

空隙の町の物語

越季

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蒼穹隊に顕現した一期一振は、演練場で出会った氷雨隊の鶴丸国永と友達になる。彼の主催する会で雲霄隊の鶯丸と澄清隊の江雪左文字とも友達になった一期は、充実した生を送っていた。

だが、光があれば影もある。

城下町に現れる化物。一期が時折見る変な夢。児童養護施設の子供達。かつて起こった「大移動」。森の奥に潜む部隊。研究所での謎多き研究内容。

光の中で笑う一期はまだ気付かない。世界に潜む影の色は彼の想像以上に濃く、涙と憤怒と怨嗟で満ちている事を。

※キャラ崩壊、捏造、特殊設定でんご盛りです。歴史的要素はほぼ出ません。

※一部刀剣男士が可哀想な目にあったり悪役的行動をします。また刀剣破壊描写があります。

※ブラック本丸・政府が出ます。

※同名でpixiv、くるつぶ、privatter、自サイトにも掲載しています。

目次

第一話「始まりの夢」

- 1—1 「二期一振、蒼穹隊に顕現す」
- 1—2 「二期、演練先に向かう」
- 1—3 「二期、夢を見る」

第二話「城下町の幽霊」

- 2—1 「氷雨隊の朝、蒼穹隊の朝」
- 2—2 「懇願と指令」
- 2—3 「いざ、幽霊退治」
- 2—4 「対峙：蒼穹」
- 2—5 「対峙：氷雨」
- 2—6 「vs 『幽霊』」
- 2—7 「一件落…：着？」

第三話「宴会と過去の事件」

- 3—1 「接触」
- 3—2 「居酒屋へ」
- 3—3 「愛甲区域の大移動」
- 3—4 「森の中の部隊」

第四話「春の光差す本丸」

- 4—1 「手当て」
- 4—2 「春の光差す本丸」
- 4—3 「森の外へ」
- 4—4 「まだ道は交わらず」

第五話「子供の園、少女の護衛」

- 5—1 「お誘いとお守り」

5—2 「滑^レ園の子供達」

5—3 「からかい／寂しさ」

5—4 「獣の園」

5—5 「失踪」

5—6 「時空の裂け目」

5—7 「分断」

5—8 「アドバイス」

5—9 「合流」

5—10 「夕暮れ、その闇の中で」

第六話「平成出陣／臨時隊員」

6—1 「平成へ」

6—2 「迷子」

6—3 「看破／臨時出陣」

6—4 「夢と彼女について」

6—5 「膾切り」

6—6 「血眼」

6—7 「今はまだ」

6—8 「暴走」

6—9 「少年は祈り、少女は動き始める」

第七話「嵐の前の日常」

7—1 「蒼穹と氷雨、それぞれの大坂城」

7—2 「雲霄と包丁入手事情」

7—3 「清澄隊の事情」

7—4 「奇襲／懸念」

7—5 「ルピナスマートにて」

102

109

117

124

129

138

146

152

159

162

167

176

184

189

194

199

204

209

216

223

228

236

246

7—6 「仲直り」 257

7—7 「調査部隊の仕事」 264

7—8 「一日の終わり、そして襲撃」 270

第八話「氷雨隊蜂須賀虎徹拉致事件」

8—1 「被害者の本丸にて」 277

8—2 「被害者／追う者」 283

8—3 「錯乱／光明」 290

8—4 「時間切れ」 296

8—5 「発見まで」 302

8—6 「拉致事件終焉、その先に伸びる影」 308

第九話「事件のその後」

9—1 「記憶調査」 317

9—2 「記憶処置」 326

9—3 「最終兵器」 333

9—4 「卒園告知」 339

第十話「初めての近侍、惨劇の前触れ」

10—1 「初近侍」 348

10—2 「最終兵器の実力」 356

10—3 「近侍と春の光」 362

10—4 「春光隊の審神者」 367

10—5 「被験者と被害者」 377

10—6 「悩むもの、煽るもの」 386

10—7 「惨劇の前兆」 392

第十一話「惨劇の夜」

11—1 「宴と、その裏で」 397

1 1—2 「研究」

1 1—3 「残虐な侵入者」

1 1—4 「残忍な復讐者」

1 1—5 「援軍」

1 1—6 「殺された魂」

1 1—7 「雨の気配」

第十二話「涙に満ちた彼の夢」

1 2—1 「透明少年を巡るもの」

1 2—2 「嘲笑／導入」

1 2—3 「『彼』が訪れるまで」

1 2—4 「witness／葉研藤四郎『出来損ないの自分に』」

487

1 2—5 「witness／歌仙兼定『買物』」

1 2—6 「witness／鯰尾藤四郎『彼の残骸2』」

1 2—7 「witness／葉研藤四郎『大嫌いな自分が』」

516

第十三話「望まぬ罪を犯した者」

1 3—1 「witness／歌仙兼定『潜入』」

1 3—2 「witness／鯰尾藤四郎『彼の残骸3』」

1 3—3 「witness／葉研藤四郎『何も知らない自分は』」

557

1 3—4 「witness／歌仙兼定『大人』」

1 3—5 「witness／鯰尾藤四郎『彼の残骸4』」

1 3—6 「witness／葉研藤四郎『罪を抱えた自分を』」

590

13—7 「witness／歌仙兼定『説得』」

13—8 「witness／鯰尾藤四郎『彼の残骸5』」

13—9 「そうして悲劇は幕を開けた」

第十四話「猫達は暗がりを進んだ」

14—1 「witness／葉研藤四郎『穏やかで悲しいあの子

は』」

14—2 「witness／石切丸『ごぞよりも』(前)」

14—3 「witness／石切丸『ごぞよりも』(後)」

14—4 「witness／歌仙兼定『決断』」

14—5 「witness／鯰尾藤四郎『楽園の残骸』(前)」

684

14—6 「witness／鯰尾藤四郎『楽園の残骸』(後)」

694

14—7 「witness／獅子王『お願いします』(前)」

708

14—8 「witness／獅子王『お願いします』(後)」

724

14—9 「witness／歌仙兼定『真実』(前)」

14—10 「witness／歌仙兼定『真実』(後)」

14—11 「witness／石切丸『あさぼらけ』(前)」

760

14—12 「witness／石切丸『あさぼらけ』(後)」

769

14—13 「雨と導火線」

第十五話「ぎあざあと、じめじめと」

786

15—1 「現れた令嬢」

15—2 「演練場での暗躍」

15—3 「非公式手合わせ」

15—4 「消えた町の子供達」

15—5 「ティータイム1」

15—6 「ティータイム2」

15—7 「コーヒーブレイク1」

15—8 「コーヒーブレイク2」

15—9 「町はまだ」

第十六話「カウントダウンは、始まっている」

16—1 「最終兵器、襲来」

16—2 「最終兵器、その脅威」

16—3 「宴会、その下で」

16—4 「監視者と、交渉」

16—5 「氷雨鶴丸と、普通の少女」

16—6 「氷雨鶴丸と、清澄江雪」

16—7 「氷雨鶴丸の、決断」

16—8 「雲霄鶯丸と、深手の少年と」

16—9 「雲霄物吉と、春光隊と」

16—10 「雲霄物吉と、蒼穹秋田」

16—11 「蒼穹一期の、聴取」

16—12 「蒼穹一期の、大切な中核」

16—13 「空隙の町の、導火線」

第十七話「雨足は遠のかず」

17—1 「訪れたのは」

933

930

923

917

911

905

897

891

884

877

870

861

855

849

846

840

834

829

822

814

806

799

792

17-2 「公安局にて1」

17-3 「公安局にて2」

17-4 「情報交換1」

17-5 「情報交換2」

17-6 「怨恨と未練」

17-7 「彼女のもとへ1」

17-8 「彼女のもとへ2」

17-9 「さくやこのはな」

17-10 「叫び」

17-11 「朝を告げる鐘が鳴る」

番外編 「その虚しさよ、遠くあれ (前)」

番外編 「その虚しさよ、遠くあれ (後)」

第十八話 「揺るがされる町 (前)」

18-1 「決意を固めて」

18-2 「憎悪の一太刀」

18-3 「行動計画」

18-4 「非日常の思考と日常の挑発」

18-5 「到着―氷雨―」

18-6 「到着―雲霄―」

18-7 「本丸では―蒼穹―」

18-8 「本丸では―氷雨―」

18-9 「会敵1」

18-10 「到着―春光と協力者―」

18-11 「合流1」

18-12 「合流2」

18—13 「会敵2」

18—14 「会敵3」

18—15 「協力」

18—16 「世界に挑む」

第十九話「揺るがされる町(後)」

19—1 「神に成る」

19—2 「それでも、俺は」

19—3 「君の未来の為に」

19—4 「核心／狂気」

19—5 「それぞれの願い」

19—6 「踏み躪るもの／決着1」

19—7 「神に抗う／決着2／荒業」

19—8 「決着3／反転」

19—9 「外では／決着4／決着5」

19—10 「悪夢の続きを」

19—11 「最後の悪意」

第二十話「狭間の世界の物語、あるいは」

20—1 「希望の為に」

20—2 「どうして、と／もういい、と」

20—3 「生きて、君と」

20—4 「ある叛逆刀の顛末」

20—5 「きつと未来は(前)」

20—6 【終】「きつと未来は(後)」

番外編「深夜、麦茶の瓶が空になる」

第一話 「始まりの夢」

1—1 「一期一振、蒼穹隊に顕現す」

桜吹雪が、先ほどまで火の気配に包まれていた部屋を包む。最後の一枚が床に落ちた時、その男は目を開いた。

「私は、一期一振。粟田口吉光の手による唯一の太刀。藤四郎は私の弟達ですな」

空色の髪、温和な中に強い意志を感じさせる顔だち。そしてふわりと紋が刻まれたマントが翻る。

一期一振——その男は確かにそう名乗った。それは、かつて豊臣にあったという名刀のものであるはずだ。人間の姿をした物が、刀を名乗っている。普段は気が狂ったのかと思われるのだろう。

しかし、その場にいた和装の青年と、檻褌布を被った青年は、あんどろりとした顔をした後、叫んだ。

「粟田口派！ 一期が……一期一振が来たぞ!!」

一拍おいて、まとまった複数の足音がドドドド、と聞こえてくる。そして部屋の前に、歓喜に満ちた表情をした背の低い少年たちが現れた。

「いち兄！」

「いち兄、やっと来たか！」

「待ってたんですよ、ずっと！」

少年たちが部屋に入ってきて、空色の男を囲む。男は少年たちをぐるりと見て、ふふ、と微笑んだ後、和装の青年に尋ねた。

「貴方が、今代の主でよろしいので？」

「ああ、そうだ。お前の力を借りたい。頼めるか？」

「ええ、勿論。久々に戦場に出られる好機を逃せませんから」

「よろしく頼む。お前の弟たちは大体ここに来ているから、説明の後にゆっくりと時間をとっておこう」

「ありがとうございます」

頭を下げる空色の男を見やってから、檻褌布の青年はため息をつ

く。

「……とりあえずあんたたち、鍛刀場から出ろ。狭くてかなわん」

「あつ、そうだ」

「山姥切さん、すみません」

「いち兄に会えると思うと嬉しくて、つい……ごめんね」

「いちいち細かいこと言うなよ、まんば。兄弟たちの感動の再会だぞ、野暮ってもんじゃないか」

「まんばって呼ぶな、主！」

檻褌布の青年が喚く。少年たちは笑い声をあげる。空色の男は、檻褌布の青年に右手を差し出した。

「山姥切、殿ですか。これからよろしくお願い申し上げます」

「……山姥切国広だ。この本丸では一応古株になる。分からないことがあつたら聞いてくれ、答えられることは答える」

「ありがとうございます。……ところで、その布は取らないので？」

そう問うと、檻褌布の青年は自嘲するように吐き捨てた。

「これを被つていれば、山姥切と比べられることもなくなるだろうからな」

「あー、まんばは写しであることを気にしてるんだよ。別に気にすることないと思うんだけどなー」

「……俺は偽物なんかじゃない。国広の第一の傑作なんだ……！」

「あー、始まつちまった。少しほっておくか」

「はあ……」

和装の青年は、ぶつぶつと何事かを呟き始めた檻褌布の青年を放置することに決めたらしい。未だ勝手がわからぬ空色の男に、少年たちがわあわああと話し始める。

「ねえ聞いてよいち兄！ 厚が新しいシャンプーの匂いを臭いっていうのー！」

「なんだよ乱。香油なんてどれ使っても同じだろ」

「えっと、僕、五虎退です……いち兄にお会いできて、嬉しいです」

「よう兄貴。体調が悪くなったら、すぐ俺に言ってくれよ」

「いち兄来たんだ！ 手合わせ楽しみだなー」

「兄弟、まずは手を洗って来い。馬糞がついてる」

「ここには、たくさん動物がいるんですよ。いち兄も一度ご覧になってはいかがでしょう」

「本丸の外にある城下町は、たくさん施設があるんですよ！ 僕と平野で案内させてください」

「いち兄だ！ ねえねえ、懐入っていい？」

「おおー、一期殿！ ようやくお越しになりましたか！ 鳴狐も大変喜んでおりますー！」

「よく来たね、一期」

いつの間にか、人数が増えていた。様々なことを話す弟たちや親戚に、空色の男は耳を傾けている。和服の青年は、よかったよかったと豪快に笑っている。

そうしているうちに、襦袢布の青年が叱り飛ばした。

「……あんたらいい加減に鍛刀場から出る!!」

「あつ、山姥切さんが復活したー！」

「わー、ごめんなさーい！」

襦袢布の青年——いや、山姥切国広に追い立てられて、少年たちが鍛刀場と呼ばれる部屋から出た。空色の男——一期一振も、弟たちと共に出ていく。外を見やると、朝日に照らされた赤く色づいた葉がひらひらと舞っていた。

追い立てられながらも笑顔の弟たちに、一期は弟たちと話せるようになった喜びを噛みしめる。

ここは、数多の名刀が集まる場所。

美術品と化した名刀が、もう一度己の本分を果たせる夢のようなところ。それが、この本丸だ。

そして数多の名刀には、新たな呼び名がつけられた。

——刀剣男士、と。

西暦二二〇五年。『歴史修正主義者』を名乗る無法者は、過去に遡り干渉することで、現在まで続く歴史を変えようとしていた。

時の政府は、それを阻止せんと『審神者』なる者を各時代に送り出

す。

審神者とは、眠っている物の想い、心を目覚めさせ、自ら戦う力を与え、振るわせる技を持つ者。

その技によって生み出された付喪神が我々『刀剣男士』であり、我々は審神者とともに正しい歴史を守ることが使命である――。

「……俺たちが呼び出された理由については分かったか？」

「ええ。つまりは無法者たちを斬ればよろしいのでしょうか？」

「話が早くて助かる」

板張りの廊下を歩きながら、山姥切は一期にここまでの経緯の説明をする。話が色々突飛な気がするが、武器としての本分を果たせるのだ、一期の側に文句はない。

秋とはいえ、まだ暑さが残る。襟元を緩めながら、山姥切は新たな説明に移った。

「出陣は、その正門から行う。時空指定は主がするから、俺たちはあまり気にしなくていい。怪我をしたら手入部屋で手入れを行う。俺たちが知っている手入れとは、大分仕方が違うけどな。……まあ、うちの主はかなり慎重派だから、使う機会はそうないだろう。ちなみに、戦場以外での抜刀は基本的に禁止だ。私闘で抜刀して怪我をしたら主と政府の両方から雷を落とされると思え」

最後のほうになると、山姥切は体をがたと震わせていた。禁を破ったことがあるのだろうか、と一期は推し量る。

山姥切の説明は続く。

鍛刀は依頼札を刀匠に渡して行うこと、遠征は審神者が指定した素材を入手してくること、刀装は兵の魂を詰めたものであり、刀剣男士が作成すること、錬結は刀剣男士の素となる物質を体内に取り入れ強化すること、刀解は素となる物質を分解し資材に変えること、『特』とは練度の指針であり、一定の練度になると大きく刀剣男士の性能が上がること……。

「まあ、これくらい覚えておけば、近侍になっても大丈夫だろう」

「近侍は交代制なのですか？」

「この本丸ではそうだな。他の本丸だと、近侍制度の他に出陣方法も

違うと聞く」

いろいろ複雑らしいが、覚えなくても平気だ。山姥切はそう締めくくった。一期は頷きながら、脳内にメモを取った。

「じゃあ次は本丸の案内だ。まずは厨だな」

「はい」

本丸巡りは特に問題なく進んだ。

厨では眼帯を付けた太刀と菖蒲色の髪を前側だけ頭頂で止めている打刀が昼餉の準備を手伝っていたり、大広間では打刀たちが双六遊びをしていたりした。

厩では鯰尾藤四郎が馬糞を集めてみせて真っ白な太刀に嫌がられていたり、畑では桃色の非対称的な長髪をした打刀と後ろで結わえられた青い髪が立っているのが特徴的な短刀が茄子を摘んでいたりする。

武道場ではだんだら羽織をした下げ髪の手刀と赤いピアスをした脇差が手合わせを行っており、和装袴姿に赤い襟巻をした打刀と手合わせ中の脇差と同じピアスをしている打刀が野次を飛ばしていた。それぞれ、刀剣男士の名前を教わりながら進んでいく。

その他、厠、風呂場、茶室、書庫、手入部屋、鍛刀場、刀装作成場……。

「さて、これで本丸内の施設の説明は終了だ。少しずつ覚えていけばいい、最初は誰でも迷う」

「わかりました。あ、でも厨の場所は覚えましたがよ、確かあっちですよね」

頓珍漢な方向を指さす一期に、山姥切は冷静に返す。

「……そっちは厠だ」

「えっ、あれっ」

「一度で覚えなくていいとただだろう、別に誰も責めやしない」「いや、おかしいな……」

確かにあっちだと思ったのだが、いやおかしい確かにあっちだったとぶつぶつ呟く一期に、負けん気が強いのだな、と山姥切は印象付けた。

ふと、山姥切が付け加える。

「そういえば、新入りは練度上げのために演練に参加することになっている。あんたもそうだろうから、出陣の準備をしておくといい」

「演練は確か、怪我をしても元に戻るのでしたっけ」

「ああ。機構の仕組みは分からんが、怪我をしても元に戻る。主は……まあ、少し心配症だな。練度がある程度上がるまで、演練で鍛えようという心積もりらしい」

少し言葉に詰まらせた山姥切に、何かあったのだと推測する。詳しく聞いてみたい気もするが、新入りがあまり出しゃばる場面ではない。一期は軽くうなづく程度にとどめた。

「玄関正面に本日の割り当てがかけられている。演練への出陣があるかどうかもここで確認できるぞ」

「えつと……あれ、演練の欄に私の名前がありませんが」
「えつ」

指さしで確認した一期に、山姥切が驚きの声をあげる。山姥切も指さしで演練の欄を確認すると、書かれていたのは前田藤四郎、骨喰藤四郎、山姥切国広、大俱利伽羅、和泉守兼定、太郎太刀の6振りだった。

「……見事に高練度の奴ばかりだな」

「何があつたんでしよう?」

「本当に何が——」

そう言いかけて、はっとした後、山姥切が頭を抱える。そのまま唸り始めた様子を見て、一期は声をかけた。

「何か思い当たることが?」

「……氷雨だ」

「はい?」

「演練相手が氷雨隊なんだ……くそつ、なんでこんなに連続しているんだ、一週間前にもやりあつただろう!」

畜生なんで、俺が写しだからか、とぶつくさ言う山姥切だが、一期の方はまだ理解が追いつかない。そうこうしているうちに、荒い足音がこちらに近づいてくる。

「まんば、演練の欄は見たな？ 投石兵の玉二つ積んどけよ」

「……ああ、わかった」

「よし、いい返事だ！」

氷雨の野郎、今度こそ目に物を見せてやる、そう言いながら審神者は遠ざかっていく。しかし、遠くからでも怒気に満ちた声は聞こえてきた。審神者がいなくなったのを確認してから、一期は山姥切に問う。

「えつと、もしかして氷雨隊の審神者殿とは……」

「察している通り、仲が最悪だ。顔を合わせれば罵倒嫌味合戦が始まる。刀剣男士の方も氷雨とうちの中で相性が悪いのがいてな……罵倒と遠戦兵器の雨が降ることになるんだ」

「そうなのですか……」

「今からあの厭味つたらしい声を聞いたりしなきゃいけないと思うと……」

山姥切は一気にやつれた。罵倒を聞くのも言うのも苦手らしい彼は、これから起こるであろう別種の戦場に、早くも疲労の色を隠せない。しかし顔を上げると、一期に気を回す。

「あんたも嫌なら今日は演練場に来なくてもいい。無駄に疲れるだけだからな」

「いえ、私も参ります。主があれだけ力を入れていることから考えると、氷雨隊はある程度強い部隊なのでしょう。身になることはあると思います」

「……そうか、わかった。でも、くれぐれも無理はするなよ」

「私もかつて天下人の元にいた刀です。多少の嫌味なら平気ですよ」

そう言っつて、一期は勝ち気に微笑んで見せた。そうだったな、と山姥切も力なく笑い返す。

玄関口に、演練に出る男士たちが意気揚々と集まってきていた。

1—2 「一期、演練先に向かう」

演練は、違う本丸の刀剣男士たちを訓練のために戦わせるものだ。近場の演練場から他の本丸と接続して、精神だけを戦場に飛ばして戦い合わせる。

審神者の持っているコンピューターと呼ばれる物に、演練相手の一覧が配信される。朝と夕方の5時に演練相手は更新され、めったにかち合うことはない。……はずなのだが、一期が顕現した本丸——蒼穹隊と言うらしい——と氷雨隊は、なぜか組まされてしまうことが多い。

氷雨隊の審神者は軍上がりの人間で、かなり誇り高いらしい。そのため、最近審神者になりたてで、あまり歴史を守ることには信念を感じられない蒼穹隊の審神者が気に食わないようなのだ。

気に食わない者に皮肉を浴びせる人間と、あまり気の長くない人間。皮肉と罵倒の合戦が始まるのも、当然の話である。

蒼穹隊の審神者が、演練場の受付にて和泉守と手続きを行っている。受付は、様々な審神者と刀剣男士で溢れかえっていた。それを眺めて、一期と山姥切は雑談をしている。

「なんかふらふらしている短刀がいますけど……」

「……ああ、不動行光か。甘酒をいつも手にして酔っぱらっていることが多いな」

「甘酒って酔っぱらうものでしたっけ？」

「なんとか効果ってやつじゃないのか。……げっ」

二振りの目の前を豪華な狩衣をまとった、それでいて本刃もそれに負けず壮麗な刀剣男士が通り過ぎた。一期はその刀剣男士をみやっておや、と声を上げた。

「何か覚えがある気配ですね」

「……三日月宗近だ。顕現難易度五、天下五剣の一振り。主の禁句の一つでもある」

「なぜです？」

「顕現難易度五と言っただろう。そのままの意味で、顕現させるのが

とても難しいんだ。主が来ない来ないと呟きながら鍛刀をしているのを何度も見てきた」

額を抑えて、がっくりと項垂れる山姥切。その横で、一期は曲げた人差し指をあてて思案にふける。

「私は確か、四でしたよね」

「そうだな。主が審神者になつて三ヶ月たつてあんたがようやく来たから、四でも相当顕現が難しい。それを上回ると言えばどれくらい難しいかわかるだろう。……個刃的にあのクソジジイには何度煮え湯を飲まされたかわからん……!」

「えっ、三日月殿つてそんな苦汁を飲ませるような性格でしたっけ」

「演練で何度もやられてるんだ。あのクソジジイ俺の負けでもいいと言いながら太刀とは思えない素早さで斬ってくるんだ畜生練度上限に達したら覚悟しとけ写しと侮つたことを後悔させてやる絶対に」

「落ち着いてください、声が大きいです!」

「——そこまで言ったからにはこつちも黙つちやいらねえなあおい!？」

大音量の愚痴を吐く山姥切を窘めっていると、蒼穹の審神者がこれまた大きな声で怒鳴るのを聞いた。確か、蒼穹の審神者は受付にいたはずだ。一体何が起こつたのか。一期と山姥切が視線を受付に向けると、殺気を出す蒼穹の審神者と和泉守、そしてその正面には軍服を着た若い男とへし切長谷部がしらつとした顔で立っていた。山姥切は顔を青ざめさせる。

「なっ、よりによつてなんで和泉守だけの時に……!」

「あの方が、氷雨隊の審神者殿ですか」

「ああ、軍でしごかれただけあつて、かなり弁が立つ。正直、和泉守だけじゃ収拾がつかん!」

「我々も止めに入ったほうがいいのでは——」

山姥切は腰を浮かせた一期を制止にかかる。

「止めておけ! 何せあつちには嫌味魔王の一角、へし切長谷部がいる。下手に入つたらこつちがやりこめられるだけだ! くそっ、他の奴らはどこへ行つた!？」

そうしている間にも、喧嘩は続く。氷雨の審神者は、はんと一笑して告げた。

「おお嫌だ、品のない。こんな者に使われる刀剣男士があまりに気の毒だ。なあ長谷部？」

「ええ、おっしゃる通りです。落ち着きもなく、品もなく、すぐに激高して。主の選べない彼らが少し哀れに感じますね」

氷雨の長谷部の言葉に、蒼穹の和泉守が吠える。

「てめえ、それはどういうこった！ 主は俺たちのためにも心を砕いてくれる、いい審神者なんだよ！ てめえみたくない刀を使い捨てることも良しとするような人間に言われたかねえんだよ！」

「主に汚い物を飛ばすな。刀は使われてこそ刀だろう。貴様は主に人間の如く扱われて、魂まで落ちたのではないのか？」

「……おお、いいぜ。そっちがその気なら、てめえの心鉄まで砕いてやるよ」

「その言葉、そっくりそのまま返してやる」

周囲の刀剣男士たちがざわざわと囁きあう声が聞こえる。一方の審神者側も、火花を散らしあっていた。

「品のない？ はっ！ 政府の犬になり果てたやつに言われたかねえな！ 尻尾振ってりや甘い汗吸えるんだからいい仕事だよなあ？」

「犬というのは光栄だな。政府の忠実なる僕としてこれ以上の褒め言葉もあるまい」

「ああ、犬じゃなくて豚か。政府のためにブヒブヒ鳴いて媚びて、最後には丸焼きにされる運命がてめえにやお似合いだ！」

「……忠士の信念も分からぬ無礼者が」

「豚の誇りなんざ一生分かりたくないね」

審神者、刀剣男士の双方に張り詰めた空気が漂う。最早、いつ殴り合いになってもおかしくない雰囲気だ。蒼穹の和泉守と、氷雨の長谷部が同時に柄に手をかけた、その時。

「——そこまで！ 双方、演練場外での抜刀は禁止だと分かっているうな？」

威厳のある声が、受付に響いた。蒼穹、氷雨の両者が動きを止める。

声の主は、スーツを身にまとった初老の男性だった。その後、コツとヒールの音が近づいてくる。

「あつ、主だった。もー、演練始まったのに抜け出すからどうしたのかと思ったよ」

初老の男性の刀剣男士であろう加州清光が、小走りに寄ってきた。そして周囲を一瞥し、騒動の中心を見つけると、蒼穹、氷雨双方に忠告した。

「で、あんたら何やってるの？ まさか、戦場以外での抜刀は禁止だつて掟、忘れたわけじゃないよね？ ——雲霄隊の名前、出来れば出したくないんだけど」

威圧を放つ加州に、氷雨の審神者は縮こまり、蒼穹の審神者は慌てた様子で頭を下げる。

雲霄隊、その言葉を聞いた周囲からはどよつとざわめきが起こつた。

蒼穹の山姥切も、驚きを隠せない。

「雲霄隊……!?!」

「(っ)存じで?」

「……政府直属と言われている部隊だ。滅多に表に出ないから存在を疑っていたが……」

雲霄隊。それは政府直々に運営する精鋭部隊。普通の審神者には開かれない戦場に赴くこともあるという、まさに最強ランクの本丸。その存在は前々から噂にはなっていたものの、姿を現すことはほとんどない。だからこそ、都市伝説の一種として囁かれるだけだったのだが――。

「なんで、演練場に」

「なに、久々に若いのを見たくなっただけだよ、なあ清光?」

「まあ、どのくらい他の部隊が育ってるか見ておくのは大事だよねー」
呆然と呟く蒼穹の山姥切の言葉を拾い、初老の男性——雲霄の審神者が答える。雲霄の加州も、笑って補足する。

蒼穹の一期は、まじまじと雲霄隊の面々を見た。加州清光の他に、平野藤四郎、物吉貞宗、山伏国広、蜻蛉切が途中から現れた。どの男

士も、どこか強者の風格が表れている。まだ練度が低いのだろうか、どこかの三日月宗近がその迫力に押されて少し後ずさった。

「すまない、遅くなった!」

「主君は大丈夫ですか!? ……って、あれ?」

「何があっただんです……?」

「……?」

騒ぎを聞きつけ、慌てた様子で蒼穹の前田、骨喰、大俱利伽羅、太郎太刀が現れた。しかし、流れが変わったのを感じたが、何が起こったのか分からない全員の頭に疑問符が浮かんでいる。それを見て、雲霄の審神者はがはは、と豪快に笑った。

「いやいや、老いぼれが少し顔を出しただけだ。あとは若いのだけで楽しんでくれ。おーい皆、帰るぞ!」

「えっ、もう帰るのー? 俺もうちよつとほかの隊の刀ひとと話したい!」

「加州さん、我々も忙しい身なのでから」

「カカカカカ! 新しい思想に触れるのもまた修行ではあるな!」

「しかし、平野の言う通り時間がない。今日のところは引き上げよう!」
「しようがない、帰るか。皆、交流を楽しんでいってね!」

そうして、雲霄隊の面々は去っていく。それを見送ってから、氷雨の審神者と長谷部はこそこそと立ち去った。まだ疑問符が消えない蒼穹の四振りには、山姥切は事情を説明することにした。一期は、呆然とその場に立っている。

「いやあ命拾いしたなあ、俺たちも、きみたちも。ここで抜刀なんてしたら、政府に何時間しごかれることか」

「危なかったのですね……」

「いや、ある意味新たな危機に陥ったのか? なんせあの雲霄隊だ、政府にチクられるなんてこともありうるからなあ」

「どうなんでしょうか……ん?」

はて、今自分は誰と話しているのだろうか。横を見やると、真っ白な刀剣男士が真隣にいた。

「う、うわああああ!! いつからそこに!?!」

「おいおい、さつきからずっといたぜ。気づかなかったとは驚きだ!」

思わず飛び上がる一期に、その刀は大仰なポーズで嘆いて見せる。フードがついている真つ白な着物、真つ白な髪、と白尽くしの刀剣男士。蒼穹の本丸でも見かけた鶴丸国永だった。今までなぜ気づかなかったのか。気配を消すのに長けているのだろうか、と推測してみる。

まあいい、と仕切りなおして、鶴丸は一期に右手を差し出した。

「氷雨が一振り、鶴丸国永だ。そつちにも『俺』がいるだろうが、まあ俺たちは初めまして、だ。さつきは俺の主と長谷部が無礼を働いてしまつてすまなかつた」

「……蒼穹が一振り、一期一振です。こちらこそ我が隊の面々が失礼をいたしました」

「ごつちのことは気にするな。あれは全面的に主が悪い。まあ謝りあつたから御相子つてことで、俺たちはこれから仲良くしていけると嬉しい」

仲良くなりたいと見つめてくるその目に、偽りはない。随分と綺麗な目をしている、と何となしに思った。一期は、鶴丸の謝罪を受け入れた。

「いえ、こちらこそ頭に血が上りやすい主のようで。私の方こそ、仲良くしていただけると嬉しいです」

そう言つて、氷雨の鶴丸の手を握る。目を丸くしたのち、ありがとうな、という鶴丸の言葉とともに、手は離れた。

「鶴丸殿は、これから演練に参加するのですよね」

「いや？ 俺は参加しないぞ」

「えっ、じゃあなぜここに？ 私と同じく見学して戦術を極める……ということでしょうか」

「あー、それもあるが、主な理由は一主と長谷部いのししどもの制止役だな」

「いのしし……」

「ああ、そう言ったことは内緒な。どうも主は長谷部と一緒にだとな気が大きくなって嫌味の量も増すからなあ」

おっと、愚痴はあんまり吐いちゃいけないな。鶴丸は話を打ち切

る。きよとんとしている一期に、鶴丸はある誘いをかけた。

「きみはなかなかいい驚き方をする。是非うちの会に入ってもらいたいもんだ」

「会？」

「まあ、会といっても城下町で飲んで騒いで遊ぶのが中心の活動だが、情報交換も行っている。本丸の中だけでは手に入らない有益な情報が入ることもあるぞ。どうだい？」

「有益……それは、新たな戦場とか、敵に対する戦術の討論とか、そういうものですか？」

一期が、好奇心をくすぐられた顔を近づけて問う。それを見て、鶴丸はにやりと笑う。

「ああ、もちろんそういうやり取りもあるな。それに」

「それに？」

「都市伝説とか、審神者の間だけで流行っている噂話とかも——」

「入ります」

「早っ！ いや、何ならもう少し考えてもいいいんだぜ？」

あまりの即答に動揺しながらも猶予を示す鶴丸に、いえ、と一期は首を振る。

「都市伝説や、噂程度でも審神者殿の間で流れている話が、大きな事件につながることもあります。主や弟たちを守るためにも、見過ごすことはできません」

「うん、いい心がけだ。……で、本音は？」

「都市伝説とかまことしやかな噂とか気になって仕方ありません！」

刀がオカルト好きで何が悪い。好奇心に抗わないことの何が悪い。そう示すように堂々と宣言してみせる一期に、我慢できずに鶴丸は吹き出す。

「あつはつは、こりやあ驚いた！ まさか一期一振という刀が都市伝説に興味を持つとは！」

「何か悪いことでも？」

あつけらかんと言いつ一期に、鶴丸は声を上げる。それには、歓喜の色が強く滲んでいた。

「悪いものか、むしろ最高だ！ 蒼穹隊の一期一振、俺は君を歓迎するぞ！」

「ありがとうございます。……で、次の会はいつ行われる予定で？」

「ああ、それは——」

『——蒼穹隊、氷雨隊の皆様、早急に指定された部屋に入ってください。繰り返します——』

鶴丸の言葉を、アナウンスが遮る。気づけば、周囲には人も刀もいなくなっていた。鶴丸は舌打ちする。

「残念だが、時間切れだ。続きはまた今度」

「ええ、そうですね。……あれ、連絡はどうするのです？」

「きみたちには端末が支給されてなかったんだっけな。よし、それじゃあ受け取れ！」

そう言つて、鶴丸はほいっと何かを投げる。放物線を描きながら落ちていくそれを、一期は慌てて受け止めた。

手の中には、薄い板状の物体。一期は記憶を探る。

「確かこれは……すまーとふおん、でしたか」

「そう。前時代の遺物だが、刀剣男士同士でのやり取りはこれで十分行える。俺の連絡先は入っているから、夜以外は好きな時に連絡してくれていい。返事が遅れることもあるけどな」

「いいのですか、貴重なものでしょう？」

「いいのさ、掘り返せばいくらでも見つかる。それに、その端末は俺が会に入る男士に渡すために一年以上持ってた物の一つだからな！

安心して使つていいぞ」

「今悲しい一言が聞こえた気がしましたけど!？」

それじゃあまたな、手を振つて鶴丸は受付横の廊下に消えていく。端末をポケットに入れた後、一期も慌てて指定された一室に向かった。

1—3 「一期、夢を見る」

演練自体は、特に大きな問題もなく終わった。実際に戦うところを見るのは学びも多く、とてもためになる時間であった。

……ただし、蒼穹の和泉守が目潰しのための砂かけを氷雨の長谷部に対して多く行っていたり、あるいは氷雨の長谷部が速度に任せて蒼穹の和泉守に足を引っかけたり、双方の審神者が罵倒しあっていたことを受けて刀剣男士たちが攻撃回数を無視して乱闘状態になってしまったことを除けば、だが。

『いやあ、大目玉食らうことにならなくてよかったな。お上に目をつけられたら、半日潰れることになるからな』

「本当、そうならなくて良かったですよ……主には、もう少し冷静さを持ってほしいものです」

『こっちもすぐ喧嘩売る癖を何とかしてほしいもんだなあ』

端末越しに、蒼穹の一期と氷雨の鶴丸はため息をついた。

弟たちも寝静まった、午後十一時。一期は、連絡帳アプリに入っていた連絡先にチャットメールを送った。返信はすぐに返ってきて、「今から電話しないか」と提案された。一期はそれを承諾し、現在こうして通話をしている訳である。

ちなみに、端末機器を使うのは初めてだった一期は、夕暮れに書庫を訪れ、端末機器の説明書を必死に探した。単独でできるとは到底思えなかったからである。結果、類似の機器の説明書を見つけ、何とかおぼつかないながらも端末を立ち上げることに成功した。端末ごとき扱えないようでは、一期一振の名が泣く。そう思っていたが、電話に出た鶴丸の第一声は『そーいや説明書つけるの忘れてた！ 連絡とるの大変だっただろ』というものだった。

「いえ、別段大変だったわけでは」

『そんなことはないだろ。刀剣男士は、どの刀種においても現代の機器に弱いと聞く。別段恥じることはないぜ』

「いや、ですから」

『あ、でもこうして一発で連絡とってきたってことは、なかなか筋があ

るってことなのか。さすがは一期だな』

「ふふ、そうでしょう」

胸を張った一期は、鶴丸が『こんなに乗せやすいとは驚きだ』という言葉が聞こえていない。しかし、少し前の鶴丸の言葉に引っかかり、尋ねた。

「刀剣男士は、現代の機器に弱い？ それは、博多や長谷部殿などの主を補佐することも多い刀も例外なく？」

『そうだな。その二振りも、習得するのに少し時間がかかるはずだ。一発で習得できる奴がいるとしたら、そいつは化け物か何かだろ』

「鶴丸殿も苦勞なされたので？」

『一台目を破壊して主に衣紋掛けの刑にされた』

「うわあ」

「ご愁傷さまで、と憐れみの言葉を一期に、鶴丸は乾いた笑いを漏らした。

そうして、先ほどの演練の話になる。

『大目玉食らいそうになった以外はどうかだった？ 有意義な時間を過ごせたか？』

「ええ、他の本丸と交流もできましたし、とてもためになる時間でした。……本丸にいない刀を見るたび、主が神経質になるのにはまいりました」

『はは、まあそのうち戦力拡充計画も行われる。その時になったら来る確率も上がるだろう。気長に待つといいさ』

「そうですね」

縁側からは、明るい月がよく見える。秋の虫の音が、辺りに響いていた。さて、今は何時だろうか。

「……鶴丸殿、お時間は大丈夫ですか？」

『そろそろ長谷部の見回りが来るな……。今日はこの辺にしとくか』
「そうですね。あ、会は次いつある予定なんです？」

『そうさなあ……。十八日には他の面子の予定が空く。大丈夫か？』

「十八日……」

自室に戻り、予定表を見つめる。政府からの通知も、審神者からの

指令も入っていないかった。

「お待たせしました、大丈夫そうです」

『そうか、よかった。じゃあ十八日の六時に、城下町の入り口で待つて
るぜ』

「分かりました。鶴丸殿、おやすみなさい」

『ああ、おやすみ』

ツー、ツーと会話が終わった音が鳴った。端末を自室の机に置き、
一期は布団に入ることにした。

今日はずいぶんいろいろあった一日だった気がする。明日は、どん
な一日だろうか。

翌日への期待を抱いて、一期は目を閉じた。

炎が、辺りを包んでいる。熱くて、息をするのも困難だ。自分は今、
どこにいるのだろうか。いや、考えるまでもない。

大阪城だ。思い出も、仲間も、栄華も、何もかもが燃えた場所。

誰かの悲鳴が聞こえる。自分も、ここで潰えてしまうのだろうか。
崩れ落ちる天井に、一期は目をつぶってしゃがみ込んだ。

……気が付くと、一期は真つ暗な場所にいた。燃えた形跡もなく、
人の形をとっている。手を見つめると、不自然なほどはつきりとその
形を確認することができた。

辺りを見回す。誰の姿も見つけられない。

ここは天国？ 地獄？ それとも焼け落ちた大阪城か。それにし
ては、誰の姿もないのが変だ。

「誰か……誰かいなか」

声を張り上げてみても、何の返事もない。

「鯨尾！ 骨喰！」

やはり、返事はない。一期は一步、足を踏み出そうとする。

——突如として、すすり泣きが聞こえ始めた。

幼い少年の泣き声だ。一期は光明を見つけたように、その声に語り
かけた。

「……泣いている少年、君は誰だ？　ここはどこなのか知りたい、協力してもらえないだろうか」

丁寧な話しかけた一期へ、すすり泣きながら声は答えた。

「だれも、きてくれないの」

「……え？」

答えになっていない言葉を投げかけられ、一期は呆気にとられた。声は続ける。

「だれも、こっちにきてくれないの。みんな、みんな、ぼくをこわいつていうんだ。そうして、どんだんはなれていく」

「君、何を言って——」

要領を得ない幼い言葉に、一期は狼狽する。そういえばこの声、どこかで聞いたような気が——。

「おまえも、はなれていくんだろう。みんなすきだなんて、うそつき」
糾弾するように、声は響く。そうして、轟音を伴う地鳴りが響いたと思うと、黒い風景が少しずつ崩れていく。

立っていられなくなり、一期はその場に座り込んだ。

はあ、はあ、と荒い息をつく。朝日が自室に差し込んでくる。ちゅんちゅんと、雀も朝を告げていた。

体から汗が引かない。激しい胸の拍動もおさまらない。

「何だったんだ……今の夢は」

燃え盛る風景が夢に現れるのは、まだ理解できる。しかし、その後の真つ暗闇に幼い声、これには心当たりがない。

「いちにーい！　朝だよー！」

「いち兄、起きていらっしやいますか？」

弟たちが、自分を呼ぶ声が聞こえる。変な夢に動揺している場合ではない、頼りになる兄に戻らねば。

「今行くよー！」

一期一振は急いで身支度を整え、自室を出る。その頃には、もう夢のことなど頭から消え去っていた。

白い天竺葵の葉が、主人のいない枕元に落ちていた。

第二話 「城下町の幽霊」

2—1 「氷雨隊の朝、蒼穹隊の朝」

ちゅんちゅんと、雀が朝を告げるように鳴く。その声を聞きながら、氷雨の鶴丸国永の一日は幕を開ける。大きく伸びをし、よっこいせとベッドから降り、軽い柔軟体操をしてから、自室のドアを開けた。この本丸は、西洋風の作りになっている。最初は複雑な驚きが先行したのだが、現在はすっかり慣れてしまった。時は嫌でも驚きを薄れさせるのだなあ、としみじみと鶴丸は思う。

今日はなんだか体の調子がいい。気分も爽やかだ。文句なしに絶好調だろう。いい驚きも自分を待っているに違いない。鼻歌を歌いながら食堂へと向かった鶴丸は、すぐにその気分を急降下させることになる。

「おや、鶴丸殿ではないですか。こんな時間に起きてくるとは、流石お年を召した方は生活習慣も早くなるものですねあ」

食堂についた鶴丸に、開口一番嫌味を飛ばしてきたのは一期一振。吉光が打った唯一の太刀であり、栗田口の長兄だ。そのプライドは富士山より高く、弟たちだけへの愛は海よりも深い。

はつきり言おう。鶴丸は、氷雨の一期が嫌いである。一期も、鶴丸のことが嫌いであろう。鶴丸は一期の小癪な態度が憎たらくて仕方ないし、一期は鶴丸の調子のいい性格が我慢ならないようだ。

当然、こんなのは序の口だ。鶴丸はすかさず嫌味を打ち返す。

「流石は栗田口の長兄、誰よりも早く起きるとは！　こんなに早く起きるなんて、君の方こそ耄碌してきたんじゃないか？」

「鶴丸殿は冗談がお上手だ。どこかの衝撃がなければすぐにボケる誰かとは違って、私はまだ若輩者ですから」

「はっはー、そいつは誰のことだろうなあ？　……誰が驚きがなければボケるってかくちばしの黄色い若造が」

「はっ、そうやってすぐ頭に血がのぼるところが年寄りだと言っているんですよ」

双方顔は笑っているが、額に青筋を立てている。

——こいつ折つても許されるよな、よし自分が許した！

鶴丸がフォークを、一期がナイフを手に取ると、パン、と手を叩く音が食堂にこだまする。

「二振りとも、何遊んでるんだ！ 私闘は禁止だと何度も言っているのに、何故守れない！」

氷雨隊の最初の一振り、蜂須賀虎徹がいつの間にか入り口に立っていた。一期と鶴丸は慌ててカトラリーを下げる。

「すみません、蜂須賀殿。この鶏が朝から鳴いていたもので、絞めて大人しくしようかと」

「誰が鶏だ！ 先に喧嘩を売ってきたのはそっちだろう!？」

「大人気なく、それを買ったのは貴方ですが」

「こんの糞餓鬼……！」

「ああもうすぐに睨み合わない！ 全く、主にまた衣紋掛けの刑に処してもらわなくてはならなくなるだろう！」

頭を抱えながら処罰の執行を仄めかせば、二振りはずすくれた顔をしながらも静かになる。その様子を見て、蜂須賀はため息を一つつく。

「今回は未遂だったから、主への報告はなしだ。でも、次は未遂でも報告するからね！」

びしっ、と指をさして警告する蜂須賀。二振りが不満げに返すが、睨まれしびしび頷いた。

蜂須賀に関して、いつもこうだ。喧嘩が始まる寸前にいつの間にか二振りの間に現れ、制止させる。派手な姿をしているはずなのに、あつちの仕事をしている鶴丸ですら、彼の気配はなかなか捉えられない。練度もこの本丸一高いとだけあって、二振りは彼に逆らえないのだ。鶴丸は密かにその秘密を探りたいと思っているが、なかなか成果は出ていない。

厨房の方向から、鐘の音が聞こえてくる。食事ができた合図だ。聞きつけた男士たちが、続々と食堂に集まってくる。

「いち兄、おはようございます！ ……また鶴丸さんと喧嘩してたん

ですか？　あまり蜂須賀さんを困らせることがないようにしてくださいね」

「すまないね、秋田。できればそうするよ」

「鶴さん、また一期さんとやりあつてたのかい？　喧嘩を売るとか、あまりかつこ悪いことしないでね」

「今回売ってきたのはあつちだ！」

食堂は瞬く間に席が埋まっていく。一期は弟たちに連れられて、鶴丸は伊達の刀たちと共に、自らの席についた。

いただきます、蜂須賀の言葉を復唱し、食事が始まる。鶴丸はさり気なく、弟たちと談笑している一期を見やる。

——やっぱり蒼穹のとは雰囲気が違うな。

先日、蒼穹隊の一期一振と出会った。彼は、顕現したてというのもあるのか、それとも審神者の影響か、氷雨のそれとは違い「鋭さ」が少ない。嫌味を言ったとしても、笑って、もしくはふざけながら悲しむ程度で受け流せるものしか言わないのだ。しかも一期一振にしては珍しく、とても好奇心旺盛ときた。連絡先を交換したのは正解だった。新鮮な驚きを向こうから提供してくれる。

この後、電話でも掛けて愚痴るか。それなりにツツコミを入れながら聞いてくれるから、話しているこっちも楽しいのだ。この後の予定を練っていると、こちらの一期と目があつた。一気に現実を引き戻された気がして、鶴丸は一期に向かって舌を出す。ぐしゃりとナプキンを握りつぶしたさまを見て、少しだけスツとした。

足を一步踏み込み、横一文字に剣を振るう。しかし、相手は盾兵に受け止めさせ、その攻撃を凌いだ。そして、次は相手の手順だ。

「——はいっ！」

その掛け声と共に、袈裟懸けに切られる。軽騎兵はあつさりと切り伏され、自身に攻撃が当たった。

「くっ……！」

あつという間に、仮想生存値は一になった。それは、演練を安全に行うためにかけられたセーフティ。——すなわち、戦闘の続行は、不

可能。

「——勝負あり！ 勝者、玄天隊！ 戦績ランクB！」

審判の声と共に、身体中の怪我が消えていく。いや、精神だけ飛ばしたため、最初からなかったのか。

蒼穹隊の一期が目を覚ますと、目の前には透明な丸みを帯びた合成樹脂の蓋が被せられていた。蓋を開け、起き上がる。先に蓋を開けていた獅子王が、一期に笑いかける。

「二期、お疲れ！」

「獅子王殿こそ、お疲れ様です。最後の三日月殿の斬撃、早すぎて捉えることができませんでした……」

「気にすんなって！ 練度九十九とか、普通に俺でも見切れないから！」

項垂れる一期に、獅子王がケラケラと笑う。その明るさが、一期の後ろめたさを少しだけ癒してくれた。

現在、午前十時半。一期たちは、もうすっかり習慣となった演練を行っていた。一期が一番の新入りなので、練度も一番低い。『特』にもなっていないので、まだまだ伸び代はある——と思っていなければやってられないほど相手に手厳しくやられてしまった。

「しっかし、蛍丸はやっぱり強えよなあ。流石は『演練の悪魔』だ」

「悪魔……にしては可愛らし過ぎやしませんか？」

「一期さん、覚えておきな。可愛い顔した奴がそのまま可愛い性格してるなんて百パーセントありえないから」

「加州殿……経験したことがおありで？」

「安定あいつと一緒にいると嫌でもそう思うようになるよ。やっぱり身内だと嫌な部分も見えてきちゃうよねー」

「……弟たちはそんなことありません。ええ、きつとそうです」

「あ、やば、ブラコンスイッチ押しちゃった」

「しばらく放っておけー」

蒼穹隊の面々がわいわいとお喋りに花を咲かせていると、部屋のドアがゆっくりと開いた。顔を出したのは、演練相手の三日月宗近だ。

「やあ、蒼穹隊のものたち。なかなかの強さだったぞ」

「三日月さんが言うのと嫌味にしか聞こえないんですけどー」

蒼穹の加州が膨れて見せると、三日月はいいや、と否定する。

「嫌味ではないぞ。特に一期は、最近顕現したとは思えないほどの剣さばきだった。練度上限の状態でしあえなかったのが惜しいと思うほどだ」

「あ、ありがとうございます」

「それを伝えようと思ったところ、部屋の中から楽しげな声が聞こえたものでな。じじいも是非混ぜてはくれないか」

「えー、別にいいけど、三日月のじつちゃんが好きそうな話題ってなんだ?」

蒼穹隊がうーんと唸っていると、三日月がおお、と、手を叩いた。

「そうだ、あれがあった」

「あれ?」

「ああ、そうだ。最近城下町でよく聞く噂でな、お前たちにも意見を聞きたいと思ってな」

「噂、ですか?」

一期が首をかしげると、三日月がうむ、と話を始める。

「——なんでも、城下町で最近、幽霊が徘徊するらしいのだ。刀剣男士でしか祓えないような、な」

2—2 「懇願と指令」

『刀剣男士でしか倒せない幽霊?』

「ええ、鶴丸殿はなにかご存知ですか?」

本丸に戻った一期は、電話を掛けてきた氷雨の鶴丸の一通りの愚痴を聞いてから、彼に演練相手の三日月が話していた噂について尋ねてみた。自室の前の縁側に座り、葉が落ちて行く様を眺めながら。

『いや、幽霊とかなら青江とか神社連中でも切れそうじゃないのか?』
「それが、他の刀剣男士にも切ることができたそうなんです。偶然居合わせたのは薬研だと聞きましたが……」

『幽霊とか情緒とかとは縁遠い奴だな。普通のお祓いは効果がなかったんだよな?』

「効果はなく、あつさりと切り伏せられそうになったそうですよ。それでそっち方面の人はあまり動きたがらないとか」

『そうか……』

うーん、と鶴丸は唸る。しばらくした後、申し訳なきように告げた。
『すまない、俺の方はさっぱりだ。城下町には最近下りられてないからなあ』

「そうですか……最近流行り始めたばかりだと言う話ですから、最近行っていないなら知らないのも当然ですよね」

『あー……ささくれた心に蒼穹一期の優しさが効くー……もつとばふあ〇んしてくれえ……優しくされるほど強くなる刀だ俺はあ……』
「電話切りますよ?」

『待ってくれ待ってくれ冗談だ!!』

本気で慌てた様子の子の鶴丸に、一期はため息をついた。なんでこう、優しいまままでいさせてくれないのか。呆れ気味になっていると、端末越しからそうだ、と声が聞こえた。

『一期、それ次の会の題目にしよう』
「え」

『言っただろう、都市伝説も取り扱うって! まさにぴったりの新鮮な話題じゃないか! 次の会までに多少は調べてこようぜ!』

「ちよつと、もし刀剣男士でも倒せない危険なものだったら——」
『その時はその時だ!』

よし決まりな、明るい声がそう告げる。

幽霊といったオカルトには無論興味がある。しかし、自分に危機が及んで弟たちを悲しませるのは本意ではない。一期は、密かに分からなかったで通そうと決断した。

「いち兄、戻ったぜ」

「ただいまーいちにいー!」

「た、ただいま戻りました……!」

遠くから、薬研と厚、五虎退の声が近づいてくる。非番だった彼らは、城下町に出かけていたのだ。氷雨の鶴丸と仲がいいことは、一応互いの本丸の者には秘密にしてある。一期は、焦りながら鶴丸に言った。

「鶴丸殿、弟たちが帰ってきたので切りますね」

『わかった。次の会までに絶対調べてこいよ! それじゃあまた!』

「ええ……はい……」

——念押しされてしまった。一期は憂鬱な気分で電話を切ると、自室に戻り、机の中に嚴重に端末をしまった。引き出しを閉めると、弟たちが障子を開ける。

「いち兄、ただいま。最近根詰めてるみたいだから、滋養強壮にいい薬貰ってきたぜ」

「ありがとう、薬研」

「いち兄、えつと、僕からは葉です。いち兄みたいな、水色のなんですけど、どうでしょう……?」

「すごく綺麗だね。大切に使用してもらおうよ、五虎退」

「いちにい! オレからは戦法書のお土産だ!」

「厚、ありがとう……多くないか!」

三者三様の土産を渡されて、喜んだり、顔を引きつらせた。そんな長兄に、ほっとした様子の弟たちは顔を見合わせた後、切り出した。

「いちにい、話があるんだ」

「なんだい厚、改まって……薬研と五虎退も」

「うん。そのな、オレたち……」

厚が大きく息を吸い、高らかに謳った。

「オレたち、城下町の幽霊退治に行こうと思う！」

「……はあ!？」

厚の宣言に、一期は大きく動揺した。危機が、弟たちの方から飛び込んできたのだ、動揺しない方が無理な話である。

「梅桜亭のばあちゃんが、幽霊に襲われたらしいんだ。漢として、これは放っておけねえよ！」

「……って厚が言つて聞かなくてな。まあ、梅桜亭のばあさんにはいつも世話になってるから、安心して外出できるようにはしてやりてえなつて」

「えつと、僕も、怖いですけど……でも、おばあちゃんのために、頑張ります！」

三振りには、なかなかやる気に満ち溢れている。一期は、愕然とすることしかできない。危険なことを避けようと思ったのに、どうして弟たちの方から——！

「だからいちにい、夜間の外出許可、大将にも出してくれるように頼んでくれないか？」

厚がずいっと近づいてくる。薬研も決意に満ちた表情をしている。五虎退も、刀身を握りしめてこちらを見ってくる。

真剣な三つの眼差しに何か折れた音がした一期は、プツンと何か切れたように、やけになった。

「ああもうわかった！　ただし、幽霊退治には私も行く！　それでいいね!？」

弟たちは、わあつと声をあげる。いち兄ありがとうございます、さすがはいち兄だ、いちにいがいれば百人力だ、と明るい顔で兄を讃える三振りに、もうどうにでもなれ、と一期は捨て鉢になったのだった。

電話が切れた音が響く。氷雨の鶴丸は、端末を懐にしまうと、早速行動を開始した。

まず向かうは審神者のところ。審神者経由で、何か情報が得られな

いだろうかと考えたためだ。

ドアをノックし、入れ、と入室の許可が出た途端、鶴丸はバンツと勢いよくドアを開け放った。

「主！ 城下町の幽霊について知らないか？」

「……いきなりなんだ、ついに頭がイかれたか」

じとつとした視線を鶴丸に向ける審神者。それにめげずに、鶴丸は問いを重ねる。

「なんか少しでも知ってることはないか!？」

その問いに、呆れ果てたように審神者は答えた。

「……はあ。幽霊なんて非科学的なもん、存在するわけないだろう。お前は驚きに釣られすぎなんだ、少しは物を考えて——」

「説教は後にしてくれ！ というか、それを言うなら俺たちの存在だって非科学的だろう!？」

うがああ、と喚く鶴丸に、審神者は冷淡に返す。

「お前たちの存在は科学的に解明されている。……ああそうだ、思い出した。鶴丸、調査部隊の連中を集めてこい」

「はあ!?! しばらくはあつちは休みだつて——」

「文句を言うな、急に入ったんだ」

職務机からファイルを探し、鶴丸に差し出す審神者。鶴丸は嫌々ながらもファイルを受け取り、中を改める。内容を見て、鶴丸は目を見開いた。審神者は命令を下す。

「——指令だ。調査部隊を編制し、そこに示された施設を破壊しろ」

鶴丸の手にある紙には、『第八暗影研究所』と書かれていた。

2—3 「いざ、幽霊退治」

「よーし、全員揃ったな！ それじゃあ行くぞー！」
「待ちなさい厚！」

深夜〇時、士気高く城下町に進軍しようとする厚を一期は停止させる。

「どうしたいちにいい、何か問題でもあったか？」

「いや、士気が高いのはいいことだが……この数は……」

「数？ ああ、幽霊退治するって言ったら増えてた」

城下町前に集まった蒼穹隊の刀剣男士たち。その総数、三十一。蒼穹隊に所属する刀剣男士が三十三なので、ほとんどの男士たちが集まったこととなる。

「あれ、はせべさんとつるまるさんはどうしたんですかー？」

「長谷部は主さんの書類の手伝いで忙しくて、鶴丸はなんか体調悪いんだってさ。珍しいよな、鶴丸が体調崩すなんて。残念だよな、この祭りに参加できないなんて！」

長谷部はくれぐれも主に迷惑のかける行為をするなーって言うたぜ、と愛染国俊は話す。今剣はふうん、とあまり関心を示さなかった。

長谷部と鶴丸がいなくても数は三十一いるのだ、ちよつとした遠足の集団のような賑やかさになっていた。

「高ぶるねえ……士気のことだよ？」

「城下町の平和のためにも、力を尽くしましょう」

一期が声のする方を見やると、にっかり青江や太郎太刀も、それぞれの意気込みを見せていた。幽霊切りの刀や御神刀がやる気を出しているのだ、もう彼らだけでいいんじゃないのか、という感想を抱く他ない。

「城下町では、手分けして幽霊を探す。城下町の噂が確かならオレたちでも倒せるけど、一応見つけたら青江や太郎さんにも支援に来てもらうようにしてくれ。それじゃあ皆、行くぞー！」

おお、と男士たちの鬨の声があがる。一期も力なく、腕を持ち上げ

たのだった。

時は遡り、午後一時。氷雨隊本丸の正門に、刀剣男士たちが集まっていた。へし切長谷部、小夜左文字、につきり青江、堀川国広、鶴丸国永、次郎太刀の六振りである。

「よし、全員揃ったな。これより、『第八暗影研究所』の調査及び破壊作戦を行う」

「あ、長谷部さん、その前にいいですか？」

堀川が手を挙げた後、ぺこつと頭を下げる。

「新たに調査部隊に配属になった堀川国広です。新入りの身で、このような部隊に配属になって光栄です。これからよろしくお願いしますね」

「よろしくな」

「……よろしくお願いします」

「フフ、新入りって響き、何度聞いてもいいよね」

「そんなに畏まらなくなつていいよ！　これから一緒にやってくんだ、仲良くしようじゃないか！」

堀川のあいさつに隊員がそれぞれの歓迎の意を示した後、隊長の長谷部が忠告する。

「この調査部隊は、危険な任務も多くこなす。当然、破壊されるのも覚悟の上で挑むことになる。政府のために、ひいては主のために、身を粉にして働いてもらうぞ」

「はいー」

「普通、逆じゃないのか？　なあ、小夜坊」

「鶴丸さん、余計なことは言わないほうがいいですよ」

長谷部がひそひそと囁きあう鶴丸と小夜を睨む。おっと、と身を正し、鶴丸は作戦の説明を待った。

——調査部隊。それは、通常の任務である時間遡行軍の討伐以外の、反逆者の『処理』や政府の背後にある『闇』への協力など、いわゆる汚れ仕事を行う特殊部隊である。

政府は逆徒にならないと判断した者を選出し、『歴史改竄阻止計画』

の妨げになる物たちを排除させるのだ。当然、任務内容には重要機密が含まれることが多い。破壊まで追いつめられることも多い調査部隊の中で、氷雨隊のそれは破壊数が圧倒的に少なく、非常に優秀な戦績を修めている。そのため、氷雨隊の審神者は計画を守るものとしての自負がとても強く、周囲と衝突することも少なくないのだが、それはまた別の話である。

おほんと、一つ咳ばらいをした長谷部が、ファイルを取り出し今回の作戦の概要を話し始める。

「先ほども言ったとおり、今回の任務は『第八暗影研究所』の調査及び破壊だ。どうも最近、ここの周囲に不審な物体が現れるといった報告が多いらしくてな。第八暗影研究所には重要機密を取り扱っている研究室もあつた。物体が何であろうが、正体を見定め、排除し、重要機密にまつわる物を回収していけ。内容が分からないものでも回収せよとの命が出ているので、帰りは大荷物になるだろう。その点を留意しておくように」

「長谷部さん、質問です」

「堀川、なんだ？」

堀川が拳手をして、発言の許可を求める。長谷部の許可を待って、堀川は尋ねた。

「不審な物体について、もう少し詳しく知りたいです。政府から何か情報は届いていますか？」

「そうだった。その説明を忘れていたな」

堀川の指摘に、長谷部ははつとしたように付け加えた。

「物体は全身が黒く、手では掴むことができない。その姿は陽炎のようにゆらゆらと揺らめく、と書いてあるな」

「……ねえ青江、これってさ……」

「どう考えても幽霊だよねえ」

訝しげに呟く次郎太刀に、青江は肩をすくめて答える。鶴丸は、ぱあっと目の前が明るくなり、さらに機嫌が上昇するのを感じた。任務で幽霊の調査ができなくなったと思つたら、幽霊が任務として現れたのだ。頬が緩まずにはいられない。——ありがとう主、ありがとう政

府！

「鶴丸国永、なにをにやけている」

「ん？ いや、なんでもないぜ」

にやにやと笑みをこぼす鶴丸を、長谷部は鋭く睨みつける。そうして、お灸をすえんと鶴丸に向かいなおす。

「全く、貴様は気が緩みすぎている。重要機密が敵の手にでも渡ったら、戦況は大いに不利になるのだぞ。気を引き締めてかからんといかんのに貴様と来たら——」

「わかった、わかった。この鶴丸国永、きつちりと任務をこなさせていただくぜ。だから説教はもういい」

「貴様の軽い態度は信用ならんが……言質は取ったぞ」

——あ、これ現場でこき使われるやつだ。顔をひきつらせた鶴丸は先ほどの宣言を撤回したくなった。次郎太刀が大きく伸びて、のんびりした口調で言う。

「帰ったら酒が飲みたいねえ」

「フフ、僕もご一緒させてもらつていいかな？」

「おつ、いいねえ。俺も参加させてもらうぜ。小夜坊も呑もう！」

「えつと、僕は……」

「いいですね、宴会。僕おつまみ作りますよ！」

「貴様らあ!!」

こうして、調査部隊は気が緩んでいるのか引き締まっているのか曖昧なまま、本丸を発ったのだった。

2—4 「対峙：蒼穹」

「よーし、それじゃあ班分けのくじ引きだ！ 同じ色のやつが同じ班な。一振り一本ずつ、引き直しはするなよ！」

厚は紐がたくさん飛び出している箱を手に、そう叫んだ。箱の周りに、続々と男士たちが集まってくる。

「ボク、いち兄と同じ班がいいなあ、やつぱり怖いもん。いち兄、一緒の班になったら手をつなごうね！」

「乱、これぐらいで怖がるタマじゃないだろ。いち兄の前だからって、猫かぶってんのか？」

「今更かわい子ぶったって本性はバレバレなのにねー」

「薬研、信濃、どうしても手入部屋に行きたいんだね。ボクが直々に送ってあげるよ、表に出な！」

「ちよ、勘弁！ 乱、短刀では前田の次に練度高いじゃん！」

「おーおー、血が滾るなあ。いいぜ、先攻は譲ってやる」

「薬研も煽らないで！」

「兄さんたち、見苦しいですよ。ただでさえ夜中だから響くのに、城下町中に響き渡ってると思っちゃうじゃないですか」

「いち兄、暗いですが、辺りは見えていますか？ 短刀が一緒になったら、先導していただくのもいい案だと思いますよ」

「うう……暗い……あつ、虎くんたち待つて！」

「いやー、久々の夜戦だ！ 今のうちに準備をしつかりとしておかないと」

「兄弟、その大量の懐中電灯は何のために……」

「うーむ、太刀以上よりは有利とはいえ、夜戦は打刀、脇差は短刀より不利でありますからなあ。鯰尾殿の慧眼に、このお供のキツネ、感服のしきりでございます！」

人数が多いため後の方に回された粟田口派は、ワイワイと喋りながら順番を待っている。一期は兄弟や親戚のやり取りに顔をほころばせた（さすがに乱たちの喧嘩は止めたが）。

「よーし、最後はオレたちだ！ 皆、どんな結果になっても不平は言

「いっこなしだぜ」

そうしているうちに、粟田口派の順番が回ってきた。一期も、箱からくじを引く。先端の色は、紫色だった。

「あー残念、いち兄とは別れちゃった」

「乱は、白か」

「俺たちは青だ。決着が今すぐつけられないのは残念だが――」

「薬研？」

睨みを利かせた長兄に、薬研は慌てて口をふさぐ。その一方で、厚が箱を眺めて首をかしげた。

「あれ、まだ引いてない奴いるか？ 一本くじ余ってるんだけど」

「え、ボクらはひいたよ？」

「俺も」

「私もですね」

次々にくじを掲げ、または引いたと宣告する声が相次いだ。厚は「作りすぎたのかな」と自らを納得させ、箱を脇に置いた。

「よし、じゃあ同じ色の奴は集まってくれ。班ごとに搜索する場所を決めるぞ！」

厚の声に、男士たちは同じ色同士のくじを持つ刀を探し始めた。一期もそれに倣う。

——隅に置き去りにされた箱に、小さな手が伸びる。その手の持ち主は、くじの紫色を確認した後、一期のいる班に向かった。

*

「……何も大人数で行く必要はなかったんじゃないか？ 兄弟のノリに合わせて、ついてきてしまったが」

「私もそう思います……」

紫色の班は、城下町の南西に向かっていて。一期は、歩きながら山姥切と雑談をしていた。

「なんかもう、ノリが肝試しのそれになっような気が……」

「ああ、厚たち以外の方はそうかもしれないね。なんせ、城下町に降りるのは普通ならそう頻繁にないと言いますから」

「そうなんだよな。もう遊園地のお化け屋敷に訪れた観光客のような

感じになっている。……普段は本丸が建てられている山にある万屋で事足りるからな……」

そうしたら、氷雨の鶴丸をはじめとした会のメンバーは変わり者ぞろいなのだろうか。一期はそんなことを考えた。

先行して路地裏を覗いていた燭台切光忠が、こちらに戻ってきた。

「こつちもだめだ、何の気配もない。……厚くんの言葉を疑うわけじゃないけど、本当に幽霊ってまだいるの？ 実はもう退治された、みたいな可能性はないのかな」

「ああ、専門家を呼んで、さくつと消滅させました、という可能性も否めないな」

「そうしたら我々は時間まで何をしたらいいんでしょう……」

集合時間は午前二時半。現在の時刻は二時である。あと三十分、どう暇をつぶそうか。途方に暮れる一期と山姥切に、燭台切は手を叩いて提案した。

「あ、じゃあ世間話でもしようか。昔外国で、それは恐ろしい政策が打ち立てられたことがあったみたいなんだ」

「いきなりですね。……それはどんな？」

「なんでも、その国は人口を増やすために人工中絶と離婚の禁止を国民に強いたらしい。人口は増えたけど、育児放棄も増えて、孤児院に引き取られる子供も増えた。孤児院の職員は子供を死なせた場合、給与が減らされるから、無理な病気治療の一つとして、大人の血を子供に与えた。結果、血から感染する病気にかかる子供が激増した」

「……燭台切、あんたなんでそんな恐ろしいことを知っているんだ」

「まさか、そういう残虐趣味がおありで……？」

引いた目で見つめる二振りに、燭台切は慌てて否定する。

「いや、違うよ！ たまたま書庫から飛び出していた本が、外国の歴史に関する本だったんだ。整理しようと手に取ったら、思いのほか面白くて……全部を理解することはできなかつたけれど、どれも興味深いものばかりだったよ」

「……まあ、この国にも正気を疑う出来事があるけどな」

「あんまり外つ国のことを言えませんよねえ……」

外国の歴史の話で盛り上がる三振り。それを見向きもせず、その丸い目は別の方向を見ていた。視線の先にあつたものに、少し驚きを隠せないでいる。しかし、『それ』の存在を伝えることはしなかった。——絶対に、自分の言葉に耳を傾けることはない、分かっていたから。

彼らが『それ』に気づいたのは、少し後になってからのことだった。談笑途中の三振りはぞわり、と背筋を凍らせる。まるで、背中に冷たい氷をいきなり入れられたような感覚。さつとあたりを見回すと、十メートルほど先に『それ』はいた。

暗闇の中なのに、それすらを明るいと思わせるほどの漆黒のヒトガタ。その手には刀を持っていが、影に覆われていて太刀だということしか分からない。ゆらゆらと、その姿を揺らめかせながら『それ』はゆっくりと近づいてくる。

一期は思わず、抜刀態勢に入っていた。山姥切と燭台切も、すぐ抜刀できる状態になっている。

「山姥切殿、燭台切殿、これは——」

「うん。……僕たち、アタリを引いちやつたみたいだね」

「くそ、なんだこの気配は!? やつぱり来なけりやよかつた……!」

「応援は!?!」

「もう呼んだ! でも、やつぱり少し時間かかるつて!」

「……それまで我々だけで持ちこたえるしかないですね……!」

三振りが、同時に抜刀する。そして黒い影が、その腕を振りかぶつた。

2—5 「対峙：氷雨」

「とーうちゃーくー！」

「結構時間かかったなあ」

氷雨の調査部隊は、少し古びた白い建物の前にいた。目的地である第八暗影研究所だ。町はずれにあるため三十分ほど歩き、体は少し汗ばんでいる。長谷部がぐるっと隊員を見回し告げた。

「よし、ここで一度解散だ。手分けして中を調査するぞ。何かあったら、警笛で救援を呼べ。調査後は爆薬で施設ごと破壊するから、忘れ物などないように」

「了解」

そうして、部隊は三つに分かれる。鶴丸は、小夜とともに行動する手はずとなっていた。毛を逆立てた猫のような小夜を見やり、ニツと笑いかける。

「よし行くか小夜坊！ 何か珍しいものがあつたらこつそりくすねていこうぜ」

「それは、禁止されていることなのでは？」

「びっ〇りまんしーるぐらいだつたら大丈夫だろう」

「研究所にびっ〇りまんしーるがあるんですかね……？」

おちゃらけた雰囲気はいつも通りだ。小夜は肩の力が抜けていくのを感じながら、鶴丸とともに建物の中に踏み込んだ。

*

「廊下は割と綺麗だな。じゃあまずはこの部屋から行くか」

「そうですね」

鶴丸たちの担当は二階。二振りは階段を上った後、最初に目に入つた扉を開ける。

「おおー、見事にギヤマンの容器が置かれている棚しかないな」

「あと、置いてあるのは机ぐらいでしょうか」

二振りの中を見渡してみる。白い天井と床には、窓を含めた装飾はない。作業用の机以外には、ビーカー、試験管、フラスコ、その他空の実験道具が並んだ棚がぎっしりと置かれているだけだ。

「薬品とかは廃棄されているか」

「書類がなかったら出ましようか」

机の中を改めてみても、何も入っていない。この部屋は空振りだったようだ。

残念がることも特にせず、二振りには部屋を出た。

次の部屋を開けた途端、いかにも難しそうな機械がどんと置いてあるのが目に入った。その他にあるのは作業机と大きな画面。

「うげえ……俺だったら永遠に使いこなせねえな」

「僕だつてそうですよ……」

「どうする？ この機械ぶつ壊すか？」

「刀は使わないでくださいね、刃こぼれしますから」

「うーん、どうするか……」

鶴丸が機械の前で頭を悩ませている間に、小夜は机の中を探っていた。そして、一枚の紙を見つける。

「鶴丸さん」

「どうした、小夜坊」

「……これ、研究報告書みたいなんですけど」

小夜の手持たれた紙を覗き込む。髪を二つに分けて結んでいる幼い少女の写真がまず目に入った。経歴が書かれている箇所を見ると、黒塗りされている部分があったものの、こう読めた。

『・被験者19477番に×を接続。融合に成功。苦痛を訴えていた点に×は、さらに改良の余地あり。』

・再び×を接続。一部数値にエラーあり。酷い苦痛を訴えているが、研究×支障はないと判断。

・再び×を接続。断末魔をあげたのち、死亡が確認された。××の改良を要検討。

備考：×9478番のメンタルが不安定になり、さらに暴力を振るうことが多くなった。薬剤を投与してもメンタルが安定しない場合は記憶処置の許可を申請すること』

「……酷いな」

「……ええ」

おそらく、19477番と19478番は仲が良かったのだろう。幼い少女を酷い苦痛が伴う実験の道具として使い、必死に出たであろう救難のサインすら無視され、仲が良かった者の引き裂かれた悲しみを、絶望を、実験のために強引に忘れさせる。

彼女たちの人間としての尊厳など、どこにもなかった。

「きつと、19478番には復讐心もあつたことでしょう。それがあ
るおかげで、絶望にも耐えられたのかもしれない。……身内の仇を呪
う権利すら、実験のために奪うなんて」

小夜は復讐のために使われた短刀だ、思うところがあるのだろう。
紙の端をぐしゃりと握りしめる。

がしゃん、と何かが割れる音が聞こえる。驚いた小夜が振り向く
と、鶴丸が機械に鞘のついた刀を振り下ろしているところだった。何
度も、何度も、何度も振り下ろして、完全に壊れたのを確認してから、
鶴丸は小夜の方に、表情を落とした顔を向けた。

「……これを燃やして、19477番に黙祷してから出ようか」

「……はい」

持ってきていたライターに紙をかざすと、レポートが炙られた箇所
から燃えていく。完全に灰になった紙を確認した後、鶴丸と小夜は目
を閉じ、手を合わせた。

*

次の部屋は、訪れたどの部屋より大きいものだった。いくつも並ぶ
機械がついている、割れた太いガラスの円柱だった物の中には、液体
が入っていたようだ。

そう、この部屋の有様は、他のどの部屋とも違っていた。ガラス片
があちこちに落ちていて、机はひっくり返っている。ところどころに
溜まっている赤黒い染みたちは、血の跡だろう。

「すごいな。ここだけ台風でも来たんじゃないかって思うぐらいだ」
「血の跡も大量に……何があつたんでしょう」

「研究所の連中が殺されたんなら、ざまあみろって感想しか浮かばな
いけどな」

そう吐き捨てた鶴丸の目に、破れた紙片が落ちているのが映った。

拾い上げて目を通すと、ある箇所を見て小夜の肩を揺さぶった。

「小夜坊！ これ、19478番の研究報告書だ！」

はっと振り向く小夜に、屈んで文字が見えるようにする。

紙片には、血の跡が酷くこびりついており、解読が困難だ。しかし、根性で二振りは読める文字を拾う。

『・× 験×19478番に×質×× 体を投与。× 難×××× の適×に× 功
するが、原×不明の×走を×× 研×員を次々と×害× 現在、この×
告書を×い×いる私も19×78番に×われて×る。×だ、×にたく
×い、こんなと×ろで×に×× されるなんて——』
「……どういこうった？」

「後半の字の形が変ですね、走り書きのような……」

不気味な紙片に二人が考え込んでいると、外から音が聞こえた。高く、鋭い音だ。

「——警笛か!？」

「部屋の外に出ましよう！」

部屋の外に出ると、その音は確かにホイッスルであった。上の階から響いてくる。二振りが急いで階段を駆け上がると、屋上に続く階段の前に一階担当の堀川と青江がいた。

「鶴丸さん！」

「なにがあつたんだ!？」

「わからない、急に上から聞こえたんだ！」

「例の物体かもしれません、急ぎましよう！」

四振りは急いで階段を上る。屋上のドアを開け放つと、そこには、戦装束に傷がついた次郎太刀と、あちこちに傷を作っている長谷部が、抜刀した状態で立っていた。

「アンタたち、ようやく来たか！」

「次郎さん、長谷部さん！ かなりの傷じゃないですか、一体何が——」

「分かってるだろう、貴様ら。——奴のお出ました」

次郎太刀と長谷部の間に、『それ』はいた。日差しを飲み込む漆黒、陽炎のように揺らめき、そのヒトガタはゆっくりと腕を振り上げ、大

太刀だと思われる影に覆われた刀を、長谷部に向かって勢いよく下ろした。横に飛びのいたものの、砕けたコンクリートの破片が長谷部の傷に当たる。

「チィ……っ！」

「長谷部、アンタは下がりな！　ここは次郎さんに任せなさい！」

「抜かせ、俺はまだ戦える！」

列強の戦士たちであるはずの四振りは、長谷部と次郎太刀の気迫とヒトガタの己の深淵を抉るような気配に思わず固まってしまった。

はっと鶴丸は我に返り、柄に手をかけながら三振りに告げる。

「長谷部と次郎が押されている。ここで主要戦力を失うわけにはいかない、俺たちも加勢するぞ！」

鶴丸が、ヒトガタに向かって駆け出す。それを見た三振りも、

「——了解！」

と答え、迷わず戦場に飛び込んだ。

ヒトガタが、大きく振りかぶる。狙いは山姥切だ。振り下ろされた腕を、間一髪でよけ切った。山姥切の足に、飛んできた石が掠めて、傷を作った。ヒトガタの腕が地面にめり込んで動けなくなっているところを、燭台切が大きく上から下へと切り落とそうとする。しかし、もう片方の腕で防がれてしまい、即座に後方に下がる。

「大きいのに、かなり素早いですね……！」

「ああもう、切っても切っても復活するとか、最早幽霊じゃなくて化物だろう！」

山姥切がわめく。もう何度も腕や頭を切り落としているのにそのたびに復活するのだ、荒れるのも当然の話であろう。

「迂闊に建物を利用することもできないし、もう本当どうしよう……」
燭台切が途方に暮れる。しかし、攻撃の機会は狙い続けているままだ。

再び、ヒトガタが腕を叩きつける。狙いは、

「ぐあ……っ！」

「山姥切殿！」

——傷を受けて動きが鈍っていた、山姥切だ。彼の脇腹から、血があふれ出る。とどめを刺そうとするヒトガタの腕を、一期が受け止める。

「くっ、重い……！」

刀身全体で持ちこたえながらも、少しづつ後ろに下がっていつてしまふ。刀身にひびが入りそうなくらい、その力は強い。

ふと、ヒトガタのそれとは違う、微弱な力を感じた。一期がそちらに目を向ける。

力の源流——ヒトガタの腰には、小さなストラップが付いていた。

一斉に、そのヒトガタに斬りかかる。小夜はその身軽さを生かし飛びかかって右腕を切り落とし、堀川は左腕を落とす。青江が左足に切り傷を作れば、長谷部がさらに傷を抉り、体と足を切り離す。崩れ落

ちるヒトガタへ、さらに鶴丸は右足に、次郎太刀は頭に攻撃を加えた。一見すれば、四肢と頭、そして刀は落とされた瞬間に砂とともに消え去っていて、もう倒したと思ってもおかしくはないだろう。しかしそのヒトガタは、少し蠢いたと思うと、一気に四肢と頭を復活させた。手には、刀が握られている。

「……こりや驚いた。恐るべき回復力だな」

「幽霊じゃなくて、怪物と言った方がいいですよね……」

鶴丸が冷や汗を流す。小夜も、その回復の速さに身震いした。

先ほどから、何度もこのような攻撃を繰り返していた。そのたびにヒトガタは、こうして蘇っている。きりが無い、と堀川がつぶやくのを聞いた。

「……青江、見えたかい？」

「確かに感じるねえ……弱弱いけど、確かな力が」

しかし、次郎太刀と青江には、何かが見えたようだ。鶴丸が二振り尋ねる。

「感じるって、何がだ？」

「……アタシが頭を切り離れた時、何か光って見えた。形からして、鎖につながれた小さな鍵だったみたいだけど」

「その鍵から、微弱だけど、どこか強い意思を思わせる力を感じたんだ。何とかアレを壊すことができれば、戦況が変わるんじゃないかと思ってるね。……希望的観測だけど」

鍵。ヒトガタに向き直ると、それは見つからなかったが、確かに首から鎖で何かが下げられている様子が見て取れた。

「しかし、それを壊すって言っても、鍵はその怪物の中だ。どうしろって——」

「関係ない」

座り込んでいた長谷部が、ふらりと立ち上がる。体からは、強い力があふれ出していた。

「幽霊だろうが、怪物だろうが、その中にある鍵だろうが」

刀を構える。その目は、力強くヒトガタを睨みつけている。

「——主に仇なす敵は斬る！」

ヒトガタの胴体が、真つ二つに割れる。ヒトガタから、耳障りだが、悲痛だと分かる声が轟いた。

真剣必殺。刀剣男士が追い詰められた時に、稀に起こすことができずるカウンター攻撃。長谷部は、それを発動させたのだ。

鶴丸は思わず耳をふさぐ。そしてヒトガタを見た。

——ヒトガタの真上で、鍵がパキリ、と砕け散った。

「根付……？」

攻撃をなんとか受け流し、後方に大きく下がった一期が訝しげに呟く。可愛らしい猫の顔がついたストラップだ。なぜヒトガタにこのような物が——。

「一期さん、どうしたの？」

「あ、いえ、敵の腰に、猫の根付がついていました」

「猫の根付？ どうしてそんな物がついてるんだらう」

「——それが鍵になるかもしれないよ」

突然声が出て、はっと振り返る。青江が、息を切らしながらそこに立っていた。

「青江殿！」

「遅くなってごめんね。遅いのは、男だったら嫌われることだろうに」「いえ、来ていただけで助かりました。それで、鍵になるといっは？」

さりげない下ネタを、これまたさりげなくスルーした一期に、青江は肩をすくめながら説明する。

「根付けかどうかはここからは見えないけど、確かに異質な力を感じるね。恐らくはそれを壊せば、何か変化が起こるはずだ。良くも、悪くもね」

良くも悪くも。それは、ヒトガタがさらに狂暴になるかもしれないということだ。大きいデメリットもあるが、試してみる価値はあるだろう。

「分かりました。根付を壊せばいいのですね」

「その根付があるのは、腰だったよね」

燭台切が、ヒトガタの腰に目を向ける。そうして刀を構え、一気に斬りかかった。

「――青銅の燭台より、斬るのは容易いよね!」

腰に、大きく切り込みが入る。ストラップが切れ、猫の顔が碎け散った。

ヒトガタが、大きな咆哮をあげる。そうして先ほどよりも速度を上げて、燭台切に襲いかかった。しかし燭台切は、軽々とそれを受け止める。

「二期さん、山姥切くん、速度は上がったけど、さつきよりも力が弱くなってるよ!」

「よかった、これで――」

「二期気をつけろ、速度が上がってる分、相手の手数も増えている。油断したら燭台切が押されるぞ!」

布を裂いて脇腹にあてていた山姥切が、一期に向かって叫ぶ。はつとなり、慌てて加勢に向かう。青江は、山姥切に駆け寄っていた。

背中を向けているヒトガタに、左肩から右腰にかけて背中に傷を入れた。ぎいあああ、と呻き声をあげたヒトガタは、振り返って一期に襲いかかる。

速度が上がり、何度も剣戟を浴びせてくる。しかし、もう先ほどまでの押す力はない。練度の低い一期でも、受け流せる程度のものだ。一期が攻撃を受けている間に、燭台切が刀を持った腕を切り落とす。もう、腕は再生しなかった。

「よし、再生能力は消えてる!」

「あと少しで……!」

「それじゃあ仕上げにかかろうか。山姥切くん、やれるかい?」

「ああ、あんたの力添えで傷も多少塞がった。任せろ」

青江の肩を借りて山姥切が立ち上がると、二振りは鋒をヒトガタに向けた。彼らからあふれる力が、共鳴している。

二刀開眼。戦場にいる打刀と脇差が、その力を繋げることで行える連携攻撃だ。

「それっ!」

「はあッ！」

青江が残った腕と足を俊敏に切り落とし、山姥切が胴体を大きく切り裂く。ヒトガタは、一際大きな絶叫をあげると、その姿を大きく崩れさせた。さらさらと、砂が風にさらわれるようにその影を消していく。

「ア……が……オと……チ」

呻き声をあげて、影は跡形もなく消え去った。

怒号が、屋上に響き渡る。その場にいた全員がそのけたたましさに耳を痛めている。ヒトガタは長谷部に向き直ると、その刃を向けた。しかし、あっけなく斬り返される。

「ふん、本来の力はこの程度か」

全身に傷を負っている長谷部に、真剣必殺の影響で大きく力を増しているとはいえ、あっさりとは反撃を許すのだ。力が弱まっているのは、誰の目にも明らかだった。

「よし、鍵を壊されたことで相手は弱まった。アタシたちも行くよー！」
突撃の合図を次郎太刀が出せば、ほかの刀も一斉に攻撃を再開する。両腕、両足、胴体と、一気に切り刻んでいく。

「ウ……が……ドウ……し……」

その呻き声が、やけに耳に残る。しかし鶴丸は、頭を振ってヒトガタに告げた。

「悪いな。きみにも大切な物があるのだろうか——こっちも譲れない任務なんだ」

そうして、会心の一撃を浴びせる。ヒトガタは、その影をすべて風に飛ばした。

「……セン……い」

残された声を聞きながら、鶴丸は目を閉じて、納刀した。

2—7 「一件落……着？」

「いちにーい！ 青江さーん！」

「大丈夫ですか？」

「無事でよかったです！ ……うわあ山姥切重傷じゃん！」

青江と同じ班だった信濃、宗三左文字、大和守安定が駆け寄ってくる。一期はにっこりと微笑んだ。

「私はこの通り軽傷だ、ありがとう。 ……宗三殿、大和守殿も来ていただいてありがとうございます」

「それは馬の札を持っていなかった僕への嫌味ですか、一期。 ……まあ、なにはともあれ無事でよかったです」

一期は劳いの言葉をかける宗三をはじめとした青江班に頭を下げる。

「弟を見ていただいて、感謝申し上げます。 皆さんも、無事で何よりです。 ……こちらは、山姥切殿が怪我を負ってしまいました」

「かなり強い化け物だったんでしょ、仕方ないよ。 一期さんは顕現したてなのにかかなり健闘したんだって？ 流石だね！」

——そうか、自分は健闘したのか。 率直な賛辞を贈る大和守に、一期は少しだけ気分を良くした。 大和守は山姥切のもとへ行き、燭台切と共に肩を貸すの借りないのの駆け引きを行い始める。 信濃が、涙目になりながら一期の懐に飛び込んだ。

「本当に良かった、無事で……！」

「ありがとう、信濃。 心配をかけたね」

「本当だよ！ 思った以上に強いつて聞いて、俺、肝を冷やしたんだからー！」

えぐえぐと一期を見上げる頭を、優しくなでる。 青江がすすすつと近づいてきて言った。

「奥があつたかいねえ……心のことだよ？」

「ええ、弟はみんなとてもいい子で」

「……青江さん、いろいろ台無し……」

再び青江ジョークをスルーした一期と、半目になりながら突っ込む

信濃。その場の空気は、とても緩やかだった。

しかし、少しだけ気になったことがある。

刀を持った敵、可愛らしい猫のストラップ。そして、

『……………オと……………チ』

こちらの心を痛める、無念さを滲ませた一言。それは、何を意味するのだろうか。

和やかな雰囲気を含む満天の星は、何も言わずに輝いていた。

「ここから三十分歩くのかあ……………きついじえ……………」

「酒が飲みたあい……………」

「文句を言うな、きびきび歩け」

氷雨隊の調査部隊は、持ってきていた大量のダイナマイトで研究所を破壊し任務達成、無事帰路についていた。隊員たちは収穫があまりなかったため身軽だが、皆疲れ切った表情をしている。その中で、長谷部だけがしっかりとした足取りで歩いていた。

「長谷部さん、なんでそんなに元気なんです……………?」

「あれだけ傷を負ったのに、主命の力ってすごいんですね……………」

「当然だ。本丸に帰って、主への報告が終わるまでが任務だからな」

「あれだけやってまだ元気だなんて、夜のほうはさぞすごいんだろうね……………夜戦のことだよ?」

「青江、その冗談はつまらん」

長谷部以外の隊員の足取りはおぼつかない。それを見て、次郎太刀は勢いよく手を挙げた。

「はいっ、隊長! アタシ、居酒屋じゃなくていいから休憩したい!」

「はあ? 何を言っている、主に一刻も早く報告しないと——」

「そうは言ったって、この調子じゃまともな報告もできやしないよ!

茶店での休息を要求する! そして茶菓子を食べたい!」

そうして次郎太刀は、隊員たちを見やって意見を募った。

「はーい、それじゃあ茶店で休みたい奴手え挙げてー!」

「ほーい。俺みたららし団子が食べてえなあ」

「はい、僕は餡団子で!」

「うーん、葛餅置いてないかなあ」

「……僕は、冷たいお茶が飲めれば……」

「おい貴様らー!」

ワイワイと話が盛り上がる隊員たちを止めようとしたのだが、止まるどころかヒートアップしていく話題に、長谷部はついに諦めた。

「——ああもうわかった、これから素馨屋に寄って休息をとる! ただし時間は二十分、経費は自分の給料からだ!」

やけくそになった長谷部の言葉に、隊員たちはわあつと歓喜の声をあげる。

「やったあ!」

「何食べようかな……!」

「流石、心の広い隊長様だねえ」

「よっ、長谷部隊長!」

「へし切隊長ばんざーい!」

「へし切って呼ぶな!」

賑やかな雰囲気のまま、部隊は茶屋の素馨屋に向かって歩を進める。隊長をよいしよしながら、鶴丸はあることが頭から離れないでいた。

——あの研究所は、一体何を研究していたのだろう。

懐に手を入れる。そこには、血まみれになった紙片が入っていた。

このことは、小夜にも言っていない。

「鶴丸ー? 何してるんだい、置いていくよー!」

無自覚に立ち止まってしまった鶴丸を呼ぶ声が聞こえる。鶴

丸は懐から手を出すと、急いで部隊を追いかけた。

茜色の空は藍色で押し込みながら、太陽を沈めていた。

氷雨の調査部隊が去ってしばらくした後。第八暗影研究所だった瓦礫の山の上に、三つの影が現れた。

「あーあー見事なまでにぐっちょやぐちや。これじゃあ収穫は望めそうにないねー」

赤い髪紐で黒髪を絡め、しかし頭頂から一本逆毛が立っている少年

は、壁だった物の一部を掻き分けながら告げた。壁だった物の一部は、すぐにボロボロと崩れていく。

それを聞いて、黒髪に白衣を着た少年が逆毛の少年に叫び返した。「こっちもボロボロだ、少し遅かったか。長谷部ー、そっちはどうだ？」

長谷部と呼ばれた青年——いや、なぜか少年にも思える——は、顔を持ち上げて答えた。

「……紙片も、灰すらも見つからない。持ち去られたか……。ここにもう用はない、帰るぞ」

「はい、見つからないうちに帰りましょうー」

逆毛の少年は調子よく、『長谷部』は砂を払って立ち上がった。

膝を立てた白衣の少年は、目の端で黒く蠢く物を捉える。

「ん、なんか視界の端で動いたような……」

「気のせい……なんて言ってられないね。警戒しながら帰ろうか」

逆毛の少年と白衣の少年が腰に手を当てれば、そこからあつという間に衣装が変わった。軍服を思わせる、黒い戦装束だ。戦装束に変わると同時に、手には刀剣が握られている。先ほどまで白衣をまとっていた少年は、未だに立ち尽くしている『長谷部』に向かって声をかけた。

「……そんなに落ち込むなよ長谷部。これであんなのような奴が、救われなくなったわけじゃない。次の手段を探そうぜ」

「……そうだな」

白衣だった少年が慰めの言葉をかけると、ようやく『長谷部』は二振りの元へ向かった。そうして三つの影は、研究所跡地の近くにある、時折空間を裂くように違う風景が映り込む森林の中に踏み入る。

「あー、今日の夕餉はなーにつかなー」

「兄貴はそればつかだな」

「俺はカレーがいい」

「長谷部さん、毎日カレーでも飽きないんですか……?」

「チキンカレーならなおいい」

「鶏肉好きだよな、あんた」

そんなやり取りをしながら、三つの影が夕暮れの闇に溶けていく。
そして後にはもう、彼らがいた痕跡はどこにもなかった。

第三話 「宴会と過去の事件」

3—1 「接触」

『そうか、格が上がったのか。おめでどう、一期』

「ありがとうございます、鶴丸殿」

午後十時、行灯に照らされ、ぼんやりと室内は明るい。蒼穹の一期は、氷雨の鶴丸から端末越しに『特』付きになった祝いの言葉をもらっていた。

「これから実戦も多くなるでしょう、弟たちに示しがつくようにいられたらいいのですが」

『きみは演練でも三日月に褒められたんだろう？ なら心配はいらないさ』

一期は、布団のしわを何となしにつまむ。そうだ、と鶴丸は何かを思いついたように発した。

『次の会では、このことも話題のうちに入れておくか』

「えっ、それはちよつと、恥ずかしいような……」

『きみの本丸内では祝われたんだろう？ 俺からも改めて、祝わせてくれないか』

そう、蒼穹隊内では、弟たちをはじめ、多くの仲間に祝われた。『特』付きになる時期を見越していたのか、弟たちからは花束を贈られた。審神者は弟たちを撫でながら「これから再スタートだ。ガンガン戦場に出していくから、よろしく頼むぜ」という言葉を一期に贈った。

『何せ実戦では、本気で命のやり取りが行われる。その時の血の沸き様と言ったら、言葉では表せないほどに素晴らしい。人の形を与えられた一番の醍醐味はそれだと俺は思っている。それをようやく味わえるようになるんだ、祝わずして何を祝う？』

一期は、想像を巡らせる。自らの手で敵に己の刃を食い込ませ、血が流れる。敵の刃が、同じように己に食い込むかもしれない、緊張感と殺気。演練ではセーフティがかけているために感じられない、命の奪い合い——武器の身として、それを味わえることは確かに愉悦

だった。

「……そうですね。それではありがたく祝われます。楽しみにしていますね」

『おう、任せておけ。友達の格上げ祝いだ、とっておきの驚きを用意しようじゃないか』

——友達。それは、さりげないのにやけに大きく、そして甘美な響きを一期にもたらした。なぜだろう、その言葉を聞いた途端、背筋を伸ばさないと身を律すると同時に、体の余計な力を抜くような、暖かい気持ちに包まれる。矛盾した感覚は、けれどとても心地よかつた。

「……ありがとうございます、鶴丸殿」

『ん？ 何がだ？』

「いえ。……いい友達を持って、幸せだなと思ったままでです」

『おつ、おう。……いやあ、なんかこそばゆいな』

「ふふ、そうですね」

なかなか照れるな、それに友達と思われてなかったらどうしようかと、と鶴丸はこぼす。一期は、後半の部分をきちんと否定した後、ここまで言った理由を尋ねた。

『いやなに、友達にはちゃんと格上げの祝いをしておかないとな、つて』

「そのように思った理由とは？」

『よく聞いてくれた！』

——あ、聞くんじゃないかった。そう後悔したが、もう遅い。鶴丸は目の前にいたのなら唾が飛んでいく様が見えるような勢いでまくしたてた。

『俺さ、格上げた時に、同郷の連中からは祝ってもらえたんだよ、それはもう光坊なんかは胴上げしそうな勢いでな。けれど一期一振——あ、きみじゃなくて俺の本丸のな——の奴、あいつなんて言ったと思う？ 厭味ったらしい口調で、ようやく殻を割ることができましたねえよくできました、これからさらにぴーちくぱーちくと喧しくなりそうですね、だぞ?! 俺は生まれてすらいなかったってか、つーか格

上げの祝いの言葉に嫌味って何考えてるんだあいつは！ 畜生今思
い出しても腹が立つてきた、時間が許すなら今すぐ殴りに行きたい本
当に』

「それは……えーと、なんと云えばいいのか……」

もう一人の自分がすみませんと言えればいいのか、いやそれも何か違
う気がする。一期がかける言葉に悩んでいると、鶴丸は続けた。

『同郷たちの祝福が嬉しかった分、腹が立ったからなあ。もし格上げ
前の友達ができたら、格上げ時には嫌味なく思いつきり祝ってやろう
と思っただよ』

「他の方にも、そうして祝ったのですか？」

『いや、格上げ前になった友達は一期が初めてだ。……さつきは大見
得を切ったが、どう祝ったらいいのか分からなくてなあ』

「意外ですね、鶴丸殿はたくさん友達がいそうな印象なのですが」

『うちの隊ではあまり身内以外の格上げを祝うことはない。仲間では
あっても、友達と言える奴は少なくてな。城下町でも、下りてくる奴
は少ない上に、そのほとんどが格上げ後だ』

なるほど、広く浅くの関係を築く傾向が多い鶴丸国永らしい言葉
だ。だからこそ、彼に友達と言われたのは一期にとって光栄だった。
「本当にささやかなものでもいいのですよ、その気持ち嬉しいので。
あまり気合を入れすぎて、当日に体調を崩す、なんてことになったら
大変ですから」

『……そうだな、あまり気合を入れすぎて空回っても仕方ない。驚き
は少ないが、確かに祝福の意を込めたものにさせてもらおうぜ』

「改めて、楽しみにしていますね」

『おう』

それじゃあ、また。そう言い合って、電話は切れた。端末を机の中
にしつかりと入れる。

なんだかそわそわして落ち着かない。戦場に出られる喜びと、友達
と言ってもらったこそばゆさからか。一期はついに立ち上がり、障子
を開けて、廊下に出た。外からは、虫の鳴き声がしている。空には雲
がかかり、月はぼんやりとした明るさしかわからない。軋む廊下を歩

いて、一期はその足を書庫に向けた。

何度か違う部屋を開けてしまいなながらも辿り着いた書庫には、先客がいた。

「おつ、一期か。こんな時間に来るとはな」

「鶴丸殿」

自本丸の鶴丸だった。肩に薄いカーディガンをかけて、本棚の前に立っている。寝衣とカーディガンのアンバランスさが、やけに印象に残った。

「きみも本を借りに？」

「ええ、寝つけなくて。鶴丸殿、体調がすぐれないと聞きましたが、大丈夫ですか？」

「もうほとんど大丈夫だ。主は心配しすぎなんだ」

部屋の端の燭台が、鶴丸の顔を照らす。その横顔は、なぜか絵画を見ているような感覚に陥らせた。なんだか、作り物めいているような――。

「――人間とは、自分の運命を支配する自由な者のことである」

「え？」

「外つ国の言葉だ。支配される側だった俺たちが、人間のように運命を選べるようになるとは、驚きだよなあ」

本を手に、鶴丸がこちらを向いている。やはりその笑顔は、偽物の表情のように思えた。

「いいえ、何も変わらんでしょう。我々は、今もこうやって人間に使われている」

「いや、俺たちは運命を変えられる、やろうと思えばな。きみは、その可能性から目を背けているだけだ」

「鶴丸殿、一体何が言いたいのですか？」

「なあ一期」

声から、色が抜け落ちた。表情もまっさらなものになっている。一期は、思わず固まった。

「きみの大切なものが主に侵されているとして、きみは主を許すか？」

「……っ」

目を見開く。鶴丸の表情は、相変わらず色が無い。

「弟たちが、主に嬲られているとしたら？」

審神者が、笑顔で弟たちの頭を撫でる光景が浮かぶ。

「弟たちが、政府に食い物にされているのを主が許しているとしたら？ 弟達が心を折られるまで散々に罵倒されているとしたら？ そして——弟達が火に投げられ、苦しむ様を見て楽しんでいたら？」

審神者の、一期への激励が脳裏にこだまする。そんな審神者が、悪人だったら？ 記憶の中にある審神者の顔が歪んでいく。そうして浮かぶのは——悪意に歪んでいる審神者の笑顔と、苦痛に泣き叫ぶ弟達。

「君はどうする、一期一振」

鶴丸の笑顔が誰かの悪意を示しているように思えて、一期は背筋を凍らせる。憎悪を煮詰めて抽出したようなその表情から目を背けたくて、一期は叫んだ。

「やめてください！ 主は、そんなことはしない！」

大声を出して、鶴丸の追及を遮る。はあ、はあ、と息を荒くして、一期は鶴丸を睨みつけた。

「きみには少し早かったか。俺から話すことはそれだけだ、邪魔者は退散するでしょう」

「鶴丸殿……何がしたかったのです」

「いいや、何も？ 暇刃が戯事を吐いただけだ。それじゃあな」

そう言つて、本を片手に鶴丸は一期の横をすり抜け、書庫を出ていく。がらがらと戸が閉まる音が響いた。

閉まり切った戸を見つめ、一期は思う。

——氷雨の方とは、まるで違う。

氷雨の鶴丸は、ちよつとしたことで喜んだり、怒つたり、落ち込んだり、慌てたりする。彼にも心に暗い水底があるのだろうか、それを全く感じさせない——本当の底を見せない安心感があった。

しかし、蒼穹の鶴丸は違う。彼は、自分の水底の暗さを隠そうともしなかった。その暗さでもって、相手を支配しようとする。氷雨の彼

とは正反対だった。

早く忘れよう。一期は、本を適当に数冊抜き出し、書庫を後にする。なかなか寝つけなかったが、本を読んでいるうちに眠ることができた。

3—2 「居酒屋へ」

きらきらと輝くケーキが並ぶショーケースを前に、氷雨の鶴丸は悩んでいた。

「うーん、もんぶらんにするか、ふるーつたるとにするか……いや、あんまり奇をてらつて食べられない、とかになったら悲惨だな。ここはひとつ、しょーとけーきに……いやいや」

「鶴丸、いい加減に決めろ。後ろに客が詰まってる」

「そうですよ、鶴丸……もしくは、他のお客様に順番を譲って差し上げては」

「待ってくれ、あともうちよつとなんだ!」

「それももう何回聞いただろうな」

「ああ、視線が痛い……」

特徴的な前髪をした鶯色の男と、水色の切りそろえられたロングヘアをした男が、呆れた顔で鶴丸を見る。鶴丸はまだうんうんと唸っていた。

彼らがいるのは『パティスリーガザニア』。城下町では有名なケーキショップである。店の前では、ケーキを買いに来た女性たちが、美しい男たちにきやあきやあと黄色い声を上げている。

しびれを切らした鶯色の男が、店員に話しかけた。

「ああもういいだろう。すまない、ふるーつたるとのほーるを一つ」

「あつ、鶯丸!」

「鶴丸、大概になさい。本気で見苦しいですよ」

「江雪まで! いやだって、祝い事なんてこの会では久々だから、気合を入れてだな!」

「一期は、初めてののけーきなのだろうか? なら何でも喜ぶさ」

「いやでも……」

まだごねる鶴丸に、水色の男は彼の頭に手刀を浴びせた。

「いって!」

「……お客様が不満そうにしています、いい加減にしなさい。鶯丸の言う通り、彼なら何でも驚きますよ」

「うう……分かったよ」

「お待たせしました、ご注文のフルーツタルトのホールです！」

「来たか」

鶯色の男はケーキの箱を受け取り、鶴丸の代わりに代金を支払った。ありがとうございます、という声を聞きながら、店の外に出る。

「鶴丸、これで貸し一つだ」

「あー、建て替えてもらったんだっけな。悪い、後で払う」

「いや、金はいい。その代わり茶店で茶と菓子をおごれ」

「きみ、本当に茶が好きだな！」

「私もいただきたいです。……手間をかけさせられたのですから、これくらいはいただけますよね」

「いや、流石に二振り分は——」

「い・た・だ・け・ま・す・よ・ね？」

「ぐっ……分かった、分かったよ！ 江雪の分も俺がおごる！ だから庄をかけないでくれ！」

騒ぐ男たちを通り過ぎる人々が見やる。水色の男——いや、もういだらう——江雪左文字は、暗い庄を消す。鶯色の男——鶯丸は、おかしげな笑い声をあげて、鶴丸をからかう。

「それにしても、鶴丸がこんなに新入りの一期のために張り切るとはな。明日は槍でも降るんじゃないか？」

「仕方ないだろ、まさか一期一振が会に入るなんて思ってもみななかったんだから！」

「新入りの一期で四振りになりますね……何でも、好奇心旺盛なつつこみ属性だとか」

「一期の様子を見ているとそうなるな、噂話とかオカルト話には素早く飛びつくし。と言っても、無謀なこととはできるだけ避ける性質もあるみたいだ。ただ流石に、弟たちのことになると飛び込まざるを得なくなるが」

「話を聞いている限り、普通の一期だな。好奇心旺盛と言うところを除けば、だが。ほら、たるとだ」

新入りの話で盛り上がる三振り。タルトを鶯丸から受け取りなが

ら、鶴丸はご機嫌だ。

「今日の会が楽しみだ！」

会の開始まであと四時間。太陽は、少しだけ傾きながらも輝いていた。

「それでは、行ってまいります。留守の間、弟たちをよろしくお願いいたします」

「俺は逆に世話される方だと思うが……他本丸の刀剣男士との交流会、楽しんでこいよ」

午後五時四十五分。蒼穹の一期は、正門前で審神者に頭を下げる。鶴丸の告げた集合時刻まで、あと十五分だ。

氷雨の鶴丸がいることは、審神者には言っていない。あくまで、他本丸の刀剣男士との有益な情報交換を行える宴会、としか告げなかった。外出許可を快諾して、外に友達ができたか、よかったよかった、と頭を撫でる審神者に、少しだけ罪悪感を覚えた。が、宴会の約束はしていたし、楽しみにしていたのは事実だ。今更行くのをやめるという選択肢はない。

弟たちは、羨ましそうに一期を見ていた。

「いいなあ宴会。お酒飲めるんでしょ？ 俺も飲みたかったなあ」

「わがまま言っちゃダメだよ。いち兄だって休みたい時はあるんだから、たまには息抜きしてもらわないと」

「いち兄、この辺りの治安は悪くはありませんが、帰りは気をつけてくださいね」

「いちにい、何か面白い話があったら聞かせてくれよな！」

「楽しんできてくれ、いち兄」

弟たちに見送られ、一期は本丸を出る。十分ほど歩けば、城下町まですぐそこだ。

城下町の入り口に着くと、そこには鶯色の刀剣男士がいた。

「来たか。お前が、蒼穹隊の一期一振だな」

「はい。あの、あなたは……？」

「氷雨の鶴丸から、お前を迎えに行くように頼まれてな。こうしてこ

「ここにいるというわけだ」

「ありがとうございます。それで、あなたは」

「全く、鶴丸も刀使いが荒い。けーき屋であれほど迷惑を被ったのに、まだ俺を休ませないか。早く俺も店に向かいたいもんだ、それでゆっくり酒を——」

「あのー。あなたの名前と所属をお願いしますー！」

マイペース過ぎる語り口をなんとかぶった切り、一期は鶯色の刀剣男士に身分を尋ねる。ああすまない、と一言謝罪し、鶯色の刀は名乗った。

「雲霄が一振り、鶯丸だ。そちらには『俺』がないのだったか？　なら真正正銘、これがこの姿での初対面だな。まあよろしく頼む」

「雲霄……!?!」

雲霄——それは、一期顕現初日に、演練場で蒼穹隊と氷雨隊の仲裁をした部隊であり、政府直属と言われる、まさしく雲の上の部隊だ。こうして再び見えるようになるとは。一期は、慌てて一礼する。

「演練場の時はすみませんでした！　雲霄隊の方々にご迷惑をおかけしてしまつて……」

「ああ、あの日のことか。演練の後、俺は一足先に茶屋に行っていたからその現場を見ていないが。主も気にしていないだろうが、まあ、俺からも言っておく」

「ありがとうございます。……しかし、雲霄隊の方とこうして酒の席を……一緒にさせていただくことになるとは……」

「他の奴は滅多に城下町に下りないが、俺はよく鶴丸たちと飲んでるぞ。まあ、仲良くやろうじゃないか」

時間も近い、行こうか。先導する鶯丸の背を、一期は追いかける。城下町を歩くと、店の灯りが次々とついていくのが分かった。

着いた先には、古い木の看板に大きく『猩々木庵』と書かれている居酒屋があった。中からは、灯りと酒の匂い、それから賑やかな声が漏れてくる。鶯丸は、暖簾をくぐった。

「いらつしやい！……あ、鶯丸さん！　鶴丸さんたちなら奥の二番の部屋にお通ししましたよ」

「分かった、ありがとう」

若い女性が鶴丸の居場所を告げると、他の客の注文を取りに駆けていく。後から入ってきた一期は、店の中をきよろきよろと眺めていた。

店内は、木のテーブルがたくさん並べられている。壁には、メニューの書かれた紙が大量に貼ってあった。早くから来ていたのか、親父たちが赤ら顔で大きな笑い声を上げている。その間を、若い女性と男性が、料理や酒を手に、泳ぐように駆け回っていた。

「はい、追加の生お待ち！」

「おいしい、エイヒレ炙り追加で！」

「はい、一日の終わりにいいなあ、酒は！」

よくよく見ると、演練場で見かけた審神者も客の中にいる。一日の疲れを、酒で飛ばす。それは、ごくありふれた城下町の光景だった。

「一期、大丈夫か？」

「ええ。……ここは、とても賑やかですね」

一期は、店内の下町のような雰囲気を感じ取りながら、鶯丸の後についていく。奥の方は、個室になっていた。部屋の前に靴が散乱していることから、座敷のようだ。鶯丸と一期は、『二』と大きく書かれた襖を開けた。

「鶴丸、江雪、連れて来たぞ」

「おう、一期やつと来たか！」

「……あなたが、蒼穹隊の一期一振ですか」

鶴丸は手を挙げ、江雪は軽く一礼して迎える。鶯丸と一期は座敷に上がり、鶯丸は鶴丸の、一期は江雪の隣に座った。

「さて、新入りが来たことだし、改めて自己紹介と行こうか。俺は氷雨が一振り、鶴丸国永。この会の会長だ！」

「雲霄が一振り、鶯丸だ。一応この会の副会長を務めている。まあ名前だけしかないけどな」

「……澄清が一振り、江雪左文字です。この会に入ったのは三ヶ月ほど前ですので、割と新入りです」

それぞれが、一期に名前と所属に一言付け加えた自己紹介をする。

一期も、頭を下げたそれに倣った。

「蒼穹が一振り、一期一振です。このような会にお呼びいただき、本当にありがとうございます。顕現したてで分からないことも多いですが、よろしくお願いします」

「よっ、新入り！」

「よろしくな」

「……あなたには、聞いてみたい話もあります。あなたも、聞きたいことがあつたら話してみてください」

それぞれが、一期へ歓迎の意を示す。なんだかこそばゆくて、一期は身をよじった。つつい、メニューに目をやってしまう。

「さて、もうすぐ料理が来る。酒はその装置で店員を呼んで追加する仕組みになっていてな。こーす制だから、飲み放題だ！好きなだけ飲むといいぞ」

「一月ぶりか。楽しみだな」

「鶴丸、あまり呑まれ過ぎないようにしてくださいね。後が大変ですから」

「何を言う。酒は呑まれてこそだろう！」

「……分かっててやっているのですか。たちが悪いですね」

話しているのを聞いているだけでも、とても楽しい。自然とにこにこしてしまう。自分も、その輪の中に入れるだろうか。そう思っていると、

「お待たせしました、前菜をお持ちしました！」

「来たな！」

先ほどの女店員が、キャスター付きの台に乗せて、料理を運んで来た。鶴丸は表情を輝かせる。料理を並べる女店員に向かって、鶯丸は酒の注文をする。

「すまない、とりあえず生を三つ。一期は決めたか？」

「酒を飲むのは初めてなので、どれがいいのか……」

「……初めてなら、このかしすおれんじがおすすすめですよ」

「じゃあ、私はそれで」

「はい、生三つとカシスオレンジ一つですね！ 少々お待ちください」

！」

料理と水を並べ終えた女店員が、台を引いて去っていく。鶴丸は、立ち上がって音頭をとる。

「酒はまだだが、始めようか。『顕現難易度四太刀の会』に新たなる参加者、蒼穹の一期が来たことを祝して、乾杯！」

「乾杯」

「……乾杯」

「会の名前、もう少し何とかならなかったんですか!？」

一期のつつこみが部屋に響く。こうして、一期の初めての、外での宴が幕を開けたのだった。

3—3 「愛甲区域の大移動」

「そーいや、愛甲区域の連中はどうなった？」

「それぞれの隊自体は回復しつつあるが、まだ心身共に傷が残っているものも多いな。制裁が進んだと言っても、政府を信用できていないのなら意味がない」

「うーん、『森』から出る気がない奴はまだまだ多いってことか」

「……悲しいですね……」

「少しずつ信頼を取り戻そうとしているみたいだがな、政府も。何せあの『大移動』を成し遂げたものたちだ、寝返られたら大変だろう」
「……『森』に入って、直接交渉すると言うことはできないのでしょうか」

「いやあ、中に入ったら永遠に出られないと言われる大迷宮だぞ、そう簡単には——」

「待つてください待ってください情報量が多い!!」

酒が運ばれて来て十数分。訳の分からない話で盛り上がり三振り
に、ついに一期は叫び声を上げた。あ、と三振りも我に返る。

「すまんすまん、一期。説明もなしに話を展開して」

「さて、どこから話したものかなあ」

「……一期が気になるところからでいいのでは？」

「そうだな。一期、何から聞きたい？」

鶯丸にそう問われ、一期はうーん、と思案にふけた後、ある単語に触れた。

「大迷宮であると言われていた『森』が最初に気になりましたね」

「そうか。じゃあ、そこから話そうか」

そうして、長い話が始まった。

*

城下町から少し離れたところにある森は、大迷宮であると言われている。時空の歪みが出やすく、すぐに違う時空へ飛ばされてしまうためだ。政府は、未開拓だったその森を切り開こうと調査隊を派遣したが、すぐに隊は四散し、混乱状態に陥り、帰ってこられる者すら少な

い有様だった。現在も森はほぼ手付かずのままであり、調査隊を派遣しては返り討ちにあっていると言う——。

「……ん？ 返り討ち？ 一体何に？」

「そこが、政府も手を焼いているところだな」

森の中には、時空の隙間から落ちた無法者の他に、『大移動』を成し遂げたものたちが生息している。森の中で生活しているものにとつては、政府は敵である、と認識しているものも多い。——縄張りを荒らされると見ると、即座に反応し、攻撃を加えるくらいには。

「先ほどから出ている『大移動』とは何です？」

「これから話すことは、あまりおおっぴらにすると政府に目をつけられるから気をつけろよ」

『大移動』——正式名称は『愛甲区域の大移動』。政府の汚点とも呼ぶべき事件であり、多くの人材を犠牲にした事件。

事件の概略はこうだ。愛甲区域を管理していた者たちは、下々のものから搾り取った甘い汁で生活しているような連中だった。それに憤ったものたちは、隣接する区域に救援を求めることにした。しかし、地に墮とされるのを黙認する管理者たちではない。彼らは、あらゆる手段を使って、それを妨害しようとしたと言う。それこそ、戦力拡充計画用の大量の敵を操り、『口止め』をしようとした、とか——。

「……まさか、成し遂げたと言うのは」

「おそらく想像している通りだ。管理者たちから逃れようとしたものたちは、大多数が命を落とした。亡命を成し遂げたものたちは、数少ない生き残りだな」

「普段は区域外のことには介入しない、ということとは暗黙の了解になっている。だが、あまりにも大勢に救難を求められ、管理者たちが『口止め』をすることが目に余ったのだろう。政府は、隣接区域に積極的な救助を命じた」

「……つまり政府は、愛甲区域の管理者たちを見限ったのです」

政府は、愛甲区域管理者たちの一斉制裁を行った。関係しているとすれば、天下りした者でも容赦なく。

しかし、救助されたものたちの傷が癒えることはなかった。彼らは

ある程度回復したとなると、あるものは全てを失って精神喪失し、あるものは身の回りの物を持って森の中へと消えていったという。後者は生きること自体を諦めたのかと思われたが、そうではない。彼らは、今も森の中で、政府の行動を見極めている——と、言われている。……」

「これが、森と政府の関わりだ。結構長かっただろう」
「……いえ」

一期は、あまりの衝撃にそれ以上の言葉を紡げなかった。かつて、そんな悲惨な事件があったとは。人間ではなく『もの』と言うくらいだ、刀剣男士も多数が破壊されたのだろう。主である審神者を殺されて、自身のありかを見失った刀もいるだろう。その刀たちに思いを巡らせ、一期はうつむき、目を閉じる。鶴丸は、痛ましそうに一期を見た。

「……そんなに落ち込むな、一期。制裁はもう済んでいるし、愛甲区域の管理者も一新された。政府も、『大移動』を成し遂げたものたちへ最大限の配慮をしている。——もう、これ以上俺たちに出ることはないんだ」

「ですが……」

「さあ、暗い話はこれでおしまいだ。鶴丸、江雪、一期。次は何を頼む？」

「俺はうーろんはいにしようか」

「私は、れもんさわーで」

「……引き続き、かしすおれんじで」

話を振るんじやなかった、一期は後悔した。今の一期には、到底受け止めきれそうにない。こうなったらとことん飲んで気分を変えよう、そう思った。

*

「あ、そうだ。鶴丸、一期に渡したい物があるんじやなかったか？」

「んあー？ あーそうだったそうだった」

「……かなり酒が回っているな」

「まずいですね……」

宴もたけなわ。料理が散乱しだし、そろそろデザートを、と言うところで、鶯丸はフルーツタルトの存在を示唆した。しかし、鶴丸は顔を赤くして、かなりふらふらしている。無事にタルトを取り出せるのか、と鶯丸と江雪は顔を見合わせる。

「ふっふっふー、いちごみる、これがおれのさいらいきゆうのおいわいらー！」

——呂律も回っていない。フルーツタルトは無事に取り出せたようだが。

一期は目を見開いて、タルトを見た。

「……鶴丸殿、これは」

「おうー。ぱていすりーがぎにあのふるーつたるとらー！」

箱を開けると、苺、ベリー、キウイ、パイなどがアプリコットジャムによってつやつやと光を反射している。その下にはアーモンドクリームと香ばしいタルト台。付随しているメッセージカードには『一期格上げおめでとう』と書かれている。

「……うっ」

「えっ、いちご?」

「どうした」

「苦手なものでもありましたか?」

嗚咽を漏らし始めた一期に、三振りには焦りが止まらない。しかし一期は、顔を上げて涙声になりながらも口にした。

「ちがいますう……わたしっ、わたし、とても、こんなにきれいなもの、うれしくてっ、うう、くらいはなしをふったのに、こんなにきれいなもの、うええ」

顔を上げた一期は、顔は赤くないものの、目の焦点が合っていない。——この一期、泣き上戸か。新たな下戸出現に少しげんなりしつつも、いい反応だったことを喜んだ。

「そうかそうか、うれしいかあ。よかったよかった!」

「うええ……とってもうれしいですう……だいじにとっときたいですう……」

「らめらぞー、いちご。けーきはしょうみきげんがきれるまえにたべ

ないと。こつちのいちごもいちごにたべてほしいっていつてゐるぞー」
「じゃあたべますう……」

もう場が混沌としてきた。鶴丸はいちごのいちごらー、と叫んで笑い転げているし、一期は相変わらず泣きながら普段なら言わないようなことを口走っている。

「もうお開きだな、これは」

「そうですね……」

酒に強い二振りには、苦笑しながらも片付け始める。鶯丸はそのついでに、端末機器を取り出し、どこかへ連絡を取り始めた。

3—4 「森の中の部隊」

目を開けると、見慣れた天井。見慣れた壁。見慣れた家具。蒼穹の一期ががばつと勢いよく起き上がれば、頭がずきずきと痛んだ。下を見ると、きつちりと布団もかけられている。

昨日自分は鶴丸たちと飲んでいたはずだ。だが、途中からの記憶が一切ない。一体どうやって自分はここまで戻ってきたのか。——何だか嫌な予感がする。

障子を開けて、厚、薬研、乱が入ってきた。

「あつ、いち兄起きた！」

「よお、いち兄。体調は大丈夫か？ 昨日あちこちぶつけたみたいだから、湿布を貼つといたぜ」

「いちにい、昨日は凄かったなー！ あつ、風呂には入れたから安心してくれ」

何を安心しろと言うのか。嫌な予感が高まりつつある。一期は、恐る恐る三振りに尋ねた。

「……私は、昨日、どうやってここまで帰ってきたんだ」

厚、薬研、乱は覚えていなかったのか、と言いたげな表情で目を丸くしていた。気まずい空気の中、口火を切ったのは薬研だった。

「昨日、雲霄隊の鶯丸から連絡が来てな——」

『すまない、そちらの一期が酔っ払ってしまつてな。城下町の入り口まで送るから、迎えに来てもらえないだろうか』

連絡が来たのは、午後十時半。それを受けて、審神者はまだ起きていた厚、薬研、乱に同行を頼んだ。

快諾した三振りと審神者は、軽く舗装されている道を歩いていく。「いち兄、酔っ払っちゃったんだ。なんか意外、強そうな感じがしたのに」

「いち兄だって完璧じゃない、そういうところもあるさ」

「達観してんなあ薬研……。俺も一期が酒に弱いなんてびっくりしたつてのに」

「あつ、大将、あそこじゃないか？」

城下町の入り口に、男一人にしては一回り大きい影が見える。近づいてみると、それは一期を背負った鶯丸だった。

「来たか、蒼穹の」

「いやあ、お手間をかけさせてすまねえ。酒に弱いなんて知ってたら、俺も自重しろと伝えたのに」

「気にするな。割といつものことだ」

蒼穹の審神者に笑いかけ、一期を引き渡す。審神者が受け取ると、それではな、と鶯丸は闇に溶けていった。

「おーい一期、しっかりしろー」

「……ん、あ、あるじ？」

「そうだぞ、主だぞー。迎えに来たから帰ろうなー」

一期を背負った審神者を見ながら、三振りにはひそひそと囁き合う。

「いちにい、本当に酔ってるな」

「なんかちよつと顔が幼くなってない？」

「気が緩んでるんだらうなあ」

「……です」

「ん？　なんか言ったか？」

「オレは何も言っていないぞ」

「ボクも」

声の出所を三振りが探っていると、審神者に背負われた一期が叫んだ。

「おとうとたちは、どこにいるのですー！」

「ちよ、一期、耳元で叫ぶなー！」

そうかと思うと、審神者の背中から転げ落ちるように降りて、一期は側溝に頭を突っ込んだ。

「はかたー！　ごとうー！　でておいでー！」

「ちよ、いち兄！　何やってるのー！」

「ここからちかにつづくみちがあるはずですよ！　そこにきつとおとうとたちがー！」

「落ち着けいち兄、そこから大阪城には繋がってねえからー！」

頭を突っ込んだまま、弟たちの名を叫び続ける一期。かと思えばふらふらと立ち上がり、本丸の方向へと歩き出した。

「あはは、おとうとたちがわたしをよんでいるーまっつてくれーいまかわをこえるからーおはなばたけー」

「どこに行くつもりだいちにい！ ああもうすっかり酔っ払いの言動をしちまっつて……！」

「しかも川にお花畑って、それ彼岸行きじゃねえか！ 一期おーい戻ってこーい！」

「……本丸で宴会が開かれたら、いち兄にはお酒を渡さないようにしようね」

「そうだな……」

ふらふら歩き続ける一期を正気に戻そうとする審神者と厚、一期の禁酒令を出すことに決めた乱と薬研。場はまさに、酔っ払いの独壇場であった。

その後、本丸に着いた一行は、泥まみれになった一期を風呂に突っ込み、布団まで引きずっていった。無事寝息を立て始めたのを確認した一人と三振りは、その場に座り込んで疲労困憊の息を吐いたのだった。

「今すぐ私を折ってくれ!!」

「大丈夫！ このことは他の兄弟たちは知らないから！」

「知られていたらしばらく私は引きこもっていたよ！」

顔を手で覆う一期に、乱は慰めの言葉をかける。しかし一期の気は晴れない。

「主にもお前たちにも醜態を晒し、迷惑をかけて……情けない……」

「まあ、少し驚いたけどな。これくらいどうってことねえよ。……ただ、今後は酒の飲み過ぎに気をつけて欲しいもんだが」

「そうするよ……」

「で、いちにいい、寝起きのところ悪いんだが」

厚が申し訳なきように、うなだれる一期に申し出る。

「本丸の食材が、かなり少なくなってるな。送ってもらうにも少し時

間がかかる。そこで、オレたちが必要な物を買ひ揃えようつてなつてな」

「何しろ三十三振り分だからなあ。万屋まで行つたが、まだ足りない。不足分は城下町で補うことになつた」

「本丸総動員で買ひに行こうつて。もう他の皆は下りていったよ。あと残つてるのはボクたちだけ。いち兄、行ける？」

一期は、少し重たい頭を上げ、三振りに告げた。

「もちろん、行くよ。準備をするから、待つていてくれ」

「無理しないでね、本当に」

氣遣わしげに見つめる三振りに、一期はなんとか笑いかけた。ほつと息を吐く三振りには、俺たちも準備するな、と部屋を出ていく。一期は、さつと端末に来ていた新しいメッセージを確認した後、外出の準備に取り掛かつた。

城下町に到着すれば、そこは沢山の人々が行き交つていた。現在いるのは、城下町の中でも食品を取り扱う店が多い通り。普段城下町に下りない兄弟たちは、辺りを見回しては感嘆の声を上げていた。

「すごい！ 人がいっぱい！」

「そうですね。昼間の城下町が、こんなに賑やかだなんて」

「あつ、いち兄、あつちでお肉の安売りをやってます！」

「見て見て、変な形の大根！」

「鯨尾にい、買わないなら戻してこいよ……」

「鰹出汁の素、か……こんな物もあるんだな」

客寄せの声、値切り交渉をしている声、子供たちが通りをはしやぎながら走りすぎていく。弟たちは、そんな通りの雰囲気を満喫している。

一期もその雰囲気に浮き立つ気持ちが抜けなかつた。しかし、兄として忠告しなければ。

「お前たち、予算は限られているのだから、必要な物だけを買うようにね」

「はい、いち兄！」

「えっと、どれを買えばいいのかな……」

買い物に集中し始める弟たち。一期も、メモを取り出し、必要な物を買いつけようとする。

しかし、頭痛がひどくなってきた。立っているのが少し辛い。どこかに座る場所がないか探していると、腕を引かれる。

「!? ……んう……っ!」

口元を、布が塞ぐ。思いつきり息を吸い込んでしまい、一期は意識を手放した。

*

目を開けると、そこは背の高い木が生い茂る森の中だった。背中に、木の感触がする。目の前で、二人の男たちが会話をしていた。

「なんだ、これだけかよ。シケてんなあ、もつと持つてるはずだよ」

「天下の刀剣男士サマなら、溜め込んでるはずだよな? ……ああ、飼いなに吸われてんのか」

手には、一期の財布。思わず返せ、と叫ぼうとしたが、口をテープで塞がれている。腕も、縄で縛られているようだ。

「おお、刀剣男士サマのお目覚めだぜ」

「随分ねぼすけだったなあ、ええ?」

敵意に満ちた嘲笑が降ってくる。一期は、きつと男たちを睨みつけた。

「おおこわ。こんな状況でも戦闘意識をなくさないとは」

「そうだな。でも——」

男の一人が、ナイフをくるくる回したと思えば、一期の足を大きく切りつける。

「……っ!」

「痛みに弱いのは、人間と同じだろ」

痛みに目を瞑るが、一期はすぐにまた鋭い視線を取り戻す。男たちは口笛を吹き、煽った。

「ヒュー! 強いねえ」

「流石、刀剣男士サマってところか。じゃあ次はこっちだな」

そうして男たちは、近くにあった枝にライターで火を付け、一期に

近付ける。一期は、顔を青ざめさせ、それから逃げようと身をよじつた。

「やっぱり火には弱いか。——楽しんでそうだな」

「ああ。——兄貴たちの恨み、たっぷり晴らさせてもらおうじゃあないか」

火が、足の傷に当たる。まさしく焼ける痛みにも、一期は声にならない叫び声を上げる。やめろ、やめろ、また、全てを焼き尽くされるのか。あの時のように——。

「——流石に悪辣過ぎるね。長谷部さん、やってもいい?」

「……好きにしろ。普通の奴は、どうでもいい」

「そんな冷たいこと言わずに。……じゃ、やりますか」

そう声が出たと同時に、男たちが絶叫して倒れ伏す。上から、長い髪をした少年が降ってきた。

「よつと。どこかのいち兄、大丈夫?」

その少年——鯰尾藤四郎は、手早く一期の拘束を解く。なまずお、とか細い声で自分から出ているのを感じた。

「デメエ! よくも——」

「はい、静かに。俺たちもあまり政府に目をつけられたくないんでね」

男の鳩尾に一発入れ、切った縄で素早く小指同士を縛る。まだ呻く男を見て、もう片方の男は荒く息を吐いた。

「刀風情が、人間に齒向かってんじゃねえよ!」

そう叫び、ナイフを振りかぶって鯰尾に襲いかかる。が、ナイフは鯰尾に傷一つ入れられなかった。

「お前らの気持ちはよく分かる。だが、鯰尾を、『刀風情』と言ったな」
いつの間にか降り立っていた青年が、刀の鞘でナイフを受け止めた。その視線は、鋭く光っている。

「それだけで同情の余地はない——失せろ!」

足を払い、怯んだところを刀で思いつきり殴りつける。男は頭に強い衝撃を与えられ、意識を失った。

「うっわあ、おーばーきる。やり過ぎですよ、長谷部さん」

「鯨尾を侮辱した、これ即ち罪状は死に値する。俺は当然の処刑をしたままでだ」

「その愛情の重さ、もう少し何とかしましょうよ……」
しれっと言い放つ長谷部に、鯨尾の逆毛が少ししおれる。

一期は、呆然としながらそのやり取りを見ていた。この二振り、何かが変だ。

見た目だけなら、少しおかしいだけだ。鯨尾は普通の内番服ではなく水色のパーカーを着ているし、長谷部に至っては、鳴狐そっくりのジャージを身に纏っている。だが、外見だけじゃない。特に長谷部の方、何かボタンを掛け違えたような違和感がある。掛け違えているところを直したいような、目を背けたいような。

「……何をじろじろと見ている」

「ちよ、長谷部さん！ 威嚇しない！」

長谷部に、思いつき警戒した目つきで見られる。鯨尾に宥められて目を逸らしたものの、不機嫌な態度は消えていない。ほーら飴ちゃんですよ、と声をかけられても、っーんとしている。

「……あなたたちは、一体」

「ん？ 俺たちが何物かって？」

鯨尾が、一期の呟きを拾い、腰に手を当てる。風が強く吹き、紅葉が舞う。

「俺たちは、春光隊。審神者さんたちの間では『愛甲区域の大移動』と呼ばれている事件の、生き残りだよ」

それが、蒼穹隊の一期と、春光隊との出会いだった。

第四話 「春の光差す本丸」

4—1 「手当て」

——また、この夢か。

蒼穹の一期は、すすり泣きの響く暗闇で、自分の状況を把握した。何度か見ている夢だ、少し慣れてきた、と言ってもいい。けれど謎が全て解けた訳ではない。すすり泣く声に、話しかける。

「君は何が悲しいんだ？ 私でよければ、力になれないだろうか」

声の主は、泣くのを止めた。すると、正面に少年が現れる。黒髪で、特にこれといった特徴のない7歳くらいの少年だ。顔は、俯いていてよく見えない。

「——うそつき。なにもするきがないくせに」

少年は涙声で、一期を責めるように呟く。しかし、ここで引いてはいけない。この夢を何とかしなければ、もどかしい状態が続くままだ。

「嘘じゃない。君を何とかしたいのは本当だ、よければ話してくれないか？」

出来る限り、優しく話しかける。それこそ、日常で弟たちに語りかけるように。少年は、顔を上げた。

「——これでも」

一期は喉を引きつらせた。何故なら、

「——ぼくをなんとかしようと、おもうのか」

——少年の顔は、顔の凹凸も見当たらない、のっぺらぼうだったからだ。

*

「うわああああっ！」

叫び声と共に、飛び起きる。身体中から汗が出ていて、気持ちが悪い。はあ、と息をついて、額の汗を袖で拭った。

声の姿が明確になったのは、初めてのことだった。ごくごくありふれた普通の少年。彼は一体何なのだろう？

思考がどん詰まりになったところで、辺りを見回す。八畳ほどの、畳敷きの部屋だ。正面には床の間があり、刀掛けには『一期一振』が掛けられている。その右横には押入れと思われる襖があり、少しだけ戸を補修した跡が見受けられた。右側面には障子があり、左側面には西洋風の引き戸。

……西洋風の引き戸？ はて、自分の本丸に、このような戸はなかったはずだが。

どたばたと段差を降りる音がして、こちらに足音が近づいたと思うと、引き戸が開く。

「いち兄、大丈夫!？」

「すごい叫び声だったぜ、悪夢でも見たか？」

顔を出したのは、水色のパーカーを着た鯰尾と、紺のTシャツの上に白衣を纏った薬研である。その『少し違う』二振りの様子に、ようやく一期は思い出した。

——そうだ、自分はごろつきに襲われたところを、春光隊に助けられたのだった、と。

時間は、春光の鯰尾と長谷部がごろつきを倒した時まで遡る。蒼穹の一期は、鯰尾の言葉に衝撃を受けていた。

「愛甲区域の大移動……つて」

「あ、知ってる？ 俺たちこれでも結構強いんだよ」

「……私も、昨日聞いたばかりだが」

下のものから搾り取った益で私腹を肥やす管理者たちから逃れようと、決死の亡命を行い、生き残ったものたち。それが、一期の目の前にいる。隠れ棲む珍しい生き物を見つけた気分だ。

長谷部は、鯰尾の言葉にこてんと首を傾げる。

「それは自分で言うことなのか？ まあ鯰尾たちが強いのは事実だが」

「率直な賛辞嬉しいです。さて、どこかのいち兄」

長谷部に慈しむような表情を向けていた鯰尾は、一期に向き直ると、真剣な表情になった。

「流石にその足の怪我の状態で、はいさようならって言う訳にはいかない。このごろつきのような奴が、この森にはわんさかいるからね。だから、俺たちの本丸で修復してもらおうと思う。いい?」

「もちろん、そうしてもらえるとありがたいが……いいのかい、資材やお金も、さほど持ち合わせていないよ」

不安そうに見上げる一期に、ぼったくったりしないって、と鯰尾は笑う。

「大丈夫、こういう時のための蓄えだからね、俺たちの場合」

「……バイタルチェックとか、諸々の雑事は俺がやることになるんだが?」

睨め付ける長谷部を、鯰尾はまあまあと宥める。

「……流石に、身内をおざなりにしたくはないんです。頼みますよ、がざにあのたると奢りますから」

「……タルトの他にマカロンも付けろよ。それぐらいじゃないと割に合わない」

「長谷部さん、本当にいち兄が苦手なんですね。……まあしょうがないですよ、少し悲しいですけど」

さっきの長谷部の表情からすると、苦手、という言葉は本刃がいる手前、柔らかくした表現である可能性が高い。でも、一期は何故か、敵意を向けられているのにこの長谷部を嫌いになれなかった。弟を大切にしてくれている、という事実があるからかもしれない。

「よし、それじゃあ行こうか。俺たちの本丸へ!」

「うわあつ! 鯰尾、流石にこれは」

「はいはい、色々矜持に触れるだろうけど、怪我人はおとなしくしててくださいーい!」

鯰尾は、軽々と一期を背負った。気恥ずかしさとか弟に背負われるあれこれとか、様々な思いが胸をよぎったが、一期は黙って背負われることにした。

森の中を、三つの影が進んでいく。時々ちらちらと、空間を裂くように別の風景が映るのを、不思議に思いながら見ていた。

突如、目の前にいた長谷部が固まったと思うと、猛スピードで駆け

出した。それを見て、鯰尾も走り出す。

「うわ、ヤバ……！」

「鯰尾!? どうしたんだ、いきなり」

「時空の流れが変わりそうなんだ！ 早く本丸に入らないと、別の時空に放り出される！ 足痛むかもしれないけど、我慢して！」

勢いよく、景色が後ろに流れていく。鯰尾にしがみつぎ、目を瞑り、なんとか一期は激しい揺れに耐えた。

ばん、と音がして、目の裏が少し暗くなる。ばたん、と再び音がすると、もう大丈夫だよ、と鯰尾が告げた。

「ありがとう、鯰尾」

「これくらいどうってことないよ。長谷部さんに任せると、いち兄が振り落とされそうな気がしたしね……」

そこは、普通の本丸ではなかった。玄関も小さく、横にある下駄箱も西洋風のものだ。正面の壁には絵画が飾ってある。なんだろう。まるで、ありふれた近現代の一軒家のような――。

とんとんと段差を降りる音がして、菖蒲色の頭が現れた。

「鯰尾、長谷部、お帰り。……おや、背中に背負っているのは」

「ごろつきに襲われていたから助けて連れて帰って来ました。怪我の度合いは、軽傷と言ったところですかね。資材の量、大丈夫ですよね？」

「大丈夫だよ、軽傷分の資材はある」

菖蒲色の刀剣男士――歌仙兼定は、そう言って微笑んだ。着ているのは、いつもの内番服。自分の本丸との共通点を見つけられて、なんとなく一期はほっとした。

まだ機嫌が悪そうな長谷部を見て、歌仙は顔をしかめる。

「長谷部、いつも言っているだろう。負の感情を表に出し過ぎるのは、雅じゃない。どんな人だって、初対面で負の感情を浴びせられたら、嫌な気持ちになるに決まっている」

「……でも」

「だって、もへちまもないよ。己の感情を操作出来ない、いざという時、相手を不安にさせてしまう。それか、相手にされなくなってしまう

う。君は困っている者を助けたいのだろうか？ だったら、相手を安心させられる術を覚えなさい」

「……わかったよ」

説教をしている歌仙の横を通り過ぎ、鯨尾は一期を誘導する。

「ここを曲がって、まっすぐ行ったら手入れ部屋。いち兄、歩ける？」
「少し痛いけど、歩けるよ」

和室に着き、鯨尾は一期から刀を預かり、刀掛けに掛けた。そして、横になるように誘導する。

「まだ時空の流れが安定してないから、ゆっくりしていいよ。手伝い札を使うけど、気分までは治さないから、良くなるまで休んで」

「ありがとう。そうさせてもらおうよ」

「長谷部さん、準備お願いしまーす！」

歌仙の説教が終わった長谷部が、こちらに駆けて来る。そうして、ポケットから端末機器を取り出し、電源を入れた。すると、彼の目の前に、キーボードと画面が浮かび上がる。

「……刀帳番号二十五番、一期一振。認識完了。当該情報体の損傷状態を確認。……完了。修復完了までの時間を確認。資材使用許可。作業促進パッチ適用許可。仮登録、偽装登録完了まで50、80、……共に完了。……修復開始」

長谷部は早口で何やら呟いている。同時に、手元も鍵盤を弾くように目にも留まらぬ速さで動かしていた。最後の一言を告げると、足の傷が少しずつ塞がっていく。焼けた跡もなくなった。安心したのか、体の力が抜けていく。

「眠くなっちゃった？ そりゃああんな目に遭ったんだもん、安心してたらそうなるよね。……ゆっくり休んで、いち兄」

鯨尾の声を遠くに聞きながら、一期は目を閉じた。

4—2 「春の光差す本丸」

「私は、どのくらい寝ていたんだ？」

和室から出た後、リビングのソファアールに案内されて座りながら、一期は葉研と鯨尾に問う。それには、葉研が答えた。

「二時間くらいだ。……ああ、悪いが在籍している本丸も確認させてもらった。いち兄の本丸には連絡を入れておいたぜ」

「ありがとう。うちの本丸の弟たちと、買い出しに行っているところだったんだ」

「災難だったね。あいつら、そろそろ何とかした方がいいよな？」

前半は優しく一期に、後半は厳しい顔で葉研に、鯨尾は言った。

「それに関してはそろそろ穏健派が動き出すだろ。問題は、俺たちも加勢するか、だが」

「うーん、あんまり多過ぎてもいいのかなって思ってたさ」

「政府に目を付けられていいことはない。それなのに、わざわざこうして刀剣男士を傷つけているんだ。目を付けてくださいって言うているようなもんだらう。これ以上余計なことをしないように牽制しとくつてのも手だが」

「そうだねえ……」

——森にもいろいろあるんだな。二振りのやり取りを一期が出された緑茶を飲みながら眺めていると、玄関からだたと慌ただしく走って来る音が聞こえる。

「ただいまー！ いやあ、せーるに行き遭ってさ、卵を大量に安く買えたぜー！」

「今日は卵料理がいいかな。……おや、お客様か」

リビングの入り口から二つの姿が現れる。癖のある金髪を一部編み込みサイドに纏めているジャージ姿の刀と、もみあげを斜めに切り揃えた和装の刀だ。

「おっと、客には名乗らないとな。春光が一振り、獅子王だ！ 何があつたかは知らないけど、災難だったなあ」

「同じく春光が一振り、石切丸と言う。時空の乱れがまだ収まってな

いから、まだここで休んでいた方がいいかな」

石切丸の言葉に、鯨尾がええっ、と声を上げる。

「まだ収まってなかったんですか!? 獅子王さんと石切丸さん、よく平気でしたねー!」

「まあな。なんとなく、勘で避けたっていうか」

「神気の流れと似たようなものだね。その内鯨尾さんも避けられるようになるさ」

「あれ災害級のやつだと思ってたんですけど……平安生まれすぎていな……」

「兄貴、それだけじゃないと思うぜ……」

軽く胸を張る獅子王と事も無げに言う石切丸。呆然とした様子の鯨尾の肩をポンと薬研が叩く。リビング内はあつという間に賑やかになった。一期はその雰囲気を楽しみながら、ちらりと違和感を覚える部屋の隅に目をやる。

そこでは、長谷部が小さく体育座りをしていた。小さな機械を、勢いよく指で操作している。その目は真剣そのものだ。耳にも機械を当てているようだが、髪でよく見えない。ふと、外見年齢が獅子王と近いな、と思った。何故そう思ったのか、自分でもよく分からない。

機械の操作を止めた長谷部が、顔を上げる。一期と目が合うと、思いつきり鋭い目付きで睨み付けた。

「……じろじろ見るな、鬱陶しい」

「えっと……すみません、不躰で」

たじろぐ一期の様子を見て、薬研が一期の視線の先を追う。長谷部の存在に気づくと、そちらに近づいて話しかける。

「長谷部、そんな隅にいたら俺たちも気づけねえよ。こっちに来ていち兄に改めて自己紹介してくれ」

「やだ」

「いや、やだじゃなくて……」

「やだったらやだ」

「……歌仙が今からがぎにあのけーき出そうとしてるんだけどな」

「ぐっ……それでもやだ」

「はあ……」

強情に動かない長谷部に、薬研は肩をすくめて一期の方に戻ってくる。

「だめだ、けーきでも釣られねえ。ああなったらだめだ、梶子でも動かん。すまねえな、いち兄」

「気にしてない、と言ったら嘘になるが……私は、相当嫌われているようだね」

「あー、えーとだな……」

言葉に詰まった薬研が、一期の肩を組み、小声で告げた。

「実はあの長谷部、元は他所の本丸から来た奴でな。そのいち兄にきついことを言われたらしくて、いち兄を見かけたらすぐにああなる。だから、あんたが特別悪い訳じゃない。気にすんな」

「え……」

その内容に、違和感を覚えた。——へし切長谷部とは、きつい言葉一つをあそこまで引きずる刀だったのだろうか？ いや、織田信長から黒田官兵衛に下げ渡されたことを気にしている事実があるのは分かっているが、どうも何かが引つかかる。それを言語化出来ないでいると、薬研が一期に釘を刺した。

「いち兄にはいち兄の過去がある。それと同じで、あいつにはあいつなりの過去があるんだ。……あいつには、あまり過去を思い出させたくねえ。深掘りはよしてくれねえか」

「……そうだね、私も不作法だった」

どうも自分は、気になることを追求したがる癖があるらしい。一期一振にしては珍しい、とは氷雨の鶴丸の言だ。それはそれで自分らしさだとは思うが、無闇に出したら迷惑な悪癖でしかない。一期はこのことは要反省、と脳内にメモを取った。

「やげーん、何話してたの？」

「ちよつとな。あいつが端っこにいるのが気になったんだと」

「あー、長谷部さんまた政府中枢機器への侵入挑戦中？」

「みたいだな」

懲りないねえ、と呟きつつも、鯰尾の表情は優しい。薬研も暖かい

目で長谷部を見ていた。一期は、聞こえた物騒な単語に突っ込みたい気持ちでいっぱいだった。

「俺、ちよつと長谷部さんの様子見てくるよ。薬研は歌仙さんにけーきの用意をお願いしといて」

「おう、任せられた」

鯰尾と薬研がそれぞれの方向に駆けていく。残された一期の両隣に、獅子王と石切丸がそれぞれ腰掛ける。

「鯰尾から聞いたぜ、本当に災難だったなあ。あいつら、森の中でも結構問題になつてる奴等なんだ」

「そのようですね、鯰尾から聞いた話では」

「刀剣男士を狙った犯行が多くてね。彼等に恨みを持っていることは間違いないだろう。もうすぐ制裁が加えられるようだから、一期さんは本当に最後の被害を受けてしまった訳だ」

折角だから祓っておこうか、と言う石切丸の提案を受け取るか悩んでいると、キッチンから歌仙と薬研が現れた。

「お待ちせしたね、がぎにあのがとーしよこらだよ。温めたから、火傷しないように気をつけてくれ」

「紅茶もあるぜ。砂糖と牛乳、好きな分だけ入れて構わない」

食卓に、ガトーショコラと紅茶が並べられていく。獅子王は勢いよく飛び出し、石切丸は「走ったら危ないよ」と言いながら立ち上がる。「長谷部さーん、けーき来ましたよー。そろそろ切り上げておやつにしましょうよー」

「待ってくれ、あとちよつと……!」

「そう言つて何時間もかけるつもりでしょう。ほら、電源切った切った!」

「分かったから揺らすなあ!」

鯰尾と長谷部のやり取りを見て歌仙が「早くしないと冷めるよ」と声をかけながら食卓の椅子に座る。一期も勧められて着席する。しばらくして、ようやく長谷部と鯰尾が着席すると、歌仙が手を合わせた。

「それじゃあ全員で、いただきます」

「いただきます」

掛け声が終わると同時に鯰尾、獅子王、長谷部が勢いよくガトーシヨコラにがつついた。「行儀が悪い！」と歌仙が叱る声も聞こえていないようだ。

「あー、減り切った腹に甘味が沁みるー……」

「やっぱりおいしいですねえ……」

「うん、洗練された洋菓子はいいね」

ほう、と獅子王、鯰尾、石切丸から息が漏れる。一期もフオークでガトーシヨコラを掬い、食べてみた。しつとりとして、とても濃厚な甘味が広がる。少しの苦味もアクセントとなり、食べる手を止めさせない。それは長谷部も同じだったのだろう、彼の皿はあつという間に空になった。

「……ごちそうさま！」

「長谷部早っ！」

「しつかり噛まないか、長谷部！」

「長谷部、俺たちの分も食うか？」

「薬研は甘やかさない！」

「いやだって、俺は十分食べたし」

「薬研、甘味あんまり食べないよね」

「薬研さん、午前中に煎餅をたくさん食べていたからねえ。お腹もそこまで減ってないんだろう」

「ちよ、石切丸！」

「……煎餅が丸々一袋無くなったのはそのせいかな。薬研、今晚の夕餉は減らすからね」

「後生だ、やめてくれ！ 腹減って眠れなくなるー！」

「煎餅一袋とか、さすがに間食にしては食い過ぎだろ。……あー、うめえ……」

賑やかで、明るい食卓。ガトーシヨコラを口に運びながら、一期はその雰囲気を楽しんでいた。まるで、どこかのありふれた家庭の一幕のようだ。歌仙は額を押さえていたが、一期に向き直り尋ねる。

「二期、どうだい？ 洋風のものだけど、なかなかおいしいだろう」

「ええ、とても美味しいです。そして、楽しいですね」

一期が心からそう告げると、歌仙は微笑んだ。

「そう言ってもらって何よりだよ。いつもこんな風に騒がしくて、風流の欠片も無いけれど、これはこれでいいものだ」

「歌仙、おかわりはないのか!?!」

「歌仙頼む、夕餉を減らすのだけは勘弁してくれ!」

「獅子王さん、食べ終わったら長谷部さんも交えてげーむしません?」

「おっ、いいな! 何やる? 対戦げーむなら負けねえぞ!」

「私も観に来ていいかな」

「君たち、静かにしないか!」

しつとりしたムードはすぐに消え去り、騒がしさが戻ってくる。一期は、今度こそ笑い声を漏らしたのだった。

4—3 「森の外へ」

「本当にお世話になりました。改めて、春光隊の皆様にご挨拶申し上げます」

「構わないよ、迷ったものを助けるのが僕らだ。帰り道、気を付けて」「もうここに来ることがないように祈ってるぜ！ その方が絶対いいからな」

「久々のおお客様だし、もつと話したかったけれど。一期さん、一緒に食事が出来て楽しかったよ」

「歌仙、留守は頼んだぜ」

「それじゃあ、いつてきまーす！」

長谷部以外の春光隊の面々が、一期を玄関まで見送りに来た。薬研と鯨尾は、本丸近くまで一期を送り届けることとなった。長谷部が出てこないのは、再び行っているハッキングチャレンジに夢中になっているからだ。歌仙は「長谷部に関しては、後で叱っておく」とため息をついていた。

ドアを閉め、薬研が一期を先導する。鯨尾は一期の背を守っていた。

「ありがとう、二振りとも」

「気にしないで、ここで迷ったら出られなくなっちゃうから」

「時空が乱れやすいからなあ。特に、俺たちの本丸がある周辺は」

「それはどういうことだ？」

「周りを見てみな」

薬研の言うとおりに、周囲を見渡してみた。少し離れたところに、先ほどもまで一期がいた春光隊の本丸である一軒家が存在している。

いや、そこだけではない。古びた物から割と綺麗な物まで、周囲には家が点在していたのだ。外観がバラバラな家たちには共通点があった。明かりが点いている物以外は、壁に穴が開いていたり、屋根が無かったりと、どこかしら損傷しているのだ。明るい家だけではなく、暗い家からも何かの気配を感じる。森の中だからか、夕方近くだったからか、陽があまり差しておらず薄暗い。すぐに来た道を戻り

たくなるような不気味さを感じた。

「行きは目を閉じていて気付かなかったが……森の中に、何でこんな家が」

「時空のことはよく分からないけど、この辺りはあちこちの時代から家流れ着きやすい場所らしいよ。ごーすとたうん？ だったかな。そういうところの家が多いって」

「俺たちはここら辺のことを『家の墓場』って呼んでいる。政府もここまで来るとは少ないから、政府に疑問を持つ奴らの本丸やごろつきたちの巣窟になっているな。うかつに立ち入ればごろつきの餌食だ」

「お前たちは大丈夫なのかい？」

「言ったでしょ、俺たちは強いって。ごろつきぐらいなら返り討ちだよ」

えへん、と鯰尾が得意気に胸を張る。まあ切れ味には自信があるな、と薬研も言う。『大移動』がどれほどのものだったのかは一期には分からなかったが、氷雨の鶴丸たちが「たくさんものが命を落とした」と言ったのだ。地獄に相応しいものであることは、なんとなく感じ取れた。それを乗り越えて残った彼らが強いことも。

「でも、大変だろう。お前たちなら軽々追い払えると言っても、ごろつきのいる中で生活するのは」

「まあね、確かに大変だよ。……でも、主を殺した奴らがいるかもしれない政府の下で生活する気は——」

「兄貴」

鯰尾の怒りがこもった言を、薬研が鋭く遮る。鯰尾もおっと、と口を塞ぐ。そうしてすぐに顔を上げ、謝罪した。

「……ごめん、いち兄に言うことじゃなかったね。政府も、よくやっているとは思うんだ。俺たちが、信じられないだけで」

「恨みを客人にぶつけないでくれ。俺だって、本当はまだ悲しいんだ。でも、それは客人とは関係ないだろう」

「そうだね、思わず口を滑らせた。今のは忘れて、いち兄」

主を殺した奴ら。その言葉に、どれだけの恨みがこもっているのだろう。想像してしまう。彼らは、今も森の中で、政府の行動を見極め

ている。政府への恨みを、敵側に寝返ってしまいたい衝動を抑える。そののなんと辛いことか。一期は、様々な思いを隠すように笑って見せた。

「……私は気にしていないよ。それよりも、お前たちに嫌なことを思い起こさせてすまなかつた」

「それこそ気にしないで。俺たちが勝手に怒りを湧きあがらせたただだし」

「ああ。こつちの方こそ、こつちの事情に入り込ませるところだった。本当にすまない」

あまり、こつちに入り込まないほうがいい。そう告げる二振りに、あの食卓での楽しい光景を思い浮かべて、一期は少し寂しさを覚えた。

*

森の中を歩きながら、一期は空間の裂け目に視線をやる。

「空間が時々裂けるように別の景色が映っていたのも、時空の乱れかい？」

「そうだね。そこに触れたら、あつちの方に引つ張られるから触らないようにね」

「あつちって、まさか冥界とか……？」

伸ばしかけた手を、慌てて引つ込める。その様子を見て、薬研が豪快に笑った。

「あー違う違う。あつちって言うのは、様々な時代の現世だな」

「ん？ ここが現世なのではないのかい？」

「あー、そこからか……まあいい機会だし、俺たちなりの時空と戦いの話をするよ」

——二十二世紀。海外で異空間が発見されたことにより、世は時空開拓時代となった。日本も例外ではなく、所謂『あつちの世界』と呼ばれていた異空間を切り開き、新たな町を開拓していった。

しかし、問題が発生した。異空間に住む者と元の空間にいる者の歴史の認識にずれが起こったのだ。調査を進めた結果、異空間から歴史に干渉しようとする動きが観測された。政府も対応しようとしたが、

時空移動に耐えられる人間はほとんど存在しなかったのだ。

そこで、政府は別の研究に利用していた『付喪神』に着目した。『付喪神』は、時空移動に耐えられ、しかも武器のそれは無法者の強力な対抗手段となった。政府は『付喪神』の顕現を行え、時空移動に耐えられる存在『審神者』を、高い給金と配偶でもって異空間に呼び寄せた。

そして審神者の協力を行った企業には、政府からの強力なバックアップがついた。それに釣られ、次々と企業が審神者の住む異空間に進出を開始、町は大きく発展していった。

だが、異空間にはまだまだ謎が多い。その一つが、森の中で頻繁に起こる時空間の乱れである。春光隊の彼らは、時空を無理に切り開いた影響なのではないか、と言う考えを示した。これが正しいわけではない、と言う但し書き付きだが。

「もしかして、神域と呼ばれる場所も切り開かれているのかい？」

「そことかさつき言ってた冥界とかは、空間の異物を弾き出す力が大きすぎて開拓は実質不可能だ、って言う結論が出ていたと思うが……まだ政府は諦めていないだろうな」

「資金とかはどうしているんだろうね。金だって有限だろう？」

「なんか審神者の技術をちらつかせてるらしいよ。外つ国でも歴史の改竄が増えていて、高いお金を吹っかけられても技術を使いたい国が多いらしくって。だからしばらくは大丈夫だろうね」

「……昔と比べて、何と言うか、あれだね、したたかになったのかな」「と言うより昔がへ——」

「薬研、それ全部言ったら歴史過激派に囲まれるよ」

「ははは、と後に続く言葉をうやむやにした薬研に、ふと思いついた一期は尋ねた。

「時空の乱れによって、何か面白いな、と思う出来事はあったかい？」
「んー、人が落っこちるとかはねえかな。ただ、『家の墓場』の辺りはよく物が落ちてっているな」

「例えば？」

「無難な物だとげーむする機械とか、てれびとか」

「でかい物だと飛行機の羽とか？」

「……それは、おもちゃの飛行機の羽だね？」

「いや？ 正真正銘、本物の飛行機の羽」

「流れ着いたのを見た時は、何があったんだってなったなあ。まあ、元に戻しようもないから、分解して素材にしたが」

「……お前たちもしたたかだね……」

喋っている間に、森の入り口に到着した。あと少しだ、と薬研は振り返り、歯を見せて笑った。

4—4 「まだ道は交わらず」

「いち兄！」

「大丈夫ですか、いち兄！」

「うう、よかったあ……！」

城下町の入り口で、弟たちは待っていた。一期に気が付くと、わつと駆け寄ってくる。あるものは涙を流し、あるものは安堵しきった表情を浮かべ、一期を迎えた。

「心配をかけたね、私はこの通り無事だ。ところで、主はどちらに――」

「一期お！ よく無事だったなあ！」

「ぐふっ!？」

蒼穹の審神者が、勢いよく一期に突進し、思いっきり頭を抱きかかえ、撫でまわした。

「あの、主、ちよっと」

「連絡が来た時は血の気が引いたぞ！ もしかしたらまた俺の刀が折れるんじゃないかって……！ くうっ、よく帰ってきたなあ！」

「主、苦しいです……」

息苦しかったが、悪い気はしなかった。自分は確かにこの審神者の下に帰ってきたのだ。それに強い安堵を覚える。

「ところで一期、助けたっつう隊の奴らはどこに？」

「えっ、そこまで来ているはずですが」

「どこにもいないぜ、いち兄」

蒼穹の薬研の言葉に振り返ると、もう春光隊の薬研と鯨尾は影も形もなかった。審神者は一期の頭をようやく離し、うーんと唸る。

「礼を言いたかったんだがなあ。やっぱりそうさせてはくれないか。一期、そいつらは何て名乗ってた？」

「春光隊、と名乗っております」

「……そうか、例の部隊か。今も助けてくれてるんだなあ。審神者の嬢ちゃんのことを慕っていた分、恨みも強いだろうに」

「ご存じなのですか？」

「伝聞と、写真で見ただけだがな。大層可愛らしい嬢ちゃんだった。成長していたら、美人になっただろうなあ」

美人。嬢ちゃん。慕っていた。その言葉で、春光隊の刀たちが、どれだけ審神者を大事にしていたか分かるようだ。いや、別に顔が悪いからと言って軽んじるつもりはないが。言い訳がましく一期が考えを巡らせていると、ふと思いついた。

——どうして、春光隊の面々は、自分を手入れ出来たのだろう。基本的に、審神者が手入れの許可を出さないとできない仕組みになっているのに。思案に暮れていると、弟たちが話しかけてきた。

「いち兄、帰ろう！ 今日の夕餉はかれーだって！」

「いち兄、お疲れでしょう。本丸に戻って、ゆっくり休んでください」

「うー、帰ったらいちにいに戦法の相談をしたかったのに……」

「一期殿も残念に思っているはずですよ。また後日、ゆっくり時間をとってはいかがでしょう」

「まったく、いち兄を襲った奴に馬糞投げてやりたいよなー！」

「兄弟、気持ちは分かるが馬糞を投げるのはやめておけ。……お帰り、いち兄」

弟たちと親戚は、思い思いの言葉を紡ぐ。それに心からの微笑みを浮かべて、一期は返した。

「ただいま、皆」

「ぐあーっ、また負けた！」

「よし、勝った！ これで唐揚げの最後の一個は俺のものだ！」

「くっそー！」

「本当に楽しそうだねえ。私も、機械を操作できるようになればいいんだけど」

春光隊のテレビの前で、長谷部と獅子王はゲーム対決をしていた。石切丸はそれを微笑ましく観戦している。台所からは、歌仙が炒め物をしている音が聞こえてくる。

「うー、唐揚げー……」

「まあまあ。今回は長谷部さんに運気が向いていたけれど、次は獅子

王さんに向くかもしれないよ」

「機械操作に長けている長谷部にどう勝てと……将棋か、やっぱり将棋か……」

「それ、俺を負かせる気しかないだろう！」

萎びていた態度から一変、獅子王は長谷部に言い聞かせるように人差し指を立てた。

「いいや、そんなことはないぜ。お前は仮にも審神者だろう。上に立つものとして、ある程度の戦術は覚えてもらわないとな」

「……それ、獅子王が勝ちたいゲームでやりたいだけに聞こえるんだが」

「いや、獅子王さんの言葉にも一理あるよ。刀が握れないとしても、ある程度身の振り方を覚えておいて悪いことはない。いい機会だし、獅子王さんに将棋を教わったらどうかかな？」

「……何かいいこと言っただけに不利な方向に持っていこうとしている気がするが、まあいいか。将棋を教えてくれ、獅子王」

「おつ、いいぜ。じゃあ何賭ける？」

「ルールを覚えてない奴に賭けを勧めるなよ！」

玄関から、二つの「ただいま」が響く。おかえり、と言葉を返し、長谷部と獅子王はすぐさま玄関に向かった。

「無事送り届けてきたか？」

「おう。ごろつき共も現れなかったし、無傷で送り届けたぜ。ただ、兄貴がちよつと感情的になっちまったが」

「うーん、らしくないことしちゃったなあ。要反省ですね」

しゅん、とうなだれる鯰尾に、長谷部はなんてこともないように言った。

「何も知らない奴が無神経なことを言っただろう。気にするな」

「長谷部さんの俺たちへの謎の信頼は一体……」

「あといち兄のこと嫌い過ぎだろ。もうちよつと感情を抑えてくれると身内としては嬉しいなあ」

「善処する」

「演技でもいいから直す姿勢を見せてくれよ……蜂須賀が来た時も睨

んでたろお前」

「まあ、少しずつ改善していこうぜ。俺っちも手伝うからさ」

「……薬研、かうんせりんぐの心得あったよね？ 何で行衣引つ張り出してるの？」

「あるぜ。でもいざと言う時は滝行だ、そっちの方が効果あるかもしれねえしな」

「おいおい力技じゃねーか！ 風邪ひくかもしれないから止めてやれ！」

玄関で騒いでいると、石切丸が顔を出した。

「皆、歌仙さんが夕餉の支度を手伝えるなら手伝ってって。誰か来られるかい？」

「俺が行くぜ。夕餉の減量を止めるように交渉しねえと……」

「じゃあ俺も行きまーす」

「よし長谷部、早速将棋の指南だ！ 居間に将棋盤持ってくるから待ってろよ」

「今やるのか!？」

本丸の中は、次第に客のいた気配を薄くしていく。こうして、春光隊の日常は戻ってくるのだった。

第五話 「子供の園、少女の護衛」

5-1 「お誘いとお守り」

夕食後。風呂の準備のために部屋に戻った一期は、ついでにと机の引き出しから端末を取り出す。チャットアプリを開けば、すでに三振りが会話を始めていた。

『そういえば明日また、滑~~氷~~園に参ろうかと』

『おー、ちび共によろしくなー』

『俺も行ってみたいものだが、主に止められていてなあ。少し江雪が羨ましくもあるな。子供たちはどんな様子だ?』

『相変わらず元気いっぱいですよ。小さな喧嘩はありますが、仲も悪くありません』

江雪が、その発言の後に写真を貼った。ピースサインをした男子たちが歯を見せた笑顔を見せている。少々ぶれていたが、微笑ましさは伝わってきた。

「こんばんは。かわいらしいですね」

『おっ、一期!』

『こんばんは、一期』

『夕餉は済んだのか?』

一期の言葉に、それぞれの反応を返す三振り。レスポンスの速さに、まだまだ入力の手速や細かい操作では敵わないが、一期も会話に参加しようと画面をタップする。

「ゆうげはさきほどもせました。これからふろです」

『今日の夕餉は何だった?』

「ぶたのもの、ひややつこと、あおなのおひたしと、あさりのみそしるですな」

『おお、うまそうだな』

『和風つてのもいいよなあ。俺のところはかなりの確率で洋風だから、たまに和食が恋しくなるな』

「ただ、ぶこたいがあおなをたべるときにひようじょうがしるずんでお

りました。にがみがあるのはわかりますが、すききらいのこくふくも、こんごのかだいですな」

『目に浮かぶようです。仲間で揃って食べる夕餉はいいものですよね』

そうして、鶴丸が食事中に自分の本丸の一期と言ひ合いになり審神者に雷を落とされたとか、鶯丸が新製品のレーションを試食する事になったとか、食事にまつわる様々な話が挙がる。一通り話題が熟した後、一期は先程出た単語の意味を尋ねる。

「すべりひゆえんとは、なんなのでしょうか」

『そういえば一期が入ってから話題に上げていませんでしたね。滑園は、城下町のはずれにある児童養護施設です』

何でも、滑園は文武両道をスローガンとして掲げており、実際にその通りに子供たちを育てている実績があるようだ。鶴丸は教材を見せて貰った事があるらしいが、一部教科は理解ができなかった、と話す。ぎゆうぎゆう詰めのカリキュラムをこなす子供たちは、それでも歪まず、真つ直ぐない子たちばかりだとか。

「そうなのですか。いちどいつてみたいですよ」

『では行ってみますか?』

「え、よろしいので?」

『子供たちも喜びますよ。是非一緒に』

その言葉に、一期は目を輝かせる。そして、勢いよくタップし、参加の意を伝えた。

「よろしくおねがいます!」

『おお、食いつきいいな』

『興味が湧いたんだろうな』

遠くから、弟たちの呼ぶ声が聞こえる。一期は風呂の準備を再開しようとして、会話から離脱する旨を書いた。端末をしまい、準備を済ませて部屋を出る。

『しかし大丈夫かね?』

『何がだ?』

『あのちびたち、少々元気が過ぎるような気がするんだが』

『大丈夫ですよ。一期は頑固な所もありますが、悪い性格ではありません。子供たちもすぐ心を開きますよ』

『なんかずれてる気がするなあ……』

『まあ、あの悪戯っ子たちを上手くいなせるか、一期の腕の見せ所ですね』

『……大丈夫かね、一期』

『まあ、何とかなるだろう』

一期が去った後には、そんな会話が繰り広げられていた。

滑り園に二振りが赴く日の早朝、氷雨隊の調査部隊は審神者の部屋に収集をかけられていた。隊員達は顔を見合わせて、訝しげに話しながら審神者を待つ。

「こんな朝早くに、どうしたんだろうねえ」

「本当に珍しい。どこかが襲撃でも受けたかな？」

「それか、要人の護衛か。どちらにせよ、俺達は任務を遂行するだけだ」

「そうは言ってもなあ。大まかな内容ぐらいは教えて貰いたいもんだ」

「迂闊に電話で通達できない内容なんでしょうか」

「……皆さん、主が来ます」

小夜の一言で隊員たちは話を止め、背筋を伸ばす。ドアが開き、審神者が苛立ちを隠さず部屋に入ってきた。隊員たちはいつに無く威圧を放つ審神者に、事の重さを感じ取る。

「おはよう。お前達に集まって貰ったのは他でも無い、非常に重大な任務を課すためだ」

重大な任務。審神者がそういう事は滅多に無い。一体どんな過酷な任務なのか。鶴丸は唾を飲み込む。ちらりと隊員を見ると、それぞれ驚き、感嘆、覚悟を露わにしている。

審神者はドアの向こうに告げた。

「入っていい」

「はい、お兄様」

涼やかな声が返ってきたと思うと、ドアが開き少女が現れる。セミロングの切り揃えた黒髪、ブレザーの制服、背筋の伸びた立ち姿。彼女はどこか、和の雰囲気漂わせていた。

「主、その子は妹君かい？」

「そうだ。お前達は夕立と呼ぶといい」

「分かったよ。んで、その夕立ちちゃんがどうしたんだい？」

次郎太刀がそう問うと、審神者の圧が一層大きくなる。目をくわつと見開き、憤怒を剥き出しにする。

「……妹が、敵に襲われかけた。幸い、人通りの多い場所に出て、撒けたらしいが。そうだな？」

「はい、お兄様。私を襲ってきた者は、笠を被り、刀を持っておりました。暗くて判明したのはこれだけです。お兄様の言う時間遊行軍の打刀に間違いないと思います」

「何故妹が狙われたか分からない。そのためこちらに居を移す事になったのだが、手続きが済むまでは護衛をつけるようにと政府から命があった。……くそ忌々しい、審神者の仕事が無ければ俺が直々に挨拶に行ったものを、大体何故妹なんだ、いくら美人で気立てがいいと言ってもまだ嫁にやる気は無い、例え死神であろうとも俺が叩つ斬つてやるぞ」

シスコン魂を露骨にする審神者に、隊員たちは少し引いていた。妹の夕立は、いつもの事だというようにため息をついて、兄から隊員たちに向いて依頼した。

「……という訳で、しばらくは刀剣男士の皆様にも私の護衛をお願いしたいのです。構いませんか？」

「え、ああ、主の命なら構わないけど……」

青江は引きつった笑みを浮かべた後、隊員たちに耳打ちした。

「主があんなに怒り狂っているの、初めて見たねえ」

「目に入れても痛く無いほど可愛いがっているらしいからなあ。そんな兄貴が妹を狙われて黙っていられる訳が無いさ」

「気持ちに分かりますけど……顔の迫力が凄いですね……」

堀川も顔が引きつっている。引いている隊員を見て、夕立は苦笑い

をしていた。

一通り怨嗟の念を漏らした審神者は、改めて調査部隊に告げた。

「指令だ。夕立を現世で護衛し、襲い来るものどもを返り討ちにしろ。

……ああ、それと」

追加で何を言われるのか、と首をかしげる調査部隊に、審神者は笑顔で付け加える。

「——妹に不埒な行為をしたら、白金台に単騎で出陣して貰う」

「おかしいな、主は笑っているはずなのに、背後に般若が見える」

「目が笑ってませんもんね……」

「返事は!？」

「あ、あいあいさー!」

審神者に凄まれ、調査部隊は背筋を伸ばして応える。それを見た夕立は、羞恥に染まった顔を兄に向けて叫んだ。

「お兄様、皆様の気を悪くさせるような事を言わないでください!

皆様はそんな事はしませんよ!」

「こいつらの剣の腕は信頼しているが、そつちの方面は分からないだろう!」

「私だって自分の身を守れるくらいの心得はあります! お兄様は過保護なんですよ! 子供の頃だって、ただ話していた男の子に襲いか

かって怪我をさせて、あの子のご両親に顔向けできなくなっちゃって、その後気ますぐなくなっちゃったんですから!」

「どこの馬の骨とも知らん奴をお前に近づけさせるか! 俺にはわかる、あの男は邪な感情をお前に抱いていた! そうなればなおさらお前に近寄らせる訳が無いだろう!」

「邪って、あの子も名門の家の子ですし、振る舞い方は弁えてましたよ!」

「お前は危機感が無さすぎる! 大体——」

「だから過剰な反応をしないで欲しいんですよ! そもそも——」

物騒な宣告を皮切りにした兄妹喧嘩は、疲れ切った表情をした調査部隊が止めるまで続いた。

5—2 「滑園の子供達」

滑園は、城下町の入り口から20分程度歩いた所にある。今日も城下町は賑やかで、日も高い今は人通りも多い。江雪に先導され、一期は足取り軽く目的地に向かっていった。

「守る存在を見て決意を新たにできる、実にいい事ですね」

「表情が輝いていますね、一期」

「弟たちと過ごすのは好きですから。まあ、弟たちよりはまだ未熟なのでしようけれど」

「まあ、そうですね。栗田口の刀たちと比べては可哀想です。彼らは、私たちよりも遥かに短い生なのですから。……見えてきましたよ」

江雪が指をさす。建物の向こうが突然ひらけている。恐らくは運動場だろう。近づくと、幼い笑い声が聞こえてくる。辿り着いた門から中を覗くと、子供たちが鬼ごっこや縄跳びをしていた。その中の一人が門の方を向いた後、笑顔で駆け寄ってくる。

「あつ、江雪だ！ おーい！」

「江雪さんだー！ 一緒に遊ぼー！」

「江雪さん、隣のひと誰？」

一人、また一人と門に駆け寄る子供たち。一人が門の内鍵を開け、二振りの中に迎え入れる。子供たちからの視線を浴びながら、江雪は優しい笑みを浮かべた。

「皆さん、久しぶりですね。彼は一期一振。最近友達になり、ここに興味を示したので連れてきました。優しい方ですので、皆さん仲良くしてくださいね」

子供たちの視線が一期に集まった。一期は王子めいた微笑みを子供たちに向ける。それを見て、女子たちが黄色い声をあげた。

「二期一振と申します。滑園の皆さんと友達になりたくてやってきました。一緒に遊んでくれますか？」

子供たちはきよとんと丸い目を一期に向けた。声も無く顔を見合わせてから、弾けた笑顔を向ける。

「いーよー！」

「一緒に遊んでー!」

「敬語じゃなくていいよ、いちごひとふりさん!」

「鬼ごっこしようよー!」

歓迎の意を示す子供たち。手を引かれて、一期と江雪は運動場の中央へと誘導される。

鬼ごっこ、いや縄跳び。新しい『友達』の遊び相手を決める言い合いが始まった。一期が微笑ましさに目を細めていると、背後に気配を感じた。しかしその時には遅かった。

「おーりやつー!」

「わあっ!」

膝裏に衝撃を受け、一期は前に倒れる。わっと悲鳴をあげた女子たちは、すぐに背後の存在を睨みつけた。

「ソメゴロー、あんたね!」

「いちごひとふりさんに何すんの!」

「いちごひとふりさん、大丈夫!? いい加減にしなよ、ソメゴロー!」
ソメゴローと呼ばれた男児は、女子たちの責め立てを苦にもせず、へっと笑い言い放った。

「そいつが膝カツクンぐらいで転ぶ軟弱さなのが悪いんだろー?」

「膝カツクンで倒れない人の方が珍しいでしょ!? あんた新しい人が来る度に嫌がらせして!」

「だからバレンタインのチョコの数少ないんだよー!」

「お前らからのチョコなんていらねーよ! なんならお前らにも膝カツクンしてやるーか?」

「ぎゃーっ! こつちくんなーっ!」

女子とソメゴローの喧嘩がヒートアップしていく。ソメゴローが女子を追いかけて、追われなかった女子がソメゴローに飛びかかり止める。そうしてその女子とソメゴローが取っ組み合いになる。そうしている間にも彼女らの口は回り続ける。それにソメゴローが言い返し、場はまさに混沌と化した。

一期が止めようとしても、子供たちは耳を貸さない。そのうちに建物の中から男子に手を引かれて現れた女性が、子供たちに一喝した。

「いい加減にしなさい！ 女の子たちはソメゴロー君の挑発に乗らない！ ソメゴロー君は今日おやつ抜きよ！」

「先生！」

「なんだよ、おやつ抜きって！ 俺は新入りに入りやすくしただけだろー!?!」

「それが悪質だつて言ってるの！ 反省するまでご飯抜きでもいいのよ！ ほら、お兄さんに謝りなさい！」

『先生』と呼ばれた女性がソメゴローを一期に向ける。ソメゴローは、ふてくされた事を隠さずに言った。

「……サーセン」

当然、先生はソメゴローの態度を良しとせず、ソメゴローの耳を引つ張り、ちゃんとした謝罪を促した。

「ご・め・ん・な・さ・い！」

「いててて！ ごめんなさい！」

痛みで涙目になりながらも、ソメゴローは改めて謝罪した。ふう、と一息つき、先生は一期に頭を下げる。

「二期一振様、すみません。この子はここ一番のやんちゃ坊主で……怪我はしていませんか？」

「えっと、少し擦りむいた程度です。なので大丈夫——」

「大変、すぐに手当てをしないと！」

擦りむいた、と聞いた途端に先生の顔が青くなる。

「皆、仲良く遊んでね！ 先生はお兄さんを手当てしないとイケないからー！」

「はーい」

「いちごひとふりさん、また後でねー！」

子供たちに一言注意をして、先生は一期たちを棟内に案内する。『いむしつ』とプレートがかかった部屋に通された二振りは、少しお待ちください、と慌ただしく出て行った先生を見送ってから、話し始めた。

「……大丈夫ですか？ 粟田口にあのような子はいないので驚いたでしょう」

「ええ……少し。あのようないたずらをされた事も無かったですし」
「そうでしょうね。あの子……ソメゴローはかなりのいたずらっ子でして、職員も手を焼いているようなんです。ただ……」
「ただ？」

「……いえ、そのうち分かる事でしよう」

意味深に言葉を区切った江雪に、どういう事かと一期が首をかしげていると、先生と共に頭髮が寂しい初老の男性が入ってきた。

「あの男性は、ここの施設長ですよ」

江雪はそう耳打ちする。息を切らして入ってきた施設長は、温和そうな出で立ちだった。その表情はまるで罪を誤って犯したかのよう
に青ざめている。一期の方を向くと、勢いよく頭を下げた。

「この度は申し訳ありませんでした！」

施設長は土下座しかねない勢いだ。一期は慌てて宥める。

「頭をあげてください！ 私は軽傷ですし、一応謝罪も本人からいた
だいています。私の鍛錬も足りなかったのでしょうか、ですからあまり
気にされると——」

「いえ、躰が行き届かなかった私どもの責任です。刀剣男士の皆様
に戦場以外で怪我をさせるなど言語道断！ 例の児童には、更に厳しく
教育を施しますので、どうかお許しを……！」

施設長はぶるぶると震えてしまっている。一期は手負いの小動物
を相手取るように、話しかけた。

「弟たちなら身の振り方を教え込んだでしょうが、相手は幼い人間の
子。まだ世間を知らない年頃の子を、責め立てるつもりはありません
ん」

「しかし……！」

「それよりも、擦りむいた所の処置をしたいのですが」

「そうでしたな！ スギハラさん、一期一振様に手当てを」

「は、はい！」

先生——スギハラは、液体の入った瓶と絆創膏をローテーブルに置
くと、一期に尋ねた。

「擦りむいた所はどこでしょうか？」

「膝下辺りです」

「両方ですね？ では失礼して……」

スギハラは一期のジャージを捲ると、処置を始めた。液を傷口に垂らし、周囲を軽く拭いて、絆創膏を貼る。それだけだが、スギハラの手は震え、拭う時も力が入っておらず、絆創膏の貼り付けも過剰な程に慎重だった。全ての処置が終わった時、スギハラはふーっと大きく息を吐いたが、施設長の咎める視線に慌てて背筋を伸ばす。

「ありがとうございます」

「いえ、礼を言われる程の事ではありません。本当に、お気になさらず……」

スギハラはすっかり萎縮していた。児童の一人が怪我をさせた事への負い目にしては、あまりにも身構えている様子に見える。

「今回の事、なんとお詫びすればいいのか……」

「本当に気にしないでください、私は平気です」

「ですが……」

「施設長、スギハラさん」

静かに様子を眺めていた江雪が、謝罪を遮る。施設の二人は、江雪の声によって口を閉ざした。

「あまりに謝罪を重ねると、軽く思われますよ。一期も気にしないといつている事ですし、今回はこれで終いにしましょう」

「……そうですね、その通りです」

施設長はうなだれ、スギハラも目を伏せた。重い沈黙に包まれる部屋の外から、こちらに走ってくる音が聞こえてくる。

「せんせー！ お話終わったー？」

「あれ、施設長もいる。珍しいねー」

入り口から顔を出したのは、女子たちだった。スギハラは沈んだ顔から一転、『先生』の顔に戻る。

「もう、遊んでてって言ったのに」

「だっていちごひとふりさんと遊びたいんだもん！」

「先生たち手当てに時間かけすぎだよー」

「ごめんね」

困った笑顔を浮かべて女子たちの頭を撫でた後、スギハラは一期に尋ねる。

「……一期一振様、もしよろしければ、この子たちと遊んでいただけないでしょうか？ この子達、あまり園の外の人と関わらずにいたので、どうしてもあなたへの興味が抜けないようなんです」

ソメゴローは近づけさせないようにしますので、とスギハラは付け加えるが、そんな物が無くても、一期の答えは決まっていた。

「もちろん構いません。私は、そのためにここへ来たのですから」

女子たちはわあつと一期に駆け寄り、腕を引いた。

「いちごひとふりさん、縄跳びしよ！」

「えーっ、かくれんぼがいい！」

「ツクシさつきもかくれんぼしたじゃん！」

一期が幼い声に耳を傾けていると、スギハラが女子たちに注意を呼びかけた。

「いい？ お兄さんにこれ以上怪我をさせたらダメだからね！」

「はーい！ 行こ、いちごひとふりさん！」

「江雪さんも行こ！ 早く早く！」

「ええ、今そちらに」

江雪もソフアーから立ち上がり、女子たちの下へ歩いて行った。

はしやぎ回る女子たちを見ながら、ふ、と笑みを浮かべる。

「すっかり人気者ですね、一期」

「物珍しさから来ているのでしょね。多分しばらくしたらあまり気にされなくなりますよ」

「……いえ、あの子たちは先生の言いつけを破ってまで一期の下へ来ましたからね。ここの子供たちが言いつけを破る事はそうそうありません。とても気に入られていると思いますよ」

流石は王子と呼ばれるだけありますね、と江雪は静かに笑う。王子よりは武士でありたいですな、と一期は返す。目の前の女子たちは、一期の方に詰め寄る。

「ねーいちごさん、縄跳びがいいよねー？ ねー？」

「うーん、そうだなあ」

「かくれんぼの方がいいに——きやつ!？」

ツクシと呼ばれた少女は足を捻った事により体のバランスを崩し、一期の腹に倒れ込んで来た。一期は思いつきり尻餅をついてしまう。

「いっ……!？」

「きゃー!ー いちごひとふりさーん!」

「ごめんなさい、大丈夫!」

ヒリヒリと尻が痛む事を顔に出さずに、一期は二人に笑いかける。

「大丈夫だよ、ありがとう」

「でも、傷に響いてない？」

「全然。最初から傷など無かったみたいだよ」

「一期、痩せ我慢はいけません。少し休んでから——」

「いえ、それが」

江雪が一期に目線を合わせ調子を問うと、一期は訝しげに首を捻る。

「ちつとも痛く無いんです。少しは膝の痛みがあってもおかしく無いのに、まるで本当に傷が無かったかのような感じで」

「……一応、様子を見ますね」

江雪はジャージを捲り、膝下を見る。すると、

「……え？」

江雪は、呆けた声を出した。

スギハラの貼り方が悪かったのか、絆創膏がめくれて膝下の様子が露わになっている。——膝下にあるはずの傷はどこにも無く、あるのは絆創膏が貼られた痕だけだった。

5—3 「からかい／寂しさ」

本丸が並ぶ一画の中心部にあるビル。そこが、この区域の中枢部であり、現世へと繋がるゲートがある場所だ。

「皆様、動き辛く無いですか?」

「うーん、落ち着かないっちゃ落ち着かないが、動きづらくは無いな」
氷雨の調査部隊が、現世に身を置くための服を着て体を動かしている。堀川と青江が学ラン、長谷部はスラックス、小夜はパーカー、鶴丸と次郎太刀はシンプルな着物。全て、審神者が用意した物だ。

長谷部が手をぱつと振ると、刀が現れる。鞘から刀身を抜き、一凧夕立はそれを見やって、ほう、と息を漏らした。

「流石ですね。すぐに動けるようになるなんて」

「主の妹君を守るため、これくらいは当然です」

「本当に凄いです。頼りにしていますね、長谷部さん」

「お任せを」

ふたりが真面目なやり取りをしている間。

「あつはつはつは！ 鶴丸、その格好していると本当に詐欺ができるよ！」

「……なんか、病院から一步も出た事が無いような人に見えますね」

「そうだなあ。あの葉が落ちたら、僕の命は……つてか?」

「あはははははは！ 傑作だよ!」

「鶴丸は似合うからいいよね。僕なんかどこからどう見ても十代前半には見えないだろう……」

「ああ、青江さんは十代後半くらいに見える気がしますね」

「妹君と同年代の学校の生徒、という体だろうけど、無理があるんじゃないかな……」

「大人っぽいで通しましょう!」

背後では、着慣れない服をタネに会話が弾んでいた。職員が訝しげに声の主たちに視線を向け、通り過ぎて行く。青筋を立てながら、長谷部は話を続ける。

「襲われたのは夜という事でしたが、昼間でも人目の少ない所で襲わ

れないとも限りません」

「ねえ鶴丸、もつとやっつてよー!」

「ええ、そうですね」

「……こんなに味が濃い物を食べるの、初めてだ……」

「ですから、我々の内誰か一振りとはいつも行動を共にしていただく事になります」

「病院のアレは、薄いつていうよねえ……食事の事だよ?」

「無論、承知しております」

「なんか本当に儂げな雰囲気……」

「妹君には、息苦しさを感じさせる事になるかもしれません。その点を……了承願います」

「……あつ、倒れた」

「いえ、皆様といて息苦しいとは思いません。兄ほど過保護でなければ大丈夫ですから」

「空に手を伸ばしてる……手が落ちた。迫真の演技ですね」

「あつはははははは! 現実味出し過ぎでしょー!」

「……あー、今から少し見苦しい所をお見せする事になりますが、よろしいですか?」

「? 目を閉じていた方がいいですか?」

「耳も塞いでいただけるとありがたいです」

疑問符を浮かべ、目を閉じて耳を塞ぐ夕立。それを確認し、

「——貴様ら! それが重大な任務前の態度かあ!!」

長谷部の特大の雷が、五振りに落ちた。

*

任務前お決まりの説教タイムは、今回一時間弱続いた。げんなりした五振りとはびんぴんしている一振りは、ゲートを通り現世のゲートがある建物に到着後早速分かれて行動を起こす事になった。索敵組二つに、一振りが夕立の護衛だ。最初に、堀川と青江と次郎太刀、長谷部と小夜、そして護衛の鶴丸、という班分けになった。

「よーし、サクツと探してサクツとやっつけよう! 行くよ青江、堀川!」

「ちよ、次郎痛い痛い」

「次郎さん、襟元掴まないでくださいよー!」

次郎太刀班が勢いよく飛び出したのを見てから、長谷部は小夜に問う。

「小夜、話が長くて悪かった。行けるか?」

「……はい。大丈夫です」

「そうか、じゃあ行こう。鶴丸、くれぐれも変な事をするんじゃないぞ!」

そう忠告してから、長谷部班も建物の外へ出て行く。ひらひらと手を振ってから、鶴丸は夕立に告げた。

「俺達も行くか。最初はどこに行くんだったか」

「まずは私の自宅です。といっても学校の寮なんですけどね。生徒の目が集まると思いますが、注意した方がいい点とがありますか?」

「そうだなあ……まずは話し方か。使用人とかと話す時はどうしてる?」

「えつと、もう少し気安い感じですかね? ……まさか、鶴丸様にもそうしろと……?」

「関係性を探られた時に困るだろう?」

話しながら、建物の外へ出る。少しだけ暑さが残る空気が感じ取れた。暑すぎず寒すぎずのいい気温だ。しばらく歩いて着いた門から、紅葉が見えた。鶴丸は、目の前に舞っていた紅葉を指でつまんだ。

「いやいやいや恐れ多いですよ、神様に向かってそんな言葉遣いは……! それに使用人のように扱うなんてできませんよ!」

「君は兄貴とは正反対だなあ。主は『お前達の存在は科学的に云々』って言うってこき使い倒しているが」

「……兄様が、そんな事を? 後で言うっておかないと」

目がすわった夕立に、失言をした事を思い知った。が、まあたまには怒られればいいのだ、あの冷酷皮肉屋軍人は。

「それに、俺達は道具だからなあ。使われてなんぼの存在だ。配下として扱うのは、間違っではないと思うぜ?」

「……いいのですか?」

「おう」

夕立が、鶴丸に向き直る。

「じゃあ護衛されている間、鶴丸と呼ばせていただきますね」

梅の花が、咲いたようだ。はにかみながら微笑む夕立に、鶴丸は確かにそう思った。なるほど兄の言う通り、並の男は彼女に堕ちるだろう。兄のあの溺愛ぶりも頷ける。

真面目にやらないと折られるな、色々な奴に。やる気を出した鶴丸は、手始めに夕立へ一礼する。

「はい。この鶴丸、お嬢様のために誠心誠意お仕え致します」

畏まった口調に、完璧な使用人スマイル。夕立はきよんとした後、顔を赤らめた。

「な、なんか恥ずかしいです、鶴丸」

「そうですか？ ……ああ、そこは段差になっています。お手をどうぞ、お嬢様」

「うう、小説のような事が実際に起こると爆発しそうです……！」

「ははは、お嬢様は照れ屋でいらっしやる」

わたわたしながら鶴丸に手を引かれる夕立。一方の鶴丸は、くつくつと笑い声を漏らして夕立の手を丁重に引いていた。

子供達と遊ぶのはとても楽しかった。それはもう、自分らしく無いと思う程にはしゃいでいた。弟達とはまた違う純真さに触れるのも面白かった。

「二期さん、みーつけた！」

「はは、見つかってしまった。ツクシちゃんは探すのが上手いね」

「えへへ、そーでしよー？ 私、隠れるのも上手いんだよ！」

ツクシが胸を張る。その頭を優しく撫でると、にへー、と表情が緩んだ。

しばらくこの施設に通って、少しずつ名前と特徴が一致してきた。ツクシはかくれんぼが大好きな人懐っこい少女である。一期にとびきり懐いている一人だ。

「あーあ、ツクシが鬼だとすぐ終わっちゃうよ。なんか悔しいなあ」

「……アズサさん、あなたは縄跳びが得意でしょう。得意なものは人それぞれ、落ち込む事はありませんよ」

「そうはいつでも、真っ先に見つかると悔しいの！ ねえ、江雪さんと一期さんのいる場所でかくれんぼ上手な人いないの？」

江雪がアズサを慰めた。アズサは頬を膨らまし、更なるかくれんぼ技術向上を図っている。

アズサは縄跳びが好きな負けん気の強い少女だ。ツクシとは仲がいいが、同時に様々な事で競うライバルでもある。その他にも、大人しくなかなか輪に入れない子、男子にも負けられないやんちゃさを見せる子、遊ぶより本を読む事が好きな子と個性豊かな女子がいた。

そう、女子達だ。ここに来るのは二回目だが、基本的に一期の周りには女子しか集まってこない。一方の男子達はというと。

「何だよ、あいつらあんな軟弱者がそんなにいいのか？」

「軟弱そうに見えてもある程度力はあるし、見るからに爽やかそうだもんな。そういうのが好きなんだよ、女子達は」

このように、遠巻きに一期を見ていた。女子達が男子を押し退けて一期の周りを取り巻いている現状、なかなか女子に混じって入れないのだろう。一期が王子めいた印象をもたらしただけ、泥まみれになっ

て遊ぶ男子達とは違う人種だと思わせたのだろう。縄跳びの縄を取りに行った女子達がいなくなっただけから、一期はうなだれた。

「……男子達には最初、歓迎されていたのに……」

「仕方ありません、私も最初はそうでした。通っていれば、次第に遊びに誘われるようになりますよ」

江雪が一期の肩にポンと手を置く。うう、と唸る一期だったが、ぱたぱたと走って来る音を聞いて、振り返る。ツンツンとした頭の男子が、こちらに向かって来ていた。

「おや、サクヤ君。どうかなさいましたか」

「……」

江雪にサクヤと呼ばれた男子は、じっと一期を見つめている。一期とサクヤはしばし見つめ合っていた。何か変なものでも付いている

のだろうか、と思い始めると、サクヤが切り出す。

「……一期さんは、兄弟が沢山いるって聞いたよ」

「え、うん、そうだよ」

それがどうしたのか。しばらく俯いていたサクヤは、顔を上げる。「ねえ、兄弟ってどんな感じなの？ 沢山いる兄弟の長男なんですよ？ やっぱり、賑やかで楽しいの？」

サクヤは、真剣な表情で一期に問いかけた。兄弟を知らない——一期は、彼らが孤児である事を思い出した。サクヤの発言から、この子供達は血の繋がりが無いと分かる。

「そうだね、確かにとても賑やかだ。私達は少々特殊だから、生まれた時から一緒だったという訳では無いけれど、それでも、毎日どこかで喧嘩が起きたり、兄弟の誰かと一緒にいたずらをしたりしている」

「……そうなんだ」
「でも、私達のように仲がいい兄弟ばかりじゃない。私のいる場所では、己の信念から相容れないもの達もいる。それは、多分人間も同じだ」

「……兄弟っていうのは、仲がいいのがいいって思ってたんだけど」
「もちろんそれが最上だが、互いの思想が相容れないのに無理に仲良くする必要は無いと思うよ。無理に繕えば、必ず破綻するのが世の道理だ」

じつと一期の話を聞いているサクヤに、一期は尋ねた。

「君は……サクヤ君は、気が合うと思える相手はいるかい？」

「……うん。ちよつと乱暴だけど、何でか一緒にいると楽しい奴」

「なら、その子との繋がりを大切にするといいよ。時には血の繋がりよりも、縁の繋がりが大切な事もあるからね」

「……そっか」

サクヤの服が、風にはためく。彼は少し寂しそうに言った。

「俺を捨てた親よりも、親身になってくれる友達の方が大切だよなあ……やっぱり、そうだよな」

少し、泣きそうだと感じたのは気のせいだろうか。声をかけるべきか、少し悩んでしまう。

「あーっ！ 一期、サクヤのこと泣かしただろー！」

肩を怒らせて、ソメゴローがこちらに走って来た。サクヤの前に立ちほだかると、一期を睨みつける。

「サクヤは俺の親友なんだぞ！ サクヤを泣かせたら、俺がボコボコにしてやるんだからな！」

「ソメゴロー、俺が勝手に悲しくなったただだから。後、ボコボコにするっていつでも、返り討ちにされるのがオチだと思うよ」

「俺には必殺・アルティメットブレイブパンチがあるから大丈夫だ！」
「……それ、腕ぐるぐる回してぶつけるだけのやつじゃん。それに名前がバカっぽい」

「なんだよー！ サクヤは俺が頼りにならないっていうのか!？」

「身の程を知れって言ってるの。厚顔無恥って知ってる?」

「またなんか難しい言葉使ってよー！」

サクヤとソメゴローがやいのやいのとしているのを、一期と江雪は眺めていた。

「サクヤ君が一期に興味を示したのは驚きましたね。彼は、図書室にいる事がほとんどですから」

「そうなのですか?」

「本をよく読むためか、かなり弁が回る子でして。何だかんだ理由をつけては、図書室に閉じこもるんです。ソメゴロー君と一緒に遊ぶ事もありますが、それも稀ですね」

「あれ? でも、一緒にいて楽しいって言っていませんでしたか?」

「同室ですから、自然と一緒にいる時間も長いようです。同室の子は他にもいますが、それでもソメゴロー君以外の子と仲良く話しているのはあまり見かけませんね」

少々理屈っぽいからでしょうか、と江雪は付け加える。理屈っぽい子と感情一直線の子、なかなかいいコンビではないか、と一期は評価する。

一通りやり合った二人は、一期に向き直る。

「次サクヤを泣かせたら、必殺技のアルティメットファイナルスパーブレイブパンチをお見舞いしてやるからな！」

「ソメゴロー本当やめて。後長くなってるし技名。……ねえ一期さん、もう少し話聞いてもいいかな」

「あつ、俺も行くぞ！ サクヤに何かしないように見張ってないどー！」
「恥ずかしいからやめて」

張り切るソメゴローに、ため息をつきながらも穏やかな表情のサクヤ。微笑ましさに表情を緩ませ、サクヤに視線を合わせる。

「もちろん構わないよ。何が聞きたい？」

「そうだな……一期さんの兄弟の事、詳しく聞きたいな」

「無視すんなー！」

「いえ、無視はしていませんよ。そうですね、一期」

「そうだね、ソメゴロー君も一緒にどうかかな」

「なっ……ふん、どーしてもっていうなら行ってやる！」

「失礼な事言わないの」

「サクヤに言われたくねー！」

サクヤが、近くのジャングルジムに腰掛ける。隣にソメゴローも腰掛けたのを見て、一期は兄弟の話をしようと口を開いた。

5—4 「獣の園」

——いやはや、女はいくつになっても女だな。段ボールに囲まれた部屋の中、氷雨の鶴丸はそう嘆息する。窓のサッシに腕を乗せ気怠げにする様は、絵になってはいるが。

「鶴丸、大丈夫ですか……？ 少しベッドで横になりますか？」

恐る恐る、夕立が提案する。演技も忘れた鶴丸の疲労感を敏感に感じ取っていた彼女に、鶴丸は手を持ち上げて答える。

「いえ、大丈夫ですよお嬢様。こうやって寄りかかっていたら、少しは楽ってもんです」

「下にズルズルと下がってますよ……鶴丸が汚れちゃいますから、少しベッドで休みましょう、ね？ 鍵もかかっていますし、少しは安全に眠れると思うのですが」

気を使う夕立の声は小さい。そうなってしまふ原因は、ドアの外から響く物騒すぎる声だ。

「白いイケメンはどこに行ったあ!？」

「まだ遠くには行ってないはずだよ!」

「探せ! そして囲え!!」

「ふふふ……イケメン、イケメンがここにいる……!」

「何としてでも捕らえますよ! 先輩たちに後れを取らないように!」

バタバタと荒々しく走り回る音、そして発せられる欲に塗れた声。それは哀れな鹿を追い立てる獰猛な獣を思わせた。無論、鹿役は鶴丸である。部屋の近くまで来た足音に、夕立はびくつと体を竦ませた。

——畜生、どうしてこんなことに……!」

そう嘆いても何も変わらない。獣達の声は、まだドアの外を徘徊している。

*

時間は夕立が通う学校の寮に到着した頃まで遡る。

校門から少し離れた場所に寮はある。上に話は通っているとの事で、校内及び寮内には難なく入れた。

「それじゃあ、私の部屋に行きましようか。……鶴丸？」

夕立が振り返ると、きよろきよろと玄関ホールを見渡す鶴丸が目に入った。広々としたホールを、演技も放り出して今にも駆け出しそうだ。それだけでなく、玄関先から見える学校の施設にも目を向けている。くす、と微笑んで、夕立は言った。

「校内を案内しましょうか？」

「！ いいのですか？」

「ええ、もちろん」

一気にぱあつと明るくなる鶴丸に、夕立はまず私の部屋に行つてからですね、と告げた。

階段を登り、夕立の部屋へ向かう最中に、女子生徒が声をかけてきた。

「明王寺。そうだ、寮を出るんだつたな」

「先輩」

どうやら夕立の先輩だったようだ。一礼され、女生徒は災難だったな、と告げた。

「ここはある程度は安心だと思つたが、暴漢に毎日のように襲われるとなると、セキュリティがしっかりしている家族のところに行つた方が安心か。しかし、お前がいなくなると寂しくなるなあ」

「そう言つてくださるのは先輩くらいしかいらつしやいません。寮を離れる事、本当に残念に思っております」

「悲しい事言うな、他の奴も寂しがっているさ。……ところで、後ろの人は？」

女生徒は温かい笑顔を後輩に向けていたが、背後に立つ鶴丸を見て、部外者への表情に変えた。夕立はそうでした、と慌てて鶴丸を紹介する。

「先輩、彼は今回私の護衛となつた鶴丸です。兄の紹介ですので、身元は保証されております。鶴丸、彼女は吹上先輩。この寮に入つてから、ずっと親身になってくださった方です」

「そうか、あのお兄さんの紹介なら大丈夫だな」

深く頭を下げる鶴丸に、後輩をよろしくな、と吹上は朗らかに笑う。

「……しかし、随分目立つ容姿だな。道中声をかけられなかったか？」
「いえ、今のところは……」

「気をつける、ここの学校の生徒は大多数が男に飢えている。鶴丸さんのような色男を見逃す奴らじゃないだろう。囲まれたらかなりの時間足止めされる、用事は急いで済ませた方がいい」
「えっ」

鶴丸が夕立に勢いよく視線を向けると、彼女は忘れてました、と青ざめながら呟いた。嫌な予感が込み上げてくる中、こちらに新たな生徒が駆け降りてくる。

「吹上！ ねえ、ここら辺でイケメン見なかった!？」

「今まさにここにいる！ まさか……」

「ヤバイよ、一部の飢えてる奴らが一斉にこっちに向かってきてるの！ イケメンいるならここから引き離して!？」

女生徒が叫んだ直後、階段下で地面が轟く音を聞いた。いや、地面が轟いたのでは無く――。

「――いた、イケメンだ!？」

飢えし獣が、階下に現れた。獣達は、猛烈な速さで鶴丸に近づき、夕立達を押し退ける。

「うわあ、この薄い色素が様になってるって凄い……!？」

「これは是非ともうちの婿に……!？」

「まつげ長あ……目えキラキラ……」

「ちよつと、前の子だけずるい！ 私達にも見せてよ!？」

「ふふふ……生きのいいイケメン……! 是非とも私の犬にしたい……!？」

「せめて髪の毛一本だけでも……!？」

腕を引かれ、顔に触られ、挙げ句の果てには尻を触られ、と揉みくちゃにされた哀れな鶴丸^{こしか}。特に最後の方の発言に本気で身の危険を感じた。

何とかして夕立の方を見ると、待ち構えていたように彼女は口を動かした。

――さん、まる、い。

それを読み取った鶴丸が頷き、夕立が階段を駆け上がり始めた途端、吹上と友人が力づくで鶴丸と周囲の女生徒けものたちの間に割って入った。「しばらく私達が足止めしているから、鶴丸さんは逃げる！」

「……恩に着ます！」

女生徒達の怒号が響く中、鶴丸は駆け出した。二階、と書かれたプレートを見やり、更に階段を駆け上がる。

獣達の唸り声は、鶴丸が三階に辿り着いた途端に動き出した。三〇五、三〇五、と左右を見渡すと、ドアが一つ開いていた。

「鶴丸！ こつちです！」

声の元に、一目散に駆ける。鶴丸が室内に滑り込み、夕立がドアに鍵をかけると、獣達の声がドアの外から響き始めた。

*

疲労感を隠せない二人は頭を抱えていた。相変わらず、外からは飢えた獣達の怒号がドア越しに響く。

「……これはもう校内案内どころではありませんね……」

「ええ……鶴丸申し訳ありません、容姿の事は頭に入っていませんでした……」

「お嬢様は気になさらずに。しかし、これからどうしましょうか……」
突如、ピピピ、という電子音が鳴った。一人と一振りがびくりと身を竦ませたが、連絡用の端末からだ、という事に気づいて、はあ、と身を緩ませる。端末を見ると、チャットルームでの連絡。中間報告の時間になったようだ。

『こちら長谷部・小夜、現場を調査して見るも敵は痕跡を残さず、決定的な手がかりは見つからなかった。そちらは？』

『はい、こちら次郎・堀川・青江。堀川が口説かれた事以外は特に異常なし、敵の痕跡も無かったよー。ここ最近の女の子ってガンガン行く感じなのかな？ しつこく食い下がってきてねー』

『女の子はああも積極的なのが主流なのかな？ とても情熱に満ちていたね』

『次郎さん、青江さん、その話はあまりしないでいただけると……』

『というかその話は任務と関係無いだろうが！』

『……鶴丸さん、そつちはどうですか？』

小夜に話を振られて、鶴丸は倦怠感で重たい指を動かす。

『おんなはけもの』

それだけ打ち込むと、再び窓枠に腕を預ける。画面に何があったと問うメッセージが入るが、もうあの女生徒達けものに気力をこつそり持つていかれてしまったため、打つことはせずに端末を懐に入れた。

「……荷物、残りもまとめちゃいましょう」

「……そうですね」

しばらくすると鶴丸が切り出し、作業を進め始めることにした。

「兄はほん……職場ではどのような様子ですか？」

「あー、これはお嬢様に申し上げていいのか……」

多少逡巡するが、多少は愚痴をこぼしてもいいか、と鶴丸は思い直す。

「先程述べた通り、かなりこき使い倒されているんですよ。お兄様はかなり真面目な方で、上の命令をたとえ無茶でも請け負って来るものですから、下々である我々は振り回されっぱなしで」

「本当に申し訳ありません……。兄は昔から、父に難しい要求を突きつけられてきまして……。多少の無茶は無茶じゃない、と周囲にもそれを強要してしまうんです。私もそうでした、夜遅くに眠いと泣いても勉強をさせられたり、礼儀作法には特に厳しかったですね」

小さい頃は兄が怖かったですね、と言う夕立に、鶴丸は少しだけ驚いた。

「それは……さぞ大変だったでしょう。大切にしているお嬢様にも無理をさせるとは」

「我が家は軍の家系ですから、それに恥じない振る舞いをするように、と言うのが兄の言葉でした。今思えば、私が生きていくのに必要なことをしっかりと叩き込んでくださったのですよね。兄は私が大切なのだ、と言うのを理解してからは、恐怖心は減りました」

にっこりと笑う顔に、確かに恐れはない。兄の愛を確かに理解しているのだろう。それから一転、夕立は表情の明度を下げる。

「それにしても……忠臣は盲目的なだけでは務まらないと言ったのは

お兄様なのに、上の方々に仕事を押し付けられているように見えるのは私だけでしょうか」

呆れの中に心配を忍ばせて、夕立は溜息をつく。

「仕事は選んでいるようですが、大量に仕事を入れてくるので……あ、いや、やりがいはありませんがね。それでももう少し休む時間が欲しいと言うのが本音です」

「兄へは一言言っておきますね……。仕事に関しては聞き入れてくださらないとは思いますが。お歳暮は、少し多めにお送りするように手配致しますね、せめて皆様へ行き届くように」

「やった！……ごほん、お嬢様は本当に優しい方ですね、あのお兄様にはもったいない」

「ふふ、正直鶴丸のような方の妹になった方が毎日楽しいのではと魔がさす時はありますね」

「厳し過ぎて、それなのに過保護だから？」

「です。でも、私は氷雨の妹。本心も分かっていますし、だからこそどうしても兄のことを心配せずにはいられないのがちよつと悔しいですね」

「やはり、あなたはいい妹だ」

雑談をしながら、荷物を段ボールに詰める。まとめ終わり、段ボールの山ができる頃には、欲に満ちた声は少し遠ざかっているように思えた。

「今のうちに外に出ましょう」

「そうですね、見つからないうちに……」

「この布を持っていても構わないでしょうか？」

「？ ええ、構いませんが……」

夕立はドアをわずかに開け、周囲を窺った。指で丸を作った後、ドアを大きく開ける。部屋から出て、警戒しながら階段に向かう。

「——みいーつけた」

その声に、夕立は固まる。鶴丸は振り返り、背後に獣の一人が不気味な笑顔で立っていることを視認すると、舌打ちし夕立を肩に抱え上げる。

「うわあっ!？」

「少しだけ耐えてください、お嬢様！」

そう言つて、地面を蹴った。夕立は慌てて鶴丸にしがみつく。背筋も凍りそうな笑い声を振り切つて階段を飛び下り、玄関ホールまで急ぐ。

「いた！ 明王寺の部屋にいたのね!？」

「くそ、逃すかあ!？」

獣達は次々と手を伸ばし、鶴丸を捕らえようとする。その手を振り切り、校門を目指す。

悲鳴と怒号をかき分けて、校門を見据える。あと少しだ、と言うところデズン、と目の前にゴリラじみた獣が立ちはだかった。

「逃がさない、イケメンは絶対に逃がさない……!？」

ひいっと肩から悲鳴が聞こえる。背後から獣が迫る音もする。

鶴丸は懐から布を取り出し、目の前の獣に被せた。当然、獣は視界を遮られ、動けなくなる。その横を大きく迂回し、鶴丸は校門の外へと飛び出した。待てええ、と唸る声は当然無視した。

しばらく走り、大通りに出て人目が多くなったことを確認して、ようやく鶴丸は肩から夕立を下ろした。

「……」

「……あの、もう演技はいいですよ……お疲れ様でした」

「ありがとう。……もう女子校はうんざりだ!!」

髪を乱した鶴丸は全力の絶叫を響き渡らせる。周囲の人の目が少し痛い、叫びたかったのだから仕方ない。

早く部隊と合流しようと言う鶴丸の言葉に、夕立は力なく頷いた。

5—5 「失踪」

一期が滑^レ園に来るのはこれで三回目。一期は江雪と共に門を開ける。すると、一斉に子供達が集まってきた。

「江雪さん！ 一期さん！」

「なあなあ江雪、サッカーして遊ぼうぜ！」

「二期、キャッチボールしたい！」

今回は、男子が中心となっていた。少し避けられていたと思っていた一期は驚く。

江雪は男子に尋ねた。

「……今日は、女の子達は？」

「女子は今体力テスト中！ 俺達は終わったから遊んでるんだ！」

「そうですか。体力検査、良い結果だといいですね」

「俺、持久走のタイム縮んだ！」

「俺は落ちちやっただよなあ……。前より絶対体育きつくなるだろこれ……」

江雪の周りにも、男子が集まっている。今日は体力テストの日だったようで、男子は皆一様に体操着だ。それは一期の周りを囲む男子も例外ではない。

「なあ一期、あのサクヤをどうやって手懐けたんだ？」

「あいつ外には滅多に出てこないんだよ。それなのに体力テストでは優秀なんだから悔しくて！」

「ソメゴローとも話してたよな。あいつ結構一期さんに懐いてたよなあ」

一期に向けられるのは、サクヤとソメゴローが少し懐いたことへの質問だ。そうは言っても、一期は自分の兄弟の話をしただけだったのだが。

輪の外側に、いつの間にかソメゴローが現れて言う。

「別に懐いてねーよ！ お前ら変なこと言うなよ！」

「あつ、ソメゴロー」

「前一期が来た時に引っ付いてたの見てたらそんなこと言えないよ

なあ？」

「一期さんいい人だもんなんー。遊んでももらいたい気持ちも分かるよ」

「だから違う！俺はサクヤが心配でだなあ！」

男子がソメゴローをからかって、ソメゴローはそれを真つ赤な顔で否定している。微笑ましい光景が目の前で繰り広げられていたが、男子の一人が一期の裾を掴む。

「ねえ一期さん、また兄弟の話して！」

「私は構わないけど、他の皆はいいのかい？」

「アツシとヤゲンとナマスオの武勇伝、途中だったじゃん！」

「ぶ、武勇伝？ いやあれはただの悪乗り——」

「マエダとヒラノが似過ぎてあるじって人が困った話もしてたよねー？」

そう、前回訪れてソメゴローとサクヤに兄弟の話をした時、二人の笑い声につられたのか、周りに女子だけでなく男子も集まってきたのだ。もっともつととせがまれるままに兄弟の話をしていたら、いつの間にか男子達に懐かれていた。何故だろうか、と言う疑問には、江雪が答えてくれた。

「多分、あなたの語る様が慈愛に満ちていたからだと思いますよ。彼らはあなたの愛に溢れた語りを聞いたことで、『とつつきにくい王子』から『優しい、一緒に遊んでくれるお兄さん』と言う印象になったのではないでしようか」

なるほど、と思った。弟達に接するように振る舞っていたつもりだったが、弟達より幼い彼らは一緒に泥まみれになってくれる大人の方が好きなのかもしれない。それに、孤児と言うのも関係しているのかもしれない。慈愛に満ちた語り様が彼らの琴線に触れたのだろうか。例外もあるため、断定はできないが。

「ソメゴロー君、そういえばサクヤ君はどうしたんだい？」

「いつも通り、図書室にいるぜ。……そう言えばあいつ、今日は元気なかつたなあ。体力テスト、悪くなかつたと思うんだけど」

サクヤがそんなことで落ち込むかなあ、とソメゴローは首をひねる。そうだ、と彼は飛び跳ねる様にした。

「サクヤも呼んでくる！ 一期、まだ話し始めるなよ、絶対だぞ！」
「あつ、ちよつ」

制止する間も無く、ソメゴローは棟内に駆け込んだ。しばらくして、スギハラを引き連れて戻ってきた。輪の中にいた男子がスギハラに声をかける。

「先生！ 先生も一緒に一期の話を——」
「皆、サクヤ君がどこに行つたか知らない!？」

焦燥を隠せないスギハラの様子に、男子達は固まる。ソメゴローも顔から血の気が引いている。

異常を感じ取った江雪も、スギハラの近くに来る。

「スギハラさん、サクヤ君がどうしましたか」

「体力テストのことで、サクヤ君に話をしようと思ったのですが……
図書室に、サクヤ君がいなかったんです」

「……俺の部屋にもいなかった。なあ、お前ら、サクヤがどこに行つたか心当たりないか」

男子達は、顔を見合わせる。知ってる？ 知らない。そんなやり取りだけが行き来する。焦れたソメゴローは声を荒らげる。

「くそっ！ サクヤ、俺に何も言わずにどこ行つたんだよ！」

「あ、あの」

男子の一人が恐る恐る手をあげる。ギュン、と首をひねり、ソメゴローは彼に詰め寄る。

「なんだ、何か心当たりがあるのか!？」

「ひっ……！ え、えつと、昨日、僕、夜にトイレに起きたんだ。そして、応接室から声がして……」

「それがなんだって言うんだよ!？」

「あうつ、それが、なんか大人の男の人と女の人が、施設長と話してて、それが」

「それが!？」

「——サクヤ君のことだったんだ」

場が、静まり返る。スギハラが、呆然と言葉を発した。

「……まさか、あの子、話を」

「どういうことですか？」

「……その男性と女性は、サクヤ君の父の両親です。現世で暮らしていらつしやつたのですが、昨日突然訪れて『息子を引き取る』と……急な話だったので検討する、ということでお帰り願ったのですが……コタロー君が起きてて、心当たりがあるってことは——」

「——サクヤも一緒だったんだな、コタロー？」

男子——コタローは頷く。スギハラは頭を抱えて崩れ落ちる。

「よりによって、サクヤ君が話を聞いていたなんて……！」

「それで、サクヤ君は何故失踪を……」

「サクヤ君、言ってた」

コタローが言葉を紡ぐ。ソメゴローが、コタローをじつと見ていた。

『今更、なんだっていうんだ』って。『捨てたくせに、必要になったから引き取る？ 最低だな』って」

「あいつ、まさか……！」

ソメゴローが目を見開く。江雪が尋ねる。

「行き先に、心当たりが？」

「あいつ、言いたいことは言わなきゃ納得しない性格なんだ。捨てた親にも、自分の口から断らなきゃ我慢できないと思う。だとしたら行き先は——」

ソメゴローは息を吸い、告げた。

「——現世の、親のところだ」

しん、と一瞬、静寂に包まれる。スギハラは悲痛な叫びを上げ、静寂を切り裂いた。

「そんな、一人で現世になんて……！」

「しかし、現世に行く手段は限られているはず。現世に繋がる門は、政府が厳重に管理しています。多分、すぐに追い返されて帰って……」

「……いえ」

江雪の言葉を、一期が遮る。彼は、春光隊とのやり取りを思い返して、慎重に言葉を選ぶ。

「時空の乱れがある場所では、時空の裂け目に触れるだけで、現世に飛ばされることがあると聞きます。もし、サクヤ君がそれを知っていたら——」

「……失念していました。それがありませんでしたね」

「時空の裂け目がある場所って……まさか、町の境目!?!」

一期は例の森を想像していたが、それ以外にも裂け目が現れる場所があるようだ。一期の知識の欠けを補足するように、江雪はスギハラに話す。

「町の境目は、大きな裂け目が発生しやすいです。それこそ、そこから敵が現れたらひとたまりもないような。少年一人なら、簡単に痕跡も残さずに通してしまうでしょうね」

「至急、職員総出で捜索します!」

「私達も捜索に加わりませう。子供達を施設内から出さない様に——」

ガシャン、と金属音が響く。はつと振り向けば、ソメゴローが門の外へ出て、駆け出す後ろ姿が見えた。

「ソメゴロー君!」

スギハラが悲痛な叫び声を上げ、後を追わんとする。それを、一期と江雪が制した。

「私達がソメゴロー君を追います! スギハラさんは子供達を中に——」

一期と江雪が門の外へ向かう。スギハラは二振りの後ろ姿を呆然と見送った後、不安そうな子供達の視線に気づき、急いで棟内への誘導を始めた。

5—6 「時空の裂け目」

「よーし、こっちは異常なし。そっちはどう?」

「こちらも異常ありません。鶯丸様、そちらは?」

「こっちも異常はない。これでこの地点の確認は済んだな。次の地点に向かおう」

様々な景色が映り込む壁のような物を点検した後、雲霄の鶯丸は他の面々に向かつて声をあげた。

ここは所謂、時空の境目である。境目に触れれば現世と、過去と、あるいは他の城下町に繋がることもある場所だ。だが、普通に境目に触れるだけでは思うような場所に行くことはできない。行きたい場所に行くには、ころころと変わる時空間座標を確認してから行かなければならない。そうでなければ、時空の隙間に入り込むか、とんでもない時代に飛ばされてしまう。

また、境目には様々な時間軸が映る。ある人物が何かをしなくても変わってしまうのが歴史だ、それはもう多種多様な景色が現れる。境目の調査に普通の本丸が関わらないのは、違う歴史を見て心を動かさないように振る舞えるものが少ないからだ。その点において、雲霄隊の刀達は過去——己の『物語』——を見直し更なる境地に達した『極』と呼ばれるランクの刀剣男士と同じ境地にいるのかもしれない。

「しかし、似ているようで少しずつ異なっているというのは、中々に興味深いものであるな!」

「そうだな。風が吹けば桶屋が儲かる……ではないが、やはり些細な何かが起こるだけでも歴史はこうも変わるものなのだな」

「ある程度の変化は問題ないと見なされているんですよね。やはりこの国が乱れている時間軸には時間逆行軍がいる、と見ていいんでしょうか」

鶯丸の少し後ろを歩きながら、山伏国広と蜻蛉切、平野藤四郎が語り合っている。鶯丸はあまり細かいことを気にする性質ではない。敵が現れたら斬らなければならぬ、そしてできればそんなことはせ

ずに茶を飲んでいたい、それが鶯丸の思考を占めていた。時間軸についてだとか歴史の細かいずれだとかは、あまり興味を持ってない。

小難しい思考を消し去るように鶯丸は振り返って、違和感を探す。その先には、物吉貞宗がいた。

「物吉。疲れていないか？」

「はい、鶯丸さん。ボクは大丈夫です」

にっこりと笑うその顔には、確かに疲労の色は滲んでいない。そうか、と鶯丸が返せば、加州が話に入ってくる。

「俺もう疲れたー。大体戦闘以外での細かい計算とか、俺達には酷なんじゃないの？」

「あはは。確かにそうかもしれないですね。ボクも計算とか、機械には強くありませんから」

「だよなあ。……あ、そうだ物吉。俺のポンコツ時空座標指定装置、例の奴に直すように頼んでももらえない？ 何かまた画面が変でさー」

「分かりました、頼んでおきますね」

「新品のはずなのに調子が悪いのか？ 元から不良品だったんじゃないだろうな」

「うわ、そうだったら最悪。あの会社、前も欠陥品出して回収騒ぎ起こしてたよなあ」

鶯丸が出した最悪の想定にげんなりした表情から一転、加州は神妙な表情で物吉に問いかけた。

「……ねえ物吉、例の機械に強い奴、まだ俺達に会いたがらない？」

散々世話になってるのに、礼の一つも直接言えないの、何だか気が収まらなくて」

物吉は首を振り、答えた。

「まだ会ってくれないと思います。相変わらず、ボクからの依頼ってことにしないと請け負ってもらえなくて」

「そっか」

俯く加州に、ええと、ええと、と口に出した後、元気づけるようにぐっと両手を握り物吉は行った。

「でも、少しづつ……こう、柔らかくなっているとは思うんです。だか

ら多分、もうしばらくくしたら、きっと加州さんからの依頼でも受けてくれると思います！」

「会ってくれなきや意味ないじゃん！」

「大丈夫です、お中元なら受け取ってくれますよ！」

「何が大丈夫!? って言うかそれ仮定だよな、そもそも依頼も受けてくれるか分からないんだよな!」

「ガザニアのマカロンがボク的にはオススメです！」

「ああもうこの子話聞いてない！」

わーわー騒ぐ加州と物吉を、温かい目で見守る鶯丸。後ろを歩く三振りも、優しい眼差しを向けている。

そうして余所見をして歩いたせいだろう、鶯丸は急にぶつかってきた何かを避けられなかった。

「っとー！」

「うわあー！」

弾けたように、後ろに下がる。ぶつかったのは、胸の下あたり。そう見当をつけて見おろすと、十歳前後の少年が地面に手をついていた。

「いつてえ……!」

「鶯丸殿、ご無事か？」

「俺は何ともない。すまなかつた少年、大丈夫か？」

鶯丸が山伏に返答し少年に手を差し伸べると、少年はその手を取らずに立ち上がり、ぶすつとした顔を向けた。

「……大丈夫だよ、これくらい。こんなん泣くようなガキじゃねえし」

「そうか。なかなか強く打ったように見えたが、それなら良かった」
十分子供に見えるが、本人が大丈夫と言えば大丈夫なのだろう。すると、後ろから加州が顔を出す。

「ちよつとちびすけ、そつちだつて余所見してぶつかったみたいだけど、鶯丸に謝ったの？」

「う……っ」

「鶯丸だつて痛かつたはずだよ。だけど言うべきことは言った。……」

ちびすけ、お前は言えないの?」

加州からの圧にぐつと詰まった少年は、視線を左右に彷徨させた後に頭を軽く下げた。

「……ゴメンナサイ」

「態度がなつちやいないけど、謝れただけ上等か」

加州はふう、と息をつく。それを見て、恐る恐る少年は問う。

「……ぶたないの?」

「言葉で済むならそれでいいんだよ。ちびすけ、お前ぶってほしかったの?」

「違う、けど……」

もじもじする少年に、鶯丸は目線を合わせて話し始めた。

「少年、俺達はただ『子供がぶつかった』と言うそれだけの理由で簡単に罰を与えていい存在じゃない」

「どういうこと?」

「俺達は下のもの達にどんな罰でも与えることができる。ただぶつかっただけで罰を与えては、下のもの達を動けなくさせる。それだけじゃない、下手したら動けなくなった分、溜まった感情が爆発する可能性だってあるんだ。その感情を向けられるのは俺達だ」

「えーつと……?」

疑問符を浮かべる少年の頭に手を乗せて、鶯丸は微笑み語り続ける。

「下のもの達を鬱屈させない、そして然るべき時にはきちんと罰を与えることが、この世界の釣り合いを保つことになる。そして、その然るべき時は今じゃないんだ」

「うーん……?」

「つまりは、俺達は平和主義だと言うことだ。長々と話したが、結論はそういうことだ」

「喧嘩、嫌いなのか?」

「そうだな、できる限り平和な方がいいと俺は思う」

「ふーん」

鶯丸の言葉に、少年はニツと笑う。

「先生が言ってたな。『偉い人達はバランスをうまく取れるから偉いんだ』って。偉い人って大変なんだな」

「分かってもらえて何よりだ」

くしやり、と少年の頭を撫でる。少年は一瞬目を見開き、ニヒヒ、と笑みをこぼした。

「カカカカカ！ 拙僧らを相手にして堂々と振る舞えるその様、少年よ、将来は大物になるな！」

「全くだ。将来が楽しみだな」

「不敬ですよ、と言いたいところですが……鶯丸様に免じて、よしとしましょう」

場が緩やかな空気に包まれる。それは少年のハツとした様子に破られた。

「そうだ、サクヤ！」

「どうした少年、急に慌てて」

駆け出そうとした少年に声を掛ける。少年は立ち止まって、鶯丸達に振り返る。

「なあ、あんたらサクヤ知らないか？ 俺より背の低い、ツンツン頭の！」

「うむ、拙僧は見なかったな」

「そうですね、そのような子供は見かけませんでした」

もどかしさのままに再び駆け出そうとする少年を、蜻蛉切が制止させる。

「待て、大人にこの辺りは近寄るなど言われなかったか？」

「言われたけど、サクヤがこつちに来たって聞いたんだ！」

「この辺りは違う場所に飛ばされかねない危険な場所だ。サクヤは俺達を探すから、お前は家に帰った方が良い」

「でも、あんたらはサクヤがどんな奴か知らないだろ!？」

「詳しく話してもらえれば、俺達が必ず見つける。家まで送るから、できる限りもうここには近づくな」

「でも、うーっ、サクヤあ……!」

地団駄を踏みながら涙を滲ませる少年。齒を食いしばっているが、

涙がぼろぼろ落ちてくる。そうして、最初に折れたのは加州だった。
「……仕方ない。確かに俺達はサクヤがどんな奴なのか知らないし、
万が一別の場所に飛ばされたりしていたら大変だ。少年、サクヤがど
んな奴か、どんな行動するか話して」

「加州、いいのか？」

「知ってる奴が一緒の方がいいでしょ。それに、放っておくとこいつ
一人でこの辺り探しそうだし。少年、一緒に探してやるから、俺達か
ら絶対に離れるなよ」

「……わかった！」

少年は涙を拭って大きく頷く。そういえば、と平野が尋ねた。

「あなたの名前を聞いていませんでしたね。何とお呼びすれば良いで
しょうか？」

「そうだった、俺は——」

「——ソメゴロー君！」

通る声が遠くから響く。声を聞いた少年は鶯丸の後ろにさっと隠
れた。すぐに声の主は現れた——一期一振と江雪左文字だ。

「やっと思つけた……！ 先生が心配してましたよ、ソメゴロー君。

滑レ園に戻りましょう」

「やだ！ サクヤを見つけるまで俺は帰らないぞ！」

「この辺りは危ないと言っていたのを聞いていなかった訳じゃないだ
ろう？ ここは先生達に任せて——」

「やだ！ 俺が自分の目で見つけるんだ！」

少年——ソメゴローは、鶯丸の後ろで二振りを睨みつけていた。一
期と江雪、そして少年という組み合わせに鶯丸が納得の言葉をかけ
た。

「そうか、少年は滑レ園の子だったか」

「あなたは……雲霄の鶯丸殿、ですか？」

「そうだ。偶然だな、蒼穹の一期、清澄の江雪」

「すみません、慌てていて挨拶を忘れていました」

一期と江雪が一礼する。後ろから加州がひらりと手を振った。

「堅くならないでいいよ、緊急時なんでしょ？ 二振りはこの子……」

ソメゴローだっけ、を探しに来たんだと思うんだけど」

「そうです。ソメゴロー君、園に」

「帰らないぞー！」

鶯丸の裾を掴んで離さないソメゴローを見て、加州は溜息を一つ吐いた。

「……まあ、こいつも頑固でさ。俺達が一緒に友達を探し出すことにしたんだよね。放つといたら一人で探しそうだし、俺達こいつの友達のこと全く知らないし」

「……ですが、いいのですか?」

「友が困っていたらできる限り助けるのが当然だ。江雪、お前は滑園の子を大層可愛がっているだろう? なら、その子が困っているのを助けたいと思うのも当然だ」

「……わかりました、お願い致します」

江雪が改めて鶯丸達に一礼する。ソメゴローが不安げに江雪を見上げた。

「……俺、サクヤ探しの班にいていいの?」

「このままあなたを帰すのも心配です。あなたは独断で行動しましたからね。……それに、あなたがサクヤ君を説得するのが一番いいと判断したのです」

「江雪……」

「説得の仕事、しつかり果たしてもらいますからね」

「もちろんだー！」

しつかりと目を見て、ソメゴローは答えた。

*

「しかし、一体どこに行ったのかねえ、サクヤって子は」

加州が時空座標指定装置を手にした。これは時間遡行の際に時間と場所を指定するのが主となる装置だ。それ以外にも時空の裂け目に反応する機能も搭載されており、現在はそれを使用しサクヤがいる場所をしらみつぶしに探している。だが、成果はよろしくない。

「もしかしたら、既に現世に飛ばされている可能性もあるな」

「想像したくありませんね……」

蜻蛉切と平野も時空座標指定装置を手に探している。一期と江雪は、サクヤの痕跡を基に搜索している。

「足跡があまり残っていませんね……」

「時空の裂け目を探すしかないのでしょうか……」

装置を持つていない二振りは、あまり戦力になっていない。そんな二振りの肩を、山伏が叩いた。

「カカカカカ！ 暗い顔をしなさるな！ 装置だけでは細かい裂け目を感じできません！ それを探してもらおうだけでも拙僧はともありがたい！」

「……そうですね、頑張りましょう」

一期が応えた途端に、幼い悲鳴がかすかに聞こえた。その場にいた全員が顔をあげる。

「聞こえたか!？」

「はい！ あちらの方から!」

平野が指差した方向は、木の生い茂る場所だった。恐らく、『森』と繋がる場所であろう。平野が先導し、声の元を辿る。

果たして、そこにサクヤはいた。しかし、いて欲しくないものも同時にあった。

「——時間逆行軍!？」

サクヤは、時間逆行軍の太刀に追い詰められていた。一期の鋭い声に反応して、サクヤはこちらを向く。

「な、あ、逃げ……!」

平野は飛び上がり太刀の腕を切りつけ、怯ませる。鶯丸が胴体を二つに分ければ、太刀は跡形もなく消滅した。

「サクヤ!」

ソメゴローがサクヤに駆け寄る。傷がないのを確認し、ほう、と息を吐いた。

「怪我が無くて良かった……!」

「……なんでここにいるの、ソメゴロー」

「心配してここに来たに決まってるだろ!」

サクヤはばつが悪そうに俯く。ソメゴローは続ける。

「早く帰ろう、ここは危険なんだ！」

「……危険なのは分かっている、でも」

「でも、なんだよ！」

「俺は……あのクソ親共に一言言わなきゃ気が済まない。なんで今更、俺はあいつらの道具じゃないって。俺は、お前らがいなくても生きていけるって」

サクヤは拳を握る。地面に手をついているため、土まみれだ。ソメゴローは苦い顔をしながらも、言葉を紡げない。

ピキ、とヒビが入る音がした。音の方向をソメゴローが見ると、少しずつ、空間に穴が開き始めた。

「——なんだあれ!？」

雲霄隊、江雪、一期はヒビを視認した。

時空の裂け目が生じたのだ。

それは大きく口を広げて、その場にいたものを飲み込んでいく。避けようとしても、お構い無しに。

ソメゴローはサクヤの手を取り逃げようとしたが、サクヤはその場から動こうとしない。目的を考えれば当然のことではあるが、驚愕で動けないと言うのもあるだろう。

次々とその場のものを飲み込んだ裂け目は、最後に加州を飲み込まんとする。

「時空座標指定、完了! ——上手くいつてくれよ……!」

裂け目は加州を飲み込み、その穴を閉じた。

5—7 「分断」

「いやあ、ここのはんばーぐ美味しいねえ！」

「おむらいすもなかなか美味だよ。ここは当たりだったねえ」

「酒が飲めないのが残念だがなあ」

「口の中で……肉がとろける……」

「焼肉も美味しいですね。なんでこんなに美味しいのに人がいないのでしょうか」

「隠れ家のように運営しているからだろう。……夕立様、いかがですか?」

「とっても美味しいです! 値段が安いのも驚きですよねえ」

氷雨の調査部隊は、人があまり来ない店、と言う選択基準で決めた店にて昼食をとっていた。人の良い店主にコック二人、若いウエイトレスも二人と小規模な店だったが、お嬢様である夕立を満足させる程に美味であった。

全員が食器を置いたのを確認し、長谷部が切り出した。

「さて。夕立様の転居準備が完了し、後は荷物が本丸に届くのを待つのみとなった。しかし油断するな。あと少し、と言う気が緩みかけたところで敵は襲撃してくる。各員、最後まで気を引き締めてかかるように」

「了解了解。って言っても、最後まで出て来ないような気がするけどな」

そう、ここまで敵の出現はなかった。少し不気味さを感じる程に。それでは彼女を襲ったのは一体何なのか、目的は何なのか。長谷部の眉間を突っついていても、頭を悩ませる彼は気づかない。鶴丸は突つづくのを止めてあつけらかんと告げる。

「まあそう考え詰めなさんな。俺達は妹君を最後まで守り抜けば任務達成なんだ。悩ませて太刀筋が鈍る方がまずい。とりあえずは飲み物飲んでけ」

「……貴様は考えなさ過ぎなんだ」

「おっ、そう見えるかい? だとしたら少し悲しいなあ。俺だって考

えて発言しているんだぜ？」

そろそろ勘定を、と全員が立ち上がる。会計係に堀川が立候補したので彼に任せ、他の面々は店の外に出た。

「あー、美味しかったー！」

「さて、ここからは任務だ。気を引き締めていこう」

「普段からそうしてもらえるといいんだがな」

「でも、賑やかで楽しいです！」

「……敵、現れるといいですね」

「そうだなあ。敵から少しでも収穫があればいいんだが」

話の花が咲いていると、店のドアが開いて堀川が出て来る。

「ありがとうございますー！」

「ご馳走さまでしたー！」

「随分長かったな、堀川」

「すたんぷカードで作るかって言われて作っちゃいました。はい」

堀川の手の上には、ベージュ色のカードが乗っている。スタンプは三つ押されていた。

「まあ、また来る機会があるかもしれん。それは主に渡そう」

「はい。お任せしますね」

堀川の手から長谷部の手へスタンプカードが渡る。さて、と長谷部がカードを懐に入れてから言った。

「これから夕立様を再び門まで送る。周囲への警戒は怠らないように」

「了解」

店から門のある建物まで三十分。人通りも少なくなき、そのまま歩いていけば何事も無く辿り着くはずだった。

しかし、そう上手く事は運ばなかった。

「……敵襲です！」

堀川が叫ぶ。ゲートがある建物が見えてきた頃だった。緊張が走る中、横道から時間遡行軍が現れた。敵の槍は夕立を見据えている。「人目のつかないところまで誘導しろ！一般人に見られたら事だ！」

「言われなくてもそうするさ！ 嬢ちゃん、悪いが走れるか!？」
「は、はい！」

空中から出現させた刀を抜き、鶴丸が夕立を連れて裏道に入る。槍と太刀がその後を追い、さらにその後を他の調査部隊が追う。

槍の激烈な一突きを、辛うじて避ける鶴丸。夕立を守りながら戦っているため、その動きにいつもの軽やかさはない。

「……悪いな、嬢ちゃん。囧にしちまって」

「構いませぬ。覚悟の上ですから。それに、鶴丸達は強いと分かっています。察での身のこなしを見ていましたから、あなたを信頼しているのです」

「ははっ。本当主にはもったいない妹君だ！」

槍の突きをいなしつつも、軽口を叩く。気をそらしていたのを察してか、鋭い突きが襲いかかろうとした。しかし、不意に槍の動きが止まった。と思うと前に崩れ落ち、槍は砂のように消えた。

「あーもー！ ここ狭くて思うように暴れられないよ！ 酔いも醒めてくるし、調子悪い！」

「次郎、助かった！」

「お礼は白檀屋の焼酎でよろしく！」

苛立ちを滲ませながらも次郎太刀は構え直す。

青江は大太刀の斬撃を、軽い身のこなしでかわしている。堀川が突き出された槍の柄に降りると、敵の頭を一閃する。長谷部は打刀としてのぎを削り合っていた。

太刀と切り結んでいる小夜が、ふと感じた違和感を漏らす。

「……おかしいです。敵が、本気を出しているようには見えません」

「……小夜坊も感じたか。何か他に狙いがあるのかね」

「待ってください。今、表通りに敵が——」

堀川が表通りへ駆ける。数泊して鋭い声が事態を告げた。

「敵短刀、恐らくは苦無、『町』に繋がる建物の門前に数体！ 入口の警備員が押されています！」

「——敵の目的は『町』への侵入か！ だとしたら——」

長谷部が打刀を叩き斬ると、その場にいる全員に告げた。

「こいつらは陽動だ！ 相手にするのは止めだ、門へ向かって侵入を防ぐぞ！」

「了解！」

調査部隊は攻撃をいなして表通りへ。ざわめく人波に逆らい表通りを駆け抜ける。

敵の撃つ弾丸を避けながらも門前に到着した時には、警備員は虫の息だった。

「全く、ひどい真似をするね」

「救急班には連絡を入れました。後は中に入った苦無です」

壊された門を通り、苦無を追う。青江と小夜が建物内に入るのに続こうとする調査部隊だったが、それを察してか建物内の苦無が甲高い耳障りな音を出した。

駆ける部隊に、上空から銃弾の雨が降る。それに気を取られていると、建物入口のシャッターが閉まった。

「チツ！ 分断されたか！」

「小夜、青江、大丈夫かい!？」

次郎太刀が中の二振りに声をかける。中からは、剣戟の音と共に青江の声が返ってきた。

「僕達はまだ大丈夫だ！ それよりも、外からかなり多くの気配がするけど——」

「——ああ、そうだね。アタシたちもやられた」

何体もの時間遡行軍が、地面に降り立つ。総数およそ五十。強い禍々しさを纏った槍も多く見られた。

鶴丸は、背後に立つ夕立を見やる。夕立は悪夢を見ているかのよう
に、恐怖を露わにしていた。

「いつてえ……！」

「た………ソメゴロー、大丈夫？」

「ん………ここは……？」

「……」

清澄の江雪は意識を浮上させる。そこには、ソメゴロー、加州、鶯

丸、物吉がいた。

ここはどこだろう。確かサクヤを見つけた直後に、裂け目に飲み込まれたはずだ。話では、あらぬところに飛ばされると聞いていたが。

周囲を見回す。四方を壁に囲まれ、正面の壁にドア、背後の壁にホワイトボード、中央に長机と椅子が数脚ある、さほど大きくない部屋だ。

「……………ここは、いつの、どこです」

「二二〇六年、十月四日。……多分、時の政府の施設内」

加州が、手元の時空座標指定装置を確認すると、大きく息を吐いた。

「あーっ！ 面倒な手間はかかるけど、大昔に飛ばされるなんてことにならなくて良かったー！ よくやった、俺の時空座標指定装置！」

「加州、あなたが何かしたのですか？」

「裂け目を認識した途端に、時空座標指定を行っただろう。裂け目に干渉して、飛ばされる先を決めさせたんだな」

鶯丸が説明する。時空座標指定装置は時間遡行装置と共に使用し、時空を干渉して過去へ遡る。時間遡行装置の代用を裂け目に行わせ、指定した場所へ遡行する。それが加州の行った手段だ。

これは時空の流れに上手く干渉できなければ、どうなるか分からない危険な方法だ。当然、一か八かの勝負だったのだが――。

「ああああよっしやああああ！ ポンコツなんて言っでごめん！ 愛してるよ俺の時空座標指定装置！ 絶対に修理してもらおうな！

そんで最後まで使ってやるからなあ!!」

「……………江雪、カシユー？ がすげえ怖い。何で機械に頼りしてんの……………」

「耐えてください、ソメゴロー君。彼らはそれだけのことを成し遂げたのです」

「彼ら……………」

「髪を振り乱して騒ぐなんて、うちの加州は滅多にしないからなあ。よっぽど上手くいったことが嬉しかったんだろう」

加州、戻ってこーい。鶯丸がそう声をかけると、加州ははっとして表情と思考を切り替えた。

「えっと、ここにいるのは四振りと一人か……残りはどこに飛ばされたんだろう」

「……時の政府の施設なら、説明すればある程度は協力していただけるでしょう。まずはここがどこかはつきりさせるのが最初でしょう」
「そうだね」

加州は、きよろきよろと何かを探す。

「……えーっと、物吉？ どこ？」

「ただいま戻りました」

ガチャリと、部屋のドアが開く。それに驚いた加州は飛び上がり、壁に思い切り頭をぶつけた。

「うっわあつびっくりしたあつてか痛い！ 物吉どこ行つてたの!？」

「あー、久々にぐさつと……えーと、とりあえずこの建物の情報を集めて来たんですけど」

物吉がそう言うのと、一斉に彼へ賛辞の言葉が贈られる。

「おおー、物吉優秀！」

「この短時間でよくも……凄いですね」

「すまない、出て行ったことに気づかなくて。よくやったな」

「影薄い兄ちゃんすげー！」

「あはは……後で長谷部さんに話聞いてもらおう……」

物吉は複雑な顔をしつつも、全員に情報共有を始めた。

「ここは、『町』と現世を繋ぐゲートがある建物のようです。場所は丹頂女学院駅の近くですね」

「丹女って、確か氷雨隊の審神者の妹さんが通ってるって言う？」

「そうですね。現世でのこの日は確か、妹さんが現世から『町』へ帰る日のはずですよ」

こちらの本陣が特定されないように、『町』の時空座標もころころと変わる。現世でのゲートをくぐってはいいおしまい、ではない。戻るためには『町』の時空座標を指定する時間もあるのだ。物吉が言うことはつまり。

「上手く氷雨隊に合流できれば、待ち時間短く『町』に帰れるな」
「だね」

鶯丸の言葉に加州が頷く。

「多分、他の奴らもそう遠くない場所にいるはずだ。ここを出て全員と合流しよう」

「わかった」

「はい」

「……わかりました」

「なんかよく分かんないけど分かった!」

ドアを開けて部屋の外へ出る。すると、どこからか鉄のぶつかる音がした。

「物吉、さつきこんな音してた?」

「いえ、全く。……刀剣男士がいるかもしれない、行ってみましよう」

静かに、階下に降りる。金属音は、階を降りる度に大きくなっていった。

一階に降り立った途端に、声と剣の音がはつきりと耳に入った。

「くっ……しぶといねえ……!」

「せめて、こいつらを倒せば……!」

声の主は、につきり青江と小夜左文字。氷雨隊の刀剣達で確定だろう。

声の元に向かうと、そこはこの建物の入口と見受けられた。彼らが戦っている相手は。

「——嘘だろ、苦無……!?!」

雲霄隊でも難敵と認定している、短刀・苦無。五振りの苦無は、着実に青江と小夜にダメージを与えている。

入口はシャッターが閉まっており、開く気配がない。このままでは、二振りが折れる。

「三振り共、用意はいい?」

「ああ。盾兵の刀装は三つある。江雪、二つやるから援護を頼む」

「……すみません、このような事態は想定しておらず」

「普通の部隊は、想定する方が難しいですよ」

「な、なあ、俺は? あと、あの兄ちゃん達怪我いっぱいしてるけど、

皆は大丈夫なのか？」

ソメゴローが不安げに四振り我问う。江雪が、その頭を優しく撫でた。

「大丈夫、私達は必ず生きて帰ります。ソメゴロー君は、大人の人に鎧戸を開けるように伝えてください」

「……でも、あの兄ちゃん達、強そうなのに傷だらけだ。警備員さん呼んできた方がいいんじゃない——」

「……だめです。普通の人間ではあれに太刀打ちできない」

ソメゴローが見上げると、眉間にしわを寄せ、口をきつく結ぶ江雪の顔が目映った。

「あの敵は、私達が必ず倒します。あなたは彼らが折れないように、あなただけにできることをしてください。……さあ早く！」

江雪が発した強い言葉に驚きつつも、ソメゴローは走り出す。姿が見えなくなったのを確認し、江雪は虚空から刀を出し、三振りの下に立つ。

「江雪、準備はいいか」

「はい」

鶯丸の言葉に頷く。

一步踏み出せば、苦無達がこちらを向き、青江と小夜は唐突に現れた援軍に驚愕する。

傷付いた小夜と不安を露わにしていたソメゴローを思い、江雪は怒気を発する。

「……違う隊でも、お小夜は私の弟。私は、お小夜と子供達のために戦います……！」

「——じゃ、おっ始めるぜ！」

加州の一声で、三振りは苦無へ一斉に向かって行った。

5—8 「アドバイス」

「二期さん、二期さん！」

サクヤは横たわり、魘されている二期を揺する。起きる気配はなく、さらに呻き声を上げるだけだ。サクヤは平野に告げた。

「だめだ、全然起きない」

「困りましたね……」

眉根を寄せて目を閉じたきりである他隊の長兄に、平野は案じるように口元に指を当てる。

現在ここにいるのは、サクヤと平野、二期。山伏と蜻蛉切は探索に向かっている。

目覚めた場所は建物の裏庭らしき場所であり、平野の言葉からさほど遠い時間に飛ばされていないことを知った。一同は、他の面子も飛ばされていないか確認するために通信を行った。しかし反応は無く、山伏と蜻蛉切がとりあえずこの建物の様子を見ようと提案したのだ。

二期は、ここに着いてから目を覚まさない。正規の時間遡行ではないため、時空圧の衝撃に耐えきれなかったのではないかと平野は推測した。サクヤが起こそうと揺すっているが、目覚める気配もないまま、現在に至る。

「戦力的に、ここでいち兄に起きて貰わないと困るのですが……」

「戦える人減っちゃうし、寝てたら動けないもんね……」

「僕は……辛うじていち兄を運べますが、それだと」

「引きずる感じになっちゃうし、平野さんが戦えないよ……俺、運動神経はいいけど戦えないし」

うーん、と悩む一人と一振り。そこに、山伏と蜻蛉切が戻って来る。

「戻ったぞ。周辺を探索したが、ここは政府の施設であると分かった。

二期はまだ目覚めないか？」

「ええ、サクヤ君が揺すっても起きる気配ありません」

「ふーむ、拙僧が主殿に教わった筋肉ばすたーとやらを試してみるか？」

「えっと、それはどういう……」

首をかしげる平野の横で、サクヤが目を見開きぎよっとする。

「一期さんを殺す気!? やめてよ!」

「心配するな! 一期殿なら多少痛んでも目覚めると信じている!」

「だから痛めつける前提なのはやめてってば!」

「——うわあああつ!!」

不穏なやり取りをするのを察知したのか、叫び声と共に一期が飛び起きる。殺人技をかけようとしたことなど感じさせない笑顔で、山伏は一期に挨拶をする。

「目覚めたか一期殿!」

「え、あ、はい。ここは一体……」

「二二〇六年十月四日の現世だ。探索の結果、ここは政府の施設であると分かったところだ。……魔されているようだったが、大丈夫か?」

蜻蛉切が、一期の体調を気にかける。一期は夢見の悪さを振り払うように首を軽く振り、蜻蛉切に笑顔を見せる。

「ええ……変な夢を見ただけです、体調に異常はありません」

「変な夢? 俺も時々見るよ」

サクヤが反応する。

「何か桜の木の下にいる夢。時々見るんだ、そういう時はあんまり無理しないようにしてる。一期さんも無理しない方がいいんじゃない?」

「……私は、暗闇の中にいる夢だったが……そうだね、無理はしないようにするよ」

一期は欠伸を押し殺して、立ち上がる。手の土を軽く払うと、山伏と蜻蛉切に問いかけた。

「時の政府の施設なら、職員に要請して今すぐ『町』に戻して貰えばいいのでは?」

「どうもそう上手くいかん様だな。本刃証明、異常検査、飛ばされた時の状況説明など様々な手間がかかるらしい。本刃証明については、一期殿が難関であるな」

「時間と手間がかかると言う訳ですか……」

「まあそんな訳で、職員に面接をしたいと言われている。とりあえず施設の中に――」

ぴくり、とサクヤが身を竦める。

「……ねえ、何か近づいて来てない？」

怯えた少年の様子に、その場にいたものが抜刀し身構える。

平野が鋭く叫んだ。

「――サクヤ君の後ろからです！」

そう告げて、平野がサクヤの背後へ駆け出す。

現れた太刀の懐に飛び込んで、平野はその胸に己の刀身を突き刺す。深く抉って抜き取れば、太刀は崩れ風にさらわれて消えた。

平野は背後へ飛び退く。平野がいた場所に、敵の槍の鋒が現れる。

平野を見据えていた敵の槍から、いつの間にか刃が飛び出していた。蜻蛉切は敵槍を振り上げると、遠くの大太刀に向けて飛ばした。

目の前の大太刀が怯んだのを見逃す山伏ではない。刀を持つ手を切り落とし、首を飛ばす。大太刀と槍は、砂となり消滅する。

一期は、サクヤを守りつつも打刀を相手取っていた。流石に打刀相手には押し負けなくなったが、それでも身体中に小さな傷が散乱している。

「二期さん、大丈夫？」

震え声で、サクヤが問う。一期は打刀を袈裟懸けに切った後、優しく答えた。

「大丈夫。私は強いからね。それに、私より強いもの達がこの場にはいるからね。心配することは何もない」

「本当に？」

泣きそうな声に気がついて、一期はサクヤの方を向く。

「俺が、勝手に抜け出したりしたから、だからこんなことになって、ごめんなさい、俺が、俺が」

「サクヤ君……」

「一人で平気だって、大丈夫なんだって、そう思ってた。思い込んでた。だから、断りに行くのも自分だけで平気だって」

「サクヤ君」

「でも、違つたんだ。俺は一人じゃ何もできない。一人で生きてなんていけない！　こんな、こんなに色んな人に迷惑かけて、どんな顔で先生やソメゴローに会えばいいか分からないよ……！」

「サクヤ君！」

一期が、サクヤの声を遮る。はあ、と荒い息を吐き、サクヤは一期を見上げる。

「……一人で生きることと、一人でできることは、同じ物ではないことを先に言っておこう。君は、一人で生きていけると思ったけれど、違つたと悟つた。それにその年頃で到達したのは、素晴らしいことだ。けれど」

一期は、言葉を選んで話し始めた。

「二人では何もできないと言うのは、違つと私は思うよ。どんな偉人でも、国を統治するのにたつた一人では不可能……と言うと、規模が大きいかな。でも」

敵の襲撃は、少し落ち着いている様だ。納刀はせずに、周囲を警戒し続ける。

「上に立つ者が様々な役割を上手く割り振るのも、才能の一つだ。様々な仕事を誰かが統括しないと、途端に下は滅茶苦茶になる。そして、割り振るのが才能だとしたら、ある仕事をこなすのもまた才能だ」

サクヤは、じつと一期を見つめている。

「君は、様々な知識を身に付けている様だね。その知識で、人を支えることもできるはずだ。何もできないんじゃない、君の役割が違うんだ。一人で何もできないと思つてを放棄するのは、ただの依存だ。その点から問おう、君はどうなりたい？」

一期は——少なくとも個体差として——自分が本物の子供の相談に乗るのは得意ではないと感じていた。それでも自分が出せる全てを出した。サクヤは、どう返すか。

沈黙が続く。

「……俺は」

サクヤは口を開き、とめどなく自分の考えを示し始めた。

「先生みたいな優しい人になりたい」

「うん」

「ソメゴローの馬鹿を止められる位置にいたい」

「うん」

「……もつと、もつと、知識が欲しい。俺はまだ、世界を全く知らない」

「うん」

「……できれば、ソメゴローと一緒に、世界中を旅してみたいな」

「そうか」

サクヤの言葉を聞き届け、一期は彼の頭を撫でる。

「じゃあ、まずは何をしようか」

「……先生と、ソメゴローに謝る。親の説得は、多分俺にはできないな。先生に任せるよ」

「そうだね」

「それから、本だけじゃなくて、色んな人と話す様にしてみる。本じゃ、本物の他人のことは分からないから」

「うん、そうだね」

サクヤは、無邪気な笑みを浮かべて言った。

「一期さんって、やっぱりお兄さんなんだなあ」

「どうしたんだい、いきなり」

「色んなことを知ってるから。それに、何だか話してて落ち着くし」

「弟を持つ身として光栄な言葉だね」

一人と二振りは微笑み合う。和やかな雰囲気は、しかし長くは続かなかった。

「そろそろいいか？ ……表から声がする。恐らくは刀剣男士だ」

「ごめん、槍のお兄さん」

「状況はいかがでしょう？」

「あまり良くない。平野殿が偵察に向かったが、五十体程の時間遡行軍がいる様であるな」

「五十体!?!」

一期は目を見開く。一度に五十体は、六振りでは骨が折れるのではないか。

サクヤが焦った口調で言った。

「すぐに加勢に行かないと……！」

「焦つても仕方がない。個別で行つたら、それこそ各個撃破されてしまふぞ。それに、サクヤ君をどうするかが問題だ」

「あ……」

サクヤは狼狽する。戦力として数えられない自分は、足手まといだと思つたのだろう。

一期はサクヤに提案する。

「サクヤ君、あそこに窓がある。そこから平野と中に入って、職員に火急の事態を知らせてくれないか？」

「平野さん？ いいの？ 戦力が減るんじや……」

「君を一人にして何かあったら、ソメゴロー君が悲しむだろう？ それに平野は尊い方の護身刀だった。上との交渉の仕方をよく知っているから、上手いことやってくれるはずだよ」

「……分かった」

サクヤは了解する。蜻蛉切と山伏が一人と一振りを持ち上げ、窓の中に入れる。着地する音がした後に、二つの足音が遠ざかった。

「二期殿、刀装はあるか？」

「えっと、軽騎兵が一つだけです……」

「うむ、万全でないのは仕方ない。これもまた修行と思おうぞ」
カカカカ、と笑う山伏に、一期は何とか気持ちを浮上させた。

蜻蛉切が告げる。

「よし、ではこれから表の部隊を援護しに向かうぞ！」

「あい分かった、任せられよ！」

「はい！」

そうして三振り、表の戦場へと躍り出た。

「君達は、雲霄隊……？ 何でこんなところにいるんだい？」

「兄様まで……本当に、どうして」

「話は後！ こいつらをやつつけるよ！」

様子を窺っていた苦無は、素早く動いたと思うと、加州に襲いかかる。刃を受け止めている間に、小夜が胴体を切り離した。

周囲を見てみると、苦無は残り四体。恐らくここに到着する前に一体は仕留めたのだろう。しかし青江は中傷、小夜は重傷である。

早急に決着を付けねばまずい、と江雪は感じた。

「兄様、鎧戸の外に仲間がいるんだ！ 早く仕留めて、加勢しに行かないやいけないのに……！」

「かなり数が多そうだったからね。でも小夜、その傷だと加勢しに行っても折れてしまうよ。……多分、僕も」

「くっ……！ あいつらが鎧戸を閉めなければ……！」

小夜が歯噛みする。江雪は小夜に、ソメゴローの存在を告げることにした。

「……お小夜。今一緒に迷い込んだ人間が、鎧戸を開けるように交渉しに行っています。今暫しの辛抱ですよ」

「本当に!？」

「ええ。途中で物吉が職員に会いましたから、話はすぐに通じると思っています」

「そうか……なら、もう出し惜しみはいいいよね」

小夜が、毛を逆立て、力を漲らせる。

「僕の刃……受け止めてよ！」

幾重もの剣筋が、苦無を切り刻む。弧をいくつも描くそれは、憎しみに満ち溢れていた。

苦無は地に落ち、破片へと変わった。

限界を迎えた小夜が、体を横たえる。

「っ……ぐうっ」

「お疲れ様、小夜。それじゃあ僕も行くか」

小夜を奥に隠して、青江が苦無を睨む。苦無は仲間をやられた怒りなのか、真つ直ぐ青江に向かつてくる。だが。

「——どこかで見た動きだね」

痛みを抑えながらも攻撃はいなされる。青江は鋒を苦無に向けた。笑いなよ、にっかりと」

それは、無駄のない急所を突いた一撃。まともに食らった苦無は、耳障りな音を立ててバラバラになった。

青江は直後、床に膝をつく。

「——後は、頼んだよ」

そう言い残し、体が倒れそうになる。物吉がそれを受け止め、ゆっくりと床に下ろした。

「……お疲れ様でした」

「全く、簡単に押し付けてくれちゃってさー」

「そう言うな、加州。二振りもぎりぎりのところだったんだ。俺たちがここにいなかったら、どうなっていたか分からん」

「……残り二体ですね。退く気は、ありませんか」

苦無はどこにも逃げ場が無いのを悟ったのか、自棄になった様に斬りかかって来た。

加州と鶯丸が、それを受け止める。

「動きが単調になって来てる。この状態だったら、俺達の敵じゃないね」

「そうだな。敵は俺達が引き付ける。二振りは機会を逃さずに斬つてくれ」

「……無茶を言ってくれますね」

はあ、と溜息をつく江雪。しかし刀を構え直し、加州と鶯丸の動きをじつと見据える。

「オーラオーラオーア！」

「命が惜しいなら引け！」

加州が軽い身のこなしで敵を翻弄し、鶯丸が小夜と青江のガードをしつつも重い一撃で敵を退ける。

江雪は機会を窺う。そして。

——見えた！

敵が僅かな隙を見せた。江雪はそれを逃さず、一步踏み込む。

「——戦うということは、こういうことですよ！」

一気に二体を斬り伏せる。ガラガラ、と床に苦無の体が落ちる。

ふう、と息を吐き、江雪は二振りを見た。

「終わった、かな」

「そうですね」

「まだ外への援護が残っているがな」

「あーそうだったー。だるい……」

「まあまあ、そう言うな」

気が緩んだ三振り。床に座り、すっかり休養モードになってしまっている。

ガタ、と苦無の体が動き、目を光らせた。刃の先は、のんびりしている三振りだ。

「——嘘、まだ生きてたの!?!」

「しくった……!」

刃は、刀を構える間も無い三振りを斬りつける——ことはなかった。

苦無の上から、脇差が突き立てられている。

「幸運は、いつもここに……ですよー!」

物吉が、刃を滑らせ苦無を二等分に割る。苦無は、今度こそその命を散らした。

物吉は刀をしまつてから頬を膨らませる。

「皆さん、ボクのこと忘れてたでしょう? まだですって言ったのに!」

「あつ、……あーごめん! すっかり気が緩んで……!」

「悪かった、そしてよくやった、物吉」

「……気配も悟らせないとは……あなた、忍者になれるのでは」「嬉しくないですよお……」

物吉はがっくりと肩を落とす、明日は有給を取って春光隊へ行こ

う、と決意したのだった。

はあ、はあ、と荒い息が満ちていた。

斬っても斬っても斬っても、数が減らないのだ。そしてこちらは全員中傷、無傷なのは夕立のみである。

「あー……今どのくらい斬ったっけ？」

「三十体程だな。そしてその内、槍が五割」

「まだまだってことか……槍もまだ待ち受けているってのはしんどいな……」

「いや、もう少しかもしれないですよ？ だって太刀をあんなに斬ったんだし……ふふふ、槍が一体、槍が二体」

「堀川、正気を手放すな！」

長谷部が活を入れる。それでも現実が変わらない。夕立は震えながらも、何とか戦場を見渡している。次郎太刀は諦めて、刀を大きく振り回す。

「あー、どつかから援軍こないかなー！」

「次郎さんも壊れた……」

「現実逃避するな、次郎ー！」

「ははは、ここの場所を察知して援軍が来るなんて、そんな奇跡みたいなことあるわけ——」

「——あつたらどうします？」

涼やかな声が、鶴丸の耳を通る。敵の壁の向こうが、少しずつ崩れていくのが目に入った。

現れたのは、空色の髪の子。彼は鶴丸に、清廉な笑顔を向ける。

「こんにちは、鶴丸殿」

「えっ、ちよ、お前、一期？ 何でここに？」

目の前の一期は、蒼穹隊の彼であるはずだ。だが彼は、清澄の江雪と共に、滑ツル園ヰにいるはず。何がどうしてこんなところに。

一期はははは、と笑って告げる。

「色々あります。それより鶴丸殿、前から槍が」

「おおっとおー！」

鶴丸は仰け反り、槍の突きを避ける。そして返す刃で敵を沈めた。「うおおおお！ 唸れ、拙僧の筋肉！」

「近寄らせはせん！」

敵の壁の向こうで、山伏は大暴れし、蜻蛉切は確実に敵を屠っていた。少しずつ、敵の数が減っていく。

「総員、刀を構えろ！ この好機を逃すな！」

長谷部が煽りながら敵に向かう。他の隊員も刀を振るい始めた。

「大人しく吹っ飛ばされな！」

次郎太刀が剣戟の嵐を起こす。刃に触れたものは大きく斬られ、そうでないものは大きく弾き飛ばされる。

「おー、すげえなあ。……さて」

そう呟き、鶴丸が敵の視界から消える。そして。

「——遅い遅い！」

跳躍した鶴丸が、敵の首を落とす。その様は鶴のように優美で、無駄のない動きだった。

「押し切る！」

長谷部が敵を次々に切り刻んでいく。その隣に堀川が立ち、やけに守備が堅い槍を見て、言った。

「やりますか、長谷部さん」

「ああ」

そうして、二振りの力が繋がる。そのまま槍に向かって走り。

「はああっ！」

「てやー！」

二刀開眼を行った結果、堅い兵を切り捨て、本体に迫ることができた。長谷部は、露わになった体を二つに分け、己の刃に付いた血を払った。

「二期！ お陰で大分楽になった！ ……一期？」

鶴丸が一期に近付くと、彼は。

「……痛くはないな。ふふ、ははは」

近付く敵を千切っては、ではなく、斬っては投げ、斬っては投げを繰り返しているのである。——彼は、すっかり戦闘狂になっていた。

「い、一期?」

「あはははは! お覚悟!」

「……一期さん?」

「なるほど。……ふふははは!!」

「やべえ完全に我を忘れてやがる!」

一期は、まだ戦場に出て日が浅かったのだろうか。肉体を得た刀剣男士が陥りがちな『熱』に、すっかり浮かされてしまっている。敵もほぼ殲滅できた今、斬るのは残った敵の遺体である。

こうなると、それを鎮める方法は一つしかない。鶴丸は、刀を鞘に納める。

「悪い一期、後でいくらでも殴っていいから、今は許してくれ! ——
せいやあつ!」

一期の脳天に、鞘付きの刀身がヒットした。脳を思いつきり揺さぶられた一期は、当然意識を手放した。

そう、『熱』を鎮める方法は、気絶させることである。現状、これしか対処法はないのだ。

鶴丸は手を合わせてから、一期を背負う。

「……あー、何だかんだで片付いて良かったなあ。山伏、蜻蛉切、君達もありがとうな」

「カカカカカ! なかなかいい修練であったぞ!」

「無事で良かった。……長谷部殿、雲霄の隊員を見かけなかったか?」
「いや、俺達は見えていない。何かあったのか?」

「時空の裂け目に飲み込まれ、離れ離れにされてな。近くにいるはずなんだが」

シャッターが開く音がする。ガラガラと開き切ったそこに、蜻蛉切達が探していた彼らはいた。

「あー、やっと開いた。おーい、こつちー!」

「俺達の隊員も一緒だな。本当に装置には褒美をやらないといけないな」

「……何がいいのでしょう。油ですかね」

加州達が、こちらに手を振っていた。

日差しは少しずつ傾き始めている。

5—10 「夕暮れ、その闇の中で」

「いや本当にすまなかった、君の熱を鎮めるためにはあれしかなくて
だなあ……」

「かなり痛かったんですよ、あれ」

「いや無論承知だ！ 俺だって悪かったと思ってるんだ！ 今度何か
奢るから、それで手打ちにしてくれ！」

「ではがぎにあのふるーつたるとで」

「よし来た！」

『町』の入り口にて、鶴丸が一期に土下座している。先程の一件で、
一期の不快感を上げていたためだ。

それを見て、鶯丸は笑う。

「いやあ、相変わらず土下座が似合うな、鶴丸は。あんな綺麗な土下座
をする奴、そうそう見た事がない」

「そうなんですか……？」

「まあ、鶴丸はそんな奴だ。変わり者ではあるが、これから仲良くして
やってくれ」

「はい、もちろんです」

夕立は笑う。夕立はしばらくの間、氷雨隊の本丸で過ごすことにな
った。これから楽しい刀達に囲まれて、少しずつ襲撃の傷を癒して
いくだろう。

「サクヤ、まだ親に何か言わないと気が済まないか？」

その近くにいるソメゴローがサクヤに問う。サクヤはしばらく
黙った後、心配そうに見ているソメゴローに言った。

「いや、伝言だけして後は先生に任せるよ。俺は力不足だったこと、痛
いくらいに分かったから」

「力不足なんて、そんなこと……！」

「それに」

背後で加州が、長谷部をからかって遊んでいる。真っ赤になって追
い回す長谷部を、江雪が止めていた。その近くでは、鶴丸がタルトを
買いに走ろうとするのをおろおろと小夜が見ている。

賑やかで、とても楽しい風景。それを見て、サクヤは表情を緩ませる。

「まだここにいたいし……やりたいこともできた。だから、まずは勉強からしようかなって」

「なんだよー、まだ頭良くなる気なのか、サクヤは」

「俺は頭が良い訳じゃないよ。ちよつと本が好きなだけだ」

「まあ良いよ。頭良くなっても、サクヤはサクヤだし。やりたいこと、後で教えてくれよー!」

「……うん」

幸せを滲ませ、サクヤは笑った。

夕立はその光景を見て微笑んでいたが、ふと表情を曇らせる。

「妹君、どうしましたか」

「いえ……私は、戦場を、現実をあまりに知らないな、と」

加州を追いかけ回すのを止めた長谷部が問えば、夕立が答える。長谷部は気遣うように言った。

「一般人に知らせないようにするために、この町があるのです。何も気にすることはありませんよ」

「そうでしょうか……」

「ええ。あなたは軍の家系の人間とは言え、戦争には本来関わりのない一般人です。それに、あなたは被害者だ。我々はあなたのような人間を守るために遣わされたのですから、余計な心配は無用です」

「そう、ですね。これ以上はあなた達にも不快でしょうから、止めておきますね」

「はい。……まだ何か?」

夕立は、まだ暗い顔を直していない。長谷部が更に問うと、彼女は呟いた。

「……腕の細さ……あんな感じなんですか?」

「どういうことですか?」

「いえ、時間遡行軍の打刀、いたでしょう? 腕が、随分太かったなって思っ」

「太い? 敵の打刀は、いつもああいう姿ですが……」

夕立は、もみあげを耳にかける。そうして、零した。

「私に襲ってきた打刀は、もつと全体的に細かつたんです。……何か、嫌な予感がするのは、私だけでしょようか」

夕焼けと夜の空が、綺麗な階調を見せている。星々の光は、不気味な程に輝いていた。

二二〇六年十月四日から、全ての刀剣男士が立ち去った後の夜。あるアパートの一室で、少女が微笑んでいた。

「ふふ、やつと、やつとなのね」

その手には、紙が握られている。レシート大の、小さな紙だ。そこには、数字の羅列が書かれている。

普通の人間が見たら、ただの数字にしか見えないだろう。しかし、一部の人間には、違うように映る。

「ここに、兄さんが……」

そして、問いただすだろう。

——どこから、『町』の時空座標値を手に入れた、と。

「待ってて、兄さん」

少女は浮き立つ気持ちを隠さずに、棚から機械を取り出す。それもまた、ここにあつてはならない物のはずだ。

「もうすぐ、化物達の巣窟から、助け出して見せる。ふふ、ふふふふ……」

そうして、少女は狂気染みた笑みを浮かべて、機械に数字を打ち込む。目の前に現れた空間の裂け目に、彼女はバッグと共に躊躇なく飛び込んだ。

裂け目が閉じた後には、少年の写真だけが残されていた。

第六話 「平成出陣／臨時隊員」

6—1 「平成へ」

「お茶を淹れて来ました、鶯丸様」

「ありがとう、平野。今茶菓子を出そう」

「はい」

日差しが暖かい昼下がり。雲霄隊の鶯丸は、確認していた端末を座卓の上に置き、棚へ向かって立ち上がった。

棚から皿と楊枝を置いて、箱を取り出す。包装を丁寧に解き、卓の上に置く。箱を開けると、中には表面が滑らかな羊羹が入っていた。

「牡丹一華堂の羊羹ですか。僕、ここの羊羹大好きです」

「そうだろうと思って用意した。今取り分けるからな」

すつと楊枝を羊羹に通し、一つずつ羊羹を皿に乗せる。平野が座り茶を置いていくのと合わせて、茶菓子もそれぞれの前に置かれた。

画面に通知が映る端末を見て、平野は尋ねた。

「また端末を見ていらっしやっていたようですが、皆さんは相変わらずですか？」

「そうだな。今日は苦手な食べ物について話していた」

「鶯丸様は、苦手な食べ物があるのですか？」

「俺は今のところないが、蒼穹の一期が『貝割れ大根が食べられない』と言っていてなあ。どうやらあいつは甘党らしい」

「個体差って凄いですね。氷雨隊のいち兄は、確か辛い物が好きだとおっしゃっていたはずですが……」

「と言うか甘い物が苦手なんだ、氷雨の一期は。それをおちよくって大喧嘩に発展したと以前鶴丸が言っていて、大包平以上に馬鹿をやっているなあと思ったものだ」

「……何であそこの二振りは、そこまで仲が悪いのでしょうか」

「性根が似た者同士は仲が悪くなると聞いたが、どうだろうな」

茶をすすりながら、会話を楽しむ二振り。今日は秋にしては涼しくなく、過ごしやすい気候だ。

「あ、でも蒼穹のいち兄とは仲が良いのですよね」

「そうだな。何だかんだで長く話していることも多い。そう言えば何故だろうな」

「うーん、全くの正反対とか？」

「いや、好奇心旺盛なところは似ている。長所が似ていると仲が良くなるのか？」

「どうなんでしょう、心理学には疎いので……薬研兄さんに今度尋ねてみましょうか」

「雅を解さないとやっている奴に聞いていいものだろうか」

「……そう言われると、よく分からんとしか返されないような気がしますね」

ふと、平野が顔を上げた。足音が部屋に近づいて来る。直後、ひよいと加州が顔を出した。

「あ、お茶飲んでる。二振り共、調子はどう？」

「加州さん。僕はまあまあですが……」

「俺も悪くないな。どうした、任務でも入ったか」

鶯丸が冗談めかすが、加州はそれを笑わず、何のこともなしに告げた。

「うん、多分そう。改めて二振り共、主が呼んでるよ。至急執務室に来て」

俺先に行ってるね。そう言って加州は去って行く。鶯丸と平野は顔を見合わせ、小さく溜息をついた。

*

鶯丸と平野は、ある程度片付けてから部屋を出た。板張りの床をしばらく歩くと、大きな部屋の前に到着する。中からは電子音と機械の稼働音。これには中々慣れないなあ、と苦笑いしながら、鶯丸は告げる。

「鶯丸及び平野藤四郎、招集により参上した」

「来たか。よし、これで全員揃ったな」

入室許可と共に障子を開ければ、執務室には既に加州清光、山伏国広、蜻蛉切、物吉貞宗が揃っていた。いつもの第一部隊の面々だ。ま

あ座れ、と審神者が座布団を指差し、二振りは勧められるまま着席する。

数多の機械を背に、審神者は端末を手にしながら振り返った。

「皆、よく集まってくれた。察していると思うからさっさと進めるが、政府から出陣の要請があつた」

端末を床に置き電源を入れると、空中に画面が浮かび上がった。映っているのは男性の履歴書と小難しい文書である。

「画面に映っている男は、政府とも関わりのある企業の御曹司だ。そいつが時間遡行軍によつて殺害された結果、歴史の大きな変動が確認された。皆には、時間遡行軍の殲滅を頼みたい」

「はーい、質問。規模はどのくらいになりそう？ それと、時代はいつなの？」

加州が手を挙げて審神者に問う。審神者はそうだな、と顎に手を当てる。

「規模はそこまで大きくはない。一週間くらい張り付いていりや、皆なら殲滅できるだろうと言うのが上の見解だ」

「了解。まあ当然だよな」

加州が平然と言う。他の刀達も同じ様な表情だ。彼らには、政府直属の部隊だと言う自負がある。様々な難題を乗り越えて来た経験は、確かな自信を彼らに身につけさせていた。

満足そうに頷いた後に少し表情を険しくさせ、ぐるりと見渡し審神者は告げた。

「それと、時代だが——平成三十年の東京だ」

えつ、と物吉が目を見開く。他の面子は、渋い表情を浮かべていた。「……難易度めちやくちや高くない？」

「うむ。当時の政府は当てにできない上、刀に厳しい割に刀に関心が出ている頃合いだからな」

「それも首都か……人目に付くことになればあつという間に身動きが取れなくなるぞ」

自信は、驕りではない。彼らは、平成の時代に出陣する事の難しさを認識していた。

急激に文明が進化し、それに振り回された平成時代。山伏が述べた通り、政府もぐだぐだな事、刀の人氣が再上昇している事から、下手に抜刀したら瞬く間に拡散されて、上に翻弄されたり、そこを敵に突かれて歴史改変に至るに違いない。

沈んだ空気になる部屋。審神者は、頭を下げた。

「無理は承知だ。だが、ここで改変を阻止しないと、我々の経済的基盤も崩壊しかねない。皆への褒美はたんまり取らせると確約させた。

——頼む、引き受けてはくれないか？」

しん、と静まり返る。しばらくは審神者も頭を下げたままだったが、はあ、と加州が頭をかいた。

「頭上げてよ、主。俺達は武器だ。主の勝利のためなら、どこへだって行って戦うよ。例えそれが、戦い辛い時代でも」

「……すまないな、皆」

「何、これもまた修行。今回も無事こなして見せようぞ」

カカカ、と山伏は明るく笑う。加州が頭の後ろで手を組んだ。

「俺、褒美は主と現世旅行がいいな」

「長谷部さん辺りがずるいつて言いそうですね……」

「何なら、皆で現世旅行といこう。かなりの無理を押し通そうとしているのだから、それくらいはできるだろう」

「拙僧は山籠りの許可を頂きたい！」

「何週間籠るつもりだ、山伏殿……」

「どこに連れて行ってもらうのかなー」

褒美の話になり、部隊は表情豊かに話し始める。現世旅行の計画を早速立て始めようとしているのは加州だ。

審神者は、そんな加州を手招いて呼び寄せる。

「主、どうしたの？」

「……これは、時が来るまで内密にしてもらいたいのだが」

ちらりと物憂げに、審神者が隊員達の方を見る。いや、隊員全員ではなく——。

「——物吉のことを、気にかけてやってくれ。例の嬢ちゃんが関わってくる可能性がある」

「……え？ 護衛対象の履歴とか文書には、そんなこと書かれてなかったよね？」

「あくまで非公式の情報だ。だから必ず何かが起こると言う確証もない。いたずらに不安がらせることはないが……」

「……その時が来たら、全力で止めろってことだね。了解」

振り返ると、物吉はにこにここと隊員達の話をしている。それを見て、頼むから何事も起きてくれるなよ、と加州は祈った。

「ねえ、いち兄さま」

「……うん」

「改めて聞くけど、何がどうしてこうなったの」

「……私が聞きたい」

「いや本当に不思議だよなあ。何でこんなところに迷い込んだか。よっぽどの方向音痴じゃなきゃこんなことにならないぜ」

「薬研頼むから傷を挟らないでくれ!!」

顔を覆って蒼穹隊の一期は叫ぶ。春光隊の鯨尾と薬研は、困りきつた表情でそれを見ていた。

ソファアーに座りうなだれている一期に、苦笑いしながら歌仙が茶を運んできた。

「……まあ迷ってしまったものは仕方がない。時空の乱れが収まるまで、ゆっくりしていつてくれ」

「ありがとうございます……」

力無く湯呑みを持ち上げて、一期は本当にどうしてこうなった、と回想を始めた。

6—2 「迷子」

それは審神者の一声から始まった。

「今日は全員非番だ！ 俺はまんばと城下町に下りるが、ついて行きたい奴はいるか？」

「主、離せ！ 氷雨隊より戦果が良かったからって、浮かれ過ぎなんじゃないのか!？」

「はっはー、戦果発表後のあの野郎の喚き様だけで、最高の酒の肴になるな！ よし、猩々木庵で呑むか！」

「昼間から酒を飲むな！」

山姥切の首に腕を回し上機嫌な審神者の言葉に真っ先に反応したのは粟田口の短刀達だ。顔を輝かせて、下りたいと手を挙げる。

「ボク、あの化粧品店に行こうかなー！」

「僕は本屋ですかね」

「えっと、虎くん達の餌、新しいのを探したいです」

「よし薬研、げーむせんたーに行くぞ！」

「おう。何か賭けるか？」

「賭け事はほどほどにしてくださいね」

「いち兄はどうするの？」

信濃に問われ、一期は温かい微笑みを浮かべる。

「私もお前達と一緒に城下町に行くよ。でも、どこから行こうか悩んでしまうね」

「じゃあボクに合う化粧品一緒に選んで！」

「あつ、ずりい！ オレもいちにいとげーむしたいのに！」

「ふふーん。早いもの勝ちだもんね！」

「いちにいは化粧なんかよりげーむの方がいいに決まってる！」

「なんかって言い方向！」

厚の言葉に乱が眉を跳ね上げ、喧嘩が始まった。呆れながら平野がなだめるが、止まる気配はない。ふと、五虎退が鯨尾と骨喰に向けて尋ねた。

「鯨尾兄さん、骨喰兄さん。二振りは、城下町に行かないんですか？」

「なんか骨喰の調子が悪いらしくてさ。俺は本丸に残って様子を見るよ」

「鳴狐も心配しております。我々も残りますよう！」

「ありがたい、兄弟、鳴狐」

と言う訳で、粟田口派はこの三振りを除いて城下町に赴く事になった。

城下町は相変わらず人通りが多い。そうして審神者に連れられていく刀、目的の場所に一目散に向かう刀がいる中で、粟田口派は揉めていた。

「いち兄はボクと一緒に化粧品を見に行くの！ どうせげーむは時間かかるでしょ!？」

「化粧品だって何時間もかかるだろ！ いちにいはげーむやってる方が楽しいだろ！」

「僕も、いち兄と本を選びたいのですが……」

「食べ歩きもしたーい！」

わあわあど粟田口派が騒ぐ中、その目はぼうつと見ていた。一期が、甘い匂いに釣られてふらふらと歩くのを。しかし、輪の外にいた彼がそれを告げる事はなかった。

しばらくして、五虎退がはつと周りを見渡す。

「あ、あの、いち兄がいません……!？」

五虎退の声に、粟田口派がはつとする。そして辺りを見回すが、長兄の姿はどこにもない。肩を下げ、乱が気を落とす。

「ボク達が長く話し合ってたから、呆れちゃったかな……」

「そうだな……仕方ない、いちにいはゆつくりしてもらうか」

「そうですね、その内本丸に戻っているでしょう」

解散の雰囲気醸し出される。しかし、何かが心配だ。それは何だったか。

それに気付いたのは、信濃であった。小さく挙手をして、発言する。
「……ねえ。うちのいち兄って方向音痴じゃなかった？」

その顔は青ざめていた。伝染するかのように、粟田口派が青ざめていく。うわあああ、と頭を抱えて厚が叫んだ。

「まずいだろ、まずいだろ！ どこに行つたか分からないけど、いちにい探し出さないと永遠にさまよい続ける！」

「いや本当喧嘩してる場合じゃなかったな……前回みたいに変なところに迷い込んでたら……」

「また助けてもらえるとは限らないしね……とにかく手分けして探さない！」

じゃあ僕はあっち、オレはあっち、と別れて栗田口派は城下町を駆ける。しばらくの間、城下町には一期を呼ぶ声が響く事になった。

一方、探されている当の一期はと言うと。

「……ここは、どこだ……」

飴の入った袋を手下げ、例の森の中に立っていた。

甘い匂いに釣られて飴屋から飴を大量に買った一期は、弟達のところへ戻ろうとはしたのだ。しかし、どこから来たのか分からず、『何か木があったはず』といった朧げな記憶を頼りに歩くも、どんどん道から逸れていくばかり。そうして危うい記憶を頼りにした末に、一期は森にいますと言う訳だ。

「とりあえず、ここから出ないと……」

そうは言ってもだ。方向音痴の一期には、自分がどこから来たのかでんで分からない。下手に動けばまたウルトラC的な思考の飛躍で、ここ以上にとんでもないところに行ってしまうかもしれない。早く弟達のところに戻らねば。そんな焦りと、自分の方向音痴と言う性質への苛立ちが、一期の思考を占めていた。

「おい、あそこにいるの……」

「ああ、刀剣男士だ。金をたんまり持つてるはずだぜ」

気が付けば、周りを数人のごろつきに囲まれていた。下卑た表情で、襲撃のチャンスを探っている。何かデジャヴを感じた。

しかし、今回は拘束されていないし、コンディションも悪くない。一期はどうするか考えたが、弟達が探しているという焦りと下卑た声による苛立ちに邪魔され、思考がまとまらない。

そうして結論はこうなった。

「ああもう面倒だ。峰打ちなら許されるだろう」

「——いや許されないうて！」

柄に手を掛けた一期へ鋭くツツコミが入る。途端、ごろつき達が叫びながらその場に崩れ落ちた。

残ったごろつきの一人は何事か怒鳴りながら攻撃したものを探すが、背後を取った黒い影から首に手刀を受け、やはり倒れ伏した。

黒い影——薬研藤四郎は、ごろつき達を縛り上げた後に一期へよう、と手を振った。

「元気だったか、蒼穹のいち兄。今日は縛られてないようで何よりだ」「……お前は、春光隊の？ さつき鯨尾の声が聞こえた気がしたんだが、どこにいる？」

「はい、俺はここだよー」

しゅたつ、と鯨尾藤四郎が木の上から降りて来る。靡いた髪を整えて、左右を見渡した。

「色々聞きたいことがあるけど、また時空の流れが変わりそうなんだ。収まるまでうちの丸で休んで行ってよ」

「ありがとう、鯨尾」

「じゃあ帰るか。いち兄、今度は走れるな？ 俺達の後をついて来てくれ」

そう言つて、薬研は駆け出す。鯨尾も即座に動き、一期もそれに倣った。

相変わらず、ちらちらと空間の裂け目から違う景色が映っている。奥に行く度に周囲が薄暗くなり、少しずつ気味も悪くなっていた。鯨尾と薬研はそれらに用心しながら、直進、右折、左折を組み合わせて進んでいた。

春光隊の本丸である一軒家が見えて来る。周囲をさつと確認して、薬研はドアを開けた。鯨尾と一期は玄関に滑り込み、薬研も中に入つて施錠した。

「はい、お疲れ様。とりあえず上がって」

鯨尾はスリッパを取り出して、一期に勧める。玄関から上がれば、中から歌仙兼定が現れた。

「おかえり、鯨尾、薬研。……おや、その御仁は」

「ああ、前に襲われてたいち兄だ。今回は怪我なしだ」
「そうか、それなら良かった。お茶を出そう、中に入って待っていてくれ」

歌仙が身を翻す。リビングに通された後、薬研に座るように言われ、一期はソファアに身を沈める。少し硬めのソファアは、軽く一期を押し返した。

「さて、いち兄。どうしてあそこにいたか、聞いてもいい？」

「別に構わないが……自分でもよく分からないんだ」

「まあとりあえず話してみてくれや」

そうして、先程の会話に戻る。

「とりあえず、いち兄は一振りで行動しない方がいいよ。周囲の胃に悪いから」

「そうするよ……」

「しかし、方向音痴の一期一振か。何だか、おかび？ を見ているような気分だね」

「私は珍種生物か何かですか……」

茶を飲みながら落ち込む一期に、歌仙がさりげなく追い討ちをかける。いや本当に何故城下町の入り口から離れたところに迷い込んだのか。他本丸の一期一振はこんなことにはならないのだろう、と考えて、再び自己嫌悪に陥る。

ガチャン、と玄関から解錠する音がした直後に、ドタバタとリビングに満面の笑みが現れた。

「帰ったぞー！ 新しいゲーム機見つけ、た……」

長谷部の輝いていた表情は、一期を視認した途端に苦いものへと変わった。それを見咎め、歌仙が立ち上がる。

「長谷部、客刃に向かって顔をしかめない！」

「うっ……だって……」

「だってじゃない！ 何度も言わせないでくれ、客に対して失礼な態度を取るのは……」

「雅じゃない、だろ！ 説教は後にしてくれ、ゲーム機入手の喜びが

！」

「だったら態度を改める！」

長い説教から逃れようと、叫びながら耳を塞ぐ長谷部の後ろから、獅子王が現れた。

「長谷部、玄関の鍵開いてたぜ。無用心な……あれ？ お前、前にも来てた一期か？」

獅子王が一期を見つけ、三週間ぶりくらいか、と笑った。それに一期も微笑んで一礼する。

歌仙が獅子王の帰宅に気を取られている隙に、長谷部はリビングの外へ飛び出した。階段を駆け上がる音を響かせた長谷部に、歌仙はあつ、と音の方向を振り返る。

「こら、長谷部逃げない！ ……すまない、蒼穹の一期。後で意地でも引っ張って来るから」

「いえ、構いません。過去の傷と言うのは、そう簡単に癒えるものではないのですから。……それに」

一期が、階段の方を向く。その顔には不快感など無く、ただ穏やかな笑みを浮かべていた。

「どうしてか、彼には興味が尽きません。できれば仲良くなりたく、そう思いもするほどに」

一期は、そう呟く。

何故だろう、目を逸らしたいと思うと同時に、しっかりと彼を知らなければならぬと言う使命感のような物が一期の中に芽生えている。純粹に、普通のそれと様子が異なる彼への好奇心もあるが。ゲームが好きだと言う幼さのある彼に、弟や滑アイス園の子供達と重ねてしまっているのかもしれない。……はて、何かが引っかかるような……。

つらつらと一期が考えを巡らせていると、しん、と部屋が静まり返っていたのに気付いた。不安が込み上げるままに、春光隊の面々を見渡す。

「……あの、何か不躰なことを言ってしまったか」

「……いち兄」

薬研が、真剣な声で一期に言う。

「あいつは、かなり特殊な奴だ。それに、基本的に俺達以外の人型を信用していない。生半可な覚悟で向かうと、あいつもいち兄も傷付くことになる」

「……」

「俺達は、いたずらに誰かが傷付くことを避けたいんだ」

「……その事情を、話してもらおう訳にはいかないのだね」

「……そうだな、悪い。俺達は、まだあんたと言う個体のことをよく知らない。そんな相手に、こちら側に踏み込ませる訳にはいかない」

その通りだ、と一期は思う。まだ自分は、何かを抱えている彼らに踏み込む覚悟ができているか、分かっていないのだ。好奇心だけで彼らを引つ掻き回すつもりはない。

「そうだね、私もお前達のことはよく知らない。それに対して、私の態度はあまりにも性急だった、申し訳ない。……でも、一つだけ聞かせて欲しい」

「内容によるが、いいぜ」

「……お前達にとつて、長谷部殿はどんな存在なんだい？」

薬研はしばらく黙っていたが、フツと目を閉じて答えた。

「……子犬、かね。俺達は、あいつに健やかに生きて欲しいと思ってる。そのためには水もやる、食べ物も、必要なら家も」

「でも、経験が必要なら厳しいこともさせるよ。あくまで俺達がするのは、長谷部さんが後悔せず、幸せな日々を送れるようにすることなんだ」

「そうだね。説教をすることもあるけれど、長谷部には陽だまりの中で生きていて欲しいな」

「陽だまり……そうだな、あいつには、日差しの中で笑っていて欲しいなあ……」

それぞれが、長谷部への願いを口にする。それは、普通の本丸の彼に対しては、まず出てこないだろう言葉達だった。

長谷部と言えば、堅物で周囲に厳しいのがほとんどだ。それはさながら、風紀委員を思わせる。周囲の反応も、厳しい指導員へ向けるそ

れである。

それなのにこの彼はどうだ。周囲にいるものは慈愛に満ちて、まるで、あどけない子供に向けているような表情で。

本当に、この本丸の長谷部は、周りに暖かく見守られているのだ。「長谷部さんが押入れから出てこなくなっちゃったんだけど、何かあったのかな？ ……おや」

とんとん、と階段を降りて来た石切丸がリビングに現れる。一期を見つけると一瞬目を見開き、口元を緩ませた。

「君は、蒼穹隊の一期さんだね。また襲われてしまったのかな？ 私が祓って差し上げようか」

「いえ、実は迷い込んでしまいました……」

「おや、そうだったのか。災難だったね、お守りを渡した方がいいかな？」

はは、と笑う石切丸に、本当にお守りをもらった方がいいのか頭を悩ませる一期。

物思いに耽っていた獅子王が、石切丸に話を振った。

「なあ石切丸、お前は長谷部のことどう思ってる？」

「どうしたんだい、いきなり」

「今そういう話をしてんだ、一期に聞かれてな。で、どう思ってる？」

うーん、と考えた後、親を思わせる穏やかな表情で石切丸は答えた。

「そうだね、できれば厄のある場所に近寄って欲しくないかな。彼はもう、余計な災難で苦しむ必要はないはずだからね」

「あいつ、助けられなかった奴のことは自分のせいだ、って考えがちだしな。実際は運が悪かっただけなのに」

「そうですねえ。長谷部さんがやりたいって言うなら止めないけど、助けられなかったことで苦しんでいるのを見る度、こつちまで悲しくなってきたちやいますよ」

「ほどほどにして欲しいもんだな、正直。それで体調崩されたらたまらん」

「でも長谷部がいなかったら、苦しんでいるものがあることも知るこ

とはできなかつたと思うと、視野が広がっていつている感覚はあるね。……ああすまない一期、こっちはかり話していい」

「いえ。……皆様は、本当に長谷部殿が大切なのですね」

その言葉を、春光隊は肯定する。石切丸は付け加えた。

「長谷部さんが笑っていれば、この場所は平和なんだと感じられるんだ。だからかな、私としてはずっと長谷部さんが笑っていられる環境であって欲しいと願っているよ」

先ほど垣間見た長谷部の笑顔。彼らの平和を象徴するそれをいつか、正面から自分も見られるだろうか。そう夢想しながら、一期は一口茶を含んだ。

6—3 「看破／臨時出陣」

「……よし、座標地点の誤差はほぼ無し。到着だ」

加州が時空座標指定装置を懐に入れる。人通りの少ない裏路地を到着地点に指定した彼らは、薄暗い場所から光と人通りがある表通りを覗いた。喧騒、空を隠す摩天楼、そして警戒の少ない人々。首都・東京はこの時代も相変わらずである。

「つくづく、この時代には観光で来たかったですね」

「偵察じゃなくて、敵が出て来ると確定しているからなあ」

平野と鶯丸は嘆息する。その横では、山伏と蜻蛉切がストレッチをしている。加州が物吉を探している最中に当の物吉に肩を叩かれて飛び上がったっている。

彼らは、遡行先の時代に合わせた服装をしていた。打刀以下は加州プロデュースの洒落た格好。鶯丸と蜻蛉切はスーツ、山伏は修験者の格好である（山伏についてはこだわりが強くこれ以外の格好にしたらならなかったため、囀の役割を果たすことで了承している）。

空中に画面を映してから、よし、と加州が隊員に声をかけた。

「改めて確認ね。紅猿子製薬代表取締役の子息が、この時代の一週間で時間遡行軍に暗殺される。俺達の任務は、その御子息の暗殺阻止だ」

「やはり、建造物の破損は最小限か」

「そうだね。そしてできる限り対象との接触も禁止」

「敵が対象と接触する前に終わらせる方がいいでしょうね」

「敵方の時間遡行の痕跡はあるか？」

「待って、今出すから」

えーとどれだっけ、ああこれだ、と加州が空中の画面を動かせば、周辺の地図が現れる。そこには、大小、色も様々な丸い印が点在していた。

「夜まで大規模な敵襲はなさそうであるな。痕跡を辿るものと対象周辺の監視の二手に別れるか、加州殿？」

「うーん、その方がいいかな。じゃあ俺と鶯丸、物吉は対象の方、平野

と山伏、蜻蛉切は痕跡の調査をお願い」

加州が役目を割り振ると、隊員はそれぞれ了承の意を示した。頷き、加州はこう締めくくった。

「それじゃ始めようか。集合場所は端末に転送しておいたから。そうだな、四時頃に一旦集合しよう」

「あい分かった。それでは行くか、平野殿、蜻蛉切殿！」

「声の音量を落としてください、目立ってます！」

「それと杖を掲げるな……」

先陣を切って歩き出す山伏を追い、平野と蜻蛉切が駆け出す。人混みの中に消えたのを確認し、笑って加州も足を動かす。

「俺達も行こう。この時間なら対象は会社にいるはずだから」

「何だか緊張しちやいますね。ボク、こんな都会を歩くのは初めてなので」

「そう言えばそうだったな。何、城下町を歩くのとさほど変わらん。肩の力は抜いておけ」

「はいー」

鶯丸はそうアドバイスした後、歩きながらビル群を見渡す物吉から数歩離れた加州の隣に寄る。

「加州、そろそろどう言う意図か聞いてもいいか」

「……何の話かな」

ぐつと詰まりながらもあくまでしらを切る加州に、歳を食っているものを舐めるなよ、と鶯丸は腕を組む。

「何かあると瞬きの回数が増えるのは相変わらずだな。それに、ずっと物吉に目を凝らしていれば、何かあると言っているようなものだ。その様子じゃ他の隊員にも勘付かれるぞ。主とも何か話していたな。だとしたらまずは——」

「あーもうわかった、降参、降参！」

両手を挙げて鶯丸の言葉を遮る加州。それを見て、別に責めたい訳じゃないんだが、と前置きしてから鶯丸は忠告する。

「隊員に気付かれるだけならまだいいが、他のものに察知されたら隊長のみに通知される機密にも辿りつかれやすくなる。くれぐれも気

をつけるよ」

「……はい。俺もまだまだだつて痛感したよ……」

項垂れる加州に、まあ他の隊員には気付かれないだろうがな、と鶯丸は先程の鋭さを潜めてのんびりとした様子でいる。

「で、だ。それを話す訳にはいかないのか？」

「……確証がある訳じゃないから、中途半端に警戒させるくらいなら話すなつて、主が言っていたんだけど。主がそう言うくらいだから、多分起こる確率はかなり低いよ？」

「構わん。話してくれ」

即座に聞く判断を下した鶯丸に、はあ、と息を吐いてから声を潜めて告げた。

「物吉に勘付かれるといけないから、簡単に言うよ。——物吉が暴走する可能性がある」

簡潔に述べられた一言に、鶯丸は目を見開き、そして閉じた。

「……そうか、あれ関連か」

「うん。どの局面でそうなるかは分からないけど、いざとなつたら全力で正気に戻すよ。……まあ、どっちが正気なのかは分からないけどさ」

「それは今論じても仕方ない。分かった、物吉のことは気に掛けておこう」

あやふやな懸念事項をしつかりとした口調で請け負った鶯丸に、ありがとう、と加州は礼を述べた。

「……あー、何事も無ければいいなあ」

「これは俺の勘だが、何かが起こる予感を強く感じるぞ。まあ、覚悟しておくんだな」

「鶯丸の勘、結構当たるからやーだー……」

「加州さーん、鶯丸さーん？ どうしましたー？」

物吉が声をかけてくる。気が付けば、目的のオフィスビルまであと少しだった。

今行くから、と加州が小走りになる。それに合わせて、鶯丸も歩く速度を上げた。

テレビの中で、筋肉質の空手道衣を着た男と、セーラー服を纏った少女が格闘しあっていた。

男の拳を避け、少女が杖から魔法を放つ。それを避けようとしたところ、少女の拳がヒットし、男は倒れ伏した。画面には、勝敗を決した表示が現れる。

「やったー！ 勝ちましたー！」

「あーつくそつ、これでまた引き分けかー！」

鯨尾が歓喜の声を上げ、獅子王が額を手で覆う。直後画面は切り替わり、モードを選択する状態になった。

「どうします？ 違うげーむで対戦します？」

「それもいいけど、いい加減体を動かしてえな……」

「そうは言っても、長谷部さんが降りてきませんし。あ、怪物を一狩りするげーむやりましょうよ！」

「あー、それしかねえか……」

かちやかちやとゲーム機を操作して新たなゲームに切り替える鯨尾達の様子に、一期は心を和ませる。

「楽しそうですね。私では相手にならないのが残念ですが」

「仕方ないよ、普通の刀剣男士は機械の操作に長けていないものの方が多いんだ」

「私達がこうして多くの機械に触れるようになったのも、こっちに來てからのことだしねえ」

「普通の刀剣男士なら尊敬できるくらいのもんだぜ」

「では長谷部殿は……？」

「あいつは特殊だ」

ソフアーに座り、茶を飲みながら四振りは会話する。ソフアーにもたれる一期の目にはホットタオルが乗せられていた。

先程まで一期もゲーム機に触らせてもらっていたのだ。しかし、手の動きと画面の動きがどうも噛み合わず、最終的には目を回してしまった。ホットタオルが用意されたのも回した目を癒すためだ。

「凄いですよ、あんなに小さい端末を使いこなすとは。私にはとて

も……」

「まあ、趣味が高じて、と言うのもあるだろうね。機械をいじっている時の長谷部は楽しそうだから」

「また弾かれたー、って叫んでたりな。まあ、機械の修理もやってもらっているから文句は無いが、ほどほどにして欲しいもんだ」

「目は大切だからねえ。目が悪くなってしまうっては情報が少なくなってしまうから。でも楽しいなら何よりだよ、ねえ長谷部さん？」

えっ、と声を発して勢いよく起き上がったせい、一期の目からタオルが落ちた。慌ててキャッチし、石切丸の視線を追う。

リビングの入り口から覗き込む様に、顔を出し、ソファーを見つめる長谷部がいた。一期の視線に気が付き、きつと睨む。

「……鯰尾達が楽しそうだから来ただけだぞ」

「はあ」

「本当に本当なんだからな！」

「何に対しての天邪鬼なんだか」

「普通の長谷部なら考えられない捻くれ方だねえ」

うるさい、と唸り長谷部は一期を睨む。長谷部の声に気が付いた獅子王が、長谷部の方を向く。

「なー長谷部、俺久々に出陣したいんだけどー」

「……今からか？ 準備がいるが、構わないよな？」

「おー、いくらでも待つって。あ、でも軽食が必要か？」

「それなら僕が用意するよ。久々だからね、楽しみにしてくれ」

「歌仙さんの許可が下りたぞー！」

「私も、武器の本分を忘れないようにしないとイケないからねえ」

急遽、出陣準備を始める春光隊。歌仙が台所に向かい、長谷部を除く隊員が刀を出現させる。

一期は立ち上がりながら、帰り支度をしようとする。

「出陣ですか？ それなら私は帰った方が――」

「なあ、久々に六振りで出陣したくないか？ 一期、部隊に入ってくれ！」

「――はあ!？」

獅子王の発言に、一期と長谷部の裏返った声が重なった。

常軌を逸した発言だ。他の隊の刀を編成し、出陣するとは。政府の機構上、非常識な提案だ。

「いやいや無茶でしょう！ 他隊の刀は組み込めないのでは——」

「時間と手間とコストがどれだけかかると思っているんだ！ 何か褒美がないと嫌だぞー！」

「後でがざにあのもんぶらん買ってくる！」

「よし交渉成立！」

「できるのですか!? と言うかちよろい！」

一連の流れに色々と突っ込みたい。だが話は進んでいる上、何よりも。

「いち兄と出陣かー。なんか嬉しいな！」

「ここにいち兄が来ることなんて蒼穹のが初めてだからなあ。血も滾るってもんだ」

自分と共に戦えることを春光隊の弟達が喜んでいる。これに応えなければ、兄としての名折れだろう。もう、かなりのはちやめちやな事態をそんな風に割り切ることにした。石切丸が、そんな一期を心配そうに覗き込む。

「一期さん、嫌なら嫌と言っていいんだよ？」

「……いえ、他隊とは言え弟達が共に戦うことを期待しているのです。これに応えないことに何の意味がありません」

「そうか、それなら少しの間よろしく」

「はい。……それにこんな非常識な事態、見過ごす訳にはいきませんし」

「おや、監視も兼ねているのか。それなら油断はできないな」

「いや、そうではなく。私の個刃的な好奇心からです」

「……本当に一期さんは変わっているねえ」

石切丸と話しながら、一期も刀を握る。台所から、歌仙が風呂敷に包まれた物を手に現れた。

「待たせたね、それじゃあ行こうか」

「今日の軽食は何ですか？」

「本当はおやつにしようと思っていたんだけどね。ふるーつさんだよ」

「おお、いいな！ あ、刀出す間持つぜ」

獅子王がニツと笑う。獅子王に軽食を渡し、歌仙も刀を出現させた。

「よし、玄関に行こう。長谷部、頼んだよ」

「ああ、分かった」

全員が玄関に立ち、長谷部が端末機器を取り出した。画面を浮かび上げらせ、早口で呟きながらタイプする。

「……刀帳番号二十五番、一期一振。認識完了。仮登録、偽装登録完了まで50、80、……共に完了。念のために妨害情報もばら撒いておいて、と。……隊長・歌仙兼定、隊員一・薬研藤四郎、隊員二・鯨尾藤四郎、隊員三・獅子王、隊員四・石切丸、……管理者権限においてゲスト刀剣一期一振の追加許可……隊員五に追加完了。部隊登録完了。時空座標指定開始、次元軸36556682、時軸186407080500、空間軸35008944135769889。当該情報体の指定時空座標への転送を開始」

視界が、少しずつ暗くなっていく。地面から浮かんでいるような、不思議な感覚。これは、蒼穹隊での出陣では感じたことのないものだった。普段は一瞬で着いてしまうものだったから、こんな出陣の仕方は新鮮だ。

「転送完了まで16、32、48、64、80、96……転送完了」

長谷部がカウントを終えた時、そこに六振りの姿は無かった。長谷部は新たな画面を表示させる。そこには、闇の中に降り立った六振りの姿があった。

「全員、異常はないか？」

「大丈夫だよ、転送位置も悪くない」

「問題はないな」

「大丈夫でーす」

『あー、早く敵出ねーかなー！』

『獅子王さん、騒ぐと現地の人が出てくるよ』

『私も、異常ありません』

画面の中の部隊は、軽く体を確認した後、移動を始めた。

彼らがいるのは、一八六四年七月八日。もうすぐ朝を迎えようとしている池田屋の近くだった。

6-4 「夢と彼女について」

とあるビジネスホテルの一室。雲霄隊第一部隊は定期報告のために、それぞれ二つのベッドに腰掛けていた。

「対象周辺に動きなし。強いて言うなら、女性に群がられてたつてこたくらい。もちろん女性の身边を軽く洗ってみたけど、不審な点はなし」

ベッドサイドランプが一番その近くにいる加州を照らす。うむ、と頷き、蜻蛉切も口を開く。

「こちらも時間遡行の痕跡を辿ったが、本陣は見つからなかった。身を潜めているのだろうか、だがどうも一箇所が集まっているようだ」
「どっか？」

「地図に印を付ける。暫し待ってくれ」

空中に浮かぶマップに、三角の印が付く。その周辺画像を出す
と、薄暗く街灯も少ない、いかにも路地裏、と言った場所だった。

鶯丸が地図を見て、呟く。

「ここは、奴が通勤時に通る道か？」

「いいえ、ここではなくここに繋がる広い通りを車で行くはずですがこの道には、暴力団が関わっている風俗店があります」

「そいつらが何かを起こす可能性があるか……改変前にそいつらが事件を起こしたって記録あったっけ？」

「今資料を出す。……違法薬物を取引していた件で警察が立ち入り捜査を行っているな」

「奴はそれに巻き込まれるってところだろうか。何にせよ、その道で待機していた方がいいだろうな」

鶯丸がそう結論付けると、加州がそうだね、と肯定した。

「念のため、平野は対象に付いていて。俺達は対象の退勤時間に合わせて配置に付くよ。それまでは体を休めて」

加州がマップに印を付けていく。ふう、と息を吐き、鶯丸は物吉に話し掛けた。

「物吉。体調は大丈夫か？」

「えっと、大丈夫なんですけど。ボクはこっちです、鶯丸さん……」
「ああ、すまない、こっちだったか」

物吉のいる位置とは反対方向に話し掛けていた鶯丸は、改めてしょんぼりとしている物吉に向かい合った。

「すまないな。……衝動は最近起こっていないようだが、それ以外に変なことは無いか？」

「そうですね、覚えの無い夢を見る程度です。それも悪夢と言うほどの物ではありません。コンディションは万全ですよ」

「そうか、ならいいが。……時に物吉。日が沈むまでまだ少し時間がある。一階の喫茶店に行かないか？」

「えっ、構いませんけど……珍しいですね、鶯丸さんが平野さんじゃなくてボクと行動しようだなんて」

「たまにはいいだろう。夢の話聞かせてくれ」

鶯丸がそう言っ、加州に視線をやる。加州は一つ頷き、ベッドの上にはぶん、と倒れ込んだ。埃が宙を舞い、蜻蛉切が小さくくしゃみをした。それを背後に、部屋のドアを閉める。エレベーターに向かつて歩きながら、物吉は自信なげに言った。

「本当に会話しているだけなので、あまり面白味も無いと思いますが……」

「構わない。夢の中の会話は大体が支離滅裂で面白い」

「それじゃあ……」

エレベーターのボタンを押して、階を示すパネルを眺めながら、物吉は一つ一つ慎重に語り始める。

「夢の中で、いつもボクはベッドの上にいるんです。部屋の中にあるのは、窓と、ベッドと、本棚くらいでしょうか。いつもボクは窓から、外の様子を眺めていました」

エレベーターがチン、と音を鳴らして到着した。口を開けたエレベーターに乗って、階を指定し、ドアを閉めるボタンを押す。下へ下へと向かうエレベーターは、鶯丸に浮遊感をもたらした。

「そこに、女の子が訪ねて来ます。女の子はポニーテールで、意思のはっきりした顔立ちをしていました。当然、ボクは彼女を知りませ

んですけど、何故か名前は分かったんです」

「そうなのか。名前は何だった?」

「確か……ミサキ、だったかと」

再びチン、と音を鳴らしてエレベーターは到着を告げる。光が一気に入って来たことで鶯丸と物吉は目を少し細めながら降りる。

「そのミサキと、どんな話をしていた?」

「大体が、彼女が持つて来た本と一緒に読みながら、取り留めのない話をしていました。でもしばらくしたら、ボクは外の世界を教えてくださいがんでいましたね。そうしたら、彼女は教えてくれるんです。春は桜の美しさを、夏はアスファルトの照り返しがきついこと、秋の空が高いこと、冬の雪が本当は丸くないこと、などを」

喫茶ラウンジに到着すると、従業員に空いている席へ案内される。四角いテーブルに手を置いて座ると、椅子が軋む音がした。ラウンジの中には、コーヒーを飲んでいるサラリーマンがいるだけだ。

「後は、ボクの境遇に憤ってもいましたね。部屋の中に閉じ込めて、彼女以外誰もボクに会いに来ないことに。ボクとしては、彼女と話せるだけで幸せだったんですが。そうして彼女が部屋から出て行く前に、約束をするんです。いつか一緒に外を歩こう、と」

「その様子だと、夢の中の物吉は病弱だったのか」

「そうみたいです。……不思議なことに、夢の中のボクは、部屋の中から全く出られないのがちつとも嫌だと思っていなかったんです。動けないことは、人間にとっては退屈で仕方ないはずでしょう?」

「まあ、そうだな」

「それなのに、彼女が来ると言う、それだけで幸福で満ちていたのですよね。夢の中のボクがどういう存在か分かりませんが、幸福をおすそ分けされたみたいで、目が覚めるのが少し惜しいくらいなんです」

従業員が水を運んで来た。それに合わせて鶯丸は紅茶とケーキのセットを注文し、物吉はコーヒーとケーキのセットを頼んだ。従業員は下がり、再び物吉は話し始める。

「でも、存在が分からなくても、正体は分かっているのですよね。悪い存在ではないのが分かっているので、今のところ不安はないです」

「そうか。……正体を教えたのは」

「はい、いつも機械を直してくださる方です。夢のこともあまり気にしないでいいとおっしゃっていたので、本当に恐怖とかはないんです。だから、そこまで心配しなくても大丈夫ですよ。加州さんにも、そうお伝えください」

物吉は気分を害した様子も無く、にこにここと鶯丸を見つめる。自嘲するように、鶯丸は苦笑った。

「……あまり気取られ過ぎるのも考え物だな。これでは隠密活動の意味がなくなってしまう」

「流石に、二振りでこそそそして、こうもあからさまに切り込まれたら気付きますよ。本来、ボク達の存在は重要機密なんですからね？」

「主が心配していてなあ。加州も心配しているんだ。仲間だからこそ、きちんと話をしないといけない。ずっと共に過ごすのだから、尚更な」

「そうですね。ボク達は普通に振る舞おうとしても、なかなか上手くいかない存在ですから。ちゃんと違うところも、合わないところも、確認していかないといけませんね」

「そうだな。……個別的には、お前に色々教えた奴に会ってみたいところなんだが」

「あはは、今は難しいと思いますよ。猜疑心が強い方ですから」

従業員がそれぞれのセットを運んで、テーブルの上に並べていく。チーズケーキ二つと、紅茶にコーヒ―。ごゆっくり、と告げて伝票を置き、従業員は下がった。

「じゃあいただくか。……物吉」

「はい？」

フォークを手にした物吉に、鶯丸は硬い表情を向ける。

「夢の中の心地はいいのだろうが、あまり飲まれ過ぎるなよ。俺達は、不本意ながら戦わなくてはならない存在だ。くれぐれも――」

「切れ味が悪くならないように、ですよ。分かっています」

物吉もまた、真面目な声音で返す。しばらくそのままだったが、ふっと表情を緩めて、鶯丸はケーキを口にする。

「それならいい。このけーき美味いぞ」

「あ、本当！」

物吉もフォークで切り分けてケーキを口に運ぶ。表情をほころばせる物吉に、もう一つの隠し事に気づかれなかったことに安堵しつつ、鶯丸は紅茶を口に含んだ。

「おう！」

甲高い声が聞こえてくる。それに続き、刀剣男士と思われる声が響いた。甲高い声はこんのすけだ。刀剣男士を先導し、河原に駆けていく。池田屋から出て来た部隊のメンバーは、和泉守、同田貫、大俱利伽羅、青江、骨喰、堀川だ。

薬研が腕を組み、唸る。

「二刀開眼狙いの組み合わせだな。こりやちよつとまずいか？」

「祈れ、祈るんだ！ いち兄も！」

「え、何を祈れと」

「刀剣男士部隊が敵を討ち漏らすように、だよ！」

「何ですか!？」

手を組み祈り始めた春光隊。一期は、刀剣男士部隊の武運と、春光隊のよくわからない祈りのどちらを選べばいいのか混乱した。当然の話である。春光隊は、敵を見逃せと言っているようなものなのだから。

斬り合う音が止む。河原にいる和泉守はしかめっ面をして叫ぶ。

「これ以上は検非違使が出る、退くぞ！」

「くそつ、また槍を倒し損ねた！」

「一応は勝利です。これは、日本号さんの気配……ではなさそうですね……」

それぞれ何か言っている様だが、橋の上からでは聞こえない。和泉守は落ちた桜の枝を掴み、装置を起動させた。河原から、部隊が姿を消す。

残されたのは、ふらふらとした時間遡行軍の槍のみだった。

「長谷部、部隊が帰還した！」

『よし、周囲に敵影は無い、突っ込め！』

「よっしゃー！」

「偵察行きますー！」

長谷部の一声で、春光隊が次々と橋から飛び降りる。目標はもちろん時間遡行軍の槍だ。新手に気が付いた槍は、刀装を展開させて応戦する。

薬研が抜刀し頭蓋骨に突き刺そうとするが、刀装兵に弾かれて一旦距離を置く。鯨尾が薬研に叫ぶ。

「薬研、早い早い！ まだ敵陣形はつきりさせてないのに！」

「どうせ一体だけだ、どうやったって同じだろ」

「そりやそうだけどね……鯨尾、陣形は？」

「方陣です！」

「少し堅いか……」

「何、長く楽しめりやそれでいい！ 長谷部、火力高めでもいいよな！」

『そうだな。よし、鶴翼陣で行け！』

長谷部の指示に、陣形を展開させてから春光隊は敵に飛びかかる。次々と斬撃が繰り出され、槍は少しずつ刀装兵をすり減らしていく。

槍の突きが、薬研に襲いかかる。軌道を逸らし腹に穴を開けられる事態は避けたが、左肩に突き刺さる結果となった。左腕は動かないだろうが、薬研から猛々しい笑みは消えなかった。

石切丸が、刀を大きく振るい槍の肩口に傷を負わせたとせば、獅子王が軽い身のこなしで足に切り込みを入れる。歌仙が首に向かつて一閃した直後、鯨尾が歌仙と共鳴し、刀装兵を引き剥がす。

狂った笑い声を上げて敵を襲うその様、まさに。

「膺切り……」

橋の上から降りられずに、一期はぼそりと呟いた。

春光隊の面子は、それはもういい笑顔で敵と斬り合っていた。ほとんど戦場に出られない鬱憤を晴らすように、激しい剣筋である。槍に突かれようが御構いなしに敵を斬り続けるその様は、膺切りとしか言い様がない。

一期の目の前に、画面が現れる。長谷部は、首を傾げながら言った。

『……お前は戦わなくていいのか？』

「いえ……あれは、彼らの獲物でしょうし……私はあくまで臨時の隊員ですから」

『へーえ。で、本当のところはどうなんだ』

「狂気染みた様に少し引いています。獲物を取られたら、私にまで殺意が向きそうです……」

ギラギラした表情で敵に襲いかかる五振りを見つめる一期の顔は、まさに「ドン引き」と言つて差し支えないものだった。うーん、と唸り長谷部が問う。

『引く気持ちはよく分かるが、それが武器の性なんだろう?』

「いや、そうなんです、そうなんです、そうなんですけど、ちよつと、これは……どれだけ飢えていたんですか、彼らは」

『まあ、出陣したら政府に見つかる可能性が高くなるからな。あまり出陣はできていない』

「具体的に、頻度はどれほどですか?」

『様々な要因が重なるから何とも言えん。だが、今回は一月ぶりの出陣になるな』

「……それは、あんな状態になるのは、領ける、のでしょうか」

『さあな。普通の勇士の事はよく分らん』

「……普通の? それはどう言う……」

引つかかる物言いをする長谷部に追求しようとするが、長谷部は話を聞いておらず、画面をしばらく見つめてから言った。

『……そろそろ止めるか、検非違使が来る』

『もうそんなに経っていたんですね……』

『僅かな合間を縫つて出陣しているからな。時間はそうない』

そうして、死体蹴りをするかのように戦っている春光隊の前にも画面が現れる。

『お前達、時間切れだ。そろそろ検非違使が来るぞ』

「あ? もう終わりか?」

「うわあ薬研左腕外れてる……。はいはい、帰還しますよー」

『時間が経つのは早いな……』

「うー、まだまだ物足りねーよー……」

「獅子王さん、多分これ以上は長谷部さんの精神状態が悪化するから。すぷらったって言うんだっけ、こういうのは」

『気遣わんでいい、画面越しなら平気だ。それより置いてけぼりの一期一振を回収しろ』

「あ」

河原の春光隊が橋を見上げる。鯰尾は手を合わせて謝罪の意を示した。歌仙が申し訳なさそうに声を出す。

「いち兄ごめーん！」

「二期、帰還するからここまで降りて来てくれないか？」

「分かりました、今降ります」

一期は橋の上からひらりと着地し、河原に降り立った。それを確認し、長谷部がキーボードを叩く。

「……隊長・歌仙兼定、隊員一・葉研藤四郎中傷、隊員二・鯰尾藤四郎、隊員三・獅子王軽傷、隊員四・石切丸、隊員五・ゲスト刀剣一期一振。部隊状況認識完了。帰還プロセス確認、……時軸220610121523、確認完了。当該情報体の帰還を開始」

春光隊と一期がその場から姿を消す。検非違使が現れたのは、それから二分ほど経ってからのことだった。

6—6 「血眼」

『こちら平野、対象が建物から出て来ました』

「了解。襲撃の可能性もあるから、警戒しといてね」

『こちら物吉、風俗店への潜入に成功。今のところ気付かれた様子は
ありません、見張りを続けますか？』

「続けて。危険だと思っただらすぐに出てくるように。気配を消せると
は言え、ぎりぎりのところでやってるのは確かだから」

時刻は六時過ぎ。平野、物吉からの通信を受けて、配置についた路
地裏の四振りは目を光らせていた。路地裏にはネオンが灯り、妖しく
彼らを照らしている。

蜻蛉切が目を瞬かせる。

「ある程度なら見えるが、やはり夜目はあまり利かん。電飾があつて
助かったな」

「ふむ。拙僧や蜻蛉切殿、鶯丸殿は夜目が利かぬのに、今回の任務の一
員となった。これはどういうことだろうか」

「お前達はガタイが良い。しかも刺青を入れているようにも見える。
主は、多分——」

「……時間遡行軍だけじゃなくて、暴力団ともやり合うのかも、つて考
えたのかな」

「現地の人間になるべく手出しはするなという指示が、相当難しくな
るな……」

しん、と辺りが静まり返る。風が吹いて少し肌寒い。加州がう
あー、と力なく唸った。

「早く終わりたいな……ここ一帯荒野にできないかなあ」

「いや加州、流石にそれは」

「もういつそ爆弾使つてさー、ここら辺を更地にすんの。ここらの人
間は逃げるじゃん？ そしたら人目は気にしなくていいし、馬札は使
えるし、遠戦もし放題だし」

「気持ちは分かるが現実逃避をするな。敵に襲われた時に反応が鈍く
なるぞ」

「だつてさあ、これが一週間だよ!? 今日中にケリがつけばいいけど、思いつきり斬れない戦いがあと六回続くかもしれないんだよ!? やさぐれたくもなるよ!」

そう叫び頭を掻き毟る加州におろおろとする蜻蛉切。鶯丸と山伏は加州をなだめる。

「まあ、確かに斬りにくいのは辛いな」

「これも修行と思おうぞ、加州殿!」

「うえー、こんな修行やだよー……」

『えつと、お忙しいところすみません』

平野は荒れている加州に困惑を隠せない様子だったが、事態を動かす一報を入れた。

『対象の同僚が合流して、風俗店に向かうと言う話になったのですが、そちらの方の動きはありますか?』

「無い。全然無い。で、対象は今どこ?」

『加州さん荒れてますね……対象は、そちらまで三分ほどの場所にいます』

「おつけー分かった。くれぐれも気付かれないように追跡続行して――」

『加州さん!』

焦燥した物吉の声が飛び込んでくる。声の後ろから、怒号と悲鳴、何かが割れる音が聞こえてきた。

『従業員に紛れていた時間遡行軍が、ホステスの一人に怪我を負わせました! 敵は仕留めましたが一瞬のことだったので、止められず……すみません!』

「いいよ! 何か物騒な音してるけど、そっちの状況は?!」

『ホステスの命に別状はなさそうです。けれど暴力団の方がかなりいきり立って……拳銃を取り出している始末です、対象をここに入れたら危険です!』

「分かった、残党がいなか確認したらすぐに出て! 平野聞いた?

どんな手を使ってでも対象を遠ざけて!」

『了解です!』

あくまでも、現地の人間の手で、と言うことなのだろう。現地の人間を扇動して歴史が変えられるなら、その方が成功率もずつと高い。暴力団の暴動によって、対象は殺される。それが時間遡行軍の狙いなら、何としてもそれを食い止めるのが刀剣勇士だ。

『時間遡行軍の残党を発見、混乱に乗じて表に引きずり出します！』

「頼んだ！ 山伏、人をできるだけここから遠ざけて！」

「任せよー！」

山伏が小さな装置をぶん、と放り投げた直後、風俗店のドアを破り、敵短刀二体と物吉が絡み合いながら出て来た。物吉は山伏が装置——人々の意識を他方に逸らす物——を使用したのを見て、風俗店の看板を叩き割った。物々しい音、そして関わりたくないと強制的に意識誘導され、近くにいた人々が遠ざかっていく。元々人通りが少ないこの路地は、あつという間に人氣がなくなった。

「張り紙はあるか！」

「用意してあるよ、それっ！」

山伏の要請に応じて、加州が懐から巻かれた紙と立ち入り禁止のテープを取り出し投げ渡す。受け取った山伏は、即座にテープを貼り始めた。

鶯丸と蜻蛉切、加州は抜刀状態になっている。物吉と三振りに阻まれた敵短刀二体と対峙した。鶯丸が物吉に尋ねる。

「物吉、怪我は？」

「軽傷ですね。でも、軽い傷ばかりなのでまだ動けますよ」

「よかった。……さて、中の奴らが出て来る前に仕留めないとな」

しばらく睨み合いが続き、そして先に動いたのは敵短刀だった。二体がかかりで物吉に襲い掛かる。

物吉は前に出た一体を殴り付けるように刀を振る。遠くに追いやられ怯んだ敵短刀の横をもう一体がすり抜けるが、そちらは即座に斬り捨てた。

味方がやられたのを見て、再び物吉に襲い掛かろうとする敵短刀。しかし、

「——おいおい。俺の事忘れちゃいないよな？」

敵短刀の背後から声がしたと思うと、真つ二つになって地に落ちる。視界が開けると、加州が敵を斬り上げた腕を下ろしているところだった。

敵短刀が消滅したのを確認して、加州がゆったりと周囲を見渡す。

「これで全部？」

「はい、風俗店にいるのは。周辺にまだ残党が潜んでいる可能性はありますが……」

物吉が加州達に駆け寄る。蜻蛉切が合点のいかない口調で言った。

「とりあえずは、これで終いか。何と言うか、あつけなかつたな」

「まあ、苦戦するよりはましだろう。周囲を一通り索敵して、平野と合流——」

『加州さん！　こちら平野、対象の近くで会敵、戦闘になりました！』

平野からの通信が入る。加州は目を見開き、平野に問う。

「大丈夫!?!　こっちはとりあえず片付いたから、今からそっちに加勢しに向かうよ！」

『いえ、向かって来た敵は一体のみで、戦闘中の音を聞いて対象もそちらに向かうのを止めました。それよりも、そちらに複数敵が向かってるようです。足止めされて追跡はできませんでした、申し訳ありません。僕もそちらに向かいます、戦闘準備を！』

「了解！」

通信が切れる。同時に、山伏がこちらに駆け寄って告げた。

「加州殿！　敵を視認した、こちらに誘導したほうがいいか？」

「お願い！　……俺達を排除しようつてののか、上等だ」

「やれやれ、茶を飲めるのはまだ先か」

「しかし、不思議だな。こちらに来て、我々に斬られるだけだと言うのに」

「……勝算でもあるのか？　それとも——」

「——きゃあああつ！」

遠くから、小さな悲鳴が聞こえてきた。ヒールの音を鳴らし、その悲鳴は近づいて来る。表通りを悲鳴を上げながら女性が駆け抜け、その後ろを時間遡行軍が追って行く。

山伏が黄色いテープを破り捨てる。加州は舌打ちした。

「別の奴を狙ったか！」

「加州殿！ 敵の印は付けた、後を追おう！」

「当然！ 物吉、調子はどうか？ まだいける——」

加州は物吉がいるだろう方向を見た。しかし、そこには何もなく、ただ猫の鳴き声が響くだけだった。

「あれ？ 物吉？」

「——！」

辺りを見回す加州に、画面のマーカールを見つめていた鶯丸が鬼気迫る様子で叫ぶ。

「加州、急げ！」

「う、鶯丸？ 物吉はどこに」

「印を見る、物吉は敵のところに向かった！」

「えっ？ ——まさか！」

鶯丸の言葉に、加州の顔は血の気を失う。

加州に言い渡された任務、女性の後を追う敵、それを追っていないくなった物吉。このことから答えは絞られてくる。

そして何より、決定的な要因を鶯丸は見ている。女性が走り抜けて行った後、追いかけれないほどの猛烈な勢いで駆け出す寸前の、物吉の顔を。

その様は、言葉通り目の色が変わっていて——。

「恐らく、さつき走り去った女が令嬢の関係者だ！」

6—7 「今はまだ」

「たーだいまー！」

「楽しかったな」

「おかえり。薬研、獅子王、手入れ部屋は用意してあるからな」

「おー。ぴかぴかにして来るぜ」

「血が垂れているよ、獅子王」

「さて、体を清めるとするかな」

春光隊と一期が玄関から上がる。血が落ちたところを長谷部が拭う。春光隊の面々はそれぞれ、手入れ部屋や風呂、台所に消えて行った。

残った鯰尾が一期と話しながらリビングに向かう。

「改めてごめん、俺達だけで楽しんじゃって」

「いつも、あんな風になるのかい？」

「いやあ、今回は久々だったから……いつもはもうちよつと、こう……とにかく、ああじゃないからね！」

「ああ、うん……」

「目逸らされた！」

ソファーにぼふりと座り、鯰尾はローテーブルの上にある煎餅をつまむ。一期もソファーに座り、残って冷え切っていた茶を飲み干した。

一期は、鯰尾に言った。

「鯰尾」

「んー？」

「長谷部殿は、凄いね」

「おつ？ いち兄、長谷部さんの凄さが分かっちゃった？」

「うん。前回もそうだったけど、手入れや出陣の作業を一手に引き受けている訳だろう？」

「あー、うん、そうだね」

歯切れ悪く、煎餅を噛み砕きながら鯰尾が肯定した。一期は、長谷部の眩きを振り返る。

「長谷部殿は、出陣の際に何事か呟いていたね。早口で、内容も分からないけれど、何かの根幹に触れている様な気がした。長谷部殿の頭には、どれだけの情報が詰まっているのだろうかね」

端末に入力しながら何事か呟いていた長谷部を見た時、やはり自分とは違う存在なのだとしみじみ思ったのだ。自分とは違う誰か。自分にはない思考回路を持つ存在。それを、一期は非常に興味深いものと見做した。自分と異なることを悲しむことは、したくなかった。少しの違和感も、彼の個性だと思えば興味深いものに変わる。

一期は、春光隊の長谷部と、友達になりたいと思いはじめた。

「……長谷部殿と、ゆっくり話をすることはまだできないのかな」

「……いち兄」

「分かっている。これがただの好奇心によるものなのか、本当に長谷部殿と親交を深めたいのか私もまだ判別できていない。それでいたずらに長谷部殿を傷付けるのは私も本意じゃない。でも、私は長谷部殿を好ましい存在だと思っているようだ。それだけは、分かってもらいたい」

「……」

鯨尾は黙り込む。リビングに沈黙が落ちる。空になった湯呑みの底に、水滴が落ちるのを見ていた。

しばらくして、鯨尾が神妙な面持ちをして一期を見た。

「……あのね、久々なんだ」

「……何が」

「普通の刀剣男士が、長谷部さんに興味を持つのが」

「……前にもいたのかい、私みたいな刀が」

「うん。でも、その刀は結局、離れて行ったよ」

俯き、指を組んで語る様は、寂しさを滲ませていた。遠い日のことを思い出しているのだろう。過ぎ去った、過去の光を。

「仲良くなりたいたって、その刀も言った。長谷部さんのためだけにここに通いもしてたくらいだから、相当だね。最初は戸惑ってた長谷部さんも、その刀に少しずつ心を開いていった。……でも、ある日を最後に、ふつつりと来なくなっちゃった」

「……」

「ここは、宿り木のような場所なんだ。長谷部さんが、そうすることで悩めるひとを助けようって。多分、その刀も宿り木に一時期止まっていた鳥だったんだ。飛びたい場所——居場所ができれば、ここに用はない。……でも」

鯨尾は語る。一期に警戒心を剥き出しにする、彼のことを。

「その刀が来なくなっただけでしばらくした日、長谷部さんは言ったんだよ。『やっぱり、同じ仲間の方がいいよなあ』って、分かり切ってるような表情で。悲しむでもなく、怒るでもなく。せつかく友達になれそうだったんだよ？ それなのに、どうして簡単に諦めちゃうんですかって、そんな風に簡単に割り切っちゃうんですかって、言いたかった。だけどすぐ気付いた」

湯呑みを持つ手が強くなって、鯨尾の指先が白さを帯びている。一期は、黙って聞いていた。

「長谷部さんは、俺達以外に——いや、もしかしたら俺達にも——期待しないようにしているんだ。どうせ、自分から離れていくからって。どうせ、自分はそんな関係築き上げられっこないって。自分は、そんな大層な存在じゃないって。……そんなの、余りに悲しいじゃないか。怒ったり、泣いたりしてくれる方がよっぽど良かった」

鯨尾の声が、震えだした。長谷部の傷を代わりに背負っているかのように、鯨尾は目に涙を溜める。

「だから、俺達は長谷部さんを大事にしているんだ。そうしたらいつか、長谷部さんが自分を大切にできるって信じて。……少しずつ、成果は出てきてる。だから、今博打をして、振り出しに戻るの嫌なんだ」

ふう、と息を吐き、鯨尾は語りを止める。茶を飲もうとして湯呑みを持つも、途端に空だということが分かり、ローテーブルに湯呑みを戻した。コトンと言う音が、やけに響いて聞こえた。

「……何て言いたかったんだっけ……そう、つまりはいち兄が長谷部さんを好意的に見ていることは嬉しいけど、だからと言って長谷部さんとハイ友達になりましょう、って訳にはいかないってことなんだ

よ。長谷部さん側も、俺達側も」

「……そうだね。春光隊の事情は、まだ良く分からないけれど……それでも、軽い気持ちで近付いて欲しくないと言うのは分かった」

「……うん、気持ちは本当に嬉しいんだけど——」

「私が仲良くなりたいのは長谷部殿だけじゃない。お前や、他の隊員達とも、親しくなりたいと思ってる」

鯨尾が目を見開いた。一期は腿に拳を置き、真剣な顔で鯨尾に告げる。

「だから、お前達の嫌がるようなことはできるだけ避けるようにする。長谷部殿と近付くのが早いなら、時期を待とう。その間、お前や、他の隊員達と話をしよう。そうして少しずつ、春光隊のことを知ってきたい。私の本丸とは別種の暖かさを持つ、この本丸を」

鯨尾は、湯呑みを再び手に持ち、ぎゅつと握りしめる。空の湯呑みを覗くように俯きながら、鯨尾は問う。

「……どうして、そこまでするの？」

「どうしてって……」

一期は、氷雨の鶴丸と初めて会った時のことを思い出す。彼は一目で一期に会への参加を呼びかけ、貴重な端末を手渡した。それから導き出される答えは一つだろう。

「——友達になりたいと思うのに、理由があるかい？」

その言葉に鯨尾は言葉を失う。そして目を閉じて、自らを嘲るように笑った。

「……そっか。そうだよ。何か俺、難しく考え過ぎちゃってたなあ」「私達は少なくとも功を争う間柄じゃない。打算がある関係でもない。それなのにお前達に近づく理由はただ一つ、お前達が好ましいからだ。好ましいものと仲良くなりたいのは、当然のこと、だと思っ」「断定できなかつたことが恥ずかしく、一期は煎餅を手取る。ふはっ、と鯨尾が嘔き出した。

「そこは断言しようよ、いち兄」

「すまないね。私も割と顕現したばかりだから、感情のことは探り探りだ」

「でも……そうだね。そこまでしようとしてくれるのは本当に久々だ。だから一つ、俺達と関わる上で大切なことを教えておくよ」

鯰尾も煎餅を手取る。そして口に啜えて真つ二つに割った。口に含んでいた方の欠片を噛み砕くと、一期に向き合った。

「——灯台下暗し」

「……え？」

「この諺をよく覚えておくといいよ。必ず、どこかで関わってくるはずだから」

鯰尾の表情にもう先程までの暗さは無く、ただ丸く綺麗な目から真つ直ぐ射抜く視線を投げかけるだけだった。

不意に鯰尾が視線をリビングの入り口に向ける。直後、浴衣を着た石切丸が現れた。

「上がったよ。どらいやーはどこかな？」

「あつ、そういや靴下を早く乾かすからって居間に置いたままだ……待ってください、確かこの線を辿って……」

「ああ、あつたあつた。ありがとう、鯰尾さん」

「寒くなつて来ますし、ちゃんと乾かしてくださいねー」

ドライヤーを手渡し、再び石切丸が洗面所に去っていくのを見送る鯰尾。その所帯染みた様子に、一期は心が穏やかになるのを感じた。

6—8 「暴走」

人波に逆らい、表通りを走る。時折ぶつかりそうになるのを、器用に避けて進む四振りには、焦りの色を見せていた。

「ああもう、一目目で起こるなんて！ 非公式程度のもんじゃないだろう、これ！」

「物吉殿にお守りは持たせているか？」

「二応持つてる！ でも、それがあからこそ無茶しそうで怖いんだよ！」

「前は持たせなかったが、それでも暴れつくしていたからなあ……。急がなければならぬことに変わりはない。平野も早く合流できれば良いのだが」

加州は山伏と蜻蛉切にも事情を説明した。今回は本来なら隊長のみが把握している情報であるため、二振りとも多少驚いていたが、すぐに状況を確認し、物吉の追跡を開始した。

平野には、物吉が猛追し始めた時点で連絡を入れてある。平野も全速力で物吉の下へ向かうと言った。しかし、女性の逃げた方向と平野がいた場所からは少し離れている。合流するのは、少し遅くなりそうだった。

物吉のマーカ―は、ある路地を指し示している。人混みを抜け、人通りの少ない場所に入ると、光が無くなったのも相まって、途端に薄気味悪くなる。

四振りにはマーカ―の示す地点に到着した。物吉のいる場所まで、あと少しだ。加州は叫ぶ。

「物吉ー・どこにいるの!?!」

それに応える声は無い。その場で反響するだけだ。地図のマーカ―を睨んで、鶯丸は歯噛みする。

けれど、加州の耳は拾った。——女性の悲鳴と、激しい剣戟の音を。地を蹴り、音の方向へ走り出す加州の後に続く三振り。暗闇の中を動く加州を追うのがやっとだ。周囲を見回す余裕も無く、ひたすらに奥へと進んで行く。

金属の音が、近付いて来た。その音は余りにも激しく、間隔を挟んでいる様子も無い。苛烈な戦闘をしているのは明らかで、どうしようもない不安が四振りを襲う。

そうして彼らは、物吉の下へ到着した。

「はあ……っ、はあ……っ！」

「——物吉——」

物吉は全身ぼろぼろだった。左腕が動かないのかだらりと下がってきたまま動かない。右足の腿に布が巻きつけられてある。よく見ると、物吉の上半身に上着はなく、彼が後ろで庇っている女性に被せられていた。破れている上着で覆われている女性は、寒さだけではないだろう、がたがたと震えて物吉の背を見ている。

残っている敵は、大太刀のみ。その他の敵は地に崩れ落ちており、立っている敵大太刀も、ほとんど死に体といった状態である。

物吉が敵に向かって駆ける。敵は体を軋ませながら大きく刀を振りかぶる。物吉は素早く後ろに下がり、敵の顔面に近くにあつたゴミ箱をぶつけた。

怯んだ敵の隙を見逃さず、物吉は左足で踏み切り大きく跳躍した。

目標は、敵の首筋。そこに刀を突き刺し、踏み倒す。

前方に倒れた敵の首筋から刀を抜く。そして物吉は、敵の脳天を思いつきり刀で貫いた。敵が、こちらの不快感を引き起こされる悲鳴を上げる。

四振りが割って入る暇も無く、戦闘は終わる——ことは無かった。

ざくり、ざくりと物吉が敵の頭に刀を刺し続けている。表情は見えないが、余りにも規則的に敵に攻撃をしている。ざくり、ざくり。刺す合間に、物吉は呟く。

「……許さない」

ざくり、ざくり。その声音には怒気が混ざっていた。敵は、物吉の為すがままにされている。

「……ミサキさんを、この世界から消そうだななんて」

ざくり、ざくり。物吉は手を止めない。最早敵は、物吉の——『彼の怒りを受け、いたぶられるだけのものと化していた。』

「私の目の黒い内は、絶対に、そんなことさせるものか……！」
ざくり、ざくり、ざくり、ざくり。

それは、世界への憤怒。ただひたすらに、不条理への怒りを口にしながら、目の前の敵が不条理の塊であると認識して感情をぶつけ続ける。闇夜に光る黒い目に狂気を孕んだその様は、見慣れないものが見たならこう言うだろう。

——化け物、と。

「……ぼーっとしてる場合じゃなかった。物吉を止めないと！」

「物吉殿！ 聞こえているか、物吉殿！」

「物吉殿、もう敵は倒れている。その辺りで——」

蜻蛉切が物吉の肩に手を置く。物吉の手が止まることは無く、ただ一心不乱に刺し続けている。

「……刀を取り上げても構わないか？」

「うん。……これで戻って来ればいいんだけど」

鶯丸が加州に了承を得て、物吉の手から刀を取り上げようとする。物吉の手は固く握り締められており、苦勞したが無事に手放させることに成功した。

だが物吉は得物を失くすと、今度は片手で敵を殴りだした。敵の姿はほとんど消滅しているのに、残っている部位に拳をぶつけ続ける。

尚も攻撃を続ける姿を見て、加州は苦渋の決断を下した。

「山伏、悪いけど頼んだよ。蜻蛉切、一緒に来て」

「聞き取りだな、分かった」

「任されよ。……すまぬ、物吉殿」

加州は懐からスタンガンを取り出して山伏に手渡し、蜻蛉切と共に女性の下へ走った。

山伏は真面目な顔で受け取り、物吉に近付く。背後でしゃがみ首にスタンガンを当てると、物吉は動きを止め後ろに倒れ込む。彼を受け止めた山伏は、そのまま背負って立ち上がった。

加州と蜻蛉切は、女性に詳しい状況を聞いている。怯えて動けないながらも、女性は何とか話そうとしていた。

背負われた物吉に近付き、鶯丸は呟いた。

「……今回は、気絶させるまでに至ってしまったか」

「うむ。少年の目覚める引き金は分かっていても、鎮め方はまだ良く分かっておらん。また改めて調べねばならぬな」

「……どちらが正気か、か」

鶯丸は空を見上げた。星が瞬くのを見ながら、考える。

物吉も、少年も、どちらも背負われている彼だ。二つの意識は、今も彼の中でせめぎ合っているのだろう。今は物吉が、その体の主人たる椅子に座っている。けれど時々、こうして少年が椅子を奪うこともある。

時折現れる少年は、そのほとんどが攻撃的な性を露わにしていた。彼女関連時のみ表に出るのが幸いなのか、不幸なのか。

共存するのか、消滅させるのか。彼が選ぶ日は、そう遠くないのかもしれない。

「山伏はどう思う？　どちらが主人格になるべきだと考える」「む？」

山伏は目を丸くしながら、物吉を背負い直す。

「そうであるなあ……少年は受け渡すことに同意したのだろうか？　ならば、物吉殿が主人格になるべきではないだろうか」

「そう思うか」「……だが」

物吉はまだ目を覚まさない。背中の物吉に目をやり、山伏は続けた。

「どちらになるにせよ、彼らの選択は尊重しなければな。拙僧は案外、清廉な少年を気に入っているのだ。それに、拙僧は敵を倒すことに躊躇は無いが、罪のない、むしろ善行を積んでいる者を殺すのはどうしても躊躇いがある。できれば、強制的に殺すことはしたくない」

鶯丸は驚く。山伏が少年を椅子の所有者として扱っている。それに、少年を気に入っていたとは。

「……結果、物吉が消滅してもいいと？」

「いや、それは違う。双方が納得する結論を出せばそれでいいのだ。拙僧は物吉殿達が後悔のない選択をすることを願っている」

「そうか。そうだな、結局はそこだ」

何にせよ、彼らが後悔しない道を選べればそれでいいのだ。そして、それを決めるのは自分達ではなく、物吉達だ。

鶯丸は小さく笑う。

「余り細かいことは気にしない方がいい。俺としたことが普段言っていることから外れる考えをしてしまった」

「カカカカカ！ 瞑想もまた、修行であるぞ！」

加州と蜻蛉切が女性を連れてこちらに戻って来る。笑い声を上げる山伏に首を傾げつつも、表通りに向かうことを告げたのだった。

6—9 「少年は祈り、少女は動き始める」

月が高く昇る頃。チャットアプリでは、任務でいない鶯丸を除く三振りで今日起きたことのやり取りをしていた。

『それで本丸に帰った後弟達に正座させられて、こんこんと説教された。まあ一期一振らしくない風景だな!』

『わらいごとではありません』

『そう言う鶴丸も、説教中の自本丸の一期に茶々を入れて喧嘩になり、長兄共々説教される側に回ったのではないのでしたっけ』

『江雪、それは言うな!』

『ひとのこといえないじゃないですか、というかげんあなたですし』

『俺は余りに厳し過ぎる奴の説教で必要以上に萎縮してる短刀達の気を和ませよう』

『やり方がまずいでしよう、やり方が』

『いや、俺の冗談が無ければ間違いなく必要以上に自分を責めていただろう。だから俺は間違ったことはしていない!』

『冗談で窓を叩き割って木を切り倒すのですか。大した冗談ですね』

チャットアプリでも騒ぐ鶴丸に呆れながらも、蒼穹隊の一期は振り返る。

*

あの後、日が傾いて来た頃に春光隊の歌仙、石切丸に見送られ、鯨尾に城下町入り口まで送ってもらった。

「はい到着。ここからは自力で帰れるよね?」

「すまないね、ありがとう」

「今回は連絡入れてないから、自分で何とか説明してね。あんまり目をつけられるようなことはしたくないから」

それじゃあ、と帰ろうとした一期を、あつと叫んで制止させる。

「いち兄、ちよつと待って!」

「どうしたんだい、鯨尾」

「えーつと、確かここに……あつた!」

懐がさがさと探っていた鯨尾が、一枚の紙を差し出す。

それは、大きくポップな文字で「困ったことはありませんか？ あなたの悩み、春光隊がお聞きします！」と書かれたチラシだった。詳しく見てみると、「居場所が欲しい方、息苦しさを抱えている方、話を聞いて欲しい方。我々と一緒に楽しい時間を過ごしましょう！」と書かれた文の横に、笑っている長谷部らしき簡略化されたキャラクターが描かれている。下にはスケジュール、連絡先、必要金額が載っていた。

「本来なら、違うひと達に渡す物なだけどね。いち兄、俺達のこと知りたいって言ってたでしょ？ だからまずは俺達の活動内容を知ってもらおうと思って」

「これは、お前達が作ったのかい？」

「そう。あと、連絡すれば迎えに来るから、遊びに行きたい時はその番号に電話して」

「分かったよ」

それと、と鯨尾が付け加える。

「——多分、蒼穹隊にもお世話になるひとが出て来るかもね」

「えっ、それは——」

一期の声を遮る様に、遠くから足音が聞こえて来る。それを察知した鯨尾は身を翻した。

「あっ、誰か来る。それじゃあまたね、いち兄！」

「あ、ああ、また」

「——いた、いち兄だ！」

乱の声がしたと思うと、どんつと衝撃が走る。背中に思い切り突進して来たのだ。一期は振り向く。

「乱！ すまない、心配をかけて——」

「心配なんてものじゃないよ、こんな時間までどこ行ってたの！」

見下ろした乱の顔は涙で濡れながらも厳しい眼差しを向けていた。慌てて頭を撫でながら一期は釈明する。

「いや、お前達の下に戻ろうとはしたんだ！ でも、飴が美味しくて、そしたら道も分からなくなつて、それで……あっ、乱も飴食べるかい、

美味しい——」

「——いーちーにいー？」

地の底から出ている様な声が、背後から響く。ぎしぎしと振り向くと、弟達——本丸で休んでいたはずの骨喰と鯨尾、鳴狐までが揃って、そこにいた。

「え、えーと、お前達には心配をかけて——」

恐る恐る声をかける。憤怒の表情でそれを遮り、弟達は説教の始まりとなる叫びを上げた。

「——この、方向音痴!!」

*

あれから夕食が始まる時間まで、いや夕食が始まってても説教は続き、自本丸の鶴丸に笑われたり、山姥切に呆れ切った視線を向けられたりしたのだ。あの時ほど穴に入りたい時は無かったと思う。風呂の時間まで小言は続き、自室に戻ってようやく解放、という長丁場であつたのだ。

『しかしよく戻って来られましたね。方向音痴なのですから、戻るのにも苦労したでしょう』

江雪が、鶴丸への突っ込みを放棄して一期に話し掛ける。一期は文机の引き出しに入れたチラシを見つめる。ポップなチラシを貰った相手達のことを、まだ話してはいけないと思つた。

『ええ、それはもう。おとうとたちがみつめてくれなかつたら、ずっとさまよいつづけていたところでしたよ』

だから一期は、こう返した。そうして再び鶴丸が騒ぎ始め、江雪が呆れながら突っ込みを入れる。

彼らも間違い無く友達であると言える。それなのに、春光隊のことを秘密にするのは、後ろめたさを伴う苦しさを感じさせた。

だが、一期は後悔していない。森に住む彼らと、友達になりたいと願つたことを。

「本当にすみませんでした……」

しよんぼりと、物吉がうなだれる。雲霄第一部隊が表通りから近く

の駅のタクシー乗り場まで女性を案内している間、ずっと物吉は落ち込んでいた。

「勝手過ぎる行動はいただけじゃないけど、今回はそれで救える人がいたんだし。処罰はそこまで重くできないと思うよ」

「でも、それではボクの気が収まりません……」

「研究に協力する必要も出て来ましたからね。多分、それで十分処罰になるかと」

加州や平野がそう言っても、物吉の表情は晴れない。女性もちらちらと心配そうに物吉を見ている。

「でも、ボクが制御できなかつたから……!」

「物吉」

鶯丸が、物吉を鋭く制した。物吉は眉を八の字にして、鶯丸を見上げる。鶯丸は、真面目な表情で言った。

「……お前の中に眠るそれが心を持つ者である以上、制御する、と言う表現は良くないな」

「……」

「分かっているだろう？ それにも、過こして来た物語がある。それを蔑ろにするのでは無くて、上手いこと共にあれる様にするんだ」

「……ボクに、できるでしょうか」

鶯丸が物吉の頭に手を置いた。置かれた衝撃で、物吉が一瞬目を閉じる。

「難しいかもしれない。でも、このまま何もしなければずっとそれを知ることもなく、互いが互いを振り回す羽目になるぞ。まずは、相手を知ることだな」

「……相手を」

「研究にも、久々に参加したらどうた？ 大変だろうが、かんせりんぐ？ とかもあるだろう。積極的に相手を知ろうとしてみる。何かが変わるかもしれないぞ」

「……カウンセリング、ですね。分かりました、受けてみます」

気付けば、目の前にタクシー乗り場を示す看板が見えて来た。女性は、前に出て頭を下げる。

「皆様、本当にありがとうございます」

「気にしないで。仕事の一つだから」

「道中お気をつけてくださいね」

女性には、簡易的な記憶消去を施してある。特定の情報を抜き取り、脳の補完機能を活性化させる物だ。今の女性は、「暴漢に襲われたところを男達に助けられ、タクシー乗り場までボディガードの役目を果たしてもらっている」と言う認識をしているはずだ。

「それと、そこの方」

「えっと、ボクですか」

物吉に向かって、女性はさらに深く頭を下げる。物吉はぎよつとした顔をする。

「貴方が助けてくださらなければ、私は今頃死体となっていたでしょう。本当に、感謝してもしりません」

「えっと、ボクは、ただ暴走しただけですし……」

「それでも、命を助けていただきました。何かお礼の品を用意できれば良いのですが……」

その言葉に、物吉の目が黒くなった。そして、にっこりと告げる。

「お礼はいりません」

「え……？」

「でも、そうですね。貴女が結婚をして、子供を産んだ時。その子を大切に育て上げていただければ、それで十分です」

「はあ……？」

疑問符を浮かべる女性に、蜻蛉切がタクシーの到来を告げる。女性は改めて頭を下げて、蜻蛉切の背を追った。加州達も、その後に続く。

その場には、鶯丸と物吉が残された。

「なあ」

「なんでしょう」

物吉の目がまだ黒いことを確認し、鶯丸は問う。

「あの女性は、一体何だったんだ？」

その問いに、ふっと笑って物吉は答える。

「知っているでしょう？ 私が動くのは、彼女に関してのみ。恐らく

あの女性は、彼女の先祖ですよ」

「そうか」

「鶯丸さん」

物吉は——彼は、鶯丸に笑いかけた。

「ありがとうございます。まだ私を、人扱いしてくださいませんか」

その笑顔は、やはり物吉のそれとは雰囲気が違う。鶯丸はそれを改めて認識しながら、重ねて問い掛けた。

「……お前は、まだ生きたいと思うか？」

「私は、彼女のいない世界を認めない。生きたい理由なんて、それだけです。私は彼女以外に興味はない。だから極論、彼女が存在できれば、それ以外はどうでもいいんです。安心してください、物吉さんの邪魔をするつもりはありませんよ」

「そうか」

彼の世界には、彼女しかいなかったのだろう。詳しいことは知らされていなくても、何となく、彼の生い立ちが想像できてしまう。

「……令嬢が、安心して過ごせる様になればいいな」

「そうですね」

東京の空を見上げる。星は見えないが、半月が天に浮かんで、周囲の雲を照らしていた。

蒼穹の粟田口派が城下町を駆け回っていた頃。

乱は、パティスリーガザニアの前を通りながらぼやいていた。

「いち兄、本当にどこいっちゃったんだろう……いち兄は認めてないみたいだけど、あれどう考えても方向音痴だよー！」

長兄の名を呼びながら走り出そうとする。前方を見ていなかったからなのか、乱は何かにつつかってしまった。

「きやつー！」

「あつ、ごめんなさい！ 大丈夫？」

乱は即座に謝罪する。髪を肩で切り揃えていた少女は目を見開いた後、にっこりと笑った。

「大丈夫よ。それより、急いでいるのでしょうか？」

「うん、そうなんだ。本当にごめんなさい、お姉さん！」
そう言つて乱は駆け出す。走りながら、思い起こす。

——あの女の子、目が笑つてなかったな。

そう、少女は口元だけを持ち上げていた。その視線は、まるで自分を蔑んでいるかの様に冷たかった。

あの子絶対性格悪いよな。そう考えたことも、少女のことも、乱は兄を探す内に忘れてしまった。

*

少女は蒼穹の乱が走り去った方向を見た。その視線はもう、蔑む気持を隠そうともしていない。

——紛らわしいのよ、化け物が同じ顔して。

乱が姿を消した後、少女は軽蔑の表情からとろける様な笑顔へと変えて、軽い足取りで歩き出す。

「あの化物共、本当に兄さんの居場所を吐くんでしようね。まあ、どんなことをしても吐かせるけど」

ふふふ、と恍惚の笑みを浮かべる少女。

「兄さん、もうすぐ、もうすぐよ。これからは、私がずっと一緒だからね。ふふ、ふふふふ……！」

不気味な笑い声と共に、少女は路地裏に消える。城下町は侵入者の存在を匂わせず、いつも通りに賑やかだった。

第七話 「嵐の前の日常」

7—1 「蒼穹と氷雨、それぞれの大阪城」

大阪城。かつて豊臣家が栄華を誇った場所だが、そこに昭和の陸軍が工場を作り、紆余曲折を経て今ではよく分からない何か……というより地下ダンジョンの様な場所と化していた。

政府は調査を進めているものの、時間遡行軍が地下に眠る小判を狙って出現するために難航している。そこで、政府は時折審神者に向けて大阪城を開放し、各階にある小判を餌に時間遡行軍の討伐を募った。謎の多い「秘宝の里」への出陣、腕試しの意味合いが強い「連隊戦」への参加には小判が必要になるので、審神者はこぞって討伐に参加する。

万年資金不足の蒼穹隊や本丸の損傷する頻度が高い氷雨隊も例外では無く、討伐への参加を決めていた。

大阪城、三十階。壁は岩で固められ、床は土がむき出しになり、その上には木材が散らばっている。壁には点々と明かりが灯っており、地下を異様に明るく照らしていた。この光景だけ見れば、採掘場だと勘違いしても不思議ではない。

一期が最後の敵を屠ると、蒼穹隊第二部隊はふう、と息を吐いた。

「主からの帰還命令が出た、今日はここまでか」

「ようやく三十階か。本当にここはどうなっているのだろうか」

「つたく、主は慎重過ぎんだよなあ。俺はまだ戦えるつてのに」

「同田貫殿、油断は禁物ですよ。まだまだ先は長いのですから、万全の態勢で進軍しないといけません」

「主さん、僕たちが中傷になると青ざめますからね。僕らが破壊寸前になって卒倒されたら堪りませんから」

長谷部が宙に浮かんだ画面を見て撤退を悟れば、歌仙がげっそりとした声を上げる。同田貫が不満気にしていると、鳴狐と堀川に諭され、しぶしぶ納刀した。一期も、刀身に付いた血を払い納刀する。

今回は、一期が隊長である。隊長になると、味方への指揮を行うためか練度が上がりやすい。おかげで、一期の練度は少しずつ上がって来ていた。

「これより本丸へ帰還します。敵影は無し、小判もありますね」

「おう」

「へし切、報酬の刀装は持っているだろうね」

「へし切と呼ぶな。当然だ」

歌仙と長谷部のやり取りに、春光隊の彼らとはやはり少し違うと感じる。春光隊はどうしているのだろうか。今日空いている時間に電話してみようか、と一期がつらつら考えていると、鳴狐のお供の狐がしみじみと言う。

「改めて、全員怪我が無くて良かったですねえ」

「それじゃあ隊長、お願いします」

堀川の声に頷き、一期は画面上の「帰還」を押す。一瞬の浮遊感の後、景色は薄暗い地下から日が差す本丸の正門に変わった。

正門前には審神者と山姥切がいた。審神者が第二部隊に駆け寄る。

「お帰り！ 全員、怪我は無いな？」

「はい。小判もこの通り」

「よし、でかした！ 今日皆お疲れさん。この後の予定は無いから、好きな様に過ごしていいぞー！」

そう言って、審神者は一期たちの頭を撫でて回る。大抵は苦笑いを浮かべていたが、同田貫は撫でんなど叫んでいる。一期は、審神者に撫でられるのが嫌いではなかったもので、そのままにされていた。ちなみに長谷部は、思いつきり褒められたことに喜びを隠せていない。

山姥切が一期に近づく。

「あんた、すっかり隊長の仕事に慣れて来たな」

「そうでしょうか」

「ああ。この調子だと、近侍の番が回って来ても平気だろう」

この本丸の近侍は当番制だ。一振り一振りときちんと向き合いたいという審神者の意向である。主な仕事は審神者と本丸内の管理補佐である。とある本丸では「主お世話係」などという役職もあるよう

だが、それは必要無いと審神者は主張している（氷雨隊の審神者への態度をはじめ、ここの審神者は気の短いところがあるので本当は必要ではないかと囁かれているが）。

一期は目を見開いた後、表情を緩める。

「山姥切殿のお墨付きをいただけで心強いです」

「……写しの言葉にあまり重きを置くな。あくまで俺がそう思っただけだ」

「最初期からこの本丸を支えている方の言葉です、判断材料には事欠かないかと。写しというのは関係ありませんよ」

一期の言葉に山姥切は被っている布を引っ張り、顔を隠してしまった。山姥切は少し照れ臭そうに早口で一期に尋ねた。

「そーいやあんたは、この後どうするつもりだ？ 粟田口の連中はほとんど遠征に出ているが」

「友刃に会いに城下町に下りたいと思っています」

「あんた、城下町が好きだな」

「賑やかで楽しいではありませんか。山姥切殿は城下町が好きではないのですか？」

「……城下町に下りると、人の目が一気に俺に集中するんだ……」

「ああ、それは……」

綺麗と言われたくない山姥切にとっては、遠くからそう噂されることは地獄だろう。最早布を引っ張りすぎて白い饅頭状態になっている。

土産は何がいいか問うと、兄弟と食べられる物なら何でも、と返された。

氷雨第一部隊は、早々に五十階に到達していた。蒼穹隊よりも功を稼ぐために岩融を組み込み、さくさくと順調に階を降り、五十階で確実に顕現する包丁藤四郎の本体も入手した。

が、蜂須賀は頭を抱えている。

「……本当、主は何を考えているんだ……！」

「拳で殴り合って仲直り、とか？」

「二振りにとっては逆効果じゃないか……?」

「はっはっはっは! 最早敵など目に入っておらん、あやつらは!」
「笑い事じゃないよ、岩融……!」

蜂須賀、蛭丸、愛染、岩融の視線の先には、切り結んでいる鶴丸と一期がいた。敵の死骸を踏みつけながら刀を振るい、嫌味を飛ばしあっている。

「おや、しぶとい。鶴らしく己の血に染まるめでたい姿を、早く拝みたいものですな」

「はっ、君の血で赤く染められたら、さぞめでたいことになるだろうよ! だから大人しく斬られろ!」

「お断りします。冥府なら一振りで行っていただきたい。歴代の主も手をこまねいて待っていることでしょう。今度は黄泉返りなどせずにいられたらありがたいのですが」

「……こちら一帯火の海にしてやろうか、糞餓鬼!!」

互いの地雷を踏み抜きあう嫌味合戦。蜂須賀を除く刀は止める気がない。巻き込まれ喧嘩に参戦することになれば、審神者に雷を落とされるのが目に見えているからだ。二振りは喧嘩の間、嫌味の鋭さが増す。介入してそれを聞かされる可能性もあることも、彼らが積極的に止めようとしなない理由だ。結果、二振りを止めるのは蜂須賀の仕事となる。

蜂須賀は大きいため息をつき、刀装玉に手をかけた。

「投石兵達、頼んだよ。目標は、あの二振りの頭だ」

納刀する気配がない二振りは、蜂須賀が気配を消しながら投石兵を展開したことに気づかない。互いに鬼のような形相で、本気で折りにかかっている喧嘩を続けている。

投石兵が構え、そして。

「がっ……!」

「いつ……!」

二振りの頭上に、石の雨が降った。蜂須賀の要望通り、頭に思いつきり石を落としている。頭を抱えて蹲る二振りに、般若を背負った蜂須賀が歩み寄る。

「……二振りとも、戦場のど真ん中で、何をしていた？」

「うっ、いやその」

「問答無用、そして正座!! 　いつ敵が襲い掛かって来るか分からない状況で、くだらない私闘なんかして! 　他の隊員に迷惑がかかると思わなかったのか!？」

「いや、でも喧嘩を売ってきたのはそのアホウドリで」

「よし、叩き折る!」

「――また石で殴られたいか？」

再び喧嘩になりそうになる二振りに、怒気を滲ませ凄む蜂須賀。二振りはその言葉が脅しではないと感じ取り、口を閉ざした。全く、と息を吐き、蜂須賀は告げる。

「主には全て報告するからね。多分衣文掛けの刑にされるだろう、その間に反省するように!」

「……分かった」

「……はい」

逆らったら自分達では蜂須賀に太刀打ちできないと分かっている二振りは、先程までとは打って変わり、萎びた青菜の様にしおらしくなっている。

「なんか番長みたいだね、蜂須賀」

「力で支配しているのがまさになあ……」

「猛獣に首輪を付けるのは道理よ」

ひそひそと囁き合っている蛍丸、愛染、岩融も、蜂須賀の気迫を感じ取っていた。囁き声の内容を知らずに、蜂須賀は帰還準備を進める。二振りは、正座したままだ。

「全く、あまり心労をかけられたくないんだけどね、こっちも。二振りが喧嘩する度にあちこち壊されて、修繕費が大変なことになっているんだから。そうだ、二振りも修繕工事に参加してもらおう。大変さを実感すれば、少しはマシになるかもしれないしね」

「勘弁してくれえ……土まみれになるのはごめんだ……」

「あの、蜂須賀殿、まだこの状態で――」

「帰城するまで正座」

「ですよね……石が食い込む……」

かくして、二振りには正座したまま本丸へ戻ることとなった。帰還した正門前には、審神者が腕を組み仁王立ちでそこにいた。顔は能面の様に表情が無いが、それが返って彼の怒りを表している。

「たっだいまー」

「あ、主さん、これ小判……あと、包丁藤四郎の本体……」

「蛍丸は大物だな、あの顔の主を前にそう声をかけられるとはー！」
「そうかな?」

審神者はよくやった、と言い愛染から小判と短刀を受け取る。そして、正座している鶴丸と一期へ顔を向けた。

「鶴丸国永、一期一振」

「……はい」

「お前達は任務を最優先にすると考えていたが、その最中に私闘とは、随分余裕のあることだ。なら、今から言うこともこなせるな?」

「……はい」

ここで領かなければ、更なる説教が待ち受けている。これから言い渡される罰を早く終わらせるためには、神妙にするしかない。

「二期は夕食の後衣紋掛けの刑、鶴丸は遠征の後衣紋掛けだ。時間は明日の夕方まで、異論は」

「……ありません」

「よし、ではここで解散だ。皆、ご苦労だった」

一期は立ち上がり、肩を落としてふらふらと本丸である洋館の中へ入る。愛染は審神者から逃げる様に蛍丸を引っ張っていった。岩融は鶴丸の肩を軽く叩いてから一期の背を叩きに向かった。

その場にいるのは、審神者と蜂須賀、鶴丸だけとなった。鶴丸は立ち上がって審神者に尋ねる。

「……主、遠征って調査部隊の?」

「その通りだ。蜂須賀、調査部隊の奴らと呼んで来てくれ」
「分かった」

蜂須賀も本丸の中に入って行く。審神者はそれを見送ってから、鶴丸に任務内容を告げる。

「ある審神者が、歴史修正主義者と内通しているとの報告があった。本日その審神者が現世へ向かい、歴史修正主義者と会合を開くという。その審神者と歴史修正主義者の捕縛が今回の任務だ」

「……へえ。そりやまた素晴らしい景色が拝めそうだな」

大体の内通者は、生き延びようと過去をちらつかせて懇願したり、あるいは激しく罵倒をしたりと抵抗をする。その過去や罵倒が自身の根幹を揺るがしかねないこと、内通者の中には刀剣男士が混じっていることもあり、あまり気持ちのいい任務ではないのが鶴丸の本音だ。

そして、この国を暗闇ごと愛している審神者は、歴史を変え、間違いをなかつたことにしようとする動きが許せない。この国を歪めようとする内通者は殺されて当たり前、という同情する点すら切り捨てるその様は、いつそ清々しかった。

「どんなことを言っても、この国の歴史を変えようとした罪人であることには変わりはない。時間遡行軍が少し会話のできる存在になっただけで、やることは同じだ」

「まあ、できるだけ生かしてはおくがね。俺たちが全員帰還することを優先していいんだよな？」

即ち、こちらに大きな損害を受けるほどの激しい抵抗を見せれば殺害してもいいかということだ。審神者は頷く。

「お前たちは全員重要な戦力だ。もし悪足掻きを止めない様であれば、処理をして構わん。情報を吐かなければ、脳みそをかち割ればいいだけの話だ」

事もなさげにそう言った審神者に、鶴丸は長谷部が喜びそうだな、と思いつつも空を見上げる。秋の空はとても高く、全てを包む様に広がっていた。

7—2 「雲霄と包丁入手事情」

演練場で、双葉の様な逆毛を右側に立てた小さい刀剣男士がひと混みの間を彷徨っていた。

「いち兄ー、平野兄ー？ どこだー？ ……訓練面倒だし、城下町へ人妻探しに繰り出そうかなあ」

探し刀が見つからなかったその刀は、ひつとーづまー、ひつとーづまーと歌いながら演練場の入り口に向かった。自動ドアが見えて来ると、刀は駆け出し、そして自動ドアから入って来た何かにぶつかった。

「いったー！ 何、……！」

「ああすまない、大丈夫か」

ぶつかった相手に文句を言おうと見上げた刀は、相手から発せられている迫力に固まる。本刃は隠そうとしているようだが、僅かに漏れ出る威厳から、当刃の力はかなり高いと分かる、分からされてしまう。

——自分では到底敵わない、機嫌を損ねたら終わりだ。上下関係を理解した刀は、わたわたしながら謝るしかできなかった。

「ごっ、ごめんなさい！ 俺、前見てなくて……」

「いや、前を見ていなかったのは俺も同じだ。……ん？ お前は包丁藤四郎か？」

「えっ、あ、そうだぞー！」

刀——包丁藤四郎の目線に合わせて屈んだ鶯色の髪をした刀は、手に持っていた袋から飴を取り出し包丁に差し出す。鶯色の刀に少し怯えていた包丁は、思わぬ甘味の登場に目を輝かせた。

「確か、包丁は甘い物が好きだったな。ぶつかってしまった詫びだ、受け取ってもらえるか？」

「いいの!? やったー！」

包丁は受け取ってすぐに包み紙を広げる。真っ白な飴玉を口に放れば、甘いミルクの味が口内に広がった。にこにここと笑顔を浮かべて、鶯色の刀に礼を言う。

「美味しいぞ、ありがとう！」

「そうか、良かった。ところで、お前は何で一振りでここに――」

「――包丁、包丁！ どこだ!?!」

包丁を呼ぶ焦燥に満ちた声が背後から聞こえて来る。包丁がくりりと振り向くと、長兄がこちらに駆けて来ていた。包丁は手を振って応える。

「いち兄ー！ こつちだぞー！」

「包丁！ 良かった、ここにいて……心配したよ」

「ごごごった返し過ぎなんだよー！ この刀にぶつかってなかったら、城下町に人妻探しに行つてたところだったんだぞー！」

「……後で教育的指導が必要なようだね……」

包丁の言葉に脱力する一期は、鶯色の刀に気付き慌てて礼を述べる。

「ありがとうございます、包丁を止めてくださつて……」

「構わないさ。それよりも、急がねば演練に遅れるのではないか？」

「そうでした、それでは私たちはこれで。包丁、行くよ」

「うえー、面倒臭ーい……」

頭を下げながら足早に立ち去る二振りを、鶯色の刀は手を振って見送った。

一期に手を引かれながらも鶯色の刀が見えなくなったことを確認し、包丁は青ざめた顔で呟く。

「……うー、あの刀、怖かつたんだぞー！」

「……そうだね。迫力が尋常じゃなかった」

手を引く一期の顔も強張っている。あの気配を前にして表情だけでも冷静でいられたのは、流石粟田口の長兄だと包丁は思う。

包丁は、ふと思ひ浮かんだ事を口に出した。

「いち兄、もしかしてあの刀、雲霄隊っていう部隊の刀なんじゃないのか……?」

「……政府直属の部隊の一つと言われている、あの？ はは、まさか。そうやすやすとこんなところに来るはずが無いよ」

「でも、すーつごく怖かつたんだ！ 少しでも機嫌を損ねたら折られるかもって思うくらいー！」

「うーん、飯にそうだとしたら、何でここに来たのだろうね」

二振りが指定されたドアをくぐり、部屋が閉ざされると、話し声は聞こえなくなった。

*

雲霄の鶯丸はどこかの一期と包丁を見送り、演練場内ロビーの隅にあるベンチに座って他の部隊を観察していた。演練を終えた部隊の中には、包丁藤四郎を含む隊も多く見られた。おおよそ、顕現したての新入りの練度上げが目的だろう。ポシエツトから菓子を出して大人しく食べている包丁もいれば、人妻人妻と騒いで隊員を困らせている包丁もいる。個体差というのは、あくの強い刀にも適用される様だ。

騒いでいた包丁に長兄の手で拳骨を落とされる光景が、目の前に現れた影に遮られる。鶯丸は、その影を見上げた。

「鶯丸」

「主、加州。遅かったじゃないか」

そこにいるのは、加州と審神者だ。呑気に返す鶯丸に、加州はじとりとした視線を向ける。

「主、ふらふらと先に行くって言って、俺に諸々をぶん投げ会議を抜け出した鶯丸に一言」

「ははは、元気でいいことじゃないか。それに、先に様子も見ていたのだろう？」

「そうだな。見事に包丁藤四郎だらけだ」

「じゃあその袋は何なの……ああ、確かに多いね。戦力も強化されて来たってことなのかな」

鷹揚に笑う審神者と、鶯丸の手にある袋を見やっため息をついてから周囲を見回す加州。鶯丸も、改めて周囲を見渡した。

今回大阪城が開放されて一週間弱。その期間で、包丁藤四郎を顕現させているのは中々にいいペースだと言っている。中には「極」となった刀も混ざっている。審神者たちが積極的に戦力を強化しようとしているのは、いい傾向だ。

蒼穹隊と氷雨隊は、どこまで行ったのだろうか。鶯丸は友のいる本

丸に思いを馳せてみる。蒼穹隊は慎重に進軍するだろう、氷雨隊は先月の戦果が蒼穹隊より僅かに少なかったことを気にして、早急に駆け降りて行くに違いない。

そうして、江雪のいる清澄隊に考えが行き当たり、少し気分が暗くなる。

清澄隊は新しい刀を迎え入れられない。江雪は、新しい刀がどんな姿をしているかも分からないのだ。

変に気遣って話をしないのは江雪に悪いと分かっている。だから、チャットでも普通に新しい刀の話が出るだろう。そして多分、こう言うのだ。

——また悲しみの地に立つ刀が増えるのですね。でも、一期が兄弟と出会えることは、喜びましよう。

鶯丸としては、彼に吉報が早く訪れることを願うしかできない。こういう時、心が目覚めてそう時間が経っていない自分が頼りなく思えてしまう。

「……………？　おい、鶯丸？」

鶯丸を呼ぶ声がある。はっと頭を上げると、訝しげな表情をした加州の顔があった。どうしたの、と問われて、首を横に振る。

「早く大包平が来ないかと思っただけだ、気にするな」

「……………そう。ねえ主、大包平の方はどうなってるの？」

「あと少しで安定した顕現が可能になるそうさ。だからもう暫し待つていってくれ、鶯丸」

「だってさ。政府が今年中に何とかするって言ってたけど、年末になりそうかもねー」

心配そうに鶯丸を覗き込んでいた一振りと一人は、いつものように大包平の話題を出せば、それに乗って来た。彼らのことだ、それだけでは無いと分かっているはずだ。

話す気にはなれなかった。清澄隊のことは、天に祈ることしかできないのだから。

「さて、これからどうする、主」

「しばらく見て回ったら帰るか。長くいすぎて萎縮されたら悲しいか

らなあ」

「主、案外人の目を気にするよね。どうでもいいって感じがするから意外に思ってたんだけど」

「老いぼれの身に化け物でも見るような目は堪えるんだよ、加州。特に孫と同じ世代の審神者に泣かれた時はなあ……」

「……あー、それはちよつと辛いかも」

「だが、個の間で見せる人格をよく思われただけで、世間の評価は気にしないよな、主は」

「そりやそうだ」

審神者は、鶯丸の指摘に微笑む。

「世間の評価は流動的な物だ。ちよつとしたことで簡単にひっくり返る。だから、自分自身が能力を正確に把握しておけば、どんな風になれようとも揺るがずに済む。世間よりも、自分自身がどう思うか、だな」

「……おお、主かっこいい！ 輝いて見えるよー！」

「輝くは言い過ぎだよ、加州」

「主、照れているな。まあ、俺も概ね同意見だ」

加州ははしやぎ、審神者は頭を搔く。鶯丸も、審神者の言葉に頷いた。

他人の評価を気にし過ぎていては、それに振り回され、最終的には潰れるだろう。審神者は、あくまでも自分からの評価で自己を確立している。それが過ぎればただのナルシストだが、ちよつどいい塩梅で成り立つ人格は、まさに年の功と言うべきか。そして、政府に勤める中でころころと派閥や評価が変わり行くのを目の当たりにしていたのだろう。その経験も、またこの審神者を形作っていると言えた。

「あー、おほん。じゃあもう少し見て回るぞー！」

「よーし、俺もやる気出して巡回するぞー！」

「これは巡回というより視察じゃないか、加州」

照れ隠しで咳払いをして歩き出す審神者に、加州は腕を上げてついて行く。加州に突っ込みを入れた鶯丸は、立ち上がってその後を追った。

7—3 「清澄隊の事情」

「あつ、一期さん！」

「一期さん、こんにちはー！」

「二期、サッカーしようぜ！」

「なあなあ、弟たちの話してくれよー！」

蒼穹の一期が滑^レ園の門を開けると、その音に反応し子供達が駆け寄って来た。

あつと言う間に囲まれた一期は、歓迎する女子達に笑顔を向けた後、膝かつくんを仕掛けようとした男子の一撃を察知して避ける。

「うおっ！ くそ、引つかからなかったか！」

「ソメゴロー君は上手く気配を消していたよ。君もそれくらいの技量を身に着けなければ、私には届かない」

「ちくしょー！」

地団駄を踏む男子の後ろから、清澄の江雪も歩いて来る。

「こんにちは、一期。ここに来るのは、三週間ぶりくらいですか」

「こんにちは、江雪殿。そうですね、そのくらいになります」

「子供達も今日一期が来ると聞いて、とても楽しみにしていた様ですよ」

「そうだったのですか。子供達に喜んでもらえるのは嬉しいですな」

「私も一緒に遊びたかったですよ。一期はなかなか予想外の動きをしますから」

「予想外って……？」

江雪の表情は穏やかだ。戦とは程遠い場所であるここは、彼にとっても安らげるところなのだろう。

江雪の後ろからソメゴローが姿を現し、一期に指を差して告げた。

「二期！ 俺と勝負しろ！」

「えっ、ソメゴロー君？ 一体どうしたんだい」

「いいから！ 俺と剣道で勝負しろ！」

いきなり宣戦布告された一期は戸惑うばかりだ。鬼気迫る様子を見せて、一体どうしたのだろうか。

つい、と一期の服の裾を引かれる。振り返ると、サクヤが後ろめたそうに見上げていた。

「ごめん、一期さん。多分俺のせいだ」

「サクヤ君」

「昨日俺、ソメゴローに将来やりたいことを話したんだ。一期さんに相談したことも。そして、全然知らなかった、俺じゃ力になれないのか、って落ち込んだじゃって。そんなことないって言ったんだけど。そしたらさつき『俺があいつに勝ってサクヤの相棒だつてことを証明してやる!』つていきなり叫んでさ。……ソメゴロー、一期さんを超えることで自分の力を証明したいんだと思う」

なるほど、と合点が行く。ソメゴローは、親友の悩みに寄り添えなかったことにショックを受けたのだろう。自分は親友の悩みを知らず、無神経なことを言ったかもしれない。そしてそれを解消したのが、知り合つて間もない一期だということ。それが彼の焦燥を加速させたに違いない。

サクヤが、溜息をつきながらソメゴローに近づき、言った。

「ソメゴロー、力の差つてものを考えなよ。ソメゴローと一期さんじゃ、どう考えても遊ばれて終わりだよ」

「何だよ！ サクヤは俺が負けるつて言うのか!?!」

「どう考えても負けるでしょ、常識的に。一期さん、優しいな雰囲気だけど筋肉あるみたいだし、勝負事には容赦ない気がするし」

ぐつと言葉に詰まり、次第にソメゴローは目に涙を溜め始める。

「……サクヤは、俺がバカで頼りないつて思ってるんだろ」

「はあ……何度も言ってるけど、そんなことないよ。ソメゴローのことは頼りにしてるつて」

「じゃあ何である時話してくれなかったんだよ！ サクヤが、親のこととかやりたいこととか一切知らなくて、俺、寂しくて、置いてかれたみたいで……」

ソメゴローは、いよいよ涙を落とし始めた。拳を固く握り締め、俯いてしまっている。

冷静に窘めていたサクヤは流石に動揺を見せ、辛うじて声を絞り出

した。

「ソメゴロー、あのさ」

「——サクヤのバカ！ うっ、うわあああん」

ソメゴローは、サクヤに罵声を浴びせて泣きながら棟内に駆けて行ってしまった。その場には、気まずい雰囲気の子供達と江雪、一期が残された。

「……ソメゴローが泣くの始めて見た」

「ねー……ちよつとびっくり」

女子達がひそひそと囁き合う中、男子達はサクヤの肩を叩いた。

「気にすんなよ、サクヤ」

「そーそー。あいつサクヤに寄りかかり過ぎだったんだよ」

「たまには離れてみるのもいいんじゃないか？」

「一緒にサツカーしようぜ！ お前、運動神経いい癖に全然外に出ないから本気出してるってこ見てみたいんだよ」

サクヤは彼らの言葉に小さく頷いてはいるが、視線は棟内に向けられたままだ。

一期は、どうすることもできずに彼らを見ていた。

「……ソメゴロー君とサクヤ君が喧嘩をしたのは初めてですね」

「え、そうなのですか？」

側にいた江雪が漏らした一言に、一期は振り返って尋ねる。表情が暗いまま江雪は頷く。

「ここに通う様になってしばらく経ちますが、二人があんな風にぶつかり合うことなどありませんでした。彼らはなかなか息が合っているのです、相棒と言っても差し支えはないと思っています」

「しばらく？ 江雪殿は、いつ頃からここに通っていらしたのですか？」

「……そうですね、今年の始め頃にこのことを知り、通い始めました」

今は十月下旬だから、半年以上の間ここに通っていることになる。その間、一度も喧嘩らしい喧嘩は無かったのか。性格は正反対だが、彼らは本当に仲がいいのだろう。

ふと思い浮かんだことを、一期は何気なく問いかけた。そう、本当に何の気も無しに。

「何かここを知るきっかけでもあったのですか？」

江雪が固まる。その様に、聞いてはならないことだったと悟るが、もう遅い。一期は慌てて話を打ち消そうとする。

「話したくないのならそれで構いません、不躰なことを——」

「……いえ、いずれ話さなければいけないことです。話しましょう、私の、これまでのことを」

江雪は息を吸い、顔を上げた。目の前では、男子達がサッカーの準備を始めている。

「私は去年の今頃に顕現しました。戦うために呼び出されたことを知り、深く嘆きましたね。私は始めての顕現難易度四の太刀だったそうで、同じ刀剣男士に強い戦力として見なされていたのも、悲しみの素となりました」

しかし当の審神者は、仕事として出陣させなければならぬ最低限のことをこなした後は、刀剣男士を出陣させなかったという。刀達の中には不満や疑問を上げるものもいたが、しばらく審神者を観察して、江雪は気づいた。

「彼も、戦いを嫌っていたのです。できれば、敵とも和睦を結び、無意味な争いを避けようとする、そんな方でした」

男子達がサッカーボールを運動場に線で描いたコート中央に置き、キックオフを行おうとしている。男子の一人がボールを蹴り出し、試合が始まった。

江雪は、子供達を見ている様で見ていない。どこか、遠くに誰かを見ている様な目だった。

「主とは、時々語らうこともありました。結論はいつも悲しいものですが、だからこそ己の世代だけで済ませたいと、そう考えているようでした。……子供が戦場に向かうことを、彼は避けたい様子でしたね」

審神者は元々、教育の場にいる人間だった様だ。子供達が健やかに育ち、巣立つのを見るのが何よりの喜びだと話していたそうだ。

ボールを奪おうと、サクヤともう一人の男子との間で小競り合いが起きている。それを制したのは、サクヤだった。

「……今年の一月末のことでした。主が、他の審神者と現世で会合を開くことになったのです。その日の近侍は私でした。主は私に、皆のことを任せて現世へ赴きました」

サクヤが味方へのパスを駆使しながら、どんどん相手チームのゴールへ向かっていく。相手チームのメンバーが阻止しようと動いているが、止められない。

「二報が入ったのは唐突でした。歴史修正主義者がその会合を嗅ぎつけ、会場に時間遡行軍が襲撃して来た、と。会合に参加したほとんどの審神者は死亡、私の主は何とか一命を取り止めましたが——今も、意識は戻っていません」

サクヤが、ゴールへ向かってボールを強く蹴った。キーパーはボールを止めようと横に跳ぶが、ボールはゴールの網に鋭く突き刺さった。

「その後、次々と私以外の方が人の形を保てなくなりました。私の本丸は、どうも古い形態だったようで。審神者が衰弱した場合、近侍以外の刀剣男士は大部分の力を失うと、こんのすけは申し訳なさそうに話していました」

ボールは、再び中央に戻った。ゴールを決められたチームの一人が、ボールを蹴る。

一期は、何も話さなかった。話せなかった、というのが正しいか。江雪は悲しみを湛えて試合を見ている。

「時折、政府の方が様子を見にきていたのですが、私は何も話す気になりませんでした。事態が変わらないのを受けて、次第に彼らの足も遠のいていきました」

ボールが子供達の足を行ったり来たりしている。外野の子供達はプレイヤーに声援を送る。女子達もちらほらと観戦しているようだ。「そんな中、氷雨隊の鶴丸が本丸に訪れる様になりました。彼は時折ふらりと現れては世間話をしたり、見知らぬ物を寄越したりと、まあ色々構って来ましたね。最初は私も拒絶していたのですが……次

第に、彼が来ない日に静けさが痛くなってしまいました。そう言うとは彼は端末を差し出して『これでいつでも連絡してくれ。寂しい時は話し相手になるぜ』と。……あの痛さが寂しさだと、ようやく私は理解しました」

鶴丸に理解させられたのが少し複雑なのですがね、と江雪は言う。静けさが痛い、というのがどんな物なのか、一期は想像できなかった。自分の本丸では、いつもどこかしらで声が聞こえて来るのだから。分からないことに同意することもできず、一期は黙って江雪の話を聞いていた。

「端末でやり取りし出してから、時折会に参加しないかと鶴丸に誘われることもありましたが、しばらくの間は断っていました。そうしたら鶴丸が『籠るよりは外出する方がいい。そういや城下町に児童養護施設があるが、行ってみるかい?』と言われて、私は滑^レ園に顔を出してみました」

歓声上がる。またサクヤのいるチームが点を取ったようだ。

江雪は仲間と手を叩き合うサクヤを見て、ふつと笑った。

「そこには、無邪気に未来を信じている子供達の姿がありました。私には少し眩しいくらいに、彼らの表情は明るくて……そんな子供達に手を引かれて、いつの間にか私も泥だらけになっていました。私は、しばらく感じられなかった幸福を、再び噛み締められたのです」

再び、ボールが中央に戻る。ボールが動く度、歓声と野次が上がる。ここの子供達は、確かに希望に溢れている。手を引かれ、共に遊んだことで、江雪にも希望が宿ったのかもしれない。

「……長くなりましたが、ここを知ることになった経緯は以上です。気分の良くない話もあったでしょう」

「……いえ、こちらこそ、思い出したくない話もあったでしょうに、無神経に話を振って申し訳ない」

「いいのです。かつての話ができるようになったのだと、実感しましたから」

きつと、今でも江雪は傷付き続けている。その度に子供達によって手当てが施されている彼は、それでようやく立っていられる状態なの

かもしれない。

友達として、自分は彼の支えになれているだろうか。一期は思わず問うていた。

「……江雪殿」

「何でしょう」

「私といて、楽しいですか？」

一瞬目を見開き、江雪は微笑んだ。

「楽しいですよ。貴方は他の一期一振りよりも賑やかですから」

「褒め言葉として受け取っておきますね」

ふふ、と笑い合う二振り。

一期は友の小さな幸福になれていることに安堵した。自分が、どんな形であれ彼にいいように作用していたらいい。そのための努力は、決して怠ってはならないだろう。

密かに努力を誓う一期の耳に、門の方向からガラガラと車輪の音が聞こえて来た。

「こーんにーちはー！ 今日のお弁当の配達でーす！」

「あつ、今日は狸々木庵の弁当か！」

「ハルカ姉ちゃんー！」

若い女性の声に反応して、子供達が門へ走り出す。サクヤは棟内へと駆けて行った。一期が声の方へ向かうと、そこには子供達に群がられ笑顔を浮かべる髪を下方で一つに結んだ女性と、丸刈り頭が特徴的な仏頂面の青年がいた。

「ハルカ姉ちゃん、今日の献立なあに？」

「今日はねー、鮭の切り身がメインだよー。あとは大学芋も入ってるよー！」

「やった、大学芋ー！」

「サトル、相変わらず無愛想だなー。そんなんじや客に逃げられるぞー」

「……余計なお世話だ、というか俺は厨房担当だからな」

にこにこ子供達に向き合い弁当を配る女性とは正反対に、青年は愛想の無い態度で子供達と向かい合っていた。女性が一期に気が付

き、あつと声を発する。

「貴方は、よくうちで会を開く刀剣男士さんの一振りですよね？」

「ええ、はい。蒼穹が一振り、一期一振と申します。うちの店、とはも
しかして猩々木庵の？」

「はい。一度顔を合わせていると思いますが、私はただの店員でした
ものね」

そうして、女性は一礼し、笑顔を浮かべる。

「私は木枕遥コマクラハルカと言います！ 猩々木庵に勤めて早二年、今じゃすつかり
看板娘でーす！」

「……看板娘じゃなくて岩盤ゴリラだろ、糞姉貴。——ぐあつ!？」

空になった弁当入れをガツと掴み、ハルカは青年の頭に強烈な一撃
を与える。頭を抱えて蹲った青年を見て子供達の間にも動揺が広がっ
た。弁当入れを元に戻したハルカは、人を殴ったことなどない様な微
笑みを浮かべる。

「オホホ、愚弟が失言を致しまして」

「くつそ、俺は本当のことを言っただけじゃねえか！ 大体あの箱を
片手で、しかもあの力でぶん殴るってのがおかしいんだよ、——いつ
!？」

「——今度は荷台ぶつけるぞ」

鈴の鳴るような声から一転、地から響くような低い声で恫喝し、青
年の足を踏み付けるハルカ。足を離された青年は、再び蹲り踏み付け
られた足を抑えている。恐ろしい顔で舌打ちを一つした後にはもう、
ハルカの表情は先程の笑顔に戻っていた。

「えー、一応紹介しておきますね。愚弟の悟サトルです。ほとんど厨房にい
るのであまり顔を合わせないかと。まあともかく、一期さん！ 猩々
木庵を是非これからもご贖い願いますねー！」

何事も無かったかの様に店を宣伝するハルカに、子供達の顔が恐怖
に染まる。固い表情の江雪が呟いた。

「……やはり恐ろしい方ですね、ハルカさん……」

一期は、引きつった笑顔の裏でその言葉に頷いていた。滑ツル園側の
ハルカへの評価が一つになった瞬間だった。

7-4 「奇襲／懸念」

時空座標を指定し、夜の現世に降り立った鶴丸をはじめとした氷雨の調査部隊の面々は、とあるビルの前にいた。隊長の長谷部が五振りへと任務内容の確認にかかる。

「さて、今回の任務はこの建物内にある居酒屋で行われる会合の襲撃、及び歴史修正主義者とそいつらに与している審神者の捕縛だ。できる限り生かしておけとのことだが、相手側の激しい抵抗が予想される。その場合は、頭部さえ無事ならどう対処しても構わない」

「今回はどのくらいの規模なんだい？」

「そうだな、人間の数は十数名程だが、刀剣男士の所持数が不明だ。くれぐれも気を抜くなよ」

鶴丸はビルを見上げる。この中で、政府に仇をなす者達による会合が行われているのだ。周囲を見ると、緊張で張り詰めている調査部隊には目もくれずに、酒の席へと向かうサラリーマンやOLが歩いている。すでに酔いが回っている者もいるようで、下品な騒ぎ声も聞こえて来る。彼らは、歴史を変えようとしている者がこの建物内にいることなど、少しも考えていないのだろう。

ぼーっとしていた鶴丸に、堀川が声をかける。

「鶴丸さん、大丈夫ですか？」

「……ああ、すまん。何だつて？」

「いえ、ぼんやりしている様だったので。体調は悪くないですか？」

「ああ、大丈夫だ。……何というか、俺達はあくまで裏方なんだな、と思っただけだ」

「……？」

首を傾げる堀川に、鶴丸は苦笑しながら続ける。

「俺達は、政府から公表されていない存在だ。政府は堂々と俺達の存在を喧伝して協力者が大幅に増える得よりも、反逆者が大幅に増える損を重視した訳だ」

「……それは」

「俺達は世間から評価されない。それはまあいいが、下手したらこの

国が滅ぶ危険と隣り合わせだっていうのに、人々はそれを知らず呑気に暮らしていて、こうして戦っているものがあることも知る由も無いんだらうな」

堀川が拳を握り締める。俯いて、何かに耐える様に体を震わせている。鶴丸はそれに気付かず、飄々と言葉を並べた。

「まあ、でもその方がいいか。暗い顔が並んでいるよりかは、明るい顔が並んでいる方がいい。例え俺達が認知されなくても、明るい顔を裏から守っているのが俺達だってことは、紛れも無い事実なんだしな」

「鶴丸、堀川！　そこで何をしている、作戦会議の途中だぞ！」

苛立ちが混ざった長谷部の呼ぶ声に二振りは振り向く。鶴丸は手を上げて長谷部達の下へ向かった。

「……それでも僕は、兼さんが——」

堀川の言葉は風にさらわれ、誰の耳にも届くことはなかった。

*

鶴丸は、青江と行動を共にすることとなった。建物内の構造を確認し、現場の状況を把握する。標的は地下にある居酒屋を貸し切り、現在も会合を続けているようだ。

薄暗い廊下は少し埃っぽく、埃独特の匂いと居酒屋の料理の匂いが混ざり合っていた。鶴丸と青江はひそひそと囁き合う。

「どうするかい？　このまま突っ込んで構わないけど……襲撃のこどだよ？」

「……いや、小夜坊達の報告を待とう。刀剣男士がどのくらいいるのか、それを確認してからでも遅くは無いだろう」

長谷部と次郎は店員側に話を付けに行き、そのまま店内で待機している。小夜と堀川は、偵察に行き相手側の戦力の大まかな予測を立て、報告するのが役目だ。

戦意を滾らせている青江を宥めながら、報告を待つ。しばらくして、ガタンと音を立て小夜が天井から降りて来た。

「……鶴丸さん、青江さん」

「おかえり、小夜」

「小夜坊、どうだった？」

小夜は淡々と告げる。

「……審神者側は短刀三、脇差二、打刀一。歴史修正主義者側は短刀五、脇差一です」

「……守り刀を連れて来たとも見える、が」

「室内戦を想定しているとも取れるね」

数値には出ないが、基本的に室内での戦闘では小回りが利く方が有利だ。審神者側はまだ近侍を連れて来たと考えられるが、歴史修正主義者側はあからさまである。

確実に戦闘になる。その推論に鶴丸はため息をついた。

「同士討ちは好きじゃないんだがなあ」

「いつも君はやってるじゃないか、一期一振と。それと同じような物だと思えばいいよ」

「アレは特殊だ！ 敵側に寝返るのはいけないが、俺は標的に恨みはない！ というか、室内の破壊は禁止のはずだろ!?!」

「……本丸も破壊禁止の掟が出ているんですけどね」

「破壊禁止の意味が分かっていたとはねえ、余計にタチが悪いかな?」

「本丸が壊れるのは事故だ、事故！ それに、壊しているのは奴も同じだ!」

「事故ってことにしているのがタチ悪いって言ってるんですよ……」

「そもそも先に手が出るのは奴だろう、何で奴の罰は俺に比べて軽いんだ、壊しているのだから奴もそうだし、俺はそんなに信用ないか、畜生今度は……」

小夜と青江は呆れ顔だ。それも当然の話、鶴丸と一期の喧嘩は本丸を破壊して回ることが多いのである。窓ガラスを割って武器にしたリ、テーブルをひっくり返したり、壁に穴が空く程の力で相手を投げ飛ばしたり。破壊禁止の意味を理解しているのかどうか分からないくなるレベルのアクロバティックな喧嘩を繰り返しているのだ。そして、審神者と蜂須賀に叱られるまでがお約束となっている。

任務中であることを忘れてここにいない存在に恨みを募らせぶつぶつと呟く鶴丸に、青江と小夜はもう物が言えなくなる。

「本当、鶴丸さんは一期さんのことになると、なんていうか……」

「はつきり言っていていいよ、小夜。子供っぽいって……ん？」

懐に入っている端末が震えている。それに気付いたのだろう、鶴丸の恨み言がようやく止まった。通信相手は長谷部だ。

『小夜、報告は済んだか？』

「……長谷部さん、助かりました……」

『？ 何かあったのか？』

「しようもないことだよ」

訝しげな声を発する長谷部に青江は適当に誤魔化した後、真剣な声で問う。

「……報告は聞いたよ。確認だけど、戦闘になるのかな？」

『そうなるだろうな。……これから襲撃だ、手筈通りに。店の責任者に話は通したから抜刀して構わないが、店はなるべく壊すな。刀剣男士が六振りいる、無力化させるのは骨が折れるだろう。気を引き締めてかかれよ』

「了解」

通信が切れて、辺りは静けさに包まれる。刀を出してから店内に入ると、がらんどうの客席が彼らを出迎えた。店の奥からドアが閉まる音が響く。恐らく、店員が避難していたのだろう。奥の個室が並ぶペースへ歩くと、そこには次郎太刀と長谷部が立っていた。

「堀川は天井で待機している。俺が合図を出したら突っ込め」

「出口はアタシが塞いでおくよ！ 存分に暴れて来な！」

次郎太刀が、三振りとすれ違う様に入り口へ移動する。長谷部はテーブル席に繋がる角で、標的を逃がさぬ様に立っていた。

標的達がいる座敷の前に着く。中からは、物音一つもしなかった。青江と小夜の様子と堀川が天井にいるという話から、中にいるのは確かだが。——勘付かかれているか。鶴丸は刀を握りしめる。相手も、徹底的に抗戦するつもりなのか。

襖を挟んで探り合いが続く。襖を睨んでいると、手に汗が滲む。小夜は髪を逆立たせ、青江は唇を舐めている。双方、物音は立てていない。張り詰めた静寂が続く。

そうしてどれほど経ったのか。長谷部が、靴をトン、と鳴らした。

——突撃の合図だ。

真つ先に青江が襖を開ける。中では既に、敵の刀が刀装兵を展開していた。

テーブルの上に、わらび餅二つとあんみつが置かれている。他のテーブルでも、女性達が甘味に舌鼓を打ち、会話に花を咲かせている。一通り演練場を見て回った後、雲霄の鶯丸、そして審神者と加州は、甘味処・素馨屋に立ち寄り軽食を摂っていた。加州がわらび餅を切つて口にする、満面の笑みをこぼした。

「んー、やっぱりこのわらび餅おいしいー!」

「茶もなかなか美味しい。休息にはもってこいの場所だな」

鶯丸も茶とわらび餅の味に満足している様で、穏やかな表情を浮かべていた。

「何だかお前さん達を見ていると、孫のことを思い出すなあ」

審神者が表情を緩める。加州はわらび餅を喉の奥に流し込んだ後、軽く首を傾げた。

「主のお孫さんって、俺達会ったこと無いよね。まあうち、色々機密事項を扱っているから当然なのかもしれないけど」

「気になるのか、主の孫が」

「そりゃあね。時々話にも上がるし、どんな子なのかって興味は沸くよ」

「はは、孫とは最近会えていないからな、今はどんな風になっているか想像もつかん。子供の成長は思っていた以上に速い」

「まあ、鶯丸とかからしたら主も孫みたいなものだよな」

「それはそうだな。人間の生は目まぐるしい」

鶯丸は茶をすすする。彼からすれば、審神者も数多に見て来た人間と同様に大切な孫のような存在だ。あつという間に育ち、そして老いていく。彼の生涯を見届けるのが、今の鶯丸が楽しみの一つとしていることである。

加州は目を輝かせ、ずいっと顔を審神者に近づけた。

「で、で、主のお孫さんってどんな子?」

「食いつくなあ、加州。……俺の孫は、なかなか渋い趣味をしていてなあ。あの年でジュースより茶を好んだり、囲碁に興味を示したりな。何だか妙にませていて、物分かりが良すぎる印象があったよ」

審神者はあんみつを掬い、口に運ぶ。飲み下してから、先を促す加州に微笑みながら話を続けた。

「でも、俺が孫の所に来た時はくつついて来ていてなあ。何が楽しいのか、俺の昔話をねだったりしていた。それと、あの年でわがままを滅多に言わないのが心配で仕方がなかったんだよ。だから行ける時は遊びに連れ回したりもした。遅くまで遊んでいて嫁に怒られた時も俺のことを庇っていたんだ、俺が孫に楽しんで欲しくてしたことだつてのにな」

「へえー。いい子なんだね、お孫さん」

「周囲の顔色を窺うような性質があるようだな、主の孫は。当時は何歳だったんだ？」

「審神者になってからはメールでやり取りしているだけだから、最後に直接会ったのは……三年前か、孫が六歳の時だな」

三年、という言葉にぎよつとした表情で加州は立ち上がって叫んだ。

「うっそ、三年も会ってないの!? 子供の三年って長いよ!」

「加州の言う通りだな、休暇を取って一度会いに行ったらどうだ？」

鶯丸の提案に、困った様に審神者は言う。

「戦況があまり良くないのに放置はできんよ。この町に何かあったら大変になるのは俺だ」

「だからって……」

「それに、孫は俺にも気を使っているようだな。喜んではいたものの、鶯丸の言う通り俺の顔色を窺っていた。……俺は親戚だが、家族じゃない。あまり、心労を掛けたくないんだよ」

加州が口を止める。審神者の顔は仕事の時のそれではなく、孫を案じる祖父のものだった。

確かに、一緒に住んでいない人間は、親族とはいえ気を使ってしまうことが多い。敏い子の様だ、両親が緊張しているのも察していたの

だろう。

暫しの沈黙の後、二振りは口を開いた。

「……でもさ、家族じゃないからこそ話せることもあると思うよ。家族には、家族ならではの緊張感があるんじゃないかな」

「主が行くことで別の緊張に切り替わる……つまりは、家族と過ごしている時の緊張が解れると考えればいい。話を聞く限りでは、好かれているのだろうか？ 時折顔を出すくらいなら、孫も羽を伸ばせられるんじゃないか」

そして、家族以外の人間が家庭内に来ることで、ある種のイベントのような高揚をもたらす緊張感に変わるのもまた事実だ。ずっと家族だけで過ごすという閉塞的な環境は、精神状態上あまりいいとは言えない。友達にしろ、親族にしろ、他人が家庭に時折介入することは、部屋の風通しを良くする様に家庭内の澱みを軽減させる可能性がある。

審神者は、眉間に指を当て、考え込んでいる。それに、鶯丸が追撃した。

「主は、個と個の関係では少々臆病な気があるようだな。ここは一つ、俺が普段言っていることを実践してみたらどうだ」

「……他人のことなんか気にするな、か」

「そうだ。完全に嫌われているなら話は別だが、孫からはある程度好感度を得られている。なら、迷惑なのではないかななどと考えずに、主が孫に対してどうしたいかを考えてみる。まあ、答えは明白だろうか」

鶯丸は湯呑を持ち上げる。茶を口に含みながら、審神者の答えを待った。加州も審神者を見つめて、口に出される言葉を待っている。

審神者は眉間の皺を緩め、高らかに笑い出した。

「……ははは！ そうだな、孫はかわいいから何度だって会いたい！ 最初からそれだけ考えればよかったんだ。まあ孫の家に毎回訪れるのは流石に大変だから、たまにはここに呼ぶのもいいだろうな」

吹っ切れたように笑う審神者に安堵しつつ、加州と鶯丸は後半の言葉に反応する。

「お孫さん呼ぶ時は言つてね、城下町案内するから！」

「おう、もちろんだ！」

「茶菓子も用意しておかなくてはな。主の孫は苦手な物はあるか？」

「特にはないが、練り切りを持って来た時は大層はしゃいでいたな」

「なら、牡丹一華堂の物を。孫の舌に合えばいいのだがな」

「孫がここに来たら驚くだろうな、何せ時代劇に出るような城下町があるんだから」

和やかに孫が遊びに来ることを想定した話をする鶯丸達。

孫はこの町を『地球上にない場所にある観光スポット』だと認識している。一般人の大多数がそう認識していることだろう。一部の出資している企業の上層部以外の一般人は、ここに戦争をしている本丸があると知る由もない。

その辺りも配慮した観光プランを組み立てねばならないと話し合う一人と二振りの耳に、ある言葉が飛び込んで来た。

「——ねえ、聞いた？ 城下町にまた人を襲う幽霊が出たんだって」
「聞いた聞いた、怖いよねえ」

幽霊。その言葉を聞いた途端に、雲霄の面々は話すのを止め、幽霊の話を出したテーブルに耳を傾ける。

「ここに来るまでは幽霊とか！ って信じてなかったけど、怪我人まで出るとさあ」

「信じざるを得ないよね、夜出歩けないじゃん」

「何でもその幽霊は刀を持って、落ち武者の霊なんじゃないかって」

「早めに引き上げたほうがいいかなあ、せつかく来たのにねえ」

話している女性達は、どうやら旅行客らしい。『刀を持っている』という内容に落ち武者の霊と反応する辺り、刀剣男士の存在を知らない様である。

審神者は、加州に命じた。

「加州。あの女性達に詳しく話を聞いて来てくれ」

「りょーかい。行って来ます」

加州は席を立ち、女性達に近づいて行く。女性達はいきなり二枚目の青年に話しかけられて驚いている。鶯丸は、審神者と顔を突き合わ

せた。

「……『幽霊』は、蒼穹隊と氷雨隊が退治したと聞いたが」

「新たなものが出たか……頭が痛い話だ」

氷雨隊からは研究所の調査時に討伐、蒼穹隊からはわざわざ『幽霊』を討伐しに行ったと報告があつた。彼らは、『幽霊』の正体を現時点では不明だと結論付けていたが、雲霄隊は別の推論を出していた。そのことを考えて、審神者は頭を押さえる。

「飲み会でも『幽霊』の話は出ていたが、蒼穹の一期と氷雨の鶴丸は思うところがある様子だった。あの二振りは頭がいい、正体に気付かれるのも時間の問題だろう」

「だよなあ……ああ、頭が痛い」

鶯丸が『会』での様子を話すと、いよいよ審神者は頭を抱える。鶯丸もまた、眉をひそめていた。

真実を知った時、あの二振りはどう反応するのだろうか。湯呑を持つ己の手が軋んでいる。怖いのか、何がだろう。もしかして、あの会のもの達に侮蔑の目を向けられることが怖いのか。長くこの世にあつたはずの自分が、心を目覚めさせられた途端にこの有様だ。まだまだ悟りには遠いな、と鶯丸は自嘲する。

加州が戻つて来て、声を潜め報告した。

「……やっぱり、新しい『幽霊』が出たみたい。持っている刀は打刀、ここ最近現れた奴じゃないかな」

「そうか……やはり、研究所跡地から出た奴か？」

「それなんだけど、ちよつと気になることがあつて」

加州は緊張した面持ちで疑問点を上げる。

「研究所から『幽霊』が現れたのは二、三日前で、そこからここら辺まで来るには一週間くらいかかるよね？」

「そうだな」

「あの人達の話からすると……その『幽霊』は昨日、急に城下町に現れたみたい。特徴も、二、三日前に出現したのと一致してる」

審神者の顔が驚愕に染まる。鶯丸も、驚きを隠せなかつた。

『幽霊』は、近くに人がいない限りゆっくりと移動していく性質があ

り、出現するのは決まって研究所跡地からだ。前触れもなくいきなり城下町に現れることなどあり得ないのである。蒼穹隊が遭遇した『幽霊』は研究所跡地からやって来たものだったが、今回は急に出現したそうだ。

「……………おかしいよね？」

「ひっそりと城下町に来たのか、それとも……………」

「それとも、何？」

審神者が言葉を止め、腕を組んで黙り込んでしまう。加州が審神者に問うが、答えは返って来ない。

鶯丸が、審神者に代わるように答えた。

「主、もう一つの可能性の方が濃厚だろう」

「もう一つ？ それって」

「薄々勘付いてはいるんじゃないか、加州」

「えっ、——もしかして……………」

加州が審神者の方を向くが、彼は苦い顔で黙ったままだ。鶯丸が告げる。

「誰かが、城下町に運び込んだんだ」

7—5 「ルピナスマートにて」

お昼時になり、城下町はますます人で溢れ返る。蒼穹の一期は、人の合間を縫って、流れに逆らうように歩いていた。人にぶつかるため、看板を見ている余裕もない。このままでは、確実に迷子になる。「すみません！…通して…うわあっ!？」

妙齢の女性達が、一定の方向に——具体的には、一期の向かっている方とは反対側に——駆け抜けて行く。一期はその人波に押され、流されて行った。もみくちゃにされた後、何とか流れから抜け出した一期は、大きく息を吐いた。

「……一体、何が……」

呆然と呟く。滑^レ園でハルカに昼食を勧められたが、弁当を持っていないし用意してもらうのも悪いと断り（ハルカの雰囲気^レに恐れをなした訳では断じて無い）、本丸に帰ろうとした結果がこの様である。

相変わらず、女性達は一定の方向へ歩いたり、走ったりしている。その表情は鬼気迫るものだった。この荒波に逆らうのは無理だと判断した一期は、たまたまあった本屋の軒下でやり過ぎすことにした。

人波の中には、子供の手を引いている者もいた。どこいくのー、と母親に声をかける子もいれば、触れれば破裂しそうな母親の表情に泣きそうになっている子もいる。

人波をしばらく眺めていると、背の高い一際目立つ男が目に入った。もみあげを切り揃えているその男は、覚えのある気配を漂わせていた。

一期は人波の隙間をくぐり抜けて、その男に近づく。

「石切丸殿！」

「うおっと！ ……君は、蒼穹の一期さんかな？」

「はい、そうです。いきなり大声を出してすみません」

「構わないよ、少し驚いたけどね。一期さんは……えーと、迷ったのかい？」

「……ええ、はい」

男——春光の石切丸は、苦笑を浮かべる。内番着を身に纏い、手に

は小さく丸まったバッグを持っていた。一期は、石切丸に尋ねた。

「石切丸殿だけで、こちらへ？」

「いや、歌仙さんと長谷部さんも一緒だよ。ふたりは、先に行つてしまつたけれど」

「この人波は……一体何があるのですか？」

「二期さんは見るのは初めてか。この先には、『るぴなすまー』という小売店がある」

『るぴなすまー』……？　そこで何が――」

一期は、石切丸の横顔を見上げる。その表情は周囲の人間と同じく、戦意に満ち溢れていた。その様子に一期は呆けてしまう。

「毎月第四金曜日は、売られている物が大幅に値引きされるんだ。普段は高い卵も安くなる。いわば、家庭を築く者達の戦場が開かれる日なんだよ、今日は」

戦場と聞いて、一期は唾を飲み込む。一期はとんでもない日にそこに行くわしてしまつたらしい。石切丸が端末を取り出し、画面を一瞥した後二期に告げる。

「二期さん、すまないが手伝つてはくれないかい？」

「えっ、何を」

「卵の安売りが始まつた！　卵は一人につき一包、うちは卵を多く使うから一包でも多く手に入れたいんだよ！　二期さんには、卵の入手を手伝ってもらいたいんだ！」

「私ですか!?　小売店の仕組みは分かっていますよ!？」

「卵の売り場は店の奥だ、手に入れたら私達と合流して、会計まで一緒にいてくれたらそれでいい！」

「わ、分かりました……」

戦場でしか見ないであろう石切丸の迫力ある表情で迫られて、一期は思わず頷いてしまう。よし、と言い石切丸は前を向き、視線の先にあるであろうルピナスマークを見据えた。

「お礼は後で用意するからね。それじゃあ行こう！」

「ちよ、石切丸殿力が強いですつででで！」

激しく動き出した人波に乗つて、一期は石切丸に腕を強く引かれて

走り出した。

*

ルピナスマートは日本全国に展開しているルピナスグループのスーパーマーケットの一つである。毎月第四金曜日には一部の品を除いて五パーセント割引を実施しており、その日には家庭を支える者達で店内がごった返す。他の日も安売りは行われているのだが、この日と比べると客数の差は歴然で、市井の者達のしたたかさが窺える。

一期は籠を手に、卵売り場まで流されて行っていた。奥からは、購入制限を告げる店員の声が響いている。周囲からは赤子の泣き声もしており、流されつつ一期は嘆息した。

「あ、赤ん坊まで連れて来るのか……」

「少しでも多く卵を入手したいのは皆同じだからね……売り切れていないといいのだけれど」

石切丸の視線の先には、少しずつ近づいて来ている卵売り場。まさに飛ぶように売れており、最初にあったであろう嵩からは大きく減らしていた。一つ、二つと売れていく卵。石切丸の焦燥感が高まっているのを隣にいる一期は感じていた。

一步一步と近づいて行く度に、卵売り場の様子が鮮明になって来る。卵の数はかなり減っており、前の親子が三パック持って行った時には、石切丸の覇気が増していた気がした。

そして、一期達の順番が巡って来た。卵は僅かに残っており、店員から直接手渡された。その卵のパックを手に取った時、一期は宝物を入手した気分になった。

「よ……良かった……」

「一期さん、ありがとう。おかげでしばらくは卵が持つよ。このお礼は必ずするからね」

「はい……」

歌仙さん達と合流しようか、と告げられて頷く。卵売り場から離れると、人が少し減って歩きやすくなる。

しばらく歩くと、海鮮コーナーに歌仙と長谷部が立っていた。一期は石切丸と共に彼らへ近寄る。

「石切丸、どうだった」

「卵はこの通りだよ。そちらは？」

「こつちも無事手に入ったよ。蒼穹の一期もありがとう。昼時だし、何か食事を作ろうか」

「いいのですか？ 確かに昼餉はまだですが……」

一期がそう言うと、長谷部がふん、と鼻を鳴らした。

「今日の昼飯は歌仙が当番だ、ありがたく頂戴するんだな」

「なんで君が自慢げなんだい、長谷部さん」

「それとも何か、歌仙の料理が食えないってのか？ ん？」

「長谷部、威嚇しない！」

歌仙に叱られ、長谷部は少し拗ねた様に頬を膨らませる。その様子に微笑ましさを感じながら、一期は長谷部を少し見下ろす。その行為に、疑問を浮かべる。

——あれ？ 長谷部殿は、私より背が少し高い筈では？

へし切長谷部の身長は、一期一振より一センチ高いと記録されており、実際に蒼穹隊の長谷部も一期より背が高い。今日の前にいる春光隊の長谷部は、一期の目線より少し下に顔がある。山姥切と話している時と同じ様な感覚だ。歌仙と並んでいると、彼よりも少し背が低い。そのことへの違和感が凄まじいが、個体差で片付けられる話なのかもしれない。

どうしようもできない違和感を振り払い、一期は歌仙の提案を承諾しようとして口を開く。

「それじゃあ、よろしくお願い——」

「——ちよつと、どういうことよ！」

耳障りな金切り声が飛び込んで来る。一期が思わず声の方向を向くと、そこでは初老の女性がカウンター越しに店員とやりあっているところだった。

「この切り方、明らかに手を抜いているわよね!? サイズがバラバラじゃないのー!」

「申し訳ございません、すぐに取り換えさせて——」

「大体、鮮度も最悪じゃないの! 孫がお腹下したら責任とれるの!」

「いえ、そちらの商品は未開封なので……」

「そんなことも考えないでやってたの!? 店長呼びなさい店長! あんたをクビにしたらうわ!」

どうやら、魚の調理サービスに不満があり、クレームを入れているところだったようだ。初老の女性は理不尽なことを喚き、店員は困り切りながらも何とか対応している。その様は、女性が見苦しく思えてくるレベルである。

聞く価値なしと判断した一期は春光隊の方を向く。そこでは、長谷部がきつく目を瞑り、耳を塞いで蹲っていた。

「長谷部、行こう。これ以上聞くことはない」

「長谷部さん、大丈夫、大丈夫だからね」

「……うう……」

一期は目を睜る。普通の長谷部では考えられないことだ。長谷部は有象無象の悪意のある言葉は切り捨て、身内の皮肉には怒りか皮肉で応じる性質である場合がほとんどだ。少なくとも、自身に向けられてもない悪意に満ちた言葉に反応する性格ではない。

それがどうだ。この長谷部は、他人の金切り声に怯え、耳と目を塞いで震えている。まるで暴力を恐れる幼子の様。歌仙と石切丸は驚いている様子はない。こうなることを分かり切っていたのか、対応も早い。

春光隊の長谷部の謎は深まるばかりだと、一期は思った。

「二期、すまないね。少し遠回りしてから行こうか」

「……長谷部殿は、大丈夫ですか」

「少し厠に連れて行くよ。歌仙さん、悪いけど買い物は頼んだよ」

「分かった、落ち着いたら連絡するよ」

石切丸が震える長谷部を宥めながら遠ざかって行く。長谷部の背は余りにも小さく、か細く見えた。

トイレに消えたのを確認して、歌仙は一期に向き直り微笑んだ。

「……僕達も行こう。長谷部が戻って来るまでに、ある程度買い物を済ませないと」

「そう、ですね」

手にメモを持ち、歌仙が歩き出す。あちこちのコーナーを回りながら、ぽつぽつと歌仙と一期は会話をしていた。

「一期は、どうしてあそこにいたんだい？」

「滑園からの帰りです……昼時になると城下町は人が多くなるのですね」

「滑園か、結構歩くだろう。よく通っているのかい？」

「時折ですね。そういうえば、そこでとても遅い女性と会ったのですか……」

「遅しい？ それは、坊主頭の弟を連れている、コマクラと名乗っていた女性かな？」

「ええ、そうですが……お知り合いですか？」

「知り合いと言えばそうだが……」

歌仙が唸る。そして左右を見渡し、人影が遠いことを確かめると、一期に囁いた。

「一期は口が堅い様だし、世話になるかもしれないから教えておくよ。」

コマクラ姉弟は、情報屋だ」

「……情報屋？」

「ああ。君達の情報は、小さなことから大きな物までほぼ掴まれていると思うよ。どんな手段を使っているんだか、僕達が欲しがった情報は必ずと言っていい確率で提供される。……どうやら重要機密情報も掴んでいる様だね、知りたくもないけれど」

そんなことをして消されないのか、と問えば、だから素性が知れないんだよ、と歌仙は語る。かなり政府の深部に触れている情報も扱っているが、ああしてコマクラ姉弟は生きている。姉の謎の怪力からして、何かの被験者にもなったのではないかと推察しているが、彼らの素性は謎のまままだ。

情報屋の存在に『裏側の世界』の影を感じて、一期は少しだけ心臓が高鳴るのを感じた。好奇心は、相変わらず一期の中に潜んでいたらしい。何とか好奇心を奥底に押し込み、歌仙の話の続きを聞く。

「金とこちらの情報と引き換えに、有益な情報を提供する。彼女らは、本当に有能な情報屋なんだよ」

「パツと見、そんな風には見えませんでした。ちよつと気が強い普通の姉弟だと……姉の方は少し怖かったですよ」

「完全に見た目に騙されているね、でも彼女の狂気を少しでも感じられただけ十分か」

「狂気？……一体どういう」

あの人の好きげな笑みを浮かべていた女性にどんな狂気が宿っているというのか。腹黒そうだと感じていたが、そこまでは感じ取れなかった。歌仙は大きいため息を吐き、首を振った。

「言つてしまえば、『自分は人より物を知っている』という自己顕示欲と、神という生き物への嫌悪を拗らせた狂人だよ。そのためには、自分の命さえ利用するんだから本物だ。弟の方は……そんな姉を見て反面教師にしたのか、血が繋がっているとは思えないほどまともだよ」

彼女らを思い出してげつそりとする歌仙に、恐る恐る一期は尋ねる。

「……何かあつたのですか、その二人と」

「初めて仕事を依頼した時に、姉の方と一悶着あつてね。何度折られそうになつたことか……人間の姿をした化物だと言われても信じられるよ」

「——えつ、折られそうに!? 審神者じゃないんですよね!」

「そのはずだよ。長谷部を除く全員で襲いかかっても殴り返され無力化されたんだ、天は本当に不平等だよ。狂人にあんな力を与えるなんて……」

驚かされてしまった。コマクラ姉弟の正体も、そんな二人に関わつて生きている春光隊にも。かなりの修羅場を潜り抜けて来たことが窺える春光隊に、一期はある種の敬意を抱いた。

ぽいぽいと商品を籠に入れていきながら、歌仙は締め括った。

「まあともかく、弟は気の毒だけれど、僕らはできるだけあの姉弟と距離を置いて接していきたいね。彼女らと接する時は、非常時のことが多いから」

「……何だか、凄いことを聞いた様な気がします」

「生き残るためには必要なことなんだよ、色々」と

乾いた笑いが歌仙から漏れる。そして一期の表情をじつと観察した後、口に手を当てた。

「二期は、あまり怖気づいていない様だね」

「……実のところ、情報屋という存在に興味を抱いてしまいました」

そう言う一期は、照れ笑いを浮かべて頬を掻く。歌仙は真剣な声音で告げた。

「好奇心は猫を殺す、とは外つ国の言葉だったかな。君が思っている以上に、コマクラ姉弟は危険だよ。時には危険な現場にも潜入して、命を晒しながら情報を手に入れる。それに何より姉の性格が最悪だ。できる限り、彼女達には関わらないことを勧めるよ」

「都市伝説の様な存在に浮き立っているだけで、積極的に関わろうとは思っていません。コマクラさんとは、客と店員という関係を保つていこうと考えております。ご忠告ありがとうございます、歌仙殿」

一礼した一期に、歌仙は暫し考え込む。それから立ち止まり、目を伏せた。

「君には、少し期待しているんだ。長谷部に、良い影響を与えるだろうとね。こうして何度も僕らと関わって来る刀剣男士も久々だし、嫌みとはいえ僕ら以外と積極的に会話をしようとしているのも久々だ。……僕らは、限りなく黒に近い情報屋とも関わっている。一期一振、君はそんな僕らの姿を見ても、親しくしたいと思うかい？」

それは、もしかしたら彼らにも自信が無いのかと思わせるには十分な様子だった。彼らが普通に日常を過ごしているので忘れかけていたが、彼らも人の形をとってそう時間は経っていないのだ。長谷部を大切にしているかと聞いて、彼らはすぐに肯定した。けれど、彼らはまだ『慈しみ方』への自信が足りていないのかもしれない。

自分は彼らより顕現が遅い。だから自分は、彼らよりもどうすべきかの選択肢が不足している。刀としての矜持はあるが、心を持つものとしての自信が無いのは、自分も同じだ。

「私は、春光隊の皆さんと友達になりたい。その思いは今も変わっておりません。人としての経験は大いに不足していて、もしかしたら無

神経なことを言ってしまうかもしれないと、いつも考えています。そんな私でも、皆さんと恐れず話をしたいと願っているのです。時折で構いません。私も、皆さんと一緒に話をしたい。……恐れるものですか。傷つくものを支えようとする、優しいあなた達を」

——思ったことそのままを整理せずに話してしまつた。上手く伝わっているだろうか。

一息で話したため、少し呼吸が荒くなる。我に返って、まだ話したくないかと悩む。

歌仙は目を見開き、それからほうと息を吐いて、ありがとう、と微笑んだ。安堵しているのが伝わって来る。彼も、不安を抱えているのだろう。いつか、それも話せたらいい。

歌仙は再び歩き出す。端末で連絡を入れながら、一期に心配そうに告げる。

「君は優しいけれど、そのせいでつけ込まれないだろうか」

「つけ込まれるって、誰にですか？」

「情報屋だよ。君にはあまり情報屋の標的にされない様にして欲しい、と僕は願っているんだ。……もしかしたら、手遅れかもしれないけれど」

「それは、神嫌いと関係が？」

「うん。彼女と最初に会つた時に一悶着あつたつて言つただろう？」

その時に殴り飛ばされて告げられた言葉がある」

頭痛を堪える様に右手で頭を押さえ、歌仙は彼女の決まり文句を口にした。

『「頭が高いのよ、神の分際で』。その言葉から、彼女が僕らにいい感情を抱いているとは言えないと察したんだ。もしかしたらあの力も、神を食物の様に取り込んで得た物なのかもしれないね」

「それは、また……」

凄い言葉だ。一部の信奉者の前でそれを言い放つたなら、殺されてもおかしくはないだろう。彼女が生き残り、ああしていられるのが、本当に不思議だ。看板娘時の彼女は、猫を被り過ぎにも程があるだろうと思う。

「あの力に、あの思想。故に彼女は、時折刀剣男士に干渉する。それもあまり良くない方向にね。一期、彼女と話す時はくれぐれも気を付けるんだよ。できるだけ弱みを見せないように」

「……分かりました」

売り場を抜けると、レジの前に人が長く列を成していた。辺りを見回すと、列から少し離れたところで長谷部と石切丸が待っているのが見える。歌仙と一期はそちらに向かい歩いた。

「長谷部、石切丸。もう大丈夫かい？」

「うん、大分落ち着いたよ。今は鶏肉に夢中かな」

「歌仙、チキンカレー食べたい！」

石切丸の後ろからよきつと現れ、顔を輝かせた長谷部が歌仙にねだる。歌仙は長谷部に慈しむ笑みを向ける。

「四日前に食べただろう？ 流石に連続する訳にはいかないから、鶏肉を使った料理を何か考えるよ」

「チキンカレーがだめなら鶏の照り焼きがいい！」

「本丸に帰ったら考えるから。栄養の均衡はきちんととらないとだめだろう？」

「鶏肉、鶏肉！」

子供のようにはしゃぐ長谷部に、一期は驚愕する。やはり、この長谷部は普通の長谷部とは違う性格をしている。観察する一期の視線に気づいた長谷部は、思い出したかのようにむすつとした顔に戻ってしまった。

それを横目に、歌仙が籠の中を覗く。視線を動かし、菓子が入っているのを見つけて顔をしかめた。

「石切丸、菓子の量が多すぎやしないか？」

「廁から出た後も、少し暗い顔をしていてね……買って見せると喜んでいたので、つい」

「……まあ、食べる量を言い聞かせればいいか。よし、並ぶよ」

レジに並ぶ歌仙達にならない、一期も後ろについた。あ、と歌仙が思い出した様に声を上げる。

「一期は一番か二番の列に並んでくれ」

「何か違うのですか？」

「二番までは店員が会計してくれるんだ。一期はれじを使ったことがないだろう？」

「ええ、使ったことはないです。そこ以外は、自分で会計を？」

「そう。後ろが詰まっているから、できるだけ早く済ませないといけないしね」

「分かりました、それでは移動しますね」

歌仙から籠の中の商品分より少し多い料金を預かり、列を外れようとする一期に、長谷部が憎まれ口を叩く。

「ねこばばするなよ」

「長谷部、失礼なことを言わない！」

苦笑いをして列から外れる。歌仙の説教する声が少しずつ遠ざかっていく。

例え憎まれ口でも、長谷部との会話が増えたことは嬉しかった。こうして段々と、仲良くなれていけたらいい。

一期は一番の列に並んで、小さな喜びを噛み締めながら順番を待った。

7—6 「仲直り」

「ソメゴロー、開けてよ。……はあ」

男子トイレの戸の一つを叩いていたサクヤは、全く応えがないのにため息をつき、トイレの外へ出る。

「……サクヤ君、どうですか」

「全然反応ない。もう結構やってるのになあ……」

トイレから少し離れたところにいた清澄の江雪がサクヤに話しかける。それにサクヤは首を振って見せた。

蒼穹の一期が滑^レ園から帰ったのが二時間前。少なくとも二時間以上、ソメゴローはトイレに籠^レっていることになる。サッカーを終えた後、昼食のあと度々サクヤはトイレに赴^レいているが、出て来るどころか返事さえも無く、状況は膠着^レしていた。

「先生も困^レったよ、昼^レ飯も食^レべないでっ。他の奴はほっとけて言^レってるけど」

「そもいきませんよね……」

うーん、と顔を突き合わせて悩む一人と一振り。江雪は和睦を重んじる性質だ。二人にも早く仲直りをして、いつものように元気な姿を見せてもらいたいと思^レっている。

サクヤがおもむろに顔を上げた。

「……江雪さんはさ、こういう時^レどうしてる？」

「え、私ですか？」

「うん。こういう時、どうしてるのかなって」

江雪は自分の本丸の記憶を呼び起こす。参考になるのは、短刀や脇差の喧嘩だろうか（弟である小夜は、ほとんど諍^レいを起こさなかったが）。そういえば、よく乱と厚が口論^レをしていたが、すぐに仲直り^レをしていた気がする。それはどうしてだったか。

他の兄弟の仲裁もあつただろう。けれど、時間が経てば彼らは普通に仲良く話^レしていたりした。それから――

「……私は喧嘩^レらしい喧嘩^レをしていないので、周囲の方の話^レになりませんが。まずは一度時間^レをおいて冷静^レになることですね。喧嘩^レの最中

は、どうも頭に血が上りやすいですから。後は、一度瞑想をすることを勧めます」

「瞑想？…何か難しそう……」

「いえ、この場合の瞑想はそう複雑ではありません。心の中で、自分がこの喧嘩でどう感じたか、自分はどうして欲しくて、どうしたいのか。心の中で整理して、それから相手に伝えるのです。紙に書いて整理するのもいいですよ」

自本丸の乱と厚は、かなり険悪になった際にどちらかが江雪の部屋に来ることがあった。いない長兄の代わりではあったが、その時江雪はほとんど口を挟まずに彼らの愚痴を聞いていたのだ。ある日「しゃんぷーに金使うの意味わかんねーとか酷い」「着飾るのの何がいいんだかって、ボクがしたいからしてるのに」などと散々に愚痴をこぼした後、悟ったように乱が呟いた。

——そっか、ボク厚に分かって欲しかったんだな。

憑き物が落ちたようにすっきりとした顔で、乱は礼を述べて仲直りに向かったのだ。

——話してたら、ボクはそのことが悲しかったんだな、って分かったよ。

そう付け加えて。

「どう感じたか……分かった、やってみる」

サクヤが自室に戻ろうと身を翻す。それを見送り、江雪はトイレの中に入って行った。

閉ざされている戸の前に立つ。ノックをして、中にいるだろうソメゴローに話しかける。

「ソメゴロー君、調子はどうですか。お腹空いてませんか」

「……」

「今日はいい天気ですよ、外では男の子達が野球をしています。私も少し混ざったのですが、力加減が難しく男の子達に文句を言われてしまいました」

ゆったりした口調で、江雪はとりとめもなく何でもない話を続ける。

「最初は『ぼーる投げる力強過ぎ、手が痛い!』と。次は少し加減をしたのですが、途中で球が落ちてしましまして。『江雪は極端過ぎる!』と言われて、観戦席に回るようになってしまいました。野球とは、なかなか難しいものですね」

「……」

「でも、こうして滑~~る~~園の皆と遊ぶのは心が安らぎます。いつまでも、こんな日が続いて欲しいものですね。私の方は、そもいかなのが現実ですが」

「……いつまでも、一緒に遊べばいいじゃんか」

戸の中から、か細い声がある。江雪はそれに目を伏せて、返した。

「そういう訳にもいかないのです。……ソメゴロー君は知っていますか、今この国が、戦争をしているということを」

「……授業で習った。悪い奴らが、歴史を変えようとしてるって。どうしてそんなことするのか、よく分からないけど」

「そうです。私は戦が嫌いですが、こうして貴方達と遊べるのも、その戦のために私が呼ばれたからなのです。私は戦の兵のひとり。ソメゴロー君が大人になる前に、死んでしまうこともあり得ます」

息を飲む気配がある。それからソメゴローは声を荒らげた。

「何でだよ!? 何で江雪が戦わなきゃならないんだ! 昔のことを変えることがそんなに大変なことなのか!」

「ええ、大変なことです」

かなり込み入った話になってきてしまったが、考えるのが苦しくても、大切なことは伝えなければならぬ。江雪は沈痛な声音で続ける。

「……相手は歴史を変えれば今この現状が良くなると考えているのか、はたまたその逆なのかは、私には分かりません。けれど、彼らが今の歴史を否定しているのは同じです。……そしてそれは、今の歴史上にいる人々の選択を否定するのと同義」

「選択を否定? それってどういうこと?」

「彼らはそれぞれ悩み、苦しみ、そして様々な選択をして来ました。その選択が彼らにとって正しかったにしろ間違っていたにしろ、彼らに

は選択をした責任があります。——人の生死が関わる選択なら尚更。彼らはそれを覚悟で選び取っていきましました。その責任を、覚悟を、彼らは無かったことにしようとしている」

「……難しいよ」

確かに少し難しいか。江雪は頭を働かせて、ソメゴローにも分かりやすく噛み砕こうとする。

「そうですね……例えばソメゴロー君。目の前にお菓子が一つあるとします。貴方の隣には、お腹を空かせた今にも泣きそうな年下の子がいます。同じくお腹を空かせた貴方はどうしますか？」

「そりゃあ……お菓子を譲るよ。目の前で泣かれるのは嫌だし」

「その子は笑顔で礼を言うでしょうね。——相手は、お腹を空かせた貴方にお菓子を食べさせたために、その子からお菓子を奪い、そして貴方の手に渡すでしょう。そして、その子は涙を流すことになる」

「はあ!? 余計なお世話だ! 俺がそうするって言ったんだからそうしてるんだ、気遣いなんていら……な……」

「……少し理解したみたいですね。相手がしようとしていることは、貴方のそうした思いを踏み躪ることです。もちろん、これは分かりやすくした例ですが」

長く話したせいかわ、少し口が痛い。ソメゴローは呆然とした調子で口を止めた。

「私達が守るのはこの国だけではなく、そうした人々の思いです。私達が飲み下し、糧にした後悔や傷を、彼らは跡形も無く消そうとしている。私は戦が嫌いですが、私の仲間にはそれを見過ごせないでしょう。だから、戦うのです」

「……江雪達は、心を守る戦争をしているんだな」

「そうですね。片方が悲しみに満ちることになりますが、私は少しでもそれを減らしていけたらいいと思っています。それに、戦が好きなら私になどなりたくありませんから」

沈黙がトイレの中に満ちる。微かに聞こえて来るのは、男子達の歓声だ。それに気を緩ませると、トイレ独特の臭いが不意に鼻をついた。

「……俺さ、親の記憶全く無くて、知りたくもないからそれでいいと思ってたんだよな」

ソメゴローが、ぼつりぼつりと話し始めた。

「でも、サクヤはそうじゃなくて。親に一言言ってやりたいくらいには憎んで、やりたいこともあって、俺がそれを知ったのが最近で。何かどこかで、俺とサクヤは互いに何でも知ってて当たり前だと思ってたんだ。サクヤの悩みを晴らしたのが一期だってことも複雑でさ。……俺、江雪と初めて会ってしばらく経つのに、そういう戦争の兵士だつてこと、ちつとも分からなかった。話してみても気付いたよ。俺、他人のことを知ろうとしなかったんだな」

ソメゴローの声は自嘲の響きを含ませている。彼らしくない声だ。

「サクヤのことは、何でも知ってると思ってた。でも、話さなくちゃ何も分からないんだよな。……俺、情けないなあ」

「それに気付けただけ見事です。対話無しに理解無し。それに気付かない人間の何と多いことか」

「そうかな。……サクヤにも謝らなきゃな」

解錠する音がして暫し、ソメゴローが戸を開けて出てきた。目が少し腫れているが、その顔には笑みを浮かべている。江雪は胸を撫で下ろした。彼を先導し、トイレから出る。

「サクヤ君に謝りに行きますか?」

「行く。サクヤはどこに——」

「——ソメゴロー! ……いった!」

下半身に衝撃が走る。痛みの元を辿れば、サクヤが後ろに手をついて座り込んでいた。江雪はサクヤに視線を合わせる。

「サクヤ君、大丈夫ですか?」

「いてて……江雪さん、ごめん。俺は大丈夫」

サクヤは江雪に笑って見せると、背後にいるソメゴローに気付き、すぐに真面目な顔になった。そして立ち上がりソメゴローに近寄る。

「ソメゴロー」

「サクヤ……その、さっきはごめん。ちよつとカツとなつて——」

「ソメゴロー、これ！」

サクヤがポケットを探つてからずいっと手を出す。その手には紙が握られていた。目の前にいきなり手を出されたソメゴローは目を白黒させる。

「えつと、サクヤ、これは」

「いいから！ 読んで！」

さらに手を近付けさせられ、ソメゴローは手を差し出した。くしゃくしゃの紙を握らされて、恐る恐る紙を広げる。

「……これ……！」

その紙には『感じたことリスト』と題が付けられ、箇条書きにしてサクヤの想いが書かれていた。

泣かれてびっくりしたこと、信じてもらえなかったみたいで悲しかったこと、話が長くなりそうなので内容が纏まるまで待つて欲しかったこと、そして――

「……一緒に、世界を見て回る？」

「教えてくれてソメゴローが言つてた、やりたいことだよ。俺は、まだまだ世界を知らない。世界にはきつと、綺麗な景色もあれば汚い景色もあるんだと思う。それを含めて、知りたいんだ。――ソメゴローと一緒に」

「……！」

「ソメゴローが嫌だつて言うかもしれないと思うと不安で、なかなか言えなかった。親友を、俺のわがままで傷つけない。だからちゃんと聞きたいんだ。――ソメゴロー、俺の夢に付き合ってくれる？」

その言葉に、ソメゴローは目を見開き、それから嬉し涙を堪える様に笑う。それから、大声で宣言した。

「当然だ！ 俺は、親友の夢にどこまでも付き合うぞ！」

サクヤはほうつと安堵の息を吐く。喜びを噛みしめる様に目を閉じて、目を開けば勝気な笑顔になっていた。

「約束だからね、ソメゴロー」

「当然だ！ 俺はサクヤの約束は必ず守るぞ！」

「他の子の約束も守りなつて」

「うおおお！ 今なら何でもできる気がする！ 一期にだって勝てる気がするぞー！」

「いやそれは無理でしょ」

すっかり元の二人に戻った。喜びのまま暴れ出そうとするソメゴローを、呆れながらも笑みを押し殺しきれないサクヤが止めている。江雪はその様を見て、微笑みながら心の中で祈る。

——願わくは、二人の友情が永遠に続くように、と。

7—7 「調査部隊の仕事」

居酒屋内は惨憺たる光景と化していた。テーブルと椅子は投げられ、電灯は砕け、足元には時間遡行軍の死骸。それを踏み付けながら、鶴丸は生き残っている敵に正対する。

「……はっ、しづといこって」

「……壊れた備品の修繕費は、こっちに請求が来るんでしよるか」

「敵方に回せ、敵方に！ 壊しているのはあつちだ！」

小夜と軽口を叩き合い敵を斬り伏せる鶴丸に、内通者の一人である男は顔を真っ赤にして喚いた。

「きつ、貴様ら！ こんなことをして、どうなるか分かって——」

「どうなるか分かってないのは君の方じゃないのか？」

小夜との会話を切り上げ、鶴丸は冷えた声色で男を睨む。その目は、まるでゴミを見る様な蔑みがこもっている。

「敵方と通じて機密情報を垂れ流し、そして自分は甘い汁を啜る。そのせいでどれだけの部隊が面倒を被っていると思っている？ 大層な理由も無く、自分が楽をしたいからって味方を売るのは頂けないな」

「化物の貴様に分かるか！ 娘を失った絶望が、そして世間の非情さが！」

——来たか、言い訳の時間が。

鶴丸は内心ため息をつく。追い込まれた人間はこうして、自分の言い分を喚き散らし少しでも同情を買おうとする。その態度が同情どころか苛立ちしか買わないのを当の本人は気付かないのだ。

「娘は交通事故で後遺症に苦しんだ後に死んだ！ 余所見運転という防ぐことができた事故で！ それなのに、あのふざけた男は金だけ払って放免だ！ あの男はもう殺したが、娘は帰って来ない！ なら、娘をあの場所に行かせない様にするしかないだろう！」

「それで他の人間が事故で死んでもいいって？ 大層な親心だ」

鶴丸は冷め切った表情のまま男の言葉を切り捨てた。

「歴史を変えればどこかで歪みが生じる。君は娘の代わりに他の誰か

が死んでも構わないって訳だ、それが彼女の友人だとしても」

「当然だ、娘を取り返すには仕方ない代償だ」

「へえ、君は娘の友人が自分の代わりに死ぬ運命へと変えられて、娘や友人の親といった数多の人間から恨まれるとは考えなかったのかい？ それに、娘は懸命に生きて運悪く力尽きたが、君はその生きる努力さえ否定しようとするのかい？ 全く、これだから親つてのは面倒だ」

歴史改変の歪みは、身近なところで生まれる。鶴丸の言う通り、娘の代わりに友人が死ぬ運命になってもおかしくはない。些細なことでも積み重なれば歴史は大きく歪む。彼の言い分を認める訳にはいかなかった。

それに彼は改変の結果として、恨みを背負える人間なのだろうか。鶴丸からすれば、彼は当然の帰結を理不尽だと喚く様な人間に見える。いる。

「黙れ黙れ黙れ！ 化物が人間を語るな！」

男は鶴丸の言葉に耳を貸す気が無い様だ。呆れを吐き出す息に乗せて、鶴丸は小夜に告げた。

「小夜坊、あの煩いの黙らせても大丈夫か？」

「……ほどほどにして下さいね」

復讐に含みのある小夜も、彼の姿には見苦しさを覚えている様だ。これから鶴丸が行おうとしていることを止める気配も無い。

鶴丸は男に近寄り、目の前の床に刀を突き立てた。

「何のつもり……っ!？」

男はすぐにその行為の意味に気が付いた。声がするのだ、頭の中が、声で満ちている。

——どうして。

——何でうちの子が。

——誰のせいだ。

——あいつだ。

——あいつのせいだ。

——あいつさえいなければ。

「やめろ……やめろ！」

男は叫び悶えるが、声は止まない。耳鳴りも酷くなつて来た。刀を突き立てた鶴丸は、柄を握り微動だにしない。そして、男にとって致命打となる一言が響く。

——こんなことをされてまで、生きていられなかつた。こんなことをされるなら、生きていられるだけで恨まれるなら、生まれて来たくなかつた……！

「あ、ああ……」

男はその一言に崩れ落ちる。それは、紛れもなく彼の娘の声だった。彼女からの拒絶に強く衝撃を受けた男は、もう反抗する気力も失せた様だった。

「小夜坊、そいつを縛ってくれ」

「はい」

小夜が動き、男の腕を縛る。鶴丸は納刀し、近くにあつた壊れていない椅子に座り込んだ。

鶴丸が行つたのは、男の脳に直接働きかける、いわゆる脳内ジャックだ。付喪神と称される彼らは、時折超常現象を起こすことがある。鶴丸が行使したのはその一つ。最も、意図的に起こすのは至難の技であるが。

鶴丸は、男を縛り上げその場に転がした小夜に呼びかける。

「小夜坊」

「鶴丸さん、大丈夫ですか？」

「少し休めば平気だ」

長く休んでいる訳にはいかないな、と鶴丸が軽く伸びをする。懐からぬるくなつた水筒を取り出して一口。

すると、遠くから叫び声が聞こえて来る。

「……くっ！」

「ふん、こんなものか」

叫び声は次郎に取り押さえられた内通者の女性のものだった。長谷部と内通者の女性の所有だろう鯰尾藤四郎が罅迫り合いをしていた。長谷部は片手で、鯰尾は両手で相対している。

「主！ 待ってて、今助ける！」

「鯨尾、だめ！ このままじゃ、貴方が折られる！」

鯨尾が女性の下へ行こうとすれば、長谷部が鯨尾に斬りかかる。鯨尾は長谷部の相手で精一杯で、女性の下へなかなか行けない。焦れた鯨尾が憤怒の声を上げる。

「どけ、主と俺の邪魔をするな！」

「ほう、俺達は一体、貴様らの何を邪魔しているのだろうか？」

長谷部が、ニタアと顔を歪ませる。うわあ、と声を出したのは一体誰だったか。

——長谷部のショーは、もう開幕している。

「決まってるだろう、主は親御さんを助ける、俺は大阪城のでき事をやり直すんだ！」

「審神者朧雲。親を火災で亡くし、保護される様に審神者となったのは記録で見たな。そして鯨尾藤四郎。大阪城で骨喰藤四郎、一期一振と共に焼け、記憶の一部を失った」

「分かっているなら、そこを——」

「——それがどうしたア？」

笑みが更に醜悪になる。それは、『主の敵』に対する憎悪に満ちており、鯨尾が一瞬固まってしまうほどだった。その隙をつき、長谷部は鯨尾に一太刀浴びせる。

「がっ……！」

「鯨尾っ！」

したたかに壁に身を打ち、痛みで動けなくなる鯨尾。それに近付き、長谷部は鋒を首筋に当てる。

「お前達は既に歴史に介入した様だな。その結果、どうなったか話してやろう」

「……は？ 私達はまだ——」

「お前達の骨喰が内密に燃え盛る大阪城へ潜入し、鯨尾と一期を回収しようとして破壊、一期はこれまた内密に親を助けようとして共に火に巻き込まれて消息不明。いやあ、奴らの破片を回収するのが大変だったんだぞ？ どいつもこいつも炭になって、まるで大阪城を再現

した様だった!」

「……嘘だ、骨喰といち兄が」

鯰尾の声が震える。刀を握り締め、絶望に染まっていく。

「そしてお前達が会合に向かった直後、別の調査部隊が本丸に奇襲、歴史改変に関わったとして全員刀解。気丈に振る舞っていたが、いなくなつた主と鯰尾を最後まで探していたぞ」

「冗談言わないで! 皆が、刀解? そんなこと、許されるはず……!」

往生際悪く抵抗する女性に、長谷部が一枚の紙を放り投げる。その内容は。

「……本丸の、解体認可」

「いやあ、実に呆気ないな。政府が出した紙一枚で、あつという間に本丸一つが消えるんだ。泡沫とは、こういうことを言うのだろうか。可哀想な審神者殿。これでまた、家族を失つたな」

「……嘘、嘘、嫌ああああ!!」

女性の慟哭が響く。次郎は、やり過ぎだよ、と口を動かす。しかし長谷部は止まらない。

「別にいいだろう? どれもこれも、お前達が自分の信念に従つた結果だ。実に美しい生き様だった。だから」

そうして、長谷部は。

「——妹君の消滅を辛うじて避けたことに免じて、これで済ませてやる」

——大きく刀を振り下ろし、『鯰尾藤四郎』を、折つた。

「なま、ずお……」

絶望の表情をしたまま、鯰尾——女性の最後の家族が消えていく。さらさらと、その場に鉄屑が落ちる。それを止められなかった女性は、目から光を失つた。そうして、抗うこともせず、なすがままにされていた。

女性に興味を失つた長谷部は次郎に命ずる。

「縛り上げておけ」

「ちよつと、長谷部。いくら何でもやり過ぎだよ、ここまで心を折る必

要あったのかい？」

「どうしてだ？」

きよとんとした顔で、長谷部は言い放った。

「絶望していた鯨尾には死という救いを、女性にはやり直す機会を与えた。それに、自分の信念に殉じていったんだ。それで充分なはずだろう。俺にしては、随分温情を与えたと思うが？」

その場にいた調査部隊員全員が、ぞつと背筋を凍らせる。これで温情なら、本気を出したらどんな地獄が待っていると言うのだ。

固まる部隊員に、片付けて主の下へ帰るぞ、と長谷部は帰還準備を始めた。

「……いやあ、久々に隊長様の恐ろしさが出たなあ」

「……『汚れ仕事も平気でこなす』という政府の評価は、正確ですよね……」

冷や汗を流して鶴丸と小夜が囁き合う。そこに、青ざめた堀川も駆け寄って来る。

「……長谷部さん、いつもあんななんですか……？」

「いや、今回は妹君が絡んでいたらしいからな。主の妹君も大事なんだらうよ、長谷部にとっては」

「……主、知った時は怒り狂ってたんでしようね」

長谷部は、基本的に主の命に忠実だ。なのでその本丸の長谷部の様子で、本丸の雰囲気察することができる。リトマス紙のような存在だ。

そして氷雨隊の長谷部は、時にこうして冷酷な面を見せる。審神者が冷酷な面を持っているので、まあ領けるのだが。しかし。

「……怖いですね……」

「堀川、頑張るんだ！」

「大丈夫です、味方にはあんなことはいらないと思います……多分」

三振りの視界の先には、縛り上げた歴史修正主義者達を、次郎、合流した青江と共に纏める長谷部の姿があった。

7—8 「一日の終わり、そして襲撃」

「いち兄、今日ボクの隣で寝ようよ！」

「乱は甘えん坊だなー。ここは新入りの俺に懐を譲るところなんじゃないのー？」

「一緒の布団で寝る気か、信濃……」

「いち兄、滑園の様子を聞かせてください」

「僕らと背丈が同じような子達ですか……虎くん達と一緒に遊んでくれるでしょうか」

「そうだなあ、俺も一緒に遊んでもらえるかね？」

「外見と性格の差に驚かれそうだね……」

蒼穹隊本丸の大食堂で、一期は弟に囲まれて夕食を摂っていた。今日の夕飯はビーフカレーである。チキンカレーが好きなひを思い出したら、回想が止まらなくなった。

*

会計し、ルピナスマートを出た後、春光隊の本丸で昼食をご馳走になり、少し食休みしてから城下町入り口まで送ってもらった。

「……何で俺がこいつの見送りを」

「鯨尾と獅子王はげーむに夢中になっているし、石切丸と薬研に後片付けを頼んでしまったからね。たまには、他の本丸のものと交流することも大事だよ」

「むう……」

そう、今回は歌仙と長谷部に見送りをしてもらったのだ。長谷部と話せる減多にない機会に、うきうきした気持ちで一期は話しかける。

「歌仙殿の鶏肉の照り焼き、美味しかったですねえ」

「ふふん、歌仙は料理がとっても上手いんだぞ」

「だから何で君が自慢気なんだい、長谷部」

「滑園で昼食を取ろうか迷ったのですが……やはり、でき立ては美味しいです、ありがとうございます」

「温かいご飯は最高だからね。……長谷部？」

立ち止まった長谷部を振り返る。長谷部は少し後ろで、苦虫を噛み

潰したような表情をして立っていた。

「あの、長谷部殿？ 私、何か失礼なことを——」

「滑園」

「え？」

長谷部は苦い顔のまま、一期に告げた。

「傷付きたく無ければ、滑園には近寄るな」

「——え？」

「これで買い出しの借りは返した。……行こう、歌仙」

「あ、うん」

それっきり、長谷部は黙り込んで一言も話さなかった。何度話しかけても、難しい顔をしてだんまりだ。

そして結局、長谷部とはほとんど話せずに城下町入り口まで来てしまったのだった。

*

「……ち兄、いち兄」

骨喰の声に一気に現実へと引き戻される。一期は骨喰に優しく微笑んで見せた。

「どうしたんだい、骨喰」

「いや、それが……」

「乱兄さんと信濃兄さんが喧嘩を始めてしまって……僕達じゃ止め切れません、助けて下さい！」

「どちらが一期殿の懐を取るかで話し合っていたのですが、それが過熱してしまって……このままじゃ壁を壊しかねませんよう！」

騒ぎ声の方を見ると、乱と信濃が激しい取っ組み合いを行なっているところだった。その激しさは確かに、壁を壊しかねない。

一期は立ち上がり、弟達の仲裁に向かった。

『……というわけで、ふたりをかかえてねることになったのですよ』

『おー、ほのぼのするなあ。それにひきかえ、俺はこれから衣紋掛けの刑だじえ……』

『出陣中に敵に目もくれず大喧嘩をしたんだ、当然の結果だな』

『本当に懲りませんね……』

氷雨隊の自室で、鶴丸は端末に目を通していた。明日の夕方まで洗濯物を吊るされ放置されるのだ、少し心が挫けそうになる。

遠くから審神者の声がする。そろそろ行かなければまずい。鶴丸は端末を引き出しにしまおうとして、ふとある物が目に入る。

それは、血塗れの紙片。研究所跡地の調査時にこっそり持って帰って来た物だ。これを見る度、鶴丸の心は痛みに軋む。いずれ、この紙のことも調べてみようか。

「——鶴丸国永！ 一体いつまでほつつき歩いている！」

審神者の声が破裂寸前だ。行かなければ本当にまずい。鶴丸は紙片と端末を引き出しに入れ、ドアを開けて飛び出した。

『鶴丸が行ったか』

『本当、何故懲りないのでしょね……』

『ごたいさはすさまじいですな、わたしはひさめのつるまるどのはたのしくはなせるのに』

雲霄の鶯丸は自室で一期の文章を読み微笑んだ後、画面をタップして疑問を投げかける。

『一期、お前のところの鶴丸とはどうなんだ』

『……なんだか、ぶきみなのです。本当にそこなしぬまがみえているように……』

『苦手だ、と』

『……そうですね。ひさめのつるまるどのは、そこがあるようにみせかけてくださるからあんしんできるのです』

言い得て妙だ、と思った。あの鶴丸は、何とか他のものがとつつきやすくしようとしている節がある。

一期が鶯丸に問いかける。

『うぐいすまるどのは、きょうはどんないちにちでしたか？』

『そうだなあ。主の会議に付き合ったり、演練場に行ったり、茶を飲んだりと充実した一日だった』

『最後はいつも通りですよね？』

江雪の突っ込みに笑うスタンプで返す。鶯丸の文には、一つだけ本当のことが書かれていない。

——城下町の幽霊。そして、それを運び込んだ誰か。

明日から、調査部隊も集めての捜索になるだろう。これは極秘事項だ。化物じみた幽霊など、存在してはいけないのだから。

友に対して秘密を抱えなくてはいけない苦しさに、これが心を持った弊害か、と鶯丸は嘆息した。

『まあ、細かいことはいいじゃないか。それで、二振りはどうだったんだ』

『二期と共に滑り園に参りました。やんちゃな子達が少し喧嘩をしまして』

『あつ！ こうせつどの、そのあとどうなりましたか？』

かつて兄弟と共に過ごしていた部屋で、清澄の江雪は一振り、静けさの中で端末を見ていた。

周りには、刀身だけの兄弟がいる。本来なら肉体がある方がおかしいのだが、それに慣れ親しんだ今となっては、話せないことが寂しかった。

けれど。

『安心して下さい、その後仲直りをして、また一緒に遊び始めましたよ』

『そうですか、よかったです』

『険悪になるよりは仲がいい方がいい。仲直りが上手くいってよかったです』

今は、友がいる。こうして自分と話してくれる友が。江雪は、悲しみに満ちた世界の中で、彼らと出会えたことに感謝した。何に、と言われると困るが。

月は、高く登っている。それを眺めて、明日の幸福を祈ろうか、と江雪は小さく笑った。

サトルは店仕舞いの後、明日に向けての仕込みを始めた。唯我独尊

を地で行く姉ハルカは、現在客と対応中である。

コマクラ姉弟——主に情報を握っているのは姉の方だが——は、情報屋である。故に、こうして店仕舞いの後に客の対応をすることが多い。情報屋としての合言葉は『金木犀を一枝下さい』。そう告げられると、ハルカは店の裏から客を入れるのだ。

ハルカは、情報通であることに固執する。そのためには、命の危険を冒してまで情報を手に入れようとするのだ。それに付き合わされるサトルの姉への評価は『糞姉貴』の三文字で事足りる。

しかも、ハルカにはあるものを激しく拒否する困った思考がある。

——神と呼ばれるものを、彼女は殊更に嫌悪する。幼少期に宗教的価値観を押し付けられたことによる反動だとサトルは見ているが——好き嫌いは勝手にするといひ。それに俺を巻き込むな。それが、サトルの偽りぎる本心だった。

しかし、彼の願いは叶わない。

「愚弟」

「……姉貴。対応は終わったのか？」

「ええ、今帰ったわ」

厨房に入り込んで来た姉に顔を向けると、彼女はまるでコンサートのチケットが当たったかのような輝く笑みを浮かべていた。

——嫌な予感しかない！

サトルは身を翻して逃げようとするが、どこから出ているのかわからない力で肩を掴まれて逃げ道を失くす。

「今日のお客様はね、どうも神に思うところがあるようだったのよ」

「そうか、勝手にしろ」

「それで、私の持っている情報と引き換えに何をするか聞かせてもらったの。大幅に値引きするからと言ってね」

「そうか、俺には関係ない」

「関係あるわよ、愚弟。私達も彼女の後をつけるわよ」

「……一応聞くが、拒否権は」

ハルカはいつもの様にこちらの希望を汲む気が無い。捨て鉢に尋ねたサトルに、にんまりといたずらっ子の様な表情でハルカは告げ

る。

「ある訳無いでしょ、愚弟。あんたの頭はおが屑でも詰まってるの？」

——神に弓を引く瞬間が見られるかもしれないのよ。行かない理由なんて無いわ！」

昨夜弟を両腕に抱えたことにより腕が少し痛む。両腕を伸ばしつつ、蒼穹の一期は坂を下り、近くの万屋へと向かう。

——悪い一期、万屋へ資材買って来てくれないか？ 怪我した奴らのための資材が無くなっちゃまって……。手が空いているのがお前しかないんだ、頼む！

審神者にそう頼まれた一期は了承し、端末を持って本丸を出た。

朝の空気は心地いい。ちゅんちゅんと雀の鳴き声も響いている。思いつきり息を吸いながら歩いていると、目の前に誰かが現れた。

「おや、君は……」

「貴方は……水雨隊の蜂須賀殿？」

目の前に来るまで気付かなかった。相手は、派手な出で立ちをしているのに。相手——水雨の蜂須賀は、一期がそう考えていると気付かずに、にっこりと笑って肯定すると、右手を差し出して来た。

「ああ、水雨が一振り、蜂須賀虎徹だ。いつもうちの主がすまない」

「蒼穹が一振り、一期一振です。こちらこそ、うちの主がいつもご迷惑を……」

右手を握り合い、微笑みながら互いに手を離す。蜂須賀は、一期に尋ねた。

「今から万屋かい？」

「はい、蜂須賀殿も？」

「手伝い札が無くなってしまっただけね。ここから近い万屋なら、俺も向かうところだ。一緒に行っても構わないか？」

「ええ、もちろん」

そうして、二振りで歩き出す。するのは主に、主の話だ。

「俺も主には喧嘩を売らない様に言っているんだけどね。なかなか治る気配がなくて……」

「ごちらもそうなんですよ。しよつちゅう頭に血が上つては他の方と喧嘩をして……何とかならないものですかね」

坂を下り、しばらくすれば万屋が見えて来る。万屋の中では、老婆が船を漕いでいた。

「あそこですね、必要な物があるといいのですが」

「ああ、そうだ——っ一期!!」

蜂須賀の悲鳴と同時に、頭部に衝撃が走る。一期は強い目眩に、立っていられなくなった。

「あら、もう一匹いたの? ……そうね、奴らに伝わると困るし、運んでどつかで捨てて行くわ」

タン、と地に着地する音がする。目を開けないまま、一期はその涼しい声を聞いていた。蜂須賀が困惑と動揺に満ちた声で問う。

「……何だ、君は」

「やだ、何よそよそしい言い方をしているの? ……そうか、記憶が混乱しているのね。奴らなら、記憶消去くらいやりかねないわ。でも大丈夫よ、これからゆつくり思い出していけばいい」

その声は涼しげながら、いや、だからこそ背筋が粟立つ恐ろしさを感じさせる。最後の力を振り絞り、目を開ける。そこにいたのは、髪を肩で切り揃えた少女と——数多の時間遡行軍。

「さあ、一緒に帰りましょう兄さん。——私達の家にも！」

その言葉を最後に、一期の意識は暗転した。

第八話 「氷雨隊蜂須賀虎徹拉致事件」

8—1 「被害者の本丸にて」

日光の光源が少しずつ上へ登っていく。今日はいいい天気になりそうだと思うと、夕立の心は軽やかに弾む。鼻歌を歌いながら足取りも軽く向かう先は、洗濯物がはためく中庭だ。

中庭の中央、洗濯物干しが大量にある中で、物干し竿代わりに一振りの刀がかけられている。夕立は洗濯物を掻き分け、その刀を見つけると挨拶をした。

「おはようございます、鶴丸様」

『おー、おはよう妹君。あの時みたいに鶴丸でいいって言ってるのにな』

「何を言いますか、神様にそんな無礼なことできませんよ。あの時は特別です」

かけられていた刀——鶴丸国永は、念を飛ばし夕立に挨拶し返す。彼は昨日、一期一振と出陣中に喧嘩をしたことで、衣紋掛けの刑に処されている。彼の刀身には、大量の洗濯物がかけられていた。

『なあ妹君。今何時だ？』

「えーと、後ちよつとで八時です。もうすぐ朝食の時間ですね」

『うえー、まだ四刻半残ってるのかー……』

「頑張ってください、鶴丸様。私もお兄様には内緒で、時々話をしに来ますから」

夕立の姿は朝日に照らされ、心が弱っている鶴丸には神々しく見える。肉体があつたら拜んでいただろうが、残念なことに肉体は封印中だ。

『妹君の優しさがありがてえー……そーういや妹君、今日の朝餉は何だか分かるか？』

「あつ、見て来るのを忘れていました！今見てきましょうか？」

『いや、別にいい。思い返したら、朝餉を食べられないのに献立を聞いても虚しくなるだけだと気付いてな……ははは』

「……できるだけ話しに来る様にしますね」

乾いた笑い声を上げる鶴丸に、夕立は痛ましそうにそう言った。その後しばらく鶴丸と世間話をしていた夕立は、ある異変に気づくと首を傾げた。

「……おかしいですね、朝食の鐘が鳴りません」

『まだ朝餉ができていないんじゃないか？ 料理人が寝坊したとか』『そうだといいんですけど……』

そう囁き合う一人と一振り。不審に思っていると、遠くから荒い足音が近づいて来る。——審神者だ。

夕立だけでなく、鶴丸も驚いた。罰の執行中、審神者は姿を現さない。それなのにここへ来たのは何故か。

「お兄様!?! どうしましょう、ここにはなるべく行くと言われてるのに……!」

『禁止されていたのか?! ……まあ、洗濯物の様子になった、と言えればいいさ。それにしても何でここに……』

審神者が夕立の前に到着する。あわあわと夕立が言い訳をしようと口を開く。

「お、お兄様、これはですね、ちよつと洗濯物が気になって……お兄様?」

「——刀剣男士鶴丸国永の実体化制限を解除」

審神者は夕立の姿が目に入っていない様だ。洗濯物を乱雑に避け、鶴丸に向かってそう宣言すると、鶴丸は肉体を取り戻した。鶴丸はいよいよ目玉が飛び出そうだ。処罰を中断されるなど、今まで一度も無かったのだから。

「……主、何があった?」

「執務室で話す。……ああ夕立、朝食はお前の自室に運ばせた。許可を出すまで本丸を出るなよ」

来い、と鶴丸に命じて審神者は歩き出す。また後でな、と夕立に視線をやり、鶴丸も後を追う。その場には、夕立だけが残された。

夕立は、兄の様子を思い浮かべた。兄はどこか急ぐ様に洗濯物を避けて、口早に制限解除を宣言し、そして自分を外に出さない様にした。

「……何か、あったのでしょうか……」

自分にできることは、兄の負担にならぬ様、本丸内でじっとしていることだけだ。齒がゆいが、無力な自分には何もできない。余計なことをして兄を追い詰める真似はしたくなかった。

夕立は俯きながらも、自室に戻るために歩き出した。

*

審神者に先導され執務室へと向かう鶴丸は、審神者の様子がいつもと違うことに気がついていった。

審神者はいつも焦りや怒りを理性でコントロールしている。妹が絡むと感情を剥き出しにするが、今回妹は絡んでいない様だった。

それなのに、足音荒く背中を見ているだけでも感情を露わにしているのが見て取れる。本当に何かあったのか。

———そういう蜂須賀、俺の様子を見に来なかつたな。

ふと、そんなことを考える。いやいや現実逃避をするなど首を振って、審神者の背を追う。

執務室に着くと、勢いよくドアを開け放つ。軽く衝撃が伝わる程の荒々しさだ。執務室内には、もう調査部隊の五振りが揃っていた。

「お前達、よく集まった」

「主の命ならすぐにも。……して、何かあったのです?」

長谷部が審神者に問うと、審神者は机の前に移動し、調査部隊の面々を見渡す。そして端的に告げた。

「———蜂須賀が拉致された」

その言葉を理解した時、それぞれが動揺した様子を見せた。当然だ、蜂須賀は誰よりも早く練度上限に達し、本丸最強の刀として近侍をずっと務めていたのだから。そう易々と拉致できる存在ではない。それなのに———

調査部隊員が思考を巡らせる中、強張った顔の次郎が手を挙げて発言する。

「何があったのか、詳しく話してもらってもいいかい」

それに頷き、審神者は話し始めた。

「……今朝、手伝い札の残りが少ないことに気づいてな。今日も出陣

があり、遠征はしばらく時間がかかるため、蜂須賀に買い出しを頼んだ。万屋までは足取りが残っているが、その後時間遡行軍に囲まれたらしい痕跡の後——蜂須賀の名がシステムから消えた」

システムから消えた。それは、審神者の手から刀剣男士が離れたことを示す。懸念されるのは、蜂須賀が審神者を裏切ったかもしれないということだが——

「その可能性は低いと考えられる。最後に蜂須賀からメッセージが入っていたな。『すまない後れを取ってしまった、どうにかして必ず帰る』と」

「何故、蜂須賀は拉致されたんだろう？ そうは言っても、時間遡行軍を相手に後れを取る訳が無いだろうに」

「それだがな」

青江の疑問に、審神者は忌々しさを顔面に貼り付けて、推測を述べた。

「……蒼穹の痴れ者から連絡が入ってたな。『うちの一期がお前のところのやつと一緒に拉致られたってどう言うこった』と。おおよそ、大人しく来なければ一期一振を破壊する、と脅迫されたんだろうな」

蒼穹の一期の名前に、鶴丸の手が固く握られる。友が巻き込まれたことに、何故、と脳内で愕然とした気持ちりが渦巻く。

審神者は、冷厳な口調で命令した。

「政府には既に通報したが、こちらでもできる限りのことをするぞ。まずは、現場に赴き状況を確認しろ」

「了解」

調査部隊は任務を遂行するために部屋を出て行く。パタンとドアが閉まり、足音が遠ざかるのを聞きながら、審神者は端末を取り出す。そこに書かれていた、蜂須賀からのメッセージの全文は。

『すまない主、後れを取ってしまった。俺を兄と呼ぶ少女に人質を取られて同行を求められた。どうにかして必ず帰るから、そちらでも調査を頼むよ』

それを見て、審神者は呟く。

「……まさか、本当に？ いや、記録は重要機密のはずだ、そんなこと

があるはずは……」

その言葉の真意を問うものは、誰もいなかった。

蒼穹隊の本丸では、審神者が頭を抱えて嘆いていた。

「くそつ、俺が買い出しなんて頼まなければ……い！」

「主、あんただけの責任じゃない。あまり自分を責めるな」

「そうだよ、あるじさん。いち兄のことはとても心配だけどさ、あるじさんまで何かあったら大変だよ。まずは朝餉を食べて」

一番の古株である山姥切と、食事当番の乱が審神者を宥めている。審神者は一期が拉致されたと判明してからずつとこの調子だ。

審神者は一期に資材の購入を頼んだ。一期はそれを了承し、買い出しに向かった。審神者はしばらく時間が経ち、一期の帰りが遅いことを気にかけて。すると、端末に連絡が入る。誰からだ、と思っで見ると。

『すまない一期一振の端末を借りた。一期一振は時間遡行軍に襲撃され意識が無い。同行を求められたためしばらく連絡が取れないが必ずそちらに帰す。このことを政府に通報していただけると有り難い。』

氷雨隊蜂須賀虎徹』

そうして慌ててシステムを開いてみれば——一期一振の名が消えていた。取り乱して氷雨隊の審神者に電話で怒鳴り込んだり、システムを何度もチェックしても現状は変わらなかった。政府に通報してみれば『調査が終了次第、再び事情を聞く』という素っ気ないものだった。

「くそ……っ！ 一期おっ！」

「今回、一期が端末を持っていて助かったな」

「そうだね。どこで手に入れたのかは謎だけど、そのおかげで早く緊急事態だつてことが分かったんだし」

頭を抱えて悔やむ審神者とは裏腹に、山姥切と乱は冷静だ。大きく慌て嘆く審神者の様子に、返ってこちらの焦燥が薄れてしまっていた。だが、心配なのは変わりがない。

「このこと、皆に話す？」

「……そうだな、まずは長谷部に話そう。あいつと話し合つてどうするか決める。粟田口派はあんた以外、このことを知らないな？」
「うん」

「あんたも話し合いに入つて欲しい。主の部屋の前で話し合う予定だから、それまでは主を宥めていてくれ」
「分かった」

山姥切は乱の了承に一つ頷き、部屋を出る。背後では乱がほらあるじさん食べてー、と話す声が聞こえていた。長谷部のいる部屋へと向かう道中、鶴丸と鉢合わせた。

「おつ、山姥切」

「……あんたか。長谷部は部屋にいるな？」

「ああ、いるぜ。多分書類仕事中だ」

「分かった」

そう言つて鶴丸の横を通り過ぎようとすると、鶴丸が言い放つた。

「二期、無事だといいな」

ありきたりな懸念の言葉だ。それなのに、ぞくりと背筋が震える。山姥切はぼつと振り返つた。鶴丸は手をひらひらと振つて遠ざかつて行く。

一期が拉致されたことを知っているのか。部屋の中の声が聞こえていたのだろうか。それにしても。

「底が知れないな……」

あの鶴丸は、どうも得体の知れないところがある。一年以上同じ本丸の仲間としてやって来ているが、どこか線を引かれている感覚があるのだ。仲間のはずなのに、心が読めない。それが山姥切の不安をかき立てて仕方がなかった。何か、厄を運んで来そうな――

仲間に対してなんて考えだ、とはつとして、考えるのは後だ、と思考を打ち切る。そうして山姥切は、今度こそ長谷部の部屋に向かった。

8—2 「被害者／追う者」

慣れることのない深い闇の中で、蒼穹の一期は呆然と立っていた。何度も見ている夢だが、空恐ろしさは平気になれない。

今回は少し様子が違う。夢の中にいる少年は、こちらに話しかけて来ないのだ。闇の中で不自然に浮き出る少年は、背中を丸めて座っている。

「だれかこないかなあ」

少年はぼつりと、そう呟く。その誰かに呼びかける様な響きは、一期にも共鳴する。

——この子は、寂しいのか。

少年の肩を叩いて、ここにすることを伝えようとする。しかし、手はすり抜け、虚しく空を掻くだけだ。

「……ぼくは、なんなんだろう。なんで、ここにいたくちやいけないんだろう。ぼくは、いつたいどんなそんなそんざいなのか？ ……だれか、だれかとはなせば、ぼくはどんなそんなそんざいかわかるのに」

少年の声は、心細さを感じさせた。一期は彼の前に移動し、声を届けようと試みた。

「君は、確かにここにいる。生きている。君は、少し寂しがり屋で、だけど物を考えようとする、賢い子だ。……そんな君を、どうして周囲の人間は一人にするのだろうかね」

一期の声に呼応するかのように、細く光が差し込んでくる。少年はそれから目を守る様に手で翳した。そして、光の太さが大きくなって、少年と一期を包んでいく。

* 一期が最後に見たのは、その光から誰かが出てくる景色だった。

ずきり、と頭が痛む。ガタンゴトンと揺れる床が、更に頭痛を倍増させている様な気がした。手を動かそうとして、自分が後ろ手に縛られていることに気付く。どうやら、足も縛られている様だ。目の前はどんな地獄が広がっているのか。恐る恐る、目を開ける。

そこには、先程の髪を肩で切り揃えた穏やかな笑顔の少女と、ぎこ

ちない作り笑いを貼り付けた氷雨の蜂須賀虎徹が、ボックスシートに向かい合って座り談笑している光景が広がっていた。一期はぽかんと口を開ける。

「それでね、兄さんと一緒に泥まみれになっちゃって、母さんに叱られちゃったの。こんなに服を汚して！ って」

「そうなんだ。全然思いつけないけど」

「仕方ないわ。記憶操作をされているのなら、ちよつとやそつとじゃ記憶は戻らないもの。時間をかけていきましよう」

「そうだね。……あ、起きた」

蜂須賀がこちらを見る。ぎこちない表情が、安堵に緩むのが分かった。少女は先程までの穏やかな笑みを引っ込め、憎悪を滾らせた鋭い視線を一期に向けた。

「感謝しなさい。兄さんが足がついたら大変だと忠告してくれて、そして何より大切な友達だと言ったからまだ貴方を捨てていないの。少しでも妙な真似をしてみなさい、貴方の首と胴を切り離すわ。——貴方は兄さんの慈悲で生きているということを忘れないで頂戴」

ぐつぐつと煮え立つ憎悪を剥き出しにし、少女は一期を見下ろす。少女が靴を鳴らすと、周囲から時間遡行軍の短刀と脇差が現れた。一体どこに潜んでいたのか、短刀は体を強張らせる一期の周囲を監視する様に飛び回っている。

顔をしかめて、蜂須賀は少女に苦言を呈した。

「コノミさん、あまりそいつらを表に出すのは止めてくれないか。そいつらは俺の敵なんだ、あまり近くに寄られると気分が悪い」

「まあ兄さん、可哀想に。こいつらは酷いことをされていたのね。でも大丈夫よ、こいつらは私達を守ってくれるの。言わばボディガードね。だからそんなに不安にならなくていいのよ」

「……この数の兵を、どこから手に入れたのです」

蜂須賀に蕩ける様な笑みを見せていた少女——コノミは、一期の追求を冷たい声音で突っぱねた。

「貴方が知る必要のないことだわ。それとも、今すぐここから放り出されたいの？」

「コノミさん。本当に君が俺の妹だとして、そんな風に俺の友達を蔑ろにする妹は嫌いだよ。それに、彼も俺も緊張するから、そいつらは引つ込めておいてくれると嬉しい」

蜂須賀が不快感を露わにしたのを見て、コノミは一瞬顔を青ざめさせる。そしてはつとしたと思うと、うつとりした表情で蜂須賀を見つめた。

「本当に兄さんは優しいわ。昔から変わらない、そういうところが大好きよ。兄さんに嫌われるのは嫌だから、しばらくそいつはそこに置いておくわ。ボディガードも下がらせるけど、くれぐれも危険なことをしないでね？」

ほう、と無意識に息を吐いていた。それは蜂須賀も同様であつたらしい。

ピピピ、とコノミの鞆から電子音が鳴り、一期は体を竦める。それには気付かずに、コノミが中から端末を取り出して画面を見ると、顔を歪めた。

「ごめんなさい兄さん、ちよつと席を外すわね。すぐに戻ってくるから」

「分かったよ」

コノミは席を立ち、通路を歩いてドアに向かう。コノミが時間遡行軍を引き連れてドアの向こうに消えたのを確認して、蜂須賀は立ち上がり一期に駆け寄った。

「一期！　すまない、君を巻き込んでしまつて……」

「蜂須賀殿のせいではありません、お氣になさらず」

蜂須賀は刀を出現させ、一期の手足の縄を軽く切る。これで、一期が少し力を入れれば解け、かつコノミに怪しまれない程度の拘束になつた。

「いざとなつたら、力を入れて縄を切つてくれ。……今はこれが怪しまれない限界だ」

「ありがとうございます。……それから、彼女は何者です？」

蜂須賀は「分からない」と言い頭を抱える。

「本当に妹が存在するなら、浦島が大喜びしそうだけどね。俺には心

当たりが無い。彼女は、俺を誰かと勘違いしている様だ。……それを利用して、一期を友達だと言って放り出されるのを阻止したんだけど……」

「重ね重ね、ありがとうございます。流石に情報もない場所に一振りではどうしようもありませんから」

「そうだね、と蜂須賀は頷く。」

「一応言っておくと、ここはどこかの路線の電車内だ。貸し切りだと言っていたから、車掌に救援を、という訳にはいかないみたいだね。どうしたら本丸と連絡が取れるか、途方に暮れているところだ」

「どこの路線かは分からないのですか？」

「端末が使えなくてね……電車も止まる気配が無いし、どこの地域かすらも分かっていないよ」

「打つ手無し、ということか。しかし、どうにかして連絡を取らなければ、自分は捨てられ、蜂須賀は自称妹に閉じ込められそうだ。」

「そういうえば、主からこれを預かっていたんだけど……」

蜂須賀が懐からある物を取り出す。それは掌より少し大きい機械であった。一期はそれに既視感を覚えたが、答えが出てこない。

「修理に出しておくと主に言われていてね……でも、俺はこれの使い方が分からなくて。一期、心当たりは？」

「……見覚えのあるような……すみません、すぐに思い出せそうにありません」

「そうか。まあ、修理しなくちゃいけない位だし、あまり使えないか。でも、心当たりがあるなら一応持っておいてくれ」

「そう言つて、一期のジャージのポケットに機械を突っ込む。直後、ガラガラとドアが開かれた。蜂須賀はまた後で、と言って席に戻る。」

「お待たせ、兄さん」

「……誰からだつたんだ？」

「兄さんを助けるのに協力すると言って来た奴らよ。全く、事細かに報告しろだなんて。身内でしか話せないこともあるじゃないの、ねえ？」

「あー、そうだね……」

すっかり己の兄として接しているコノミに、蜂須賀は苦笑いだ。介入して怒りを買う訳にもいかず、一期は本丸と連絡を取る方法を模索することに決めた。

氷雨の蜂須賀と蒼穹の一期が拉致されたと一報を受けた雲霄隊はてんやわんやの状態だった。何せこの町の時空間座標を特定され、空間の壁に穴を開けられ、刀剣男士を連れ去られたのだ。主に時空間管理を担当する雲霄隊は、原因究明に乗り出していた。

雲霄隊本丸の一室で、加州は機械に向かいながら喚いていた。

「あーもー、何でこんなことになっちゃったかなー!」

「頭掻き毟っちゃだめですよ、加州さん。ボクの方は空振りでした」

「俺の方も空振りだ。相手は徹底的に蜂須賀をモノにしたい様だな」

「鶯丸様、言い方!」

時空の穴の痕跡を辿ってみるも、今のところ当たりには至っていない。ブラフに思いつきり引つかかっている状況だ。

事が起こってから事態を知り、事前に拉致を防げなかった雲霄隊は、恐らくこの後思いつきりこき使われるだろう。本来なら政府から処罰が下ってもおかしくはないが、何せ謹慎などを命じたなら確実に時空間の警備が手薄になる。政府直属部隊の中では、ここの審神者と刀剣達程時空間の扱いに長けているものはいない。後釜を据えるにしても、時間がかかる。故に、彼らを休みなく働かせることで、処罰の代わりとするはずだ。後釜の教育もする様に命じられるに違いない。

加州が端末を取り出して、メモした氷雨隊の審神者の証言を確認する。

「えーと、連れ去ったのは蜂須賀を兄と呼んでる女の子。その子が万屋の前で氷雨の蜂須賀と蒼穹の一期を襲撃、拉致した、と。……ねえ平野、どう思う?」

「普通なら人違いで他人を襲い、拉致した狂人と見なされるでしょう。ですが、確か氷雨隊の蜂須賀さんは――」

不自然に区切られた平野の言葉に、鶯丸と加州は顔を見合わせる。

加州の顔には、冷や汗が浮かんでいた。

「……いやいやいやいや。痕跡は丹念に消しているはずだし、普通に考えてそういう結論に至る？」

「至ったのだからな、彼女は。……とんでもない執念だ」

「問題は、誰が彼女を確信させたか、ですね。そんなことを思い浮かんでも、普通は陰謀論だということを選択肢から外しますから」

鶯丸は、鶴丸からの個別トークルームでのメッセージを思い起こしていた。

『うちのはちそかと、そいきよつのいちごがつれさられた。なにかしららないか』

鶴丸は、恐らく蜂須賀の真実を知らない。聡い刀だ、いずれは真相に辿り着くだろうが、機密情報である以上今の鶯丸から言うことは何もない。鶯丸は『こちらでも懸命に調べている。心配なのは分かるが、とりあえずは落ち着けよ』と返信して、端末をスリープ状態にした。

だが、大人しくしている彼らではないだろう。氷雨隊でも、決死の捜索が行われているはずだ。

「鶯丸さん」

物吉が鶯丸へ声をかける。思案の海から浮上した鶯丸は、どうした、と物吉の方を向いた。

「氷雨隊、がむしやらにならないといいですね」

「……そうだな。時空軸は数多にある。手当たり次第に出陣しては、疲労するだけだ」

世界は一つではない。数多の時空軸、それぞれに細かい歴史は違う。大きな流れはほぼ同じだが、例えば市井の人々に関する歴史は、ちよつとしたことでがらりと変わる。

この町へ接続できる時空軸だけでも百を超えるのだ。まずは少女が、どの時空軸に逃げたかを特定しなければならぬのだが――

「……途方も無いなあ。目が回りそうだな」

「が、頑張りますしょう！　ね？　ボクらがちゃんとしないと、氷雨隊が暴走しかねませんし……」

時空軸一つ一つの世界中を見て回る訳にはいかない。そのため、時空の壁を破壊した痕跡を元に探している。が——現時点で蜂須賀達は見つかっていない。

「あー、蜂須賀のいるところから敵が襲撃して来て、時空軸特定できないかなー」

「加州さんの目が死んでる……」

「頑張ろう、加州。今はやるしかないんだ」

「本当、そんな都合のいいことが起こるといいんですけどね……」

平野の言葉に一瞬部屋が静まり返り、四振りはため息をつく。そして、よしやるよ、という加州の一声で再び機械に向き合った。

8—3 「錯乱／光明」

氷雨の蜂須賀と蒼穹の一期が襲撃された万屋前。氷雨の調査部隊は、命を受けて店番である老婆に話を聞くために赴いていた。

「皆すまないねえ……いきなり襲われて腰を痛めてしまったよ」

「……いえ、お気になさらず」

万屋の中は物が散乱し、足の踏み場がない状態だった。先程、老婆が時間遡行軍に襲われていた跡だ。逃げ惑っていた老婆を殺そうとした時間遡行軍を斬り捨てた氷雨隊は、腰を抜かしていた老婆に手を貸していた。

青江が、小夜に支えられている老婆に切り出す。

「それで、状況を詳しく話してもらえないかな？」

「ああ、そうだねえ……あの時は驚いた。悲鳴が聞こえて何事かと思ったら、空色の髪をした男の子が蹲っていてねえ。悲鳴を上げたのが、派手な出で立ちをした男の子だって分かって後に、近くの木から女の子が降りて来たんだよ」

女の子。それは、蜂須賀達を連れ去った犯人のことだろう。老婆は続ける。

「それで……何て言っていたか……そう、これだけははっきりと覚えているよ。声がよく通っていたからねえ。派手な出で立ちをした男の子に向かって『一緒に帰りましょう、兄さん。私達の家に』って」

「……『兄さん』？」

——どういうことだろう。蜂須賀を兄と勘違いしている？

そんな推測が調査部隊の頭に組み上がる。当然だ、刀剣男士は名の通り男しかない。妹がいるなどあり得ないのだ。

混乱する調査部隊をよそに、老婆は話し続ける。

「その後、二言三言話して、派手な出で立ちの男の子は女の子に連れられて消えてしまったよ。空色の男の子は気を失っていたみたいだけど、周りにいた笠を被った男に担がれて同じく消えてしまった。その後、わしは残っていた笠を被った男に襲われてねえ。物を投げたりして逃げ惑っていたけれど、殺される寸前に皆が助けてくれたんだ。

……わしが知っているのはこのくらいだねえ」

笠を被った男とは、時間遡行軍の打刀のこと。調査部隊は間一髪のところ、目撃者を救ったという訳だ。

老婆に例を言い、調査部隊は万屋周辺を捜査するために動き出す。鶴丸は焦りで歯噛みした。

「……くそつ、状況は進展せずか」

「慌てても仕方がない。……それにしても、犯人の頭が少しイかれて
いる、ということしか分からなかったな」

長谷部も焦燥感を隠せない。時間遡行軍がいるのは分かっていた。しかし、行き先だけでも知ることができないかと思っていたのに、犯人は「私達の家」以外に情報を言わなかった。事態は膠着状態のままだ。

「……一振りずつあちこちの世界に探しに行くか」

「……何を言っている、鶴丸。そんなことをしても時間が無駄になるだけだ。まずは主に報告を——」

「万が一にも当たりを引くことがあるかもしれないだろう！ 主に報告？ そんな時間はないんだよ！」

鶴丸が激昂した。その声は少し潤んでいて、少なからず隊員に衝撃をもたらした。すぐに復帰した長谷部が鶴丸に言い返す。

「貴様はその万が一のために隊員を疲弊させるつもりか!? 大まかにどこの世界に逃げたのかすら特定できていないのに、隊員をばらけさせる？ その関係のない時間遡行軍に会敵したらどうするつもりだ！」

「じゃあ主の言う通りにある程度絞れるまで待つってか!? その間に蜂須賀達が折れる事態になったらどうするんだ！ ……ああそうか、お前さんは主命が第一で仲間が折れてもいいって奴だったな！」

「貴様——！」

鶴丸につられて長谷部も苛立ちを露わにし出す。口での戦争はどんどんヒートアップしていった。感情的になっていく喧嘩の内容に隊員は口を挟めない。

そうして、あわや抜刀——という時。

「——アンタ達、いい加減にしな」

次郎が低い声で、二振りの首根っこを掴んで互いの頭を衝突させる。痛みで二振りの口はようやく止まった。

「鶴丸、焦る気持ちは分かるがアンタは頭に血が上り過ぎだ。ちよつと考えれば、アンタの提案は現実的じゃないことくらい分かるだろう。それに長谷部。隊長ならもう少し冷静になりな。隊員の喧嘩をいちいち買ってるんじゃないよ」

次郎の諭す言葉に、項垂れる二振り。次郎は呆れた様子で肩を竦める。

「全く、酔いが醒めちゃった。アタシの性分じゃないんだけどね、こんなこと。酒でも飲まなきゃやってられないよ」

「次郎さん、ありがとうございます。……圧倒されちゃって、僕」

「堀川一、お礼代わりに後で万屋のお婆ちゃんから酒買ってきてー。青江、小夜、主に報告よろしく。馬鹿共はアタシが引きずって部屋に放り込む。それじゃあ、一旦帰城するよ」

そう言つて、次郎は喧嘩をした二振りの首根っこを掴み歩き出す。三振りも慌ててその後を追った。

「……うう、一期……」

そう呟いた鶴丸の声は、幸か不幸か、誰の耳にも入ることはなかった。

苦笑いが貼りついている蜂須賀と、満面の笑みを浮かべたコノミが会話をしている。話すのは主に、兄を含めたコノミの家族のことだ。「……あの時の兄さんはとても格好良かったわ！ サックスのソロという責任重大な役目を緊張も見せずに堂々と演奏しているあの様は、他のどんな奏者も平伏すと思うの！」

「それは言い過ぎなんじゃないかな、コノミさん……」

「もう、コノミでいいと言っているのに……。母さんも、兄さんの堂々たる様に感心していたわ。父さんも、よくやったと兄さんを褒めていて、兄さんは嬉しそうだった」

うつとりと回想するコノミに、蜂須賀から乾いた笑いが漏れる。自

分の知らない家族のことに、あまり関心を持たなかった。

ちらりと、一期を見やる。一見彼は俯き、しおらしくしている様に見える。しかし、氷雨の一期の場合はその表情の下で策略を巡らせているのだ。彼もそうだと思いたい。

「……いさん？ 兄さん？ どうしたの？」

心配そうに、コノミが蜂須賀を窺う。——油断していたらだめだ。こんな表情をしていても、彼女は時間遡行軍を従えているのだから。

「……少し頭が痛くなってきたね。軽いものだから、心配はない」

「まあ！ もしかしたら、記憶が戻る前兆かもしれないわ！ 兄さん、私のことを思い出そうとしてくれているのね、嬉しい。でも無理はないで。兄さんが苦しむのは、とても悲しいから」

「あ、はは……」

自分の都合のいい解釈をする彼女にはいつそ賞賛に値する程である。しかしそのおかげで怪しまれずに済んだ。蜂須賀は内心胸をなでおろす。そして、再び「記憶喪失であるコノミの兄」を演じようと口を開く。

「俺は、多分昔とは容姿が違っていると思うんだけど、両親は腰を抜かしたりしないかな」

「ああ、心配しないで、兄さん」

コノミは慈愛溢れる笑みを浮かべ——言い放った。

「二人とも、殺したものだ」

「……は？」

蜂須賀は固まる。しょうがない物を想像する様に、やれやれとコノミは額に指先を当てる。

「もう、父さんも母さんも酷いのよ。『あいつはもういないんだ』『いなくなつた人よりも、前を見て生きなさい』って言うんだもの。兄さんは確かに生きているのに。挙げ句の果てに、兄さんを迎えに行こうとする私の邪魔までしようとしたの。『化物を迎え入れるつもりはない』って。こんな環境で兄さんの心が安らぐはずがない。だから殺したわ」

「なっ——！ 君は、両親を慕っていたんじゃないのか!？」

驚愕を顔面と声に乗せ、蜂須賀は詰め寄る。きよとんとした様子で、コノミは蜂須賀の疑問に答えた。

「まあ、それなりに好きだったわよ。でもね、それよりも兄さんの方が大事。兄さんのために、安らげる環境を作ることが心がけたわ。父さんと母さんがいた方がいいのかもしれないけど……兄さんを『化物』と拒絶して傷つけようとするなら、消えてもらうしかない。私の元に駆け付けて詰って来た叔母さんも、兄さんを憎んで『いなくなつて清々する』と言つた従兄弟達も、あいつも、あいつも、あいつも——全員、綺麗にしたわ。ねえ、兄さん。私、お掃除凄く頑張つたのよ。記憶が戻つたらでいいから、目一杯褒めて欲しいわ」

コノミは、まるでボールを取つて来た犬の様に、目を輝かせ、兄の褒美を待っていた。

——狂つてる。蜂須賀は愕然とした。

彼女を舐めていたことは否めない。所詮、時間遡行軍にしか頼れない、普通の現代に生きる少女なのだ。何故そう思った。彼女は、躊躇いなく一期を殴る様命じていたじゃないか——

目眩がする。手すりに体重の一部を預ける。それを見て、コノミは蜂須賀に縋り付き、言い訳じみたことを話し始める。

「ごめんなさい、兄さんには刺激が強かったかしら？ それとも、私を人を殺したことを怒ってる？ でも、仕方がないのよ。兄さんが化物と呼ばれるのは、耐え難いもの。兄さんが迫害されることは間違ってる。兄さんは綺麗な場所で生きるべきだわ。だから私、兄さんの周りを綺麗に——」

再び、電子音が響く。コノミは舌打ちをして端末を取り出し、蜂須賀に申し訳なさそうに眉を八の字にした。

「ごめんなさい、また連絡が入つたわ。……しばらく休んでね」

「……ああ」

コノミは席を立った。そうしてドアが閉まった後、黙っていた一期が問いかける。

「……蜂須賀殿、大丈夫ですか？」

「……ああ、少し衝撃を受けたただけだ。心配はしなくていい」

「そうですか……政府に刃向かおうとするだけあって、彼女は少々常軌を逸しておりますな」

力無い笑いが漏れる。今のやり取りで、本丸に戻らねば、という思いが更に強固になった。

「二期、何か考えは思いついたかな？」

「すみません、それがさっぱり……機械を使えないか考えていたのですが……」

「機械か……」

確かに、突破口になりそうなものはこれしか思い浮かばない。だが、審神者に「万が一の保険」として持たされているこれは、審神者が遠隔操作するものだ。と蜂須賀は考えていた。

うーん、と唸る二振り。蜂須賀が、ふと零した。

「その機械だけどね、故障箇所が調節ボタンなんだ」

「調節ボタン？」

「ちよつと失礼……そう、このボタン。何度ボタンを押しても画面の数値が変わらない。どうも数値が固定されたままになっている様なんだ。ほら、見てみて」

「どれどれ……」

蜂須賀は、一期のポケットの中から機械を取り出し、ボタンを押して見せる。画面に変更は無く、そのままの数値でそこにあった。

「ほら、変わらないだろう？ 昨日から変わらないんだ、だから修理してもらえって主が」

「……！」

「……一期？」

目を見開く一期の目を、蜂須賀が訝しげに覗き込む。しばらくの沈黙の後、一期は口を開いた。

「蜂須賀殿、数値は本丸にいた時から変わらないのですよね？」

「ああ、そうだよ。それがどうかしたかな？」

「蜂須賀殿」

一期は蜂須賀を見上げる。その目は、力強く光っていた。

「私に、考えがあります。——これに賭けましょう」

8—4 「時間切れ」

和佐中木之実^{ワサナカノミ}は、苛立ちながら電話を切った。電話の相手が「必要な物が揃わない、もう少し待っていてくれ」と言つて来たのだ。一刻も早く家に帰りたい彼女は、電話を叩き割りたい衝動に駆られる。

——早く兄さんと二人だけでゆっくり過ごしたいのに！

兄を見つけるまでは良かった。誤算だったのは、その場に兄以外のものが存在していたこと、そして兄がそれを大切な友達だと言つて放り出すのを止めて来たこと。

久々に会つた兄は、姿こそ変わっていた（彼女すら本人かと疑つた位に）ものの、優しい性質はそのままであつた。関係のないものにも慈悲を与えるその姿は、まさしく幼い頃に引き離された兄そのものだった。

優しい兄。だからこそ言えない。両親が、高額の金に釣られて兄を国に売つたことを——

——これでしばらくお金に困らないわね、あの子も役に立つじゃない。

——久々に旅行にでも行こうか。コノミには適当に誤魔化そう。

兄がいなくなつた夜。眠れなくなつて階下に降りたコノミは、両親の欲に塗れた会話を聞いた。——聞いてしまった。

金にがめつい親族にも金を貸す優しい両親。コノミはかつて、そう信じていた。しかし、金に執着するのは両親も同じだったのだ。

兄は両親の娯楽のために、国に引き取られた。その事実が己の中に浸透した時、目の前が真っ赤になったのをよく覚えている。

それからコノミは、様々な場所に向かつて兄の行方を尋ねた。しかし返されるのは、哀れむような視線と、訝しむ周囲の態度。コノミの周囲の人間は、両親の兄が海外に留学しに行ったという作り話を疑つていなかった。

——兄はもう、生きていないのでは。

——違う！ 兄は生きて、私を待つてる！

ぐるぐると諦観する思いと希望を求めると頭を回る。嘆き、悲

しみ、何度涙で目を腫らした夜を越えたことか。

世間を信じられなくなり、何ヶ月も学校にも行かず兄を探し回るコノミを、周囲の人間は無責任に哀れみ、忌避した。そうして、コノミは更に心を閉ざしていった。

ある日のこと。いつもの様に兄を探すコノミの前に、ある男が現れた。男は、彼女に囁く。

——兄の行方を知りたくはないかい？

同情ならいらないと突っぱねるコノミに、男は一枚の写真を差し出す。それは、リノリウムの床の上で、他の子供達に囲まれて座る兄の姿を窓の外から写した物だった。日付は、その日から一ヶ月前——。

——答えて。兄さんはどこにいるの!?

詰め寄るコノミに、歪んだ笑顔を向ける男は取引を持ちかけた。兄の居場所を教える代わりに、自分達の計画に協力してもらう、と。

悪魔の契約だ。分かっている、コノミはそれを飲んだ。そうして得た真実は——コノミを壊すには充分な物だった。

その日の深夜。コノミは男に持たされた拳銃を使って、両親と交渉しに行った。その結果は、「化物を迎え入れるつもりはない」という物だった。交渉決裂だと言って、コノミはまず父親を撃った。それを見た母親に命乞いされても、その後母も撃ち二人とも死んだと確認しても、弾が切れるまで何度も何度も撃った。そうして、狂った様に笑い続けた。——いや、もう狂っていたのだ、彼女は。

やり過ぎだと言う男は、笑って彼女に「戦力」を与えた。そうして押しかけて来たがめつい叔母、兄を虐めていた従兄弟、無責任な視線を向けていた人間——皆、殺した。

逃れようのない罪を犯した彼女を逃した男は、使いを通して兄の居場所を教えた。そうして彼女は「町」を訪れ——ついに兄を見つけたのだ。

*

コノミは、兄と共に国外へ逃亡することを目論んでいた。そのための準備を男達に行ってもらおう手筈だったのだが——まだ、準備はできていないと言う。

——化物が、そんなことも迅速にできない訳!?

怒りを何とか腹の底へと隠し、コノミはドアを開ける。怒り狂った自分を、兄には見せたくない。

ドアの前には、姿を変えても愛しく感じる兄がいた。兄は、驚いた様に目を丸くした後、につこりとコノミに笑いかける。

——ああ、この笑顔が大好き。

怒りが霧散していくのを感じながら、コノミは兄に笑い返す。

「どうしたの、兄さん?」

「コノミさん。……あのね、一期がお手洗いにいきたいと言っているんだ」

「そんなの、我慢させればいいでしょ」

「いや、本気で漏れそうだと言っていてね……このままじゃ、座席を汚してしまう。俺としても座席を汚したくないから、行かせてあげてくれないかな」

「……はあ、分かったわ。兄さんがそう言うなら」

コノミは、一期と呼ばれた青い髪の男に、監視として「兵」を一つ付け、手足の拘束を解かせた。そうして、青髪はトイレへと消えていく。

今度こそ二人きりになった、と浮き立ちながら、コノミは兄に話しかける。

「ねえ兄さん。無事に家に着いたら、一緒に海外旅行に行きましょう! 兄さん、どこか行きたいところはある?」

「ええ? そう言われても困ってしまうなあ……」

「私はフランスがいいわ。エッフェル塔が見たいの!」

「俺はどうしたいか分からないな。いつかフランスのことを教えてくれ」

優しい笑み。日差しを受けて、兄の姿が聖人の様に神々しく見えて来る。それを真近で見られる妹の特権に、コノミは内心で兄を付け狙っていた女に舌を出す。

「もう、兄さんも一緒に行くの! 一緒に写真を撮って、美味しいご飯を食べて、綺麗な景色を見るの!」

「そんなことが、できたらいいね」

消極的な兄の反応に、コノミは頬を膨らます。しかし、あんなことがあったのだ、そうなるのも致し方ないのだろう。

「兄さんは、もつと贅沢をしいいのよ！　ねえ、どこに行きたい？」「うーん、そうだなあ……」

その時。彼女の端末からアラームが鳴る。慌てて端末を取り出すと、そこには「兵」が消滅したという表示が出ていた。

——あの化物、何かしたのね!?

トイレへ向かおうとするコノミだったが、兄の唸り声で足を止めさせられる。

「うう……」

「兄さん!?　大丈夫?」

「いつ……た……!」

兄が苦しんでいる。それを何とかかしたいと思いつつも、トイレの方も気になる。

どうすればいい。どっちに行けば——

そうしている間に、ドアが開く。青髪の男が、一人で現れた。

「貴方、どういうつもり?」

「どう、とは?」

「私の兵を消したでしょう!?　まさかとは思うけれど、私と兄さんの邪魔をする気じゃないでしょうね!」

コノミの詰問を受け流し、青髪は涼やかに笑う。

「邪魔とは?　私はただ廁へ行っただけです。……ああ、そういえば用を足している途中で時間逆行軍が襲って来たので討ち取りましたか……この点からすると、邪魔をしたのは貴方では?」

「ふざけないで……!　やっぱり、あの時捨て置くべきだった!」

もう彼女の堪忍袋の緒は切れている。目の前の男は自分の邪魔をする化物だ。ならば、もう容赦はしない。

「大人しくしていなかったことを、後悔するといいわ。……行きなさい!」

コノミは「兵」——時間逆行軍を展開させる。狭い場所でも動きや

すい打刀以下で編成されているその隊は、一斉に青髪に襲いかかった。

青髪は、真つ直ぐ斬りかかって来た短刀を斬り伏せ、その勢いのまま背後にいた脇差を斬り上げた。打刀と錨迫り合いをした後、押し勝った青髪がふらついた打刀を袈裟懸けに斬った。

「何をしているの！ 早くあの化物を殺しなさい！」

コノミは怒りのまま、次々と時間遡行軍を繰り出す。その中には、あの男が「苦無」と呼ぶものまで含まれている。次第に強さを増す兵達に、青髪は次第に押されていった。

「……苦無まで……貴方、どれだけの業を積めばこんなに動かせるのです」

「化物に効く口はないわ！」

コノミは青髪を押している高揚感でいっぱいだった。

——私の邪魔をするものは、一人残らず消え失せればいい！

次第に高らかな笑い声を上げるコノミ。青髪への報復に夢中になっっている彼女は、気づかなかった。

頭痛を催していたはずの兄が、己の隣にいないということに。

「あらあら？ さっきの生意気な態度はどうしたのよ！」

「はあ、はあ……っ！」

苦しげに息を切らして敵に相對する青髪に、コノミの加虐心は高まっっていく。

——もっと苦しめ、そして後悔しろ、私の邪魔をしたことを！

そうして兄に話しかけようとしたことで、ようやくコノミは兄の不在に気がついた。

「兄さん？ 兄さんどこ!?!」

「……はあ……っ」

「貴方！ 兄さんをどこへやったのよ!?!」

「……さあ……どこでしょうね」

目の前が赤く染まる。兄と、また引き離されるのか。湧き上がる憤怒に身を任せ、コノミは吠える。

「すつとぼけやがって……！ 化物は化物らしく人間に退治されりや

「あいいんだよ！」

地が出始めた彼女へ、青髪は疲労を滲ませふつと笑う。

「それが貴方の本性ですか……なかなか愉快ですが」

「ああ!？」

凄むコノミの耳に、ギシギシと音が響いてくる。音の方向は——天井。

おかしい。この電車は割と新しく、天井が軋むなんてことはないはずだ。それに、少しずつ光が入って来ているような——

青髪はポケットに手をつ込みながら、告げた。

「残念ながら——時間切れです」

「——一期!!」

天井に穴が空き、空から白い塊が降ってくる。白い塊に押し潰された苦無は、呆気なく崩れ去った。白い塊——男は、少し涙を滲ませ青髪に駆け寄る。

「無事で良かった、一期……!」

「ぼろぼろだな、でもよく頑張った。後で茶を奢ろう」

天井から、緑色の男も降って来た。白い男と緑色の男に鋭く睨みつけられ、コノミは形勢が逆転したことを理解した。

8—5 「発見まで」

時は、少し遡る。

「それで、長谷部が蒼穹の一期に『傷付きたくなければ滑~~レ~~園に近寄るな』って警告したんだよ。前はほとんど話さなかったのに、凄い成長だと思わないかい?」

「いやあ、ずっと見守っている身としては涙が出ますよ。長谷部さんがいち兄を気遣うだなんて!」

「……うるさい」

「こうやって少しずつ、他の奴らと話せる様になればいいな」

「うんうん、やっぱり長谷部さんは優しい子だねえ」

「うるさいったら!」

春光隊では、昨日長谷部が蒼穹の一期に起こした行動についてで盛り上がっていた。長谷部が一期を気にかけてと思われる言動をしたのだ、長谷部以外の春光隊員にとっては宴を催してもいいほどの成長ぶりだった。長谷部は嫌がるだろうが。

当然、隊員達は氷雨隊と蒼穹隊に起きたことを把握していない。いつもの様に、アットホームな雰囲気醸し出していた。

「友達が増えることはいいことだぜ、長谷部。この調子でどんどん仲良くなっていこう!」

「獅子王、面白がってないか!」

「そーんなことねーって。……おつ、電話」

「逃げたー!」

ジリリリ、と鳴る電話に走って行く獅子王。長谷部は不本意そうに隅っこの方で機械をいじり始めた。

獅子王が電話を取る。

「ほいほーい、こちら春光隊。要件を聞くぜー」

「獅子王さんの言う通り、どんどん友達増やしていきましようよ長谷部さん! まず蒼穹のいち兄からですね!」

「鯨尾!」

「何なら、僕から仲良くしてみようかな。あの一期はなかなかにとつ

つきやすいし」

「雅は分からねえが、戦略について話すのも手だなあ」

「歌仙、薬研……!」

「彼には色々話を聞いてもらいたいものだねえ。長谷部さんのどの点を見て友達になりたいと思っただのか」

「石切丸まで……! 何で友達になる前提で——」

「——ちよ、おい、落ち着けて!」

獅子王の面を食らった様な大声に、隊員達の会話が止まる。電話先で何かあったのか、ちらちらと長谷部の方を見やっている。長谷部は涙目のまま、獅子王に近付いた。

「どうした、獅子王」

「いや、蒼穹の一期からだっただけ……何か『妹が』とか『蜂須賀が』とか言つてて訳分かんなくて……」

「——スピーカーフォンに切り替えろ。そのボタンだ」

涙を拭い、真剣な顔付きになった長谷部にそう言われて獅子王がボタンを押すと、焦燥に満ちた蒼穹の一期の声が聞こえて来た。

「もしもし、聞こえていますか!?!」

「聞こえている。何の用だ」

『長谷部殿、良かった……! 今私は、氷雨の蜂須賀殿と共に歴史修正主義者に拉致されています!』

隊員達がざわめき、そして氷雨の蜂須賀、と聞いた長谷部の目の色が変わった。強張った口調で一期に説明を請う。

「状況は?」

『今、私は電車内の厠にいます。蜂須賀殿は妹と名乗る歴史修正主義者と一緒です。……蜂須賀殿が持っていた機械を使えば、戻るまでにはできなくても、電話をすることは可能なのではないかと思います』

「連絡して来た、と。時空座標指定装置があったのか、流石蜂須賀だな」

『それで、長谷部殿なら何とかできるのではと考え、ちようど春光隊のチラシがあったので、連絡しました。——がざにあのけーきを沢山用意します、どうすればいいかご指示を!』

「……分かった」

長谷部が重々しく頷いても、隊員は声を出さない。ここからは、長谷部の独壇場だ。

「周囲に、何か地名の手がかりになりそうな物はあったか？」

「……先程、『鷲ノ原』と書かれていた駅を通り過ぎました」

「後は、時空座標指定装置のシリアルコードを。画面の裏側にある英数字十五文字の羅列だ」

「……6LTWSV4B4W89HK3です。合っているか、自信がありませんが……」

「合っているかは、これから調べる」

そうして長谷部は端末を取り出して、画面を映し出す。数多の世界を映している画面に、長谷部は呟きながらタイプする。

「……時空座標指定装置、検索。……シリアルコード6LTWSV4B4W89HK3。……約五十件ヒット。『6LTWSV4B4W89HK3 鷲ノ原』で再検索。……三件ヒット。該当する時空座標は——これだ！」

長谷部は画面に映し出された情報を見ながら、一期に問う。

「一期、今から時空座標指定装置に簡単なメッセージを送る。届いたら読み上げろ！」

『はい！』

沈黙の時間が、あまりにも長く感じられた。息を呑みながら、その時を待つ。

数十秒後、一期が報告する。

『……届きました！……『がぎにあのきかんげんていたると』、で合っていますか？』

「よし——」

——繋がった。長谷部は高速で時空座標をコピーし、その勢いのまま一期に捲し立てる。

「報酬はそれだ、いいな!？」

『は、はい！……そろそろ怪しまれるのでこれにて！』

そうして、電話が切られる。次に長谷部は、ある番号に電話をかけ

た。しばらくコール音がした後、相手が出る。

『……はい、雲霄が一振り、物吉です！ 長谷部さん、忙しいので後で——』

「拉致された水雨の蜂須賀と蒼穹の一期一振がいる時空座標を特定した！ 今から送るから、後はそっちで何とかしてくれ！」

『ええ!? 一体どうやって特定を——』

「送った、後は頼んだ！」

『ちよ、はせ——』

ガチャリ、と電話を切る。はあ、と大きく息を吐いてから、長谷部は床に寝そべった。

「……お疲れ様、長谷部。今回の功績に免じて、その行儀の悪さは見逃すことにするよ」

「あー、疲れたー……」

「長谷部さん、寝るならお布団で寝て下さい！ 体冷えちゃいますよ！」

「動きたくないー……」

拉致事件の陰の功労者は、腕で視界を遮りその場で寝転んでいた。

電話を切られた雲霄の物吉は、呆然と廊下に立っていた。あんなに苦労しても見つからない二振りの位置を、ぽいっと送り込まれたのだ。そうなるのも無理はない。どうやって特定したのか、いやもう春光の長谷部ならそれくらいできそうな気がする。

混乱の渦に飲み込まれそうになった物吉は我に帰ると、先程までいた部屋に飛び込み、報告された位置を確認しようとする。

「ちよ、物吉どうしたの？」

「電話で何かあったのか？」

それに返事をする余裕も無く、物吉はタイプしながら画面を食い入る様に見ていた。時空座標を入力、そして該当機と接続し——ハッキリングする。

表示されたのは、時空座標指定装置の所有者情報。「水雨隊蜂須賀虎徹」と映し出された。

——ビンゴだ。物吉は机を叩き、宣言した。

「氷雨隊蜂須賀虎徹及び蒼穹隊一期一振の位置を特定しました！」

「えっ、今の数分で一体何があったの!？」

「本当ですか、物吉さん!？」

「もしや、電話の相手からか?」

三者三様の反応を見せる。物吉が画面を見せると、次第に三つの顔が真剣になっていく。勢いよく立ち上がり、加州が指示を飛ばした。

「平野、蜻蛉切と山伏に出陣の用意をつて伝えて！ 俺達も用意したら出陣するよ！」

「了解！」

「氷雨隊に伝えた方がいいか?」

「敵の数が未知数だ、戦力は多い方がいい！ 氷雨隊にも出陣要請して！」

「分かった」

四振りには部屋の外に出る。物吉と鶯丸は、同じ方向に歩きながら一言交わした。

「鶯丸さん。一期さんが無事で、本当に良かったですね」

「……ああ」

鶯丸の手には、端末が握られている。画面に映し出されているのは、チャットアップリの通知だ。

『一：わたしもはちすかどのもぶじです。きゆうえんをおねがいします』

鶯丸は安堵の息を吐く。しかし、本当に大変なのはこれからだ。二振りはそれぞれの部屋に飛び込み、出陣準備を始めた。

次郎から頭を冷やす様にと部屋に放り込まれた氷雨の鶴丸は、ベツドの上に座りながら、激しい焦燥感と暗い不安に駆られていた。友達を助けに行きたい。それなのに、情報が全く入って来ないのだ。感情に任せて隊長と喧嘩してしまったのも、不安を掻き立てられる要因だ。

——もしかしたら、部隊から外されるなんてことは……。

それは我慢ならなかった。蒼穹の一期の無事を、この目でしっかりと確認したい。例え審神者に言われても、それを譲る気はなかった。

——一期、破壊されてないよな？

それはあり得ることだ。何せ相手は、蜂須賀のみに執着していた様なのだから。もし、一期が破壊されていたら？ —— 鶴丸は、きつと歴史修正主義者を地獄に落ちるよりも無残な目に遭わせるだろう。

——長くこの世にあったのに、何て様だろうな。

ふつつつと湧き上がる憎悪に気が付き、鶴丸は自嘲する。自分がこんな感情的になるなんて考えもしなかった。他の本丸の自分は、もっと上手く感情を操れるだろうか。

ピロン、と端末から電子音がした。しまつてある引き出しからのろのろと端末を取り出す。調査をしている鶯丸からか、それとも何も知らない江雪からか。そう思いながらチャットアプリを開き—— 鶴丸は目を見張ることになる。

『一：わたしもはちすかどのもぶじです。きゆうえんをおねがいします』

それは、間違いなく蒼穹の一期からのメッセージだった。鶴丸は画面を食い入る様に見つめる。その時、バン、とドアが開いた。

「鶴丸、至急執務室に集合！ —— 蜂須賀が見つかったよ！」

ドアを開けた次郎は、鶴丸にそう言い残して足早に去っていく。ぽかんと口を開けた後、鶴丸は端末をしまおうと立ち上がる。

「……くっ、ふふふ、はははははー！」

口から笑い声が突いて出る。緊張と不安から解き放たれた鶴丸は、狂った様に笑い続ける。

——よかった、一期は無事だった！

その気持ちのまま一通り笑った後、鶴丸は頬を叩き、表情を引き締めめた。

恐らくこれから出陣の命が下されるだろう。犯人には、ある程度痛い目を見てもらわなければならない。

刀を握り、鶴丸は力強く廊下へ踏み出した。

8—6 「拉致事件終焉、その先に伸びる影」

電車の上から、剣戟の音がする。外に到着した援軍が戦闘をしているのだろう。

コノミはぶつぶつと呟きながら、車内で逃げ回る。

「何で何で何で！　ここまで上手くいっていたじゃない！　どうして邪魔が入るのよ！」

背後から近付くのは、平野と鶯丸、それから鶴丸。彼らは敵を斬り伏せながらコノミを捕らえようと迫る。

「あいつが犯人か……随分と若いな」

「どんな年齢でも関係ない！　捕らえて頭をかち割れば同じだ！」

「鶴丸様、顔が怖いですよ。あまり怒りに身を任せ過ぎずに」

そんな会話をしながら、コノミとの距離が縮まっていく。突如、コノミが立ち止まる。――先頭車両に着いたのだ。

「こうなったら……！」

コノミは鞆の中から兵を出そうと試みる。それは、「検非違使」と呼ばれる第三勢力のレプリカ。それを展開させれば、彼らにはひとたまりもないだろう。提供した男は「ギリギリまで出すな」と言い含められていたが、ここが極限だ、とコノミは決断を下した。

「追い詰めた、と思っっているみたいだけど――ここが貴方達の墓場よ！　出て来なさい――」

「させないよ」

コノミの背後にあった車掌室が開き、コノミの頸部に衝撃が走る。軽く意識を飛ばしたその隙に、車掌室から出て来た小夜が鞆のシヨルダーを切った。鞆を奪い、背後にいた加州に渡す。

「これでおしまい？　全く、随分手こずらせてくれちゃって」

「……鞆の中身を改めて、それから聴取ですか」

「そう。この子には、色々聞かなきゃいけないことがあるしね」

運転手をしていた時間遡行軍を、小夜達が斬り捨てたことにより電車は止まった。加州がコノミの手足を拘束し、彼女を抱えて車掌室から降りていく。小夜と鶴丸、鶯丸と平野もその後が続く。

降りた先は、線路沿いの道。そこでは氷雨達の調査部隊と雲霄隊の第一部隊が、氷雨の蜂須賀と蒼穹の一期を守る様に囲んで待っていた。

「さーて、鞆を改めますかー」

「何か手掛かりがあるといいんですけど」

加州と平野が鞆を開き、中を検分する。その横を駆け抜け、鶴丸は一期と蜂須賀の下へ向かった。

「一期、蜂須賀！ 本当に無事でよかつた……っ！」

「何泣いているんだ、鶴丸。……あれ、鶴丸。蒼穹の一期と知り合いなのかな？」

「鶴丸殿、ご心配をおかけしました。……ええと、私は……」

訝しげに顎に手を触れる蜂須賀に、齒切れ悪く一期は言い淀む。鶯丸が蜂須賀の背後に近付き、解説した。

「鶴丸が開いている会の一員だ。要は友達だな」

「ええっ!？」

蜂須賀がぼつと一期と鶴丸を振り返る。二振りは気まずそうに目を逸らした。

「その様子だと、鶴丸と一期は黙っていたな？ まあ、審神者同士の仲が悪いのだから当然か。心配するな、俺も会の一員だ。そうやって審神者を納得させればいい」

「……納得するかね、主が」

「何なら主権限で命じてもいいんだぞ？ 『刀剣男士の交友に口出しするな』と。……俺はお前達とまた飲みたいものだが、お前達は違うか？」

「違わないー!」

「違う訳ないでしょう!」

悩んでいたのが一転、声を揃えて否定する二振りに、鶯丸は笑い声を上げる。

「そうかそうか。そう聞けて嬉しい。さて次はいつにするか」

「鶯丸殿、帰ってから決めましょう、ね!?! 一応ここは戦場ですよー!」

「いや、今度は居酒屋じゃなくて甘味処に行こうか。たまには素面で

話し合うのもいい」

「聞いてますか鶯丸殿!？」

「それにしても、どうやって位置を報告したんだ？」

「いや、壊れかけの装置が本丸に座標を固定していると判断して、装置を使って『町』に小さな穴を開け、信頼できる場所へ連絡しただけですが……後で話すべきことですよね!？」

戦地のだ真ん中でのんびりと話す鶯丸に突っ込む一期。置いてけぼりの蜂須賀は、鶴丸に尋ねる。

「……あれ、どうにかしなくていいのか？」

「まあ、そのうち一期が諦めるだろう……ん？」

鶴丸の下に、青江と次郎が近付いて来る。二振りには真剣な表情で鶴丸に切り出した。

「ねえ、もうそろそろ元鞘に収まってもいい頃じゃないかな？」

「……? どういうことだ？」

「長谷部と和解しろってことだよ。あんたら、まだ話し合っていないだろう?。」

そういえばそうだった、と鶴丸がポンと手を叩く。蜂須賀は目を丸くした。

「喧嘩? 長谷部と鶴丸が?。」

「ああそうだよ。鶴丸が蜂須賀を助けるために無謀なことをしようとしてね。それを止めた長谷部と言い合いになったんだ」

「次郎が何とかその場を収めてね。とりあえずは小康状態ってところかな? 互いに収まるべきところに収めないと、僕らも困ってしまうからねえ」

腹をくくれ、ということだろう。長谷部の方を向くと、そっぽを向きながらもこちらの様子を気にしていることが見て取れる。

鶴丸は長谷部の方へ向かう。

「長谷部、すまなかった。あの時、血が上り過ぎていた」

「……」

「二期と蜂須賀が心配で、冷静さを欠いていた。それで君に八つ当たりをしてしまい、弁解のしようもない。……俺は、まだこの部隊で

やっていきたい。罰は何でも受ける。……許してくれないか」

沈黙。鶴丸は唇を噛み締め、長谷部の返答を待つ。

長谷部の指先が、鶴丸の額に伸びる。そうして額に向けて、思いつき指を弾いた。

「いつ……」

「……俺にも落ち度はあった。その点に関してはすまないと思ってる。それと今のこれで相殺、ということにしよう」

「……そうだな」

長谷部はふん、と再びそつぽを向く。けれど、鶴丸には長谷部が安堵している様に思えてならなかった。

仲間には割と優しい、それが氷雨調査部隊隊長である。

「さーて、あつちはどうなったかねー」

「俺達だけならまだしも、今は雲霄隊がいる。できることはそうないだろう」

「じゃあしばらく暇ってことか。何しようか——」

「——ちよつと、これどういうこと？」

鞆を検分していた加州が惑乱した声を上げる。小夜も目を瞠っている。鶴丸と鶯丸が近付き、加州に尋ねた。

「加州、どうしたんだ？」

「鞆の中に何かあったか？」

「……鞆の中にあつた時間遡行軍の兵を見てただけど……二振り共、これ見て」

加州が地面に置かれた刀を指差す。それは、ほとんどが時間遡行軍の兵達で構成されていた。しかし、一部の刀は違う雰囲気を出している。

「……これ、検非違使か!？」

「やつぱりそうだよね……この子、検非違使まで操ってたみたい」

検非違使とは、時間遡行軍と刀剣男士が長らく同じ戦場で激しく戦っていると出現し始める第三勢力。それらは時間遡行軍を踏み付け、刀剣男士をも折らんとする、時空の調停者。検非違使の正体には様々な説があり、未だに続けられている議題でもある。

「……検非違使は、歴史修正主義者が操ってたつてののか？」
「ううん、違う。一瞬そう思つて調べてみたんだけど、……」
「加州、どうした？」

加州の顔が、青ざめている。震える声で加州は説明した。

「……こいつらは、三つの刀装を操れる。それにしては——弱過ぎるんだ。……多分、投石兵を付けなくても倒せるくらい」

「はあ？ そんな検非違使いるわけ……まさか!!」

「うん。——多分こいつら、政府産だ」

政府は、時間遡行軍や検非違使に対抗できる戦力を育て上げるために、時折「戦力拡充計画」を行う。仮想敵である時間遡行軍や検非違使を用意するのは、政府だ。その検非違使は、通常より弱く設定されている。加州は、これが政府の作り出した、仮想敵の検非違使だと推測したのだ。

そうだとしたら、大問題だ。当然のことであるが——

「……政府産の検非違使を、盗んだってことか、こいつは」

「一人では不可能だろう。多分、内通者がいるんじゃないか」

「ああーっ！ もう次から次へと……!」

加州が頭を抱える。政府側の対応が問われるのは必至だろう。加州は一通り喚いた後、目を覚まして歯噛みしているコノミの方を睨み、ずかずかと近寄つて怒鳴りつける。

「おい、小娘！ この兵をどうやって手に入れた!」

「……言う義理はないわ。兄さんを返しなさい」

コノミは加州を睨み返す。そうしてまだ兄を呼び、まともに見える気のない彼女に、加州の怒りが頂点に達した。

「まだそんなこと言つてんの!? あいつは蜂須賀虎徹！ お前の様な反逆者の兄なんかじゃないんだよ!」

「反逆者？ 最初に私達を裏切つたのはあんた達でしょう!」

「お前の何を裏切つたつて言うんだよ!」

コノミはそうして、言つてはならないことを叫んだ。

「あんた達は兄さんを化物に貶めた！ 化物共と同一視される兄さんが哀れでならないわ！ あの化物共のおかげで兄さんを見つけられ

たけど、やっぱりあんた達は信用できない！ 縄をほどきなさい、兄さんは私と一緒に帰るの！ あんた達といたら兄さんは不幸になるだけだわ！」

「このアマ……！」

「——お前、何と言った？」

コノミの言葉に違和感を感じたのは鶯丸だった。加州は怒りでそれに気付かない。

その時。コノミの頭に、時間逆行軍の短刀が絡み付いた。罵声を浴びせていたコノミの口は止まり、恐怖に顔が染まる。

「新手か!? こんな時に——」

「——違う！ 皆、伏せろ!!」

事態に気付いた鶯丸は間に合わない判断して加州を引っ張り、距離を置いてから盾兵を展開させた。カチカチカチ、と短刀から音がしている。

「あ、あ、嫌、死にたくない！ 兄さん、助けて——」

コノミの言葉も虚しく、彼女には誰も近寄らない。そうして、短刀からドオオオン、と爆風と共に火が上った。それぞれ刀装を持っているものはそれを展開し、持っていないものをその守備範囲内に引き入れた。

しばらくして。そこには、頭部を吹き飛ばされた少女の遺体が残った。蜂須賀は、それに近寄った。

「……いくら君が俺の妹でも……俺が背中を預けた仲間を悪く言う子は、好きになれないよ」

それは彼が妹に告げる、決別の言葉だった。

へたり込み呆然とそれを見ていた一期の頭の中は、先程の言葉で渦巻いていた。

——化物。そうか、我々はそう見えているのか。

平野が一期に近寄り、一期に目線を合わせて屈む。

「蒼穹のいち兄。あまり気にしちやだめですよ、あの人間の言葉は逆者のそれなのですから」

「……そうだね、平野」

水雨の調査部隊が、遺体を片付けようと動き始める。鶯丸も「手伝うぞ」と言つてそれに協力した。

「……鶴丸。あの少女の言葉、どう思った？」

「……俺達が人間じゃないって意味なら、間違いなく俺達は化物だろ。神格の高い神なら別だが、俺達は付喪神だから」

「その考え方はいいが違う、それじゃなくてだ」

鶯丸はいつもの余裕がなくなっている。顔をしかめて、線路沿いの木々を見渡している。まるで――

「化物共のおかげで、と言つていただろう。彼女は俺達刀剣男士を化物と称していた。この意味が分かるだろう、鶴丸」

「……おいおい。そりゃあ、洒落にならねえぞ」

「洒落にならないことが起きようとしている。――恐らく、これからな」

――まるで、まだ見ぬ敵を見据えるかの様に。

「呆気ない終幕ねえ」

「……どこがだ。人一人爆発したんだぞ。目が腐ってるんだな、そうなんだな」

ハルカがサトルの頭を殴る。彼女達は電車内から、事件の終焉を眺めていた。

彼女達は、加州が入り込んだのとは反対側の車掌室に潜んでいた。コノミが時間遡行軍によって車庫に入っていた電車をジャックした後、こっそりとそれに乗り込んだのだ。

そんなハルカの興味は、もうコノミという敗北者から別のものへと移っていた。

「愚弟。これから起こるであろう事柄を十五字以内で述べなさい」

「はあ？ ……政府が後処理に追われる」

「○点」

ハルカは容赦無く切り捨て、彼女の答えを述べた。

「正解は、神々が醜い戦争を起こす、よ」

ハルカはにんまりと笑う。サトルは、軽蔑し切った表情でハルカを

見ていた。

「うふふ、楽しみ、楽しみだわ！ 身の程知らずに人の形を取った神々が、そのお綺麗な面をひっぺがして、どろどろした感情を剥き出しにして戦争するの！ さあ、神々はどんな醜い感情を見せてくれるのかしら？」

高揚しながら踊るハルカ。彼女は、こうなることを知っていた。

昨日訪れた客——コノミは、己の目的から後ろ盾となったもので、余すことなく感情的に教えてくれた。そうして、彼女が殺されるであろうことも、ハルカはその性格から予測していたのだ。

それを阻止することもできたはずだ。それなのに止めなかったのは。

「ああ、でもあの子はちよつと残念ね。神に対抗して見せたのはいいけれど、兄を前にしてから詰めが甘過ぎたわ。でも、これで神々も人間がただの家畜ではなく、むしろ人間のおかげで存在できることが多少なりとも理解できたでしょう」

——全ては、神への嫌がらせ。ハルカの行動原理など、それだけだ。

真夜中、草木も眠る丑三つ時。「町」の森の中、その奥深くにあるぼろぼろの家で、六つの影が蠢いていた。

「全く、最後の最後であの娘は。感情的になるのは構わないが、こちらの存在を知られたくないと言ったんだが……まあでも、政府がどのくらいで駆けつけるか分かったのは収穫だな」

ぎい、ぎい、と古い椅子を鳴らし、鶴丸国永がぼやく。それを囲いながら、乱藤四郎が自分の三つ編みを摘む。

「頭を吹き飛ばせたから、これ以上こっちの情報を掴まれることはないでしょう？」

「そうだな。ありがとう、堀川。なかなかいい操作だった」

鶴丸の礼に、堀川国広がにっこりと笑う。

「敵短刀の操作は難しかったんですけど、上手くいって良かったです。

——調査部隊は、僕のことを疑いもしませんでした」

「いやいや、氷雨の審神者はお優しいこった。……こっちの審神者の

ことを考えれば、ひとのことを言えないって思われそうだな」

鶴丸は、ぐるりと囲う五つの影を見渡す。ふんだんにフリルが使われているスカートを纏う乱、微笑んだままの堀川、そして小狐丸、蛍丸、宗三左文字。鶴丸は彼らに問う。

「今日、他に報告はあるか？」

「ボクはないよ」

「僕もですね」

「……母様、母様……」

「……」

「……僕もありません」

ぶつぶつと呟き続ける小狐丸、鋭い目で黙りこくる蛍丸、それにため息をつく宗三。それに苦笑いを浮かべて、鶴丸は告げた。

「今日はこれで解散だ。堀川、今日は本当にご苦労だった。ゆっくり休んでくれ」

「はい」

五つの影が、闇に消えていく。そうして鶴丸は、ぎい、ぎい、と椅子をわざと鳴らす。

「……今に見てろ、死に損ない共。もうすぐ、地獄に送ってやる」

その呟きを聞いたものは、誰もいなかった。

第九話 「事件のその後」

9—1 「記憶調査」

「報告書書くのめんどーい……誰か代わってー……」

「加州さん、だめだと分かっているでしょう。諦めて下さい」

「えーと、こっちのエリアの防壁確認は完了、と」

「蜻蛉切殿！ 晦冥研究所付近に『幽霊』が出たと報告があった、調査要請も出されていたので共に向かおうぞ！」

「これで今月何回目だ……？ 分かった、行こう」

大量の機械に囲まれた部屋で、刀剣男士達が必死に書類や機械と向かい合っている。駆動音と会話が行き交う部屋の中に、山伏と蜻蛉切とすれ違った鶯丸が戸を開けて入って来た。

雲霄隊は、先日の拉致事件における時空管理のミスにより審神者を含む部隊全体が減給処分を食らっていた。それに嘆いている間にも、どんどん仕事は舞い込んで来る。本丸内は、いつも通り——いや、それ以上か——の忙しさを見せていた。

部屋に訪れた鶯丸に、目の下に隈を拵えた加州が首だけ振り向いて辛気臭い声を上げる。

「鶯丸ー、ちようどいいや。報告書書くの代わってー……」

「すまない加州、俺は様子を見に來ただけだ。もうすぐ約束の時間だからな」

「あれ、もうそんな時間？」

「あつという間ですね……道理でお腹が空く訳です」

平野が端末の時計を確認すると、時刻は間も無く十三時を示そうとしていた。

今日は、蒼穹の一期がこの本丸に来る日だ。鶯丸と蒼穹の一期は友達だが、今回は私的な用件でこの本丸を訪れるのではない。

——場合によっては記憶処置も検討している拉致事件の事情聴取。それが、一期がここに来る目的だ。

友達にはできるだけ厳しく接したくないが、これも仕事だ。公私混

同は抑えなくては。奥に押し込んだ友を思う心が痛むが、必死にそれを見ない事にした。

「……そういう訳だから、加州の代わりはできない、すまないな。それじゃあ迎えに行ってくる」

「行つてらっしゃーい。……あー、しんど」

「書かないといつまでも終わりませんよ、加州さん」

「分かっているよー！ でもやりたくないことから逃げたい気持ちは理解できるでしょ!?!」

加州の疲労混じりの喚き声に苦笑いしながら部屋を出る。板張りの床をしばらく歩き、玄関から靴を履き、外へ。舗装されていた道が、ある地点で土が剥き出しになる。足に響く違和感をやり過ぎし、喧騒溢れる城下町の入口へ。

蒼穹の一期は門の陰側に立っていた。背筋が伸びているのはいつも通りだが、今日は肩が少し強張っている。鶯丸はその様子に、とつて食う訳じゃないんだがと思いながらも、仕事時の態度で接しなくてはならないことに心苦しさを覚えた。

「……待たせたな、蒼穹の一期」

「……いえ、私も今来た所です」

一期に声をかけると、びくりと肩を跳ねさせてから振り返る。やはり、少し緊張している様だ。そう畏まるなど言いたいが、緊張させているのは自分だ。それでも、仕事は完遂しなければ。鶯丸は改めて思い直し、一期へ冷徹に告げた。

「今回は、雲霄隊で審神者と共にお前の話を聞く事になる。場合によつては記憶を見せて貰うが、構わないな?」

「はい。必要な事なのでしょう? ならば、協力する他ありません」

緊張しながらも、しっかりと目を見て頷いて見せた一期。流石だな、と感嘆した鶯丸は、一期を先導しようとして一声かける。

「覚悟があるならいい。……時間が迫っている、ついて来てくれ」

前を向いて歩き始める。後ろからは規則的な足音が聞こえて来た。重い沈黙のまま、鶯丸は賑やかな城下町から離れ本丸へと歩みを進める。

正門に到着し鶯丸がチャイムを鳴らすと、こんのすけの声かしばらく待つ様に告げる。その通りにすると、本丸内から雲霄隊の審神者が現れた。

「お前さんが蒼穹の一期一振か。今日は時間を取らせてすまないな」「いえ、重要な事だと理解しています。事件が起きた際、犯人の近くにいたのは私ですから。被害を受けた一振りとして、私が知りうる限りの事を話したいと思っております」

「そうして貰えるとありがたい。……応接室に案内しよう、こんのすけ！」

「はい、主様」

ぼてぼてと、審神者の後ろからこんのすけが歩いて来る。審神者が応接室に通す様命ずると、頭を下げてから蒼穹の一期の方を向く。

「まずは口頭で説明して頂きます。私の後について来て下さい」「はい」

ぼてぼてと、こんのすけが元来た道を歩いて行く。一期は黙って背筋を伸ばしたまま、小さな管狐に案内されていた。

一期が見えなくなってから、審神者が憂える顔を鶯丸に向ける。

「……悪いな、友達の事情聴取なんてやらせて」

「仕方ないさ。他の奴は忙しいしな」

「……友情を壊しかねないことをしたかね、俺は」

「何を言っている？俺は一期を信じているぞ」

暗い表情の審神者に鶯丸は、先程の一期の様子を思い浮かべて言った。

「二期は、こういう時に『友達だから甘く見て貰える』などと考えていない様だった。だからといって、仕事の時が俺の全てだとも思っていないだろう。……仕事以外の時は友達だ。俺は、一期もそう思っていると信じている」

「……そうか。野暮なことを聞いたな」

「少し心苦しいのは事実だが、詳しい話を聞かないといけないのは事実だろう。公私混同はしないぞ、俺は」

審神者は軽く頷いて、鶯丸に茶を用意する様に頼む。鶯丸は了承す

ると、すぐに本丸のキッチンへと赴き茶の用意をした。友の為にと買っておいたとおきの菓子を用意したのは、別に構わないだろう。

*

ローテーブルを挟む様に置かれたソファ。その片方に一期が、もう片方に審神者と鶯丸が座っていた。ローテーブルに置かれた湯呑から、小さく湯気が立ち上る。鶯丸は湯呑を手にとって茶を一口含み、飲み下してから確認した。

「そうか、あの少女は一つの町を壊滅させたのか……」

「彼女の言っていたことが正しければ、『綺麗にした』という言葉は、文脈から言って人間の殺害と見て間違いないかと」

「そこまでするとは……本当に、どこから兵を手に入れたんだろうな」
審神者が頭を押さえる。コノミは確かに時間遡行軍を用いていたが、時間遡行をしていない以上、彼女の起こした惨劇を無かったことにするのは不可能だ。被害者の遺族への手当、時間遡行軍関係の隠蔽、そして何より、時間遡行軍のレプリカの入手経路の捜査。やる事は山積みになっていく。

残っている菓子を口に入れる。甘みはあまり感じられなかった。

「まあそこはいい。一期、よく連絡を取る方法を考えついたな」

「そうだ、それだ！ よく機転を利かしてくれた、お陰で早くお前さん達を発見できた。どうやって思いついたんだ？」

一期は鶯丸と審神者の賞賛にも動じず、神妙な顔で一礼した。

「ありがとうございます。……たまたま雲霄隊の加州殿が似た様な機械を動かしていたのを見ていました。信頼できる場所への連絡先がたまたま入っていましたので、そこを通じてそちらに通報しました」
「尋ねていいか？ ……信頼できる場所というのは」

氷雨の蜂須賀が関わっている事、そして物吉に連絡が来た事。この二つからどの本丸が関わっているか、雲霄隊には明白だ。そして、一期が『信頼できる』と言っている事。一期は、政府を疑っているその本丸といい縁を結んでいるのだろう。だからこそ、一期の答えは予想できた。

「申し訳ありませんが、私の口からは言えません。……『森』で暮らしている方達、としか」

「そうか、言えないならいい。『森』の連中だと分かっただけで充分だ」
恐らく、こちらが特定している事も一期は理解しているだろう。それでも深くは入り込まず、鶯丸は話を打ち切った。

雲霄隊の物吉も、その本丸と深い縁を結んでいる。物吉が機械の修理をその本丸によく頼んでいる事も分かっている。だから、その本丸が政府や普通の刀剣男士を疑ってかかる姿勢も知っていた。彼等は、中立状態を保っているのだ。あまり深く踏み込み過ぎて離反されるのは避けたい。

審神者はその様子を見て、次の段階へ移行しようと腰を上げる。

「次は記憶調査だな。蒼穹の一期、頭の中を覗くのは悪いと思ってるが、少しでも情報が欲しいんだ。……頼む、協力してくれるか？」
「話が来た時点で覚悟はできております。……あまり昔の事は思い起こしたく無いので、その点だけお願い致します」

一期は即答したが、後の方になると俯き膝の上で拳を握る。それに困った様な笑顔を浮かべ、審神者は説明した。

「見るのは事件前後の辺りだけだ、昔までは覗かんよ。鶯丸、こっちである程度報告書をまとめておくから、記憶調査は頼んだ」

「拜命した、任せてくれ」

鶯丸が立ち、一期を引き連れて応接室を出た。

歩いていると時折、雲霄隊の刀剣男士とすれ違う。一期がきよろきよろと辺りを見回したり、すれ違う刀剣男士に驚いているのが伝わって来た。

「……珍しいか？」

「あつ、いえ、他の本丸に入るのは初めてなので……こういう本丸もあるんですね」

本丸は、審神者が金を払えばある程度自由にカスタマイズできる。洋館にしたり、ビルにしたり、地下空間に本丸を作っている審神者もいる。審神者・政府間の専用通貨である小判を払えば氣候を操れる様になるが、最初期に設定した建物は変えられない。

蒼穹隊の本丸は、人気が高い和風の本丸だ。雲霄隊の本丸も和風の部屋があるが、ほとんど審神者や刀剣男士の私室だ。それ以外の場所では、洋風の明るい色のドアが並んでおり、中からは様々な機械の稼働音が響いている。室内では、刀剣男士が話し合ったり仕事をこなしたりしている事だろう。

「後で案内しようか？」

「いいのですか？ 確かに中は気になりますが……」

「他の本丸を見て、見聞を広げるのもいいことだろう。……これは独り言だが、友達に協力して貰った礼もしたいしな」

一期が息を呑む気配がする。蒼穹の一期に友達だとはつきり言うのは初めてだ。少しむず痒い気恥ずかしさがある。後は、一匙程度の不安。自分は一期に今でも友達だと思われているのかどうか。鶯丸は公私混同をしない。だからこそ、先程までの公での場面と、私生活での場面でのギャップが響いていないかどうか、心配になってしまったのだ——怯えられやしないかと。けれど、それは一期への不信で、侮蔑だ。口には絶対に出さない。けれど、万が一の事を思い、怯えてしまうのは仕方ないだろう。先程審神者にはああ言ってみせたが、やはり不安は込み上げてしまうのだ。

歩きながら返事を待つ。そして。

「ありがとうございます。是非、案内して下さいね」

一期の、明るく嬉しげな声が答えた。鶯丸はほっ、と息を吐く。二振りの友情は保たれたままだった。大きく安堵したせいかな、少し声音が緩んでしまった。

「そうか、それじゃあ後でゆっくり案内しよう。この本丸は広いぞ。目を回さない様にな」

「よろしくお願いします、目を回す程の広さ、ですか。楽しみですな」

一期も気が緩んでいる様で、鶯丸の態度が友達のそれになっている事で会話が回り始める。鶯丸は、一期へ更に話しかけた。

「先程驚いていた様だったが、何かあったか？」

通り続ける刀剣男士が蒼穹の一期の気配に一瞬訝しむも、すぐに聴取に来たものと分かったのか、視線を一期から外す。この本丸の方々

は堂々としてますね、と一期は感嘆する。それから一言付け加えた。
「……何だかこの皆さんはとても迫力があるな、と。途中で『私』とすれ違いましたが、一体どれだけ鍛錬を積み重ねたのでしょ……」

確かに、この本丸の一期一振はかなりのしつかり者だ。蒼穹の一期の様に都市伝説に興味を抱いて飛びつかないし、氷雨の一期の様に特定の刀剣男士に感情を剥き出しにしない。蒼穹の一期は、この本丸の一期に感動している様だ。

「個体差というものだ、気にするな。迫力があり過ぎる事で他本丸の短刀に怯えられたら世話ないからな」

「えっと、経験がおありで？」

そう問われ、鶯丸は我が隊の一期の闇を晒す事にした。

「……うちの一期が他本丸に調査へ行つた際、その本丸の弟達に泣かれたと愚痴を吐いていてな。泣かないものも一期を遠巻きに眺めていて、視線を向けたら目を逸らしたらしい。その日のうちの一期は大いに荒れていたな」

「……何と言えばいいのか……とりあえず、私は私なりの鍛錬を積みたと思います」

「是非そうしてくれ」

鶯丸はあるドアの前で立ち止まり、ドアを開け一期を先に中へと入れる。一期は部屋の中を見て、目を見開いた。

そこは、数多の厳つい機械が並ぶ部屋だった。中央にはベッドが置かれ、ベッドの上には大量の線で機械に繋がるヘッドギアが乗っていた。ベッドの向こうにはもう一つ部屋があり、そこにも大量の機械が並んでいる。

呆然とする一期の横を通り、鶯丸はベッドの横に立つ。

「二期、この帽子を被って寝台の上に横になってくれ。そうしたら後はこちらで操作する。……後一応、同意書と筆だ。一通り見たら、署名してくれ」

ベッドの上で、一期が同意書に目を通す。そしてボールペンを手に取り、署名欄にサインをした。鶯丸に同意書を渡し、ヘッドギアを被

る。

「そうだ。あまり動くなよ、調査が上手くいかなくなるからな。……それじゃあ、始めるぞ」

鶯丸がベッドの向こうの部屋へと向かい、機械を立ち上げる。モニターが脳波や数値が映す中、一つの画面に朧げながらも景色が浮かび始めた。数値を調節しながら、目的の景色を探す。しばらくして、一期が万屋に向かい、蜂須賀と出会う景色が映った。そこを起点に、更に鮮明にしようとダイヤルを回す。

強い衝撃を受けた様で、画面が揺れている。ちらり、ちらりと殴った相手を探そうと画面内が動く。そうして、時間遡行軍と少女を映して、画面が暗くなった。——意識を失くしたのだろうか。しばらく暗黒の時間が続き、覚醒まで時間を飛ばそうとしたが——

そこで、鶯丸の目にある物が映った。

それは、記憶にしてはやけに鮮明で、はっきりと様子が見える。そこにいたのは、少年だった。少年の背を撫でようとしたのだろうか、一期のものであろう手が伸びて、少年の背をすり抜ける。しばらくして光が差し込み始め、それに包まれる様に一期は覚醒した。

鶯丸は、一期の記憶が録画されているか確認しながらもその光景に衝撃を受けていた。これは、自分の時と同じだ。

かつて、物吉がこの本丸に馴染むまでに自分に起こった事。それが、一期の身にも起きているのだ。審神者なら、こう言うだろう。——記憶領域へのハッキング、と。

早く手を打たないと、一期もこの少年も深く傷付くだろう。だが、これに関わる真実は重要機密だ。一体どうすれば——

一期達が救出され、本丸へ戻る所まで映し出された。これ以上の情報は無さそうだ。機械を止め、録画した媒体を取り出し、一期の下へ向かう。

「二期、終わったぞ」

「……ん、あれ、いつの間に……」

声が少し幼くなっている。どうやら少し眠っていた様だ。起き上がり、ヘッドギアを外すと一期は足をベッドの外に出した。

「お疲れ様。これで聴取は終わりだ。後は本丸案内だな」

「はい、分かりました……ううん、まだ少し眠いです」

「応接室で休むか？　ほとんど誰も来ないから、しばらく眠ったらどうだ」

「いえ、本丸の中が気になります。頑張つて起きて見せますぞ」

ふんす、と力を込めて一期が立ち上がる。やはり挙動が幼い。後で穴に入ってしまうかもしれない。

忘れない内にあの事を言える範囲で伝えておいた方がいいだろうか。いや、もう少し目が覚めてから……。鶯丸は悩んだ末に、今伝えておこうと決めた。

「二期」

「はい、何でしょう」

鶯丸が黙考している間に少し目が覚めたらしく、一期の声がはつきりして来た。鶯丸はできるだけ言葉を選び、一期に忠告する。

「周囲を隅々まで見渡すことを、決して忘れるなよ」

一期は突然真剣な言葉を投げかけられた事に訝しみながらも頷いた。意味は、恐らく通じていない。こういう時、規則に縛られる自分が心底頼り無く思えた。

そうして鶯丸は後に、苦しむ友の前で回想する——やはりこの時に全て話しておけば良かった、と。

9—2 「記憶処置」

氷雨調査部隊は、第八暗影研究所跡地に来ていた。ここ数日、『幽霊』と称されるヒトガタが再び現れる様になったので調査をする様にと命じられたのだ。昼食をとってから現地赶赴して見れば、出るわ出るわ『幽霊』の大群が。仰天しながら戦闘を開始する六振り。けれど戦って見れば、あつという間に殲滅できる程度の弱さだった。

「……呆気ないですね」

「楽でいいじゃないか。さーて狸々木庵で飲もう！」

小夜が腑に落ちない雰囲気で納刀すると、次郎は拳を掲げて足取り軽く歩こうとしていた。きつと長谷部が睨みながら次郎の肩を掴む。

「まだ昼間だ馬鹿者！」

「殲滅できた自分への褒美だ！ 長谷部もたまには自分を褒めてあげなよー、主に酒でー！」

「自分への評価は充分にしている。俺は昼間から酒を飲む行為を咎めているんだ！」

飲む飲まないの応酬をしている次郎と長谷部を見て、鶴丸と小夜がやれやれと互いに視線を向け合う。しばらくはこのやり取りが続くだろう。

二振りの事は放置を決めて、鶴丸は背後で破片をいじっていた青江に話しかける。

「前に比べると随分弱かったな。俺達が強くなったのかね？」

「それも有り得るけど、もしかしたら生まれ変わったなのかもしれないね。今回戦った相手は、どうも力の使い方を分かっていない様だった。再生能力も使っていた事を理解していなかったみたいだしねえ」

今回の『幽霊』は確かに、足を切られたり腕を落とされたりしてもすぐ再生した。しかし体の一部を失ったショックなのか、その後は錯乱しまともに動けなくなるものが多かったのだ。その隙に動力の源となつている物を壊しても、あまり動きは変わらず簡単に斬り捨てられた。前回の『幽霊』が強過ぎたのか、またはこれが普段の強さなのか。

「とりあえず、主には包み隠さずありのままを報告しよう。何か分かる事があるかもしれないし」

「それしか無いよな。弱かったって言うだけじゃなくて、青江の証言も追加しないと怒られそうだ」

審神者に「お前達の目は節穴か」という言葉から始まる説教を受け、再びここへ舞い戻る事になるのは避けたい。多少なりとも、情報は持っていていかなくては。

突如背後からドンツと衝撃が伝わる。いつの間にか背後にいた次郎が鶴丸と青江の肩を組んで来た。

「ねー、アンタ達も隊長を説得してよー。燃料切れで報告する気が出ないーい！」

「お前達、耳を貸すな。次郎、歩かないなら力尽くでも引つ張って行くぞ」

「やれるもんならやってみな！ アタシは酒が飲めなければ梃子でもここから動かないよー！」

次郎はごろりと地面に大の字になって寝そべる。長谷部は本当に動く気配の無い次郎に怒り混じりのため息をつき、懐から縄を取り出し次郎の腰に括り付け始めた。

「えっ、ちよっ」
「力尽くでも引つ張って行くと言っただろう。精々、摩擦の痛みに耐える事だな」

肩に紐をかけてニヤリと悪魔の笑みを浮かべる長谷部に、本気だと悟った次郎の顔が青ざめる。ジタバタと暴れるが長谷部は動じずに次郎を引きずり始めた。ずりずりと荒れた地面と次郎の体が擦れている。明らかに痛みを生じているであろう音が、こちらにまで痛みを想像させていた。

「あーっ！ 長谷部の鬼！ 主命馬鹿！」

「後者は関係ないだろうが。それと、大人しくしなければ余計に痛くなるぞ」

「それが鬼だって言ってるんだよ！ 皆助けてー！」

長谷部が次郎を荷物の様に引きずりながら遠ざかっていく。青江

と小夜、鶴丸は呆れながらも二振りを追った。

——堀川がさつと瓦礫の山を漁り、様々なガラクタを懐に入れてから五振りを追う。その様子を見ているものは、誰もいなかった。

*

本丸に帰還した調査部隊は、審神者に結果を報告する為に執務室へ訪れていた。審神者は長谷部によってまとめられた報告に黙って頷く。

「そうか、出現してそう時間が経っていないと」

「はい、青江はそう見ています。力の使い方を理解していない様子だった事、四肢を切り落としただけで錯乱する事、鍵となる物体を壊しても動きに何ら変化が無い事。これらの三点から、俺も青江の意見に相違は無いと考えております」

「なるほど、分かった。それで、何故再び出現したのかは……」

審神者の疑問に、青江が小さく挙手して答える。

「数時間で大量に湧くのも変だし、何よりあそこは一度調査しているけれど、鍵となる物はあるなにかは……どうやって集めたかは疑問だけど、僕は意図的に集められたんじゃないかと思ってるよ」

「——敵が関わっている、と考えて良さそうだな」

審神者の眼差しが強くなる。政府の敵となるものが存在すると見なして、敵意を滾らせているのだろう。こりやまたこき使われるな、と鶴丸は暗鬱のため息をついた。

「ご苦労だった。政府にこの事を報告すれば、それに基付き更に詳しく調査が行われるだろう。我々はこの国の防衛に貢献した。これからもその誇りを胸に、任務に励んで貰いたい」

審神者の言葉を受け取って、調査部隊は執務室を後にする。

彼等は自室に向かわずに談話室へと向かう。備え付けてあるソファアに座って、次郎は大きく息を吐いた。

「もーいったーい！ 長谷部、本当に本丸まで引きずって行ったね!」

「動けないと言っていた奴をここまで運んでやったんだ、有り難く思っただけだ」

「……次郎さん、途中から歩けるって叫んでましたけど」

「いやいや、引きずる音で聞こえなかつたなあ？」

皮肉混じりの口調から、アルカイックスマイルで次郎の悲鳴を受け流していた長谷部を思い出し、隊員達が引いた声をあげる。

「うわあ、鬼だ……」

「そういう嗜好があつたとはねえ……いやいや、夜の隊長は激しそうだ」

「おい、いかがわしい発想に繋げるな！」

「いやそう思つても仕方ないでしょう……長谷部さん、終始笑顔でしたからね……」

「長谷部の鬼！ 主命馬鹿！ 特殊性癖！」

「また引きずり回されたいか、次郎太刀！」

賑やかな声が廊下まで響き、声を聞きつけた刀剣男士達が時折顔を覗かせる。中を見ていつもの第四部隊だと分かれば、あまり騒ぐなよ、といった旨をそれぞれ述べて去っていく。

しばらくして、談話室に蜂須賀が現れた。

「廊下まで声が響いていたよ、少し静かにしないか」

「蜂須賀！ だって長谷部がアタシで自分の欲望を満たそうと」

「語弊を招く言い方をするな、馬鹿者！」

長谷部が勢いよく次郎の背中を叩く。細かい傷を思い切り抉られた次郎は、痛い痛いと言きながら己の背中をさすろうとしていた。小夜が恐る恐る背中をさすろうと手を伸ばす。長谷部は眉間に皺を寄せ、残る三振りには苦笑いだ。

そういえば、と鶴丸が立ち上がり蜂須賀の方へ歩み寄る。

「君も聴取に行つたんだつたな。どうだった、政府の聴取は？」

「あー、それなんだけど」

ばつの悪そうな顔をする蜂須賀。それに首を傾げていた鶴丸は、次に発せられた蜂須賀の言葉に固まった。

「どうも俺、事件の時意識を失っていたそうじゃないか。だから、事件の事を全く覚えていなくてね。君達が助けに来てくれたんだつて？」

本当にありがとう。意識を失くしている間に折られて、二度と弟に会えなくなるなんて事になっていたら、と思うとぞつとするよ。この

お礼は必ずするからね」

背後からも、呆然とする気配が伝わってくる。蜂須賀はその様子に、どうしたんだ、と困惑した表情を浮かべていた。

蜂須賀はあの時、ちゃんと意識があったはずだ。鶴丸と蒼穹の一期が友達である事に驚き、そして妹と名乗っていた少女に決別の言葉を残した。自分の記憶が間違っているのか、そうでなければ。

——記憶処置。それしか考えられない。一体どうして。鶴丸の頭が困惑と驚愕、そして不安で渦巻く。

——一期は、記憶を消されていないよな？

ふと思いつかん懸念に、鶴丸の足が勝手に動き出す。

「あつ、鶴丸!？」

蜂須賀の声を振り切り、廊下を駆けて階段を一段飛ばしで登り、自室へと急ぐ。自室に着くと、もどかしさのまま引き出しを開け、端末を取り出した。チャットアプリを開き、鶯丸との個別部屋に書き込む。

『鶯丸、一期は確か君のところまで聴取だったよな?』

それだけ送って、次の文を打とうとした鶴丸の指が止まる。

——友達を疑うのか。でも、鶯丸は公私を分ける性格だ。それに主の言葉は絶対。どうあがいても、それは変えられない。そもそも、記憶を消したとして鶯丸の心が痛まないと何故決め付ける？

ぐるぐると悩んでいると、鶯丸から返信が来た。

『なるほど、蜂須賀の記憶は消されたな? 安心しろ、一期の記憶は一つも消していない。後で本刃に聞いてみるといい』

その文面に安堵の息を漏らし、それから己の行動を恥じる。友達を疑った事を悟られてしまった。本当に軽率な事をした。疑われて気分のいいものでは無いだろうに。

『すまん』

どう書いていいか分からず、結局その一言に集約させてしまった。再び、鶯丸から返信が来る。

『何に対しての謝罪だ? 疑われた事に関してなら、別にいい。それが俺達政府直属部隊の定めだからな』

そうだよな、と思う。鶯丸は政府直属の部隊に属している事を受け入れている。今更疑われた所で、別に屁でもないだろう。だからこそ、友達である自分達が信じなければならぬはずなのに。

『いや、最近俺一期の事ばかりだなあと思ってる』

できたばかりの、新しい友達。最近彼の事ばかりであまり鶯丸や江雪とじっくり話していない事に思い至った。新鮮な驚きをもたらしてくれて、話も合う蒼穹の一期は鶴丸にとって今最も熱い刀なのだ。だからといって鶯丸や江雪と一緒にいてつまらないという事は無いし、ちゃんと友達だと思ってるのだが。

『そうだ、その件で俺はちよつとせんちめんたるだ』

突然の横文字に疑問符が浮かぶ。せんちめんたるとは、感傷的という事か。どういう事だ。内容を理解できない内に鶯丸が更に書き込む。

『最近、お前が一期に構ってばかりなのは別にいい。俺達も一期の事は気にかけているからな。だが、あまりお前と一対一で話す機会が無いのが少し寂しい。口に出していないが、江雪だつてそうだろう。……お前には感謝しているんだ、たまたま入った猩猩々木庵で相席になったあの日から。お前は俺の本丸の真面目な鶴丸と違って、とにかく楽しい事を求めている性質がある。本丸に顕現したてで息苦しさを感じていた俺にとつて、楽しさを求めるお前とのやり取りは上手く息ができた数少ない時間だったんだ。今では本丸に馴染んできたが、それでも少し息苦しさがあるのは確かだ。だから、お前が遠ざかると少し不安になる。依存しているみたいで、恥ずかしい話だがな』

ところどころで区切りながら、鶯丸は心の内を吐露する。それに鶴丸は驚いた。鶯丸がこんなに己の事を話すのはとても珍しい。だつて彼が話すのは、専ら大平の事だったのだから。しかも、自分に感謝している。遠ざかると不安になると。そこまで自分が彼に影響していたとは今の今まで分からなかった。

鶴丸の方こそ、鶯丸に感謝している。城下町で一振り寂しくさまよい歩き猩猩々木庵に辿り着いて、鶯丸と相席になったあの日に「友達」という素晴らしい概念を理解できたのだ。そこから今に続く楽しい

日々が生まれたのは、間違い無く鶯丸のおかげだ。

その旨を書き込むと、鶯丸は笑顔の愛らしい猫のスタンプを送って来た。

『可愛いな、その判子』

『うちの本丸の秋田が描いてくれたんだ。なかなか気に入っている』

『そうか……本丸に馴染めたみたいで、本当に良かった』

『ああ。……友達とは、話したい事が多過ぎて本当にいいものだな』

『違くない』

また会を開こうと鶴丸が書くと、鶯丸は予定を確認しないと、悩む猫のスタンプと共に返した。

9—3 「最終兵器」

傾き始めた陽の下で、ガラガラと門が開く音がする。それに気がついた子供達は、遊びを中断し開けた人影を確認するとすぐに門へと駆け出した。

「二期——！」

「二期さん、こんにちは——！」

「今日のおやつはドーナツだよ、一緒に食べよう——！」

「なあなあ、また弟達の武勇伝話してくれよ——！」

群がられた人影——蒼穹の一期は、ニコニコと笑いながら子供達の言葉に返事をしていく。輪の外周にいた江雪も、一期に話しかける。「こんにちは、一期。……改めて大変でしたね、無事で良かったです」「こんにちは、江雪殿。ありがとうございます、本当に——」

江雪には、事件の概要——氷雨の蜂須賀と蒼穹の一期が歴史修正主義者に連れ去られた——だけ話している。かなり政府の深部に食い込む事件だったので、本丸に戻る際に関係者以外他言無用だと鶯丸に言い含められたのだ。トークルームでも事情を話したのは鶯丸で、鶴丸と一期はあまり話せなかった。それでも鶯丸主導で話した事で察したのか、江雪は深い事は聞かなかった。

子供達が、二振りの話に反応して問いかけて来る。

「ねー、一期さんどうしたのー?」

「何かあったのか?」

無邪気に問う子供達に大人の事情を話す訳にはいかないと、一期は真実を隠しながらも答えた。

「ちよつと友達の家遊びに行っただけだよ」

「友達? 一期、江雪以外に友達いたのか!?!」

「……失礼ですよ、タイガ君」

江雪に咎められて、タイガと呼ばれた少年が慌てて一期に頭を下げる。謝ったならいいよ、と一期が言った後、江雪は一期に尋ねた。

「鶯丸の本丸へ行ったのですか?」

「はい、少し話をしに。その後、本丸内を案内して頂きました」

「そうですか……私も鶯丸の本丸を訪ねた事があるのですが……あれは凄いですね」

遠い目をする江雪。確かに、雲霄隊の本丸は——物凄かった。

*

最初に、と私室では無い場所へ案内された一期は、リノリウムの床と真っ白な壁に驚いた。和風の自本丸ではまずあり得ない素材だ。それだけでは無く、大量の機械があつたのもまた新鮮だった。液体が入っている筒型のガラスに機械が付いていたり、とにかく大きくて複雑そうとしか言えない機械があつたり——

しかし、一期が唾然としたのは別の事だった。

「ツシヤア報告書一区切りだア！ 主の所に持つて行つて来る！」

「なるべく早く戻つて来て下さいね！」

「南エリア端の時空が乱れています、立ち入り制限と緊急修復を！」

「分かった、行つてくる！」

「銀髪の子はいるか!? 千子村正の固定化に成功した、確定では無いかもしれないが諸々の数値を記録して政府に報告してくれ！」

「今行く！」

本丸内を慌ただしく叫びながら行き交う刀剣男士達。バタバタと鳴る足音の中で聞き取れた分でもこれだけの大騒ぎだ。それに、聞き逃せない言葉も出て来る。

——銀髪の子はいるか？ 千子村正？

あんぐりと口を開けている蒼穹の一期の横で、ああそうだと雲霄の鶯丸がさらりと警告する。

「まだ安定した顕現ができていない刀剣男士や、安定した顕現に成功してもまだ政府が公表していない刀剣男士もいる。つまりは今お前が聞いていたり見えていたりしている物は全てが機密事項だ。公で口にしない様に気をつけろよ」

「どうしてそんな危険な場所を案内しようと思ったんですか!？」

流星に命までは狙われたくない一期がそう叫ぶと、鶯丸が顎に手を当てる。

「そうは言っても、案内する所ほぼ全てがこんな感じだしなあ。今回

は仕事を多く回されたからこの騒ぎだが、普段から割と大っぴらに話しているぞ。それに秘密とか、興味あるだろう?」

「いやありますけれど! もつとこう、都市伝説的な物を想像していたというか……」

「残念だったな、ここはそれとは程遠い会社の様な物だ。それにさつきも言った通り、仕事を多く回されたから慌ただしさがいつもより酷いぞ。まあ、来た時期が悪かったな」

秘密結社の様な光景を想像していた一期は少し落胆する。しかし自本丸の雰囲気とはまるで違うところが、非日常を感じさせるのは確かだ。

動き出した鶯丸について行きながら、再びてんやわんやの光景を見やると――

「ぎゃあああ巴形の肉体が崩壊したあああ! また数値見直しの作業が……!」

「包丁行くぞ! ああもう菓子は後で食えっつて!」

「加州さんどこですか!? 書類はまだまだ山積みなのに……!」

阿鼻叫喚。雲霄隊本丸の中はそう言って差し支えない程のカオスであった。歩く所では隅にいないと誰かとぶつかりかねないぐらい往来が激しい。間を潜り抜けながら、鶯丸の背を追う。

鶯丸の私室に辿り着いた時には、一期の髪やら服やらが滅茶苦茶になっってしまった。いた。

「お疲れ、一期。今茶を出そう」

「お願いします……」

一期はふらふらとした体を座卓に投げ出し、ぐったりとした声を絞り出した。戦場でもみくちやにされるのは慣れていないが、何でもない場所でもぶつかられたりするのは、何だろう、とても疲れる。

一期は目の前に出された湯呑みを口に傾け、茶を喉に流し込む。目の前の鶯丸はこういう事に慣れているのか、背筋を伸ばして湯呑みを持っていった。

「また今度、落ち着いている時に改めて案内しよう」

「そうですね……」

茶を啜り外の音に耳を澄ませようとして、行ったり来たりする足音やら悲鳴や怒鳴り声からここで風流人になるのは無理だと改めて実感する。鶯丸はまるで外にいる鳥の声を聴いているかの様に穏やかな表情で茶を飲んでいた。その境地に至れるまで一体どれ程の時間がかかるのか。

突如ガラリと障子が開く。現れたのは――

「ここにいたか、鶯丸」

「三日月か」

「――っ!？」

急いで体を起こす。そして一期は、その姿を目にした。

今の今まで存在に気付かなかった。それなのに、現れた瞬間に周囲を平伏せさせる、自分が敵だったら立ち向かう気すら無くなってしまう様な強い迫力を三日月から感じ取った。その穏やかな笑顔さえも、畏怖を与える物でしかない。

――政府直属の部隊の三日月宗近とは、これ程まで。

顔役になつている刀剣男士は伊達じゃないとは思っていたが、この迫力は異常だ。鶯丸は年の功なのか、それとも共に過ごしているものを気にする様な性質ではないのか、びくともしていない。鶯丸もまた、雲霄隊の刀なのだと思ひ知らされた。

「おお、一期もいたか。ん？　だが何やら気配が違うな」

「今日事情聴取をした蒼穹隊のだ。本丸を案内していたが、疲れてしまった様だな」

「そうか、ゆつくり休んでいくといい。鶯丸の茶は美味いだろう」

返事をしようにも、口を動かせない。何か無礼を働いてしまったら、すぐに切り捨てられてしまうかもしれないと思うと、何も言葉にならなかつた。いや、自分の知る三日月はそんな些細な事を気にする性質ではないが、しかし――

「……一期？　顔色が悪いぞ、大丈夫か？」

「ああ、怯えさせてしまったか。では邪魔者のじじいはここらで退散しよう」

「いえ、そんな事は――」

気分を害してしまったかと、慌てて言い繕おうとする。が、手だけで言葉を制されてしまい、一期は黙り込むしかできない。三日月は微笑んで見せるが、それは強者の余裕——お前を殺すまでも無いと言っている様な——としか受け取れない。

「無理をするな。こういう事はよくある。何せ主曰く、俺は『最終兵器』らしいからな。普通の刀が恐れるのは仕方の無い事だ」

鷹揚に笑い、三日月は去っていく。遠ざかったのが分かった瞬間に、一期の体から力が抜けた。そのまま座卓に突っ伏し、大きなため息を吐く。

「すまない、三日月の事を忘れていたな。……当てられてしまったか、気分は悪くなっていないか？」

「……ええ、先程よりは落ち着きました」

あの三日月を見てしまったら、今まで演練で会って戦って来た三日月がただの好々爺に思えてしまう。あの三日月は力の底が知れない。本当に、一線を画す様な強さを持っているのだろう。ここの「自分」は、あの三日月にも恐れをなさないのだろうか。

「気にするな、うちの三日月は様々な調整を受けて強くなった『最終兵器』。恐れるのは当然の防衛反応だ。うちの一期も、初めて三日月と会った時に固まっていたしな。……あれに完全に慣れてしまう方がまずいと俺は考えている」

「……何故です」

鶯丸が湯呑みを座卓に置く。唇を噛み、眉根を寄せている。

「……『最終兵器』にも種類があるが、うちの三日月は対刀剣男士に特化していてな。普通の刀剣男士には問答無用で畏怖の感情を植え付ける。力の差を理解させられるが為にな。それが平気になってしまふという事は」

鶯丸が空の湯呑みを見つめている。湯呑みを持つ手に力を入れているせいか、指先の色が変わっている。

「——『最終兵器』に匹敵する力を持っているか、あるいは外道に堕ちたかだ」

鶯丸は苦々しくその言葉を吐き出した。外からは、まだ数多の足音

が響いている。

9—4 「卒園告知」

その後鶯丸に城下町入口まで送って貰い、せっかく外出したのだし子供達に癒されたい、と滑園に向かう事にした一期。子供達に囲まれながら先程までの出来事を思い出して、その慌ただしさに軽く目眩を起こし子供達に大丈夫、頭痛いの、と心配されていた。

「……その様子だと、三日月にも会いましたね？」

「ええ……本当に、凄い方でした」

「私は情けない事に腰を抜かしましたからね……『最終兵器』の異名は伊達じゃない、という事でしよう」

雲霄の三日月との邂逅は、ある種の洗礼なのだろう。鶯丸は三日月と会う可能性を忘れていた様だが、あの三日月を見たら——あの三日月と対立する事を考えると、政府に逆らう気など失くす。江雪もそうだったのだろう。

「ねー、ミカツキって何？」

「縁があれば、ここに来るかもしれない方ですよ」

「じゃあ江雪の友達なのか？」

「……そうですね、私の家にもいらっしやいます」

清澄隊にも三日月がいるのか。随分運が良い本丸なのだろう。

蒼穹隊には三つの刀装を操れるのが自分と鶴丸しかいない。「骨喰の為にも早く三日月さん鍛刀して下さいよ」と鯨尾にせっつかれ、頭を抱える審神者が時折可哀想になつてくるくらいには、蒼穹の審神者には運が無い。早く三日月を鍛刀して、気が楽になつてくれれば良いのだが。

「皆ー！…そろそろおやつ時間よー！」

棟内からスギハラが叫ぶ。それを聞きつけた男子達はぱつと走り出し、棟内へ消えていく。

「わーい！…ねえ、一期さんも行こー！」

「おやつ分けてあげるー！」

女子達に背中を押され、引つ張られ、一期は棟内に上がる。中ではスギハラが子供達を微笑みながら見ていたが、一期達に気がつくとき表

情を引き締め一礼する。

「江雪様、一期一振様。いつも子供達と遊んで頂き、ありがとうございます」

「いえ、楽しんでやっていることなのでお気になさらず」

「……私もそうです。礼をされる程の事ではありませんよ」

それでも、とスギハラは深々と頭を下げる。顔を上げた後、彼女は子供達に顔を向けた。その表情は、子供を心から愛する母親を思わせる物だった。

「貴方方のおかげで、子供達も楽しそうで……子供達がここに来てから出て行くまでずっと見守って来ましたが、こんなに元気になれるんだ、とここ一年驚きっぱなしです。……ですから、私は何度でも、貴方方にお礼をしたいのです」

スギハラは暖かな慈愛を込めた視線を子供達に向けている。スギハラは本当に、子供達を愛している。そうでなければ、余所者の自分達にこんな心情を漏らさないだろう。

「是非、一緒におやつを食べていって下さい。それに、今日は大事な発表があるんです」

「発表？」

「少し寂しいですが、喜ばしい事です」

ああ、と合点がいった様に江雪が声を上げる。ピンと来ないまま、一期は江雪と共に食堂へ案内された。

沢山のテーブルに、一席一つずつドーナツが置かれている。子供達は席に着き、今か今かと置かれているドーナツを見つめていた。一期と江雪は空いていた椅子に座る。隣にいた男子が、嬉しそうに二振りを見ていた。

「おやつはちゃんと行き届いているかなー？」

「はいー！」

机の列の最前に立つスギハラの声に子供達が元気よく手をあげる。一期と江雪も小さく手をあげる。見渡した後に、スギハラは切り出した。

「今日は、大事な発表があります。……二人共」

すると、おどおどと立ったコタローとすくつと綺麗に立ったアズサが、スギハラの下へ向かう。彼等は真剣な顔をしていた。何だろう、誕生日だったつけ。子供達の囁きが伝播する。

スギハラは二人の肩を抱え、告げた。

「コタロー君とアズサちゃんが、『卒園』します」

その意味を理解した子供達の間でざわめきが広がる。嘘でしょ、本当に？ いいなあ、さみしい。そんな中、ツクシが立ち上がってヒステリックに叫んだ。

「聞いてないよ、アズサ！」

「先生にこの時まで秘密だつて言われてたの。ごめん」

アズサがツクシに頭を下げる。いつも勝気な少女は、そのまま動かない。目を見開いてから、震える声でツクシは問う。

「……アズサ、本当にいつちやうの？」

「……手紙出すからね、ツクシ」

二人の少女の目に涙が溜まっていく。幼い二人の真面目な様子に、一期も「卒園」の意味を理解した。

「『卒園』って——」

「はい。お察しの通り……里親に引き取られる事です」

なるほど確かに、寂しいけれど喜ばしい事だ。彼等がずっと望んでいた「自分だけの家族」ができるのだ。羨ましがられるのも当然の話だが、ここにいた子供達が「家族」じゃ無かった訳では無い。特に仲が良い子だと、シヨックを受けるのも頷ける。アズサとツクシがその例だ。彼女達は親友でライバルで、ずっと共に過ごして来た「家族」。別れをすぐに受け入れられるはずが無い。

「コタロー、元気だな」

「新しい父ちゃんとお母ちゃん困らせるんじゃねえぞ！」

「何かあったら俺かサクヤに連絡して来いよ、すつ飛んでくから！」

「すつ飛んでくのは無理かもしれないけど……必ず力になるよ」

「皆、ありがとう……！」

コタローの方も、男子達に言葉を贈られ涙を浮かべている。

こちらは同じ年の子供がいなかったせいか、縋る様な子供はいな

い。けれど、小さく素直なコタローは皆から愛されていた。だからか、彼に贈られるのは幸福を願ったり助力を約束する言葉が多い。

パン、とスギハラが手を叩いて子供達を静かにさせる。その目にも涙が浮かんでいた。

「皆、まだ卒園まで時間はあるのよ？　今からしんみりしないで、その涙は本当に二人が卒園するまで堪えていなさい」

その一言を受け、子供達は席に戻って行く。スギハラは涙をハンカチで拭いて、二人の頭を撫でる。

「……コタロー君、アズサちゃん。卒園おめでとう。寂しいけれど、私からもお祝いさせて貰うわ。まだ先だけど、言わせて。新しい場所でも、幸せにね」

「先生……！」

卒園する二人はついに、涙を溢れさせた。他の子供達は涙声ながらも、先生が泣かせてどうすんの、と野次を飛ばしていた。江雪と一期は立ち上がって二人に向かい、それぞれ祝福の言葉を贈った。

「おめでとうございます、コタロー君、アズサさん。長い人生、辛い事もあるでしょう。けれど、貴方方ならそれに屈せず幸せを掴めると信じていますよ」

「おめでとう、コタロー君にアズサちゃん。知り合って間も無いけれど、二人と出会えて良かった。新天地でも、明るく楽しく過ごして欲しい」

ありがとう、と二人は声を揃えて何とか笑顔で返す。僅かな、けれど十分な思い出を反芻して、一期も目を潤ませる。スギハラがはい、と言つて二人の肩をぽん、と叩く。

「しんみりムードはここまで！　今日のおやつは何とパティスリーガザニアに特別に頼んで作って貰った特製ドーナツよ！　ゆつくり味わって食べてね！」

「パティスリーガザニア!?!」

「早く食べたい！」

涙痕を残しながらも、表情を輝かせる子供達。コタローとアズサも椅子に戻り、スギハラの号令を待っている。

「それじゃあ手を合わせて……頂きます！」

「いただきまーす！」

子供達がドーナツにがつつく。男子達は早く外で遊びたいのだ。アズサはツクシと話しながらゆつくりと食べている。コタローもちびちび食べていたが、男子達がペロリと平らげるのを見て、慌てて喉に押し込み咳き込んでいた。

「美味しいですね」

「ええ、本当に。……もうすぐ二人とお別れですか。卒園までに何度ここに来られるか」

二人の様子を見てみると、込み上げて来るものがある。それは寂しさであるし、幸福の祈りでもあった。江雪は空の皿を手に立ち上がって小さく微笑み、一期に提案した。

「今日は、夕方まで遊びましょう。新しい場所でも、ここで二人が愛されていた事を思い出せる様に」

「そうですね、そうします」

本丸に連絡を入れないと、と一期は食べ終えた皿を見つめながらしばし考える。その間に片付け終わった江雪に食器を返す場所を教え、と貰い、その場所——カウンターに向かう。カウンターに皿を返している、サクヤもカウンターに皿を乗せる。偶然、サクヤも食べ終わった所だった様だ。一期はサクヤに話しかける。

「サクヤ君。おやつ美味しかったかな？」

「うん、美味しかった。……コタロー、行っちゃうのか」

後半はぽつりと微かに聞こえる音量で呟いていた。普段冷静な彼も寂しく思っているのかと思い、江雪に提案された事を告げる。

「今日は、夕方までいる事にしたよ。寂しさを埋める様に、一緒に遊ぼう」

「本当？ 一期さん、夕方までいてくれるの？」

「江雪殿に提案されてね。サクヤ君も遊んでくれるかい？」

「うん」

サクヤも涙の跡を残しながらもにこりと頷いて見せる。一期とサクヤは皿を片付けて、外へ出ようと江雪と合流する。江雪と一期に挟

まれる様に、サクヤは歩いていった。玄関に着いて、靴を履きながらサクヤは俯く。

「……力になるとは言ったけど、どうやって助けを求めているのを聞けるのか、分からないんだよね」

「……まあ、現世に行く可能性もありますからね。どうやって連絡を取るのか分からないなんて事——」

「だってさ」

サクヤが江雪の言葉を遮り、不審そうに言った。

「マコトも、ミクも、トツカも、アミも……今まで卒園した奴ら全員、手紙を一通も送ってきた事が無いんだ。……便りが無いのは良い知らせ、とは言うけどさ、やっぱりちよつと寂しいよね」

外では子供達が、バレーボールをしようと呼びかけている。傾き続ける日差しに照らされるその無邪気さが、悲しい程眩しかった。

「長谷部、行かなくて良いのか？」

「……あいつらがいる。だから行かない」

「強情だなあ」

滑り園の木々の間、その上に春光隊の薬研と長谷部はいた。その視線の先には、バレーボールをする一期と江雪、子供達にスギハラ——そして、コタローとアズサの姿。

「……行く先が分かっているのに、何もできないのは歯痒いよな」

「……そうだな。今の時点で、俺達にできる事は何も無い」

打つ手なしと判断した二つの影は、滑り園から遠ざかろうとする。長谷部は一言だけ、小さく冷え切った言葉を投げかけた。

「無知の嘘つき程、性質の悪い物も無いよな」

その言葉の後、木々の間に影はもう無かった。

ギイ、ギイ、と月光に照らされながら椅子が鳴る。深い森の奥にあるぼろ家で、蒼穹の鶴丸は刀達を集めていた。

「集まってくれてありがとう。今日は、君達に頼みたい事があって来て貰った」

椅子を囲う様に座る五振りは、今日もいつも通りだ。真面目な顔で話を聞く堀川、三つ編みを弄る乱、鋭い目で睨む蛍丸、ぶつぶつと呟き続ける小狐丸、気だるげにして見せる宗三。

鶴丸は端末を取り出すと、起動させ画面を出した。乱が画面を覗こうと首を伸ばす。

「まずは乱と宗三な。三日後、ここの警備が手薄になる時間がある。その隙について、ういるすとやらをばら撒いて貰いたい。できるか？」

鶴丸が出して見せた地図は——政府の武器庫。そこには対刀剣男士用の武器や、時間逆行軍のレプリカが置かれているはずだ。そしてそれを管理するシステムを、ウイルスを用いて破壊せよ、と鶴丸は言っているのだ。

気だるげなまま、どこを見ているか分からない目をして宗三は了承する。

「……まあ、僕はできませんけど。乱は何の担当なんですか？」

「乱は周辺の警戒だ。政府の奴が近付いたら、さりげなく遠ざけてくれ」

「さりげなくってというのが凄く難しいと思うんだけど……分かった」
「後で補助機器を用意する。頼んだぞ」

宗三と乱が頷くのを確認し、鶴丸は次に眼光鋭い蛍丸と一見話を聞いている様には思えない小狐丸の方を向く。

「小狐丸、蛍丸。君達には、研究所の破壊を頼みたい。君達のような存在を、もう生み出さたく無いだろう？」

「……本音は何なの」

鋭い視線のまま蛍丸が問いかけると、鶴丸は大袈裟に肩をすくめて見せた。

「いやいや、今言ったのも本音だぜ？ ……だが、これ以上戦力が増えて欲しく無いっていうのもあるな。よっぽどの事が無い場合、審神者は刀剣一振りずつ、同じ刀は育成しない。新しい刀が来て、戦力を増やす事になるのは避けたいんだ」

「……秘宝の里も開かれるしっ」

「そうだな」

しばらくの沈黙の後、蛍丸は目を閉じる。

「分かった。小狐丸には適当に言っとく」

酷い呼び名に苦笑いしながら、鶴丸は最後に体育座りのままこちらを見ていた堀川の方を向く。

「堀川。例の物は集めて来たか？」

「はい、この通り。相変わらず、僕を泳がせているのかって思うくらい何も言われませんか」

堀川が懐から袋を出し、鶴丸に渡す。それは、研究所跡地で集めた『幽霊』の鍵となる物達。中を確認した鶴丸は頷き、堀川に笑んで見せた。

「ありがとう、堀川。……泳がせられているかもしれないってのはあるな。くれぐれも慎重に、政府側の情報を集めて来てくれ」

「はい」

真面目な顔を崩さずに、堀川は刀を握った。乱はそれを見て、不服そうに言う。

「ボクもさー、どつかの部隊に潜入したいよ。この森の中、物騒なんだもん。明るい所で活動してみたい」

可愛く膨れる乱に、鶴丸は脅す様に顔を近付ける。

「そうだなあ、狸々木庵……あの居酒屋なんかはどうだ？ 人がいつ

ばいいし、明るい所で動けるぞ」

「……それって、あの情報屋姉弟がいる所でしょ。やだよ、あの姉弟おつかないし。というか鶴丸さん、ボクを基本的に森から出す気無いよね？」

目つきが悪くなっていく乱に、鶴丸は顔を離し両手を上げて降参の意を示した。

「悪いな、できるだけ自由に動けるのが必要なんだ。要は遊撃だな。それができるのは極めている君だけなんだ、すまない」

「……まあ、頼りにされているのは嬉しいけど」

目つきを元に戻した乱に再度「悪いな」と言って、鶴丸は立ち上がり五振りに宣言した。

「君達がやっている事は、どれも政府に打撃を加えるものばかりだ。憎き政府に――全てを奪った政府に、目に物を見せる為に君達はい。それを決して忘れないでくれ」

月光に妖しく照らされ一種の支配者じみている鶴丸。五振りはその言葉に、確かに肯定して見せた。

第十話「初めての近侍、惨劇の前触れ」

10—1「初近侍」

戦装束に袖を通して、襟を正す。髪は変では無いか、装束に皺は無いか丹念に調べて、よし、と気合いを入れ一期は自室を出た。

廊下を歩きながら外に目をやると、まだ夜の色調を残した空が下から少しづつ朝に染められていくのが見えた。本丸内はまだ本格的に目を覚ましておらず、微かな寝息やいびきが聞こえる他は静かだ。きし、きし、と床が軋む小さな音も大きい物に思えた。

寝ているものを起こさぬ様静かに進み、一期はある部屋の前に到着した。中からは大きないびきが響いている。すつと入り、中にいた人物に声をかける。

「主、おはようございます」

「……んあ？ 一期か？」

「はい。一期一振、只今参りました。起床の時間です」

「もうそんな時間かあ……って、お前さんは随分早いな」

寝ぼけ眼の審神者は、一期の様子を見て起床時間を推測する。一期は目が完全に開き切っており、動作もしっかりとしたものだ。背筋を綺麗に伸ばしたその様は、まさに粟田口の頂点に相応しい。

一期は、強い意志がこもった笑顔で、審神者に告げる。

「当然です。初めての近侍で、寝坊するなんて事があってはなりませんから」

——今日は、蒼穹の一期一振が初めて近侍を務める日だ。

*

昨晚の事。夕食前の時刻に遠征から帰還した一期は、玄関正面に弟達が集まっているのを見て、始めは自分を迎えに来たのかと考えた。しかし、弟達は正門から背を向けているし、何より彼等は割り当て表を見て何やら騒いでいる。

「……また演練で氷雨隊とかち合ったのでしょうか」

「さあな。主への報告はやっておくから、聞いてきたらどうだ？」

和泉守はそう提案して、さつきと歩いて行ってしまった。一期は和泉守に礼を述べてから弟達の下へ向かう。近付いてみると、弟達のざわめきが鮮明に聞こえる。

「——ついに来たか、いちにいの——」

「——おめでとうつて言った方が——」

「——でも、大変なんですよ？ 近侍って」

「確かに少し大変ですけど、あるじさまと仲良くなれるのは……あつ、いち兄が帰って来ました！」

五虎退が振り向いて声をあげた。すると弟達が一斉に振り返り、一期の下へ駆け寄って来る。弟達は一斉に一期へ思い思いの言葉を口にする。

「いち兄、おめでとうさん」

「いち兄、ついに当番が回って来たね！」

「え、えつと……ちよつと大変ですけど、いち兄なら大丈夫ですよね」

「いち兄、おやつの量増やしてくれて主に交渉してくれよ——」

「おめでとうございます、いち兄。……包丁、それは自分で交渉しなさい」

「おめでとうございます！ 立派に当番を務める姿を見るのが楽しみです」

わーわーと一斉に話すものだから、一期は何が何やらだ。混乱している一期を見て、輪の外から骨喰と鳴狐が兄弟達を制止させる。

「兄弟達、一旦落ち着け。いち兄が困っている」

「二期殿の耳は二つしか無いのですよう。一振りずつしつかりと話さないで、流石の二期殿も困惑してしまいます」

二振りの言葉に、ぴたつと弟達が話すのをやめた。静かにはなつたが、興奮を湛えた目でこちらを見ている事から、一期が問えばまた一斉に話し出すに違いない。一期は割と冷静だった骨喰と鳴狐に尋ねた。

「一体、何があったんだ？」

「明日の割り当て表を見れば分かる」

「さあさあ皆様、割り当て表までの道をお空け下さい」

弟達はさつとどいて道を作る。靴を脱ぎ、割り当て表へと近付いて端から見えていく。手合わせ、畑当番、馬当番、料理当番、掃除当番、そのいずれにも一期の名前は無い。そして、一番端。

——近侍、一期一振。

ぼうつとその名前と割り当てを見つめる。何だか、あまり実感が湧かない。色々な事があつたせいで、こんなに早く来るのかという気持ちだが抜けないのだ。まだまだ先の事なのだ、何となく他人事の様にして思っていた。

——けれど。

「いち兄、本当におめでとう！」

「ある程度強くないと、近侍当番も回ってこないからなあ」

「近侍を任せるに相応しい強さを得たという事です。僕らとしても、誇らしいですよ」

弟達の言葉が、少しずつ染み込んでいく。そうして実感した。——

明日は近侍になると。そう思えば、背筋が伸びる様な緊張感と、本格的にここの戦力として認められたという喜びが込み上げてくる。顕現してから二ヶ月程、長い様な短い様な複雑な感覚。そして緊張感とやる気とが入り混じって、一期にも不思議な高揚感がもたらされた。

「いち兄、明日は頑張つてね！でも、今日はゆっくり休んで」

「そうですよう一期殿。今日は夕餉をしつかりと食べて、早めにお休み下さい。近侍の一日は早いですから！」

乱と鳴狐にそう提言され、一期はそうだね、と言ってから弟達を笑顔で見渡す。

「お前達、ありがとう。初めての近侍、立派に務めて見せるよ」

弟達達がわあつと興奮した歓声をあげて、またわーわーとそれぞれ話を始める。それに一振りずつ話せ、と骨喰が注意し、鳴狐も宥める。

一期の周りは良い子で元気な兄弟でいっぱいだと、そう信じていた。

——この時に、いやもつと早く気付いていたら、どうなっていただろう。

一期は後に何度も後悔する。——遠巻きに一期達を睨み付ける、丸い目の存在に気付かなかつた事を。

*

寝巻きから礼装に着替えた審神者は、システムを立ち上げながらもだ眠そうな声で告げた。

「さて、まずはもうすぐ帰ってくる遠征部隊の出迎えだな」

「はい。……噂をすれば、ですね。出迎えましょうか」

遠くから賑やかな声がしてくる。共に立ち上がって遠征部隊を迎えに玄関へ向かう。軋む廊下を歩きながら、一期は審神者に問いかけた。

「遠征部隊がいつ帰ってくるかというのは、どうやって分かるのですか?」

「あー、一期は知らないか。まあ別に隠していた訳じゃねえんだけど。まあ要は、この本丸全体の管理システムのおかげだな」

——本丸管理システム「刀剣乱舞」。審神者になる為の教育課程を修了した後、審神者に配布される物品の一つだ。これ一つで、出陣編成の刀剣男士への通知、刀剣男士の大まかな状態の確認、当番の設定、遠征帰還予定の表示、更には景色の設定までできてしまう。他には今まで顕現した刀剣男士の記録をまとめた「刀帳」の閲覧や、政府から戦績を受け取ったりもできる様だ。

「なるほど、とても便利ですね」

「まあ報告書は提出しなくちゃならねえんだけど……おー、お前達お帰り!」

玄関では、遠征部隊が資材の確認をしていた所だった。陸奥守吉行が審神者に向かって手を振って見せる。

「ようまとめて来たぜよ。……つくづく思うけど資材がこがな形なかが不思議ちや」

「まあ本物の木炭やらを大量に置く場所も無いからなあ」

資材と呼ばれる物——数枚の板状の物は首をひねる陸奥守から苦笑いする審神者に手渡された。

資材は刀剣男士の顕現や修復に用いられるが、その正体は物体の発するエネルギーが様々な工程を経て圧縮された物である。刀剣男士が遠征先で戦闘などを行う事によってエネルギーが生まれ、圧縮され

る。成果物は媒体に記憶され、小さな形状になる。どういう理屈でそうなるのかは科学者やらにしか分からないだろう。実際審神者は教育課程でさらっと解説されたものの、全く訳が分かっていない。だが審神者が務まっているのだから、これは審神者にはあまり必要の無い情報なのかもしれない。

「主さん、こっちは大成功だ！ 手伝い札二枚！」

「こっちは普通の成功。手伝い札は持ち帰れなかったよ」

愛染が手伝い札を差し出し、大和守は資材だけ手渡した。よくやった、と審神者はそれぞれの隊長の頭を撫で回す。愛染はやめるよーと不服そうに叫び、大和守は困った様に笑う。

成功と大成功の違いは、帰還時の時間遡行でどれくらい資材を持って帰れるかだ。どんなに沢山資材を集めても、時空移動の際に時空の隙間に資材が落ちる。落ちた量がどれだけ少ないか、それが二つを分ける違いである。コンディションが万全だと大成功になりやすいと統計が出ている為、コンディションを整えてから遠征に出す審神者も多い。

資材を全遠征部隊から受け取った審神者は、労りの言葉をかけてから一期に振り返る。

「よし皆お疲れさん、ゆっくり休んでくれ！ 一期、報告書をまとめるぞ」

「はー」

再び審神者の部屋に戻る。審神者は大きな文机の前に座ると、パソコンを立ち上げ文書作成ソフトに記入し始める。一期は資材の量や部隊のコンディション、成功か大成功かをシステムで確認しながら審神者に伝えていく。審神者は相槌を打ちながらまとめている。

しばらくして、審神者が背伸びし唸り声を上げた。

「よし、報告書はこのくらいでいいだろ。少ししたら戦績も届くはずだ」

「お疲れ様でした。……あ、文が届いた様ですよ。早いですな」

「まあ半自動だからなあ。持ってきてくれるか？」

了承し、審神者の部屋を出る。郵便箱から戦績と思われる封筒を出

し、審神者の下へ持つていく。

本丸はもう目を覚ましていた。あちこちから話し声が聞こえてきたり、身支度を済ませたもの達がすれ違ったりする。一期は審神者を起こした時とは本丸の雰囲気がるで違う、と感じていた。まるで、建物自体も眠ったり起きたりしている様に思えてならないのだ。一期は欠伸をする本丸を想像し、くす、と小さく笑い声を漏らした。

審神者の部屋に戻ると、審神者はシステムを見ながら何やら感慨深そうな顔つきをしている。

「文をお持ちいたしました。……主、どうなさいましたか」

「ああ、一期。いやあ、俺は結構遠くまで来たなあって思ってた。ちよつとこつち来い」

手招きをして、システムを覗く様告げる審神者に一期は彼の横からシステムの画面を見る。

そこに映されていたのは、所属している刀剣男士の情報だ。顕現順に、練度やコンディションが表示されている。一期は栗田口派の名前を探した。乱、前田、薬研、五虎退、鯨尾、骨喰、平野、厚、鳴狐……顕現した順番としては、そんな感じだった。

きよろきよろと目が動く一期を見ながら、審神者がぽつりと呟く。

「……俺さ、前に一振り破壊に追い込まれたんだよな」

「え？」

「充分に練度上げをしようとしすぎて、検非違使が現れる様になっちゃったんだよ。あの頃の俺は、検非違使との戦い方をよく分かっていたなかつた。……あの時、敵大将まで後少しつてところで進軍できるつーそいつの言葉を鵜呑みにしちゃったんだ。……圧倒的だったよ、検非違使は。破壊されたそいつの悲痛な声が、言葉が、今でも忘れられねえ。だから、出陣させる奴らにはお守りを持たせる様にした。懐が寒くなつたが、あの時の事を思えば屁でもねえ」

ぽつぽつと連なる言葉は、苦しみを絞り出すかの様だ。審神者は今でも後悔しているのだろう。短気だが情に溢れた人間だ、その事に關しても相当自分を責めたに違いない。

審神者が、一期に深く頭を下げる。

「すまなかつた。……俺が破壊に追い込んだ奴は、お前の弟なんだ。俺の采配ミスで、お前の弟を折ってしまった。お前さんには、顕現した時から謝ろうと思っていた。本当に、本当に申し訳ない。気が済むまで、俺を殴って貰っても構わない」

審神者は頭を下げた切り動かない。審神者がこんなに悲痛な声を出すのは、初めて聞いた。彼には慰めではなく、本心から話した方がいいだろう。

「頭を上げて下さい。確かに主にも過失があつたのかもしれませんが、自分の状態を把握せず、行けると慢心して進軍させてしまった弟にも責任があります。当時はそれぞれが未熟だった、それだけの話です。ですから、必要以上に罪悪感を抱えなくていいんですよ」

審神者は一期の言葉に頭をゆっくりと上げる。それでも暗い顔で俯いたままだ。一期はパンツと手を叩き、審神者の顔を上げさせる。「過去の事は過去の事。それよりも、これから失敗を重ねない事が重要です。主には沢山勉強して頂き、そして私達を勝利へと導いて貰いたい。それが、私の本心です」

審神者は呆然として、真剣な表情の一期を見つめている。そのままの状態がしばらく続いた後、審神者は小さく息を吐いた。

「……そうだな。過去に囚われて失敗したらそれこそ腹切り案件だ。悪いな一期、俺の懺悔に付き合わせちまって」

「いえ、話して頂けて良かったです。黙っておられたら、手討ちにしていたかもしれませんから」

「おつかねえなあ。流石は一期一振だ」

冗談を言い合いながら、ようやくその場の雰囲気が緩む。ふと思いつき、一期は審神者に尋ねる。

「それで、折れてしまった弟というのは……」

「ああ、それは——」

「あるじさん大変！ 鯨尾兄に馬糞ぶっかけられちゃった加州さんが、それを笑った大和守さんと大喧嘩してるの！ お願い、一緒に止めに来て！」

審神者の声を遮り、乱が部屋に駆け込んで来る。審神者は今行く、

と告げて駆け出そうとして、一期に手を合わせた。

「悪い一期、話は後で。……おい、お前達何喧嘩してんだー！」

今度こそ足音が遠ざかり、一期だけがその場に残される。

一期はそのままになっているシステムに視線をやる。見てみたい衝動に駆られたが、いやいや覗いちやだめだろうと首を振る。はあ、とため息をつき、報告書を片付けておこうと一期は文机の前に座った。

10—2 「最終兵器の実力」

陽がまだ完全に顔を出す前。晦冥研究所からさ程遠くない場所で、水雨調査部隊は集まっていた。

本日の任務も『幽霊』退治だ。任務は任務なので真面目にやるが、調査部隊の面々も少しうんざりしている節があった。ここ数日何度も『幽霊』の処理に追われていたのだ、飽きてくるのも頷ける。

しかし、今日はそうも言っていられなかった。何故ならば――

「はい、今日の調査は俺が指揮を執りまーす。……三日月、まだ会議は終わってないから！」

「はっはっは、そうだったか？」

「しつかりしてよ、本当に……」

マイペースぶりを発揮する三日月に、加州が項垂れる。調査部隊は全員、いつもなら口を挟む長谷部さえも、何も言わない。言えない。

そう、今日は雲霄の第一部隊と合同で調査をする事になったのだ。何故かは分からない。話を持ってきた水雨隊の審神者でさえも、調査命令の紙を見た途端に顔を引きつらせていたと蜂須賀が言っていたのだから。

それに、何故か部隊にいないはずの三日月宗近までもが一緒に来ている。彼は、対刀剣男士に特化している『最終兵器』だ。雲霄第一部隊と最終兵器。前者だけでもひっくり返るものであるが、後者を見た調査部隊は、ひっくり返る事すらできなくなった。

「……何だい、アレは」

「……強い霊気を感じるねえ……アレは本当に刀剣男士かい？」

「……気配を悟らせない様になっているのに、こちらが気付いた途端、殺気を向けられる気がしますね……」

「……今は従う他あるまい。従わなければ、全員殺されるぞ」

「……そうですね」

五振りはそう囁き合う。当然だ、遠慮無しに近付けば切って捨てられそうな気配を漂わせているのだから。鶴丸も、三日月が発するあまりにも強い迫力に押し潰されそうな感覚を覚えていた。

——こんな驚きはいらなかったぜ、鶯丸……！

鶴丸は昨晚チャットアプリで『明日はちよつとした驚きがあるぞ』とだけ送って来た鶯丸を睨み付けた。彼はそれを笑顔で受け流す。再び三日月を見るが、のほほんとして見せているもいつ表情が反転するか分からない恐ろしさを感じて目を逸らした。見られていた事に気が付いた三日月は鶴丸に近寄ってにこにこ口を緩ませる。

「鶴丸、どうかしたか？ 気分でも悪いか？」

「……いや、その、だな……」

「そういえば、そなたは一期とよく喧嘩をしているらしいではないか。いかにぞ、本丸内の空気を乱すのは。無理に仲良くする必要は無いから、無関心でいる様に努めるのだな」

「……ああ、分かった」

ぎこちない声しか出ない。三日月はあまり感情を乱す事は無いものの、乱さないからこそ無感情で折る事もできる可能性もあるのだ。それを考えると、下手な答えは返せそうに無い。自分の本丸にいる三日月などただの可愛いクソジジイだった、そう思い知らされる。

雲霄の加州が二振りの様子を見て、三日月の首根っこを掴んだ。

「三日月、氷雨隊の鶴丸で遊ばない！」

「はっはっは、すまん。どうも我が隊の鶴丸はつれなくてなあ。つ他の隊の鶴丸に構いたくなってしまった」

「大概にしてよ、自分の力分かってるでしょ？ これから戦闘なのに戦意喪失されたらたまらないよ！」

性質の悪過ぎるクソジジイだ、鶴丸はがっくりと肩を落とす。それから遠巻きにしていた調査部隊を睨み、ずかずかと歩み寄って声を押し殺した叫びをあげた。

「君達なあ！ 少しは助太刀してくれよ、アレに一振りで立ち向かうのは無理がある！」

「いやだって……ねえ？」

「……僕達が口を出して、悪化させたら大変ですから」

「いい薬になっただろう。これで一期一振との喧嘩も収まればいいんだがな」

「長谷部、君なあ……！」

「こそこそと話していると、加州がごほん、と咳払いをして全員の視線を集めた。」

「それじゃあ改めて説明ね。晦冥研究所周辺に『幽霊』が出現したっていう報告があった。俺達の任務は四手に別れて『幽霊』の討伐及び出現した理由の調査をする事。細かい事でもいい、気付いた事があったら報告して。恐らく『幽霊』は強くないけど数が多いと思う、油断は絶対にしないで。それじゃあ、班分けするよ」

「そうして班分けの結果、鶴丸は鶯丸、三日月と同行する事になった。その結果に鶴丸は頭を抱える。」

「……驚きやいいのか安心すりやいいのか分からないな」

「はっはっは。よろしく頼むぞ、氷雨の鶴丸」

「変な気さえ持っていないのなら三日月は心強い味方だ。まあ力を抜け」

「抜けるか!!」

「散開して建物周辺を見て回っていると、早速『幽霊』が現れた。鶴丸が構えようとする、鶯丸に制される。」

「何故だと思っていると、三日月が鯉口を切り——次の瞬間、納刀していた。『幽霊』の方を見ると、叫び声をあげながら消滅していくのが見えた。「鍵」となる物——恐らくはストラップ——は、真つ二つに割れている。」

「ふむ、こんなものか。手応えが全く無いな」

「三日月の力は『幽霊』にも通ずるか。なら、俺達の出番は無さそうだな」

「なっ……」

「——こいつ、本当に太刀か？ 剣筋が全く見えなかったぞ！」

「驚愕を隠せず惚ける鶴丸の眼前で、鶯丸が手を振る。現実に戻って来た鶴丸は、鶯丸を引きずって三日月に聞こえない位置まで連れて行く。」

「おい、何だアレ」

「何って、三日月宗近だが」

「そうじゃない！ 何だあの剣筋、あの見えない一太刀で根付と『幽霊』両方やったのか!？」

「まあ、うちの三日月は規格外だからなあ。そうそう真似できるとは思わない事だ」

「真似できるか！ 『幽霊』は鍵になる物を斬らないと倒せないだろ？」

あの小さいのを一発で、しかも見えない程の早さで斬ったってのが規格外過ぎるんだよ！」

肩を組み話す二振りを見て、三日月がそわそわとしていている。そうしてこっそり近付くと、二振りの背中をポンと叩いた。

「何を話しているんだ？ じじいも混ぜろ」

その瞬間、鶴丸は背後にキュウリを置かれた猫の様に飛び上がり声にならない悲鳴をあげる。

鶯丸は口を押さえて震え出した。

「鶴丸、そこまで驚くな。面白くて笑いそうだ」

「いや驚くだろうというか笑うな！ 気配を全く感じさせなかったぞ!？ どこまで規格外なんだこの三日月！」

「はっはっは。鶴丸は愉快だなあ」

鶯丸と三日月がにこにここと笑っている。これだからジジイ共は、と鶴丸は内心で二振りの事を言えない悪態をつく。

背後から襲いかかって来る幽霊を、三日月は笑顔のままではぼその場から動かずに見事な太刀筋で倒していく。鶴丸はもう観戦を決め込む事にした。

「あー、『幽霊』がスパスパと切れていくなあー」

「処理落ちしたか。まあ当てられたのなら仕方ないな」

「なー暇だし何か話そうぜー」

「俺は構わないが。三日月は……久々の戦いを楽しんでいる様だから放っておくか」

鶴丸は、軽快に『幽霊』を切っている三日月を眺めながら言った。

「……蜂須賀、何で記憶を消されたんだろうな」

「……それは」

「二期の記憶は消されなかった。それは良かったと思う。でも、何で

一期は消されなかったんだ？ 蜂須賀と何か違いがあるのか？ 俺達は、同じ刀剣男士のはずだろう」

鶴丸は、ずっと考えていた。何故蜂須賀が記憶を消されたのかを。敵に繋がる情報なら、持っていた方がいいはずだ。記憶を抽出したと言っても、鮮明さには限度がある。だったら、彼が思い出すのを待つのもありであるはず。それなのに、全て消された。事件の事も、妹を名乗る少女の事も。

鶯丸は俯いて、口を閉ざしている。彼は理由の見当はつけているが、それは機密情報に繋がる物だ。政府に協力しているとは言っても、一般の部隊員である鶴丸に言えるはずが無い。例えば友達であろうとも、言えない事もあるのだ。それが少し、心苦しいのだけれども。沈黙する二振り、三日月が納刀しながら告げる。

「それは、知らない方がいい事に気付いてしまったからに決まってるだろう」

鶯丸が顔を上げ、三日月を咎める様に睨む。鶴丸はゆっくりと顔を上げ、三日月を見つめる。

「それは、どういう事だ」

「そなたは聡い。今までの事を繋げれば、大体の見当はつくのではないか？」

「三日月、喋り過ぎだ」

鶯丸が鋭く三日月を制する。鶴丸は驚いた。鶯丸がこんなに厳しい口調で言う所など、見た事が無かったのだから。鶯丸の鋭い眼光を物ともせず、三日月は穏やかに笑う。

「鶯丸、遅かれ早かれ同じ事だ。いずれその鶴丸は真相に辿り着くだろう。俺は、少しだけそれを早めたただけだ」

「……知らない方がいいのは、鶴丸だつて同じだ」

「友が大切か。それはとても良い事だ。だがな」

三日月は笑みを消し、憂うような、窘める様な表情で続ける。

「——過保護なのも考え物だ。特に氷雨の鶴丸は機密事項に関わる事もあるのだから、『知らなかった』で済まない事例もあるかもしれない。その時はどうする？ ……無知の苦しみは、思っている以上に辛

い物だ」

鶴丸は、三日月と鶯丸のやり取りを見ている事しかできなかつた。

——機密事項。蜂須賀の件は、それに関わる事なのか。何も言えない鶴丸に、三日月はまた先程の笑みを浮かべて言う。

「知る事で苦しむ事もあるう。だがそなたはとても聡く、強い。真実を知っても苦しみから早く抜け出せると、俺は信じているぞ」

10—3 「近侍と春の光」

蒼穹隊の近侍の午前中は目まぐるしかつた。何故かというところ、あちこちで確認作業を行っていたからである。

「鍛刀で使った資材の量はいくつだ!？」

「木炭、玉鋼、冷却水、砥石全て八百、それを十回です!」

「一期さん、手入れ部屋空いてる？ 伽羅ちゃんの中傷なの隠してて

……!」

「空いています、どうぞ!」

「遠征部隊が帰って来ました、資材の量の確認をお願いします!」

「今行くよ!」

「一期、資金をこちらに回してくれないか？ 米が底をつきそうだ!」

「主と検討します、しばしお待ちください!」

「いちにーい、お菓子が無いぞー!」

「おやつまで我慢しなさい!」

……とまあこんな感じで、あちこちから近侍を呼ぶ声があるので。こんな形で人気になりたく無いのだが、と思うと同時に、近侍を志望する一部の刀剣男士に敬意を覚える。

疲れ果てた一期は審神者にしばらく休む様に言われて、自室に戻ろうと廊下を歩いていた。確認要請の声が今度は審神者を呼ぶ物に変わった。その声と審神者の悲鳴を聞きながらふらふらと歩き、自室の障子を開ける。

「あつ、蒼穹のいち兄、お疲れ様ー。ここ近侍は大変だねえ」

ピシャン、と障子を閉める。遠征に出ているはずの鯰尾が本を読んでいたからだ。怠けていたのか、それとも生霊か。というか何故自分の部屋に。一期の背中を冷や汗が伝っていく。

勢いよく再び障子が開かれる。そして一期より少し低い背の男が一期に罵声を浴びせた。

「鯰尾の挨拶を無視するとはいい度胸だな無神経野郎!!」

「ちよ、長谷部さん声大きい!」

「——うわあああつ!」

一期は今度こそへたり込んだ。この異常なまでの身内愛を見せる長谷部は、一期の記憶では春光隊の彼以外あり得ない。何故ここにいるのか。どうかどうやって入ったのか。問おうとするが声が上手く出てこない。

バタバタと、複数の軽い足音が近付いて来る。一期の悲鳴を聞きつけて、弟達が駆けつけて来たのだ。

「いち兄、どうしたの!？」

「どうかしましたか!？」

一期が声を出せずにいると、弟達は一期の部屋の中を覗く。すると、彼等の目の前にゴキブリが蠢いているのが見えた。

乱が可愛らしい悲鳴をあげ、怯えて見せる。

「きやあつ！ ゴキブリ怖ーい！」

「また乱の猫被りが出た。……いち兄、ゴキブリに驚いたの?」

「いつもの事だろ。……しかし意外だな、いち兄がゴキブリに怯えるとは」

「本性モロバレだつて言ってるのになー。……腰痛めてないか、いちにい?」

「よーし、そこの三振り表に出な！ ボコボコにしてあげる！」

「大概にして下さいね……いち兄、何なら僕達が退治をしますが」

一期は心配する前田の言葉に思いつきり首を振った。

「いや、大丈夫だ。障子を開けていきなりいた事に驚いただけだから。退治はできるよ」

「ですが……」

「それよりも、主が呼んでいるんじゃないか？ 急いで行った方がいい」

前田は平野と顔を見合わせて、腑に落ちないながらも頷いた。それから三対一にも関わらず、三の方が劣勢である四振りに呼びかける。「兄さん達、主君が呼んでいますから行きましょう。いち兄は大丈夫らしいですから」

「とりあえず口火を切った奴はぶん殴る！」

「やめてえええ！」

「いい加減にして下さい！ 主の呼び出しを無視するつもりですか!?」

平野が乱と信濃の首根つこを掴み、引きずっていく。厚と薬研も前田に誘導されてその場から去る。そして一期の部屋の前には誰もいなくなった。

「いやあ、ゴキブリのおもちや持ってて良かったですね！」

「流石の機転だな、鯨尾」

「えっへん！」

……部屋の中にはいつの間にも隠れていた二振りがいるが。鯨尾はゴキブリのおもちやをリモコンで動かしている。一期は、疲労を隠さずに振り向いた。

「……何故ここにいるんですか、春光隊の長谷部殿と鯨尾」

「鯨尾が来たと言って言っていたからついて来た」

「ちよつと蒼穹隊の様子が気になってねー。どんな感じなのか実はこっそり見てたんだ！ いやー目まぐるしいね、こここの部隊！」

あつけらかんと言つてのける鯨尾に、一期を睨む長谷部。二振りが何の用でここに来たのかはよく分からないが、聞いておきたい事がある。

「いつから見ていたんだい……後、どうやって侵入したんですか……」

前半は鯨尾に、後半は長谷部に問いかける。二振りはきよとんとして、それぞれ答える。

「えっ？ いつからって、朝早くにいち兄が審神者さんの部屋に行つた所から？」

「何言ってるんだ？ 俺達ならこここの部隊は五分で制圧できるぞ」「えっ」

一期が首を絞められた鳥の様な声を上げる。——朝早くに来ていてそれに気付けなかった？ 五分で制圧できる？ 一期の頭は混乱の渦に飲み込まれた。それを見た鯨尾が慌てて注釈する。

「あ、主将である審神者さんを討ち取るのに五分かかるって事だからね？ 流石にこここの部隊全員を相手にするのは無理だよ。……後、するつもりも無いから！」

「……お前から見て、ここの本丸の警備度合いはどう思う」

「……正直言つてザルだね。審神者さんに警備費増やして貰った方がいいと思うよ」

「そうするよ……」

がつくりと項垂れる一期に、まあこれが普通だから、と鯰尾がなっているか分からない慰めをする。

その横を、長谷部が通り過ぎた。廊下を歩いて消えていく背中を見て、一期は追いかけてようと立ち上がるも、鯰尾に制止される。

「いち兄、大丈夫だよ」

「でも、うちのものに見つかったら……」

「長谷部さんはそんなへましないよ、大丈夫。……心配なんだね、やっぱり」

後半は本当に小さな声だった。鯰尾の表情は、慈愛と懸念が入り混じった物だ。鯰尾は一期に見られていると分かると、すぐに表情を笑顔に変える。

「よし、それじゃあいち兄の春画の隠し所はどこかなーつと」

「いや、何を探す気だ鯰尾」

「男なら一冊くらい春画を持つてる物でしょ！ さーてどこかなー」
「物を漁るのはやめなさい！」

鯰尾ががさがさと押入れを漁っている。それを制止させようと一期は鯰尾の腰を掴み引つ張り出そうとした。しかし鯰尾はかなりの力で押入れにへばりついている。

しばらく押し合いへし合いが続いたが、いきなり固まった鯰尾を思いつき引つ張つたため、一期は強かに腰を打つ。

「いった……い！ 鯰尾、何かあったのか——」

引つ張り出された鯰尾の手には、一冊のアルバムが握られていた。開かれているページは、少女が鯰尾をはじめとした刀剣男士達に囲まれている写真があるページ。一期は背後から覗き込み、それを見た。

「……あれ、こんなの押入れにあったか？ もしかしたら主が片付け忘れて——」

「——主だ」

「え？」

鯰尾の声は、震えていた。涙で濡れているようにも思える。ページの端を握りしめ、鯰尾は押し殺した叫びを上げた。

「主の写真だ……！」

一期は再びアルバムを見る。

少女は六歳程の幼い姿をしていた。髪をツインテールにして、質素な和服を着ている。顔は紙の面でよく見えない。彼女の手を繋いでいるのは、歌仙と長谷部だ。周囲には二つの刀装を操れるものしかいなかった。が、それでも二十数振りいるのだ。現在の春光隊と比べると、かなりの大所帯である。

「……可愛い審神者殿だね」

「……うん。可愛らしくて、優しくて……悲しい子だった」

最後の一言が耳に残る。悲しい子とはどういう事だろう。

首を傾げる一期に、涙を浮かべながら鯰尾は笑った。

「滅茶苦茶気になるって顔してるよ。……ちようどいいから、話そうか。主がいた頃の、俺達の話を」

鯰尾は、正座になってから一期に向き直る。一期も座布団を鯰尾に渡して、自身も座布団の上に座ってから鯰尾の方を向いた。

そうして、長い話が始まった。

10—4 「春光隊の審神者」

鯰尾は、初めての脇差として春光隊に顕現した。目の前にいたのは小さな女の子で、鯰尾は大層驚いた記憶がある。何よりも印象に残っているのは――

――鯰尾藤四郎様ですね？ 私が貴方を喚び出した審神者です。どうか、我々の戦いに協力して頂けませんか。

――大人びた、では足りない程の、様になっっているかしこまった挨拶。形式張っている口調では無く、心からそう思っている口調だった。小さな女の子のはずなのに何故か圧倒されてしまって、鯰尾は呆然と了承していた。

初めての出陣では傷を負ったら状況を見て撤退させ、手入れもきちんと行ってくれた。鯰尾より前に来ていた刀達が審神者への対応に困っている雰囲気を出している事以外は、ごく普通の本丸と言えた。

普通では無い事が起こったのはその日の夜。鯰尾は初めての就寝をしようとしていた。が、今まで寝るなんて事をしてこなかった刀が、すぐに寝付ける訳が無い。すると、審神者はいきなり服を脱ぎ始めた。

――ちよちよちよちよ！ 何やってるの、主！

――何って……眠るには、疲れる事が一番だと聞きます。ならば私が貴方のお相手になろうと――

――ああもうマセガキめ！ 子供はそんな事考えなくていいの！

審神者は何故拒絶されるのか不思議そうな顔をしていた。後に聞けば、初めての刀である歌仙も同じ洗礼を受けたという。時の政府は子供に意味の分かっていない事をさせるのか、と憤ったものだ。

この時に気付くべきだった。何故、彼女が躊躇い無く夜伽をしようとしたのかを――

「……いち兄は分かる？ 何で主がそんな事をしようとしたのか」

「……そうするのが当たり前だと、教育されたから？」

「そうだね。でも、後一步かな。……続けるね」

彼女には、不思議な習性があった。誰かが喧嘩をすればどんな軽い

ものでも震えながら止めようとしたし、布団の中ではなく押入れで眠る。食事は取られないように大事に食べていたし、常に誰かの顔色を窺っていた。特に一番最後が問題で、ちよつと誰かが感情的に怒ると、固まって動けなくなる。だから和泉守などは、彼女への接し方に悩んだそうだ。

——何て言うのかな……オレは主じゃなくて自分に怒ってたりするのにな、その感情に反応して怯えられるんだよな。鏡みてえだ。その様子を見てみると、怒る事も難しくなってくる。……オレは、主にどう接したらいいのかね。

和泉守の談だ。それに違和感を覚えた薬研が、図書館に行つて彼女の行動について調べた。その結果——

「……聞いた事がある。親から歪んだ感情や暴力を振るわれると、子供はその兆候を表に出すと」

「そう。子供がその感情や暴力を振るわれる事を、世間では『虐待』つて言うんだよ」

調べに調べた薬研は、審神者への接し方について具体的なガイドラインを作成した。とにかく、ここは審神者にとって安心できる場所であると教える事、感情的になつたら許されないラインを超えない限りはきちんと受け止めてあげる事、パニックになつたら安心できる場所へ移動させて対応できるように一振りは本丸に残しておく事……大まかに言えばこうだが、他にも様々なガイドラインを設けた。最初は難しそう、と言っていた刀達だが、少しずつ、少しずつ対応の仕方を覚えていき、審神者も少しずつ、問題行動を起こさなくなった。問題行動を除けば優しい少女なのだ、本丸内の空気は穏やかな物になつていった。

しかし、一つだけ彼らが知らなかった事がある。審神者は時折、研究所へと赴いていた。そこで何をしていたのか、誰も知らなかったのだ。歌仙はある日、研究所へ行こうとする審神者に強制的に同行した。当然入口で引き離されてしまう訳だが、歌仙はこっそりと審神者の後をつけた。辿り着いたのはとある研究室。そこで見たのは、おぞましい光景だった。

怒気に満ちた声で、鯨尾は吐き捨てる。

「……主、研究員の男に裸の体を触らせていたらしいんだ。中には、いやらしい触れ方をしている奴もいたみたい。胸を、股間を、男達に触らせてた——手籠めにされていたんだ、主は」

その行為を黙って見ている歌仙ではない。歌仙は研究室に乗り込み、男達を全て斬り捨てたのだ。そうして審神者にマントを着せて、泣きながら抱きしめた。けれど、審神者は悲しそうに呟いたのだ。

——私は、皆様を満足させる事ができていません。それどころか、こうして泣かせてしまう始末。審神者、失格ですね。

「……っ」

「……それを聞いた時、俺達は改めて誓った。主が、あんな事をされるのは間違ってるって思わせようって。辛い事かもしれない。けれど、あれを当たり前のように受け入れる自尊心の低さは、見ていて悲し過ぎるよ。主のために、何より自尊心のある主であって欲しいと願った俺達のために、そうする事に決めたんだ」

歌仙は刀剣男士全員に、男性としてのマナーを叩き込んだ。セクハラをしない事、力任せに扱ったりしない事、エスコートをきちんとする事、などを。刀剣男士達は普通の人間とは違うので、その点に関しては心配は無用だったが、審神者の心を守るために改めて行った。

「それから徐々に、主は感情を露わにし出したよ。専ら言ってたのは、俺達が離れていくかもしれないのが怖くて仕方ないって事だったかな」

任務をこなしながらも、審神者の心の傷を治そうと励む刀剣男士達。審神者も少しずつ表情が豊かになっていく。少しずつ子供らしさを取り戻していく審神者を、刀達は穏やかな気持ちで見守っていた。

しかし、その日々は唐突に崩れ落ちる。

「……元々体の弱かった主が、酷い咳をするようになった。咳き込んだ勢いで、血を吐く事もあった。病院はどこに行っても見て貰えなくて、次第に主の症状は悪化していったんだ」

何度病院の戸を叩いても、なしのつぶて。しかしその横で、上層部

の人間は病院で診察を受けている。見捨てられたのだと、彼らは悟った。

歌仙は自分が研究員を斬り捨てたからだと言っていた。後悔はしていないが、もつと慎重になるべきだったと。それを否定しないものはいなかった。当然の怒りを表に出しただけ、自分がもしそこに居合わせたら自分もそうすると、慰めではなく上層部への怒りから、仲間達はそう言った。

その間にもどんどん弱っていく審神者を見て、歌仙は決断した——亡命を図ると。

「時々、『町』が他の『町』と繋がる事がある。歌仙さんはそれを利用して、隣の『町』へ助けを求めようとした」

審神者を守る第一部隊は、長谷部、歌仙、薬研、鯰尾、獅子王、石切丸。戦う事は無いだろうと思っていたのだが——現実は残酷だった。端末を手にしていた長谷部が、震える声で告げたのだ——敵の襲来を。

「もう平和的解決は無理だと悟ったよ。命をかけて主を守る、それが全員の意思だった。まず最初に、骨喰と弟達が本丸で囿になった」

骨喰達は、最期に薬研と鯰尾に告げた。

——主殿を、未来へ連れて行ってくれ。

——あるじさんを幸せにしなくちゃ、絶対に許さないんだから！

——主君に、明るい世界を。お願いしますね。

手が、足が震える。そんな事は嫌だと叫びたかった。けれど、振り向く訳にはいかない。——主を守りたい、それが彼らの願いなのだから。

「裏山を登って、森を駆けて……そうしているうちに、次々と仲間が離脱して行った。どんどん少なくなっていく仲間達が、未来を託しているんだ。泣いて立ち止まる余裕なんて無かった」

——主の晴れ姿が見られねえのが残念だ。

——主に、籠の外の世界を見せておやりなさい。

——一緒に、成長したかったな。

少しずつ、少しずつ仲間がいなくなっていく。それでも彼らは駆け

抜けた。

しかし、敵から受けた攻撃による傷は蓄積されている。体力が少ない薬研が崩れ落ちるのは、分かりきっていた事だった。

「ここまでかつて、薬研は力無く言った。慣れない傷の手当てをして、何とか進んで貰おうとしたけど……敵の矢が、薬研に突き刺さったんだ」

もう全員が、薬研の破壊を覚悟したという。しかし、薬研は現在の春光隊に存在している。その意味は――

――嫌だ。

か細い声だった。そしてその言葉と共に、薬研の体が修復されていったのだ。呆然とする薬研は、足元に転がっていた物――壊れた白い御守りを見た。

白い御守り――それは、刀剣男士の破壊箇所の身代わりをし、全快させる緊急修理機器が入った物。手に入れるのに大層苦労したはずの物を、審神者は薬研の服に縫い付けていたのだ。

――私は、あいつらの手にかけられるのだけは嫌だ。

そして薬研は審神者を見る。審神者の目は、衰弱していてもなお力強い光が宿っていた。薬研はそれに何よりも驚き――歓喜したという。

――お願いします、皆様。私を、あいつらから逃して下さい……！

それは、審神者が命がけでした「お願い」だった。それを聞かない彼らではない。薬研が立ち上げられるのを確認して、再び彼らは駆け出した。

「辿り着いた『町』の境界線は、惨憺たる有様だったよ。沢山の刀剣男士が、必死に他の『町』と繋がる場所を探してた。審神者を抱えている刀も、そうでないのもいた。開いてっていう悲鳴が、苦しみに喘ぐ鳴咽が、あちこちから響いていたんだ。俺達も、少しでも穴が無いか探した」

穴がどんな形状なのか分からないまま、彼らは必死に境界線を探し回った。背後から来る敵を押し留めながら、彼らは突破口を見つけようとした。

鋼の折れる音、泣き叫ぶ声、苛立ちから来る怒号。本当に、あの声達を聞く状況には二度となりたくない。

「敵も目の前に迫って、俺達も疲弊して……もうだめだと思って。その時突然目の前の境界線が無くなった。俺達はなだれ込むように境界線を越えた。そして、目の前に沢山刀剣男士がいて、ここもだめなのかなって絶望しかけた。けど」

——総員に告げる。亡命者を保護し、敵を蹂躪せよ！

初老の審神者がそう命ずると、数多の刀剣男士達は一斉に背後の敵に向かった。次々と切り刻まれていく敵に、切り刻む刀剣男士の姿に、そして一部の刀剣男士にもう大丈夫だと声をかけられ、鯨尾の目からは自然と涙が溢れてきた。——自分達は、主は、助かったのだ。長谷部と薬研は審神者の意識を真つ先に確認していたし、獅子王は大きく吼え、歌仙と石切丸は大きく息を吐いていた。

それぞれが安堵の表情を浮かべていて、これで審神者が元気になればまたやり直せる、そう思っていた。だが——

「……主は病院に搬送されたけど、だめだったんだ。もう体全体にガタが来てて、こうして生きているのが奇跡みたいな物だって、医者には言われた。……俺達は、主と別れを告げなくちゃならなくなった」服を用意しに行つた長谷部以外の五振りは、ベッドの上で横たわる審神者の前で沈痛な面持ちで立ち尽くしていた。皆の願いを叶えられなかった。主に、幸せな未来をもたらす事ができなかった。

何も話せない彼らに、審神者は小さく微笑んだ。

——そんな顔をしないで下さい。私は、充分幸せでしたよ。ああ、でも……。

審神者は目を伏せてから、ぼつりと呟いた。

——私は、こうして生きていた事すら忘れられちゃうんでしょうか。それは少し、寂しいですね。

審神者の言葉はゆっくりと彼らの内に染み込み、そして一つの決意を生み出した。

「……主は頑張つて生きた。それも歴史の中にいずれ埋もれてしまふ。だからね、俺達は主の記憶を大切に語り継ぐようと思ったんだ。俺

達の主は、こんなに懸命に生きてたって」

しかし、彼らには選択が迫られていた。刀解、別の部隊への配属、戦場での破壊。彼らはどれも選ぶ事ができない。審神者は覚えてくれるだけでいいと言ったが、刀解や破壊を選べば語り継ぐものがいなくなってしまう。他の部隊へ行くといつても、上層部への不信感を植え付けられた彼らは、割り切って次の主に仕えられるとは思えなかった。

すると審神者は、刀達にクマのぬいぐるみを手渡した。

——これを、長谷部さんに。いざという時に、と言えば分かると思うので。

代表して歌仙が、そのぬいぐるみを受け取った。審神者は受け渡した後、最期の言葉を紡ぐ。

——私は、貴方達の主に、なれていましたか？

全員が肯定した。否定する理由など無い。彼女は、自分達を大切に——自分達も、彼女を大切にしていた。戦場にも出してくれたし、手入れも、交流も、彼女なりに頑張っ行っていった。

——そうですか、良かった……。

そうして彼女は、息を引き取った。

「……その後、長谷部さんがぬいぐるみを調べて、色々な機材と——審神者権限の移行許可証が入っている事が分かった。主は、四つ目の道を示してくれた——俺達の願いを叶えてくれたんだ。それから俺達は病院から抜け出して、『森』の奥深く、少し崩れていたけどまだ使える家を奇跡的に見つけた」

その家を修復して本丸として使えるようにし、右往左往して本丸を運営しながら、現在に至る。

「最初は大変だったよ。今まで考えてこなかった事を、全て考えるようになったんだ。生活費とか、どうやって家事をやるかとかね。でも、その都度調べながら乗り越えてきた。……力を合わせて頑張ったおかげで、連帯感は強まったかな」

鯨尾は頬をかいて笑う。一期は思わず畳の目に視線を落としてしまった。

——とてつもない話だ。一期は内容の全てを理解したとは言わない。けれど、目の前にいる別部隊の弟がまだ癒えていない傷を抱えてここにいるのは分かる。そして、彼の仲間も同じ傷を抱えている事も。

過酷な出来事を乗り越えて、今の彼らがあるのだ。

「……お前達は、本当に凄いな。自分が無知である事を、改めて思い知らされたよ」

胸の痛みを感じながら一期が絞り出した言葉に、鯨尾は悲しそうに笑んだ。

「知らないのは当然だよ。誰も話してこなかったんだから。語り継ぐと言っても、俺達は相手を選んでは。いち兄なら、この事を他人事にしてないで受け止めて貰えると思ったんだ。……その様子だと、俺の考えは正しかったみたいだね」

自分の表情は分からなかったが、心の中で渦巻く事実と感情に、己が振り回されている事は確かだ。他人事とは確かに思えない。自分の主は、一介の審神者でしかない。政府に切り捨てられる事だつてあり得るだろう。——自分達が仕えるのは、あくまで審神者。その審神者に何かあったら、守るために動くのが我々だ。その行動で負うリスク、仲間を失う苦しみを、自分は背負い切れるだろうか。

——君の大切なものが主に侵されているとして、君は主を許すか？

不意に、自隊の鶴丸の言葉が頭をよぎる。もしかしたら、亡命したものの中には審神者から逃げていた隊もあったのかもしれない。審神者に裏切られた苦しみもあると思うと、どれだけの痛みが伴うのだろうか。

少し短気だが優しい審神者と、いい環境に恵まれたと思う。だから審神者には二心無く仕えられるし、戦える事と弟や友達のいる幸せを享受している。そんな自分が傷付いた彼らに接する時に言葉を考えなければ、言葉は棘となって彼らの心に突き刺さるだろう。

「……きつと、私は長谷部殿の言う通り、無神経な事も言っただろうね。それでも、何でも知りたいとは言わないからもつとお前達と話をしたい。今日何があったか、楽しかった事とかを語り合いたい。私

は、春光隊の方達と友達になりたいんだ」

鯨尾は目を伏せて黙り込んだ。近くから聞こえるはずの喧騒が遠く感じる。部屋の中は静寂が訪れて、僅かな衣擦れの音は拾えてしまふ。それが少し不思議だ。

額を押さえて、鯨尾は小さく言う。

「……蒼穹のいち兄の事は、好ましく思っているんだ。こうして長く、俺達だけじゃなくて長谷部さんに好意的に接してくれる刀剣男士は久々だし。でも、好ましく思っているからこそ、あまりこちら側に関わって欲しく無い。俺達は、政府の事を信用し切れて無いから。いち兄がこつちに関わる事で、上の心象が悪くなる事は避けたいんだよ」

その言葉に言いたい事はあるが、言葉が上手くまとまらない。——上の評価など知った事か、いや審神者の目は気になるけれど、関わるなど言われたら間違い無く一期は反抗するだろう。だが、その言葉達は春光隊には不適切だ。あちら側に関わるのが大変なものも察する事ができる。でも、それへの躊躇で友達になれるかもしれないもの達を遠ざけるのか。こちらだって、春光隊の事は好ましく思っているのに

「……私は」

一言だけ発して口を開けては閉じと明確に言葉に出来ずにいる一期は、視線だけでもしつかりと鯨尾を見据えようと顔を上げる。鯨尾は真剣にしている一期を見て、表情を緩ませる。

「蒼穹のいち兄は、真っ直ぐだね。俺には眩しいくらい。だからこそ、真実を知った時に苦しまないか心配だな」

「真実……？」

「前に言ったでしょ？ 灯台下暗しって。長谷部さんに繋がる真実への手がかりは、実はいち兄の近くにいる。よく見渡してね、隅々まで見るつもりで」

「それって……」

——雲霄の鶯丸も、そのような事を言っていなかったか。この本丸に、春光の長谷部に繋がるものがあると言うのか。

障子が開き、光が一気に差し込んでくる。入口を見ると、春光の長

谷部が立っていた。

「長谷部さん、お帰りなさい。どうでした？」

「……そろそろだろうな。それとタイムオーバーだ。ここの審神者が俺達の気配に勘付き出してる」

「うわ、やっぱ！ 逃げなきゃ！ ごめんいち兄、話の続きはまた今度ね！」

一期が止める間も無く、二つの影は足早に去っていく。

呆然としていると、審神者が一期の部屋に顔を出した。

「二期、ここにいたか。……なーんか変な気配がしたんだけどよ、そっちに行つてないか？」

訝しげにしている審神者に、一期は立ち上がり姿勢を正して進言する。

「私の所には来ていません。……それよりも主、ここの警備費を増やすつもりはありませんか」

「えっ、何だいきなり……まあ、資金次第だろうなあ。まずは小判を増やさないと——」

「小判を入手できる遠征場所はどこですか？」

「えっ、何だ張り切つて……いででで！ 衿を引つ張るな衿を！」
審神者を力尽くで引きずつて、一期は歩幅大きく審神者の部屋に向

かった。

10—5 「被験者と被害者」

大きい角が生えた大太刀や、長髪と蛇の頭が尾についている槍。敵であるはずの数多の時間遡行軍が、大きな建物の中で何もせず並んで沈黙している。

そこに蠢く影が二つ。

「……よし、侵入成功」

「全く、あのひとも人使いが荒いですねぇ」

蒼穹の鶴丸率いる反乱部隊の乱と宗三は、政府の武器庫の中にいた。鶴丸が命じた「ウイルスをばら撒け」という指令を達成するためだ。ダクトの中を通ったり、天井裏を通ったりと、様々な難所を乗り越えて、ここまで来たのだ。だが、これからする事も難関だ。

「宗三さん、お願い」

「ええ。乱も、頼みましたよ」

二振りとは別れてそれぞれの任務を遂行する。宗三はセキュリティシステムへのハッキング、乱は宗三のハッキング中に誰かが来ないか監視する役目だ。

宗三は端末を取り出すと、端にある機械に近付きタイプを始める。

「……宗三さん、あのさ」

「どうしました、乱。誰か来ましたか」

『いや、来てないんだけどさ』

ワイヤレスマイクで通信が入った。宗三が問うと乱が口籠る。政府のシステムの堅さに宗三が苛々していると、乱は恐る恐る尋ねた。

『……宗三さん、どうしてこの部隊に入ろうと思ったの？』

「……何故、それを聞こうと？」

『だってさ、ボク達まあまあ長く一緒にいるのに、お互いの事を何にも知らないじゃない？ だから、ちよつとだけ交流、とか』

「……はあ」

いかにも面倒臭そうな気怠さで返す宗三に、慌てた乱が口早に打ち消す。

『いや、嫌ならいいよ！ ボクだって思い出さたくない事があったの

に、無神経だった！ この話は終わりって事で——』

「いえ、話でもしていないと苛立ちでどうにかなりそうです。堅過ぎるんですよ、ここのシステム。それじゃあ、僕から話しますか」

乱の言葉を遮り、宗三はタイプピングをしながら口を開く。

「……記憶の始まりは、薄暗く白い天井でした。狭い部屋、目の前には鉄格子、薬品の匂い。そこで僕は、仲間達と共に過ごしていたのです。……今思えば、彼らは友達と言っていていい存在でしたね」

小さな部屋で三人きり。彼らは外から来たと話し、自分に沢山の話をしてくれた。でも、彼はどこか遠くの場所の話を知っているような、現実感の無い気持ちでいた。だって、自分は。

「僕は、籠の鳥ですらない——生まれつきの実験動物モルモットだったのですから」

毎日毎日、注射を打たれたり、苦い薬を飲まされたり、変なカプセルに自分を入れたり。血が流れ、当然苦痛を伴うそれらは、彼にとつて日常だった。外から来た仲間達は、その度に泣いて叫んで嫌がっていたけれど。それでも、従わなければ待つのは死だけだ。

「仲間達は、いつも僕に夢物語を聞かせてきましたね。外に行ったら遊園地に行くんだとか、美味しい物をいっぱい食べるんだとか。でも、相槌を打ちながらもできっこ無いと僕は思っていました。外に逃げようとすれば、捕らえられて更に過酷な実験を受ける事になります。そうなれば、逃げるなんて選択肢は無くなりますよね」

外へ逃げ出そうとした者を引きずり戻す研究者の視線は、同じ人間を見るそれでは無かった。それは彼には慣れっこだったけれど、やはり仲間達は震えていた。けれど、仲間達は希望を捨てない。実験から解放されるのを、辛抱強く待っていたのだ。

「そんなある日の事でした。僕がいた建物の電源が全て切れたのです」

仲間達は怯えて彼の腕にしがみついていた。何とか彼らを宥めて、彼は何があったのか把握しようとした。真っ暗で、何も見えない。遠くから、爆発音と悲鳴が聞こえてくる。その内、鉄臭い匂いも漂ってきた。

「流石にただの停電では無いと感じましたね。悲鳴が途切れ、そうしてずるずるという音と共に現れたのが蛍丸と鶴丸でした」

鶴丸は彼らを見た途端、「驚いた、生き残りがいたのか」と呟く。鶴丸は蛍丸と共に鍵を探して鉄格子を開き、足に付けられていた枷を外した。呆然とする彼らに、鶴丸は「好きな所に送り届けてやる」と告げた。仲間達は喜んだが、彼はどうすればいいか分からなかった。

「当然ですよ。だって僕は……研究所以外知らない。だからとりあえず、僕は仲間達の行きたい所を見届ける事にしました」

一人は憧れた首都へ、もう一人は生まれ故郷へ。そうして送り届けられた後、鶴丸は彼に問いかけた。「君はどこへ行きたいんだ?」と。

「……旅をした後でも、僕はどこに行きたいか思いつきませんでした。だから言っただけです。『貴方のやりたい事に付き合いますよ。行きたい所も無いし』と」

彼は、鶴丸達が見返りも無く自分を助けたなどと思っていなかった。だからカマをかけてみたのだが——それは正解だった。

「彼は、この国に反旗を翻そうとしていたのです。そうして問われました。『俺達が行く道は地獄への片道切符だ。それでも、俺達についていくかい?』——僕はイエスと答えました。こんな世界です、天国も地獄も変わりはない。それに、あの研究者を束ねている奴らに一泡吹かせたいと思うようになっていたのですよね」

自分は慣れていたのでいいが、仲間達が笑顔で目的地へ向かう様と研究所での彼らの暗い顔を比べると、ふつふつと怒りが込み上げてきたのだ。そうして、見下していた自分達に逆襲されたらどんな顔をするだろう、という暗い欲望も首をもたげていた。

「まあ、こんなものでしょう。ご満足いただけましたか?」

『うん、ありがとう宗三さん。研究所出身なんだって改めて実感したよ』

満足げに礼を言う乱に、宗三は画面を見ながら問い返す。

「……それで? 貴方はどうなんですか」

『……ボクの話は、よくある話だよ?』

「それでも聞かせて下さい。……本当に堅いんですよここのシステ

ム、話していないと腹が立って憤死しそうです」

今にもシステムを叩き割りそうな声音の宗三に小さく笑ってからじゃあ、と言って乱が語り始める。

『……ボクはね、ある本丸の初めての鍛刀で顕現したんだ。目の前にいたのは小さな男の子。ボクを見て女の子が来たって驚いてたっけ』
乱は、右も左も分からない審神者と共に本丸を運営してきた。陣形選別に悩んだり、刀が増えれば編成に悩んだり。衝突し合う仲間をおろおろと宥める事もあった。

『だから、あるじさんはボクをとでも頼りにしてくれていたし、ボクも真っ直ぐなあるじさんが大好きだった。乱さんは可愛くって頼りになるね、って言うてくれた時は嬉しかったなあ。加州さんが隣でむくれてたけど、それもいい思い出』

乱の審神者は、よく病院に通っていた。体が生まれつき弱いと聞いていたので、乱も審神者を助けていた。薬を飲ませたり、無理をさせないように早く寝かしつけたり。

『病院代が嵩んで、あまり余裕のある資金繰りはできなかつたけれど……それでも、ボクは幸せだった。あるじさんのためなら何でもできるって思ってたよ』

ある日、「極」という刀剣男士の新たな形態ができた。「極」になるには時間遡行を伴う修行が必要で、安定した修行ができる刀の中に乱も入っていた。審神者は、乱が更に強くなるなら、と修行に行く事を認めた。

『お願いが受け入れられて嬉しかった。ボクは修行先に飛んで、順調に鍛錬を積んできた。そして帰ろうと思った時に、白い鳩が飛んできたんだ』

白い鳩が示すのは、修行先から帰還する際に受け取る帰還先の時空座標の変更命令だ。白い鳩を飛ばす事で、審神者は即座に修行から刀剣男士を戻って来させられる。

『あるじさんはせっかちなあつて、手紙を開けるまではそう思った。でも手紙を開けたら頭が真っ白になったよ。何て書いてあったと思う？ ——あるじさんが危篤だから、至急帰還しろ、って』

乱は帰還した後、真つ先に審神者の部屋へ向かった。そこで見たのは、真つ青な顔をしている兄弟と、意識を失いながらも血を吐き咳き込む審神者。病院は、と尋ねると、兄弟達は首を振った。

『どこもかしこも、受け入れてくれないんだつてさ。おかしいよね？一箇所ぐらいは受け入れてくれてもいいはず。でも、どこもいつばいだつて。それに厚が言つてた。——お偉いさんに関わる人は、横を通り抜けていったつて』

乱はこの区域の上層部が腐っていると判断し、亡命を決意した。審神者を抱え、どこか遠い場所へ行こうと荷物をまとめ始めた。——だが。

『家畜が逃げるのを黙って見ている訳が無いんだよね。本丸に、沢山の敵が襲撃してきた。近くの公安局に連絡を入れたら、そんなの感知してない、そちらの見間違いだろう、でおしまい。ボク達は見捨てられたんだ、あるじさんごね。——ボク達は、命がけであるじさんを逃す事になった』

裏山を登り、森を駆け抜け、彼らは隣接区域に助けを求めようと動いた。時空の境界線で、必死に隙間をこじ開けようとした。近くには、他の部隊であろう刀剣男士達もいる。審神者を抱えているものも、そうで無いものも。しかし、敵は迫ってくる。あわや破壊されるかと思つたその時。

『……時空の境界線が、ようやく開いたんだ。ボク達は、なだれ込むように隣の区域に入った。目の前には、沢山の刀剣男士。こっちもだめかな、と思つたら、あつちの刀達は敵に向かつていった。……ボク達は、救助されたんだ』

即ち、乱がいた区域の上層部は見限られたという事。安堵の声を上げるものや、審神者に無事か確認するもの。その場は、ようやく逃亡が終わつたのか、という気持ちで満ちていた。

悪い政府の人間は罰され、審神者は元気になる。これで大団円——とは、ならなかった。

『……手は尽くしたけど、つて。もう少し早ければ、つて。……逃げられたのに、あるじさんは、死んじやつたんだ』

審神者は、病室で息を引き取った。最期の言葉は「ごめんね、ありがとう」。残された刀達は嘆き、悲しんだ。

けれど、決断しなければならぬ事が一つあった。——この後の事だ。

『刀解されるか、他の部隊に行くか、それとも思い出を胸に戦場で散るか。ボク達は、この中から選ばなければならなかった』

すぐ決める刀もあれば、悩む刀もいる。乱は後者だ。今の審神者に沢山の気持ちを貰ったのだ、他の部隊に行く事は考えられない。けれど刀解されたり、戦場で散るのも気が引けた。乱はそれを、死ぬのが怖いからだと思っていた。

『鶴丸さんが現れたのは、本当にボクの思考が煮詰まってきた時だった。何の用なの、同情ならいらなくて突き放したけど……鶴丸さんは一枚の紙を出して、ボクに見せた』

——渡されたのは、上層部の異動リストのコピー。そこには、かつて審神者を追い込んだと話題にしていた者も載っていた。乱の視界が赤く染まる。

鶴丸は、乱に囁いた。

『……憎いだらう、そいつらが。君の手で討ち取りたいと思わないか？ 鶴丸さんはそう言った。それで、ボクが刀解も破壊も選べなかったのは、政府が憎いからだって分かったんだ』

鶴丸も、政府に憎悪を抱いていた。それで政府に目に物を見せるために、仲間を集めているのだと。乱は、鶴丸の勧誘に二つ返事で了承した。

『仲間達を騙すのは気が引けたけど……ボクは、戦場で散るふりをした。鶴丸さんから貰った御守りで復活して、それから鶴丸さんと合流したんだ。……宗三さんも言われてた事をボクも言われた。地獄への片道切符だって。上等だよ、堕ちる時は奴らも道連れだ』

もう、乱は振り返らない。審神者や仲間達が安らかに過ごさせていればそれでいい。この復讐は誰のためでも無い、乱が我慢ならないからする事なのだ。

『……これでボクの話はおしまい。どう？ ありきたりだったでしょ

う?』

「いえ、僕は普通の部隊を知らないので新鮮でしたよ。僕らの部隊って、主に小狐丸と蛍丸のせいで湿っぽいじゃないですか」

『あはは、まあ確かにね。……あの二振りにも、ボクらのような過去があるのかなあ』

「聞いてみたらどうです? 抜刀されるかもしれません」

『それは嫌だなあ。……ちよつと待って、誰か来る!』

今まで穏やかに懇談していた乱が鋭く声を発する。宗三もその声に反応し、タイプ速度を上げた。

乱は機材を取り出したようで、イヤホン越しに耳鳴りのような不快な音が入ってくる。それに耐えながら、宗三はハッキングを続ける。

不快な音と、タイプピングの音だけが響いている。心臓が嫌な音を立っているのが分かった。一文字タイプミス。舌打ちをして消す。今度は余計な文字が入ってしまった。落ち着け、落ち着け、と念じて打ち込んでいく。

しばらくして、乱が息を吐いて告げた。

『よし、今はいなくなつたよ。そつちの状況はどう?』

「無事入力完了しました。後は、システムへのウイルス混入ですが……」

『時間かかりそう?』

頷いてから、そうだ乱には見えないんだ、と気付いて改めて告げる。

「ええ、なかなか難敵です。この間に警備員が巡回でもしたら――」

『――最っ悪! アレで散ってくれば良かったのに!』

外から銃撃の音が響く。ぎよつとして、ウイルス混入までの時間を見た。まだ五十パーセント。加勢に行く訳にはいかない。自分は何としてでも、この任務を遂行しなくてはならないのだから。

苛立ちを露わに、乱が問う。

『あーもうしつこい! 宗三さん、まだ?』

「待って下さい、今五十七パーセント、六十、六十四……!」

六十七、七十二、七十五……。少しずつパーセンテージが上がっていく。それに伴い、外の銃撃も激しくなる。

八十一、八十四、八十六……。どこからか、誰かが入ってきたら。嫌な想像をして、端末をしまい刀を握りしめた。鯉口を切って備える。九十、九十二、九十四……。九十八。後少し、後少しなのに！ 歯痒い思いをしながらその時を待つ。銃撃の音もヒートアップし、銃弾の雨という表現がぴったりだと感じる。

そして――百パーセントになった。宗三は口早に告げる。

「乱！ 百パーセントになりました！」

『よし、こつちもだいぶ集まった！ ——これでも喰らえ！』

外から脳を揺さぶる爆音が響く。それに備えていた宗三は耳を塞ぎ、音が漏れ聞こえないようにした。

乱が炸裂させた物は、脳内ハッキング促進装置。不快な爆音で脳内を混乱させ、ハッキングを行いやすくする物である。所謂洗脳も行いやすくなるため、鶴丸が万が一にと乱と宗三に持たせたのだ。

宗三は最終チェックを行う。ウイルスは無事システムと時間遡行軍のレプリカに混入しているようだ。後は隠蔽作業を行えば、ひとまずは任務達成である。

しばらくして乱が外から戻って来た。宗三は乱に歩み寄り、互いの拳をぶつけ合う。

「お疲れ様、宗三さん」

「乱こそ、お疲れ様でした。監視カメラの加工も済ませています。隠蔽の方は大丈夫ですか？」

「うん。ボク達は警備員で、ここを巡回した事にしたから。最後には謝ってたよー、味方になって事を、ってね」

「まあ、敵なんですけどね。僕ら」

二振りには再び元来たルートを辿って行く。乱が文句を言いながらダクトの中を進む。その背中に、宗三は尋ねた。

「乱」

「うん？ どうしたの？」

「……ウイルスが炸裂したら、大変な事になりますね」

乱はその言葉に訝しんで返した。

「大変な事にするためにこうしてるんでしょ？ 今更どうしたの？」

「……いえ。今までこんな大それた事をした事が無かったので、実は、わくわくしているんですよ」

無言で進んでいくと、乱が吹き出す。

「あっはははは！ そうだね、楽しみ！ あいつらの目玉が飛び出た顔、直で見たいね！」

「鶴丸に交渉します？」

「多分反対されるんじゃないかなあ。慎重派だから、鶴丸さん」

一二つの叛逆者の影は、談笑をしながらダクトの奥に消えていった。

10—6 「悩むもの、煽るもの」

「全員集まった？ それじゃあ戦果を確認するよー」

雲霄の加州が手を上げて全員の視線を集める。まずは俺達からね、と加州はメモ帳を取り出す。

それぞれの班による戦果報告を右から左に流していた氷雨の鶴丸は、脳内で思考を巡らせていた。

——蜂須賀は知らない方がいい事に気付いてしまった。それは一体何だ？

鶴丸が知っている事は、一期が共に連れ去られた事、犯人がどこからか「町」の時空座標値を手に入れていた事、政府産の時間遡行軍を用いていた事、それが誰かによってもたらされた事。消すに値しそうな事もあるが、どうも何かが引つかかる。それ以外何があるのか？

——そういえば、犯人は狂人だった。

犯人は蜂須賀を兄と勘違いして拉致した。そして蜂須賀に丁寧に接して、一期の事は縛っていたという。それに煮え立つような怒りを思い起こしてしまい、いや今は感情的になるな、と首を振る。

——19478番の時も、怒りが込み上げて来たんだっけか。

以前訪れた研究所跡地で見た胸糞悪い研究報告書。その時も、怒りのあまり機械を壊してしまったのだ。他の「鶴丸国永」はもつと悟っているのだろうかと落ち込んで、いやいやそうじゃないだろうと頬を叩く。いきなりの行動に、隣の小夜がびくっとして鶴丸を見た。

——今までの事を繋げれば……。

鶴丸は、様々な事を思い浮かべた。反逆しようとした審神者達、胸糞悪い研究所、誘拐された蜂須賀、『幽霊』……これらが全て繋がるとは思っていないが、どれかが繋がる事はあるかもしれない。

「……る、鶴丸！ 聞いてる!?!」

加州の声で、現実を引き戻される。はつとすると、全員が訝しげに鶴丸を見ていた。視線が集まっている事に軽く驚き、すまんすまんと笑って頭を掻く。

「考え事をしててな。何だったか？」

「もー、ちゃんと聞いててよねー。……この『幽霊』は、以前調査部隊に退治して貰った奴みたいになにか話そうとしている傾向があった。意思の疎通はできなかったけど、これも報告する方向でいいよね、って話してたの。鶴丸はどう思う？」

「あーそうだな、俺も報告した方がいいと思うぜ」

「よし、全員報告した方がいいって出たので、これも報告しまーす。後、誰か話しておきたい事はある？」

誰も手をあげる気配が無い。加州はぐるりと見渡してから告げた。

「じゃあ今回はこれで解散ね。皆お疲れ様。氷雨隊も協力ありがとう。ゆっくり休んで」

そう言つて雲霄隊は去っていく。三日月は調査部隊にっこりと笑つてから隊の最後尾についた。それを見送つた後、調査部隊から力が抜けていく。

「……いやあ、あの三日月はやばかったね」

「……いつ怒り出すか、分からないのが不気味でしたね」

「あれが最終兵器……その名にふさわしい迫力だ」

「……流石に堪えたな。それくらいしないと牽制にならないが」

調査部隊は歩きながら三日月について話している。鶴丸はそれに領きつつ、考えをまとめていた。

——近いうちに、19478番の事を調べに行こう。

鶴丸は自室の引き出しの中にある赤く染まった紙片を思い浮かべて、そう決意した。

「……三日月、氷雨の鶴丸に何したの」

「少しお節介をしたただけだ、気にする程でも無い」

「それにしてもずっとぼーっとしていたみたいですが……」

「干渉はなるべく控えて頂きたい。貴方の言葉は、あまりにも強過ぎるのだから」

雲霄隊は帰路を行きながら三日月を問い詰めていた。彼は今日いきなり「俺も行くぞ」と告げて本当について来たのだ。マイペース極まりないこの自称じじいは、影響力が強いため普段は本丸から出な

い。それなのに今回の任務について来た事に、部隊員全員が裏を感じずにはいられない。

「はっはっは、よきかなよきかな」

「良くねえ！ どうすんの鶴丸が変な事したら！」

マイペースさを発揮する三日月に怒鳴りつける加州。部隊員は苦笑いを浮かべているのがほとんどだ。

しかし、いきなり三日月が立ち止まる。不審そうにする部隊員を尻目に、周囲を見渡してから咳払いをして注意を自らに向けた。

「……俺が今回ついて来たのはな、主にある任務を託されたからなのだ」

「へ？ 何いきなり……主からの任務？ 三日月に？」

一体どういう事だろう。強い『幽霊』が出るかもしれないとも言われたのだろうか。しかし、その指摘に三日月は首を振る。

「まあ、何か引つかかれば御の字と言った所だったのだが……見事に釣れたな。皆は見えていたか？ 俺が現れた時の氷雨隊の反応を」

「皆驚いてましたが……」

「うん。びびってたし、普通の反応じゃ……」

「……三日月殿、それは真であるか？」

山伏が、厳しい口調で問う。それに頷き、三日月は種を明かした。

「山伏は気が付いていたようだな。……俺は刀剣男士に畏怖の感情を与える事ができる。それに抵抗できるのは、狂人か、外道に堕ちたからだ。そいつは瞬きの間だったが、反応が遅れた。周囲の反応を見てから合わせたのだろうか」

「……それって——」

加州が震える声で呟く。部隊員はもう、誰も笑いを浮かべていない。

「氷雨隊の堀川国広……あやつ、外道に堕ちたか。周囲を洗うように、進言した方がいいだろうな」

審神者から戦術にまつわる本を持ってくるように言われた蒼穹の一期は、書庫で目的の物を探していた。書庫の一角にある本を数冊手

に取り、よいしょ、と掛け声を出して持ち上げる。そのまま入口に向かい、戸を開けようと本を一度床に置こうとした瞬間、ガラガラと戸が開く。

目の前にいたのは、鶴丸だった。

「先客がいたとは驚きだ。よつ、一期」

「……こんにちは、鶴丸殿」

仮面のような笑顔は相変わらずだ。一期は一礼をして、鶴丸の横を通り過ぎようとする。

しかし、鶴丸は何故か一期の後ろについてきた。何も言わず、けれども背中に視線が突き刺さっているのが不快で、一期は鶴丸の方を向く。

「……何か用ですか、鶴丸殿」

「いや、俺もこつちに用があるんでな」

「そうですか」

再び沈黙が落ちる。それでもやはり背中に視線は突き刺さっており、何か言いたげな雰囲気伝わってくる。氷雨の彼とは違う足音が何故か不気味に感じられて、一期はもう一度振り返った。

「……あの、何か話があるなら手短かに——」

「なあ一期」

鶴丸の声と表情に色彩が無くなっている。前回の問答の続きだろうか。一期は覚悟を決めて、鶴丸を見据えた。

「君には、大切な存在があるか？」

唐突に何だろう。疑念と緊張を手放す事の無いように、一期は答える。

「……弟達と、主と、友達ですな」

それは迷い無く答えられた。自分の事を慕う弟達は愛しい存在であるし、主無くして自分は存在できない。友達という概念は顕現してから理解したが——刀派の繋がりも無い存在と好意的な関係を結べるのは、尊い事だと思えた。

鶴丸は、更に一期に問いかける。

「その大切な存在達と対立したら、君はどうする？」

穏やかでは無い仮定だ。一期はしばらく考えてから告げる。

「まずは、対話を試みるでしょう。今の私達には口があります。心を伝えられる器官があるのです。それをまず使わずして、何を使いますしょう」

人の形を取った利点はこれだ。物言わぬ刀だった頃には考えられないが、今は心を持ち、それを伝える手段がある。出陣したい、手入れして欲しい、遊びたい。様々な欲求を伝える事ができるのだ。——感情に振り回される事も時々あるが。

鶴丸は問いを重ねる。

「その対話が無意味に終わったとしたら？ 否定され、拒絶され、その大切な存在が離れて行ったら、君はどうする？」

——答えられなくなった。一期は無意識の内に、自分の思いは必ず通ずると思いついていたのだ。人間によくある傲慢さ。それを否定され、一期の思考は停止してしまった。

「……正直に言うのだ。俺は、人は必ず分かり合えるなんて綺麗事にはうんざりしているんだ。同じ存在でない以上、必ず齟齬は生じる。それを無理矢理噛み合わせても、いずれ崩壊していくだけだ。それで苦しむ事になるなら、最初から繋がりなんて無い方がいいと思わないか？」

鶴丸の言葉に、どうしてか反論できない。どこか穴があると分かりつつも、その暗い底無しの洞穴を思わせる表情に、怖気付いてしまった。本を持つ手が震えている。

やはり、この鶴丸とは仲良くなれそうにない。

後ろから声がする。審神者の物だ。救いを求めて一期は声の方を向いた。

「遅くなって申し訳ありません主、本をお持ちしました！」

「うおっ!? びっくりした! ……珍しいな、鶴丸が部屋の外にいるなんて」

「何、書庫に行ったら一期がいたもんで、ちよつと話をしただけさ」

じゃあな、手をひらりと振り鶴丸は去って行く。確かに審神者の部屋を通り過ぎたが、自分を揺さぶるために話しに来たのではと疑って

しまう。

「……何かあったのか？」

「……いえ、私が未熟で、鶴丸殿の問いに答えられなかっただけです」
「二期が未熟ってんなら、俺なんか単細胞だろうな。何せ人を殴って審神者になっただけだから！」

あつはつは、と豪快に笑いながら自虐をかます審神者に、何とか心の安定が取り戻されていく。ほう、と息を吐き、二期は審神者に尋ねた。

「鶴丸殿は……顕現した時からああなのですか？」

「ああって？」

「……何か、他者を寄せ付けられないような。説明が難しい、あの感じです」

「うーん……悪い二期、俺も分かんねえんだわ」

解せない答えに審神者の顔を見る。審神者は、困ったような、憂うような複雑な顔をしていた。

「……実はな、あの鶴丸、うちで鍛刀した訳じゃない。かと言って、戦場で拾って来た訳でもない。政府からの貰い物なんだよ、あいつは」

「……そうなのですか？」

「ああ。だから、ここに来る前の事は分からない。政府の『強い戦力になる』つっ—言葉につられて引き取ったんだ。……だがあいつ、あんまり丈夫じゃないらしくてなあ。部屋に引きこもってる事が多いんだよ。近侍もやりたがらないしな。だから俺も、あいつの事はよく知らない。主の名が泣くがな」

「……いえ、そんな事は」

鶴丸が消えた方向を見る。風が強く吹き、廊下の上に枯れた葉が落ちて来た。

10—7 「惨劇の前兆」

陽が傾きだして、空が橙色に染まっている。まだまだ近侍の仕事は続くけれど、今は休憩時間だ。蒼穹の一期は、端末を取り出しチャットアプリを開いた。

『畜生鶯丸呪ってやる！ 具体的には箆笥の角に足をぶつける呪いをかけてやる！』

『やれるものならやってみろ。呪い返してやる』

『荒れてますね……鶯丸は雲霄の三日月に会った事が無いのでしたか、意外ですね』

『前連れて行った時三日月は不在だったからな。今日が初対面だ』

『あんなに怖いなんで聞いてねえぞおい！ 本気でちびるかと思つたわ！』

『飛び上がった鶯丸は芸術的だったな。今思い出しても笑える』

鶯丸の発言の後、鶯丸が泣いているひよこのスタンプを押した。それを見て一期の頬が緩む。

——ああ、この雰囲気、安心するなあ。

和みながら、トークに混じろうと画面をタップする。

『こんばんは。つるまるどの、たいへんでしたね』

『一期！ 鶯丸に嵌められた俺を慰めてくれえ！ 嬉しい驚きだと思つたのに恐怖体験するなんて聞いてないぞ本当に！』

『鶯丸、大概になさい。一期もそんな風に詰め寄られて鬱陶しいと思ってるでしょう。ちよつと当てられたくらいで大袈裟な』

『鶯丸が大きく跳躍した話をしようか。その方がいい』

『君達本当に呪うぞ!!』

くすくすと笑い声を思わずあげてしまった。やはりこちらの鶯丸は安心できる。でも、彼には話しておかなければならない事がある。

一期は鶯丸との個別部屋に、こう打ち込んだ。

『つるまるどの、ちかぢかてあわせをしていただけませんか？』

すぐに既読マークが付き、それからしばらく待つと、鶯丸が返信してきた。

『どうしたんだ？ 俺は別に構わないが……強くなりたいたなら、焦らない方がいい。一期なら、すぐに練度上限に達するさ』

気遣いを見せてくれるのはありがたいが——そんな猶予は恐らく無い。

『いえ、できればすぐに。……おそらく、わたしはうちのたいのつるまるとのたいたりつすることになるでしょう』

『どういう事だ？』

『……わかりません。でも、わたしのかんがつけるのです。いずれ、そうなる』

手の震えが止まらない。吐いた息も頼りなく漂う。

頭の中で警報が鳴るのだ。自分の知らないどこかで、取り返しのつかない何かが起きると——

『分かった、少しでも相手の手の内を知った方がいいもんな。俺はそっちの『俺』をよく知らないし、戦い方もズレがあると思う。それでも構わない？』

『はい、おねがいします』

多分、賽は投げられている。自分は、できる限りの準備をするだけだ。

氷雨の鶴丸は、蒼穹の一期との個別部屋を閉じて、端末をスリープ状態にした。懸念事項は増えるばかりだ。

引き出しを開け、紙片を取り出す。相変わらず赤錆びていて、文字はあまり読めないけれど——この紙片が、何かに繋がると信じたい。

鶴丸は刀を握り、窓から外へ飛び出した。——真実へと繋がる糸を、掴むために。

『江雪、そういえば今どこだ？ 一期も鶴丸もいなくなっちゃったし、これから二人だけで飲みにも行くか？』

『今は城下町です。……飲むのは、全員揃ってからです』

雲霄の鶯丸は、江雪と個別部屋で話していた。相変わらず部屋の外はバタバタしているけれど、鶯丸にとってはただの背景だ。

——氷雨隊の堀川国広に、背信の疑いがかかっている。

鶴丸もいずれ知る事になるだろう。その時、彼にどう接すればいいのだろう。それに、江雪が滑園の真相を知ってしまったら——

次の会が湿っぽくならないといいな、と願いながら、鶯丸は茶を口に含んだ。

城下町にてチャットアプリを閉じた清澄の江雪は、暗くなった空を見て本丸へ戻ろうと思ひ歩みを進めていた。

今日はコタローとアズサのお別れ会があつた。いよいよ里親に引き取られる二人に、子供達は涙を流して別れの言葉を贈った。江雪も、目が潤んでしまったのを覚えている。

明日から二人がいなくなるのか、と物悲しさに浸っていると、後ろから声をかけられた。

「……江雪さん、どもつす」

「貴方は……サトルさん？」

うす、と言つて、台車を引いているサトルは小さく頭を下げる。彼は、猩々木庵の料理人見習いだ。時折、こうして料理や弁当を運ぶ事もしているが。

サトルが、目を逸らしながら江雪に尋ねた。

「……江雪さん、今暇つすか？」

「もう本丸へ帰る所ですが……どうかしましたか？」

サトルは台車の荷物を探ると、一つの包みを江雪に差し出した。

「……これを、滑園の子供達に運んで欲しいんすよ。今日、お別れ会があつたんすよね？　こういう時、子供達が大人に内緒でパーティーを開くみたいで……これがそのパーティーで出される料理なんすけど、俺これから他の所にも配達に行かなくちゃいけなくて……江雪さん、よければ頼めないつすか？」

しばし悩んだが、子供達のためだ。江雪はその頼みを引き受けた。

「分かりました、これをお供達に届けなければいいんですね？」

「すみません、お願いします」

江雪は再び元来た道を歩いて行く。パーティーがあるなら、蒼穹の

一期も呼ぼうと端末を取り出す。その足取りは軽かった。

——自分が悲劇の目撃者になるなど、この時の江雪は思いもしていなかったのだから。

遠ざかる江雪を見て、サトルは苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

——サトルが話していた事に嘘は無い。ただ、真実を話さなかっただけで。

当然これは忌々しい陰謀家の姉、ハルカの差し金だ。

「……糞姉貴の嫌がらせ、不発に終わるといいんだけどな……」

そうならならいだろうと諦めつつ、サトルは台車を引いて江雪とは逆の方向に歩いて行った。

——蒼穹の一期に言っていない事がある。確かに話の筋はあの通りなのだが、鯨尾は一部出来事を省略して話したのだ。省いたのは、「森」へ行く事にしたもう一つの理由。近い内に、話す事になるだろうが。

それは、審神者が最期の言葉を告げた時。

「そうですか、良かった……それと、ぬいぐるみを使うのなら、もう一つお願いしてもいいですか？」

何だろうと思いつながら、五振りは頷く。礼を述べてから、審神者は「お願い」を告げる。

「あの方は……あの人は、私以上に辛い思いをしてくれました。私は、本当はあの人に幸せになって欲しかったんです。だけど、私は皆様の主だから。なかなかあの人だけにかかりつきりにする訳にはいかなかった」

「主……何を言っているんですか？」

鯨尾が、不審さを隠さずに問う。審神者は顔をこちらに向けて、淡い微笑みを浮かべる。××

「長谷部さんの事を——×の事を、皆様をお願いしたいんです。皆様がこの世界に生まれてきて×で良かったと私に思わせてくれたように、あ

の人にもそう思つて貰いたいです」

審神者の言葉に、五振りは固まる。鯰尾は、頭の中で様々な事象が組み立てられていくのを感じながら、愕然とした。——灯台下暗しとは、この事じゃないか。

どさりと物が落ちる音が後ろから聞こえる。それはあまりに大きく、病室に響いていた。振り向くと、目を見開き、顔を強張らせた長谷部が立っていた。

「……………どういふ事ですか」

長谷部がベッドに近付く。落ちた荷物など見向きもせず、真つ直ぐに審神者の下へ向かう。

「今の……………つどういふ事ですか。貴方が、俺の……………それは、本当に——
どういふ事なの、ねえ！」

震える声で叫ぶ長谷部の口調は乱れている。それを笑うものは誰もいない。それどころか五振り全員が、悲痛な面持ちで俯いていた。

——もつと早く気付けていれば。そう思つても、もう遅い。彼女の命の火は、今にも消えようとしているのだから。

「——×、ごめんね」

審神者が、長谷部の頬に力無く手を伸ばして涙を拭う。

「×私ね、×に幸せになつて欲しかった。地獄の様なあつた場所で、ずっと×に幸せを貰つてきたから、それを少しでも返せればと思つたの。×……でも、私は審神者になつた。私情で一人×だけにかかりつきりにする事は、どうしてもできなかつたの。……×。いっぱい泣いて、いっぱい怒つて、いっぱい笑つて、いっぱい皆×頼つてね。それは、きつと大きくなるのに必要な事。——幸せになるのに、必要な事」

力を失い落ちようとする審神者の手を、長谷部は震えながら握つた。彼の目は今にも涙が溢れそうだ。審神者は、今にも閉じそうな目を何とか開いて、長谷部に伝える。

「……………お土産話、沢山持つて帰つてきてね。できれば八十年分くらいあると、嬉しいな」

審神者の目が閉ざされ、病室に絶命の電子音が響く。審神者の手を取つて慟哭する長谷部を、誰も止める事はしなかつた。

第十一話 「惨劇の夜」

11—1 「宴と、その裏で」

灯りがついていく城下町を歩いて、来た道を戻り滑園の門前に到着したまでは良かった。が、そこから清澄の江雪は立ち尽くす。ここからどうしよう。大人達にも内緒のパーティーなら、堂々と入るのは大人達にバレるだろう。どこから入ろうか。

うろろうと園の周りを歩いていると、正門から小さな影が現れた。

「……あれ!? 江雪だ! サトルはどうしたんだ?」

「……ソメゴロー君」

正門から堂々と出て来たソメゴローに、江雪は啞然としてしまった。大人達はどうしたのか。それを問い掛ければ、答えはすぐに返ってきた。

「あー、里親が来る日は大人達みーんな卒園する奴送り出しちゃうんだよ。だから園の中には……スギハラ先生しかないかな? 先生も今部屋で突っ伏して寝てるの見たから、今の内に入った入った!」

ソメゴローは江雪の腕を引き、園の中に引き入れる。運動場は昼間の賑やかさはなりを潜め、遊具だけが江雪達を見ていた。玄関から棟内に入り、階段を上がってパーティー会場であるソメゴロー達の部屋に向かう。

浮き立ちながら歩くソメゴローが語る事には、こうして「卒園」して行く子供が里親に送られて行く日に残された子供達がパーティーを開いて、悲しみや寂しさを思いつき吐き出していくのだという。子供達が小遣いを貯めているのは、大抵がこの日の為だ。流石に酒は飲まないが、ジュースや子供用ビール、菓子や料理を並べて子供達ははしゃぐ。そうする事で、明日からの生活に寂しさを引きずらない様にするのだ。

辿り着いた部屋のドアを開けると、中では数人の男女が入り混じり菓子の袋を開けていた。

「あつ、お前ら狡い! 先に始めるなよー!」

「悪い、ソメゴロー。皆もう食べたいって言ってるさ……」

「料理は持ってきたんでしょね？」

膨れるソメゴローにサクヤが謝れば、ツクシが強気な口調で料理の受け渡しを迫る。部屋の中をよく見渡せば、ここにいる子供達の年齢は十歳前後だ。それよりも小さい子供は、もう眠っているのだろう。大きな子の特権は、こういう時に発動するらしい。

ソメゴローが廊下呼び掛けると、現れた江雪に子供達がざわめく。

「え、嘘、何で江雪さんが戻って来てるの？」

「ソメゴロー、先生に告げ口したのか!？」

「するか！ 料理を持って来てたから、多分サトルに頼まれたんだろ！」

なあんだ、と言って子供達は江雪に笑顔を向ける。

「江雪さん、先生には内緒だよ？」

「江雪もパーティーに参加していけよ！ お菓子いっぱいあるぞ！」

「ねえねえ、料理の中は何？」

群がられた江雪が包みを開くと、中にはオードブル容器に詰められたフライドポテト、唐揚げ、ソーセージ、エビフライなどが入っていた。江雪の周囲からわあつと歓声上がる。

「早く食べたい！」

「手を伸ばさないで男子！ 江雪さん、ローテーブルの真ん中にその容器置いてくれる？」

「分かりました」

ツクシが頼めば、江雪は頷きローテーブルに容器をそつと置く。それは子供達にとって神々しい食事を置かれたかのように思えた。その間に子供達はローテーブルの周りに座り、ツクシは江雪の分の飲み物を注いでいく。

子供達は料理と菓子が並べられたのを見てから、一斉にソメゴローの方を向く。

「……えっ!?! 俺かよ！」

「ほらほら、いつもの自信満々な態度はどうしたの？」

「よっ、お山の大将！」

「それ褒めてねーだろタイガ！」

やんややんやと囃し立てる子供達。それに突っ込みつつ、ソメゴローはため息をついてコップを持ち立ち上がる。

「……あー、今日はアズサとコタローが里親に引き取られる事になった。寂しいけど明日から二人がいない日を過ごせるように、ここで思いつき寂しさを悲しさをぶちまけていけ！ それじゃあ、乾杯！」

「かんぱーい！」

ソメゴローの音頭で一齐にコップが掲げられる。子供達は菓子やオードブルをつまみ、わいわいと話を始めた。

「それにしても、コタローがいなくなるとはなあ……」

「まだちっこかったのにな。いや、ちっこい方がいいのか？」

「あーあ、本当にいないんだね。何でアズサなんだろう」

「ツクシ、いつつもアズサと競争してたもんね。二人はこの園の中でも優秀だったから、それでアズサが引き取られたんじゃない？」

子供達の話に相槌を打ちながら、江雪もコップを傾ける。中身はオレンジジュースだ。爽やかな香りを楽しんでいると、ツクシが江雪に話しかける。

「ねー、江雪さんも何かここでの思い出話してよー！」

「そういや江雪、今年の始め頃にふらっと現れてから、ずーっとここに通ってるよな。アズサやコタローとも仲良くしてたし、思い出もあるんじゃないか？」

ソメゴローも江雪の話の聞き手がった。子供達の目が、こちらを向いてきらきらと輝いている。江雪は僅かに口元を緩ませて、コップをテーブルに置いた。

「……私がこの園に来たのは、友達からの紹介でしてね。当時の私は悲しい出来事があつて塞ぎ込んでいたのですが、この園に来て心が洗われました。……世の中は私にとって、辛い事の方が多かったので。でも、皆さんと遊ぶ事によって、それを忘れられたのはとてもありがたかった。……コタロー君は少し気弱でしたが、言うべき事は言える子でした。アズサさんは強い意志の持ち主で、誰かとぶつかる事

も多かったですが、その意志を曲げなかったのは素晴らしいと思えます。私は、二人が里親の下で楽しく過ごして欲しいと願ってやみません。二人には沢山の救いを頂いたのでですから、なおの事です」

しん、と子供達が静まり返る。料理をつまむ者も飲み物を飲む者もない。江雪はコップを握りしめた。少し、感傷に浸り過ぎたか。そう思っていると、不意にツクシが涙を零した。

「……アズサあ……やっぱり、寂しいよお」

それから、声を上げて泣き始めてしまう。隣の女子が慌ててティッシュの箱を渡した。男子も思う所があるのだろう、俯いて誰も話さない。

一気に沈んだ空気になったのを感じて、頭をガシガシと掻きソメゴローが大声を上げる。

「あーもう、お前ら湿っぽ過ぎ！ 江雪も言っただだろ、里親に引き取られる二人の幸せを願う為にこのパーティーがあるんだよ！ 特にツクシ、お前が泣いてるのなんて性に合わないだろ！ お前はいつもみたいに呑気な笑顔浮かべてりゃいいんだよ！ お前が元気じゃなかったらアズサも里親の所で元気でいられないだろ！」

ティッシュで涙を拭いていたツクシは、目を腫らしながらもソメゴローを睨みつけた。

「……呑気って何さ、バカソメゴロー……」

「呑気は呑気だろ！ 後タイガ達、いつものパワーはどうした!? お前達は俺と一緒に真っ先にバカやるのが当然の流れだろ！ パーティーはいつだって俺達がバカやって明るくするもんだろが！」

矛先を向けられたタイガは、ぐっと詰まりながらも何とか呟いた。「……だつてさ、やっぱり寂しいよ。コタローがいなくなっちゃうのはさ。ちびっこくて、おどおどしてたけど一緒に遊んでさ……悲しく無い訳が無いよ」

それっきり男子は黙り込み、ツクシは嗚咽を漏らし続けている。女子はツクシの涙を拭いつつも、困っている様子だ。部屋の中には、重たい沈黙が流れる。

しばらくして、サクヤがコップを持って告げた。

「……俺はソメゴローの言う事も一理あると思うよ。このパーティーはさ、確かに悲しみや寂しさを吐き出す場だけど、だからと言ってずっと湿っぽくちや葬式と変わらないよ。——滑園のアズサとコタローっていう存在の葬式とね。この回は、明るい未来に向かう二人のお別れ会の二次会であるべきだ。湿っぽくなるのは、一瞬でいいと思う」

子供達は、サクヤの言葉を何とか噛み砕こうとしていた。——今の雰囲気は葬式と変わらない、と言われたらもう返す言葉も無い。江雪も二人の葬式では無く、送別会である事を望んでいた。悲しさや寂しさに押し潰される事無く、子供達には未来を夢見て貰いたい。子供達の笑顔は、江雪の救いの一つなのだから。

コップを傾けるサクヤを見て、ソメゴローがぽかんと口を開ける。

「……サクヤが俺の言葉に同意してくれるとは思わなかった……」

「まあ、流石に暗過ぎたしね。ソメゴローはちよつとデリカシーな過ぎただけど」

「なっ！ 俺は何とか皆を笑わせようとしたなあ！」

「そのやり方がまずいって言うてんの。正論が通らない事もあるんだから」

「セーロンって何だよ、またサクヤは難しい言葉使って！」

「いや、正論分かんないの……？」

「何だよその目！ どーせ俺はバカだよ、ここ一番のな！」

「何で堂々としてんのさ。傲慢出来る事じゃないよ」

いつもの二人のやり取りに、ツクシがプツと吹き出す。それは子供達に伝播していき、部屋の中は次第に笑いに包まれる。それを見渡し、ソメゴローは腕を組んだ。

「そうだ、その調子だ！ もっと笑い声でこの部屋をいっぱいにするんだ！」

「どこの熱血教師？ それに笑い声が大き過ぎても駄目でしょ、先生にバレルよ」

「……あっ」

「先生の存在忘れるなよ……ソメゴローは相変わらずソメゴローだな」

あ

「それどういう意味だサクヤ!」

ツクシがあはは、と濡れた、けれど明るい笑い声を上げる。それにつられて子供達も笑う。パーティーの雰囲気は、いつの間にか賑やかなものへと変わっていた。

江雪はそれに内心胸をなでおろしながらフライドポテトをつまんだ。

「すみません、私が暗い事を言ったせいで……」

「私が勝手に悲しくなっただけだよ、気にしないで。……ソメゴローとサクヤのやり取り、やっぱり安心するね」

ツクシが江雪に笑いかけてからしみじみと呟く。やいのやいのと漫才を繰り広げるソメゴローとサクヤは、確かにこちらを安心させる。子供達が元気だと、こちらも元気を貰える。元気な姿を見るのは、江雪の心に安らぎを与える。戦いから離れて久しいが、この日々が出来れば続いて欲しいと願っていた。

「……あれ? これ……」

タイガが部屋の隅にある物を見つけ拾う。それは、小さなクマのキーホルダーだった。それを見て、サクヤが顔を青ざめさせる。

「……これ、俺が渡したやつ」

「コタロー、忘れちゃったのか? 今から届けに行つて、間に合うかな」

首を傾げるタイガからサクヤがキーホルダーを受け取り、ドアの前へと駆ける。

「――絶対に合わせる! ごめん、しばらく抜けるから!」

「ちよ、サクヤ!」

ツクシが止める間も無く、サクヤはドアを開けて勢いよく飛び出して行ってしまった。しーん、と部屋が静まり返る。ソメゴローはため息をつき、子供達に告げた。

「……サクヤの分は取り分けるか。サクヤが帰るまで待つてたら、多分冷めちゃうし」

「そうだね……」

ソメゴローがオードブル容器から料理を取り分けようとしたが、フライドポテトを多く取り分けようとしてツクシをはじめとした女子達と言い争いになった。男子はソメゴローと女子の喧嘩を煽っている。

江雪は子供達を宥めながらも、ふと思い浮かぶ。

——一期も来られれば良かったんですがね。

ここに来る前、蒼穹の一期にも連絡は入れた。返事は「近侍の仕事があるので、残念だが行けない」というものだった。近侍になれた事を祝いつつ、ここに一期がいたらどうなっていたらろうと考える。

せめて写真を撮って送ろうと思いつき、江雪は子供達に許可を得ようと口を開いた。

*

「……間に合わせると言っても、どこにいるんだろう、コタロー」

サクヤは部屋を飛び出した後、あても無く棟内をうろうろと歩いていた。コタローが外に出るとしても、どこに行ったのかは分からない。だからまずは、棟内を探索する事にしたのだ。

先生の部屋に行き先が書かれている物が無いかと、スギハラの部屋に行き眠っている彼女を起こさない程度に探したが、それらしい物は見つけられなかった。

次は、施設長の部屋だ。普段は立ち入り禁止だが、緊急事態という事で許されるだろう。そう思って、サクヤは施設長の部屋のドアノブを回す。施設長が反応すればと思っただけで、開く事は期待していなかったのだが——ドアノブを奥に押し込む事が出来た。それに驚愕しつつも、サクヤは施設長の部屋に入る。

初めて入る部屋の中は、家具以外がらんで、静かで、外からする鳥の声しか聞こえなくて——それがとても不気味だった。

早く出ようと思っていたが、本棚の後ろに不自然な隙間を見つけてしまった。近付くと、本棚を動かす事が出来そうだ。ごくり、と唾を飲み込み、サクヤは本棚に全身の力を入れて横にずらした。

ふう、と息を吐いて振り返ると、本棚があつた場所に引き戸があつた。微かに開いているその引き戸を、サクヤは慎重に開ける。

開いた先は、暗闇だった。目が慣れてくると、奥に伸びている通路があると気付けるが。サクヤは音を立てずに、ゆっくりと通路の中に入った。心臓がいやに音を立てている。つるりとした壁につけている手がじんわりと汗で滲んでいる。次第に、鼻をつく薬品の匂いがしてきた。

——どうしてだろう。引き返さなきゃいけない気がするのに、進む足を止められない。

ひた、ひた、と歩く足音が、小さく響いている。右手は壁に、左手は胸を押さえながら、長い通路の奥へと進み続ける。

そして、彼は辿り着いた。——見てしまったのだ。

「……………え？ コ……………タロー……………？」

思わず呟いてしまった口を急いで押さえつけるが、もう遅い。

そこには、白衣の大人達がいた。数多の機械を操作している大人と、ある物を囲んでいる大人。部屋は機械の画面でぼんやりと明るい。それに妖しく照らされる大人達は、音の方向——呟いたサクヤの方を見ていた。

そして、囲んでいる大人達の中央にいたのは——

「……………被験体15737番の侵入を確認。機密保持の為、処置の許可を申請します」

大人の一人が通信機器でどこかへと連絡を取る。それに呼応するかの様に、大人達の手が一齐にサクヤの方へ伸ばされた。

サクヤは一步下がり、身を翻して走り出す。先程歩いた通路を懸命に駆ける。大人達の複数の足音が聞こえてきた。後ろを見る事をせず、サクヤは走り続けた。

大人達は何事か話している。それが聞こえる距離になってしまった事に焦り、サクヤは更に走るスピードを上げる。はあ、はあ、と息が切れているが、それを気にしている余裕は無い。

——何だよ、何だよアレ！ コタローが、何で……………あんな姿に——
混乱する思考の中にながらも、サクヤは通路の入口である引き戸の前に辿り着く。開けて飛び出そうとするが——開かない。力を思いつきり出して引いてもびくともしない戸を、サクヤは何度も何度も

引っ張る。しかし――

「……全く、賢すぎるのも考え物だな。こうして行き着く者が出てしまふ」

コツ、と足音がすぐ後ろまで迫る。ぱつと振り向くと、白衣の大人達がこちらを見下ろしている。その視線はあまりにも冷め切っており、同じ人間を見ているとは思えないほどだった。サクヤは、往生際悪く大人達に叫ぶ。

「……何なんだよ、あんたら！ コタローに何をしたんだ！ いや、コタローだけじゃない――今まで出て行った奴らに何をしたんだ、あんたら!!」

大人達はそれに答えず、ただ蔑んだ視線を向けた。

「ほう、思っていた以上に賢いな。――だが、それはお前の知る必要の無い事だ。これからお前も、19688番と同じ存在になるのだから」

連れて行け、という命令に従い、白衣の大人達がサクヤの腕を掴んで引きずって行く。サクヤは激しく抵抗したが、所詮は子供。大人の力に打ち勝てず、どんどん奥に連れられて行った。

大人達は処置台にサクヤを固定した後、彼に注射針を刺した。

――ソメゴロー、ごめん。俺、約束破っちゃうな。

サクヤの意識が薄れていく。瞼の裏に、桜の花弁が舞った様な気がした。

11—2 「研究」

木々の合間を縫って、氷雨の鶴丸は走り続けていた。懐に入っている紙片を落としていないか確かめながら、目的地まで駆け抜ける。

鶴丸は19478番の事を調べる為に、晦冥研究所へと向かっていた。第八暗影研究所は粉々になってしまったので、他の研究所を通して19478番の手がかりが掴めないかと思っていたのだ。自隊の蜂須賀の記憶が消され、蒼穹の一期の記憶が無事だった理由。それを見つける為に、鶴丸はこうして走っているのだ。

研究所が見えてきた頃、背後から猛烈な勢いで追いかけてくる気配を感じて、鶴丸はちらりと背後を見る。それが覚えのあるものだった事を確認し、足を止めて振り返った。

「よっ、小夜坊。こんな所まで何の用だ？」

「……それはこちらの台詞です、鶴丸さん」

気配——小夜は、毛を逆立てた猫の様に殺気立っている。研究所を一瞥してから鋒を鶴丸に突きつけ、問い詰める。

「こんな遅くに、何の用でここに来たんですか」

「いやあ、夜の散歩をしたくなってな」

「……物凄い勢いで走って、研究所まで散歩に？」

「らんにんぐ、だったか。たまにはそういうのもいいだろう？」

「何故、一直線に研究所まで来たのかを聞いているんです。……僕が貴方の後をつけたのは主からの命令です。不用意な行動をすれば斬り捨てて構わないと」

飄々と返す鶴丸に殺気を更に濃くする小夜。夜は短刀と脇差の独壇場だ。ここで戦闘になり、真相を掴めなくなるのは避けたい。鶴丸は一か八かで小夜を抱き込む事を計画し、ひとまずは両腕を上げた。「すまんすまん、誤魔化す様な真似をして。……俺がここに来たのはな、これの事を調べたかったからなんだ」

懐から赤錆びた紙片を取り出して、手の上に広げる。小夜はそれを見て、目を見開いた。

「……これ、持ち帰っていたんですか」

「ああ、気になってな。ずっと考えていたんだ、19478番がどうなったのか。今どうしているのか、幸せなのか、不幸せなのか。ずっとずっと気になっていた。……それから、蜂須賀の事もある」

「蜂須賀さんが、どう関わっているの？」

小夜の問いに、鶴丸は首を振る。

「それは分からない。……雲霄の三日月に煽られてな、今までの事を繋げれば真相が分かると。だからまず、19478番の事を調べようと思ったんだ。なあ、気にならないか？ 何故蜂須賀の記憶が消されたのか。何故蒼穹の一期は記憶を消されなかったのか。俺は気になって仕方が無い。それに、19478番が真相を握っているにしろそうでないにしろ、俺は最初からそいつの事を調べようとしていた。今日駄目なら明日、明日駄目なら明後日、明後日が駄目でもいつかは必ず、俺は19478番を探しに行くぞ」

拳を握りしめ、視線と言葉に力を込め、背筋を伸ばし、鶴丸は小夜を見据える。調査部隊員である事は伊達では無く、鶴丸は覇気を纏わせて小夜の殺気を受け止めていた。

小夜は表情には出さなかったが、かなり驚いていた。鶴丸がこうも露骨に力を表に出す事は珍しい。それだけ、彼は真相を渴望しているのだろう。——それこそ、小夜と刺し違えてでも。

小夜は刀身をゆつくりと地に向けて、殺気を鎮めた。

「……分かりました。僕も同行します」

「え？ 主の命令に従わなくていいのかい？」

小夜の言葉に鶴丸は思わず目を丸くする。小夜は目を閉じて納刀しながら告げた。

「主も僕が鶴丸さんを止められるとは思っていなかったでしょう。生半可な気持ちで調べようとしていたのなら引きずって本丸まで連れて帰りましたが、そこまで本気なら何度も貴方は抜け出すでしょうね。——主はこうも言っていました、『鶴丸は頃合いだろうな』と。主は、貴方がその真相とやりに近づく事も予測して僕を送り込んだのかもしれませんね。……それに、僕も19478番の事は気になります。夜は短刀の力が大きくなるので、僕を連れて行くのは得策かと」

小夜の提案に鶴丸はしばらく呆然としてから、頭の中でこれからの事を組み立てていく。一通り考えてから、小夜に手を差し出した。

「ついてきてくれるなら、これ以上に心強い味方もいないだろうな。

小夜坊、頼めるか？」

「はい。くれぐれも、僕から離れない様にして下さいね」

小夜は鶴丸の手を強い力で握り返す。手を離すと二振りは、ぽつぽつと電気が灯る研究所に強い眼差しを向けた。

*

かちやかちやと、ドアから不審な音がしている。それはしばらく続き、音が止んだ直後にゆっくりとドアが開かれた。ドアの外から、鶴丸と小夜が左右を確認して内側に入る。二振りがドアを閉ざすと、眩い月光が遮断された。

「いやー、まさか小夜坊が鍵開けの技能を持っていたとはなあ。駄目だったら扉を破壊して入ろうとしていたんだが」

「……方が一の為と思って、身につけておいて良かったです。後それ、すぐに気付かれますよ」

あつけらかんと言いつつ鶴丸に小夜が呆れた声を出す。二振りは音をなるべく立てずに階段を降りて行った。

二振りには、研究所の屋上から施設内に侵入しようと試みた。正面から入るのはもつての他だし、窓を割つたらすぐに感知されるだろうと思えば、屋上を侵入経路に定めた。作戦としては、小夜が窓の縁を掴んでロツククライミングの要領で登り、屋上に着いたら縄を垂らして鶴丸を引き上げるといふもの。ここで見つかったら一巻の終わりだし、そもそも窓の縁を登るのも無茶があると鶴丸は思っていたのだが——小夜は、難なく成功させた。さくさくと登って行き、屋上から縄を垂らされた時には目玉が飛び出るかと思つた。これが夜戦に強い短刀の力か、と感心しながら鶴丸も縄を掴んだ。

屋上には、思っていた通りドアがあつた。問題は、ここからどうやって入るかだ。すると小夜がこれから見る事は内密に、と言ってピッキング道具を取り出した。ドアに近付きピッキングを進める小夜に、彼が来てくれて良かったと思うと同時に誰が彼にピッキングを

仕込んだのか気になった。が、小夜にも知られたく無い事はあるだろうと鶴丸は口をつぐむ。開きました、と告げられて鶴丸がドアノブを回すと、呆気なくドアを引いて開けられた。月明かりが照らす中、二振りの刀剣男士は晦冥研究所へと侵入したのだった。

「よし、ここからは慎重に進むぞ。小夜坊、索敵は頼んだ」
「はっ」

まずは一番上の階から。小夜が踊り場で立ち止まって周囲を警戒する。小夜は再び髪の毛を逆立てて気配を探り、周囲に人がいない事を確かめてから鶴丸を先導した。

「この階に動いているものの気配はありません。行きましょう」

動いているものがないとしても、いつ誰かが登ってくるか分からない。二振りは足早に開いている部屋へと滑り込む。

その部屋には、様々な実験道具が置かれていた。中には誰もおらず、ドアから見て正面奥と右側に配置された机の上には書類や道具が散乱している。ドア左手には実験道具が入った棚とホワイトボードが並んでいた。

「……分かつちやいたが薬品臭いな。さっさと調べよう」

鶴丸の言葉に小夜は頷き、右側の机に近付いた。鶴丸も奥の机に向かう。書類を手に取り読んでみるも、小難しい数式などが並んでいるその書類達は、鶴丸にとって余りにも難解過ぎた。思わず、がしがしと頭を掻いてしまう。

小夜の様子を見ると、彼は真剣に書類に目を通して見ている。それを見て、改めて書類達に向き合うと、ある紙の中に気になる文を見つけた。『……語られる歴史は流動的な物であり、過去の文献から読み取れる歴史の流れは偏っている事も多い。正しい歴史を突き止めようにも、文献の筆者が偏った考え方をしているのなら整合性が低下する。歴史は、人物によって受け取り方が異なる。それでも歴史学者達は、出来る限り客観性のある歴史の流れを見出そうとした』

当然の事を、と息を吐いた。どんな出来事も立場や考え、状況が違えば解釈も異なる。同じ人間など存在しない以上、まるつきり同じ解釈が出る事も無いだろう。それこそ、本当に客観的な歴史を示せるの

は神しかないだろう——その神にも思考の偏りが無ければ、だが。付喪神たる自分でさえ、少し思考の偏りがあると感じられる。それを考えると、完全に客観的な歴史は無い物として扱うのが一番では無いかと思えた。

『一方で化学者達は、犬の遺骨がある種のエネルギーを発しているのを突き止めた。生物の遺骨からエネルギーを抽出した彼等はそれを新たな電力源として用いる事が出来ないか研究し始めた。しかし、電力としては微弱であったそのエネルギーは実用には至らなかった』

犬や生き物を少し哀れに感じてしまう。死してなお鞭打つ様に実験に使われるのだ、化学者達は崇られてもおかしくは無いだろう。死んだものは安らかに眠りにつかせるべきだ、余程の例外が無い限りは。例えば、お飾りとされて本分を果たせなくなってしまった刀剣達は、屍の様であった昔と比べたら今は生き生きとしているものが多いだろう。そういったものを除けば、基本的には死したものは眠らせるに越した事は無い。

ふと考える。犬や生き物は確かに生物だが、自分達は物だ。それと同列に扱うのはどうなのだろうか。そう思いながら、読み進める。

『歴史学者達はその研究に目を付けた。その化学者達と合同で、遺骨から歴史を抽出出来ないか試したのだ。結論から言えば、それは成功した。数多の犠牲が出たが、新たな視点から歴史を観測出来た事を歴史学者達は喜んだ。一方で化学者達も、自分達の研究に価値があると証明された事は大きな収穫であった』

——遺骨から歴史を抽出？ それはどういう事だろう。それに、数多の犠牲とは？

鶴丸が顔をしかめて紙を睨んでいると、横からさわさわと何か腕に触れる感覚があった。見ると、小夜が鶴丸の持っている紙を覗き込もうとしていた。鶴丸は少し屈んで小夜に紙を見せた。

「小夜坊。そっちは見終わったのか？」

「……はい。一通り見ましたが少し気になる事があって。鶴丸さんはどのくらい読み進めましたか？」

「いや、こっちは全然だ。どうにも難しくてなあ、細かい数式ばかり

で。まともに読めるのがこの紙くらいだ」

「……少し読み辛いので、紙を渡して貰えますか？」

鶴丸は小夜に紙を手渡す。紙に目を通しながら、小夜は然程大きく無い声で説明する。

「僕の方は、『情報生命体』なるものの研究成果でした。『先天性』と『後天性』に別れている様で、その大まかな説明が」

「……情報生命体？ なんじゃそりゃ」

「……多分、ですが。僕達の事だと思いますよ」

小夜は紙から目を離さずにそう告げる。目を軽く見開き、呆然と鶴丸は呟く。

「……えーと、俺達って、付喪神だよな？」

「そうです。ただし、現代の化学者は神をそう呼ぶかと思われます」

「……神を一種の生物にするか。人間はいつからここまで恐れ知らずになったんだか」

「今も昔も変わらない人種は変わりませんよ。確か現世で、ある宗教団体の御神体を食べた少女が現在も逃亡中だとか」

「あー、機密文書に書いてあったなあ、そんな事。……そいつ、恐れ知らずどころじゃないんじゃないのか……」

こつちも食われたらたまったもんじゃないな、と鶴丸は乾いた笑いを浮かべた。口に手を当てた小夜は笑わずに紙を睨み続けている。

「……分からないのが一つあったんですよ。『先天性』は『後天性』を疎外する傾向あり、研究を進めよ』と書かれています。この二つの違いは何なのか」

「先天性、後天性ねえ……」

考えてみるも、説明出来る気がしない。化学は鶴丸の範疇外だ。先からと後からの何かなのは、何となく分かるが。

チャリン、と金属の音が鳴る。顔を上げた小夜が、左手で鍵を持っていた。

「……机の上に置いてありました。二階の部屋の鍵みたいです。次は、この鍵の部屋に行ってみましょう」

「分かった、もう少し調べたら行こう」

鶴丸はそう告げて、小夜から鍵を受け取った。

月明かりの下、人通りの無い滑_レ園正門前に一つの影があった。影は門を見据えて、呟く。

「ここに、母様が」

白く長い髪がたなびく。その影は手にした刀を抜き放ち、月光に刀身を照らした。

「待っていて下さい、母様。アサギは必ず、母様の下へ帰りますからね……」

ニタリと笑った影は門をひらりと飛び越え、滑_レ園の棟内に入っていく。

——母を求め血に塗れた殺戮者を、子供達の園は呆気なく迎え入れてしまった。

11—3 「残虐な侵入者」

蒼穹の一期は、自室前の縁側から月を見上げていた。無事に近侍の仕事も終わり、後は眠るだけとなったが、何となく空を見上げたくなつたのである。

今日はいい天気で、少し欠けた月がよく見える。月見酒と洒落込みたい所だが、生憎酒の類は弟達に没収されている。なので、今飲んでいるのはただの緑茶だ。

月を見ていると、夕方の会話が思い浮かぶ。

——分かり合えるは綺麗事、か。

自隊の鶴丸の言葉だ。彼の迫力に圧倒されて、一期は何も反論出来なかつた。それが悔しくて、もどかしい。

確かにそうかもしれない。氷雨隊の鶴丸と一期が相容れない様に、世の中皆仲良しこよしなんて甘い幻想は一期だつて抱いていない。

——けれど、話さなければ何も始まらないじゃないか。

よつぽど話を通じない相手でなければ、まず話さなければならぬだろうと一期は思っている。必ずどこかに、落とし所がある筈、と。

——武力で全てを解決するのは、流石におかしいだろう。

自隊の鶴丸は、何故あの様な思想を抱いているのだろうか。政府で何かがあつた？ それとも——

背後から僅かに振動音がした。それは、文机の引き出しの中にある端末からした音である筈だ。そういえば、今日は子供達が大人達に内緒でパーティーをしていると清澄の江雪が話していた。その写真でも送ってくれたのだろうか。

一期はそんな微笑ましい想像を浮かべて端末を取り出し——そして、通知を見て固まった。

『たすけてください』

『ごどもたちが、おそわれて』

『だれか』

送信相手は思った通り、江雪からだつた。しかし、その文面が穏やかでは無い。江雪はこんな冗談は言わない。それに、この細切れの文

章は――

一期はすぐに戦装束に身を変えて、審神者の部屋へ向かう。道中で誰かとすれ違った気がしたが、気にも留められなかった。

時は、少し遡る。

喋りながらサクヤを待っていた子供達と江雪であったが、彼はなかなか戻って来ない。その事に痺れを切らした一人の女子が、立ち上がって鈴の鳴る様な声でわざとらしく告げる。

「……ねえ、サクヤ君遅いよね？　しょうがないなあ。私、ちよつと探しに行つて来るよ」

「ノギクさん。探すなら私が……」

「いーの！　江雪さんは座つてて、園の中ぐるつとしたらすぐ戻るから！」

江雪が止める間も無く、女子――ノギクは三つ編みをなびかせて走つて行つてしまった。そのあまりの速さにぽかんとしていると、ツクシが耳打ちする。

「ノギク、サクヤの事になるとすぐこうなるんだよ。ソメゴローがない時は、ぶんぶんしながら追いかけてるの。多分、サクヤの事好きなんじゃないのかなあ」

「……そう言えば、以前からその様な傾向がありましたね。でも、決めつけるのは良く無いのでは？」

「本当に嫌いかもしれないって？　ふふ、そんな事無いんだよ。ノギク、バレンタインの時めちやくちや張り切つてたからね。一つだけの特別チョコ、渡してるの見ちゃったんだ。あ、これは内緒だからね？」

彼女への配慮なのだろう、ツクシはソメゴローに聞こえない様にひそひそと友達の秘密を打ち明ける。恋の話は、いつの世代も女子の興味を惹くらしい。素直じゃない乙女心は、江雪にとつて少し難解だ。

ソメゴローが、身を寄せ合っているツクシと江雪を見て近付いてくる。

「なんだよー、江雪独り占めすんなよツクシ」

「ふふーん。コイバナはソメゴローには早いでしょ。もうちよつとイ

ケメンになって出直してきな」

「なつ、江雪はそんな話よりスペレンジャーの話の方がいいに決まってるだろ！ 後遠回しにブサイクって言っていないかお前!？」

「言っていない。被害モーソー激し過ぎ」

「くそつ俺がバカだからって偉そうに！ お前がこないだのテストで赤点だったの知ってたんだかな俺！」

「大声で言うな！ それにドベのあんたにだけは言われたく無い！」

ぎゃあぎゃあと喧嘩を始めたソメゴローとツクシを、江雪は宥めずかしてみるものの、「ちよつと黙ってて！」の一言で押し留められてしまう。いつもの事だと男子は流し、女子も今回は宴に集中する事に決めた様だ。

喧嘩の声を背景に、ちびりちびりとジュースを飲み続ける江雪。しかしまたしばらく経ち、ふと時計を見て不安が過ぎる。

——ノギクさんも、帰ってこないですね。

同じくそれに気が付いたタイガが、喧嘩中の二人に向かって声を掛ける。

「おい、お前ら大概にしろー。ソメゴロー、サクヤとノギクの様子見に行つてくれよ。ツクシ、ジュースはこれで最後?」

「……まだあるけど」

「じゃあまた一本出すか。ソメゴロー頼むよ。もしかしたらコタローとまだ別れを惜しんでるのかもしれないけど、先生に見つかったら大変だ。その前にこっちに戻つて来させないと」

「……分かった」

ほい、とタイガから懐中電灯を手渡され、ソメゴローは部屋の外へ出る。寄り道すんなよー、とタイガに言われてうるせえ、と叫び返す声が出た。

タイガの狙いは恐らく、二人を分断して頭を冷やして貰うのが目的だろう。しかし、江雪は戻つて来ない二人と、一人で行ってしまったソメゴローが心配で仕方ない。

「……大丈夫ですかね。もしソメゴロー君が戻つて来なかったら私が行きます」

「まあそうだな、次は江雪に頼むよ。……おーいツクシー、機嫌直せー」

膨れるツクシの肩を叩くタイガ。その光景を見ても、江雪の不安は消えなかった。

*

ソメゴローは階段の先を懐中電灯で照らしながら、ぶつぶつとぼやいていた。

「何だよ、ツクシの奴。俺はハゲじゃねーっての、じじいになつてもふさふさ頭のままでっての。……サクヤも早く帰って来いっての」

最後の一言には、寂しさと不安が滲んでいた。それを振り払う為に足音を立てない様注意しながら、ゆっくり階下に降りて行く。

踊り場にある窓から月光が差し込んで、ほのかに明るい。それでも静まり返った夜の家を進むのは、昼間の賑やかさとは打って変わりひよこつと変なものが出てきそうな不気味な雰囲気があつて少し怖い。例えば、幽霊とか、泥棒とかが襲つて来たら——

「いやいや、怖くねーし！ さつきと二人を見つけて——」

そこでソメゴローは、ある異変に気が付き独り言を打ち切る。一階は、大人達が集まる場所もある筈だ。なのに、あまりにも静か過ぎる。

この時間帯は子供達にとって深夜といつてもいいものではあるが、大人にとつては会議や打ち合わせ、大人達だけの宴会などがあつてもおかしくは無い時間なのだ。それはパーティーがある日以外に起きていた事もあるやんちゃ坊主のソメゴローも知っている。

それに、人の気配が全く感じられない。大人達が寝ているだけならいいのだが、原因不明の胸騒ぎがしてならない。ソメゴローは慎重に懐中電灯で廊下を照らして明かりが灯っているスギハラの部屋へと歩を進める。

理由の分からない胸騒ぎが、いよいよ明確になつてきた。近付く度に、鉄臭さが強くなるのだ。鼻をつく臭いに自然と足取りが重くなる。それでも部屋の前に辿り着き、ソメゴローはスギハラの部屋を覗き込み、そして——絶句した。

「な——何だよ、これ……！」

スギハラの部屋の床は、赤黒く染まっていた。根源を辿ると、そこには腹を裂かれ、血を流し机の前に崩れ落ちているスギハラの肉体があった。ソメゴローは彼女に恐る恐る近寄る。

「せ、んせい……？」

スギハラからの返答は無い。表情を見ると、目から光が消えて、顔から血の気が引いている。口からも血が流れており、固まったまま微動だにしない彼女の生存は絶望的だとソメゴローにも分かった。

ソメゴローは懐中電灯を手放し、その場にへたり込んだ。血の海の上に座り込んだ為、足や手に血が付いてしまう。だが、そんな事に気を回している余裕は無かった。

数時間前までアズサとコタローの別れを惜しんでいた人が、昨日まで笑顔で子供達に接していた人が、やんちゃをしている自分を叱っていた人が、今はもう、物言わぬ死体になっちゃった。それに思い至って、ソメゴローは頭を抱える。

——何で？ 何で、先生がこんな状態になったんだ？ だってパーティーの前だって、いつもの様に早く寝なさいって言ってたのに——混乱を極めるソメゴローの思考を遮るかの様に、今度は悲鳴が飛び込んでくる。その特徴的な声質に覚えがあった。

「——ノギク!？」

床に落とした懐中電灯を掴み、立ち上がる。部屋を出ようとして、一瞬だけスギハラの遺体に振り返る。

「先生、ごめん。後でもう一度来るから……!」

そう告げて、声のした方へ走り出す。今自分が出せる全力で駆け抜け、何の部屋か確認しないまま、息を切らしてドアを開ける。

月光に照らされ、一人の男が立っている。それは、白く長い髪に血を吸い込ませ、右手に血を滴らせた刀を、左手には白衣の男の首根っこを掴んでいた。

彼の背後を見ると、数人の白衣を着た人間が折り重なって倒れており、その場を血で染めていた。

そうして最後に、男の視線の先を追えば——腹を裂かれたノギクが、壁に倒れ込んでいた。ノギクの息は小さく、呼吸をする度に口か

ら血が出ていた。

様々な感情の末に呆然と立つソメゴローを見て、白髪の男が呟く。「……まだ邪魔者がいたのですね。母様は見つからないし邪魔者は多いし、あの鳥に騙されたか。まあいい。母様の周りの邪魔者は、全て排除しなくては」

ぽい、と白衣の男を投げ捨て、白髪の男はソメゴローの方を向く。鋒をこちらに向けてニタリ、と酷薄な笑みを浮かべるその様に、ソメゴローは口にしようにとした数多の罵詈雑言を封じられた。

——何だ、こいつ……シリアルキラーって奴かよ……

気迫に押されて、思わず一步下がってしまう。白髪の男も一步ずつこちらに近付いてくる。

男が刀を構え、ソメゴローを斬ろうとした——その時。ゴン、と男の頭に何かがぶつかった。男が刀を下ろし、振り返って投げられた方向を見る。ソメゴローも痛みが襲って来なくなった事を訝しみ、目を開く。

「……まだ生きていたのか」

男の足元に、卓上時計が落ちている。ノギクを見ると、振りかぶった手をそのままにはあ、はあと痛み苦しみながら息を切らしていた。ソメゴローに背を向けて、男はノギクの方へと歩く。ノギクは顔を上げ、ソメゴローに視線だけを向け、口を小さく動かした。

——こうせつさんに、たすけを。

ソメゴローはノギクが命懸けで作った時間を受け取り、踵を返した。

ノギクはそれを見届けて、振り下ろされる鋒を受け止める様に目を閉ざした。

*

「……ソメゴロー、遅いよな?」

「どうしたのかな……もしかして先生に見つかったとか」

「それやばいじゃん。ゴミとか隠した方がいいかなあ」

子供達はそう口にしながら片付け始める。その顔には不安の色が浮かんでいた。江雪も流石に次は自分が見に行こうと提案する事を

決めて、片付けを手伝う。

「一気に三人もいなくなると……何か部屋が広く感じるね」

「うん……八人でも普段は狭く感じるのにな」

「何があつたのかな……三人とも説教されてるのかな」

ボソボソと囁き合いながら部屋を片付ける子供達。江雪が時計を見ると、針はもう既にサクヤが部屋を出てから四十分経過している事を示していた。

江雪がそれを見て口を開く。

「あの、そろそろ私が探しに——」

ドアが勢い良く開き、バタン、という音と共に閉ざされる。ドアを背にはあはあと荒く息をするソメゴローは、その顔を青ざめさせていた。

「ソメゴロー！」

「ソメゴロー、サクヤとノギクは——」

「静かに！——奴に見つかる」

ソメゴローはこちらを心配そうに見つめる江雪へ静かに迫った。

「江雪！ お前戦うのが嫌いなだけで戦えるんだよな!？」

その表情に、いつもの明るさは無い。揶揄う様子も見受けられず、子供達はソメゴローを見たまま固まった。江雪がソメゴローに問う。

「……何が、あつたんですか」

「——スギハラ先生が殺された。呼吸もしてなかったから間違いないと思う。こつちに来る時間を稼いでくれたノギクも、多分……」

「……は？ 先生が、殺された？」

「ノギクが、殺された？ ちよつと、ソメゴロー冗談——」

「ツクシ声落とせ！ 奴は多分、こつちに来る！」

いつにも増して顔を強張らせ殺気立たせるソメゴローに、ツクシは言葉を呑み込む。八人の子供達は、ドアを抑える様に立ち、足に血が付いているソメゴローの様子を見て、口をつぐむ事しか出来なかった。江雪は拳を握り、ソメゴローに尋ねた。

「……犯人は、どんな様子でしたか」

「……白くて長い髪をして、何か『母様』とか言ってた。それと——刀

を持つてた」

それを聞いた途端、江雪は戦装束に身を変え、刀を左手に握った。右手で端末を握りソメゴローに告げる。

「ソメゴロー君、扉から離れて下さい。相手は、私と同類の可能性がありません」

「どういう事だ？」

「――扉を切り裂けるかもしれないという事です。開かない様にするのはありますが、貴方まで切り裂かれるのは頂けません」

「じゃあ、どうすればいいんだ」

端末から三振りに救援を求めようとするが、焦りが出ているのか上手く操作出来ない。焦燥のまま江雪は衝撃が抜け切っていないソメゴローに指示を出す。

「こちらに来る、という可能性が高いのなら、この部屋で相手を迎え撃ちます。その足の血で、相手も真っ直ぐこちらに向かって来るでしょう。確かこの部屋の窓から、外に出られる筈ですね？ 皆さんは、外に出てから他の子供達を連れて避難を」

「避難って、どこに」

「……とりあえず、城下町の真ん中に行こう。そこなら人も多いし、警察を呼んで貰えるかも」

「それで決まりだな。じゃあ江雪、悪いけど任せたよ」

江雪は頷き、端末をしまいドアに注意を向ける。子供達は窓を開けて一人ずつ外へ出て行く。ずり、ずり、とこちらに向かう足音が聞こえる。江雪は抜刀して、戦闘態勢に入る。最後の一人であるソメゴローが窓枠から外に出た途端、ドアが真つ二つに割れた。

男――小狐丸は、縦に裂かれたドアを蹴飛ばし、部屋の中へ侵入しようとして、目の前で刀を構えている江雪を見た。

「……刀剣男士……やはりあの鳥は一度吊るさねばならないな」

舌打ちした小狐丸は、ポニーテールの少女の遺体、その襟元を掴み引きずっていた。彼女の遺体から流れ出た血が、廊下の床に歪な線を引いている。

江雪は視界が赤く染まるのを感じながらも、目の前の返り血に塗れ

た殺戮者の言葉を聞いていた。

「まあいい。私と母様の邪魔をする者は、全て殺す。今までと同じ事だ。邪魔者を殺せば殺すほど、母様との距離が縮まる。ふふ、私は必ず、母様の下へ帰りますからね……」

——無意識のうちに動いていた。小狐丸と江雪の刀身がぶつかり合う。しばらく鎬を削った後、江雪は力を入れて相手を押し込め、力負けしたと察した小狐丸は後方の廊下に下がった。

ふつつつと、江雪の中で更に怒りが込み上げる。その源は、いつの間にか投げ捨てられた少女の体であったり、廊下に点々と横たわる動かない小さな体であったり、ソメゴローが知らせた事が事実であると分かったからだろうか。

「……貴方が、スギハラさんと子供達を」

「ん？ ……ああ、邪魔者共の事か。そんな者共の名など気にもしなかったわ。私の目の前にいたのは弱き邪魔者のみ。すぐに朽ち果てる者の名を知るなど、無意味な事であろう」

今、彼は何と言ったか。スギハラと、子供達の命が、弱くてすぐに朽ち果てる無意味な物だと？

ぶちり、と脳内で何かが切れたのを感じる。柄を強く握り、江雪は吼えた。

「——尊い命を無意味と断じ、いたずらに散らすその有様、見過ごせる物ではありません。貴方は、ここで仕留めます！」

11-4 「残忍な復讐者」

氷雨隊の鶴丸と小夜は、二階に並ぶ研究室の一室内に移動しようとしていた。慎重に辺りを見回して、人に出くわさない様に進んで行く。鍵は2103と刻まれていたので、掲げられているプレートを見て比べて一致した部屋の気配を探る。気配が無いのを確かめて、鶴丸はドアの鍵穴に鍵を差し込んだ。

「……さーて、鬼が出るか蛇が出るか」

鶴丸はそう呟き、ドアを静かに開けた。

中は少し広いが、先程と似た様な部屋だった。実験器具が入った棚が並び、書類と道具が散乱している大きな机が部屋の中央に置かれている。機材が少しあるのが、先程と違う点か。掃除道具が入っているのか、部屋の隅にロッカーも置いてある。

「よし、ここもさくつと調べよう」

「はい」

鶴丸と小夜は、机の上の書類を手に取って読み始める。相変わらず小難しい数式が並んでいて、頭が痛くなってくる内容だった。雲霄の驚丸なら分かるのだろうか、と思いながら読める所を読んでいく。

『情報生命体導入装置を用いて情報生命体を固定化させる事を可能にした人間を神道の役割に準え《審神者》と定義した。審神者は、思考エネルギーを情報生命体と反応させ、情報生命体を人の形に固定化させる事が出来る。導入装置を接続し、思考エネルギーを表出させられる被験者のみが審神者となる。しかし、初期における導入装置の接続には問題があった。当時接続する生命体の調整が不十分だった為、死亡する被験者が相次いだ。その数は30%以上に登る。現在は接続する生命体の数が増え、調整がしやすくなった事により、死亡に至るケースは減少傾向にある』

読める箇所も頭が痛くなる内容だった。小難しい事が書かれているが、要は審神者のからくりの正体を記した物なのだろう。それよりも後半である。いつ頃の話かは分からないが、初期の審神者候補者の死亡者は約三人に一人。被験者の家族などから不満が上がらなかつ

たのだろうか。それを知る術は無いが、鶴丸は内心で手を合わせる。『固定化には二種類の方法がある。媒介を用いる方法と、完全に思考エネルギーのみで固定化する方法だ。どちらにもメリットとデメリットはある。前者は後者よりも固定化が容易だが、媒介が必要になる点と、別紙に記した通り異端視を受けやすい傾向がある。後者は媒介が必要無いが、思考エネルギーに依存する為、審神者の体調が崩れやすい。しかしこのデメリットも、『刀剣乱舞』システムの開発によって解消されつつある』

異端視。それは『先天性は後天性を疎外する傾向にある』と小夜が言っていたそれだろう。媒介を用いるだけで、何故差が生まれるのだろうか。

「……媒介……ん？」

何かが引つかかる。何故か脳裏に浮かぶのは、あの狂気染みた少女だった。

——あんた達は兄さんを化物に貶めた！ 化物共と同一視される兄さんが哀れでならないわ！

鶴丸の中で、急速に仮定が組み上がっていく。そうして、浮かび上がったのは——

「まさか——」

「なっ……!?!」

書類に目を通していた小夜が驚愕の声を上げる。鶴丸は思考を打ち切り、小夜の方へと向かう。

「小夜坊、何かあったか？」

「……鶴丸さん、これ……」

震える手で小夜が紙を渡そうとするが、紙は手を離れて床に落ちてしまった。

鶴丸が紙を拾おうとしたその時、小夜が目を見開いて鶴丸の腕を引く。

「ちよ、どうした!?!」

「——誰か来ます!」

小夜は慌てていたのか荒々しく鶴丸を引きずり、ロッカーの中に鶴

丸を入れ、自身も中に入って戸を閉める。ロッカーの中は狭いが、鶴丸は小夜のスペースを作ろうと身を動かす。

「小夜坊、狭くないか？」

「僕は平気です。……それよりも、音を立てない様に」

小夜は身じろぎを極力行わない様になっている。それに、気配を殺して外を窺っている様だ。それに鶴丸は首を傾げた。

「そこまでする必要あるか？　相手はただの人間だろうか？」

「……そうだと、いいんですけどね」

小夜の歯切れが悪い言葉に問いを重ねようとした途端、部屋のドアが勢いよく開かれる音がした。鶴丸が通気口から外を覗こうとすると、それより先に異変に気付く。外から、異様な臭いがしたのだ。

それは、戦場でしか嗅ぐ事が出来ない筈のもの。鉄臭い、戦場で嗅いだなら戦意が昂ぶるもの——血の臭いだった。

視界が狭い通気口からは、相手の様子がよく見えない。しかし相手の足音から、軽い者——大柄の人物では無い事は分かった。相手は、平坦な声で呟いた。

「誰かいるな」

その声に、目を見張る。鶴丸の本丸でも聞き覚えがあるものだったからだ。小さい体ながらも大太刀を振り回し、『演練の鬼』と呼ばれる強さを誇る、蛍丸の声だ。しかし、その声から奔放さは窺えない。仄暗い、負の感情をどろりとするまで煮詰めた様な、そんな声音だった。蛍丸は部屋の中をゆっくりと歩いて気配の源を探していたが、机の上にある書類を見つけると、一つに纏めて火を付けた。辛うじて後ろ姿からは表情を見る事が出来ない。蛍丸は淡々と火を付けて書類を処分していく。

「……錠があればよかったのに。焼けた臭いで気配が辿れない」

独りごちる蛍丸だったが、部屋の中を再び探り始める。足音と何かを引きずる音で部屋が満ちた。

鶴丸の口はいつの間にか小夜の手で塞がれていた。小夜の様子も見たいが、身じろぎ一つして音を立てたら相手に見つかる。動けない体と裏腹に、心臓の鼓動は収まらない。

ひた、ひた、ずり、ずり。小夜が唾を飲み込む音が聞こえる。蛍丸は少しずつこちらに近付いて来る。

蛍丸はロッカーの目の前に立ち、取っ手に手を掛けた。小夜はいつの間にか手に刀を握っている。僅かに開きかけた戸から光が入り込もうとしていた。

「あーもう、皆人使い荒ーい」

がらりと部屋の入り口が開く音がする。のんきな声の主は女性で、恐らくはこの研究員だろう。蛍丸は取っ手から手を離し、ひた、ひた、ずり、ずり、と声の方に近付く。

一拍おいて、女性が化物を見たかの様に絶叫した。

「い、嫌あああー！ 何で……何でここに19478番がい——」

肉を断つ音がする。女性の悲鳴は、そこで途絶えた。再び鉄臭さが充満する。小夜が髪を逆立てているのが感じ取れた。苦しそうに小さく声を上げる女性に、どうしようも無い不快感が込み上げる。

何度か斬り裂く音と女性の呻き声を上げさせた後、蛍丸は刀を一振りして血を払った。

「ここは後ででいいや。先に残ってる研究員共を殺そう」

その一言だけを置いていき、蛍丸の足音は遠ざかる。気配が消えたのを確かめてから小夜は戸を開けた。転がり出る様に、小夜と鶴丸がロッカーの外に出る。

抑えていた呼吸を再開すると、荒い息が出て来る。刀を出して握ると、少しでも安心感を得られた。

「……小夜坊」

「……言いたい事はあると思いますが、まずは主に報告しましょう。それから調査した方がいいですかね」

それに賛同し、鶴丸は審神者専用の端末を取り出して文章を打ち込む。ちらりと入口を見ると、ずたずたにされた女性の遺体が転がっていた。その斬られ方はお世辞にも綺麗とは言えない。まるで、いたぶる事を目的としている様だった。

「……一振りだけで行動しているのか、それとも仲間がいるのか。その点でも慎重になった方がいいよな」

「はい。僕達の装備は最低限ですから、出来る限り会敵は避けたいです
すね」

文章を完成させて審神者に送信すると、鶴丸は端末をしまい入口に移動した小夜に近付く。小夜は刀を握って外の様子を窺っていた。しかし女性を見て、ぽつりと零す。

「……僕達は見捨ててしまったんですよ、この人を。彼を……復讐に囚われている蛍丸さんを止めずに、僕達は生き残った」

自分達なら、助けられたかもしれない。けれど、彼の正体を知った事と自分達の保身で助けるべき対象を助けに入らない方を選んだ。先程の不快感は、その事に対する嫌悪感なのかもしれない。

蛍丸をどうにかしないといけない。けれど、彼の正体は先程の女性の悲鳴で分かってしまった。そして復讐の刀である小夜が、蛍丸の動機を機敏に感じ取ったのを鶴丸は察した。

「今の俺達が割って入ったとしても、小夜坊の言う通り装備が心許ない以上返り討ちにされるだけだと思うぜ。ここはお上にとっても大事な施設だ、すぐに政府の奴らが駆け付けけるだろう。無謀に突っ込むよりも、戦力が充分な状態で挑んだ方がいいと俺は考えるが……なあ小夜坊、あの蛍丸についてどう思う？」

鶴丸の問いに小夜は目を瞬かせ、口に手を当てながら述べ始める。

「……復讐する事が、悪い事だとは思いません。でもあの蛍丸さんは、僕の考えが正しいならもう仇討ちを済ませている筈。なのに仇を広げ続けて、復讐する事自体に囚われている。……彼を見て湧き上がるこの気持ちは、同族嫌悪なのでしょう。それにしても、何故だか物悲しくて」

「……嫌悪では無いと思うがなあ」

鶴丸も上手く説明出来ずに頭をがしがしと掻く。もどかしさを感じたのは、鶴丸も同様だ。

あの蛍丸は小夜に共鳴されるほど、復讐に執着している。境遇を考えればそうなるのも致し方ないのは理解出来るが、彼は普通ではないのだ。存在の狭間で揺れる彼を、止めたいと願うのは身勝手だろうか。鶴丸は心のままならなさに嘆息しつつ、己の刀を持つ手に力を入

れる。

小夜がぼつ、と勢いよく顔を上げる。鶴丸もまた異変に気付き、周囲に注意を向ける。

下の階から複数の悲鳴が上がったのだ。微かだが、「助けて」「死にたく無い」といった言葉も聞こえてくる。鶴丸と小夜は目を見て頷き、女性の遺体を避け部屋を出て一階に向かった。

警報が鳴り始める中踊り場で一度足を止めて様子を窺うと、目の前には酷い光景が広がっていた。

階段前を通る研究員は誰も彼もが恐慌状態にあつた。ある者は顔を強張らせ、ある者は涙を流している。そんな研究員の間では怒号が飛び交い、仲間を押しつける様に一定の方向へ走っている。髪や服が乱れていても、誰かの足を踏み付けていても、気にする素振りも見せないまま、誰もかもがこけつまろびつ何かから逃げようとしていた。

——あの蛍丸は、一体何を。

先程の女性の言葉から彼がどんな評価を受けているかは感じ取れず、この惨憺たる現状がその証明だろう。分かり切っている疑問は、虚しく鶴丸の脳内に反響する。

人の激流が過ぎ去った後、血に塗れた男性が這い蹲りながら現れた。よく見ると脚を斬られているらしく、立って歩く事が困難である様だった。顔から血の気が引きながら、それでも背後から来るであろう何かから少しでも遠くへ行こうと体を引きずっている。

ひた、ひた、ずり、ずり。魂を刈り取らんとする復讐者は、独特の音を立てて現れた。

「安全な場所から引きずり下ろせば、こんなに滑稽な姿を見せてくれる。いつ見ても爽快だね」

ひい、と腹這い研究員が喉を引きつらせる。現れた蛍丸は左手に掴んでいた男の体をぽい、と放り投げて刀を構える、ひた、ひた、と歩み寄り、腹這い研究員の斬られている脚を思いつ切り踏み付け、体重をかける。痛みに絶叫する腹這い研究員の声に、蛍丸は表情一つ変えない。

「……こんなんじゃない。あの子の痛みには程遠い。さあて、ど

うしてやろうかな。逃げた奴らもこいつと同じ様にして人形遊びで
でしょうか。きつと楽しいよね。だって、俺の考えた劇の演者になれ
るんだもの。『操り糸』もあのスパイが更に入手してくれたし、多少は
使っても文句は言われないでしょ」

そこまで言つて、ようやく蛍丸はその表情を穏やかなのに醜悪な、
歪んだ笑みへと変えた。腹這い研究員は必死に蛍丸から逃れようと
腕を動かすが、動く度蛍丸が踏み付ける力を強めるため動けない。蛍
丸は冷え切った目で腹這い男を見下ろし、口角だけ持ち上げる。

「もういいや。こいつはさっさと人形にしちやおう」

そう言つて刀を振り下ろそうとした蛍丸を見て、鶴丸と小夜は抜刀
し最終確認をする。

「小夜坊、行けるか？」

「はい、鶴丸さん。……君には悪いけど、僕達にも守るべきものがある
からね」

そう言つて小夜は階段を駆け下り、蛍丸の懐に滑り込もうと動い
た。しかし入り込む直前で蛍丸が小夜の存在に気付き、刀身で小夜の
刃を受け止める。蛍丸の足の力が緩んだその隙に鶴丸は腹這い研究
員の下へ行つて抱え、蛍丸との距離を引き離す。

「……お前達は」

蛍丸が二振りを睨みつけて刀を構える。上着を破り腹這い研究員
の足に巻きつけながら鶴丸は答えた。

「通りすがりの刀剣勇士だ。こんな所に蛍丸がいるのは驚きだな」

「……ふうん。こんな夜に、研究所に忍び込むのが通りすがりねえ」

「まあそんな事もあるさ。……さ、軽い手当ては終わったぞ。大丈夫
かい？」

鶴丸は壁に腹這い研究員を座らせ、しゃがみ込んで語りかける。彼
は恐る恐る顔を上げて、恐怖が抜け切らない顔を鶴丸に向けた。

「あ、あいつが、いきなり斬りつけてきて……！ お前達は、あいつと
は無関係なんだな？」

「ああ。君の他に怪我人は？」

「さ、三人、殺された！ 俺の他に何人も怪我人が出ている、俺も後少

しで、あいつに……殺され……」

そこまで話してから、腹這い研究員は齒をがちがちと震わせ、頭を抱え黙り込んでしまった。もう話を聞くのは難しそうだ。声が届いているかは不確かでも、鶴丸は腹這い研究員に言い聞かせる。

「大丈夫だ、俺達の主を通してこの事は政府に通報してある。これ以上、被害を出さない様にするからな。君の事も、死なせない為に努めるさ」

立ち上がり、蛍丸の方へ向きを転じる。蛍丸は臨戦態勢でいながらも、何やら小夜と話している。鶴丸は小夜の下へ歩き、肩を軽く叩いた。

「小夜坊。何話していたんだ？」

「……政府側につくものとして、説得を試みたのですが……やっぱり駄目です。元々僕が説得出来るとは思っていなかったのですが」

「そうだよ。お前は復讐の刀。そんな奴に『これ以上は止めた方がいい』とか言われても、説得力無いよね」

「蛍丸が呆れた声で言い放つ。小夜はぐつと詰まりながらも、言葉を掻き集めて蛍丸に呼び掛ける。」

「……貴方の気持ちはよく分かる。でも、貴方がやっているのはただの八つ当たりだ。直接彼等に何かされた訳でも無いなら、いたずらに復讐の種を撒くのは貴方の為にならない」

「お前に俺の何が分かる？ 研究所は、それを配下に置く政府は敵だ。『歴史を守る為には仕方の無い事』なんてぬかして人間を消費する下種にかける情けは無い」

「……貴方を僕の仇にしたく無いんだ。この国を守る為に、政府が必死になっている事も僕達は知っている。貴方がしている事は、この国を崩す事に繋がりがかねない」

「復讐の刀が生温い事を。こんな国、守る価値なんてありはしない。むしろ一度崩した方がいいんだ。——大切な友達を理不尽に殺して、それを失敗の一言で片付ける国は。そうそう」

急に蛍丸が冷やかな笑みを浮かべる。その視線の先は、小夜では無い。視線は遠くを捉えており、黙って二振りの駆け引きを見ていた

鶴丸は、その視線の先を追おうとして——轟音と爆風の感覚が、先に届いた。

振り向けば、エントランスから次々と爆発が起きていた。粉塵の白と火の赤が混ざり合う中、研究員達が逃げ出そうとすればするほどどこからか轟音が響く。

瓦礫の落ちる音や燃える音、絶叫や嗚咽が鳴り止まない。焼け焦げる臭いに目眩がする。救助を求める声が心を軋ませる。呆然とする鶴丸と小夜に、蛍丸はカラカラと笑った。

「奴らが逃げ出す時間稼ぎをしたかったみたいだけど、エントランスには爆弾が大量に仕掛けてあるよ。裏口にも仕掛けてあるし、奴らが逃げる事は屋上から飛び降りるなんて事をしない限り不可能。残念だったね。人形が減ったのは惜しいけど、あいつがいるからいいや」
腹這い研究員に歪んだ笑みを向ける蛍丸。それを遮る様に立ち、鶴丸は蛍丸に問う。——辿り着いた推論を、確かめる為に。

「ここまでする事だったのか、蛍丸。いや——19478番」

顔を憎悪の色に染めた蛍丸が地を蹴り、鶴丸に刃を向ける。己の刃ではじき返し、鶴丸は重ねて問う。

「君は、19477番と一番仲がいい被験者だった。彼女が実験で死亡してから、君のいた第八暗影研究所を壊滅させて、復讐の道へと歩み出した。……19477番が人間であるなら、まず君の正体は明らかだよな。19478番、君は——」

「——その不快な呼び方を止めろ。俺にはケイ、あの子にはスズって名前がある」

更に殺意を剥き出しにして、蛍丸はぶん、と刀を振るい、それから鶴丸に鋒を向けた。それに反応して、小夜も刀を握りしめる。

「……鶴丸さん、主から連絡は？」

「……ああ、来たぜ。『指名手配中の危険な個体だ、なるべく相手をするな。政府直属の部隊がそちらに向かっている、お前達は逃げろ』だそうだ」

「……主が逃げろと言う相手……でも、それは出来そうにありませんね……」

二振りは刀を構えて、すぐ動ける様に気を張り詰める。蛍丸は嘲る様に顔を歪めて、告げた。

「決めた。お前達はここで殺す。あの鳥に似ているお前を殺せば、少しは気分も晴れるだろうしね」

蛍丸が大きく刀を振りかぶる。——復讐に彩られた戦闘の火蓋が、切って落とされた。

11—5 「援軍」

蒼穹の一期は、執務室で審神者に外出許可を申請していた。しかし、正座をして一期に向かう審神者の反応はよろしく無い。

「……だからなあ。お前さんがそこで折れでもしたら、今度こそお前さんの弟達に合わせる顔が無いっての。政府に通報もしたし、後はお上に任せようや」

「しかし江雪殿が折れたら、私はこの先ずっと後悔する事になります！ 友達からの救助要請を跳ね除けるなんて、私には出来ません！」
「俺もその気持ちは分かるが。……お前さんが友達を思う様に、この奴らもお前さんを大事に思っている。ましてやお前さんにはお前さんを慕う弟達が沢山いるだろう。そいつらの気持ちも汲んでやれって話だ」

「ですが……！」

「それに、夜は太刀の力が大きく落ちる。厳しい事を言わせてもらうが、お前さんが行ってもあまり力にはなれんと思うぞ。……俺はもう、誰一振りとして折りたく無いんだ。分かってくれねえか、一期一振」

悲痛な面持ちで拳を握る審神者に、一期も言葉に詰まる。

分かっている。一期だってこの本丸の兄弟や仲間達を大切に思っているし、今から飛び出して何かあったら、本丸の皆は心配するだろう。それを蔑ろにしたい訳では無い。だが、友達の危機に何もせずに行られない程一期は安定した心を持ち合わせていない。江雪の事を侮っている訳では無い。けれどももし彼に何かあったら、永遠に悔やみ続ける事になるだろう。

歯噛みする。せめて、他の一期一振の様にもう少し冷静になれたなら――

「ならば、短刀や脇差が同行したらいいのですね？」

執務室の外から、声が響く。それは一期にとって愛おしい、兄弟の声だった。目の前の審神者が驚きで目を見開く。一期が振り向けば、そこには明るい茶髪を切り揃えた短刀と、銀髪の脇差が立っていた。

「……聞いていたのか、前田。それに、骨喰も」

「はい。すみません、無作法でしたね」

「悪かった」

前田と骨喰は謝罪をしてから、呆けている一期の斜め後ろに座り、審神者に提案する。

「僕達は練度もそれなりにあります。確かに僕達は政府の刀達に比べれば弱いかもしれませんが、でも、数々の経験を積んで、戦況も見極められると思っています」

「いち兄も強くなつた。だが、俺達も強くなっているんだ。それに、いち兄がここまで同じ刀派では無い刀に肩入れするのも珍しい。俺達は、それを尊重したいんだ」

「危険だと判断したら、すぐに撤退します。ですから主君、僕達に出陣許可を頂けませんか」

二振りが頭を下げて、審神者に請う。一期も改めて出陣の許可を求めた。

「お願い致します。私達に、滑園への出陣許可を。二振りには短刀と脇差、強い戦力になる事は私がよく知っています。——城下町の平穏を取り戻す為にも、どうか」

低頭する三振りに、審神者は深く息を吐き、三振りに背を向けて文机を漁る。そのまま頭を上げずにいた一期達に、何かが降って来た。

「頭を上げろ、三振り共。……お前達の思いはよく分かった」

言われた通りにした一期は、目の前に落ちていた物を見て仰天する。それは、白い御守り。破損箇所を完全に直して、万全の態勢にする事が出来る代物。背後の二振りも、驚愕の声を漏らした。

「主君、これは……!」

「……とっておき、だったんじゃないのか」

手に白い御守りを握り、審神者を見つめる三振り。審神者は観念した様に口を開いた。

「……言っただろう、友達が大事な気持ちは分かるって。俺だって、見捨てる事を積極的に勧めようとする程冷酷じゃねえ。ただ、一期が単独で滑園に行つて、折れてしまうのが怖かっただけだ。弟達を遺し

て折れてしまって、弟達に責められるのも怖かったのもあるな、情け無い話だが。だが前田と骨喰、お前さん達がここにいるって事は、粟田口派は一期の想いを肯定したのが大半だったんだな？」

「……はい、確かに粟田口の面々で話し合いました」

「なら、俺からは何も言えねえよ。お前さん達は刀だが、今は心がある。お前さん達の考えを無視して、俺がお前さん達の意味を握り潰す何て事は出来ねえ」

呆然と審神者と前田の言葉を聞いていた。大切な御守りが、大きな力を感じさせる。まるで、審神者からこの心を肯定されたかの様だ。

一瞬顔を緩めていた審神者は表情を引き締めて、三振りに命じた。「その御守りは、デッドラインだと思え。刀装が一つでも壊れたら撤退、一つでも御守りが壊れた時点で何が何でもその場から離れる。あくまでお前さん達は政府の刀が来るまでの時間稼ぎだ。——一期一振。お前の友達の力になって来い。前田と骨喰はサポートに回れ。全員、必ず生きて帰還するように」

一期の言葉と共に、三振りは深く頭を下げた。

「——かしこまりました。必ず、主の下へ帰ります」

*

夜の城下町は酒気と喧騒で満ちていた。顔を真っ赤にして千鳥足で歩く者、そこまで行かなくても気分が良さそうに足取り軽く歩く者。その合間を縫って三振りは駆けていた。人々にぶつからないのは流石刀剣勇士といった所か。

「……しかし、主と話している時間はあまり長く無かったと思うのだけれどね。いつの間に話し合いをしたんだい？」

滑_レ園に向かいながら、一期が弟達に問い掛ける。その疑問に答えたのは前田だった。

「通りすがった兄弟が話を持って来てくれたんです。それでいち兄の友達が危ない事を知りました」

「兄弟？ それは一体誰が？」

「それは……あれ？ 誰が話してくれたんでしょう……？ 確かに、粟田口の刀だったと思うのですが……」

首をひねる前田に、一期も少し訝しむ。前田がこんな事で誤魔化しをするとは思えない。本当に思い出せないのだろうか。それなら、一体どうして栗田口の内の誰が伝達したのか分からないのか。そう言えば、審神者の部屋へ向かう途中で誰かとすれ違った気がした。もしかしたら、彼が教えてくれたのかもしれない。でも、それが思い出せない事に繋がるのだろうか。

物思いにふけていた一期は、骨喰の言葉で現実に戻る。

「見えて来た、あそこが滑_レ園だな？」

「ああ、あの場所です——っ！」

顔から血の気が引く。滑_レ園からは、赤々と火の手が上がっていた。本能的な恐怖を何とか振り払い、一期は正門へと走る。

正門の前に、火の赤さに照らされた子供達が集まっていた。それは滑_レ園にいる子供達の総数と一致しない。一期は子供達へと叫んで、駆け寄った。

「皆、無事か!？」

「二期さん！」

「二期！ 中で、江雪が……！」

「まだサクヤが見つかってないの！ どうしよう、生きてる子だけでも町に逃げようと思ったのに……！」

「ツバキが、ツバキが……うっ、うわあああん」

「皆さん、落ち着いて下さい！ 一人ずつ、ゆっくりと状況を教えて貰えますか?！」

前田が凜とした声を上げ、子供達の視線を集中させる。混乱している子供達を代表して、ボブカットの少女が子供達の前に出た。

「……貴方は、一期さんの弟?！」

「はい、前田藤四郎と申します。こちらは骨喰藤四郎です。兄の一期一振が江雪さんから異変を知らせる連絡を頂き、補佐として僕達が共に駆け付けた次第です。貴方の名前をお聞きしてもよろしいでしょうか?！」

「……私はツクシ。よろしくね、前田……さん、骨喰さん」

ツクシは前田と骨喰にぺこりと一礼する。骨喰は軽く頷き、前田も

一礼する。骨喰がツクシに向かつて、落ち着かせる為か比較的穏やかに話しかけた。

「お前がこの中で一番冷静そうだ。教えてくれ、ここで何があった？」
ツクシは背後で泣いていたり顔を青ざめさせていたりする子供達を見ながら、悲痛に顔を歪める。

「……私達、ある部屋に集まってパーティーをしていたの。そしたら、サクヤが今日卒園する子の忘れ物を届けに行つて……でも、しばらくしても帰つて来なくて、その後ノギクがサクヤを探しに行つたの。そしたらノギクも戻つて来なくて……今度はソメゴロ————そこでサクヤ探すつて暴れてる奴ね、そいつが探しに行つたら……スギハラ先生が、死んでいたらしくて」

スギハラが死んだ。それは、一期の中で決して小さくは無い衝撃をもたらした。刀は母親を持たない。けれど、スギハラ姿勢は確かに子供達の母親なのだと思わせるのに充分なものだった。余所者の自分でもそんな風に思うのだ、子供達にとってのショックは如何程か。ツクシは続ける。

「先生が死んでいるのを確認した後、ソメゴロは悲鳴がした部屋に向かったの。そしたら、ノギクが、……白いロングヘアの刀を持っている男に斬られている真つ最中だったつて。ノギクはソメゴロを逃がす時間を与えてくれたらしいけど、生きてるかは、もう……」
そう言つて、ツクシは俯いて嗚咽を漏らし始める。必死に涙を堪えながら証言を続けようとする彼女の背中を、前田が支えていた。

滑_レ園の子供までもが犠牲になった事に悲憤せずにはいられない。一期がここに来る度に笑顔で迎えてくれた少女にはもう会えない。それが酷く辛く、白髪の男——間違い無く刀剣男士だろう——へどうして平穏な子供達の園を狙つた、と詰問したくて仕方が無かつた。
「……ソメゴロは、私達の所に戻つて来て、江雪さんに戦えるか聞いた。江雪さんは、私達を逃がす為に、今も戦っているの。私達は逃げながら、他の子供達を窓の外から探したけど……どこの部屋のカーテンも血塗れだった。多分、生き残っているのは、ここにいる子供達だけなんじゃ——」

「——サクヤは生きてる！ あいつは簡単に死ぬ奴なんかじゃないんだ！」

ツクシの声を遮り、癖っ毛頭の少年が叫ぶ。彼は少し長い髪の少年に羽交い締めされており、それでもそこから逃げだそうと暴れていた。

「落ち着け、ソメゴロー！ 今中に入っても江雪の邪魔になるだけだ！」

「タイガ離せ！ あいつは絶対に生きてる筈なんだ、こんな所で死ぬ奴じゃないんだ！」

「だからってあの火の中に入るのか!? 一期達も来たし、後は任せよう！ お前が死んだら、誰がサクヤを迎えるんだよ！」

「畜生、畜生……！」

ソメゴローはぼろぼろと涙を流しながら、園内を見つめる。途端、運動場に面しているガラス戸が割れて、中から二つの影が飛び出した。

影の一つである江雪は戦装束が所々破れており、荒く息を吐きながらもう一つの影——小狐丸を睨みつけていた。小狐丸も口からぺつ、と血を吐いており、距離を置き身体中の傷に見合わない爛々とした視線で様子を窺っている。

「……スギハラさんの血を吸い、子供達の血を吸い……どこまで血を求め続けるのですか……！」

「ふん、母様と私の邪魔をする奴等が悪い。お主もここで引けば、命を見逃してやってもいいぞ」

「……そうして私がいなくなつた後、狙うのは子供達でしょう！ それを分かっている、引く事など出来ません！」

はん、と鼻で笑って、小狐丸が刀を前に突き出す。それを紙一重で避けて、江雪も袈裟懸けに刀を振るう。攻勢と守勢が目まぐるしく変わる。火の音と金属の音が、やけに鮮烈に聞こえた。

「僕達も行きましょう、いち兄。火が激しいですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。骨喰は大丈夫かい？」

「……大丈夫だ。だが、ソメゴローが暴れているのが心配だ。俺は、子

供達の側から遠戦を仕掛けるが、それでも大丈夫か？」

「確かに子供達は気になるね。骨喰、頼んでいいかな？」

「任せてくれ。——刀装、展開」

骨喰が刀装玉から小さな兵士を生み出す。兵士達の手には、弓が握られている。兵数は計十六。子供達は目を丸くして、手品じみた光景を見ていた。

「標的は小狐丸だ。——行け」

その一言で兵士は弓を構え、次々と矢を放っていく。小狐丸はこれを察し、自らの兵で防衛する。

怯んだ一瞬を、前田は見逃さなかった。すぐさま兵の隙間を縫い、小狐丸の腕を狙う。小狐丸は大きく下がりがり態勢を立て直そうとするが、前田の猛攻は止まらない。足を、脇を、首を。素早い動きで小狐丸を翻弄し、少しずつ態勢を崩していく。

しかし、小狐丸は猛攻を受けているのに目を光らせた。それに気付いた前田は小狐丸の胴体から離れようとしたが、大きく刀を振るわれ、展開していた兵を大きく削られる。

「……全く、無粋な輩の多い事よ」

小狐丸は苛立ちを隠さずに足をトントンと鳴らしている。前田の額に一筋、汗が流れた。

——太刀には不利な夜戦の筈なのに、相手の戦意が全く落ちていない。

むしろ、目がますます輝いている様な気もした。相手は殲滅するまで戦う気だ。何がそこまで彼を駆り立てるのかは分からない。けれど、これは早急に抑えなければ危険だ。

一期が江雪の下へ走り、ふらついている江雪を支える。

「江雪殿！ ご無事ですか!？」

「……まだ大丈夫です。来てくれてありがとうございます、一期」

「気にしないで下さい、友達なんですから。前田、私の加勢はいるか？」

「……いち兄、来ては駄目です。短刀の僕が思いつ切り重歩兵を削られたんです、太刀では重傷にされるかと」

焦燥感に満ちながらも冷静に判断を下した前田の言葉に、一期は声を出せなくなつた。前田も乱よりは少し遅いが、蒼穹隊の創設期からいる古参組だ。練度も相応に高い。その彼の刀装を小狐丸に大きく削られ、この判断を下したのだ。小狐丸の脅威は推して知るべしだろう。

「……私では、力になれそうに無いですね」

「いいえ。貴方が来てくれたのは勿論、戦力として前田と骨喰を連れて来て頂けて嬉しいです」

江雪の顔を見ると、確かに少し安堵の表情が浮かんでいる。友の心に僅かな余裕を生み出せたのなら、来た甲斐があるというものだ。しかし江雪はすぐにその顔を曇らせる。

「……あの小狐丸は正気の沙汰ではありません。ほぼ重傷で恐らくは立っているのもやつとの筈なのに、『母様、母様』と呟きながら立ち上がって来るんです。誰を求めているのかは分かりませんが、子供達を狙う以上私も引けなかつた」

不死身なのかと疑いたくなりますね、と江雪は付け加えた。少し離れた所へ視線を向ければ、未だ前田と小狐丸が睨み合っている。戦況は膠着状態だ。

二期、子供達の避難誘導を。初対面の骨喰一振りでは子供達も不安がるでしょうからね。せめて小狐丸から遠い場所へ移動出来れば……」

「分かりました、すぐに——」

「邪魔者を逃がす私だと思つたか？」

一期が子供達の所へ向かおうとするのを遮り、小狐丸が兵を展開させる。兵数は僅か六であったが、それを見て江雪と一期は愕然とし、前田は問いただす様に叫んだ。

「何故——何故、太刀である貴方が銃兵を指揮出来るのですか!？」

それには答えず、小狐丸は兵達の銃口のある方向へと向ける。向けた先は、正門から離れようとしている子供達。一期は気が転倒しながらも正門へ叫んだ。

「骨喰！ 子供達を守れ！」

叫びは届き、骨喰は銃口が己の方へ向けられているのを確認した。が、兵を展開する僅かな時間で銃弾が飛んでくる。展開途中の兵の間をすり抜けた弾丸は、骨喰の近くにいたツクシに当たろうとしていた。

ツクシは恐怖で体を震わせる事しか出来なかった。彼女の死への恐怖を嘲笑う様に、目の前に弾丸が迫ってくる。目を閉じて固まるしか無かったツクシに、横からドン、と押される衝撃を受けた。その勢いのまま、ツクシは尻餅をつく。

目を開くと、視界いっぱいタイガの姿が映った。

「ツク……シ……大丈夫か？」

頷こうとしたツクシは、何かに耐える様に声を震わせ、顔をしかめるタイガの様子を訝しむ。

そして視線を顔から下に移すと——タイガの腕から、血が滴っていた。

一気に平静が失われたツクシは悲鳴を上げてタイガに取りすがる。

「タイガ！ 何で、何で、私を庇って……嫌、嫌だよ、タイガが死んじやうなんて……！」

「……体に傷でも付いたら大変だろ。撃たれたのは腕だけだから心配すんな、姉ちゃん」

かつての呼び方でツクシにおどけて見せるタイガは、まだ痛みが引いていない様だ。ツクシは慌ててスカートのポケットからハンカチを取り出しタイガの腕に巻こうとする。

タイガが撃たれた事によって、子供達の間にも恐慌が広がった。あらゆる方向へ駆けていこうとする者や、その場にうずくまって震える者、タイガの傷を過剰に心配する者などに分かれた。

骨喰は慣れないながらもそんな子供達を何とかまとめようとし、そして再び背後から銃弾が飛んでくる気配を察して兵を完全に展開させる。兵数をかなり削られながらも、今度は子供達の防衛に成功した。

「お前達、一度集まれ！ 兵達の内側から出るな！」

恐慌状態の子供達を集める骨喰を一瞥し、小狐丸はまた鼻を鳴ら

す。

「おお嫌だ、あの様な不快な声を上げて。何故母様は私ではなく童共わっぱを構っていたのであろうな」

「貴方がそうさせたんでしよう！ 何故何の罪も無い子供達を傷付けるのですか!？」

距離が無かったなら胸ぐらを掴んでいたであろう剣幕で一期は小狐丸に問いただす。それにも嘲笑し、小狐丸は刀を下ろして言い放つ。

「母様と私を邪魔する害虫は、一人残らず殺す。私と母様は共にある運命なのだから、それを歪めようとする者を排除するのは自然の摂理。それが何故分からぬ？ 運命を歪める者を殺めるのはお主達も同じでは無いのか？」

殺人鬼の言い分と己がこうして存在している理由を強引に繋げ合わされて、一期と江雪は一瞬何を告げられたのか理解出来なかった。理解したく無かった、というのもあったのかもしれない。動けたのは、小狐丸と対峙していた前田だけだった。前田は小狐丸の懐に入り込もうと地を蹴り、小狐丸は刀でその刃を受け止める。

「我々は国を正しい形に保つ為にこうして存在しているのです！ 貴方の身勝手な因縁と我々の使命を同一視しないで頂きたい！」

「国など私にはどうでもいいが、その使命とやらが身勝手では無いという確証はどこにある？ お主達も私と同じ、各々の都合で動いているに過ぎん。そこに上下などありません。自分が『崇高な理念』で動いていると勘違いしているのではないか？」

「……童殺わらべしが、詭弁を並べて……！」

「ならば私はこう返そう。『刀ごどきが、詭弁を並べて』、とな」

睨み合う前田と小狐丸。一期は小狐丸の言葉に違和感を覚えて彼を見た。まるで、己が刀では無いかの様な言い方だ。外見はどう見ても演練で見かける小狐丸そのもので、普通の小狐丸も母などとは言わないだろう。しかしよくよく目の前の小狐丸を見ると、どうしようもない感覚を覚えてしまう。まるで、己の存在を否定されてしまいうようなその違和感。

一期は知っている。それは、春光隊の彼と初めて会った時に感じた

「……ちぎ、一期！ 大丈夫ですか？」

思考の海から一気に引き上げられる。眼前に江雪の心配そうな顔があつた。一期は一旦思考を止めて、江雪に微笑んで見せる。

「少し思案に暮れてしまいました。敵前なのに申し訳ない」

「いえ。……骨喰の兵数が残り僅かです、前田を引き上げさせて子供達の所へ行きましょう。私も兵を失いまして、多分これ以上攻撃を受ければ中傷になります。その前に、子供達を安全な場所へ連れて行きたいんです。撃たれたタイガ君を早く病院で手当して頂きたいですすし」

前田と斬り合いをしている小狐丸に聞こえない様にか、江雪の話す声は小さい。一期は考えを巡らせた後、江雪の提案に懸念を示した。

「……多分、あの小狐丸殿は追いかけて来るのでは？」

「滑~~り~~園の子供達は足が速いです。恐らく、前田の後を追えるくらいに。迅速に城下町中心部へと向かえば流石の小狐丸も容易に刀を振るえないでしょう。彼はここで事を済ませたいみたいですからね」

「前田を追える？ それは、また……」

「かなりの鍛錬を重ねているみたいですからね、子供達は。……刀装が完全に無事なのは貴方だけです。子供達を守って頂けますか」

刀装が無事だという事は、ある程度のダメージなら刀剣男士に通らないという事だ。一期の刀装は小狐丸と戦闘していない為万全だ。子供達の後ろにつき兵で小狐丸の攻撃を防げば、子供達を守り切れるだろう。

一期は江雪の提案を了承し、前田に声をかけようとした。

パキン、と音がしたのは正にそのタイミングだった。前田の刀装が壊れたのだ。

——刀装が一つでも壊れたら撤退。

審神者の命令を理解していた前田は一期に目配せをして、少しずつ後退し始める。ここぞとばかりに前田へ攻撃を仕掛けて来る小狐丸を受け流しているのを横目に、一期と江雪は子供達の下へと駆ける。

「――逃がすか」

そう言つて小狐丸が、兵に一期達へと銃口を向ける様命ずる。走る一期はそれに気付き兵を展開しようとするが、前田が兵へと斬りかかり、注意を彼に向けてしまう。

「前田!!」

一期が悲痛な声を上げる。銃兵の弾丸を一身に受けた前田は、身体中に深い傷を作った。覚束ない足で身体を何とか立ち上がらせている前田は、一期に叫ぶ。

「いち兄は刀装の保全を！ これ以上子供達に傷を付けてはなりません！」

満身創痍でも、前田は小狐丸から視線を外さない。一期は弟の覚悟に応える為に子供達に駆け寄り、兵を一部展開させる。江雪は気疲れが一気に来たのかその場に座り込んでしまい、ツクシに支えられている。

骨喰が一期に近寄つて端的に告げた。

「タイガの状態が危険だ。早く病院に行つた方がいい」

「分かっている、前田が撤退するのを手伝つてからだ。骨喰、これを」
骨喰に手渡されたのは、盾兵の刀装玉だ。骨喰は丸い目を更に見開き、一期に問い掛けようとするが――既に一期はその場になかった。骨喰はこれで子供達を守れと言われたのだと解釈し、手の上に刀装玉を乗せる。

「……刀装、展開。タイガ、大丈夫か?」

「……まだ苦しそうだ。なあ、大丈夫なのか?」

タイガの側にいたソメゴローが心配そうに声を震わせる。タイガの事や前田の事、それと自分達が無事でいられるのか。そんな懸念が窺い知れる声だった。骨喰はぼん、と彼の頭に手を置き、不器用に頭を撫でる。

「大丈夫だ。兄弟達を信じろ」

骨喰は小狐丸達の方へと目を向ける。前田は引き下がりながらも戦っており、一期も弟の下へ駆け寄ろうとしている。小狐丸は苛立ちを隠さず、けれど確実に前田を追い詰めていく。

「全くしぶとい小童よ。そろそろ終いにするか」

前田は短刀を構え、切り傷だらけの身体を奮い立たせる。一期は自分が今出せる全力で疾走し、前田の背中に手を伸ばしていた。

しかし時間は一期を待つてはくれない。小狐丸は刀を構え、前田を斬り捨てようと動く。前田が刀を受け止めようとする。この状態では御守りを使う事になるだろう。

——主君の命を守れなくなってしまふな。

そう覚悟した前田は——しかし、飛び込んで来た言葉に驚愕する事になる。

「——投石兵、行け！」

その凜とした声と共に、前田と小狐丸の間に石の雨が降り注いだ。小狐丸はそれを避け、その間に一期が前田に追い付き、思い切り後ろに下がらせる。その合間にキン、と音が鳴る。砂埃が晴れば、その音が小狐丸と何ものかの刃がぶつかり合った音だと分かった。力負けた小狐丸が後ろに下がり、切り結んだ相手を瞋恚の目で睨む。

「……次から次へと」

小狐丸の相手はその視線を物ともせず、ぐるりと見やり血塗れとなった園内に少し顔を曇らせる。

「——少し遅かったか。長谷部、悲しんでるだろうなあ」

相手は一期に顔を向ける。一期は前田を背中に隠しながら、その相手を見て驚喜した。

「よう、蒼穹のいち兄。相変わらずで何よりだ」

薬研藤四郎——春光隊の短刀は、一期へ不敵に笑って見せた。

11—6 「殺された魂」

窓ガラスが一太刀の振りで割れていく。氷雨の鶴丸と小夜はガラスの破片を避けつつ、目の前に迫る大太刀——蛍丸の攻撃をいなしていた。

「つたく煌々と電気がついていっているにしても、室内でこれだけ動けるって怖すぎるだろうー！」

「あの大きさの刀身をここまで振り回せるのは……相手は建物を壊してもいいって思っているというのもあるでしょうけど」

蛍丸は先程から二振りの度肝を抜く戦い方を見せていた。天に向かって刃を振り上げ天井を落として二振りの脳天を狙ったり、床を砕いて足元を不安定にした上で突きを繰り出して来たり、窓ガラスを割って避けさせるしかない二振りに自分の受ける傷は度外視で突っ込んで来たり。

時間進行時は、建設物の破壊を禁じられている。歴史改変に繋がる恐れがある為だ。そのため、室内での戦闘において大ぶりの刀種はあまり編成されない事が多いのだが——この蛍丸は、室内破壊の禁忌を破っている。しかもその戦術に慣れているのか、その行動の一切に躊躇が無い。

出来る限り室内を壊したく無い二振りと、壊す事に躊躇いが無い蛍丸。二振りは次第に圧され始めていた。

「まだ死なないの？ いい加減無様な死体になって欲しいんだけど」

「俺達にも、やるべき事があってな！」

鶴丸は正確に突いて来る蛍丸の鋒を紙一重で避け、相手の鏢を己の鏢で引っ掛け、蛍丸の動きを一瞬止める。その一瞬で小夜が鶴丸の肩へ飛び、蛍丸の右腕を斬らんと跳ねる。蛍丸はそれを察して刀を引き、小夜の刃を受け止めた。

「うっざいなあ……い！」

「……っ！」

大きく刀を振り下ろし、小夜を床に叩きつける動作をする。小夜はバランスを崩すも床に落ちる前に態勢を立て直し、さっと後ろに下が

る。

小夜は距離を保ったまま、蛍丸に問い掛ける。

「何故、ここまでやるの？」

「何故？ 全ては敵を殺す為。それはお前達も同じでしょう？ 何度も聞くとか、そんな体で痴呆でも始まった？」

「……でも」

小夜は息を吸い込み、声を張り上げ告げた。

「貴方は人間だったんでしよう？ 価値観は刀のそれとは違う筈。なのに——なのに何故その心は普通の人間とかけ離れてしまったの？」

「春光の薬研！ お前がいるという事は——」

「ああ、鯰尾兄と長谷部もいるぜ。この園からの通報を長谷部が聞き取ってな。なるべく早く来たつもりだったが、犠牲者は出ちまったみたいだな」

春光の薬研は刀を抜いて小狐丸を睨みつけた。小狐丸も忌々しげに薬研を睨み返す。

「こうまで母様との間を邪魔される。全く腹立たしい事この上ないわ」

「同感だな。俺達もちび達を殺された事に、はらわたが煮えくり返っている所だ」

そうして、再び刃が交わる。

小狐丸が薙ぎ払おうと振るったその先に薬研はいない。目を見張る小狐丸は薬研がいた場所に砂埃が舞っているのを発見し——背後から殺気を感じ取り、素早く後ろからの突きを避ける。

肩を狙った一撃は避けられたが、薬研も怪我は負っていない。再び投石兵に命じて石を飛ばし、小狐丸の兵を削る。暫し睨み合いが続き、それから二振りは同時に動き出した。

キーン、と金属音が響き、刀身がぶつかり合うのが見える。身体中に傷を負っている小狐丸は、万全の状態である薬研に力負けしてよろけてしまう。薬研はそれを見逃さず、すかさず足払いをかけて転ばせた。脇腹に穴を開けようとする薬研の攻撃は、しかし体を反転して避

けられる。

「いち兄、今の内にちび達を逃がせ！」

薬研の張り上げた声に一期は頷き、刀装を展開させて前田と共に正門へ向かう。正門では子供達が身を寄せて盾兵の内側にいた。ぼろぼろの前田を見て、ざわめきが広がる。

骨喰は一期の顔を見て、表情を少し緩める。

「戻って来られて良かった。いち兄、前田、あまり無茶はしてくれないな」

「任せて悪かったね。さあ、城下町に行こうか」

そうして子供達の数を改めて数えようとした——その時。

「誰だ!？」

薬研の声に全員が園内を見る。対峙する薬研と小狐丸の前に、二つの影が現れたのだ。

「……五虎退と小夜すけ? 何でこんな所に」

疑問を浮かべる薬研を尻目に、小狐丸が二振りに向かって刃を振り上げる。薬研が滑り込んで刃を食い止める。二振りは慌てて避けながらこう言った。

「ぼ、僕達、気付いたら近くの森にいて……声が聞こえたから、近くに誰かいるかなあって思って……」

「……何でここにいるか分からないんです。その白髪の太刀が、仇ですか? なら、協力します」

五虎退は踵から足を踏み出し、小夜は軽く髪を弄りながら薬研に助力を告げる。しかし、薬研はそれを突っぱねる。

「練度が低いなら足手まといだ。……ああ、そういう事か。長谷部!」
呼び声と共に再び石の雨が降り、砂埃が舞った。その一瞬で、木の上から紫色のカソツクを纏った男が二振りを抱えてまた木の上に消える。

「……迷子ですかね? あの二振りは」

「そうかもしれないね。さて、改めて点呼を——」

前田と一期が何気なく話した後、子供達の方を向くと、様子が少しおかしくなっていた。園の中を見て、囁き合っている。

「……あの白い髪の子、まさか……」

「いやいや、外見が違い過ぎるよ、別人じゃ……」

「でも……」

訝しみながら話し合う子供達。前田と骨喰は首を傾げながら子供達の数を数えている。

その中で一際顔色が悪くなっていたのは――

「――コタロー？ サクヤ……？」

――この中で誰よりも元気な筈の、ソメゴローだった。

蛍丸は、氷雨の小夜の問いに鼻で笑って答える。

「そんなの決まってる。お前達がそうさせたんだよ。でも、悪い事ばかりじゃないかな。だって、復讐するのに普通の倫理観なんて邪魔なだけだし」

まるで刀剣男士が人間の倫理観を解していない様な言い方だが、実際は勿論違う。現代まで残っている刀は当然現代の倫理観を知っているし、現存していない刀も知識としてその倫理観は把握している。当然、彼等は戦場以外でそれに沿うのも忘れない。

氷雨の鶴丸は顔をしかめて蛍丸に苦言を呈する。

「……俺達をただの殺人鬼と一緒にしないで貰いたいな。俺達も俺達なりの矜持でもって刀をやってるんだ、そこらの人斬り包丁と同一視されるのは腹立たしい」

「人を殺す道具の時点で上下も無くない？ お高く纏っていても結局は人の命を絶つ事しか出来ないのに、矜持って。ハッ、笑えるね」

ケタケタと笑う蛍丸に、鶴丸はいよいよ表情を無くしていく。それは身近なものが見れば怒りに触れた事が一目で分かる顔だった。

「……君、蛍丸の魂はどうした？ いくら蛍丸でも、そんな事は言わない筈だ。その魂を、矜持を、どこで失くした？」

蛍丸は、また普通の蛍丸ならまず有り得ない歪な笑顔を浮かべて告げる。

「そんなの、とうの昔に食ったよ。何か悲鳴上げてたけど、邪魔だしね。心を持ったばかりの刀をねじ伏せるのは簡単だったよ……つと」

鶴丸は蛍丸に斬りかかるも、あつさり避けられる。鶴丸の斬撃の軌道が乱れ始めている。小夜はぎよつとして鶴丸を抑えた。

「鶴丸さん、落ち着いて下さい!」

「19478番、君は蛍丸を——刀の魂を殺したのか!? 蛍丸の記憶を、想いを——人が語り継いだ物語を、全部踏み躪って!」

刀剣男士は、人々が語り継いだ『物語』によつてこの世に在る事が可能になる。

物が語る故、物語。

それは誰が言ったものかは分からない。だが鶴丸は、その言葉を結構気に入っていたのだ。自分がこう永く存在している意味が、かつての大切な過去を語る為に——人々が己に託した想いを、背負っているからだと思えて。

だが、この蛍丸——19478番は、それを体現する存在を殺した。そして人としての倫理観を共に捨てて、この刀を復讐に使う事にしたのだ。己の物語を無かった事にされ、歪な物語で上書きされる蛍丸の無念はどんなにか。

しかし目の前の蛍丸を象る存在は、そんな鶴丸の叫びにことりと首を傾げていた。

「所詮、物は物じゃん。どんな形であれ、使われた方がいいんじゃないの? ——後」

蛍丸はその顔を憎悪に染め、鋭い視線で鶴丸を刺した。

「その呼び名で俺を呼ぶな。——やっぱりお前から殺してやろう」

鶴丸も、この存在を殺したいと感じていた。刀の魂を踏み躪って、通った道を憎悪で汚す。小夜のように復讐心を自制出来るならいい。しかし、目の前の存在は自制などせず、その憎悪のままに動いている。それが、周りにいい影響を及ぼすとは思えなかった。この存在を肯定してしまえば、自分達の心まで否定されてしまう。

そうして再び大太刀が振りかぶられ、二振りが衝突しそうになったその時だった。

「——通報にあった蛍丸ってあれだよな?」

「うん。氷雨隊と思われる鶴さんと小夜ちゃんも一緒だ、間違い無い

ね」

「よし、推して参ろう」

「あつ、長曾祢兄ちゃん待つてよー！ 太鼓鐘と博多、頼んだぞー！」
ガラスの無くなつた窓枠から銃弾が飛んで来て、壁に当たつていく。衝突寸前だつた二振りはその銃弾を避け、鶴丸は窓枠から入つて来る刀達を見た。白い服に青いマントをなびかせる短刀、栗田口の戦装束を身に纏い赤縁眼鏡をかけた短刀、そして白黒のんだら羽織が特徴的な打刀。

三振りは一斉に蛍丸に斬りかかる。短刀達は壁を伝いながら空間を跳ね回り、蛍丸に傷を負わせていく。打刀は鏝迫り合いに持ち込み、蛍丸の刀を固定させた。

「氷雨の鶴丸と小夜だよな？ 大丈夫か？」

窓枠の外から緑色の上着を纏つた槍——御手杵が顔を覗かせる。その後ろから、眼帯をしている太刀——燭台切光忠が現れた。

「外見はそこまですも無さそうだけど……どこか痛い所は無い？」

「ああ……無いな。小夜坊は？」

「僕も、ありません」

「そっか、それは何よりだ。とりあえずここは僕達に任せて。……でも、何でここにいたかは後でじっくり聞かせて貰うからね」

迫力ある顔で凄まれて鶴丸は乾いた笑いを浮かべる。小夜も視線を少し逸らした。

目の前では激しい戦闘が繰り広げられている。それを遮る様にひよこつと現れたのは、青い着物を着た脇差——浦島虎徹。

「二振りとも、怪我が無くて良かったー！ でも心配だから、俺が本丸まで送つていくよー！」

「……戦闘に加わらなくていいんですか」

「あーうん、今は三振りで何とかなつてるし。——それに多分、あいつはそろそろ引き下がるよ」

小夜が尋ねると、浦島は無邪気な笑顔で答え戦場を見る。

鶴丸もそれに倣うと、確かに蛍丸は少しづつ後退していた。斬りかかる短刀達をやり過ぎしながら打刀の斬撃を受けている。しかし、ふ

と目線を横にやっつて舌打ちをすると、大きく刀を振りかぶり三振りを吹き飛ばす。大きく後退した三振りを横目に、蛍丸は近くの窓枠から外に出た。

「あつ、待てー！」

「逃がさんばい！」

短刀達はその背を追おうと窓枠に足を掛けると、地面からカチカチ、と音が響いている事に気付き一度足を止める。その直後、窓枠から身を乗り出して外側の壁を大きく蹴った。一気に闇の中へと消えて行った二振りを、鶴丸は呆然と見守っていた。

「……弾丸みたいだなあ、あの二振り」

「そうだよー。まあそんな訳で、話を聞きながら送るから」

「……窓から跳躍したのは、足下の爆弾のせいですか」

「だろうね。爆弾が破裂しない所まで抱えるから。御手杵さんが」

「俺え!？」

図体がでかいとこんな時あれだよなあ、と呟きながら御手杵が鶴丸と小夜を抱える。後ろから白黒だんだら羽織の打刀——長曾祢虎徹が、鶴丸に話しかけた。

「氷雨の鶴丸、ここで何をしていた？」

「あ、えーつと」

「そうそう、それを聞かないといけないよね。貞ちゃんと博多君が追ってくれている今、僕達も任務を遂行しないと」

「……」

「長曾祢兄ちゃん、あんまり厳しくしないでね？」

「少なくとも、俺が二振りを下ろすまで待つてくれねえかなあ」

政府の部隊が鶴丸達に迫る中、鶴丸はいい言い訳を考えていた。

——今夜邂逅した蛍丸を忘れる訳にはいかない、と。

蒼穹の一期は、ソメゴローの言葉に我が耳を疑った。

先程春光の薬研の前に現れた五虎退と小夜左文字。その二振りを見て、ソメゴローが滑^レ園の子供達の名を呟いたので。

「何を、言っているんだい。ソメゴロー君」

「……コタローは歩く時、踵から足を下ろす癖がある。サクヤはいつもツンツンした髪が気になってるのか、髪を弄る癖がある。それ以外にも色々あるけど——何で、コタローとサクヤが、あんな格好……」
震える声で、ソメゴローは告げる。まるで、何かから目を逸らしたいかの様に——

「ただの、そっくりさんじゃないかな。刀剣男士にも色々個性があるし、そういう癖を持っているものもいるんじゃない——」

「じゃあ何で、あいつらの癖がごとごとくコタローとサクヤの癖と同じなんだよ！俺はあいつらとずっと一緒にいた、だからあいつらの事はよく知ってるんだ！何で、何で……」

そう言っただけでソメゴローは頭を抱えてうずくまってしまう。骨喰はおろおろとした様子で手を伸ばすか伸ばすまいか迷っている。前田も困った様に一期を見る。一期も改めてソメゴローの言葉を否定しようとした途端、

「——一期さん。私達も、同意見」

ツクシが江雪を支えながら厳しい顔で前に出て、ソメゴローの言葉を肯定した。一期は愕然とした表情で、子供達を見渡す。全員、じつと一期達を見つめている。

「私達も、ずっと二人と一緒にいた。家族みたいに育てて来た二人の事を、見間違える筈が無いの。その全員が、ソメゴローと同意見。ねえ、これってどういう事なの？」

じつと見つめて来る視線が、まるで一期達を問い詰めているかの様だ。

そう言われても、一期には分からない。どうしてコタローとサクヤが刀剣男士の格好をしているのか、まるで刀剣男士そのものの言葉遣いは、本当にどういう事なのだろう。

ツクシに支えられうなだれている江雪に、縋る様に一期は尋ねた。
「……江雪殿。私には、何が何だか分かりません。江雪殿は、何か知っていますか？」

持ち上げられた顔を見て、一期は立ちすくむ。江雪の顔は、血の気が引いて真っ白になっていた。

「……私も、短いながら、子供達と一緒にいました。私も——あの二振りには、コタロー君とサクヤ君にしか見えません。……本当に、どうなっているのでしょうか」

江雪は震える手で顔を覆う。そうして小さく、嗚咽を漏らし始めていた。

一期は、混乱を極めながらも思考を巡らせる。子供達は満場一致であの二振りをコタローとサクヤだと見なしている。長らく一緒にいた子供達の言葉と、江雪の悲痛な姿。

——傷付きたく無ければ、滑~~り~~園には近寄るな。

かつて、春光の長谷部に言われた事。それが駄目押しになった。

「……ここは、まさか——」

「まだいたのか」

背後から凜とした声がする。恐る恐る振り返れば、そこには一期に忠告した張本人である、春光隊の長谷部がいた。その横には、五虎退と小夜。子供達は、一斉に五虎退と小夜に駆け寄る。

「コタロー！ 里親の所に行ったんじゃないか!?」

「サクヤ、行こう！ ここにいたら危険だ！」

子供達の中から、ツクシがふらりと長谷部の前に現れる。長谷部は気まずそうに、ツクシに言った。

「……久しぶりだな、ツクシ」

「うん、久しぶり。……長谷部さん、正直に教えて。あの二人は、コタローとサクヤなの？」

長谷部を鋭い視線で見るツクシ。長谷部の後ろで、五虎退と小夜は困り切った表情で子供達に告げていた。

「えっと……僕は、五虎退なんですけど……」

「僕は小夜左文字。サクヤって、誰の事？」

長谷部はその困惑と動揺に満ちた光景を見ながら、苦痛に歪んだ表情でツクシに明確な回答をして見せた。

「——そうだ。尤もこの通り、その記憶は消えているがな」

ツクシは衝撃と絶望、そしてどこか得心した感情を顔に浮かべてよろめいた。

一期もまた感情が大きく揺さぶられるのを感じていた。ここには時折訪れていたが、先程までその事に全く考えが及ばなかった。数少ない来訪回数でそれを見破れというのが無茶なのだが。

——ここは……審神者及び刀剣男士育成機関。

考えが突飛過ぎるかもしれない。けれど、一期にはもうそれ以外に思い浮かばなかった。審神者には様々な規制がある。手紙の内容次第では、相手に届かない事も有り得る。そして記憶を失って刀剣男士の姿になったコタローとサクヤ。それを考えると、滑_レ園を出た子供達から手紙が届く筈も無いのは明確だ。

目眩がする。今までこの少年達は未来を、希望を信じて生きて来た筈だ。けれどそんな彼等に待ち受けているのは、人間としての生の終焉と、果ての見えない戦いへの参戦。自分は刀だ。戦える事が嬉しいし、それに誇りも感じている。だが、それを人間の少年達に押し付けたかった訳では無いのだ。子供達には戦いから少しでも遠い所にいて欲しかった。それを一際強く感じているであろう江雪の姿は絶望に満ちていて、止まらない涙があまりにも悲痛だった。

「……嘘、だろ。サクヤが、サクヤが——」

話を聞いていたソメゴローは頭を抱えたまま、沈痛な声を漏らした。小夜は彼に近付き、ごく普通に声を掛ける。

「えつと……君、大丈夫——」

手を伸ばしかけた小夜は、いきなり胸倉を掴まれて目を丸くする。胸倉を掴んだソメゴローの目には——憤怒と憎悪の炎が揺れていた。

「——何で……何でサクヤを殺したんだよ！ サクヤと、一緒に世界を見て回って約束したのに、お前が、全部壊したんだ！ 返せ、返せよ！ サクヤを——俺の相棒を返せ!!」

憎悪と無念を叫ぶソメゴローに、小夜は理解出来ていない表情を向けていた。小夜は復讐の刀だ、憎悪の念は分かるが、それが何故自分に向けられているのか図りかねているのだ。

それに苛立ったソメゴローは、思いつきり手を振り上げ——

「冷静になって、ソメゴロー」

——誰かにその手を掴まれた。ソメゴローが振り向くと、まだ悲し

みが抜け切れないながらも、真剣な表情をしたツクシが振り上げた手を力強く止めている。

「混乱しているのはその人だって同じ。誰のせいでも無く親友を失って怒りのぶつけ所が分からないのは理解出来るけど、何も分かっているじゃないその人を責めるのは筋違いだよ。それと、今まで知らなかった江雪さんと一期さんや、理由があつて話せなかったんだと思う長谷部さんに怒りをぶつけるのも見過ごせない。後で話を聞くから、今は避難する事を優先しよう」

感情を押し殺しながら淡々と話すツクシに、衝動のままソメゴローは詰め寄った。

「……ツクシはっ、何でそんなに落ち着いていられるんだよ！ コタローとサクヤがいなくなつて、悲しく無いのかよ!?!」

「悲しく無い訳無いでしょう。悪く無い、私達と同じくらい悲しんでくれている人に怒りをぶつけるのが駄目って言うてるの。あんたは頭に血が上り過ぎてる、それで責める相手を間違えるんじゃないよ。……薬研さんの時間稼ぎにも限界がある、駄々をこねていたら置いていくからね」

ツクシはそう言って江雪の所へ戻り、再び江雪を支えて立ち上がる。ソメゴローは歯を食いしばり、それからツクシの後についていった。

一期は呆然と立ち尽くしていたが、長谷部に背を叩かれ我に帰る。「お前も避難しろ。恐らくもうすぐ政府の部隊が到着する」

「そう、ですね。……長谷部殿、大丈夫ですか？ 顔色が良くありませんが……」

長谷部の顔色は愁傷と無念を混ぜた様な物だった。それに加えて、体の重心がぐらついている。

「……ツクシは、前々から優しい子だと思つてたが。責められない事は、やはり辛いな」

「長谷部殿に、何の非があると言うのです?」

長谷部は己を嘲笑する力無い笑みを浮かべて、小さく吐き捨てた。

「知つてたのに言わなかった事、滑園の子達を救えなかった事。そ

れが、俺の非だ」
園の中は未だに炎が渦巻き、鎮火する気配は無かった。

11-7 「雨の気配」

月が高く昇り、天から全てを見下ろしている。雲霄の鶯丸は、縁側で軽食と共に茶を飲んでいた。近くには、旧型の端末が置いてある。

端末を通じて江雪からの救援要請が来たのは、滑園からの通報があった直後だった。トールルームには「政府のものが向かう、少し待て」と書いておいたが、既読マークは付いていない。そしてその後氷雨隊の審神者を通じて知らされた、研究所に指名手配中の個体が出現した事も鶯丸の心配の種だった。恐らくは鶴丸が潜入して、鉢合わせしてしまったのだろう。

滑園には別の政府直属の部隊が、研究所には雲霄の第三部隊が向かったと言うが、どうなったのか。

江雪と鶯丸は無事なのだろうか。もしかしたら、江雪の救援要請を受けて一期も飛び出してしまったのでは無いか。友達の心配をしていると、廊下に二つの影が差し込む。

「よっ、鶯丸」

「相変わらず酒じゃなくて茶飲みよーと？」

「太鼓鐘、博多」

第三部隊の太鼓鐘と博多が、少しの傷をこさえて立っていた。茶を勧めると、今から手入れ部屋だと断られる。そう言う割には鶯丸の隣にそれぞれ座り、思いつきり愚痴を零し始めた。

「聞いてくれよ鶯丸ー！ 俺指名手配中の蛍丸の方追いかけてたんだけど、後ちよつとつて所で逃しちまったんだよー！」

「お前は部隊に配属されたのは初めてだったか？」

「いや、三度目。それで追い詰めた！ って思ったら後ろからどこぞの鶴さんが現れて、ヤバって時には閃光弾放たれて……気が付いたら二振り共消えてたんだよー！ 本当に後ちよつとだったのになあ……！」

「太鼓鐘は焦りすぎばい。あん時はもう少し慎重になった方が良かったかもしれないね」

「……鶴丸？ 氷雨隊の……では無いよな」

鶯丸が疑る目を向けると、博多はああ、と言って手を横に振る。

「違う違う。氷雨の鶴丸しゃんは主人の所におるばい。あれは別刃やった。ただ、蛍丸が俺ん足ん速しゃに負けんのは驚異的たい」

「博多の足と互角の相手……分かつてはいたが恐ろしいな」

「本当に、外道に堕ちた奴なんだな、あの蛍丸は」

太鼓鐘は後ろに手をつき空を見上げる。月は雲に隠れ始め、少しずつ周囲を暗く染め上げつつあった。

博多がふと鶯丸の端末を見て告げる。

「鶯丸しゃん、主人の所に行ってきたらどげん？ 今事情聴取ばしよー所やけん」

「いいのか？」

「友達がおった方が話しやすかやろうけんね、主人もそう思うとーばい」

そうか、と言って鶯丸は立ち上がる。湯呑みを室内に入れて、二振りには傷をよく治すよう言い聞かせて執務室へと向かった。

太鼓鐘と博多も立ち上がり、手入れ部屋に向かう。

「しかし、あの鶴さんさあ……契約が切れていないよな？」

「そうやなあ。前ん主人とん契約が切れとらんのか、あるいは……」

「……どこかの部隊に潜り込んでる？」

「そんな部隊ん主人と組んどつたら最悪ばい」

「本格的に潜入捜査になるだろうなあ」

太鼓鐘は歩きながら厚い雲で覆われた空に月を探すも、光はどこにもありはしなかった。

「……一雨来そうだな」

「いち兄！ 骨喰！」

「前田、大丈夫ですか!？」

「うわあああん、無事で良かったです……!」

蒼穹隊の玄関口に粟田口派が集まっていた。一期は前田を背負いながら、骨喰と兄弟達と共に手入れ部屋へと向かう。普段は人妻、お菓子と騒ぐ包丁も、今は心配そうに一期達を見つめている。

「いち兄、子供達はどうなったの？」

「江雪殿の本丸で一時預かる事になったそうだよ。……心身共に傷付いている子が多いから、早く癒えてくれる事を祈るしか無いね」

「そっかー、ボク子供達に会ってみただけだけど……しばらくは無理そうだね」

「薬研が手入れ部屋の準備してくれてるぜ、早く治してくれよな。子供達の所にも早く顔出したいだろ？」

「犠牲が出てしまった事を、鳴狐も大層嘆いております。一度全員に会いたかったと……犯人は逃走したとの事、無念で仕方ありません」

そう話しながら、軋む廊下を歩いていく。弟達を失う事は、あの子供達が「家族」を失うのと似た痛みをもたらすのだろうかと一期は考えながら歩いていった。総勢一二振りの大所帯で歩いていると、それはもう賑やかだ。この賑やかさを失う事など、考えたくも無い。そう思いながら手入れ部屋の前にいる薬研に手を振った所で。

——すつ、と粟田口派の横を誰かが通り過ぎた。

その違和感に、一期は足を止める。何故か顔から血の気が引くのを感じていた。いち兄？ どうしたの？ 兄弟達の声が、反響する。前田、骨喰、鯨尾、平野、五虎退、包丁、信濃、乱、厚、薬研、鳴狐——十一振りが思い思いに一期に話しかける。

何だ。何だ、さっきのどうしようも無い違和感は。思い出せ、思い出せ、一体、何が——

「——一期」

気が付くと、目の前に審神者がいた。兄弟達は、審神者が通れる様に道を開けていた。先程までの違和感を頭の隅に置きながら、一期は審神者に微笑む。

「主、挨拶が遅れました。——只今戻りました」

「ああ、お帰り。……前田が重傷か。俺の命令には従えなかったか」

「申し訳、ありません。戦況を、見誤りました」

「前田にはしばらく出陣を控えて貰う。一期もそれ相応の罰を考えんとな。……でも今は」

審神者は、一期の頭に手を置いて、わしやりと撫でた。

「よく帰って来た。強敵から子供達を守り、無事に帰還した事。それを讃えよう」

「……私は、全員を守れませんでした」

「いや、全滅や一人だけ残る事が最悪だ。一人だけだったら支え合う者がいない。だが九人だ。それなら何とかやり直せる。一期、九人をあの場所から救った事を、自分で褒めてやれ」

審神者の温かい手が、涙腺を刺激する。悔しい、悲しい、寂しい。そんな感情に支配された今、流れ出る物を止める手段を今の一期は持ち合わせていなかった。

兄弟達は、涙を流す長兄と審神者を優しく見守っていた。それに審神者は気恥ずかしくなったのか慌てて粟田口派に告げる。

「お前さん達、遅いんだからそろそろ寝ろ！ 明日も忙しくなるんだからよー！」

「はーい」

「いち兄、おやすみー」

「ゆつくりお休み下さいー！」

「前田、先に手入れ部屋に入りましょう」

兄弟達が去り、その場には審神者と一期が残る。涙を拭って、一期は審神者へと顔を向けた。

「お見苦しい所を失礼致しました……」

「いやいや、たまには泣く事も大切だ。……そういや、一期。お前さんが兄弟と喧嘩なんて珍しいなあ」

「……はい？」

いきなり何を言い出すのか。胡乱な目で審神者を見る一期は、続く言葉に凍りついた。

「いや、いきなり部屋に駆け込んで来て泣きながら『しばらく休暇を下さい』って言われた時は何だと思ったよ。何があつたんだって聞いても口を割らねえし。でも一期の名前を出したらかなり動揺してて、かなり精神的に参ってると判断したから、それに許可を出しちまったけど」

「……その、私の兄弟と言うのは一体」

心臓が嫌な音を立てる。先程の違和感が再び頭をもたげる。しかし、この期に及んでも、その違和感が分からない。どうしたら、どうしたら思い出せる？ 思い出せなければ、手遅れになるかもしれないのに――

審神者は妙なものを見る様な顔で、口を開く。

「二体って――秋田の事だろう？ お前さん、もしかしてどこか調子悪いか？ すぐ手入れ部屋に行った方がいい」

春光隊の台所で、長谷部と鯨尾が食器の片付けを行っている。長谷部が一つ一つ丁寧に洗っては鯨尾に渡し、鯨尾はそれを棚にしまう。そうした作業を繰り返しながら、鯨尾は問い掛けた。

「じゃあ滑^レ園の五虎退と小夜ちゃんは、しばらくはうち預かりになったんですね？」

「ああ。また騒がしくなるだろうな」

「賑やかなのはいい事ですよ。気分が明るくなるじゃないですか」

「……それにしても、薬研があそこまでやられるとはな。あの小狐丸、相当な手練れらしい」

「まあ中傷で済んで良かったと思うべきなんでしょうね……政府の部隊が来なかったらもっと大変な事になってたでしょうし」

会話が途切れる。長谷部は眉間に皺を寄せ、淡々と食器を洗い続けている。ちらちらと見てから意を決して、鯨尾は呼び掛けた。

「ねえ、長谷部さん」

「何だ」

「あの子は、どうなってます？」

その問いに長谷部はピタリと作業を止めて目を閉ざし、皿の上に水が跳ねて辺りを濡らしている光景を遮ってから答える。

「……眠っている。大方、今日の騒動で心を摩耗したんだろう。だが、消えてはいない。明日には、目を覚ますだろうな」

「そうですか……良かった」

ふう、と息を吐いてから顔を引き締め、鯨尾は再び長谷部の側に寄っていく。

「長谷部さん、覚えておいて下さい。俺達はあの子と同じ様に、貴方も大切なんです。あの子の存在を保つ事に努めるのもいいですけど、それで貴方が消えちゃったら本末転倒なんですよ」

「……分かつている。死ななきや安い。逆に言えば、死んだら全てが終いだ」

「そうです。それでいいんですよ。貴方とあの子は、正に一心同体なんですから」

鯨尾は微笑んで、長谷部から皿を受け取る。長谷部が再び皿を洗おうとした時、リビングから聞こえる歌仙の穏やかな声に手を止めた。「君達、そろそろ石切丸が帰って来るよ。お出迎えの準備を始めた方がいい」

「もうそんな時間か」

時計を見て台所を出ようとする長谷部に、鯨尾が制止をかける。

「長谷部さん、あの子が寝たままなら長谷部さんも寝た方がいいですよ。後の事は俺達に任せて」

「しかし……」

「大丈夫。僕達も心得ているから。君も疲れているだろう？ 君の話も聞きたい所だけど、明日倒れたら大変だし」

「……分かった。任せたぞ」

長谷部はふらふらと台所を出て、リビングを通り、階段へと消える。

鯨尾と歌仙は玄関へと向かい、ドアを開けて外を窺った。

「……長谷部さん、かなり参っているみたいでしたね」

「心配だね、やつぱり……。しばらくゆっくり休んで貰いたいけど、彼がそれを許さないだろうし」

どうしたらいいんだろうね、と歌仙は息を吐く。鯨尾も俯き、顔に陰を落とす。

そうしてから数分すると、鯨尾が気配を感知して顔を上げる。目の前に、石切丸と誰かがいた。

「石切丸さん、隣にいるのは見学希望者ですね？」

「そうだよ。……さ、ここまで来ればもう大丈夫だからね」

「石切丸、ありがとう。それじゃあ改めて紹介しようか」

歌仙はその表情を柔らかい笑みに変えて、石切丸の陰にいる見学希望者に声を掛ける。

「春光隊にようこそ、蒼穹隊の秋田藤四郎。ここは君の止まり木。再び立ち上がれる様になるまで、ゆっくりしていくといい」

第十二話 「涙に満ちた彼の夢」

12—1 「透明少年を巡るもの」

雨が降りしきる森の中で葉が音色を響かせている。森の中には家が点在しており、空き家や住人がいる家も雨粒を一身に受けている。まだこの辺りも目を覚ましたばかり、本格的に動き出すのはまだ先だろう。

そんな中、少し異様な様子を見せる家が一軒。ある家のドアの前に仁王立ちで立っている男が、目の前の男と押し問答を繰り返しているのだ。

「帰れ」

ドアの前に立つ男——春光の長谷部はにべも無く、目の前の紙袋を持つ男に告げた。しかし、彼はまだ引かない。

「せめて、直接謝りたいのです。中に入れて貰う訳にはいきませんか」
「本人は会う気無しと言っている。まだ傷が癒えていないのに傷付けた張本人と合わせるつもりは無い」

「……今までの事を言い訳する気はありません。ですが、秋田が元気がどうかだけでも確かめたくて——」

「蒼穹隊、一期一振」

長谷部は白黒のジャージからカソツクとストラを基調とした戦装束に身を変え、兵を展開させる。兵の手には、投石器が構えられていた。

「最終通告だ。——ここから即刻立ち去れ」

投石兵は男——蒼穹の一期に向けられている。それを従える長谷部の目は凶悪犯を見るが如く冷たく細められている。流石の一期も、ここまでの敵対行為を見せられたら退がるしか無い。せめてもと、長谷部の手に紙袋を渡そうと手を差し出す。

「……がごにあの菓子折りです。皆様でお召し上がり下さい」

差し出し続けられる手に、長谷部は紙袋をしぶしぶ受け取る。そうして一期は一礼すると、背筋を伸ばしながらも気落ちした雰囲気は漂

わけて森の外へ歩き出す。

一期が視界から消えたのを確かめ、長谷部は大きく息を吐いた。それから兵をしまい着ている物を戦装束からジャージに戻す。張り詰めている糸が何とか切れない様にドアを開けて中に入ると、玄関から繋がる廊下に歌仙が立っていた。

「……一期、来たみたいだね」

「ああ。追いついたが」

「そうだね……秋田のあの精神状態じゃ、会っても拗れさせるだけか」
二階からは赤子の様に秋田が泣き喚き、それを宥める鯰尾と薬研の声が聞こえてくる。階段を見上げて、長谷部と歌仙は心配そうに顔を歪めた。

昨夜滑り園の五虎退と小夜を引き取った後、春光隊に連絡が入った。電話の相手は「チラシを見た、居場所を作れるというのは本当か」と尋ね、電話に出た歌仙はそれを肯定した。すると電話の相手——蒼穹の秋田藤四郎は、「見学希望」を申し出て来た。

春光隊は、秋田の様な特殊な刀剣武士の一時預かりを行っている。預かる刀剣武士は本丸に馴染めず、傷付き疲れ果てた状態になっているケースも少なくは無い。そういった相手には、とことん遊んだり、話を聞いたり、時折出陣をしてコミュニケーションを取る練習をする。大抵は適宜様子を見て審神者に連絡を入れて、彼等の説明及び引き取りをして貰っているが、今回の様に一期が真っ先に様子を見に来る事は非常に稀だ。彼等の現状が知られていない事を嘆くべきか、一期が秋田の真実に近付けた事を喜ぶべきか。

長谷部はリビングのソファアームに座って、テレビのリモコンを探しながら歌仙に問う。

「歌仙は小夜と話さなくていいのか？ 旧知の仲間なんだろう？」

「そうなんだけど……どうも記憶があやふやらしいんだ、あのお小夜は。警戒されて五虎退の後ろに隠れられた事が、思いの外悲しくてね……」

「記憶の定着が甘くても、魂が定着しているなら仲良くなれると思う。もう一度小夜と話してみたらどうだ？ 俺は五虎退と話してみるか」

ら」

「……そうだね、預かっている以上はうちの案件だ。二振りと同じ本丸に配属されるとは限らないし、一振りですべていく練習をしなくてはね」

歌仙はぐつと拳を握り、気合を入れて小夜と五虎退がいる台所へ歩き出す。

あの時、小夜と五虎退はいきなり知らない場所に放り込まれ、いきなり滑り園の子供達に詰め寄せられ、いきなり政府の部隊に質問攻めにされたのだ。精神が安定しているとは言いがたかった二振りは、あつという間に混乱状態に陥った。不安を共有出来る相手がお互いしかない今、別の部隊に配属になつては心が折れかねない。そこで、事情をよく知っていてその事情に纏わる活動をしている春光隊が一時預かりとなつたのだが——この本丸に来てから、二振りはいつも一緒に行動していた。まるで、不安を紛らわす様に。研究員にはもう少し何とかして欲しかったと思うが、恐らく説明する前に襲撃されてしまったのだろう。

長谷部はこちらに来た五虎退に気付くと、隣に座る様勧める。五虎退は台所をちらちらと見ながらも、長谷部の横にちょこんと座った。

「何か見たい物はあるか？ プリ○ユアとか戦隊モノとか朝ドラとかサスペンスとか何でもあるぞ」

「え、えっと、幅が広過ぎじゃありませんか……？」

「鯨尾が集めた物だからなあ……うちの鯨尾は何でも見るぞ。俺には見せて貰えないアニメとか映画とかも見ているらしいし」

「……そうなんです。らしいと言えたらいいんですけど。……僕、笑える物が見たいんですけど、何かありますか」

「よし」

長谷部はリモコンを操作して、少女漫画家の男子高校生を中心としたアニメを選択した。一話目を再生すると、夕陽に照らされた教室が映し出される。

時間が過ぎる程に五虎退は強張らせていた体の力を緩め、クスクスと笑い声を上げている。長谷部もこのアニメが好きで、つい要所要所

で笑ってしまふ。五虎退は一話目を見終わった後、長谷部の緩んだ表情を見て目を丸くした。

「……長谷部さん、怖そうに見えて怖くないです」

「正直だなお前は。まあ俺はこんな感じだ。歌仙の方が怖いぞ」

「えっ、あの優しそうな方が？」

「ちよつと危険な事をしたら、まさに鬼の形相で叱られた。何度意識が遠のいた事か……でも、心配してくれているから叱るんだって分かっているから、嫌な思いはしないけどな。歌仙は面白い小説とかをよく知っているし、料理は美味しいし、戦う時は頼りになるし……本当にいい奴なんだ」

「……長谷部さん、歌仙さんが大好きなんですわね」

その言葉に長谷部は目を瞬かせた後、破顔する。

「歌仙だけじゃ無く、この本丸の皆が好きだぞ。何せ、俺を拾ってくれた本丸だ。悪感情なんて、どこにも無いさ」

森の中をとぼとぼと、水色の傘を持って蒼穹の一期は歩いていた。秋田に謝ろうと春光隊を訪れたが、先程の長谷部の態度からは取り付く島も無かった。

当然の話だ。——自分は秋田にそれだけの事をしたのだから。

*

昨夜、秋田の存在を審神者に告げられるまで軽視していた事に気付いた一期は、慌てて審神者に事情を説明した。すると審神者は、驚きながらもどこか納得した表情で言う。

「今まで、俺も何度か相談を受けていたんだ。『僕の存在が薄い』ってな。でも見る限り、他の奴らとは話が成立していたみたいだったし、軽く考えちまつたが……あんな泣き方する程追い詰められているとなつちや、しばらくは帰って来ないかもな……くそっ、俺も阿呆だ」

「主、秋田の行き先に心当たりは!？」

最早悲鳴に近い声で審神者に尋ねる。審神者も頭を掻き筆りながら答えた。

「……秋田の手に、紙が握られていたんだ。内容はよく見えなかった

が、笑っている長谷部らしき絵が描かれていたのが特徴的だった。変な所へ行つたんじゃないか——一期!」

審神者の話の途中で一期は駆け出す。審神者の慌てた声を振り切り、自室へと向かう。ガラリと障子を開け、文机の引き出しを探る。

そして見つけたそれは、奥の方に折り畳まれてしまわれていた。

それを掴み、再び審神者の下へ走る。そして審神者に開いたそれを見せると、彼は仰天しながらこれだ、と叫んだ。

「滅茶苦茶特徴的な長谷部の絵、この紙だ! 一期、これどこで手に入れた!」

「……春光隊の方から、特別にと頂きました。秋田は今、春光隊に身を寄せているかと」

その紙は、一期が以前春光の鯨尾から貰ったチラシだった。貰った際に「蒼穹隊にも利用者が出るかもしれない」と告げられていたのに、今の今までその真意を探ろうともしなかった。どんなに悔やんでも遅い。秋田は一期に何も言わず春光隊へ赴いた、それが全てだろう。

しかし、それでも考えてしまう。何故今まで秋田の事を無いものとして扱ってしまったのだろう。

他の本丸にも秋田はいて、演練時にも会っており会話を交わした事もある為存在を知らなかったでは済まされれない。何故自分の本丸の秋田をここまで蔑ろに出来たのだろうか。

一期の思考は、審神者の焦燥が抜け切らない声に遮られた。

「何はともあれ、まずは傷付けた事を謝らないとなあ……菓子折り持って行って、つてまず春光隊は俺と会っちゃくれねえか……」

「私が行きます。何度かお世話になっていきますので、春光隊の隊員は会って下さると思うのですが……」

「秋田と会えるかは分からないか。それでも誠意は示さないとな。……とりあえず今日は手入れ部屋に入れ。お前さん顔色も良くねえし。万全の状態で向かわないといけないだろう?」

それに頷き、一期は手入れ部屋に入る。手入れ部屋はカーテンで仕切られていて、片方では既に小さな職人——恐らくは打ち粉の付喪神

——がスタンバイしている。刀を職人に手渡し、敷かれている布団に体を横たえる。隣では前田が手入れを行っており、静かな寝息だけが聞こえてくる。一期もそれに倣う為、眠気に任せて目を閉じた。

*

その次の日、即ち今日。一期は開店直後のパティスリーガザニアに駆け込み、菓子折りを購入した。そして春光隊の本丸にいる秋田へ謝罪に赴いたのだが——秋田は一期に会う気が無く、春光の長谷部に追いやられた結果、一期は森の出口に向かっていた。

12—2 「嘲笑／導入」

「……一朝一夕で許す筈も無いか……」

肩を落として呟く。当然だと分かっているも、やはり秋田に拒絶された事にシヨックは隠せない。まだ起きたての森を歩いていると、一期の姿は目を引くのか彼方此方で囁き声が聞こえる。それすらも自分を責めている様に思えて気が滅入った。

足取り重く進んでいると、そこで意外な人物と遭遇した。

「あら？ 貴方は蒼穹隊の一期さんですか？」

鈴の鳴る様な声に振り返ると、そこには髪を下方で結っている女性がピンク色の傘を差して立っていた。一期はあつ、と声を上げ女性の名を思い起こす。

「貴方は……ハルカさん、でしたか」

「名前を覚えて頂けて嬉しいです。森の外へ出る所ですか？ 私もちょうど仕事から帰る途中だったので、そこまで一緒に行きましよう！」

女性——木枕コマクラハルカ遙は、人の良さそうな笑みを浮かべてそう言った。

一期の隣に走って並び、ふう、と一息つく。

その姿はいかにも「頑張り屋の居酒屋店員」と言った風にしか見えない。しかし一期は知っている。彼女が陰で情報の売買を行っている、所謂「情報屋」だという事を。彼女の本性も又聞きだが把握している。本当に、そうは見えないのだけれど。

警戒心と僅かな好奇心を表に出さない様に努めていると、ハルカが話しかけて来た。

「二期さんは、どうしてこの森に？」

「……えっと、実は少しこの方に礼を欠いた事をしてしまいました、そのお詫びに」

「わあ、お疲れ様です。こんなに早くに起きて謝罪しに行くなんて、余程大事になったんですね」

「あ、はは……」

ハルカは力無く笑う一期の顔を覗き込む。いきなり目の前に女人

の顔が現れた事に驚いた一期は、唐突にに発せられた言葉に首を傾げた。

「でも、気を付けて下さいね」

「はい？」

「謝罪なんて、真意を込めなければただの自己満足です。どれだけ土下座しても、逆にわざとらしく見えて心が離れてしまうもの。いじめとかの加害者がする誠意が込められていない謝罪程、人を腹立たせる物も無いですからね」

「はい、心得て——」

「それに」

一期の言葉は、強い調子で話すハルカの言葉に遮られる。一期はその事を少し不快に感じたが——ハルカの表情を見て慄く。彼女は先程の人間らしい表情とは打って変わり、不気味なからくり人形の様な笑みを浮かべていた。こちらを蔑み嘲笑しているのを皮一枚で覆い隠し、まるで滑稽な劇を見ているかの様なその顔は、長い間この世にあつた一期の記憶にもそうそう無い。

「神経を逆撫でして被害者の心を更に傷付けて、被害者が加害者に報復する、何て事例もありますからねー。一度打つ手を間違えると悲惨な事になりますよ。何せ加害者はいじめを楽しんでいる事が多い訳ですからね。そう簡単にその価値観は変えられない。一度いたぶる立場を味わった者は、その旨味から逃げ出せないですよ。いたぶられる立場を味わった者は何とかしてそこから逃れようとする」

ハルカは誠意を込めた謝罪について話していた筈だったが、いつの間にか話がズレている様に思えてならない。関係の無い事例について話している筈なのに、何故己の心臓の前に刃を突き付けられている気持ちになるのだろう。彼女は続ける。

「誰だって生贄にはなりたくない。でも加害者にもなりたくない、という現実の無視を主体とした傍観者もそこから生まれる訳ですね。自分は何もしていない、だから悪くない。そうして傍観者は遠回しにいたぶっている事から目を逸らし、場合によっては被害者の恨みを買う事になります。被害者にとっては、その環境の全てが敵に思えてく

るでしょうね。だから自殺などが起こる訳で」

そして、致命的な一言がハルカの口から歌う様に紡がれた。

「……無視して安寧を得ていた事実が目の前に突き付けられると苦しくて逃げたくなるでしょう？ 被害者はどうなのでしょいか。傍観者を殺したい程恨んでいるかもしれない。その恨みはさぞかし大きいのでしょいか。傍観者も現実を無視していた事が暴かれて、全てを無かった事にしたい衝動が燻っているんじゃないんでしょいか？」

「……っ私は、そんな事は考えていない！ 無かった事になど、する訳が無いでしょう！」

ハルカは楽しそうに口に手を当てる。一期は彼女のペースに乗せられている事に気付いていない。その証拠に、彼女が話してもいない真実を揶揄している事に思い至ってもいないのだから。

「口で言うだけなら簡単ですよねえ。プライドが変に高い人は自分可愛さに過失をみつともなく否定しますが、貴方は満点の口だけ回答を導き出した訳です。よく出来ました」

クスクス、と嘲笑われいよいよ一期は傘を投げ捨て、抜刀しハルカに斬りかかってしまう。己でもまずい、と思ったが、斬った感触は感じられなかった。目の前にハルカはおらず、辺りを見渡すと彼女は木の上にいるの間にか立っていた。

「あらあら、一般人に刀を振るうなんて野蛮ですね」

「貴方は……っ！」

「怒りのぶつけ先を間違えていらっしやるのでは？ 私は世間話をしただけ。何でかそれに反応して怒って斬りかかれるのは流石に私も傷付きますよ」

よよよ、と演技がかったよろめき方をするハルカ。白々しい、と叫びたくなるのを一期は喉元で抑える。それに更に追い討ちをかける様にハルカは言った。

「過去の過失から逃げようとする姿は本当に見苦しいですねえ。謝つたらはいおしまい、で済む程世の中甘く無いですよ。被害者から大切な物を差し出せと言われた時、貴方は従えますか？ 今の貴方はただお菓子で釣ろうとしているのと変わりありませんよ」

ハルカは口元を手で押さえ、いびつに表情を歪ませる。一期は苛立ちながらも、睨み付ける事しか出来ない。

自分の弱い所を突かれた怒りと、謝るだけでは駄目ならどうすれば、といった戸惑いが一期の中で渦巻き刀を振るう先を曇らせる。詭弁と皮肉に満ちた彼女の調子に乗せられていた一期は、冷静さを欠いたまま口を開こうとし――

「糞姉貴、いい加減にしろ」

「二期、大丈夫か!？」

飛び込んで来た二つの声に口の動きを止めた。背後を見ると、透明な傘を差した獅子王と石切丸がこちらに駆け寄って来ていた。二振りとも全力で走って来たのか、荒く息をしている。もう一つの声に反応したハルカの声が、つまらなさそうに降って来た。

「何よ愚弟、ここまで来て何の用事?」

「店主が呼んでる、いい加減戻って来いとき。まったく、面倒事起こしやがって……すんません、一期さん。不快だったでしょう、糞姉貴と話すの」

抜刀している一期を見てもう一つの声の主、サトルは彼に紙を手渡す。見ると「おつまみ一品サービス」と書かれたクーポン券だった。クーポン券を渡した後、サトルは申し訳無さそうに目を伏せた。

「その様子じゃ、糞姉貴に色々言われたみたいですね。糞姉貴の戯言をあまり真に受けなくてくれると嬉しいっす。……本当はもつといの渡したかったんですけど、手持ちがそれしか無くて」

「……有り難く受け取りますね」

うす、と言った後、サトルはハルカに行くぞ、と告げ黒い傘に顔を隠す。ハルカは木から降り立ち、しばらく歩いてから置き土産にこう言い残した。

「二期さーん! 狸々木庵をぐ鼻屑にお願いしますねー!」

遊び尽くした子供の笑みを浮かべてハルカは手を振る。先程の雰囲気など無かったが如く、明るい看板娘の声で店の宣伝をしてのけた彼女は、足取り軽く去って行く。

納刀した一期は、息を整えた石切丸に話し掛けられる。

「二期さん、抜刀していたって事は……サトルさんの言う通り相当きつい言葉を投げかけられたらしいね」

「……私は、秋田に許されない事をした。分かっているんです。ですが、……っ」

「あいつの言う事を気にし過ぎるな。こうして心を乱しているのを見れば、あいつの思う壺だ」

獅子王がハルカの去った方向を睨んでそう言った。その言葉を受けても、一期の心は風ぐ事は無かった。刀を握る手からは力が抜けないのに、今にも崩れ落ちてしまいそうな程足元が覚束ない。獅子王は石切丸と顔を見合わせ、それから一期の背中を軽く叩いた。

「そう自分を責め過ぎるな。一期は自力で秋田の事に気付けただけ上等なんだよ。……俺達がお前を追いかけて来たのは、少し秋田の……秋田達の事を詳しく話そうと思ったからなんだ」

「達……？」

そう、と石切丸が首肯し、それから提案する。

「ここじゃ落ち着かないだろうから、場所を移そうか。少し長い話になるけど、時間は平気かい？」

「はい」

「よし、じゃあ行くか」

三振りには森の外に出て、人が行き交い始めた城下町を歩く。

秋田と、彼と同じ様な刀達の事を知る事が出来れば、何か糸口が見つかるとだろうか。暗い思考が抜けないまま、一期は二振りの後をついて行った。

春光隊の二階にある一室で、三振りの刀が話していた。

「大丈夫か、秋田。悪い、いきなり突っ込んだ事聞いて」

「……はい。すみません、泣いてもどうしようも無いのは分かっているのに……」

「泣ける時は泣いちやうのが一番だよ。まああまり大声だと近隣の家の人とかがびっくりしちやうと思うけど」

目を腫らして俯いている秋田の頭を鯨尾は撫でる。葉研はティツ

シユ箱を手渡し、ノートに何事か記入し始めた。秋田はそれを横目で見ながら、ティツシユで鼻をかんだ。

とんとん、と階段のある方向から複数の足音がする。その後ドアをノックされて、はい、と鯰尾が返すとドアが開いた。ドアを開けた歌仙は、後ろにいる三振りに先に中に入る様に勧める。

「三振り共、秋田とは初対面か？ なら、挨拶してくれ」

「え、えっと、初めまして、秋田。僕は、五虎退です」

「僕は小夜左文字。……目が腫れているけど、大丈夫？」

紙コップを手にしている長谷部に促されて名乗る「施設利用者」は、秋田の表情を見て心配そうに見つめる。秋田は目を袖で拭い、顔を上げた。

「……秋田藤四郎です。初めまして」

それだけ言うと秋田は膝に顔を埋めてしまう。おろおろとする五虎退とただじつと見る小夜に、鯰尾は座布団を敷きながら言った。

「まーとりあえず全員座って座って！ どこでもいいよー、後飲み物も取ってこないと！ ちよつと待ってて下さいね！」

「鯰尾、飲み物は持って来たよ。林檎の果汁なんだけど、秋田は大丈夫かな？」

「……はい」

「よし、じゃあ俺が配ろう」

長谷部が重ねられた紙コップを外して、歌仙がジュースを注ぎ全員に手渡しに行く。行き渡ったと分かると歌仙はドアから近い座布団の上に座り、ぐるりと辺りを見渡す。

「さて。こうして集まって貰ったのは、秋田、五虎退、お小夜の三振りに自分の事を理解する手助けをしようと考えたからなんだ。君達には他の刀剣男士とは違う特性がある事は、何となく感じているだろう？ その解答の一例を、これから話そうと思う」

五虎退と小夜は首を傾げているが、秋田は顔を持ち上げて問う。

「……僕は、他の方とは違うんですか」

その表情は不安と何かに縋る様な物だった。それに微笑んで歌仙は答える。

「うん、少しだけね。君は刀剣勇士でもあるし、そうじゃないとも言える。その点から君は良くない扱いを受けてきたのかもしれない。だからと言って、君がこの世界にいてはいけないと言う訳じゃないんだ。君の様な存在は、今も生きている。これから話す事は、ある存在が自分の特性を受け入れるまでの話だ。少し長い話だけど、聞いてくれるかい？」

五虎退と小夜は理解しきれていないながら、秋田は膝の前で組んだ手を握り締めながら頷いた。

「それじゃあ、始めよう。――まずは、僕から話そうか」

カラオケボックス「ビンカ・マジョール」の一室。店員がワンドリンクを運んだのを見送ってから、石切丸はグラスを持った。

「……まず前置きとして、私と獅子王さんは一連の出来事に区切りが付いてから春光隊の一員になった。だから今から話す事はほとんど伝聞だ。事実とは多少異なる事もあるかもしれない」

獅子王と一期もドリンクを飲み始める。獅子王はストローから口を離して付け加えた。

「でも、この事は秋田達にも繋がる事だからな。結構重要な話だぜ？」

それと、この話は出来る限り口外しないで貰えると助かる。……本当は広めたい所なんだけど、色々しがらみがあつてさ」

「その……春光隊の審神者殿の話なら以前伺っておりますが、それは別の話になるのでしうか」

「少し違う、けれど重なる所もある話かな。えーと、誰の話から始めようか」

石切丸がうーん、と考え込んでいると、獅子王がグラスをテーブルに置いてから提案する。

「鯨尾の話からはどうだ？ 時系列的に一番早いだろ」

12—3 「『彼』が訪れるまで」

Witness / 歌仙兼定「邂逅」

瑞々しい青葉が月に向かって伸びている、ある晩の事だった。ごつた返している自分の部屋を片付けていた歌仙は、ひよつこりと現れて顔をしかめた愛染に告げられる。

「うわ、凄え事になってる……。つと、歌仙。主さんが呼んでるぜー」「主が？　こんな遅くにどうしたんだろう」

「そりゃこつちの台詞だったの……。今から片付けて。つーか物多過ぎだろ」

「実は昼からやってたんだ。でもどれもこれも、大切な物だからね。ありがとう愛染、主にすぐ行くと伝えてくれ」

少しは減らせよ、と言って愛染は去って行く。歌仙は戦装束に身を変えてから部屋を出た。

時刻は午後十時半。何かあったのだろうか、と思いながらも審神者直々の呼び出しで、しかも呼びに来た愛染は平静としていた。審神者に問題が起こった訳では無さそうだ。もしかしたら、今から出陣なのだろうか。

考えながら歩いていると執務室の前に着いた。中にいるであろう審神者に声をかけると、中に入る様に告げられる。障子を開けると、文机と筆筒、文机の上にある歌仙チョイスの花器しか家具の置かれていない部屋が目に入る。審神者はもう少し物を増やしてもいいのではと歌仙は思っているのだが、これで充分だと彼女は譲らない（花器は半ば強引に歌仙が手渡した物である。戸惑っていた審神者はその値段を聞いて青ざめ、必要以上の金を使った罰として小夜にはしばらく冷たくされたが）。

一連の思考を隅に置いてから審神者の前に座り、歌仙は彼女に尋ねた。

「どうしたんだい、主。新たな敵が出たのかい？」

「いえ、違います。……実は、歌仙さんにある場所へ行くのに付き添って貰いたいんです」

「……こんな遅くに？」

「ええ、今からお会いする方はなるべく人目につかない時間帯がいいらしくて、この時間に。詳しい事は道中で説明します、お願い出来ますか？」

彼女の様な子供が出歩くのには不安しか無い時間だが、一人で行かせるは以ての外だ。変な事に巻き込まれていないといいが、と思案しながらも歌仙は頷いた。

*

「刀剣男士の引き取り？」

月光に照らされながらも仄暗い道をじやり、じやりと音を僅かに立てて歩きながら、歌仙は審神者の話を聞いていた。微かに吹く風が審神者の顔を覆う紙の面を揺らしている。審神者は物憂げにそうです、と言った。

「先日演練をした際にお問い合わせされました。どうも今日引き取る方は、引き取りを頼んだ審神者さんと気が合わないみたいです。それで審神者さんとピリピリしちゃうと、他の刀剣男士さんともピリピリしちゃうみたいで、その……」

後半になるに連れて審神者が口ごもっていく。ある程度察した歌仙は大きいため息をついた。

「……要するに本丸の雰囲気が悪くする刀の厄介払いじゃないか。冷たい様だけど、主が引き取り手になる必要は無いだろう？」

「……本当に困っている様だったので、つい……。それに刀剣男士さんの練度はかなり高いです、即戦力になると思っただんですが……」

「具体的な練度は？」

「九十一です」

なるほど、と歌仙は得心する。それはすぐに欲しい戦力だ。

今現在、本丸の練度は平均して六十前後。決して低い練度では無いが、九十一となれば大幅な戦力の底上げが期待出来るだろう。練度が高い刀剣男士に影響されて、本丸の平均練度も上がるかもしれない。

——問題は、当の刀剣男士の性格なのだが。

少し先に大きな木が見えてきた。審神者があそこです、と指定され

た場所を指し示す。近付くと、木の下に三つの影があつた。審神者と歌仙が来た事に影の一つが気付くと、残り二つの影も顔をこちらに向けた。

審神者が和服を着た若い男に頭を下げる。

「遅くなって申し訳ありません」

「いやいや、こちらこそ遅くに申し訳無い。早速だが、引き渡しを始めよう」

和服の男——引き渡し審神者がそう言うのと、すつと前にその刀は進み出る。引き渡し審神者は改めて、その刀の名を口にした。

「へし切長谷部だ。少し性格に難があるが、貴殿の本丸の強い戦力になるだろう。よろしく頼む」

刀——へし切長谷部は軽く礼をし、審神者と歌仙に顔を向ける。

歌仙はその姿に背筋を凍らせた。長谷部は目に光が無く、目の奥にどろりと淀んだ感情が見て取れた。それだけでは無い。全体的に表情が暗く、姿勢もいいとはとても言えず、所在無さげに刀を両手で握り締めている。演練で見かけた背筋が伸びている勝気なへし切長谷部とは、何もかもが違っていた。

審神者もそれに気付いたらしく、引き渡し審神者に恐る恐る問いかける。

「あの……彼、何かあつたんですか」

「……ああ、やはり普通の長谷部には見えないか。俺の本丸では出来る限り普通に接して来たつもりなんだが……俺もよく知らないが、あちこちの本丸を転々として来たらしい。そこで何かあつたのだろうか」

引き渡し審神者も表情を曇らせている。隣にいる加州清光は、少し目を逸らしていた。かなりの問題物件の様な気がするが、審神者が引き取ると言ってしまったのだ。彼女は言った事をなかなか覆さないし、やっぱり止めた、と言つてしまえば相手の不興を買いかねない。それは審神者の性格上、避けたい所だろう。

審神者同士で契約先の変更手続きを行い始め、手持ち無沙汰になつた歌仙は引き渡し審神者の加州に話しかけた。

「何か彼について注意すべき点はあるかい？」

「……そつちは手入れ部屋をよく使ってる？ 使ってないなら長谷部が行方をくらませた時、手入れ部屋を探すといいよ。あの長谷部、人気の少ない所が好きみたいだから」

審神者との共通項が生じた事に歌仙は驚いた。審神者も人気の無い所で過ごしている事がある。転々として来た本丸の中で、酷い虐待を受けた所もあつたのだろうか。

改めて長谷部を見る。長谷部はぼうつと一步前に出た所から動かずに突っ立っていて、視線もどこを向いているのか分からない。ただ、深い沼の様な絶望の中にいるであろう事は何となく分かった。

手続きが終わり、引き渡し審神者と加州はそれじゃあ、と言つて去つて行く。後にはぼうつとした長谷部と、審神者と歌仙が残された。

「それじゃあ、行きましようか」

「……はっ」

どこかぼやけた声で答えてから長谷部は審神者について行く。歌仙は審神者の隣に並びながら長谷部を盗み見る。とぼとぼ、といった言葉が似合う歩き方も普通の長谷部らしく無い。希望が無さそうに俯いて、縋る様に刀を握り締めている。

歌仙が長谷部を見ていた事に気付き、審神者がぽつりと呟く。

「……私、長谷部さんと良好な関係を結べるでしょうか」

審神者も以前程では無いとは言え、今も健全とは言えない精神状態だ。誰かと仲良くなる方法などあまり知らない彼女もまた、不安なのだろう。歌仙は審神者にしか聞こえない様にして、安心させようと微笑んだ。

「大丈夫だよ、君は僕達が認めた主。彼に『へし切長谷部らしき』があるのなら、きつとすぐに馴染んでくれるさ」

そうは言つたものの、歌仙は何となく感じていた。——少し難儀な事になるだろうな、と。

Witness / 鯰尾藤四郎「彼の残骸1」

ガツタン、ゴトン。ガタガタ、ガタン。

自室の中から響く音に不審がりながら風呂上がりの骨喰は障子を開ける。その中では――

「あつ、骨喰。湯加減良かったらろー?」

先に風呂に入り終わった鯨尾が何故かテレビを四方に動かしていた。テレビ台に足を掛け、テレビをずらしたり傾けたりしている様は奇怪極まり無い。異常な行動に怪訝な顔をして、骨喰は尋ねる。

「……何をしているんだ、兄弟」

「いやー、ここらの放送局ってあんまり面白い番組やってないじゃん。さつきたまたまてれびにぶつかった時、新聞に載って無い、多分現世の番組が映ったんだよ。それでてれびを動かしていれば、いつか映るんじゃないかなって!」

「外まで音が響いていたぞ。亥二つを回っているし、他の奴が眠れなくなるからもう止めないか」

「待ってもうちよい……あつ、映った!」

ガタガタ動かしていると、他本丸の様子を映したチープなバラエティ番組から子供達の様子を移したドキュメンタリー番組に変わる。鯨尾は珍妙な体勢のまま番組を見始め、骨喰も部屋に入ってちやぶ台の前に座りテレビに目を向ける。

『……少子化解消法案、後に人々の間で《落とし子政策》と呼ばれる法案によって支援金の支給等子供を産めば産む程優遇される制度になると、一時的に子供達の数は増加しました。しかしすぐに枠組みは崩壊し、後には育児放棄されたり虐待を受ける様になった子供達だけが残されました。児童養護施設は依然満員状態が続いており、町中に放置された子供達が溢れ返っています。……』

テレビの中で、ぼろぼろの服を着た子供達が路地裏で菓子を食べている。顔にモザイク処理を施された子供達は、しかし見える箇所だけでも生きる過酷さが窺えた。取材されていた町の治安は良いとはとても言えず、荒れた町並みに暗い顔の子供を怒鳴りつける声と、悲惨な光景が広がっていた。

「……番組変えられるかな」

「……りもこんはここだ。適当なのでいいな?」

「うん」

骨喰がりモコンのボタンを適当に押すと、今度はお笑い番組が映し出された。鯰尾は骨喰の近くに移動し、ちやぶ台に頬杖をつく。先程の番組が頭に引っかけかり、テレビの中で時折起こる笑い声になかなか二振りは釣られない。

「……現世の様子を映した番組を見る限り、あれが全てだとは思わな
いけどさ。でも、確かにああいう子供達はいるんだよな」

「……そうだな」

「あの子達、これからどうなるんだろう」

「……さあ」

それきり、二振りは黙り込む。テレビはいつの間にか「こちら側」の番組に戻っており、短刀達が楽しく遊んでいる風景が映っている。自分達の足元がぐらついている様な気がして、二振りはテレビを消す。そしてちやぶ台を片付け、布団を敷き、眠る体勢に入る。

「おやすみ、兄弟」

「おやすみ、骨喰」

鯰尾は電気を消して、目を閉じる。しばらくすると隣から寝息が聞こえて来て、それを子守唄にして鯰尾も夢の中へ旅立った。

——鯰尾が異様な夢を見始める様になったのは、この夜からだっ
た。

*

——ん、あれ、ここは……。

鯰尾は奇妙な感覚と共に目を開ける。周囲を見回すと、見慣れない
風景があった。

小さな台所、小さなリビング、小さな玄関。台所は洗われていない
食器が山になっており、リビングには服やごみが散乱している。

——ここ、どこだ？

きよろきよろとしていると、足下に小さく蹲る存在を見つける。

それは、子供だった。黒いぼさぼさの髪を伸ばしっぱなしにし、肌
も身につけているTシャツも薄汚れている。身体中には絆創膏や包
帯があちこちに付けられていた。ちびちびと菓子を食べているその

子供は、痩せ細っているのもあって一見男か女か分からなかった。

——おーい、ちびすけー？

手を伸ばした所で、自分の手が透けている事に気が付いた。己の体を見るとどこも半透明で、自分の存在はこの子供に気付かれていないと考える。その証拠に、子供の目の前に座つても子供は微動だにしない。さてどうしたものか、そう途方に暮れていると。

ばん、と玄関のドアが荒々しい音と共に開く。音の方向を見ると、着飾った若い女性と小さな——ぼさぼさの髪だがワンピースで性別が分かる——女の子が玄関から入って来た。足音も荒く女性は洗面所と思われる部屋に消えて行く。女の子は蹲る子供に駆け寄った。

「お兄ちゃん……！ 大丈夫？」

女の子の言葉でようやく、子供が男の子であると分かる。それ程、彼は痩せ細っていたのだ。男の子は女の子の頭を弱々しく撫でて、力無く微笑んだ。

「大丈夫、トモエ。それよりも、俺に近寄らない方がいい。あの人の機嫌が悪くなったら大変だ」

「そんな事より、お兄ちゃんの方が大事だよ！ ごめんね、ご飯作れなくて……」

「気にしないで。まだ作るには早いから。怪我は無い？」

「うん、平気——」

女の子が言い切る前に、男の子の体が吹っ飛んだ。女の子も鯨尾も、目を見開く。鯨尾は何が起こったか分からなかったが、女の子の叫び声で理解した。——してしまった。

「お兄ちゃん!! ……お母さん、お兄ちゃんをいじめないで！」

奥の方に吹っ飛ばされた男の子は、脇腹を押さえて苦しそうに呻いている。女の子は手を広げて女性——男の子を蹴り飛ばした人物を遮ろうとした。しかし、所詮は子供。押し退けられて、その場に崩れ落ちる。

「ぎゃっ……！」

「——まだ生きてたの、化物」

こちらまで罵倒された気にさせる低く冷え切った声。その表情も

人間を見るそれでは無い。男の子はその声に萎縮しながらも頭を持ち上げる。

「……お母……さん……痛つ……!」

「その呼び方は止めろと言ってるわよね? 化物の癖して、まだ人間ぶる気なの?」

男の子の脇腹を踏み付け、尚も罵る女性。嫌悪を隠さずにいる女性の足下に取りすがり、女の子は懇願する。

「お母さん、止めて! お兄ちゃんお腹空いてるんだよ!? あんまり動けないのにいじめちゃ駄目だよ!」

「トモエは黙ってなさい。こいつを兄呼ばわりして、あんたまで化物になりたいの?」

女性は女の子の言葉をつ突っぱね、男の子を殴り罵倒を続ける。不思議な事に、鯰尾の耳に女性の罵倒は途中から届かなくなった。悲痛に顔を歪めた女の子の泣き声も聞こえない。次第に景色は遠のき、意識も暗転する。

けれど、それで良かった。——罪の無い子供への虐待なんて、鯰尾は見たくなかったのだから。

*

「兄弟、兄弟!」

揺さぶられる感覚に目を開けると、視界いっぱい骨喰の顔が広がっていた。表情を滅多に変える事の無いその顔に、懸念の色を乗せている。掠れた声で、鯰尾は尋ねた。

「……あれ、骨喰……どうしたの?」

「どうしたって……泣きながら魘されていたぞ。枕が濡れているのに気付いていないのか?」

起き上がって枕を見なくても、頬を通る風の冷たさに自分が泣いていた事に気が付けた。起き上がり、枕に触れる。枕は所々濡れており、やはり泣いていた事の証明になっている。左右を見渡し、いつもの自室に明るい朝日が差しているのを確かめて息を吐いた後、鯰尾は片手で顔を覆った。

「うわあ、俺引きずられ過ぎでしょ……!」

「……引きずられ？」

「……見た夢が、昨日見た番組の内容に似ていたんだ。相当悲しかったのかなあ、俺……」

「そうか……」

骨喰も昨日のドキュメンタリーを思い出したのか、表情を暗くする。

現世のどこかであるかもしれない、壊れた家族の夢。目覚めは最悪と言っている。あまりにもリアリティのある夢だった事が、更にダメージを与えている。よろよろと立ち上がって、身支度を整えようとしている鯨尾を、骨喰は心配そうに見つめていた。

一通り身支度を整えると、鯨尾は振り返っていつもの明るい笑顔を見せる。

「まあ、夢は夢だし。あまり気にしない様にするよ。過去なんか――」

「振り返ってやらない、か？」

「そうそれ！」

ははは、と笑う鯨尾に骨喰もほっとした雰囲気醸し出す。朝餉に行こう、と鯨尾は骨喰の手を引いて部屋を出る。

大広間には既に刀達が集まって談笑を始めていた。二振りが粟田口派が集まる席に座ると、秋田が気付いてはあっと明るい表情を浮かべる。

「骨喰兄さん、鯨尾兄さん、おはようございます！」

「おはよう、秋田」

「おはよう。何か随分ご機嫌だね？」

周囲を見渡し、内緒ですよ、と秋田が二振りの耳元で囁く。

「主君が新しい方を連れてくるのを見ちゃったんです！ きつと今日の夕餉は豪華になりますよ！」

「……新しい刀？」

「主、鍛刀したのかな？ ……夜中に？」

訝しむ骨喰と鯨尾を横目に、秋田はおむらいすーおむらいすーと歌っている。その気の抜ける歌に聞き入っていると、審神者が大広間に入って来て一礼した。

「皆様、揃っていますね。おはようございます」

それぞれが審神者に挨拶をすると、審神者は真面目な顔で切り出した。

「皆様にお知らせするのが遅くなりましたが、昨日新しい方がいらつしやいました。他の審神者さんから譲り受けた方で、練度も高い事から戦力の向上になると期待しています。——それでは、皆様にご挨拶をお願いします」

審神者が振り返ると、静かにその刀剣男士は入って来た。その姿を見て異常を感じた刀達は、ひそひそと囁き合い様子を窺っている。骨喰も、鯨尾に小声で言う。

「あれは……へし切長谷部、だよな？」

「……うん。その筈だけど……」

その長谷部は、少し俯きながら大広間に現れた。服の裾を掴み、目に生気を感じさせないその姿は演練で見かけた長谷部とは程遠い。確かにそれは異常だ。けれど、鯨尾には更に気になる事があった。

「……へし切長谷部だ。よろしく頼む」

何故だろう。

——彼の姿が、昨日夢で見た男の子と似ている気がしたのは。

12—4 「w i t n e s s / 薬研藤四郎 『出来損ないの自分に』」

大広間中に囁き合う声がする中で、薬研藤四郎は大広間の入口に立つ、かつて同じ主の刀だったへし切長谷部を観察していた。

へし切長谷部。勝気で皮肉屋、物騒な物言い。けれど純粋で心に秘めている忠誠心は本物。それが世間一般のへし切長谷部の性格だと認識している。薬研もまた、それからさほど外れていない印象を抱いていた。

しかしどうだろう。現れた長谷部は顔を下に向け、大広間にいる刀達と目を合わせようとしなない。どこかおどおどして勝気とはかけ離れた様子に、薬研は推察する。

——前の本丸で虐められて、性格が歪んだか。

心を持ったばかりの刀が虐めや虐待を受ければ、容易く性格は歪むだろう。虐待を受けていたと思われる審神者を世話して来た薬研は、長谷部もそうなのかもしれないと判断した。

さて、どうしたものか。かつて同じ主を戴いた仲間を、どの様に扱おう。静観するか、介入するか。長谷部を見ながら考えていると、審神者が内番の編成を発表していた。慌てて隣の五虎退に確認すると、薬研は今日の内番担当に含まれていないと分かった。ほう、と息をついた直後、審神者が出陣編成を発表し始める。

「今日は三条大橋に出陣して頂きます。編成は隊長に薬研藤四郎さん、以下今剣さん、愛染国俊さん、厚藤四郎さん、鯰尾藤四郎さん、へし切長谷部さんです。長谷部さん、早速で申し訳ありませんが、よろしく願いますね」

「…………お任せ下さい」

やはり覇気の無い返事に刀達は訝しむ。審神者と長谷部が席に着くと刀達は疑問を脇に置いて、食前の挨拶をしてから箸を持った。

薬研は、長谷部の更なる異常に気付いて箸の進みが遅くなっていた。

——出陣編成に組み込まれたのを聞いた時、彼の顔が一瞬強張った事に。

*

今回の戦場である三条大橋は、橋の上の敵は弱いが大橋と名が付くだけあって戦闘回数が多い。その為短刀は兵を消耗しやすく、また時折橋の上にも槍が出る為撤退に追い込まれる事が多い。しかし夜戦であるので運が良ければ遠戦は夜の闇に紛れて回避が出来る。三条大橋は、審神者の采配が問われる戦場の一つであると言える。

「ふふふ、きょうこそはてきたいしようをうちとりますよ！」

「潜んでなかなか出て来ないからなあ。……あっおい愛染、飛び出すなよ！ まだ偵察出来てねえんだぞ！」

「離せ厚！ 祭りの気配を逃すオレじゃねえ！」

「だから情報が出揃ってからだ！」

わあわあと賑やかな短刀三振りを見てから、薬研は背後にいる鯰尾と長谷部に目を向ける。

「鯰尾兄、長谷部の補佐は頼んだ。長谷部、あまり功を急ぐんじゃねえぞ」

「分かった、こっちは任せて」

「……」

鯰尾がやけにしつかりと頷いたのも気になるが、黙ったまま目を伏せて刀を握り締めている長谷部も気がかりだ。しかしここは戦場。敵の気配が近付いた事を察して、薬研は声を張り上げる。

「陣形は分かったか？」

「わかりましたよ、かくよくじんです！」

「よし。こっちは魚鱗陣でいいな、大将？」

審神者からの了承が得られると、薬研は突撃の許可を隊員に与える。真っ先に今剣と愛染が飛び出し、遠戦を避けながら敵に組みついて行く。厚はその後に続いて、敵の懐に入って刀を通す。鯰尾は敵と切り結び、力押しで斬り伏せた。

薬研も周囲を窺いながら戦闘に入ろうと、背後にいる長谷部に振り返る。

「長谷部、鯰尾兄の所に——」

そこで、長谷部の様子が更におかしくなっている事に気が付いた。抜刀はしているものの、両手で柄を握り締めてカタカタと震わせている。夜闇の中でも顔が青ざめていると分かる程で、異常を察知した薬研は長谷部の下へ駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

長谷部の目は薬研を見ていない。その視線の先には——歩み寄って来る敵の打刀。視線を固定させたまま、長谷部はか細い声で何事か呟いている。薬研が耳を澄ませると、こう聞こえた。

「……違う、あれは敵、味方じゃない、あいつじゃない、なら斬らなきゃ、斬らなきゃ、殺される、痛いのは嫌だ、嫌だ——」

錯乱した様な言葉に声を失っていると、長谷部は敵の打刀へ駆け出し、素早く斬り捨てた。敵の打刀が、風に乗ってその体、血さえもさらさらと消滅させて行く。

見事な剣技だ、と感心する。「圧切」の名に相応しい戦い方は、流石としか言い様が無い。しかし彼は、誇らしくするでも平然としているでも無く、何か化物を見たかの如く顔を青ざめさせ体を震わせている。それから間も無く、長谷部は荒い息をしながらその場にしゃがみ込んだ。

「長谷部?! ……鯰尾兄、そっちはどうだ?!」

「こっちは無事に終わったよ。……あつ、長谷部さんの事忘れてた!

そっちは——」

「長谷部の様子が変だ、すぐに撤退するぞ!」

「えっ!? ……皆、帰還準備を!」

返り血に塗れている短刀三振りに声をかけ、鯰尾は薬研達の下へ集める。集まった三振りの短刀はこれ以上戦えない事に不満の声を上げかけるが、頭を抱える長谷部にぎよつとして三者三様の言葉をかける。

「はせばさん、だいじょうぶですか!」

「おいおい、真つ青じゃねえか……さつきまで何とも無かったよな?」

「ああ、そうだな……薬研、オレは体調の事はよく分からないから、長

谷部の事頼んだぞ」

ああ、と頷き薬研は帰還準備を進める。景色が歪み本丸の正門に戻ったと分かった直後、長谷部は糸が切れた様に崩れ落ちた。本丸内から駆けつけた審神者は狼狽し、薬研に頼んだ。

「や、薬研さん、すぐ医務室に……！」

「ああ、分かっている。鯨尾兄、手伝ってくれ」
「了解」

鯨尾が長谷部を背負い、薬研は先に医務室の準備をしようと走り出す。その直前、

「ごめ……なさ……」

果てしなく弱々しい、そんな声が聞こえた。

*

医務室は、手入れ部屋を使うまでも無い怪我や病気をした際に用いられる。医務室の主は薬研。少々医術の心得がある彼は風邪や熱中症などなら何も見ずに手当てやアドバイスをする事が出来るが――

――心の病なら、少し調べないとな。

医務室の扉を開け、ベッドの準備をしながら考える。心はとても繊細だ。丁寧に扱わなければ、症状が悪化しかねない。薬研に心得があるのは怪我や内科で診られる物だ。心の病は今の主の為に得た、後付けの知識になる。だから逐一確認しなければ、間違えた診断を下しかねないのだ。

ベッドを整え終わるとドアが開き、長谷部を背負った鯨尾が現れた。

「鯨尾兄。長谷部はどうだ？」

「気を失っちゃった。……長谷部さん、滅茶苦茶軽いよ。前の本丸で、ちゃんと食べてたのかな」

「色々懸念事項はあるが……とりあえず、そこの寝台に横たえさせてくれ」

薬研がベッドを指差すと、鯨尾はゆっくりと運んで起こさない様に慎重に横たえさせる。歯を食いしばり魔されている長谷部を、二振り心配そうに見やった。

「……歌仙さんも様子見に行くってさ。そりやそうだよね、新入りがいきなり倒れたんだから」

「大将も顔真つ青にしたしなあ……」

「……ごめんなさい、か。長谷部さんは……」

言葉をそれ以上紡げず、二振りは無言。長谷部の悲痛な声を聞きながら、互いに考えている事は何となく分かっていった。

——この長谷部は、何かが違うと。

*

深夜、ほとんどの刀が寝静まった頃。薬研は念には念を入れて、医務室で寝込んでいる長谷部の様子を見に行こうとしていた。薬研はずっと気にしていたが、出陣してこない周囲の刀は長谷部が倒れた事を聞くと最初は驚いていたが、次第に気にしなくなり、夕飯時には話題にも登らなくなった。まるで、最初からそんな事は無かったかの様だ。

薬研はそれを過剰に気を揉む性質のある審神者への配慮だと判断し、然程深く考える事は無かった。ただ、長谷部の体調は気がかりだった為、こうしてこつそりと廊下を歩いている。

医務室が見えて来た時、薬研の耳に音が届いた。苦しそうに咳き込むその音は、医務室に近付く度に明瞭になる。走って医務室の前まで行くと、液体がビニール袋に流れ落ちる音がした。薬研は急いでドアを開ける。

「長谷部！」

「……っ、げほっ、うえ……っ」

ベッドの上にいる長谷部は、脇にあつた袋に嘔吐していた。薬研の存在に気が付くと、ゆっくりと頭を持ち上げる。口の周りには吐瀉物が付いており、目に怯えの感情が浮かんでいる。

「……すま、ない……」

「そんな事言ってる場合か！ 何で早く呼ばなかったんだ！」

「……迷惑、かけるかと、思って……っげほっ、おえ……っ」

「とりあえず落ち着いたら洗面所行つてうがいだ！ 迷惑なんて考えるな、こういう時は一刻も早く呼べよ！」

長谷部の態度で確信する——この長谷部は虐待を受けていたと。

昔の仲間は助けなかったのだろうか。迷惑をかける、という物言いから周囲の対応の良さは窺えなかった。かつていた場所では、こうして密かに苦しんでいたのだろうか。苦しさをさらけ出せ無い程、彼は孤独だったのだろうか。

——ここに来た以上、そんな思いはさせねえぞ。

長谷部が孤独になれば、周囲に不健全な関係性を築き上げかねない。それは審神者の精神衛生上かなり良くない事だと言えるだろう。何より他者の感情と共鳴しやすい審神者の影響なのか、孤独の闇に沈む彼を想像してしまった薬研は彼を放置する選択肢を選べない。

誰もが安心出来る環境を整えなければ、審神者も刀達も苦しむ一方だ。

紙コップを持ち、長谷部を何とか支えながら、洗面所へ向かう。床が軋んで音を立てているのが煩わしい。よろよろと歩きつつ、薬研は長谷部に問いかける。

「長谷部。お前さん、脂っこいのは嫌いか？」

「……？ そんな事は無いが」

「そうか。今日の夕餉、結構脂っこかっただろ。だから気分が悪くなったのかと思ったんだが」

「いや……そうじゃなくて、……」

長谷部は口を開閉させた後に言葉が見つからなかったのか、黙り込んでしまう。薬研は追及せず、視線を前に向けた。

洗面所に到着した薬研は長谷部に紙コップを渡し、うがいをする様に指示する。長谷部は何も言わずに従い、口をゆすぎ、ガラガラと喉を洗う。それを数回繰り返し、はあ、と息を整えた長谷部は大分顔色が良くなっていた。

「……いつもこうなんだ。戦場に出ると、必ずこうなる」

ぽつりと長谷部が零す。薬研は軽く驚きながらも真剣な表情で先を促した。長谷部は紙コップを握り潰し、内心を吐露し始めた。

「短刀や脇差は大丈夫なんだ。人の形をしていないから。打刀以上になると、人の形をしているだろうか？ ……あれを見てしまったら手が

震えて、逃げたい衝動に駆られてしまうんだ。手合せなら平気だと思っただけど、……斬りかかって来られたら、駄目で……っ！ 何でか分からない、前の本丸でも治せと言われたけど、どうすればいいか分からないかった！ それが悪しくてたまらない！ ……俺は、出来損ないの刀なんだ……！」

一気に恐怖を吐き出し、涙を落とし始める。すすり泣く長谷部の背を撫でながら、薬研は今度こそ動揺していた。

——好戦的な筈の長谷部が、人型を斬る事に怯えている。

薬研が演練で見て知っている長谷部というのは、戦場に積極的に出たがり、真つ先にこちらへ突っ込んで来る鉄砲玉の様な存在だ。ギラギラとした顔付きでこちらに斬りかかる姿は、その装束とは裏腹に血の花が良く似合う。何度も演練場で長谷部と当たって来たが、誰一振りとして例外は存在しない。——少なくとも、人型を斬る事をこれだけ恐れる長谷部は、見た事が無かった。

長谷部には有り得ない性質を持つ、長谷部と同じ姿をしている存在。普通に接していたら困惑どころの騒ぎでは無い。そんな彼をどう扱うか背中をさすりながら考えて——結局、薬研は深く考える事を止めた。

——こいつはこいつだ。人斬りを怖がる性格だって、個体差の範囲に含まれるだろう。それを尊重しようじゃないか。

「戦うのが嫌いな刀は出来損ないか？ そんな事は無いだろう。いいじゃねえか、時間は嫌になる程あるらしいぜ。その間の時間で治すもよし、別の楽しみを見つけられるもよしだ。今はもう斬るだけの存在じゃないみたいだしな、俺達は」

「……でも、敵を斬る事が、顕現した理由なのに……」

「どこぞでは時間遡行軍との戦いに参加せずに、傷付き疲れた刀達を保護している本丸もあるらしいぜ。俺たちは戦う、お前さんはこの本丸の運営を手伝う。役割分担って奴だな。そんな感じでいいんじゃないか？」

「……そう、かなあ」

「そうそう。……だからそう自分を責め過ぎるな。見ているこっちま

で悲しくなつて来るからな」

背中をぼんぽんと叩き、長谷部を見上げる。不安げに揺れる瞳から涙を一つ落とした後、長谷部は目を袖で拭った。

「……ごめんなさい」

「あー、その謝り癖も治した方がいいな。今、お前さんは何か悪い事をしたか？　ここまで付き合つた事に関してなら、これも俺の仕事だ。謝られる筋合いは無えよ」

濡れている目をぱちくりとさせた後、長谷部は潰れた紙コップをいじりながら薬研にたどたどしく言い直した。

「……ありがとう」

「おう、それでいい。さ、吐き気は治つたか？　医務室に行つて、どの薬飲むか決めないとな」

薬研は身を翻し、洗面所から出た。長谷部が雛の如くついて来ているのを確かめた後は、振り返らずに進んだ。

『そう、かなあ』

『ごめんなさい』

『ありがとう』

——そんな長谷部の言葉遣いに違和感を覚えた事を、悟られない様に。

「過去に何の関係も無い夢……私も見た事があります」

「そうか。何回にもわたつてだな？」

「はい……長谷部殿に関わる話という事は、その夢も重要なのですね？」

「その通りだよ。長谷部さんは勿論、秋田さんにも直結する話だ。鯨尾さん達は長谷部さんを特殊な形で迎え、気にかけていたからその異常性に早く気付けたみたいなんだ。私が来た頃には長谷部さん、すっかり馴染んでいたからね。何も知らなかった私は少し困惑したよ」

「二期が顕現して間も無い頃の石切丸や俺と同じ情報量だとしたら、そつちの審神者は何も知らないんだろうな。知っていたらとつくに手を打っている筈だ。……広めたいのか隠したいのか曖昧なんだよ

な、政府も」

「ずず、と獅子王がストローでドリンクを啜る。備え付けのテレビには、有名アーティストとのコラボCMが映し出されていた。」

「……長谷部さん、戦うのが嫌いだったんですか？」

「正確には刀を握れない、だな。今もそうだ、長谷部は遠戦でしか攻撃出来ない。戦える様になっただけ、少し良くなったのかね。……少し複雑だが」

「え、えつと、戦えなくて、酷い目に遭ったりとかは……」

「後で長谷部さんに聞いたら、転々としてきた本丸の中で酷い扱いを受けていた所もあったみたいだよ。腫れ物に触る様な扱いを受けていた所もあったらしい……結構色々だったんですよ？」

「そうだな」

「えつと……長谷部さん、イメージ違いますね」

「正直に言っていていいよ、普通のへし切長谷部とかけ離れ過ぎだって。当人ももう受け入れているしね」

「その通りだけど、俺が言うべき事じゃないのかそれ」

「大きくない部屋の中、敷き詰められた座布団の上で三振りの施設利用者は身を乗り出す。春光隊の四振りはそれぞれの疑問に答えながら紙コップにジュースを注いで行く。」

再び満ちた紙コップに口を付けながら、長谷部は付け加える。

「まあ、あのひとが納得しているのかは分からないけど……でもこうしていられるのなら、ある事を許されているのかな」

「長谷部、あいつはあんたが消える事こそ許さないとと思う。あんたが倒れた時かなり心配してたんだぜ、あいつ」

「あいつ……？」

秋田が首を傾げると、薬研はおつと、と言って彼に申し訳無さそうな笑みを向ける。

「悪いな、急にこっちの話をしちまって。あいつの事も話して行くうちに分かると思う。それじゃあ、話を続けよう」

ぺたぺたと、廊下の湿り気は足の裏に張り付く。空から降る水の独特な音は、そろそろ一月ほどの長い付き合いになるだろうと感じさせる物だった。

風流を感じながらも歌仙はある部屋の前に立つと、勢いよく障子を開け放った。

「……やっぱりここにいたか、長谷部」

深くため息をつき、部屋の隅に縮こまっている存在——へし切長谷部に近寄り、こちらを見る淀んだ目と視線を合わせる。

長谷部がこの本丸に来て半月程。その間、様々な刀達から彼の異常性は聞かされていた。

曰く、戦場に出れば吐く程の戦い嫌い。

曰く、何かあればすぐ謝罪する謝り人形。

曰く、影が薄過ぎてすぐ見失う。

はじめは演練で見かけたへし切長谷部とはかけ離れた刃物像に皆戸惑った。だが薬研と鯰尾の両名からなされた「気にかけて方がいい」という進言で審神者は長谷部を戦場に出さずに、人手が少ない内番を任せる事に決めた。そして審神者の命によって「長谷部お世話係その一」となった歌仙は、すっかりその特性に慣れ切っていた。

そしてもう一つ。前の本丸の加州に言われた通り、長谷部はよく手入れ部屋にいた。人氣が少ない所の方が安心するという。確かに慎重な進軍をする本丸の方針のおかげで、手入れ部屋を使う機会はほとんど無いが——方が一という事もある。それに、彼には他の刀と接して馴染んで欲しいという思いがあるのも事実だ。現状はこの通り、影の薄さを利用して一振りでいる方が多いのだが。

長谷部は歌仙の呆れた目つきに体を震わせて、くぐもった声を出した。

「……何かあったのか？ ……ごめんなさ——」

「だからすぐ謝らない。軽く見られるよ。……主が呼んでいる、執務室へ行くよう」

「分かった」

立ち上がって自身の服の裾を掴み、歌仙の後ろを気配も薄くついて行く姿は、どこかふつと存在が消えそうな不安を掻き立てられる。これもまた、この長谷部の特性なのだろう。

大広間では短刀達が遊んでいる。歌仙にどこへ行くのか問いかけ、背後にいる長谷部を指差すとその存在に驚きながら納得される。短刀達でも長谷部の存在に気付きにくいのだ、打刀となると意識を集中させなければ認識出来ない。どこにいても、背景の一部にされてしまふのだ。これも何とか出来ないだろうか、と歌仙は嘆じずにはいられない。

執務室の前に到着すると、障子が開いていた。中で書き物をしている小さな審神者に長谷部を連れて来た事を告げると、彼女は筆を止めて振り返った。

「ありがとうございます、歌仙さん」

「開けているなんて珍しいね。こうもじめじめしていると、流石に閉め切る訳にはいかないか」

「そうですね。それと、雨の音が好きなのでよく聞こえる様に」

「なるほど、風流だね。……それはそうと主、僕達に用事って？」

歌仙が尋ねると、審神者がそうそう、と手を合わせる。

「歌仙さん、茶器を直して貰っていたそうですね。先程工房から連絡がありました、修復が終わったので引き取りに来て欲しいと」

「ああ、待っていたんだよ！ すぐに出向かないとー！」

「……俺は、何で呼ばれたのでしょうか」

興奮を隠さない歌仙の横で、所在無さげに体を縮める長谷部。審神者は長谷部に財布を差し出し、柔らかな口調で言った。

「長谷部さんも、たまには買物をしたらどうか、と思っただんです。

……長谷部さん、あまり物を持っていないでしょう？ だから、娯楽の物でも身につけられる物でも、何か好きな物を買ってみて欲しかったです。お金は、私が出しますので」

長谷部は何を言われたか分からないと言う様に呆然とする。審神者に強引に財布を手渡されて、されるがままに受け取った。歌仙はそ

の光景に、目を輝かせる。

「主……！ それは、僕も新しい骨董品を買っていいと言う事だね？」
「えっ、いや、それはちが——」

「ありがとう主、僕は嬉しい！ 長谷部、僕は主に喜びを示す歌を考え
るから、先に出かける準備をしていてくれ！」

「えっ……ああ、分かった……」

長谷部は何が何だか分からないまま、歌仙の勢いに押されて執務室
を出て行った。

長谷部の足音が遠ざかるのを確かめてから、歌仙は審神者に向き直
る。その表情は、子供を慈しむ「大人」の物だった。

「主、長谷部に何か楽しい事をして欲しかったんだろう」

「……お見通しですか」

「そりゃあ、君の一番初めの刀だからね。……君なりに色々考えたん
だろう、どうしたら長谷部が楽しく過ごせるのか。幸せになれるの
か。その一環として、今日僕と一緒に城下町に行かせようと思ったん
だね」

「……ご名答です。流石ですね」

審神者は紙の面に覆われていない口元を綻ばせる。穏やかな顔を
していた歌仙は、しかしすぐにその表情を懸念する物に変えた。

「君も、楽しい事をしていいと思うんだけどね。君は僕達に尽くし過
ぎている。まるで、僕達が君の主のようだ。……君の望みは今も変わっ
ていないのかい？」

審神者は、口を笑みの形にしたまま動かした。紙の面に覆われて、
表情の全貌は分からない。

「はい。……こんな私を主と呼んで下さる皆様の刃生を、満足出来る
幸せな物にしたい。それが、私の望みです」

だが心からそう願っている事は、その口調で分かった。

*

城下町は雨のせいでいつもより人通りが少ない。まばらに傘を差
して歩いていたり、店内に消えて行く人の顔も雨のせいかな程明るく
は無い。そんな中洒落た傘の下でホクホクとした顔をしながら歩く

歌仙の後ろを、長谷部はシンプルな傘を軽く傾け、目線を下に向けたままついて行っていた。

「いやあ、流石の腕前だね！ 長谷部も見ただろう、あの趣深い景色を！」

「……そうだな。機嫌いいな、歌仙」

「そりゃあ、あの様に見事なものを見せられたらね！ 長谷部も、もし茶器とかが割れたらあそこに頼むといいよ！」

「……考えておく」

返す声には覇気が無い。歌仙が振り返って長谷部の様子を見ると、彼は人にぶつかられてよろめいている所だった。ぶつかった人と謝罪し合い、長谷部は再びとぼとぼと歩き出した。やはりそこには、勝気という印象は見当たらない。そうそうぶつかる事はもう無い広い道なのに肩身が狭そうにする彼は、歌仙がこちらを見ているのに気が付くと、慌てて顔を上げる。

「……どうした？」

「いや、何でも。……ああ、あそこに雑貨屋があるね。少し覗いて行くか」

「分かった」

歌仙が歩く方向を雑貨屋のある方へ変えようと、長谷部も黙ってそれに倣う。軒下で傘を閉じ店のドアを開けると、純和風な外装に反して内装は現代風の物だった。女性客が五、六人品物を見たり手に取ったりして物色している。品物を見ると、可愛いポーチやバッグ、小瓶や食器などが置いてある。小物も並んでいる様で、女性客の一人がキーホルダーを両手に取って見比べていた。

うーん、と歌仙は思案する。自分は海外のセンスがよく分からない。この店が和風の雑貨を取り扱っていれば良かったのだが、残念な事に海外風の物ばかりだ。加州や乱などが来たのなら、喜んで店内を見て回るのだろうか。

はっ、と気が付くと隣にいた筈の長谷部がいない。慌てて見渡すと、やはりと言うべきか店の隅にある一角に立っていた。商品棚の間を縫って長谷部の下へ行くと、彼は並んでいた商品を手に乗せじつと

見つめている。

「四葉の根付……欲しいのかい？」

「……いや、これは違……！」

歌仙が後ろから話しかけると、長谷部は肩を跳ね上げて振り返る。青ざめて唇を震わせるその様は、欲しい物を前にした表情とは言い難い。クローバーを模した飾りが付いたストラップを、長谷部は慌てて商品棚に戻す。

「違う、大丈夫、いらぬ、欲しくない、手に取っただけ、大丈夫、大丈夫、だから——」

かたかたと体と声を震わせ、歌仙の顔色を窺う。周囲の目が痛く感じる。これではこちらが虐めている様ではないか。

欲しい物一つでそこまで怯えられては困るのだと、歌仙は思わず苛立った声を出しそうになった自分に気が付き、息を吸う。

——あのひと、放って置いちゃいけないと思うんです。何か、主に似ている気がして……。

——ありや、大将と同じ様な目に遭ってるな。

鯨尾と薬研の言葉は、歌仙を冷静にさせるには充分な物だった。二振りがこの長谷部にあの審神者との共通点を見出しているのだ、ここで負の感情をぶつけてしまったら心を閉ざしかねない。「仲間外れ」が出てしまえば審神者の心も刀達の心も休まらないだろう。

相手が顕現してどのくらいかは分からないがこちらも顕現からしばらく経つのだ、自分が大人になって対応しなければ。

歌仙は長谷部が戻した商品を手に取り、レジへと向かう。長谷部が疑問符を浮かべていたのは感じ取れたが気にしない事にして会計をする。ラッピングを頼むと店員は愛想良く微笑んでから奥へ引っ込み、しばらくしてから包装された商品を歌仙に手渡した。

ありがとうございます！、という愛想のいい声を聞きながら店の外へと出る。傘を差しながら長谷部は尚も訳が分かっていない様子で歌仙に尋ねた。

「……主への贈り物か？」

「それは別に用意するに決まっているだろう。これは君のだよ」

は、と目を丸くする長谷部の手に歌仙はラッピングされた袋を握らせる。長谷部は手にした袋と歌仙へ交互に目をやり、呆然とした口調で呟く。

「……これを、俺に？」

「そうだよ。主から好きな物を買う様言われていたじゃないか」

「……これから借金のカタにされて、売られたり……」

「君が僕をどう思っているのか問い質す必要がある様だね？ 後それ、絶対お小夜の前で言うんじゃないよ」

「……売られた先で、体をあちこちいじられたりするんだ……！ でも大丈夫、クローバーは幸せを運んでくれる、だから実験に使われても平気——」

「妄想を加速させるんじゃない！ 僕はそこまで情が無いと思われていたのか!?!」

周囲の人間が大声で長谷部に突っ込んだ歌仙を不審な目付きで見ながら通り過ぎて行く。我に返って咳払いをした後、まだぶつぶつと何か呟く長谷部の肩を叩き、視線を向けさせる。

「まあそんな事は無くて、純粹に君への贈り物だと思ってくれ。何か見返りを期待している訳じゃない。強いて言うならそうだね、君に本丸で出来る事をやって貰えたら僕は嬉しいかな」

「……見返り無く？ 叩いたり、しないのか？」

「する訳が無いだろう、全く君は僕を何だと思っているんだか……」

頭を抑える歌仙と手元の袋を見比べて、今度こそ自分へ不純の無い贈り物をされたのだと理解した長谷部は、暗い雰囲気を払拭させ、歌仙へはにかんで見せた。

「……ありがとう」

その顔から暗さは抜けていないが、それでも妄想を加速させていた時の悲壮感はない。歌仙はぽん、と長谷部の頭に手を乗せて丁寧に撫でた。

「そんな表情も出来るんじゃないか。もう少し雅に笑えたら良かったけれど、今はそれでよしとしよう」

「……そんなの、どうやって」

「何、楽しいや嬉しい事があつたら笑うといい。しばらく短刀達と混じって遊んだらどうだい？ 君は少し、素直になる必要があるみたいだから」

歌仙はそう言うと、ゆっくりと手を下ろし前を向く。雨はパラパラと落ちて、足下の水溜りに跳ねていた。

水溜りを避けて歩こうとした歌仙は、長谷部の言葉を拾って彼の方を向き――

「……短刀達は、俺と遊んでくれるかな」

――見えた姿に絶句した。

煤色の髪では無く長いぼさぼさの黒髪、目の色は淡い青紫から茶色に、幼さが残るぐらいの筈である顔立ちは、すっかり大人らしさが抜けている。今自分は長谷部と話していて、こんな見知らぬ幼子の相手はしていなかった筈だ。

幻覚を見ているのか、と考えて頭を振ってから目を擦ると、そこにはいつもの長谷部の姿があった。いきなり不審な行動をした歌仙に、心配そうな視線を向けている。

「……歌仙？ 目が痛いのか？」

「……いや、何でもない。よし、主へのお土産を買いに行こう。君にも考えて貰うからね」

「えっ」

俺はセンス無いし、変な物選んだら、とぐちぐち言う彼の手を強引に引っ張り、歌仙は城下町を進む。水溜りを踏んでいる事など、気にもしなかった。

長谷部の手はきちんと質のいい手袋の感触で、それに安堵している自分がいた。

12—6 「Witness」／鯰尾藤四郎 『彼の残骸
2』

「寒いね。寒くて……お腹すいたね」

鯰尾は何度目か分からない、あの子供達の夢を見ていた。状況は夢を見る度に悪化の一途を辿っており、今回からは外に連れられていた女の子さえも男の子の隣で震えていた。

陽射しが入らない部屋の中は北風が隙間から吹いて来ており、二人とも唇を紫色に染めていた。二人は暖をとる様に身を寄せ合い、ちびちびと半分に割った煎餅を食べている。

「……トモエ、俺のお煎餅あげるよ」

「ううん、それはお兄ちゃんのだよ。私はこれで大丈夫」

力無く微笑む女の子の言葉が嘘だと看破されていても、女の子は譲らない。仕方無く男の子は煎餅を食べる作業に戻る。二人の姿は痩せ細ってあまりにも弱々しく、まるで打ち捨てられた子犬の様だ。

鯰尾は齒痒くて仕方が無い。あの女性にどうしてこの子達を可愛がれないのか問い詰めたかった。けれど相変わらず鯰尾の手は空を切るし、声も届かない。黙ってこの光景を見ているしか無いのが現状である。

女の子が煎餅を食べ終わると、立ち上がって部屋の隅に置いてあるポスト型の貯金箱を振る。そうして男の子の下へ戻り、貯金箱を開けた。

「お兄ちゃん。私、お小遣い貯まったから、お外にご飯買いに行くよ」
「駄目だよ！ それはトモエの大事な——」

「いいの。お兄ちゃんのお腹がいっぱいにならなきゃ、私も辛いから」
そう言って、女の子はふらふらと覚束ない足で玄関へと向かう。男の子が後を追いつ、ぶかぶかのコートを着ている女の子の肩を掴んだ。

「一人じゃ駄目だ、俺も一緒に行くよ」

「お兄ちゃん……でも、お腹すいてるでしょ？ 私一人でも大丈夫だよ」

「平気だ、トモエと一緒になら。それに、あの人の布団の中からこれが出て来たんだ」

男の子がポケットから茶封筒を取り出すと、女の子は目を丸くした。

「それ、お母さんの……？」

「正確には『俺達のお年玉を横取りしたあの人のお金』だな。だから、使っても大丈夫……だと思う。今日は遅くまで帰って来ないと思うから、これでチキンカレーを作ろう」

「チキンカレー！ 私、お兄ちゃんのチキンカレー大好き！」

女の子の表情が輝いた。男の子はそれに穏やかな笑みを返してポケットに茶封筒を突っ込み、女性の物と思われるコートを着ると女の子の手を握る。

「一緒に鶏肉選ぼうな」

「うん！」

手を取り合い、玄関のドアを開ける。曇り空で、冬風の冷たさしか無い事に構わず明るい表情で二人は外へ出て行く。

階段を降りて道を行く二人を、鯰尾は暖かく見守っていた。

——絶望と諦観で淀んだ町の景色をなるべく目に入れない様、意識しながら。

*

「……それで金を取った事が女にばれて、少年はまた胸糞悪い虐待をされたのか」

「かれーを美味しそうに食べてた光景が微笑ましかった分、精神的な傷が深いよ……。子供に水攻めとか普通するか!? 庇った妹ちゃんも顔に火傷負っちゃったし……あーここにあの女がいたら馬糞投げつけてやりたい！」

「そうか……後、馬糞を握り潰すな兄弟。歌仙に叱られるぞ」

馬の手入れを中断し骨喰は怒りに燃える鯰尾を窘める。ぎゃーつと叫んだ後、鯰尾は手洗い場へ走り去って行った。骨喰はふう、と息を吐いて馬のブラッシングを再開する。今日は雨の季節にしては珍しく、太陽の光がさんさんと降り注いでいた。

ある壊れた家族の夢を見てからというものの、鯰尾はしばしばその夢の続きを見る様になってしまった。流石に気にしない訳にも行かず、こうして骨喰に夢の話为零している。気分の悪さを共有する様で申し訳無いが、骨喰に話す様になったのは鯰尾が子供達の酷い境遇を見続けて、精神的に参ってしまいう寸前だったのだ。少しは吐き出せ、と骨喰に泣かれ、鯰尾は骨喰には夢の内容を語る事にした。

手を洗いながら考える。今日もまた、悪夢を見てしまった。一体あの家族は何なのか、そもそも何故鯰尾が見る様になったのか、本当にあの家族が実在しているとして、鯰尾に何の関係があるのか――

「鯰尾」

「っふおどわあっ!？」

考え事をしていたら背後からいきなり声をかけられた。とんでもない叫びを上げながら後ろを向くと、長谷部もまた目を丸くし立ったまま固まっていた。

長谷部が来てから三週間。相変わらず、鯰尾は彼との距離感を測りかねていた。

どこか夢の中の男の子に似ている彼を放って置けないのはそうだが、おどおどとした彼は鯰尾に心を開き切っていない状態だ。あまり距離を詰め過ぎれば驚いて心の壁を作られかねない。じりじりとにじり寄る感覚で少しずつ心を開いて貰おうとしているのだが、そうなるのはいつの日か。

それと懸念事項が一つ。――彼の影が薄過ぎるのだ。実際、鯰尾は長谷部が手洗い場に來た事に声をかけられるまで気が付かなかった。偵察が得意な短刀や脇差がすぐに見失う程なのだ、彼の異常性は明白である。審神者も何とかしたいと話していたが、具体的な案が見つからないまま今に至る。

「は、長谷部さん。すみません、変な声出して……。どうしましたか？」

「あ、ああ。いや、少し裏山に行つてこようと思ったんだが、主も歌仙も見当たらず……。どこにいるか知らないか？」

長谷部は本丸の裏にある山に時折出かけていた。理由の分からない

いその行動も馴染めないでいる要因ではないかと鯰尾は思っている。だが一度本丸の都合で止めた時に長谷部はかなり落ち込んでしまい、その日の夕飯をあまり食べなかった。それ以降、出来る限り裏山へ行かせるのを止めないでいる。

「あー、主も歌仙さんも今研究所に行ってますねー。まだ帰って来ないと思いますけど、帰って来たら俺が主に伝えましょうか？」

「そうして貰えると助かる。じゃあ行って来る」

長谷部はそう告げると身を翻してその場を去って行く。ひらひらと手を振り見送っていた鯰尾だったが、彼の頭にある考えが芽を出す。

——長谷部さん、裏山でいつも何やってるんだろう？

萌芽したのは、謎の行動をする彼への好奇心と、何かに巻き込まれているのではという心配。それに気が付いたらもう駄目だった。振っていた手を握っては開きを繰り返してから、鯰尾は厩へ走って骨喰に叫んだ。

「骨喰！俺今から裏山行って来る！」

「は!?! いや当番はどうする気——」

「すぐ帰るつもりだけど、時間かかったらごめん！後で埋め合わせするし、今日の夕餉のおかずは分けるから！」

そう言ったが早く鯰尾は弾丸の如く駆けて行ってしまふ。訳も分からず置き去りにされた骨喰は、ぽかんと呆ける他無かった。

*

微かな気配を元に、木々の間を跳ねて進んで行く。木漏れ日がちらちらと目に入っているのを感じながら、細い蜘蛛の糸を探して手繰る様に、長谷部のいる方向を探る。

——拓けた所に進んでみるみたいだな。

枝を渡り、気配の下へ進む。木々の隙間が広くなり始め、鯰尾は大きくなり始めた木漏れ日に当たらない様、拓けた場所から少し離れた木の枝に潜んだ。目の上に手を当て、長谷部の姿を探すと。

——いた！

長谷部は拓けた場所にある横倒しになった丸太の上に座っていた。

じつと座って俯き、時折ちらりと顔を上げて視線を周囲に向ける。こちらの方向に視線を向けられている時もあり、鯰尾は息を潜めた。

太陽が長谷部を照らしているのに、肩身が狭そうにしている。鯰尾はやはりそれに既視感を覚えた。まるで、夢の中に現れる男の子のようだ。何故かそう考えて、どこまでも普通の長谷部らしくないな、と思っただ。

「長谷部殿！ お会い出来て嬉しいですよー！」

「体調は悪くない？」

突如聞こえた声に叫びそうになった。身を竦ませながら声のした方を見ると、面頬を付け肩に狐を乗せた男が丸太に向かって歩いている。粟田口派の打刀、鳴狐だ。

——うちの伯父さんじゃない。いや、それよりも……気配を全く感じ取れなかった。

あの気配の薄さだと、背後をあつきり取られるだろう。刀を突き付けられる空想が浮かび、鯰尾の背中に汗が伝う。穏やかでは無い想像をする鯰尾の事など知る由も無く、鳴狐は長谷部と少し距離を置いて丸太に座った。

「俺は元気だ。鳴狐も元気だった？」

「ええ、鳴狐は健康そのものですよう。……その様子ですと今度の本丸では悪く無い待遇を受けている様子。何よりでございます！」

「……うん。今度の主は優しい。刀剣男士達も、良くしてくれてるし」「良かった。……油揚げ、食べる？」

「いや、それは狐にあげてくれ」

談笑する二振りを見て、鯰尾は少なからず衝撃を受けた。本丸での長谷部はいつも俯いていて声も大きいとは言えず、陰気な印象が著しい。しかし鳴狐の前では、相変わらず声はか細く俯いてはいるものの、陰気な印象から少し照れ屋ぐらいのイメージの差がある。お供の狐の言葉にクスリと笑ったり、鳴狐の話を聞いてしみじみと頷く場面も見られ、本当に和やかな雰囲気醸し出していた。

——いいなあ、どこぞの伯父さん。

二振りを眺めながら鯰尾は憧れる。自分もあの様に長谷部と会話

してみたい。楽しい事で一緒に笑ったり、空の青さを眺めながらゆつくりと時を過ごしてみたい。

それはただ見た事の無い表情を見たいだけの好奇心から来る物なのか、本当に長谷部と仲良くなりたいが為の想いなのかはまだ分からないけれど。確かに、自分は長谷部の柔らかさを引き出した鳴狐を羨んだ。

「……それで、やっぱり優しくされても、いつか出て行くのに仲良くなっても虚しいだけじゃないかって思ってしまった……。明るい場所で遊んでいる短刀を見ると、胸が苦しくなるんだ。どうしても、あの中に完全に混ざれなくて。壁が、ある気がするんだ。自分は陰の中にいるべきなのにとって、壁の向こうから責められている気がしてならない。……分かってる、捻くれ過ぎだよな。でも、疑う心しか持てない自分が、どうしても好きになれない」

はっと気が付くと、長谷部が沈んだ表情でそう語っていた。組んでいる手に目を落としながら、先程の穏やかさとは打って変わった泣きそうな声音で言葉を紡ぎ続ける。

それがまたあの夢の男の子を連想させて、鯰尾の胸が少し痛んだ。そんな事は無いと言いたかった。弟達も長谷部を気にして一緒に遊んだが、楽しく無かったなんて一言も言わなかった。責めるなんて事、審神者も自分達もする訳が無いのに――

すすり泣く声が聞こえる。それでも盗み聞きしている自分は、何も出来ない。長谷部の側に降り立ったお供の狐は、甲高さを残しながらも柔らかい口調で告げた。

「……大丈夫ですよ。いつか長谷部殿にも、暖かな陽差しを浴びられる日が来ます。どんなに冷たい氷も、陽射しの下に置けば溶けて馴染んでいきます。長谷部殿も、その心を日向に置けばいいのですよ。重たく固まり切った氷を動かすのは大変かもしれませんが。でも、日向に行こうと努力をするものを誰が笑いますか。少なくとも、我々は笑うものを許しません。そうして少しずつ動かして行けば、次第に暖かい光が傷付いた心を包むでしょう。その証拠にほら、あそこに長谷部殿を心配して来て下さった方もいる様ですし」

え、と鯰尾は凍り付く。長谷部も驚いて鳴狐が指差した方——即ち鯰尾がいる方向を見た。お供の狐は追い討ちをかける様に声を張り上げる。

「その気配は……鯰尾殿でしょうか？ いやはやわたくしは嬉しいですよ。以前の丸ではこうして長谷部殿を追いかけて来る方などひとりもいなかったのですから。隠れていらつしやらないで出て来て下さい。わたくしは、貴方を責めようとしている訳では無いのですから」

正体まで看破されているとなると、降りない訳には行かない。鯰尾は木の枝に掴まってから地面に着地する。長谷部は驚愕の眼差しで木の上から降って来た存在を見つめた。

「……鯰尾、何で」

「いやあ、いつも裏山に行つて何してるのかなーって思つて。……その伯父さんは友達ですか？」

鯰尾は長谷部に問いかけた。聞くまでも無いと思つたが、長谷部は鳴狐をじつと見てから不安そうに首を傾げる。

「……友達、なのか？」

その言葉から一拍の間が生じ、奇妙な沈黙が流れる。お供の狐はその沈黙を破つて大仰に喚いて見せた。

「おお長谷部殿、まさか我々をただの知り合いだと申しますか!?! 鳴狐は悲しんでおりますよう！ 長らく続いているお付き合いではないですか！」

鳴狐も空を仰ぎ嘆く素振りを見せる。一振りと一匹の様子に慌てて長谷部は釈明した。

「いや、そういう意味じゃない！ ……鳴狐みたいないいひとを友達って言つていいのか、悩んだんだ。俺みたいなのが、友達を名乗つていいのかつて」

手をぱたぱたと振つて言い訳をするも次第にその声も萎れていく。再び視線を膝に置かれた手に固定してしまった長谷部に、お供の狐が前脚を彼の拳の上に乗せる。

「冗談ですよ。長谷部殿の性質は多少なりとも触れているつもりで

す。そんな貴方が喜びや悲しみを語れる時点で、我々は友達と定義出来るでしょう。……長谷部殿はもう少し自信を持つていいと思いますよう」

「……そうかな」

「そうですよう」

鳴狐も、長谷部の肩に手を置く。二つの温もりに触れられて長谷部の表情が緩んだ。

本当に鳴狐には心を許しているのだと、改めて感じた。転々と本丸を移る中で、彼に助けられた事もあつたのかもしれない。

自分の知らない長谷部。それを、全て分かつたとは思わない。けれど、鯰尾も長谷部に心を許されるまでは行かなくても、自分の側で少しだけ安らいで貰えたら嬉しい。そうするには、やはり彼について知る事は欠かせないのでは、と思う。

鯰尾は思い耽つていて、鳴狐がこちらを見ていた事に気付けなかった。いつの間にか鳴狐の肩に戻つていたお供の狐が突如大きな声で長谷部に話しかけた事で、思案から引き戻される。

「さて、長谷部殿。わたくし共は鯰尾殿と話したい事がありますので、すこーしだけ離れて頂けますか？」

「……？ 何を話すんだ？」

「いやいや、長谷部殿の良い所をお話するだけですよう！ 何なら

長谷部殿も一緒に——」

「いい、いいー」

長谷部は木の陰に走つて隠れ、耳を塞いで座り込んだ。兄弟に向ける様な温かい眼差しでそれを見た一振り和一匹は、しかし鯰尾の方を向くとその表情を問い質す寸前の様に真剣な物に変えた。鯰尾も思わず背筋を伸ばす。

「さて、鯰尾殿。貴方は長谷部殿を、どう思つていらつしやいますか？」

「どう、つて……仲間だと思つてるよ。当然だろ？ 本丸で一緒に過ごしているんだ、悪い感情は抱いてないよ。長谷部さんを害するつもりも無い」

「ほうほう、なるほどなるほど。……ですが」

二種類の鋭い眼光が鯀尾に突き刺さる。お供の狐は目を鋭く光らせたまま、鯀尾に問いかけた。

「貴方は気が付いているんでしょう？ 我々の……長谷部殿の異常性に。影が薄くて性格も普通の彼と異なり、そして何よりも——彼を見ていると異物を飲み込もうとした様な強い違和感を覚える。『影が薄い』はもしかしたら『目を逸らしたい』に言い換えられるかもしれないが」

鯀尾は生唾を飲み込む。確かにここ三週間で長谷部のおかしさは理解している。けれど、強い違和は指摘されるまで思い至らなかった。長谷部はいつだって空いている手入れ部屋にいたのに、そこにすぐ訪ねる事はせずにいつも探し回って。——お供の狐の言う通り、彼の存在から目を逸らしていたのだ。

鳴狐は何も口にしないが、まるで首元に刃を当てられている様な錯覚に陥らせる目で鯀尾を見つめている。

「貴方が真に長谷部殿と友誼を結びたいのか、それともその違和感の正体を探りたいのか。貴方と初対面である我々には分かりませんが、それが生半可な好奇心による物であるならば……深追いはしない方がよろしいですよ。貴方にとっても長谷部殿にとっても、良くない結果になりかねません。それだけ、我々はひとびとから外れているのですから」

咎める様に、けれどどこか諦めている様にお供の狐は言う。鳴狐の表情は、先程から鋭い眼光のままだ。けれど鯀尾はその目の奥に、長谷部とよく似たどろりとした絶望を垣間見た。

彼等が顕現してからどんな軌跡を辿ったのかは分からない。けれどひよつとしたら、彼等も長谷部と同じ様な暗い道を歩いていたのかもしれない。鯀尾も最初から最後まで明るい経緯を辿っていたとは言えないが、それでも優しい主や愉快的仲間達に囲まれて悪くないと思える日々を過ごしている。

長谷部と鳴狐は絶望から共鳴したのだろうか。だが、語り合っていた二振りの表情からはそれだけの繋がりではないと感じられた。小

さな幸せを掻き集めてそつと見せ合う姿は、木漏れ日の如く影の隙間から差した温かさがあつたのだ。

「……でも」

視線から逃げない様に頭を意識して固定させて、鯨尾は鳴狐達に答える。

「俺は、どうしたって長谷部さんの事を放って置けないんだ。確かに分からないよ、どうしてここまで気になるのか。伯父さんの言う通り好奇心や違和感による物なのかもしれないし、夢の子と重ねて哀れに思っているだけかもしれないし、もしかしたら両方かもしれない。……でも俺は、伯父さんに見せていた長谷部さんの笑顔を間近で見たいんだ。いつもひとりで申し訳無さそうにしている表情じゃなくて、皆の中で一緒に笑っている姿が見たい」

「……ふむ、夢まで見ていますか。切っ掛けに興味がありますが、今は置いておきましょう」

——木漏れ日の温かさを分けて欲しいと言外に願う鯨尾の声は少し震えてしまっていた。お供の狐はそれを意に介さず、顎に右の前足を当てる。それから重ねて告げた。

「それでは更に問います。——それが貴方の独りよがりな物や見返りを求めての物である可能性を、自覚していますか？ 長谷部殿は困っている事をなかなか話せないし、見返りを渡す事も非常に困難です。困っている事を話せない、何故なら誰もまともに彼の話を聞いてこなかったから。優しさをただ受け取る事しか出来ない、何故なら返し方を知らないから。そんな彼に、仲間としての優しさを与え続ける事が出来ますか？」

ひとりの方がいいと思っているかもしれない彼を、強引に多数の中に放り込むのはどうなのだろう。お供の狐はそれを含めた身勝手な優しさの自覚を問うた。

鯨尾は頭の中で思考を巡らせる。確かにひとりの方がいいと言うものもいるだろう。だけど鳴狐と穏やかに語らう様子を見れば、長谷部が誰かと一緒に過ごしたいと願っているのは何となく分かる。それが大勢の中でなのか、少数の中でなのかはまだ分からない。けれど

確信していた。

——絶対に、長谷部をひとりにしてはならない。

「……そうだね、長谷部さんはいきなり大勢の中に行くのは辛いのかも。皆と笑う光景も、確かに俺の描いた理想だ。でも、本当の独りぼつちは寂しいよ。大俱利伽羅さんみたたくひとり立てるひとはともかく、あの長谷部さんがそうだとどうしても思えない。歌仙さんや薬研からも聞いてるんだ、あのひとはひとりにしちやいけないって。それに俺の主は、俺達にも心を砕く人だ。長谷部さんが暗い顔をしていたら、それだけで心を痛めるくらいなの」

鯨尾の脳裏に浮かぶのは、紙の面で顔を隠した我が主。誰かの感情に共鳴し、それに反応してしまうその性質に最初は悩まされた。けれど明るさが宿り始めた今は、彼女も少しずつ笑う様になっている。審神者の平穩は刀達の平穩だ。それを守る為にはどんな手間も惜しまない。

「……俺は暗い顔より、陽射しの中みたいな明るい顔が見たい。長谷部さんも含めて皆がそれぞれ楽しく過ごせる様になって欲しい、それは俺の本心だ。これに関しては見返りはいらさない、そうやってくれる事が俺の望みだから。身勝手なら治すよ、しっかりと長谷部さんの様子を見て。暗い雰囲気よりも、明るい雰囲気の方が断然気持ちがいいからね。そうなれるなら、俺は何度も優しさを渡すよ」

目を背けずに、鯨尾は話し切った。それに少し安堵しながらも、鳴狐達の様子を見る。鳴狐は少し目を見開き、お供の狐もおお、と声を漏らす。

鳴狐がお供の狐と目を合わせる。それに頷き、お供の狐は鳴狐の肩の上に立ち、鯨尾にぺこりと頭を下げた。

「申し訳ありません、意地の悪い事をお尋ねしました。けれど貴方は、長谷部殿を陽射しの中へ連れて行きたいと思ってる様子ですね。それは、我々にとっても喜ばしい事でございます」

「……長谷部さんは、影の中にいるんだよね」

「ええ、今も。まるで己を罰する様に、陽射しの中へ出ようとしません。我々も悩んでいるのです。偉そうな事を申しましたが、我々も手

探りなのですよう」

「手探りなんだ。長谷部さん、随分伯父さんに心を許している気がしたけど」

「たまたま、我々の感情が噛み合ったのですよう。同じ様な方は他にもいらつしゃいますが、余計なお世話だと突っぱねられたりしましたね」

同じ様な方、という言葉が引つかかる。長谷部の様な存在はまだ他にもいるのか。それにしても、話題に上がって来た事も無いが。お供の狐は、そんな鯰尾の疑問を察して語った。

「ここだけの話、長谷部殿の様な方は今もどこかで暮らしていらつしゃいます。数は随分減ってしまいましたが……絶望に押し潰されて自害を選んだ方が、本当に多くて。我々はそれを何とかしたいと思つて動いているのですが、この手は思つた以上に小さい。無力さに嘆く事は幾度もありました。けれど、ひとりでは無いという事をお教えする為に、鳴狐もひとりでは無いという事を実感する為に、我々は膝をつく訳には行かないのです。……これこそ、エゴなのでしょうかね」

それでもこうして少し不思議な長谷部と出会えたのだから、自害をさせなかつた鳴狐には感謝しないといけないだろう。動機がエゴでも、救えた命がある。それは紛れも無い真実なのだから。

「独りよがりでもいいじゃん。絶望の果てまで行つて、死に救いを見出すのは悲しいよ。その状況を変えられたんだから、伯父さんはもつと誇つてもいいと思うんだけど」

「……そうですねえ。そう思えばいいのですが……なかなか上手くいかないんですよ。でも、その言葉はとても嬉しいです。ありがとうございます」

「ありがとう」

鳴狐が口元を綻ばせる。鯰尾も肩の力を抜いて、にっと笑つて見せた。

視界の隅が動いたのに気が付いてそちらを見ると、長谷部が木の陰からこちらを覗き込んで独りぼつちになつた哀愁を漂わせていた。

どうやら長話をし過ぎた様だ。鳴狐に長谷部を呼ぼうと提案しようとした鯀尾は、鳴狐が再び真面目な表情になった事によりその口を噤む。

鳴狐はお供の狐を通さず、自らの口を動かした。

「鯀尾。……真実を知つても長谷部と仲良くしてくれたら、鳴狐は嬉しい」

それだけ言い残し、鳴狐達は長谷部の下へ歩いて行った。そうして木の陰にいた長谷部の側に行く立ち話を始める。長谷部はどうから鳴狐に何の話をしていたか詰め寄っているらしい。お供の狐は右前足を上げ甲高い声で長谷部を宥めている。

呆然とそれを眺めていた鯀尾は、鳴狐の手招きで我に振り返り二振りと一匹の所へ駆け出した。

12—7 「w i t n e s s / 薬研藤四郎 『大嫌いな自分』」

医務室の中で二つの影が動いていた。電子体重計に乗っている方は不安げに測定結果を見つめ、椅子に座っている方は測定結果をノートに書き記す。

「……うん、体重も増えてきた。今の所調子は良さそうだな」

「……相変わらず、暗い気持ちは抜けないが」

「それはまあ、おいおいな。まずは体調を万全にしないと」

ノートに診断を書きながら薬研は体重計から降りた長谷部に微笑む。気まずそうにしている長谷部は現在、赤を基調とした袴姿をしていた。

長谷部が来てから間も無く二月が経とうとしていた。その間にあった異変といえば、鯰尾が長谷部が入り浸っている手入れ部屋に不特定の仲間を連れて突撃する様になった事だ。「相性のいい刀を探そう計画」を実施している鯰尾は、刀種問わず連れて行ける刀を一振り選び、手入れ部屋で菓子を持ち寄り遊んだり話をする様に仕向けていた。

更に鯰尾は、長谷部に脇差以上の刀の内番着を着せて目立たせようとしていた。長谷部のいつもの内番着から離れた服を着ていれば、嫌でも目立つだろうという考えかららしい。ある日、手入れ部屋からの悲鳴に非常事態かと急いで駆け込んだ時には、長谷部が鯰尾と宗三によつて着せ替え人形にされている所だった。それに大いに脱力したのも笑い話である。

今日は加州を連れて突撃したらしい。手入れ部屋の中からは「ふふふー、長谷部さん今日もお覚悟！」やら「うっわあ相変わらず陰気だなー。こりや徹底的にデコるしか無いね！」やら長谷部の困惑した声やらが聞こえてきて非常に和やかであった。

その結果。長谷部は爪の先までピカピカにされ、そんな自分がどうも落ち着かないらしくそわそわと体を動かしている。薬研は朗らか

に笑い、長谷部の肩をバンバンと叩いた。

「その服いいじゃねえか、似合ってるぜ？ やっぱりあんたの和服はいつ見ても新鮮だな」

「……何でこう、いつもサイズがぴったり物の物を用意して来るんだ……！」

「照れんなって。あんたが次に誰の服を着てくるのか、皆楽しみにしてるんだぜ。大将もな」

「うう、逃げられない……！」

頭を抱える長谷部にはは、と笑いながら机に向かう。冷房の効いたこの部屋は、外の刺す様な陽射しと陽炎が揺らめく外の暑さの事を忘れさせてくれた。冷房の風向きが変わると、長谷部がぶるりと体を震わせたのが目の端に入る。

「おっと、強くし過ぎたか。弱めるかな……ん？」

医務室へ向かって大きな足音を響かせ誰かが走って来る。勢いよく開け放たれたドアの向こうから、歌仙が硬い表情で現れた。

「薬研、長谷部もいたか。鯨尾達の部屋に来てくれないか」

「どうしたんだ歌仙、何かあったか」

薬研が顔から笑みを消し、緊張を纏わせたそれに変えて立ち上がる。長谷部も慌てて立ち上がった所で目眩を起こしたのか体のバランスを崩してしまい、再び椅子に座ってしまった。頭を押さえた長谷部に歌仙は大丈夫かい、と声をかけてから付け足した。

「ああいや、鯨尾達は何ともない。いつものあれだよ」

「あーそつちか……最近ずっとこうだな」

「……あれ？」

歌仙の言葉に納得したため息をつく薬研とは対照的に、長谷部は訳が分からず首を傾げる。歌仙は頭痛を堪える様に大きく息をついた。

「てれびだよ、また映りが悪くなったみたいだね。安かったらいいからすぐ壊れるのは何となく分かるけど、僕は機械の事に関してはお手上げなんだ。だから少しでも知恵を合わせようと考えただけ……」

「喝入れりや直るんじゃねえのか？ 前もそうだっただろ」

「それも試したけれど、駄目だったって。本職に直して貰うしか無いのかなあ……」

うーん、と唸る歌仙と薬研。自分達はこういった事に関しては滅法弱かった。ここ最近の機械は複雑過ぎて、何が何だか分からないのだ。説明書を読んでも理解出来なかったのだからもうこういうものだど受け入れるしか無い。連絡用の端末も支給されているが、ほとんど使用されずに放置されている。長谷部や博多などの事務仕事をを行う刀剣はある程度訓練を積めば機械に強くなるらしいが――

「……少しそのテレビを見せてくれないか」

か細い声が耳に入る。声の方へと視線を向けると、袴の膝の辺りを握り締めている長谷部がいた。歌仙に向けているその目は、否定される事への恐怖で震えている。二振り目は目を丸くした後、先程の考えから合点が行きぽんと手を叩く。

「そういえば、君も『長谷部』だったね。少し個性的だったから忘れていたけれど」

「そうだったな。本職に頼むのにも金がいるから、あんたが直してくれるなら一番いい」

「……本当に直るかどうかは分からないからな」

期待の目を向けられて再び俯き、ぼそぼそと長谷部が予防線を張る。それでもいいと二振りは長谷部をゆっくりと立ち上がらせ、鯰尾達の部屋へ移動しようと歩き出す。

ぎしぎしと廊下の床から軋んだ音が鳴る。先頭の歌仙と後尾の薬研に挟まれて、長谷部はやはり背中を丸めて所在無さげにしていた。

その後ろ姿をしばらく見つめてから、薬研は長谷部の背中をバシッと勢いよく叩く。その痛みに驚き、長谷部の背筋が真っ直ぐに伸びた。

「いつ……」

「姿勢は正した方が良いで、体のあちこちに影響が出る。それに、ただ壊れかけのてれびの様子を見るだけなんだ。そこまで緊張しなくていいからな」

「……凄くびっくりした……」

「こうでもしなきゃあんた言う事聞かないだろう。必要な措置って奴だな」

「そうなのか……」

あつけらかんと言って見せた薬研に、長谷部は背中を叩かれた事に納得し、背筋を伸ばす様努めながら足を動かす。歌仙はそのやり取りに少し呆れながら告げた。

「じゃれ合いもいいけど、ちゃんと前を向いて歩いてくれ。長谷部、背筋を伸ばすのに集中し過ぎて目線が真上に向いているよ。そのままじゃ転ぶ——」

「痛あつ……!」

「……言わんこつちや無い」

足が絡んだ勢いで床に膝を打ち付けた長谷部に、歌仙はやれやれと手を差し出す。うう、と唸りながら歌仙の手を借りて立ち上がった長谷部は、再び視線を下に向けてしまった。下に向き過ぎているのを見て長谷部の意図を悟った薬研が長谷部の腕を引く。

「長谷部、足が絡まない様にする為だろうが、前が疎かになってるぞ。少し視線を上に向けろ」

「……転ばないかな」

「そうそう起こらねえよ、上向き過ぎて転ぶなんて事。ほら、鯰尾兄達の部屋はあそこだ」

一歩ずつ進む度、鯰尾の声が鮮明になる。それと同時に、ガタガタという音もはつきりと聞こえてきた。肩を跳ねさせた長谷部は歌仙を追い越して鯰尾の部屋に入る。

「何やってるんだ!」

「えっ、てれびを直そうと思って、いつも通り動かしてみてるだけですけど……長谷部さん、そんなに顔強張らせてどうしました?」

「そんなに思いつきり動かしたら状態が悪化するぞ! とりあえず元に戻せ!」

長谷部のいつにも無い大声に、歌仙と薬研は鯰尾の部屋に駆け込ん中を覗く。鯰尾はゆつくりと傾けていたテレビを元に戻し、長谷部はリモコンを手にしてからテレビに近付いて様子を見ている。鯰尾

は怒鳴られた事への驚きが尾を引いていたが、興味深そうに長谷部のやる事を観察していた。

テレビの背面を覗いた長谷部が、テレビと壁の隙間に手を差し込んだ。それからかなり力を入れて腕を動かす。カタン、カタンといった音だけが響き、しばらくしてから長谷部が腕を引き出しリモコンで電源を入れると、画面にニュース番組が明瞭に映し出された。

「……お、おおお！ さつきよりはつきりとしてますよー！」

「……ケーブルが抜けかけていた事だけが原因だったみたいで良かった。鯨尾、これからはあまりテレビを動かし過ぎるなよ」

「よーしてればも直して貰った事だし、現世の番組探しちゃうぞーっとー！」

「少しは聞く姿勢を見せてくれ！」

再び音を立ててテレビを傾け始める鯨尾と悲鳴を上げながらそれを止めようとする長谷部。歌仙と薬研は、それを呆然としながら見ていた。

「……長谷部ってのは、こころも機械に強いのか？」

「……別の本丸の長谷部だったら、こころは行かない筈だよ。ぱそこんやらの故障には対応出来ないと言っていた記憶がある」

刀剣男士は、総じて機械に弱い。パソコンや端末機器などがある程度操作出来る個体もいるが、それはその個体の弛まぬ努力の賜物である。それでも故障した時はおっかなびっくり原因を探るのが当然だ。この長谷部の様に迷わずテレビの不調を探し出せるのは、刀剣男士としては異常なまでのスキル持ちだと言える。

前の本丸で散々機械をいじらされたのだろうか。いや、それでもここまで速いのは奇怪だ。一体、彼は――

「あつ、歌仙いたいた。薬研と長谷部もいるみたいだね、少しいい？」

「加州。どうしたんだい？」

横から話しかけられた歌仙が顔を向けると、加州が手をひらひらと振りながらこちらへ歩いて来ていた。薬研も加州に気が付き、部屋の中の攻防戦を横目で見ながら加州に話しかける。

「どうした、加州。誰か怪我でもしたか？」

「いや、怪我した奴はいないよ。ちよつと手合せで試したい事があるって五虎退と今剣が言つてて、歌仙をはじめとした打刀達に意見を聞きたいって。俺はいいと思つたけど、薬研達栗田口派にも一応許可を取っておきたいと思つてき。いいよね？」

薬研は歌仙と視線を合わせた後、まだ鯨尾とやり合つている長谷部に目をやった。鯨尾は現世の番組を見る事を諦めきれないのか、口を尖らせて不満を述べている。長谷部は疲れ切つた表情でテレビなどの精密機械がどれだけ繊細か話していた。

長谷部は戦闘に怯えてはいるものの、練度は九十を超えている。以前の本丸では戦う事を強要されていたのだろう。無理に戦わせるつもりは無いが、その経験をこの本丸の為に活かして貰えないだろうか。歌仙もそう考えているのだろう、その目には強い光が宿っていた。

歌仙に一つ頷き、薬研は加州に告げた。

「ああ、いいぜ。戦いに役立つなら俺は何も言わん。後はそうだな、長谷部を連れて行つてくれないか？ 意見を言うくらいなら、長谷部にも出来るかもしれん。元はその為に引き取つたんだしな」

長谷部という単語を聞き、加州は目を軽く見開いてから憂いを帯びた声で尋ねる。

「……………いいの？ 長谷部、また具合悪くなつたら……………」

「その時は大声で呼んでくれ、すぐに行く。俺は鯨尾兄を宥めなきゃならんからなあ……………」

「そういえばさつきから何やつてたの？」

「ああ、長谷部がてれびを直してくれたんだ。直つた途端に鯨尾が現世の番組を探し出してね……………。長谷部が説教していた所だったんだ」

「……………あー。鯨尾、現世の番組好きだよな」

「そういう訳だから、俺はここに残る。歌仙、後で詳しい話を聞かせてくれや」

歌仙は微笑んで了承の意を示し、それに同じく穏やかな笑みで返した後、薬研は長谷部と鯨尾に近づく。鯨尾はまだ不満を垂れ流しており、長谷部はぐつたりとし始めていた。

「いいじゃないですかー、ちよつとくらい。俺の癒しなんですよ、現世の番組探し」

「テレビの故障を促してどうする……。主の用意出来る資金だって無限じゃないだろう、現世の番組なら主に用意して貰えばいいじゃないか」

「俺は今、まさに、この時に！ やってる番組を見たいんですよー！」
ちやぶ台をばんばん、と叩いて鯰尾はごねる。長谷部は頭を抱えていたが、苦笑いしながら近付いて来た薬研に救いを求める様に顔を勢い良く上げる。

「長谷部、疲れている所悪いが道場に行ってくれないか？ 五虎退と今剣が話を聞きたいらしい。直接戦闘しないのなら大丈夫だよな？」

「……ああ。俺は戦術に明るくないが、それでもいいのなら」
「一振りでも多くの意見があった方がいいだろ。些細な事でもいい、思い浮かんだら話してみるのもいいと思うぜ」

長谷部は分かった、と言って立ち上がり、歌仙と加州の下へ合流しその場を去って行く。

足音が聞こえなくなった瞬間に動こうとした鯰尾の首根っこを掴んだ薬研は、呆れながらため息をついた。

「させねえぞ、鯰尾兄」

「ぐっ!? くっそ、力強っ！ ちよつとぐらい見逃してよ薬研ー！」

「しばらく鯰尾兄の夕餉が質素で少量になってもいいってんなら俺は止めねえぞ？ 俺は鯰尾兄の為を思ってこうしてるんだがなあ」

「ああ、それは嫌だ！ でも現世の番組は見たいー！」

尚もじたばたと暴れる鯰尾をちやぶ台の前に戻し、薬研は問いかける。

「こっちの番組も現世の番組もそう変わらねえじゃねえか。何でここまで固執するんだ？」

「だって、こっちの番組って何かわざとらしさが強いんだよ。現世の番組もそりゃわざとらしいけどさ、笑える物が多いんだよ。あの夢を連日見てたら気晴らしもしたく——」

「……あの夢？」

鯰尾は慌てて口を塞ぐが、葉研の耳にはしっかりと入っていた。さつと鯰尾が顔を背けるが、葉研は顔を除き込み問い詰める様に目を合わせる。鯰尾が顔を逸らす度に、何度も回り込んで目を凝視する。過去は振り返らない、と何度も言う鯰尾が、ぽろりと零してしまう程に連日見ている夢。それは大坂城の炎の夢なのか。いや、それは彼の誇りにかけて言わないだろう。それならば、彼が見ている物は一体何なのか。——怪異に纏わる夢ならば、審神者にも相談しないとならないだろう。

しばらく無言の駆け引きが繰り返されてきたが、次第に険しくなっていく葉研の視線に折れた鯰尾が両手を上げて降参の姿勢を見せた。

「言う気になったか、鯰尾兄」

「……ごめん、心配かけたくなかったから今まで言わなかったんだ。随分胸糞悪い夢だったから、最初は前見た番組に影響されたと思って深く考えなかったんだけど……ここ最近、ずっとあの夢を見てる。俺達は現世の事をなかなか調べられないから、てれびで探るしか無いと思っただんだ」

「詳しく話せ、どんな夢だ？」

そうして鯰尾は話した——母親に理不尽な虐待を受けている、二人の子供の話を。葉研は話が進む度に顔を強張らせた。かつては捨て子が当たり前だった時代があったが、それと同じくらい凄惨な話だった。

「……日が経つにつれて、状況は悪化してる。子供二人が家の中にある物を掻き集めて、何とか生き延びている。母親が帰ってきたら、暴力と泣き声で溢れる。見ている苦しいよ、俺は二人に何も出来ないんだ。俺が何度も何度も止めろって叫んでも、誰の耳にも届かない。……あの子達は今どこにいるんだろうね。今は平和に生きてます、つていうんならいいんだけど」

「……そんな辛い夢、骨喰兄にしか打ち明けなかったのか」

「だって、話したって皆を苦しめるだけで、俺が楽になる事しか出来ない。主も自分の事で精一杯で、現世の子供にまで手を回せないだろう

し。……主の過去の傷を呼び起こしかねないしね」

薬研は頭を掻き毟る。鯨尾が審神者に夢の事を相談出来ないのは、彼女も虐待を受けていたからだ。彼女もまた酷い虐待を受けていた事は、普段の態度から見ても明白。詳しい事を話せば、審神者のトラウマを想起しかねない。鯨尾としても、審神者を傷付けたく無いのだ。そうしてほば誰にも言えないまま、現在に至る。

事情を知った薬研も、どうすればいいか分からない。現世の記録を見る事は大きく制限されている。彼等の現在を知る事は、あまりにも難しい道だった。

鯨尾は俯きながら、ぼつりと呟く。

「……ごめん。どうしようも無い事を話して」

「別に構わん。仲間で、兄弟だろ？ どうしようも無い事でも、話して楽になれば上々だ。あんまり水くさい事言うなよ」

「……そうだね。ありがとう、薬研」

おう、と返して薬研はぱつと立ち上がり、鯨尾の手を引いた。勢いそのまま鯨尾は立ち上がらされ、引かれるまま廊下へと歩き出した。

「え、何、どこ行くの」

「ちよつと長谷部達の様子を見に行こうと思つてな。長谷部が体調を崩してたら、鯨尾兄が支えてくれや」

「え、俺長谷部さんの支え係!? いや、別にいいけど、何かこう腑に落ちない……」

「気分転換に長谷部の世話をしたらどうだ？ 俺としても雑用をこなしてくれる刀が欲しいし……おつと」

「俺を雑用係にする気満々じゃん！ さっきまでの感動を返せー！」

はは、と笑いながら道場に向かう。道場を覗くと、刀達が輪になって何やら話し込んでいた。長谷部の背中も、その中に混ざっている。「……というわけで、このじょうきようでぴょんとはねてくみつきたいとおもうのですが、どのとうそうがいいかいけんをいただけませんか？」

「い、今剣さんの補佐として僕はどうしましょうか……？」

「うーん、重歩兵でがっちり固めて被害を最小限に抑えるのがいいん

じゃないかな」

「二振り共か？ 俺は今剣に軽歩兵を付けた方がいいと思う。今剣の足の速さと隠蔽の高さを活かして一気に切り込んで……とか」

「それだったら、五虎退に偵察が上がる銃兵を付けるのもいいかもね。少し兵数が心許ないけど、その点は二振りの足並みの合わせ方を信じ……あ、薬研、鯰尾」

加州が薬研と鯰尾に気が付き、声を上げる。道場の中の刀達が顔を入口に向けて思い思いに薬研達に声をかける。薬研と鯰尾は道場の中に入り、長谷部の背中に近付いた。

「どうだ、長谷部。具合は悪くなつてねえか？」

「大丈夫だ」

「あまり無理をしない様に。どれが引き金になるか、俺達はまだまだよく分かつていないからね」

蜂須賀の言葉にうん、と長谷部は頷く。隣にいた陸奥守が笑いながら長谷部の背中を叩く。

無事に馴染んでいる様で何よりだ、としみじみ感慨にふけつていと、五虎退が長谷部に頭を下げた。

「あ、あの、長谷部さん。ありがとうございます、来て下さって」

「頭は下げなくていい。……俺は、お前達の力になれていたか？」

「もちろんですよ！ はせべさんのちからがあつてこそ、あらたななぜがふいたというものです！」

顔を上げた五虎退ははにかみながら、今剣は花が咲く様な笑みを長谷部に向ける。長谷部の顔はこちらからは窺えなかったが、袴を強く握っているのと、耳が赤くなっているのは見えていた。思わずにやけながらも薬研は長谷部の肩を組んだ。

「どうだ、うちの刀達は。いい奴らばかりだろ？」

「……ああ。本当に、今までにないくらい、いい本丸だ」

「おっ、いいねえ。大将も喜ぶぜ」

薬研がぼんと背中を叩く。俯いていた長谷部はふと顔を上げ、どこか遠くを見ながら呟いた。

「……ここに来られて良かった。今死んでも、殺されても、悔いは無い

な。どんな死に方をしても、笑って死ぬる自信がある」

しん、と道場が静まり返る。歌仙は何故か突然に、目を強く擦っていた。

長谷部がろくな扱いを受けていないのは察していた。けれど、何故ここで全てが終わる前提で話すのか。彼を害するものはこの本丸にはいないし、審神者だって彼に気を使っている。

これから彼はこの温かい本丸で、彼なりの幸せを見つけて、幸せに過ごすのだ。それはあの審神者が顕現させた刀剣男士達が、総じて願っているように努めている事だった。けれど、まだ彼の心は開き切っていないのだ。

「……勘違いするな。あんたを俺よりしみつたれた、そんな顔で折らせるつもりは無い」

山姥切が小さく、しかし確かな怒りを込めて長谷部に告げた。

「あんたは精々主に大事にされて、俺達の宴会で揉みくちゃにされて、短刀達に振り回されて、脇差達に丁寧過ぎる世話をされていればいいんだ。写しの俺に優しくされても困るだろうが、あんたは幸福を受け取り過ぎて困ればいいんだ。——あんたが不幸なまま折れて、俺達に傷を付ける事は許さない。仲間の不幸は、俺達の不幸だ」

話し切った山姥切は、ぽかんとした表情をしている長谷部を睨み付けた後、またぼろ布の中に顔を隠してしまった。山姥切に追従して、他の刀達も長谷部に告げる。

「全く、贗作じゃ無いのにその自尊心の低さは頂けないね。長谷部、君は戦えなくてもこの本丸には無くてはならない存在になりつつある。あまり悲しい事を言わないで欲しいな」

「そうそう。機械を修理出来る刀剣男士は今の所長谷部しかいないんだしさ。勿論それだけじゃないけどね。……あんたが暗い顔してるるところまで湿っぽくなっちゃおうし」

「やっぱ笑いゆーのが一番ちや。おまんはもうこの仲間なんやし、気楽にしてくれたら嬉しいぜよ」

「は、長谷部さんと仲良くなれて来たのに、すぐにお別れなんて嫌です……」

「そうですよ！ はせべさんには、もつともつとぼくたちとあそんで
もらうんですからね！」

それぞれに言葉をかけられて、長谷部は目を見開く。涙が溢れるの
を食い止める為か、その後目を伏せ口を開閉させて言葉を探してい
る。目を拭っていた歌仙も、表情を緩めて長谷部に向かい合う。

「長谷部、君がかつていた本丸でどんな扱いを受けていたかは知らな
い。でも、今はこの一員として存在しているんだ。過去を気にし過
ぎずに、ここでの生活を楽しんで欲しいと僕は思っているよ。何なら
僕が風流について教えようか」

歌仙がそう言うのと、薬研は笑って腕の力を入れた。

「はは、歌仙の教えは長いぞ。俺も教えを説かれたが……鯰尾兄、あの
時どれくらい時間が経っていたか」

「んー、昼餉後から始まって……夕餉近くまで行ったかな？ 歌仙さ
んもよく話が続きますよねえ」

「何を言う。風流を語るにはどんなに時間があっても足りないよ」

「長谷部さん、いざとなったら逃げるんですよ。歌仙さんの話に付き
合い過ぎたら、ご飯抜きになっちゃいますからね」

「夕餉の時間になっても『まだ話は終わってないよ』って言って語り続
けそうだよなあ」

「夕餉抜きにさせる程僕は鬼じゃないよ！ 後鯰尾、逃げる事を推奨
するんじゃない！」

軽く怒る歌仙に、鯰尾が更に茶々を入れる。怒りを加熱させる歌仙
を五虎退はおろおろとしながら宥める。そのやり取りによって道場
に笑い声が満ちる。長谷部もまた、涙を一つ落として小さく笑った。

「……ありがとう」

賑わいの中でも——その微かな声を聞き逃したものは、道場の中
はいなかった。

月が高く昇っている夕食後。薬研は審神者の招集に従い、賑やかさ
が落ち着いている廊下を歩いていた。呼び出しに来た歌仙も、薬研の
隣を歩いている。

歌仙に対して、少し気になる事があった。昼間の道場で、皆を黙らせた長谷部の一言の後に歌仙が目を擦っていた事。

時折、長谷部を見た後に同様の行動をしているのを何度か見かけた。まるで幽霊か何かを見たかの様な表情と動作に、この本丸最古参の刀に起こった異常をどうしようかと悩んでいた。が、じっくり話し合う時間を欲しても、出陣やら遠征やら内番やらでなかなか設けられなかった。

どうしてかは分からない。だが、この事について話し合うのは今しかない。そう考えた薬研は、歌仙にこう切り出した。

「歌仙。あんた、長谷部に何を見た？」

歌仙は足を止め、硬い面持ちで薬研を見遣る。薬研は至極真面目な鋭い表情で歌仙を見返す。数泊の沈黙の後、歌仙はふう、と息を吐き心許無さを表に出した。

「……流石に君には隠せないか」

「つて事は、あんたは何かを見たんだな」

薬研は、この本丸で初めて鍛刀された刀である。当然、この本丸で初めて顕現した刀である歌仙との付き合いは長い。かたや雅を愛するもの、かたや雅を解さないもの。水と油かと思われた二振りだったが、二振りが戦闘を好むという共通点、薬研が相手の嗜好を無闇矢鱈に否定せず、相手の間合いを尊重する性質から喧嘩になる事は少なかった。次第に彼等は背中を任せられる間柄になり、多少の隠し事なら看破出来る様になった。それがいい方向に作用しているのか、現在では最も気が置けない仲である。

歌仙も今回の事を隠し通せるとは思っていなかったらしい。薬研が促すと、すんなり自分に起きた異変を話し始めた。

「ああ。……時折、長谷部が違う誰かに見えるんだ。刀剣男士では無い、他の誰かにね。長谷部に取り憑いている幽霊なのか、何なのか……それが少し不気味だね。長谷部本刃には悪意が一切感じられないのも不可解だ。昼間はあんな事を言ったけど、実はまだ完全に受け入れられてはいないんだ。……情け無い話だけどね」

「不気味に思う事があるなら、完全に受け入れられないのも道理だ。

俺も時折、あの長谷部が偽物じゃないかと思う時があるしな。あいつは悪い奴では無さそうだが」

薬研の意見に歌仙は顔をしかめて、月を見上げた。

「……薬研もか。薬研も僕と同じ様な？」

「いや、俺は見えてない。だがあいつは、俺の知る『長谷部』とはかけ離れ過ぎてる。だが、あいつは確かに『長谷部』だし、歌仙の言う通り悪意も感じられない。それが少し奇妙だな」

「同意見だよ。……それに加えて、鯰尾が長谷部に肩入れし過ぎているのが僕は気になる」

「ああ、他の奴連れて長谷部の下に押しかけたりしているあれか。どう考えても、ここに馴染ませようとしてるよな」

「……もし、長谷部が悪しきものだった場合は」

「分かってる。鯰尾兄が止めても、俺は斬るぞ」

歌仙はこの本丸の支柱となる刀、薬研は忠誠心が高い刀だ。いざとなれば、二振りは躊躇いなく長谷部を斬れるだろう。長谷部を疑いの目で見ていた二振りは、それを確かめ合って再び歩き出した。

——今となつては、あの長谷部がそれを感知しない訳も無く、だからこそ完全にこちらを信頼しなかったと分かるのだが。

審神者の執務室に辿り着いた二振りは、障子の向こうにいくつかの気配を感じながら、審神者に声をかけた。

「主、薬研を連れて来たよ」

「お入り下さい」

障子を開けると、中には小夜左文字、鯰尾藤四郎、骨喰藤四郎、宗三左文字、へし切長谷部、そして奥に審神者が座して二振りを待っていた。中に入り障子を閉め、二振りは空いている隙間に座る。

「宗三。何の集まりか聞いているか？」

「いえ、全く。主も早く話して下さればいいのに、全員集まってからと言つて……この僕を呼び出したからには、それなりの要件なんですよな？」

「まあ落ち着け。歌仙も聞いて無さそうだったし、一体何なんだろうな」

薬研が隣に座っていた宗三に尋ねると、彼は少し不機嫌そうに返す。もう間も無く眠る時間だと言うのに呼び出された事が気に入らない様だ。歌仙の様子を見てみると、彼も小夜に呼び出しの理由を尋ねていた。小夜が小さく首を振っている事から、小夜も知らない様だ。では兄達は。ちらりと見ると、二振り共腑に落ちない様子で目を合わせていた。最後に長谷部。……いつも通り、居心地が悪そうだ。「皆様、お集まり頂きありがとうございます。今回の呼び出しについてお話ししますね」

審神者がそう告げると、全員が背筋を伸ばす。審神者がぐるりと見回し、一枚の写真を全員に見える様に床に置いた。どこにでもある様な本丸の遠景を写した物だった。

「政府から、愛甲区域全部隊に対してある本丸への調査指令が入りました。皆様には、その本丸への調査に赴いて頂きたいのです」「政府から？ それはまた、どうして……」

小夜が問いかけると、審神者がもう一枚写真を取り出した。それを見て刀達は固まる。

——写真に写っていたのは、金属片と血が部屋に散らばっている光景だった。

「……主、これは」

「……お察しの通り、この本丸の刀が突如全員破壊されたのです。審神者も殺害され、現在この本丸は封鎖状態にあります。時間逆行軍が介入した可能性も示唆されておりますが、原因は未だ不明です」

「その本丸の調査を、俺達に」

審神者は写真から手を引いて、膝の上で握り締める。それから深く一礼した。

「……これは、政府からの指令です。受けてもいいけれど、受けなくてもいい。そう言われていますが……受けた本丸には政府から調査支援の名目で資材や資金の支給を受けられる、と。この本丸は、お世辞にもゆとりがあると言いがたいです。皆様に苦勞をかけてもこのままなのですから、私の力不足があるのでしょうか……私は少しでも、皆様に過ごしやすくなつて欲しいのです。その為にも、協力して頂け

ませんか」

審神者は頭を上げずに刀達に乞う。折り畳まれた体は小さく、彼女が幼い子供なののだと思ひ知らされた。

審神者は支給の言葉に弱い。自分に優しくしてくれた刀達に、少しでも良き日々を過ごして欲しい。彼女は、どこまでも刀達に尽くしたがった。それから、もう一つ。彼女は、政府からの支給が微々たる物だと分かっている。それでも受けたがるのは、その微々たる支給でもほぼ丸々残せばこの本丸の軍備が潤うと知っているからだ。

微々たる支給をほぼ丸々使わずにいられる刀達だと、彼女は信じている。それは、つまり――

「……そこまで僕等の力を信じてくれているのなら、受けなかったら名折れか」

歌仙が力強く告げる。薬研も自身の力を信じている審神者に報いたい気持ちが高まった。宗三がため息をつきながら、小夜に話しかける。

「まあ、僕等も戦果を挙げていますからね、それなりに。受けない事で力が無いと見られるのは腹が立ちます。ねえ、お小夜？」

「……そうだね。僕は、復讐する相手を討ち漏らす事は無いよ」

力を漲らせる小夜に次いで、鯨尾達が頭を下げている審神者に顔を向ける。

「頭を上げてよ、主。俺達の生活をより良くする事は、主としていい事だよ。俺達を信じて任せてくれる事も嬉しい。頑張って調査するからさ、主には笑顔でいて欲しいな」

「兄弟の言う通りだ。あんたはただ、主殿として堂々としていればいい」

骨喰の言葉に、審神者がゆっくりと頭を上げる。小さく口元を綻ばせ、ありがとうございます、と礼を述べた。しかしすぐに、はつとした表情で長谷部に向かって尋ねた。

「長谷部さん、貴方にも確かめないで申し訳ありません。今回の調査、引き受けて頂けますか？」

「……そもそも、何故俺が同行する事になったのでしょうか。俺は、戦

う事が出来ませんが……」

そういえば、と薬研は思い至る。ここにいるのは七振り、審神者が指揮する部隊としては一振り多い。同行する、という言い方も、戦えない長谷部にとっては当然の事だ。それなのに、何故ここにいて調査の内容を聞いているのか。

審神者を見ると、彼女は唇を震わせ手を握り締めていた。不審に思っていると、審神者はこう言った。

「……今回向かって頂く本丸が、少々入り組んでおります。長谷部さんに、道案内をして頂きたいと思つて……貴方には、残酷な事を強いてしまうかもしれませんが」

「大将、調査する本丸の部隊名は？」

まさか、と思つて薬研が審神者に問う。審神者は、小さな声で答えた。

「——狭霧隊」

長谷部が、目を見開いて顔を蒼ざめさせる。それを見て、薬研は自分の予想が当たっていた事を悟つた。長谷部は、恐怖を押し殺した声を絞り出した。

「……主、そこは……」

「……すみません、管理局の方に窺いました。貴方のプライバシーに関わる事ですが、知つたのはたまたまです。それだけは、信じて下さい」

「主、狭霧隊つて……まさか」

鯨尾が顔を強張らせて長谷部と審神者を見比べる。宗三が薬研の袖を引っ張り、憂いを秘めた顔を向ける。歌仙と小夜も狼狽えた表情で見合せている。

そして審神者は、決定的な答えを告げた。

「——長谷部さんが顕現した、一番最初にいらつしやつた本丸。それが、狭霧隊です」

Witness／縛ク縛恰？ 彭キ佳キ驛イ「客観的絶望譚」

暗闇の中で、様々な声が渦巻く。

「おか……さ……くるし……」

「煩い！ あんたみたいな化物、生まれて来なければ良かったのよ！」

——止めろ、止めてくれ。

「お母さん、止めて！ お兄ちゃんが溺れちゃうよ！」

「あんたさえいなければ、教祖様に疎まれる事も無かつたのに……！」

——どうして、こんな事を。こいつは、何も悪い事をしていないじゃないか。

「連れて行け」

「お兄ちゃんっ！ 痛いよ、離して！」

「トモエ！」

——拳句の果て、こんな事まで。

「ここで君達に殺し合って貰う」

「初めまして、だな。俺はカサネ。友達になろう！」

「ふん、出来損ないが」

「一緒に、ここから出よう。こんな所にいたら、大人達に壊される」

「たかだか子供が、逃げられると思っただか？」

「絶……対に、お前の……事を、許さない」

耐え切れずに、目を開ける。

「[r b :自分>・.]」は椅子に座っており、膝の上にはぼさぼさの

髪の毛が横たわっていた。

少年が消えかかっているのを見て、声を荒げる。

「おい、起きろー！」

少年は動かない。それでも、声を上げ続ける。——少年の存在を、保つ為に。

「妹に会いたいんだらう!? カサネに謝りたいんだらう!? ……あの

本丸は、幸せな場所だっただらう!? なら目を覚ませ！ しばらくの間、記憶は肩代わりしてやる！ だから——幸福とやるべき事から逃げるな！」

喉が痛んだ気がした。それほど大声で叫んだのだ。その甲斐があつて、少年は存在を取り戻し、静かに目を開ける。

「……ごめんさーい」

違う、謝るべきは自分だ——人の身には重過ぎる運命に、少年を巻き込んで。

次第に意識が揺らいでいく——朝が、今日もやって来ようとしていた。

第十三話 「望まぬ罪を犯した者」

13-1 「Witness／歌仙兼定『潜入』」

「……ここか」

その門の前に立ち、歌仙は重々しく呟いて手にしていたメモから顔を上げた。続く六振りと審神者も、そびえ立つ門を見上げていた。

審神者から告げられた調査任務を遂行する為、準備を万全にしてから本丸を旅立ち馬で一時間半程。そこに狭霧隊の本丸（であった建物）はあった。門は古びてはいるもののさほど壊されておらず、門外から見える範囲では建物自体も綺麗な状態を保っている。

これで「突如ここにいたもの達全員が殺害された」と説明されていなければ、留守にしているだけのどこにでもある本丸だと思ってしまう事だろう。この様子だと、時間逆行軍に外部から襲撃された訳では無さそうだ。

後ろにいた小夜がぶるりと武者震いをする。殺気を感じ取った歌仙は何事かと振り返った。

「どうしたんだい、お小夜？」

「……ここ、黒い澱みが渦巻いています。恐らく、憎悪の部類の澱みですね？」

「え、この審神者は確か良くも悪くも無い人格だという話でしたよね？」

宗三の言う通り、狭霧隊の審神者は可もなく不可もない普通の審神者であった、と政府から配布された資料に記載されていた。刀達とは程々の距離を取り、任務も命じられた物は遂行する。過剰な愛は向けられていないが、主として信頼はされていた。歌仙は狭霧隊の審神者をそういう人物だと受け取った。

だが、陰で疎まれていた可能性も否めない。詳しくは聞けなかったが、ここに生き証人がいるのだ——今もなお震えながら何とか足を動かしている、狭霧隊で顕現したというへし切長谷部が。

「……長谷部さん、大丈夫ですか？」

「長谷部、具合が悪くなったらすぐに言え。薬研が何とかするから」
「信頼してくれているのは嬉しいし努力もするが、俺たちは精神方面にそこまで強く無いぞ」

体を抱え、震える長谷部の体を鯰尾が支えている。骨喰も感情の薄い顔に懸念の色を混ぜて隈の濃い長谷部の顔を覗き込み、薬研は苦笑いしながらも兄のパスを受け取っていた。

長谷部はここに来るまでの道中、ほぼ言葉を発しなかった。談笑に混ざらないのはいつもの事だが、いつも以上に不安げで、手綱を固く握り締めて歯をかちかちと鳴らすその様は異常だった。出発前夜、小さな泣き声が手入れ部屋から聞こえて来たと薬研から報告も上がっていたのだ。

あまりにも精神が不安定な彼を連れて行くのは心苦しかったが、複雑な構造になっているという狭霧隊の本丸は案内がいなければ調査するのも難しいらしい。実際、先行して調査を行っている部隊もその入り組み方に悲鳴を上げているようだ。そうならば連れて行かない選択肢も薄くなる。

——後は、長谷部の事が少しでも掴めればいいが。

歌仙は仲間として接してはいるが、手放して長谷部を受け入れている訳では無い。それは自身に起こっている異常から来る物である。

時折、長谷部が違う姿に見える。何者か分からないその姿を誰も見ていないのは、言い換えれば自分しかその姿を見ていないのは何故か。その原因を少しでも解明出来れば、敵意を感じない相手に抱いて後ろめたく感じる不信感も払拭されるかもしれない。

「あつ、来たね。主、春光隊のひと達が到着したよ！」

門の中から響いた声で我に返る。顔を覗かせたのは加州清光。こつち来て、と加州に手招きされて春光隊は門の中に入った。

歩いた先の中庭にいたのは前田藤四郎、につきり青江、加州清光、獅子王、石切丸、太郎太刀。そして——あの晩に長谷部を連れて来た、若い和服を着た引き渡し審神者。

「貴方は……」

「……おや、春光隊の審神者殿か。久しいね」

「……ええ、あの晩以来ですね」

引き渡し審神者はこちらの審神者に微笑んでから固まっている長谷部を見ると、氣遣わしい表情にして尋ねた。

「どうかな、そちらの長谷部は元気でやっているかな？」

「……はい、少しずつ馴染んで来ています。時折短刀達とも遊んでいる様ですし、まあまあ元氣だと言っているいいのではないかと」

審神者がそう言うと言き渡し審神者は目を見開き、驚いたな、と呟いた。

「あの長谷部が短刀と遊ぶ様になるとは……うちにいた時は手入れ部屋からほとんど出て来なかったのに。貴殿の本丸は本当に健やかで細やかな気配りが出来る刀が揃っているのだろう。実にいい事だ。……俺は、まだまだ未熟だという事を思い知らされたよ」

「いえ、そんな事は……」

俯いてぱたぱたと手を振る審神者に、本当の事だよ、と引き渡し審神者は寂しそうに笑った。

「俺はうちの刀が一番だと胸を張って言えるが、少し大雑把なきらいがある。俺はそれを含めていい刀達だと思っているが……長谷部は、うちの気風に馴染めなかった。もう少し気にしていたらとも思うが、うちの前の本丸にいた時は腫れ物に触るような扱いを受けていたらしいと聞いていたからな。微妙なさじ加減で馴染めるか出て行くか変わってしまう。その点で、貴殿の本丸はバランスを取るのが非常に上手いのかもしれないな。その力量を俺も見習いたいくらいだ」

引き渡し審神者の隣で加州が気を揉んでいる様子で審神者と長谷部を見比べる。彼も、長谷部に思う所があったのかもしれない。例えば長谷部の世話をしている一番近くにいた、とかなら長谷部の事を心配しても不思議では無いだろう。

かつての審神者は「普通に接して来たつもりだった」と言っても、その態度が苦痛になってしまっっては元も子も無いのだ。長谷部が去ると決まった時に、彼等はどの様な思いを抱いていたのか。歌仙はぼんやりと小さく荷物を詰める長谷部とそれを遠くから見ている加州と引き渡し審神者を思い浮かべ、終わった事を想像しても仕方無いとす

ぐにそれを打ち消した。

「……私は、少し物事を気にし過ぎる性格で。大らかな性格というのは、とても羨ましい事です」

「はは、無い物ねだりだな、お互いに」

引き渡し審神者が目を伏せながらも羨望と悲哀が入り混じった微笑みを浮かべる。審神者も、俯いて右手で反対側の着物の袖を所在無さげに握り締めた。

「主君、そろそろ」

「ああ、長話をしてしまったか。では改めて」

前田に話を切り上げる様にたしなめられ、引き渡し審神者は咳払いを一つして、表情を引き締めた。審神者も背筋を伸ばして顔を上げる。

「今回狭霧隊本丸の調査をする部隊は我々朝凧隊と、貴殿方春光隊だ。先行して我々も調査を行っているが、まだ成果は得られていない。調査に参加する貴殿方と案内を申し出た元狭霧隊所属のへし切長谷部には感謝の念に堪えない。……では、現時点で入手出来た情報を渡そう」

審神者二人は端末を立ち上げ、データの受け渡しを行った。引き渡し審神者——朝凧審神者は情報が開かれたのを確かめ、説明を続けた。

「施設内部では青江と石切丸が黒いもやの様な物を目撃したとの報告があった。現在それはこちらに対して何も行動を起こしていないが、二振りにも正体が分からない以上何が起こるかも分からない。注意して調査してもらいたい」

「……幽霊に近い何かなのは確かだと思うけどねえ」

「いい物では無いね。強い怨嗟の念が感じられたから」

青江と石切丸がそう付け加えれば、春光隊側の刀達は一斉に小夜の方を見る。視線を一身に受けた小夜はびくりと体をすくめた後、ぼそぼそと口にした。

「……僕が感じた黒い澱み……門の近くまで来ていましたけど」

その言葉によって、朝凧隊側にざわめきが広がった。嘘だろ、まず

いですね——その囁き合いと顔の強張り様から察するに、事態はかなり深刻らしい。朝凧審神者は苦々しく顔を歪め、端末を操作して大雑把な地図を表示させた。

「ここ数十分で門まで来たか……早く何とかしないと被害が広がりがねないな。すまないが春光殿、そちらの長谷部に地図を確認して貰いたいのだが」

「分かりました。……長谷部さん」

「はい」

暗い顔をした長谷部が審神者達に近付き、地図を見て中の構造を確かめ始めた。

その間、春光隊側の刀達はひそひそと話をしている。歌仙も、小夜に小声で話しかけた。

「お小夜、黒い澱みというのはどの様な物だった？」

「……とにかく、怨嗟の声が聞こえて来そうな程濃い感情を感じました。あれに引きずられたらひとたまりも無いでしょうね。強い破壊衝動を持つていても不思議ではありません」

「お小夜がそう言う程か……でも、ここの審神者は良くも悪くも無いと言っていたが」

「それは間違い無いと思いますよ。……あの澱み、相手を選んでいない節があります。僕等が到着した途端にこちらを取り込もうとしていたのですから。恐らく、ここの本丸は通り魔の餌食にされてしまった様な物なのではないのでしょうか」

通り魔の様な——歌仙は改めて中庭を見渡す。ごくごくありふれた、審神者が選べる景色の一つであるその庭園は、池は綺麗な水を湛え、緑は青々としていながら整然としている様に見える。しかし自分の目に映っていないだけで、青江達や小夜にはかなり淀んだ光景が広がっているのだろう。

自分も何か感じ取れないかと力んでみる。小夜が訝しむ様に見えるが、構わずに続けていると——

『何か気味悪いよね、長谷部さんって……』

——突如、そんな声が聞こえた。固まった歌仙を見て、小夜が話し

かける。小夜の口の動きは「声」と重ならない。二つの、あるいは一つと複数の声は、歌仙を困惑の渦に叩き落とした。

「歌仙、どうしましたか」

『そうですね……どこか不気味というか、何というか……』

『近付くと、こっちまで呪われそうで……』

「歌仙？」

『主は仲良くしろって言うてるけど……難しいよね』

『悪い奴では無さそうだが……関わりたくねえよな』

「汗が凄いですよ、歌仙。……聞こえていますか？」

『化物を斬ったんじゃないやなくて、化物その物であると言われても信じるな、俺』

『だね……出来る限り、近くにいて欲しく無いなあ……』

「——歌仙！」

小夜に体を大きく揺さぶられ、歌仙は「声」を認識の外に出す事が出来た。小夜を見つめると、どうしたんですか、と鋭い目を心配そうに細めている。周囲を見回すと、春光隊側の刀達は怪訝な目つきでこちらを見ていた。朝風隊側に目を向けると、彼等は歌仙の異変に気付いていない様子で会話を続けていた。「声」はこの場の誰にも聞こえていなかったらしい。

「声」の主は、この中にいる誰かの様でもあるし、誰でも無い様な気もした。または、「自分」が発していた可能性もある。今でも気を抜けば聞こえて来る言葉達は、どれもこれも長谷部を疎む物ばかりだ。一体、これは何なのだろう。

歌仙は何気無く、本丸の縁側に目をやった。そして、目を瞠る。

——「声」が一層強く渦巻く中、覚えのある気配を纏わせた長谷部が足取り重く歩いていた。

「長谷部!？」

「うわっ、どうしたんですか歌仙さん!? 長谷部さんがどうかしましたか?」

背後にいた鯰尾がびくりと体を跳ねさせ、ひと段落ついてこちら側に戻って来ていた長谷部も目を丸くしていた。

歌仙は再び本丸の縁側へ顔を向ける。そこにはもう、長谷部の姿は影も形も無かった。

骨喰が呆然とした声音で、歌仙に問いかけた。

「本当にどうしたんだ。長谷部の幻覚でも見たか？」

「……ああ、そうだね。ここが長谷部と因縁がある場所だと、意識し過ぎたみたいだ」

「あんまり力まないで下さいよ。長谷部さんはもう、うちの刀なんですから」

ねえ、と鯰尾は長谷部に呼びかける。浮かない表情の長谷部は、それに何も返さない。どこまでも沈み込みかねない様子の彼は、しばらくしてからぼつりと零した。

「……あまり、ここでの生活は覚えていないんだ。何故だか涙が止まらなくなる程酷く辛かった、という事しか……思い返しもしない俺は、薄情なんだろうか」

「まあ、あまり過去に囚われ過ぎない方がいいですから。身にならない辛過ぎる事は、忘れてしまいうに限りますよ」

「……何があつたかは知りませんが、湿っぽくなられても困ります。出来る限り思い出さないで頂きたいですね」

鯰尾と宗三が長谷部にそう言う中で、歌仙は「声」の名残を追って本丸の縁側を見つめていた。

あれは、この本丸の記憶なのだろうか。何故自分だけが認識出来たのか、いやそれよりも。

——長谷部はこの本丸で、あんな陰口を叩かれていたのか。

自分達も最初に長谷部を見た時、例えような無い違和感を感じた。だがあからさまに避けたり、あんな風に陰口を叩くものはいなかった。それは今の主が少し特殊なものもあるかもしれないが。

歌仙は今しがた見た見た長谷部の扱いに困惑していた。彼なりに言うならば「雅じゃない」あの陰口の中に「自分」が混ざっていたのかもしれないのだ。いくら違和感があるとはいえ、あの様な心無い言葉を「自分」が発していたとは思いたくは無かった。だが個体差であると言われると、歌仙はもう何も言えない。

——でも、何故そこまで長谷部を疎んでいたんだ？

確かに変わった所が多い長谷部ではあるが、そこまで遠くに置きたがる理由が分からない。それこそ個体差で片付けられる問題だと思う。

思うのだが——自分にも心当たりがある。長谷部が違う誰かに見える事。悪意は無いと判断しているが、その人物を知らないこちらとしては、主を害する可能性が否めない為、僅かに警戒して長谷部の経過を見ていた。しかしそれも、「呪われそう」と言われる根拠には欠けている。歌仙は警戒こそしてもそう思う事は無かったのだから。

姿が違つて見える事が、幽霊を連想させるからか。いや、それなら幽霊を斬つたにっかり青江も遠巻きにされなければ不自然だ。幽霊に関わる事が問題では無いのだろう。

「歌仙さん」

審神者の呼ぶ声で目まぐるしく回転していた脳が一度止まる。審神者に顔を向けると、彼女は紙の面を風に揺らし、覆われていない口元を動かし真面目な声を紡いだ。

「準備が整いました、これから本丸内に入ります。長谷部さんを先頭に、朝風隊、私達と続きます。気になった事があればすぐにおっしゃって下さい。……考え事をしていた様でしたが、それは澱みと関係がある物ですか？」

「……歩きながら話そうと思う。澱みと関わるかは分からないが、長谷部に関係している事だ」

分かりました、と返して審神者は縁側に顔を向ける。長谷部と朝風隊は既に室内に入っており、障子を開けて春光隊を待っていた。

*

「……何故、歌仙さんだけ感知出来たのでしょうか」

「分かってたら苦労しないよ。気分の悪くなる物を聞かされているし、本当に何で僕だけ……」

はあ、と歌仙は大きくため息をつく。歌仙の後ろを歩きながら審神者も口に憂いを湛える。

廊下を歩いている現在、「声」は再び歌仙の耳に入り始めていた。し

かも、時間が経つ度に声の数も大きさも増している。不愉快さもそれに合わせて上昇し、歌仙は少しだけ気が立っていた。

『化物』

『申し訳ないのですが、近付かないで頂けますか』

『気持ち悪い』

『弟を呪ったら許さない』

陰口は次第に罵倒と化し、歌仙を襲っている。幾ら何でも、長谷部がここまで言われる筋合いは無いだろう。普通の本丸であるという評価は覆さなければならぬ。どう考えても、これは異常だ。

頭が痛むし、少し吐き気もする。宗三に支えられ、歌仙は重い体を引きずりながらも何とか歩いていった。

「……この審神者は何をしていたのでしょね。長谷部がここにいるという事は、審神者は不和の元を切り捨てたという事。……根本的な解決をせずに、苦しむ刀剣男士を放り出した。それで成り立つ平和など、歪にしか見えません」

「……刀剣男士にとって良くも悪くも無い審神者なら、そんな手段を取るのも不思議じゃないかもかもしれませんね。言っちゃ何ですけど、たった一振りいなくなればみんな仲良しこよしになれるなら、平凡な人だったらそうすると思います」

「……長谷部は、そんな凡庸かそれより下の審神者にしか当たらなかったのか」

「よく憎しみに堕ちなかつたですね、長谷部さん……」

「昨晚あんなに泣いていた訳だ。精神的な傷への刺激が少しでも小さきやいいが」

薬研が重々しく呟けば、春光隊側の刀は小声で話し合っていたのを止める。そうして全員が先頭へと目を向けた。

隈の濃さからして長谷部は一晚中泣いていたのだろう。どんなに記憶が曖昧だと言っても、傷付いた事実からは逃げられない。あんな陰口や罵倒を浴びていて平気でいられるのは余程心が強靱でなければいけないだろうと歌仙は思う。

今先頭を歩いている長谷部は、ふらふらと覚束ない足取りで本丸を

案内している。現在向かおうとしているのはこの執務室だ。

この本丸はかなり複雑な構造となっており、右を曲がったと思えば左へ、かと思えば数多の分かれ道の中真っ直ぐに進まなければならなかったりと、知らぬものが何の道しるべも無く入れば頭を抱える程の迷宮度合いだ。長谷部も記憶が薄れている為どちらに進めばいいか悩む場面もあった。

「足下、気を付けて下さい。段差になっています」

だがしばらくすると、少しずつ思い出して来ているのだろう、案内の口ぶりに迷いが少なくなっていた。朝風審神者が礼を述べ、段差に注意する様に後方へと声を張り上げる。

進めば進む程、澱みが濃くなっている様な気がする。歌仙が感じ取れるレベルにまで至っているのだ、オカルトに強いものがほとんどである朝風隊の刀達が顔を強張らせているのも頷ける。

「……春光隊の皆、ここからは気を強く持った方がいい。でないと、引きずり込まれるよ」

朝風隊の最後尾を歩く青江が振り返り、死地へ赴く緊張を帯びた声で告げる。歌仙は小さく頷き、背後の様子を確かめる。流石にふざけているものは誰もいない。

すすすと青江が春光隊側に下がり、歌仙に小さく囁く。

「……あれだけ大切にしているなら、酷くされると覚悟していたんだけど」

「……何がだ？」

「長谷部君の事さ。とても良い待遇を受けさせている様じゃないか」

歌仙は眉をひそめる。追いついた側である青江が、それを言う真意は何なのか。……自分も長谷部を信じ切れていないが、仲間として認めつつあるのだ。

——本当はこの本丸の誰かに問い質したかった。悪意の欠片も無い長谷部を、迫害した理由を。

それを見透かした様に、青江は肩をすくめる。

「長谷部君の事は、不用意に謝るつもりは無いよ。長谷部君が悪くないのは分かっている、でも僕等も必死だったんだ」

「……言い訳をするのか。見苦しいのを見せるのなら斬り伏せるよ」
「言い訳……そうだね、言い訳だ。どんな形であれ、僕等は彼を傷付けた。でも」

青江は名の示す表情では無く、真剣な面持ちで歌仙を見る。

「彼は僕等の本丸に災厄を運びかねなかつた。何せ彼を中心に、殺傷沙汰になりかけたんだからね。主が彼をそちらに譲り渡したのは、本当に本丸が分裂する寸前だったんだ」

「……殺傷沙汰？ そんな事を起こしかねないものを、こちらに渡したのか」

「謝って楽になるつもりは無いよ。……彼は何故かそこにいるだけで、こちらの嫌悪感を掻き立てる。その中でも彼を斬ろうとする過激なもの達と、庇おうとする数少ないもの達が殺し合いになる所だったんだ。手に余るという事で最初は政府に引き取って貰おうと思ったんだけど、長谷部君は『政府に引き取られるくらいなら折れてやる』って騒いでね。それで引き取り手を探して、君達の本丸に行く事になったって訳さ」

——嫌悪感。それが理由か。歌仙は憤りと共に、すんと何かが腑に落ちる感覚を覚えた。自分が時々感じていた違和感の正体を、正面から突き付けられた気がした。

それでも、と理性が叫ぶ。そんな無意識を抑え込めずに何が戦士か。長谷部は、何も悪く無いじゃないか。理想を掲げるだけではどうにもならないと分かっているが、目の前にいるものが絶望で押し潰される様を見るのは、どうしても嫌だった。

「……僕は、必ずここで真実を掴むよ。その上で長谷部と上手くやっていきたいと思っている」

「陰ながら応援しているよ。……そうする事しか、僕には出来ないからね」

青江は少し悲しそうな笑みを浮かべてから前を向く。顔を上げると同時にもうすぐだ、と朝風審神者が告げた。

そして一分経っただろうか。動いていた列が止まると、右手に「執務室」とプレートが掛けられた引き戸があつた。

——中からは、悪い気配が強く感じられた。

「よし、それではこれから執務室の調査にあたる。気になる物があつたらいたずらに触れず、青江か獅子王か石切丸か太郎太刀に報告してくれ。……執務室はまだあまり調査が進んでいないという。敵の出現も考えられる為、慎重な行動を心がけてくれ。太郎太刀、頼んだー」朝風審神者が呼びかけると、太郎太刀は前に進み出て執務室の扉を開ける。

扉の中から、澱みが一気に流れ出て来た。加州がうわっ、と嫌そうな声を上げた。

「……俺でも分かる様な嫌な空気なんだけど」

「……耐えろ、加州。ここを制圧すれば任務は終わりだ……多分」

獅子王をはじめとしたオカルトに強い刀達は、一様に顔を青ざめさせている。

加州が恐る恐る薄暗い部屋に足を踏み入れて、そろそろと奥まで進み窓を全開にする。空気は多少ましになった程度で、澱みが収まる事は無かった。

心なしかのろのろと、朝風隊の面々が中に入る。

「……僕達も入ろう」

歌仙は気合を入れつつもそう言って部屋の中に踏み出した。

中には正面に文机と窓、右手に花器が置かれている床の間、左手に襖があつた。全体的に華美では無く、質素と言つていい執務室である。

歌仙は床の間に向かい、花器を検分する。花器は美しい曲線を描いており、歌仙の目にもいい物だと判断出来た。なかなかいい趣味をしているのではないかと思つてみると、横にいた小夜に袖を引かれた。

「歌仙。花器に何かありましたか」

「見てくれお小夜、この花器はいい物だ。刀剣男士を一振り追い出している人物にこんな評価を下したくは無いが、いい目を持っていたんじゃないかな。ああこんな所に無かつたら買って帰り——」

「真面目に調査して下さい。次余計な事を言ったら全力で頬をつねります」

「……お小夜が冷たい……」

肩を落としてつつも隣の地袋の戸を開こうとしゃがむ。

戸を開くと、中には書類がぎっしりと詰まっていた。詰め方も無理矢理押し込めた様で、乱雑だ。

顔をしかめていると、足下に一枚の紙が落ちていた。歌仙は拾わずに紙の文字を読み上げる。

「……『物質情報生命体の媒体精製及び融合実験について』……?」

読み上げてみたものの、全く意味が分からない。小夜も困惑した表情で覗き込んでおり、何なんでしょう、と不審さを隠さずに呟いた。

朝風隊の誰かを呼ぼうと歌仙が振り返ると――

――みつけた

地を這う様な声が、耳の中に滑り込む。

聞き覚えの無い、幼くもおどましい少年の声だった。周囲をぎつと見回すも、朝風隊と春光隊以外の人物はいない。

恐る恐る、歌仙がその場にいたものに尋ねる。

「……今、声がしなかったかい?」

「え?」

「いや、聞こえなかったけど……」

朝風隊の面々はそう返した。オカルトに強い刀達も全く感じていなかった様で、首を傾げている。

それでは我が隊は。襖の前にいた鯰尾と骨喰を見ると、二振りは顔を固く強張らせ、冷や汗を一筋流していた。

「……たった今、押入れの中に青い御守りを見つけたんです。それで誰かを呼ぼうと思ったら――」

「……声がした。子供の声だった……よな?」

文机の側にいた薬研と宗三も、張り詰めた面持ちで呟いた。

「……俺だけじゃ無かったか。宗三はどうだ?」

「……出来れば聞こえていない事にしたかったですね」

「あの、一体何があったんですか?」

薬研の隣にいた審神者は何も感じていなかったらしく、しかし張り詰めた空気を察して恐る恐る自分の刀達を見渡す。

自分の隣からは殺気が感じ取れる。見れば、小夜が髪を警戒する猫の様に逆立てて目を見開いていた。

「……澱みが、僕等に集中して攻撃をし始めたんです。何が起こるか分かりません、せめて気を強く持つて——」

「……嫌」

恐怖を押し込めた声が弱々しく部屋に響く。その「らしくない」声に耳を疑い、声の主を追いかける。

——部屋の入り口付近にいた長谷部が、唇を震わせながら頭を抱えて蹲った。

「嫌、嫌だ、違う、ごめんなさい、俺が、俺がいたから、ああ、いや、嫌あああ——っ！」

「長谷部!?! おい、どうした!?!」

「長谷部さん!?!」

薬研と審神者が錯乱した長谷部に駆け寄ろうとした、その時だった。

——にがさない

——にがさない

——うらぎりもの

——ひとりだけいきのこった

——うらぎりものにばつを

——ぼくたちのひかりをうばったつみびとめ

——つみびとも、かばうやつも、ぜんいんしんじやえ

耳の奥で、声が反響する。同時に身体中重石を乗せられた——むしろ、身体が重石になった様に、ずしりと床に倒れ込む。

目を開こうとするも、澱みが目の奥まで浸透してそれを阻む。

朝風隊のもの達が顔色を変えて部屋を見渡す。うつすらとした横向きの視界を動かすと、自分の隊は慌てている審神者以外全員倒れ込んでいた。

「——ごめんなさい」

か細い長谷部と誰かの重なった声を最後に、歌仙の意識は暗転した。

13 | 2 「Witness」／鯰尾藤四郎 『彼の残骸
3』

——迂闊だった。

鯰尾はぼんやりとした頭の中でそう舌打ちする。

今自分がどうなっているか分からないが、あの御守りがこの事態の引き金になったのは確かだ。もう少し慎重に行動するべきだった。

——いやでも、見ただけで怪異を起こされたらどう対処しろと。

ぐるぐると思考が回る。自分が原因なのは間違い無いが、前置きもした、御守りに触らなかつたという事からかなり慎重に動いたのでは無いか。いやそうだろう。

「……おさん、鯰尾さん、聞こえますか？」

その落ち着きの中に焦燥感を混ぜた声と共に、鯰尾の五感は復活する。どうやら自分は今冷たい床に横たわり、体を揺さぶられているらしい。そして鼻の奥につんとした薬品の臭いが刺さる。

……おかしい。あの執務室で、こんな臭いはしなかつたはずだ。

ゆつくりと目を開けると、目の前に眉を八の字にした小夜の顔が映った。

「……小夜ちゃん。俺、今どうなってる？ 俺達、今どこにいるの？」

「良かつた……見た目は先程と変わりません。服装もいつも通りです。それから、場所ですが……僕にもさっぱり分かりません」

起き上がれますか、と問われて頷く。体を起こして左右を見渡すと——そこは「白」であつた。

白。壁から天井、ドアに床、机などの調度品まで全て眩い白色だった。天井の電気も白い光を発している。透明なガラス製品等が収められている白い棚、白い書類、白いノートパソコン……うんざりする程の白である。

「……ここって、所謂『研究所』って奴？」

「知ってるんですか？」

「本の中でしか知らないんだけどね。……でも、ここって怨霊とかと

は縁遠い場所のはずじゃ……」

漫画や小説の中でしか見聞きしない研究所。超常現象と対を成す科学を取り扱うその場所は、刀剣男士とは無縁の場所だ。……少なくとも、鯰尾の認識では。

刀剣男士は、審神者が用意した素材を用いて降ろされる付喪神。所謂オカルトに近い存在である彼等は、科学的な物に疎い。鯰尾が「研究所」を知っていたのは、ただの好奇心による副産物である。

普通なら「白い」だけで済まされてしまうだろうな、と考えながら、鯰尾は立ち上がってドアに近付く。ドアノブを掴んで開けようとするが、ドアはびくともしなかった。

「……扉、開かないんです。鯰尾さんが起きたら開くかと思ったんですが……」

「そつか。じゃあこの部屋を調べるしか無いかあ……」

鯰尾は気怠げに立ち上がって腕を上には伸ばした。

小夜も立ち上がり、どれから調べましょうか、と呟く。

「うーん、それじゃあまずはその棚から調べてみようか。紙の資料なら読みやすいだろうし」

「分かりました」

二振りはクリアファイルの詰まった棚に近付き、それぞれ目の前にあったクリアファイルを手に取って開く。

鯰尾が手に取ったファイルをぱらぱらと流し読みして見ると、どうやらそれは男児達の記録をまとめた物である様だった。

胸から上の写真、身長、体重、健康状態、それから「適性」などという項目も記されている。意味をよく理解出来ず頭痛が起こるのを感じていると、あるページが目についた。

そのページには、鯰尾が夢で見ていた男の子の写真がクリップで留められていた。鯰尾は目を皿の様にし、そのページを隅々まで読み込んだ。

アロチトシキ
——新内利樹

八歳、身長一二三センチメートル、体重十八キログラム、成長不良の傾向あり。ここに来たのは母親の推薦だが、被虐待児であり突然泣き出す、性格が豹変するといった行動がみられる。解

離性同一性障害の可能性あり。適性はDが四十パーセント、SSとSがそれぞれ二十パーセント、LとGが十パーセント未満……。

適性が鍵になるとは思うのだが、どうも意味がよく分からない。唸り声を上げていると、隣から視線を感じた。

「……鯨尾さん。さつきから手が動いてませんけど……何か気になる事がありましたか」

「……見覚えのある子の写真を見つけて、気になったんだ」

「見覚えのある？ 見せて下さい」

はい、と小夜に持っていたクリアファイルを渡し、小夜から彼が持っていたクリアファイルを受け取る。鯨尾はその分厚さに驚きつつ、最初の方のページを開いた。

『……この実験は被験者を大量に消費してしまうという欠点はあるが、それを補って余りある利益が生じる。我々はそれを忘れてはならない。成果は時に倫理よりも重んじなければならない。罪悪感が襲っても、何も知らない人々に糾弾されても、研究者としてこの実験を実行あるものにする事を政府は期待している』

この施設は政府も認めている実験をしていた様だ。一体何の実験をしていて、それにあの男の子はどう関わっていたのか。

男の子は妹からは「お兄ちゃん」、女性からは「化物」と呼ばれていて、鯨尾は長い間夢を見ていたが彼の本名すら知らなかった。友達もいなさそう——そもそも同年代の子供がいる学校に通っていないさそう——だったので、まともに名前を呼ばれる場面が無かったのだ。

鯨尾は、男の子が今どうしているのか知らない。見ていたのはささやかな幸福と、苦痛で満ちた虐待の繰り返し。そんな中で掴んだ手がかりだ、真剣に見るのも当然である。

「鯨尾さん、この子とはどこで会ったんですか？」

「夢の中で、一方的に知っているだけなんだ。存在しているか疑っていたんだけど、他に見覚えが無い子の写真があるのを考えると本当にいるみたいだね」

「……それ、誰にも言わなかったんですか？」

「半分実在を疑っていたから、骨喰と薬研にしか言っていないよ。俺も

随分前に見た番組に影響されただけだと少し思ってたしね」

小夜は再び視線をクリアファイルに落とす。目を左右に動かして文字を追い、ページを捲って同じ事を繰り返してからぱたんとクリアファイルを閉じた。

「どうして鯨尾さんがその子の夢を見る事になったのかは気になりません。その子の事は後で聞かせて下さい。今は他のひととどうやって合流するかですが……」

「扉が開かない事にはねえ……次はばそこんを調べようか」

二振りとは反対側の机に向かい、折り畳まれていた白いノートパソコンの画面を持ち上げた。

電源は既についており、パスワードの入力を促す表示がされている。

「ばすわーどって……何ですか」

「確か鍵になる言葉とか、そんな感じだったと思う。……手掛かり無しにどうしろと……」

そう言いながら鯨尾は適当にキーボードをタイプし、弾かれたのを見てためか、と投げやりに息を吐いた。小夜も恐る恐る「かぎ」とひらがなで書かれたキーを入力し、これまた弾かれていた。

鍵になる言葉。そうは言っても、鯨尾達には思い当たる物が無い。ばらばらの英数字であつたらそれこそお手上げだ。

画面を睨んで鯨尾はぶつぶつと悪態を吐く。

「何だよ、ばそこんとかって怪異とは程遠い筈だろ。それともあれか、怪異も現代に適応してるのか？ 怪異の癖に現代かぶれかよ！

ちよつとは知識分けろよちくしよー！ 俺だってばそこん使いたいんだよー！」

「鯨尾さん、気持ちは伝わりますがあまり画面に近いと目を悪くしますよ」

小夜に宥められ、鯨尾はまだぶつぶつ言いながら画面から離れて近くの椅子に座った。

小夜は口に手を当ててしばらく考えてから、先程の棚まで戻りクリアファイルを取ろうとつま先立ちになる。指先がぶるぶると震えな

がらも手が届かないのを受け、小夜は近くの椅子を引つ張つて来て柵の前に置き、椅子の上に乗ってクリアファイルを取り出した。

中身を確認かめ、椅子を元に戻して小夜はパソコンの前に再び立つ。怪異よりも後を歩いている事に不貞腐れている鯰尾が、ゴロゴロと椅子を勢いよく回転させながら小夜に尋ねた。

「小夜ちゃん、何か分かったー?」

「さつき、鯰尾さんが言ってた子の名前を入れてみようと思って……鯰尾さん、目を回しますよ」

「ろーま字入力とか分かるー? 多分そういうのってるーま字入力だと思う。分からなかったら俺が代わりに入れるよー」

「……分からないです。お願いします」

ぎつ、と音を立てて椅子の回転を止め、鯰尾がパソコンの前に移動する。入力を代わり、記憶を頼りにしてクリアファイルに載っている名前を打ち込む。一番最初は、やはり男の子の名前だ。

「鯰尾さん、ろーま字入力とかどこで学んだんですか?」

「んー、退屈しのぎに読んでた本を読んでだよ。ばそこんの本とか読んで夢を広げるのが楽しいんだー」

「……色んな本を読んでいますよね。小説から学術書とかまで……」

「あんまり難しい事は覚えて無いんだけどね。……よしつ、通ったー!」
入力を終えてエンターキーを押すと、今までの画面とは違い「ようこそ」という言葉が浮かび上がった。しばらく待つと、デスクトップ画面が表示される。

しかしデスクトップにはアイコンが一つだけ——「うそつき」というファイルのショートカットしか貼られていなかった。

「……何だこれ?」

「不可解ですが、調べるしか無いでしょう。……えつと」

「ああいいよ、俺がやる」

パソコンの操作の仕方が分からずまごつく小夜に笑いかけ、鯰尾はマウスを動かし「うそつき」をクリックした。

すると、画面がさらに眩く輝き——二振りを飲み込む光量が溢れ出た。二振りはとつさに目を瞑る。

光が落ち着いてから目を開けると、先程の部屋の中に小さな頭と白衣を着ていると思われる頭が見えた。何か話しているらしく、小さな頭が僅かに動いている。

不思議な事に、今自分は天井から部屋を見下ろしている様だ。手を見ると、夢の中と同じ様に透けている。あの二人には干渉出来ないと思っただ方がいいだろう。

「な、何が……い」

隣から泡を食った様な声が出る。小夜は初体験だったな、と思いつつから鯰尾は右を向き明るい声を出す。

「小夜ちゃん、大丈夫だよ。映像を見せられている様な物だから、体に異常があつた訳じゃ無い」

「……慣れてますね。まさか鯰尾さん、夢の中っていうのはこういう……」

「そう。あの二人に俺達の存在は感知出来ないと思うから、好きに動いてみたらいいんじゃないかな」

そう告げてから、鯰尾は水中に沈む要領で部屋にいる二人の下へ降りる。近くまで行くと、声が鮮明に聞こえて来た。

白衣の男は三十代後半くらいだろうか。くたびれたTシャツとぼろぼろのズボンを履き目線を下に向けている男の子を、白衣の男は人の良さそうな笑みを浮かべて見ている。

「……以上で診察は終わりだ。トシキ君、何か質問は？」

「……妹は……トモエは、どこにいるんですか？ 早く会いたいんですけど」

白衣の男はパソコンに何かを入力し、それから小さく懇願する男の子——トシキを見た。先程から変わらない微笑みが仮面の様だ、と鯰尾は感じた。

「君とは違う実験棟にいる。君が実験を終えれば、きっと会えるさ」
——嘘だ。直感がそう告げている。

この男は兄妹を引き合わせるつもりなど皆無だ。笑っていない目の奥、そこにあるのは虫ケラを見る侮蔑の感情だった。

トシキは妹が唯一の心の支えであるのに——静かに煮えたぎる憤

りを、握る手に込める。

トシキも白衣の男の意図を察したのか、それ以上食い下がる事はしなかった。薄っぺらい笑みのまま、白衣の男は声音だけは優しく物知らぬ少年に語りかけた。

「君にはここである実験に参加してもらおう事になる。詳しい説明はこの後行く場所にいる人がしてくれる手筈になっているよ。……この実験は皆を助ける為の前段階といった所かな。君の妹を助ける事にも繋がる大切な実験だ。君がいい成果を上げてくれるのを祈っているよ」

妹を助ける、その言葉にトシキが肩を跳ねさせた。相変わらず俯いたままだが、膝の上に置かれた手を強く握りしめている。しばらくして、トシキは顔を上げて白衣の男を真剣な眼差しで見た。

「分かりました。頑張ります」

「よし、いい返事だ。君と同年代の子もいるから、彼等に引き離されない様にね。それじゃあこの紙を持って、あの女の人について行ってくれ」

白衣の男は指差した先にいた白衣の女に後は頼んだ、と声を張り上げた。白衣の女はトシキの前に歩いて、彼の手を引いて再び歩き出す。

ドアの向こうへと二人が消えた途端、景色が揺らぎ白衣の男の姿が消える。そうして揺らめきが収まると、そこは先程まで立っていたパソコンの前。パソコンの画面には「再生終了」の文字が浮かび上がっていた。

隣に立っている小夜は呆然とした顔で立ち尽くしている。鯨尾が小夜の顔の前で手を振ると、小夜は我に返った様に目を大きく開く。

「……終わっただんですね」

「そうだね。何か気付いた事があつたら教えて」

そう投げかけると小夜はじつとパソコンを見つめてからぼつぼつと呟いた。

「あの白衣の男……どう考えても兄妹を合わせる気が無いですよ。妹って単語を出せば兄を釣れると思っていて、実際その通りになって

います。……白衣の男は、あの兄を同じ考える頭を持つ存在だと認識していない。確かに兄はまだ子供で、経験も浅いかもしれないですけど……何と言っているのか」

「……うん、決まり切った言葉を選んで話している感じはした。小夜ちゃんの言う通り、白衣の男はかなり男の子を軽視していると思う」
小夜は言葉を選んでいるが、はつきりと言ってしまえばあの白衣の男はトシキを同じ人間として見ていないという事だろう。自分が持つ尊厳を、トシキにもあるとは微塵も思っていない。トシキは信じてはいないが、大人への対応として白衣の男にある程度の敬意は払っている。

同じ人間であるはずなのに、そこにあるのはあまりにも歪んだ認識だった。

「……ん？」

ドアの方からガチャ、という小さな音がした。鯨尾と小夜はドアの方に顔を向ける。

鍵がかかっていたはずのドアはわずかに開いており、空気が流れ込む感覚を覚えた。

「……行けて事か。あからさま過ぎるだろ」

「行くしか無いでしょう。他の方もいるかもしれませんが、一刻も早く合流を目指すべきです。一振りでも多くいた方がいいですから」

「そうだね、他のひとも心配だし。腹をくくるか」

小夜の意見に同意して、薄く開かれたドアの外を窺ってから鯨尾はドアノブに手をかけた。

13—3 「w i t n e s s / 薬研藤四郎 『何も知らない自分は』」

「……こりゃあ、どうなってんだ」

「俺が聞きたい、薬研」

日差しを遮り町を仄暗く染める曇天、落書きで塗れたシャツターの下りる店が並ぶ薄汚れた大通り、目から光を失くし力無く歩く人々、路地裏に蹲りぎらぎらした眼差しで何かを待っている子供達。

薬研と骨喰は、そんな知らない町の商店街で目を覚ました。

索敵がてら商店街を歩いてみるが、誰も彼も身なりが悪く覇気が無い。希望に満ちている者と一人もすれ違わず、からからと足元で転がるビール缶をはじめとしたごみを拾う清掃員もいない。それらが余計にこの大通りの空気の重たさを増していた。

「……貧民街といった所か。あの本丸と何の関係があるんだ？」

「狭霧隊の審神者がここの出身とか……あり得ねえか、資料には上流階級の生まれだと書かれていた筈だ」

「そうだな。政府の機密文書でそこを偽る必要は無いだろう」

政府の資料ではそこそこ社会的地位の高い素封の家の人間と記載されていた。電柱に書かれている町の名前などは一文字も出ていない。商店街のある町と繋がっているのなら、それも資料に記載されていただろう。それが無いのなら、狭霧の審神者はこの商店街とは無関係だと断定出来る。

「いよいよ訳が分からず、二振りが途方に暮れかけていると——」

「——散れ散れ、糞餓鬼共！ 金の無い奴にやる果物は無いよ！」

品の無い響きを纏った怒鳴り声が入って来た。骨喰がぎよつとした表情でそちらを見る。薬研も声の方へ目をやった。

どうやら八百屋の老いた女店主が、果物を強請る子供達を追い払っているらしい。バットを振り回している女店主から蜘蛛の子を散らす様に子供達は走り去って行った。しかしその中の一人が果物を握りしめて逃げたらしく、女店主は怒髪天を衝く勢いで怒号している。

そんな一幕を人々は軽く見ただけで目を向ける事無く歩いている。女店主を気にする事もせず通り過ぎて行く光景は、この町にとっての日常なのだ。と察する事が出来た。

薬研達もここに情報は無さそうだと思って歩き出そうとした。

「……すみません」

少年の声に足を止める。か細いその声が何故か気になって、薬研は再び八百屋の方を向く。そこには、二人の子供が立っていた。

声の主は伸ばしっぱなしの髪、腕や足に包帯を巻いた少年。彼と手を繋いでいるのはこれまた伸ばしっぱなしの髪をした少年より背の低い少女だった。頼り無い雰囲気醸し出す二人から、どうしてか目を離せない。

女店主は怒鳴り散らすのを止めて、子供達を見下ろした。

「……トシキとトモエか。母親はどうした？」

「いつも通り、集会に行きました。それよりも、買い物をしたいんですけど」

ふん、と鼻を鳴らし女店主は二人に告げた。

「さつきと奥に入りな。いつもの奴を買うんだらう？ 入るまで油断するんじゃないよ」

「ありがとうございます。ほら、トモエも」

「……」

少女の声はこちらまで聞こえなかった。しかし頭を下げている事から、礼を述べているのが分かる。

子供達は左右をさつと見渡してから、店の中へと入って行った。それに続き女店主が中に入り、ガラガラとドアを閉めた後に施錠した。

薬研と骨喰は、どちらが言うまでも無く自然に八百屋の近くまで歩いていた。薬研と骨喰はドアの前に立ち、耳を澄ませようと身を屈める。

すると、先にドアへつけた薬研の手が吸い込まれる。目を丸くした骨喰が消え、野菜と果物が並ぶ棚が目に入った。下を見ると、下半身はドアの向こうに、上半身は野菜と果物の棚が並ぶ屋内に存在している。這い蹲って奥に進むと、下半身も屋内に入った。

「どうやら、自分は壁を通り抜けられるらしい。幽霊じみているな、と考えてから同じ様なもんか、と考え直す。」

上半身を屋外に出してみようと試みてドアに突っ込むと、ぽかんとした表情を浮かべた骨喰が現れた。

「中に入れるみたいだぜ。骨喰兄も入れよ」

「……いよいよ異界の様相になって来たな」

「分かっていた事だろ？」

上半身を屋内に引っ込めて、骨喰を待つ。まずは骨喰の手がドアから生えて来て、手を開閉させて様子を確かめている。それから足が生え、少しずつ骨喰が中に入って来た。ほっとしたのか肩の力を緩める骨喰に行こう、と一声かけてから薬研は奥へ進んだ。

店の裏に入ると、女店主と少年と少女が野菜を手に机を挟んで話し込んでいた。二振りは念の為柵の陰に身を隠し、三人の声に耳をそばだてる。

「……はいよ、ジャガイモとタマネギ三つずつにニンジン二本。二百二十六円だ」

「はい、二百三十円です。……おばさん、いつもありがとうございます」

「四円のお釣りだね。何、あんたらはまともに金を払うお得意さんだからね。店先で餓鬼共に金を横取りされちゃたまらないだけの事さ」
「俺達も、お金を盗られたら困りますから……」

小さい声で話しながら小銭を受け取る少年。服の内側に小銭をしまっている少年に、女店主は机に頬杖をついてぼやいた。

「全く、少子化対策だか落とし子政策だか何だか知らないけど、金をばら撒くだけじゃなくて設備とかも整えて欲しいもんだね。躰のなつて無い子供が増え過ぎて困ってんだ。あんたらみたいな普通の客が、上客に見える程度にはね」

「……また、襲撃が？」

「あんたら、かち合わなくて良かったね。今日はいつてもより人数が多かった。あれに襲われちゃ、ひとたまりも無いだろう。後金も盗られてたね、私の金が」

「はは……」

しかめっ面で明け透けない愚痴をこぼす女店主に少年は苦笑いだ。少女は話の内容が分からないのだろう、首を傾げて二人を見比べている。

「落とし子政策……そうか、ここも……」

「骨喰兄、何か知ってるのか？」

骨喰の眩きを拾い、葉研が小声で尋ねる。何故ここに放り出されたのか、その答えに繋がるヒントを知っているのかと期待して。

だが、骨喰は小さく首を振った。

「俺も、てれびで聞いただけなんだ。子供を産めば産む程支援金が受け取れるという既に崩壊した政策で、その内あちこちの町中に行き場の無い子供が溢れ返る事になったとか……その町の光景は、見ていて気分の悪くなる物だった。子供達はどうなるのか、と考えると……兄弟も、顔を曇らせていた」

「その余波が、この町の有様って訳か。……でも、狭霧の審神者は関係あるのか？」

「……分からないな……」

そう話していると子供達が立ち上がり、店を出る準備を始めた。葉研と骨喰は小さく体を屈めて三人が通り過ぎて行くのを見送り、それから後を追う。

店先まで出ると、子供達は振り返り、女店主に小さく頭を下げた。

「おばさん、ありがとうございます。この事、お母さんには……」

「言わないさ、あつちも聞かないだろう。だからまた金を持って来ておくれよ」

「はい、また買いに来ます」

子供達は手を繋いで歩き出す。少女が何か話して少年が頷き、それから二人は微笑み合った。その姿は、小さな花がひっそりと咲く様な幸せで満ちていた。

女店主はその後ろ姿を見つめて、ぼそりと吐き捨てる。

「……鳶が鷹を生むとはこの事だね。全く、あの宗教狂いから何であんなまともな子供が……」

その瞬間、景色がぐらりと陽炎の様に揺らぐ。薬研と骨喰はとつさに身構えた。

目が回る、足元が崩れる。体が沈み込む感覚は錯覚だとしても気分が悪かった。

気持ち悪さに耐えていると、視界から光が消える。目を潰されたかと思つたが、自分の手は薄暗い中でだが見えている。恐らく、違う場所に連れて来られたのだろう。

薬品の臭いが強く辺りを満たしている。一体、自分は今どこにいるのだろうか。

「骨喰兄！ どこだよ！」

薬研は暗闇の中で骨喰を呼ぶ。声は反響するだけで、望んだ声は返つて来ない。仕方が無いと薬研はその場をぐるりと見渡した。

ここは屋内であるらしく、机や棚が並んでいた。机の上には書類と器材が、棚の中には瓶が置いてある。足元を確かめると、床は綺麗であるらしい。ただ、それはこの明るさで分かる程度だ。

慎重に歩きながら、薬研はこの部屋の出口を探す。ゆつくりと部屋の四隅を調べていると、ある一角の壁に固い金属らしき突起があった。手で触つてみると、その突起は僅かに下へ動き、これがドアノブであると判断した。

ドアノブを掴んで慎重に下げる。押してドアをわずかに開けると、隙間から白い光が目に入って来る。覗くと、白い壁とドアが目に入った。今は誰もいなさそうだ。

薬研はドアを開け、部屋の外に足を踏み出す。白い廊下に出て左右を見れば、やはり人らしきものはその場に存在していなかった。

——嫌な感じだな。

直感がそう告げた。白しか色らしい色が存在していないのも不自然だが、どうにもここからは血の臭いがする。それは悪い事では無い。薬研は戦場の——血の臭いが好きなのだから。

問題はその血の臭いが、白で覆うかの様に塗り隠されている事だ。まるで、不祥事を隠すが如く。

どう考えても、ろくな場所では無い。早く骨喰と合流した方がいい

だろう。そう思つて歩き出すと――

「薬研。ここにいたか」

しばらく歩いた先の階段から、骨喰が現れた。薬研は兄の名前を呼ぼうとし――それから訝しそうに骨喰を観察する。

骨喰の腕は後ろに回されており、両腕と体の隙間から小さな足が飛び出している。よいしょ、と骨喰が体を縦に揺すった事で、彼が何かを背負っているのだと分かった。

「……何おぶってるんだ、骨喰兄」

「俺が目覚めた場所で横たわっていた……見た方が早いだろう」

骨喰が少し体を回転させ、見えた物。それに薬研は目を大きく見開く。

「こいつ……さっきのちびすけ!」

先程、八百屋で買い物をしていた少年が、小さく寝息を立てていた。ぼさぼさの黒髪、包帯が解かれて初めて見えた身体中の傷。間違い無く、あの少年だ。

何故ここにいるのか、それよりも気になった事。――その体は、薄く透けていたのだ。

「……重みがあるのに、透けているんだ。それに酷く魘されていたから、放つて置けなくて連れて来たが……」

「……俺達の時とは状況が違いそうだな。多分、放つて置くとまずい。このまま連れて行こう」

少年の様子に顔を曇らせて、薬研は彼の同行に賛成する。骨喰は頷き、再び少年を背負い直した。

「骨喰兄、ここを探索していたみたいだが。行くあてはあるか?」

「下の階で、声が聞こえた。そこへ行ってみよう」

「分かった」

階段で下の階へ降りて行く。その間少年は魘され続けており、苦しそうに呻く声が聞こえた。

ちらりと少年を見て、薬研は疑問を呟いた。

「……何でこいつはここにいるんだろうな」

「……分からない。進む先で何か分かるといいが」

「そういや、この先って何があるんだ？」

「賑やかな声があったが、詳しくはまだ調べていない。……声がしたのはあそこからだ」

階段を降りて骨喰が指差した先に、観音開きの大きな白いドアが見えた。僅かに開いた隙間から、小さな笑い声が聞こえて来る。

薬研と骨喰はそつと近付いて中を確かめようと隙間を覗く。

「……それでその時のばあちゃんと来たらさ、目えかつ開いて腰抜かしてんの！ ちよつとしたいはずらのつもりだったんだけど、そこま

で驚かれるとは思わないじゃん？」

「やり過ぎじゃないの、カサネ……」

「ゴキブリのおもちやにあそこまで反応されると思わなかったんだよ！ その後正気に戻ったばあちゃんに特大の雷落とされたよ。途中でばあちゃんの驚き方を思い出してちよつと笑っちゃって、また追加で怒られた……」

「やっぱりやり過ぎだよ……おばあさんの苦勞が偲ばれるね」

ドアの中では、二人の少年が楽しそうに談笑していた。片方の「カサネ」と呼ばれていた少年は、肩まで伸びた髪をいじりながら話し続けている。

問題は、もう一人の少年だった。——骨喰に背負われている筈の少年が、カサネの隣で突っ込みながら話を聞いていたのだ。

薬研は骨喰の背にいる少年を振り返り、少年がいることを確かめる。少年の体が先程より透けている気がして、ぎよつとした顔付きで骨喰にその事を告げた。骨喰も慌てて少年を見返し、その姿を見て理由を探す様に言った。

「……何が起こっているんだ？」

「あのカサネって子供とこいつは友達みたいだが……どうして体が更に透けているんだ？」

「……嫌な事があった、とか」

「あり得るか。でも、今の所そんなに仲が悪い印象は受けないが」

再び中を窺うと、少年とカサネは互いに悲痛な面持ちをして俯いていた。急変した様子に息を呑んでいると、カサネが苦々しく目に角を

立てる。

「……こつちは四人死んだよ。残っているのはあと五人。この様子だと、再編されるだろうな」

「……再編……って事は、まだ終わらないのかな」

「終わらないだろ。大人達は、最後の一人になるまで殺し合いをさせる気だ」

子供達の口から紡がれる物騒な言葉に覗いている二振りは凍り付く。血の臭いと物騒さは自分達刀にとって当たり前の事だが、子供達が会話の中で血の臭いを漂わせていると辛く、重たい気持ちになってくる。

子供達の無垢な笑顔は、守るべき物の一つだ。あの二人の表情には、無垢さなどどこにも無い。それが酷く苦しくて仕方なかった。

「……トシキ」

「何？」

「いつか一緒に、ここから出よう。こんな所にいたら、大人達に壊される」

強い決意を秘めた誘いに、少年は目を丸くしてカサネの真剣な顔を見つめた。

本気なの、と言いたげなその視線に頷き、カサネは言葉を重ねる。

「外に出たら、まずは木に登って町を見下ろそう。知ってるか？ 本当に高い所から見下ろす町は圧巻なんだぞ。偉い人になった気分になれる。それを堪能してから、美味しい物をいっぱい食べよう。サーロインステーキとか憧れるよなあ。あとそれから……」

「……で、でも、大人達に見つかったら……」

「安心しろ、作戦は練ってる。トシキはまず、外に出てやりたい事を考えろ」

「……本当に、やる気なの？」

不安そうに声を震わせる少年におう、と明るさを装ってカサネは笑う。少し無理矢理に笑顔を作っている感覚は否めなかったが、次にカサネが真面目な表情に戻した時にはもう作り物めいていなかった。

「絶対にここから出て自由になる。その為にはお前の力が必要なん

だ。だからトシキ、俺と一緒に外へ行こう」

少年は手を握り締め、唇を震わせる。視線を彷徨わせる少年の返事をカサネは辛抱強く待っていた。

少年はどんな返事をするのか。外から覗いている薬研達も、どうしてか手に汗を握って少年の様子を見ていた。

しばらくして、少年は不安を決意で押し殺した目をカサネに向けて、告げた。

「……分かった。カサネの力になれるのなら、協力する」

カサネはぱあつと顔を輝かせてから、少年に勢いよく抱き着いた。少年はふらりとよろけたが何とかバランスを取り戻し、満面の笑みを浮かべるカサネの背をぽんぽんと叩く。

「ありがとう、ありがとうトシキ！」

「喜び過ぎだよ。カサネは俺の恩人なんだから、これくらいはさせてよ」

「何だよー、恩人とか少し距離があり過ぎないか？　こういう時はなんて言うか、はいさんにーいち」

「え、えっと」

カサネは体を起こしてから戸惑う少年の肩をバシツと叩いた。その表情は歓喜と希望で溢れていて――

「はい時間切れ！　正解は『親友だから』でした！」

「……俺、カサネの親友なの？」

「何度でも言ってるけど、お前は俺の一番の友達だ！」

少年は困った様に笑う。カサネも晴れやかな顔で笑っていた。楽しそうに笑う二人にこちらまでが笑顔になるくらいに。

直後、二人の姿は煙が吹き飛ばされたが如く消えてしまった。隙間の先は暗闇に覆われ、何も見えなくなる。

現実に戻された二振り息を吐き、骨喰の背にいる少年――トシキの体を確かめる。

彼の体は、また一段と薄くなっている気がした。

「……悲しい事を話していたな。最後は楽しそうでもよかったが」

「そうだな。……それじゃあ何でこいつはさつきより透けているんだ

？」

「……この後、何かあったのか？」

「そう考えるのが自然だろうなあ」

骨喰は首だけを動かしてトシキの寝顔を見ていた。薬研は口に手を当てて考える。

この場所が何かはわからないが、子供を殺し合いに参加させている時点でろくな場所ではないだろう。カサネが脱出を決意する程にはとんでもなく黒い世界がありそうだった。

脱出を願っていたカサネだが、どんなに賢くても彼は子供で、ここにいる大人達がろくな人間ではないと仮定すると、彼等の末路は自ずと決まって来る。疑問点は、何故トシキがここにいるのかという事だが――

思案に暮れていると、遠くからガチャリ、という解錠の音が聞こえた。

「……誘われているな」

「そうだな。でも手掛かりがほとんど無い以上、行くしかない。……鯨尾兄達、どこにいるんだろうなあ」

「行く先で会える事を祈ろう」

よいしょ、とトシキを背負い直して骨喰は歩き出す。骨喰の後をついていく薬研は、注意深くトシキの状態を観察していた。

――ごめんなさい、と魔されているトシキが、あの変な彼と被つて見えた。

ガン、ガン、とドアから鈍い打撃音が聞こえる。空しく反響するだけであったその音は次第に衝撃度合いが増し、ガシャン、と何かが壊れる音がした直後に大きな衝撃と共にドアが倒れた。

空いた空間の先では、菖蒲色の男と桃色の男が刀を抜いていた。

「全く手のかかる……素直に開けばいいものを」

「そうですね。現実の法則が適用されないなら、僕等が開けたい時に開けばいいんです」

——歌仙と宗三という、ある意味最もこの空間に一緒にしてはいけない二振りは、そう言いながら倒れ伏したドアを睨んでいた。

小さな部屋で目を覚ました二振りは、探索らしい探索を全くせず、他の隊員達との合流を優先した。宗三は「お小夜と薬研が心配です」と二振りの心配しかしていないし、歌仙も小夜が心配という言葉に同意した為だ。

どこまでもマイペースを貫く二振りは、納刀しドアを踏み付けながら文句を垂れる。

「ああ、お小夜、薬研……何事も無いといいいのですが」

「こんな風流さの欠片も無い場所、一分だっていたくないよ！早く他の刀と合流して脱出しないと……」

部屋の中をろくに調べもせず、片方は部屋をぼろくそこにこき下ろし、片方は部屋に言及すらしない。自由過ぎる二振りは自分がいた部屋を顧みる事無く廊下を歩き出した。部屋を開けては誰もいないのを確かめると、ドアを開けっ放しにして次の部屋へ踏み込んで行く。

嵐が通り過ぎて行くが如く仲間を探す二振り。——そんな彼等に業を煮やしたのだろうか。

「……薬研!」

「お小夜の声もしなかったかい!」

二振りは馴染み深い声を聞きつけて駆け出す。声が聞こえた先のドアを開け、中に踏み入る。

左手にガラス張りの壁と長机がある、あまり大きくない部屋だ。中

では数人の白衣を着た男女の影がゆらゆらと揺らめいている。

「薬研はどこに……！」

「お小夜はいそうに無いね……あれ？　でもさつき声が……それに彼等は誰だ？」

目を大きく見開き薬研を探す宗三と、小夜がいない事に気を取られながらもこの状況の不審さに気が付いた歌仙。そして立ち上る影から薬研と小夜をはじめとした刀剣男士達の声がした事で、宗三も異変に注意を向けた。

「……お小夜と薬研の声を使っている!？」

「……二振りだけじゃないみたいだね」

影はゆらめきながら刀剣男士達の声を使い、何かを話している。歌仙はそれに耳を傾けた。

「……はい、それじゃあ241番から260番。『実験』を開始します。

制限時間は一時間、ブザーが鳴ったら攻撃を始めて下さい」

ビー、とブザーが鳴り響いてから影の一つが伸びをする。それからざわざわと声が行き交い始めた。

「さーて、今日は誰が生き残るかな」

「また賭ける？　今日のランチの五割負担を賭けて」

「いいねえ。俺は256番が生き残るに賭ける」

は、と耳を疑った。——生き残るのは誰かと言ったか。ガラスの向こうを覗いて見れば、今度は目を疑った。

そこにいたのは、短刀ではない真正正銘の子供達だった。子供達は刀を握り、互いを殺そうと振るっている。その顔は大多数が無表情か恐怖に染まっており、誰も彼もが「死にたくない」という悲痛な願いを刃に乗せて斬り結んだ相手を殺そうとしていた。

生き残る為に、相手を殺す。子供達にとってはあまりにも負荷が大きい事だろう。ガラスから影に目を向けると、影達はまるで競馬を見て勝ち馬を決める様に楽しそうだった。

「うーん、私は243番かなあ。なかなかしぶといでしょ、あの子」

「しぶといで言ったら259番じゃないかな。今日までこうしている訳だし」

「じゃあ俺は大穴狙いで247番！」

実に、楽しそうだった。——子供の生死を賭けているとはとても思えない、軽々しい声だった。

何が楽しいのか、理解出来ない。理解したくない。よりにもよって刀剣男士の声を使ってこの様な言葉を吐かせるとは。この状況を生み出している者はとんでもなく悪趣味だと、歌仙は拳を握った。

影の一つがあつ、と声を上げる。ガラスの向こうを見ると、逃げ出そうとする子供が一人いた。涙と鼻水で濡れている顔をくしゃくしゃにして、必死にドアを開けようとしている。

影は、間違えてカップを落とした様に残念そうな声を出し、そして軽々しい声のまま無慈悲に言い放った。

「あー、260番はやっぱり駄目だったかー。処理する？ させる？」

「する方が真剣にやるんじゃないのかな」

「右に同意」

「それじゃあ260番の処理を開始します」

直後、ガラスの向こうから耳をつんざく爆発音が響き渡った。音のした方向を恐る恐る見る。

——逃げようとした子供の上半身が消失していた。周囲には焦げ跡と肉片が散らばっている。

残された下半身がゆっくりと床に倒れていくのを見て、子供達は恐怖で固まった。

「警告。脱走を図った者へ『処理』を執行しました。実験からの脱走は重大な規則違反です。これ以上の規則違反者が出さない様にして下さい。それでは、『実験』を続けます」

無機質な音声が流され、子供達は生き延びる為に怯えながらも刀を握り締め動き出す。

影はただらだと会話を再開していた。——気分の悪くなる様な言葉を交わして。

「260番に賭けた人ー？ ……何だあ、いないの」

「逃げるだろうって分かり切ってる奴に賭ける馬鹿はいないでしょー」

「ちえー。せつかく競争相手が減るかと思ったのになー」

「ほらほら、次は誰が落ちるか見てないと。……それにしても、もつと楽しい事は無いかなあ」

「まあこんな所、これしか娯楽は無いしねえ」

「違う、と影は下品に笑う。歌仙は柄にかけた右手を動かさない様に左手で抑えていた。

ガラス一枚隔てた先では、子供達が必死になって戦っているのに。それを娯楽にするなど、子供達を踏み躪る行為を何故平然と出来るのか。影に対して斬りかからなかった自分を心底褒めてやりたいと、苛立ちが喉まで込み上げる中歌仙は思った。

再びブザーが鳴り、戦闘終了の合図を出す。生きている子供の数は四分の一まで減っていた。彼等は静かに刀を下ろし、鞘に納めた後その場に座り込む。

歌仙は生き残った子供の中に、気になる者を見つけた。

他の子供よりも長い、ぼさぼさの黒髪。——時折長谷部を塗り潰す幻覚で見た、あの少年だ。何故こんな所に、そこまで考えて意識を失う前に長谷部が漏らした言葉を思い出す。

——俺がいたから、か。

ならばこれは、長谷部に纏わる記憶と見て間違い無いのだろうか。あの少年と長谷部に、一体何の関係があるのだろうか。早めに合流して、彼に問い質さなければ。

「歌仙」

肩を揺すられて顔を上げると、宗三が気怠そうな表情に不快感を滲ませて影のいる方を見つめていた。ガラスから影に視線を移すと、影は煙の様に消えている最中だった。

「……面白く無い物を見せられましたね」

「ああ、そうだね……正直、抜刀しなかった自分を讃えたいくらいには不快な物を見せられた」

「僕も貴方を讃えましょう。僕は刀を抜いてしまいましたから……お小夜や薬研に似た声で、あの様な吐き気のある言葉を話さないで欲しかったですね」

宗三がそう吐き捨てる。それに心からの同意を示すと、宗三は息を吐きながら納刀した。

影は消えて、その場には歌仙と宗三だけが残る。ここに他の刀がないかを改めて確かめてから、二振りには部屋を出た。

この階は全て調べ終わった（ドアの外から中を軽く見るだけの簡単な調査だったが）。階段を下りようとした歌仙に、宗三が問いかけた。「歌仙、ギヤマンの向こうに何を見ました？ 二回目の音が鳴ってか
らずと見ていたでしょう」

「……」

「まあ、話したく無いなら話さなくていいですけど」

足を止めて言葉を探す歌仙への問いをすぐに撤回した宗三は、やはり気怠げな様子で階段を下りる。歌仙も階段を下りながら、宗三の隣へ移動する。

「……憶測が混じる話だけど、君には話した方がいいか。少し気になるのを見つけてね」

「はあ。一体何だったんです？」

「多分、長谷部の秘密に近い場所にいる少年の姿を」

踊り場でピタリと足を止め、宗三は不審そうに眉をひそめる。

「……長谷部の？ 確かにあの長谷部は少し様子がおかしいですが……少年とは？」

「僕は時々、長谷部に被さる様な幻覚を見ている。それが、ギヤマンの向こうにいた少年の姿だったんだ」

は、と宗三は小さく声を出す。歌仙は言葉を選びながらも語った。長谷部が違う誰かに見える事、鯰尾が長谷部に肩入れし過ぎている事、薬研も長谷部を少し疑っている事、長谷部が狭霧隊で迫害されていた事、疑っている自分を棚上げしてそれに腹を立てた事――

後半は歌仙の感情が大いに混ざっていたが、宗三は黙って聞いている。そして歌仙が語り終わると、ぽつりと言った。

「……あの長谷部は、ほとんど昔の事は語りません。ですよね？」

「え？ ああ、そういえばそうだね。ごめんなさいとか、もう心残りはないとか、そんな事ばかりだ」

「……もし、貴方が気になったという子供や長谷部の立場だったら。貴方は、心を許し始めた相手に全てを吐き出さない自信がありますか？」

宗三は、何を言いたいのだろうか。そう疑問に思いながらも、歌仙は想像する。

気を緩める時間も無く、身内で殺し合う日々。もしかしたら、昨日仲良くしていた相手が掌を返してこちらに斬りかかって来る事もあるかもしれない。

誰も彼もを疑ってかかる日々。——例え殺しの道具であっても、心が消耗してもおかしくは無い。

そんな日々の中で、身内では無くこちらと仲良くなるうとしている、話を聞いてくれそうなのとがいたなら。歌仙は、吐き出してしまおうかもしれない。雅じゃないとか風流じゃないなどと言って、思いつ切り愚痴ってしまうのだ。

「……あの長谷部は、余程の事が無ければ昔の話をしなかったそうです。それが強さなのかただの痩せ我慢なのかは僕には分かりませんが……少なくとも、この状況を生み出している相手よりはマシです」

「どういう事だい？」

「……まだ憶測の域を出ませんが。元凶は、僕等に先程の風景を見せたかった様に思えてなりません。無差別にこちらへ引きずり込んで、自分の境遇を見せつける。ええ、ええ、確かにあの様は胸糞悪い物でしたよ。でも、だからと言って僕等にどうしろと？ 僕等をお小夜や薬研の声で釣っておいて、もし改善を求めるで無くただ同情されたいだけなら——反吐が出ますね」

その両目に怒りを滾らせ、宗三は冷たく言い捨てた。

「そんなによしよし可哀想と言われたいのなら、好きなら身内と傷を舐め合っていればよろしい。少なくとも僕を巻き込んで欲しくありません。僕に優しい言葉をかけて貰えそうだと思いますたら大間違いですよ。不幸自慢程、聞いていて嫌な物もありませんから」

ふん、と鼻を鳴らし階段を下りる宗三の後を、歌仙は少し遠い目に

なりながら追う。

「……憶測でよくそこまで言えるね……」

「なら歌仙、貴方は不幸自慢を延々と聞いていられますか？」

「いや無理だけど。……流石にあの子供達は少し可哀想だと思っ
てしまつてね」

「まああれで心が痛まないのはただの鬼ですがね。それを延々と話さ
れたらたまつたものじゃありませんよ。……それに」

階段を下り切ると、歌仙の耳にまた声流れ込む。——小夜の物も
混ざつたそれを聞いて、宗三ははあ、と苛立ちのまま足音荒く歩き出
す。

「今聞こえた内容からして、憶測じゃなさそうな予感がしますしね」

「……確かに」

——嗚咽と罵倒が混ざつた声の内容を聞いて、歌仙はいよいよ気が
滅入つて来た。

*

声が聞こえて来た先は渡り廊下に繋がる大きなドアの前だった。
影は少年達を率いて、どこかへ連れて行く途中らしい。

「さつさと歩け愚図共、こっちは次の予定が詰まつてんだよ！」

影が子供達に向かつて罵声を飛ばす。少年達は出来るだけ早く移
動しようと足を動かす。その光景は、本で見た奴隷達とそれを指揮す
る人間の様だ。

しかし、そんな中でもどうしたつて足の遅い者は出てくる。最後尾
の少年は必死に列を追いかけているが、少し距離が開いてしまう。

すると影が最後尾の少年の腹に鋭い足蹴りを食らわせた。最後尾
の少年は吹っ飛ばされ、壁に当たり動かなくなる。

「次の予定があるつて言ったよなあ!? 何で身体強化してんのにそん
な鈍間なんだよ！ 俺の教育が甘いみたいじゃねえか、ああ!?!」

影は更に最後尾だった少年に蹴りをかます。蹴られ、罵倒されてい
る小さな体と心が苦痛に呻いていたのは一目瞭然だった。

吐瀉物や血を口から流し、最後尾だった少年が頬に涙を伝わせる。
影は少年の胸倉を掴み、罵倒を重ねた。

「何泣いてやがんだ！ そんな余裕があるならさっさと体を動かさせてんだよ！ ……てめえらもだ、足止めてんじやねえ！ 痛い目見たくなかったらさっさと別棟に移れ！」

蹴飛ばされていた少年の様子を怯えながら窺っていた列は、影に怒鳴られた事により再びゆっくりと動き始める。渡り廊下へと列が姿を消しても、影は罵倒と暴力を止めなかった。

奥の方で別の列を動かしていた影が、手前の影に呆れた響きを滲ませて声をかける。

「その辺にしときな！ 駄目にしちゃったらそれこそ上に怒られるよ。腹立つのは分かるけど、鬱憤を晴らす為に被験者潰したら更に腹立つ事になるでしょ？」

そう言われた手前の影は舌打ちし、最後尾の少年から手を離す。最後尾の少年は無理矢理体を動かし、渡り廊下へと姿を消した。

やれやれ、と首を振り奥の影は再び整列させ始める。手前の影はぐちぐちと不平不満を並べていた。

「くそ、何で俺が餓鬼共の世話なんてしなきゃならねえんだ。俺は研究者だぞ？ 保育士になった覚えはねえっての！」

「はいはい、気持ちはよく分かるよー。でもこれだって立派な研究に繋がると考える事は出来ないかね？」

「餓鬼共の世話の研究なんて、教育研究家に任せときやいだろうが！ 俺は遺伝子研究を志したんであって、餓鬼の世話の研究を志した訳じゃねえぞー！」

「子供の研究だって遺伝子研究の一環だと思わない？ 今ぶつくさ言っても現状は変わらない訳だしさ、プラスに考えてみようよ」

手前の影はまだぶつぶつと不平を述べている。奥の影ももう相手にするのは止めて、少年達の別棟誘導を再開させた。

奥の影が誘導している列の中に、あの長いぼさぼさの黒髪の少年がいた。俯いた先に感情を落として来た様な無表情で、列に並び足を動かしている。

「……あの子、またいる」

「どんな様子ですか？」

「いや……列に並んでいる子供達と同じ感じだよ。無表情で、足だけが生きているみたいなの」

そう話している内に再び影と少年達の姿は掻き消え、静寂が訪れた。姿の名残を追って歌仙はじつと渡り廊下の向こうを見つめる。

口に手を当てて何かを考えている宗三は、歌仙に顔を向け自分の思考を告げた。

「……その子供、この状況に大いに関係あるでしょうね」

「うん、そうだろうね」

「でも、何の関係が？ 僕達は狭霧隊の本丸を調査していた筈なのに。そもそも、何故僕達だけが巻き込まれたのでしょうか。その子供が、何か関わっているのか……」

うーん、と唸ってから、宗三は肩の力を抜いて零した。

「こんな考え事、本来僕がすべき事では無いんですよ。何故僕がこんな小難しい考えを巡らせなくちゃならないんですか」

「あ、考察は宗三に投げっぱなしだった。すまないね、一緒に考えなければならぬのに」

「いえ、歌仙を責めている訳ではありませんよ。……僕の知る長谷部がいれば、頭を回して色々考えるんでしようがね」

「あの長谷部は少し違うからね。そういえば、彼はどこに——」

「——トシキ、トシキ！ どこにいる!?!」

聞こえて来た声に二振り共が勢いよく振り返った。どこからか荒い足音も聞こえる。

今の声は、へし切長谷部の物である筈だ。しかし、自分の知る長谷部の声とは、雰囲気が大きく異なっていた。声が大きく、真面目そうな棘のある声。——それは本来の長谷部の声なのだろう。

しかし、何故今になって？ あの性格は猫を被っていたという事だろうか。

いや、長谷部は誰かを呼んでいる。誰かは分からないが、話を聞いた方がいいだろう。

宗三と頷き合い、歌仙は声を張り上げた。

「長谷部！ どこにいるんだい!?!」

「……！ その声、歌仙か!? 下にいるのか、今そちらに行く!」

「僕もいますよ! 詳しく話を聞かせて貰いますからね!」

宗三も大きな声を出し、自分の存在を示した。

階段を駆け下りる音がした後、こちらに向かつて紫色の装束を纏った男が駆けて来る。歌仙と宗三の前でブレーキをかけ、はあ、はあ、と息を荒くしている。

——勝気な眼光を向けるへし切長谷部が、汗を拭いながら息を整えていた。

「お前達、トシキを——ぼさぼさの長い髪をした少年を見なかったか!?」

「えっ、あの子の名前トシキって言うのかい? 幻覚の形で何度か見

ただど……」

「実物は見ていませんね」

「くそ、何事も無ければいいが……」

焦燥感に顔を歪め今にも走り出さん長谷部に、宗三が気怠さを極力少なくした声で尋ねる。

「……ここはどう考えても、トシキという少年に関係する場所でしょう。貴方は、彼とどう関わっているのですか? 場合によっては彼にも話を聞かなくてはなりません」

ぐっ、と長谷部が言葉に詰まる。話せるのなら話したいが、全て話していいのか悩んでいる事がまざまざと伝わって来る。宗三と歌仙は何も言わずに長谷部の返事を待つ。

止めてやってくれ、と長谷部の口から絞り出された言葉は、頼り無く宙を漂った。

「あいつは、充分苦しんで来た。更に傷付ける様な事はしたくないんだ。話なら話せる範囲で俺が話すから、あいつにだけは——」

「でも、本人にしか分からない事もあるでしょうし……」

宗三が遠回しにトシキに尋ねる事を匂わせると、長谷部は首を思い切り振って焦燥感に満ちた声でそれを遮った。

「駄目だ! あいつがまた世を憐む事になって、消えてしまったら、俺は——」

徐々に声を震わせ俯いてしまった長谷部に、歌仙は疑問を抱く。消える、とはどういう事だろう。それに、長谷部が主以外の人間にここまで感情を抱いているのも不思議だ。

歌仙は長谷部に、抱いた疑問をそのままぶつけた。

「長谷部、随分トシキという子に肩入れしているみたいだけど。改めて聞くよ。彼は——君と彼は、一体どういう関係なんだい？」

歌仙の言葉に拳を握り、強く閉ざしてから開いた目には、小さくはない悲しみが湛えられていた。

「あいつは、俺の——」

13—5 「Witness」／鯰尾藤四郎 『彼の残骸
4』

用が済んで出て来た部屋のドアを閉めて、静かな白い廊下を進む。鯰尾は小夜がいるのを確かめる為、目線を後ろに向ける。小夜は周囲を警戒しつつ、鯰尾の後をついてきていた。

「小夜ちゃん、何かあったら言ってね」

「はい。……鯰尾さんも索敵してますよね？」

「いやー、俺だけだと見逃しそうですさー。二振りなら見逃しも無くなりそうだし」

「はあ……」

うろんな目つきで小夜は鯰尾を見る。鯰尾はそんな視線を見なかつた事にして、等間隔に並んでいる数多のドアを見遣つた。

どこもかしこも僅かに開いてはいるが、中に気配は感じられない。ちらりと見える部屋の中は、先程の部屋と似た構造をしている。やはり白で塗り固められている部屋達は、有機物を拒むかの如く生気が無い。早くここから出たい、息苦しさに改めてそう思った。

「……鯰尾さん、あそこ」

立ち止まった小夜の指差す方向に、薄く開いたドアが見えた。中からは少年らしき声がする。だが、トシキの物では無さそうだ。行つてみよう、と声の方向を見据えれば、小夜は頷いて再び歩き出した。

ドアに近付いてそつと隙間を覗き込む。見えたのは、ごぼりと音を立てて上昇する泡を閉じ込めた大きなガラスの筒の列。そしてその手前にいたのは、笑顔を貼り付けた白衣の女に背中を支えられているおどおどとしたトシキと、肩まで伸びた髪を弄りながらトシキを窺う少年だった。

「……んで、そいつが新入り？」

「そう、新内利樹君。被験者番号は258になるわ。色々勝手が分からないと思うから、面倒を見てあげてね」

「へーえ、随分人のいい事言うんだね。何？ あんた、今度の趣味はま

まごごにでもしたの？」

少年——カサネの声音は、かなり棘がある。困った表情を浮かべる女性と、苛立ちを滲ませたカサネの顔を見比べてからトシキは俯く。それを見た女性は、患者の子供に語りかける様な口調でカサネを宥める。

「そうカリカリしないで。確かに貴方達には過酷な実験を強いているけれど——」

「殺し合いを見ながらカツサンド食って賭博に興じてる人間の言葉は薄っぺらくて仕方ないよね。今度は何企んでる訳？ 変な薬飲んでラリった状態でやらせようとか？」

「……下品よ、カサネ君」

眉をひそめる女性を鼻で笑い、カサネは鋭い目を向ける。

「その下品な行為をしている奴に言われたくないね。あんたらならやりかねないじゃん。……あんたらは俺達を人間扱いしてないみたいだけど、俺からしたらあんたの方が余程人でなしだよ。あんた達の飼い主だって、どうせロクな人間じゃ——」

「それ以上の反体制的発言は見過ごせないわ。続けるなら、上層部に報告する事になる。私としてはあまり貴方達の数を減らしたくないのだけど」

女性の声の温度が下がったのを受け、カサネは舌打ちしてそれ以上の罵倒を打ち切った。しかし、まだ睨んでいるカサネと目に何の感情も浮かばない女性が無言で火花を散らし合う。その険悪な雰囲気を払拭したのは、俯きながら尋ねたトシキの声だった。

「……つまり、俺はカサネ君の言う事を聞いていればいいんですね？」
女性はトシキに視線を向け、口だけで微笑み彼の頭を撫でた。

「そうね、この事はカサネ君に聞いて頂戴。基本的な規則は話した通りだけど、貴方達特有の決め事もあるでしょう。同じ被験者同士、良好な仲を築いて貰えたら嬉しいわ。それじゃあ、私は報告があるからこれで。くれぐれもよろしくね、カサネ君」

そう言っただけで女性はさっさと立ち去った。その場に残ったのは、足に視線を固定しているトシキと、髪を弄りながら何かを考えているカサ

ネだけになった。

数十秒程、沈黙が続いた。それがやたらと長く感じられたのは、カサネが反抗的な雰囲気を感じ出しにしていたからだろうか。しかし、次にカサネが口を開いた時には、険のある響きは感じられなかった。

「……お前さ、この施設でやる事説明された？」

「うん。……ここで、殺し合いをしろって」

正解、とカサネは頷いた。それから抜けた髪を指で弾きながら表情を険しくさせる。

「はつきり言つてロクでもない施設だよ、ここは。早急に慣れなきや死ぬだけだからね。……あ、お前はどのような経緯でここに？ 気分が悪い事を聞くけど」

「……多分、親に売られたんだ、と思う」

鯨尾はついにそこまでやったか、という衝撃と、あの母親ならやるだろうな、という腑に落ちた感覚に揺れた。

正直なところ、ここに母親がいるのなら八つ裂きにしてしまいたい程に鯨尾は怒りを抱いていた。昔、それこそ刀が武器として振るわれていた頃なら子を売る事はありふれていたかもしれない。けれどそれは貧しさから行われるものであって、今は貧しい者を救う為の制度も整っている。

金を怪しげな新興宗教に注ぎ込み、子を乱暴に扱い、挙句売り払う。

今の時代の母親として、あの女はあまりにも異常だった。

「そうか。親に未練は？」

「無い。……あ、でも、一緒に連れて来られた妹が心配だ」

「妹か……。女子の方はどうなっているか分からないな。でも、もう一度妹と会いたいだろ？ なら、それを生きる理由にするといい」

ごぼり、と水泡の音がする。トシキは顔を上げて、弱弱しくカサネの言葉を反芻した。

「……生きる、理由」

「そう。何か支柱になる物があれば、最期まで折れずにいられる。笑うのは無理かもしれないけど、泣く事だつて無くなるはずだろ？」

ニツ、とカサネが口角を持ち上げ目を細める。薄暗いこの空間で、

その笑顔は似つかわしくない程に希望で満ちていた。

トシキは、不可解な物を見る様子のままカサネに問い掛けた。

「……君は、どうしてそうしていられるの？　ロクな場所じゃないんでしよう？　なのに、どうして笑っていられるの？」

質問の内容を噛み砕いてきよとん、とした後にカラカラと笑いながら、カサネは答えた。

「別に俺だって、いい子ぶっている訳じゃないよ。……俺は、俺を不幸にしようとしている奴に負けたくない。そいつらの鼻を明かしてスカツとする為なら、手段を選ばない。どんなに辛くても、泣かせようとする奴がそれを期待しているのなら、その逆の事をやってやる。ただ、それだけだ」

それは、世界に向けての強がりだ。彼の不幸は不特定多数の大人達の手による物で、その大人達は彼にとって世界を構成する歯車ではないのだ。世界の一部でしかない大人達を一人ひとり憎んでいたら心が持たないだろう。だから彼は、世界そのものに対抗する事を選んだ。

悲しい強さだ。まだ幼い彼がするべきではない反抗だ。——何てままならない現実なのだろう。

「後、君じゃなくていいの……あつ、そういえば名乗っていなかったな」

カサネは困った様子で呟いた後、はつとした表情で手を叩く。トシキに手を差し出すと、彼は笑顔を輝かせて告げた。

「——初めまして、だな。俺はカサネ。友達になろう！」

トシキはカサネの手と顔を見比べ、恐る恐る手を握る。カサネにぶんぶんと手を上下に揺すられて、トシキは目を白黒させていた。

「わ、わ」

「よし、これで俺達は友達だ！　困った事があつたら何でも言ってくれよな！　俺が困らせる事もあるかもしれないけど、その時はごめんなー！」

「お、俺、友達今までいた事なくて——」

「よーしお前の寢床まで案内するぞー！　途中で同室の奴らの説明も

するから聞き逃すなよー!」

「ねえ聞いてるー!?!」

意気揚々と進むカサネの後を慌てて追いかけてながらトシキは声を上げる。

「そんなの、これから考えていけばいいじゃん! 俺はお前と友達になりたい。今はそれで充分だ!」

カサネの言葉を最後に、二人の姿は掻き消えた。

室内はしん、と静まり返り、鯨尾と小夜はドアから体を離した。

「……そっか、ここで友達が出来たんだ」

「……ロクな施設ではない以上、喜んでばかりもいられません……」

「そうだね……でも、本当に良かった。心を許せそうな人がいたんだね、あの子にも」

小夜がちらり、と鯨尾の顔を窺った。その目は憂いの色を帯びていた。

——分かっている。今まで出会った大人にまともそうな人間がいなかった以上、彼らの末路は薄々見えていた。だけど、今この時だけは安堵に身を浸したかった。

「行きましょう。他のひとも無事でいる保証はありませんから」

「うん。……あれ、何か聞こえない?」

下の階から、誰かの声が響いてくる。よくよく耳を澄ませてみると、その調子に覚えはないが、物凄く聞き覚えのある声だった。

「——トシキ、トシキ! どこにいる!?!」

ぱつ、と小夜と顔を見合わせる。小夜は目を見開いて頷き、声のした方向へと駆け出した。鯨尾も追隨しながら思考を巡らせる。

——あの声は……普通の長谷部さんだ。でも、何でここに?」

鯨尾の知る長谷部は、あんなに強い語気で話さない。声は弱弱しく、自信に満ちているとはとても言えない調子。今聞こえてきた声は、それとは大きくかけ離れている。

何故今になって出て来たのか。いつもの長谷部は消えてしまったのか? あの少年を探しているのは何故か? 不安と焦燥で思考が上手く纏まらない。だからこそ、鯨尾は気付かなかった。

いつもの長谷部とトシキが似過ぎていてる事に――

「歌仙と宗三兄様もいるみたいですよ！」

「良かった、無事だったんだ！ この空間もいつまで持つか分からない、急ごう！」

鯰尾は速度をさらに上げて、声のした方向へ駆ける。階段を下り左右を見渡すと、渡り廊下に繋がるドアの前に三つの影が見えた。右折し、鯰尾は長谷部の背中に向かって床を蹴る。

「あいつは、俺の――」

「長谷部さああああんっ！」

「うわあっ!？」

長谷部の背中に思いつきり突進し、鯰尾は長谷部を吹き飛ばした。長谷部は激突された勢いで渡り廊下前のドアにぶつかり、頭を強かに打つ。ずるずるとその場に崩れ落ち、長谷部は目を回していた。

「長谷部さん無事でよかったです！ さっきトシキって叫んでいましたけどあの子と長谷部さんにどんな関係が……っとうわあ大丈夫ですか!？ 敵襲!？ 敵襲ですか!？」

「突っ込み待ちですか、鯰尾。貴方が吹っ飛ばしたんですよ」

「受けて立つぞまだ見ぬ敵！ 俺の錬度は六十五だ！ 生半可な気持ちで来ると痛い目を見るぞ！」

「とりあえず落ち着いてくれ。君達の成り行きを説明してもらえないかい？」

さっと避けて衝突を避けていた歌仙と宗三が引きつった表情で鯰尾を窺める。

直後息を切らした小夜が現れ、状況を察知するとはあ、と息を吐いた。

「歌仙、宗三兄様、無事で良かったです。……鯰尾さん、二振りが引いてます。冷静になって僕達の経緯を説明しましょう」

「……はっ！ すみません二振り共、取り乱して」

「取りあえず状況説明を。鯰尾、情報源を昏倒させた償いに、移動時長谷部を背負いなさい」

「はーい……」

「焦り過ぎだよ、鯨尾。あの子って言うていたけど、君も幻覚を見たのかい？」

歌仙の言葉を皮切りに、四振りには情報交換を始めた。

話題は主に、幻覚として多く現れる少年、トシキの事。今の今まで他の刀に夢の事を隠していたのに苦言を呈され、番組に影響されただけだと思っていた、と言いつつそれでも話せ、と怒られた。

「それにしても……夢を見始めた日が長谷部の本丸異動と被っているね」

「うん。それに一度だけじゃなく連続で。ここに現れた幻覚と合わせると、あの子はもう事件と無関係とは言えないね」

「下手したら、うちの本丸にも影響が出たかもしれないですね」

不穏な方向に流れる話を聞いても、鯨尾の中で長谷部とトシキを庇う気持ちは消えなかった。ずっと夢の中で妹を慈しんでいる姿を見てきたのと、不器用なだけでこちらに敵意が無い事を知っているからだろうか。

「……悪い事をしたとは思えないんですけどね」

「分かっているよ、君が無条件であの子の全てを許容するとは思えない。この長谷部も庇っているのを見るに、あの子は本当にいい子なんだろう。でも……」

「お小夜の澱みに関する推測から、彼が相当強い恨みを受けていると推測出来ます。本丸で彼を受け入れるには、澱みをどうにかする必要がありますね」

「やっぱりそうだよね……澱みの中核がどのくらいの規模か予測出来ないから、他の刀とも合流しないと」

ガチャリ、とどこからか音が聞こえた。辺りを見回すと、渡り廊下に繋がるドアが少し開いている。隙間から風が流れ込み、その場の気温が少し下がった。

「……行きましょう。骨喰と薬研、いるといいんですけど」

鯨尾がそう言うて長谷部を背負い、ドアノブを掴む。開けた先の薄暗い渡り廊下に、軽い足音が二つ響いていた。

*

渡り廊下の先、ドアの向こうで二つの影が身を屈めながら歩いていた。遅い時間帯なのかほとんど明かりが落とされており、二つの影は見え辛い。しかし目が慣れて来ると、それがトシキとカサネであると判断出来た。

先を歩くカサネは数歩行く度に左右を見渡し、足音を殺して進んでいる。トシキが足音を小さく鳴らすと、カサネは勢い良く振り返り人差し指を口に当てた。

「しーっ！ トシキ、もう少し静かに歩け！」

「でも、誰もいないよ？ もう少し気を緩めても平気なんじゃ……」
「こうして抜け出しているのがどこでバレるか分かったもんじやないんだ、慎重に動くに越した事は無い！ 見つかったらどうなるか分からない、だから静かに歩けよ！」

音量を落としながらも鬼気迫る声で諫められ、トシキは口を押さえ抜き足差し足で歩き出した。四振りと気絶して背負われている一振りもその後を追う。

それにしても。罰を受けるリスクを抱えてまで、彼等はどこへ行くのだろう。

正直言つて、鯰尾はこの施設全体に良い印象は抱けない。それは歌仙と宗三の情報によって更に強固な物になった。大人達に弄ばれ、虐げられる子供達を二振りと共に見ていたのなら、鯰尾は抜刀していたに違いない。子供達の中にトシキがいるのなら、尚更だ。

けれど、この施設にも微かな光はあった——カサネの存在だ。彼は、トシキと友達になりたいと明るく話した。この二人が友情を築けている光景が、この場所で唯一の清涼剤だ。先導しているカサネも、その後をついていくトシキも、確かに相手を信じ行動している。

対等に信じ合える相手がトシキに出来た事。それが、涙が出そうな程に鯰尾は嬉しかった。

「……よし、着いた」

カサネがそう言つてガラス戸の前で立ち止まる。振り返つてから呆然としているトシキにもそれが見える様に体をずらす。ぺたりとガラス戸に手を付き、トシキは興奮を滲ませて眩く。

「……綺麗だな……」

近付いたガラス戸から見えたのは、満天の星。濃藍の布に数多の穴を開けて光を透かした様な、星々の鮮やかな光だった。小さな星の微かな光も、大きな星の煌々とした光も、それぞれが影響し合い幻想的な空を作り上げている。

トシキは心を奪われた様にガラス戸に張り付いている。雲一つない星空を見つめているトシキの後ろで、カサネは得意げに胸を張る。「凄いだろ、ちよつと前にここから星が綺麗に見えるって知ったんだ」「……うん、本当に凄い。ここつて、こんなにはつきりと星が見えるんだね」

星を見上げるトシキの隣に立ち、カサネも上を向く。それから、どこか遠くへ意識を向けながらぼつりと漏らした。

「……ここつてさ、地球とは少し違う世界だつて知ってる？」

「え？」

「地球からじゃ、こんなに綺麗な星は見えない。街明かりがガラガラして、星の光を届かなくさせるんだつたかな？ ……とにかくここは地球とは少し違う世界で、よく知らないけど大人達はここを使って戦争をしてて。俺達は、きつと——」

途中からカサネの声が聞こえなくなった。トシキがカサネの横顔に視線を向けると、ダン、とカサネがガラス戸を叩いた。

「……俺達は遊ぶのが仕事なんじゃないのか？ 鬼ごっこしたり、隠れんぼしたり、ゲームしたり、そういう遊びをするのが、子供の仕事なんだから？ ……ばあちゃんが言ってた。子供は未来そのものだから、戦争から遠い場所にいるべきなんだつて。でも、俺達は戦争が一番近い場所にいる」

「……」

「もつと追い詰められている国は子供を戦争に参加させているらしいけど、この国はそこまで追い詰められていないだろ。大人が少ない訳じゃない、寧ろ子供が少ないから国を挙げて対策してるって話してた。結局、大人達は戦いたくないだけだろ——どいつもこいつも、くそつたれだ。それでも、何も出来ない自分が一番嫌いだ」

子供の自覚がある、年相応らしくない言葉だ。けれど——この環境が、彼をそうさせてしまったのだろう。

どんなに背伸びして大人ぶっても、本当の大人に敵わない。

大人達の負の面を見つめて軽蔑しても、現実には変わらない、変えられない。

叫んだ声ですら、無い物として扱われる。

——無力な子供である事を、否応無く思い知らされる。その口惜しさは如何程か。

「……大丈夫だよ。ここを出るって、決めたんでしょ？俺達なら出来るよ。カサネは頭が回るから、きつと成功する。そしたらさ、あの大人達に負けないくらい強い人になれる様に、一緒に頑張ろうよ。妹も連れて、旅でもしながらさ」

トシキが穏やかに微笑んで見せる。カサネはゆつくりとトシキに顔を向ける。その目は頼り無く揺れ、口は小さく震えていた。そして、涙に濡れた声で告げた。

「……ありがとう、トシキ。本当に、今日まで生き残ってくれて良かった。そうじゃなきゃ、とつくに心が折れてたよ」

「ううん、こっちこそ。カサネがいたから、今日まで希望を捨てずに済んだんだから。……最初はカサネの事を信じ切れなくて、本当にごめんね」

「ここでは正しい判断だよ、気にすんな。——明日、絶対に成功させるぞ」

「うん」

頷き合い、再び星を見上げるのを最後に、二人の姿は消えた。ふう、と息を吐き、鯨尾はガラス戸から離れる。

「……子供は、大人びるくらいが健全だろうに」

「……本当に、悲しい子供ですね」

「ああ、本当に。あのまま脱出出来ていればいいが」

「そうだといいですね……」

「だが、あんまり明るい想像が出来ねえな。ちびすけが薄くなっている以上、ロクな事は起きないと考えた方がいい」

「薄くなっているのか、それはまずい——ちびすけ？ 薄くなっている？」

違和感を感じた歌仙の言葉に、鯨尾が振り返ろうとした。直後、

「——トシキ!!」

耳元で大きく叫ばれ、鯨尾は耳を痛めた。心なしか耳鳴りがする。何だ、と仰天していると、傍を風が通り過ぎた。体にかかっていたはずの重量が無くなった事で、長谷部が目を覚ましたのだと分かった。寝起きでよく動けるな、と目線を動かして鯨尾は更に驚いた。

——黒と銀の頭が増えている。

「うおっと、長谷部!? このちびすけと知り合いか？」

「ああ、無事——とは言えないがまだ消えていなかったか……本当に良かった……二振り共、こいつに他の異常は起きて無いか？」

「あ、ああ、透けている以外は特に……」

「話聞いてくれよ」

薬研と骨喰が、いつの間にかそこにいた。強烈な勢いでトシキに異変が無いか迫る長谷部に、二振りは少し呆けている。同じく呆然としていた四振りは、我に返ると怒涛の勢いで薬研と骨喰に詰めかけた。

「薬研！ 無事だったんですね！」

「おう、この通りピンピンしてるぜ。特に敵とも出くわさなかったしな」

「骨喰、良かった！ 怪我は無い？」

「ああ。……長谷部、この少年はお前が背負っていてくれ」

「分かっている」

「あの、二振り共。道中で何があったか、話して貰ってもいいですか？」

「そうだね。少年はどこで拾ったんだい？」

そこでまた、情報交換が行われた。薬研と骨喰は最初トシキの育った場所を彷徨い、次にこの施設でトシキを拾ったという。あちこちで幻覚を見ながらここまで歩いてきたが、トシキの体は幻覚が映し出される度に薄くなっているらしい。このままでは消えてしまうだろう、と薬研は判断していた。

長谷部に抱えられているトシキの体を見て、宗三は目に憐憫の情を乗せる。

「向こうがかなり透けて見えますね。最初に拾った頃より透けているですよね?」

「ああ、透明度が大きく進行している。消える事は何とかして食い止めたいが……」

「目を覚まさないからなあ。本人がどう思っているのかはつきりと分からない以上、どうする事も出来ん」

「早くここから離れないと……ああでも、この子はどうなるんだろう。それが分からない以上、迂闊に動く事も避けるべきか」

それぞれが言葉を交わす中、鯨尾は黙ったままの長谷部が気になっていた。彼はトシキを優しく抱え直しながら、顔を覗き込み悲痛に顔を歪めている。トシキを骨喰から受け取った後、ずっとこの調子だ。性格が普通の長谷部のそれに変わっているのも不思議だが、その彼があからさまに主以外の他者の心配をしているのも異常だった。

「……長谷部さん、何か知っているんじゃないですか? 意識が戻つてすぐ彼のところに駆けつけてましたし……彼にかなり肩入れしているみたいですが、それは何故ですか?」

小夜が長谷部にそう尋ねると、六組の目は一斉に長谷部へと向けられる。視線を一身に受けた長谷部はトシキを抱える腕に少し力を入れ、涙を落とさない為か顔を背けながら答えた。

「この先——一階の裏口に行けば分かる。行くぞ、恐らく終着点はすぐそこだ」

13—6 「witness／薬研藤四郎『罪を抱えた自分を』」

長谷部に導かれ、六振りは階段を降りて行く。静かに足を下ろしながら、薬研は考える。

——ちびすけと長谷部の関係は、きつと……

出会った幻覚と得られた情報で、一人と一振りの関わりが見えて来た。

それは、互いが互いの命を握り合う間柄。長谷部とトシキ、二人共がある意味で相手を平伏せさせる主君であり、ある意味で相手に全てを投げ打たなければならぬ従僕なのだろう。命を握られているにもかかわらず、長谷部は随分トシキの事を考えている様だ。それを踏まえると、トシキは強制的に長谷部を支配しようとは思っていないに違い無い。もしトシキが無理に従えようとしていたならば、長谷部は即座に彼を見限っていただろう。むしろ、トシキは——

「——こっちの警備員は行った、移動するぞ」

「分かった」

階段を降り終わると、耳に子供の声の流れ込んで来た。カサネとトシキだ。二人は壁に隠れて周囲を窺い、素早く動き始める。急いで追いかけると、廊下に下ろされたシャッターを見つめてカサネが何かを構えた。

「カサネ、そのボール何？」

「まあ見てろって。——よし、壁を壊せ！」

命ずる声に呼応し、カサネの周りに小さな人型が現れる。二十の数の人型は、側面で紐状の物を回し、ふっと手を離す。紐状の物は壁まで一直線に飛んで行き、壁にぶつかると轟音を立てて大きな穴を開けた。トシキはぽかんと口を開けて尋ねる。

「……これ、貴重な道具なんじゃないの？ 嚴重に保管されているはずなのに、どうやって手に入れたの？」

「大人が回収し忘れた奴を拝借したんだよ。凄いやな、シャッターが

木端微塵だ。……つと、立ち止まってたらまずいよな、早く移動しよう」

子供達は静かに走り出す。それを見つめていた六振りは、啞然としてその背中を見ていた。

「……あれ、投石兵……だよな？」

「うん、俺もそう見える。どうして、あの子が投石兵を……」

「貴重な道具、と言っていましたね。回収し忘れたとも。……まさか刀剣男士から——」

「いや、政府公認の施設であるこの施設は、わざわざそんな事をしなくても刀装が手に入るんじゃないか？」

「……でも、刀剣男士しか扱えない筈なのに……」

そう話し合っているが、もう彼等全員が自分と同じ仮説を立てているだろうと薬研は思っていた。

刀を用いて子供達を殺し合わせ、カサネの言葉では薬を投与し、最後の一人になるまで終わらないという地獄。下位の存在でも薬研は神だ。それを何と呼ぶか、耳にした事はあった。

—— 蠱毒。

百の虫を同じ容器で争わせ、勝ち残ったものが呪詛の媒介として用いられる。大体そんな内容だった筈だ。聞くにつけ悍しい儀式だ、命を喰らわせて強い媒介を作ろうと言うのだから。

そしてその儀式が、虫を人間の子供に置き換えて行われている。

媒介を何に用いるのか。それはもう、真実を明確に知る長谷部以外の六振りにも理解が及び始めていた。

「脱走者がいた、捕えろ！」

「相手は玉を持っていて、充分警戒しろ！」

遠くから警備員と思われる男達の声がする。走るカサネは再び投石兵を展開させる。背後数メートル先に石を落とし、警備員達を足止めした。

「これでしばらくは動けない筈！」

「前から警備員が来るよ！」

トシキが短刀を抜刀し叫ぶ。

カサネは脇差の柄を握り締め、前方の銃を構える警備員二名に向かって斬りかかった。浅く服を切っただけだったが、一瞬の隙を生むには充分だった。

トシキが警備員の手を薄く斬り、銃を奪い取った。

トシキは銃を放り投げ、受け取ったカサネが警備員の脚に鉛弾を撃ち込む。行動不能になった警備員を尻目に、二人はさらに速度を上げる。

「トシキ、まだ行けるか？」

「勿論。……あの人達に酷い事しちゃったかなあ」

「一緒になって虐めてきた奴等に同情は必要ない。もうすぐ裏口だ、気を抜くなよ！」

ここまでの脱走は順調だ。——異常な程に。

追手は然程戦い慣れていない警備員ばかり。それも数が余りに少ない。子供の鬼ごっこに付き合わされている、という訳では無いのだろう。子供達は、普通の子供ではなくなってしまうているのだから。

そう、警備員の様子はさながら羊を追い立てる犬の様な——

「鍵が開いた！ トシキ、あと少しだ！」

「このまま行けば……！」

裏口のドアを開け、二人の子供は転がる様に外へ出る。はあ、はあ、と息を切らしてから息を大きく吸い込み、下に向けていた視線を前に動かす。

数メートル先には、鉄の門がそびえ立っていた。そのさらに向こうには、舗装され街へと繋がっているであろう道が伸びていた。

人工的な灯りではなく、太陽の光が降り注ぐ。

機械の音ではなく鳥のさえずりが耳に入ってくる。

薬品の臭いではなく雨上がりの臭いが漂う。

固い床ではなく土の感触が足を押し返す。

外だ。——焦がれていた外が目の前に大きく広がって、二人を待っているのだ。

「やった……あとはあの門を乗り越えれば、俺達は自由だ！」

「うん……本当に、外へ出られるんだね」

カサネが自由を目前にして拳を握り声を震わせて歓喜の声を上げる。トシキも実感が少しずつ湧いて来たのか、頬を緩め目を細める。カサネは顔をトシキに向けて満面の笑みで尋ねる。

「トシキ、やりたい事は決まったか？ 決まっていなければ俺が先にやりたい事やっちゃうぞ！」

カサネは今にも駆け出しそうな勢いだ。当然だ、外に出る事など何か月ぶりか、しかもその間地獄の様な『実験』を強いられて来たのだから。

そんな彼に眩しい物を見る目で微笑み、トシキは口を開く。

「うーん、そうだなあ。……そうだ、妹がいる場所の手掛かりを見つけない。妹も同じような施設にいるのなら自由にしてあげたいし」

「お前は本当に妹思いだな。たまにはお前のやりたい事をやってもいいと思うぞ？」

「だって、そう言われてもよく分から——」

そう、話している最中だった。——カサネが、ふらりとその場に崩れ落ちたのだ。

トシキの表情が苦笑いから驚愕、そして絶望に移り変わる。体を起こして体調を確かめようとした途端、トシキの目蓋がずしりと重たくなった。

持ち上げようとしても体が動かせない。指の一本すらからも力が抜けていく。頭の中がぼんやりとした感覚を覚えた。

トシキもまたその場に倒れ込むと、背後から硬い靴の音が近付いて来る。

「……全く手間のかかる餓鬼共だ。反抗期にはまだ随分と早いはずだが？」

「背伸びをしたい年頃なのでしょう。幼稚な万能感を持つのは子供特有の現象かと」

「それで我等を出し抜けると錯覚したのか。餓鬼の我が儘に振り回される大人の苦勞を慮らんとは、全く忌々しい」

「発信機の在り処すら知らないなんて、かわいじやないですか。無知で、無力で、愚かで」

辛うじて意識を保っていたトシキは、複数の声を耳にして震え上がる。

——どうして、どうして？ 外は、もう目の前なのに——

それは、この施設の研究員達に違いなかった。しかも、上に近い立場にいる者達だろう。滅多に表に出て来ない彼等が、悠然と歩いて来る。トシキは死神が近付いて来る恐怖とはこの感覚か、と目を動かさうとする。

頭に衝撃が走る。同時に上半身が浮上し、腹の辺りに冷たい風が通る。

「……ふん、出来損ないが。そんな頭で抜け出せると本当に思っていたのか？ どこまでも無知で、無謀で、無駄な事をしたな」

「所長、この二人はどうします？」

「そうだな、こんな不良品ももうすぐ出荷要請が出ている。仕上げるか」

「了解しました。処置の後、実験場に移動させますね」

その言葉を最後に、景色がぶつりと消え失せる。次に映し出されたのは、広く真つ白な部屋だった。

トシキの頬が接している床は、見るからに温度を感じられない。彼がゆらりと体を起こすと、目の前には刀が一振り置いてある。刀を握り、頭を押さえると、眩いた。

「……どこだ、ここは？ 主は、どこにいらつしやるのだろうか」

その口調は、非常に覚えがある物だった。薬研はぱっと長谷部を振り向く。薬研だけではない——六つの両目が、トシキを抱える長谷部に集中していた。

長谷部は俯き、抱える腕を調整しながら口を動かした。

「……——」

しかし声はあまりに小さく、薬研の耳には入って来なかった。それを掻き消す敵意に満ちた声が、代わりに流れ込んで来る。

「……あれは——敵か」

目の前には、笠を被り刀を持った黒い肌の男が立っていた。その場にいる刀剣勇士にはその男に見覚えがある——敵である時間遡行軍

の打刀だ。

睨んでいたトシキは抜刀すると、敵打刀に斬りかかる。刃が届く直前に敵打刀も抜刀し、攻撃を受け止める。

敵打刀が、何かを叫ぶ様に唸り声を上げる。

「——！！」

「喧しいな。貴様も刀なら、喚いていないで戦って見せろ！」

トシキは刀を押し込み、体勢を崩した敵打刀の腕を斬り落とす。敵打刀が悲痛な叫び声を上げる。それに構わず、トシキは煽りながら攻撃を繰り返した。

トシキの幼い声音では、長谷部の言葉を模倣している風には聞こえない。

しかし、その場にいるものは、完全に悟った。悟ってしまった。

トシキの正体は——

「隠れようが無駄だ！」

逃げ惑う敵打刀に情け容赦のない斬撃を繰り返すトシキ。その度に敵打刀は絶叫し、何かを伝えようと唸る。しかし、残虐に笑って刀を振るうトシキには届かない。

少しずつ、少しずつ、敵打刀の動きが鈍ってくる。トシキはその隙を見逃さずに腕を切り落とし、心臓を狙い突きを繰り返す。

「——俺のせいなんだ」

長谷部の呟く声が、先程より少し鮮明に聞こえてきた。

敵打刀が血を吐いて崩れ落ちる。トシキは動けなくなった敵の心臓を狙い、一突き。刀身を一回転させてから、思い切り引き抜いて一言吐き捨てた。

「こんなものか」

直後、トシキの体がふらりと揺れる。何かに耐える様に頭を押しさえ、きつく目を閉じ、それからゆっくりと開く。

そして——

「……えっ？」

トシキは目を見開き、それから唇をわななかせて、刀を手から落とした。

「……カサネ……？」

その呼び名に驚き、薬研は敵打刀がいたはずの場所を見る。そこにあつたのは——腕を切り落とされ、心臓から血を流し赤い水溜まりを作り、今にも息絶えようとしていたカサネの体だった。

先程まで、確かにトシキは敵打刀と戦っていたはずだ。何が、何で、どうして、どうしたら——トシキの混乱する気持ちがまざまざと伝わってくる。

ふと上方を見ると、天井から二メートル程がガラス張りになっている。その向こうに、白衣を着た男女数名がこちらをじつと見つめている。何故か、彼等の声はつきりと聞こえる。

「……認識修正薬の効果がそろそろ切れそうです」

「よし、情報生命体導入装置の用意を。融合値も上がっているな？」

「はい。数値からして、適合する確率が一番高いのはへし切長谷部かと」

「まあまあ成果か。よし、被験者を連れて行け」

「もう一方はどうしましょう？　認識修正薬があまり効いていないみたいですが」

「あの傷ではもうじき死ぬだろう、放っておいていい。後で清掃させる」

認識修正——敵打刀に見えたのは、そのせいか。

視界が赤く歪む。強く手を握り締め、抜刀しそうな心を制する。

自分達はまだいいのだ。主に危害を加えるものがいたら、例え仲のいいものでも手を下す覚悟は出来ている。武器であり戦士である自分達には当然の事だ。

だが、彼等は違うだろう。彼等は戦から一番遠くに置いて、守るべき存在である子供だ。

それなのに。

どうして。

どうして——守るべき幼い子供、それも固く友情で結ばれている者同士を殺し合わせた！

「うら……ぎ……り、もの」

トシキの足元から声がした。細く途切れそうなその声は、決して小さくない悲憤で満ちていた。

少しずつ視界を下に動かす。光が消えそうな目だ。その眼光の奥は、憎悪でどろりと淀んでいる。

「絶……対に、お前の……事を、許さない」

それだけ告げて、カサネの目から光が消える。もうその目は、誰の事も映していない。

トシキは投げ付けられた言葉の意味を一瞬理解出来なかった。理解が及んだ時には、もうカサネは何も話せなくなってしまった。トシキはしゃがみ込み、カサネの体を揺さぶる。

「カサネ、カサネ——どうして、何で、ごめんなさい、ごめんなさい、ねえ俺、カサネのお願い何でも聞くよ、ご飯だつて分けるし、俺をぶつたつていい、だから起きて、起きてよ、カサネ——」

壊れた様に同じ言葉を繰り返す。それでもカサネの血は流れ続けるし、体もどんどん冷たくなっていく。もうカサネは、トシキの言葉に応えないのだ。

取り返しのつかない事をした——その事實は、少年にはあまりにも重いだらう。無意識の内に人を殺すという時点で精神に大きな負担がかかるだろうに、殺した相手は一番の友達だ。どれだけ重い十字架を背負い込んでしまっても不思議ではない。

研究員達が泣き崩れているトシキを抱え、傍らにあるカサネには目もくれずに運んでいく。トシキはカサネに手を伸ばすが、研究員達は構わずにドアを閉めた。

途端、景色が移り変わる。液体が満ちている大きなガラスの円柱が並ぶ部屋だ。研究員達は意識を失っているトシキにコードを接続して円柱の中に入れ、機械を操作して見つめている。

トシキが円柱に入れられて数分。——変化は、目に見えて現れ始めた。

長い黒髪が抜け落ち、ショートヘアに。髪の色も、じわりと煤色に変わっていった。体は全体的に大きくなり、子供のそれから二十代のそれに。検査着は体に合わせて変化し、しばらくすると紫色のカソツ

クに変わる。顔立ちも大人の物になり、目を開けば藤色が現れる。

「登録番号一一八番、打刀へし切長谷部。完全な定着を確認した」

ふう、と研究員達は息を吐いた。円柱からトシキ一一長谷部となつた彼の体を取り出し、コードを取り外す。薄く開いている目から一筋の涙が、液体に塗れている長谷部の顔に伝う。

「戦闘レベルは八十か、上出来だな」

「出荷先はどこでしたっけ？」

「出荷先の審神者名は狭霧だ。直接受け取りに来るので、くれぐれも粗相の無い様に」

「まあまあ偉いお人なんでしょう。大丈夫ですよ、そんなへまはしません」

「よく言うよ、詰めめのは甘さは一流のくせに」

あはは、と研究員達は笑い声を上げる。一仕事を終えた彼等は、涙を流し続ける少年だったものを気に掛けもしなかった。

ぶつり、と世界が黒に染まった。幻覚は影も形もなくなり、その場に見えているのは七振りの刀と一人の少年だけだ。

——現実で気絶する前に聞こえた子供達の声が、耳が痛くなる程反響している。

「——俺のせいなんだ。俺が、妙な薬に惑わされなければ——」

震える声でそう言った長谷部は、静かに項垂れた。抱えているトシキの体は、いよいよ消えそうになっている。

*

怨嗟に満ちた幼い声とそれを聞いた気分の重さを表す静けさが、闇を支配している。その場にいる誰もが口を開けず、俯いて受けたショックを内心で処理していた。薬研もまた、怒りと悲しみを制御しようとして必死だった。

——長谷部が完全に悪いとは言えない。長谷部は自らの認識を強引かつ意識の外で改変されていたのだ。下位でも神の認識すら歪められる技術に抗えなかった事を、誰が責められようか。それは下手したら、「自分」達にも起こりかねなかった物なのだ。

けれど、長谷部は自分を責めている。悪いのはどう考えてもあの研

究員達だが、「妙な薬」を跳ね除けられなかった、という後悔でいっぱいなのだろう。——目の前の存在を敵だと勘違いした結果、一人の少年を殺めて、もう一人の少年を絶望させてしまったのだから。

「……長谷部さん。その子……トシキ君は、どうしてまだ残っているんですか？ 酷い言い方になりますが、多分さつきさんの定着云々の時に、消えちゃうはずだったんじゃないですか」

鯨尾が掠れた声で問いかける。夢を見続けていた少年の末路がこの様な残酷な物だったのだ、彼の悲哀はどれだけの物か。

長谷部が僅かに顔を上げて答える。

「……完全にトシキの体に定着する前に、消えかかっているトシキの魂を見つけたんだ。とっさにその魂を抱えて一つの椅子——多分肉体を精神世界で表した物だろう——に座り込んだ。それが功を奏して、今もトシキの魂は体に残っている。……この様に、精神状態で具合は大きく変わるがな」

長谷部はトシキの顔を覗いて、顔を歪めた。トシキは苦しそうに呻いており、体の透明化も歯止めがかからない。

この場にいる刀剣男士全員が思っている——トシキを、絶望の中に留めたまま消滅させたくない。

だってそうじゃないと、あんまりだ。親からは愛情ではなく最悪の感情を向けられ、その日々の中に差し込む光だった大切な妹と引き離され、連れて来られた場所で出来た友達を、無意識の内に自分の手で殺めてしまった。そしてその後は疎まれ、弾かれてあちこちを転々とさせられて来た。まだ彼がこうして存在しているのが不思議なくらいだ。

こんなのは——こんなのは、あまりにも理不尽だ。

「……どうしたらいいんだ。もう俺には、どうしたらいいのかわからない。許されない事をした、謝つてもどうにもならない事を。せめてもと、トシキを幸せな場所に連れて行こうとした。でも、俺の罪が表に出た以上、もう俺はここにはいられない。だがトシキを一人にしたら、世界を儚んで消えてしまうかもしれない。……手詰まりじゃないか。トシキがここまで透けているのは初めてだ。記憶を、感情を肩代

わりしてもこれだ。——もう、俺は——」

長谷部の声は酷く震えて、もう涙を流す寸前なのだろう。顔が悲痛に歪んでいるのを、薬研もまた心を痛めながら見ていた。

長谷部もまた、トシキのために出来る献身を行っている。それこそ魂を削って、トシキが残れるように手を尽くしているのだろう。薬研の知る長谷部というのは、主に尽くし、仲間にも自分にも厳しい態度をとる印象が強い。その彼が、仲間の前で涙を溢れさせる寸前の表情を見せなければならぬ程に主以外の人間に心を砕き、どうにも出来ない現実に追い詰められている。かつて同じ主を戴いた仲である事以外にも、必死の献身に彼の肩を持ちたくなるくらいは許されるだろう。

薬研がかかる言葉に悩んでいると、宗三が口を開いた。

「……貴方は、どうしてその子を存在させようと思ったのです？ そうした方が彼にとって幸せだから？ 散々な目に遭ってきたんです、このまま楽にしてあげる道もあつたのではないのですか？」

長谷部は目を見開き、わなわなと震えてから大声を上げた。

「貴様、何を——！」

「僕だって、彼のように消えてしまいたくなつた時もありました。けれどこうして今も在るのは、人が僕をどんなになつても在る様にさせたからです。今の貴方も、彼等と同じ様な考えが透けて見えますよ。——貴方は、何のために彼を生かそうとしているのですか？」

絶望を帯びた宗三の気迫に長谷部は口をつぐみ、俯く。小夜が宗三と長谷部の顔を見比べているのが目についた。

宗三の思惑は、何となく分かる。彼もまた同じ主を戴いた仲なのだ、皮肉の中に他の真意が混ざっている事くらい察せられた。気だるげでひねくれている彼は、あまり仲間に関心の無い様に見えても、情のある刀なのだ。

「……ああそうだ、俺は少しでも罪を軽くしたかった。こんな小さな子供に友を斬らせてしまった事を、許して欲しかったと思つた事も確かだ！ だが許されない事だとも分かっているんだ、例えばトシキが許しても俺自身が許せない！ 勝手な贖罪だ、押しつけがましい懇願だ

！ それでも……それでも俺は、まだ生まれて十年も経っていない子供が、世を憐む事態にさせたこの世界を許せない、俺自身の存在も含めてだ！ 身勝手な怒りだ、軽蔑されて当然だろう、でも俺は——トシキを幸せにさせない理不尽なんて、絶対に認めない!!」

話し始めは小さかった長谷部の声が、次第に咆哮の声に変わる。ついに決壊した涙腺から涙が溢れ出て、彼の頬を濡らしている。トシキを抱きかかえたまま嗚咽を漏らす長谷部に、薬研は拳を握り締めた。子供に襲い来る理不尽を認められないのは、自分だって同じだ。

宗三は悠揚に長谷部に近付き、穏やかな口調で告げた。

「そうですね、本当に身勝手です。……でも、僕もひとの事を言えません。僕も貴方と同じ様に、理不尽への怒りから行動しようというのですから」

「ねえ、トシキ。僕は今から貴方に酷い事をします」

歌仙はトシキと彼に語り掛け始めた宗三を静かに見つめていた。酷い事をする、と言っている彼の口調はそれに反してとても柔らかい。だから歌仙も、何をするか穏やかに見届けられるのかもしれない。

「僕は身勝手に、貴方の意思に関係なく、貴方が生きる事を望みます。貴方にとつてはとても辛いでしょう、でも僕は謝りませんよ。だって僕は貴方にとつて酷い事をするとは思っても、悪い事をするとは思っていないのですから」

トシキはまだ、唸り声を上げている。彼の体勢を整えながら、長谷部も宗三の言葉に耳を傾けていた。

宗三はトシキのぼさぼさの頭に触れ、ゆつくりと撫でる。そうして強い意志を柔らかさで包みながら、穏やかに語り掛けた。

「……辛かったですでしょう、悲しかったですでしょう。でも、もういいんですよ。貴方は充分償った。貴方が無意識に貴方の親友を殺した罪は、貴方が異端として扱われた事で帳消しにされた。世界の全てが貴方を許さなくても、天下人の象徴たる僕が許します。貴方の幸福を求める権利を世界が否定するなら、この僕が先んじてそんな不条理を斬り裂きましょう。……だから、ねえ。もう自分を責めなくていいんですよ。貴方はただ少し不幸だった、それだけなのですから」

宗三の表情は普段の憂いを帯びた物ではなく、父親が我が子を見つめる様な温かさに満ちていた。歌仙は滅多にない事に少し驚く。あまりの事に、心を寄せるのも躊躇いがないのかもしれない。

自分も同じだ。トシキが生きる事を選ぶなら、言葉でも行動でもいくらでも示して見せる。それが、少しでも希望に繋がられると信じて。

トシキの唸り声が、少し小さくなる。それを見計らった小夜が、トシキに語り掛ける。

「……君は、この世界が嫌い？ ……僕は正直、よく分からないんだ。

どんなに楽しそうな事があっても、黒い澱みは消えてくれない。僕はね、復讐に価値を見出された刀なんだ。復讐以外の思想をを否定するつもりはないよ、それも考えた末の事だろうから。……でも、君は幼いんだ。絶望に意味を見出すには、まだ早いんじゃないかな。一緒に考えてみない？ 僕達の、意味の在り処を。僕も、君の邪魔をする物に復讐をしながら悩んでみようと思っっているから」

小夜もトシキに近寄り、恐る恐る頭を撫でる。トシキの唸り声が更に小さくなる。ほっと息を吐いて、小夜は手を離した。

次に口を開いたのは、骨喰だった。丸い目に強い光を宿し、少しずつ言葉を紡いでいく。

「……俺には昔の記憶がないんだ。残っている記憶は、炎だけ。それでいいと思っていた、今は主殿の刀なのだから。……でも、忘れた方がいい記憶とそうじゃない記憶があると日々の中で知った。正せる失敗は次の糧にすればいい。だが、お前は何も過失がないだろう。辛だけの記憶など、忘れてしまえ。空いた記憶の分は、これからの日々で埋めていけばいいのだから」

骨喰はトシキの手を握った。悪夢に魘されている彼は、骨喰の手を微かに握り返した様に見える。目を見開く長谷部に骨喰は小さく微笑み、一歩退いた。

黙って考え込んでいた薬研がトシキと長谷部に向かつて、深く頭を下げた。

「トシキ、長谷部。ずっと疑っていて悪かった。トシキはずっと過去に苦しんでいて、長谷部はそれを何とかしようとしていたんだな。不信の目を向けられたら、更に辛さが上乘せされる。……疑われて、疑って、気の休まる時がほとんど無かったのなら、追い詰められるのも当然だ。お前さん達の恨み辛みを全部聞くから、少し俺と話をしてくれないか？」

ぎよっとして、長谷部は薬研の下げられた頭を見つめる。そのまま首を振って頭を上げる、と長谷部は言った。

「疑われるのは当然だ。俺は、俺達は、この本丸を信じられずに、全てを話そうとしなかったのだから。お前が謝る筋合いは——」

「信じる余裕を充分に与えられなかった、それだけでも医療担当の手落ちだ。お前さん達の信頼を得られなければ、かうんせりんぐの意味が無い。……トシキもあんたも、心が傷付いているのは明白だった。それなのに本当の所で何とかしようとしなかった、信じなかったのは医療担当として最悪だ。長谷部はいいと言うが、それでも謝らせてくれ。——本当にすまなかった」

頭を上げずに薬研は言い切った。髪が顔に垂れ、表情は窺いにくい。

しん、とその場に静寂が満ちる。歌仙は折り目正しく頭を下げている薬研を見て、彼も粟田口派なのだ実感する。滅多に見せないからこそ、誠意が見える。今日は稀な事がよく起こる。きつとそれ程彼等は——自分達は、この少年と刀に起こった事に心を痛め、何とかしたいと考えたのだ。

まだ薬研は頭を上げていない。長谷部は唸り声を発しなくなったトシキの顔を覗き——

「……薬研さんは、悪くないよ。長谷部さんの言う通り、受け入れようとしてくれていたのに信じなかった俺が悪かったんだ」

——トシキの口が動いた事に肩を跳ねさせた。周りにいた刀も目を見開いたり、トシキに勢いよく視線を移したりとそれぞれ驚愕を表している。薬研も流石に頭を上げてトシキの顔を見つめていた。

「だって、今までこんなに沢山のひとに優しくされた事なんて無かった。いつだって、近寄ろうとしたら嫌がられたし、信じようと思えば疑われた。だから、これから何か酷い事をされるんじゃないかって、ずっと疑ってきた。信じて辛い思いをするのは、痛いから。ここでも、少し疑われているのは分かった。どんなに優しくされても、きつと、ここでも最後には仲間外れにされるんだって」

トシキの目がゆっくりと開く。その拍子に涙がとめどなく溢れ出る。長谷部は右腕だけでトシキを抱え直し、左腕の袖口で微かに触れさせ目元を拭った。

「……俺は、それだけの事をしたんだ。妹を助けにも行かない、親友を——カサネを殺して、俺はまだのうのうと生きてる。最低だよ、こん

な事。受け入れられないのも、当然の話なんだ。俺の罪は、多分ずっと消えない。ううん、きつと生まれて来た事すら、間違つて——」

「——そんな訳無いだろ！」

トシキの言葉を遮り、鯰尾が叫んだ。悲しみに泣き喚く様な、目に余る事に怒鳴る様な、そんな声だった。いつもの明るい口調ではないその叫びの主へ、一気に視線が集まる。

鯰尾は目を潤ませ、拳を握り、今にも地団駄を踏みそうな態度で更に続ける。

「君が生まれて来なかつた方がいいなんて事、あるもんか！ 宗三さんの言う通り、君はただ不幸だったただけだ！ 母親に愛情を貰えなくても、妹にずっと愛情を注ぎ続けて！ 親友の願いを、意識ある時には叶えようと頑張り続けた！ そんな君が、優しい君が、生まれて来ない方が良かったなんて考えさせるこんな世界が間違つてるんだ！

世界はいつだって不条理で、優しくないけど！ でも、それでも優しくあろうとした君が、生まれて来た事すら祝福されないなんて——こんな腹立たしい事があるか！ 幼い君が自分の存在を否定する程の絶望を抱えているだなんて、こんな悲しい事があるか！ ——君の優しさが傷になって返ってくる、こんな酷い理不尽があるか!!」

鯰尾は、ずっとトシキの夢を見ていたのだと言う。その彼が、トシキの辿つて来た経緯を知って感情を爆発させる事は目に見えていた。むしろ、今までよく保つた方だ。

そして多分——鯰尾が叫ばなければ自分が、小さな子供を襲つた不条理への怒りを表していただろう。

「これからは、俺達が優しさを返すから！ 君がずっと、優しいまま笑える様に支えるから！ 君が大人になるまで、いらない傷を付けさせない様にするから！ だから、だから——もう、そんな風に泣かないでくれよ……」

涙を堰き止められなくなった鯰尾は、けれど溢れ出る物をそのままにして俯いていた。骨喰が心配そうに彼の背をそっと支える。

トシキは涙で濡れた目を見開き、呆然とそれを見ていた。——彼の体の透明さが、少しずつ収まっている。長谷部は冷静さを装っている

が、歡喜の感情は隠せていない。

畳み掛ける様に、歌仙は言葉を連ねた。

「そうだね、まずは改めて君達を歓迎する宴でも開こうか。君は法の上ではまだ酒を飲める年齢じゃないけれど、酒の勢いに巻き込まれてみるのもいいかもしれないよ。酒癖の悪さは本丸ごとでも個体差が出るという話だけど、うちの本丸は誰が面白い事をするかな？ ああでも、片付けをさせるのも苦勞するのか……。それはさておき、その後は短刀達と遊んでみるといい。彼等は戦闘訓練として鬼ごっこや隠れんぼを取り入れているから、中々に手強いと思うよ。それから、打刀や脇差の中には機械遊戯にはまっているものもいるらしい。一緒にやってみたらどうかね」

困惑の表情を浮かべたトシキは、長谷部の顔を見上げて首を傾げる。長谷部はトシキの頭をくしゃくしゃと撫で、歌仙を見る様に告げる。

再び、トシキと目が合う。何を言われるのか分からない様子の彼に、歌仙は穏やかに笑んで見せた。

「――僕達は君を歓迎するよ。だから笑顔を見せてくれ。疑ってしまった事は申し訳ないけれど、これからはひとりの仲間としてきちんと君を信じるよ。……長谷部、君もだ」

「……え？」

「今まで、本当に苦勞して来たと思う。これからは、僕達も君と一緒に色々考えていくよ。全てを話すのはまだ難しいかもしれないけれど、少しずつでも打ち明けてくれたら嬉しい。同じ主に仕える仲として、これから仲良くしていけたらいいと僕は思っているよ」

長谷部は目を瞠り、それから目を伏せて小さな声で漏らした。

「……俺は、トシキの人生を滅茶苦茶にした」

「君は騙されていただけじゃないか。それにトシキの事を、感情や記憶を肩代わりしてまで守っていた、と言っていただろうか？ 人生がどうなるかは、仮にも神である僕達にも分からないんだ、そこまで深く考えなくていい。……というか、滅茶苦茶にしたのはこの施設の間人じゃないか」

「……俺が、薬に惑わされなければ良かったんだ」

「神ですら惑わす薬に抗うなんて、見た限りでは非常に難しいと感じたよ。君を降ろそうとして陰謀を企てた施設の人間に罪はある。君はただ、敵を斬るといふ使命を果たしたただけだ。幻覚だとしても、それは変わらない。腰抜けと罵られたいなら別だけどね」

「……俺は、どうしようも出来ない罪を犯した。それでも、あの方に仕えていいのだろうか」

震える声で、長谷部は尋ねる。トシキがおろおろと長谷部の様子を窺う。はあ、と息を吐いて歌仙は呆れを滲ませながら笑いかけた。

「言っただろう、君と仲良くしていきたいって。君はむしろ騙された被害者なんだ、そこまで縮こまらなくていい。そんなに惑わされるのが心配なら、約束をするよ。——君が主を敵と認識して襲った時は、僕が君を斬る。僕の練度はこの本丸で一番高い。君の練度にもすぐ追いつくだろう。その点は安心していいよ」

長谷部は息を飲んで、ふっと笑い声を吐いた。それは驚愕と共に安堵の色を宿している。

「……はっ、それは安心だな」

憎まれ口だが、その声音は穏やかだ。本当に——心から安堵したのだろう。歌仙もほう、と息を吐き出して力を抜く。

涙ぐんでいた鯰尾も笑顔を浮かべていて、骨喰も柔らかな雰囲気で長谷部達を見ている。宗三も小夜も、いつもの態度の中に温かな眼差しを浮かべていた。薬研も口角を上げかけて——顔を強張らせ柄に手をかける。

「——奴さんが来たぞ！」

舌打ちして、歌仙も抜刀する。このままおとなしくしていれば、と思ってもそうはいかないらしい。

黒いもやが数多の手に形を変え、こちらに向かって伸ばされる。歌仙は正面から来た手を横一文字に斬りかかったが、横に割れた手はじわりとくっついて再び襲い掛かって来る。

斬り裂いても斬り裂いても、手は何度も繋ぎ合わされて復活する。きりがない、と言ったのは誰だったか。その間にも、幼くおぞましい

声は響いている。

——うらぎりもの

——ぬけがけはゆるさない

——おまえだけはゆるさない

——かばうやつもみんなしんじやえばいいんだ

——かえせ

——ぼくらのみらいをかえせ！

恐らく、この声は「実験」で命を落としていった子供達の物なのだろう。声は憎悪でねばつき、澱んでいる。こんな声を発する様になつてしまった原因である大人達に何て事をしたんだ、と掴みかかりたくなつた。

それはほかの刀も同じだった。手を斬り落としながら腹立たしげに宗三が吐き捨てる。

「しつこい……本当に、いつになったら……！」

「中核になつている物を探せ！ このままだどこつちが押し負けるぞ！」

骨喰が鋭く叫ぶ。歌仙も応戦しながら視界を動かした。

動かした視線の先で、長谷部がトシキを抱え庇いながら刀を振るっている。その背中に一層黒々とした手が複数迫り——

「長谷部さん！」

鯨尾が背中に追いつき、手を刀で叩き落として次の獲物を追う。助かった、と短く礼を述べた長谷部の背の前に小夜が立った。

「長谷部さんを襲つていた手、かなり澱んでいる様でした。しかも他の物に比べ復活する様子もありません。あの手を斬つていけば、中核が現れると思います」

「分かつているが……あの手は、多分……」

「あの更に黒い手を斬つていけばいいんだな？」

言いよどむ長谷部の声に薬研の声が被さる。そうして低く構えると、地を蹴り風を思い切り裂いて手を斬り刻んでいく。薬研に負けぬと言わんばかりに、歌仙達も手を斬り落とす。

そして、それは一層澱んだ手が全て斬られた直後に現れた。

ゆらゆらと陽炎の様に立ち昇る、小さな子供くらいの黒い塊。それは他の手を周囲に従え、歌仙達から少し離れた場所に佇んでいた。

こちらを窺う様に、その塊は動かない。しかし、周囲の手は小さく縮こまってからこちらに勢いよく迫って来た。しかしその本数は先程までと比べれば遥かに少ない。残りの手は塊の周りで何かに阻まれているかの如く動かない。

これくらいなら余裕だと、油断していたのが良くなかったのだろうか。

手を迎撃していた骨喰と薬研が、突如動きが速くなった手に吹き飛ばされたのだ。

「薬研！」

「骨喰！」

歌仙と宗三、鯰尾が叫んだ。吹き飛ばされた二振りには、手が迫り来る。鯰尾が膝をついている骨喰の所へ、宗三が吹き飛ばされたまま倒れている薬研の所へ駆けて、手を叩き落とす。宗三が薬研の息があるのを確かめてから黒い塊を睨むと、柄を強く握って吼えた。

「よくも、よくも薬研を……！」

薬研が昏倒した事によって、歌仙達の殺意が湧き上がっていく。仲間を傷つけられた事によって、あるものは憎悪を、あるものは危機感を抱いて塊を斬ろうと構える。

塊は、相も変わらず動かない。こちらを嘲笑っているのか、と認識した歌仙は上段の構えをとり駈け出そうとした。他の刀も攻撃態勢を整え、塊を見据える。

静かだが一触即発の空間。——そこに、幼い声が響き渡った。

「——待って！」

歌仙はその声に足を止め、つんのめる。声の主を見ると、驚愕と悲哀で顔を歪めている長谷部の腕の中、そこで刀を——「へし切長谷部」を震えながら握るトシキが、顔を上げて歌仙を見ていた。怯えながらも決意を秘めている様子のトシキに、歌仙は固まる。

「……俺がやる。皆を巻き込んだ責任は、とらなくちや」

そう言つて長谷部の腕からゆっくりとトシキは離れる。そして恐

る恐る、けれど確実に塊に向かつて歩を進める。七振りの刀達は、それを黙って見ている事しか出来ない。

これから行うのはきつと、少年の過去への訣別の儀だ。

塊の周囲にある手は、押さえつけられた様に震えて動かない。塊も、どこかトシキを見つめている様だった。

「……ごめん、皆、カサネ」

塊の前に立ち、トシキは柄を握り締める。長い髪を掴もうとする手はやはり、何かに妨害されている様だ。それを見て、トシキは言葉を重ねる。

「俺は、皆を殺して今もこうして生き残っている。本当は、死んで償いたいと思っていたけれど……」

手は口惜しそうに手を伸ばそうとして、やはり阻まれる。

「充分償ったと言ってくれたひとがいる。一緒に悩むと言ってくれたひとがいる。忘れてもいいと言ってくれたひとがいる」

トシキは一つずつ一つずつ、大切な物を挙げる様にかげられた言葉を並べていく。その言葉に、塊は何も返さない。手だけが、忌々しそうにその場で動くだけだ。

「話をしたいと言ってくれたひとがいる。俺の代わりに悲しんでくれたひとがいる。こんな俺を歓迎すると言ってくれたひとがいる。ずっと記憶と感情を肩代わりしてくれたひとがいる」

ゆつくりと、トシキが刀を持ち上げる。刃を向ける先は、黒く蠢く塊だ。泣きそうになるのを抑えながら小さく笑み、トシキは告げる。

「そのひと達に望まれたから。今は、そのひと達の為に生きていたい。……本当にごめん。今から俺は、そのひと達を守る為に皆を斬る。俺は地獄に落ちるだろうけど、お願い。——少しだけ、時間を頂戴」

ブン、と刀が塊に向かつて振り下ろされる。塊が斜めに斬り裂かれると手がさらさらと、風に乗った砂の様に吹き飛ばされていく。塊も、少しずつ形を崩していた。

すると、変化が訪れる。——空間が、少しずつ白み始めたのだ。天から少しずつ光が差し込み、空間を支配していた澱みも少しずつ消えていく。

誰に言われるでもなく、事態は終息に向かっているのだと分かった。歌仙の意識が段々と薄れていく。それでも、トシキの姿を見失わないように視線を固定し続けた。

「——地獄なんて、行く必要ないよ。俺もお前も、大人のおもちやにされただけだったんだから」

はつと、トシキが顔を上げる。顔を向けた先は、崩れゆく塊。トシキは肩を震わせて再び俯く。

歌仙は見た。——塊が、いつの間にかカサネの姿をしていたのを。

「じゃあな、親友。当たったりしてごめん。——しわくちやになるまで、こつちには来るなよ」

そう言つて、塊は消え失せた。その場にはもう、澱んでいる物は何もない。視界が光に包まれて、意識を保つのも辛くなってきた。

トシキはその場に崩れ落ちて嗚咽を漏らし始めた。親友と本当に別れを告げたのだと、それを深く悲しむ涙なのだと思う。

「——よく頑張った」

意識が途切れる間際。——長谷部が泣き崩れるトシキに近付き、肩を抱いているのが見えた。

*

「……………さん、歌仙さん！」

少女の声に歌仙は目を覚ます。頭を動かすと、審神者が唇を震わせながら歌仙の顔を見ていた。

どうやら自分はどこかに横たえられているらしい。背中に柔らかな物を感じる。見てみると、埃っぽい布団に横たわっていると分かった。

「……………ある、じ。僕は、どのくらいの間寝ていたんだ？」

「四時間程倒れていらつしやいました。他の方はもう起きていらつしやいます。歌仙さんだけ、少し起きるのが遅かったんです。……………目が覚めて、本当によかった……………！」

ぐるりと見渡すと、そこは元いた執務室ではなく、大広間だった。布団が全部で七枚敷かれていて、他の隊員は起き上がって朝風隊の審神者や刀達と話している。それを見る限り、彼等にも異常はない様

だ。

朝風隊の青江がゆつくりと近付いて来て膝をつき、審神者に話しかける。

「歌仙の目も覚めたようだね。これで春光隊は全員復活か。良かったねえ」

「はい、本当に……青江さんも、ありがとうございました」

「気にしないでくれ、十分に温めて貰ったからねえ。……看病をしていたからだよ？ それはそうと、歌仙。真実は掴めたかい？」

きよとんと首を傾げる審神者と、はあ、と息を吐きながら頭を抱える歌仙。フフ、と青江は妖しげに微笑んだ。

「長谷部君、さっきからずっと泣いているんだ。きつと倒れている間に何かあったんだらう？ ……嫌な空気が変わったのも、彼がまた泣き出してからだしねえ」

長谷部のいる方を向くと、彼は上半身を起こして何も言わずに涙を流していた。朝風隊の加州が静かに横に座っている。

彼は今、どつちなのだらう。トシキは消えていないだろうか。それがどうしても気になった。

じつと長谷部を見ていると、長谷部は視線に気付いたのかこちらを向き、ぼうつとした表情で歌仙を見返した。それから「すまない」と小さく口を動かして目を閉じた。

色々気になる事はあるが、まずは審神者に説明をしなくてはならない。歌仙は審神者と青江に視線を移し、語り始めた。

「……ある少年が関わっている場所に連れて来られたよ。そこで少年が、刀剣男士にさせられる様を、胸糞悪い出来事と共に見せられた。狭霧の審神者は、その刀剣男士の受け取りをしていたんだ」

「へえ。彼の名前を聞いても？」

「名前は新内利樹。彼は親に売られて同じ様な子供と殺し合うという過酷な実験をさせられた後、無意識の内に親友を手に掛ける事になった。……見ていて叫びたくなかったよ。認識を改竄させて親友を殺させるなんて、外道のやり方としか思えない」

「ふうん、子供達、か。まるで蠱毒だねえ」

青江も顔をしかめて話を聞いていた。歌仙も出来ればあの光景を思い出したくない。

——けれど、起こった事は話さなければ。事件の後処理はしっかりとしないといけないのだから。

そうして歌仙が全てを話し終えた後、青江は口に手を当てて、これは僕の想像だけど、と前置きをして話し始めた。

「……狭霧の審神者は、その子供達による呪いの起点にされたんじゃないかな。蠱毒の儀式を行っていた子供達は、死にたくないが故に一層剣の鋭さを増していったけれど、結局は散っていった。一人だけ生き残った子——トシキ君だっけ？ 彼を妬んで呪い殺そうとして、まずは最初に配属されたこの本丸から探そうとしたんだろう。まあ、この本丸はその犠牲になっちゃったんだらうね。ご愁傷様だけど」

呪いの起点。子供達がそうしてしまった嘆きはあるが、長谷部を迫害した本丸には何の感慨も湧かなかった。冷たい様だが、真実を知った今彼等に同情する気も起きない。今はただ、子供達の冥福を祈るだけだ。

「……子供達の墓を建ててあげた方がいいんじゃないかと思うんだけど、どうだろうか」

「そうだね。これまで子供達は弔いをして貰えなかった。けれど、今からでも遅くは無いんじゃないかな。……長谷部君、これから馴染めるといいね」

青江は墓の事は主に頼んでみるよ、と言って立ち上がり、朝風隊の審神者の下へ向かった。黙って見送り、歌仙は審神者の方を向く。

審神者は不安そうに歌仙を見返して、膝の上で手を握っていた。

「……しばらく長谷部さんに事情聴取に協力して欲しいと言われてました」

「そうか、まあこの事件の重要参考刀だからね。仕方ないか」

「はい。……それで、その……もし嫌だったら、長谷部さんを政府で引き取ると……」

口を強く結んで審神者は俯いた。歌仙は彼女の最初の刀だ、考えている事はお見通しである。

「断っておくれ。倒れている間に皆で話し合った、長谷部はこの本丸で穏やかに過ぐして貰うと」

「……じゃあ……!」

決定的な言葉を待つ審神者へ、歌仙は穏やかに微笑んで見せた。

「主、帰ろう。長谷部と一緒に、僕達の本丸へ」

「……はい!」

審神者はそれは嬉しそうに頷いた。歌仙は長谷部をもう本丸の一員だと考えていたからだ、彼女の歓喜の理由を深く考えなかった。

——その理由と、青江と話している最中に彼女が動揺していた事。それに気付かなかった事を、歌仙は今でも後悔している。

夕食を長谷部の歓迎会とする事にした帰り道、そしてその宴会となった歓迎会の最中、鯰尾はずっと考えていた。

——何故、長谷部さんは迫害されないといけなかったんだろう。

隣では和泉守が酒瓶を掲げ、堀川がやんわりと諫めている。その斜め前では加州と大和守が他愛のない、そして酒の勢いで滅茶苦茶な口調になりながら喧嘩をしていた。

普段なら、鯰尾も茶々を入れたり、諫めたりしただろう。だが、どうも今日はそんな気になれない。それは、事件が解決した後でも明かされなかった謎のせいだ。

歌仙が話していた長谷部を詰る言葉達。そして、それを受け入れている長谷部。それが、どうしても気になって仕方がない。

長谷部は眠いのか、短刀達の輪の中で船を漕いで、骨喰は山姥切に絡まれて困惑しながら対応している。陸奥守と和泉守が肩を組んで歌い始めた事で、周囲の視線は彼等に集中している。歌仙は薬研と共に、酒瓶の片付けをしに行った筈。

カオス極まりない会場。——本丸を抜け出すなら、今だ。

鯰尾は隣にいた堀川に「ちよつと厠に行つてくる」と告げ、廊下を歩く。

そして戦装束に身を変え、軽歩兵を展開し森へと突っ込んで行った。

「……あれ、鯰尾兄だよな」

「こんな時間に何の用だ？ ……そう言えばなんだかんだで彼、全然酒を飲んでいなかったよね」

「話しかけてもずつと上の空だったし……何かあるな。歌仙、追いかけるか？」

「そうだね、変な事に巻き込まれていたら大変だ」

たまたまその現場を見ていた二振りは、迷い無く鯰尾を追いかける

事に決めた。

*

月が高く登り、木々の隙間から淡い光が漏れて独特の模様を作り上げている。

枝の上を跳ねて、鯰尾は森の奥へと進んで行く。ちらちらと目に入る月光が少し煩わしい。

何故こんな事をしているのか。抜け出した事が露見すれば絶対に歌仙達に怒られるし、そもそも彼が真実を知っている保証も無い。けれど。

——真実を知っても長谷部と仲良くしてくれたら、鳴狐は嬉しい。その言葉が思い浮かんで離れないのだ。きっと、あの鳴狐は何かを知っている。少なくとも、長谷部がトシキである事を知っているのは間違い無いだろう。

問い質さなくてはならない。——まだ隠されている、長谷部の真実を。

そう考えていると、顔の横を弾丸が飛んで来る。背後に目をやると、六つの銃口が反射し、こちらを捉えていた。

——また来る。そう思った通り、再び弾丸が放たれた。木を盾にしたり枝の上に飛び移ったりしてそれを回避する。

避けるのは簡単だった。きっと相手は、こちらを足止めする事だけを目的として銃弾を撃つたのだろうから。

「よう、鯰尾兄。こんな時間に何してる？」

「酔い覚ましをするには少し遠くへ行き過ぎだと思うけどね。森の中に何かあるのかな？」

足を止めて振り返る。歌仙と薬研が抜刀して鋒をこちらに向けていた。

見つからない様に来た筈なのに。鯰尾は背中に一つ汗を流し、おどけながら尋ねた。

「歌仙さん、薬研。いやあ、少し飲み過ぎたみたいで」

「それにしちや迷い無く森に向かっていたみたいだがなあ」

「今も少し前後不覚でね。俺って酒に弱かったのかな」

「君がうわばみなのをよく知っているし、今夜は一滴も飲んでいないのも知っているよ。……さて、鯨尾。そろそろ話して貰おうか。君に何かあったら主が気に病むからね」

二振りには流されてくれなかったらしい。歌仙は心配する口ぶりだが目付きは鋭くなつていくし、薬研も笑みを浮かべながら柄から手を離さない。流石に最古参の二振りを相手にするのは避けたい所だ。鯨尾はおどけるのを止めて両腕を挙げた。

「すみません、何かあった訳じゃないんですけど。……長谷部さんの事が、どうしても気になつて」

「長谷部の？ それと森の中に何の関係が」

「歩きながら話すよ。……本刃が現れるとは限らないけど」

「つて事は、誰かに会いに行こうとしていたんだね。詳しい話を聞かせて貰おうじゃないか」

歌仙の言葉に頷いてから歩き出す。鯨尾は所属不明の鳴狐と会つた日の事を、事細かに話した。

気配を感じ取れなかつた事、長谷部は鳴狐を信頼している様子だつた事、長谷部の影の薄さに言及していた事、何より「真実」という言葉の口にしていた事――。

「……どう考えても長谷部の――トシキの過去も知っていそうだな、その伯父貴は。何で話さなかつたんだ」

「こつちの事を信じていなさそうだったから、言つても会つて貰えない可能性が高いと思つたんだ。それに、長谷部さんは伯父さんと話す事に安らぎを感じているみたいだった。それを壊すのもどうなのかなつて……」

「それでも話してくれ。その鳴狐と会うかは、主が決める事だ。隠し事をされる方が後々困るからね」

「本当にすみませんでした……この先です。長谷部さんとどこかの伯父さんが話していたのは」

二振りには静かに頷いた。目の前には、丸太が置かれている大きく拓けた空間。あの日、長谷部が鳴狐を待っていた場所だ。

三振りには丸太の上に座り、しばらくの間ぼうつと月を眺めていた。

幻覚で見た物とよく似ている星空は、暗い心をどこかに置き去りにさせてくれる。感嘆の息を吐いて、歌仙は呟いた。

「……綺麗だね、ここから見る星空も」

「そうですね。……どこかの伯父さんも、見てるのかな」

「本丸の中から見ているかもな。審神者か、仲間と一緒に——」

「——いえいえ。我々には主たる審神者も、同じ主に仕える仲間もおりませんよう」

唐突に聞こえてきた声に、三振りには驚愕し左右を見渡す。しかし、声の主である筈の姿は見当たらない。空耳だったのか、と肩の力を抜いた直後。

ほん、と背後から肩をたたかれて鯨尾の心臓が跳ね上がる。

「お久しぶりです、春光隊の鯨尾殿。お元氣そうで何よりでございます。……そちらのお二方は初めましてですねえ。春光隊にも『我々』はいらっしゃるでしょうが、改めまして。——これなるは鎌倉時代の打刀、鳴狐と申します。わたくしはお付の狐でございます」

鳴狐とお供の狐が、いつの間にか三振りの後ろに立っていた。今度は待つている側なのに——いやだからこそか——近付いている事も、居場所すら全く分からなかった。歌仙は顔面蒼白になり、薬研も一見すると分かり辛いが、かなり狼狽している。一度それを経験している鯨尾すら飛び上がったのだ、二振りの驚きはそれどころではなかった。

心臓を押さえて息を吐き出してから、歌仙は鳴狐に向かい合った。

「……これでも、どんな刀種の氣配も感じ取れる様になったと思っただけだね。僕はまだまだ未熟だと痛感したよ」

「いえいえ、そんな事はありません。『我々』は、かなり氣配が薄いですからねえ」

「……どんな鍛錬を積んだらそこまで氣配を殺せるのか、ご教授願いたい所だが……」

「消したくて消しているのではありませんがねえ。……お三方は、今日は何の御用で？ 調査から帰ってきたばかりである様ですが、お疲れではないのですか？ 長谷部殿も大層お疲れでしょう、わたくし共

は心配でございます」

調査の事を知っているのは、それがこの区域の全部隊に通達されている為不思議ではない。だが、長谷部の事を引き合いに出したのは、どう考えても何かを知っているとしか思えない。

「……伯父さん。今日訪ねて来たのはね、長谷部さんの事を詳しく聞きたかったからなんだ」

「ほう。鯰尾殿だけでは無く、歌仙殿と薬研殿もいらつしやるという事は……」

「うん。——調査で、長谷部さんの大体の過去は把握した。その上で、俺達は正式に長谷部さんを仲間として受け入れる事にしたよ」

「そうですか。……そうですか、本当にめでたい事でございますねえ」

お供の狐と鳴狐は鯰尾の報告に目を見開いた後、幸福を噛み締める様に目を閉じた。

それだけだが、鯰尾は彼等が優しい存在である事を感じた。——だって、妬むでも無く悲しむでも無く、喜んだのだ、彼等は。

安堵してばかりもいられない。彼等には、聞きたい事があるのだ。伯父さん、と呼びかけて鳴狐達の目を向けさせる。

「何で——何で貴方達は、そんなに疎まれているの？ 俺達は長谷部さんの過去を見てきたけれど、嫌われる様な事は無かった——いや、一つだけあつたけど、それも強制的にそうさせられたという点で帳消しされる。それじゃあ一体、貴方達の何が俺達の目を逸らさせるんだ？」

「……」

鳴狐達は、目を伏せて黙り込んだ。黙秘する訳では無く、何から話すか考えている様だった。薬研は腕を組んで、歌仙は表情を固くして、鯰尾は拳を握ったままで答えを待った。

そうしてどのくらい待っただろうか。お供の狐は、重々しく口を開いた。

「……一言で言ってしまうえば、簡単ですよ。我々は、人間でも刀でも無いからです」

「そいつは、どういう……」

薬研が困惑して意味を尋ねる。お供の狐は諦観に満ちた口調で尋ね返した。

「一から話しましょう、我々の成り立ちを。お三方は、『落とし子政策』という単語をご存知ですか？」

「確か……今は崩壊している、子供を増やす為の政策だったか？」

「うん。支援金とかを支給したけれど、そのせいで恵まれない子供が溢れ返ったって」

「……落とし子？ 何だか嫌な予感がするんだが」

「その予感は正しいですよ、歌仙殿。まずはそこから話しましょう」

——今から十数年前。加速する少子化を憂いた政府によって、子供を産めば産む程支援金が貰えるという謳い文句の政策が実施された。子供の育成にも莫大な金がかかるこの国だ、その政策は主に下流家庭に喜ばれた。

しかし、その政策には大きな問題点があった。支援金をどこから捻出するのか、という話である。子供は産んで欲しい、しかし金は少ない、ならばどうするか——

「……政府の出した答えは、女性にとって最悪の回答でした。中絶や離婚時の手続きに莫大な税をかけたのです。貧しい人は、望まない妊娠をしても産まざるを得なくなる。この欠点に気づいた上流から中流家庭は結婚をしなくなる。負の循環が、ここから始まりました」

下流家庭は金が欲しい、そして金目当てに沢山の子供を産んでいく。金目当てに生まれた子供達の末路は、想像に容易いだろう。

例え望まれて生まれたとしても、子供達の苦難は続く。政府は幼稚園や保育園などの設備を整えないままこの政策を実施した為、手のかかる時期に預けられる施設は全て満員状態。頼れる施設が少なかつた事もあって、病んでしまった親による子供への虐待が増加した。

当然、児童養護施設へ保護される子供も増えていくが、そのも限界がある。虐待する親から逃げ出した子供も多く、結果治安の悪い街では行き場の無い子供で溢れ返った。

「……強姦されて子供を産んだ親もごまんといましたね。その果ては育児放棄、虐待、児童養護施設への置き去り。目に光の無い子供達で

いっぱいこの街の光景は陰惨ですよ。僅かな小銭を持つて食料を買う子もいれば、その小銭すら無く食事を乞う子もいました。わたくしもあまりのむごさに言葉をなくしたものです」

「……なんて、酷い」

「そしてその政策は、十年後に立ち上がった人々の手によって廃止されました。——ここまですが前置きです」

政策が廃止された後、政府は子供達の扱いに困り果てていた。学校に通わせるにも金がかかる、それを親が認める筈が無い。けれどこのままではこの国の治安が悪くなりかねない。国の金も底をつきかけていて、国会は毎日紛糾していたという。

そんな時起こったのが、歴史修正主義者による過去への襲撃だった。政府はそちらの対応を迫られ、子供の処遇は一旦脇に置かれた。

時空を切り開いて町を発展させ、更に時間遡行軍の正体である刀の付喪神の研究によって政府の財政は再建の目途が立った。

その付喪神——刀剣男士の研究で、子供達の処遇は決まった。

「さて、ここでお三方に問題です。かつて刀剣男士は人型をとる為に媒介を必要としていました。その媒介は当初死刑囚を用いていましたが、その数にも限界がございます。代わりに用いられる事となった媒介は何でしょうか？」

「……まさか、溢れ返っていた、子供達を……」

「鯨尾殿、そのまさかでございます」

死刑囚と比べて精神や肉体が発達しておらず、刀剣男士と反発する可能性が低い子供達は、媒介に最適だった。政府は日本各地に溢れていた子供達を金で釣って掻き集め、刀剣男士発現の実験に用いた。政府としては時間遡行軍に対抗出来る兵を集められる、親達は大きな金が手に入る。この二つの視点からすれば双方得のある話なのだろう——子供の意思を無視した上での話だが。

「——鳴狐やそちらの長谷部殿は、その子供達の一人です。子供達は政府によって時間遡行軍を打ち倒す兵器にされました。体力面や精神面で、人間性はほぼ無くなってしまったと言えるでしょう。……この『ほぼ』がとても厄介なのです。例えば、そうですね。薬研殿」

「……何だ？」

鳴狐はおもむろに落ちていいる枝を拾い、手の上に乗せる。お供の狐は鼻をひくつかせて問いかけた。

「ここに一本の枝があります。これは人を斬り裂けるとても鋭い枝なのです。薬研殿は、これを刀と呼べますか？」

「……いくら切り裂けても、枝は枝だ。刀とは呼べないだろ」

「そうですね。しかし人を斬り裂ける点では、刀とこの枝は共通です。

——そして枝側からは『そんな危険なものは枝ではない』と感じ取ってしまおう事でしょう」

「……ちよつと待ってくれ、まさか、そんな理由で君達は——」

愕然と体を震わせる歌仙に、お供の狐は淡々と回答を示した。

「ええ、そんな理由です。我々は刀剣男士からも、人間からも、同種に見られない。なのに『自分は貴方達と同種だ』と言う様にそこに存在しているのです。……心を持ったものなら悍ましく感じられるでしょうね。例えば刀が——真正正銘の刀が、『自分は人間だ』と言っているのを想像してみてください。滑稽で、狂気じみて——恐ろしく感じるでしょう？」

鯨尾は、何も言えなかった。歌仙と薬研も、同じ様に黙り込んでいる。

それは、今の世の中では良くないとされていて、けれど多くの人間が心のどこかで付随している物だ。

物である自分は、そんな感情を抱かないと思っていた。——驕っていた。

こちら側の差別意識。——それが、長谷部達の存在感が薄いと感じていた理由だったのだ。

「我々は貴方達の事は責めません。先程話しかけた時、我々の存在を探そうとして下さったのですからね。……刀剣男士は基本的に上品です。だからこそ、目立たなければ存在を無視するだけで済みますが、存在を示せば不快なものとして排除しようとする。誇り高いが故に、贗作くらいなら認めようとするも、なかなか人間から刀になった存在を認められない」

人間は「主」になりえる存在だ。生身では殴る事しか出来ない非力さを、そして力を増幅出来る刀に縫っている人間がいる事も知っている。だからこそ己の価値を肯定し、己の鋭さを誇れるのだ。

その鋭さを人間が持つてしまったら、自分達はどうなってしまうのだろうか？

「これは受け売りですが、心持つものは力あるもの——暴力に限らず、摩訶不思議な力でも恐れるらしいですよ。だからその力を削ぎ落とそうと、どんどん地位を落とされていく。ある特殊な力を持つてしまえば、最初は崇められても次第に恐れられ転落していく」

「……僕は、そんな力なんて欲しくなかつたんだ。辛い思いをすると知っていたのなら、研究所から何があつても逃げていた。きつと、僕も驕っていたんだね」

鳴狐はぼつりとそう漏らした。湧き出る激情を抑え込んでいる、そんな声だった。

歌仙は痛ましいものを見る目で鳴狐を見つめていた。薬研は俯いて、拳を強く握っていた。

鯰尾はただ、呆然とその場に立っていた。目眩と頭痛がする。きつと、かなり深い所まで考えを巡らせた為だ。

自分の驕りを思い知らされた。目の前の刀剣男士の悲しみに触れてしまった。

けれど、これだけは伝えなければ。

「俺は、これからもつと長谷部さんと仲良くなりたい。きつと心の中にある差別意識は、簡単に消えてはくれない。でも、それでも、長谷部さんときちんとした仲間になりたいんだ。……伯父さん、俺は貴方にも沢山の話を知りたい。俺は、魅力的なひとを知ろうともしない自分と、決別したいんだ」

鳴狐の目を見据えて、鯰尾は力強く宣言した。きつとまだ傲慢さがあるかもしれない。けれど、ここで彼等に告げなければこの先ずつと恥じながら生涯を送っていく事になるだろう。

鳴狐は目を丸くして鯰尾藤四郎を見返す。その後続く言葉に、彼は更に目を見開く事になる。

「そうだな、俺も伯父貴と話をしてみたい。長谷部も交えて一杯やらないか？」

「君は外見で止められると思うよ。……鳴狐、僕も君の話に興味がある。心の話は前々から勉強してみたいと思っていたんだ。君はいい先生になってくれそうだね」

「いつそ本丸全員で……いや、あんまり大人数で押しかけるのもあれか。やっぱり少人数でだな」

「うん、鳴狐の意思も尊重しないと。鳴狐、近々僕達と飲みに行かないか？」

「嫌だったら断つてよ？ 伯父さんを嫌がらせたくはないからさ」

友好的な態度を示す三振りに、鳴狐は驚愕している様子だった。三振りの顔を見渡し、か細い声で尋ねる。

「……僕は、まだ信用出来ない。長谷部を交えるとしても、飲みに行けるまで時間がかかると思うけど……」

「構わないよ。時間はたっぷりあるみたいだし、徐々に仲良くなっていきましよう！」

「まあまずは、長谷部が城下町に下りられる様にならないといけないからね」

「楽しみにしてるぜ、伯父貴。……そろそろ大将が心配するな、本丸に戻らねえと」

薬研の一声で、その場は解散の雰囲気となった。それぞれが丸太を降り、鳴狐に別れの挨拶をしようと口を開こうとする。

「……城下町、入口」

「え？」

鯨尾が丸太から離れた所で振り返ると、鳴狐が丸太の前で口元を少し持ち上げているのが見えた。

「飲みに行くときは、そこで待ち合わせよう」

鳴狐は、確かに微笑んでいた。——それにぶわっと歓喜の感情がこみ上げてくる。

三振りは言うまでもなく、それに頷いていた。

13—9 「そうして悲劇は幕を開けた」

「……そうして長谷部さんは伯父さんの手を借りながら、本丸に馴染んでいったんだ」

ふう、と鯰尾がジュースを一杯飲んで息を吐く。五虎退はもじもじと手を動かしながら問いかける。

「えっと、つまり、長谷部さんは二重人格なんですか？」

「そういう事になるのかな。薬研の話では、性格が混じり合っているって話だったけど」

「それが自覚的なのか無自覚的なのかは分からないけどな。……まあともかく、長谷部は理解ある他者に支えられて、本丸に馴染める様になった。政府の指定した本丸に配属されてそうなるかは分からない。もし希望するなら、そういう刀剣男士を多く受け入れている本丸に行ける様手配するぜ。まあゆっくり考えな」

「は、はい」

安堵の息を吐く五虎退の隣で、小夜が頭に手を当てている。それに気付いた歌仙が小夜の様子を窺った。

「お小夜、頭が痛いのかい？」

「……そうみたいです。すみません、寝床を貸して頂けますか？」

「俺が案内する」

「ぼ、僕も行きます……！」

長谷部が立ち上がり、小夜を抱えて部屋の外に歩き出す。五虎退もその後についていき、部屋のドアをパタン、と閉めた。

真っ先に小夜の下へ行く筈の歌仙は動かなかった——動けなかったのだ。

歌仙の着物の裾を、秋田が膝に顔を埋めたまま小さくつかんでいる。そうして歌仙に尋ねた。

「……歌仙さん、お尋ねしたい事があります。気分を害するかもしれないですけど、気になって」

「な、何かな？」

おろおろしながら歌仙は秋田と目を合わせようとする。秋田は顔

を持ち上げて、丸い空色の目を向けた。

「——あの、主君はどちらにいらっしやるのでしょうか？」

「……私達が聞いた話は以上だよ。少しは助けになったかな？」

「補足説明すると、夢は長谷部みたいな奴に共鳴した結果、見る事があるみたいだ。共鳴といっても、似た様な経験をしている必要は無い。同情したとか、そんな感じで見える事もあるみたいだしな」

「つまり、私が見たのは、秋田の過去……？」

「そうだよ。正確には秋田さんの『依代』である子の過去だけど」

手が震える。秋田は——あんな暗闇の中で、ずっと過ごして来たのか。人間の子供には、あまりにも辛い環境だろう。早く気付かなかつたのが、つくづく悔やまれる。

ふと、思い浮かんだ事がある。それをそのまま、一期は二振りに尋ねた。

「あの、一つおうかがいしたい事が」

「何だ？」

「……歌仙殿は、何を後悔していらっしやるのですか？ 今の話を聞く限り、その時点では大団円の様な気がするのですが……」

ぴたり、と二振りの動きが止まる。再び動き始めると、獅子王はコップを持ちながら下を向き、石切丸は沈痛な面持ちで目を伏せた。聞いてはいけなかったか、と慌てるも、もう遅い。

「……やっぱり、そこも気になるよな」

「いえ、話さなくていい話ならしなくても——」

「いや、この際だから話してしまおう。……長谷部さんの、殊更に大きな傷を」

「そうだな。一期、長谷部と仲良くしたいなら、今からする話は長谷部が振るまで口にするなよ」

ごくぐり、と息をのんで頷く。この話は絶対に聞かなくてはならない。

——春光の長谷部と友達になりたい。それは一期の中で確かに存在する気持ちなのだから。

Witness／獅子王「お逃げ下さい」

「ねー、軽歩兵並の位の奴いるー?」

「それは処分してしまいましよう、特上の位の物を数個で充分かと」

「食糧、どのくらいいるかなあ」

「ちよ、詰めすぎ! 風呂敷から溢れるぞ!」

春光隊の本丸内では、賑やかに刀達が荷造りをしていた。こうして見ている分には分からないだろう。

——彼等が、亡命をしようとしている事など。

「うーん、この湯呑はどうするか……」

「獅子王さん、何を悩んでいるんだい?」

「石切丸! この湯呑なんだけど、手にしつくり馴染んで気に入ってたんだよ。でもこれ入れると重くなりそうだしなあ」

「軽くしていた方がいいんじゃないかな、何があるか分からないんだし」

「そうだよなあ……いや、でもなあ……」

そうして悩んでいる獅子王は、軽い遠征に行く様な気分だったのだ。こっそりと本丸を抜け出し、隣の区域まで救援を求める。

ただそれだけだと、思っていたのだ。

「——は? 鳴狐、何、言って……」

電話をする為に廊下に出ていた長谷部が突如大声を出した。室内にいた鳴狐が呼ばれたかと思つて顔を出す。

「長谷部殿、鳴狐がどうかしましたか?」

「……いや、お前じゃない。流浪の、鳴狐が——待つてくれ、皆にも聞かせる!」

はつとして、長谷部は端末の画面をタップする。すると、端末から音が響いてきた。

——戦場と聞き間違えるくらいの、轟音と悲鳴が。

『……殿、よろしいですか!? 春光隊の皆様、聞こえますか!? 我々は今、霜風隊の本丸付近にあります! ある本丸の厚殿に会いに行こうとした道すがら、霜風隊の本丸が襲撃されているのに行きあつて……』

！ 通報はしたのですが、そんな事は起こっていない、悪戯はやめろの一点張りで……！』

お供の狐の声が、焦燥感に満ちている。その場にいた刀達は愕然とした。最悪の展開が、彼等の脳を支配する。

そして、お供の狐は叫んだ。

『そちらの審神者殿を連れてお逃げ下さい！ 上層部は——敵は、皆様の口を命ごと封じるつもりです!!』

その一言が、命がけの「遠征」の始まりだった。

第十四話 「猫達は暗がりを進んだ」

14—1「Witness／薬研藤四郎『穏やかで悲しいあの子は』」

草が生えている列と土しかない地面の列が交互に並び、見渡す限り広がっている。地面の列の一つに、少年の背中が草の列を掘り起こしながらそこにいた。

余計な草を除け、土を慎重に掘っていく。ある程度掘り進めると、ぐつ、と株を握り、千切れない程の力を入れて引つ張る。すると、ずるずると土を纏いながら紫色の根が現れた。

土を払い、少年は根——サツマイモを籠に入れていく。今にも鼻歌を歌いだしそうな様子で、少年は収穫したサツマイモを見る。

「大漁、大漁」

少年——薬研はサツマイモの詰まった籠を背負い、畑から少し離れた倉庫に運ぼうと歩き出す。風は少し冷たく、働いた後の体にかいた汗を多少の肌寒さと共に乾燥させていく。そろそろ厚着を出さないと過ごすのが厳しくなつて来るだろう。

倉庫にサツマイモをしまいながら衣替えの実行タイミングを考えている薬研の耳に、後方から近付いている軽い足音が入って来た。振り向くと、今剣が息を切らしながら、からんからんと音を立て薬研の所へ走っていた。

「今剣。病み上がりなんだから、そんなに激しく動くともた倒れるぞ」「ぼくはそんなにやわじやありません、すこしはうごかないと！なにかてつだうことはありませんか?」

「そうだなあ、じゃあ一緒に芋を中に入れてくれるか?」

「わかりました!」

今剣はにつこりと笑い、籠の中のサツマイモを抱えてに大まかな大きさに分けながら倉庫内の箱にしまっていく。薬研も箱に詰めながら今剣に話し掛けた。

「走った後でも顔色悪くなさそうだし、次の戦には出られそうだな」

「そうじやなきやこまりますよ！　いつまでもふとんのうえでよこになつてうごけないのはほんとうにつらくて……かんだんさがはげしすぎますよ、かぜひくかたながぞくしゆつしたじゃないですか」

「あー、大将も倒れたからなあ。幸いすぐに良くなつたが、そろそろ冬の着物を出さないとな」

「あるじさま、あんまりじょうぶじゃありませんからね。はやくふゆぎをだして、あつたかくしてもらいましょう！」

「そうだな」

話している内に、籠の中が空になった。再び籠を背負つた薬研にあつ、と声を出して今剣が腰から伸びていた紐を引っ張る。紐の先には、小さな水筒が二つくつついていた。

「はせべさんにもつていけつていわれていたのでをわすれていました……やげん、のどかわいてませんか？」

「カラカラだな。いい頃合いに持つてきてくれたぜ」

笑つて水筒を受け取り、蓋を開けて思いつきり呷る。中身は温かいお茶であり、喉を潤し、少し冷えていた体を適度に温めてくれた。喉の渇きのまま飲んでみると、水筒の中身はあつという間に空になってしまう。もう一滴でも出ないか水筒を振っている薬研に、今剣が持つていたもう一つの水筒から口を離して言った。

「いちどやすんで、おおひろまにいきましよう！　そろそろひるげのじかんですし」

「もうそんな時間だったか」

いつの間にか太陽は高い位置まで昇つていて、かなりの時間を畑仕事に費やしていたことを知る。体に意識を向けてみると、腹の虫が騒ぎ始めている。起きたのが早かつた為朝食は握り飯二個だけで済ませていたのだ、この時間までもつたのが不思議なくらいである。

立ち上がつて、手洗い場へと歩き出す。ぴよんぴよんと跳ねる様に目の前を歩く今剣は、朗らかに昼食のメニューを告げた。

「きょうのひるげは、はせべさんのちきんかれーらしいですよ！　はせべさん、ちきんかれーすきですよねえ」

「作れる献立もまだ少ないからなあ。歌仙や燭台切に教えて貰つてい

るらしいが、幾分豪快過ぎる所があるしな、あいつ」

「……それ、やげんがいます?」

じとつとした目を向ける今剣に気付かない素振りです。薬研は笑い声を漏らした。

今剣が言っているのはばらばらにも程がある具材の大きさだったり、大味過ぎる調味料の放り込み方だったりする肉メインの料理や、山盛りが正義と言わんばかりに盛られる白飯だったりする。薬研が料理の指揮を執る日は当然ながら、歌仙が雅じやない風流じやないと文句を零す。ちまちまするよりはこつちの方がいいと喜ぶ刀もいるのだが。

手洗い場の蛇口をひねりながら、今剣がしみじみと呟く。

「それにしても、はせべさんがせいしきにここのたいいんになってからさんかげつですか。ときのながれははやいですねえ」

「ああ。すっかりここに馴染んだよな、長谷部も」

「いいことです! たのしいあそびあいてがふえて、ぼくはうれしいですよ! すこしあかるくなりましたよね、はせべさん」

「精神状態は確かに安定しているな。泣く事も減ったし、診察しているこつちも安心する。まあ、油断は出来ないが」

けいかかんさつってやつですか、と今剣に問われて薬研は頷いた。手を洗い終えて近くのタオルで手を拭きながら、薬研は思い返す。

長谷部とトシキ——長谷部の依代となった少年——を正式に春光隊に迎える事にしてから、三ヶ月。長谷部がじつとしていたのは最初の数日だけで、その後は積極的に本丸内で働く様になった。内番が割り振られた日も真面目にこなし、それ以外の日でも当番のものを補佐しに駆け回る。出陣や遠征から帰って来たもの達の為にタオルや風呂の準備をしたり、料理を覚えようと歌仙と新入りの燭台切に教えを乞うたりしていた。

最初は明らかに仕事量がキャパシティーオーバーであり、疲れが溜まって体調を崩す事も多かった。仕事中にばたきと倒れる事もあつたくらいだ。流石に気に病みやすい審神者の前で倒れられるのは目に余る。

どうしてそこまで働くのか。それを解明するべく薬研が診察を重ねた結果、何かをしないと受け入れて貰えないのでは、と不安を覚えている事が分かった。

その後は、見た目は幼いが中身は大人の短刀達の出番である。彼等は長谷部が働き過ぎているのを見ると空き部屋に引つ張り込み、ゲームをしたりかくれんぼや鬼ごっこで遊ぼうと誘った。長谷部は当初遠慮していたものの、きらきらした瞳で見上げられれば陥落し、次第に短刀の輪の中に混ざる様になった。よく短刀達に混ざっている鯨尾が、程よく遊んで疲れ昼寝を始めた長谷部を自室に運べばミツシヨンコンプリートだ。

歌仙をはじめとした刀達も、長谷部に軽い仕事を任せられる様にした。キャパシティーオーバーにならない程度に仕事を任せ、ある程度長谷部の不安を紛らわせて、やり過ぎだと判断したら短刀達と合図をして長谷部を休ませる。そんなルーティンが三か月の間で出来上がっていた。

長谷部の中にいる少年の心は、その間に少しずつ解けていたらしい。最近は短刀が飛んで来たら長谷部も多少の躊躇いだけで仕事を中断する様になり、短刀達と遊ぶ表情は最初と比べて明るくなってきていた。仕事をしないと不安になるのは変わっていないらしいが、遊ぶのも仕事の内だと考えたのか遊びにも時間を割く様になった。これは目覚ましい成果である。

手洗い場から離れ、正面玄関へと足を運ぶ。からんからんと音を立てる水筒を見て、薬研は今剣に話を振った。

「その水筒も長谷部が用意したんだろ？ どうだ、今の様子は」「だいじょうぶです、まだとめるだんかいはありませんでした。ひるげをすぎてもうごきまわっているなら、へやにひっぱりこませます」

「頼もしいぜ、今剣」

「とーぜんですー！」

こうして短刀達の間で長谷部の様子を観察するのも日課だ。短刀達の間で築かれたネットワークは、出陣していなければ即座に長谷部

を休ませる体制が整えられている。

こうして本丸全体でサポートしないと、長谷部は働き続けてしまうのだ。そして倒れて、審神者が己の器量不足だと落ち込む。そんな負のループだけは、何としても回避しなければならない。

審神者の事まで思考が及び、靴を脱ぎながら薬研はふと口にした。

「……そういや大将は、研究所だったか」

「そうですよ。きょうはかせんさんもどうこうしていました。なんできゆうにいっしょにいくといたんでしよう？」

「まあ、今まで一人で行かせていたのがおかしかったんだよ。何があるか分からないだし、一振りは同行させねえと」

「かせんさんも、そうおもったのかもしれないですね」

うんうん、と二振りは頷き合う。

審神者は時折研究所に赴き「調整」を受けていた。無理矢理審神者としての性能を高められた彼女は、研究所での「調整」が必須なのだという。そこまでしなければならぬ程、こちら側には人手が足りならしい。だからといって彼女やトシキの様な子供まで駆り出さなくても、と薬研は密かに時の政府に憤っていた。

靴を揃えて隅に並べてから、大広間まで向かう。歩いている床は少し冷たく、嫌でも近付く冬の気配を感じさせた。今剣が踵を浮かせているのを見て、裸足で歩き回るのはそろそろ辛いだろうな、と感じる。途中でそれぞれの自室を通りがかると、場所取りの為の名前が書かれている札を取りに行き懐に入れた。

大広間では、もう刀達が集まって食事の支度を始めていた。薬研は今剣と共に空いている席を探し、入口近くに二つ空いている所を見つけて並んで札を置く。置かれていたトレーを持って台所へと向かうとすると、前から気だるげな声をかけられた。

「薬研、今剣。これから台所ですか？」

「宗三もか？」

「ええ。一緒にしても？」

「もちろん！ いっしょにいきましょう、そうござん！」

今剣がぴよんぴよんと机の端を回り、宗三の下へ行き手を取って先

導していく。薬研も二振りの後ろについて台所へ向かう。

「今日は長谷部が監修したちきんかれーらしいですね。長谷部が厨当番の時はいつもかれーの様な気がします」

「まあ、それしか作る許可が出ていないらしいからなあ。他の料理はまだまだ出せる段階じゃないんだと」

「かれーはもとをとるかすれば、だいたいのあじはきまりますからね。あじのちようせいには、これからにきたいということなんでしょう」

三振りの横を、秋田と五虎退がトレーにカレーの皿を乗せて運びながら談笑しつつ通り過ぎて行く。皿の上にはごろごろと大ききの揃っていない具が掛かっており、鶏肉もまた乱雑な切り方で乗っていた。

宗三は少し呆れた様に息を吐き、ぼやいた。

「長谷部も飽きないんでしょうかね。それから主も」

「あるじさまはちきんかれーがだいすきですからね！ さいしよにだされたとき、ないてしまうほどよろこんでましたよね」

「おいしい、おいしいって泣いてたよなあ。大将は豚肉より鶏肉の方が好きだったって事なんだろう」

そう、初めて長谷部が台所の仕切りを任せられ、チキンカレーを夕飯に出した時。審神者はいつもとは様子を一変させて皿にがつついていた。何も話さず勢いよく口にカレーを運び、ある程度皿が空くと、面の下に涙を流して言ったのだ。

——おいしい。……本当に、おいしいです。

彼女の口調はもう届かない光景を思い浮かべる様に、懐かしさと寂しさを滲ませていた。

「……泣くほどだったんですかね？ 歌仙が自信を失いかけていましたか」

「そういえばそのあと、かせんさんによるとりにくまつりがおきましたよね。からあげ、につけ、しるもの、さんしよくすべてがとりにく……あれはもうかんべんしてほしいです」

「あー……大将、口元が引きつってたよな」

「少し不安になっただけでしよう、もうそんな事はしませんよ。主も

論したらしいですしね」

そう話している内に、列を成している台所に到着した。列の先で、エプロンを着けた長谷部が料理道具の付喪神達に指示を出して自らもカレーを配膳している。薬研達も列に並び、順番を待った。

少し待つと、配膳の順番が回って来る。薬研は長谷部の列に当たった。慣れた手つきで白飯を盛り、ルーをその上に掛け、端に福神漬を乗せてから長谷部は皿をトレーに乗せる。

「ありがとうございます。いい匂いだ、カレーは安定しているな」

「カレー以外も作れる様になればいいんだが。……よし、次！」

短い会話の後、薬研はトレーを持って台所の外に出た。列を成している方とは反対側で、今剣と宗三が待っていた。

「待たせたな、行くか」

「いいにおいですね！ はやくたべたいです！」

「……僕の皿、具が大きいのばかり……切り方も何とかする様に指導して貰わねばなりませんね」

「おまけてて奴じゃないのか？ 得したと思えばいいじゃねえか」

「すぷーんで掬えない程の大きさのおまけてどうなんでしょう……食べにくい事この上無い……」

「ぼくはぎやくにちいさいのばかりですね。いっぱいぐがのついているのはうれしいですけど」

そう話しながら大広間へ戻れば、既に座っているものは食べ始める合図を待っていた。じつと皿を見つめているものもいれば、近い席のものと賑やかに語らいながら待っているものもある。薬研達も座つて、話しながら合図を待つ事にした。

「はせべさん、しじをだすのもなれてきましたよね。さいしよはあわあわしていたのに」

「何というか、どう指示したらいいか分からないみたいだったよな。礼を欠いてしまう事を恐れていたっていうか」

「指示を出さなければいつまで経っても進まなくて、逆に迷惑がかかるのに。最近は萎縮するよりも、どんと構えていればいいと分かかって来たんですかね」

「まだ縮こまっている様子なのは否めないけどな。大将みたいに、予想外の事が起こると固まるみたいだし」

「あるじさまも、いまだにちよつとしたしやうげきでかたまっちゃいますからねえ」

「——何々、主の話？ 俺もまーせて」

前方から声を掛けられて視線を向けると、加州が宗三の隣にトレーを置いて座るところだった。よいしょ、と席に着くと頬杖をして加州はこちらを見つめる。宗三はちらりと加州の方を見て息を吐いた。

「違いますよ、長谷部の話です。主の様に想定外の事で固まる所がある、という話をしていたんです」

「そうだったんだ。そーいや長谷部、正式に配属されて三ヶ月経ったんだっけ」

「そうです、そんなにたつたとはおもえませんよね。たしやうあかなくなつたとはいえ、まだいしゆくしていますから」

そっか、と加州は目を伏せる。彼もまた、長谷部の話を聞き気にかけていた一振りだった。

「まだ本調子には程遠いか。……そーいや長谷部、今日は誰の服着てるの？ よく見てなかったんだけど」

「鯨尾兄のだけ。恥ずかしそうにしてたが、大将がニコニコしてるのを見て何も言えなくなつた」

「あー、似合いますよ、って主が言ってる光景が目には浮かぶよ……」

長谷部の内番着替えも継続していた。相変わらず鯨尾は朝一番で長谷部のいる場所に押し掛け、強引に服を取り替えさせる。今日の同行刀は骨喰だった。着替えを終えた所で行きあつた薬研は、鯨尾より無表情で服を引っ張る骨喰の方が怖かった、と震えていた長谷部の背中をそつと撫でた。

悲鳴を聞きつけて現れた審神者は、何事も無かつたのに安堵しつつ、口元を緩めて長谷部の格好を褒めていた。その様子に少し変でもあるじしやうしゆぎあへし切長谷部である彼が口を閉ざしたのは先程述べた通りだ。

湯気の登るカレーの皿を一瞬見遣つてから、加州は疑問を口にする。

「……主、長谷部の事気にしてるよね、やっぱり」

「まあ、特殊な経緯を辿って来た刀ですからね。元は人の子であるなら、潰れないか気にするのは当然ではないですか?」

「うん、そうなんだけど……時々、主がこう、眩しい物を見る様な物を長谷部に向けている気がするんだ。何だろうね、上手く説明出来ないけど」

「眩しい物? 前程ではないとはいえ、まだ暗い印象は拭えないが」

「そうだよ。……でもさ、長谷部が誰かの手伝いをしてたり、短刀達と遊んでいたりしている時、その近くに主がいたら、そういう様子なんだ。同情じゃない、でも刀に向ける物でもない。なんなんだろうね、あの表情は」

加州はそう言つて考え込む様に俯く。

確かにそう言われると、審神者が長谷部に向ける表情は他の刀のそれとは少し異なっている様に思えた。思い起こすのは、長谷部が庭で短刀と遊んでいる時。薬研は一步引いて見ていたが、審神者が訪れた際には少し話をしていた。そして風が吹き面が浮いた一瞬。薬研は、確かに見た。

——審神者が口元を綻ばせ、目を細めて。何かを堪えている様な、でも苦しそうではない、そんな表情を。

「……もしかしてあるじさまは、はせべさんとおにいさまを——」

今剣が小さくそう言いかけた、その時。

玄関方面から大きな足音と共に、激情を抑えられていない大声が轟いた。

「——薬研、長谷部! 今は手すきか!」

足音と声は、こちらに近付いて来ている。外出していたはずの声の主に、そのただならぬ響きに、薬研は反射的に立ち上がった。

「長谷部は厨だ! 歌仙、どうした!」

大広間を飛び出し、玄関に向かう。玄関まで走った薬研が見たのは、マントに包まれた審神者を横抱きになっている歌仙だった。歌仙は顔を憤怒で歪め、審神者を抱える腕を震わせていた。

「長谷部と一緒に主を部屋に連れて行ってくれ。主が、出先で倒れた」

「……長谷部が一緒に呼ばれたのは、何でだ」

「事情は後で必ず話す。今から皆に説明するから、長谷部を引き離していてくれ。……長谷部には、絶対に聞かせてはならない話だ」

触れれば爆ぜそうな様子の歌仙に一つ頷いてから、薬研は意識の無い審神者を受け取る。大広間方面から足音が近付いて来たのは、それと同時にだった。

「歌仙、薬研！ 一体何が——」

「大将が出先で倒れたらしい、長谷部は至急寢床の準備を頼む！」

「えっ!? わ、分かった！」

身を翻し、長谷部は審神者の部屋へと走り出す。薬研も審神者を休ませる為に、彼女を抱えて足を動かそうとする。

その後ろから歌仙が、普通の人間なら戦意を喪失するに違いない凄みのある声音で問いを投げかけた。

「薬研、念の為聞くよ。君の主は、政府か、その少女か」

凄みの中に不安も混ざる強張った調子で問われた薬研はそれで大体の事を察し、即座に答えた。

「——俺の今の大将は、このお方以外いねえよ」

「……良かった。分かり切っている事を聞いて悪かった、主を頼んだよ」

審神者を刺激し過ぎない様に早足で彼女の部屋へ歩き出す。大広間を通りすがった時に中からどよめきが上がったが、気にしている余裕は無かった。

審神者の部屋の障子を開けると、既に布団が敷かれていた。こちらをぱつと向いた長谷部がおろおろとしながら立ち上がる。

「薬研、主は……」

「……眠っているみたいだが、容体が変化しないとも限らねえ。しばらくここで様子を見るぞ」

「分かった。……主……」

薬研から審神者を受け取り、長谷部は沈痛な面持ちで審神者を布団に寝かせる。

彼女の寝息自体は穏やかだが、研究所で倒れた事から、何が起ころ

かは分からない。

そして、歌仙の問い掛け。それで、研究所でろくな事が起きなかったのだろうと分かる。長谷部に話せないという事は、また過酷な実験を行っていたのだろうか。だが、審神者にそれが必要なのか？

薬研の思考は、遠くから届いた和泉守のふざけんな、という声に遮られた。後から次々と怒りに満ちた大声が続く。目の前の長谷部がその怒号に肩を震わせ、膝の上で手を握り締め俯く。

「大丈夫だ、長谷部。和泉守達はあんたに怒ってる訳じゃないからな」
「……………」

苦しそうに目を閉ざし長谷部は呻る。その背中をぼんぼんと叩きながら、薬研は考える。

あちらの会話の内容は分からないが、長谷部を引き離れたのは正解だったらしい。和泉守の後に憤怒の叫びが次々と続いたのだ。恐らくあの場にいる滅多に感情を露わにしないものを含めた全員が、審神者の身に起こった事に激怒している。自分も冷静になる事に必死になつて、長谷部のメンタルまで気を回す余裕がなくなつていたかもしれない。怒るより悲しむ性質であるこの長谷部だ、きつと審神者の痛みをそのまま想像してしまうに違いない。それで彼が動けなくなるのは、なんとしても避けたい所だ。

この長谷部には、悲しい顔をして欲しくない。きつとその思いには、多分に情が混じつてしまっているのだろうが——自分は、彼等の過去を見てしまった。ならば、彼等に心を砕かない方が難しい話なのだ。

遠くの怒号が小さくなつてから、長谷部は審神者に掛けられた布団を調整し、再び審神者の顔を見つめる。薬研も同じく彼女に目を向ける。

* 審神者は痛々しい程静かに、身動き一つせず眠っていた。

室内に月明かりが差し込み、時計の短針が十一を指した頃。静かに眠る審神者の横、畳の上で長谷部も寝息を立て始めたのを見届けてから、薬研は審神者の部屋を抜け出した。

目指すは歌仙の私室、目的は研究所での出来事を聞き出す為。床を軋ませながら寝静まったもの達を起こさぬ様に進む。通る部屋の中から時折、小さな灯りが漏れ出ていた。その部屋を含めて、どこも一様に静かだ。

歌仙の私室が見えて来て、薬研は音を立てずに深呼吸をしながら障子の前に立つ。中にいるものに入室の許可を得ようとした途端、激情を押し殺した声が薬研に投げかけられた。

「……薬研か。長谷部は」

「大将の横で眠ってる。かなり気を張っていたからな、相当疲れているだろう。しばらくは起きねえよ」

「そうか。……入ってくれ」

障子を開け、室内に体を滑らせる。後ろ手に障子を閉め、文机の前に座りこちらを見ている部屋の主を見返した。

寝間着に身を包んでいる歌仙は、表情を削ぎ落としていた。それがかえって彼の怒りを増幅させている様に思える。部屋の隅にある行燈は穏やかに歌仙を照らしているのに、彼の様子は穏やかさに見合わないのだ。

歌仙の目の前には、一枚の座布団。座ってくれ、と告げられて薬研は座布団に座った。

「遠回しなやり取りは無しだ。……歌仙、研究所で何があった？」

ぎり、と歯を噛み締め、歌仙は文机の上に置いていた己の右手に爪を食い込ませた。そうして、鋭い眼を更に研ぎ澄ませて吐き捨てた。

「こちらも結論から言わせてもらおう。——主が、研究所の連中に手籠めにされていた」

言葉の意味を理解するのにかかったのは一瞬だけだった。理解が及んで、腹の底から様々な感情が込み上げてくる。激憤、憎悪、悲哀、憐憫——それらに吞まれ過ぎない様に息を吐き、薬研は殊更低い声で呟いた。

「……なるほど。そいつを丸ごと長谷部に言えないわな」

「当然だ。長谷部にどんな悪影響があるかわからない。主が暴力を受けていた、とだけ伝えておこうと思っている。……どうだろうか」

「それでいいと思う。大将が酷い目にあっていた、それだけ分かれれば十分だ。……詳細を聞かせて貰えるか」

歌仙は静かに頷き、文机の上から膝に右手を移動させる。行燈の灯りが揺らめく中、歌仙は語り始めた。

「……研究所に着いたら、玄関で主と引き離されたんだ。ここから先は審神者の秘技が詰まっているからと言つてね。しばらくは監視がついていたが、誰もいなくなった頃合いを見て僕は主が消えた方向へ向かったんだ。途中で検知器に引っかかってやり過ぎそうとして、……僕は、その部屋を見つけた」

冷静を装っているのだろうが、顔は怒りに歪み、膝の上の拳は固く握りしめられている。声を震わせながら、歌仙は続けた。

「部屋の中から下卑た声がして、その中に主の声が混じっている気がして、その部屋の扉を薄く開けた。中では……処置台の上に横たえられた裸の主が、男達に体を触らせていて……股間を、胸を触られても、主はなすがままにされていた。研究所の男が下賤な言葉を主に投げかけたのと同時に、……水音が、聞こえてきて……それが限界だった。衝動のまま僕は部屋に押し入って、男共を斬り捨てた」

行燈の灯りが一際大きく揺れて、部屋を明滅させる。薬研はただ黙って話を聞いていた。——大きくなっている己の中の激情が、みつともなく表に出ない様に。

「僕はすぐに外套を主に巻いて、もう大丈夫だと言いながら抱きしめた。けれど、主は悲しそうに僕の目を拭つて……僕達を満足させられない、泣かせてしまう自分は審神者失格だと、そう言つたんだ。……僕達は刀で、戦場に出してもらおう事が至福だ。あんな己の体を貶めさせる事を、主に求めてなんかいない!」

拳を膝に叩き付け、歌仙は吼えた。薬研も歯を食いしばって叫びそうになるのを堪える。

審神者はこの本丸が動き始めた頃から、度々刀剣男士に己の体を捧げようとしていた。刀剣男士は全員がそれに狼狽え愕然とし、それを固辞し続けていた。彼女がそうしようとする理由は、育ってきた環境由来だと判断して、刀剣男士達は彼女への接し方に気を付けていたが

——外で体を穢され、それを当然だと刷り込まされていたのなら、彼女のその価値観を修正する余地もない。

審神者が最初の刀である歌仙を顕現させてから、どのくらい経つただろう。それから長い間、彼女の身に起きていた事に気づけなかった。自分達の見通しが甘かったのだと、思い知らされた。

後悔に苛まれながらも、薬研は顔を上げて問いかける。

「……そんな研究所に、大将を向かわせる必要があるのか」

「僕もそう思って主に聞いたよ。そうしたら、主は無理矢理審神者としての力を高められたせいで、定期的に体の調整を行う必要があると答えた。……あんな事を行っているのを見るに、それも疑わしいけれどね」

少女の体を貶めている人間が、まともな調整をしているとは思えない。他の研究所で調整を行う事も考えるが、そんな所が果たしてあるのか。今まで関わった研究所は二つだが、その二つ共ろくな場所ではなかったのだ。研究所を移るのも尻込みしてしまう。

「……昼間に皆へ事情を話した時に、全員が主を研究所へ向かわせない事に賛成した。特に短刀達の怒り様が尋常じゃなくてね、そんな場所に向かわせるのをよしとする奴がいるなら、短刀全員で相手になると殺気を漲らせていた。調整を受けない事で体に負担がかかるなら、必要最低限の任務だけをこなせばいい、と蜂須賀が提案してね。出陣回数は大きく減るけれど、戦闘欲は手合せで何とか治めようと大和守が。……念の為に薬研、君の意見は」

「当然、大将が行くといつても向かわせねえぞ。……向かわせない事に反対する奴はいなかったのか、安心した。——闇討ちするのにも準備がいるんでな」

僅かに殺気を表に出した薬研に、歌仙は安堵した様にほっと息を吐いた。

「よし、これで賛成が取れていないのは長谷部だけだ。言うまでもないだろうけどね」

「そうだな。後は大将の説得だが……」

「全員が行くべきではない、と言って聞くかどうか……」

「それでも納得してもらおうしかないな。俺達は大将がああ場所に行くのは悲しい、と言ったりな」

「主への対応も見直す必要があるな……やる事は山積みだ」

「どれも必要な事だ。今日決めとく事は決めとこう。大将の価値観は少しずつ改善していけばいいさ」

そうだね、と力強く頷き、歌仙は微笑む。薬研も穏やかな表情で歌仙を見返す。

行燈の光は、ゆらゆらと静かに揺らめいていた。

14—2「Witness／石切丸『ござよりも』
（前）」

石切丸は、春光隊初の大太刀として顕現した。顕現時に目の前にいた面を着けている小さな少女が新たな主と聞いて、大層驚いたのを覚えてる。

しかし石切丸は、彼女からかけられた言葉に更に驚いた。

「この本丸では、必要最低限の出陣しかしません。私の力不足が原因です。もしここがお気に召さなければ刀解も行います。……刀の貴方に出陣をさせないというのは心苦しいのですが、ここの一員になって頂けると、とても嬉しいですよ」

石切丸がそれに頷くと、あからさまに少女——審神者は安心した様子を見せた。隣にいた金髪の少女染みた刀剣男士によかったね、と微笑まれて審神者も口角を上げる。少女染みた刀剣男士は審神者には任せて、と言って鍛刀場から送り出した。

その場に残った少女染みた刀剣男士は、明るい表情のまま石切丸に名乗り上げる。

「石切丸さん、初めまして！ ボクは乱藤四郎、粟田口派の短刀だよ。あるじさんはちよつと具合が悪いから、ボクが代わりに案内するね」
「乱さん、だね。よろしく。主の具合が悪いって、大丈夫なのかい？」
「うん、大丈夫。今日は鯰尾兄達が様子を見てくれているから」

ついてきて、と告げられて石切丸は乱の後を追う。

案内される道すがら、ある部屋が目に入った。そこでは小さい背丈の刀剣男士と、それに混ざって煤色の頭をした刀剣男士が輪を作っている。彼等の手には一様に、数枚の札が握られていた。

「よーし……これだっ！ ってあーっ！」

「え、えへへ、それがババだったんです」

「五虎退、演技派ですね！ 次は長谷部さんですね、愛染君から札を引こつたやろ」

「混ぜて混ぜて……よーし引け！」

「む、むう……一枚だけカードが飛び出てる……」

楽しそうに遊んでいる刀達。煤色の刀も、体は大きくはみ出しているのに背丈の低い刀達に馴染んでいた。ぼうつとそれを見つめると、五虎退と呼ばれていた刀がこちらを向いた。

「あ、あの、もしかして貴方は……」

「先ほど顕現した石切丸という。乱さんに案内をしてもらっていた所を通りすがったから、少し見学させて頂いたよ」

「おっ、新入りか！」

「初めまして！」

石切丸の周りに、小さな刀達が群がる。すっげえ大きい、いよいよ大太刀かな——途端に周りを囲まれて明るく賑やかな声が満ちていく。石切丸が一振り一振りに対応していると、少し先を歩いていた乱が振り返ってこちらに寄って来る。乱はどうしたの、と首を傾げた後、石切丸が対応に追われているのを見てぽんと両手を叩き、部屋の中にいる刀剣男士達に呼びかけた。

「皆、話す時は一振りずつだよ！ 石切丸さん困ってるでしょ？」

「おっと、悪い悪い」

「すみません、興奮し過ぎました」

「大ききからして、刀種は大太刀ですよ？ 大太刀の方が来るのは初めてなので、つい……ごめんなさい」

それぞれ謝罪の言葉を口にしながら、改めて一振りずつ自己紹介をしていく。返事をしながら石切丸は知らなかった刀の名前を脳裏に刻む。

「私は石切丸、秋田さんの言う通り大太刀だ。本当に来たばかりだから、色々教えて貰えると嬉しいよ」

「勿論、何でもお聞き下さいね！」

「美味しいおやつのお店的事なら僕に任せて下さい！」

「一緒に祭りに参加出来るのを楽しみにしてるぜ！」

わいわいと話す短刀達に笑顔で返しながら、石切丸は違和感を覚えて周囲を見渡した。何か欠けている様な気がするのだが、その何かが分からない。猛烈な違和感があるはずなのに、意識しなければそれ

が気にならなくなってしまう。

画竜点睛と言うには小さ過ぎるそれに、石切丸が軽く顔をしかめていると――

「……大太刀か。主もお喜びだろうな」

「うわあっ!?!」

突如現れた刀に声が裏返る。目の前にいるのはよく見なくても先程輪の中にいた煤色頭の刀であり、石切丸もその姿を見ていたはずだ。

それなのに、今の今までその存在を忘れかけていた。決して目立たない容姿ではない。青いジャージを纏ってぼうつとこちらを見る表情は幼さが残る端正さだ。それに、短刀達の中で彼だけ身長が飛び抜けている。存在を忘れるのは、どう考えてもありえない。

混乱する石切丸をよそに、乱が煤色の刀の方を向いた。

「あれ、長谷部さん今日は青江さんの服着てるんだ?」

「ああ、ジャージなだけあって動きやすい。……やたら青江がニコニコしていたんだが、一体何だったんだろう……」

「長谷部さんにお着替えさせるの、皆楽しみにしてるからねー。本当はボク達も参加したいくらいなんだよ? 身内が増えた感じが嬉しいんだって皆言ってるし!」

「……喜ばいいのか、頭を抱えればいいのか分からない……!」

俯いて震える煤色の刀――長谷部に向かい朗らかな笑い声をあげた乱は、固まっている石切丸に気付くとそうだ、と背筋を伸ばし表情を引き締める。

「石切丸さんに説明しなきゃね。……うちの長谷部さんはね、少し個性的なんだ」

「個性的?」

「うん。気付いていると思うけど、長谷部さんは気配が少し薄い。それから、あるじさんに似て自分に自信がなくて、それが原因でちよつと働き過ぎるところがある。ちよつと精神的に脆くて、戦闘嫌いなのも特徴かな。演練に出たら驚くと思うよ、他の所の長谷部さんとは正反対だから」

ちらりと長谷部を見ると、確かに彼は少しびくびくしている様だつた。目には怯えの色が浮かび、手は服の裾を握っている。暗い雰囲気
の長谷部だが、敵意や邪気といった物は感じられなかった。その為だ
ろう、先程は驚いたが悪い印象は抱いていない。

「……感じている違和感も、長谷部さんと過ごしているうちに気にな
らなくなると思う。何しろ、優しいひとだからね。さつきはびつくり
したと思うけど、これから長谷部さんと仲良くしてもらえるとボク達
は嬉しいな」

真つ直ぐこちらを見据える乱は、そう締め括り口を固く結んだ。他
の短刀達も、真剣な顔で石切丸を見つめていた。

ぐるりと短刀達を見回してから、再び長谷部のいる方向を見る。こ
ちらを見ていたららしい長谷部と目が合ったが、彼は気まずそうに俯い
てしまう。

その様子に、やはりどこにも邪気や悪意は感じられない。目を逸ら
したのも、初対面の刀に対する緊張と不安からだろう。むしろそれを
後悔している様で、何とか石切丸と目線を合わせようと試みている。

彼は、邪心とは程遠い心を持つもの。そう確信したならば、石切丸
の答えは一つだ。

「長谷部さん」

石切丸が長谷部の傍に歩んで穏やかに声をかけると、びく、と体を
強張らせて長谷部が顔を上げる。その顔に浮かんでいるのは拒絶さ
れるかもしれない恐怖と、こちらの気を悪くしていないかどうかの不
安。出来る限り負の感情を捻じ伏せようとしている様だが、石切丸は
この世に長くあつたせいとその胸の内まで想像出来た。

別を取って食べる訳じゃないんだけどな、と内心で苦笑いしながら、
石切丸は長谷部に柔らかく微笑んだ。

「君とは色々と話をしたと思う。ちよつとした出来事や、君の興味
のある事、何でもいい。何ならありがたい話も出来たらいいね。私は
顕現したばかりだから、教えを乞う物も多くなると思うけれど。君と
ゆつくりお茶でも飲みながら、何気ない話をしたいんだ。……私もこ
れから、君と仲良くなれたら嬉しい。でもとりあえずは、初めまして

から始めよう」

石切丸が右手を差し出せば、長谷部はきよとんと目を丸くした。それからおずおずと石切丸の手を握る。弱い力で石切丸の手を握り、不安と期待の目で見返す様に、石切丸は何故か幼子の姿を幻視した。少し力を込めてから手を離すと、長谷部もゆっくりと手を下ろす。

途端、背後から息を吐く音で溢れた。後ろを向くと、短刀達が一樣に安堵の表情を浮かべている。乱は胸をなで下ろしながら頬を緩めていた。

「よかったー、そう言ってもらえて。長谷部さんの後に新しく来たひとは石切丸さんで三振り目なんだ。ボク達もなるべく長谷部さんがいる本丸に馴染んでもらえる様にしてるんだけど、まだ完全にやり方が決まっている訳じゃないから、少し不安だったんだ」

「三振り目？ その前に来た二振りっていうのは……」

「獅子王さんと燭台切光忠さんだよ。石切丸さんと同じ様に凄くびつくりしてたけど、割とすぐに慣れたんだ。この本丸は大きくないから、石切丸さんはその二振りのどっちかと同室になるよ。長谷部さんについて、色々と聞いておくといんじゃないかな」

石切丸は脳内に二振りの名前をメモすると、乱に礼を述べる。

「そうだね、そうするよ。乱さん、ありがとう」

「うん！ ……あつ、案内の途中だった！ 石切丸さん、行こう！

皆、また後で！」

乱に廊下に先導されて、石切丸は短刀達のいた部屋を離れていく。手を引かれながら短刀達に手を振ると、彼等は笑って送り出した。

その中で一際大きかった長谷部は、はにかみながら手を小さく振っていた。

「……る、石切丸！」

隣からかけられた声によって湯船に揺られる現実へと帰還した石切丸は、ぼんやりとした心地で声の方へ向く。

「大丈夫か？ のぼせたんじゃないだろうな。風呂が気持ちいいのは

分かるけど、長湯は厳禁だからな」

隣にいた刀——獅子王は、心配そうな顔で石切丸の様子を確かめていた。そういえば風呂に入っていたのだったか、と石切丸はぼやけた思考から現状を引っ張り出した。

*

演練での練度上げが頭打ちになり、更なる練度上げの為に石切丸は初めて過去へと出陣した。まだ実践の少ない獅子王と共に行く先は、桶狭間。くれぐれも限度を見誤らないように、という歌仙の言葉に隊長を任された石切丸は、気を引き締めて戦場に向かった。

優秀な戦果を最初から挙げられるとは思っていなかった。思っていないくても、攻撃が己に集中した結果刀装を全て剥がされ、中傷にまで追い込まれたのは酷く堪えた。あと一歩で敵の大将に辿り着ける、といった所で撤退を余儀なくされたのも口惜しかった。

一緒に出陣していた宗三から胸倉を掴まれ「見誤るな、という言葉をお忘れる程豪碌してはいませんかよね？」と凄まじい言葉、無理をして進軍していただろう。隊員を見渡せば、全員が撤退すべきだと目で語っており、戦意が滾り過ぎていて自分は冷静になれていなかったのだと察した。

隊長である自分が手酷くやられているのだ。審神者の加護で自分が折れる事はないにしろ、万全の態勢で向かわなければ大将首は討ち取れない。

自分は武器だ、だからこそ指示を出すだけの案山子にだけはなりたくなかった。追い詰められた際に強大な力を出せる事もあると聞いているが、ここで賭けをするつもりもない。石切丸は激情を押し殺し、撤退を告げた。

帰ってきた本丸の玄関には、中傷刀が出たと審神者から知った長谷部が立っていた。真っ青になっていた彼から差し出された少しごわごわだが綺麗なタオルからは、柔軟剤のほのかな香りがした。

長谷部に手伝い札と共に手入れ部屋に叩き込まれた石切丸は、刀身と体があつという間に修復されると同時に飛び込んで来た審神者に「折れなくてよかった」と涙声で言われ、自分の行動が審神者の心を左

右するのだという事をまざまざと実感した。

少し遅れて大浴場に入った石切丸は、既に体を清めたり湯船に浸かっている隊員達に劳いの言葉を告げられた。石切丸も止めてくれてありがとう、と礼を述べ、特に鋭い言葉で石切丸を現実に取り戻した宗三には丁寧な言葉を下げた。その宗三には過剰な礼は不要と言われつつ、

「あの時の貴方、獣染みていましたよ。あれで止まらなければ重傷にさせて強制的に帰還してしまいました。貴方を昏倒させてあれ以上主を悲しませるのは流石に心が痛みますから」

……と、浴場の暑さだけではない汗を流れさせるコメントを返されたのだが。

体を清めて湯船にゆっくりと浸かると、戦意の名残や無念が汗と共に流れていく。ふう、と息を吐き、本物の戦場の空気や質感、手ごたえをくるくると脳内で思い巡らせた。

——最後に考えたのは、これから長谷部と出かけるという審神者の事だ。

審神者は石切丸が顕現する少し前から出陣の頻度を下げている。刀剣を過去に送り出すのは、体の弱い審神者にとってかなりの重労働であるらしい。その為、審神者に負荷をかけない、そして刀達の不満を湧かせない程度に出陣をさせている。

今の所審神者の体調は悪化していないし、刀達から不満も出ていない。平和、といっても差し支えないだろう。

しかし、問題点が一つ。——審神者のメンタルが不安定になりだしたのだ。それは石切丸も知っている。

石切丸が顕現した夜に、審神者の部屋を通りがかった時——審神者の泣き声が、中から響いた。何かあったのか、と焦燥感に任せて障子を開ける。そこでは、審神者が布団の上でぐすぐすと鼻をすすり、頬に涙を伝わせていた。どうしたのかと聞くと、

「……怖いんです。皆が、私に失望して、離れていくのが」

そうしやくりあげながら答えた。離れる訳がない、自分達は主であ

る審神者の道具なのだから。そう言っても審神者は泣き続ける。

「私……私は、皆様に顔向け出来る人間じゃない……それなのに、皆様が傍にいてくれる事を期待して……私は、私が醜くて、汚くて……消えてしまいたいののに、消えたくない……怖い……怖くて、嫌で、見たくなくて、辛いんです……」

審神者は布団に顔を埋め、声を大きく上げて泣き出す。顕現したばかりの石切丸がなすすべなくおろおろとしていると、ばたばたと足音が近付いて来る。息を切らして現れたのは、薬研だった。

「大将！」

薬研は泣き崩れている審神者の傍、石切丸の隣に膝をついて顔を覗く。石切丸は冷静な薬研に驚きつつも、審神者に起きた異常を伝えた。

「や、薬研さん、主が、ずっと泣いてて……」

「取りあえず大将を落ち着かせるのが先だな。石切丸、説明は後でする。今は静かに傍にいてやってくれ」

真剣な面持ちで石切丸にそう告げると、薬研は審神者の背中をぽんぽんと叩いてから、優しく語り掛ける。

「大将。どうして泣いているか、教えてもらっていいか」

薬研は嗚咽しか漏らさない審神者の目をタオルで柔らかく拭いた。石切丸はそれを黙って見ている事しか出来ない。しばらくすると顔をゆっくりと上げ、体を抱きかかえながら審神者は話し出す。

「……私は、汚くて……優しくされるような人間じゃないんです」

「どうしてそう思ったか、詳しく話してもらえるか」

「……皆様に優しく対応される度、私は……よく分からなくなる。どうして優しくするのか、どうして丁寧な扱いをされるのか、どうして――」

言葉を詰まらせている審神者に首をかしげたのも束の間。続いた言葉に、石切丸は顔を強張らせた。

「――どうして、夜伽をしようとしなのか」

とつさに問い詰めそうになったのを察したのだろう、薬研は石切丸を鋭い目で制した。後で話す、という言葉思い出した石切丸は慌て

て口を引き結ぶ。

審神者は体を抱きかかえる手に力を込め、嘔吐するように激しい勢いでまくし立てた。

「分からない。分からないんです。皆様がどうして性行為をしなくて済むのか、目に優しい光しか湛えられていないのか、触れる時に一言前置きをするのか、私は私であるだけでいいと言いきれ以上をしようとしな理由も。私は……私は、間違っているのですか？ こうするのが当たり前だと何度も言われました。でもその一方で、皆様はそうするのは特別な相手と特別な時だけだと言う。私にとって、皆様は特別なのに、それは違うと返される。……もう、滅茶苦茶なんです。私がかしてきた事は異常な事だと皆様は繰り返し言う。じゃあ、それを当たり前だと受け入れてきた私は？ 異常でしかない事をしてきた私は、全部おかしい事になる。間違っている事をしてきた私が……私は、醜く汚く思えてならないのです」

震える声で、懺悔をする様に話し終えた審神者は、再び声を上げて泣き始めた。薬研は審神者に穏やかな笑みを向けながら、彼女の言葉を反復する。

「大将は性行為なしに優しくされる理由が分からなくて、性行為をししてきたかつての自分が汚く思えるんだな」

「……はい」

「何度でも言うが、大将は何も悪くない。どんなに間違った事をしてきたとしても、それを強いたのは研究員達だろう。自分をそこまで責めなくていい」

黙り込む審神者に、薬研は穏やかに目を細めて続ける。

「だが、そう思うのも当然の事だ。混乱も自己嫌悪も、大将が受けてきた仕打ちを考えればもっと酷くてもおかしくない。それを抑え込んじまったら、悲しみも苦しみも薄れていかないぜ。だから、泣ける時に泣き切つちまえ。そうして辛いと言ってくれた方が、俺達も安心できる。声が漏れるのが心配なら、肩を貸すから」

「……私、私は——」

薬研が腕を広げたのが決定打だったのだろう。審神者は薬研の肩

に顔を埋めて、痛みを叫ぶように声を上げた。

石切丸は、ただ泣き叫ぶ審神者と何かを堪えている様に歯噛みする薬研を、静かに見比べていた。

*

泣き疲れて眠った審神者を薬研が近侍であった乱と長谷部に託してから、石切丸を連れて医務室へと向かう。他の刀は寝静まり、寝息やいびきがあちこちから響いてくる。それ以外は二振りの歩みで起こった床の軋む音がむなしく残響するだけだ。

ガラリと医務室の扉を開いて、大股で事務机の前にあるパイプ椅子まで歩きドカツと座ると、石切丸にも事務机の近くにある椅子に座るように告げる。

石切丸がパイプ椅子に腰掛けると、薬研が足と腕を組んでから言った。

「さて、何から話すか……とりあえず石切丸、さっきの大将とのやり取りの中でどこまで分かった？」

「……主が、研究員とやらに手籠めにされていて、それを当然だと思っていた、くらいしか……」

下方にある目を見返しながら、石切丸は推測を述べる。薬研は軽く頷いて、それを肯定した。

「それが分かってりや充分だ。……恐らく大将は、生家で虐待を受けていた。あ、虐待って分かるか？ 歪んだ感情や暴力を保護者から受ける事を言うんだが」

聞き慣れない言葉に当惑したのも束の間。意味を解説されて石切丸は審神者の身に起こったであろう事を理解し、頼りなく声を震わせて呟く。

「……主が、親から不当な暴力を……」

「ああ。昔だったらありふれていた事だったが、今やったら立派な犯罪だ。それにただ単に暴力で子供を無理矢理従えさせるってのも、もう昔の考えなんだ。……大将を産んだ人間は、多分一発で檻行きの所業を大将に行っていた、と俺は考えている。——大っぴらに言えないが、普段は面で隠されている大将の顔には、大きな火傷の跡があるん

だ。同じく虐待を受けていた兄貴を庇った時の物らしいが、それだけでもう大将の家は普通じゃないと断言できるな」

女の顔に傷を残すなんて正気の沙汰じゃない、と薬研は殊更低い声で吐き捨てた。

石切丸は混乱する。戦や暴力から遠く、清らかな神域に近い場所にいた彼は、今の主たる審神者が理不尽が過ぎる暴行を親から受けていた、という事を上手く飲み込めない。

そのようなものは、かつては対岸の火事であると感じていた。——だが、今はもう他人事ではない。

現実を突き付けられた今でも、まさか主が、という気持ちも抜け切らない。自分の今の主は、審神者と名がつくだけあって清らかとは言えずとも過度な不浄に近い場所にはいないと思っていたのだ。

——先程の審神者の発言と本丸発足時からいた薬研の推測が、その幻想を容赦なく打ち砕く。目を逸らすな、と言わんばかりに。

戸惑い目を泳がせる石切丸に、薬研ははあ、と息を吐きながら足を組み替える。

「……まあ、あの優しい大将が理不尽な事をされた、つてのが受け入れ難いよな。あんな御方にも理不尽は容赦なく襲い掛かるんだと思うと、無力さすら感じると思う。名前は出さないが、最初に大将がそんな目に遭っていたと告げた時に嘘だ、嘘だ、つてあんた以上に現実を受け入れられなかった奴もいた。だからまあ、すぐにはいそうですか、つてならなかった事に罪悪感を感じなくていい」

窓から入り込む月明かりしか光源がない室内だったが、薬研の顔ははつきりと見える。彼は煮え滾る内面を覆い隠すように顔をしかめていた。

「大将が虐待を受けていた事、手籠めにされていた事を当然だと受け入れているのはそういう背景から来る物だ。……手籠めにされていたのを知ったのはつい最近でな、俺達もまだまだ未熟だったと思い知らされた所だったんだ」

「最近？……生家では受けていなかったのかな？」

引つかかる物を覚えて石切丸が問うと、薬研は殊更に顔を憤怒に歪

めた。

「ああ、生家では多分受けていない。最近まで大将が通っていた、政府が関わる研究所の連中に手籠めにされていたんだ。……連中はどうも『調整』という名の下に、大将の身体を好き勝手に弄り倒していたらしい。歌仙が同行した事で事態が明るみになって、今は行かせていない。……お上が全員そうだとは思わねえが、俺達には前例がある。ほいほいとお上の『平気だ』という言葉を信じて、大将を危険な目に遭わせるのはもうごめんだ」

激情に目を滾らせ、薬研は拳を握り締める。石切丸も小さくない怒りを覚えながら、脳内で思考をまとめた。

——この本丸の刀は、上層部を敵だと考えている。

確かに全員がそうだとは言えないのかもしれない。けれど、現在の主である審神者にとって上層部の人間は余りにも敵が多過ぎる。

「前例」について詳しくは分からない。だが薬研の口ぶりからすると、審神者が性的暴行を受けているのを上層部が黙認していた可能性すらあるのだ。

錯乱していた審神者の言葉からして、彼女の辿って来た道が明るくない事は察せられる。審神者には幸せになってもらいたいと、石切丸は配下として願うばかりだ。

「……私もそんな不浄の気がする人間の所に主を向かわせたくない。そうだね、祈祷だけではなく主の幸福の為に、私は動くこうと思うよ。今は自由に動かせる体があるのだからね。主の前に不浄の物が現れたなら、力の限り遠ざけてみせる。話を聞いて、改めてそう決めたよ」「そう言ってくれて良かった。……あんたを信じていなかった訳じゃないが、ちゃんとこの本丸を理解した上で一員になってもらいたかったからな。長くなったが、これからよろしく頼むぜ」

薬研はそう言って穏やかに微笑んだ。石切丸も小さく笑い返して、体の緊張を解く。

どうやら、自分は試されていたらしい。彼等が審神者を思うが故だと話をした事で理解した為、不快感はなかった。むしろこれくらい警戒していないと、あの審神者を守る事は難しいだろうとも思える。

ふと、話の中で気になった単語について尋ねる。

「薬研さん。『前例』っていうのは、一体何の事なのかな」

一瞬薬研は目を逸らし、哀情を湛えたそれを伏せる。それから明らかに繕った様に口角を上げて、石切丸に退出を促した。

「……その事も、近い内に必ず話す。こつちも長い話になりそうだからな。今日はもう遅いから、ゆつくり体を休めてくれ。明日は演練だろう?」

確かに、もうかなり遅い時間だ。薬研の提案に従う事にして、石切丸は立ち上がって扉に手をかけた。

「……分かった、それじゃあ部屋で休む事にするよ。こんな遅くに時間をとってくれてありがとう、薬研さん。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

そう就寝の言葉を薬研と交わして、石切丸は扉を閉める。手をひらりと振っていた薬研が扉に遮られたのを見てから、石切丸は軋む廊下を歩き出した。

静かな廊下は、小さな審神者に思いを馳せる石切丸の足音だけを反響させていた。

(後)』

「少し考え事をしていただけだよ。そうだね、そろそろ上がろうか」

石切丸は湯船から立ち上がり縁を乗り越えて、こちらの様子を窺っている獅子王の顔を見返した。獅子王も不安そうに出たら何か飲めよ、と言いながら同じく浴槽から出た。

長居し過ぎたのか大浴場には二振り以外誰もいない。広い浴場をほぼ占領していた事に不思議な気分を抱えながら、石切丸は獅子王と共にぴちやぴちやと水音を立てて脱衣所へ繋がる扉を指す。

扉に手をかけようとしたその途端、がらりと扉が開き冷気がこちらに流れ込んで来た。獅子王が寒さに体を震わせて縮こまる。

「うお寒っ！……って、長谷部？」

「ようやく上がったのか、随分長かったから倒れたかと思ったぞ！」

目の前にいたのは、ふかふかのタオル二枚と牛乳瓶を二本持っているへし切長谷部だった。ぽい、とタオルを二振りに投げて牛乳瓶をずいっと差し出し、受け取られてからはあ、と胸を撫で下ろす。

タオルで体を拭いてから腰に巻き、牛乳瓶の蓋を開けて口に運ぶ。冷たい牛乳は喉越しが良く、茹で上がってぼんやりしていた脳内を少しはつきりさせた。

ぷはあ、と声を上げてから獅子王は口を拭い、空の牛乳瓶を長谷部に渡した。

「美味かった、ご馳走さん。そういや長谷部、主と出かけたんじゃないのかなかったのか？」

「忘れ物をしたから引き返して来たんだ。そうしたらまだお前達が風呂から上がってないって聞いて……もう少し出て来るのが遅かったら、浴場に踏み込んでいた所だったぞ」

「かなり長く入っていたのか……長谷部さん、心配させたね」

「牛乳も持って来てくれてありがとうな、長谷部！ 堀川の内番着も似合ってるぜ！」

「撫でるなーっ！」

石切丸からは優しく、獅子王からはわしゃわしゃと頭を撫でられ、茜色を基調としたジャージを身に纏う長谷部は顔を赤くして喚いた。喚きはしても、震えるだけで二振りの手を避けられないのがこの長谷部らしい所だ。

「前例」——この長谷部の「性質」も過去も、二振りは既におおよそは聞いている。最初はどの様に接すればいいか迷っていた二振りだったが、宗三や鯨尾がちよっかいをかけている様子を見て、恐れ過ぎず普通に話せばいいと分かってからは積極的に話をしに行く様になった。

何せ打ち解ければかなり素直なのだ、この長谷部は。褒められると喜びと戸惑いを表に出し、恒例の着替えによって起こる羞恥を毎回剥き出しにしてからかわれる。嬉しい事があるとはにかんだ微笑を浮かべて報告してくれる。

——「彼」の性格は、内気だが素直。その性格と経緯を知れば気にかけてくなるのは当然だろう。「長谷部」の方も他本丸と比べると接しやすい性格をしているので、時折「彼」の話を肴にして飲み交わす事もあった（「長谷部」は体の事情を慮ってかジュースを飲んでいない）。

今だって撫でられるのは恥ずかしいが、手を退けるのは憚られると考えているのがありありと分かる。だから二振りは撫でる事を止めない。

つまり年長刀である二振りは、この長谷部の事が可愛くて仕方ないのである。

「うぐぐぐ……離せー！」

「お前は健やかに育つのが仕事なんだぞー。いい事をしたんだから大人しく褒められとけ」

「長谷部さんを撫でていると、何だか癒されるんだよねえ。何だっけ、はなまるせらふだったかな？」

「アニマルセラピーの事か!? というか犬扱いされてるよな!？」

それでも手を退けられない長谷部は、ふるふる震えて撫でる手を享

受する事しか出来ない。そんな彼に二振りはほっこりと顔を綻ばせ、更に頭を撫でる。生暖かい眼差しを浴びる長谷部が更に顔を赤くして縮こまっていると――

「長谷部さーん、石切丸さん達の様子はどうですかー？」

遠くから審神者の声がちちらに近づいて来る。ぱつと頭を上げて長谷部は自分を撫でている二振りを見た。――きよんとしている二振りは、腰に巻いている物以外何も着ていない。

「とりあえずお前ら、撫でるのを止めて服を着ろーっ!!」

流石に長谷部は撫でる手から離れ、棚の中から浴衣を取り出して勢いよく裸の刀剣勇士二振りに投げつけたのだった。

*

「ここが城下町か、流石に人が多いな」

「獅子王は何か興味ある物はあるか？」

「うーん、興味があるとしたらげーむかな。一狩り行けるヤツがあるって聞いたから、それがあつたら欲しい」

「……安くなっている事を祈ろう」

様々な人が行き交う城下町の中できよろきよろとしている獅子王の袖を握り、長谷部は俯いてぼそぼそと口籠る。

今はちようど昼時。食事処を比較している人が通りを歩き、食事処の中も人で一杯になっている。その他にも土産屋に立ち寄ろうとしている若者や、昼間から酒を飲もうとしている陽気な人達が居酒屋へと吸い込まれて行くのが見える。

石切丸は町の様子をしばらく眺めてから、隣にいる小さな審神者に視線を合わせた。

「本当にいいのかい、私達もついて来てしまつて」

「ええ。折角ですし、お二方が無事に帰って来た事を労おうと思ひまして。ご迷惑でなければ、ですが」

「いや、そんな事はないよ。ちよつとこそばゆい気はするけれど」

「石切丸さん達はこの戦いに協力して下さいさっているんです、きちんとお礼はさせてください」

審神者は風に吹かれてなびく面を抑えながら、至極真面目な口調で

言った。

この少女はいつもそうだった。神に仕える身として、その年にしては重過ぎる責任を泣き言一つ漏らさず背負っている。あの夜に覗かせたこちらの胸が苦しくなるような弱弱しさは、今は欠片も見当たらない。もう少し年に見合った姿を見せてもらえると、こちらとしても安心するのだが。

ふと数メートル先へ視線を向けると、おもちゃが並ぶ店へと駆け出した獅子王を慌てて追おうとしている長谷部が目に入った。それを見て石切丸は口に手を当て考える。

——最初は、長谷部さんのみが同行する予定だったはず。気を使われて、私達も共にする事になったが……

顕現してしばらくしたある日に、今剣がこっそりと教えてくれた話がある。——審神者は今は離れ離れになった自分の兄を長谷部に重ねているのではと短刀達の間で囁かれている、と。

短刀達は見た目こそ審神者の年齢に近いが、中身は百年、下手したら千年単位の精神を持っている。審神者の周囲には、同じような精神年齢の人型は存在しない。それに刀剣男士は末席に坐するとしても神である。少しでも気安く接するのは、彼女にとってとても難しい事なのだろう。

そこに現れた心の年齢が近い存在。彼——長谷部の傍では、彼女は少し楽に呼吸できるらしい、と短刀や脇差は気付いていた。今剣たち短刀は、そこから更に一步踏み込んだ推察を導き出した。

審神者には兄がいる。審神者と同じく研究所に連れて来られて、離れ離れにされた彼女の兄は今どこに居るのかは分からない。そして長谷部——「彼」にも妹がいるのだという。今剣はもしかしたら本当に二人は兄妹なのかもと期待を抱いていたが、それはないだろうと他の短刀は否定したらしい。いくら神に仕える身だと自負している審神者でも、慕っていた兄に会ったらすぐさま自分の正体を明かしているはずだ、希望を抱かずにはいられない気持ちは分かるが——とたしなめられたそうだ。

似たような境遇の二人が心を通わせるのは当然の事、と納得した短

刀達。彼等は審神者に、こうして城下町に降りる際には必ず長谷部を連れていくように進言している。遊びを全く知らなかつた審神者と長谷部の息抜きが一挙に出来るというのが第一の理由、秘されている第二の理由が審神者へのささやかな心配りだ。

審神者は毎回長谷部と一緒にいる事に口元を綻ばせるが、すぐに他の皆はいいのか、と喜んだ事を恥じるかのように刀達を見渡した。長谷部だけを鼻屑するつもりはないが、これではそうやってしまわないか、と。

——主が張り詰めてばかりだと、こちらも安心できないから。刀達はこう返した。審神者は皆様には敵いませんね、と幸福と気後れを混ぜた苦笑を漏らしていた。

審神者は長谷部に親近感を抱くなど、自分の意思はきちんと持っている。しかし審神者は刀達を気遣って要求を表立って言おうとしない。以上を踏まえて、石切丸は審神者に告げた。

「私は城下町に降りるのは初めてだからね。主に案内して貰おうかな」

「あつ、そうでしたね。石切丸さんは何か興味がある物がありますか？」

「そうだねえ……書物を見るのもいいし、食事を楽しむのもいい。獅子王さんが興味を示しているげーむを試してみるのも一興かな。ああでも御守りがどうなっているのかも気になるし……」

気になっている物をつらつらと並べ、首をひねりうーんと悩む素振りを見せる。審神者は小さく微笑んでから石切丸に提案した。

「とりあえず、皆様と一緒に目ぼしい場所を回ってみますか？」

「そうだね、獅子王さんの用を済ませたらお願いしようかな」

よし、と内心で拳を握る。しかしそれをおくびにも出さず石切丸は笑い返して、獅子王達が走って行った方角へと足を踏み出した。

*

一世代古いゲーム機とゲームソフトの入った袋を下げた獅子王はホクホクと足取り軽く前を歩んでいた。一緒にやろうぜ、とゲームの内容を捲し立てながら目を輝かせ隣に行く長谷部を誘っており、長谷

部はその勢いにこくこくと頷かされていた。審神者はそんな二振りを見て楽しそうではなかったと喜びをにじませていた。

ゲームセットを安い値段で購入出来たので、審神者の懐にはまだ少し余裕がある。まずは雑貨屋に寄ってみようと決めて、三振りと一人は店のドアを開けた。

「雑貨屋といってもデザインは洋風なので、あまり興味を示さない方もいらっしやっただんです。石切丸さんもここは別にいいと思ったら、すぐに言ったださいね」

「まあ、確かに私には縁遠い物ばかりみたいだけど。これはこれで新鮮だよ」

「長谷部、確か四葉が好きだって言ってたよな？ 見てみようぜ！」

「ちよ、それ一体どこから聞いて——痛い痛い痛い！」

ぐいぐいと長谷部の腕を引く獅子王が店の奥に消えていく。二振りが向かった方をしばらく見てから、審神者が私たちも行きましたよ、と石切丸を見つめた。

店内は可愛いポーチやあまり大きくないバッグ、様々な模様を描く食器に小瓶、様々なかわいい動物がついているキーホルダーや愛らしいクマのぬいぐるみが置いてあった。

小瓶を手にとってちよっとした物を入れるのもいいかもしれないと思案に暮れる石切丸に、審神者が購入しますかと小さく笑んで尋ねる。首を振って小瓶を元に戻しながら、石切丸はこれはどうだあれはどうだと騒がしい方向へと視線を向ける。

「あまり騒ぎ過ぎると店に迷惑がかかるな。主、止めに行こうか」
「そうですね」

そうして石切丸が二振りのいる場所へ向かうと、獅子王が様々なクローバーグッズを長谷部に見せて、長谷部が顔を真っ赤にしながらそれを押し止めていた所だった。

「これなんかどうだ？ 四葉の湯呑！」

「いやだから俺はいい！ 充分にコップはあるし、無理して買うことなんて——」

「そんな事言っただけ釘付けだぞ。いいから買っとけっ！」

近くにいる女性がちらりと二振りを見て、鬱陶しそうに眉を寄せている。それを知らずにやんややんやと騒ぐ二振りに近づき、石切丸は咳払いをして獅子王の背後に立った。獅子王と長谷部は言い合いを止めて、周囲を見渡して頭を軽く下げ、気まずそうに石切丸の方を向く。

「悪い、流石に騒ぎ過ぎだったよな」

「そうだね、こちらの方まで聞こえて来ていたよ。一体どうしたのかな？」

柔らかく口角を上げながらも眉を八の字にして石切丸が問えば、不服そうな顔で獅子王を睨みながら小さい声で長谷部が答えた。

「……獅子王にクローバーのグッズを何か買えつてずつと言われて……俺は今使っている物で間に合っているし、貴重なお金を無駄遣いしてまで買う事はないって言ってるのに、獅子王が……」

「お前なあ。確かに物を大切にするのはいい事だけど、お前の使っている物ってほとんど壊れかけだろ？ 特に湯呑、あれあちこち欠けている所あるだろうが」

「……でも、まだ飲める」

「それで怪我したら主が悲しむだろ！ その湯呑に今までありがとうって感謝してから、気に入った湯呑をまた大切に使っていけばいいんだよ。大体お前、俺が話しかけるまでその湯呑に釘付けだっただろ」

「……うう、貴重な主のお金が……」

「……てな感じで、さつきから二の足を踏んでいる訳だ。別にこのくらいの値段なら、主も出すと思うんだけとなー」

長谷部の渋る表情に肩を竦めて、獅子王は石切丸に顔を向けた。なるほど、気遣いの気があるこの長谷部らしい葛藤である。

確かに我が本丸はお世辞にも潤沢な金があるとは言えないが、多少の小物を買ひ替えるくらいに余裕はある。審神者も、コップくらいなら即座に了承するはずだ。そう思ってから、はたと気付く。

——審神者が近くにいない。二振りの様子を見る為に、ついて来ているのではなかったのか。

石切丸は身を翻し、柵の間を覗きながら早足で審神者を探す。まさか店の外へでたのではないか。懸念しながら次の柵の間を見ると――

「――ま？」

「……」

審神者は、ぬいぐるみが並ぶコーナーにいた。愛らしいクマのぬいぐるみを手にも、じつとその顔を見つめている。どこか惹きつけられるように、石切丸の呼び掛けにも応えず審神者はぼうっと立っている。

石切丸の後ろからクローバーのコップを持った獅子王とおろおろとしている長谷部が顔を出す。獅子王が呼び掛けた所でようやく我に帰ったらしく、審神者は顔を勢い良く上げて石切丸達へと慌てて無礼を詫びた。

「すみません、気付かなくて……！　もしかして石切丸さん、獅子王さん達がいらつしやるという事は、私、何も言わずにここで道草を……申し訳ありません！　皆様にはなんとお詫びしたら――」

「いや、少し慌てただけだから気にしなくていい。それよりも、その人形は？」

石切丸はいくらでも続きそうな謝罪の言葉を遮り、審神者の手にあるぬいぐるみを指差した。審神者はぬいぐるみを柵に戻そうと背伸びしながら言った。

「いえ、その、少し可愛いなあと思っただけで……随分長く見てしまっていたみたいです、本当に申し訳ないです。そういえば石切丸さん何か買いたいたい物がありましたか？　欲しい物があつたら何でも言つて下さい、私が購入しますので」

どこか誤魔化すように口早な審神者に、これは兄妹かもと言われるのも納得だと嘆息する。石切丸は獅子王に目配せをして、獅子王が領くのを確かめた。

審神者の手にあるぬいぐるみを取り上げる。同時に、獅子王もクローバーのコップを手にしたまま、石切丸と共に歩き出した。

「えっ、ちよつと」

「すみませーん、この二つお願いしまーすー！」

「はい、コップが一点、ぬいぐるみが一点で合計——」

「あーっ!!」

石切丸と獅子王によって瞬く間に二つの品がレジへと通される様に、審神者と長谷部は揃って悲鳴を上げた。

理由はともかくそうやって慌てている様は子供らしい、と思ったのは石切丸の秘密である。

*

陽が傾き出し、城下町の雰囲気も昼の健全なそれから夜の少し不健全なそれへと変わろうとしていた。暗くならない内に帰ろうと審神者と三振りは本丸へと歩みを進める。

「……でも石切丸さん、本一冊だけで良かったのですか?」

「今はこれで充分かな。骨喰さんからこの作家はいいと聞いていてね、少し気になっていたので」

観光目的の人間が減り、代わりに「町」に勤めているのであろう仕事終わりの人間が背中を丸くして、少しくたびれた様子ですれ違っていく。それだけでも随分景色が様変わりするのだな、と石切丸は本が入った袋を片手にぼんやりと思う。

石切丸は審神者に欲しい物を買わせる事には成功したものの、自分が欲しい物は中々見つけれなかった。しかし何かを買わなければ審神者の気が収まらない。悩みに悩んだ石切丸は目についた本屋で、骨喰が推していたファンタジー小説家の作品を買う事にしたのだ。「逆境にめげない主人公が多くて良い」と骨喰は作家を評価していた。それによって石切丸がその作家を気に留めたのは事実であり、その作家の中でも一番厚い作品を買った事によって、一度は審神者の気は収まった。

が、こうして尋ねられるのを見るにこの不安を感じやすい小さな少女は、まだ石切丸が満足しているとは思っていないらしい。

再び口を開こうとした審神者を遮るように、獅子王は振り返って彼女の顔を覗き目を細め、白い歯を見せた。

「まあ今はそれでいいんじゃないやねえか? 他に欲しい物があつたら戦果を挙げればいい訳だしな」

「うん、主の気持ちは充分嬉しいよ。この本だけでも私にとっては大きな報酬だ。今日はありがとう、主」

「そう、ですか？ ……それなら、よかったです」

審神者は少し声音を緩めて息を吐いた。見える範囲だけだが、彼女が笑っていると分かる。

気に病みやすい審神者だが、これでもましになった方だという。前はどんなに大丈夫だと言っても、彼女の焦燥感は抜けなかったのだ。

もつと報酬を、もつと捧げ物を、もつともつと彼等が本当に満足していくまで——そして彼等が不審がれば、自分が悪いのだと己を否定した。

身を削ってまで尽くそうとする彼女を、あるものは訝しみ、あるものは煙たがり、あるものは逆に自分が至らないのではと思いついた。——歪んだ価値観を持っていたと分かってからは、それを少しでも治そうと刀達は力を入れた。

彼女の為だけでなく、自分の主には誇り高くあつて欲しいと願った。だから「自分をまつとうに愛せる価値観」を抱けるように刀達は根気強く彼女と向き合ったのだ。それはどれだけ困難な事だっただろう。いくら現代の価値観を知識として知っているとはいえ、使われていた時代の思想が消える訳ではない。それだけではなく、彼女のような子供のケアには細心の注意を払わなければならない。本来ならその道のプロに任せなければならない状態だったのに、精神も含めて「調整」を施すはずの研究所は語りたくもない有様だった。

つまりは、人の体と心を持ったばかりの刀剣男士達しか審神者のケアを行える存在はいなかったのだ。障壁が大き過ぎる状態からここまで持ち直したのは、大いに称賛されるべきだろう。石切丸が少し想像しただけでもその大変さは窺えた。実際に彼女のケアをして来た刀達の苦勞を言葉にするのは至難の業だろう。

「……にしても骨喰もよく読むよな。間違いないと鯰尾の蔵書から読んでるんだろうけど」

「いつか二振りの部屋の床が抜けそうで心配だな……」

石切丸と審神者の前にいる獅子王と雑貨屋の袋を下げた長谷部は、

鯨尾達の部屋の話をしながら歩いていた。後ろの審神者と石切丸に合わせたスピードで、彼等の様子を見つつ先を行く二振り。談笑しながら歩いていた彼等はしかし、前方への注意が散漫になってしまっていた。

石切丸がすれ違いそうな存在に気付き、声をかけて注意を促そうとした途端――

「抜けるだろうな、近い内に。書房とか作れねーかなあ……おっとー」
獅子王がその存在にぶつかってよろめいた。ぶつかったもう一方も注意が疎かになっていたらしく、どきどきと物が落ちる音が響く。獅子王が慌ててその存在に詫び、しゃがんで落ちた物――大体は食材や食品の入っていた袋だった――を拾い集めていく。

「悪い、よそ見してた。大丈夫か？」

「いえいえ、こちらこそ申し訳ありません。我々も注意不足でした。おお、お手伝い頂きありがとうございます」

「ぶつかっただのはこっちだからな」

石切丸は困惑する。一瞬、獅子王が誰と話しているのか分からなかったのだ。

それは、以前にも覚えた違和感。目の前にいるはずなのに、意識しなければ存在を見失う。――初対面の時、長谷部に対して覚えた引つかかる感覚を、今再び感じていたのだ。

その違和を振り払おうとした石切丸は、突如長谷部が大きく発した単語に驚く事になる。

「――鳴狐!？」

その声は内側から喜びが溢れ出したように明るく、目を輝かせて駆け寄るその様はまるで友達を見つけた子供のそれだった。

――知り合いだっただのか、いやそれよりも……鳴狐？

獅子王も目を丸くして鳴狐の顔を凝視する。彼も目の前の存在が鳴狐どころか、刀剣勇士である事に気付けなかったのだろう。審神者はきよんととしてその場に立っていた。何が起こったのか分からない、といった表情だ。

「ん? ……おお、春光隊の長谷部殿でしたか! お元気そうで何よ

りですよー!」

「すまない、中々会いに行けなくて……そつちも元気だったか?」

「はい! この通り、我々は健康そのものです!」

和やかに話す二振りに石切丸は混乱しながらも脳を回転させる。そして、以前鯨尾が語っていた刀剣男士にまつわる話を呼び起こした。

——似た性質を持つ長谷部さんと仲のいい、森の中で出会う事が多い刀剣男士。まさか、目の前にいるのが……

置いてけぼりを食らっている一人と二振りの視線に気づいた鳴狐とお供の狐は、咳払いを一つしてから春光隊の面々に名乗りを上げた。

「……おほん、皆様へのご挨拶が遅れましたね。これなるは鎌倉時代の打刀、鳴狐と申します。わたくしはお付の狐でございます!」

「お察しの通り、我々も長谷部殿と同じ性質を持っておりますよう。長谷部殿が春光隊に落ち着くまでは、相談を受けていた事もございます。石切丸殿の様子を見る限り、我々の存在も話に上がった事があるみたいですねえ」

「……ああ、鯨尾さんから聞いたただけだが……長谷部さんの事情を知っている流れ者の鳴狐さんがいると」

おっかなびつくりそう答えると、お供の狐はそうですねえ、と頷いた。鳴狐は温かな表情で長谷部を見つめていた。

「春光隊の様子を時折覗いておりましたが、長谷部殿は本丸に馴染んでいるようで。本当に何よりですよ。こうして長谷部殿のような存在を受け入れて下さる本丸は、本当に少ないですから」

「えっ、来てたのか? 話しかけてくれればよかったのに」

「いやあ、乱殿にファッションショーに誘われている長谷部殿はとても微笑ましいものでしたよう」

「前言撤回、その時に話しかけられていたら発狂してた……っっていうかそれ見てたのか!?!」

うわあああ、と蹲り頭を抱える長谷部に微笑みを浮かべてから、鳴

狐達は目に真面目な光を乗せて二振りと一人の方を見た。

「初めましてですねえ、春光隊の審神者殿、獅子王殿、石切丸殿」

「……はい、初めまして。鳴狐様」

「そうかしこまらなくて結構ですよ、審神者殿。別に我々は貴女を責め立てようなどは思っておりません。むしろ直接感謝したいと思っていたところですよ」

「……それは、長谷部さんのような存在を受け入れる本丸が少ないと言っていた事と、関係があるのかな」

少し鋭い口調で問い質すようになってしまったのを、石切丸は内心で歯がゆく感じていた。

長谷部が乱に着せ替え人形にされそうになっていたのは数日前。本丸内に刀剣男士が散らばっていたにも関わらず、流浪の鳴狐が来ていたという報告は一切なかった。——誰にも存在を気取られずに、この鳴狐は春光隊本丸内の様子を眺めていたというのか。

同じく脅威を感じたのか、獅子王も鳴狐を鋭く見据えている。審神者はおろおろと石切丸達と鳴狐の間に漂う緊張感に震えて、顔色を窺っていた。

——だが、長谷部は心を開いているらしいのだ。それに何よりも、この鳴狐からは邪気を感じられない。本当にその時は、知己の様子を見に来ただけだったのだろう。敵意も感じられないが、それでも本丸近くにいて内部のものに気配を感じ取らせない気配の薄さは脅威だ。

お供の狐は少し悲しげに目を細めて、審神者に言った。

「我々は、どうあがいても人間からも刀剣男士からも異物として扱われやすいです。ですから、こうして長谷部殿を本丸の一員として受け入れて下さる方というのは、本当に得難い存在なのです。例えばたった一振りだけでも、迎え入れられるのは有り難い事なのです。特に長谷部殿は、春光隊に受け入れられなければ自害しかねない程に追い詰められていました。本当に、ぎりぎりの状態だったのですよ」

審神者が、石のように表情を固くした。そうしてから顔を伏せカタカタと震わせた体を抱える。石切丸が小さな体を支えていると、鳴狐が審神者に深く頭を下げていた。肩に乗っているお供の狐も頭を垂

れている。

「これは、長谷部殿の友としての言葉になります。——春光殿。長谷部殿を、我々の友達を救って頂き、本当にありがとうございます」
「……私は、何も出来ませんでした。本当に、長谷部さんと皆様の力がなければ、私は……」

「拒絶しなかった、それだけで充分貴女は長谷部殿を受け入れる下地を作り上げていましたよう。最終的に本丸の一員にする決断をしたのも貴女です。……貴女も大変な道を辿って来たのでしよう。その道を乗り越えて、ここに立っている。それは貴女が進もうとしなければ決して辿り着けぬ場所です。進む力を持つ貴女がそれを否定してしまつたら、貴女について来た刀剣男士達を侮辱する事になりますよう」

審神者が、ゆつくりと顔を上げ、まだ頭を下げている鳴狐を見つめる。石切丸は審神者の背を撫でながら鳴狐を見据え、獅子王もしゃがんだまま様子を窺っている。長谷部は呆然とした様子で鳴狐を見つめていた。

審神者は一般的に「可哀想な子」というカテゴリに入れられる経緯を辿って来た。それは確かに彼女を表す一面である事は間違いないだろう。

けれど、そうだ。——彼女は、良き主であるのだ。

適切な部隊を編成し、遠征や戦闘に向かわせて、大多数の刀剣男士の至福である「戦いに使う事」を叶えてくれている。現在は彼女の体調の都合上最低限の出陣だが、それでも平等に戦場に出してくれる。傷を負つたらちゃんと手入れをするし、任務を終えた刀達を労つてくれる。交流したい刀とは彼女なりの交流をしているし、娯楽を出来る範囲で用意したりもしている。

下級でも神である刀剣男士達に必要な以上に怯まず、礼を欠く事なく優しくあろうとする。

神として敬い、道具としてきちんと使う。当たり前前の事をこうしてこなしている彼女が、悪い主であるはずがない。

口を引き結んでいた審神者は、鳴狐に告げた。

「……刀劍男士の皆様は礼を欠く事はしたくありません。頭を上げてください、鳴狐様。謝意は充分に受け取りました。私に出来る事をしたままでですが、それが長谷部さんの救いになったのなら——これ以上の幸福はありません」

凜とした口調で、背筋を伸ばした審神者は何もかもを包み込むような姿で鳴狐達に微笑んだ。頭を上げた鳴狐達は審神者の様子を見て、感嘆の声を上げた。

「……おお、雰囲気が一気に変わりましたねえ。女性は成長するのも早いと伺った事もありますけど……いやはや、将来が楽しみですねえ」
「うん、大物になりそう」

鳴狐がそう言って小さく頷いた。へへん、と獅子王は立ち上がって鳴狐の荷物を手渡しながら笑う。

「そりやそうだ、俺達の主だからな！　じつちゃんぐらい大きくなつてもらわねえと！」

「まだ幼いけれど、これからどんどん成長していくからねえ。大人になった時、どんな将になつているかが本当に楽しみだ」

「えつ、えつと、主は凄いで！」

獅子王と石切丸が審神者の伸びしろを話していると、長谷部も負けじと、しかしよく分かっている事丸わかりな一言を叫んだ。

一人と三振りと一匹は、それはもう微笑ましく笑い声を上げたの一言うまでもない。

*

城下町入口までご一緒します、とお供の狐から告げられたのを了承して共に歩く。紺色の空は夕日を沈めて空に星々を散りばめ始めていた。

「……そういえば裏山に時々変ながらくたが落ちてるよな？　あれは一体何なんだろう」

「ああ、あれは現世から流れ着いた物が大多数ですよ。案外掘り出し物があるかもしれせん」

「げーむも落ちてるか!?!」

「運もありますからねえ。あまり期待しない方がいいかと」

「そうかあ……」

項垂れる獅子王の肩を長谷部がそつと叩く。石切丸が苦笑しながら鳴狐に尋ねた。

「現世以外から流れ着く事はあるのかな？」

「うーん、滅多にありませんが、他の『町』から流れ着く事もありますよう。繋がる事自体は時々ありますが、流れ着く物はとても少ないかと」

「何故なんだろうね」

「それはまあ、『町』が機密情報で溢れていますからねえ。少しでも流れていく量を減らす為に、清掃員が派遣されている事もありますし」なるほど、と頷きながら石切丸は審神者の様子を窺う。はあ、はあ、と息を切らしている彼女の足取りは重く、かなり疲れているようだと分かる。

「主、まだ歩けるかい？」

「……正直、限界が近いです。ちよつとはしやぎ過ぎましたね」

そうか、と言ってから、石切丸は審神者の両脇を持つてひよいと抱え上げ、体の位置を調整してから彼女を抱っこした。審神者は何が起こったのか理解した後、ばたばたと暴れだした。

「え、わあっ！ 石切丸さん、下ろしてください！」

「この方が主も楽だろう？ それに早く帰らないと危険だし、少しでも速く歩ける方がいいと思ってるね」

「で、でも——」

「主、大人しく抱き上げられとけ。実はもう歩けないだろ？」

獅子王に諭された審神者は、顔を赤くして俯いた。それに追い打ちをかけるようにお供の狐がしみじみと言う。

「そうして見ると、まるで親子ですねえ」

「恐れ多いです!!」

羞恥と恐れが爆発した審神者の悲鳴が、城下町にこだました。

後ろ手に障子を閉めて薄暗い廊下に踏み出すと、足取りが重くなっている事を自覚出来る。部屋から遠ざかる度に小さくなる少女の細かい呼吸が、心を締め付けて仕方がない。

曲がり角を左折してから、歌仙はどこまでも沈みそうなため息をつく。眉間を押さえて柱にもたれかかっていると、小さな足音が近付いて来たのが分かった。

「歌仙、大将の様子はどうか」

その儂げな外見に反した低い声は、激情を押し殺したような苦しげな物だった。実際、押し殺しているのだろう。歌仙は水差しとタオルを持った声の主に向かい合い、端的に告げた。

「良くはなっていないね。相変わらず咳は酷いし、さつきも血を吐いていたよ」

「……そうか。対症療法で何とか繋いでいるが、本職に見てもらわないと本格的にまずいな」

心痛に顔を歪めたのを己の様子を映したようだと思いながら、歌仙は吐き捨てた。

「望み薄だと思うよ、薬研。だって主の体調が悪化してから、誰も診てくれようとしていないじゃないか」

審神者の不調に気付いたのは、よりもよって長谷部だった。

ある晩、長谷部が審神者の様子を見に何気なく執務室を訪れた。彼としては、ちょっと審神者の様子を見たらすぐに布団に入るつもりで、部屋の中を覗いたのだろう。

結果、メンタルが強いとは言えない長谷部は見てしまった——体を丸めて大きく咳き込み、口から血を噴き出す審神者の姿を。

「——薬研、助けて!!」

悲痛な叫び声に薬研だけでなく、眠りが浅かった他の刀達も飛び起きた。歌仙もその一振り、本体片手に悲鳴がした執務室まで全速力で走った。執務室の中では、審神者の背に触れながら顔を青ざめさせ

「どうしよう、どうしよう」とパニック状態になっている長谷部がいた。

部屋に飛び込んで来た薬研は審神者の様子を慎重に見て、内臓がやられているのではと判断した。

「こりや俺の独断でやったら危ないな。本職に診てもらった方がいい」

薬研の言葉によってすぐに病院に行く手筈を整えた歌仙は、審神者を抱えてこの「町」で唯一夜間の受け入れを行っているという病院へと向かった。げほげほと咳き込み、荒い息を吐く審神者に焦りを覚えながらも、病院に行けば何とかかなると思っていたのだ。

その思いは、病院窓口にて容赦なく打ち砕かれた。

「満員つて……せめて診察だけでも！」

「すみませんねえ、医師もいま手が空いていなくて。他をあたっていただけますかね」

「連絡だつてしただろう!? その時は空いているって——」

「状況が変わりまして、今は満員なんですよ。申し訳ありませんが、他をあたってください」

似たような言葉を繰り返し告げる窓口。更に食い下がろうとした歌仙だったが、苦しそうにしている審神者の体を休める場所はないと判断し、憤りを何とかこらえて病院を後にした。

本丸に戻って病院の対応を仲間達に告げると、呆然とするもの、憤怒を露にするもの、焦燥感に駆られるものと誰もかれもが冷静ではいられなかった。比較的落ち着いていた宗三が「明日、別の病院にも行ってみましょう」と提案し、ひとまずは審神者を休める事を選択した。

苦しそうに咳き込む審神者に交代でついていた短刀達は、ままならない現状にもどかしさを抱えながらも出来る範囲で看病し続けたという。審神者の体調が快方に向かう気配は一切ないまま、雀の声に混ぜて彼女の濁った咳が夜明けを知らせた。

歌仙は再び審神者を抱えて、今度はこの「町」で一番大きい病院に向かう事にした。出陣も内番の予定も入っていなかった燭台切に同

行を頼み、大病院へと出発する。

目を閉ざして荒く息を吐き時折咳き込む審神者の顔色を窺いながら歩いてみると、燭台切がぼつりと呟いた。

「……歌仙君は、どうして割と来たばかりの僕を同行者に？」

「それは、君が何の予定も入っていないからで……いや、燭台切の腕も見込んでの話だよ？　僕はこう、自分で言うのもなんだけど、頭に血が上りやすいから。冷静に止めてくれそうな刀が君しか空いていなくて……」

「ありがとう。……多分僕は、色々な意味で適任だよ」

苦笑する燭台切の言葉を理解出来ず、歌仙は首をかしげる。——その意味は、病院に着いた時に思い知らされた。

「——見た限り、医者はまだまあ手が空いているように思えるよ。それなのに受付すらないって、どういう事なのかなあ？」
「ひっ……！」

受付の男性が眉をひそめた燭台切に迫られ、だらだらと冷や汗を流している。それはさながら、竜に睨まれている鼠のようだった。歌仙は受付の対応に怒りを感じながらも、しみじみと納得する。

——そうだった。燭台切は穏やかな性格だけど、その顔に人間に凄みを与えられる部分が多すぎる。

大病院の救急外来に駆け込んだ二振りと一人に待ち受けていたのは、またしても「満員なので、他の病院に当たって欲しい」という受付拒否だった。一拍置いてから眼前が赤く染まり、衝動のまま受付に迫ろうとした歌仙を燭台切が肩を叩き制する。

「燭台切、何を……！」

「落ち着いて、歌仙君。聞きたい事があるから、僕が代わりに交渉する」

そうして受付へと進み出た燭台切は、手入れが行き届いているのだろう受付のカウンターにばん、と手を置きこう切り出した。

「別の病院でも言われたよ、満員だって。——ここに、三日で大きな事故や流行り病が起こったなんて話、噂でも耳にしなかったんだけど？」

斜め後ろからちらりと見えた燭台切の目は、火を噴いていた。歌仙の対応をしていた時の鬱陶しそうな顔はどこへやら、受付の男はガタと音を立てて腰を抜かしていた。周囲からは小さな悲鳴やひそめ切っていない声が溢れ出す。先程の問い掛けに答えない受付の男を睨み、燭台切は問いを重ねる。

「そんな報道があったなら納得出来るけれど、周囲の様子を見るにそんな気配は微塵もないじゃないか。なんで診る事すらしようとしないのかなあ？」

「な、だから、ここは満員だから——」
「それに」

搾りかすのような受付の男の声を遮って、燭台切は更に問い質す。「僕、さつき入口で見たんだよね。刀を持った男達がぐったりしている和服を着た小さな男の子を抱えて、ここも駄目かと口惜しそうに出ていくのを。——御託はいい、どうして僕達を診ないのか、それだけでも答えろ」

後半になるにつれて、燭台切の声は鋭さを増して重くなっていく。その言葉の真意を悟った歌仙はカツと目を見開いた。

普通の人間が許可なく堂々と刀を持っていけば、当然だが法に触れる。それはつまり、刀の所持を許可されているもの——刀剣男士が審神者を抱えてここに来ているという事に他ならない。そして受け入れを拒否されて、ここを出て行ったという事でもある。その審神者がどんな病状かは分からない。だがぐったりしているという事から、その審神者の症状は決して軽くはないだろう。そして「ここも駄目か」という発言。

——審神者の受け入れを「町」の病院が一斉に拒否している。

ふざけているのか、と思う。この「町」は歴史修正主義者との戦いの最前線だ。医療施設も、傷ついたり病んだりした審神者や刀剣男士の為に存在しているはずだ。娯楽に來た旅行者の為に、こんな大きな病院を拵えているのか。

一体何故、そんなふざけた対応を——表情が更に険しくなっていくのを感じる。腕の中で苦しそうに息を吐く審神者が、何故そんな目に

遭わなければならぬのか。

青ざめて弱者のように震えている受付に歌仙も言い募ろうと一步踏み出した、その時だった。

「煙嵐様ー、煙嵐様はいらっしゃいますかー？ 診察の順番が迫っておりますので、中待合室までお越し下さいー！」

看護師がパタパタと走り去って行きながら、名前を呼んでいる。歌仙はその場の空気が凍り付く音を聞いた気がした。

煙嵐——それは、上層部の覚えめでたい部隊の審神者名であったはずだ。審神者を演練で見かけた事があつたが、毛虫を見るような冷え切った視線を向けられていたのが記憶に強く残っている。刀剣男士同士で噂されていた内容も余りよくはない。——何せ刀剣男士の練度の高さに直結する審神者のランクを、金で買っているというのだから。

再び爆ぜるようなカウンターを叩く音を耳にして、自分が呆然と看護師が去って行った方向を見ていたのだと知った。——燭台切はその低く怒りを隠さない声で受付に圧をかけていく。

「……へえ。君達は審神者の格の上下で診る人間を選んでいるんだね。患者の尊厳を守るといふ方針はどこに行つたのかな？」

「わ、私に言われても……私はただ、審神者は許可なく中に入れるなど——」

受付の男はいよいよ気絶しそうだ。無責任な、と思うが彼もまた下っ端なのだろう。こんなに恐怖して正気を失いかけている様を見るに、きつと彼から詳しい話を聞く事は難しいのだと分かる。

彼の胸倉を掴みかかりそうな勢いで身を乗り出し、燭台切は声を荒げた。

「主は確かに成果を出しているのに、政府に貢献しているのに。その事実を無視して、挙げ句の果てこんな子供を戦場に出しているのに、最低限の援助さえも奪うのかい？ ——馬鹿にするのも大概にしろ!!」

瞳孔を開いて詰る眼帯の男に、受付の男は何を見たのか。彼はへなへなと床に崩れ落ち、焦点の合わない目は虚で、ぶつぶつと呟く内容

も脈絡がない。

受付を圧倒させた事によって、周囲の囁き声が伝播して次第に大きくなる。こちらを厭う冷え切った言葉の内容も、漏れ聞こえて来た。

乗り出した体を気怠そうに元に戻し、燭台切は悲しそうに歌仙のいる方へと振り返る。

「……ごめん、格好悪い所見せちゃったね」

「気持ちはよく分かるよ、君が言わなかったら僕が言っていた。……でも」

「うん、ここにはいられないね。……帰ろうか」

歯噛みしながら目を伏せる燭台切に頷き、歌仙は審神者を優しく抱え直す。こちらを突き刺す厭忌の目から逃れるように、二振りと一人は病院を出た。

本丸に戻ってから大病院で起こった事を話すと、刀達はそれぞれ憤り、嘆き、悔しがり、悲しんだ。だがきつと審神者を診てくれる病院があるはずと、歌仙達は様々な病院の戸を叩き続けた。

しかし、どこの病院や医院も審神者を診てくれない。小さな医院なら、と希望を抱いて訪ねても、まるで審神者を恐れるように戸を閉ざしてしまう。

審神者はその間にも、どんどん病状が悪化していった。最初は体を起こせていたのだが、日が経つにつれて起き上がる事も困難になったのだ。咳も喀血も治まらず、薬研が対症療法で何とか繋いでいる状態である。

「……僕のせいかもね」

そんな日々の中、審神者の世話に関する当番を決める会議時に歌仙はぼつりと溢した。和泉守がぎよつとした顔になり、歌仙に尋ねる。

「之定、何言っただよ？ あんたが何したって言うんだ」

刀達の視線が歌仙に集中する。歌仙は俯き、顔に影を落として息を吐いた。

「……主がおぞましい目に遭っていた時に、僕は即座に研究員を斬り

捨てた。それが原因で、目をつけられたのかもと思ってね」

「歌仙さんは、その人達を斬らない方が良かったと？」

前田が目付きを鋭くさせて歌仙を見る。それに歌仙は首を振り、たらればの話だけど、と前置きをしてから話し始めた。

「斬り捨てたい程の怒りを抱いたのは事実で後悔もしていないけど、もう少し慎重になるべきだったんじゃないかと考えてしまつて……例えば峰打ちをして気絶させてから縛り上げ、公安局に引き渡すとか……あの時は公安の人間に『主の身を穢した奴等を憎まずにはいられないか』と凄んで罪には問われなかった。けれど、ここまで主の援助を打ち切られるとは思わなかったんだ。もし、もう少し冷静だったなら、主が今こうして苦しむ事だつて——」

「——それは違うよ、歌仙」

加州の否定に歌仙は口を止める。顔を上げて加州へと視線を向けると、彼は真剣な表情でこちらを見返していた。

「上層部には敵が多過ぎるつて事、忘れた訳じゃないよね？ 公安に引き渡したつて、なあなあにされて終わりだよ。何せ政府が認めている研究所で起こっていた事を、その時まで確かめようとしなかったんだからね。主に敵が迫ったなら斬るのが俺達なんだから、斬った事を気にする必要はない。俺が歌仙の立場だったら、間違いなく同じ事をしたと思うしね」

な、と加州は隣に座る大和守に同意を求める。大和守も真面目な顔で頷き、話の後を継いだ。

「考えている事は全員同じだと思うよ、上層部はあてにならないって。あてに出来ない案山子よりも、自分で主を害する者を退けたいと思うのは当然だよ。……というかあんな幼い子に酷い事をやった奴等を痛みを与えず死なせたんでしょ？ 正直僕はもつと苦しませてから首を落としても良かったと思うよ」

「そうです、歌仙さんは当然の事をしたままです！」

「……苦しませず逝かせたのが唯一の非でしょうか」

「斬った事は絶対に間違いじゃない、ボクが保証する！」

「奴等を野放しにさせる方がオレは嫌だね」

大和守の言葉に、短刀達から一斉に声が上がる。守り刀たる彼等は審神者を手籠めにしていた研究員達への恨みが強い。一時期は研究所へ攻め入ろうかという話が彼等の上で上がったくらいなのである（反逆とみなされかねないと流石に止めたが）。性的暴行を見過ごしていたであろう上層部への不信感も当然のように強力だ。

歌仙は間違っていない、と口をそろえる短刀達に次いで、鯰尾が小さく挙手して発言した。

「思ったんですけど。上層部はうちの主だけじゃなくて、他本丸の審神者への援助も打ち切っているみたいですよ。……他本丸の情報を集めに行った方がいいんじゃないんですかね。嫌な予感がするんです、何となく」

「長谷部、その辺りの事を例の刀剣男士から聞いていないのか？」

骨喰が長谷部にそう振ると、刀達の視線が縮こまっている彼に移動する。ぴくりと肩を震わせて目を泳がせながら、長谷部はぼつぼつと口に出そうとする。

「……鳴狐からはまだ何も……主の話を聞いて心配そうにしていたくらいで……後で他の本丸でも何かなかったか聞いてみる」

「ありがとう、長谷部。……鯰尾の言う通り、情報を集めた方がいいだろうからね」

「歌仙さん、何か考えがあるのかな？」

石切丸が強張った顔でそう聞くと、歌仙は顎に手を当て唸った。

「最悪の場合を想定して動いた方がいいかもしれないからね。鯰尾の予感はかなり確率で当たるから」

春光隊の刀達は審神者を「町」中の病院に改めて連れて行きながらも、流浪の鳴狐や演練での対戦相手から情報収集を始めた。

結果分かったのは、以下の三つ。

——一部の審神者に対する援助が打ち切られ、重い徴収が行われている事。

——その一部の審神者というのは、上のやり方に反発したり、春光隊のように研究所での過酷な「調整」に憤った刀達を持つ者だとい

事。

——そして上層部にすり寄っている審神者は、資材や金銭の重い徴収が行われていない事。

「……上層部は反発するものを徹底的に抑え込むつもりなのでしょう。大つぴらに動きすぎて追い込まれた本丸もあります故、くれぐれもお気をつけて」

「……仲の良かった刀がいた本丸も、数日前に潰された。皆も、頑張つて上手く立ち回つて」

流浪の鳴狐達の言葉だ。俯瞰している立場である彼等と繋がりがあつた事は不幸中の幸いだろう。——最悪の状況だと、一足早く理解する事が出来たのだから。

「……それでどうする、歌仙。大将も限界が近いし、長谷部の精神状態も最悪だ。押し入れの中で、一晩中泣いていたみたいだしな」

水差しとタオルを抱えたまま、薬研は歌仙に向かい合っていた。歌仙も眉間を押さえながら思考を巡らせる。

審神者の体調は、悪化の一途を辿るばかりだった。布団から起き上がれなくなり、意識が朦朧とし始めて刀達の呼び掛けにも応えるのが難しくなつたのだ。

審神者の体調と本丸の雰囲気按比例して、長谷部のメンタルも崩れ落ちていく。他の刀がいる前では「長谷部」が表に出る事で何とか取り繕っているが、一人になつた途端に布団に顔を埋めて泣き続けているのだ。見るからに食欲も落ち、少し痩せたようにも思える。「長谷部」も「彼」が情緒不安定になつている、と薬研に相談していたらしい。

誰もかも寝ずの看病と良くならない現状に、もう限界が近い。歌仙は決断を迫られていた。——反旗を翻すか、恭順して審神者の助けを乞うか。

「……腐り切つた上に仕えるのもごめんだし、反逆した所で主への対処が間に合わなければ意味がない。本当に、どん詰まりだね」

「そうだな。だが、大将もいつまで持つか本当に分からないんだ。早急に決めて貰えればありがたい。……酷な事を強いるけどな」

薬研は目に憂いを乗せて心苦しそうに言った。歌仙も分かっているさ、と返して、再び頭を回し始める。

審神者が不調の今、最終的な決定権は最古参の歌仙が握っている。歌仙は細かい事があまり得意ではないが、頼られる立場である以上はそれに応えたいと思っていた。しかし、思考は先程からぐるぐると同じ場所を巡るばかり。頭から煙が出てもおかしくはないだろうな、と嘆息しながら天井を見上げる。木目は錯綜する思考を示すかのようだった。

「歌仙、悪い。あんたも散々悩んでいるんだよな。今でも懸命に考えているのに、急かすような事を言うのはまずかった。……長谷部の話でもしないか？」

「いや、気にしないでくれ……長谷部の話？」

ああ、と薬研が表情を緩めて肯定する。

「あいつ、大将が倒れる前に買った四葉の湯呑、大層大事に使ってるんだよ。石切丸と獅子王が機転を利かせて買わせたらしいが、気に入っているみたいで良かった」

「ああ、あの雑貨屋で買った……前の湯呑は結局どうしたんだっけ」

「大将が供養して処分してたぜ。長谷部がありがとう、って震えた声で言ってたのを感じ感心、って言いながら石切丸が見てた」

「目に浮かぶようだね」

「石切丸がひよっとしたら別の『町』に湯呑が流れ着くかもしれないって慰めてた。それで少し捨てる恐怖が薄れたと思って安心して——」

薬研が何気なくそう言った直後、彼の肩を歌仙が思いつきり強く掴んだ。痛い、と呟いた後に薬研は眼前にあった歌仙の目を皿のようにした顔を見て息を呑む。

歌仙は地を這うような声を薬研に投げつけた。

「……薬研、今なんて言った？」

「えっ、長谷部が捨てる恐怖が薄れたみたいで安心したって」

「違う！ その前だ!!」

「石切丸がひよっとしたら別の『町』に流れ着くかもしれない……って

——」

先程発した言葉を再び口にしながら、薬研の目も見開かれていく。歌仙は己の耳が正常に機能している事に大きく安堵し——そして、一筋の光が差した事に、目の前が晴れていく感覚を覚えた。

「町」は春光隊があるこの場所だけではない。常識的に考えて、無限に湧き出る時間遡行軍をこの「町」にある本丸だけで対処出来るはずがないのだ。そして、他の「町」の存在は知っていたが、自分達には関係ないと思っていた——今の今まで。

流れ着く物があるのならば、流れゆく物もあるのだろう。凝り固まった常識に囚われていた事に内心舌打ちする。

そう、もしかしたら——

「薬研」

「おう」

——「自分達」が流れゆく事だって、可能かもしれない。その先で、審神者を診てくれる病院があれば——

「僕の賭けに、乗ってくれないかい」

目に力が戻り背筋が伸びた歌仙に、薬研も不敵に笑って見せた。

「ああ。——やっと思つつけた三つ目の道だ、どんな荒れた道だつて進んでやるさ」

薬研が拳を握り、歌仙に向かって掲げる。歌仙は己の拳を、その小さく力強いそれにぶつけたのだった。

(前)

ピ、ピ、とりモコンの操作音が部屋の中に響いている。リモコンを握り、操作しているテレビを見つめている鯨尾を胡乱な目で見ながら骨喰は問い掛けた。

「……兄弟、番組の転送も大概にしておけ。媒体が山積みになっているだろう」

「あとちよつと……面白い番組は何としても持つて行きたくて……！」

「せめて選別してくれ。第一部隊員なんだから、もしもの事があるかもしれないだろう。荷物が重すぎて動けない、なんて事態になったら笑えないぞ」

「ぐつ、正論！」

二振りの間には然程強い緊張感はない。いつも通り、遠征前の準備をしている雰囲気を出しているが——彼等がしようとしているのは、審神者の命を繋ぐ為の救援要請だ。

だがしかし、本丸内の空気はそこまで重い物ではなかった。たった一部隊が隣の区域に助けを求めるくらい、内密に動けばばれないだろうと考えていた。

それに、物々しい雰囲気を出してしまえばそれこそ大事になりかねない。腐り切ったこの上層部に今更変革を求める程期待もしていないし、別に表立って対立したい訳でもないのだ。

刀達が望むのは今もなお苦しそうにしている審神者の快癒、それだけである。

「じゃあ選別するか……んー、これとあれとそれとー」

「あまり減っていないぞ……。他に持つて行くべき物もあるのだし、本当にどうしてもいる番組以外は置いていけ」

「……駄目？」

「駄目だ」

鯰尾が上目遣いで請うても、呆れ顔の骨喰はにべもない。骨喰はすぐに荷物を纏める作業に戻ったので、仕方ない、と鯰尾は真面目に選別を始めた。繰り返して見たいお笑い番組、中々に深いテーマを扱っていたアニメ、旅やグルメなどの道楽番組が入っている数枚のディスクを選び、選ばれなかった物はテレビの横に置いておく。

さて、と鯰尾は次に己の本体たる刀の調子を確かめようとゆっくり鞘から抜いていく。刀身は鋭く光を反射し、錆も汚れも欠けも見当たらない。手入れがしつかりと行き届いている、いつもの「己」だった。「よし、俺はこんな所かな」

「刀装はどうするか決めたか？」

「うん。盾兵二つと、予備に重歩兵二つ。まあ、これだけあれば何とかなるでしょ」

「そうだな」

骨喰がこくりと頷いた。笑い返してから鯰尾が風呂敷に荷物を包んでいると、部屋の外から足音が近づいてきた。軽く豪胆な足音から、自ずとその音の主は絞られてくる。

やってるか、と言いながらひよこりと顔を出したのはやはり、弟の一振りたる薬研だった。

「うん、俺の方はほとんど終わり。薬研、主の調子はどう？」

「相変わらずだな、悪くもなっていないが良くもなっていない。早くしないといけないのは変わらない」

「そうか……」

骨喰は一瞬目を伏せたが、すぐに丸い目を薬研に向け風いだ声で問う。

「薬研、改めて確認を。決行は辰三つ……八時だな？」

「ああ、そうだ。後三十分だ、鯰尾兄は纏め終わったら執務室に来てくれ」

「分かった」

了承の意を返すと薬研は他の奴等にも言いに行くから、と手をひらりと振って去っていった。

部屋の中が静かになると、本丸内の音や声がこちらまで響いてく

る。ばたばたと走る足音、歓談をする賑やかな声、ゴトンと何かが落ちる音。音の在り処を覗けば、いつも通りの光景が繰り広げられている——と錯覚しそうだ。

荷物を包んで、よし、と声を上げる。風呂敷を持って鯨尾は立ち上がり、刀装を吟味している骨喰に告げる。

「じゃあ執務室に行ってくる」

「ああ。俺も準備を進めておく」

「了解」

鯨尾は身を翻して部屋の外へと足を踏み出した。キシリ、と板張りの床から音がする。

執務室に向かいながら庭へと目を向ける。どんよりと雲が空を覆っており、太陽の在り処が全く分からない。今にも雫が降ってきそうなその空を睨んでから、鯨尾は歩を進める。

執務室が近づく度に、喧騒が遠ざかっていく感覚がある。執務室内では審神者が苦痛に喘いでいるのだと思うと、あんな小さな子がどうしてという憐憫と、早く何とかしたいという焦燥が募っていく。早く審神者を見てくれる病院が見つかるといいが——そう思案しながら執務室の前に立ち、中にいるであろう刀に声をかける。

「歌仙さん、鯨尾です。準備が終わりました」

「入ってくれ」

障子を開けると、やはり中には歌仙が座っていた。歌仙は荒い咳をしている審神者の眠る布団の側に座しており、彼はまるで自分も審神者の苦しみが伝搬したかのように顔をしかめていた。

鯨尾も歌仙とは反対側に座り、風呂敷を横に置いた。それから改めて、審神者を見つめる。

審神者は荒い息と咳を交互に繰り返しており、唇の色も失せてしまっている。息も濁っているように見え、彼女にはあまり猶予がないと感じられる。

ふと、審神者を包む布団から何かが飛び出しているのが見えた。よく見ると、それは以前彼女が買ったクマのぬいぐるみの耳であった。よかった。

「……主、ずっとその子を抱いているんだ。苦しい時に縋る物があつた方がいいと思つて、そのままにしているけれど」

歌仙が悲しそうに説明する。そうですか、と返して鯨尾は歌仙へと視線を移す。

歌仙も、大分憔悴していた。ずっと審神者の為に病院を駆け回り、ここ数日は避難経路を睡眠時間を削つて探していたのだ。労いの言葉を掛けるべきかな、と静けさに耳が痛くなりながら考える。

そして、違和感に気付く。——耳が痛くなる程の静けさ、というのがおかしい。だつてさつきまで、本丸内は普段通りの賑やかさで満ちていたではないか。なのに、今はその声達が一切聞こえない。異常なまでに、明るい声が聞こえなくなったのだ。

そして、こちらに向かつて来る荒い足音。鯨尾の中で、悪い想像が渦巻く。

「歌仙さん、何かおかしく——」

「——大将は無事か!？」

鯨尾が嫌な予感を口にしようとした途端、障子が勢いよく開かれた。何事だと振り返つた鯨尾は、荒く息を吐きながら険しい顔をしている薬研に固まつた。——異常事態が起きたという予想は、正解だったようだ。

歌仙が上体を起こして薬研を見据える。不作法を叱るなどという事は、薬研の張り詰めた様子からしていない。

「薬研、何があつた!？」

「良かった、無事だったか……簡単に言う。上層部が敵を寄越してきやがった。第一部隊の残り三振りはこのちに向かつてる、他の奴等は臨戦態勢に入った」

は、と息を呑む。予想以上に悪くなっているらしい現状に、顔が強張つていく。ぎり、と歯を噛み締め、歌仙は薬研に短い言葉で尋ねた。「詳細を」

「長谷部の端末に、流浪の伯父貴から連絡が入つた。その内容が霜風隊が襲撃されている、つて話でな」

霜風隊——それは、春光隊が世間話の体を装つて情報を集めた部隊

の一つだ。その本丸もまた搾取される側の立場で、上層部への不満を疲れ切った顔で漏らしていたのを覚えている。そして同情して見せた春光隊にここだけの話、と言って霜風隊審神者が教えてくれた事がある。

「近々、いくつかの部隊を集めて抗議活動をする予定なんだ。——流石にもう、限界が近いからね」

春光隊も誘われたが、審神者の体調不良を理由に断った。霜風隊審神者は残念そうにしながらも、春光隊審神者の快癒を祈っていた。

その本丸が襲われた——分かり切っていながらも、鯨尾は希望的観測を口にする。

「た、たまたま、その本丸が襲われたってだけじゃないの？ それなら公安局に連絡すれば……」

「分かってるだろう、鯨尾兄。……伯父貴は続けてこう言っていたそうだ。通報はしたがそんな事は起こっていない、悪戯は止めるの一点張りだった、ってな」

そこまで——そままで、腐り落ちていたのか。鯨尾は愕然とする。仮にも止める素振りすら見せないのは——上層部が、この襲撃に関与しているからだと思えなかった。

「大将を連れて逃げろ、上層部——敵は、俺達の口を命ごと封じる気だ。そう言った後にお供の狐の悲鳴が響いて電話は切れたらしい。……霜風隊は抗議活動をする予定だったと話していた。それを感知されていたのなら、霜風隊と接触した俺達も危ない。大将を連れて、急いで境界へ向かった方がいい」

「分かった。時間が少し早まったただけだ、他の刀達にも通達を——」

歌仙が鋭く指示を出そうと口を開いたのと、地すら揺るがす轟音が響いたのは同時だった。鯨尾はとっさに本体を出し、歌仙は守るように審神者を抱きかかえる。一拍置いて、執務室に三つの影がなだれるかの如く飛び込んで来た。

「歌仙！ 薬研から話は聞いたか!？」

「聞いた！ 今の音は——」

「ここにも敵が来たんだ！ 歌仙さん、準備は済んでいるかい!？」

「ああ、すぐにでも動ける！——長谷部！」

「う、うう……っ」

三つの影——獅子王と石切丸、長谷部は最悪の急報を抱えて現れた。獅子王は狼狽を隠しておらず、石切丸は顔を強張らせて汗を流している。

歌仙に呼び掛けられた長谷部の顔色は青ざめ切っていて、右手で胸の辺りを掴んで震えていた。歌仙はすつと立ち上がり、布団を乗り越えて長谷部の前に立つ。長谷部の左腕を握り審神者を抱えさせると、歌仙は彼の肩を叩き顔を上げさせる。

「長谷部、君がこの六振りの中で一番速く走れるんだ。僕が最後の防衛線を任せた事によって気が重くなっているのは分かるけれど、君にしっかりと主を抱えて貰わないと困る。大事な仕事、しっかりと果たしてくれるね？」

「で、でも、歌仙達が倒れるなんて、考えたくない……！」

首を振りながら喚く長谷部に落ち着いて、と穏やかな口調で歌仙は続ける。

「約束しただろう。君が主に敵対的行動をしたら、斬るのは僕だ。……君達が心配しなくても、そう易々とやられるつもりはないよ。どんな手を使っても、主を別の区域まで届けて見せる」

「——トシキと主を泣かせる真似だけはするなよ」

突如表に出た「長谷部」は審神者を嚴重に抱え、歌仙を見据える。それに一瞬目を瞞ってから、歌仙は力強く頷いた。

裏口に集まった刀達は、一様に表情を引き締めて立っていた。一部の刀には体中に砂埃や返り血が付いており、敵の襲撃が現実のものになった事を示している。

歌仙は苦しむ審神者を不安そうに抱える長谷部に一瞬目をやってから、同田貫に礼を述べた。

「同田貫、ありがとう。真つ先に敵に向かって行ってくれたおかげで、皆が衝撃から復活出来たって言うていたよ」

「そりゃ、敵が来たら斬るだけだろ？俺は当然の事をしたまでだよ」

「その当然が出来なくなる程、衝撃が強かったって事だよ。僕も第一部隊長だつて意識がなかったら、呆然としていただろうしね」

「……まあ、奴さんがここまでするとは、つてのは感じたけどよ」

頭をガシガシと搔く同田貫に微笑んでから、歌仙は改めて真剣な表情で告げた。

「これより救援を求めめるために区域の境界へと向かう！ 襲撃がまたいつ起こるか分からない、けれど何が何でも敵を退ける！ 僕達は主たる審神者がいればやり直せる、言い換えれば——審神者なくしてやり直す事は出来ない！」

表情を険しくさせるもの、戦場の気配に高揚を隠せないもの、恐怖を捻じ伏せようとするもの。誰もかれもが、歌仙の言葉によつて戦意を滾らせていく。すう、と息を吸い込み、歌仙は声を張り上げた。

「卑劣な上層部に決して屈してはならない、それはすなわち主への冒瀆だからだ！ 主が上層部にされた事を、主が僕達の為に流した涙を、努々忘れるな！ 主が健全に過ごせる世界を、僕達は決して諦めてはならない！ ——必ず、主をこの腐った場所から連れ出すぞ!!」

「——了解!!」

全員が声を揃えてそう応ずる。鯨尾も刀を出して握り締め、審神者を抱える長谷部の横に行こうとした、その時だった。

背筋を冷たい物が伝うような、おぞましい感覚を覚えた。何かがある、直感的にそう思った。見ると、骨喰が既に本丸の屋根に上っている。遠方を見つめて背筋を凍らせた後、彼は振り返って叫んだ。

「敵の増援確認！ 数は五百だ！」

「何だつて!?! ——反乱分子を徹底的に潰す気か！」

「ど、どうしよう……!!」

歌仙が顔色を変え、長谷部が審神者を抱きしめて震え出す。他の刀達の間でもざわめきが広がり、まともにぶつかるか、戦略を立てるべきかと囁き合い始めた。

五百をぶつけてくるのは、例え数部隊に対してだと考えてもまともではない。強力な部隊ならまだやりようもあるのだろうが、周囲にそんな本丸があるなど聞いた事がなかった。

上層部の殺意が見える。——使えないなら潰せという、傲慢な殺意が。

「歌仙」

骨喰が屋根の上から呼びかける。思考を巡らせていた鯰尾が骨喰に視線を戻すと、彼の目には強い光が宿っていた。さあつと血の気が引いていく。その目の意味は、鯰尾がよく知っている。それは、無茶な作戦を遂行しようとする時のような——

「俺達が、ここに残って敵を引き付ける。歌仙達は早く境界に向かつてくれ」

「……は？ 何、言っただよ！ 五百だぞ!? 一振りだけでどうにか出来る筈——」

「僕達も一緒ですよ、鯰尾兄さん」

少し低い場所から声上がる。目の前にいたのは前田、秋田、乱、五虎退、鳴狐。その目付きはそれぞれだったが、骨喰と似た色の光を宿している。

どうして、そんな目をしているのだろう。どうして、全員抜刀しているのだろう。

どうして——彼等は、不敵に微笑んでいるのだろう。

「ここで騒げば、ある程度敵を引き付ける事が出来るでしょう。その間に主君を境界へ連れて行ってください」

「早く行ってよ、皆。ここに留まってちゃ、ボク達が残る意味がなくなっちゃう」

「えつと……怖いですけど、あるじさまの為に、頑張ります」

「……何で、お前達……」

声が震えているのが自分でも頼りなく思えた。足が竦んでいるのがとても情けなく思えた。けれど、鯰尾はそれを止められなかった。

——身内が進んで死地の囷になるというのに、どうして動じずにいられようか。

「駄目ですよ、鯰尾殿。栄えある第一部隊員である貴方が、そんな顔をしては」

「……伯父さん……」

「大丈夫です、鯰尾兄さん。僕は主君が笑って下さる世界を作れるなら、喜んでこの任務に就きます」

「秋田……」

身内の言葉に、縋って嫌だと叫びそうな自分が押し留められる。

——自分達は、どうあがいても審神者の為の道具だ。主たる審神者を守る事を、戦場で散れる事を誇りに思えど、それを阻む事は許されない。

「……骨喰兄、最低でも百だ。いけるか？」

「ああ、やってみせる」

しっかりと頷いたのであろう骨喰の顔は、どうしても見れなかった。薬研が激情を抑えている事が分かるのは、やはり身内だからなのだろうか。

刀を握り、身内達に背中を向ける。歌仙が鯰尾の肩を叩いてから、行こう、と横をすり抜けていく。静かに涙を流している長谷部が視界に映る。

地を蹴った鯰尾の背中に、身内達の最期の言葉が届く。

「主君に、明るい世界を。お願いしますね！」

「あるじさま、皆さん、またどこかで！」

「あるじさんを幸せにしなくちゃ、許さないんだから！」

「こちらはお任せ下さい！ 決して、振り向かず！」

「大丈夫です、僕達を敵に回したことを後悔させますから！」

振り向きたい、叫んでしまいたい。嫌だと、逝かないでくれと、一緒に行こうと。それでも刀としての理性が、それを許してくれない。

そして――

「兄弟！」

大切な片割れが、鯰尾に向かって叫ぶ。

「――主殿を、未来へ連れて行ってくれ！」

その言葉から、彼の意志を、誇りを、祈りを、感じ取れてしまったから。

鯰尾は足を止めなかった。身勝手な感情を、その言葉によって打ち碎かれたのだから。

▽▽▽

「行きましたかね」

「ええ。ここにはもう、我等六振りしかおりません」

「そっかあ。あーあ、薬研と鯰尾兄、悪だくみばっかするから心配だなあ」

空になった春光隊本丸で、賑やかな声が反響している。

「大丈夫ですよ。歌仙さんや長谷部さんもおりますし、何かあったら二振りが止めて下さるでしょう」

「え、えつと、獅子王さんと石切丸さんは……？」

「石切丸は止めるだろう。獅子王は五分五分だが」

ぎし、ぎし、と廊下を渡りながら話す六振りは、全員抜刀して構えている。

「……幸せになれるといいな。主殿も、長谷部も」

「えー骨喰兄、他の皆は？」

「そのお二方が特に心配なのでしょう。お二方は、他者の為に幸せを手放せる性格ですから」

「あ、あるじさまが元気になれば、長谷部さんも幸せになりますよ」

「他の方もそうでしょうね。……さて」

「はい、来ましたね」

秋田がそう言った途端に、悍ましい声を上げて時間遡行軍の形をしたモノが本丸内に侵入する。

美しく整えられていた庭が、大切に育てていた畑が、自分達が思い出を積み上げてきた本丸全てがソレによって蹂躪されていく。

六振りが殺気を表出させると、大勢のソレは値踏みするようにこちらを見る。丸い目を鋭く細めて、骨喰は叫んだ。

「——来い！ 春の光射す園を荒らしたその罪、この斬りで贖え！」

(後)「

時間遡行軍の形をした敵に取り囲まれている春光隊の本丸が、走る度に小さくなっていく。敵は塀の周りだけでなく、屋根にまで上り遠戦を仕掛けていた。時折敵が上空で手足を切り刻まれた状態で舞っているのを抑え込む為に、大量に内部へ入っていくのが見える。

鯰尾は一瞬だけ背後の景色を目に焼き付けてから、再び前を向いて駆ける。裏山の麓から突っ込み、山中を静かに、けれど速度を上げて春光隊は疾走していく。

「主の調子はどうです!？」

「悪化はしていない、けれど急がなければならぬのは変わりないぞ！」

駆けながら歌仙がそう返す。先頭にいる歌仙は刀達を誘導しながら進んでいた。その後ろにいる長谷部は審神者に縋るように抱きかかえ、恐怖で顔を青ざめさせながら懸命に足を動かしている。刀達の緊迫した様子によって深刻さを感じて怯えているのだろう。

——どうして、俺達が追われなければならないんだ。何も悪い事をしていないのに、何故——

任務も最低限だったのがこなしてきていたし、上層部からの徴収だつて応じて来たのだ。理不尽な目に遭っていた審神者を守る為にした行動で、追い込まれる事態になった現状に納得は一切していない。いつそ悪い夢であつた方が、まだましだった。

紅葉が落ち切っている木々をすり抜けて山の中腹まで登った頃、再びあの背筋を凍らせる寒気を感じた。振り返ると烏帽子を被った敵と長髪の敵が多数、麓からこちらに向かって駆け上がって来る所だった。

「歌仙さん、敵の太刀と槍が登って来ます！ 総数七十！」

「すり抜けて来たな、冷静に対処を！ 遠戦刀装を持っているものは構えてくれ！」

「了解。投石用意！」

加州の一声によつて打刀達は刀装に触れ、兵を出現させる。兵達は投石器を大きく振り回して手を放す。手から抜けた投石器は敵の刀装を打ち破り、頭をかち割つていく。地に伏した三分の一度の敵に、足を止めてこちらの出方を窺う生き残りが半分程度。その横を抜けた残り半分の敵が、唸り声を上げながらこちらへと駆け上り始めた。

「やっぱり全滅つて訳にはいかないか……！」

「とにかく、こつちに来た奴は一体ずつ迎撃するよ！ まともに全ての相手はしない事！」

大和守が苛立ちを隠さずに吐き捨てれば、加州が叫びながら鯉口を切りその身を反転、迫つて来ていた槍を紙一重で右に避ける。即座に柄を蹴り上げ抜刀し、体制を整える暇を与えず頭を斬り落とした。そのまま麓を警戒しながら勾配のある道を走り抜ける。

小夜、堀川、加州、大和守、和泉守、陸奥守、山姥切、山伏。最後尾の刀である八振りには、前に行く刀の背に敵の刃が伸びる先から叩き落とし、胴や頭を斬り動きを停止させる。敵の数体が転がり落ちていく胴体を避け、動きを合わせて襲い来る。こちらも一振りだけで立ち向かう程無謀ではない。対応する数を増やして、一体ずつ仕留めていった。

そうする度に前と距離が開く。距離が開けばそれを埋めようと行軍速度が遅くなる。そして何よりも――

「……数が減らないね」

「逆に増えている気がするな」

「小夜、刀装はあとどのくらいだ」

「……次食らえば壊れますね」

「僕も、そろそろまずいかも」

敵は後から後から湧き出して来ていて、小夜と堀川の刀装が心許なくなってきたのだ。前を行くもの達を気にしながら戦うのに、限界が出始めている。

ざっと見渡して、山の麓にはすでに敵が隙間なくひしめいている

事、これ以上進むスピードが遅くなれば審神者の体に障る事、全力を出せていない現状では敵に打ち破られそうな事。

これらを加味して、八振りは決断した。

「——之定！ 奴等麓にぎっしりと詰めかけて来やがった！」

「そうそう上手くは行かないか、追いつかれそうかい!?」

「はい。——ですから、僕達はここまでです」

静かな小夜の声に、歌仙が息を呑んだのが分かった。鯨尾が振り返ると、既に八振りは前の刀達の下へ行かせまいとするように横隊陣を展開していた。

歌仙は小夜の方向を向いたまま、足を踏み出すのを押し留めているのだろう、足を動かさず——動かせず、唇を震わせていた。

背を向けているのにそれを分かっているのか、小夜は鋭く歌仙を制した。

「歌仙。僕はもう刀装がありません。それに全力を出せない状態です。すると敵を連れて境界まで行く事態にはしないと、話し合いましたよね?」

「……分かっている、分かっているさ。けれど」

「でももだつてもありません。限界に近い刀を引きずって行く余裕はないはずです。……早く行って下さい。主を生き延びさせるのが、僕達の役目でしょう?」

その背中には小さいのに大きく見えるという頼もしさを体現しており、歌仙は黙る事しか出来ない。小夜以外の七振りの刀も早く行け、と言わんばかりにこちらを鋭く横目で見ている。

悲哀に目を伏せて、歌仙は前を向く。そうして歯を食いしばり、再び地を蹴って走り出した。鯨尾も任せました、と言ってその後を追う。

「主の晴れ姿が見られねえのが残念だ。之定、しっかり支えてやれよ！」

「主さんの事、よろしくお願いしますね！」

「俺がいなくなっても、主に可愛くない服とか着せないですよ！」

「清光、最期の言葉がそれ? 皆、またいつか！」

「……またな、主」

「夜明けは遠くない。信じて進むがよ！」

「ここは任せられよ！ 決して焦りを見せてはならぬぞ！」

かつて背を預け共に戦って、共に日常を過ごした仲間を置いて行くのに抵抗がないと言えば嘘になる。

けれど、進まねばならないのだ。大切な仲間は、主を逃がす事を願っているのだから。

▽▽▽

「あーもー！ 弱くてもここまで時間遡行軍の模型を寄越して来るの、正気を疑うよ！」

「同意する……」

「騒ぐな、つて言いたい所だが……確かに多過ぎるな」

「本当、主さんがここまでされる必要ってあるのかな!?!」

敵が籠を抜けようとするのを、斬り伏せて防ぐ。それでも数が多すぎて、全ての敵に対処しきれない。疲労や肉体のダメージも蓄積されている。

小夜も体中に傷をこさえながら考えていたのは、小さな主と彼女を抱える刀の事。細く息をする少女と、恐怖を抱えながら懸命に駆けていた背中。

——僕は復讐の刀で、復讐が僕を形作るものだけ……

迫る敵の槍、穂を飛んでかわし柄に乗る。思いつ切り蹴り上げ、敵の眼前に寄った直後にはもう、敵の胴と頭は離れていた。

——どうか貴方達は、その黒い澱みを生む感情に囚われないで欲しい。

そう願うのは、勝手だろうか。

「……おかしいのお。敵の一部が別の方へ向かっちゃう」

「え？」

「ふむ。先程別の刀剣男士と思しき気配が駆け上っていくのを感じたが……」

「嫌な空気が満ちている。何か事態が大きく動いているのだろうか——」

「気にする余裕は、なさそうですね」

ふらりとよろめき痛み顔に顔をしかめて着地して、小夜は再び鋒を蠢く敵へと向ける。

「僕達に出来るのは、主が元気で明るく過ごせるように、折れるその時まで敵を妨害し続ける事だけでしょう」

おぞましい唸り声が、上方から響いて来る。同時に投石器や矢、銃弾が雨のように降り注いでいた。振り返ると、やはり山頂を埋め尽くす敵がこちらへと向かっている。

「はあ、はあ……っ！」

「長谷部、落ち着け！ まだ境界は先だ、余り息を荒くすると体力を消耗するぞ！」

山の峠を何とか越してからも、敵は容赦なく追い詰めて来ていた。敵の刀種も増え、薙刀が大きく横に振り回しこちらの刀装を削っている。第一部隊の後方にいる刀達が防御しているが、彼等の刀装も脆くなりだしていた。

おまけに、長谷部のメンタルも悪くなる一方だ。どんどん数が減る仲間達、その中には長谷部に構ってくれていた刀もいる。同じく心を痛めている他の刀の手前泣く事はしていないが、精神的に限界が近づいているのは事実だった。

縋るかの如く審神者を強く抱える長谷部。その背中に近づく脇差を燭台切は叩き斬り身を翻す。燭台切は愛染と今剣の側に着くと小さい声で話しかける。

「愛染君、今剣君。刀装は大丈夫？」

「ああ、重歩兵で良かった。まだまだ先は長そうだからな」

「ほんつとうにしつこいですよね。じゅうへいにしていたらここまでもちませんでしたよ」

走りながら飛び跳ねて敵薙刀に組み付き、今剣は首を斬り落とす。跳ねて燭台切の横に並び、再び背後を気にしながら走り出す。

——そうは言っても、短刀は修行をしなければ一つしか刀装を操れない。刀装が壊れるのも時間の問題だ。

鯨尾は考えを巡らせて、小夜達が膝をつく光景まで想像してしまい――首を振ってその想像を追い出した。今は死地で戦っている仲間
の最期を想う余裕はない。攻撃を避ける事に思考を割かなければ、自
分が倒れ審神者を逃がせない状況に繋がりがかねないのだ。

「……見てみなよ、どうやら追い立てられているのは僕達だけではな
さそうだ」

青江が春光隊にだけ聞こえる音量でそう言った。視線を左右に動
かすと、砂埃や血を付け戦装束の一部が破れている刀剣男士達が、必
死の形相で坂を駆け下りているのが目に入った。刀剣男士達は一塊
になって動いているのが複数。その中には自分達と同じく、審神者ら
しき人間を抱えたり背負ったりしている集団もあった。審神者らし
き人間達の顔色は窺い知れなかったが、力なく男士達に運ばれている
者もあり、春光隊の審神者と同じく容態が優れないのだろうと判断出
来る。

「……あの集団……審神者らしき人がいないみたいだね」

「概ね、審神者に虐げられていた刀達でしょう。彼等もまた限界に達
したのかもしれませんが」

情報収集していた本丸の中で、そういった刀剣に精神と肉体両方へ
の暴力を行使している審神者がいるという話も聞いていた。その刀
達は顔に暗い影を落としていたり、憎悪に表情を歪めていたりしてい
た記憶がある。相当追い詰められていた刀もあり、名は出さないが
「全部自分が悪い」と発言していたものもいたのだ。

正直に言うと、鯨尾は彼等を正面から見ることが出来なかった。だつ
て嫌でも被つてしまうのだ――あの小さな審神者と、余りにも普通と
は言えない我が本丸の長谷部と。暴力を受ける謂れのない彼等を何
とかしたくなってしまう。けれど、自分達の最優先事項は審神者だ。
自分達は審神者を守る為に動いていて、彼等を救う余裕は全くない。
だからこそ、救う事の出来ない存在を真っ直ぐに見られなかったのか
もしれない。せめて彼等が救われる道が現れる事を、願うしか出来な
かった。

あの彼等も、救援を求めて動いているのだろうか。周りから彼等を

探そうとして、止めた。今更探しても、詮無きことだ。

主たる審神者を救う事。それ以外を、今は考えてはならない。

「——おうおう、斬り甲斐のある奴等が出て来たな。大俱利伽羅、先に行かせて貰うぜ！」

「勝手にしろ。俺は一人で充分だ」

「伽羅ちゃんそんな事相談もなく……っ!? 歌仙君!!」

後方の燭台切が歌仙に向かって声を張り上げる。その鋭い悲鳴が届いた時には、ソレは鯰尾の眼前に迫っていた。

防御の体勢を取る前に、その穂先は刀装兵を巻き込みながらその隙間を掻い潜る。鋭い穂先が捉えるのは、刀剣男士の肉体。

主に池田屋に出陣した時に、散々辛酸を嘗めさせられた相手。——

審神者達の間で「高速槍」と呼ばれる敵の槍が、春光隊の前に複数体現れていた。

「鯰尾！」

せめてダメージが少なくなるように、獅子王が鯰尾を自らの後ろに引き下げようとした。どうせ高速槍からは逃げられない、だからこそ傷を最小限にする為の行動だったのだが——

鯰尾に、覚悟していた衝撃は訪れなかった。それなのに、鉄の匂いが漂っている。鯰尾の腕を掴んでいた獅子王が、言葉を失っている。目を開いた鯰尾も、その光景に驚愕する事になった。

「いっ……へへ、鯰尾、大丈夫か？」

「傷は、ない……かな？」

——愛染と青江が、その肉体でもって高速槍の動きを止めていた。脇腹に槍が深々と刺さっているが、二振りは爛々とした目で高速槍を見据えている。震える唇は、二振りの名を呼べなかった。

高速槍は穂先を引き抜こうとした。だが、それ以上の力で掴んでいるのだらう。愛染と青江に刺さっている得物は抜けない。得物を抜く事に気を取られている高速槍は首と胴体が、あるいは上体と下半身が離れるまでの間、背後で一閃する燭台切と大俱利伽羅に気付く事はなかった。

倒れ伏した高速槍を見て、愛染と青江はふらつきながら己に刺さつ

た槍を抜いた。途端、二振り脇腹から血が噴き出す。青江は冷静に自分の戦装束の布地を引き裂き、一部を愛染に渡し、簡易的な処置をしてから背筋を伸ばす。

無傷だった今剣が高速槍達を睨みながら低い声で呟く。

「……まだまだいますね」

「ああ。……こいつらを先に行かせちゃ駄目だ」

「同意するよ。という訳で皆、先に行ってくれないかな？」

青江は中傷、愛染は重傷だ。この二振りはここで果てるつもりなのだろう。最期まで戦ってこそ武器の本懐、それは分かっていたので鯨尾は歌仙に確認を取ろうとした。

「宗三、お前も……」

「ええ、僕達もここに残ります。……あの槍達を境界付近に行かせてはならないと、意見が一致しましてね。今剣も残るといっていましたが、第一部隊は境界へ急いで下さい」

「……そうか……歌仙、あんたの意見は」

「……そうだね、あの槍達は大きな脅威だ。過酷な戦いになると思うが、構わないかい？」

歌仙達の話聞いて愕然とした——ついに、この時がやってきてしまった。

残りはたった六振りになるなど、本丸で準備をしている間は全く想像していなかった。ちよつとした遠征のつもりだったのだ。こつそりと本丸を出て、密かに救助を求める。ただそれだけの、然程大変ではない遠征だと、そう軽く考えていて。

けれど、骨喰達粟田口派が抜けて、次に八振り抜けて、嫌な予感はずっと積み上がっていった。——ひよつとしたら、第一部隊しか残らないのではないかと。

覚悟していなければならなかった事なのだろう。ここにきて抑え込んでいた悲嘆、憤怒、臆する感情などが再び湧き上がって来るのを感じた。

——どうして、どうして俺達が、主が……

そう喚きたくて仕方がない。けれどそんな猶予はないのだ。こう

している間にも、審神者の命の灯火は大きく揺らいでいる。一瞬の躊躇いが、彼女の命を奪うかもしれないのだ。

仲間の命と、その仲間の祈りが乗った審神者の命。秤にかけたら、どちらに傾くかは明白だった。

「ああ、構わねえ。あいつらには散々舐められて来たからな、俺の強さは増しているんだって教えてやるさ」

「中途半端にやって勝てる相手じゃない。ここで全力を尽くすよ、例え折れる事になっても。……一緒に、成長したかったな」

「……あの人間に決められるよりかは、余程いい死に場所だ」

「伽羅ちゃん、そんな事言わない！ ……大丈夫、絶対にあの槍達は通さないよ」

今剣、愛染、青江、宗三、蜂須賀、大俱利伽羅、同田貫、燭台切。八振りが、この場に残る事を選択した。これで残りは第一部隊の六振りのみとなる。

「ここで祈祷が出来たら良かったんだけど……今剣さん、せめて君の武運を祈らせてくれ」

「ありがとうございます、まかせてください！ あんなやり、ぼくがしゅぱーつとやつつけちやいますよー」

「頼もしいぜ、今剣。……歌仙」

「ああ。……皆、どうか本道を果たせる事を」

歌仙のその声に、何をしようとしているか察したのだろうか。高速槍が、歌仙達を取り囲もうと動き出す。

キーン、と音が響いた方向を見ると、宗三が高速槍の穂先を抑え込みながらこちらを横目に、口を動かす所だった。

「――早く！ 主に、籠の外の世界を見せておやりなさい！」

宗三が声高く叫ぶ。それに弾かれたように、第一部隊は駆け始めた。

八振りが命を懸けて切り開いてくれた血路を、感傷の為に閉ざしてしまう事はあつてはならないのだ。

▽▽▽

「まだまだアー！」

同田貫が高速槍を斬り伏せる。先陣を切つて敵を斬っている彼の体にも、あちこちに傷が出来ていた。状態にして、中傷。

「チツ……」

「本当、数が多いね……!」

「格好悪く喚き散らしたくなるなあ……!　しないけどさ!」

大俱利伽羅、蜂須賀、燭台切も、決して少なくない傷をこさえている。状態はまだ軽傷だが、いつ中傷から重傷になってもおかしくない。

それでも高速槍の数を少しずつ減らしている中、ぴくり、と大俱利伽羅が山頂方向を見た。

「……?」

「伽羅ちゃん、どうしたの……つて」

燭台切が大俱利伽羅の見た方向をなぞると、そこには覚えのある影が佇んでいた。

「あれは……刀剣男士?　増援か」

「何だよ、まだまだ暴れられると思つたのによ」

そう言いながら不満そうに息を吐く同田貫と、まあまあ、と宥める蜂須賀。その表情には安堵の感情が浮かんでいた。

しかし、背後から強い殺気を感じて振り返る。——重症の青江と愛染、今剣が戦闘態勢を取っていた。

「三振りとも、どうしたんだい?」

「……君は感じないのかい?　業の深そうな、あの気配を」

「……はちすかささん、まだおれなくなかったらかまえてください」

「え、一体どうし——」

「早くしろ!　……アレは、味方じゃねえ!!」

愛染の怒号と共に飛び出してきた影達は、高速槍を踏み付け刀身を大きく振りかぶり、八振りに向かって振り下ろした。

最前にいたソレがまず、長い柄を握り刀身を大きく横に振った。

「ギ……ギア……ギアハハハハ!　俺ヲ、楽シマセロ!」

「アシも……がおル……ダゼ!」

それは、刀剣男士と呼ぶには余りにも歪で——

「振り回……ア……あッはっハッハハハハハハハ」

「いちゴひトフリ、マイル！ ……ギギギ、ギ」

「おレニ斬レ……敵ではナ……」

冒流的で、屈辱的で、こちらを震撼させて――

「きつチャウぞー……ガ、ガガガ」

「ここ……番ノ投……たイ！」

――乱雑で醜悪で、こちらの悲哀を誘う、酷く恐ろしいものだった。

「……何だ……何だあれは!？」

「くっ！」

「何で……刀剣男士が、あんな――」

「考えるのは後です、今は迎撃を――」

その場が、錯乱した悲痛な声で満ちる。何とか鏢迫り合いには持ち込めているが、攻撃を与えるには至っていない。

どれもこれもが辛うじて（春光隊にはいないが他の本丸では顕現している）刀剣男士の形に見える。その刀剣男士が、何故こんなおぞましい姿になつてこちらに襲い掛かつてくるのか。

八振りがそう考えている内に、その中の一つである一番小さな影が、青江に致命的な一撃を与えた。

「ぐっ……！」

「青江！」

崩れ落ちた青江には目もくれず、小さな影は叫んだ宗三の元へと迫る。青い髪をしていた影を相手取っていた宗三の背中を、その小さい影が斬り裂く――

「させませんよう」

――はずだった。

突如として聞こえて来たその甲高い声に一瞬宗三は呆けた。だが目の前の小さな影が見えなくなり、代わりに現れた灰色の頭とその首に乗っている狐に、正体を看破して呟いた。

「貴方は……長谷部の、友達の」

「はい、そうですよう。朝方ぶりですねえ、春光隊の皆様……と挨拶したい所ですが、こちらを片付けてからに致しましょう」

流浪の鳴狐はそう言つて、金属音を二、三度響かせ鉄臭い気配を漂わせてから刀身を地に向けて振る。ギアアアア、と耳を塞ぎたくなる声を上げて、小さな影は完全に沈黙した。

他の刀と戦っていた影は一旦退き、こちらの様子を窺っている。その隙に蜂須賀は鳴狐に尋ねた。

「鳴狐。アレは一体、何だ？」

「……話を聞いていらつしやる皆様なら、我々の亡霊と言えば分かり易いかと」

我々——即ち長谷部とも共通する物なんて、一つしかない。悍ましい実験の、被験者達だ。彼等が何故、こんな姿になつて現れたのか。その背景を、滔々とお供の狐は語る。

「敵はとうとう死者を凌辱する事に決めたようですねえ。岩融殿も、日本号殿も、次郎殿も、一期殿も、長曾祢殿も、浦島殿も、博多殿も——全員、生前を存じ上げておりますよう。過去を忘れた不安を持つ者を、酒を飲めなくて困っていると苦笑いしていた者を、刀を上手く振り回せないと悩む者を、沢山の兄弟に期待を抱いていた者を」

流れるように、過去を懐かしみながらも——確かな憤怒を込めて。「誰かの心を傷つけていないかと震えていた者を、ひとが怖いと閉じこもっていた者を、いつかお金を皆の為に使うんだと希望ある夢を抱いていた者を——例え世を儚んで死を選んだとしても、本意ではないでしょうに死に引きずり込まれたとしても、どうしても、どうしても安らかに眠らせて差し上げる事すらないのか！どこまで外道で、鬼畜で、下劣で、人でなしなのでしょうか!!」

大きく吼えるお供の狐の話に、鳴狐は相槌を打っていない。だがその目が大きく火を噴いている事からも、彼の心情は疑う余地もない。理不尽へと向けた怒気に押されてか、敵は一步も動かない。八振りも、その怒りの声明を聞かない事には出来なかつた。

「死人に口なしという言葉がありますが、それは彼岸にいる者の意思は此岸にいる者には知る術はないという事！ 疲れ果てて、あるいは未練を残してこの世を去つた者達の意味を、勝手に決めつけるなど言語道断！ 例え彼等が戦いを望んでいたとしても、こうして玩具のよ

うに弄ぶとは彼等への冒瀆以外の何物でもありません！ ……だからこそ、我々が動く事にしたのですがね」

最後の一言は愁傷と悔恨を滲ませ、お供の狐は話を締めくくった。鳴狐は柄を握り締め、小さく息を吐く。

「……つまりてきは、はせべさんのようなかたなの、したいをあやつっているというのですか」

「その通りです」

「……面白くない話だな」

「凄く嫌そうだね、伽羅ちゃん。……僕も、とても腹立たしいよ」

八振りの刀は、それぞれぞっとしないといった表情をしていた。折れた刀を歪に繋ぎ合わせ、己を証明する物などどこにもないそれを、自身の形をとって現れたような物だ。それに、過酷な実験を受けた子供達を鞭を打って酷使しているのだ。彼等の不快感は計り知れないだろう。

ギアアアア、と唸り声を上げて再び影が動き出す。高速槍も動き出し、穂先を九振りに向けて構えた。しかし、影はこちらに襲い来る事はなかった。——坂を飛び降りて、下に広がる森の中へと消えて行く。その方向は——

「——境界に行ってる奴全員殺す気か！」

九振りが影の消えて行った方向に気を取られている内に、周囲を高速槍をはじめとする守りが堅く攻撃力が高い敵に囲まれる。

鳴狐が歯噛みしていると、真面目な口調で宗三が尋ねた。

「……鳴狐。アレらの錬度は平均でどのくらいありますか？」

「……九十台ですなえ」

「この槍達と戦うとして、ある程度は凌げますか？」

「ええ。まさか、この場で我々を当てにするなど——」

「違います。……青江、行きますよ」

「はいはい」

青江がゆらりと立ち上がって宗三の側に寄り、力を漲らせる。そして、二振りは力を繋げ——

「それっ！」

「食らいなさい！」

坂の下にいる高速槍へ向けて、青江が取り囲んでいた兵を一斉に斬り伏せ、宗三が中心にいる敵の心臓へと刃を突き刺した。

二刀開眼を行った結果、一時的に包圍網に穴が開く。宗三は鳴狐の背中を思い切り蹴飛ばし、包圍網の外へと追い出した。

転がり落ちた鳴狐は呆気にとられ、坂の上を見上げる。既に激しい戦闘が始まっている場所から、宗三達の声が届いて来た。

「行って下さい！ アレらを相手取れるのは貴方だけです！」

「それと歌仙達にも注意喚起を！ アレだけしかないとは思えないからね！」

「こっちは任せとけ！ 長谷部は歌仙達と一緒にだ！」

「長谷部、泣きそうだったぞ！ 少しでも安心させてやってくれ！」

「友達の弔い合戦、上手くいく事を祈っているよ！」

「なきぎつねさん、はせべさんとともだちでいてくれてありがとうございます！
ございましたー！」

「あまり話が出来なかったのが残念だ、どうか息災で！」

「……早く行け！」

その声に押されて、鳴狐は走り出す。彼岸に行った友を再び眠らせ、此岸にいる友の助太刀をする為に。

活路を開いてくれた友の仲間達に心の中で礼を述べ、鳴狐は心臓の痛みを振り切り決して立ち止まらなかった。

14—7 「Witness／獅子王』お願いします」
〔前〕

「くそ、ここに来て敵が強くなって来たな……！」
「泣き言を漏らしている暇はないよ！ 少しでも早く境界へ向かわないといー！」

歌仙が櫓を飛ばしながら敵の首を刎ね、木々の間を抜けていく。五振りの刀は刀装兵に傷の身代わりをしてもらいながら応戦し、歌仙の背中を追っていた。

しかし、懸念事項もある。薬研の刀装が壊れそうなのだ。このままでは、直接浅くない傷を負う事になる。

獅子王は出来る限り薬研を内側に入れて、傷を負わせないようにしていた。彼を侮っている訳ではない、むしろ逆だ。医術の心得があるのは彼だけであるし、これから薄暗くなってくる時間帯だ。夜戦に強い短刀は温存しておきたい。それに――

「大丈夫、大丈夫だ。俺達は負けてない。大将と俺達が助かるまで、あと少しだからな」

「……うう……」

――仲間達の数が減る度に、長谷部の精神状態は悪化していった。顔をくしゃくしゃにしつつ泣き出すのをこらえているが、言うまでもなく内心では不安と恐怖でいっぱいなのだ。かたかたと体を震わせ、審神者を抱え込むその姿は痛々しくて仕方ない。

長谷部は刀を持って戦えない。「彼」の抱えるトラウマによって、刀を握ると正気を失う。自ら敵を斬ると動けなくなり、吐いて倒れてしまう。だからこそ最悪の場合は審神者を抱えて逃げるという重要な任務がある。その任務の重さと減っていく仲間、自分の運命を他者に委ねるしかない不安が長谷部を苛んでいるのだろう。

メンタルの調整は、薬研が最も手馴れている。彼は付け焼き刃だと言いが、自分では心理学までは分からない。その点でも獅子王は薬研を頼りにしている。

「あと少し……あと少し……」

「そうだ、あと少し。斬れないあんたの代わりに俺達が敵をやっつけるから、その点は安心してくれ」

弟達に、いやそれよりも幼い者に対する優しさがこもっている口調で、薬研は自らに言い聞かせている長谷部を宥める。その言葉を信じたのかどうなのか、長谷部は小さく頷いて審神者を抱え直した。ひとまずは長谷部の精神が落ち着いて、獅子王は大きく安堵する。

改めて周囲を見渡す。森の中だという事もあり、木が多い。身を一時的に隠せるのは味方も敵も同じ。油断をすれば、あつという間に距離を詰められるだろう。

境界へと近づいているのだろうか、おかしな点がある。時折何もない空間に、ちらちらと森の中にはない風景が映るのだ。「裂け目」としか言いようのない空間の異常は、自分達が目的地へと向かえているのだと思いたかった。

それともう一つ。少し離れた所を、刀剣男士で構成された複数の集団が走っている。ここまで来られたのはやはりそれなりの強さの持ち主だからなのだろう、彼等は切傷をあちこちにこさえながらもまだ動いている。

審神者らしき人間は、集団の中にいたりいなかったりしていた。審神者がいない集団の方が少し多いか。審神者がいる集団はしきりに声をかけているし、いない集団は黙りこくり死に物狂いで足を動かしている。

よくよく見てみれば、単独で動いている刀剣男士もいる。相当の猛者だな、と感嘆した。こんな場所では出会わなかったのなら、少し話をしたいくらいには獅子王はその刀剣男士（返り血が多くて判別しづらいが恐らく鶴丸国永だろう）を評価していた。

そんな風に、ずっと呑気に考えていられる状況だったら良かったのだが――

「何かがこっちに来ますー！」

鯨尾が端的に叫んだ。その報告に確かめようと振り返って、獅子王の心身が強張る。

形自体は刀剣男士、のはずだ。なのにソレを見た獅子王は脳内で同類であつてはならない、と警笛を鳴らしていた。

顔面が崩壊し、腕や足があらぬ方向を向いている。胴体には傷が多数ある。そのせいか動きも変な走り方をしたり刀の振り回し方が変だつたりと不気味だ。何よりも――

「ケ、ケカケ……ケケケケケ！」

「ハガ……ギャガがガガガ！」

「グエウ……アツジャイ……ウイグググ！」

その唸り声は、最早言葉を成していない。ざらざらとしている声音、トーンも乱高下が激しく、聞いていて耳が痛くなる音だった。

こう形容するのはとても嫌だったが、化け物にしか思えなかった。それが複数、こちらに向かつて襲い掛かろうとしている。獅子王はただ、自分のシヨックを吐き出す為だけに惑乱を口にした。

「な……何だあれ!？」

「……刀剣男士……にしては、良くない気が強すぎるね」

「いち兄……の形してるよな、あれ……」

「長谷部さん、絶対に後ろ向いちや駄目ですよ！」

「え？ 分かった……」

困惑しているが嫌な何かを察した長谷部は鯰尾の言いつけを守り、後ろを向きかけた頭を前に戻した。歌仙も背後を見てぎよつとした顔をする。直後表情を何とか繕い、鋭く指示を出した。

「何をしてくるか分からない、遠戦を仕掛けて様子を見よう！ 鯰尾、

投石兵を渡すから構えてくれ！」

「はい……アレにぶつけるのはなかなかにくる物がありますけど……」

げんなりした顔で投石兵の刀装玉を受け取り、鯰尾は玉を一撫でして兵を喚ぶ。現れた投石兵はぶんぶん、と投石器を回転させ、ソレに向かつて発射した。

投石器が頭部や胴体にぶつかり、ソレらは壊れた叫び声を上げる。痛みに呻いているのは分かるが、それでも不気味で仕方なかった。

苦しみ悶えていたのであろうソレらは、再び立ち上がって蠢きなが

らカサカサと擬音がしそうな走り方でこちらに向かってきた。

「うげえっ、怒らせたか!」

「頭ほとんど潰れてるよなあれ……よく動けるな」

「不浄の気が強まった気がするね」

「薬研と石切丸さんはどうしてそんな冷静なんですかーっ!?」

「鯰尾、気持ちはよく分かるよ……雅じゃない!!」

「……俺だけ見なくていいのかな」

「見ちゃ駄目です!!」

二振りが恐慌状態に陥ってしまい、獅子王と石切丸がそれぞれ鯰尾、歌仙を抱えてからソレと距離を取ろうとする。しかし鯰尾と同じくらいのソレが猛烈なスピードで近付き、最後尾にいた石切丸を斬ろうと刀を振りかざす。間一髪で気が付いた石切丸は、半歩横にずれる事によってそれを避ける。回避されたソレは、今度こそ石切丸を斬ろうと刃を向けて飛びかかった。

「——駄目ですよ。どんなに悔やんでいたとしても、生きる者をそちらに引きずり込む事としてはなりません」

飛びかかった途中で停止したソレは、次の瞬間胴体から頭部がゴトリ、と落ちた。胴体もバランスを崩してバタンと倒れ伏す。

ギアアアア、と背後にいたソレらが咆哮を上げ、頭と体を切り離れた影に向かって一際大きな二体が詰めて来る。ブン、と水平に薙いだ刀身を影は屈んでやり過ぎ、地面を蹴る。影が懐に入り込んだと思えば、ソレの脇は深く斬り込まれ濁った血を大量に噴き出していた。影は次に、突進して来た穂先を刃で受け止める。しばらく睨み合いが続いたが、影がふつと力を緩めた。直後、バランスを崩したソレの長い柄を蹴り上げる。そして間合いを詰め、心臓を正確に狙って突き刺した。脇と心臓、それぞれを斬られたソレらは金切り声を上げ動きを止めた。倒れ伏した同類を見たソレらは、唸り声を上げて一旦は引き下がる。

呆気に取られている春光隊の中で動けたのは、今まで背後を見ておらず戦闘が起こっていた事をぼんやりとしか理解していなかった長谷部だけだった。振り向いて見覚えのある姿を目に入れると、歓喜を

前面に表した。

「鳴狐！ 無事だったんだな！」

「そちらこそ、ご無事で良かったですよ。春光隊の皆様も、ご無事で何よりです」

「あ、ああ……普通ではないとは思っていたが、凄いな」

歌仙が呆けたままに呟くと、鳴狐は小さく困ったように微笑んだ。「皆様ならこのくらい、難なくこなせると思います。……詳細は移動しながら」

お供の狐がそう言うと、鳴狐は体の向きを反転させて走り出す。春光隊の面々も慌ててその後を追いつめた。

「端的に彼等の事を話しましょう。彼等は我々のような被験者達の死体が、強引に動かされている物です。恐らくは微かに残っていた思考エネルギーを強引に他のエネルギーと繋ぎ合わせたのでしようね。姿形は刀剣男士を模していますが、中身は全くの別物です」

「……死体を」

「彼等は全員我々の友でした。様々な要因でその命を散らしていきましたが……敵は彼等の死体を再利用し、こちらを確実に潰すつもりなのでしよう。そんな死者への冒瀆は、決して見過ごせるものではありません。我々は再び、彼等を眠らせる為にここに来たのです。例えば、刺し違える事になったとしても」

そうだったのか、と獅子王の中の疑問が氷解する。鳴狐の戦い方は見事だったが、どこか執着めいた物を感じていた。けれど、上層部に責められる非がない人や刀の口を封じる為に友達が利用されていたのなら、それに怒りを覚えて何とかしようとするのは当然だろう。

せめて、友達が罪を重ねない内に冥府へと送り返す。鳴狐はそう覚悟して、この地獄に来たのだ。

お供の狐の言葉に、長谷部は声を頼りなく震わせる。

「さ、刺し違えるって……」

「鳴狐も容易くやられるつもりはありませんよう、長谷部殿。けれど、難儀な事には違いありません。——ここに来るまで、鳴狐も少なくともない手傷を負いましたからね」

よく見ると、鳴狐の戦装束には腹部、腕、足に斬られた形跡がある。血が滲んでいる箇所もあり、じわりと戦装束を染めているその赤が、やけに鮮烈に見えた。

そう、襲い来るのは元被験者だけではない。高速槍をはじめとした様々な時間逆行軍のレプリカも、大きな脅威なのだ。現に春光隊が審神者をここまで連れて行くまで、多くの仲間達が足止めとして離脱していった。こちらで残ったのは六振りのみ、かつ薬研の刀装も壊れる寸前だ。

一振りだけで行動している鳴狐も、大いに手を煩わされた事が窺える。しかしそれでも境界が見えて来そうな場所まで進めたのは、相当な手練れだからなのだろう。

「道中で春光隊の方々には道を切り開いて頂かなかつたら、我々もここまで来られたか分かりません。彼等は我々が被験者の対応が出来るという事で、皆様に注意喚起をと送り出して下さって……本当に、宗三殿達がいなかったら、我々はどうなっていたか……」

お供の狐にしては珍しい、喉から絞り出したような声だった。鳴狐も目を伏せて、お供の狐の言葉に頷いた。

鳴狐は目的の為に、途中で残った春光隊の救助を選ばなかった。どんな経緯だったのかは分からない。けれど助力しなかった事に、鳴狐の心が痛んでいないはずがないのだ。今だって目の前の一振りは顔に影を落とし、一匹は尻尾と耳を下げている。助ける選択肢を取らなかった——取れなかった痛みに苦しみ、苛まれているのが見て取れた。

落ち込んでいる鳴狐に歌仙は目を細めて、しつかりとした口調で言った。

「切迫している状況を打開出来る切り札を渡してくれたんだ、宗三達は最高の仕事をしてくれたよ。僕達が最も優先するのは、主を境界まで連れていく事。それが分からない彼等じゃないさ」

「……」

「どんな手を使っても——それこそ命すら懸けて、僕達は主を逃がそうとしているんだ。逆に僕達は僅かな可能性を掴もうと、君を利用す

る事になるだろう。そこまで萎れられる謂れはどこにもないよ」

鳴狐がはつと息を呑み、上げた顔を歌仙に向けてコクリ、と小さく下げた。口も動かしていたようで、歌仙は弱った表情を浮かべていた。

「礼を言われる謂れもないのに。……本当、こんな場所ではなかったらゆっくり話をしたかったよ」

穏やかな声から一転し鋭さを増した言葉に、ここが戦場である事を思い出した。周囲からは鉄がぶつかり合う音や、この状況への恨みが隠し切れない怒号が響いている。

こちらへも、角を生やした大太刀をはじめとした敵が多数押し寄せて来ていた。先程怒らせてしまったのがまずかったのか、被験者の成れの果ても猛烈な勢いで襲い掛かって来ようとしている。

長谷部の声量を抑えた微かな悲鳴に呼応し、六振りは構えた。

「鳴狐、君には被験者の相手を頼みたい！ 露払いはこちらでする！

僕達は逆行陣で行くよ！」

「ええ、お任せを！」

「先手必勝、って奴だな！」

「早めに厄は落としてしまわないとね」

「後は薬研と鯨尾、余り消耗しないように！ これからどんどん暗くなる、夜は君達が要になるからね！」

「了解です！」

「分かっている、大将を守る為だ。力は温存しとくさ」

歌仙が指揮をとり、協力者に最高火力で戦えるよう自隊に配置指示を出していく。そして夜戦の肝となる二振りに注意を促す事も忘れなかった。

それぞれが敵を見据え、戦闘態勢に入る。歌仙は振り返ると、後ろで縮こまっている長谷部とその腕にいる苦しげな審神者を見て、一瞬顔に現れた鬨りを振り払って告げた。

「最後に長谷部、盾兵の用意を！ 今は主の守りを頑丈にしてくれ！」

「わ、分かった！」

長谷部が盾兵の刀装を展開し、輪の中で審神者を抱えて祈るように

眩いた。

「……皆、頑張つて」

幼い少年の声が出たと、誰もが思った。三振りには聞き覚えのある、あの少年の。残り三振りも、その声の主を推測出来た。

それは最大級の応援であり、自身の無力さを噛み締めて苦味を溢れさせた懺悔にも聞こえた。獅子王は声の主の頭を撫で回してやりたい衝動に駆られたが、柄を握りそれを堪える。

「——よっしや、始めるぜ！」

代わりに大きく吼え、己の背中を見せつける。

——様々な感情で押し潰されそうになっている少年を、鼓舞する為に。

*

ここに至るまで時間がかかったのは、距離があつたのは勿論、想像以上に敵を送り込まれて来たからだ。敵は境界に近付く度に強さを増し、それ故に対処にも時間を割かれる。仲間を死地に置いてまでした足止めにも、限度がある。それでも自分達は、仲間達を信じ続けていた。きつと、最上の仕事を果たしてくれた、と。

そう、信じてはいるのだ。しかし——

「足止めして貰つて数が減つているとしても、これは……！」

「ちよつと、多過ぎるね」

「畜生、強くなつてる上に数も多いって、本気で主を殺す気かよ！」

息を切らして、敵を見据える。唸り声を上げる大太刀を斬った数は、もう覚えていない。そして目の前にいる敵の数も、数えている余裕はなかった。

斬つても斬つても斬つても、敵は次々と現れていた。じりじりと境界へと向かつてはいるのだが、相手をしなくてはならない敵が余りにも多過ぎる。

こうしている間にも、審神者の容体は悪化しているのだ。戦闘は最小限にして境界へと急ぎたい、それを悟られているのだろうか。

「皆様、大丈夫ですか!？」

「鳴狐、こちらは気にしなくていい！ 君は被験者の方に集中してく

れ！」

鳴狐の気を逸らせないように、歌仙がそう声を上げて太刀を斬り伏せた。鳴狐は再び肉体が崩壊している被験者へと相對する。

こちらが時間遡行軍のレプリカ達を引き受けているおかげで、鳴狐は順調に被験者の成れの果てを冥府へと送り返していた。成れの果ても随分な数を送り込まれていたが、その全てをたった一振りで沈めていた。しかし鳴狐の負った傷も徐々に深くなり始めている。状態で表すと中傷であり、いつ重傷状態になってもおかしくはない。

成れの果ての残りは後三体。加勢したとしても今の自分達では足手纏いである事に齒噛みしながら、獅子王は目の前の敵大太刀を倒そうと専念し始めた。

敵大太刀は獅子王を値踏みするように見ていたが、雄叫びを上げて刀身を振り回した。獅子王は飛び下がりそれを回避、地を蹴り胴体に向け横へと一閃する。しかし寸前で刀身によって阻まれた。刃がぶつかり合って腕が悲鳴を上げる。再び距離を取り、獅子王は思考を巡らせる。

隙を見つけたとばかりに敵大太刀はニヤリと笑い、足を踏み込んで大きく刃を振り下ろした。しかし、その先に獅子王はいない。後ろに下がったか、それとも横か。しかし標的はどこにもいない。

「――へへっ、隙だらけだぜ！」

その声が聞こえた時には遅かった。浮かび落ちる視界、その先にすんと地に舞い降りる獅子王の姿。何が起こったのかも分からぬまま、その敵大太刀は沈黙した。

獅子王はその敵大太刀に目もくれず、次の敵に斬りかかっていた。薬研は審神者と長谷部の側で警戒しながら、獅子王へ賛辞を贈る。

「見事だな、獅子王。木の上から飛び降りて首を落とすとは、俺もあやかりたいもんだ」

「いや薬研、歌仙の話聞いてたか？ 夜戦に向けて温存しとけって言われてるだろ」

「そうは言ってもいい戦いっぷりを見てみると、血が滾るってもんだろ」

「気持ちには分かるけど自重してくれよ?」

分かつてるよ、と言いなながら薬研は構え直した。その脚にはあちこちに斬られた跡がある。それでも動きにはまだ支障はないようで、軽やかに敵を迎撃していた。

敵と斬り結びながら、獅子王は周囲を見渡す。石切丸にはほぼ傷はなし、歌仙は軽傷で、袖を斬られて腹立たしそうに敵を睨み付けている。鯰尾も薬研の側にいるが、大きな怪我はない。審神者を守っている長谷部は、ある方向を見て泣き出しそうに顔を歪めている。その視線を追って——獅子王は、息を呑んだ。

その先にいたのは、鳴狐だった。腕からはぼたぼたと血を流し、地面に血だまりを作っている。立っているのも辛いのか、体の軸が安定していない。恐らく腹も斬られているのだろう、背中をまげて腹を押さえている。肩にいるお供の狐が、甲高い声を落ち着かせて鳴狐を励ました。

「鳴狐、あとひとりですよ。もう少し、もう少しで皆様を安らかに眠らせて差し上げられます、踏ん張って下さい……!」

「……分かつてる」

残っていたのは、打刀と思われる成れの果てだった。腕や足の筋肉が歪に隆起しており、顔面はもう元となった刀剣男士が誰だったのか判別がつかない。眼光は怪しげに光っていて、発している言葉は分からないが、鳴狐に敵意を向けているのは分かる。

鳴狐に向かって、成れの果てが迫る。袈裟懸けに斬ろうと振り下ろされた刃を、鳴狐は受け流す。二度、三度となく訪れる斬撃を、辛うじて鳴狐は凌いでいた。口から血が漏れている。きつとかなり苦しいはずだ。けれど割って入れる余裕はない。こちらも、別の敵と斬り結んでいるのだから。

弾き、押し出し、迫られ、追いやられる。そう目まぐるしく回る戦局は、唐突に打ち切られた。

成れの果てが、刀装を展開したのだ。数は二十。兵が構えているのは、投石器。音を立てて振り回されている、その標的は——

「長谷部、兵を前に寄せろ!!」

獅子王の叫声に長谷部が慌てて盾兵を前面に掻き集める。しかし焦りが出ているのか、上手く統率が取れていない。そうしている間に、投石器が長谷部達の所へと狙いを定めて飛んで来る。間に合わないと思つたのか、長谷部が審神者を守ろうと体を丸めて覆い隠す。付近にいたはずの盾兵を展開している鯰尾は、敵に阻まれて近付けない。長谷部の周囲には、盾になれる刀はいなかったのだ。

このままでは投石器が長谷部に——最悪の場合、審神者にも当たる。

成れの果てがここまでするとは。せめて、盾兵を持つている自分が立ち塞がっていれば、投石器を防げるかもしれないのに——獅子王は己の立ち位置と、成れの果ての行動を甘く見ていた事を悔いていた。

少なくとも長谷部の大怪我は免れない、誰もがそう思っていた。

「——させるかよー」

——いや、一振り以外はそう思っていた。

比較的長谷部の近くにいた薬研は弾丸のように走り、彼の前に立ちはだかる。そして僅かに残っていた重歩兵を前に出し、投石器の第一波を受け止めさせた。薬研の刀装はこの時点で壊れていたが、投石器の第二波は止まらない。

それでも長谷部の前から動かない薬研は、投石器をその体で受け止めた。頭に、腕に、脚に、胴体に、投石器が鈍い音を立ててぶつかっていく。頭から流れた血が口に入るとペッと吐き捨て、腕の布地は破れて赤く染まり、脚からも血が流れ出し靴下に染み込んでいく。

状態にして、重症。それも次に攻撃を食らえば破壊の道も見えてくる程だ。見えているのだと思つたのか、成れの果てが薬研に向かって走り出す。

しかし、薬研の戦意は落ちていない。柄を握り、鋒を成れの果てへと向ける。眼前に迫った敵の心臓を狙い、思い切り突き出した。

虚を突かれたのか、一瞬成れの果ての動きが鈍くなる。そしてそれを見逃さないものが一振り。

「ありがとうございます、薬研殿」

鳴狐が成れの果ての背後に追い付き、刃を首に当てて横に裂いた。成れの果ての頭部が、空を舞って落ちていく。ドサリ、と音を立てて成れの果ての命は地に転がった。

同時に、薬研が膝について崩れ落ちる。想像していた衝撃が来なかった事を不思議に思った長谷部が顔を上げて、血に塗れた光景を見て悲鳴を上げた。

「薬研!!」

長谷部は立ち上がって薬研の下へと寄り、涙に濡れた声で彼の名を繰り返し呼んだ。戦鬪を終えた春光隊の刀達も、薬研の側へ走る。薬研の目は強い意志の光を宿しているながら、今にも閉ざされようとしていた。

「ごめん、ごめんなさい、俺が、ちゃんと刀装を展開出来なかったから……!」

「……気に、病むな。あんたは、大将を守ろうとしただろう。慣れない戦で、それでも大将を守ろうとしたんだ、上出来だよ」

「それは仕方ありませんよ、長谷部さん。それよりも、これからどうしましょう……」

「夜戦の要である薬研がここまでやられてしまったのは痛いね。鯨尾と僕だけで、どこまでやれるか……」

「夜になると、太刀や大太刀は力を万全に振るえなくなる。何とか日が沈む前に、境界に行きたい所だけ……」

相談中にもごめんなさい、ごめんなさいと繰り返し口にする長谷部。その顔色は酷く悪く、頬には大量の涙が伝っていた。

——「彼」は、小さな子供。それもかつて無意識下で親友を殺してしまったトラウマ持ちだ。今度は自分のせいで仲間が死にそうだと苦しんでいる。実際は薬研が「審神者を守る最後の砦である長谷部を守る」という選択をした結果なのだが、その区別がつく程成熟していないのだろう。

だからその頭を、今度こそ獅子王は撫で回した。

「お前はその時出来る最善を尽くした、それでいいだろ。慌てていたかもしれないけど、それでも主を守ろうとしたのは大正解だ」

「でも……」

「……それに、薬研はまだ折れてない。まだ薬研は戦ってるんだ。ならお前も泣くだけじゃなくて、薬研がまた万全に戦えるように支えてやらないと」

ひつく、と嗚咽を一つ漏らしてから長谷部は涙を袖で拭った。小さく頷き、今度は薬研の意識を保とうと呼びかけ始める。

歌仙がその様子に微笑んでから、鳴狐に声を掛ける。

「鳴狐、君も一緒に行くだろうか？ 流石に僕達を守ってくれとは言わないけれど、境界までは共に行動しないかい？」

「ええ、勿論——」

「——いや、皆とはここでお別れだ」

お供の狐がは、と目を見開く。春光隊の刀達も、思いもよらない声に、言葉に愕然とする。

視線が集中しても何も言わない鳴狐に、お供の狐は大きな声で喚き出した。

「鳴狐、何を言っているのです!? セツかくの皆様のご厚意を無下にするといいのですか!？」

「……分かっているだろう、狐。僕はもう、限界なんだ。一緒に行って友達とその大切なひとに迷惑をかけるより、僕は最期まで彼等の為に戦いたい」

鳴狐の姿を見て分かる——分かってしまう。彼はもう、肉体の限界点を超えている。

立っているのがやっとなのか、脚が少し震えている。腹から流れ出ている血も止まらず、斬られた腕の動きも悪いようだ。口から溢れる血を何とか拭って、苦しそうに瞼が重くなっている目を何とか開けている。

このままでは、鳴狐が死ぬ。そう理解した長谷部は再び目に涙を溜めて現実を否定したいと言わんばかりに首を振った。

「……嫌だ、嫌だ、一緒に行こう、鳴狐……境界を超えれば、きっと鳴狐を治してくれるひとがいる、だからお別れなんて——」

「長谷部。春光隊にいる今、優先すべきは大切な審神者が死にかけの

僕か、分からない訳じゃないよね。それに薬研の応急処置をしないと、夜を超えるのも難しくなる。もう死ぬと分かっている奴より、生きている強い方を生かすのは当然の事だ」

鳴狐が血を吐きながら強い口調でそう諭す。審神者を大事に抱える長谷部は俯き、それでも諦め切れないのか首を横に振って嫌だ、嫌だと口にしていった。

鳴狐は途切れ途切れになりながらも、友に向けて最期の言葉を紡ぎ出す。

「……長谷部。僕は長谷部と友達になれて嬉しかった。辛い事の方が多かった生涯だったけど、長谷部と過ごした時間は確かに幸せだったよ。幸せをくれた友達の為にこの命を使えるんだ、僕は果報者だ」

「鳴狐……」

「これは、果報者の僕が最後に願う事。——生きろ、長谷部。どんなに辛い事があっても死にたくなくても、最後に笑っていられたら最高なんだ。僕は、長谷部にはそうあって欲しい」

「……酷い、酷いよ、自分は死ぬのに、俺には生きろだなんて……」

長谷部の頬に一筋、涙が流れる。油断が出来ない状況で友達が死に逝く悲しみを、それだけで抑えられたのは幼い「彼」にしては上々の結果だろう。

「ごめんね、と言ってから鳴狐は春光隊に頭を下げた。

「春光隊の皆、話を聞いてくれてありがとう。まともに話を聞いてくれた普通の刀剣男士は、春光隊の皆が初めてだった。審神者を救える事を、祈っているよ」

「……ああ、こちらこそありがとう。君がいなかったら、僕達がどうなっていたか分からなかった」

「構わない、僕が望んだ事だから。……境界まではもう目と鼻の先だ。後もう少し、頑張つて」

鳴狐は頭を上げ、春光隊に背を向ける。その先に、敵が大量に現れた。春光隊は薬研を石切丸に抱えさせてから立ち上がり、静かに後退を始める。

鳴狐は刃を敵に向け、駆け出しながら鋭く告げた。

「——行って！」

それを合図に、春光隊は走り始めた。背後からは激しい剣戟の音が響いている。

長谷部は目を伏せながら、それでも一度も後ろを見る事はなかった。

▽▽▽

「……ぎつね、鳴狐！」

甲高い声が、必死に名前を呼んでいる。仰向けに倒れている鳴狐は、目を薄く開けてその声の主を視界に入れた。

「目を開けなさい、息をしなさい、立ち上がりなさい！ ……あの子が幸せになるのを、本当は見届けたいのですでしょう!? なら倒れるのはまだ早いです！ 気をしっかり持つのです、まだ貴方は——幸せになっていない！」

その言葉に、小さく笑えていたかは分からない。けれどお供の狐は、息を吞んで口を止めた。

「……あり、がとう、狐。鳴狐じゃないのに、お前は、僕の幸せを願ってくれた」

「何を言いますか、貴方は立派に鳴狐を務めたでしょう！ 本当はやりたい事が沢山あったはずなのに、貴方は刀剣男士として生きる事を選んだ！ 鳴狐だって、貴方の幸せを願っておりました！ わたくしは、貴方を使い潰そうとした人間が、この世界が、本当に——」

「駄目だよ、狐。僕は、そんな事思っていない」

咳き込んだ勢いで、血が噴き出す。鉄臭い味が口内を蹂躪しているのを感じながら、鳴狐は木々の隙間から見える夕空を見上げた。

「確かに、あまり綺麗な物だとは思えないけど……それでも、僕はこの世界が好きなんだ。薄汚れた世界で、僕は長谷部と——トシキと友達になれた。いじめられっ子のナオキとしては、奇跡みたいな事だったよ。お前は僕の代わりに言葉を尽くしてくれた。上手く話せなかった昔とは、比べ物にならないくらい話が出来たんだ。……僕は、例え使い潰される為にこうなったとしても、『鳴狐』になれて良かったって、思えるよ」

鳴狐の息が、細くなっていく。彼の命が潰えるのは、もう避けられない。

大量に鉄屑の転がる周囲を見渡し、お供の狐は耳を下げ、小さな声で呟いた。

「……貴方のような子供が戦わなくてはならないなんて、この世界は本当に悲しく、憤ろしいですね。鳴狐——ナオキ」

14—8 「Witness／獅子王』お願いします』
（後）」

息を切らせて走り続け、敵がある程度振り切ってから春光隊は大きな木の陰に身を隠す。石切丸が薬研を木の幹にもたれ掛からせ、声を潜めて尋ねた。

「薬研さん、私達に出来る事はあるかな？」

「……巾着から鎮痛剤と包帯、剪刀を出してくれ」

「鎮痛剤というのはこれかな。包帯はどのように巻けばいい？」

「ああそうだ、ありがとう。……口で言うから、その通りに巻いてくれ」

薬研の指示に従い、慣れない手つきで石切丸が包帯を巻いていく。その間に薬研は鎮痛剤を飲み下し、木の幹に体重を預けていた。時折痛みが走るのか、表情を歪めて声を抑えている。

鯨尾が風呂敷から水の入った水筒を出し、蓋を開け薬研に手渡した。ほとんど口を利けないのか、薬研は声にはせず口を動かすだけだ。恐らくは礼を述べたのだろう。少しずつ水を飲んで、半分くらい減らしてから水筒を返す。鯨尾は水筒の残量を確認してから、蓋を閉めて風呂敷に戻す。

獅子王は、周囲の警戒だ。敵がある程度振り切ったとはいえ、まだ辺りには逃亡者をうろうろと探している敵がいる。低く唸る声は、こちらに近付いたと思えば遠ざかったりと緊張を解く事が出来ない状況が続いている。唸り声が近づく度に、長谷部が怯えて震えているのが分かった。

「薬研、正直に答えてくれ。このまま進めそうかい？」

歌仙が片膝をついて薬研の具合を確認する。薬研は肩や脚を動かそうと試みていたが、思うように動かないらしい。不器用に巻かれた包帯は血の色に染まり、じわじわと白を侵食していた。

「……難しいな。四肢がほとんど動かねえ。俺は、ここまでか」

「そんな……」

薄々分かっていた。だって薬研は満身創痍だ。こうして口を利く事だって大層辛いはずなのだ。

長谷部だけがショックを隠し切れぬ声漏らしていた。今まで平気だ、大丈夫だと言ってきたが目の前に仲間の死が迫っているのが恐ろしいのだろう。薬研は重たい瞼を力いっぱい開いて、長谷部に気丈に言って見せた。

「大丈夫だ、俺は最期まで戦う。俺達は戦場で折れてこそ本望だからな。何か支える物はないか？ 鎮痛剤ももうすぐ効いてくる頃だろうし、そろそろ立ってみねえと」

血塗れで、四肢も思うように動かせない。それなのに、薬研の戦意は全く衰えていなかった。まだ戦えるのなら、最期まで戦って貰わねばならない。人間を守る為に折れるまで使われるのは、刀の本懐だからだ。

「……………どうして……………」

「そりゃ、そうある事が俺達だからな。まさか今更知らないなんて——」

「違う！……………どうして、どうして……………」

顔に影を落とし悲痛な顔をしてどうして、を繰り返す。その尋常ならざる様子に、流石におかしいと思つて薬研が口を開こうとした。

「ビーン、と弓を射る音がした。どこからだ、と獅子王が辺りを見回す。その前に動いていた鯰尾が、木の上から飛び敵短刀を斬り落としたのを視認する。」

「気付けなかった、と慌てていると着地した鯰尾が血相を変えて木の幹へと駆け寄つた。」

「薬研っ!!」

——薬研の心臓に、矢が深々と突き刺さっていた。更に大量の血を吐き、薬研の体から力が失われていく。頭を垂れ、腕はだらしなく下がり、脚はぴくりと痙攣した切り動かない。

石切丸は周囲を見回し刀を構え、獅子王もそれに倣い警戒態勢に入る。焦燥感があるせいか、かたかたと柄を持つ手が震えた。

薬研が、破壊された。それは確定された出来事として春光隊を襲つ

た。

「薬研、薬研！ 嫌だ、嫌だ、死んじや嫌だあ！」

「くっ、僕が早く気付いていれば……！」

「しっかりして、薬研！」

長谷部は恐慌し、歌仙は己の落ち度を悔いていて、鯨尾は必死になつて薬研に呼び掛ける。石切丸は四振りを気にしながら歯噛みしており、獅子王もまた、己の至らなさに歯を軋ませていた。

——畜生、俺が真つ先に斬らなきゃならなかったのに……！

警戒を担当していたのは獅子王だ。本来ならば自分が、薬研への攻撃を防がなくてはならなかったのだ。刀装は一応まだ壊れていない、これ以上ない盾になれたはずなのに。

結果はこれだ。大切な仲間は破壊され、他の仲間を悲しませ、これから重要になる戦力を失ってしまった。これでは審神者を逃がせる確率が大きく下がるだろう、作戦も練り直さねば——そう思っていた。

「……だ」

そう、思っていたのだ。

「嫌だ」

それはあまりにもか細い、けれど力の籠もった声だった。獅子王は耳を疑った。その声の主は今まで、意識が朦朧としていたはずだ。

途端、薬研の体が眩い光に包まれる。光に弾かれた矢がぼろりと地に落ちた。もろに光を受けた三振りはとっさに目をつぶり、異常を感じた石切丸と獅子王はばつと振り返る。

光が消えると、そこには呆然と目を見開いている薬研がいた。包帯が解け、はらはらと地面に舞い落ちる。しかし、薬研はどこにも血が流れていない。試しに手足を動かしても何の支障もなさそうだ。重傷だった事が悪夢であつたかのように、薬研の体には異常がない。ふと薬研が下に目を向け、息を呑んだ。

白い御守り——緊急修理機器の残骸が、壊れた状態でそこにあつた。

「私は、あいつらの手にかけるのだけは嫌だ」

薬研は声のする方へ視線を動かす。長谷部は仰天した顔で声の主——腕の中にいる審神者を見つめていた。

「皆様に繋いで頂いた命を、こんな所で終わらせたくない。私はまだ、望んだ未来へ辿り着いていないのに……！」

審神者は話す事すら辛はずだ。それでも瞳には強い光を揺らめかせ、息を切らしながら語気強く言葉を紡いでいる。

獅子王は驚愕しながら、心が舞い上がっていくのを感じていた。審神者が、自分から生きる事を、未来を自分の意思で望んでいるのだ。かつて自分の心さえ誤魔化し、欲しい物を遠慮していた彼女とは思えない、強い欲と意志が見える。最初期の審神者を知る三振りの喜び方は静かだが、言うまでもなく凄まじい。歌仙は袖で目を拭いながら喜色満面であるし、鯨尾は目を見開き輝かせているし、薬研はまるで勝利を確信したかのように表情を明るくさせていた。

石切丸は固かった表情を緩めている。長谷部だけは事の大きさを理解し切れていないのか、審神者の顔を心配そうに覗き込んでいた。そして、審神者は息を切らしながらも声を張り上げ、刀達に嘆願した。

「お願いします、皆様。私を、あいつらから逃して下さい……！」

審神者は再び長谷部に体重を預け、ぐったりと腕を垂らした。無理をしたのか、再び荒い息をし始め言葉を紡げなくなったらしい。

審神者に見えているか、聞こえているかは定かではない。だが刀達は礼をし、代表して歌仙が答えた。

「——主の命を預かり恐悦至極。その命、必ず果たして見せよう」

歌仙はゆつくりと頭を上げてから、体を動かしている薬研に向かって問う。

「薬研。動けるかい？」

「ああ、全快したぜ。だが刀装がもうないからな、気を付けないといけないのは変わりない」

「刀装なしで悪いけど、存分に働いて貰うよ」

「上等だ、今度こそ奴さんに柄まで通してやる」

勝ち気に笑むその姿は、いつもの薬研だ。うん、と頷いてから歌仙

は声を上げた。

「さあ、進むぞ！ 目的地まであと少し、だが油断だけは決してするな！」

「了解！」

春光隊は歌仙の先導に続いた。夕陽は橙色に輝いて、少しずつ地平線へと沈み始めていた。

境界までは、思っていた程時間はかからなかった。当然敵が現れる度に斬りながら進んでいたのだが、そこまで自分達が斬らなくてもよくなった。

境界付近には、微かな希望に縋った多くの刀剣男士が集まっている。その刀剣男士が苦戦しながら、あるいは道連れにしながら敵を倒していたのだ。

「畜生、どれだけ湧いて出てくるんだよ！」

「あるじさん、あるじさんすっかりして！ 境界の穴が開けば、きつと助かるから！」

「国俊!! ……よくも、国俊を……！」

「境界はまだ開かないの!?!」

「あるじさまあ……っ！ うわあああん！」

「早く開いてくれよ……っ！」

鋼がぶつかる澄んだ音とあっけなく折れる音、境界の開放を急かしたり仲間を折られたりした感情を露にした怒号と、心身の苦痛によって涙に満ちた声。散乱している鋼の破片は敵味方の区別がつかない。

——地獄絵図。境界付近はそう言っただけで差し支えない有様だった。

「歌仙、俺達も探そう」

「そう、だね……ここまで、追い込んでいたとは」

「今は気を確かに持つのが肝要だよ、歌仙さん。長谷部さんは内側に入っ」

「うう……」

長谷部は阿鼻叫喚に圧倒されて顔を青ざめさせている。それでも審神者をしっかりと抱えているのだから、彼はまだ正気を保っている

方だろう。

獅子王は刀剣男士達の隙間を縫って境界へと触れる。ぶにりとした感覚はこんにやくを触った時のそれを思い起こさせる。けれど境界はこんにやくには程遠い。様々な景色が映り込み過ぎて、数多の色を混ぜたパレットのような状態になっている。

手を押し込んでみても、強い反発が起こって奥へは進めない。他の場所にも触れて、押し込んでみる。こちらも跳ね返された。

触っては押し込み、跳ね返されてはまた触れてを繰り返す。少しでも穴がないか触り続けるが、それらしき感覚は見当たらない。

「平野、秋田!! ……すまない、本当にすまない……!」

「何で、僕達がこんな目に……」

「まだ開かないのか!? ……くそ、いつそ特攻してやるか……」

「せめて正気を保ちましょう、そうでなければ見つかる物も見つかりません!」

「怖い、怖いよ……!」

悲痛な声が、鋼が次々と折れる音が、焦燥感を掻き立てられる。すぐ側で起きている悲劇と惨劇は、こちらも他人事ではない。いつ仲間が折れるか、あるいは審神者が息を引き取るか分からないのだ。穴を探している長谷部に抱えられている審神者は、息が細く時折咳き込んで血を吐いている。彼女を見ている獅子王の心は決して穏やかとは言えなかった。

それでも、冷静さを欠いてはならない。誰かが叫んでいたが、そうでなければある物さえも見つからない。獅子王が気合を入れ直して再び境界に手を触れさせた、その時。

銃弾が、手の置かれている位置から五センチ程上にめり込んだ。即座に背後を見ると、既に葉研と鯰尾が刀を構えて敵に向かっている。

「獅子王さん、こっちは俺達が請け負います!」

「あんた達は引き続き境界の穴を探してくれ!」

頼もし過ぎる二振りに頷いて任せると返し、獅子王はまた境界の調査に戻る。

極彩色の柔らかな壁は、相変わらず違う場所の光景を映し出すだけ

で望む変化は起こらない。けれどももう少し探せば、針の穴程でも小さな穴があるかもしれない。蜘蛛の糸に縋るような希望を持ち続けて、獅子王は壁に触れ続ける。

ちらりと仲間がいる方向を見る。歌仙は眉間を押さえ壁を殴る勢いで手を触れさせている。石切丸は氣の流れから穴を探しているらしく、壁に手を触れて即座に次の場所へと触れるなど見切りの速さが凄まじい。妖怪に纏わる刀として、勘に頼るのもいいかもしれないと脳内に書き記す。

そして、長谷部。周囲から響く怒号に肩を跳ねさせながらも、かたかたと手を震わせて懸命に穴を探している。泣く事も許されない状況だと理解しているのだろう、目に涙を溜めていても流すまでには至っていない。

衰弱の激しい審神者を左腕に抱えて、彼女の命の火が消えかけているのに怯えているのは見ても分かる。それでも泣き喚く事もせず必死に穴を探しているその様は、健気以外の言葉で言い表せない。

「彼」の年齢からしたら精神はとうに限界を超えているはずだ。こうして頑張つていられているのは、きつと「長谷部」の力添えも大きいだろう。主が元気になったら労つてやらないとな、と幼子を甘やかす未来を思い描いて、獅子王は穴を探す。

「次から次へと、キリがない……………」

「本当、完全に俺達を壊す気だよな……………」

「…………もう、だめ」

「…………ここはもう、何も無いんじゃないか?」

「疲れたよ……………」

——そんな絶望が見える言葉達を振り切るように、探す、探し続ける。

壁に手を当て、押し込んで、駄目だったら次の場所へ。繰り返して、獅子王も思考回路が鈍り始めている。しかし、壁を探る事を決して止めなかった。

審神者が生き残る為には、最早これ以外の方法はないのだ。本丸に戻っても、大切な仲間の残骸と地獄のような未来が待っているだけだ

ろう。すぐ側に蜘蛛の糸が垂れ下がっている可能性があるのに、手を止める事など出来るものか。

それは仲間達も同じだった。歌仙は眉間にしわを寄せながらも不平不満を一言も漏らしていないし、石切丸も険しい顔で気の流れを探しているようだ。長谷部も審神者に声を掛けながらぺたぺたと穴を探している。

背後では薬研が敵短刀を空中で砕き次の敵へと向きを反転し、鯰尾も獅子王達に迫る敵を次から次へと迎撃している。

戦っている彼等だつて消耗しているはずだ。何とか僅かでも隣接区域に繋がらないかと、獅子王は違う場所へと手を移した。

直後、薬研と鯰尾が更に強く緊張の糸を張り詰めさせる。何があつた、と振り向こうとした獅子王は周囲から漏れ出た言葉に警戒度を跳ね上げさせた。

「あれ、刀剣男士……だよな？」

「いや、にしては黒くない？」

「闇に紛れているだけじゃ……」

何故、その言葉が真つ先に浮かんた。アレは、流浪の鳴狐が殲滅したのを確かに見届けた。それなのにこちらへと来た理由は、それに黒いとは一体――

「――戦っている奴は全員構えろ、アレは俺達の敵だ!!」

薬研の警戒を呼び掛ける大声は、果たして周囲のものに届いたのだろうか。

背後から痛みに喘ぐ悲鳴と、混乱しているのがはつきりと分かる怒号が響き渡る。鋼がぶつかり合う音もした事から、薬研の警告はある程度届いていたと思いたい。それでも、その場は混乱とパニックに陥ってしまった。

「な、何だあれ!？」

「あんな黒い刀剣男士いたっけ!？」

「畜生、速い……!？」

「薙刀までいるぞ、早急に対処しないと――ぐあつ!」

「嘘だ、あれが刀剣男士なんて、信じない!!」

錯乱している声が行き交う中、歌仙は薬研と鯰尾に叫んで問い掛けた。

「薬研、鯰尾！ 敵の構成は?!」

「見た所さつきと同じだ！ 一体どうやってここまで来たんだろうな！」

「伯父さんが仕留め損なつたとは思えませんし、亡霊にでもなつて祟りに来たんですかね！」

「笑えねえよ、兄貴！ こっちは何とかする、あんた達は気を散らすな！」

澄んだ鉄の音が何度も何度も背後から聞こえてくる。振り向く事はせずとも、獅子王は思考を巡らせる。

アレ——被験者達の成れの果ての肉体は全て、流浪の鳴狐が首やら脇やらを斬り使い物にならなくさせていたのを確かに見た。ならば何故、先程と同じ構成でここに来ているのだろう。また肉体を再利用されているのか、それとも本当に亡霊になってここに来ているのだろうか。

破壊される——刀の命が絶たれる音がずっと止まない。その合間に、ざらついた雑音のような、地の底からする轟音のような雄叫びがする。薬研と鯰尾は大丈夫か。そう思つて目線だけ後ろへと送ると

「薬研、これまずいんじゃない……!」

「ああ、どう考えてもまずいな」

鯰尾が焦燥に満ちた声でそう言えば、薬研も忌々しそうに同意した。

——「亡霊」の数が、大きく増えている。黒く揺らめく、闇すら飲み込む漆黒を纏うソレらは、刃の光沢さえも影の中に沈めていた。

戦っている刀剣男士もまあまああの数はいるが、それでもこちらが押されている状況だった。薬研も鯰尾も中傷、早めに決着をつけなければ破壊されかねない。

鯰尾が「亡霊」の刀を持つ腕を斬り落とす。刀が砂となり消えたと思えば「亡霊」の肩がうねり、まるで発芽するように腕が伸びていく。

そして手には、元通りに漆黒の刀があった。

「ああ、ここに流浪の伯父さんがいたら……！」

「伯父貴も流石に想定外だろ、こんなの！俺達に搭載して欲しいくらい回復力だな！」

どの部位を斬つても、あつという間に元に戻つてしまう。こちらは傷や疲労が溜まる一方。防戦するしかない不利が過ぎる戦いの中で、鋼の碎ける音は止まない。

薬研の動きが、再び鈍り始めた。状態にして重傷、それでも彼は突破口を探そうと目を光らせている。鯨尾もまだ刃を構えているが、その腕は小さく震えている。

「薬研、大丈夫？」

「また、まづくなつて来たな。兄貴は？」

「……俺も、正直やばい。早く境界開かないかなあ……」

その声には疲労の色を隠せていない。二振り共そろそろ限界が近づいている。他の刀剣男士も疲弊しており、戦う事を諦めてしまっているものもいる。

獅子王は感情のままに境界を押し込んでみるが、当然何の反応もない。歌仙は境界を殴りつけ、長谷部は審神者の顔色を見て悲しそうに顔を歪め、石切丸は小さく歯噛みする。

——ここで、終わりなのか。

何も出来なかった事が悔しい、苦しそうに息をする審神者が悲しい、敵のやり口が腹立たしい。審神者を救えない無力な自分は勿論、こんな事になるまで審神者を追い込んだ敵にも、獅子王は波打つ感情を抑えられなかった。

その感情のまま、獅子王は歌仙のように境界に感情を乗せて拳を叩き込んだ。

——はずだった。

拳は空振り、獅子王は前に倒れる。背中の上に何か落ちて来てぐえ、と声を上げてしまう。痛え、という低い声から薬研が乗っているのだと分かった。

近くにいるはずの仲間を探す。歌仙も石切丸もうつ伏せになって

いて、長谷部は審神者を庇うように横向きになっていた。鯰尾は石切丸の背中に倒れていた。

何が、と思つて境界があつたはずの前面を見る。そして目を見開く。

少し離れた場所に、刀剣男士が所狭しと並んでいたのだ。相手は傷一つなく、こちらを見ている事が辛うじて判断出来る程度にしか様子は分からない。

——先回り、されてたのか。

獅子王はその光景を見て、諦観の息を吐く。刀剣男士達の表情は分からないが、全員こちらへ殺気を向けていたのだ。楽観視出来る程獅子王は耄碌していなかった。

——畜生、主だけでも逃がしたかつたなあ。

視界が滲む。意識さえも朦朧として来たのか、瞼が重たくなつて来た。握る拳にも力が入らない。

だから、最初はそれが幻聴だと思つたのだ。

「主。手前にいるぼろぼろの刀剣男士達、あれが？」

「そうだ、加州。……悲しいなあ、あそこまで追い詰めていたとは。政府に勤める者として嘆かわしいよ」

「そんな奴ら、ただで済ますつもりはないでしょ？」

「当然だ」

何だ、その会話は。獅子王は訝しむ。その内容はまるで、自分達が救われるかのような物言いじゃないか。

いや、信じてはいけない。だって、希望から叩き落とすのは、絶望させる常套手段だ。

しかし、絶望を崩す言葉は紡がれ続ける。

「……皆不安そうにしているな、当然の事だが。では、そろそろ安心して貰おうか」

そして、初老と思われる男性の命令は、獅子王達に決定的な光をもたらした。

「——総員に告げる。亡命者を保護し、敵を蹂躪せよ！」

その命令と受けた刀剣男士達は凄まじい勢いでこちらへと駆けて

——獅子王達の脇をすり抜けた。そして背後からは激しい剣戟の音。獅子王の下にとこと足が近付き、目の前まで来ると白い脚が折り畳まれて膝が見えた。その脚の持ち主は獅子王に優しく語り掛ける。

「僕達は皆さんを助けに来ました。もう大丈夫です、敵は僕達がやつつけます。本当に、お疲れ様でした」

白い脚は立ち上がり、鋭い声で「銃兵、構えて下さい！」と叫びながら刀装を展開した。見渡せば短刀達が銃兵を展開している。そして発砲し——敵を撃ち抜いていく。

——助かった、のか？

そして白い脚は駆けて行き、その後につき短刀達が走り抜けていく。起き上がり背後を見ると、短刀達が「亡霊」や時間遡行軍のレプリカを斬り倒していくのが、脇差と打刀が強力して斬り進んでいくのが、見えた。

そして、息を大きく吐いている歌仙と石切丸が、審神者の容態を確かめている薬研と長谷部が、そして涙を流している鯰尾も、一様に安堵している様子が、見えた。

光が、確かに差し込んで来たのだ。

——助かった。俺達、助かったんだ！

獅子王は拳を握り、思わず天に向かって大きく叫んでいた。それはさながら、己の名を示す獅子の如く。

目から溢れる物をそのままに、獅子王は叫び続けた。体力が尽きて倒れるまで、ずっと。

雀の囀りが聞こえる。目の裏にある温もりに、優しい光を受けていると分かる。少し薬品の匂いがして、鼻がつんとする。全身が脱力している事から、自分は横たわっているのだろうか。

目を開ける。白い天井がまず映った。視線を下にやると、ふかふかとした白い布団があった。頭を支える固さのある柔らかな物は枕だろう。背中にある物は反発があり、体の重みをいい具合に分散してくれる。

どうやら自分はベッドに寝かされていたらしい。横を見ると窓枠から枯れている木が見える。枝の上に雀が留まっついて、ちゅんちゅんと歌声を披露している。

ゆっくりと起き上がる。周囲を見渡すと、ここは個室ではなく、自分は窓際のベッドで寝かされていたと判断出来た。他の五つのベッドは既に空で、寝具が乱雑に畳まれていたり、きっちり畳まれていたりと様々だ。

体は問題なく動くようだが、まだ疲労が抜けていないと文句を言っているように思える。それでも動かねばなるまい。

よっ、と足をベッドの外に出して履物を探す。そこまでして、体はどうなっているんだと思に至る。

体はいつの間にか清められていた。服装は水色の検査着。ベッドの横にあつた履物は、「交喙病院」と記されたスリッパだ。それを履いて、獅子王は部屋の外へと向かう。

「おっ……と」

「悪い、大丈夫か……って」

ドアに手をかけようとした途端、ガラリとドアが開く。目の前に現れたひとにぶつかりそうになって謝ろうとしたが、菖蒲色の頭を見て改めて言葉を繋げた。

「悪い、歌仙。大丈夫か？」

「……」

黙り込んだ歌仙にどうしたんだ、と声を掛けようと顔を覗き込み——獅子王は言葉を失った。

彼の顔からは、一切の表情が抜け落ちている。雅じゃないと嘆く顔や、風流を喜ぶ笑顔でも、戦に行く時の気を引き締めた顔、どれもなかったのだ。

本当にどうしたんだ、と言おうとして——獅子王は、審神者の事に思い至った。

「そうだ、主は？　もう目を覚ましてるのか？　なら挨拶に行かないと——」

「獅子王」

そこでようやく、歌仙は表情を変えた。——今にも泣き出しそうに、目を伏せて唇を震わせる。

獅子王の中で、不穏な予感が湧き上がる。歌仙はその予感を肯定する事実を、口にした。

「四振りには伝えたけど、準備が出来次第集中治療室前に来てくれ。

——主は、今日が山だそうだ」

獅子王の視界が、真っ白に反転する。

希望から叩き落とすのは、絶望させる常套手段だ。それを知っていた、はずだったのに。

ダン、という音と共に、白い壁に僅かな振動が走る。音と振動の発生源である己の拳を握り締め、獅子王は絞り出すように無念を吐き出した。

「畜生、主が、どうして……!」

それは、その場にいる全員のことを表していた。言葉にはせずとも沈痛な面持ちをしている春光隊の面子は、その言葉に何も応えられない。

——明日までもつか、それすらも保証出来ません。我々も出来る限りの事はしますが、心の準備をしておいて下さい。

気絶するように眠り、目が覚めて審神者の様子を見に行こうとした早朝。薬研と共に医師の見解を聞いた歌仙は、希望が断たれた事に強い目眩を起こしてしまった。薬研にとっさに支えられたものの、頭を起こす事が出来ない。目頭が痛み、一つ雫を落とすと次から次へと雫は溢れ出る。

境界さえ超えれば、何もかもが良くなると信じて動いていた。きつと審神者は医師に診て貰えて、病院で治療して、自分達の主として再び活動出来るようになるのだと。足止めしてくれた仲間達の願いも叶って、きつと彼等も浮かばれるはずだと。

しかし、結果はこれだ。審神者は、とうに限界を超えていた。むしろ今日までよく生き延びたと、医師に驚かれたくらいなのだ。地獄のようなあの場所ではなく、平穏と言えるこの区域まで逃げ延び命を繋いだ、それが奇跡なのだ。

審神者の奇跡は、もう使い果たしてしまった。彼女との別れを受け入れる事、それが今の歌仙達に課されている命題だ。

「……服、用意して来る」

重い足取りで長谷部は歩き出す。背中を丸めてとぼとぼと消えて行くその様は、痛々しくて仕方がない。長く転々として来てようやく受け入れてくれた場所の主人が、予断を許さない状況になってしまった。「彼等」だって、相当に悲しんでいるはずなのだ。一人になろうと

しているのは、きつと「長谷部」のプライドからだ。

先に病室へと入るよう看護師に告げられて、五振りは手をアルコールで清めて中に入る。

病室の一番手前にあるベッドに、審神者はいた。体に様々な管を繋がれ、口には透明なマスクを着けられている。目を閉ざしているが呼吸は辛うじてしているらしく、ベッド横に置かれている画面に数値と波打つ線が映し出されている。

ベッドの側に立ち、審神者に声を掛けようとする。けれど、何も言葉にする事が出来ない。口を開けばみつともなく泣き縋ってしまいそうで、それでも話しておかなければと思っても、彼女に掛ける言葉が分からない。

体を得てから、初めて人間と死に別れる。歌仙はどうしても、言っではならない言葉を言ってしまうような自分を恐れて、何も話せなかった。他の刀も何を話せばいいのか分からないのだろう、歌仙と同じように沈痛な面持ちで沈黙し続けていた。

看護師がいつの間にか、審神者からマスクを外していたらしい。目を微かに開けている審神者は、苦しそうに息を吐きながら微笑んだ。「そんな顔をしないで下さい。私は、充分幸せでしたよ」

違う、と言いたくなかった。審神者はもつと幸せになれるはずだったのだ。刀達と心を通わせて、いずれは人間の友達も作って、そして優しさを持った綺麗な女性になって欲しかったのに。

もう少し、早く決断していれば。それはたらればの話だ。けれど、そう思わずにはいられなかった。

「ああ、でも……」

審神者は目を伏せて、微かに諦観を乗せ呟いた。

「……私は、こうして生きていた事すら忘れられちゃうんでしうか。それは少し、寂しいですね」

——ああ、ようやく言葉にしてくれた。歌仙は目頭を熱くさせながら、目を閉じた。

審神者は刀剣男士に対して個人的な欲求はほとんどしなかった。それは彼女の育ちの所以なのかもしれない。けれど、子供はある程度

のわがままを言うのが健全だろう。その点で、彼女は不健全であった。時々ぬいぐるみを欲しそうに見ていたり、己の中の恐怖を吐露していたりしていたくらいだ。短刀達と混ざって遊んでいる事もあったが、自発的ではなかった。

その彼女が、今際の際にだが自分を忘れないで欲しいと願いを口にしたのだ。元気な状態なら存分に祝福したかった。

本当に——本当に、世界は意地が悪い。

「忘れない」

歌仙は声を震わせて、そう断言した。審神者が虚ろな目で歌仙を見つめる。

「忘れるものか。君はいっただって、僕達の事を理解しようとする、細やかな配慮していたじゃないか。それにどんな苦境でも頑張つて生きようとしていた。その生き様を、優しくあろうとしたその姿を、忘れるのは僕が許せない。僕は決して、君の事を忘れないと誓おう」

審神者は虚ろな目にうつすらと驚きの色を乗せる。続けて薬研達も、審神者に向かって決意を表した。

「俺も忘れない。あんたみたいな子供が、幸せを掴もうと動いていたのを知ってる。命を粗末にしなかった人間を、悪いようには思わねえよ」

「俺も、忘れません。懸命に生きようとした優しい人を、俺は絶対に忘れたくないです」

「……どうして、もっと早く言ってくれなかったかなあ。主との付き合いは長いとは言えないけど、意地がある人間だって知ってたら、ただの優しいだけの人間じゃないって分かっていたら、話せなかった事を悔いる事だっけなかったのに。きつと忘れられねえよ、ずっと」

「主は、不思議な子供だった。清い心と強い意志を持っていたのに、自分の事はおざなりにしていたんだ。どうしてそうだったのか、知った今では……忘れる訳にはいかなかった。主みたいな子は、この世に沢山いるのだと忘れる事が罪だと知ったからね」

審神者の小さな手を握り、五振りには審神者に忘れないと宣誓している。小さな手からは温度が少しずつ抜け落ち始めていたが、審神者は

確かに刀達の手を握り返した。ありがとうございます、と微かに礼を述べながら。

「……でもいいんですよ、忘れたって。だって皆様は、これから次の審神者様に仕える事になるかもしれない。その時に、私の記憶など邪魔でしよう？ 時折、そんな人間がいたと一瞬思い返すだけでいいんです。私は、それで充分ですから」

まだそんな事を言うか、と嘆息したが、実際に彼等は選択する事を強いられていた。刀解、戦場での破壊、別の部隊への配属。この区域の上層部からはゆつくり考えるといい、と言われていたが、五振りはそれらを選べる気がしなかった。刀解と破壊は論外、別部隊への配属だって、主に考えなければならぬのは新たな審神者だ。今の審神者を忘れたくない彼等にとっては、苦行であると言える。

それに——春光隊は、この区域の上層部を信じ切れていない。あの区域の上層部とは違うのかも知れない。けれど似たような状態である事を否定も出来ないのだ。その懸念がある以上、他の部隊に行くのも憚られた。

歌仙は四振りの顔を見てから首を縦に振り、審神者の手を握り直した。

「僕達は、君以外の審神者に仕える気はない。かと言って、刀解や破壊も選ぶ気もないんだ。いつその事、流浪の鳴狐のように政府に属さずに生きていくのもありだと考えている。僕達は、君を忘れる事を選ばないよ」

審神者は目を小さく見開いてから、看護師のいる方へと顔を向けた。看護師に何か話しかけ、窓際に置かれていたクマのぬいぐるみを取り行って貰う。ぬいぐるみを持ち上げた看護師は一瞬訝しむ表情をしながらも、審神者の頭の横に置く。審神者は微笑みながら、歌仙にぬいぐるみを受け取るように告げる。

「これを、長谷部さんに。いざという時に、と言えば分かると思うので」

歌仙はぬいぐるみを持ち上げた。少しずつしりとした重みを感じる。このぬいぐるみは、こんなに重かっただろうか。看護師が変な表

情をしていたのはこのせいか、と考えていると、審神者は五振りに虚ろで不安そうな目を向ける。歌仙は背筋を伸ばし、次の言葉を待った。

「――私は、貴方達の主に、なれていましたか？」

歌仙は悲しそうに目を細めて、審神者の問いに答えた。

「当たり前だよ。君はきつと、完璧な審神者ではなかったんだろうけど。それでも、僕は君が主で良かった」

「そうだな。俺も、あんたが大将で良かった」

「やだなあ、これでお別れなのかと思うと……それぐらい、俺は貴方が大事でしたよ」

「短い付き合いだっただけど、俺もあんたが主になってくれて良かったよ」

「別れというのがこれ程悲しいとはね……私も、君が審神者でいてくれて良かった」

五振りが審神者の手を再び取り、感謝の意を込めて握り締める。審神者は目に涙を溜めて、小さく息を吐いた。

「そうですか、良かった……」

審神者は微笑んで、そう安堵の言葉を漏らす。五振りは目の前に訪れている別れに、心臓を軋ませながら手を離れた。

――そういえば、長谷部は一体どこまで買いに行っただんだ？

歌仙がふとこの場にいないひとりの事を考えていると、審神者が再び口を開いた。

「……それと、ぬいぐるみを使うのなら、もう一つお願いしてもいいですか？」

「え？ 君の願いなら、叶えるつもりだけど……」

歌仙は反射的にそう頷いていた。他の四振りも唐突に告げられた問いに小さく頷いた。ありがとうございます、と言ってから審神者は天井を向いて話し始めた。

「あの方は……あの人は、私以上に辛い思いをしてくれました。私は、本当はあの人に幸せになって欲しかったんです」

あの人。それは一体誰で、何故今話に出ているのか。審神者の目に

は、郷愁の気配が見える。彼女は、一体自分達に何を願うつもりなのか。

「だけど、私は皆様の主だから。なかなかあの人だけにかかりつきりにする訳にはいかなかった」

「主……何を言っているんですか？」

鯨尾が疑問の色を隠そうともせずと言った。他の三振りも、似たような表情だった。それはそうだ、いきなり知らない誰かの話を出されて、困惑しない訳がない。

しかし、次に続く言葉で——歌仙の顔が驚愕で強張った。

「長谷部さんの事を——お兄ちゃんの事を、皆様にお願ひしたいんです。皆様がこの世界に生まれてきて良かったと私に思わせてくれたように、あの人にもそう思っただけで貰いたいんです」

——は？ 今、主は何と言った？

率直に思ったのは、混乱の渦に叩き込まれた一言だった。

刀剣男士に姉妹はいない。だとしたら、彼女が言う「お兄ちゃん」とは——「彼」以外にあり得ない。

「彼」には確かに、妹がいると言っていた。そして研究所で引き離されて以来、彼女をずっと探していたとも。

もし、彼女の言う事が出任せでなかったとしたら、彼女は——

ドサリ、と物が落ちる音がした。静寂に支配されたその空間で、その音がやけに耳に響く。

ぱつと振り返ると、顔を強張らせて目を見開き、顔色を悪くさせている長谷部が立っていた。

「……どういう事ですか」

長谷部は落ちた荷物など目もくれず、真つ先に審神者のいるベッドへと歩み寄る。そして審神者の顔を覗き込むように身を乗り出し、審神者へと迫った。

「今の……つどういう事ですか。貴方が、俺の……それは、本当に——
どういう事なの、ねえ！」

長谷部の語調が乱れている。言うまでもなく、「彼」が前面に出ているのだろう。隠し事を詰問するような、事実を否定して欲しいと懇願

するような、震える悲痛な声で長谷部は叫んだ。

けれど、現実には「彼」に冷酷だった。

「——お兄ちゃん、ごめんね」

審神者が腕をゆつくりと持ち上げて、長谷部の頬に指をあてがう。そして微かな力を振り絞り、彼の頬に流れている涙の痕ごと拭い去った。

「私ね、お兄ちゃんに幸せになつて欲しかった。地獄のようなあの場所ですつとお兄ちゃんに幸せを貰ってきたから、それを少しでも返せればと思つたの。……でも、私は審神者になつた。私情で一人だけにかかりつきりにする事は、どうしてもできなかったの」

審神者が長谷部の片頬を包んで、言葉を紡いで行く。長谷部は震える手で審神者の手を握り、唇を震わせていた。

「……お兄ちゃん。いっぱい泣いて、いっぱい怒つて、いっぱい笑つて、いっぱい皆に頼つてね。それは、きっと大きくなるのに必要な事。

——幸せになるのに、必要な事」

——審神者の覚悟を舐めていた。それを今になつては悔やむ事しか出来ない。

どんなに悲惨な境遇だったとしても、きつと肉親に会つたならそれなりの感情を露わにすると思つていたので。例えば恐るべき、憎むべき親へは激情を。例えば、庇つていたという仲のいい兄なら歓喜を示すのではないかと。

それは彼女を「ただの子供」だと侮つていた事に他ならない。

——僕達の為に、会いたかつたはずの兄への思慕を表に出さず、ずつと……。

審神者になつたのだから、刀達へ平等に接していかなければならない。その制約を己にかけていた彼女は、自分が「彼」の妹である事をおくびにも出さなかつた。精々「彼」と精神年齢が近いから懐いている、ぐらいいしか見えないように振る舞つていたので。

今剣の推測は正しかった。他の短刀達が否定しても、もつと彼に話を聞くべきだった。そう思つてももう、何もかもが遅いのだが。

「……お土産話、沢山持つて帰つてきてね」

審神者の手から、力が失われていく。それでも彼女は微笑み続けた。長谷部の涙は溢れ続けて、審神者の手を濡らしている。長谷部の顔はしどどに、ぐちゃぐちゃになってしまっていた。

「できれば八十年分くらいあると、嬉しい、な」

ふっ、と審神者の息が止まり、直後に耳障りな電子音が響く。絶命を示す電子音は、あまりにも無情に兄妹の別れを告げていた。

長谷部は無機質な電子音に一瞬表情を失くして——それから涙を更に溢れさせ、叫んだ。

「うっ——うああああ……っ！ トモエえ……っ、何で、何で……っ！！」

長谷部の——「彼」の慟哭が、病室に轟く。もう何も言わない彼女の手を握り、どうして、どうしてと問いを繰り返す。そうする事しか出来ないのだろう。目の前にある現実は、「彼」にとって余りにも酷過ぎたのだ。

どんなに叫んでも、縋っても。懇願も祈りも届かないと分かっているても、「彼」にはそうするしかない。

歌仙達は、何も言えなかった。——最期の最期まで兄妹を兄妹として会わせなかったのは、自分達だと理解してしまったから。

「……しばらく、二人だけにしてあげよう」

そう告げた歌仙に、四振りには悲しそうに黙って頷いた。少し外に出てるから、と言って四振りには病室から出て行く。

歌仙は最後に泣き続ける兄と穏やかな顔で眠る妹を目に焼き付けてから、病室を出た。

やるべき事を終え、自分達の病室に戻った夜更け。トイレに行った長谷部を除く五振りは、それぞれのベッドの上で話をしていった。歓談と言うには、その空気は余りにも重かったが。

「……引つかかる所はあったんです」

俯いた鯰尾がそう言って布団を握る。水色の検査着を纏い、下半身だけ布団に潜らせている彼は、懺悔するようにぼつぼつと溢し始めた。

「未だに上手く説明出来ないんですけど。でも、何か長谷部さんと主は仲が良いなあつて、思ってたんです。当時は、同じ研究所出身だから通じるものがあるのかなって、軽く考えてたんですけど……手掛かりは、あちこちにあったのに。気付けなかったのが、悲しくて、悔しいです」

「……僕も、何でもっとよく調べなかったのかな。主に兄がいると分かっていたのに、それ以上の事を知らうともしなかった。本当、情けないよ」

「そう、だな……俺も、さんざつばら長谷部と話をしていたのに、何一つ真実に辿り着けなかった。そして気付いた時には全てが手遅れ……悔やんでも悔やみ切れん」

初期からいた三振りは、長谷部と審神者の血縁に全く気付けなかった事を口惜しく思っていた。当然だ、過ぎた時間が後から来た二振りよりも遥かに長かったのに、真実に行き着く事が出来なかったのだから。

その結果が、長谷部の現状である。

審神者が息を引き取った後、「彼」は鳴りを潜め「長谷部」が表に出る事が多くなった。彼もまた審神者と「彼」の關係に気付けなかったものの一振りだ。「彼」が泣き崩れた後、一言も言葉を発しないと「長谷部」は話していた。彼も相当参っている様子で、早まった事をしなければいいが、と言うその顔はやつれていた。

石切丸と獅子王も、悲しみを滲ませて話し出す。

「今剣さんの話を、もつと真面目に聞いておくんだったなあ……。余りにも出来過ぎた話だったから、そんな事ある訳ないって真に受けなかったんだ」

「傷付き疲れ果てた兄を、生き別れた妹が救う……確かに出来過ぎた話だな、普通なら。でも、その可能性を微塵も考えなかった俺達も、捻くれてたのかね」

獅子王の言葉を最後に、沈黙が下りる。それぞれが後悔の味を噛み締めて、目を伏せ黙り込んでいた。

何がいけなかったのだろう。本丸発足時に審神者が少しだけ話し

た身の上話を、今の彼女には関係ないと忘れるようにしていた事か。それとも、長谷部が来た時に鯨尾ともつと話をしておくべきだったのか。あるいは、審神者が長谷部に懐き始めた時に、調べておくべきだったのか。

考えても、答えは出ない。それでも歌仙は、己を責めるように思考を止めなかった。考えれば考える程、後悔の渦に呑み込まれるとしても、止めようとしなかった。

——思考を止めれば、目に焼き付けたあの光景と嗚咽が浮かぶ。考えていてもいなくても、自身を苛む事には変わりはない。それが、自分への罰だと諦めようとした。

しかし、その自罰思考さえも間違いだと突きつけられる事態が起こる。

「……何か聞こえないか？」

薬研がそう言ってドアの方向を見つめる。何だろう、と鯨尾も耳を澄まし——表情を一変させて布団を蹴飛ばし、ベッドから飛び出した。ドアノブに手を掛けたと同時に薬研が端的に尋ねる。

「何だった？」

「——長谷部さんだ。何か叫んでる、急がないと！」

鯨尾がドアを開け放つと、歌仙にも聞こえて来た。——何かに向かって叫んでいる、長谷部の声が。

歌仙も布団を跳ね上げ、スリッパを履きドアの外へと足を踏み出す。背後から薬研と獅子王、石切丸もついて来ているのを確かめ、息を切らして声のする方向へと駆ける。

どこにいる。耳を研ぎ澄ませて声のする場所を探し、どうやら長谷部はロビーにいらしいと判断する。

ロビーに向かって走ると、段々と長谷部の声が鮮明になって来る。そして、こう聞き取れた。

「——ふざけるな、主の最期の願いをふいにするつもりか！ 主は、お前の沢山の土産話をご所望だろう!？」

さあつと血の気が引く。手が汗ばんでいる。その一言で、大体の状況が分かってしまった。悠長に己の傷を抉っている場合ではなかったようだ。

ロビーに足を踏み入れると、長谷部が虚空に向かって叫んでいた。普通に見れば気がおかしくなってしまうのだと思うだろう。

けれど歌仙達は知っている。——長谷部の中に存在する、もう一人の存在を。

真つ先に到着していた鯨尾が、青ざめた顔で長谷部の肩を横から叩いた。

「長谷部さん、どうしました!？」

「お前達か！ お前達からも何とか言ってみてやってくれ！ ——トシキが、また消えかかっているんだ!！」

推測出来た状況の悪化が起こってしまった、歌仙は悲しいもどかしさを抱く。こんな時に限って、かけるべき言葉が見つからない。

だって、何と言えいいのか。自分達に配慮した結果、審神者は最期の最期まで己の正体を明かさなかった。それが彼女の選択だと言えばそうなのだろう。けれど初めの刀として、もう少し何とか出来たのでは、と思わずにはいられない。

兄妹が兄妹として過ごせなかったのは、自分が至らなかつたからだ。としか考えられなかつた。そんな自分が、そもそも声をかけていいの

か。

「ねえ、聞こえてる!? お願いだから消えないでよ! 俺達だって、君に消えて欲しくなんかないんだから!」

「命を手放す真似をしたら駄目だ! 大将の願いを踏み躪らないでくれ!」

「ごめん、ごめんな、俺達がもつと早く気付けていたら……!」

「君の命運はまだ尽きていない、気をしっかり持つんだ!」

四振りは、「彼」に声をかける事を選んだ。それぞれの言葉で、「彼」を生かそうと必死に呼びかけている。自責の念よりも、今日の前にある命を優先したのだろう。

そうだ、過去のことを悔いて今しなければならぬ事に向かわないのは絶対に駄目だ。四振りは今に向かい合っている、ならば自分もそうしなければ。

「駄目だ、何の反応もない……! 歌仙、お前もトシキを説得してくれ!」

「分かっているよ!」

長谷部が継るような顔で歌仙に頼った。反射的に頷いたが、思考はある地点を巡っている。

——分かっているとは言ったけれど、どう声をかければいいのか。自分は、「彼」に辛い思いをさせたというのに……。

自分に非があつて、それを知っているからこそ尻込みしているのは自覚している。けれど、迷っている時間はない。

「トシキ。この世は風流なもので溢れている。それを君と一緒に見られないのは嫌なんだ。この広い世界の雅な風景を、作品を、物事を、君と一緒に見たい。……それでは、生きる理由にならないかな」

結局歌仙は、いつも自分が口にしてる言葉を用いて「彼」に優しく呼びかけた。

——それが、「彼」の絶望を呼び起こすトリガーになったとも気付かずに。

「……どうして?」

長谷部の口調が、幼いそれに変わった。ひとまず一命を取り留めた

と思い、五振りは安堵の息を吐こうとし――

「彼」の表情が、声が、暗く悲しみに澱んでいたのを見て、絶句した。「どうして、悪い人は優しい人を殺すの？ どうして、こんなに苦しくて、痛くて、悲しいの？ 痛いって叫んでも誰も助けてくれなくて、助けたかった人に手は届かなくて、逃げたいって思う自分が情けなくて、星はいつだって遠くて、こんなにも無力で、神様に祈っても何にも叶わなくて、嫌いだって突き飛ばされて、それが何でか分からなくて、泣きたくなくてもみつともないって笑われて、大人はいつだって怖くて、人は人を踏みつけにしている、幸せなはずなのに不安で、平和はいつだって長く保てなくて、自分の代わりに幸せになって欲しかった人すら不幸になって、優しい気持ちは報われる事がなくて、綺麗な物は手に届かない場所にしかないの？ ねえ、ねえ――どうして？」

澁みなく吐き出されたのは、絶望の羅列。「彼」は影を落としている髪の毛の隙間から、光すら見えない暗い昏い目を五振りに向けた。息をする事もままならず、歌仙はその絶望を湛えた目を見返すしか出来なかった。

肉体を手に入れた頃、これで自分は何でも出来ると思っていた。実際、ただの刀だった頃とは比べ物にならないくらい、出来る事が増えたと思う。

けれど、肉体を手に入れたくらいで万能になれるのなら、自分が見てきた人間があんなに苦悩していたはずがないのだ。それこそ全知全能の神でなければ、無力さに苛まれなくなる事は叶わないだろう。

結局、自分は少年から絶望を完全に取り除く事が出来なかった。むしろ最悪の形で妹の在処を知ってしまい、絶望の海に更に浸る事になってしまった。――世界の汚濁を目にしてしまったその絶望を受け止めるには、彼は余りにも幼過ぎた。

絶望に満ちた疑問に答える事が出来ずに、歌仙が虚しく歯噛みしていると――長谷部の体が、大きく揺れた。

「…………ごめんね」

鯨尾が、長谷部の体を思い切り抱き締めていた。昏い目が、鯨尾の

頭を見つめる。声を涙で濡らして、鯰尾は詫びる言葉を並べた。

「ごめんね、君に幸せな夢を見せられなくて。ごめんね、最悪な形で理不尽を刻み込んでしまつて。ごめんね、君に優しさを信じさせてあげられなくて。ごめんね——俺は、傷つけないようにするって約束を守ることが出来なかつた」

鯰尾はしやくりあげて、長谷部を抱き締める腕に力を込める。背の高い方が抱き締められているという構図だが、歌仙にはその背丈が逆転している幻覚を見ていた。

「そうだよ、この世界は優しさが報われる事が少なくて、悪い人程蔓延っていて。絶望程目について、希望が見えにくいけど……それでも、俺達は君に希望を信じさせてあげるべきだつたんだ。この世界の汚さを知るのは、もう少し大きくなつてからでもよかつたんだ。俺は君にまだ、綺麗な物だけを見せてあげたかつたのに」

鯰尾の長い髪が、嗚咽を漏らす度に揺れている。彼もまた、己の中に絶望を抱えている一振りだろう。明るい面が表に出ている事が多いのでで分かりにくい、彼だつて——いや、刀剣男士の誰もが、己の内に闇を隠しているはずだ。長くこの世にある刀だ、そんな事は不思議でも何でもない。

けれど、「彼」はまだ幼いのだ。百年単位で抱える諦観と絶望を、そんな歳で覚える必要はない。

そう願つても、世界は残酷だ。「彼」のような子供に、理不尽を押し付けているのだから。

「ああ、君に絶望しか見せないようなこんな世界——壊れてしまえば、いいのにな」

そう言つて、鯰尾は泣きじやくる。長谷部を抱く腕はそのままに、肩の辺りに顔を埋めて畜生、と繰り返して零している。長谷部は絶望とそれを受け止められた安心感からか、一粒、また一粒と涙を流し始めた。

次に二振りに歩み寄つたのは、獅子王と石切丸だつた。二振りを包むように抱き締めて、目を潤ませている。

「……獅子王さん、世界とはままならないねえ」

「……ああ。じつちゃんみたいにな、安心させられる事を言えたらいいんだけど……駄目だな。どうしても、俺達の不甲斐なさが前に出て来る」

抱き合いながら涙を落とす四振り。歌仙も視界がぼやけ始めたのを自覚してから、隣にいる薬研と目を合わせて頷いた。そうして二振りも、四振りごと抱き締めて静かに泣き始める。

「……悔しいな、歌仙」

「ああ、本当に——悲しくて、口惜しい」

六振りには月明かりが射す中、抱き締め合い「彼」の心を憂い、己の無力さを痛感していた。心臓の痛みをそのまま表すように、彼等は涙を流し続ける。

大きな窓から見える叢雲。その間から顔を出している月は、悲しい程に優しく彼等を見つめていた。

審神者の葬儀を終え、いよいよ歌仙達も退院の日が迫っていた。病院内に溢れ返っていた刀剣男士や人間も数を減らしていき、歌仙達以外にいる部隊は数える程しかない。かなりのんびりと、自分達は療養していたようだ。

「いやー、どうなるかと思いましたが何とか全快しましたね！」

「そうだね。薬研や君は最後まで戦っていたから治るか心配だったんだけど、元気になって本当に良かった」

「まあ、治る速度は遅かったけどな。本職に見てもらっている訳でもなし、しょうがないっちゃしょうがないが」

朝日が射す病室で自分達の快癒を喜ぶ三振り。その一方で獅子王はある事を思い出してげんなりとしていた。

「俺はほとんど怪我がなかった分、何度かあった事情聴取が辛かったな……」

「嫌な事を思い起こさせるからねえ。制裁が少しでも進むと考えたらまあ、少しの聞き取りは耐えられたけど」

石切丸も苦笑いして獅子王に同意する。獅子王は本当に進むのかね、と言いながらあくびを一つ漏らした。

歌仙達春光隊のいた区域——愛甲区域の制裁が始まったと聞かされたのは、六振りで泣いたあの日から数日後の事情聴取からだ。愛甲区域の上層部による圧制に関与していた人間は一人残らずその地位を剥奪し、その中でも一際非道な事を行っていた者にはこれから政府による裁きが待っているという。

だから貴方達を害する人間は上層部からいなくなる、安心して欲しい——そうは言われても、はいそうですかと納得出来る訳がないのが実情である。こちらは審神者を殺されたような物なのだ、それで過去の傷がなくなると考えているのならとんだ笑い種だ。

「今はその事は忘れましょう。それよりも……」

ぱん、と手を叩いた鯰尾が、ちらりとドア付近のベッドへと視線を向ける。そのベッドの使用者は今ここにはいない。四振りもそのベッドに目を向ける。

ベッドの使用者——長谷部は、ひとりでいる事が多くなった。よく病室を抜け出し、ふらふらと院内をさまい歩いているらしいのだ。

長谷部は肉体よりも、精神的なダメージの方が大きかった。その為専門家によるカウンセリングを受けていたが、成果は芳しくない。病室に戻ってもぼうつとしていたり、布団の中で泣いていたりと不安定な状態が続いているのだ。一朝一夕で傷が癒えるとは思っていないが、自分達には選択が迫られていた。

自分達の答えは、あの夜に決まっている。後は、それを長谷部が受け入れてくれるかどうかだ。

からからと、病室のドアが開く。現れたのは、空いているベッドの使用者たる長谷部だった。

「ただいま」

「おかえり、長谷部。院内の様子はどうだった？」

「……刀剣勇士の数が減ってる。このままいくと、俺達が最後になりそうなんじゃないか？」

「もうそんなになつてたのか。まあ回復するのはいい事だが」

「随分のんびりしてたし、そんなもんだろ」

「俺も早く動けるようになりたいですねー」

「本業を完全に忘れてはならないからねえ」

賑やかに話をしている五振りを、居心地が悪そうに長谷部が見ている。何かを躊躇っていて、でも何かをしなくてはならない、そんな表情だった。五振りはそれには何も触れず、楽しそうな会話を続けた。

しばらくして長谷部は意を決したように顔を上げ、五振りに向かって問い掛けた。

「……やっぱり皆、他の部隊に行くのか？」

——ついに来た。歌仙は布団の中で拳を握る。

ずっと上層部には回答を先延ばしにしていたが、五振りの中では決定事項になっていた事。その提案をする日がついに訪れたのだ。四振りを見渡すと、全員が歌仙に向かって頷いていた。

その間にも、長谷部は裾を握りながらぽつぽつと言葉を繋げていた。

「刀剣男士は、一部を除けば戦う事が幸せなんだって聞いた。だったら皆、他の部隊に行くんじゃないかって……。だとしたら、ここでお別れになるのか？ 少し寂しいけど、それが皆の幸せなら——」

「違うよ、長谷部」

彼等にとつては的を外れた未来予想を遮り、歌仙はベッドから立ち上がり長谷部の前に立つ。

そして五振りの「決意」を、酷く不安そうにしている目の前の存在に告げた。

「僕達は、君に仕えようと思う」

「……え？」

「君を主として、春光隊を存続させる。これが僕達の選んだ答えだ」

ぱちくりと目を瞬かせ、長谷部は歌仙の言葉の意味を咀嚼し——単語にならない声を発して狼狽え始めた。

「え、は、な……俺が主って、どういう……」

「君は刀剣男士だけど、人間でもある。審神者はただの刀剣男士には務まらない。だから、春光隊の主は君以外にはあり得ないんだ」

「で、でも、俺、戦いのやり方とか分からない……」

「それはその都度僕達が教える。そもそも主……君の妹も、最初はほとんど戦術を理解していなかったんだよ？ 本当に最初期だけだったけど、取りあえずこの陣形をとればいいかと言われて頭を抱えたこともあったよ……」

「えっそうだったんですかその話詳しく」

「兄貴、それは後でな」

過去の審神者の話に身を乗り出したせいで薬研に宥められている鯨尾に咳払いを一つして、歌仙は話の筋を元に戻した。

「……審神者の仕事については、僕達が教える。その点に関して心配はいらないよ」

「……俺が審神者になる事を、政府は認めてくれるのかな」

「どんななお上に文句を言われようが、僕達の考えは変わらないよ。政府の事も気にしなくていい、問題は君が頷くか否かだけだ。……君が頷かなければ、僕達は刀解を選ぼうと思っている。戦場で散れないのは口惜しいが、君が是と言わないのならこの世にいる意味もない」

——自分を受け入れてくれた大切な仲間を失う事を、長谷部は絶対に嫌がるだろう。彼の想いにつけ込むのは気が引けたが、歌仙達にも決して譲れない願いがあった。だからこそ、半ば脅しめいた言葉で長谷部を頷かせようと歌仙は口を動かす。

「……何で、そこまでして……」

歌仙の言葉の意味を正確に理解し、長谷部は震える声で問う。それに答えたのは、布団の上で胡坐をかいている薬研だった。

「何で？ そんなの決まってる——お前さんの未来を変える為だよ」

薬研のいる方を向いた長谷部は、訳の分からない不安に満ちた表情をしていた。薬研は膝の上に拳を置き、鋭い目つきで長谷部を見返して理由を述べ始める。

「このままじゃ、お前さんは遠くない内に絶望に呑まれるだろう。世を夢んで死を選ぶか、それとも自棄になって周囲を巻き込んで滅ぶか、他者を寄せ付けず馴れ合わない以上の孤独を選ぶのかは分からない。だけど、俺達全員考えた事は同じだった。そんな未来は選ばせない、つてな」

薬研の言葉を継いで、石切丸が淡い悲しさを湛えた微笑みを長谷部に向けた。

「私は神社暮らしが長かったから、神に祈る程に追い詰められた人は知っていた。けれど、神すら信じられない程に絶望している人を知らなかったんだ。知ってしまったら悲しくなつたよ。ただそこにあるだけでは、神刀である自分でも君みたいな子の絶望を赦えない、って。だから私は、行動に移す事にした」

石切丸は獅子王に目配せをして、話者を交代する。獅子王は戦意を滾らせていた——この世界そのものへと。

「優しいお前が、どうして幸せになれない？ 小さなお前に、何故世界は不遇を押し付ける？ 考えても、答えは出なかった。でもな？ お前が幸せになれない世界なんて、その代わりに世界で一番の幸せ者になれる権利を俺に与えられたとしても、願ひ下げなんだよ」

そう吐き捨てた獅子王の言葉を肯定するように、鯰尾が力強く宣言した。

「君は幸せになれる、不幸なままになんてさせない。これは俺達の、世界に向けての抵抗なんだ。君がどんなに不幸な生い立ちでも、不幸な目に遭つたとしても、幸せはやって来るんだっていつか世界中に向けて叫んでやる。……それぐらいまともな機構じゃなきゃ、希望も何もあつた物じゃないでしょ？」

四振りの話を総括するように、歌仙は長谷部に——「彼」に真剣な表情を向けた。

「僕達が君に望むのはただ一つ、幸せになる事だ。主から託されただけじゃない。この世界はまだ捨てたものじゃないって、希望は絶対にあるんだって、僕達に信じさせて欲しいんだ——君が幸せになる事によつてね。だから、これは僕達からのお願ひだ」

歌仙はそう言つて、「彼」に深々と頭を下げた。「彼」がぎよつとしているのが分かったが、歌仙は頭を下げ続ける。

「どうか生きて、僕達を君の配下にして欲しい。僕達は君の幸せの為なら、喜んで手足になろう。どんな望みも、きつと叶えて見せるから。だから、どうか」

目を丸くしているだろう。「彼」は、何と答えるのだろうか。息を呑んでいるのは分かる、けれどどんな言葉を口にするのかは全く予測がつかなかった。

「……やだ」

今度はこちらが息を呑む番だった。「彼」はもう生きたくない、そこまで絶望を抱えていたのかと、嘆きたくなる。自分達の言葉は無駄だったのかと、泣きたくなる。

しかし、「彼」が続けた言葉は歌仙の感情を一変させた。

「配下なんてやだよ。俺は、心を持った皆を、そんな言葉で縛りたくない。それじゃあ俺が、皆の命を間違つて奪うかもしれない事も、許されるみたいじゃないか。嫌だ、やだ、俺を受け入れてくれたひと達を、そんな風に扱うなんて、絶対に嫌だ！」

——なるほど、「彼」らしい。小さく笑んでいる歌仙の表情は、「彼」には見えない。けれど冗談を言っていると思われたくないので、頭は上げない。

配下という言葉に冷たい響きを覚えて、それを自分達の為に拒絶するのも。命を誤つて奪う事を恐れるのも、刀である自分達に、受け入れてくれたんだと喜んでいた事も。

優しく、本当は寂しがり「彼」らしい拒絶だった。

「じゃあお前は、俺達という事は嫌じゃないんだな？」

「当たり前だよ！ 本当はずっと、皆といたい！ だけど、配下なんて嫌だよ……」

嬉しい事を言ってくれるじゃないかと、歌仙はにやけてしまう顔を抑える。まだ頭を下げ続けているので、その表情は「彼」に全く見えないのだが。

そうか、と言つて獅子王は優しく「彼」に告げた。

「じゃあ、言葉を変えよう。——これからは、俺達がお前の『家族』だ。これなら、受け入れてくれるか？」

獅子王の言い換えに、「彼」はええ、と言葉を詰まらせた。歌仙もそろそろいいかと頭を上げる。「彼」は酷く困惑した顔をしていて、口を手を当てていた。

困惑の理由は、やはりこちらを氣遣う物だった。

「……でも、刀と人では価値観が違うって聞いたよ。人の兄弟と刀の兄弟は違うんだって。だとしたら、それにつき合わせるのも悪いよ……」

「確かに刀と人では価値観が違う所もあるな。正直言つて俺も『家族』がどんななのか、ただの刀だった時に見た事しかないから分からない部分もあるし」

「だよね……」

「——でも、例え最初はままごとでも、続けていけばきつと本当になれる。関係性の形なんてそれぞれなんだ、お前と俺達が『家族』だと思えばそうなれるんだよ」

な、と獅子王は四振りを見回し、それぞれ頷いたのを見てから「彼」に笑いかける。

関係性はそれぞれ、まさしくその通りだ。ある本丸では仲のいい二振りも、別の本丸では仲が悪かったりする。でも、前者がそれを「ただの仲間」と言うのも、後者が「親友だ」と言うのも自由なのだ。

そして、歌仙はここに至って気付いた。——「彼」に必要なのは何でも言うことを聞く配下ではなく、何でも言いたい事を言えてそれを受け入れ、喧嘩をしたとしても帰る場所だと認識出来る「家族」なのだ。

「彼」は小さく俯いて、感極まったのか嗚咽を漏らしながら語り始めた。

「……ずっと、皆が本当の家族だったらって、思ってた。でも、皆は刀で、人間じゃなくて、考え方も違って……」

「うん」

「優しいひとだけど人間じゃないから、家族になって貰えないって、諦めてた。でも……いいの？」

「彼」はしゃくりあげながら、最後の確認だというように、尋ねた。

「俺は——皆と家族になっていいの？」

——その答えなど、五振りには決まり切っている。それぞれの笑顔で、彼等は即答した。

「——勿論！」

たった一言だ。けれどそのたった一言で、「彼」の涙腺はあっけなく崩壊する。声を上げて泣きながら、「彼」は礼を述べ言葉を並べていく。

「とっ、トモエが、ここにいたら良かったのに」

「そうだね」

「そうしたら、皆家族になって、安心出来る場所が出来て、トモエだって心から笑えて……」

「ああ」

「でも、トモエはもういないんだ……どうして、神様……うっ、わあああ——」

歌仙はしゃがんで、泣き崩れる「彼」の背を撫でる。薬研もベッドから飛び降りて「彼」の目を拭う。鯰尾は目を潤ませていて、獅子王はがしがしと袖で目を擦っているのを腫れるよ、と石切丸に微笑まれながら注意されていた。

「——ありがとう。命を、繋いでくれて」

幼い少女の声と勝ち気さを潜めた青年の声が重なって聞こえたのは、歌仙の幻聴だったのだろうか。その声に心の中で当たり前前の事だよ、と答えて歌仙は泣いている背中をさすり続けた。

(前)」

光も中々射さない木々の間を抜けながら、六つの影が歩いていた。落ち葉を踏みしめて進むその影達は、一軒の古びた家の前に立つと口々に喋り始めた。

「ほへー、ここが例の建物ですか」

「そうだね、少し崩れているけれど」

「直せば使えるだろ。しばらくの間、寒い思いをする事になるけどな」

「……崩壊しないといいが」

「大丈夫だよ、長谷部。外観からだけど、なかなかしっかりしている家じゃないか」

「……あの女、正確な情報をくれたよな。二度と関わりたくねえけど」
金色の影の疲れ切った言葉に、残り五つの影は黙り込んでしまう。
そうなってしまったのは何故なのか——時間は、前日の朝まで遡る。

長谷部が泣き止んだ後、歌仙はそういえば、と言って審神者から託されたクマのぬいぐるみを取り出した。それを長谷部に手渡した歌仙は、首をかしげて疑問点を挙げていく。

「このぬいぐるみ、やたらと重いんだ。それと『いざとなったら長谷部さんに』って言っていたのも気になる」

「……背中に不自然な縫い目があるな。申し訳ないけれど、開けてみよう」

長谷部はぬいぐるみの背中の縫い目を切ろうと、はさみを借りて来て背中を開け始める。シャキッ、シャキッ、と音を立てて糸が切れていく。

そして全ての糸を切り、背中を開くと——硬い物と紙が入っていた。背中に手を入れ、入っている物を取り出す。

「……………これ……………」

「どうしたんですか？」

そう言つて身を乗り出した鯨尾や他の刀に見えるように、長谷部はぬいぐるみに入つていた紙を見せる。書かれていた文字を見て、五振りには呆氣にとられた。

——審神者としての全権限を、新内利樹に譲渡する。文章は長々と書かれていたが、概略は以上の一言で事足りた。

「……主、こうなる事を予測していたんでしようか」
「むしろ、願つていたのかもね。長谷部達を生かして、僕達と一緒にいられる道はこれしかなかったんだから」

呆然としたままの鯨尾に、歌仙は舌を巻きながらそう返した。

審神者の権限を他の人間に譲り渡すのは、当然ながら数多の手順を踏まなくてはならない。ただしそれは「正式には」という但し書きが付く。規定スレスレの権限譲渡をしている審神者だつて存在しているし、そもそもルールを破つて権限を譲り渡している審神者もいるくらいだ。後者は政府に見つかり、審神者の地位を永久に剥奪されるが。

審神者はその規定スレスレの方法——遺言という形をとつて手続きの過程をすつ飛ばし、長谷部に権限を全て委ねたのだ。しかし、それでもしなくてはならない事は少しだけ残っている。

「長谷部、その黒い塊は機械かな？ 一体何なんだい？」

「……審神者として活動するのに必要な機械だ。でも、主のアカウント登録がされているはずじゃ……」

そして長谷部は小さな黒い塊——端末機器をしばらく動かし、声を上げ更に仰天してから再び紙を見つめる。何が起こつたか分からない歌仙達は、長谷部に詳細を聞こうと声をかける。

「長谷部、どうしたんだい？」

「まさかその機械、壊れてるとか……？」

「だとしたらまずい、んだよな？ 審神者として活動出来ないんじゃない、また手続きを……」

「違う、逆だ。端末が初期化されて、アカウント登録画面まで戻つて。後は紙に書かれている俺の情報を入力するだけで、手続きは終わる。……トモエが、ここまで抜かりなくやる性格だったとは……」

紙と端末を見つめている長谷部の最後の一言は、愕然とした物だった。

詳細を歌仙が理解する事はかなわなかったが、どうやらそれがかなり困難でとても必要な事だったのは分かった。そしてそれを成し遂げた審神者が、かなり高い技術を有していた事も。やはり自分は彼女をかなり甘く見ていたようだ。——それを知ったのが彼女の死後だというのが、残念でならない。

「じゃあ、その登録をしちやえば審神者としての登録は完了、と」

「うん……あつ、違う。本丸時空座標の初期登録が必要だ。病院を本丸として登録する訳にはいかないし、どうしようか……」

「そういうのもあるのか……どうしようねえ」

うーん、と六振りは頭を悩ませる。

長谷部を審神者として新生春光隊を発足すると決めたものの、六振りは本拠地たる本丸をどこに置くかは考えあぐねていた。政府の用意した本丸用の敷地は問題外、しかしそこ以外の場所の見当がとんとつかないのだ。入院した時より病院から一步も出ていないので、地理情報も全く持っていない。まず自分達がすべきなのは、情報収集だろう。だがここに来てからの情報源となる相手とは繋がりを持っていない。今の所はお手上げ、といった状態である。

どうしたものかと考えていると、指を頭に当てていた鯰尾が逆毛を揺らし、病室への来訪者を告げた。

「……遠くから足音がします、看護師だと思えますが」

「ああ、退院手続きもしないといけないのか。上層部からどうやって逃げるか、それも悩みものだな……」

「お金の心配はしなくてもいいけど、手続き中に捕まったら厄介だね」
「頭痛の種が沢山あるな……」

頭を抱えた歌仙をしばらく見ていた葉研が、ふと顔を上げ、ニイと口を歪ませた。——それはさながら、あの魔王と呼ばれたかつての主のように。

「なあ歌仙、退院手続きは長谷部に任せたらどうだ？」

「へっ!?!」

「え？……その顔、何か考えがあるのかい？」

堂々たる笑みを浮かべている薬研に歌仙はそう尋ねる。素つ頓狂な声を上げた長谷部に近付いた薬研は、彼の背を叩き宣った。

「長谷部の審神者入門第一弾だ。……上手くいけば、誰にも悟られずに病院を出られるぞ」

会計のカウンターに立っていた女は、慌ただしく次々と訪れる患者達に辟易していた。何せ、休憩時間を返上して対応しなくてはならないのだ。

——ああもう、笑顔を浮かべるのも疲れる！

疲労で表情を崩しそうな自分の理性を何とか律していると、次に現れた男に声を掛けられた。

「すみません、会計をしたいんですけど」

「退院の会計ですね。入院費は合計——」

——随分と高いな。そう思いながらも、ここ最近はよくある事だった。病院のベッドが隣の区域から逃げて来たもので溢れ返っていたのだ。それ自体はご愁傷様だと女も思う。けれど仕事をするのはいつだって下々の人間だ。

正直連日の対応で女の心はささくれ立っていた。便乗してクレマーのようになっていいる人間も現れたからだ。やれ入院費が高いだの、諸々を値下げしろだの。

それと比べれば、目の前の男などいい客だ。割と穏やかな気持ちで、女は男から金銭を受け取った。

「こちらお釣りで。お大事になさって下さいね」

女は人のいい笑みを浮かべ、お釣りの乗ったカルトンを差し出す。男はお釣りを受け取ると一礼し、さっさとカウンター前から去っていく。

いい客だが、それだけだ。女はやたら印象の薄い男の事を、次に会計へと来たクレマーに気を取られて忘れてしまった。

——病院から消えた患者六名。彼等は政府から迎えが来るはずのもの達だった。

大事な賓客を逃がした事で院内は天と地がひっくり返ったような騒ぎになった。関係ないと思っていた女だったが、その六名の内の一人に会計をしていた事が露見し、政府の人間から呼び出しを食らい涙目になったのはまた別の話である。

「長谷部、こっちだよ」

病院から出て来た長谷部は安堵した様子で、植木の陰から手招きをする五振りの所へと走る。駆け寄った長谷部は曲げた膝に手を置いて息を整えた。

「よ、良かった、何とも思われないで……」

「ありがとうございます、長谷部。それと、『体質』を利用して悪かった」

「皆の役に立つなら、そのくらいやるさ」

そう言った長谷部に、薬研はただ笑って頭をわしやわしやと撫で回した。うわあああ、と叫びそうになった長谷部の口を塞ぐ事も忘れずに。

薬研の作戦は、影の薄い長谷部に手続きを進めて貰っている間に、五振りはさつきと病室から抜け出す。ただ、それだけだった。

けれどその効果はてきめんで、合法的に退院出来て誰にも存在を気に留められないという最高の結果を出せた。抜け道は鯰尾が見つけていたし、長谷部の「体質」には信頼が置ける。後は五振りがばれずに出ていけるかに掛かっていたのだが——幸いな事に、抜け道には誰もいなかった。罨がある可能性も考えたが、鯰尾が何も無いと言っていたので病院の人間には気付かれていないだろう（そもそも罨を仕掛ける病院とは何ぞやという話だが）。

こうしてまんまと病院から逃げおおせた六振りは、さつきと病院から離れていく。これから彼等が向かうのは城下町だ。

「……さて、何か情報が得られるといいんだけど」

「まあ気負わずに行こうぜ。あんまり鬼気迫る勢いでいると怖がられるからな」

獅子王が肩に力が入っている歌仙にそう笑いかけた。そうだね、と笑い返して歌仙は城下町への一步を踏み出した。

「——こんにちは、刀剣男士の皆さん？」

——踏み出した足が止まる。鈴の鳴るような女の声。それに訝しんで声のした目の前を見ると、髪を下方で一つに結わえ「猩々木庵」と書かれているエプロンを着けた、気よきそうな女が立っていた。女は微笑んでいたが、それはどこか作り物めいていて——はつきりと言ってしまうば、とても不気味だった。

歌仙が一步前に出て、女を睨み付ける。何故自分が鯉口を切っているのかは、理解していません。

「……誰だ」

「私は猩々木庵に勤める木枕遥と言います。この度はご愁傷様でした。主たる審神者——トモエちゃんを亡くしてしまって」

は、と目を見開く。初対面の女だ、そのはずだ。その女が、何故自分達の審神者の事を知っているのか。彼女の本当の名前も、本来は表に出されていない情報だ。

女は淡々と、こちらの情報を言葉にして並べだす。

「トモエちゃん、本当にいい子でしたよね。刀である貴方達の子供であるように、精一杯平等に振る舞っていたんだもの。普通の子供に出来る芸当じゃありません。ああ、でも普通じゃないんですよ？ あんな研究所出身なんですよ、酷い目に遭っても健気に乗り越えて来たんですよね」

「……おい、あんた。それをどこで知った？」

薬研が殺気立てて女——ハルカを見据える。ハルカは薬研の殺意を受け流し、更に情報を口にする。

余りにも、淡々と。

「普通じゃない子で、兆候だって出していただろう女の子の救難信号を、何故ぎりぎりまで気付けなかったのでしょうかねえ。案外刀剣男士というのは審神者という存在を、簡単な指示しか出さないお人形さんだと思っていた方がよかったですでしょうか？ 戦場を分からない子に命令されるのは癪ですものねえ。それとも——彼女が本当に人形だった方が貴方達には都合がいいのでしょうか？ だって審神者は、いくらでも変わる主の一人でしかない、替えの利く使い捨ての存在な

のですものね」

「——てめえ！　言わせておけば……っ！」

獅子王がそう吼え、長谷部以外の全員が抜刀した。今の彼等は後の事など全く考えていなかった。とにかく審神者と自分達を侮辱するこの女を黙らせねばならない、と。

石切丸も刀を構えて、女に斬りかかろうとした。長谷部の悲鳴が聞こえたが、今は頭に血が上って気にも留められなかった。

だから、石切丸は気付かなかった——長谷部の悲鳴の内容が、五振りに対して逃げるように忠告する物だった事を。

視界が暗転し、頬にざらついた感覚を覚える。唸り声を上げながら石切丸は現状を確かめて、絶句する。

何故、自分は地に伏せているのだろう。何故、全身が痛みを訴えているのだろう。何故、仲間達も倒れ伏しているのだろう。

——何故、あの女は無傷で立っているのだろう。

「——頭が高いのよ、神の分際で」

ハルカは穏やかな口調を捨て、不遜な響きでそう言い放った。忌々しそうに手の中にあつた棒状の物を消し、結わえた髪をなびかせて悠々と歩く。その先にいるのは、刀身が手から離れてしまった薬研だ。薬研は柄を手にしようとして——その手をハルカに踏みつけられた。短く苦痛に喘ぐ声を発している薬研を、残りの四振りも、ハルカは冷え切った目で見下ろしていた。

「全く、少し丁寧に接したらこれだもの。神っていうのは本当に身の程知らずね。人がいるからこそ存在出来ているって事実を分かっているのかしら？　それとも目を背けているのかもね。どちらにせよ、高慢なのは変わりないけれど」

「ぐ、あ……っ！」

「ああでも、受肉させた政府には称賛を送りたいわね。こうして己の小ささを教え込ませる事が出来るようになったんだから。世界は神に様々な権限を与え過ぎなのよ。そう思わない？　——トシキ君」

やはり、その情報も知っていたか。この女なら知っていても不思議ではないと思わされてしまう。

石切丸は体を起こし、後ろに立っている長谷部を見る。彼はすっかり怯え切っていて、口に手を当てて震えながら涙を流していた。そんな彼を見て、ハルカの表情は明るく無邪気な喜びのそれに変わる。

「ああ、別に私はトシキ君に何かする事はないわよ。だって神をねじ伏せて、人間が本来持っている力を取り戻したんだもの！ 素晴らしい事だわ、胸を張るべき事だわ！ 久々にそんな存在に出会えた事が嬉しいから、貴方が欲しい情報は特別にタダにしてあげる！」

「え、えつと……取りあえず、薬研を放して下さい……！」

長谷部の懇願にあらそういえば、と言いながらハルカは足を上げる。薬研はハルカから鋭い目を離さず、使い物にならなくなった手を庇いながら起き上がった。次々に起き上がる春光隊の面々は、ハルカを睨み刀を手に収める。

「……君は、何者だ」

「貴方には聞いていないわ、身の程知らず。さつ、トシキ君！ なんでも聞きたい事を——」

「——ここにいたか、糞姉貴！」

歌仙の問いを低い声で跳ね除け、後ずさる長谷部の所へ歩こうとしたハルカの肩を、男の手が掴む。ハルカはちつと舌打ちし、背後の男へ苦言を呈した。

「ちよつと、麗らかな乙女の肩をそんな風に掴むんじゃないわよ、愚弟」

「どこが麗らかな乙女だ性悪ゴリラ女が！ ……うわあここまでボコボコにしゃがって……」

「先に手を出したのはあつちよ」

「てめえならそうさせるだろうな……！」

しれつと言つてのけるハルカにがつくりと項垂れる男。そして頭を上げると、状況の変化についていけない春光隊に向かって気まぐすそうに謝意を示した。

「……春光隊の方々つすよね？ 話してて気分が悪かったでしょう、糞姉貴がすいませんでした。……詫びと言つては何ですが、俺の持つ

ている情報をタダで提供しますよ」

「あら、私もタダで情報を渡すつもりだったわよ？」

「どうせあそこに立ってる子限定のつもりだっただろうが！ ……そろそろ人が来そうっす、続きは狸々木庵で。案内します」

男はそう言つてハルカの襟首を掴んで歩き出す。後で覚えてないよ愚弟、と唸るハルカに、胸がかなりすっとしていたのは別に悪い事ではないだろう。

——何せこちらは、彼女の煽りと打撃一発で、心身共に重傷まで追い込まれたのだから。

(後)「

道中でもハルカに煽られ、その度に一発食らわそうとして躲されあ
るいは殴り飛ばされた。春光隊の面々が狸々木庵という居酒屋に到
着する頃には体は破壊寸前(長谷部以外)、心もすっかり疲弊してし
まっていた。こちらの攻撃がハルカに一切通じておらず、飄々とした
態度でいられるのもかなり腹立たしい。男——サトルが逐一姉を止
めようとしていたのが救いだ。これでサトルもまともに話が出来な
いような存在だったら、春光隊は二人から逃げていただろう。

「着きましたよ。……糞姉貴大概にしろ、こっからは仕事だろうが！」
「言われなくても分かってるわよ、愚弟」

まだ営業時間ではないらしいその居酒屋は暖簾が掛かっていない。
代わりに「準備中」の看板が掛けられている。それをない物とするよ
うに、姉弟は店の引き戸をガラガラと開けた。春光隊も顔を見合わせ
て店内へと入る。

店内には当然ながら人はおらず、電気も点いていないのでどこに何
があるか分かり辛い。何かにつぶかったので恐る恐る触ってみると、
それは木製のテーブルであるらしかった。カチカチ、と音がしてしば
らくすると、店内奥の電気が灯り僅かに視界が明るくなる。手を触れ
させていたテーブル周辺もほんのりと見えるようになり、石切丸は
テーブルの間を慎重に進む。

「奥にある一番の部屋で話しましょう。こつちへどうぞ」

姉は何処へといなくなったらしく、弟が春光隊を先導する。静かに
その後をついて行くと、襖に数字が書かれている個室が並んだ一角へ
と辿り着く。各部屋に式台があり、六振りが一番の部屋の式台に座つ
て履物を脱いでから部屋に入った。

部屋の中に入ってすぐ、縦に二つ繋がった大きな机が目についた。床
の間はなく、壁におすすめのメニューが書かれている紙が貼られてい
るだけだ。向かって左側に並んで座る。それを見届けて、式台に立つ

ていたサトルが飲み物を取って来ます、と言って座敷の前から去って行く。

「……今の内に、聞きたい事を纏めようか」

「そうだな。長谷部、しつかり覚えとけよ。基本的に聞くのはお前だからな」

「えっ」

「あの女、絶対に俺達の質問に答えないだろうしな。気に入られている長谷部が情報を引き出すのが一番いい」

「えっ」

「弟からも話は聞けるだろうけど、基本的に情報を握っているのは姉の方だろうからね」

「長谷部さん。緊張しているだろうけど、そういう時は落ち着いて深呼吸するんだよ」

「が、頑張る……」

そうして六振りが聞きだすべき事を纏め、長谷部に質問事項を叩き込んでからしばらく。姉弟が水を四つずつ盆に乗せて襖を開けた。

「はい、お水をお持ちしましたー!」

「うっわ、キモ……」

「愚弟本当後で覚えてなさいよ」

睨み付けられたサトルはへいへい、と流して水が入ったコップを六振りの前に並べて行く。最後に自分達の分を反対側に置いてからサトルが座るとハルカも彼の隣に座り、ニンマリとした笑顔で切り出した。

「……さて、じゃあ『お話』を始めましょうか。トシキ君、何から聞きたい?」

「えっ、えっと……」

長谷部はその底知れない笑顔に震えながら恐る恐る尋ねる。

「――まずは、俺達のいた区域の上層部がどうなったのかを」

*

六振りがハルカに求めた情報は以下の通りだ。

愛甲区域の上層部はきちんと処断されたのかどうか。

そも、この「町」の情勢はどうなっているのか。
他の生き残りはどのように行動しているのか。

この「町」にも、長谷部のような存在はいるのかどうか。

政府の提供する土地ではない、具体的に言えば六人が住める程度の建物はあるか。

働き口は、この「町」にあるのかどうか。

——求めた情報を、ハルカはとても正確に提供してくれた。

「愛甲区域の上層部は大多数はきちんと粛正されたけれど、一部は賄賂を出して名前を変えこちらに潜り込んだ奴もいるわよ。私としては見苦しい以外の何物でもないけれど。という訳で、この『町』はそんな奴等が潜り込んでいる事以外は基本的に平和ね。逆に言えば、それが火種となつて燻っているのだけど。こちらに逃れたものは、絶望して死を選んだり、精神崩壊を起こしたり……後一つは、他の質問に関わるからその時に話すわね。トシキ君はお友達が欲しいの？ 勿論、貴方のように神へと抗った存在はいるわ！ 残念な事に孤独に押し潰されて死んでしまった存在もいるから、私としてはその前に彼等と接触したい所なの。けど、看板娘としての仕事の中々忙しくてね。本当、人気者は大変——」

「腐った寝言は寝ても言うな糞姉貴。それと、話が逸れてる」

サトルを肘で小突いてから、ハルカは話の筋を元に戻した。

「この区域にはね、大迷宮と呼ばれる森があるの。さつき話した逃れたものの一部はここに潜んでいるわ。その更に奥、通称『家の墓場』と呼ばれるゴーストタウンの成れの果てが流れ着いた場所があるの。そこにトシキ君が求める建物候補は沢山あるわ、今も空いていたんだけど。でも気を付けてね。迷宮と呼ばれるように、森の中は時空の乱れが激しいの。うっかりしたら、とんでもない場所に飛ばされちゃうわ。特に『家の墓場』は本っ当に時空の乱れが尋常じゃないから、変な気配を感じたらすぐに建物の中に入るか、走って通り過ぎるのよ。それと森の中には政府も中々入り込めない事から、政府に仇なすごろつきや政府に疑問を持つ人達で溢れているの。トシキ君なら大丈夫だろうけど、くれぐれも気を付けてね」

ハルカの話をして、長谷部は頷きながら聞いている。しかし彼女が他の五振りに目もくれない事が不快なのか、少し顔をしかめていた。長谷部の隣に座る歌仙が小さく耳打ちすると、長谷部は渋々といったようにした後、表情から不満を消した。顎を組んだ手の上にのせて目を細め、ハルカは話を続ける。

「生活するのにお金も必要だつて分かつてるトシキ君は本当に立派だわ。時々人員募集もあるから、城下町の掲示板を見るといいんじゃないかしら。それと森の中にはがらくたが沢山落ちて来るから、それを売って生計を立てている森の住人もいるわ。後でがらくたを買い取っている割と良心的な業者の連絡先も渡すから、働くのがまだ大変だと感じたらそのやり方も考えて見て」

長谷部はこくこくと神妙に頷く。それに満足そうに笑んでから、こんなものかしらねと組んでいた手を解いた。それから顔を長谷部に近付け、いかにも浮き立っている様子で長谷部に問い掛ける。

「トシキ君、他に聞きたいことはある？ 何でもいいわよ、例えば神を従えさせる方法とか」

「んなもん幼気な子供に吹き込むな糞姉貴！」

「……あの、じゃあ一つだけ」

制止させようとサトルに腕を引かれて苛立った顔をするハルカに、緊張しながら長谷部は気になった事を一つ尋ねた。

「……火種って、何なんですか」

びたり、とハルカが停止する。それを見てあちゃあ、とサトルが天を仰いだ。

一体何が起こったんだ、六振りがそう顔を見合わせていると——ハルカがくつくつと不気味な笑いを漏らし始める。

「——よくぞ聞いてくれたわ、トシキ君！」

そして立ち上がり腕を大きく広げて、高らかな声でそう叫んだ。

もしかしなくても、いらぬ事を聞いたのではないのか。青ざめる長谷部と嫌な予感をひしひしと感じる五振りは、だが昂るハルカを止める事はかなわなかった。

「この『町』は光射す場所は至極平穩、けれど光の届かない場所ではそ

うではないの！ 例えばこの『町』にもある研究所、そこでも愛甲区域のそれと似たような、表に出れば悍ましいとされる研究が行われているわ！ 大多数の被験者は神に負けてしまうけれど、でももし神に打ち勝った存在が現れたら——ああ、ゾクゾクするわ！ きつとその存在は、神に挑まずにはいられなくなるのよ！ 同胞が増える、とても喜ぶべき事だわ！ それとも一つ、上層部に潜り込んだ断罪を逃れた者から発する火種は、着実に彼等に害された神々をどす黒い感情で満たしているの！ ああ、ああ、楽しみ、とても楽しみだわ！ 神々が醜い感情に踊らされている間に、神々に挑戦するものも増えていくの！ これを喜ばないで、いつ喜ぶというのかしら!!」

恍惚として頬を染め身を振り、大声で流れるように語るハルカ。その様子に六振りは顔を強張らせて引いている。

頭を抱えていたサトルは億劫そうに姉を横目で見て、なおも気持ち良さそうに語り続ける彼女に聞こえないよう、声を潜めて六振りに伝えた。

「……糞姉貴が話している神への対抗論の九割は真に受けなくて欲しいっす」

「あ、ああ……残りの一割は？」

「そこが頭の痛い所で……」

石切丸が聞くと、重たいため息を吐いてサトルは残り一割の危険性について説いた。

「……確かに、肅清を逃れた奴に復讐心を抱いている刀剣男士がいるのは事実なんすよ。その刀剣男士が何か企んでいるかも知からない、それこそ反逆行為を行っても不思議じゃないんす。それに被験者の大多数は記憶が消えるんすけど、一部は刀剣男士の力しか定着出来なかった存在がいるんすよ。非道な実験の被験者なら、性格が歪んでいてもおかしくないっす。もし、その二者が結託したら……」

ごくり、と唾を飲み込んでいた。その言葉の先を、サトルは口にしなかった。けれど、分かる。

——きつとこの『町』は、ただでは済まないだろう。多くの被害が出るかもしれないのだ。建物にも、刀剣男士にも、無関係な人間にす

らも。何故それを歓喜に満ちた様子でハルカが語れるのか、理解が出来ない。

「……当たって欲しくないんですけど、糞姉貴の予測は当たるからなあ……皆さんも、こういう事があるかも、というのを頭に留めておいた方がいいかもしれないです」

物凄く嫌そうにそう忠告するサトルに、六振りは頷く。その予測が永遠に当たらないでいて欲しいと、願いながら。

そして、現在。情報屋姉弟と別れた六振りは森の奥へと分け入って、「家の墓場」にある一軒の家の前に辿り着いた。

少々崩れている個所もあるが、状態はいい方だと言えるだろう。六振りにはほぼ迷いなく、この家を本丸として使う事に決めた。

玄関のドアノブを握って引いてみると、鍵は掛かっていなかった。けれど下駄箱の上には、ちよこんと鍵が置かれていた。ドアの鍵穴に差してみると、ぴったりとはまり込んだ。

歌仙が振り返って、五振りに告げる。

「よし、新生春光隊はここから発足だ。まずはこの本丸になる家を修復していこう！」

「おーっ！」

腕を思い切り天に突き上げ、春光隊は生活する為の一步を踏み出した。

*

トンカン、トンカンと屋根から釘を打つ音がする。よいしょ、と言いながら獅子王が古い畳を持って外に出て行く。石切丸がサツシを持って本丸（になる予定の家）に戻ると、歌仙が中から出てきておかえり、と声をかける。

「交換する窓はいつ……あ、出来ているのか！」

「割と早くやってくれたよ。小判を持って来ておいて本当によかった」

「寝室や居間の以外の窓もやってしまいたいけれど、取りあえずはね。取り付けて貰っていいかい？」

「任せてくれ」

石切丸がリビングの窓を上辺からはめ込み取り付けると、内側の壁の修復をしていた鯰尾が感嘆の声を上げる。

「流石大太刀、力仕事はお任せですね！」

「おいおい、俺も太刀なんだけどなー鯰尾ー？」

「わあ獅子王さんいつの間にも！ いや今のは言葉の綾ですってー！」

わあわあとはしやぎ出す明るい二振り。片方はへらを持ち、もう片方は新しい畳を持っているという、何とも珍妙な組み合わせだが。

騒ぎを聞きつけたのか、薬研がトンカチと木材片手に上からトンと着地して本丸の中を覗いた。

「兄貴、獅子王。楽しそうなのはいいが程々にな。あんまりばたばたすると床が抜けるかもしれないねえし、工具振り回すのも危ねえし」

「床が抜けるのは嫌だ！ 獅子王さんすみません！」

「そうだった、畳！ 工具は当たってないから気にすんな！」

慌ててへらを引っ込め謝罪する鯰尾と、それを許してから畳を張り替える為に和室に消えていく獅子王。その様子を見て、石切丸は微笑んだ。

——明るくて、いい雰囲気だ。家族ってというのは、こういう物なのかな。

「いいよなあ、この感じ」

「うん、今はまだ慌ただしいけれど……その内、馴染んでいくんじゃないかなあ」

薬研とそう穏やかに笑い合う。薬研も今は屋根の修理に励んでいるが、いずれ一つの部屋に集まって眠る事になる。その時が楽しみだと、純粹にそう思えた。

リビングで端末を操作していた長谷部はぐったりしながら、にこやかにしている二振りに近付いた。

「つ、疲れた……」

「長谷部、お疲れさん。本丸の登録は出来たか？」

「出来たけど、いちいち空間座標を入力しなくちゃいけないのが面倒で……。コピーして貼り付けられたから良かったが、そうじゃなきや

発狂してたな」

遠い目をしている長谷部に、石切丸も労いの言葉をかける。

「お疲れ様。私達も、もう少ししたら休憩にしようか。窓を交換したついでにおやつを買ってきたから」

「おつ、いいねえ。ちなみに何を買ってきたんだ？」

「ばていすりーがぎにあという洋菓子店の、ちよこれーとけーきを六つだ。一番安い菓子だけど、今はお金を大事にしないといけない時期だからねえ」

「ケーキ！ やった！」

一番安いケーキでも幼子のようにぐっと拳を握る長谷部に、とても微笑ましい気持ちになった。彼の頭を優しく撫でると、長谷部は訳が分からないといった顔をしていて、それが少しおかしくて石切丸は思わず笑みを深めてしまった。

*

「うーん、この時期にしては布団が薄いですね」

「布団があるだけマシだぜ、兄貴。下手したら布団なしで雑魚寝、なんて事もあり得たんだからな」

「それもそっか。今は贅沢言えないね」

「石切丸、大丈夫？」

「……少し足が飛び出ているかな……」

「大太刀は大変だよなあ……新しい布団を買う為に、明日からも頑張ろうぜ」

「皆、そろそろ電気を消すよ」

「はーい、お休みなさいー」

「お休みー」

「お休み」

「……お休みなさい」

そんなやり取りを経て消灯した後の夜更け。石切丸はやはり足が寒くて寝付く事が出来ない。疲れによる眠気があるのに、それを寒さが邪魔しているのだ。

少し体を動かそうと考えて体を起こすと、長谷部がいるはずの布団

は空だった。彼も寝付けないでいるのだろうか。

布団を敷いているリビングから、玄関に向かいドアを開ける。外に出てもこの辺りは月が見えにくい。空を見ようとしても、見えるのは木々の枝と生い茂る葉だけだ。

散策がてら、本丸の周囲を歩く。やはり周囲には木々があるのみで、時折落ちていくがらくた以外には余り変わり映えない光景だった。

しかし、しばらくするといきなり強い光が差し込んでいる場所に出る。一瞬目が慣れなかつたが、少し経つとそこは木々に月光が邪魔されない場所なのだと分かった。

そこに、長谷部はいた。月をただ見上げて、何もせずに佇んでいる。ぼんやりとしている彼に声をかけるのは憚られたが、石切丸は穏やかに彼の側へと寄った。

「長谷部さん、君も眠れないのかな？」

「……石切丸か。むしろ俺は、夜に動く事が多いんだがな」

勝ち気な目をする彼に、思わず息を呑んだ。——「長谷部」が、久々に表に出ている。現れたのは、六振りで泣いたあの日以来だろうか。けれど、「長谷部」だって大事な仲間なのだ。滅多に表に出ない彼と交友を深めるチャンスが来たのだろうか。

石切丸はそうだったねと笑って見せ、「長谷部」に尋ねた。

「あの子は、眠っているのかな？」

「ああ。気を張っていたのだろう、微動だにせずぐっすりだ。……俺も、と尋ねたということ、やはりお前は寒さで眠れなかったか」「そうなんだよね、少し体を温めようと思って散歩をと。長谷部さんは？」

「上を見てみる」

長谷部の言う通りに空を見上げる。そこに広がっていたのは、満天の星。黒い布の上に沢山の宝石をばら撒いたような星空の中、満月が自分こそが主役だと言うように光り輝いていた。

思わず見とれてしまう。この深い森の中で、こんな場所があったのか。ほう、と息を吐いていると、長谷部が寂しそうに話し始めた。

「……トシキは親友と、この星空を見上げていた」
「え？」

「この空を見ながら、いつか妹と共に親友と旅をしようと言っていたんだ、希望を持ってな。……俺はその親友を、殺してしまった」

「それは……」

その話は聞いている。認識を改変する薬を投与された「長谷部」は、敵だと思い込んで「彼」の親友を殺めてしまったと。けれど、それは騙した人間が悪いと結論が出たはずだ。

長谷部は首を振り、哀惜を目に湛えて目を伏せた。

「分かっている、皆は俺を悪くないと言ってくれている。それでも、もし俺が騙されなかったなら、もう少し強かったなら。そうすれば今頃、トシキは親友と共に旅をしていたんじゃないかと思ってしまう……トシキの妹である主ともその道中で再会出来て、心置きなく過ごせると……。当然、たればの話だ。どうしたって死者は蘇らないし、時を戻す事は決して許されない。でも、もし、俺がもう少し強くて、あの情報屋の言う通りに、トシキに力だけを与えられていたなら……」

「それは違うよ、長谷部さん」

吐き出される言葉を石切丸は遮った。苦しみながら己の傷を抉るその様を、見ている事など出来なかった。どこか怯えたように顔をこちらに向けた長谷部に、石切丸は真剣な表情で相對した。

「君も言った通り、君がその親友を手にかけてしまったのは、怪しい術にかけられて操られてしまったからだ。君に罪はないとは言えないけれど、罪は操った人間の方が重いだろう。それに君がいたから、あの子は正気を保てたんだ。苦痛も後悔も身代わりになって受けていた事が、君の罰だと思おう。……騙された事で自分の存在を否定するなんて、余りにも悲しいだろう？」

「……」

「君だって大事な『家族』だ。だから私は、君の事も大事に思っているよ。どうか、それを忘れないでいて欲しい」

長谷部は石切丸を見上げた後、ただ悲しそうに俯き目を閉じた。

分かっている、長谷部の心は晴れていない事など。こんな一言だけで彼の心が癒えるのなら、審神者が生きていた頃にはとつくに吹っ切れていたはずだ。

——全ては、これからだ。時間はいくらでもあるのだから、ゆっくりとやっていこう。

決意を新たにした石切丸は、再び空を見上げる。丸い月はいつかの日と同じように、優しく光を放っていた。

「えー本日、獅子王さんと俺は無事初給料を受け取る事が出来ました！ これもひとえに皆で支えてくれたおかげです、本当にありがとうございます……あーもう長い前置きはいいや！ 初給料日と春光隊の繁栄と幸福を祈って、かんぱーい！」

「乾杯！」

鯰尾の音頭で、一斉にコップを合わせる。チン、と鳴るガラスの音が澄んで響いた。

少しだけ豪華な料理を詰めた小さな御重箱。それをを食卓に並べた、ささやかなパーティー。それは鯰尾の言う通り、アルバイトの初給料日を祝う物だった。

基本的に金銭は遠征で集められる。だが鯰尾と獅子王がそれでもアルバイトに向かったのは、この「町」の情報収集も兼ねていた。

何せ城下町付近にある森で暮らすのだ。買い出しだって政府の用意した万屋や業者を通してではなく、城下町に住む人間向けの店で行う。「町」で暮らしていく為に、持っている情報は少しでも多い方がいい。

本丸の家事を総括する歌仙、見た目から採用を拒否されるだろう薬研、人間不信気味の長谷部、少々浮世離れしている石切丸。彼等がアルバイトに向かう事は無理なので、人当たりのいい鯰尾と獅子王がアルバイトとして選ばれたのは必然だった。

結果、彼等は想定以上の仕事を果たしてくれた。

接客業や裏方仕事を中心としたアルバイトの中で、鯰尾はするりと滑り込むようにバイト先の人間の心を掴み、獅子王はその人懐っこさ

から中年の女性が多い職場で愛された。そして、様々な情報を引き出す事に成功したのだ。

身近な物でいえばスーパーや食材店の安売り日をはじめとした生活に必要な情報、注意すべき物としては城下町に降りて来る審神者や政府の人間、刀剣男士周辺の情報。そしてこの「町」で起こっている出来事。眉唾物の話も当然あったが、集めた情報をすり合わせてこの「町」の状態を把握する。

そうして導き出された結論は「情報屋姉弟が火種ありと言っていたように懸念すべき事柄はあるが、平穏と言って問題なし」となった。政府に積極的な敵対行動を取るつもりもない春光隊にとっては、取りあえず平和に過ごせる環境だと判明した事は大きな収穫だった。

おまけに労働の報酬として給料まで受け取れるのだ、換金する必要のない金銭を受け取れるのも素晴らしい事だった（遠征で集めた金銭は両替商に交換して貰わねばならないので）。

御重の中身を見た獅子王が、美味だと分かり切っている詰め込まれた食事に歓喜の声を上げる。

「おつ、唐揚げ！ 流石歌仙、どれも美味そうだな！」

「長谷部も手伝ってくれんだたよ。美味しい物を作ってあげたいと言ってるね」

「わあ、長谷部さんもありがとうございます！ その気持ち、とっても嬉しいですよ！」

鯨尾が御重を覗いてから長谷部に明るく礼を述べる。長谷部は率直な感謝の言葉に、少し縮こまってはにかんだ。

「歌仙のように上手くはいかなかったけどな。……でも、喜んでくれたのなら良かった」

「そりや嬉しいに決まってるだろう、なあ獅子王？」

「おう！ ありがとなー、長谷部！」

「わああああ！ 何でいちいち撫でるんだ！」

わしやわしやと獅子王に撫で回された長谷部は顔を真っ赤に染めて喚き出す。薬研はあっはっは、と笑い声を上げてかまぼこを摘んだ。

石切丸も煮豆を箸で拾い上げて口に入れる。そしてここ一か月で、本当に絆が深まったと感じていた。

この本丸を完全に使えるようになって、そして鯰尾と獅子王がアルバイトに出て情報を集めている間にも、やる事はたくさんある。

例えば、生活に必要な家具や電化製品の収集と購入。がらくた置き場に行って拾って来たり、減っていく小判に頭を悩ませながら購入したりして本丸の中は充実していった。落ちている家具は洋風の物ばかりだったので歌仙は少し不満そうだったが、しばらくしたら慣れたと言って笑っていた。石切丸も神社とは程遠い環境に、最初は新鮮さと困惑を覚えていたものだ。

例えば、炊事や洗濯などの家事。せっかく見つけ出したレンジを生卵を温めた事によって爆発させたり、洗濯機を使用した時洗剤を入れ過ぎた事によってぬめりが残ってしまったり、新しい型の給湯器に慣れずに浴槽から湯を溢れ出させてしまったり。失敗も多かったが、それでも時には歌仙に叱られ、時には頭を抱えたりしながらその度情報を集めてやり方を覚えていった。

そして、そんな日々を過ごす中で――

「石切丸さん、俺も一緒に祈祷していいですか？」

「勿論、構わないよ」

「今日あのおばちゃんが『頑張っているからおすそ分け』って饅頭くれたんだよ！」

「良かったなあ。しかも俺達全員分か、休みの日にでも皆で食べるか」

「そうか、君の境遇だと歴史をあまり知らないか。じゃあ後で一緒に歴史書を読もう」

「ありがとう、歌仙」

――確かに、春光隊の面々と話をする機会に恵まれるのだ。かつての本丸であまり話していなかった相手と、こうして仲を深めるのは「家族」になるのに必要な事だ。そして相手を少しでも知れる事で絆が生まれるのも、とても大切だ。

長谷部以外の五振りに共通してあるのは「自分の希望の為に、長谷部達に幸せになって貰いたい」という願いだった。最初はそれだけの

繋がりがなかったかもしれない。

「短刀に懐へ入られると危険だね、出陣する時は改めて気を付ける事にするよ」

「逆に大太刀の間合いだと短刀はなす術なし、と。ありがとう石切丸、いい学びを得られたよ」

「あーっ、また負けた！ 長谷部げーむ強すぎないか!？」

「いや、獅子王もいい筋してると思うけど……何度かひやりとさせられたし」

「……お菓子作りって凄く難しいですね」

「まあ、本職になる訳ではないから。楽しく美味しく出来ればそれでいいんだよ」

けれど、こうして過ごす中で新たに生まれる物もある。それがとても尊くて——嬉しかった。

きつとこうして、ばらばらだったもの達が「家族」になっていくのだろう。その先にあるのが、希望に満ちた物であるといい。

笑顔に満ちた場所で、皆で明るい明日を祈ろう。そうして日々を過ごしていけば、きつと——

「……石切丸？ 聞いているかい？」

歌仙の声で、回想から浮上する。箸が口元に当たったままになってる。煮豆を口に運んだ後、ぼうつとし過ぎたようだ。

どうしたのかな、と尋ねようとする、歌仙は既に石切丸の方を見ていなかった。見ている方向は——

「……聞いて欲しい事がある」

長谷部が、至極真剣な声と表情でそう切り出した。一体何事なのだろうか。

ひよつとしたら、また消えなくなってしまうとかそういう事なのか。話を聞かない限り分からないだろうと、石切丸は真面目な顔にして長谷部のいる方を向いた。

「俺はやっぱり、鳴狐みたいになりたい。鳴狐みたいに、苦しんでいた悲しんでいたたりするひとの力になりたいんだ。そうしたら、きつと皆とちやんと笑えるようになる気がして……ずっとずっと考えてた。

俺は、泣いているひとを放つて置きたくない。相談して、いい事も悪い事も考えて、それでもやりたいと思っただんだ」

石切丸は目を見張る。強い意志を感じさせる眼光を、長谷部は放っていた。

相談した、という事は「長谷部」もこの決意を知っていたのだろう。長い間悩んで、相談して、考えを肯定されたから長谷部はこうして話しているのだろう。

——他の被験者の力になりたいという、決意を。

「やってみてもいいんじゃないか？ お前がよくよく考えてやりたいと思うなら、一度実践してみたらいいと思う」

「生活基盤も安定してきたから、始めてみてもいいんじゃないかな。その心意気やよし、だ」

獅子王と歌仙は、そう言つて賛成した。長谷部がやりたい事を言ったのは珍しく、それを叶えてやりたいと思つたのだろう。

生活基盤も確かに安定して来ているし、しつかりとした決意を持っている彼に賛成する意見は分かる。だが——

「……俺は、正直反対です。皆が皆、長谷部さんや伯父さんみたくいられていないかもしれない。それで長谷部さんが不用意に傷付くのは、嫌です」

「賛成してやりたいが、俺も反対だ。長谷部、あんたまだ精神が安定しているとは言えないだろう。やるにしてももう少し時機を見てからにした方がいい」

鯨尾と薬研は、長谷部の精神状態を鑑みてそう反対した。それは、石切丸も憂っていた事だ。

長谷部の精神は不安定だ。急に泣き出したり、落ち込んだりと負の感情が振り切る事もあるのだ。ちよつとした衝撃で長谷部のメンタルはぐらぐらと揺れる。そんな彼に、果たして力になる、という大きな仕事が務まるのかどうか。それもまた、目を逸らせない大きな問題だ。

「石切丸。君はどう思う？」

歌仙がそう言つて石切丸に振つてきた。認めるのか否かを尋ねる

視線四つと、自分の決意を受け入れられないかもしれない不安そうな視線が一つ。

長谷部のやりたい事をやるといいと言う賛成派の意見も、長谷部の精神状態が不安だと言う反対派の意見も分かる。石切丸は目を閉ざして、思考を巡らせる。

やりたい事をやらせたいが、大きく傷付くのは避けたい。まとめると、こういう事だ。

そして石切丸は思う。五振り共、大切な事が見えていない、と——「……確かに、長谷部さんの精神は不安定だ。それは大きな懸念事項で、その点はどうしても見逃せない」

「……じゃあ……」

「だったら、私も手伝おう。何も、ひとりだけでやるという心積もりではないだろう？」

四振りがはつと息を呑む。まさに今その事に気付いた、というように。

そう、何もひとりだけでやる必要はないのだ。精神的負担だけでなく、肉体的負担だってあるのだから。一緒に活動する事で負担だって減るはずだし、精神的ショックも緩和されるかもしれない。

きつと、困っている被験者はそれなりの数がいるだろう。彼等全てを救うには、肉体一つでは到底足りない。

「長谷部さんに何かをやらうという気力が湧いているんだ、私は出来る限り叶えたい。けれどひとりでは限界があるだろう、心身共にね。だから『私が手伝うのを受け入れる事』という条件付きで、私は長谷部さんに賛成するよ」

長谷部は驚愕に口をぽかんと開けている。本当に、ひとりで全部やるつもりだったのだろう。そんなのは、末席でも神である自分にとって無理だというのに。

鯨尾は俯いていた顔を上げて、力強く宣言した。

「前言を撤回します。俺も条件付きで賛成です——俺も手伝います、それを呑んで下さい」

「……そうだな、俺も協力する。だから俺も、条件付きの賛成に変更

だ」

続けて薬研も、そう言つて微笑んだ。長谷部は口を開いたまま二振りを見つめる。反対意見が条件付き——しかも長谷部にとつては都合のいい——の賛成に変更されたのだ。いきなりの事で、どうすればいいのか分からないのだろう。

獅子王と歌仙も、それに続けて頷いた。

「俺も手伝うぜ！ そうだよな、ひとりだけでやるのは大変だ。出来る事は何でも言つてくれよ！」

「僕も協力しよう。長谷部の願いを叶える為には何だつてしようじゃないか。——『家族』だからね、それくらい当然さ」

決は取れた。——全員、条件付きの賛成だ。長谷部は潤んでいた目を見開いて、泣きそうになる自分を律するように首を振ってから、心からの笑顔で言つた。

「——皆、ありがとう」

14—13 「雨と導火線」

「……それからの彼の行動は早かった。何せ軍師の刀である『長谷部』がいたからね。様々な手段をもって被験者に接触して、まずは友達になろうと働き掛けた。拒絶したのもいたけれど、仲良くなれたものもいたんだ。それからある程度選別した審神者に接触し、被験者の存在を知らせて酷い扱いを受けていた被験者を引き取れる体制を整えた。ここで心と体を休めて、元の本丸で頑張るか別の本丸で新たな生活を始めるか、それを選ばせられるようになったんだ」

「……そう、だったんですね」

話を聞いていた秋田は、俯きながらそう呟いた。ジュースを口に含んで飲み下し、ふうと息を吐いた秋田は更に口にする。

「……凄いですね、長谷部さん達は。僕は、逆恨みしてしまったというのに」

「まあ、僕達の場合は稀な案件だと思うよ。様々な要因が絡んで、ここまで来たんだ。長谷部のようなれないからと言って、気に病む必要はないよ」

「そうだよ。秋田がああのいち兄を許せなくても、許しても、どっちでもあり得る事だからね。取りあえずは、ここでゆつくりと休む事に専念しよう」

「……はい」

秋田は小さく頷いた。目の曇りはまだ晴れず、迷いと絶望で揺れている。

「……とまあ、これが俺達と長谷部の辿って来た経緯だ」

「二期さん、大丈夫かい？」

「はい……」

ぐらりと、視界が揺れる。長谷部が——「彼」が、大切な妹を亡くしていたとは。確かにこれは、迂闊に出していい話題じゃない。

長谷部がもし、春光隊のような理解者を得られなかったら。その姿が、自隊の秋田なのだろう。

「……私は、確かに無神経だったのでしょう。秋田を傷つけておきながら、長谷部殿と友達になりたいと能天気……まずは、近くに目を向けなくてはならなかったのに」

「言っただろう、ほぼ自力で気付けただけお前は上等だ。目を背けずに、自分の罪を見つめているしな」

「そうだね。……大変なのはこれからだよ、一期さん。君の行動で、秋田さんとの溝の深さが決まるんだ。行動は慎重にね」

「……はい」

出来るのだろうか。秋田の閉ざしてしまった心を、もう一度開かせることなんて。

一期は必死に考えを巡らせた。——もう二度と、目を逸らす事のないように。

[new page]

「ふんぷーん」

狸々木庵に戻ったハルカは、鼻歌を歌いながらテーブルの上に雑巾をかけていた。こうして見る分には、彼女はただの居酒屋の店員だ。

しかしそれを見たサトルは、気味の悪いものを見るように姉を見やる。

「……今度は何を企んでやがる、糞姉貴」

「これからどう転がすか、それを考えている所よ」

ふふふ、と上機嫌に笑い、ハルカは廻り続ける町の情景に思いを馳せた。

——春光隊本丸

「秋田、少し疲れちゃったかな。しばらくの間、下で休む？」

「そう、ですね。お願いします」

秋田は鯰尾と共に、和室へと向かおうと階段を下りる。

階段を下り終わった所で、長谷部が目の前に現れた。秋田を見て、少し顔色が悪いと判断した長谷部は「和室はこっちだ」とふたりを先導する。

「長谷部さん、小夜と五虎退の様子はどうですか？」

「五虎退は眠っている。ただ、小夜が少しな……」

「どうかしたんですか？」

秋田がそう尋ねると、長谷部は複雑そうな面持ちで答えた。

「……時々、俺と言っている。記憶の混濁が起きているんだろう。あいつの中で、『椅子』はどうなるかな」

——カラオケボックス「ビンカ・マジョール」

「ここは私達が出すからね」

「そんな、申し訳ないです」

「落ち込んでいる奴に出させられないっつーの。いいから奢られとけ」

そう明るく笑っていた獅子王だったが、ふと表情を変えて一期に告げた。

「……そういうやな、俺達が被験者の成れの果てと一戦交えたって言うただろ？」

「ええ、それが何か……」

「気をつける。少し前に起きた幽霊騒動、あれの正体は被験者の成れの果てで間違いないだろう。対策は練られているみたいだが、少し厄介なことが起きてるんだ」

「……一体、何が……」

「——成れの果てを呼び起こす鍵になる物が、ごっそりとなくなっているらしいんだ。そいつを集めている奴が行動を起こさないとも限らない、周囲に注意を配る事を忘れるな」

——氷雨隊本丸執務室

「……僕だけ呼び出すなんて、一体何事なのかな」

「——につきり青江。お前に極秘任務を与える」

「へえ。隊長にも任せられない仕事って、一体何なんだろうね」

肩を竦める青江に、審神者は忌々しそうに手に入れた情報を告げた。

「——我が隊に、謀反の疑いが掛かっている」

ぴしり、と動きを止めて、引きつった笑みを浮かべる青江。審神者は酷く機嫌が悪いようで、鬼のような形相をしていた。

「……何の冗談なのかな、君みたいな愛国主義者にそんな……」

「冗談ではない。上官から直々に嫌味を受けた、裏切り者を置く人間が、とな」

「それは……つまり、僕の仕事は——」

「——指令だ。どんな手段を使っても、この本丸の中にいる謀反人を炙り出せ」

——清澄隊本丸

「ソメゴロー、ご飯だよ」

「……」

「皆も、江雪さんも心配してるよ、一緒に食べようよ」

「……」

「はあ……ここに置いておくからね」

障子の前に、盆を置く少女。とぼとぼと廊下を歩いていた少女は、目の前に現れた人影に足を止めた。

「……ツクシさん、どうでしたか」

「反応なし。相当ダメージ受けてるみたい、当然だと思うけど」

「……そう、ですか」

「……江雪さん、今日の朝ご飯はなあに？」

「……今日は焼き鮭と、かぶと豆腐の味噌汁です。行きましようか」

「うん」

江雪とツクシは並んで歩き出した。その足取りは、決して軽くはなかった。

——雲霄隊本丸執務室

「……じゃあしばらくの間、こちらで過ごさせて貰うという事で構いませんか？」

「ああ。……しかし、いよいよ嬢ちゃんが戦場に立たなくちゃならな

くなってしまうとはな」

「私が決めたことです。大丈夫です、必ず戦果を挙げて見せます」

「頑張れよ」

「主様、お客様にお茶とお菓子、を……」

「おう、物吉ありがとうな。……物吉？——あつ」

——審神者と話していた女性を見た物吉の目が、色を変える。そして物吉は、呆然と呟いた。

「ミサキ、さん……？」

「え……まさか、コースケ、なの？」

——蒼穹隊本丸

「あ、あのひと、怖いです……！」

「……すごい迫力ですね」

「あんなひとが、こんな本丸に何の用なんだろう……」

「さあ……」

粟田口派の刀達が、遠巻きに審神者と対峙している刀を見つめる。審神者は賓客に体中ガチガチにしながら、歓迎の言葉を述べていた。

「こ、この度はお忙しいところお越しくだしやり……」

「ああ蒼穹殿、そうかしこまるな。ただの客としてきたじじいとして、接して貰えるとありがたい」

「は、はあ……それにしても、雲霄隊の最終兵器である貴方が一体何の御用で？ ま、まさかここに俺の刀達じゃ太刀打ちできない敵が来る

とか……」

「いやいや、そんなものじゃない。ただの客だと言っただろう」

鷹揚に笑う「最終兵器」は、本丸をぐるりと見渡して、一瞬冷たく目を細めた。

「ただ……この本丸で暮らす刀剣男士を、じっくり見てみたくて、な」

「あはははははは、楽しみだわ！ いやいよ神々が醜態を晒し合う醜い戦争の導火線に火がつこうとしているのよ！ さあ、私はどう動いてやろうかしら？ あの反逆部隊の尻を叩く？ それとも清澄隊に

顔を出そうかしら？ うふふふふ、私は今、最高に最つつ高に楽しいわ!!」

狂ったように——いや、狂った笑い声を上げながらくると回り、店内を歩き回るハルカ。

そんな狂っている姉を見たサトルはただ一言、最大級の軽蔑を込めて吐き捨てた。

「……やっぱり一回地獄に落ちとけ、糞姉貴」

第十五話 「ざあざあと、じめじめと」

15—1 「現れた令嬢」

木々に水の弾ける音が響いている。木々の集まりである森を包むのは、ざあざあと灰色の雲から降りている水滴のカーテン。町を覆っているその雨雲は、ひとびとの活動を阻んでいる。森の中に住まうものも当然、雨雲が通り過ぎるまで静かにやり過ごそうとする存在がほとんどだ。

——そしてそれは、森の最奥にある本丸も例外ではない。

春光隊の鯰尾は、拾ってきた漫画を閉じて窓の外を見やる。天気予報によれば、太陽が顔を出すまでまだまだ時間がかかるらしい。洗濯物が乾きにくいのは勘弁だなあ、と鯰尾はぼんやりと息を吐いた。

静かに襖が開かれ、中から秋田が目を擦りながら現れる。鯰尾が気づいた時にはもう、秋田はあくびを押し殺してからリビングに足を踏み入れていた。ソファアに座っている鯰尾に、秋田は小さく頭を下げて礼を述べる。

「ありがとうございます、疲れは取れたみたいです」

「そっか、良かった。小夜と五虎退は寝てる？」

「はい。……小夜君は、魘されていましたが」

「小夜はまだ様子見だね……納得出来る答えが見つけれられるといいんだけど」

物憂げに鯰尾がそう言うと、秋田は少しだけ目を逸らす。

——納得出来る答え。それを見つけないければならないのは、自分も同じだ。けれど、かつて輪の外から見ていた光景が、輪の中にもいるもの達の冷たい目が、秋田の思考を濁らせる。最後にはぐちやぐちやになって、悲しいような恨めしいような痛苦に襲われるのだ。

このままではいけない。それは秋田が、一番よく分かっていた。

「秋田も焦らないでね。心は制御出来ない時もあるし、その心とどう向き合うかも肝要だから。ちよつとずつ、ちよつとずつだよ」

「分かり、ました」

秋田の表情が歪むのを見て、鯰尾は漫画を横に置き優しく目を細めた。気を遣われてしまつて申し訳なきが募るが、秋田は様々な感情を奥底に沈めて鯰尾と目を合わせた。

鯰尾は秋田に再び微笑んでから立ち上がり、ソファアの正面にあるテレビに向かう。辿り着くとテレビの前でしゃがんで、テレビ台の収納を漁り始めた。

「秋田、何か見る？ 色々録画してあるから何か好きな種類の番組があれば探すよー」

「え、えつと、今は晩ご飯の支度中では……」

「気にしない気にしない！ あにめもどらまも何でももあるよー。俺としてはこの食堂楽物のどらまがおすすめかなー」

「手伝った方がいいのでは……」

「必要になつたら向かえばいいよ、厨も全員入れる程広い訳じゃないし。……あれ？ そういえば獅子王さんと石切丸さん遅いなあ」

ふと顔を上げて、鯰尾が首をかしげる。

獅子王と石切丸は、現在外出中である。何か用事があつたらしく、秋田が泣いていた時に慌ただしく外へ出て行つてしまつたのだ。それからかなり時間が経つ。寄り道をしているにしても、かなり遅い時間だ。

秋田がおろおろしていると、鯰尾は大丈夫だよ、と朗らかに言った。

「獅子王さんも石切丸さんも強いし、そんじよそこらのごろつきじゃ相手にもならないよ。ちよつとしたいぎこぎが起こつたんだと思うんだけど……でも、二振りなら大丈夫だから」

「……そうでした、強いんですよ」

「うん。でも連絡一つ出来ないつて一体どういう状況——」

鯰尾がそう訝しんでいると、ピロンという軽い電子音が響く。つい肩を跳ね上げさせてしまつた秋田に、鯰尾がパーカーのポケットから端末を出して振つて見せた。

「ごめんごめん、音大き過ぎたね。多分二振りからの連絡が入つた音だ」

「……すみません、僕も反応がオーバーで」

「気にしなくていいよー、それで二振りはどうして遅くなったの、か……」

にこのこと端末を見ていた鯨尾の顔が、次第に強張っていく。端末をポケットにしまうと弾けるように台所へと向かい、緊迫した声で告げた。

「歌仙さん、久々の利用者が来ます！——はい、雲霄隊の……詳しくは端末を見てください、食事も一食分追加で……分かりました、出迎えの準備をします！」

必要な事を伝えてから鯨尾はまた勢いよく動き出す。ソファの上にあつた漫画を掴んで階段を駆け上り、二階からドタバタと音を立てて一階にいる秋田に事態の急変を知らせていた。

秋田が恐る恐る階段に近づいて階上を見上げる。直後にバタバタと慌ただしく白い塊を抱えた鯨尾が下りてくる。その白い塊は、どうやら布団であるようだった。ぶつからないように慌てて体を引っ込めると、すぐに秋田の脇を鯨尾が通り過ぎた。

そのすれ違う一瞬に、秋田は確かに聞いた。

「安定していたはずなのに、何があつたんだよ——物吉」

その日も、雲霄隊本丸はとても慌ただしかった。何せいつもの仕事量に加えて、昨夜の襲撃にまつわる調査も上乘せされてしまったのだ。今日も右に左にと大騒ぎの本丸内で、誰かとぶつからないように物吉は茶と菓子に乗せた盆を運ぶ。

今日は審神者に客が来ている。一体どんな人なのかは、物吉にはまだ知らされていなかった。けれどどんな人でも、彼のする事は変わらない。主に幸運を運び、その周囲にも幸運を運ぶ。それだけだ。

——けれど、彼がどう思うかは分からない。その事には気をつけな
いと。

物吉の体内には、もう一つ魂が眠っている。普段は滅多に表に出たり話したりする事はないが、ある人物をトリガーに体の制御を奪った事もあるのだ。

そのトリガーとなる人物の名は、ズダジミサキ頭陀寺美咲。ある小さな町の由緒ある家柄の人間。彼女は物吉の中に眠る魂にとって、世界の中心と呼べる程の存在だった。

時折夢で見る彼の記憶。それはいつも、あまりに窮屈な日々の中にささやかな幸せを運ぶ彼女の姿があった。閉塞感溢れる部屋の中に吹き込む爽やかな風は、明朗に笑うポニーテールの少女の形を取って現れる。

彼は、何事にも関心を示さない。それが例え自分を閉じ込めて遠ざけている親や親族だとしても、「どうでもいい」という無関心しかなかった。

周囲に興味を示さない彼が、ただ一人に親愛を注ぐ。その唯一の例外である存在が、ミサキだった。

彼が物吉を降ろす媒体となったのも、歴史修正主義者からミサキを守る為だった。物吉に彼の体を明け渡す時も、地獄にも近い苦痛を味わったのに恨み言一つ漏らさなかったそうだ。通常の戦場にミサキが然程関わらないと分かってからは、関心を失ったように表に出ない。普通に過ごす分なら、物吉は物吉であった。

だがいざミサキが関わるとなると、彼はどんな感を持っているのかそれを察する。そして体の制御を奪い敵を葬り去るまで暴れ尽くすのだ。そうなれば彼はもう耳を貸さない。味方が制止しようと手を伸ばせばそれを振り払い、敵の体が消え失せるまで斬り続ける。

例えもう息の根が止まっているのが一目瞭然だとしても、敵を屠り続ける。影の薄さを利用して独断行動し、隊長の命令どころか審神者の命すら違反する事もあった物吉達を、彼の昔いた本丸は持て余していた。

そして転機は訪れる。彼を何とか止めようとした隊長を、邪魔したとみなして彼が重傷に追い込んだのだ。耐え続けていた審神者も流石に限界を叫び、物吉は政府に引き取られる事となった。

刀解されなかったのは、恐らく（限定的ではあるが）歴史改変を察知出来る特殊能力のせいだろう。今の審神者はその能力を買って物吉を引き抜き、紆余曲折を経て現在に至る。

物吉は今の審神者に感謝している。時折茶に誘い物吉の悩みを聞き、カウンセリングをはじめとした様々な手配をしてくれた。

そして何より、物吉のような刀剣男士を非公認で支援している部隊——春光隊と物吉の関わりを断ち切ろうとしない事が、物吉にはありがたかった。

森の中で暮らす刀剣男士は、全てがこちらに友好的である訳ではない。むしろ政府に不信感を抱いて、それでも戦いから身を引けないものがほとんどのはずだ。

春光隊は、その中でも貴重な「条件付きだが友好的な本丸」。物吉と同じ性質の長谷部に仇なさない事、そして特殊な刀剣男士を休ませる活動を黙認する事を確かめて、春光隊は動いている。

春光隊は、物吉にとって安心出来る隠れ場所だ。そこに行くとき置きを残せば、余程の事がない限り審神者と仲間は深く追求しない。だから時折、物吉は春光隊を訪れる。「利用者」としてではなく、友達に会いに行くただの刀剣男士として。

春光隊は流石と言うべきか、利用者が呼吸をしやすい雰囲気を作り出している。利用者として行っていない時でもその息のしやすさがあるのだから、雰囲気作りはかなり堅固と言えるだろう。物吉もちよつとした愚痴や本丸内での出来事を話している時に、温かく受け入れてくれていいるのだと感じる。もちろんただでそんな事をしていく訳ではないのだろう（例えば情報収集なども行っていると分かる。物吉も機密事項は話していないが）。それでも春光隊は、物吉にとつての止まり木だった。

「物吉、今から執務室？」

物思いに耽っていると、水色を基調とした戦装束を纏っている浦島に話しかけられる。物吉はいつもの穏やかな笑みを浮かべ、目の前の浦島に答えた。

「そうですね。浦島君は？」

「今から蜂須賀兄ちゃんと滑園の調査の手伝い……。酷い事するよなあ、その小狐丸も。さつき小狐丸さんと話したけどさ、『敵ではなく、くいたいけな童を痛めつけるなど言語道断』ってかなり怒ってたよ」

「……まあ、自分の分霊がそのような凶行をしたとなれば、腹立たしく思うのも当然ですね」

——どこかの小狐丸が滑_レ園を、蛭丸が研究所を襲撃した。それからすぐに、政府直属の部隊は事件の実態を調査しようと動き始めた。だが子供達の聞き取りは要領を得ず、大人への聴取は錯乱している者が多く参考にならなかつた。追跡をしても途中から痕跡を消されており、尻尾を掴むのが困難な状況だった。

あの二振り——そしてそれを率いているらしいどこかの鶴丸は、相当な手練れであるようだ。本腰を入れて追わなければならぬ、とは眉間にしわを寄せていた審神者の言葉である。

「調査中の雰囲気あまり暗くなりすぎないといいな……ちよつと憂鬱なんだよ」

「そうならないようにボクも浦島君の幸運を祈っていますから。浦島君も頑張ってくださいね」

「うん、仕事だし頑張るよ。じゃあそろそろ時間だから」

浦島が手をひらりと振って物吉の横を通り過ぎる。物吉も審神者の部屋に向かおうと歩き出した時だった。

そうだ、と浦島が物吉に向かって叫ぶ。

「あるじさんのお客さん、綺麗な女の子だったよ！ 後で話聞かせてくれよな——」

それだけ告げて今度こそ、浦島は玄関に向かって走り去った。物吉は少し訝しむ。

——主様に、女性のお客様？ しかも、綺麗な子って……

物吉の主である審神者は、幅広く知り合いがいる。しかし女の「子」と称される程若い女性の知り合いは、かなり少ないはずだった。一体誰で、どんな関係なのだろう。

いやでも、あまり深く詮索するのもよくない。自分は、審神者に幸運を届けるだけだ。

首を振って雑念を飛ばし、物吉は執務室へと向かう。バタバタと走り回る仲間にぶつからないように、細心の注意を払いながら。

「執務室」と書かれたドアの前に立ち、大きく深呼吸をする。ノック

し、ノブを回して大きく開ける。

「主様、お客様にお茶とお菓子、を……」

——それが、物吉が体の自由を有していた最後だった。

気付けば物吉は、体の奥底に魂を押し込められていた。何が起こったのか。体の制御を奪われた事は分かる。それにしても、今回はあまりにも強引だった。乱雑にその場から押しつけられたような、そんな性急さがあつたような気がするのだ。

呆然とする物吉は、固定されている視界を覗き見る。そして、この事態の原因を知る事となった。

「おう、物吉ありがとうな。……物吉？」

審神者が怪訝な声でそう呼びかけていても、物吉にはどうにも出来ない。審神者の声に応えないと失礼だ。礼を欠くつもりはない。だが物吉は、固定された視界の中心にいるその存在に、目を見開く事となった。

——何で、何で彼女がここに——

審神者が己の失態を悟つたように短く声を上げた。物吉の口は、震えながらその名前を呼んだ。

「ミサキ、さん……？」

長い茶髪をポニーテールにまとめ、目は強い意志を秘めて光っている。皺一つないスーツを身に纏う、きつちりとした性格が見えるような立ち姿。その存在は物吉に——「r・b・彼>」に気が付くと、一瞬不信感を乗せて睨む。しかしはっとしたように目を開けると、驚愕を隠さずに尋ねる。

「え……まさか、^{コースケ}幸助、なの？」

——その存在は紛れもなく、記憶にある頭陀寺美咲そのものだった。

15—2 「演練場での暗躍」

「……それにしても珍しいよね、青江さんが演練に出るなんて」
「まあ、他の本丸が少し気になってね。うちの本丸は堅物が多いから」
「青江、あんまり新刃をからかってやるなよー」

考えておくよ、とだけ仲間に返して氷雨隊の青江はぐるりと演練場を眺めた。

演練場は今日も、様々な刀で溢れている。修行に行つた短刀が多めだろうか、それでも遠戦出来て打撃もある程度強い打刀や、盾兵の刀装を持って勝ちの目が見える太刀、大太刀も散見される。

——さて、僕はここでもいいひとに出会えるかな？

妖しい笑顔の裏で、青江は前日深夜に聞いた審神者の言葉を反芻していた。——どんな手段を使っても裏切り者を見つけ出せという、審神者の怒りに満ちた声を。

氷雨隊に、謀反の疑いがかかっている。それを聞かされた青江は「審神者が冗談を言うなんて珍しい」と一瞬考えてしまった。それ程までに現実離れしていたのだ、その事實は。

氷雨隊の審神者は、周囲の審神者から「政府の犬」と揶揄される程の愛国主義者だ。政府の指令は絶対厳守、刀剣達にもそれを求め政府から信頼を得るまでに指令を遂行し続けた。「裏」の仕事も請け負うまでに政府から買われているその忠誠心は、他の追隨を許さない。

それなのに、謀反の疑いがかけられた。上官から嫌味を受けた事で審神者もその事を知つたのだ、当然審神者自体は潔白である。

——即ち、審神者の指揮する刀剣男士の中に、裏切り者がいる。そう判断した審神者の行動は早かった。第四部隊の中でも柔軟に対応出来る青江を呼び出し、謀反者の特定を命じたのだ。審神者自身も調査すると言っていたが、青江も手段を問わず探し出すつもりだった。

ただし、探っているのを裏切り者に知られてしまつてはまずい。決定的な証拠を掴むまで何気なく、さりげなく行動しなくてはならなかった。

そこで、青江が取った手段は――

――おや、良い所にいた。

小さく口角を上げ、青江は当たりを引いた事に拳を握る。

演練相手の一覧の中、一番に映し出されている本丸にその目を伏せた刀剣男士はいた。

数珠丸恒次。青江と同派の刀剣男士だ。

かつてシステム「刀剣乱舞」の新調に伴い、審神者を更に集める為政府は人材をかき集めようとした。数珠丸という新たに顕現可能になった強い刀剣男士の確定配属という餌で、確かにある程度は集まった。しかし既定の人数には達する事は出来なかった為、数珠丸は限定時間の鍛刀という結果になった。その後も入手機会は設けられたが、今なお数珠丸は顕現が難しい刀の一振りである。

氷雨隊の審神者も、数珠丸を入手出来ない審神者の一人だ。戦力はある程度揃っているが、それでも審神者にとって数珠丸のステータスは魅力的だったらしい。入手する機会があればすぐに戦力を投下して数珠丸を顕現させようとしたが、現在も氷雨隊に数珠丸がいない事から結果は察せられる。

青江も、ある程度数珠丸の情報は手に入れていた。仏道に馴染みの深い、名の通り数珠を持つ姿。その眼差しは祈るように伏せられて、心の機敏を読み解くのは難しいらしい。

――けれど、怨念を感じ取れるなら、あるいは……。

ある事に期待を抱いて、青江は仲間達に呼び掛けた。

「ねえ、この本丸とやってみるのはどうかな？」

「んー？ ……おつ、数珠丸がいる。青江、少し話してみたくなっただけ？」

「ふふふ、どうだろうね」

「数珠丸さん、うちにいないからねー。ボクもちよつと気になるかも。演練お願いしようか」

「そうだな」

演練を申し込み、指定された部屋に入る。部屋の中に置かれているカプセルの一つに横たわり、蓋を閉める。

目を閉じ、再び開いた頃には既に世界が一変していた。風が吹く開けた大地に立っているのだと感じる。実際は、精神を電子世界に飛ばされているだけなのだが。

——いつ来ても不思議だね。さて……。

地面を鳴らして、刀達が近付いてくる。目の前に現れたのは、三つ刀装を操れる太刀と大太刀で揃えられている統率を重視した部隊。隊長は、数珠丸だ。

青江は数珠丸に笑って手を振り、刀を構える。

「——より良き自分を目指し、鍛錬に励みましょう」

「——さあ、みんな一緒に乱れちゃおう？」

開戦のブザーが鳴る。青江は地面を蹴り、刀を振りかぶった。

*

「うーん、やっぱり盾兵三つ積んだ太刀は硬いなあ」

「先制が出来る事は強みだけど、刀装を剥がせなくちゃ意味ないよなあ」

「槍は一振りいた方がいいかもね。それで——」

仲間達が演練の反省会をしている。こちらは青江を除く全員が修行をした短刀なので、その強みと弱みを確認しているようだ。

本来なら混ざりたい所だが、青江にはやらなければならぬ事がある。

青江はカプセルから出て、ドアノブに手をかけてから仲間達に振り返った。

「ちよつとあつちの本丸のひとと話してくるよ」

「えー、青江さんも意見出して欲しかったんだけどなー」

「数珠丸と話したいんだろ。こっちは気にしないで行ってこいよ、青江」

「お土産話、待ってますね」

青江が純粹に数珠丸と話したいのだと、疑いもせず仲間達は彼を見送った。青江は歩きながら信じてくれている事に喜び、そして少しの後ろめたさを感じていた。

隠し事をしているのは気が引ける。だが、こちらにも主命だ。果たさ

なければならぬ事をしなければ。

相手本丸の部屋のドアをノックする。中からは「い、とのんびりとした声が響く。ドアを開ければ、中にはカプセルの上からこちらを見る刀達がいた。

「やあ、ぴっかり君。もしかしてじえる丸君に会いに来たの?」

「兄者、来たのはにっかりで用がありそうなのは数珠丸だ」

「ありや?」

「やつほー、氷雨隊の青江。そっちの国俊は修行済なんだね。こっちの国俊はうずうずしてるよ」

「修行に行く刀も増えて来たしな。驚かせてくれるのが毎度楽しみなんだ」

相手から思い思いに声をかけられる。中に入っつていいか尋ねるとすぐに了承されたので、部屋に足を踏み入れドアを後ろ手に閉める。

青江はいつもの妖しい笑みを浮かべて部隊を見渡す。目的の刀は、部屋の隅にあるカプセルに座っていた。

「青江さん、数珠丸さんの事よく見ていたよね。もしかしてそっちには顕現していかないのかな?」

「うん、その通り。だからどんな刀なのか気になってね。不躰だったら謝るよ」

「いえ、そんな事はありませんよ。同派の顕現していない刀を、気にするなという方が難しいですから」

ようやく口を開いた数珠丸は、穏やかな雰囲気纏っている。気に障っていないかった事に安堵しつつ、青江は部隊の面々に軽妙な口振りで告げた。

「ねえ、少し数珠丸を借りてもいいかな? イロイロと話したい事があったね。それと、もっと深く数珠丸を知りたいんだ」

「この後は……特に予定はないかな」

「数珠丸、どうする?」

さあ、どうなるか。青江は密かに唾を飲み込む。まずはここで了承を受けないといけない。そうなれば、また相手探しからやり直した。友好的な雰囲気があるので、まずは断られないと思うが――

視線を一身に受けた数珠丸は、穏やかな雰囲気は一切変えずに頷いた。

「構いませんよ。私も少し、話したいと思っていましたしね」

「分かった、主には伝えておきな」

「ゆつくり話してくるといいよ、ええと……」

「数珠丸だ、兄者……」

数珠丸が立ち上がり、青江の下へと歩み寄る。青江は笑みを浮かべたままドアを開け、数珠丸を先導する。すると背後から、石切丸の聲が飛んで来た。

「……数珠丸さん、くれぐれも気を付けて」

「はい」

数珠丸がそう応えて、ドアは閉まった。部屋の外に出てしまえば、物音は二振りの歩く足音しかなくなる。青みのかった黒いカーペットの上を進みながら、青江は軽口を叩いた。

「ふふ、大切にされているんだね。石切丸の心配そうな声といったら、君に何かあつたら斬られてしまいそうなくらいだ」

「ええ。私の事を、主や本丸の皆はとても大切に扱ってくれています」
演練に出ていた部隊がドアを開けて、賑やかに横をすり抜けていく。部隊が遠ざかった後には、再び数珠丸の声だけしかしなくなつた。

数珠丸は口調を変えなかったが、今いる本丸を大切にしている事が伝わって来る。うんうん、と青江も穏和に相槌を打った。

「いい事だよ。中には刀剣男士を乱暴に扱う審神者もいるくらいだからね」

「そうですね。——貴方の本丸はどうですか？」

穏やかな雰囲気から一転、酷く警戒している声音で数珠丸は青江に問いかける。首元に刃を突きつけられているような強い殺気を覚えて青江は振り返った。

目は伏せられ、そこから心情は窺えない。しかし発している空気から、数珠丸に不信感を与えてしまったのだと気が付く。

——そうだ、数珠丸は顕現が難しい刀。

頭現が難しい刀を譲るように脅す審神者が存在する事を、青江は知っている。そして、自分の希少さを知らない数珠丸ではないはずだ。彼が警戒するに越した事はないだろう。何せ、強引にさらう本丸だってあるくらいなのだから。

「私は演練中、あからさまに貴方が私を見ていた事に気付きました。そして何より演練終了直後に現れ、性急に他のものと引き離そうとしたその態度……理由を話しなさい。独断か本丸ごとなのかは分かりませんが、それでただ『私と話したいだけ』とは言わせませんよ」

場所が場所なら、抜刀されていただろう。目は開いていないのに、鋭く睨まれている感覚がする。全身に力が入って、ピリピリとした空気を発している。もしかしたら、この数珠丸は既に被害に遭っていたのかもしれない。

——これは、ある程度話さなくては駄目か。

正直に話さなければ、更に疑われるだろう。青江は腹を括り、両手を上げた。

「ごめん、確かに慌て過ぎだった。でもこれだけは誓って言えるよ、君をうちの本丸に引き入れるつもりはない。……君の言う通り、僕はただ君と話したいだけじゃない。簡単に言えば、君の力を借りたいんだ」

「……どういう事ですか？」

数珠丸が訝しみながらそう尋ねる。まだ警戒は解いていないが、話を聞く姿勢にはなったようだ。

青江は真面目な顔を作り、数珠丸を見据える。

「詳しくは話せないけれど、うちの本丸に問題が起こっていてね。主が大層お冠なんだ。原因を何としても突き止めろとのお達しでね、うちの本丸にいない、そしてその気の事に強そうな君にしか頼めない」「私に、何をしろと？」

数珠丸はまだ完全に警戒を緩めない。青江は拳を握り、要請を続ける。

「簡単さ。ただ僕の本丸に客として来て、中をじっと見つめてくれればいい。他の刀達を不安がらせないように、ちよっとお茶でもしてく

ればなお良い。……これはうちの主の進退に関わる事なんだ。礼は必ずする、信用出来ないなら破壊以外の事を尽くす。どうか、頼まれてはくれないかい？」

頭を下げれば、結ばれた髪が垂れる。垂れた髪と青黒いカーペットが視界に広がった。頭頂部に視線を感じているが、数珠丸は言葉を発していない。

沈黙がその場を支配する。演練はもうほとんど終わっているのだろう、周囲には誰もいない。静寂が痛いくらいに耳についた。

もしかしたら、話にならないとその場を去ってしまうかもしれない。もしくは、他所に頼るなど苦言を呈するかもしれない。それでも、青江は頭を上げずに言葉を待った。

「……頭を上げて下さい」

静謐な声でそう告げられ、ゆつくりと頭を上げる。数珠丸から剣呑な雰囲気は消え失せ、ただ静かに顔をこちらに向けていた。

「元々、それこそ本丸を移れなどと無理な事を言われない限りは、貴方の頼みを聞くつもりでした。貴方や貴方の本丸にやましい所がなく、ただ協力を求められたなら応えたいと思っていましたよ。……それに、貴方は礼をすると言いました。ただ貴方の本丸で茶をするだけだというのに。そうまでして私を呼びたいのなら、同派の仲です。応えない理由がありません」

「じゃあ……」

期待を込めていたのがあまりにも明け透けだったのだろうか。数珠丸は困ったように眉を下げ、小さく笑って答えた。

「主には連絡しておきます。その前に、詳しい予定を詰めてしまいたいでしょう」

「——恩に着るよ、数珠丸」

改めて礼をすると、数珠丸は柔らかな表情で青江に言った。

「貴方の本丸を楽しみにしていますよ、にっかり」

15—3 「非公式手合わせ」

青々とした竹の間を青い髪の男が駆ける、駆けていく。青い葉の間から雨が滴るも、それを浴びながら男は進むのを止めない。

刀を構えながら走るその男に、普通の人間ならまず追いつけないだろう。それを男も承知している。

しかし背後からした葉擦れの音に気を取られ、前方が疎かになってしまう。そして気付いた時には――

「――がら空きだぜ！」

前方に立っていた白い男に鋒を向けられていた。紙一重でそれを避け、反撃しようと青髪男が横一文字に刀を振る。それをあっさりと受け流し、白い男は再び攻勢に転じる。

青髪男は息が少し上がっている。そのせいか剣撃のスピードも万全時と比べ落ちていく。一方の白い男は楽しそうに刀を振っている。戦い甲斐のある相手に、存分に楽しませてもらっているのだろう。

青髪男がふらりと体をよろけさせ、白い男がそれに気付かず刀を振り下ろそうとした。

「はいはい、そこまで！ アンタ達、休憩にしな！」

白い男がその声にピタリと動きを止める。青髪男は尻餅をついて息を荒げ、白い男は刀を鞘に収めた。

青髪男の後方からのんびりと歩いて来たのは、派手で女性的な姿をした大男。一升徳利をぶら下げて現れたその男は、青髪男と白い男の周囲を見てうわあ、と声を上げた。

「ちよつと、白熱し過ぎじゃないの？ これ上に怒られるのアタシなんだからね？」

竹の幹にはあちこちに斬った跡がついており、一部の竹は折れる寸前まで行っている。葉も地面に大量に落ちており、抉れた地面を覆い隠すように散乱していた。

息を吐いて大男の言葉を聞いた白い男は、周囲を見て気まずそうに頭を掻いた。

「……あー、すまん次郎。俺も一緒に叱られるから許してくれ……」

「それと猩々木庵で奢りだよ、鶴丸。一期もお疲れさん、水持って来たから飲みな」

「ありがとうございます……」

ペットボトルを大男——次郎に差し出され、青髪男——一期は受け取り飲み口を口に含んで思い切り呷る。白い男——鶴丸は、次郎に高級酒を奢るよう迫られ、顔を青ざめさせていた。

蒼穹の一期が春光隊の獅子王と石切丸と別れた後、端末に氷雨の鶴丸から連絡が入った。——急で悪いが手合わせがしたい、約束してかからかなり遅くなつてしまつたが時間はあるか、と。

春光隊の長谷部の過去を聞いて思考が暗くなつていた一期は、少しでも気分を持ち直す為はその提案を受け入れた。場所は本丸区域の中にある竹藪、見届け刀として次郎太刀がついて来た。

一期は顕現してから数ヶ月、鍛錬を積んで来ていた。格だつて特に上がったし、弟達にも恥じないような刀剣男士になれたと思つてる。実際、弟に恥じる所はないだろう。

しかし——結果は、鶴丸に押されつぱなし。流石に一回は攻撃を入れられると考えていたが、鶴丸には一度も刃が届く事はなかった。

これには一期も凹む。がつくりとうなだれていると、次郎が一期の側に寄り朗らかに笑いかけた。

「大丈夫だつて、鶴丸と手合わせしたの初めてなんだろう？ それでここまでもつたのは凄いよ！ もう少し鍛錬を積みめば、鶴丸と互角になるんじゃないかい？」

「そうでしょうか……」

「うん、その点は自信を持つていいと思う。鶴丸の初見殺しにもなかなか上手く対応出来てたし、後は自分の型にどうやって嵌めるかだね」

次郎はしやがみ込み一期と視線を合わせる。不安そうに顔を上げた一期の背をバンバンと叩いて、次郎はまた明るく笑う。

「力は順調についているんだし焦らなくていいよ！ とうか少し急ぎ過ぎだね、もうちよつとゆつくりでもいいくらいさ」

「……」

一期は目を伏せて黙り込む。そうは言われても、悔しさと焦りが募ってしまう。

そもそも、この手合わせを申し込んだのは一期だ。一期は一刻も早く、そして鶴丸相手にある程度上回れる力量を手にしなくてはならなかった。

——同じ存在でない以上、必ず齟齬は生じる。それで苦しむ事になるなら、最初から繋がりになんて無い方がいいと思わないか？

かつて自本丸の鶴丸に、二度された問い掛け。それがどうにも、不安を掻き立てられて仕方ないのだ。

光を返さない、暗く淀んだ目。感情の色を感じ取れない、平坦な声音。——あの鶴丸と近い内に戦う事になるだろうという予感、一期の中で渦巻いていた。

繋がりが無い方がいいなどと、一期は思わない。様々な場所にいた弟達と過ごす時間は宝であるし、氷雨の鶴丸をはじめとした他本丸の刀達と話す事はとても楽しい。その繋がりを手放す事を、何度問われても一期は選ばない。

自本丸の鶴丸とはぶつかり合う部分が大き過ぎる。きつと次は、刃を持って語らう事になるだろう。その為に、少しでも心身共に強くなりたかった。

「……なーんか納得してない様子だね。それに少し表情に翳りが見える。何があったんだい？ 次郎さんに話してごらん」

「……自分の心の弱さに、呆れていただけですよ」

「何言ってるんだい。アンタも一期一振らしく、芯の強さはあるよ。じゃなかったら向き合いたくないだろう事へ、自分から苦しみに行くもんか」

え、と次郎の方を向く。まるで自分の心の内を見透かしたような言い振りだ。

次郎は珍しく少し物寂しそうに目を細めて、小さく息を吐きながら言葉を紡ぐ。

「類は友を呼ぶとはよく言ったもんだ。アンタとうちの鶴丸は少し似ているよ。……鶴丸も昨日何かあったらしくて、ずっと無理をしてい

るようなんだ。鶴丸とアンタの様子があまりにも似通っていたからね、何となく腹の内は見えて来るさ」

「……違います、私は、刀を振るう事で逃げているだけだ」

「逃げている、っていう言葉が出るのがそれを認識している証さね。本当に目を逸らしているのなら指摘された時点で逆上しているはずだ。内心を——後ろめたい感情を指摘されると、心つてのはどうも反抗したくなる性質があるらしくてね。その鶴丸もそうだった」

「ばつと顔を上げると、鶴丸がバツの悪そうな顔でそっぽを向いていた。次郎は彼を一瞥して苦笑すると、目を閉じてから言葉が続ける。

「昨日の鶴丸の荒れ具合ったら凄かったよー。帰って来たらいつもの飄々とした態度はどこへやら、周囲に殺気を撒き散らしながら歩いてたんだ。そしてたまたま出くわしたうちの一期に、嫌味一つ言われただけで抜刀さ。いつもならもう少し皮肉の応酬をしてからなんだけどねえ。ありや八つ当たりも多分に入ってただろう、鶴丸」

「……その点は、すまないと思ってる」

「謝るなら本刃にね。それよりも、昨日の滑園の襲撃事件。あれにアンタ達も巻き込まれたんだろう？ 滑園は鶴丸も行ってたし、友達の一期も同じくじゃないかい？」

次郎の言う通り、滑園の惨劇は一期も見届けていた。子供達のほとんどが命を散らされ、そして滑園の実態を知った。

「遺された子供達の涙に濡れた悲痛な顔が頭から離れない。特にソメゴローは、親友であるサクヤを上塗りされる形で失ったと分かったのだ。恨み、悲哀、憤怒、無力感。それらが一挙に襲い掛かって来た彼のダメージはどんなにか。」

——返せ、返せよ！ サクヤを——俺の相棒を返せ!!

顕現する形が違えば、それはもしかしたら自分に向けられていた言葉だったのかもしれない。人間から兵器に変えられ、そしてかつての記憶は塗り潰される。サクヤのように大切に思われている人間がいたのなら、周囲の人々は降ろされた刀剣男士に鬱積した暗い感情を向ける事だろう。誰も悪くない故に、すぐ近くにいる責められる刀剣男士に。ソメゴローの苦しみよりもそれが辛いと思う自分は、薄情なの

だろうか。

それと、もう一つ。自分の側を通り過ぎて行く小さな弟。その存在に昨日まで気付けなかった。弟の性質が大きく関係しているとはいえ、兄である自分が存在を無視していたのだ。

気付けなかった後悔と拒絶される悲痛、そして罪の重さが酷く苦しい。一期は鶴丸の誘いに乗ったのはそれから逃れる為でもある。そんな自分に、優しくされる謂れはどこにもない。

「……吐き出すなら吐き出しちやいな。辛い物を見たんだろう、特にまだ顕現してから時間がそう経ってない一期。辛い事を堪えるのも選択肢の一つだけど、周囲に悟られているなら心が悲鳴を上げている証だ。堪えれば堪える程、心にヒビが入っていくよ」

ないはずなのに、次郎は苦しくなる程優しい声でそう言った。その優しさは一期の心に一雫落ちて、心の枷を溶かしていく。

どうして、優しい言葉をかけてくれるのだろう。分からない。分からないけれど、もう限界だ。

せめて涙を流さないように——あるいは見せないように——俯いて、一期はぽつぽつと話し始めた。

「私は……滑り園の子と、短い間でしたが交流していました。目を閉じれば、あの子達の笑顔も声も思い出せるのです。その子達が悲惨な目に遭って、それも確かに悲しくて、辛いんです」

「うん」

「でも、私は……あの子達に、何故もつと上手く出来なかったのか、何故もつと早く助けに行けなかったのか、それを責められるのが……酷く、怖くて」

「うん」

「先に救助に来ていた友刃は、心から子供達の事を憂いていたというのに……私は、自分の事ばかりで……！ いつだって自分が可愛くて、気付けないといけない事にも気付かず、それでも彼等の事よりも自分の痛苦が先に立って……っ」

「二期」

力強く、けれど丁寧さも内包して頭を抱えられる。ぽんぽん、と背

中に回された手が優しく、一期は目を見開く。続く穏やかな声が、耳に染み渡った。

「アンタは感受性つてのが豊かなんだねえ。うちの一期とは大違いさ。うちのだったらある程度悲しんだ次の瞬間には弟の事に切り替えているよ。無論、アンタのそれが悪い訳では全くないさ。寧ろ長所だね。悲しみに寄り添って、自分の悪い所にも向き合って……大変だっただろう。アンタの心はちよつと色んな事があり過ぎて、疲れちゃったんだよ」

竹の葉の擦れる音が、柔らかく心に響く。次郎が背を叩くりズムも相まって、一期の視界が更にぼやけていく。

感情の膨張に震える一期の体を優しく抱きしめて、次郎は背を叩き続けた。

「戦う事で発散するのもいい。でも今は、少し休みなよ。心の痛みを、思いつ切り表に出しな。大丈夫さ、ここにはアンタを笑う奴はいない。アンタは醜態を晒すと考えるのかもしれないけど、それは心を整理するのに必要な事さ。アンタが望むなら、アタシは何も見ない事にするからさ」

その一言によって、一期の中で感情の緒が完全に緩んだ。

目から噴き出した涙はあつという間に一期の頬をしとどに濡らし、しやくり上げる口を止められない。一期は次郎に抱き付き、肩口に顔を埋めて懺悔の言葉を紡ぎ始める。

「ごめんなさい……ごめんなさい……！ 私、何も気付かなくて……悲鳴も寂寞も傷心も、知っていたはずなのに……！ どんな顔をして、あの子の兄を名乗っていたのか……今となっては、思い返すのも苦しくて仕方ない……！ ああ、ああ、秋田、すまない、本当にすまない……！ こんな私では、誰の前にも自信を持って立てない……呑気に友達になりたいなどと、どうして言えたのか……未来が失われると知ろうとせず、どうして子供達に未来を夢見させたのか……！」

一期はただ、懺悔し続ける。自分の無知と愚拳を吐き出しながら、涙を流して。

何も言わず、次郎は一期の背を叩いていた。しばらくそうしていたが、次郎は顔を上げて鶴丸のいる方向を見る。鶴丸は、迷子の子供のような表情をしていた。

「鶴丸、アンタは吐き出さないのかい？」

「……いや、俺は……」

「大方、友達が先に感情を吐露したけど自分はどうすりゃいいか迷ってるんだろう。アタシはアンタの事も笑わないよ。アンタはかなり複雑な思考回路をしてるからね。まとめるのも時間がかかるだろうさ」

鶴丸は呆けた顔をして、ゆっくりと眉を下げた。そして音を立てないように次郎の側に寄って胡座をかく。頭をガシガシと掻きながら、鶴丸は少し情けない声を出した。

「何というか、君に負けた気がしてなあ。……友達を慰めてやりたかったのに、実際に感情を表に出させたのは君だ。それが、酷く悔しくてたまらん」

「友達だからこそ張りたい見栄だつてあるさ。アンタだつて、アタシがいなかったら一期の前でそんな顔出来なかっただろう？ 友達に悪い部分を見せて引かれたくないっていうのも人情さ。特にアンタはなかなか心の内を晒さないからねえ。友達になつたとしても線引きがまだ難しいんじゃないかい？」

「……君は、本当に頼もしいなあ」

「褒めてくれてありがとさん。で、アンタはどうする？ 次郎さんの懐は空いてるけど？」

ほら、と次郎が左腕を広げる。鶴丸は首を振り、手を後ろに置いて空を見上げた。

「いや、俺はいい。まだ吐き出したい事もまとまってないのに、いたずらに君の戦装束を濡らす訳にはいかないからな」

「別にいいのに」

「張りたい見栄つてもんもあるしな。気持ちだけ受け取っておく。ありがとな、次郎」

難儀だねえと笑い、次郎は左腕を泣きじやくっている一期の背に戻

した。

15—4 「消えた町の子供達」

清澄隊は現在、刀剣勇士として肉体を持つているのは近侍である江雪のみだ。一振り分しか用意しなくて良かった為、台所は少々広過ぎた感があった。

しかし、今は事情が違う。台所は大きさ相応の役割を果たしていた。

流し台の前にいる江雪の隣。そこにある踏み台の上に、一人の少女が立っている。名前は深山^{ミヤマツクシ}月紫。児童養護施設滑^ス園に在籍していた一人だ。

昨日の夜に滑^ス園がどこかの小狐丸に襲撃され、職員を含めた多数の死者が出た。生き残った子供達は清澄隊に身を寄せ、惨劇の傷に苦しみながら過ごしていた。

ある子供は泣きじやくり、ある子供は引きこもり。そんな中でツクシは、気丈に振る舞っている数少ない子供だった。こうして他の子供達の間まで昼食の片付けも行っているし、江雪に対しても普通に接している。

それが、江雪にはありがたかった。他の子供達は、江雪に対して複雑な感情を抱いているのを剥き出しにしていたのだから。

「……ツクシさん、後は私がやりますよ」

「ううん、やらせて。こうしていると気が紛れるの」

「……そう、ですか」

「うん」

そう言ってツクシは皿洗いに意識を戻す。蛇口から出る水は彼女の手に注がれ撥ねて、江雪の手にかかる。それを江雪はぼんやりと認識していた。

ツクシだつて、昨日の惨劇に、刀剣勇士たる自分に対して思う所があるはずだ。けれどそれをぶつけないで、普通の態度でいてくれる。

それに安心する一方で、江雪はツクシが態度を一変させる事を恐れていた。いきなり罵倒や号泣で拒絶などされたら、江雪の心にも小さくないダメージが入るだろう。

——それでも、私は最後までこの子達の面倒を見ると決めた。弱気な事は言っていられない。

決意は堅いつもりだが、子供達に拒絶されたらきつと揺らいでしまうだろう。そんな己の弱さが情けなくて仕方ない。

「江雪さん、袖まで濡れてるよー!」

ツクシから指摘され、慌てて思考の渦から現実へと戻る。確かに内番着はぐつしよりと濡れてしまっており、着替えないと風邪をひいてしまうだろうと分かる。水を止め、はあと息を吐く。

ツクシは気遣わしそうに江雪を見て、何の事はないように尋ねる。「大丈夫、江雪さん? 昨日の今日で、江雪さんも疲れてるんじゃないの?」

当たり前のように心配して、疲れてるんなら休んだら、と勧めてくれる。そんな少女の気遣いに、江雪の口からぽろりと疑問が溢れた。

「……どうして貴女は、そんなに強いのですか?」

「え?」

きよとんとツクシが目丸くする。しまったと思っても、一度口にした言葉は元に戻らない。それどころか、つらつらと疑問を並べ立てる始末だった。

「どうして貴女は、私を恨まない——いや、その素振りを見せないのですか? 貴女は昨日から、ずっと私達に対して恨み言一つ漏らさない。貴女と仲のいい子達も亡くなって、タイガ君も重傷を負ってしまった。そんな中で、私はおろかあの小狐丸にすら怨嗟の念を零さない貴女は、どうして態度を荒げずにいられるのですか? 私は、貴女達に恨まれる事を、こんなに恐れてしまっているというのに……」

最後の方は、声が震えてしまっていた。うなだれて弱音を吐いている自分が、本当に情けなくて仕方ない。

吉礼大河^{キレタイガ}は、ツクシが最も心を許している少年だ。彼は昨日の襲撃でツクシを庇い、腕に銃創を負ってしまった。現在も病院で手当てを受けており、死ぬ可能性は無くなったが重傷である事には変わりない。タイガが撃たれた時にはツクシも錯乱しており、それ程大切な存在だとその時初めて知った。

大切な存在が江雪と同じ刀剣男士に殺され、傷付けられたのだ。仲良くしていた江雪も同じように変貌してしまうのではないか。そうでなくても、似た存在に対して良い感情を抱けるかは疑問だ。

蛇口から水滴が一つ落ちるのを、江雪は流し台の縁に手を置いて見つめていた。落ちた雫は水に満ちた茶碗に波紋を作る。波紋は静かに広がってから跡形もなくなり、小さな水面は凧いだ。

ツクシは困ったように力なく笑い、流し台横のタオルで手を拭いて江雪の顔を覗き込む。

「江雪さんにはまだ話してなかったかな。私とタイガが、滑_レ園に来た経緯」

江雪はツクシと恐る恐る目を合わせて、話を聞く姿勢に入る。ツクシは微かに目を細めて語り始めた。

「私とタイガはね、ある小さい町で生まれ育ったの。家が隣同士で、私が少し誕生日が早いだけの同い歳。だからよく、タイガと一緒に遊んだ。秘密基地を作ったり、近くの森に探検しに行ったり、結構色々したなあ。他の友達とも遊んだけど、一番気が合ったのはタイガだった。一言多くて喧嘩になった時もあったけど、次の日にはうやむやになった」

そこまで言ってツクシは顔を上げて、遠くを見つめる。その目は、もう届かない何かを思い出している様子だった。

「タイガがお母さんと喧嘩した時は、私がお姉ちゃんになってあげるって言って、家に連れて帰った。逆に私が家出した時に頼ったのは、タイガのお家だった。姉弟ごっこをしたりして、何でも私とタイガのお母さんが将来は安心ねって言った。お父さんは時々タイガに凄んでたりして、タイガはちよつと怖がってた。なんだかんだで、そんな日がずっと続くと思ってた。けど、タイガと秘密基地で遊んだ時。忘れもしない——町の景色が突然揺らいだの」

語調が強くなる。ツクシは再び江雪の方を向き、言葉を紡ぎ続けた。

「秘密基地のあった場所は高台にあつて、そこから町が揺らいでいるのが見えた。タイガはどうしたんだって叫んで、私はずっと町の揺ら

ぎを見てた。でもしばらくしたら、体が宙に浮かぶ感覚がして——気付いたら、この町の森の中にいた。タイガは呆然として、私もどうしたら良いか分からなくて……でもとにかく森の外へ行こうって、日が沈むまで歩いて森の外へ出た。町の中心まで歩いて、お店の人にここはどこなんですかって尋ねたら、すぐに大人達が来て私達は大きな建物へ連れて行かれた」

連れて行かれたのは、恐らく政府中枢だろう。そこで、ツクシとタイガは飲み込むのを拒絶したくなるような事実を聞かされる事となる。

「……私達の住んでいた町は、もう存在していないはずの町だったんだって。ずっと昔に、隣の町と合併して別の町になってるはずで……私達の生まれ育った町の人は全員、正しい歴史の中にはいないんだって。歴史修正主義者が歴史を歪めたから、私達が生まれたんだって」

——歴史改変の影響で、新たな歴史が生まれる事もある。彼女の町は、その一つだったのだろう。

歴史に大きく影響しない、小さな改変。その余波で、彼女達が生まれた。生まれてしまった。

本来なら時間逆行軍の消滅に伴い消えるはずだった彼女達は、今なお消えずにここにいる。それは一体何故なのかは、すぐに説明された。

「私達は、時空への抵抗力が強い珍しい体質だって、お医者さんに驚かされた。だから歴史が正されても消えずに、存在していられたんだって。私達はしばらく、大きな建物から出られなかった。細かい事、それこそ忘れかけてる事まで色々聞かれる事になったから。色々聞かれた時に、薄々分かってたけど聞いたよ。……お父さんとお母さんに、もう一度会えますかって」

そう、彼女も分かっていたのだ。珍しい体質。驚かれる。そして一向に現れない両親。

分かっていたのだ。子供は大人達が思う程愚かではない。けれど——

「……残念だけど諦めてって、言われた。歴史が正しくなあって、間違った歴史の人間だったお父さんとお母さんは消えた。これからどんなに似た人が現れても、その人は、違う歴史を歩んだ人だから、って。……流石に、あの時はみつともなく泣いちゃったなあ」

傷になっっているだろうに、彼女は前髪を握るだけで涙を流さない。強さ故か、悲しみに蓋をしている為かは江雪には分からなかった。

歴史が正された時点で消滅した両親。そして歴史が小さな事でも揺らぐ以上、同じ両親は二度と現れない。

生まれ故郷と親、そしてそれまでの生活を失い、ツクシは一時期塞いでいたという。今までの時間を失い否定されたも同然なのだ、そうなるのは当たり前である。

しかしある日、彼女は政府の人間の噂話を聞いて、籠もっていた部屋を飛び出した。

「タイガがずっと、手をつけられない程暴れてるんだって話してて、じっとしてられなかった。すぐにタイガの部屋に行ったよ。……部屋の中は、確かにぐちゃぐちゃだった。タイガが言葉になつてない叫び声を上げながら、物を投げたり壁を叩いたりしてたから。タイガはあちこち傷が出来てて、これ以上傷が出来ないように止めようとしたんだけど……突き飛ばされて、悲鳴上げちゃった」

ツクシの悲鳴で我に返ったタイガ。大切な存在を傷付けてしまった彼は、その場に崩れ落ちて眩いたという。

「……俺達は生まれた事すら間違ってたのかって、泣きながら言ってた。『楽しかった事も苦しかった事も、何もかもが消えてなくなった。母さんも父さんも、友達も学校も、思い出も……全部、間違ってた歴史として消えちゃったんだ。あいつらが奪ったんだ、どうして』って、ずっと繰り返してた。私、タイガを抱き締めて言ったよ。『私の思い出には、タイガがちゃんというよ』って」

母の笑顔も、父に抱え上げられた感覚も、友達と過ごした時間も、故郷すらなかった事にされてしまったけれど。

けれど、ツクシの中にはタイガと過ごした歴史がある。間違っていたとしても、確かに共に過ごした記憶が。

——大丈夫。私がいる限り、タイガの思い出はなくならない。

「タイガが泣き止んでから私達、約束したの。私達は、私達の歴史を積み上げよう。世界は簡単にひっくり返るけど、私達の世界は頑丈にしていようって。どんな事があっても、私達は私達でいようねって。指切りして、私が笑って見せて……そこでようやく、タイガが笑ったんだ」

絶望の闇からタイガを救い出せたのは、間違いなくツクシの強さだ。自分も傷付いたのに、それよりも傷付けられながら幼馴染の心に寄り添った。

そこまでのしたのは——きつとツクシにとっても、タイガがただ一つの救いだったからに違いない。

「私は、大きな建物の中で過ごして気付いた。小さな出来事なんて、大きな歴史の中じゃちっぽけだ。そしてその歴史は、人間の力で変えられてしまう。だから、私は世界に期待する事を止めて、自分の手で自分の世界を守る事にしたの。大きな建物から滑り園に移ってからも、私はずっと思い出を取りこぼさないようにしてるよ。……まあ、流石に全部は覚えられないけど」

ツクシは肩をすくめていたずらっぽく笑う。直後表情を引き締め、江雪をじつと見据えた。

「でね。江雪さんが来るようになってから、刀剣男士ってどんな感じのひとなのかわかって思ってた。言っちゃえば私達の歴史を奪ったひと達な訳だし。……一緒に過ごしている内に、刀剣男士も私達と同じように自分の世界を懸命に守ってるんだって分かった。そしたら恨めなくなつたよ。本の中にあつた『正義の反対は悪ではなく、また別の正義である』って言葉を、実感した形になるかな」

彼女は江雪が滑り園で表に出さないようにしていた事を、とつくに知っていたようだ。血の匂いを悟らせて警戒させた事を悔やみ、そしてその聡明さに舌を巻いた。

「私は江雪さんの事を信頼してる。だって私達と遊んでいる時の江雪さんは、心から楽しそうだったから。だから江雪さんがサクヤとコタローの事を知らなかったのも疑ってないし、あの白い長髪の刀剣男士

みたいに豹変しないって信じてる。皆はまだ江雪さんを怖がってるみたいだけど、江雪さんがまた仲良くしたいって態度で示せば、次第に分かつてくれる子も増えてくると思うよ」

ふう、と息を吐きツクシは皿を掴み、踏み台から飛び降りる。そして食器棚まで踏み台を引つ張り、皿をしまおうと戸棚を開ける。

ツクシの背中を見ながら思う。——過酷な道を歩んだ子供は、ここまで強かさを身に付けるものなのかと。

自分の世界を壊され、知らない世界にたった二人で放り出された。彼女達の不安と傷はいかほどの物だったのか、想像する事しか出来ない。

小夜や宗三がいるこの世界が歴史改変によって出来た物であるなど、想像しただけで目の前が暗くなる。彼女達は、それどころではない苦痛を受ける事になったのだろう。

自分に出来る事は何か。——彼女達の歴史を忘れないように励み、彼女達の安息を祈るしかない。

「……そういえばツクシさん、小狐丸への恨みを表に出さない理由を聞いていませんが」

「ああ、それは——」

ツクシは踏み台の上から振り返り、にっこりと笑いながら答える。

「私だってあの刀剣男士は一発ぶん殴りたいと思ってるけど……それを四六時中、表に出すのは楽しくないでしょ？ 結局の所は、笑顔が一番だよ」

——本当に、この子は強い。その悲しい強さを身に付けさせた世界とは、何て苛酷な物なのだろう。

江雪は少しの哀愁を滲ませて、ツクシに笑い返した。

「……何だか、似たような言葉を仲間から聞いた事がありますね」

「えっ、そうなの？ 私、そのひとと仲良くなれるかなあ」

「……少し冗談が多い方ですが……ツクシさんが大きくなったら、紹介しますよ」

「？」

刺激の強い冗談を言う仲間を思い浮かべ歯切れの悪くなる江雪に、

何も知らないツクシは首を傾げた。

15—5 「ティータイム1」

鶴丸が蒼穹の一期と別れ、次郎と共に本丸へ帰る道すがら。次郎の懐から軽い電子音が鳴った。

「おや、主から連絡だ」

「えっ……あつ、俺端末忘れて来た……」

「ありやー、これで鶴丸だけの呼び出しがあったら主にこつてりと絞られるね」

「ネチネチ長いんだよなあ主の説教……それで、主は何て？」

軽く黄昏れてから鶴丸は次郎に尋ねる。次郎は慣れた調子で端末に届いた連絡事項を読み上げた。

「青江に客が来てるから失礼のないように、つてさ。……誰だろう？」
「うーん、心当たりがあるのは城下町だが。けど青江は滅多に降りないはずじゃなかったか？」

「青江は演練に出なくなつて久しいからねえ。……本当どこからの客なんだい？」

「俺が知つてたら次郎も知つているだろう」

「そりやそうか」

深く考えずに話しながら二振りには本丸の門を潜る。

赤い煉瓦造りの建物のあちこちで、窓が開いている。ふわりと外に靡く白いカーテンが、赤とのコントラストでやけに鮮烈に見えた。昨夜鶴丸が一期と喧嘩して壊した壁の跡もあり、鶴丸はさりげなく目を逸らす。

本丸内に入つてしばらく歩くと、賑やかな声が聞こえて来た。一つは妖しき溢れる声、もう一つは涼やかでこちらの心を癒す声、そして最後の一つは――

「……聞き間違いかな、この本丸にいないはずの太刀の音が聞こえるんだけど」

「奇遇だな次郎、俺もだ。おかしいな、鍛刀可能日時じゃないだろう？」

「……ついに戦場で迎えられたのかな？」

「いやいや、それだったらもつと早く一報が来るはずだ。……て事は」顔を見合わせて、鶴丸と次郎は足早に角を曲がりロビーへと踏み込む。そこに広がっていたのは、何とも洋風な光景だった。

白い丸テーブルを囲み、二振りと一人が談笑している。ケーキスタンドからスコーンを取り、ジャムとクロテッドクリームを付けて食しているのは青江。ティーポットから紅茶をカップに注ぎ、ミルクを入れて混ぜているのが審神者の妹である夕立。そして、カップの取手を持ち微笑みながら口に紅茶を運んでいるのが、客人であろう数珠丸だ。

歓談していた夕立がこちらに気が付き、涼やかな声と共に一礼した。

「鶴丸様、次郎太刀様！ お帰りなさいませ！」

満面の笑顔で迎えの挨拶をしてくれる夕立。その心に爽やかな風を吹き込んでくれる姿に、鶴丸は自然と優しい笑みを浮かべ手を振っていた。隣にいる次郎も妹ちゃんだいまー、と明るい声を発している。

夕立がこの本丸に住み始めてから随分経つ。兄の過保護のせいで基本的にこの本丸内から出られない彼女は、それでも不満を漏らさずに笑顔で日々を過ごしている。身の安全を確保する為審神者を目指している彼女は、兄の手伝いをしたり戦場から帰って来た刀達を手厚く迎えるなど、少しずつ目標に向かって歩みを進めていた。

彼女がいる事で、刀達のマナーも向上している。麗かな少女に醜態を見せるのは流石に憚られると考えたのは、鶴丸だけでなく全員そうだったらしい。風呂上がりには裸でうろつくものも減ったし、下品な話題は彼女が起きている時間帯には差し控えている。鶴丸と一期が喧嘩を始めると起こっていた賭博行為も鳴りを潜めている。

つまり鶴丸と一期による喧嘩以外の、紳士的ではない行為は数を減らしているのだ。夕立の威力が凄いと言うべきか、その夕立の力をもつてしても埋まらない鶴丸と一期の溝の深さを嘆くべきか。そう審神者が悩んでいたのは余談である。

そんな事情もあり、目の前では和やかな光景が繰り広げられてい

る。客である数珠丸にもこの本丸に対して好印象を与えられているに違いない。

そのイメージを壊さないようテーブルに近付いた鶴丸と次郎は、スコーンを飲み込んだ青江に出迎えの言葉をかけられた。

「お帰り。随分楽しんだみたいだね?」

「楽しみ過ぎてアタシが叱られる事態になりそうだよ」

「本当に悪かったって! ……で、青江。そこにいるのは」

鶴丸が次郎に向けていた情けない顔から一転、外向きの笑みを浮かべて数珠丸を見遣る。数珠丸は静かに立ち上がり、深々と頭を下げた。

「玄冬が一振り、数珠丸恒次と申します。演練場で氷雨殿のしっかりと話が弾んでしまい、まだ話し足りないと思いが一致しまして。にっかりのご好意もあり、こちらに場を借りさせて頂きました。手土産はにっかりに渡してありますので、後程皆様でお召し上がり下さい」

「ご丁寧にも、歓迎するよ」

「土産もありがとう、ゆつくりしていつてくれ」

二振りの快い返事に数珠丸が頭を上げて、やはり静かに着席する。夕立が紅茶を口にしながらにことその光景を見ていた。

小さく口元を緩めている数珠丸から青江に視線を移し、次郎は彼に違和感をそのままにして投げかけた。

「しっかし青江、アンタが演練場に行くなんて珍しいね?」

「しかも客まで連れて来るとはな。本当に槍が降って来るんじゃないか?」

氷雨の青江は、演練場での交流よりも仲間の結束を強める方に力を注ぐ傾向がある。演練場に出ていた時は相手と最低限のやり取りしかせず、演練が終わった時点でさっさと本丸に帰っていた。他本丸と交流したい鶴丸とは正反対である。当然、互いにその性質を否定はしないが。

だから鶴丸も軽い口調だが、本当に驚いていたのだ。それを察して青江は頬杖をついて苦笑いしながら答える。

「最近、修行に行った刀も増えて来ただろう? 僕も強くなる為にい

ずれ来る修行も視野に入れてから、修行が済んだうちの刀達より練度の高い、他の本丸の極めた刀の力を見てみようと思っただ。それと、うちの刀達がどのくらい他本丸とやり合えるか、確かめたかったのもあるね」

現在、修行に行けるのは短刀のみだ。そして修行に行った刀達は、いずれも高い戦闘能力を得て帰還している。他の刀種の勇士達も、真の力を解放出来るという修行に期待が高まっていた。どうやら、青江もその一振りだったらしい。

ふふ、と妖しく笑い、青江はちらりと数珠丸を横目で見る。

「それが目的で、演練場に行ったんだけど……玄冬隊と戦った時に、数珠丸の太刀筋が良かったから詳しい話が聞きたくなってるね。本当は立ち話で済ませたかったのに、思いの外盛り上がったんだ。後は、数珠丸の話した通りさ。珍しい本丸形態のうちに場所を移して、妹君の自分ももてなすという提案を受け入れて今に至る訳だ」

数珠丸は穏やかに青江を見返す。青江も紅茶を口にして、数珠丸に笑いかけた。その雰囲気はとても平穏で、青江が語った経緯が確かなのだと感じる。

しかし、その一方で——鶴丸は、不穏な予感を抑え切れない。

昨日の研究所襲撃に行きあった事によって、神経が尖っているのだろうか。けれど、昨日の今日で様々な事態が動いていて、青江もその一振りだと考えてしまうのだ。時折本丸を見詰める数珠丸も気になって仕方ない。この本丸が珍しい洋風の建物で、どうしても目がいってしまふからと言ってしまえばそれまでだ。

けれど、友達が惨劇に巻き込まれ、自分も看過出来ない存在と邂逅した。

何かが、動き出しているように思える。それこそ、この町をひっきり返す事態が——

「鶴丸様と次郎太刀様も、お茶して行きませんか？ お二方共、少し疲れているようですし……準備なら、すぐ済ませますので」

涼やかな声が、耳に流れ込む。それで現実を引き戻された鶴丸は、頭を振って心配そうにする夕立に明るい表情を向けた。

「ありがとう、妹君。じゃあ少し茶を飲んで行く事にするか」

「アタシは主に報告してくるから、残念だけどここで失礼するよ。鶴丸、奢りの件忘れるんじゃないよ」

「うへえ……」

手をひらひらと振って、次郎はその場を去って行く。置き土産によつて約束を思い出させられた鶴丸はげんなりしながら、空いている椅子に腰掛けた。

*

「おつ、このすこーん美味しいな。妹君、また腕を上げたんじゃないか？」

「ありがとうございます、鶴丸様。お口に合ったみたいで何よりです」
「実際上手くなつたよねえ、妹君。燭台切や乱と一緒に練習していた時から、食べられる日を楽しみにしていたんだ」

「……最初はとても、表に出せる代物ではなかったんですけどね」
「最初は誰でも初心者ですよ。この菓子は貴女の努力の賜物でしょう。別に恥じる事はないと思いますよ」

夕立が照れ臭そうにはにかむ。スコーンで乾いた口内を紅茶で潤しながら、鶴丸は歓談する二振りと一人を線を引くようにぼんやりと見ていた。

脳内に浮かぶのは、蒼穹の一期の泣きじやくる姿。プライドの高い一期が他者の前であも涙を流していたのが、傷の深さを想像させる。——滑園の事件は、それ程までに惨かったのか。

そうなれば清澄の江雪も浅くない傷を負っただろう。彼は本丸が機能していない分、滑園に一際強く意識を向けていた。子供達に愛情を注いでいた分、消えていった命に嘆き悲しんでいるに違いない。

雲霄の鶯丸は、今どうしているだろう。彼も事件解明の為に駆り出されているはずだ。公私をきつちりと分ける彼も、事情聴取の際には複雑そうな目を向けていた。こちらを心配するのはいいが、自分の事も大事にして欲しい。

昨日の共通トークルームは、事件後動く事はなかった。それぞれがそれぞれの痛みを背負って、楽しい話題が出来そうにもなかったのだ

ろう。鶴丸もそうだったのだから、多分他のメンバーも同じ考えだったのかもしれない。鶴丸に見える範囲で動いていたトークルームは、一期との個別部屋だけだ。

———そういや、一期と手合わせのやり取りをした時に、気になる事を言っていたな。

一期は鶴丸の提案にすぐ了承の返事を送ってきたが、それに伴い一言だけ付け加えていた。

『私は、あまりにも周囲が見えていなかったようです。……兄として駄目な私に、喝を入れて下さい』

蒼穹の一期は顕現して時間が経っていない割に、かなり頑張っている方だと思う。弟達を公平に見て来ていたように思えるし、実際弟達にも慕われていた事も窺えた。それなのに、兄としての自分を卑下していた事が気になる。

ふと、泣きながら一期が言っていた事を思い出す。

———どんな顔をして、あの子の兄を名乗っていたのか……ああ、ああ、秋田、すまない、本当にすまない……！

秋田と、何かあったのだろうか。それと「周囲が見えていない」と言っていた事が、何か関わっているのだろうか。泣き崩れる程だ、秋田との関係が悪化する何かが起こったのだろうか。それは一体どうして？

研究所で出会った歪な表情を浮かべる「演練の鬼」の嘲笑が、脳内にこだまする。今は関係ない、と脳内でその幻影を打ち消そうとして———鶴丸は、ある推測を導き出した。

———まさか、蒼穹の秋田は、あの蛍丸やうちの蜂須賀と同類なのか？

あの蛍丸は間違いなく、人間を媒体として顕現したのだろうか。現在普通となっている方法ではないやり方で顕現した彼のような存在は、異端視される傾向にあるという。氷雨の蜂須賀が意図的に影を薄められるのも、恐らくはその性質を利用しているからだ。蜂須賀の妹と名乗った存在は、本当に蜂須賀の———蜂須賀の媒体となった者の妹だったのだろうか。

蒼穹の秋田は——異端視される、もしくはそれに等しい扱いを受ける事に耐えかねて、一期と衝突したのかもしれない。いや、衝突すら出来なかったのか。

刀剣男士は基本的に上品だ。面と向かって差別的行為をしないなら、取る手段は一つ。

無視。

悪気はないだろう。鶴丸だって、昨日までその顕現方法を知らなかったのだ。普通の刀剣男士に、それを知る術はほとんどない。

何の意識もせず、ただ当たり前のように、無視する。

そうされたと仮定したのなら——特殊な精神構成をしていない限り、大ダメージを受けるのは目に見えている。秋田は認識すらされない現状に耐えられなくなり、一期の心に傷を残す何かをした。

それが何かは分からない。けれど蒼穹の一期が隠されている事実に触れ、秋田が傷付いている事を理解した。ショックを受けている一期と、友達として共に悩む事が出来たらいいのだが——

「……鶴丸様、大丈夫ですか？ 体調が悪いなら、無理なさらさない方が……」

夕立が心配そうにこちらを見つめている。はっと顔を上げると、青江と数珠丸もこちらを向いている。顔を上げた反動で、持っていたカップがカチチャンと音を立てた。

はあ、と息を吐く。それからカップから手を離して首を振り、夕立に笑いかけて見せた。

「大丈夫、少し考え事をしていただけだ。具合が悪い訳じゃない」

「そんな強張っている顔で言われても、説得力がないけどねえ」

「ええ。……何か憂いがあるのですか？」

即座に青江と数珠丸に鶴丸の異常を指摘された。頬杖をついた青江は少し眉をひそめ、数珠丸の表情から感情は窺えないが、体ごところらを向いている。夕立もおろおろとしており、三者に心配をかけたのは明白だった。

大丈夫と再び言うのは簡単だ。けれど鶴丸は、カップの中で揺れる紅い水面を見つめて考える。

吐き出してもいいと、次郎は言った。蒼穹の一期は、傷を表に出して痛みを叫んだ。自分はそのままで出来ない。どうにも長くこの世にあると、しがらみも多くなるらしい。

——辛い事を堪えるのも選択肢の一つだけど、周囲に悟られているなら心が悲鳴を上げている証だ。堪えれば堪える程、心にヒビが入っていくよ。

隠す事は慣れていると思っていた。だけど、三者に悩んでいるのを悟られた。

悲鳴を、上げているのだろうか。己の心は、限界が近いのだろうか。

……少しくらいなら。ほんの少しくらいなら、吐き出しても平気だろう。鶴丸は言葉を選び、己の傷をなぞり始めた。

「……友達が、次々と災難に見舞われた。きつと悩んでいるだろう、けど俺は何も出来ていない。話を聞いてやる余裕もなかったんだ。俺は、俺の感情に振り回されてる」

「へえ、どんな？」

「一言で言えば、憎しみって事になるのかね。……昨日会った奴と、全く意見が合わなかった。そして相手はこっちの考えを全否定と来たもんだ。その時存分に嘲笑われて、下手したら我を忘れて襲い掛かっ

ていたかもしれない所まで頭に血が上ったんだ。そんな激情に囚われるなんて、『俺』らしくないだろう？　どろどろした感情が湧き立つと同時に、それを苦々しく思う自分もいる。……本当、情けなくてなあ」

研究所を襲撃した蛍丸の言葉は、決して受け入れられる物ではなかった。刀の魂を殺した——人々が積み重ねた物語をなかつた事にした、それを許容する事は鶴丸達を否定するも同然。刀剣男士として生まれた以上、己の出自を否定されるのは不快だ。

けれど——感情を剥き出しにした鶴丸は、そうした態度を取つた事を恥じていた。

鶴丸国永という刀剣男士は、軽妙で酔狂であるとされている。他には驚きが好きだとか、その経緯から異常な執着を疎うだとか、早々に仄暗い内心を吐露しないだとか、様々な「鶴丸国永」像があると思う。

蛍丸と邂逅した昨日の自分は——そのどれとも、かけ離れていた。欲しくない驚きに感情を剥き出しにし、蛍丸を殺さねばならぬと激情を抱き、我を忘れかけた。

現在も、その名残がある。暗い感情に支配され、蒼穹の一期や清澄の江雪に寄り添う事も出来なかつた。前者は次郎が吐き出させたのをただ見ていただけだったし、八つ当たりする事を恐れて後者にはまだ一言もメッセージを送れていない。

こんな時こそ、しっかりとしなくてはならないのに。自分が腑抜けていると感じたのは、顕現して初めてだった。

「……私は恨みを抱き続けるのを勧めませんが……でも、貴方が抑えられなくなりそうになる程の激情を抱くとは、相当な事があつたのですね」

「正直、僕も驚いているよ。君が一期以外の相手にそこまでしそうになつたなんて、初めてじゃないかな？　相手がどんな御仁か凄く気になるよ」

「……鶴丸様をそこまで怒らせるなんて、その方はどんな無礼を働いたのでしょうか」

三者共、かなり驚愕していた。それはそうだ、鶴丸だつて好き好ん

で醜態を晒す真似はしたくない。心が限界になりかけていると気付かなければ、こうして吐き出す事もしなかつただろう。

しかし三者は、決して鶴丸を笑ったり否定したりしなかった。衝撃を受けても、茶化したりなどせず真面目に話を聞いてくれている。それが、鶴丸にはありがたかった。

「恨みは新たな恨みを生むだけ。そう言ってしまうえば簡単ですが、なかなか手放せない物ですよね」

「そうそう。自分を全否定されたなら尚更、相手に怒りを抱く物だ。『らしくない』のかもしれないけれど、『おかしい』事ではないよ」

数珠丸はテーブルに手を置き、青江は少し表情を緩めた。顔を上げる事はまだ出来ないが、感情を肯定されて多少重みが取れたように思えた。

けれど、まだ心には暗雲が立ち込めている。あの蛍丸を殺さなくてはならないと叫ぶ自分と、友達より憎む相手に執着するなどみつともないと呆れている自分がせめぎ合っているのだ。さて、どうしたらいいだろうか。

「……えっと、思ったのですが」

夕立が小さく手を上げる。三つの視線が集中しながらも、夕立は臆さず話し始めた。

「鶴丸様は、自分らしくないと憎悪を疎んで、なくしたいと思っているのですよね？」

「まあ、そうだな」

「今は無理に小さくなくてもいいと、私は思うんです。感情を無理に押し込めたら、反動が凄い事になると私は知っています。押し込めるよりも、その感情と向き合って分解してみるといいのかもしれない」

分解。それは一体どういう事だろうか。鶴丸が訝しんでいるのを察したのか、夕立は鶴丸に向き直った。

「例えばです。私が兄に理不尽な事で叱られて、酷く怒りを抱えたと思います。兄に感情的になってしまうその前に、まずは一度深呼吸をするんです。それから、少しずつ自分に質問をしていきます。『何で兄

に怒りを抱いたの?』『理不尽な事で叱られたから』『どうして兄は叱つたのだと思う?』『八つ当たりじゃないか』『兄に八つ当たりされて、どう思ったの?』『ショックで、兄をやり込めたいと思った』『ショックなのは何が?』『兄が、自分に八つ当たりをした事』『八つ当たりがショックだと感じたのは何故?』『優しい兄が豹変して、自分に負の感情をぶつけると思わなかったから』……というようにです」

再び紅茶の水面を見つめる鶴丸に、夕立は穏やかに言葉を続けた。「きつと、途中で詰まってしまう事もあるかもしれませんが、それでも、出来る限り自分に問いを続けます。そうしてただ漠然と捉えていた感情を分かりやすくして、どうして自分がその感情を抱いたのかが分かれば……鶴丸様の望む通り、憎悪が別の物に変わるかもしれません」

ふう、と呼吸をした夕立は、突如聞こえてきたパチパチという音に体を竦める。鶴丸も顔を上げると、青江と数珠丸が小さく拍手をしていた。

「流石は妹君。顕現したての僕等より人間である妹君の方が、感情の制御に関して一日の長があるね」

「その通りですね。私も思わず聴き入ってしまいました」

「い、いえ、そんな……偉そうに話してしまって恐れ多い限りです」
青江派の率直な賛辞に、夕立が顔を赤らめて俯いた。先程までの凛とした態度は何処へやら、火照った頬を冷まそうと手で抑えながら縮こまる。

鶴丸はその様子に小さく微笑んでから、夕立に頭を下げた。

「ありがとうな、妹君。後でその方法を試させて貰うぜ」

「あ、あの! 私の話した事は参考程度にして頂きたいのですが……!」

「無理な話だなあ。実際、俺もいい案だと思っただから」

「いい提案だったと思いますよ。自信を持って下さい、夕立殿」

「僕も少しやってみようかなあ」

「あ、あわわわ……」

青江が妖しく提案の実行を仄めかすと、夕立は言葉にならない声を

発する。鶴丸は明るく笑いながら、脳内で始まりの問いを浮かべていた。

『——何故俺は、あそこまで蛍丸を憎んだのか?』

ティータイムを終え、夕立と鶴丸に見送られて氷雨隊を後にした数珠丸。青江が途中まで送り届けると言ってそれに同行した。

——当然、そうしたのは厚意だけではない。

「数珠丸。それで、僕の本丸はどうだった?」

「……そうですね。あの本丸には、他の本丸以上に怨念が渦巻いていましたが……」

「まあ少し特殊だからね、うちは」

青江は言われ慣れているとばかりに肩を竦める。数珠丸は口に手を当て、氷雨隊内部を思い出し物憂げに呟いた。

「……しかし、それ以上に怨念に塗れている場所もありました」

「……へえ、それは一体どこ?」

青江が妖しいいつもの笑みを浮かべながらそう尋ねる。一瞬思考を巡らせるように上を向き、数珠丸は『怨念の濃い場所』を口にした。

「——三階、東側階段近くの一角です。すみません、これ以上は分かりませんでした」

「いや、充分さ。ありがとう数珠丸、この礼は必ず」

「……今度は、こんな事は抜きにして貴方と話したい物ですね」

「僕もそう願っているよ」

少し疲れの見える数珠丸に、青江は心からそう返した。

——数珠丸が口にしたのは、新撰組隊員の所有していた刀達の部屋が並ぶ一角。

大幅に被疑者の対象を絞れた青江は更に特定をすべく、次の一手を考え始めた。

15—7 「コーヒーブレイク1」

はあ、と重たく息を吐きながら、蒼穹の一期はとぼとぼと歩く。周囲の人間や刀剣男士に当たらないよう気を付けているので、傘や体がぶつかる事などはなかった。周囲も雨降る城下町の中を気落ちしながら歩く一期を気にも留めない。

本丸に戻る気には、まだなれなかった。水雨の次郎の胸を借りて泣き喚き、友達にその姿を晒してしまった。その時の悲しみが尾を引いており、一期は弟達に笑顔で向かい合える気がしなかったのだ。

——次郎殿のおかげで少しすっきりしたけれど、現状は全く変わってない。どうしたらいいのか……。

思考は同じ所を巡るばかりで、解決策は思い浮かばない。思い浮かぶのは昨日秋田が通り過ぎた時に感じた焦燥感と、こちらを見据える春光の長谷部の冷たい目。

心臓の辺りが痛む。秋田に申し訳ない、謝りたいと思う自分と、それすらも許されないのではと否定する自分。

雨音が耳障りだ。雨さえもが、自分を責めているのではと考えてしまふ。

再び気分が暗くなって、一期は目についた軒先に向かい、傘を畳んでしゃがみ込む。膝に顔を伏せて、ただ煩い雨の音を入れないように思考の海へ沈んだ。

ザアザアと鳴る音、水溜りを踏んで跳ねる音、軒先から肩に水が落ちて染みる冷たい感覚。それらが糾弾するのだ——非道だ、最低だ、冷血だと。

その辛さに耐えかねて、目に何かが滲み始めた一期。ふと気が付くと、目の裏が少し暗くなっていた。

「その二期一振、大丈夫か？ 具合が悪いなら、すぐに病院へ連れて行くが」

誰かが、目の前に立っているようだ。頭を上げると、そこにいたのは透明な傘を差す鶯色の髪をした男だった。一期は覚えのある気配に顔を歪め、ただ一言漏らした。

「鶯丸、殿……」

「ん？ ……お前もしかして、蒼穹の一期か？」

小さく頷く。鶯色の男——雲霄の鶯丸は、その場にしゃがんで一期と視線を合わせる。鶯丸は目を潤ませている一期を見て、悲しそうに眉を下げた。

「……奢ってやるから、こここの食堂に入ろう。そのままでは風邪をひいてしまう」

「……」

「昨日の話を、まだ全然聞けていないからな。……友達が泣いているのを、そのままにするのは心苦しい。だから、俺の顔を立てると思つて、な」

また、小さく頷く。一期は力無く立ち上がり、懸念の色を浮かべている鶯丸の後に続いた。

*

ファミリールレストラン・カランコエ。現世において全国的に展開しているファミリールレストランの一つで、テレビでも度々新メニューを宣伝するCMが流されている。「貴方の食事に幸福な彩りを」のフレーズ通り、季節限定メニューに大きく力を入れているのが特徴だ。

ドアを開けると、入店合図のベルが響く。中から店員が笑顔で飛んで来て、一期と鶯丸に人数と喫煙するかしないかを確かめる。店内はあまり混雑しておらず、二振りはすぐに店員に窓際の広い席へと案内された。

テーブルに二つ水の入ったコップを置き、ごゆつくりどうぞ、という一言と共に店員は去って行く。鶯丸はそれを見送ってから、一期にも見えるようメニューを広げた。

「二期、昼餉はもう済ませたか？」

「……いえ」

「そうか。今の期間限定商品は……栗の菓子が多いか。茶を飲むのは丁度いいが……満足鯉定食なんて物も出たのか、画像上は豪勢だが。ただ、ここのはんぱーぐは中々に美味いんだよな」

「……」

「……一期に奢るはずだったのに、俺ばかりが楽しんでしまっているな。一期も一覽を見るといい、様々な食事があるぞ。一期とこうして食事に来るのは初めてだから、好みはまだ知らないが……ここの味は保証出来る。好きな物を頼んでくれ」

気を遣われているとはつきり分かるその声色に、一期の視界が再びぼやける。自分は本当に意気地なしだと、一期は沈んだ気持ちを浮上出来ず下を向いていた。

鶯丸は目の前で涙を堪えて俯く友達を見て、歯痒そうに言葉を嚙む。どんなに自分が明るく振る舞っても、一期は「心配されている」という事実には情けなさを覚えるばかりなのだろう。

あからさまに打ちひしがれていた姿を見られ、気遣われているのが少しプライドに差し障るのかもしれないと、鶯丸は思っていた。

一期がこんなに落ち込んでしまう理由は、大抵の場合弟関連だろう。実際間違いいではないはずだ。

しかし鶯丸は、昨日起こった事件に目の前の友達が飛び込んだのを薄々察していた。

児童養護施設滑 \square 園にて、数多の死者を出した襲撃事件。生き残ったのは僅か九名の子供達のみ。職員も、子供達も凄惨に殺された事件に、時折顔を出していた一期も相当に傷付いた事だろう。

そして、事件が起こる少し前。滑 \square 園から、ある報告が上がっていた。

——被験体19688番に情報生命体の固定化を施した。被験体15737番が機密情報に触れた為、機密保持の為15737番にも同様に固定化を行った。19688番は短刀五虎退、15737番は短刀小夜左文字が定着した。

もしかしたら目の前に二振りが現れて、一期は滑 \square 園の真の姿に気が付いたのかもしれない。

知っていないながら箝口令に従い黙っていた自分は、責められてもおかしくないだろう。それでも「仮定は仮定だから」「気付いたとは限らない」と言い訳して、鶯丸は自分から切り出さない。

——この期に及んで口に出せない俺も、臆病者だな。

内心ほとほと自分に呆れ果てている。主に従う身としては正しいのだろう。だが友達として、自分のしている事が正しいとは思えなかった。

口によれば決定的に嫌われるだろう。けれど自分は無様に、その時が来るのを少しでも延ばそうとしている。本当に、心というのは扱いが難しい。

「……鶯丸殿、そんな顔なさらないで下さい。私は、私が許せないだけですから」

いつの間にか顔を上げていた一期が、細々とした声で言う。自信の薄れているその声色に心を痛めつつ、鶯丸は己の顔面をぺたぺたと触った。

「……俺、どんな顔してるんだ？」

「怪我もないのに、痛みがあるみたいに苦しそうですよ。鶯丸殿がこんな私に、そこまで心を痛める必要はないでしょうに」

聞き逃せない言葉が出た。あの一期一振が、自分を卑下している。一体、滑レ園レ園で何があったのか。鶯丸は惨劇の光景を想像しながら、一期を嗜める。

二期。『こんな』などと言ってくれるな。お前は俺の、大切な友達なんだ。滑レ園レ園で何があったのか詳しくは分からないが、お前は出来る限りの事をしたと聞いている。子供達が九人も助かったのは、お前と江雪の助けがあったからだ」

びくり、と一期の肩が跳ねる。言葉を選びつつ、鶯丸はメニューの上に手を置いて続ける。

さりげなく、己の負い目を零して。

「……俺は規則に縛られて、何も出来なかった。生き残った子供達を守ったのは、間違いなくお前達だ。俺は、そんなお前と友達である事を誇りに思っている。だから自分を貶める言葉を使われると、俺は――」

「いいえ、いいえ！ 私——そんな大層な存在じゃない!!」

一期が声を荒げてテーブルを叩く。周囲の驚き疎む視線が、一期と鶯丸のテーブルに集中する。いきなり豹変した一期に驚きながら、鶯

丸は周囲に軽く頭を下げた。

一期は再びうなだれ、傷を抉るように吐き出し始めた。

「……私は……誰もかもに酷な事をしてしまいました。あの施設の正体を知っていたのなら、子供達へ無責任に夢を見せる事などしなかったのに……弟を皆愛している？ 何て戯言！ 孤独に苛まれている弟に目を向ける事すらしなかった私が、どの口で薄っぺらい愛の言葉を吐けたのか……！ 罪ばかり犯しているこんな私が、どうして鶯丸殿の誇れる友を名乗れましょうか……っ！」

ぐしゃぐしゃの顔を押しさえ、一期はまた俯いて涙を落とす。

当たって欲しくなかったが、滑_レ園の隠された姿に気付いていたのは予想通りだった。しかし鶯丸は想定していた傷の数が、実際にはより多かつた事に愕然とする。

——よりによって、この時期に少年の真実にまで触れてしまったのか……！

蒼穹隊にいる被験体の記憶が一期の精神に滲出していた事は、事情聴取の際に知った。被験体——秋田藤四郎の意識は、かなり一期の精神に繋がっていたらしい。聴取で見た記憶で、一期は少年に手を伸ばし声をかけようとしていた。まるで、何度も経験しているかのよう

に。
その光景はあまりにも鮮明で、秋田が精神的に追い詰められていた事を如実に示していた。それでも規則に縛られる鶯丸には、あの時遠回しなたった一言のアドバイスしか出来なかった。

規則に抗えず友の僅かな力にすらなれなかった結果が、目の前で泣き崩れる一期となって表れた。滑_レ園での惨劇に加え、秋田の真実まで知ってしまった——それも恐らく最悪の形で——一期の苦しみは、計り知れない程大きいだろう。

こんな事になるとは思わなかった。そう言い逃れようとしても、涙を流す友がそれを許さない。罪悪の苦痛に喘いでいる一期によって、自責の念が募っていく。鶯丸は友達の問題を回避するより、規則を守る方を優先した。その報いが、この現状なのだろう。

「……一期」

そう呼び掛けてみても、一期はうなだれたままこちらを向かない。頭を上げる気力がまだ湧かないのかもしれない。

聴取の時に、全て話しておけば。そうすれば、一期は問題回避の為に動いただろう。けれど話してしまえば、今度は審神者からの信用を失う。審神者は敬い従うべき主だ、彼の意に反する事は避けたかった。だからこそ、鶯丸は出来る最低限しかなかったのだ。従うものとして、責任のあるものとして、それが間違いだったとは思わない。けれど――

「すまなかった」

一期に向かつて、頭を下げる。眼前の鮮やかなメニューが、目の奥へ小さな痛みを運ぶ。

――けれど友達として、あまりに何もしなかったのではないかと、考えずにはいられない。もう少し上手く立ち回れたなら、友達をこんなに苦しめる事もなかったのかもしれないのに、と。

友達と名乗るのに後ろめたさがあるのは、鶯丸だってそうだ。堂々と友達と言うには、鶯丸に隠し事が多過ぎる。

道具は、主に従うのが道理だ。ただの刀だったなら、それに反するなど想像すらしなかっただろう。しかし今は体と心が与えられ、自分の意思を問われる場面が生まれた。

主に従い、責任のあるものとしては間違っただけではいなかった。だが友達として、ただ眺めていたのは正しいとは言えない。

規則に縛られるのを拒まず、それでも友達が大切なら。――まずは友達に、傍観していた事を謝るべきだろう。

「俺は、全てを知っていた。滑_レ園の実態も、一期に被験体が接続していた――助けを求めていた事も。それを話さなかったのは、俺が主の命を優先したからだ。主の配下としてそれを間違っていたとは言えない。けれどお前の友としてなら、お前にもっと規則ぎりぎりまで働きかけるべきだったんだ。……俺は、友として不誠実だった。力になれずに、本当にすまなかった」

テーブルには沈黙が降り、周囲の話し声や店員の足音だけが聞こえて来る。隣の席に店員が料理を運んで、芳しい肉汁の香りが漂った。

15—8 「コーヒーブレイク2」

「……違いますよ、鶯丸殿。私達が主に従うのは、当たり前前の事じゃないですか」

一期は涙に濡れた声で言う。その響きは鶯丸を責めてはいない。

「鶯丸殿が全てを知っていた事に、驚きがないと言えば嘘になります。ですが、主に命じられて言えなかったのなら、それを責める理由はありません。……鶯丸殿を責めれば、それは自分に丸ごと返って来ます。私が許せないのは、何も知ろうとしなかった自分自身です」

「……俺が隠していた事は、知らないのが普通だ。だが俺が話していれば、一期が傷付く事もなかったはず」

「それは例えばの話でしょう。鶯丸殿がそれを話す事で罰せられるのなら、私は聞く事を望みません。鶯丸殿だって、私にとって大切な方なのですから。それに今思えば、鶯丸殿は規則に縛られる中で、出来る限りの助言をして下さったでしょう？ ……情けないと思ってるのは、矛盾している愛の言葉を使った私の至らなさ。あの子を全く見ていなかったのに、皆愛していると云った私の愚かさです。与えられた助言を活かせず、周りを見る事もしなかった自分が、憤ろしくて仕方ない」

一期はテーブルの上で拳を握り、震える声で己を詰った。カタカタと振動させている拳がコップにぶつかり、中の水面を揺らす。

一期は、鶯丸を責めなかった。それどころか自分が悪いと言い、忠告を活かせなかった事を悔いている。

まだ謝り足りないと思う。けれどこれ以上詫びるのは望まれていないだろう。なら過ぎた謝罪は自己満足以外の何物でもない。

鶯丸は己の内にある後ろめたさを一度宥め、頭を上げて一期に向かい合った。

「……これは、俺の体験談だが」

息を吸い、目の前の涙ぐんでいる友に少しでも協力したいという念をもって話を始める。

「うちの被験者は、ある対象への執着が少々強くてな。降ろされた刀

劍男士も、その執着に振り回され悩んでいた。だがそいつの執着や暗い感情を真つ向から否定せず、黙って話を聞いたり考えを一緒に整理してやる事で、少しそいつも気が楽になったのだと思う。自分だけではどうにもならない時には、周囲の力も借りた。時間がかかったが、そいつは今本丸に馴染んでいる」

物吉は、本丸に来た当初から己の体質に悩んでいた。それを支えたのは、自分だけではない。それこそ外部の人間や、例の本丸の力を借りてここまで来た。

ひとりじゃない。そう思える事が、支える側も支えられる側にも重要だ。

一期は涙を拭いながら話を聞いている。鶯丸は指を組んで、一期に微笑んだ。

「……もしお前が弟と話をする機会があるなら、まずは話を全部聞いてやるといい。どんなに負の感情をぶつけられても、否定せずにな。それから、焦らない事もそうだ。きつと互いに傷を負ったのだろう、その痛みを冷静に見られるようになるまで落ち着いてから話をしに行くのも手だ。自分だけでは駄目だと思ったら、周囲の力を借りる事も考えてみてくれ。一振りでは、出来る事に限りがあるしな」

一振りで抱え込む事は出来ればしないで欲しい。それを願っていた最後の方は、少し力が入ってしまったかもしれない。

渴いた口の中を潤す為、鶯丸は水を一口含む。少しぬるくなった水は、するりと喉の奥を通り過ぎて行った。

「……話をよく聞く事、焦らない事、一振りで抱え込まない事……」
「そうだ。きつと俺に言われるまでもないのかもしれないが、基本は大切だからな。何かあったら俺はいつでも話を聞きに行くぞ。だから、一振りで頑張り過ぎないようにな」

一期は腫れた目をもう一度押さえて、表情を緩め鶯丸に先程より穏やかな声で告げた。

「ありがとうございます、鶯丸殿」

*

料理を一切頼んでいないと、二振りは腹の虫が騒ぐ音で気づく事と

なった。すぐにメニューを読み返し、鶯丸は大根おろしのハンバーグ定食を、一期はチーズ入りハンバーグ定食を注文した。

そして割とすぐに注文の品は届けられたのだが——二振りは、ハンバーグに手もつけず身を屈めている。

その理由は、一期の座る場所から後方のテーブル席にあった。

「——すみませんミサキさん。私の今の残金では、ここが精一杯で……」

「別にいいわよ、ここも結構美味しいし。それに久々にゆっくり話せる場所と言ったら、ここくらいしか空いてなさそうじゃない?」

「そうですね。……雲霄殿には、後でお礼を言わねばなりませんね」「そうね」

そこに座るのは、茶髪をポニーテールにした女性と物吉貞宗。——ただし物吉は、一人称が普通のそれとは異なっている。

先程から身を屈めてこそそと話す一期と鶯丸は、ちらちらとそのふたりのいるテーブルを見ていた。

「……鶯丸殿、あの物吉殿は」

「……さつき話した被験者だ。一緒にいるのは執着対象だな。……何でここにいるんだ……」

ここでふたりの邪魔をしたとなれば、後でどうなるか分からない。そう考えた鶯丸は身を潜める事を選び、それに釣られて一期もメニューで顔を覆っている。

それにしても本当に何でここに。鶯丸はミサキ——物吉の依代が執着する人間——がここにいる理由をはじめとした情報を集めようと耳を澄ませる。

「じゃあ私は栗のパフェにしようかな。コースケは?」

「私は、マロンクリームのパンケーキで」

「オーケー。……それにしても、こんな形でコースケと再会するとは思わなかったな」

「私もです」

呼び出しボタンを押したのだろう、鶯丸と一期のいるテーブルを通り過ぎながら店員がポケットからハンディターミナルを取り出して

いる。ふたりの前に立った店員は明るい声で注文を取り、内容を確認してから去って行った。

「それにしても……ミサキさんの周囲は、そこまで酷い状況なのか？」

「うん、正直歴史改変の影響がもろに出てる。昨日までいた人がいなくなったり、かと思えばいなかった人が現れたり、本当てんやわんやよ。私がいなかった日も増えているらしいし……身の危険を感じたから、こっちに来る事を選んだの」

「……私のした事は、無駄に終わってしまいましたか」

「ううん、コースケは充分力になってくれる。だけど、相手がより強くなってるって事よ、きつと」

「そうだといいですけど……」

コースケ——物吉の依代は、元々彼女を守る為に被験者となる道を選んだという。それ以上の詳しい経緯は、物吉の証言とコースケが表れた時の様子でしか分からない。

知っているのは、コースケが病によって疎まれていた事と、ただ一人ミサキだけがコースケの味方をしていた事だけだ。

「コースケはどうなの？ 被験者になるって聞いた時はかなり心配したんだけど……いなくなっちゃうんじゃないかって思って、私反対しちゃったけど……」

「大丈夫です。意識はありますし、定着した刀剣男士とも上手くやっています」

「そう？ ……コースケ、昔から頑固な所あるからちよつと心配なのよね」

「あ、あはは……」

正直な事は言えないだろうな、と鶯丸は溜息を吐いた。普段は眠っていて、ミサキに関わる事のみ意識を乗っ取って暴れている、などは。物吉を悩ませる程の行動もしていた訳だし、それに比べると今はかなり猫をかぶっていると鶯丸は嘆息する。

一期はメニユーから少し顔を覗かせ、ふたりの様子を窺っている。なんだかんだでかなり気になっているのだろう。何せ弟のひとりと

同類である存在が、近くにいるのだから。

「そ、そうだ！ この町はどうでしたか？ 色々な店があつて、賑やかだったでしょう？」

「確かに賑やかだったわね。和風な建物と洋風の服を着た観光客って組み合わせが、なんだか不思議だったけど」

「あはは、確かにそうですね。ミサキさん、何か気になる店はありましたか？」

「うーん、素馨屋っていう茶屋はちよつと行つてみたいかも。いいお茶の香りがしてたし、多分かなりいい店よ、あそこ」

「ミサキさんの時間が許すなら、案内しますよ」

「大丈夫よ、コースケの仕事の邪魔出来ないし」

和やかに話しているふたり。こうして聞いている分には、仲のいい姉弟といった所だ。相手が刀剣男士で、被験者だという事がなければだ。

まあそれでも、穏やかな雰囲気だ。鶯丸は少し気を抜き、水を飲むうとコップに手を伸ばしかけ――

「それに、言つてなかったかな。――私、雲霄様の所でしばらく様子を見た後に、審神者になるから」

「――は？」

――端的に出た強張つた声に固まった。その声音はまるでしばらくくれるように妙に明るく、耳を塞ぎたいと言わんばかりに恐れに満ちて、事実を受け入れがたいとばかりに震えていた。

その様子に気付かず、ミサキは明るく話し続ける。

「二振り目の刀も決めたの。雲霄様と同じく加州清光にしたわ。凄いのね、刀剣男士つて。あんな綺麗な見た目で、力強く刀を振るうんだもの。一瞬見惚れちゃった。一緒に頑張ろうね主、つて言われたらやる気も出るつて物だわ」

やめてやれ、と言いたくなつた。それ以上の言葉は目の前で衝動を抑えている彼を傷付けるだけだぞと、本能的に言葉にしそうになつた。一期は不穏な空気を察して目をうろろさせている。

そして彼女は――決定的な言葉を、言つてしまった。

「一番近くで守ってくれる刀なんだもの、気が合いそうな刀がいいわよね。しばらく話して、この刀と末長く仲良くしたいと思っただわ」

ガタン、と音が響く。ミサキが目を丸くして、いきなり立ち上がった目の前の彼を見ている。ミサキは驚きながら、心配そうに声を掛けた。

「コースケ、大丈夫？ 胸をおさえて、一体どうしたの？ まさか、病気が再発したとか……」

「い、え。大丈夫、です。すみません、今日の所はここで……！」

「えっ、コースケ!？」

物吉が伝票を掴んでレジまで走り、素早く料金を支払ってから店を飛び出す。カランカラン、とベルが鳴り響く中、呆然とミサキが呟いた。

「……どうしちゃったのかしら、コースケ……」

いや、一番側にいたのにどうして分からないのだ。鶯丸は頭を抱えてテーブルに突っ伏す。一期がメニューを畳みながら、声を潜めて鶯丸に尋ねた。

「……これ、修羅場ってやつですかね」

「……そうだろうな……」

重い息を吐き出しながら、鶯丸は予測していた。——今日明日、物吉は本丸に帰って来ないだろう。

そしてその予測は、その後来た物吉の連絡で正解だと知る事となる。

15—9 「町はまだ」

走る、走る、走る。衝動を抑えて、あるいは衝動のままに、大通りを駆けていく。

「あつい……熱い、熱い……！」

物吉は胸を掴みながらそう口にする。雨に降られていてそこまで暑いはずがないのに、物吉は灼熱を感じていた。

彼女が審神者になるのだと告げた時に、意識の中にいた物吉は周囲に昏い火が灯るのを見た。

それは彼女が言葉を紡ぐ度に数を増し、最後の言葉——末長く仲良くしたい、と言った時にはもう、周囲を澱んだ炎に囲まれていた。

——どうして。

——どうして、私じゃなくて……！」

物吉は、その理由となる感情を理解していない。だが、知識としてなら知っている。

「——嫉妬……！」

息を切らして、物吉はただひたすらに大通りを走る。

内に眠っているコースケを、宥める事すらかなわない。嫉妬の炎は確実に物吉を苛み、精神を抉っていた。

——早く、早くどうかしないと——

「……いやー、あの作家の本が大量に入荷してたなあ」

「そうだね。人気作だと言うし、入手困難な中よくあんなに店頭に並べられた物だと——おっと！」

がむしやらに走っていたせいで、誰かにぶつかった。弾みで地面に尻餅をつく。ぶつかった相手は怒る事もせず、胸をおさえる物吉に心配そうに目を合わせて屈む。

「君は、物吉さんだね？ 大丈夫かい？ 胸が苦しそうだけど……」

「……おい石切丸、こいつもしかして雲霄の——」

既知の気配に物吉は絶るように顔を上げ——石切丸の裾を掴んで声を張り上げた。

「春光隊のお二方ですか!? お願いします、助けて下さい！ ——こ

のままでは、心が燃え尽きます!!」

一期は雲霄隊の鶯丸と別れて、自分の本丸へと戻った。すると中から出て来た弟達が、不安そうな顔をして一期におかえり、と告げた。

「……お前達、どうしたんだい?」

「えつとね、いち兄。……お客様が来てるんだけど……」

「お客様? ……主に?」

一期の主たる審神者は、かなり気が短い。その為かなり人付き合いを選んでおり、身近な審神者には友人がいないはずだ。氷雨隊の審神者と一言二言やり取りしただけで必ず喧嘩になる事からもその短気さが窺える。

そんな審神者に、いきなり客が来た。一体どんな人間なのだろうか。

「ご友人かな? それなら失礼のないように——」

「いえ、違うんです。ご友人ではなく……」

「じゃあご両親か。挨拶をしないとイケないかな」

「それも違うんだぞ! ……何というか、凄くおっつかなくて……」

「……おっつかない?」

弟の言葉に首を傾げていると——一期の全身が警笛を鳴らす。汗が背中を伝っていくのを、体が無様に震えるのを、呆然とした心地で感じていた。

そして——その存在は、のんびりとした足取りで現れた。

「おお、帰ったか。蒼穹の一期」

左足が半歩下がってしまったのを、誰が責められようか。一期は手の震えを何とか抑えて、ぎこちなく顔をその存在に向ける。

「粟田口派とも話したが、やはりこの本丸は穏やかでいい所だ。本丸を抜け出してお忍びで来た甲斐がある。よきかな、よきかな」

——何故。何故ここ二日で、こんな事態が次々と——!

何とか顔を人のいい笑みに固めて、震えないよう意識をして一期は口を開いた。

「……ようこそいらっしやいました、雲霄隊の三日月殿」

「こいつ、気に入らない」

森の中の、古びた廃屋。二つの影が月明かりに照らされて蠢いている。

その影の一つが、不穏な言葉を口にした。

「……蛍丸君、どうしたの？ 映像媒体なんて持って……そこに映っているの、長谷部さん？」

「斬りたい。こいつ、ヘラヘラして気味悪い」

「うーん、別に斬りたいなら勝手にすればいいと思うけど……あんまり不用意に斬つてると、鶴丸さんに叱られるんじゃない？」

「あの鳥は今関係ないでしょ。——こいつ、ちらちら映ってるのうざい」

少女じみているもう一つの影に、腹立だしそうに吐き捨てる「蛍丸」。その目の奥には、ほの昏い炎が揺れていた。

媒体に映っているのは、逆毛が特徴的な黒髪を一つにまとめた少年と——煤色の髪をした、微笑みを浮かべている青年。

その青年を、「蛍丸」は鋭い殺意の光をのせて見ていた。——そこに僅かな羨望が混ざっているのに、彼は気付いていない。

時計の針は、刻々と時を進める。

その先にあるのが一体何なのか——それをまだ、町は知らない。

第十六話 「カウントダウンは、始まっている」
16—1 「最終兵器、襲来」

——蒼穹隊の一期が春光隊へ向かう為に外出してから数時間後まで、時は遡る。

蒼穹隊正門が遠くに見える渡り廊下で、粟田口派の短刀達は審神者と対峙する人影を見ていた。

「あ、あのひと、怖いです……！」

五虎退が目には涙を浮かべ、声を震わせる。足下にいる虎達も、唸り声を上げたり五虎退の帽子の中に隠れたり、それぞれが正門にいるそれに警戒心を露わにした。

遠くからでも押し潰されそうだと感じさせる強い気配に、平野が全身を強張らせて継るように柄を握る。

「……すごい迫力ですね」

「あんなひとが、こんな本丸に何の用なんだろう……」

「さあ……」

短刀達が顔を見合わせる。しかし明確な答えは出ず、それ——雲霄の三日月へと恐る恐る再び目をやるしかなかった。

今日は雨だからという事で、蒼穹隊は出陣や遠征を取りやめている。雨が嫌いな審神者が「じめじめしたこんな日に出陣させたら、自分がまたミスをしかねない」と駄々を捏ねた結果だ。戦闘好きな刀達からブーイングが上がったが、たまには休むべきなんだと審神者は封殺した。

粟田口派にとっては、非常にありがたかった。何せ一期が滑_レ園の事で傷付いたばかりだ。兄（もしくは親戚）にはしっかりと休んでもらいたかったし、自分達も傷心の彼に寄り添っていたかった。

だが朝になってからすぐ、一期は審神者と少しだけ話した後には外へ飛び出してしまった。その表情は心臓を掻き筆られたかのような焦燥感に満ちており、粟田口派に止める余地など与えさせない。追いかけてようとした短刀達だったが、審神者に「一振りではしか向かえない場

所だ、大人数で行くとあつちに迷惑がかかる」と止められた。意味がよく分からなかったが「不満があつても主命で止めるぞ」とまで言われれば、それに従わざるを得ない。反発しかけたものもいたが、審神者は至極真剣であつたので戯言ではないと判断して口を閉ざした。

それから栗田口派は本丸内で遊んだり、手合わせや戦術の討論をしたりして過ごしていた。心の中で、滑_レ園と縁が深かつた一期の心情に思いを馳せながら。

客の来訪を告げる音が鳴つたのは、そんな時だつた。へいへーい、と今日の近侍である和泉守が面倒臭そうに栗田口派の部屋を通り過ぎて行く。栗田口派は政府の役人が報告書の提出を急いできたかと思ひ、いつもの事だとあまり気にしていなかつた。

——程なくして審神者を呼びながら走つて引き返して来た和泉守の尋常ならざる様子に、そして顔を青ざめさせながら玄関へと走つて行つた審神者に、栗田口派は「いつもの」客ではなかつた事を知る。

そして好奇心から正門を覗き見て——栗田口派は全身の血液が冷えていく感覚と共に、それを視認した。

噂だけなら知つている。政府直属の部隊である雲霄隊にいる、「最終兵器」と呼ばれる三日月の事を。

近付くだけでこちらの戦意を削ぎ落とし畏れを抱かせる、対刀劍男士に特化された刀劍男士。それは滅多に表に出て来ない、本当に「奥の手」であるのだという。歴史修正主義者に通じ、刀劍男士にも加担させていたタチの悪い審神者を無力化させる為に現れ、一太刀で解決した。敵に惑わされて外道に堕ち、力を増した刀劍男士さえも即座に斬り捨てた。そんな噂を、演練場で聞いた事がある。

今まではそんな刀劍男士に縁がない物だと思つていた。審神者は短気だが、時々文句を零しながらも政府に仇なす事はしていない。そして自分達も、審神者を傷つけようなどとは微塵も考えていない。だから噂に上がった「最終兵器」の事も遠い存在だつたし、これからもそうであつて欲しいと願つていたので。——縁が出来るという事は、それだけの異常事態が起こつてしまうという事でもあるのだから。

「……ま、まあとりあえず続きは中で。雨の中ずつと立ち話する訳に

もいかないですし」

「うむ。それでは上がらせてもらおう」

微笑み傘を畳む三日月を連れて、緊張を隠せてない笑顔を浮かべながら審神者が本丸内に入って来る。粟田口派はそれを呆然と見届け、姿が消えてから大きく息を吐く。

遠くから覗いていただけなのに、疲れが溜まっている。とりあえず部屋に戻ろうかという雰囲気の中、ふと包丁が飴をポケットから出しながら言葉を漏らす。

「……あの三日月に、おもてなしした方がいいんじゃないか？ なんか、何もしてない所見られたら怖そうだし……俺、とっておきのお菓子出した方がいいかなあ」

——包丁の言葉によつて、当然の事に目が行つてなかつたと気付いた粟田口派。彼等は一瞬固まった後に大慌てで、もてなしの準備をする事となった。

*

「ど、どうぞ。粗茶ですが……」

「おお平野、ありがとう」

「悪いな、平野」

客間で座卓を挟んで向かい合う三日月と審神者の前に、平野が茶を置く。手の震えを悟られていないかと緊張しながら、平野はゆっくりと立ち上がる。

三日月側には本丸一ふかふかの座布団を敷いている。三日月から見れば安いだろうが、今持つて来たのはこの本丸にある最高級の茶、これから出す菓子は包丁が勧めて歌仙が良しと言った品だ。

出来る限りのもてなしをして、気分を損ねないように。粟田口派の意見は一致し、まずは居心地が良い環境を作り上げようと動いた。それが功を奏したのか、今の所三日月の表情は穏やかな笑みのままだ。

決して見苦しくないように、平野は畏怖や緊張を露わにしない事を心掛ける。静かに客間から退出し、音を立てずに廊下を歩く。粟田口派の部屋に入り戸を閉めたと同時に、平野は大きく息を吐いた。

「と、とりあえずお茶はお出ししました……気分を害した様子もありません」

「よ、良かったあ……」

「お疲れさん、平野」

平野の報告に、声を出さずに張り詰めていた粟田口派も胸を撫で下ろす。

あの三日月を怒らせたなら、この本丸を潰されかねない。三日月は総じて穏やかな性格であるのは承知しているが、それでも恐怖心が拭えないのだ。慎重に、丁寧に、決して不興を買わないように。それを念頭に置いて、粟田口派は三日月に対応していた。

「次は俺かあ……客間で終わってくれればいいんだけど、そうはいかないんだろなあ……」

「頑張れ、兄弟。いざとなったら俺もそっちに行く」

「ありがとう、骨喰。じゃあ行ってくる」

力なく笑い、鯰尾は部屋の外へと去っていく。目に懸念の色を乗せている骨喰はしばらく鯰尾を見送ってから、部屋の戸を閉める。

静寂に満ちた室内で、それぞれが顔を強張らせている。一言でも何か漏らせば、三日月に聞かれてしまうかもしれないと恐れながら。

——何故、うちの本丸に「最終兵器」が？

そんな疑問が、粟田口派の脳裏に浮かんでいる。

政府や審神者への反逆など、少なくとも粟田口派は考えたことがなかった。他の刀も時々呆れながらもなんだかんだで審神者を慕っている様子であるし、審神者も刀達を等しく愛して適切な対応をしている。

審神者は短気なので政府に苛立ちを感じたりする事もあるようだが、反逆するつもりなど微塵もないはずだ。「俺は率直な脳筋だと言われた事がある」という審神者の言から、政府に反逆するとなったら思いつき口にするだろう。

以上の事から、粟田口派には雲霄の三日月の来訪理由に心当たりがない。自分達はどうか考えても潔白であり、反逆を疑われる所以などどこにもないと自負している。抜き打ちで調査をするにしたって、わざ

わざ「最終兵器」を駆り出す必要が果たしてあるのかという話だ。

ただの客と言うには、色々と不審過ぎるのだ。裏のない本丸の様子を見たいなら、審神者ぐらいには事前に連絡を入れてくれてもいいだろう。

何もかもが唐突すぎる事態で、頭が酷く痛い。長兄にも意見を聞きたくて仕方がないが、今は留守である。心許なくて仕方ないと、短刀達はため息をついた。

どたばたと、遠くからこちらに足音が近づいてくる。何事か、と粟田口派が身構えると同時に戸が勢いよく開いた。粟田口派の予想通りに現れた鯨尾は、息を切らしながら鋭く叫ぶ。

「全員戦装束に変えて、道場に集合ー」

「鯨尾兄？ 一体どうし——」

怪訝そうな乱の言葉を遮り、鯨尾は端的に告げた。

「三日月さんが、俺達と手合わせがしたいって！ くそ、何の苦行だよこれ！」

鯨尾が青ざめながら吐き捨てた後半の言葉は、同様に顔色を悪くする粟田口派の心境を見事に言い表していた。

*

雨の音が聞こえて来る道場にて、十一振りと一振りが相對している。緊張で表情を固めている多い方が蒼穹の粟田口派、たった一振りでのんびりと笑っているのが雲霄の三日月だ。

どこかのどこかに感じる笑みを浮かべたまま、三日月は粟田口派に言った。

「いきなりの申し出で悪いな。だがこの本丸の力を知る為だ。誰から打ち込んで来ても構わんぞ」

そう言われても、と言わんばかりに粟田口派は顔を見合わせる。非常に強いとはいえ大事な客で非公式の手合わせだ、何かあつたら上から叱られかねない。

それともう一つ——ゆつたりと構えている三日月だが、彼からは一切の隙を感じ取れない。自分達の力を軽んじている訳ではないが、それにしても自分達の有利を取れる気がしなかった。

睨み合いが続く。どう打ち込めれば良いのか分からない。三日月は微笑んだまま、隙を一切見せない。

そんな張り詰めた空気に耐え切れなくなったのだろうか。最初に三日月へと進み出たのは、冷や汗を流しながらも気丈に振る舞おうとする包丁だった。

「よっ、よーし！ ボコボコ……は無理かもしれないけど、一本は取るぞ！ とおりやあく！」

包丁は懐に狙いを定めた。彼としても、そう易々とそこへ潜り込めるとは思っていないだろう。あくまで相手の胸を借りるつもりで、包丁は三日月へと踏み込む。

——次の瞬間。ダン、と鈍い音を立てて、包丁は道場の壁へと叩きつけられた。

16—2 「最終兵器、その脅威」

包丁の体勢が崩れ落ちる。それなりに練度を積んでいるはずなのに、あまりにも呆気なく彼は打ちのめされた。その現実を、粟田口派は上手く飲み込めない。

「あいつた……え？　今、何が……？」

包丁は痛みよりも衝撃が上回ったのか、呆然としながら呟く。残りの粟田口派も、愕然としながらそれを見ていた。

多分、鋒を逸らしてがら空きになった体に、刀身をぶつけて吹っ飛ばしたのだと思う。現に包丁は、攻撃されたと思しき脇腹を押さえて呻き始めたのだから。

だが——そう言い切れる程、その行動を把握出来ていない。三日月はあつという間に体勢を整えてしまったし、何よりも視界にその速度を捉える事は敵わなかった。

見切れない速度で、相手を叩きのめす。こちらの練度が低いからと言ってしまうばそれまでだ。だが、そうしてしまうには余りにも、三日月の動きは異常だった。

「包丁。そなた、全力を出していなかっただろう。俺は言ったはずだ、この本丸の力を知りたい、と」

酷く冷え切り呆れさえも含んでいそうなその声音に、粟田口派は震えと膝をつきそうになるのを堪える。

非常にまずい。これは——己を失望させるなど言われたも同義だ。

包丁だって言葉通り、あの「最終兵器」から一本は取るつもりで挑んだのだろう。だが結果はこれだ。

ふと考える。包丁は端から「最終兵器」に勝てると思っておらず、そして客である三日月に傷をつけないように配慮して挑んだのかも知れない。それが、三日月の期待に反したとしたら？

練度が遠く及ばない事への諦観や、客へ接待としての手合わせを行った事によって失望させてしまったら、どうなるか。今はまだ三日月から大らかさは失くなっていないが、それが失われてしまったら――

——まずい、まずいまずいまずい！

粟田口派の思考は、概ねこのような思考に纏まった。敵に向かうように本気で挑まねば、三日月はこちらの心まで折りにかかってくるだろう。ひよつとしたら、この本丸の立場も危うくなるかもしれない。

本能的にそう感じ取り、まず動き始めたのは短刀達だった。雨降る外と繋がっている戸を完全に閉ざし、灯りを落とす、道場内を闇で満たす。これで、擬似的に道場内の時間を夜に変えられた。打刀、脇差、短刀で構成されている今の粟田口だからこそ出来る作戦だ。

それでも、三日月の様子は変化していない。

「ふむ、夜戦か。久々にいいかもしれんな。ただ一振りずつ相手取っている」と時間がかかってしまう。——一斉に来い。そなた達の力、存分に見せてもらおう」

言われなくても、総力で挑むつもりだった。そうでなければ、三日月を満足させる結果は得られないだろうから。

粟田口派は微笑んだまま構える三日月に向かい、一気に距離を詰めた。人数的に有利なはずなのに、まるで地を這う蟻が人間の足下に向かっていているような気分になっている事からは、意図的に目を逸らして。

一通りの事情を把握した一期の口角がひくりに、と痙攣した。本丸の客間へと行く間に三日月が話した事と、彼が用を足す間に弟達が話した事の間にはズレがあり過ぎる。

「いやはや、なかなか楽しかったぞ。流石は粟田口派といった所か。あそこに一期が加わったらどうなるのか、とても興味があるな」

雲霄の三日月はあっけらかんとう告げたのだ。それを聞いただけでは、まさか蒼穹の粟田口派が圧倒的な存在に戦慄しながらも、奮い立たせて激闘に挑んだなどは微塵も思わないだろう。粟田口派は畏怖と疲労でくたびれた表情をしていたし、こんな事だろうと推測は出来たが。

「……手合わせなのに折れると思ったのはあれが初めてだよ……」

「おっかな過ぎるよ、あの三日月！　うう、人妻に思いつきり甘やかし

てもらわなけりややってられないぞー」

「ちぎっては投げちぎっては投げだもんな……確かに『最終兵器』だわな、ありや」

「いち兄も三日月さんを見た時びっくりしてたもんね……それでボク達がおかしくなっていないって判断するのもアレだけど」

「夜戦に対応出来る太刀なんて反則だろ……うちにも顕現してくれないかなーあははー」

「現実逃避したくもなりますよね……同じ刀剣男士に怯むなんてと思っただのですが、やはりあの姿を見てしまうと……」

「ううう、怖かったですいち兄い……!」

捲し立てるように三日月の脅威を話すものと、矜持からか疲れからかその口を閉ざすもの。態度は違えど、粟田口派は誰も彼も虚ろな目をしていた。

弟達の力を疑う訳ではないが、そうなるだろうとは思った。その場にいたら、自分だって同じ目をする羽目になっていた事だろう。本当に、何の用でここに来たのか。

「戻ったぞ。さて一期も帰って来た事だし、手合わせの続きを――」

「あつオレ長谷部に呼ばれてるんだった!」

「ちよつとお菓子作りの練習してこようかなー!」

「骨喰洗濯係の手伝いに行こう!」

「主君は一体どちらにいらっしやるのでしょうか、探しに行つてきます!」

三日月が客間へにこと顔を出すと、粟田口派は言い訳を口にしながら、蜘蛛の子を散らすようにその場を去つて行った。残ったのは弟達の動きの早さに呆然としている一期と、少し落ち込んでいる様子の三日月だけだ。

「……嫌われてしまったか。本当に、楽しかったのだからなあ」

「ええと……」

まさか本当に他意はなかったのか。「最終兵器」に心があった事に安堵し、そして普通の手合わせをするつもりで心から楽しみ、粟田口派を蹂躪したその強大さに慄く。やはりこの三日月は破格なのだ。

弟達には後で何か埋め合わせをしようと決意し、一期は三日月に向き合った。きよとんとした三日月へと、一期は頭を下げまずは礼を述べる。

「三日月殿。弟達の相手をして頂き、感謝申し上げます。ですが……弟達と会う為だけにここへ来た訳ではないのでしょうか？ 話せる範囲で、ご用件をお聞かせ願えますか」

「……」

頭を上げ、目を逸らさないように意識して三日月を見据える。そうでもしなければ、この顔は即座にあらぬ方へと向いてしまうのだろうか。

三日月は少しの間一思案するように目を閉じてから、困った顔をして微笑んだ。

「まあ、そう疑問に思うのも当然だ。……実の所、俺の目的はそなたと話す事も含まれている」

「私と？」

三日月はああ、と頷く。そして眼光を鋭くして、一期を見返す。

「——滑り園の事件に、そなたも巻き込まれてしまったのだろうか？」

体が硬直してしまう。政府直属部隊に所属しているのだから、三日月だって知っているはずだ。だがそう分かっていても、その鋭い目で見られると自分が何かしたのか、と疑われているようで心地が悪い。

三日月もそれを察したのだろう、即座に一期の不安を拭った。

「ああ、当然そなたを疑っている訳ではない。事件の被害者たる子供達からは、あまり要領を得た証言が取れなくてな。それにこれ以上子供達の傷を抉る事は出来ない。……それでも、証言からこちらでも下手人を追っているのだが、あまりにも人手が足りないのだ。だから、俺も駆り出される事になった訳だな。これでも昨日からあちこちに顔を出しているのだぞ？ それに俺が行く事で、あわよくば下手人を釣り出せないか、と思っただけ」

雲霄の三日月は、普通の刀剣男士に対して畏怖の感情を問答無用で与えられる。裏のない刀剣男士ならただ三日月に怯えるだけ。そうでなければ——三日月に匹敵している力を持っているか、外道に堕ち

たかだ。前者の存在は今までに聞いた事がないので、当たり前だが三日月を恐れないのは後者となる。

あちこちに顔を出していると言うが、疑われているのはやはり気分が良くない。率直にそう伝えると三日月はすまないな、としゅんとした。

「蒼穹殿が後ろめたい事を抱えていない事は、少し話して分かった。こう言うのも悪いが、あの御仁は隠し事をするのが下手だな。一期がない理由を教えてもらおうとしたら、あからさまにうろたえていた。何か悩みがあるなら話して欲しいと頼んだのだが……すまない、そなたと秋田の事をその時に聞いてしまった」

三日月は心底申し訳なさそうに目を伏せる。

捜査に來た賓客に対して、一度は一期を慮り隠そうとした。裏表のなさ過ぎる審神者に腹芸をしろと言うのも無茶な話のだが、それでも二振り間の不和というプライベートな事を積極的に表にしようとしなかった。この三日月に対して努力した審神者に、一期は感謝と労いの念を抱いた。

「……三日月殿の手を煩わせるようにはしませんよ。これは、私が解決しなければならぬ事。罪と傷にきちんと向き合って、秋田と再び話し合えるようになりたいと思っています」

「そうか。俺には応援する事しか出来ないが……」

「充分ですよ。ありがとうございます、三日月殿」

心配そうにする三日月に、笑いかけて見せる。三日月は逡巡した様子で、もう一度すまないな、と呟いた。

ふと、三日月が客間の入り口へと視線を向ける。一期もその視線の先を追うと――

「……追加の茶を持って來た。入っていいか？」

「山姥切殿。別に許可は要りませんよ」

「ありがとう、山姥切」

山姥切が急須を持って客間へと足を踏み入れた。彼の脚は心なしかガチガチになっているように見える。

山姥切は二振りの湯呑に茶を注ぎ、ちらりと三日月を見た。すると

山姥切は、その場に蹲り頭の布を引つ張って顔を隠してしまった。

「……くっ、やはり全身が震える……これも俺が写しだからか……！」

「……いえ、写し云々は関係ないかと」

「山姥切は、この本丸一振り目の刀だったか。そなたからも話を聞きたい、座ってくれ」

三日月がそう言うと、山姥切は肩を跳ねさせてから自虐的な暗い笑みを浮かべた。どこか暗いオーラが立ち昇っている気がするの、一期の気のせいだろうか。

「はっ、写しが話を弾ませられると思つたら飛んだ笑い種だ！ それでもいいなら聞かせてやる、きつとここに呼んだ事を後悔するだろうな！」

「……山姥切殿、無理はなさらずに。顔色が悪いですよ」

「ははは、俺は写しだとしてもこの本丸最古参だ。戦いから逃げる事はしない！」

「緊張のあまり躁状態になっていませんか!？」

恐怖が行き過ぎてテンションがハイになっている山姥切と、声量を落とすようにと宥める一期。

そんな風にわーわーと騒ぐ二振りを見て、三日月はしみじみと呟いた。

「よきかな、よきかな」

16—3 「宴会、その下で」

氷雨隊が夕食を終えた後。青江は自室のある二階を通り過ぎ、三階へと続く階段を登っていた。

目指すは新選組刀の部屋が集まる一角。廊下まで響く賑やかな声だが、近づく程にだんだんと大きくなる。

「……だーかーらあ、お前は課金し過ぎなの！ いくらあの人絡みだからって普通給料全部注ぎ込むか!？」

「だって沖田君の配属確率が上がるって、上がるってえ……!」

「今回は諸々立て替えねえぞ、安定。沖田配属確率上昇祭りがある度に毎回毎回、財布すっからかんにして泣いてるじゃねえか。いい加減懲りろよ」

「大和守さん、他の趣味探したらどうです？ 例えば課金型じゃなくて、据え置き型のげーむとか……」

「堀川、心配するだけ損するぞ。他の大和守は知らないが、うちの大和守は賭博師の気が強い。何度言っても結局は元の木阿弥だ」

課金型ゲームの事でくだを巻く大和守へ一喝する、加州の苛立ち混じりの声が聞こえる。なおも泣き言を漏らす大和守に呆れたのだから、和泉守は手助けをしないとばかり言い切った。堀川が心配そうに代替案を出すか、とつくに匙を投じている長曾祢が大和守を突き放す口調でそれを止めている。

——良かった、手間が省けた。

新選組刀は長曾祢の部屋に集まって飲んでいるらしい。声のする場所を聞き取り、青江は宴会場と繋がるドアの前に立つ。

今から行うのは、裏切り者の特定だ。このドアの向こうに、何食わぬ顔をして謀反を企んでいる刀が混ざっている。

獲物を見据えた目を鋭く細めてから、青江は表情をいつもの妖しい笑みに変えてドアをノックした。

「誰だ?」

「僕だよ、長曾祢さん。入れてくれるかな?」

「青江か。待ってる、すぐ開ける」

言葉通り、微かに軋みながらドアが開かれる。長曾祢はドアを開け放ちながら、ひらりと左手を振る青江に尋ねる。

「どうした、おれに何か用か？ それともここにいる奴等か？ 大和守に用なら、今は止めた方がいいと思うが……」

「まあ、用といえば用なのかな」

青江は後ろ手に隠していた酒瓶を掲げ、ちやぷんと音を立てるそれを見せてから小さく笑う。

「少し誰かと飲みたい気分だね、相手をしてくれるひとを探していたんだ。そうしたら長曾祢さんの部屋から楽しそうな声が聞こえて来て、僕も混ざりたくなってね。手土産としてこれを持って来たけど、僕もご一緒していいかな？」

「おれは構わないが、念の為に中にいる奴等にも聞こうか」

あつさりと青江の入室を許可した長曾祢は、振り返って他の面子にも許可を貰おうとした。が、その前に和泉守が口を開く。

「オレは構わねえ……というかむしろ安定黙らせるの手伝ってくれ！ さつきからぐちぐちネチネチとげーむの沖田がどーのこーのうるさいんだよ！」

「兼さんがいいなら僕も構いません。席はどこにしましょうか？」

「俺もいいよー、安定がもう出来上がってるけど……ちよ、安定瓶置き！ 頭がち割る気か！」

「うええええん、沖田君が遠いよおおお！」

かなり酔っ払っている大和守は、わんわんと泣きながら瓶を振り回している。瓶の軌道は全く読めず、加州の頭上を過ったり堀川の脇腹に当たりそうになっていた。二振りは風を切って迫る瓶を青ざめながら避けている。

共にへべれけの大和守をどうにかしてくれと残り四振り全員が目が語っていた。青江はやれやれと肩を竦めて、酔っ払いによる戦場の中に飛び込んだ。

*

「……それでね、毎日起動すると貰える点数を使う配属がちゃでいい波が来たって思っつて、祭りの十連続配属がちゃを回したんだよ」

「うんうん」

「でも！ 結果は！ 星四つ止まりだったんだ！ キラキラした時は来たって思ったのに！ もう回せるお金も点数もないよ！ なんて沖田君は恒常じゃないんだ、ただでさえ星五つって配属させにくいのにいいいい！」

「辛かったんだねえ、よしよし」

自分の膝に顔を埋めて泣き崩れる大和守の頭を、青江は優しく撫でていた。実際は然程話を聞いておらず、声が枯れ始めても叫べる大和守の声帯に胸の内で感心している。

みつともなく同様の内容を繰り返し喚く大和守へ、顔色も変えずに対応している青江。酔っ払いの愚痴の行き先を己に集中させ、適度に肯定し適度に受け流すその姿に、残りの四振りは驚き呆れて囁き合う。

「……すげえな、青江」

「ああ、あの酔いどれ具合を笑って受け流せるとは……それだけ修羅場を潜っている証拠か」

「どんな修羅場だよ……」

「青江さんには、後でお礼を言った方がいいですね……」

全くだよ、というぼやきは口にせず、青江は四振りの潜めた声に耳を傾けていた。

当然ながら、青江だって慈善事業でこんな事をしている訳ではない。いつもだったら酔っ払いの絡みにそう長々と付き合わず、さりげなく逃げ出している。

ならば何故、こんな事をしているのか。それは、主たる審神者の命を遂行する為だ。

「本当に君は、沖田総司が大好きなんだねえ」

「当たり前だよ！ 僕に限らず、前の主に思う所がない刀なんているの!？」

「まあ、そうなんだけどね。でも、前の主がって言い続けたら、流石の主も落ち込むんじゃないかな？」

大和守がばつと顔を上げる。酔いが回っているのだろう、頬は赤ら

んで目は潤んでいる。目元を歪ませて、大和守は頼りなく鼻をすすつた。

「だって……大切にされた思い出を、早々に捨てられないよ。今の主だって愛してくれているけど、前みたたくいつも佩刀している訳じゃないし……」

「確かに昔みたいな形の愛し方じゃないけれど。僕達の心が伝わる分、いい事もあるだろう？ それに、愛して欲しいのはきつと主も同じさ。思い出を捨てるとは言わないけれど、いつも前の主の事を引きずっていちや主も気にするよ。切り替えが大事だよ、特に主の前ではね」

大和守は己を窘める言葉に、視線をさまよわせて俯く。青江もこれで彼の心境が変わるとは思っていなかったが、それでもじつと彼の一拳一動を見つめ続ける。

しばらくして、大和守はふらりと体を揺らめかせ、青江のいる方向に倒れ込む。微かに、こう呟くのが聞こえた。

「……今の主も、大切なんだ。だから僕も、いつかは変わらなきや……」

力が抜けた大和守の体を支える青江は、彼を起こさないように小さな声で長曾祢に尋ねる。

「さて、彼はどうしようか？」

「今はその寝台に寝かせておいてくれ、後でおれが部屋に運ぶ。……悪いな、お前だけに相手をさせて」

「構わないよ。……よつと」

大和守の体を抱き上げ、ベッドの上に慎重に寝かせる。ベッドに沈み込み、穏やかに寝息を立てている大和守に布団をかけてから、青江は四振りの所に戻った。

お疲れさん、と和泉守が青江の猪口に酒を注ぐ。礼を述べ、口に猪口を運びながら青江は話を振る。

「大和守君は宴会の時、いつもこうなのかい？」

「こんな初っ端から酔っ払うのは珍しいな。余程げーむの沖田の件が悲しかったんだろう」

「もうちよつと後からだよね、安定がぐだぐだになるの」

「調子がいい時は滅茶苦茶はしゃぐし、どんだけそのげーむに没頭してんだって話だよな……」

和泉守が疲れた声でそう言うと、加州と長曾祢は遠い目をした。常日頃からこの二振りには、大和守のゲーム中毒による被害を受けているのだろう。同じ主に仕えていても、知らない事はある物だ。

「大和守さん、確か鶴丸さんと一期さんとの喧嘩にも積極的に賭けていましたよね。本丸が違えば、細かい嗜好も変わる物なんですね」

しみじみとした堀川の言葉に、己の猪口に酒を追加していた和泉守がああ、と声を上げる。

「確か国広は、別の本丸から来たんだったよな。どうだ、この本丸には慣れたか？」

そうだった、と青江は思い返す。今の今までその事を失念していた。

和泉守の言う通り、堀川はこの本丸で顕現した刀ではない。前の堀川が折れた後に、政府から引き取り先を探している堀川を勧められたのだ。その堀川は前の審神者を亡くして政府に引き取られたらしい。練度も九十九と高かった為、審神者は即戦力として堀川を引き取った。

初陣時に、堀川は審神者の想定以上の働きを見せたと聞いた。詳しくは知らないが、少なくとも調査部隊である第四部隊に組み込む事を即決したぐらいには、戦力として見做せると思ったようだ。前の堀川も第四部隊に所属していたので、あるべき形に収まったと言つてもいいだろう。

そんな堀川はにこにこしながら、猪口を傾け和泉守に答えていた。

「うん。ここの本丸は皆優しいし、明るくて楽しい。それに第四部隊に配属されたからね、やりがいもあるよ」

「困った事があつたらすぐに言いなよ。主、ちよつと厳しい所もあるから」

「ありがとうございます。厳しいのは実感してますけど、主さんなり

に僕達を大切にしているのは伝わって来ますから」

加州が軽さの中に気遣いを込めた響きで言えば、堀川も少し困ったような口調で礼を返す。ならいいけど、と加州は一気に猪口の中を空にして酒を注ぐ。

こうしている分には、和やかな光景だ。比較的新入りの堀川を新選組の面子（眠っている大和守は除く）は心配しており、堀川もそれをありがたく受け取っている。一見すると異常などどこにもないと思うだろう。

——ここに、裏切り者がいると知らなければ。

「他の本丸か……。蜂須賀と穩便に過ごせている『おれ』もいるのだろうか」

長曾祢が遙か彼方へと向けている口調で、誰となく問いを零す。くると目を丸くしてから、加州が当たり前のように笑う。

「そりゃ、いるんじゃないの？　というか長曾祢さんも蜂須賀と穩便に過ごせてるじゃん」

「……まあ、そうなんだがな。だが時々、苛立ち混じりの視線を向けられると、心にくる物がある」

「まあ信念が違うんだから仕方ないだろ。蜂須賀は真作故の誇り、あんたは贗作でも名前に相応しい働きをつつー自負。互いに譲れないなら、最悪の場合殺し合いになるんだ。そうならないだけ、あんたも蜂須賀も上手い距離を取っていると思うぜ」

二振りの答えに長曾祢はううむ、と唸り声を上げる。そこはもう、己の中で落とし所を見つけてもらうしかない。青江はその会話には加わらず、四振りをじつと見ていた。

長曾祢は変わらず難しい顔つきで首をひねっているし、加州はぼんと長曾祢の背を軽く叩いている。和泉守は酒を次々と注いでいて、おろおろとした堀川がそれを止めようと声を上げている。

なかなか手掛かりが見つからない。気の緩んでいる時なら尻尾を出すのではないかと思っていたが、相手もそう簡単に正体を悟らせるつもりはないらしい。

青江は内心で次の一手をどう打とうか考える。するとおもむろに

顔の向きを変え、長曾祢は堀川に問いかけた。

「参考までに、堀川が前いた所の『おれ』はどうだったんだ？ ……あ
あいや、言いたくないのなら構わんが」

不躰だったかと質問を打ち消そうとする長曾祢。彼を制止し、堀川
は穏やかに微笑んだ。

「大丈夫ですよ。 ……前いた所の長曾祢さんと蜂須賀さんも、概ね似
たような関係でした。違う所があるとすれば ……主に何かあったら
すぐさま手を組んでいた点でしょうか。本当にすごかったですよ、
あの一致団結具合は」

「え、堀川の前いた本丸、主に危険が迫った事があったの？」

「ええ。 ……本当に、あの時は大変でした」

堀川が深く息を吐いてそう口に出す。青江はその瞬間、確かに見て
いた。

——堀川の目から、全ての光が消えた。明るい碧眼が微かに伏せら
れた時、底のない絶望と憎悪の闇を湛えて淀んでいたのだ。

一瞬の事だった為、他の三振りは気が付いていない。たまたま堀川
を観察していなかったら、青江も気付かなかっただろう。

以前いた場所で、何かあったのだろうか。堀川があんな目をしてい
たのだ、相当の事が起こったに違いない。下手したら審神者が亡く
なった時に、一騒動あったとしてもおかしくはない。もしかしたら、
平穩に政府に引き取られる事になった訳ではないのかもしれない。

政府に忠誠を誓っている審神者の事だ、そんな事情を聞いたとして
も政府の顔を立てる為に引き取ると決めてしまったのだろう。それ
に実力主義で過去など些事だと捉えている審神者は、強ければ誰だっ
て採用する。その過去に、何かあったとしたら——

猪口を握る手が強まる。堀川の見せたあの暗晦に吞まれてしまっ
たらしい。目を強く開閉し気を取り直してから、青江は会話に参加す
る。

「へえ。君の前にいた本丸の主は、大層愛されていたんだねえ」

「ええ、それはもう。前の主は本丸中に愛されていました。優しい主
だ、と」

「今の主とは正反対じゃねえか。こっちの主は時々鬼に見える事があ
るってのに」

主ももう少し手心が欲しい所だよなあ、と和泉守が不満そうに天を
仰ぐ。それに苦笑いしながらも、長曾祢は審神者への感情を述べる。

「だが、おれはあの主を好ましく思っているぞ。何せ実力をそのまま
買ってくれるのだからな。働きが評価されるのは喜ばしい」

「うん、それは嬉しいかな。いいなー、修行に行った短刀達。俺ももつ
と強くなりたいよ、そしたらもつと愛されるしさ」

「気が早いぞ、加州。安定して修行に出られるようになるまで、今少し
の辛抱だ」

「まあオレも、修行を考えちまうかな。更に強くなれば、更に戦場に出
られる。……それに何だかんだ言ったが、あの主の為になるのは悪く
ねえ」

「あつそれつんでれって奴？ 和泉守がやっても可愛くない」

「可愛くなくて結構だ！ つーか何だつんでれって、オレに喧嘩売っ
てないか!?!」

「つーんでれ、つーんでれ!」

「清光でつめえ表出る!」

「和泉守暴れるな、酒瓶が倒れる。加州も煽ってくれるな、おれの部屋
だぞ……」

ぎゃあぎゃああと酒の勢いのまま喧嘩を始める和泉守と加州。長曾
祢はため息をつき、猪口を置いて喧嘩の仲裁に入る。

堀川はさりげなく、武器になりかねない酒瓶や猪口を遠ざけてい
る。青江も酒瓶を遠ざけながら、堀川にさりげなく問いかけた。

「堀川。君も修行に出ようと思うかい?」

「青江さんは?」

「僕も修行を考えているよ。強くなれるのはいい事だからねえ。
……つと危ない、熱くなるのも大概にして欲しい物だ」

和泉守が振り回した勢いですっぽ抜けた酒瓶が飛んでくる。青江
が避けた事で壁にぶつかった酒瓶は、ガシャンと音を立て粉々に砕け
散った。

箒とか持つてきますね、と言って飛び出しそうとした堀川に、青江は重ねて問う。

「それで、堀川は？」

「……僕は……」

堀川が気まずそうに口籠もり、目を逸らす。青江がその真意を探ろうと、顔を覗く為に屈み込んだ。

途端、目の前の堀川が青江の背後を睨み付ける。青江も同様に、その視線の先を追っていた。

二振りが見据えているのは、窓ガラス。——何者かが、室内を見ている。

16—4 「監視者と、交渉」

青江は一足で踏み切つて、部屋の外へと飛び出す。それから室内にいる堀川に向かつて、軽く笑んだまま告げた。

「堀川、悪いけど僕は失礼させてもらうよ。部屋の掃除は任せたからね」

「僕も行った方がいいんじゃないか……」

堀川も出て行こうと踏み出すが、手で制止してから笑みを妖しいそれへと変えた。

「いや、一振りで大丈夫さ。堀川はそれよりも、部屋の片付けを優先した方がいい。あの二振りを一振りで止めるのは、なかなか骨だろうから」

青江はそう言ってその身で空気を裂くように走り出した。背後の呼び声は無視して、廊下の階段近くにある窓を開け放つ。

窓枠に足を掛けて身を乗り出させ、足場を蹴って目の前の木に飛び移る。気配を追うと、それは既に撤退を始めている所だった。

——逃がさないよ、何があっても。

相手の足の速さは凄まじく、普通に追えばまず追いつかないだろう。だから青江は刀装玉から弓兵を召喚し、走りながら相手の少し先へと矢を放たせる。

ひゅん、と風を切り矢が飛んでいく。しかし届かなかつたのだろうか、相手は足を止める気配がない。

——ならば、手を加えてもう一回。

「ねえ！ 君、政府の短刀だろう!？」

その言葉に動揺したのか、相手の速度が少し低下する。その機会を見逃す青江ではない。

狙いは再び相手の半歩先。——今度は手ごたえがあった。

相手が短く悲鳴を上げる。直後こちらに下がる気配がして、青江は出来得る最高速度でそこまで駆け抜けた。

そして——

「ふふ、捕まえた」

「あ、あう……」

相手が半歩下がった所を腕に収める。そうしてよくよく見てみれば、相手は白いふわふわの髪をした短刀——五虎退だった。

木の下では、大きな虎が唸り声を上げている。わたわたとしか形容出来ない動きで帽子を深く被り、政府直属の五虎退は青江の腕の中で震える。

「え、えつと、僕は……」

「ああ、何も言わなくていいよ。何となくここにいる理由は分かっているから。——背信容疑のある本丸の監視だろう？」

政府直属の五虎退は一瞬目を見開き、ううう、と泣きべそをかき始めてしまった。

「な、何で僕なんですかあるじさまあ……っ！　こうなる事は分かっていたのに……っ！」

「まあ能力的に、君が一番良かったからだろうねえ。君、隠れるのが一番上手いみたいだから」

ふるふると震えながらも政府直属の五虎退は、潤んだ眼をきつと鋭くさせ青江を睨む。

「で、ですが僕だって粟田口が一振り、かつ政府直属の刀剣です！　ここで倒れる訳には……っ！」

——ここに來たのが五虎退でよかった。青江は内心でそう安堵する。

五虎退を侮っている訳ではない。相手は修行済み、戦力的にはこちらが大きく劣るだろう。しかし、五虎退は少し気が小さい一面を持っている。

ならば、交渉の余地はある。

「いや、君にイタズラしたい訳じゃないさ。そこは安心して欲しいな」

「……え、え？　じゃ、じゃあ何で、弓を射かけて……」

「だってそうじゃないと、君は退却してしまうだろう？」

ぱちくりと目を白黒させている政府直属の五虎退に、青江は怪しく笑んでから意図的に怒りを滲ませる。当然、怒る相手は五虎退ではない。

「ひ……っ！」

またしても悲鳴を上げる政府直属の五虎退に、誇張を交えながら青江は「氷雨隊の心情」を述べ始める。

「……僕達はねえ、凄く怒っているんだよ。だって主はあんなに政府に心からの忠誠を誓っているのに、それを疑われる羽目になったんだから。正直あんなに怒り狂った主は久々に見たよ。僕達も主を疑われているのは非常に悔しい」

「ほ、僕に言われてもお……っ」

「しかも主を陥れたのは、たった一振りの刀剣勇士というじゃないか。一振りのせいで、政府からの信頼が揺らいでしまったんだ。……本当に腹立たしいよ。正直証拠があるのなら、今すぐ君に引き渡してもいいくらいに」

え、と政府直属の五虎退は言葉を詰まらせる。青江は怒りを引つ込ませて、五虎退に真面目な顔を向けた。

「ひ、引き渡してくれるんですか？ 本当に？」

「ああ。その代わり、ある程度の情報を融通してもらいたい。……と言っても、君の一存では決められないだろう。僕だって今無断で追つて来た訳だしね。僕達ははっきりした証拠をまだ掴めていない、君達は僕達が背信者を庇っていないと言い切れない」

「そ、そうですね……」

「——なら、僕達が背信者を庇っていると判断したら、僕達の本丸を取り潰してもいい。少なくとも僕は、背信者を庇い立てするつもりはこれっぽっちもないよ」

どんな手段を使つても、謀反人を炙り出せ——それが青江に下された指令だ。ならば、青江だって手段を問うつもりなどない。

本丸を潰してもいいと言えたのは、謀反人が本丸内に協力者を作っていないと推測出来たからだ。政府直属の五虎退との交渉が成立しない限りは、そのカードを表にするつもりはない。

しかし小心者の気がある五虎退だ、そんな事を言えば大きく動揺するに決まっている。

予想通り、さっと青ざめた政府直属の五虎退が、ひっくり返った声

で叫んだ。

「そ、そんな事、どうして……!」

「何故って、それくらいいの覚悟をして探している訳だしねえ。君も主の忠誠心っぷりは知っているだろう? 主も僕達もこの国を崩そうとしている輩と、同一に扱われたくないんだよ。そして、そんな事に協力しているものを、僕は仲間だと思えない。言っただろう、証拠があればすぐに突き出しても構わない、と」

「ごくり、と政府直属の五虎退が唾を飲み込む。どうしようか頭の中で考えを巡らせているのだろう。」

青江としても、この作戦は賭けに近かった。ここで「信用出来ない」と切り捨てられてしまえばそれまでなのだ。

「ならば何故賭けたのか。——この五虎退が、謀反人の正体を知っている予感がしたからだ。」

決定的な証拠が欲しかった。あの刀が、謀反人である証拠が。

五虎退の震えが止まり、息を吐いてから青江を見上げる。青江も意を決して彼の言葉を待った。

「……氷雨隊の青江さん。一つだけ聞かせて下さい……背信者の特定はどこまで進んでいますか?」

政府直属の五虎退は、引き締めた顔でそう尋ねる。青江は笑って即座に答えた。

「そうだねえ、元新選組の刀って所までは絞れたんだけど……そこから先が僕の憶測しかなくてね。それでもいいかい?」

「は、はい。構いません」

青江は五虎退を支える腕の力を入れて、吐き捨てた。

「——恐らく、背信者は堀川国広。全く、これが正しければ彼はとんでもない手練れだよ。主の信用を受けた上で、主を裏切っていたんだから」

「いつから裏切っていたのだろう。様子が急変した訳ではないから——多分、最初から彼は謀反人だったのだ。」

最終的な裏付けは、修行希望の有無だった。

青江が様々な本丸を観察して、気が付いた事がある。それは「刀剣

男士は一定の練度と本丸への愛着があれば、修行に行きたくなる」という性質だ。短刀達は練度六十に達した時点で修行を言い始めたし、他の刀種も練度の差はあれど一定の基準で修行を考え始めている。青江もまた、その基準に当てはまるように修行を視野に入れていた。そして修行を考え始めるのは、帰る場所への愛——本丸と審神者への愛着心が不可欠だ。

大和守は寝落ちる寸前に「変わらなきやいけない」と言っていたし、加州は言わずもがな。長曾祢は修行に肯定的であったし、和泉守も捻くれながらも修行希望を口にした。

新選組刀の中で、はつきりと修行を希望しなかったのは堀川だけ。彼は話の流れでそれを口にしなかったし、青江に問われた際には言葉を濁した。

考え始める為の練度は充分なはずだ。ならば——彼は本丸に愛着心がないと言える。その時点でもう異常なのだ——刀剣男士は余程の事が無い限り、本丸を愛するものなのだから。

堀川の詰め甘さは、青江が修行に関する規則性を知っていた事に気付かなかった点だろう。この事に気付かれないように、これから立ち回らなければならない。

これで間違いだったらまた振り出しだが——政府直属の五虎退は、おどおどしながらも確かに答えた。

「……そ、その通りです。そこまで特定出来ていたんですね、凄いです」

正解した安堵と堀川への怒りがこみ上げて来る。それでももうねる感情は表には出さず、政府直属の五虎退に妖しい笑みを浮かべて指示を仰いだ。

「これから、僕達はどう動けばいいかな？」

「え、えつと……少なくとも、証拠を押さえるまで刺激はしないで下さい。堀川さんと繋がっている誰かは……その、政府の転覆を計画している可能性があるのです」

今度こそ青江は表情を変えた。それは一大事ではないか、と言い募りそうになる寸前に五虎退は言葉を繋げる。

「まだこちらにも完全な証拠を掴めていないんです。今、堀川さん達を束ねている刀剣男士がいると思われる本丸に、別の方が出向いているので……」

「それで、完全な裏付けが取れると？」

「は、はい……政府直属部隊の一つである雲霄隊の、『最終兵器』が向かってるから、という話です」

ぞつと背筋が凍る。合同調査で会った、あの三日月が動いているのか。出来れば二度と会いたくないと思っていた刀剣男士が動いている事実には、青江は顔を引きつらせた。

「……相手は本当に、国へ戦争を仕掛ける気なんだね」

「うう……怖い事はそう起こって欲しくないのに……そうだ、青江さん」

目に涙を浮かべながら政府直属の五虎退は青江から離れ、ポケットからメモを取り出しさらさらと何事かを記す。書き終わるとメモを切り離し、青江に手渡した。

「僕の連絡先です。堀川さんに動きがあつたら、すぐに連絡を下さい。僕もあるじさまに確認を取りますが、堀川さん達の情報を渡せるようになったらすぐに連絡します」

「ありがとう。僕の連絡先も書いておいた方がいいよね」

「は、はい。お願いします」

メモを受け取った青江も連絡先を書き込んでいく。さらさらと流れるように書き終えると五虎退にメモを返し、青江は笑顔を張り付けて礼を言った。

「五虎退君、ありがとう。監視対象を特定出来て、本当にありがたいよ。……この事、僕の主にもまだ言わない方がいいかな？」

「はい、今はまだ。正直、ここで色々言った事とか連絡先を渡した事とかも、僕の独断なので……」

「そうだよねえ。僕も政府直属の刀が監視しに来ていたなんてそのまま主に伝えたら、信頼を失っている事に憤死しそうだし」

「……お互い、なるべく早い解決を目指しましょう。青江さんの審神者さまの為にも、この国の為にも」

「ああ。じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ。早く戻らないと互いに主が焦れそうだ」

はい、という一言と共に、五虎退は闇に消えていく。青江も来たルートを戻り、本丸の窓枠の中へと飛び込んだ。

ポケットの中にあるメモを上から触った後、青江は何事もなかったかのように新選組刀のいる部屋へと戻る。

多少の切り傷を拵えた和泉守と加州が、互いの頬に拳を突きつけ合いながら寝息を立てているのが見える。その奥で、内番着が少し破れている長曾祢がいびきをかいていた。大和守はベッドの上で幸せな夢を見ているのだろうか、緩い顔で寝言を言っている。

その周囲は瓶の欠片やら猪口やらが転がっており、長曾祢の部屋の中はどんちゃん騒ぎの跡が色濃く残っていた。

寝息といびきだけが声として響く中、テキパキと動いている人型は一つだけ。

「青江さん、外を見ていた相手は誰か分かりました？」

ガムテープで床に落ちているガラスの破片を取り除きながら、堀川が問う。

さも裏がないように振る舞うその姿に思う所はあったが、青江はただ困った笑顔を浮かべるに留めた。

「見に行ったけど、何もいかなかったよ。もしかしたらこちらが察した事に気付いて、逃げたのかもしれないねえ」

「主さんに報告は？」

「これからして来る。手伝えなくて悪いけど、後は任せたまよ」

「分かりました。少し早いですが青江さん、おやすみなさい」

軽く手を振って、青江は長曾祢の部屋を去った。

——さて、主には何と言おうか。

考えを巡らせながら、青江は廊下を進む。名前通りの笑顔は、その下にある感情を見事に抑え込んでいた。

16—5 「氷雨鶴丸と、普通の少女」

夜の帳が下りた清澄隊本丸の正門前に、紙袋を手にはぐら下げた白い男が立っている。男は雨音しか響かない本丸内を覗き込んでから、意を決したようにゆつくりとインターホンを押した。

しばらく待つと、インターホンのスピーカーから幼い少女の声が響く。

『……はい！ どちら様ですかー？』

「遅い時間にすまない、氷雨の鶴丸国永だ。ツクシ、江雪はどうした？」

『あつ、鶴丸さん久しぶり！ 江雪さんは今他の子の所にいるの。お見舞いだよね、すぐそつちに行くから待ってて！』

男——氷雨隊の鶴丸国永は、ツクシの明るい声に胸を撫で下ろしながら、彼女の指示に従った。

*

玄冬隊の数珠丸達とティータイムを過ごした後、鶴丸は自室で自問自答を繰り返していた。基本的には、何故自分があの蛍丸へあそこまでの憎悪を抱いたのか、という疑問についての問答だ。

——何故俺は、あそこまで蛍丸を憎んだのか？

——自分達の存在意義を、嘲笑と共に否定されたから。

——自分達が否定されるなんてよくある事。一々相手にしていたらキリがない。なのに何故あの蛍丸だけ過剰に反応した？

——多分、被験者である事が関わっている、と思う。

——どんな風に関わっているのだろうか？

そこで、思考が止まってしまったのだ。まるでその先を知る事を阻むかのように、頭が回らなくなる。腹の底から唸り声を吐き出した鶴丸は、少し歩きながら思考を回そうと考え——清澄の江雪と彼の本丸にいる滑園の子供達を見舞いに行つてない事を思い出して、何なら行つてしまおうと決めた。

決めてからは早かった。審神者に何とか許可をもらつて本丸の外へ出て、手土産を購入し、真つ直ぐに清澄隊本丸へと向かう。その間

にも思考を巡らせようとしたが、なかなか上手くいかない。どうしたものかと再び唸つてもどうにもならず、気付けば目的地の前に立っていた。

懸念している事が一つある。——今の今まで、江雪に一言もメッセージを送れていない。ここに来たのも、自分の事でいっぱいになってしまっている現状を打破するためだ。そんな事に友達を利用するのは、とても気が引ける。それでも、友達や子供達の様子を一度も見に行かないのはいただけない。

——江雪、沈み過ぎていないといいが。

世を憂いている友達の心中を思いながら、鶴丸はツクシの出迎えを待つ。

友達や子供達に元気になって欲しい。その為なら、鶴丸は道化にだつてなるつもりでいた。

*

パタパタと走つて来たツクシは、満面の笑みを浮かべて鶴丸を出迎えた。鶴丸もちよこちよこと滑_レ園を訪れていた身だ。ツクシの笑顔に後ろめたく安堵しつつも、彼女が少し無理をしているのではと窺い知れて心が痛んだ。

だが鶴丸はそれを表情には出来る限り出さず、軽く手を持ち上げて笑い返す。鶴丸はツクシに紙袋を手渡し、期待に目を輝かせる彼女に中身の説明をした。

「ほい、ツクシ。少し奮発して牡丹一華堂の練り切りを買つて来た。皆で食べてくれ」

「わあ、ありがとう！ 皆喜ぶよ！ ……鶴丸さん、夕ご飯食べた？」

「一応食べて来たぜ。だから俺の事は気にするな」

「久々に一緒に、つて思っただけだなあ。でも、あんまり豪華なご飯作れないから、少し安心しちゃった」

あまり良くない経済事情の一端をツクシはさらりと口にする。そうか、とだけ口にしてから鶴丸は清澄隊の状況をツクシに問いかけた。

「江雪はどうだ、体調とか崩してないか？」

「うーん、やっぱり落ち込んでるみたい。私に少し弱音みたいなのを零してたよ」

「弱音？ 何があったんだ」

「昼ご飯の後にね、江雪さんと少し話をしたの。私があまりにも普通に江雪さんに接するから、どうして江雪さんを嫌いにならないのかって聞かれて……。私達に恨まれるのが怖いって言ってたよ」

やはり、江雪はかなり気を滅入らせていたようだ。鶴丸はまだ事件の詳細を聞いていない。だがあんなにいた子供達が荒くれ者によって九人にまで減らされた事で、相当な傷を負ったのはよく分かる。

江雪は恐らく自分を責めている。それを少しでも楽にしてやりたかった。悪いのは襲って来た無法者で、江雪に非は全くないのだから。

玄関に上がり、ツクシに導かれ鶴丸は清澄本丸内を進む。本丸内は僅かに自分達以外の足音がするだけで、痛いくらい静かだ。元気さのない微かな足音が、子供達の傷を表しているようだった。

鶴丸は静かに目を伏せる。あの明るかった子供達がここまで憔悴している事実には、拳の力が更に籠る。

子供達は未来へと繋げる種だ。守るべき存在なのだ。それなのに、どうして無惨に殺され、追い込まれなくてはならないのだろう。それがただ、憤ろしくてたまらない。

湧き立つ感情でぐちゃぐちゃになっている鶴丸に、前を歩くツクシは困ったように笑う。

「まあ確かに江雪さんは刀剣男士だけど、あの襲ったひとは別なのね。皆もそれを分かってくれると嬉しいんだけどなあ。だって、江雪さんも鶴丸さんも優しいもの」

「ありがとうな。……。皆も、って事は、他の奴は……」

「うん。……。他の子は、刀剣男士に怯えてて……。特にソメゴローは事件の時に色々あって、割り当てられた部屋から一步も出てこないの。ご飯を部屋の前に置いたら、食べてる形跡があったのが救いかな。でも、食欲もないみたいで、少し残してるんだ。事件が起こる前は、おかわりするくらい食べてたのに……」

悲しそうに告げられたその返答に、鶴丸は息を呑む。

手平染五郎は、滑^{テヒラ}園^{ソメゴロウ}一の悪戯坊主だ。時折訪れる鶴丸にもちよつかいをかけ、そして鶴丸にやり返されてもケラケラと笑っているような子供。名前を真つ先に覚えた程に、鶴丸にとって彼の印象は強烈だった。

いつだって元気いっぱい、時々元気が行き過ぎて「相棒」と称する親友の蔵前^{クラマエ}朔夜^{サクヤ}に窘められていた。職員に叱られてようやく少し大人しくなるくらいだ、サクヤも散々振り回されていた事だろう。

そこまで考え、鶴丸の脳裏を不穏な予感がよぎる。そしてその予感を否定して欲しくて、ツクシに尋ねた。

「ツクシ、面白いやサクヤはどうした？ ソメゴローと一緒に閉じ籠^{カゴ}つてるのか？ ……まさか、事件の時に命を落とした、とか……」

——親友がいるのなら、ソメゴローは部屋に閉じ籠りなどしない。口にはしたが、サクヤが沈んでいるのならソメゴローは彼を元気付けようと動くだろう。そしてサクヤがいるのなら、ソメゴローは多少気分が落ち込んでいても他の子供達にも働きかけようと走り回っているはずだ。

ソメゴローは男子の中心となるガキ大将だ、なんだかんだで他の子供達を放つては置かない。それなのに、一步も外へ出て来ないという事は——

鶴丸の問いにツクシは一層顔を曇らせ、か細い声で呟く。

「……ただ死んじやっただけなら、良くないけど良かったのかもしれないね」

「……どういう事だ？」

ツクシの言い回しが気になり、再び問いかける。それではまるで、サクヤは死んだ方がマシな扱いを受けているみたいではないか。

鶴丸は納得のいく答えを導き出せず——ツクシの続けた言葉に、絶句する事となった。

「……サクヤ、刀剣勇士になっちゃったの。そうなるまでに何が起こったか分からないけど、サクヤは……もう元のサクヤじゃなくなっちゃった。その場に来た長谷部さんにね、もうサクヤとしての記憶は

消えてる、この状態だと記憶が戻る確率は低いって言われて……私達、サクヤとお別れも出来なかった。もうサクヤは別のひとに存在を上書きされちゃって、体は生きてるのにもう別のひとなの」

「……おい、それって」

「鶴丸さん。滑園の子はね、刀剣男士かその上に立つ審神者になる為に育てられてたんだって。女子はまだいい、自分が残るから。でも男子は？ タイガもサクヤとコタローみたいなのに、存在を上書きされちゃうの？ ……そんなのって、ないよ……私達、最初から戦争の為に育てられてたんだ。楽しい未来なんて、最初からなかったんだ。アズサだって、どこへ行ったのか分からないんだよ？ ……分かってる、鶴丸さん達は悪くない。でも……こんな形で願いを絶たれるなら、あの日思い出と一緒に消えてた方が良かったよ……！」

大粒の涙を溢れさせて、ツクシはしゃくり上げる。啞然としたまま立ち尽くし、鶴丸はそれを見つめていた。

——滑園も、あの研究所と同類……。

人を媒体とする顕現方法は、あの研究所で知った。そして出くわした蛍丸によって、それが真実だと実感する事になった。あの蛍丸は刀の魂を踏み潰し被験者の自我を残していたが、ツクシ達の前に現れた刀剣男士はそうではなかったのだろう。

一つ屋根の下で過ごした家族が目の前にいるのに、それは家族ではない。そして肉体がなくなった訳ではない為、ともに別れも告げられない。精神の折り合いをつけるのだからって難しいはずだ。

何よりも、自分達の——特に男子——未来がどうしようもなく暗いものである事。希望を打ち消された現実を突きつけられ、彼等は決して小さくはないショックを受けた。はいそうですかと簡単にそれを受け入れられるはずもなく、子供達は塞ぎ込み、未来の自分達の姿に怯えている。

涙を流すツクシに、何と言えはいいのだろう。もしかしたら、他の「自分」も誰かの未来を閉ざしたのかもしれない。自分は現在普通となっている方法で顕現したから、誰かの未来を潰した訳ではない。けれどそんな理屈を捏ねたって、子供達に通用するとは思えなかった。

「……俺も、悲しい。まさかサクヤがそんな事になってたとは……。そりゃ、ソメゴローだつて塞ぎ込むよな」

膝をつき、ツクシと視線を合わせる。潤んだ大きな目は、頼りない自分をはつきりと映していた。

「まともにも別れも言えないと、心にしこりが残るよな。……俺の本丸でも前に仲間が死んで、それを嘆く暇なく同じ顔をした奴が現れたんだ。そいつとはなかなか楽しくやってたから、新しく現れたそいつと同じ所と違う所を比べて、寂しく思う心を抉ったりもした。それと同列に出来る話でもないが、ツクシは今までよく耐えたと思う。何せ俺の事を笑顔で出迎えてくれたんだ。複雑な心境を態度に出さないなんていう、普通の奴には難しい事をこなしてる。これは素直に凄い事だ」

戦装束の袖で、ツクシの頬を濡らしている涙を優しく拭う。ツクシはぐしゃぐしゃの顔のまま、それを受け入れていた。

「……ツクシ、君はまだ子供だ。辛い気持ちを無理に抑え込まなくていい。泣きたい時には泣いて、辛い時には助けてと言えればいいんだ。何なら俺が当たりたい気持ちを受け止めてやる。俺の仲間曰く『周囲に悟られているなら心が悲鳴を上げている証。堪えれば堪える程、心にヒビが入っていく』らしいぜ？ 大丈夫さ、多少殴られるぐらいなら俺は何ともない。隊長サマに怒鳴られるのも慣れたもんだしな」

「……」
少しおどけて見せた鶴丸の言葉に黙り込み、ツクシは俯く。ボブカットの髪が垂れて、顔に影を落とす。

鶴丸は静かに流れ続けるツクシの涙を拭い続ける。きっと何か言いたい事があるのだらうと察して、その時を待っている。

どのくらいそのままでいただらう。ツクシは俯いたまま、ぽつぽつと言葉を吐き出し始めた。

「……江雪さんには、言えなかったの。江雪さんに言ったら、きっと凄く傷付けちゃうから」

「ああ」

「自分の世界を守る、なんて見栄張って、結局家族を守れなかった。死

んじやって、塗り潰されちゃって……今入院してるタイガだって、いつ帰ってくるか分からない。これでタイガまでいなくなっちゃったら、私、どうしていいか分からないよ……！」

「……ああ」

「どうして？ どうして世界は、当たり前前の幸せを私達から取つてくの？ 大金持ちになりたい訳じゃない、王子様の迎えもいらぬ……ただ、家族と楽しく過ごして、自分の力で生きられる大人になれば、それで良かったのに……！ どうして小さな願いすら叶えさせてくれないの？ どうして私達なの？ ねえ、ねえ、どうしてよ……っ！」

「……」

鶴丸は声を上げて泣き始めたツクシの顔を肩に乗せる。ツクシが継り付いて嗚咽を漏らし、鶴丸の肩を濡らしていくが、そんな事は気になりはしなかった。

ツクシの頭を撫でながら、鶴丸は視界の端に黒い服の裾が翻るのを見ている。密かにその場にいたもう一つの気配が去った後、鶴丸は天井を見上げる。

「……何で世界は、君達に犠牲を強いるんだろうなあ」

16—6 「氷雨鶴丸と、清澄江雪」

泣き止んだ後、目を腫らしたツクシは「顔を洗ってくるね」と言い残し微笑んで去って行った。その足取りは重くはなく、自分は少しでも力になれたのかもしれないと思えた。

少々肩が冷えているのと、憤りをぶつけられた胸の辺りが微かに痛い。だが、これくらいで子供の苦痛を少しでも楽にさせられるなら大した事ではない。

これで全てが解決した訳ではないが。未来へ繋がる子供達の力になる事に、躊躇いなどない。これからも空いた時間に顔を出そうと、鶴丸は改めて決意した。

「……鶴丸。ありがとうございます」

「江雪」

振り返ると、江雪が憂いを秘めた顔で立っていた。世を憐んでいる表情はいつも通りだが、目の下に薄く隈が出来ている。

彼も子供達の為に心を砕いたのだろう。それこそ、夜通し彼等の様子を見て回っていてもおかしくはない。だが子供達は江雪を恐れているという。なかなか好転しない現状に心をすり減らしていたのかもしれない。

その為だろうか、声音からは確かに鶴丸への感謝が窺えた。子供達の支えとなっているツクシの中にあつた絶望を、僅かでも吐き出させられたのだ。滑園の一員と言っても過言ではない江雪にとっては、相当に難しかった事を鶴丸はやり遂げたのだ。

これは滑園に顔を出した回数が、江雪よりも少なかったから出来た事かもしれない。距離が近過ぎなかったから、言うなれば「少し仲のいい知人」だったからこそだ。「江雪を傷付けたくない」と言っていたツクシの言葉からもそうなのだと分かる。

距離が少し大きいから出来た事。きっとこれは、自分じゃなくても良かったのだろう。蒼穹の一期にだって、きっと務まるはずだった。「貴方のお陰で、ツクシさんの心痛は少し取れたように見えます。

……私は、本当に無力ですね」

——だから、そんな悲しそうな声で、自分を責める謂れなどないのだ。鶴丸と江雪では役割が違った、それだけの話なのだから。

「おいおい、俺はただ話を聞いただけだぜ？　子供達を一番支えてるのは君だろう。そんな疲れた表情をして、子供達の為に駆け回らなかつたとは言わせないぞ。子供達が怯えているのは仕方ないとはいえ、一番身近な大人である君がいるのといないのでは大違いだ。……子供力は大きくはない。出来る事に限りがあるから、間違いく君の力が必要だったんだ」

「ですが、ツクシさんは少しも心の傷を表に出しませんでした。子供達の前ではもちろん、私にだって……。ずっと心を張り詰めさせていたのに、私はただそれが強さだと思い込んで……」

「それは君に心配をかけたくなかつたからだろう。様々な事を気に病みやすい君の事だ、ツクシの辛さを知ったら同じように心を痛めるのは目に見えている。俺は泣かれたりするのには慣れているからな。ちようどいい所に泣いてもいい場所が現れた、ツクシの涙はただそれだけの事さ。……俺は君に、少しでも元氣であつて欲しいと思つている。ツクシも多分同じ思ひだつたんじゃないか？　きつとずっと笑つていたんだろう、誰も傷付けないように。ツクシが強いのは正解だと思ふぜ」

泣いて解決しない事をずっと嘆くか、それとも少しでも前を向いて笑うか。ツクシは後者であろうとしていた。その身に降り注いだ出来事で、明るさを失つても決しておかしくはなかつた。だが、彼女は皆の為に笑つている事を選んだ。不条理に膝をつかずに、少しでも己を奮い立たせようと笑つていた。

だが、傷から目を背け続けると心に痕が残る。我慢し続けるのは心にも体にも良くないのだ。だから鶴丸は、ツクシに肩を貸したのだ。笑う強さは彼女の長所。それが損なわれる前にガス抜きをさせた、鶴丸がした事などそれだけだ。

「江雪。きつとツクシは、君に強い自分を見て欲しかつたんだろう。背伸びをするのは子供の特権、かわいいもんだ。それに、するべき事をきちんとしてようと真つ直ぐに立とうとしていた。ツクシは現実か

ら逃げたくなかったんだろうな、きつと。だが子供達だけだったなら、すぐに限界を迎えていたかもしれない。いい所を見て欲しい相手がいるから、ツクシは立っていられるんだ。……君は間違いなく、ツクシの支えになっている。そこだけは、取り違えちゃいけないぜ」

強く言い切った鶴丸の言葉を咀嚼するように、江雪は目を伏せる。彼にも思う所があるのだろう、一番傍で子供達を見てきたのだから。鶴丸の話した言葉全てが合っているとは言えない。けれど、間違いなくツクシは江雪を頼りにしているのだ。少なくともあまり園に行けなかった自分よりは、ずっと。

江雪は俯いたままゆっくりと口を開き、言葉を紡ぐ。

「……ツクシさんは、きつとまだ傷付いたままです。ですが……私がいる事で立ってられるなら、私は彼女の支えにならねばなりませんね」

「おう、その意気だ。今いる中じゃ君がきつと、一番頼りになる大人だからな」

「そうですね。頼りになるかは疑問ですが、子供達の信頼を裏切るような真似は絶対にしたくありません」

江雪の目が鶴丸を見る。その瞳には、先程まではなかった強い光が宿っていた。

「改めて、ありがとうございます。相談に乗るつもりが、発破をかけられてしまいましたね」

「……え、相談って」

「違いましたか？ ツクシさんが貴方の来訪を告げた時に、いつもの声の軽さがなかったと言っていましたか」

思わずぼかんと口が開いてしまった。普段と同じ調子を装っていたが、ツクシにあつさりと複雑な内心を看破されていた事に動揺してしまふ。

そして、その事に一言も触れなかった。それは江雪の担当だと分かっていたのだらう。深入りしないようにして、江雪の下に案内する予定だったのかもしれない。鶴丸が少し事情をつついたせいで、彼女は泣き崩れる事になった。けれどそれを責めずに、彼女は笑って去っ

ていった。

頭を搔きながら、しみじみと零す。

「……優しい子だなあ、本当」

「そうですね。……私の部屋で話を聞きましょう、案内します」

江雪が小さく笑んで身を翻す。切り揃えられた長い髪が少し靡いているのを見つめながら、鶴丸はその後に続いた。

*

部屋が行燈がゆらゆらと頼りなく揺れている。障子の隙間から激しい雨音が響き、部屋の中にいる二振りに晴天の遠さを教えていた。

「……まさか貴方も、そんな事に巻き込まれていたとは」

「本当になあ。聴取で聞いた話だと、下手人は同じ隊の奴等じゃないかと言っていたが。何にせよ嘆かわしい事だ」

江雪から出された緑茶を一口含み、鶴丸は憤りを隠さずにそう返した。江雪も痛ましそうに目を閉じ、湯呑を置く。

鶴丸は粗方の事情を江雪に話した。本丸を抜け出して研究所に潜り込んだと話した時点で、江雪は咎めるように眼を鋭くさせていた。が、その後己を「ケイ」と名乗る蛍丸と出くわし鶴丸を激怒させたと聞くと、微かに目を見開いて持ち上げていた湯呑から口を離した。

やはり、自分らしくなかった。改めてそう思うと、自分が情けなくて仕方なかった。小夜に落ち着けとまで言われる程に感情を荒げて、みっともない以外の言葉がどうして出てこようか。

けれどというべきかやはりというべきか、友は鶴丸を笑わなかった。驚きはしたものの、すぐに冷静さを取り戻す。そして鶴丸に問いかけた。

「……そもそも、どうして研究所に潜入しよう？」

「あー、そこ話してなかったかそういや……いや、ある任務で少し気になる事があったんだよ」

「気になる事？」

「ああ。……どこまで話していいやら……」

「話せないのなら、無理をせずに。貴方の主から箝口令を布かれている、といった所でしよう？」

察しの良さは流石だ。江雪はこうして、鶴丸の公然とした秘密を秘密のままにしてくれる。それが後ろめたくもありがたい。いい友を持てた事を改めて実感しながら、鶴丸は話を続ける。

「まあそんな所だ。気になる事は結局、滑園の正体と繋がる話だったんだが。……そこであの蛍丸が出てくる」

「……己を刀の名で呼ぶなという、蛍丸ですか」

「ああ。あいつは、俺達をただの人斬り包丁だと嘲笑った。その時点で、あいつは蛍丸の魂を持っていないと分かったよ。人々の積み重ねた物語を食い殺し、復讐の為に刀を振るう。後者だけなら良かった、復讐を否定するつもりもないしな。……だが」

「その蛍丸は私達の根幹たる物語を、なかった事にしたと……なるほど、確かに怒り狂うのも分かる気がします」

刀の物語は、辿って来た経緯の上に人間の祈りや思いが乗せられて形作られる。刀剣男士は決して、単独で在れる物ではないのだ。数多の人間の願いや誇りから成り立つ他、ある刀が非実在ながら在れるのは、元持ち主とされる人物へ向ける人々の憧憬があまりにも強かったからというものもある。

あの蛍丸は、その人々の想いを否定したのだ。取るに足らない、いやなものだと。人々が繋げた祈りが現出した魂を、弱いものだと断じて。それだけでもう、刀剣男士が怒り狂うのに充分な理由だ。

だが――

「ですが鶴丸、貴方はまだ納得していないみたいですね」

「……ああ」

そう、鶴丸はまだ蛍丸に憎悪を抱いた本当の理由を、見出せていないのだ。何となく、それだけだと言うには据わりが悪い。

存在を否定されるのなんて、任務をこなしているとざらにある事だ。いちいちそれを気にしていたら、審神者に使えないと判断されてしまうだろう。

鶴丸は早々に感情を揺らがせない事を買われて、調査部隊に配属されたのだ。自分だって、そんなに心を揺さぶられるなど考えもしなかった。

何故、あの蛍丸だけ。被験者である事が関わっていると、ぼんやり理解したまではない。じゃあ何が関わっているというのか。そこから思考が停止してしまうのだ。

鶴丸がぼつぽつと語れない部分を除いて話すと、江雪がふむ、と顎に手を当て息を吐く。しばらく黙って考え込んでから、江雪は鶴丸に問いかけた。

「鶴丸。もしかしたら貴方は、研究所に潜入する前からその蛍丸の事を知っていたんじゃないやありませんか？」

鶴丸はきよとんと目を丸くする。何故そんな事を聞かれるのか見当もつかないまま、こくりと頷いた。そうですか、と呟いて江雪は問いを続ける。

「彼を知った時、貴方は彼にどんな印象を抱いていましたか？」
「どう、って……」

「経緯だけ聞く限り、彼に同情心を抱いてもおかしくはないと思います。私が貴方の立場だったら、救ってあげたいとも考えるでしょうね。……大切な存在を殺されて、自身は生き残ってしまった。そこまですら憐れむのも当然でしょう」

心臓が、嫌な音を立てて鳴っている。相手は友である江雪で、実際彼はただ話しているだけなのに——心臓に刃を突き付けられているような心地になる。

しつかりと、江雪の言葉を聞かなくてはならない。その一方で、これ以上聞きたくないと耳を塞ぎたくて仕方がない。

「……実際には、彼は貴方の救済を必要とするどころか、貴方を見下していた。こちらが差し伸べてあげた救いの手を振り払い、逆に貴方達を嘲笑った。憐れみを拒み、自分はそんな存在じゃないと言いつ返した。……ここまで言えば分かりますか？ 私としても、これ以上は言いたくないのですが」

かたかたと、湯呑を持つ手が震える。江雪が気まずそうに目を逸らしていたのを呆然と見ながら、鶴丸は頼りない声で吐き出す。

「……つまり俺は。助けてあげようという建前で軽んじていた存在から、実際には見下されていた事に腹を立てて、憎しみを抱いたのか」

そんなまさかと笑って言うのは簡単だ。ふざけた事をぬかすなど怒鳴り散らすのも。けれど鶴丸はそのどちらも選ばず――

「そんなの――無様の極みだろう……っ!!」

頭を抱えて追い詰められたかのような声で吐き捨てた。江雪がどんな表情をしていたのかは、見られなかった。

否定しなかった――否定出来なかった。江雪が立てた推測は、心臓が立てる嫌な音と共にすとんと腑に落ちたのだから。

救済しなければと思っていた。悲しみに沈んでいるだろう19478番を、慰めてあげなければと思っていたのだ。しかし実際に会った19478番――蛍丸は、刀剣男士を嘲笑してその魂を踏み躪る、鶴丸が考えていた「可哀想な存在」ではなかった。

「可哀想」じゃなかったから、見下されていたから。――自分の想像通りの存在じゃなかったから。都合のいい性格を思い描き、それに反していたのを、許容出来なかった。

何と情けない。何て醜悪さ。何て――何て、格好悪い事か。尊厳を無視していたのは、自分も同じじゃないか。

16—7 「氷雨鶴丸の、決断」

「……鶴丸」

「くそつ、自分がここまで腑抜けだったとは！ 身のない同情をしただけでなく、それを拒まれただけで逆上するなんて！ こんな形で道化になりたくはなかったのに、滑稽にも程がある！」

「落ち着いて下さい、茶が袖にかかってしまいます」

荒くなつた息のまま、湯呑を乱雑に置いてしまう。僅かに手にかかった茶のぬるさが不快だ。もう片方の袖で水分を拭い取り、鶴丸は重々しく息を吐いた。

嫌な自分を、思い知らされた。自力で考えていた時に思考停止していたのは、それから目を背ける為だったのだろう。自分が完全に綺麗な存在だとは思っていなかったが、現実に醜い自分があつた事に吐き気がする。

呼吸が上手く出来ない。なのに身体に力が入ってしまったって苦しい。こんな情けない姿を誰かに晒すのは、恥ずかしくて仕方がなかった。

江雪が躊躇うように身動きしているのが見えた。突き付けられた自己嫌悪のまま、彼に八つ当たりをしたくはない。鶴丸はもう一度息を吐き出し、頭を持ち上げた。

「……すまない、見苦しい所を見せた」

「いえ、構いません。少し悲しいとは感じてても、見苦しいとは思いませんからね」

手に力が籠る。今の自分の、どこが見苦しくないというのか。甘やかされるのは御免だった。いつその事、詰って心を抉って欲しかった。

けれど江雪は、静かに目を閉じ湯呑をずらすと鶴丸に語りかけた。「……私は、貴方を聖人君子だとは最初から思っていますんでしたよ。完全な物がこの世にないように、心だつて欠点の一つや二つあつて当然。けれど貴方は、自分の弱さを少しも見せようとしなかった。私は、それが少し寂しいと思っていました」

その穏やかな口調は、鶴丸のささくれた心に冷静さをもたらした。

そして落ち着いた状態になって初めて、江雪の表情をしつかりと見た。

目を閉じている江雪はとても穏やかな顔で、小さな花を見つけた時のような微笑ましさを抱いているらしかった。それがどうして今自分に向けられているのか分からず、鶴丸はただ次の言葉を待った。

「弱い所を見せるのを、貴方は嫌だと感じているかもしれませんが。ですが貴方は、ひとり朽ちていくはずだった私に幸せをもたらしてくれました。私は散々弱さを見せたのに、貴方は少しも笑わなかった。それがどれだけ嬉しかったか、きつと貴方は知らないでしょうね。……希望を見せてくれた貴方が、今こうして私に協力を求めているのです。力にならずに何を友と呼びましょう」

江雪はゆつくりと目を開き、鶴丸へ微かに微笑んだ。

「自分の欠点に気付いてそれを悔めるのなら、充分に修正する余地はあるでしょう。もしかしたら見方を変える事で、欠点ではなくなるかもしれません。……例え存在を軽んじていた所があったとしても、貴方がその蛍丸の境遇を憂いたのは事実。悲しむべき事に何も感じなくなる方がまずいと、私は思います。それは心が完全に磨耗している証なのですから」

「……他の『鶴丸国永』は、何も感じないように振る舞うと思うが」「それは『感じないように見せかけている』のでしょね。きつと多かれ少なかれ、思う所はあるはずですよ。それが悲哀から来る憂いでも、過多から来る呆れでも、情感の揺らぎは必ずある。例え同情から来る物だとしても、貴方は悲しむべき事を悲しんだ。貴方は、決して薄情ではないと思いますよ」

穏和な口調で、江雪は語る。それはまるで、行燈の仄かな明るさに合わせているかの如く。ふわふわと揺れる行燈と江雪の語りに、鶴丸の心にあつたささくれも修復されていく。

「同情しか出来ないのは当然だと思います。きつと貴方は、その蛍丸の事を然程知らなかったのでしょうか？ その時まで直接話した訳でもなし、彼をよく知らないのに同情以上の感情を抱けというのが、無茶な話なのです。……鶴丸、貴方から見たその蛍丸はどうでした？」

人を食ったような態度しか取らない冷笑主義者？ 残忍な行為をする狼藉者？ それとも、人の心を失くした利己主義者でしょうか？
まずは貴方の知る彼を、貴方の口から教えて下さい」

否定的な言葉を並べているのは本心が半分、意図的なのももう半分だろう。

当然ながら、江雪はあの蛍丸を見ていない。鶴丸の話す人物像が、江雪の知る全てだ。けれどあまりに優しい口振りからして、鶴丸が抱き始めている「今の蛍丸像」が分かっているに違いない。

——そうか、俺は……。思っていた以上に、見透かされているなあ。小さく苦笑いをした鶴丸は思考を纏め直し、姿勢を正して江雪に解を示した。

「——あいつは、大切な存在を失った悲しみや憤りを周囲にぶつけている。多分、関係ない者が犠牲になった所で『大切な存在を奪った憎い奴等がいなくなった』としか考えられないんだろう。あいつにとつては、世界中の心ある存在全てが敵なんだ、きつと。……あいつの口振りから考えると研究員や刀剣男士はもちろん、無関係の審神者をはじめとした人間達にも恨みを抱いているだろう。失った子は、あの蛍丸の全てだったのかもな。いずれにせよ、己の尊厳を踏み躪られ、その子が死んだ時点であいつは壊れてしまった」

これも、上辺だけの情報なのかもしれない。それでも鶴丸は、頭で思い描いた物を全てそのまま表に出す。

守られるべき子供達が、どうして研究所に行く事になったのかは分からない。それでも、子供達を戦場に向かわせるなどもつての外だ。心の奥底では人間の子供ごときに戦場を奪われたくないという排他的思想もある。もちろん現代の道徳的にそんな事があってはならないし、子供達の顔が苦痛に歪むのを見たくないというのも本心だ。

それに何より——見ていられなかった。真正正銘の子供が、復讐に生を燃やす所なんて。ケタケタと子供らしくない声で笑い、顔を憎悪で歪ませる子供がいるなんて、認めたくなかった。

鶴丸は子供の大切さを理解している。だからこそ疑問だった。何故人間達は、子供を使い捨てるのかと。歴史を紡ぐ人間を育てる方向

ではなく、所詮は物である刀の苗床としたり、戦場へと向かわせたりする方向へと舵を切っている。それが理解出来なかった。

——こんな国、守る価値なんてありはしない。むしろ一度崩した方がいいんだ。大切な友達を理不尽に殺して、それを失敗の一言で片付ける国は。

あの蛍丸は、そう言っていた。そして聴取で聞いた「仲間がいる」という話と照らし合わせると、浮かび上がってくる火種がある。

「そんな奴が力と同志を手に入れたんだ。——政府をひっくり返す反乱すら実行しかねない」

江雪が息を呑んだ。瞳孔を開きながらも膝の上で拳を握り、動揺の表出を最小限にしようとしている。

鶴丸の言いようのない内心の不穏さが、口に出す事で定まった気がする。息を吐いて湯呑を傾けると、最後の一口だったらしくすぐに茶は流れ込まなくなった。

江雪は前髪を目前に垂らし、激情を押し殺した声で呻く。

「……そこまで、考えを及ばせないといけませんでしたね。迂闊でした」

「俺も、そんな事が起こって欲しくないが……あいつらがあのままで終わらせるとは考えられない。警戒は最大限にした方がいいだろうな」

言葉にしながら鶴丸は、次第に停滞していた思考が目まぐるしく働き始めるのを感じていた。

二つの事件を起こしてそれでおしまい、などとは考えにくい。研究所二つ潰しただけであるの蛍丸が満足するとは到底思えないし、仲間がいるなら尚更だ。

多くの血が流れる出来事が起こるのは、目に見えている。鶴丸はそれを許せなかった。

己の装束に付く血は、戦と無関係な存在の物であってはならない。敵ではない存在によって鶴らしくなるのは、絶対に嫌だった。

「せめて子供達の引き取り先が決まるまで、事が起こらないのを祈るしかありませんね。ですが、もし最悪の事態になったら——」

「俺もそつちに行けるようにはしておくが、何があるか分からない。子供達の事は頼んだ」

「ええ、命に代えても。……鶴丸、貴方も腹が決まったみたいですね」
江雪の張り詰めた問いに、鶴丸は頷く。

あの蛍丸は遠くない未来で、数多の存在を殺すだろう。言葉や優しさだけで穏便に収められるとも思えない。

あの壊れた子供を止める方法は、最早一つだけ。それは出来れば避けたかったが、鶴丸は刀らしいやり方で、被害を最小限にしないでほならない。

「ああ、流石に国家転覆を阻止する主命が出るだろう。俺はそつちを優先する。それと、もし反乱が起きた時にあの蛍丸が首謀者側にいたなら——その時は俺が殺す。あの蛍丸も俺を殺しに来るだろうしな。……奴の言葉を俺は認められそうにない。刃で語らう段階は、もう過ぎているだろうしな」

「……和睦の道は、ないのでしょうか……」

決まり文句を口にしながらも、江雪にそこまで沈んだ様子はない。それは諦めから来る物なのか——

「ある、と言えたら良かったけどな。俺は俺の筋を、奴は奴の筋を通す。揺らがない二つがぶつかり合うんだ、どちらかが壊れるのは当然だろう？ ……俺も最後まで抗う、だから勝利を祈ってくれ、江雪」
「……そうですね、貴方の為に祈りましょう」

——清澄隊本丸を訪れた当初とは異なり、友の顔が晴れ晴れとしていたからだろうか。

*

「……ん？」

「どうなさいました……あ」

子供達へ顔を出してから帰ろうと立ち上がった鶴丸の端末が、小さく震える。江雪が訝しんでいたが、彼もまた電子音がした文机の方向を見る。

「そういえば貴方、しばらく会話部屋に入らなかつたでしょう。任務以外では入り浸りだったのに、珍しいと思っていたんですよ」

「まあ、色々あったからなあ」

「そうですね、話を聞いた今は納得しています。……どちらでしようかね?」

「一期か、鶯丸か……鶯丸からだな。えーとなになに……」

端末を開いた二振りは、きよとんと目を丸くして画面を見つめた。

『鶴丸、話は聞いた。大きな損傷がなくて何よりだ。だがあまり無茶はするなよ、こちらでも調査は進めているからな。進展があったら連絡する、くれぐれもこちらの寿命を縮めるような真似はしてくれないな』

『江雪、手入れはちゃんとしたか? お前は自分を蔑ろにする所があるから心配だ。子供達は元気か? お前や子供達の心身共に何かあったらすぐに連絡をくれ。色々あって大変だろうが、一振りで抱え込んでくれるなよ』

チャットアプリの個別部屋に届いていたメッセージを読み上げた二振りは、しばらく黙ってからぷつと吹き出す。

「どうやら政府直属部隊に所属している友に、かなり心配をかけてしまったようだ。上記だけでなく、すぐに見舞いに行けなかった詫びや、ひと段落ついたらすぐに駆け付けるという宣言なども記されている。」

「あつはつは! 鶯丸には随分気を揉ませてしまったらしいな!」

「本当ですね、会話履歴が沢山……ふふ」

少しの間笑い合った二振りは、チャットアプリ内鶯丸の個別部屋に以下の文を打ち込み、端末を閉じた。

『今江雪の本丸にいる。話をして少しすつきりした所だ。俺は大丈夫だから、鶯丸も無理はするなよ。というか調査の報告とかしなくていいからな! 機密情報だろそれ!』

『鶴丸が来ています。手入れをしたので私は元気です。子供達が少し落ち込んでいるので、鶯丸の力を借りる時も来るかもしれません。その時はよろしくお願いします』

16—8 「雲霄鶯丸と、深手の少年と」

端末の画面に、新たなメッセージの通知が映っている。少し長い二つのそれは、大切な友達からの物だ。

雲霄隊の鶯丸は胸を撫で下ろしながら端末をしまい、到着した音と共に開いたエレベーターに乗り込んだ。その首からは、面会用のカードがぶら下げられている。

鶯丸は「町」で一番大きな病院に赴いていた。目的は関係者への事情聴取だ。

襲撃された研究所の人間の生き残りは少ない。成人している者はほぼおらず、滑園側の被験者が少し生き残っているぐらいだ。今回は入院している子供に、改めて事情を聴くつもりだった。

——確か入院しているのは、時折話題にも出ていた「タイガ」だったか。

一言多い所があり、男女問わず園の人間を怒らせる事も多々あった男子だと記憶している。女子の一人を庇い、腕に怪我を負った為に大事を取って入院する事になったはずだ。

鶯丸は、滑園に顔を出した事はない。審神者に止められていた事もあったし、情が移ってしまうのを鶯丸も恐れた結果だ。それでも四振りでの話題に出るのを止める事までは出来ず、間接的に子供達の日常を知ってしまった。そんな中で滑園が襲撃され、鶯丸も子供達の現状を酷く憂う事となった。

しかし、仕事は仕事だ。被害を受けた子供達に心を痛める自分と、仕事を遂行しようと冷静に考え、引きずられないようにしている自分。その二つが両立しているのが、不思議な心地だった。

エレベーターが、目指す病室のある階に止まる。開いた先には、微かな電灯に照らされるロビーがあった。夜である今は誰もおらず、鶯丸も一瞥してから通り過ぎる。

微かな話し声が聞こえる廊下を進み、目的の病室を探す。指差し確認をしながら歩いていくと、目的の病室番号があった。

鶯丸はドアのハンドルを掴んで開こうとした。しかし、中から話し

声が聞こえてその手を止める。

「……そう、ツクシちゃんを守って……腕を動かして大丈夫？」
「平気だよ、ハルカ姉ちゃん。もうすぐ退院出来るって話だし」

ハルカ、その名前を聞いて鶯丸の警戒度が上昇する。しかしハンド
ルから手を離す事も出来ず、その場で硬直してしまった。

コマクラハルカ
木枕遥。表向きは居酒屋「猩々木庵」の店員。しかしその裏で情報
屋を営んでいるという話は、政府に属するものには周知されている情
報だ。

厄介なのは、刀剣男士を相手にしてもその尻尾を掴ませないとい
う事。彼女が情報屋なのは公然の秘密なのだが、短刀や脇差が彼女の周
囲を洗っても彼女の詳しい経歴が出て来ない。意図的に隠されてい
るのは明白で、それを誰がやっているのかが分からなかったのだ。

政府の中にいるのならまだ良い。力ある者が覆い隠しているの
ら、わざわざつく必要性を感じない。

しかし、恐らく彼女は——己の力のみでその機密を保持している。
この時点で彼女が只者ではないのは一目瞭然だ。夕チが悪いのは、一
見したらただの店員にしか見えない点。政府だって暇ではない。小
娘一人の為だけに人員を割く余裕など、早々なかった。

風が吹けば飛ばされそうな一般人を装っているが、実際の脅威は計
り知れない。審神者も彼女に対しては最大限の警戒を行うように言
い含めており、決して無防備で対峙するなという警告は、鶯丸の身に
も叩き込まれている。

そんな彼女が何故ここに。ハンドルに籠る手の力を解放しないま
ま、鶯丸は病室内へと耳を澄ませる。

「そう、もうじき退院出来るのね。良かったわ、本当に」
「まあ弾丸が腕に通るなんて事、早々ないからね。いい経験が出来た
と思っておくよ」

聞いている分には和やかな会話だ。だがタイガが話している相手
はハルカ、油断は決して出来ない。

いつそ室内に入ってしまったおうかと悩む。しかしタイガも心を許し
ている様子だし、割って入っては不審に思われるだろう。

鶯丸がそう悩んでいる内に、ハルカは氣遣うように声音を変えた。「でも、ツクシちゃんに当たらなくて本当に良かった。女の子に傷が残るのは一大事なもの」

「……うん」

「タイガ君、これからは無茶しちや駄目よ。人間には、銃弾を受けた時点で障害を負う危険があるんだから。今回は運が良かったけれど、次もそうなれるなんて保証はないのよ」

「……でも、次もツクシに何かあったら……」

タイガの声が震えている。ツクシとは、庇った少女の名前だろう。タイガにとって彼女が大切な存在なのは聞いているだけでも分かる。その場にいたなら労っていた所だったが、いま鶯丸がいるのは病室の外だ。

ハルカは優しい口調で、タイガに語りかける。

「その時は大人とか、刀剣男士に任せちゃえばいいのよ。大人は色々な事が出来るし、刀剣男士は適切に対応すればすぐに傷が治せるヒーローだからね。身軽に動けるし、彼等に頼むのが一番よ」

優しい口調なのに、何故蛇が絡みつくような嫌な感じがするのだろう。しかし疑問に思ったのは一瞬だった。

——あの女、相手が被験者だと知って……！

「……刀剣男士って、傷が治せるの？」

「そうよ、腕が取れても処置をすれば元通り。だから皆に何かあったらすぐ刀剣男士がいる環境にしておくといいかもね。今は江雪さんがいるんでしょう？ だったら安心ね。……あ、でも江雪さんの所から離れたらどうしたらいいのかしら？ なかなか刀剣男士も降りて来ないし……どこかから現れてくれれば、一番いいんだけどねえ」

「……ハルカ姉ちゃん、俺……」

か細い声でタイガが言いかける——そこが、鶯丸の限界だった。

ガラリと病室のドアを開ける。ぎよっとした表情をしている他の患者を無視して、タイガのいるだろうスペースへと足音荒く近付く。

タイガと思われる少年は、目を丸くしてこちらを見ていた。ハルカはきよんとした表情をしていたが、すぐに人の良さそうな笑顔で夕

イガに告げる。

「タイガ君にご用かしら、じゃあ私はこれで。タイガ君、くれぐれも無理をしちゃ駄目だからね」

「あ、うん。ハルカ姉ちゃん、またな……」

ハルカは立ち上がり、鶯丸の横を通り過ぎようとした。その途端に、鶯丸は地を這うような声で彼女を呼び止める。

「――木枕遥」

「あら、貴方は……」鼻屑にして下さってる鶯丸さん？ タイガ君とお知り合いだったんですね」

空とぼけた態度で微笑んでいるハルカに、鶯丸は眼光を鋭く研ぎ澄ます。そして振り向くと、激しい怒りを煮えたぎらせ警告を放った。

「自分だけで勝手をする分にはいい。だが子供達をいたずらに巻き込むのなら、こちらもそれなりの対応をさせてもらう」

しかし鶯丸の怒気をぶつけられても、ハルカは平然とした様子のままペろつと舌を出した。

「あらら、怒られてしまいました。私はお話してただけだというのに。……タイガ君、今度こそじゃあね」

手を振って去っていくハルカを見えなくなるまで睨み付けた鶯丸は、息を吐いてからタイガのベッド脇に向かう。タイガは困惑した様子で、椅子に腰掛けた鶯丸を見ていた。

「……夜遅くにすまない、それに剣呑な所も見せた。名前はキレタイガ、で合っているか？」

「うん、合ってるけど……刀剣男士だよな？ 俺に何の用？」

「事件の詳しい情報を聞きたかったんだが……それどころじゃなくなつたな。無作法だが病室に入る前から話を聞いていた。……お前は、刀剣男士になるつもりか？」

ぴくり、と布団の上に乗せられたタイガの手が跳ねる。タイガは俯き、ぼつぼつと己の中の思考を吐き出す。

「……ツクシがまた襲われたら、今度は助けられないかもしれない。だったら、少しでも力をつけたいよ。ツクシがいなくなるのだけは、絶対に嫌だ」

「それだけが理由なら、やめておけ。刀剣男士は、背負う物があまりに多過ぎる」

え、とタイガが勢いよく鶯丸を見る。その目にはどうして、という感情がありありと浮かんでいた。

鶯丸は言葉を選びながら「刀剣男士の背負う物」を語る。修羅の道に進もうとしている少年を、少しでも止めたかったから。

「刀剣男士がやっているのは、好きな時に大事な存在を守れるなんて優しい物じゃない。命令されれば嫌な事でも絶対で、痛い思いをして戦わなくてはならないし、身の自由も利かない。その上恨まれる事だってあるんだ。苦しい思いをしても、見返りは少ない。無惨な死に方をする可能性もある。しかも刀剣男士になった途端に、人の道理から外れてしまうんだ。……お前の大切な存在と、寿命が大きくずれる事にもなる。それでも、なりたいと思うか？」

タイガの肩が跳ね、身体がカタカタと震える。言いたい事は、多少なりとも伝わったようだ。けれどタイガは、恐怖に苛まれながらも反論した。

「……俺のいた場所は、刀剣男士やそれを束ねる人を育てる場所だって聞いた。なら、どっち道同じなんじゃないのか？俺は、ツクシを失うのだけは本当に嫌なんだ。どんな手を使っても、それを阻止出来るなら……そっちの方がいい。刀剣男士になる事で、少しでも出来る事が増えるなら、俺は……」

そう言いながら、タイガは身体を抱き竦める。ツクシを失う事や人外になるリスクなど、様々な恐怖が渦巻いているのだろう。どちらを選んでも、負の面は付き纏う。それを容易く選べる程、簡単な選択肢を示したつもりはない。けれどそれを押し付けられる苦痛は、理解しているつもりだった。

「……悪いな。俺も、あの女と同じ事をしている」

鶯丸はタイガの頭に手を置き、優しく撫でる。ふっと顔を上げたタイガは、彷徨える者の表情をしていた。

「それだけ、重要な選択だという事を言いたかったんだ。俺は元から刀剣男士だから、人から刀になる心境など想像するしかない。だが元

からの俺からしても、刀剣男士はとても過酷な存在だと思う。だからこそ、ゆつくり考えるべきなんだ。時間はまだ沢山ある。元氣になつてから考えても遅くはない。色々なひとの意見を聞いてから、後悔のない選択をしてくれ」

タイガは小さく頷き、目を伏せる。よし、と鶯丸も頷き、タイガの頭から手を離す。

「やれやれ、あの女は混乱している状況を更に引っ掻き回してくれる。おかげで俺の仕事は増えるばかりだ」

「……あんた、ハルカ姉ちゃんのこと嫌いなのか？」

「少年、人間は見た目だけじゃない。あの女は人を食わないナリをしているが、こちらは散々煮湯を飲まされて来たんだ。正直さつき怒り狂わなかったのは、俺が細かい事を気にしないタチだったからだな」

「……時々えげつない事するもんなあ、ハルカ姉ちゃん……」

タイガが遠い目をして呟く。何をしているんだと思いつつも、鶯丸は話を切り替えた。

「まあ、今はその事はいい。少年は江雪とよく遊んでるんだつたよな？」

「え、あんた江雪の事知ってるの？」

「ああ、俺の友達だ。……実を言うと、江雪からお前達の楽しい話は聞いていてな。実際に会って話をしてみたかつたんだ。……こんな理由で訪ねる事になるとは思わなかつたが」

「そっか、事件の話だつたよな。でも俺、あんまり詳しい事は知らないよ？」

「それでもいい、知っている事を教えてくれ」

鶯丸がレコーダーを取り出して録音を開始する。タイガは古びた箱を開けるように話を始めた。

滑^レ園の中で年長側にいた子供達でパーティーを開いている最中に、白い長髪の刀剣男士が襲来した事。江雪が子供達を守る為にその刀剣男士と戦闘になり、大きな怪我を負った事。蒼穹の一期達が駆け付けた事により、何とか逃げ延びる算段がついた事。目の前に子供達の身体が基となった刀剣男士二振りが現れ、長谷部と名乗るものに

よってそれを肯定された事。他の部隊に後を任せ、自分達は政府の施設に避難し清澄隊本丸に一時的に世話になるという話になった事。

恐らくその長谷部は、森の中にいる部隊の一員だろう。物吉が時折世話になっているという、例の部隊。やはりあの本丸は、滑_レ園の実態を知っていたのだ。驚きはしない。だって彼等は、元被験者である刀剣男士を支援しているのだから。

「……ソメゴローがかなり荒れてるのが聞こえてたから、心配だ。あいつサクヤとかなり仲が良かったから、あんな事になってきつとかなり落ち込んでる。変な事しなきゃいいけど……」

「サクヤというのは、逃げる寸前に現れた小夜左文字と名乗った奴だな？」

「うん。そのサヨに掴みかかったから、滅茶苦茶ショックだったんじゃないかな。ツクシが止めてその場は落ち着いたけど、今はどうなってるだろう……」

現在、元被験者である二振りは春光隊に保護されている。二振りが政府へ来ないという事は、彼等がかなり参っている証拠。状況が分かっていない二振りを何も知らない本丸に配属させるのは酷だ。そこらは春光隊任せでいいだろうと鶯丸は脳内にメモをする。

「白髪の刀剣男士は、何か言っていたか？」

「ずっと母様母様ーって言ってたよ。あんなデカイナリしてマザコンかよって最初は思ったけど、あいつもサクヤ達と同じ可能性があるんだよな……そう考えると複雑」

「可能性じゃなく、間違いなくそうだろうな……」

襲撃して来た刀剣男士は、特徴からして間違いなく小狐丸だ。そして普通の小狐丸は「母様」などとは口にしない。疑う余地なく、彼は元被験者だろう。

知る限り元被験者二振りが、騒動の首謀者側にいる。これで差別が激しくならなければいいが、と頭を痛めながらも鶯丸はレコーダーを止める。

「協力ありがとう、遅くに悪かったな」

「本当だよ、これから寝ようと思ったのに」

「まあ、これもお前達を平穏な日常に戻す為だと考えてくれ。少しでも早く、安心して過ごせるように努めるからな」

「早くそうなる事を祈るよ、俺の睡眠の為にも」

そう軽口を叩かれて苦笑いしていると、ポケットに入っている端末から電子音がした。タイガに失礼、と一言告げ画面を開く。

画面には、物吉からの連絡通知が映っていた。

『すみません、今日は春光隊でお世話になります。主様とミサキさんにお詫びを伝えて頂けると嬉しいです』

やはり、今日の出来事で物吉の精神は追い詰められていたらしい。酷くなる頭痛に俺はこんなタチじゃないんだがな、と鶯丸は内心でため息を吐いた。

「どうしたの？ 眼精疲労？」

「……大人には気苦労が多いんだ」

「えっあんた、そんな風には全く見えないのに。むしろ迷惑かける側か」と

そう驚くタイガの頭に、鶯丸は軽くチョップをお見舞いしたのだった。

16—9 「雲霄物吉と、春光隊と」

ことり、とローテーブルにホットミルクで満ちたカップが置かれる。それを手に取って、雲霄隊の物吉はカップを口に傾ける。喉の奥に、ほんのりとした甘みを含んだ温かさが流れ落ちていく。飲み切ってからふう、と息を吐いて体の力を抜いた。

心配そうな様子でそれを見ている、目の前に立つ煤色頭の男に物吉は頭を下げた。

「……長谷部さん、ありがとうございます」

「これくらい、どうって事ない。少し落ち着いたか？」

「はい。……相変わらず、心の中が荒れ狂っています」

そうか、と言ったきり、春光隊の長谷部は黙りこくる。物吉も目を伏せて、己の精神状態と関係なく内心で燃え盛る炎を感じ取っていた。

*

春光隊の石切丸に縋る物吉の尋常ならざる様子に、獅子王は詳しい話は本丸で、と物吉を森の奥まで連れて行った。その一面にあった一軒家——春光隊本丸からは、本丸内を照らしているであろう穏やかな光が漏れ出していた。

玄関に入ると、いつもはない小さな靴いくつかと、草履が一組置かれていた。利用者が他にも来ているのだと理解した物吉は、ちらりと石切丸と獅子王を見遣って尋ねる。

「あの……結構利用者がいるみたいですけど、ボクもここにいて大丈夫でしょうか……」

「そんな辛そうな顔して言う台詞じゃねえっての。お前達みたいなのを助ける為に、常日頃から蓄えてるんだからな」

「そうそう、物吉さんはそんな事を気にしなくていいんだよ。……長谷部さん、いるかな？」

草履を脱ぎながら石切丸が呼びかけると、リビングに続くドアからひよこつと長谷部が顔を出した。

「獅子王、石切丸、お帰り。物吉、今は他の利用者も休んでいるから、

そいつらの事は気にしなくていい。……ホットミルクを作るから、その時に話を聞こう」

長谷部は体を引つ込ませて姿をその場から消した。上がってくれ、と既にリビング前のドアに立っている獅子王に告げられて物吉も靴を脱ぐ。

リビングに通されると、石切丸が先に入ってソファアームの上にあるクッションを整え、物吉に座るよう勧めてくる。勧められるままソファアームに座りクッションを抱えると、焦りが少しだけ落ち着いた。

「さて、物吉。詳しい話を聞かせて貰おうか」

「君がそんなに取り乱すなんて滅多にないからね。相当の事があったんだろう」

視線をクッションに向けて、物吉は起こった事を脳内で纏める。長谷部がキツチンからホットミルクの入ったカップを持ってきたのは、考え始めて少し経ってからだだった。

*

「……何というか、聞いた話だけでも令嬢に少し鈍い所があると分かってはいたが……」

「あそこまで強い親愛を自分に向けられていたと、彼女が全く気付いていなかったのがな……」

「いやでも、気を遣って今まで言わなかったのかもしれないし……」

「それでも他の刀とずっと仲良くしたいなんて、嫉妬を煽るような事を言っている時点である人は鈍感ですよお……それにボクがとっさに前に出てなかったら彼、感情のままにとんでもない事を口走りそうでしたし……」

頭を抱える物吉に、三振りも顔を見合わせる。

ミサキがこの「町」に来た事に驚いていた三振りは、その後語られたミサキと彼のやり取りに一時、二の句が継げなくなってしまうた。

そもそも彼が実験に参加する事になったのは、歴史修正主義者の脅威からミサキを守る為。弱い体に鞭を打ってまで彼女を守らんとしていた事は、夢を通じて物吉も把握していた。

そして過酷な実験を乗り越え消えるはずだった魂は、修羅に近い執

念で消滅させなかった。時折物吉の物となった体の制御を奪っては、ミサキに仇なす敵を屠ろうと暴れ尽くしていた。これだけで、彼がミサキに強い愛と執着を抱いているのは一目瞭然。

当然、実験での出来事や物吉が定着した後の事をミサキが知るのには難しいだろう。

だが彼女は、彼と幼い頃から接していたのだ。少しでもその片鱗を感じ取れなかったのだろうか。それとも長きに渡る付き合いの中で、固定概念を覆せなかったのか。

いずれにせよ、ミサキは彼の嫉妬心を湧き立たせ、物吉の精神を苦しめさせる結果となった。彼の荒れ狂う心をどう宥めるか、それが物吉達に課された問題だ。

頭を悩ませている四振りの耳に、階段を下る足音が聞こえてきた。足音の主はリビングの入口から中を覗く。

「皆さん、ちょっといいですか?」

「鯨尾、どうした?」

一斉にリビングの入口に視線が集まる。その中にある物吉のきよんとんとした瞳を見て、鯨尾は小さく唸りながら問い掛ける。

「あー物吉、来たばかりで悪いけど二階に来てくれない?」

「え、構いませんけど……どうしたんですか?」

物吉が背筋を伸ばすと、鯨尾は微かに笑って二階を指さした。

「他の利用者——秋田が、物吉の話を聞きたいって。他の被験者の事を知りたいって意思が見えるから、いい傾向だと思ってね。でも物吉も、無理はしないでよ」

*

鯨尾の先導で、物吉達は二階に上がる。奥の方の部屋のドアの前に立った鯨尾は、ノックをして中へと呼びかける。

「秋田、物吉を連れて来たよ。入っていい?」

「……はい」

か細く頼りない声がドア越しに響く。それに物吉は息を呑んだ。

——秋田君って、もう少し元気なイメージがあったけど……

外に出るのが大好きで、あらゆる事に興味を示す明るい短刀。物吉

の本丸の彼も、然程その印象からずれてはいない。

だが、扉の向こうにいるであろう秋田は——涙を堪えて膝を抱えて蹲っているのだろうと、物吉は想像してしまった。

声からは、抱くイメージ通りの明るさなどどこにもない。被験者の受ける待遇による傷を、もろに受けてしまっているのだろう。

あまり傷らしい傷を負っていない自分は、何を話せるだろう。肩を強張らせる物吉に、後ろから獅子王がぼん、と背を叩く。

「そんなに張り詰めるなって。お前だって立派な被験者だ、きっと秋田にも得る物がある。力を抜いて、穏やかにな」

「……はい」

「開けますよー」

がちや、とドアを開き鯨尾が中に入る。室内には利用者である秋田の他、歌仙と薬研が彼の近くに座っていた。

そして、当の秋田は——膝を抱えているのは予想通りだったが、僅かに顔を上げている。その空色の目は物吉をじっと見つめており、思わずぎくりと体をぎこちなく跳ね上がらせてしまう。

獅子王の助言通りあまり緊張し過ぎないように、と力を緩めてから物吉は秋田に微笑んだ。

「秋田君、初めまして。雲霄が一振り、物吉貞宗といいます」

「……蒼穹が一振り、秋田藤四郎です。初めまして」

「ボクの話を知りたいと伺いましたが……近くに座っても？」

「……構いません」

小さな声でそう言ったのを聞いて、物吉は薬研の隣にある座布団の上に座る。入れ替わるように歌仙が立ち上がり「下にいるお小夜達の様子を見てくるよ」と笑んでドアの外に消えていった。

歌仙を見送り、物吉は秋田の方へと向き直る。秋田は相変わらず顔に影を落としている。だが物吉の穏やかな雰囲気に対し安堵したのだろう、大きく息を吐いてからゆっくりと口を開いた。

「……物吉さんは……」

「はー」

「……前を向けるようになるまで、どのくらいかかりましたか？」

淀んだ目が、こちらを捉える。膝を抱える腕が震えている。なるほど、彼も自分達が持つ特性に苦しんで来たのだろう。

完全に前を向けるようになっていなくなっている。物吉だって今も、様々な事に苦しめられているのだから。

「……実を言うと、ボクも完全にこの特性と仲良くなっている訳ではないんですよ。今こうして春光隊にお世話になっているのも、特性に振り回されているからなんです」

「……そうなんですか？」

「はい。影が薄いのもまだ割り切れてないですし、もう一つ……被験者の魂が体の制御を奪う事も多くて。今回も、その魂が荒ぶってしまい苦しくなって、ここに駆け込んだんです」

「荒ぶるって、一体……」

「まあ、話すと長くなるんですけど……聞きますか？」

こくりと頷かれる。物吉はどのように話そうか、と考えながら語り始めた。

夢の中で見た少女と少年の事。それは自分の依代となった少年がとても大切になっている記憶である事。少年は歴史修正主義者の脅威から少女を守る為、人間を刀剣男士にする実験に参加した事。物吉が少年の体に定着しても少年の魂は残って、物吉の意思と関係なく表出する時があつた事。

そして今日、少年は少女と再会した。少年は再会を非常に喜んだ。しかし少女が審神者になり、始めの一振りと末永く仲良くしたいという一言で、嫉妬の炎を燃え上がらせた事――

「……閉じ込められてたんですか、物吉さんの被験者も」

「そうですね。病を患っていて、疎んだ家族が離れに引き離したらしいですよ。他人に感染する病ではなかったと思うのですが……家族の記憶が一切ない以上、彼等の考えは分かりません」

「そう、ですか。でも魂が残る程、その女の子には未練があつたんですね」

「敵が彼女に関わっていると、即座に表に出て屠りにかかるくらいですからね……ボクが気が付いたら凄惨な光景が広がっていた、

なんて事も一度や二度じゃないですし」

物吉は過去を思い出し、少し虚ろな目になった。

始めに滅茶苦茶になった戦場に立っていた時には、自分が正気を失ってしまったのではと思った。周囲で引いている様子だった当時の仲間達は、何があつたか口を割らなかつた。ただその後、仲間達が自分を避けているのを感じ、反省して次に生かそうと物吉は考えていた。

反省だけではどうにもならないと分かったのは、何回か同じ事が起こってからだつた。

戦闘が終わり帰ろうとした途端に意識を失って、気が付けば周囲は血の海。そしてその赤い海の中に、見知った顔があつたのを見て——自分が悪霊に憑かれたのではと戦慄した。

仲間を斬るなど、普段の自分ならあり得ない。ならば、目の前にある現実は何なのか。

ふと振り返ると、仲間達は化け物を見るような目で自分を捉えていた。そこで、何となしに物吉は察した。——もう、この本丸にはいられないと。

一時預かりとなった政府で絶望する物吉に、手を差し伸べたのは春光隊だった。彼等は支援活動を始めたばかりで、物吉をはじめとした共通点のある刀剣男士に「悩み事はないか」と尋ねて回っていた所だった。

最初こそ不審に思っていた物吉はやんわりと断っていたのだが、ある日現れた長谷部に相談をされて（今思えば、物吉の特質に目を向けさせる為の行動だったのだろう）気が付いた。——自分の中に、もう一つ魂があるという事に。

始めは混乱した。悪霊に憑かれているのだと断じてしまい、何とかしてくれと春光隊にみつともなく縋つてしまった事もあったのだ。春光隊の面々はそんな物吉をいたずらに否定せず、一通り話を聞いてから少しづつ物吉の状態を調べ始めた。そして少しづつ結果を伝え、物吉はそういう現実なのだ和理解が及ぶようになった。

その後、物吉は政府直属の部隊である雲霄隊に引き取られた。ある程度自分の特性を理解していたが、完全ではなかった物吉の状態を追加で教えたのは雲霄隊だ。そしてもう一つの魂の事を見つめ直して、物吉は魂が暴れる条件を特定した。

ならばと審神者によつて配属されたのが、経験豊かなものが揃う第一部隊。彼等は物吉が暴れた時も適切に対処し、変わっている自分を「敵を察知出来る奴」と言つて受け入れてくれた。もちろん心の中では思う所もあるのだろうが、変な目で見られないだけありがたいかつた。

今の本丸も刃生も、物吉は気に入っている。だからこそ、もう一つの魂とは適切な距離で接していきたかつた。心が擦り減らされた状態で、まともに向き合う事は出来ない。春光隊で、答えを見つけられたいいが——

「……僕も、閉じ込められてたんです。真つ暗な部屋の中に」

小さく震える声によつて、現実を引き戻される。はつとして秋田へと顔を向けると、彼は目を潤ませて俯いていた。秋田の背を、薬研が

優しく撫でている。

「僕は刀剣男士になるまで、誰とも話さず過ごして来ました。外から声がする事もなく、一日に三回食事が運ばれて来る時だけが楽しみでした。気が狂っていてもおかしくないのに、僕は空っぽだったから僕のままだった。誰かがいるのは分かっているのに、誰も来ない事が痛かった」

秋田の指が腕に埋まり、声の震え方も尋常ではなくなってくる。悲哀を想起させる、耳を塞ぎたくなる声。それでも部屋の面々は真剣な顔で話を聞いていて、物吉も耳を塞ぐつもりなどなかった。

「でも、何にでもなれる……空っぽの僕じゃなくなるって言われて、刀剣男士になったけど……結局、僕は空っぽで、誰にも見てもらえなくて……！ 寂しさの名前を知った、悲しみの痛さを知った、憎しみの苦しさを知った！ でも……感情を知って生きるのがこんなに痛いなら、あの部屋にいた方がマシだったんだ!!」

秋田の目から、涙が次々と溢れ出す。心痛を叫ぶ声は悲鳴に近く、膝を抱える指先も白みがかっている。

秋田の過去を、詳しく知っている訳ではない。けれど刀剣男士になるまで、感情を正しく理解する事すら出来なかった程の孤独に、彼の境遇が自分よりも酷いと悟った。

物吉は何となく、封印が解けて外に出た怪物が会おう人々に罵倒される様を思い描いた。多分、秋田が過ごした日々のイメージとしては大きく外れていないだろう。

だが本人ですら、己の詳しい事情は把握していなさそうなのだ。彼があらゆる物から隔離され、本当の「独りぼっち」であったのを察する事が出来てしまう。自分が孤独である事を痛みと共に理解してしまった、その衝撃の大きさはいか程か。

肩を震わせてしゃくり上げる秋田は、掠れた声で物吉に問う。

「教えて下さい……生きるのは、痛みしかない物なんですか？ 痛い事から逃げたいって思うのは、いけない事なんですか？ そう考えてしまうなら……僕が生きている事は、間違いなんですか？」

秋田は涙でぐしゃぐしゃになった顔を物吉に向ける。心が軋む痛

みをありありと示すその表情は、物吉に慎重な対応をしなければならぬと判断させるのに充分だった。そうして、物吉は考えを巡らせる。

物吉は以前、後藤藤四郎と立ち話をした事がある。その最中、気分を害したかと尋ねる物吉に、後藤は呆れたような声でこう言ったのだ。

——別に。ただ、人間って勝手だよなって思っただけ。

確か、刀の顕現に纏わる話の中で出た言葉のはずだ。どうして後藤がそのような発言をしたのか、その経緯までは覚えていないが。

ともかく人間に呆れる後藤に、物吉はこう返した。

——それでいいんですよ。勝手じゃないと、人間はすぐに死にます。

そう、人間は勝手にいいのだ。普通の人間というのは、あまりにも他人の顔色を窺い過ぎる。そうして心を碎き、粉々になるまで自分を追いつめて、結果自壊する羽目になる。

人との繋がりには他人への配慮が必要な時があると、理解してはいるが。もっと自分本位でいいと、物吉は思う。自分がしたい事を抑え込まず、嫌だという時は嫌だと突っぱね、他人にあまり同調し過ぎない。そういうのが大事だと、物吉は考えていた。

普通の物吉貞宗なら、考えるのはそこまでだろう。だが、自分は元被験者だ。

先程の後藤への返しを、ひとりになってから物吉は見つめ直した。さて、自分はどうかだろうか。

自分の中には、もう一つ魂がある。時が来ると体の制御を奪い、物吉の意思とは関係なしに暴れるちよつと困った彼。元はといえば、物吉の体は彼の物だ。だが同意したはずなのに、彼に体の制御を取られるのを物吉は憂っていた。

頭を悩ませていた物吉に、一筋の光を差し込んだのは鶯丸の言葉だった。

——積極的に相手を知ろうとしてみる。何かが変わるかもしれないぞ。

物吉はそれをきつかけに、積極的にカウンセリングを受けるようになった。当たったのがたまたま合うタイプのカウンセラーだったようで、物吉も彼も、そのカウンセラーには自分の心境を打ち明けられていた。

そして物吉はその内、彼を俯瞰する事がだんだんと出来るようになった。そうして彼を見て思ったのは、やはり人間は勝手じゃないと生き延びられないという自論の強化だ。

彼はミサキを守るという強固な意志によって、魂を掻き消されずに済んだ。その執念によつて魂を留まらせた彼は、時に物吉の意識を退け敵を過剰なまでに打ちのめした。それに困らされる事もあったが——その強烈な魂は、物吉に身勝手な人間の強さを改めて思い知らせたのだ。

身勝手といえれば聞こえが悪いが、それを言い換えれば「信念を貫く事」。それが悪い事だと、物吉は思わない。一度決めた事を貫き通す、それは人間が持つ強みだと改めて思えた。

「……ボクはまだ、堂々と言える答えを持ち合わせていません。ですからこれは、ボクだけの意見となります」

……だが、以上の事は物吉独自の考えだ。被験者の魂を残し、それを俯瞰出来た刀剣男士側の意見だ。

目の前で苦しむ秋田が、被験者寄りか刀剣男士寄りかは判断が難しい。だからこそ、答えは慎重に考えなければならなかった。

「ボクはこうして秋田君の前に立つまでに、様々な痛みを感じてきました。何せ一つの体に魂が二つ入っている訳ですからね、それなりの苦労はしました。ですが、今の主様や本丸の皆さん、春光隊の方々と出会えた事はボクにとつて『良かった事』です。安心出来る場所へ落ち着けて、考える余裕も生まれました。そうして考えて考えて至った結論は『ボク達のもつと自分の感情を訴えていい』という事でした」

秋田がしゃくり上げる声を抑えて物吉の目を見る。物吉は優しく微笑んだまま秋田の言葉を反芻し、話を続ける。

「秋田君は、今とても心が痛くて逃げたいと思っっているんですよ？ なら、その心に従っていいとボクは思います。逃げるのはみつとも

ないと思うかもしれませんが、引き際や逃げ時を見誤る方がよくないです。ボク達は戦うという使命がありますが、それ以外の事ならば自分の心を叫んでいいと思いますよ。心の傷を無理に抑え込むのは、生き延びる事にとって為になりません。だって人間というのは、勝手じやないとすぐに死んでしまいますから」

春光隊の五振りは、黙って物吉の語りを聞いている。視線が集まっている事に物吉はこそばゆいような気持ちになりながらも、にっこりと秋田に笑いかけて見せた。

「死なない為に、人間は環境を整えようとするんです。それこそ自分が勝手に、他人を踏み躪ったりもするでしょう。心と体を得たボク達もきつと同じです。秋田君が逃げたいと思っているのは、死なない為の防御反応でしょうね。いいんですよ、逃げたつて。それは死なない為に必要な行動です。逃げた先であつたかい気持ちになるような場所があるかもしれませんし、例え見つからなくても逃げている間に状況を切り開く力が戻っているかもしれません。それと、人の生死に貴賤はありません。秋田君が生きていちゃいけないという事だけは、否定させて頂きますね」

語り切つて、一息つく。秋田は目を擦りながら小さく頷いた——「ありがとうございます」というか細い、けれど少し穏やかになった声音の一言を添えて。

これだけで秋田の心を修復出来るとは思わなかったが、少しでも楽になれたのなら上々だ。そして彼にも、こちらの考えが届けばいいのだが。

それからふと、疑問に思つた事を口にした。

「そういうえば、秋田君はどういう経緯で春光隊に？」

「あー……秋田、こういう刀の常なんだけど、本丸の誰にも気付かれなくて。我慢に我慢を重ねた結果、限界に達してここに来たんだよ」

「二期一振が微塵も気になかなかつたくらいだからな。長兄を慕う粟田口派短刀としては、相当に辛かつたんだろう。全く忌々しい」

「長谷部、抑えろ抑えろ」

鯨尾が事情を説明すると、長谷部が怒りに燃えた口ぶりで吐き捨て

る。薬研がそんな見えぬ一期を威嚇している長谷部を宥めていた。

なるほどと物吉が頷き、直後にいい事を思いついたと言わんばかりにぴんと人差し指を立て言い放った。

「一期さんに恨みがあるなら、言っちゃえばいいんですよ。『一期さんの馬鹿野郎！ おたんこなす！ ピーマン！』みたいにな！」

「……罵倒の語彙が貧弱だ……」

「育ちの良さと性格がここで出たね……」

「いやいや、もつと言っていいだろう。童貞野郎とか、中折れとか、イン——」

「長谷部さんそんな言葉どこで覚えたんだい!？」

「誰だ長谷部に変な言葉教えたのは!!」

長谷部の罵倒語彙に纏わる方向に話はシフトし、部屋の中は途端に騒がしくなる。おろおろとしている長谷部に知識の入手先を問い詰める四振り。秋田はぼかんとした様子でその騒々しい光景を見ていた。

そんな中で春光隊の面々を宥めながら、物吉の耳はある音を捉えていた。

——この部屋から遠ざかる、とても軽い足音を。

16—11 「蒼穹一期の、聴取」

「……主は悪人ではないんだ……ただ少し短気で、やけに明るい所があるだけで……」

「うむ、蒼穹殿はいい人間だ」

「ただ！ 俺をすぐに城下町の居酒屋に誘うのをどうにかして欲しいんだ！ 俺が他人の視線を苦手としているのを知っているだろうに！ 何かいい事があるとすぐ城下町で酒を飲もうと言う！ 酒を飲むなど、本丸でも出来るだろう!!」

「……まんば、酔ってるのか?」

「酔ってないっ!」

「語り口が酔っ払いのそれなのですが……」

酒瓶を抱え、顔を赤らめてくたを巻く山姥切。雲霄隊の三日月はにこにことしたまま表情を変えない。恐る恐る審神者が問えば、きつと睨んで山姥切は叫んだ。

どうしてこうなった、と蒼穹隊の一期は眉間に手を当てていた。

*

山姥切が緊張でハイになった直後まで、時は遡る。

審神者がすんません遅くなって、と頭を下げながら客間に入る。そこで審神者が見たのは、目から光を失って高笑いしながら茶をがぶがぶ飲んでいる山姥切と彼を落ち着かせようとする一期、そして笑顔でそれを見つめる雲霄隊の三日月だった。

「……えーと、こりや一体どういった状況で……」

「主！ 主も山姥切殿を止めて下さい、緊張が行き過ぎて躁状態になってしまっ……!」

「ふはははは俺だつて国広の第一の傑作なんだぐぼぼぼぼ」

「え、何が……おいおい戻す寸前じゃねえか！ まんばちよつと下がれ、落ち着いたらまたここに来い!」

強引に山姥切を客間の外へと出し、審神者は障子を閉める。ふらついているのか、あちこちにぶつかる音を立てて山姥切は遠ざかっていく。

途端に静けさで満ちる客間。審神者は三日月の対面に座り、頭を掻きながら三日月を見据え問いかける。

「……あー、さつきも言いましたけど、俺は遠回しな事が苦手な性質で。礼を欠くかもしれないませんが、ちよいと聞きたい事が」

「うむ、構わんぞ」

「……本当、何の用でここに？ 俺はうちの刀は世界一、とか思ってますけど。ぶっちゃけるとうちの本丸、あまり特筆する事がないはずなんですけど……」

「ああ、それは先程そちらの一期にも少し話した。まあ要は、昨日起こった滑^レ園での事件、その詳細を聞きたかったのだ」

一瞬三日月が一期へと目を遣る。それに領いた一期は、改めて三日月から聞いた詳細を説明し始めた。

「事件の被害者である子供達からは、要領を得た証言が取れなかったらしいです。政府側でも人手が足りず、三日月殿が動く事になったらいいですよ。それに三日月殿が動く事で、事件の首謀者を釣り出せないか、ともお考えになつていそうです。……主から秋田に纏わる話も聞いた、と伺っていますけど……」

「……すまん、一期。下手に隠すと、一期にまで疑いの目が行きそうだなあ……」

深々と頭を下げる審神者。己の頭がよくないと理解している彼は、それでも自分の刀剣勇士のプライバシーを守ろうとした。が、政府の刀である三日月に太刀打ち出来るはずもなく、結局ほぼありのままの出来事を話してしまった。

けれど、守ろうとしただけ上等だと一期は思う。審神者は刀剣達を出来る範囲で慮っている、それを改めて理解出来ただけで充分だ。

さて、と三日月が引き締めた声でふたりに告げる。

「改めて、一期の口から話を聞きたく思う。蒼穹殿も構わないな？」
「ええ」

「ああ、はい」

ふたりの了承を得た三日月は、茶で口を潤してからまず事の始まりを尋ねる。

「そもそも、一期はどのようにして事件に巻き込まれたのだ？」

「……清澄隊の江雪殿の事は、ご存知ですか？」

「ああ、知っている。審神者殿が倒れてから、一振りで本丸を維持していると聞いた。あの江雪も、事件に巻き込まれたのだったな」

「はい。かなりの頻度で滑_レ園に顔を出していらつしやるみたいで、子供達とも仲が良かったのです。……昨日彼から『子供達が襲われている、誰か』と連絡が入ったのが、私が滑_レ園に行く事にしたきっかけです。主にははじめ、止められていたのですが……」

「前田藤四郎と骨喰藤四郎の同行と、他にいくつか条件を出して許可しまして。二振りから『友達を思う兄の為に、どうか』と嘆願されちゃあ、俺も折れざるを得ませんでしたよ。友達を思う気持ちは、よく理解していたもんで」

なるほど、と神妙な様子で三日月は湯呑を置く。それにすらも肩を跳ね上げてしまい、一期は深呼吸をして精神の安定を図った。

「それで、滑_レ園に向かったのだな。到着した時は、どんな状況だった？」

「……園から火の手が上がっていて、門の外に生き残った子供達が集まっていました。子供達の一人から『白い長髪の刀剣男士によって園の人間が殺された』と聞いた直後に、園内から江雪殿と小狐丸殿が飛び出して来ました」

「その小狐丸が滑_レ園を襲った下手人だな。外見に特徴は？」

「外見には、特に……ですが、繰り返し『母様』と口にしておりまして。それに、夜だというのに動きが衰えていなくて……銃兵を用いていて、前田も苦戦する程の相手でした」

「夜の短刀が苦戦する、銃兵を操る相手……昼の脅威は推して知るべし。捕らえる時は、注意が必要だな」

ぐつと拳を握る。あの小狐丸は、傷を負わずに捕らえられる相手なのだろうか。また、多くの無関係なもの血が流れるのだろうか。

せめてこれ以上子供達に被害が及ぶ事のないように、祈るしかなかった。

「それで、どうやってこちらの援軍が来るまで凌いだのだ？ 前田が

重傷を負ったのなら、さぞ苦戦した事だろう」

「……滑園をよく知る、助っ人が来まして。彼等が相手取っている間に、逃げ延びる事が出来ました」

「なるほど。その助っ人とは、あの部隊か」

目を見開き、三日月を見つめる。春光隊を知っているのか。そう言わんとしているのを察してか、三日月は淡く目を細めた。

「姿は見せなかったが、証言であるの部隊だと判断出来た。それに政府宛に『滑園の小夜左文字と五虎退は、精神が安定するまでこちらで預かる』と連絡があつた。上は勝手な事を、と普段なら考えるだろうが……今回ばかりは助かつただろう。精神が不安定な刀剣男士の対応まで、政府は手が回らないだろうからな」

俺としてもあの部隊に悪感情はないのだが、と三日月は茶を飲みながら言った。肩の力を少し抜いて、一期は拳を解いた。

審神者がちらちらとこちらを見ている。「あの部隊って何だ？」と聞きたがっているのが露骨に分かる。後で話します、と目で返事をし一期は三日月の次なる言葉を待った。

「そういえば、氷雨の鶴丸国永はそなたの友達だったか？」

「えっ、あ、はい。そうですが……」

「……ここだけの話だが、別の研究所でも襲撃があつてな。それに巻き込まれて、我が本丸で事情を聴いたのが氷雨の鶴丸だったのだ。……ああ、鶴丸は無事だったぞ。聴取で滑園での事と、そなたがいた事を耳にしたら目に見えて動揺していた。あの鶴丸は素直だな、うちのにも見習って欲しいくらいだ」

——氷雨隊の鶴丸が、別の事件に巻き込まれていた？

そんな事は聞いていない。けれど昼間の手合わせで、鶴丸は「まだ吐き出した事が纏まっていない」と言っていた。

もしかしたら鶴丸もあの時、一期に話を聞いて欲しかったのかもしれない。けれど内心の整理がついていないから、一期に話さなかったのか。いや——

「……どこまでも未熟ですね、私は」

「どうした、一期」

三日月が俯いた一期に語りかける。審神者も何があった、と心配する様子で一期の顔を覗き込んだ。

——きつと、自分が泣き崩れてしまったから、気を遣って話さなかったのだ。泣いているものに、悩みを打ち明けようとは思わない。自分の事で精一杯で、鶴丸の様子まで気が回らなかった。

氷雨の鶴丸の力になれなかった事に、今更ながら気付く。けれどあの時氷雨の次郎が吐き出すように言わなかったら、きつと自分は苦悩の迷路に迷い込んでいただろう。

それでも、心が弱く身勝手な自分が嫌になる。友達の悩みを一緒に考え、少しでも気分を晴らせるような自分が良かったのに。ああ、秋田の事もそうだ。自分は、どこまで愚かな存在なのだろう。

「……一期、そなたは——」

三日月がそう言いかけた、その時だった。

パアン、と障子が勢いよく開く。三つの視線が素早く音源のある方向へ集まった。

そこに立っていたのは、山姥切。何故か酒瓶を抱えて、ヒック、と言いながらふらふらと客間へと入る。そしてドン、と酒瓶を座卓に置き、どこか据わった目で三日月を睨んだ。

「ふ、ふふふ。俺は逃げなかつたぞ、三日月」

「別に、逃げたという事はないと思うが」

「ちよ、山姥切殿!? 何故こんな時に酒を——」

「うわまんば酒臭え! どんだけ飲んだんだよ!」

困惑する蒼穹隊側のふたりと、首をかしげる程度に収めている三日月。そんな彼等を見据えて、山姥切が叫んだ。

「この! 魔法の水の力で! 俺は、困難に打ち勝って見せる!

……うつ、おええ」

「うわああああ! 山姥切殿、客前でそんな姿を……っ!」

「まんばとりあえず吐くならゴミ箱に吐いてくれ!」

審神者はゴミ箱を山姥切に差し出し、彼が嘔吐くのをはらはらとした目で見ていた。

そして三日月に醜態を晒さないように、山姥切を洗面所に向かわせ

ようとしたが――

「ま、まんば？ 落ち着いたなら、ゴミ袋替えて新しいの持ってきてくれねえかな……」

「主、言っただろう。俺は困難に打ち勝つ為に、ここに来たんだ」

「いやだから、困難に打ち勝つ為に落ち着いて――」

「何だ、俺が写しだと侮っているのか!？」

「侮ってねえ侮ってねえ!」

ぐだぐだになっていくその場の雰囲気。そのまま山姥切は三日月に絡んだり、一期に酒を飲むように勧めたりして――

時間は、現在に戻る。

16—12 「蒼穹一期の、大切な中核」

要は、三日月への本能的な恐怖を薄れさせる為に、山姥切は酒を飲んだのだろう。そして気が大きくなったへべれけ状態で客間に突入り、湿っていた空気を吹き飛ばした。

結果、聴取は一時中断。今はまだにこにこしている三日月にくだを巻き続ける山姥切をどうしようかと、一期と審神者は悩む事となった。

——恐れる気持ちは分かりますけど、分かりますけど……！

頭を抱える一期の心情を知ってか知らずか、山姥切は三日月に絡み酒を続ける。

「それと氷雨の審神者と会ったらすぐ喧嘩になるのも何とかして欲しい……何で冷静な対応が出来ないんだ、そもそも何で氷雨の審神者は喧嘩を売るんだ……」

「俺は悪くねえ、全部氷雨の野郎が悪い」

「そこではざいてる瞬間湯沸かし器も悪いんだぞ！ 嫌味の一つや二つ受け流せばいい物を！ おかげで俺は過激派からはせつつかれ、穏健派からはあの二人を止めると丸投げされるんだ！」

「いや知るかよ氷雨の野郎が喧嘩売ってこなけりゃいい話だ！」

氷雨隊の審神者の話が出た事で、審神者の機嫌も急降下していく。うだうだとつまらない喧嘩をするなど三日月越しに文句を言う山姥切と、嫌悪している相手の話題によって酒を飲んでいる訳でもないのに顔を赤くしていく審神者。こうなってしまうのは、もう審神者に山姥切をどうにかした上で三日月を接待させるのは難しいだろう。

はあ、と重たい息を吐き出し、一期は三日月の湯呑に茶を注ぐ。

「……すみません、聴取どころではなくなってしまうでしたね」

「なに、賑やかなのは嫌いではない。蒼穹殿はいつも氷雨殿が関わるような感じなのか？」

「……そうですね、お恥ずかしながら」

蒼穹隊の審神者と氷雨隊の審神者の悪縁は、出会った時から既に始まっていた。

当時新入りだった蒼穹隊の審神者に、氷雨隊の審神者が新入りへの洗礼とばかりに嫌味を投げかけた。最初、蒼穹隊の審神者は耐えていたらしいが――

――いかにも、女人に礼を欠きそうな性格だな。一体何人の女に嫌悪されてきたのだか。

そう言われた途端――蒼穹隊の審神者は、氷雨隊の審神者に右ストレートをぶっ込んだのだ。

そのような暴挙に及んだ理由は、蒼穹隊の審神者が審神者になった所以による。

蒼穹隊の審神者になる前、彼は自分の恋人にセクハラを行った男の腹に一発入れたそうさ。その男は政府の者――審神者だったと彼は後に知った――だと聞いて彼は慌てていたらしい。だがその男は首を切られる寸前の窓際族で、被害を訴えたがセクハラの件を持ち出されて辞職させられた。彼はその事件をきっかけに審神者の適性がある事が発覚し、政府からの監視を兼ねて審神者になったらしい。

ここで終わりなら、蒼穹隊の審神者は氷雨隊の審神者に右ストレートを入れる事はなかっただろう。問題はその後だ。

元々揉め事を起こしやすかった蒼穹隊の審神者は、この件で恋人に見切りをつけられたらしい。「乱暴者は嫌い」と吐き捨てられて振られた、と言っていたのを噂で聞いた事がある。かなり長い間付き合っていた恋人との破局は審神者にとって禁句らしく、一振り目の刀である山姥切ですら、いたずらにこの事に触れると実力行使で黙らせられる。

以上の事から怒り狂った蒼穹隊の審神者は、顔面だけではなく腹に蹴りを入れたり、逆にやり返されたりと氷雨隊の審神者相手に大乱闘を起こしたそうさ。仲裁に入った政府の者から叱られても止まらず、結局は強引に引き離される事で何とか喧嘩を収めた。

それからというものの、氷雨隊の審神者との仲は最悪となり、顔を合わせる度に口喧嘩か乱闘騒ぎに発展する。顕現させる審神者による個体差なのか、互いの刀剣男士も相手の刀に嫌悪を抱くものがある。嫌悪感を示す刀があればその刀は共に喧嘩に参加し、示さない刀

しかない場合は嫌そうな顔で仲裁に入る。一期は後者であり、正直な話見苦しく喧嘩する審神者に半分呆れている所もあつた。

もう半分は——自分も自隊の鶴丸相手にはああなってしまうのか、という不安だ。

あの鶴丸は、人々が紡ぐ繋がりを否定した。それを一期は到底受け入れられそうにない。次は戦う事になるだろうという漠然とした予感、少しずつ大きくなっている。

けれど、見苦しく相手を拒絶したい訳ではないのだ。一期は一期の意思を、鶴丸は鶴丸の意思をぶつけて。そうして、きちんとした決着をつけたかった。

きちんとした決着。それを果たして、手に入れられるだろうか。それがいきなりふつと落ちるような不安を掻き立てる。

結局、まだ腹が決まってないのだろう。ぶつかり合う事は、きつと心に痛みを呼び起こすのだから。

「……一期。先程の話の続きをしようか」

いつの間にか考え込んでいたらしい。はつと顔を上げると、慈しむように微笑む三日月と目が合った。

「そなたは、己とよく向き合っているな。そんなに苦しそうに未熟さを嘆くなど、己の弱さを見つめなければ出来ない。ただ、少し視野が狭くなっている節がある。弱い所ばかり眺めるのは、強い自分から目を背ける事に他ならない」

す、と虚空へ指を向ける三日月。指差す先をぼんやりと追いかけてながら、一期は三日月の滑らかな語りを聞いていた。

「空に浮かぶ三日月というのは、欠けているからこそ美しいというものもあるだろうし、あの形だからこそ美しいというものもあるだろう。俺は、どちらも良し悪しはないと考えている。どちら側にも、賛成するものとそうでないものがある。そなたの事も同じだ。良い所が好きだというものがあれば、悪い所が好ましいというものがあるだろう。だが結局、自分の事を決めるのは自分にしか出来ない」

その指差す先に、優しく照らす三日月を幻視した。幻の月を見ながら、頭の中ではくるくると自分への嫌悪や不安、それを否定したい

自分が響き渡っている。どうして、どうしたら、どうやって——止まない疑問は、まだ己を誇れるには程遠い。

再び苦しそうに顔を歪める一期に、三日月はゆったりと言葉を染み渡らせる。

「意見を聞くのもいい。だが他のものは当然として、己の弱さに振り回され過ぎるな。そなたは、そなたの信ずる道を進むといい。それでも迷うならば、魔法の言葉を授けよう」

「魔法の、言葉？」

うむ、と三日月は頷く。そして、目を一瞬閉じ——

「——そなたの誇れる、己の名前は？」

鋭さに優しさを秘めた視線を、一期に向けた。その眼差しに、一期は息を呑む。

ああ、ああ——忘れていた。自分が自分である証を。自分である限り、決して心を折らせないその誇りを。

「……私は、一期一振。栗田口吉光の手による、唯一の太刀」

自分は、確かに一度燃えた。屈辱を味わう事になった、それでも残る物があった。

そして、再び自分の力を乞われた。願いによって戻ってきた切れ味を、何故忘れてしまったのだろうか。

「藤四郎は、私の、弟達……で……っ」

胸を押さえて、溢れる涙を畳に落とす。拭う事はしなかった、それが歓喜による物だったから。

いち兄と呼ぶ弟が愛おしい。背を預けられる仲間が頼もしい。そして友と語らう時間の、何と楽しい事か。

弟達が贈ってくれた土産を思い出す。戦から帰った後戦法を討論した事を思い出す。初めての城下町の宴会で、友達が歓迎してくれた事を、思い出す。

どれも、決して捨てる事など出来ない。例え折れる事になっても、この思い出を捨てる事を選ばない——選ばない。

そうだ、この喜びを捨てない自分こそが、自分である所以。

否定されてもいい、拒絶されてもいい。だがどんなに嘆願されて

も、例えば弟達からの願いであろうとも、この繋がりを捨てる事だけは拒否する。

それが、蒼穹が一振り、一期一振の核だ。

「迷いは晴れたようだな」

その眼差しは優しいまま、背筋を伸ばした一期へと注がれる。目元を擦って力強く肯定し、一期は三日月へ不敵に笑んだ。

「ええ。私は悪く言えば強欲、良く言えば諦めない性質であるようです。どんなに拒絶されても、私は私の繋がりを決して断たせない。手を伸ばして繋げる手があるなら、いくらでも伸ばして掴みましょう。私は、私だけは。思い出を、決して否定しないと決めました」

「そうか。ならばまずは――」

「はい。秋田に、また会いに行こうと思います。ある方からの話では、あの子は私へ救難信号を送っていたと。ならば、今度こそはそれを逃しません。例えば罵倒されても、私はあの子に筋を通します。そして……」

脳裏に描くは、あの煤色頭の少し幼い彼の姿。振り返りこちらに向ける顔は、今はまだ笑みを浮かべていない。けれど――

「ん？ どうした？」

「……いえ、これは私の秘密です」

「なんだ、気になるな。じじいにも聞かせてくれ」

「ふふ、では叶った時にお話ししましょう」

――そして、あの長谷部に言いに行くのだ。友達になろう、と。

*

「ふん、写しごときには道案内がお似合いってか」

「何、道案内も大切な仕事だ。そう拗ねてくれるな、山姥切」

三日月は審神者に、本丸の案内をして欲しいと頼んだ。審神者は首を傾げながらも了承し、一振り目の刀たる山姥切にその役目を託した。実際には、山姥切に酒気を抜いて来て欲しいという心積りもあったのだろうか。

あそこが厠、あそこが大広間、とまだ呂律が回らない口で案内をすすめる山姥切。にこにこしながらその後について行っていた三日月は、あ

る部屋の前で立ち止まった。

「山姥切、この部屋は何だ」

「ん？ ……ああ、鶴丸の部屋だ。今は具合が悪く伏せっているはずだが……」

ふらふらと三日月の側に寄った山姥切はふと障子を見つめると、ニヤリと顔を歪める。

「……あの澄ました爺さんが、あんたの姿を見たらどうなるか気になるな。開けるか」

「伏せっているなら止めた方がいいのではないか？」

そう言いつつも、三日月は動く気配がない。のんびりとした口だけ出して、酔っ払いの悪ノリを止める気すらないのだろう。

それは「最終兵器」のお茶目心か、それとも――

「たまにはこちらに驚いて貰おう。……鶴丸！」

素早く障子を開いた山姥切。部屋の中が明らかに変わった途端、ちよつとした悪意に満ちた表情が怪訝なそれに変化する。

「……あれ？ いないな。廁か？」

訝しみながらも納得しかけたが、部屋の中を改めて見渡し、次第に顔が強張っていく。

「……いや、それにしても部屋が綺麗過ぎる。布団すら敷いてないって、具合が悪かったはずじゃ……」

「――おい、まんば！ 三日月さん！ いるか!？」

誰かがいた気配が微塵も残されていない部屋に不審が募る。しかしその思考は、審神者の呼び声によって遮られた。

こつちだ、と叫ぶと荒い足音がこちらに近付いてくる。現れた審神者は顔面蒼白で、山姥切の不安を掻き立てるのに充分だった。

「主、どうした？」

「どうした、蒼穹殿」

山姥切は詰め寄るように、三日月は真面目な口調で審神者に尋ねる。

審神者は端的に鶴丸はいるか、と告げた。

「……部屋にはいなかった。他の場所もさらっと見たが、鶴丸の姿は

見かけてない」

「そうか……くそっ！ また、俺は——！」

「蒼穹殿、落ち着いてくれ。何があった？」

山姥切は前に進み出た三日月の顔を見て、固まった。まるで、何か忌々しい事が起きたかのような表情。

一体、何が。混乱する山姥切に、審神者は叫んだ。

「——鶴丸の名前が、システムから消えているんだ！ また誰かに連れ去られたのか!? 何で、俺の所ばかり……っ！」

システムからの消失に驚愕する山姥切は、三日月の横顔をもう見えない。その表情を見れば、三日月が苛立っていると即座に気付いた事だろう。

三日月は舌打ちしそうになりながらも堪えて、口内で小さく呟いた。

——逃げたな、と。

16—13 「空隙の町の、導火線」

——清澄隊本丸

「ソメゴロー、鶴丸さんが練り切り買ってきてくれたよ、一緒に食べよう」

「……」

「ねえ、そろそろ憎まれ口が恋しくなってきたんだけど」

「……」

「……置いておくから、食べてね。折角のお見舞いなんだから」

カタン、と小さい音を立ててから、足音は遠ざかる。完全に足音が聞こえなくなつてから、ソメゴローは障子を開けた。

目の前には、白い皿に乗った黄色い練り切り。手に取つて文机に乗せてから、障子を閉める。

文机の前で、練り切りを口に運ぶ。何だか良くわからない変な物を食べている心地になつて、ソメゴローは途中で手を止める。

——味がしない。

食事を出されても、完全に食べ切る事が出来なくなつた。作つてくれた家族や、江雪に悪いと思つてはいる。けれど——

——どうして小さな願いすら叶えさせてくれないの？ どうして私達なの？ ねえ、ねえ、どうしてよ……っ！

「そっだよ、何で、俺達なんだよ……」

トイレに行った時に聞いたツクシの泣き声が、頭から離れない。どうして、自分達だけこんな目に。そんな恨み言がこびりついている。相棒が、刀剣男士に存在を上書きされた。サクヤの魂は、もう残つていないという。

ソメゴローはもう二度と、サクヤに会えないのだ。

「一緒に世界を旅して回るって、約束したのに」

そう呟くと、涙が文机に落ちる。ソメゴローはそのまま突っ伏して、眠りにつくまで泣き続けた。

——春光隊本丸

二階から駆け下りたと思つたら、玄関にある草履を履き始めた小夜。それを追いかけた歌仙は、息を切らしながら尋ねる。

「お小夜、どこに行くんだい!? まだ体調も万全ではないのに……!」
「……行かなくちゃいけないんだ」

その声音に、歌仙は肩を跳ねさせる。意思のはっきりしている強気なそれは、いつもの小夜ではあり得ない。

もし、長谷部がこの場にいたら言っていた事だろう。

「気負わなくていいって、逃げてもいいって、言わなくちゃいけないんだ。俺は、あいつに」

「——君、まさか……!」

——サクヤにそっくりな調子だ、と。

小夜はドアを開け放ち外へと飛び出す。歌仙の悲痛な制止を振り切つて、小夜は森の外へと目掛けて駆け出した。

——どこかの廃屋

キイ、キイ、と音を立てて椅子を揺らす機嫌の良さそうな影一つ。それを見た桃色の男は、ため息をついて肩を竦めた。

「ねえ、大丈夫なんですか? この調子だと、あの三日月に気付かれそうなんですしょう?」

「そうだな。でもまあ、いいじゃないか」

「いや良くないでしょう。逃げたと分かったら真つ先に狙つて来ますよ、あの三日月」

「ま、そろそろ頃合いだと思つていた所さ。そろそろ俺達も動き出すぞ」

椅子の揺れる勢いそのまま立ち上がり、影は桃色の男の肩を叩く。目を丸くした桃色の男は直後、ニンマリと歪な顔で嗤う。

「そうですか。いよいよ天下をひっくり返せますか。楽しみですねえ」

「目的を果たす前に悪癖を出してくれるなよ。君も重要な戦力なんだから」

「貴方こそ。天下をひっくり返す以外に、何か企みがあるんでしょう」

？」

天を嘲笑うように吐き捨てる桃色の男。影は口に手を当てて、笑いを堪えながら返答した。

「まあな。……さて、天誅を最後に喰らわすのはどちらかな？」

町の端に、導火線がついている。

全てをひっくり返しかねないそれに着火された事を知るものは――
――まだ、少ない。

第十七話 「雨足は遠のかず」

17—1 「訪れたのは」

テレビに砂嵐が映る時特有のノイズじみた雨音が、外から響いてくる。廊下を歩きながらツクシは、その耳障りな音からまだまだ晴天には程遠い事を感じ取った。明日の洗濯物も部屋に干さなければならぬと考え、家族が部屋干しの臭いにブーイングが上がるかもと一瞬想像した。しかし今の皆に、そんな風に騒ぐ元気はないと思ひ至り、またツクシの思考が沈む。自分は無力だと、不甲斐なく感じるのは何度目だろうか。

それでも、眠くなる時は眠くなる。足取り重くその隣を歩く江雪に、欠伸を小さく漏らしながらツクシは尋ねる。

「江雪さん。私そろそろ寝ようと思うんだけど、大丈夫かな」

「もう亥三つ……十時を回っていますからね。ツクシさんくらいの年齢なら眠らないと体に悪いです」

「手伝う事がないかって意味で聞いたのに」

「充分ツクシさんは働いてくれてますよ。ただ、ここで体を壊しては元も子ありません。眠れる時は眠って下さい、ツクシさんには明日も働いてもらわなくてはならぬから」

ツクシは微かに頬を膨らませ、わざとらしく拗ねて見せた。こうしていつも通りに近い態度を取ると、少しだけ自分の感情を棚上げ出来て楽だ。内心はぐちゃぐちゃのままだが、それから少し目を逸らせれば、この優しいひとに八つ当たりをしないで済む。

江雪は優しいひとだと、ツクシは思う。襲撃された時はずっとツクシ達を守っていたし、その後行く場所のなくなったツクシ達を一時的にでも引き取ると名乗り出た。そして何よりツクシの体を気にかけて、明日も苦勞をかけると申し訳なさそうにしている。

本当に、彼は優しいひとだ。ツクシの心中に渦巻く複雑な感情も見抜いているだろうに、こうして穏やかに語り掛けている。八つ当たりしそうな衝動を、そしてそうしたくないという見栄を、多分彼は知っ

た上でツクシの思うままにしてくれる。

江雪は刀剣男士だ。——滑園を襲撃したあの白い男と、同じ。だが人間にもいい人悪い人がいるように、刀剣男士も一概に悪だとは言えない。あの白い男と同一視するのは、江雪への侮辱だ。

けれど、家族が刀剣男士になってしまったのを、まだツクシは上手く飲み込めていない。

自分達は、最初から戦争の為に育てられていたのだ。それを確信した時、強いショックと厳しい勉強の理由に納得した自分とが、せめぎ合うように押し寄せてきた。生き残った家族も同じだったのだろう、ここに着いてからは皆一様に塞ぎ込んでしまっている。

江雪は、何も知らない様子だった。あのふたりを見た時に、愕然とした表情をしていたのだから。そもそも自分達の境遇に何ら関わらないひとで、そして関係のない自分達の為に戦ってくれたひとに当たるのはお門違いだ。それはツクシも理解している。

今もこうして自分達を気にかけているひとに、仇を返してしまえば必ず後悔するだろう。だからツクシはぎりぎりでも立っていられる為の見栄を張って、江雪に相對するのだ。

涙を全て鶴丸に預けたつもりで、ツクシは悲しみに沈まないようにしようと決めた。頼りになるひとは少ないのだ、自分だけでもしっかりとしなければ家族を守れない。少しずつ膨らむ決意を胸に、ツクシは臍を曲げた様子をわざと表に出して江雪に不満を述べた。

「もー、江雪さん私の事侮ってるでしょー！ 私だってまだまだ働けるのにー！」

「気持ち嬉しいですが、しっかりと休養をとるのも大事ですよ。私達も眠らなければ万全の態勢になれませんから、ツクシさんのような人なら尚更です」

「……じゃあ江雪さんこの後寝る？」

「そうですね、皆さんの様子を見たら」

江雪はツクシの頭に手を乗せ優しく撫でる。その撫で方がどこか、もう二度と会えない父親を想起させて目の前が滲む。

もう泣かないようにしたいのになあ、とツクシは寂寥感に苛まれるな

がらも笑って江雪を見上げた。

「じゃあ私も皆の様子見る！ それくらいならいいでしょ？」

「……まあ、そう時間は取らないですし、いいですかね。ただし、見回りが済んだら素直に寢床について下さいね」

「勿論だよ、やった！」

明るく、嬉しそうに。そう心がけて笑顔を浮かべれば、江雪は苦笑しながらまたツクシの頭を撫でる。やはりそれは父親のやり方によく似ていて、ツクシは懐かしさが強く込み上げるのを感じた。

もう会えない人に心の中でまた後でと手を振り、ツクシは江雪の手を引いて歩き出す。

「まず誰の所から行く？ シオンの所？ それともヒカルの所？」

「そうですね、まずはここから近いシオンさんの所へ行きましょうか。彼女も、食事を残していましたよね」

「そうだね……ツバキの事、かなりシヨックだったんだと思う。戻さないだけ、まだマシじゃないかな」

「せめて、彼女の心に早く平穏が訪れるといいのですが……」

「カウンセリングも勧められてたんだっけな、シオン。でも本人が嫌なら無理に勧めるのは——」

ツクシがそう言いかけた時だった。彼女の視界に、黒い影が映り込んだのだ。ひっ、と悲鳴を上げて江雪の手を握り締める。江雪もそれで気付いたのか、ツクシの視線の先を追って固まった。

それは、息を大きく切らして立っていた。降り頻る雨の中、結ばれている逆立った髪は少し萎びている。僧侶の格好をしているのどこか山賊じみているその姿は、家族の一人であるサクヤが変貌した、小夜左文字という刀剣勇士であると記憶が告げている。

ソメゴローと楽しげに遊んでいた姿を思い起こし、即座に首を振る。目の前の彼は、関係のないひとなのだ。ツクシと同じ思考経路を辿ったのだろう、江雪は声を震わせながらも小夜に話しかける。

「お、小夜……貴方は、どこの所属ですか？ 流星に兄弟とはいえ、無断で本丸に入ってきて来るのは頂けませんね」

「えっと、何か用があるの？ でももう遅いから、また明日に——」

「…………だ」

ツクシも恐る恐る小夜に話しかけ、そして微かに聞こえた声の調子に耳を疑い、体を跳ねさせる。

——どうして？ だって、長谷部さんはああ言ってたのに……

ツクシの混乱する思考を一喝するように、小夜は叫んだ。——そしてその一言に、江雪も目を見開く事となった。

「ソ・メ・ゴ・ロ・ーはどこにいるんだ、ツクシ、江雪さん!!」

17-2 「公安局にて1」

月明かりの差し込む、酷く張り詰めた空気で満ちた部屋。窓の近くにあるデスクを挟んで、対峙する男女ふたりがいる。デスクの上に置かれている小さなレコーダーは、ふたりの視線を一身に受けていた。しばらくしてプツンと短く音を立ってレコーダーは、それまで流していた音を止めて部屋の中を静寂で満たした。

「……子供達から聴取出来た情報は以上だ」

「ご苦労だった。こちらで調べた事と合わせて、奴等の身元はかなり絞り込めた。改めて感謝する、雲霄隊の鶯丸」

「本当はこんな穏やかじゃない事抜きで、あの少年と出会いたかったのだが」

ドアの前に立つ雲霄の鶯丸はそうぼやく。デスク越しに彼の正面に立つ女性はすまないな、と申し訳なきように苦笑した。

*

現在鶯丸は、時空犯罪特別対策局大住区域支部の施設内——審神者達から政府中枢と呼ばれている——にいた。事情聴取したタイガの証言を纏めて報告する為だ。

「大住区域公安局の長に話がある」と受付で告げれば、すぐに面会許可が下りた。公安局長室前に案内されてドアをノックし、入室許可を得て中に入る。

中に立っていたのは、ショートヘアの体格がいい女性だった。表情も何かに怒っているかのように険しく、とっつきにくい風貌だ。鶯丸はそんな彼女に臆さず、真面目な口調で切り出した。

「公安局長。滑園園の子供達から一通り事情が聞けた、早速だが報告して構わないか？」

「ああ、頼む」

厳かに頷かれた鶯丸はレコーダーを取り出し、再生を開始する。流れ始めたのは明るさの欠片もない、澱んだ口調の幼い声。時には泣き声も混じるその証言達を、公安局長は表情を一切崩さずに聞いていた。

『ツバキ、ツバキ……うわあああん』

『何で、何で先生や皆が殺されなくちゃならなかったの？』

『帰りたいよお……』

『……これ以上、話したくない』

『肝心な時に助けてくれなかつたくせに、今更何なんだよ！』

悲痛な言葉が、レコーダーから響く。鶯丸は顔を悲しそうに歪めた。

このレコーダーは、元々聴取を担当していた刀剣男士から引き継いだ物だ。その刀剣男士は聴取をしている内に精神が参ってしまったらしく、後任として鶯丸が選ばれた。

鶯丸が聴取を行ったのはタイガだけだ。当然、他の子供達の言葉は初めて耳にしたのだが――

――なるほど、これは堪えるな……

傷ついた子供達の悲鳴は、聞き続けるこちらにも痛みを与える。前任はまともにその言葉達を食らってしまったのかもしれない。もしかしたら慣れていなかっただのかもしれない、と考えながら、鶯丸は次々と証言を再生していく。最後に流れたのは、タイガの証言だった。

タイガは子供達の中で一二を競う位に穏やかな聴取を行えた。傷を隠しているのかもしれないが、それでもまともな証言が取れただけいい方だ。事件を追うものとしては、という但し書きが付くが。

『ずっと母様母様ーって言ってたよ。あんなデカイナリしてマザコンかよって最初は思ったけど、あいつもサクヤ達と同じ可能性があるんだよな……そう考えると複雑』

流れるタイガの言葉に、公安局長が小さく指を跳ねさせた。鶯丸はそれに何も言わず、ただ黙って証言を流し続ける。タイガとの気の抜ける会話は切ってしまったかったが、公安局長は顔色一つ変えずに聞くだけだった。

レコーダーが再生を終了し、部屋に沈黙が降りる。これで報告は完了だ。鶯丸は公安局長から労いの言葉を受け、頭を下げながらも微かに不満を漏らす。苦笑いながら謝る公安局長は、鶯丸に分厚い封筒を差し出した。

「これは？」

「僅かだが、私からの礼だ。本来なら公安局でやらなくてはならない仕事を任せ、苦勞をかけた詫びも含んでいる。それに本来なら、貴方は穏やかな仕事を望むはずだろう？ 性に合わない仕事をさせた分を上乗せしているから、これで好きな物を買ってくれ」

確かに穏やかでない仕事だったが、割と穩便に事は済んだ。けれど自分はこんな仕事をする役目は仰せつかっていない。そんな部外者に仕事を任せるのは、彼女にとって申し訳ないと感じさせるのに充分だったのだろう。

鶯丸は封筒をありがたく受け取り、懐に収める。その時ハルカのことを報告せねばと思い至り、口を開こうとした。

小さなノックが響いたのは、ちょうどその時だった。

「誰だ？」

「あ、あるじさま、五虎退です。戻りました」

「入れ」

カチャリという慎ましい音と共に、五虎退が入って来る。部屋に足を踏み入れた後に鶯丸の存在に気付いたのか、慌てて頭を下げていた。鶯丸は退出しようとドアに向かいかける。

「雲霄の鶯丸。五虎退の任務は貴方にも伝えなくてはならない事だ、しばらく残っていてくれ」

公安局長の一言で、鶯丸はドアノブから手を離す。体の向きを変え五虎退の隣に立ち、再び公安局長に向かい直る。

ちらちらと視線をうろつかせる五虎退。公安局長は鋭い声で、彼に命じた。

「五虎退。報告を」

「は、はい。結論から言つて、対象——氷雨隊の堀川国広は黒と見て間違いないです」

——そうだ、三日月が周囲を洗った方がいいと前に言っていたな。

そう思い至り、ここに残つて欲しいと言われた理由を悟る。これは「最終兵器」を保持している、自分の隊への情報共有だ。

「任務の最中に被験者の成れの果て——規格外刀劍男士の残骸を集

め、夜中に度々森の中に入っていて、何より本丸への愛着が欠片もありませんでした。それに、えっと、その……」

「どうした、五虎退。汗が凄いが」

「その前に——あるじさま、ごめんなさい！ 最後の最後で氷雨隊のにつきり青江に見つかりました！」

五虎退が勢いよく頭を下げ、ぷるぷると震え出す。背後の虎も、心なしか居心地悪そうにしていた。

公安局長は眼光を鋭くし、険しい口調で問い詰める。

「青江に見つかった？ まさかそいつも、反逆を企てていると——」

「い、いえ、その逆です！ 堀川国広の黒判定も、ほぼにつきり青江の証言から得た物です！」

「どういう事だ？」

険しきの残る口調で公安局長に問われた五虎退は、頭をゆっくりと上げて語り始めた。

「……氷雨隊の審神者も、独自に調査を進めていたみたいです。につきり青江の『完全な証拠を掴めていない』という発言から、どこからか反逆者の情報を仕入れ、反逆者の特定を急いでいたと思われます。氷雨隊の審神者が反逆者の存在に怒り狂っているとも言っています。反逆者の引き渡しや、もし自分達が反逆者を擁護していると判断されたら取り潰しも厭わないと……反逆者の特定もほぼ完了していました」

「だが、口先だけなら何とでも言える。それだけで氷雨隊を信じるには足りないな」

「で、ですよね……」

「——その青江に連絡を取りたい。その様子だと五虎退、青江と連絡先を交換しているだろう？ 記録した物を出せ」

「は、はい！」

わたわたと五虎退がポケットを漁り、一枚のメモを公安局長に差し出す。受け取った公安局長は端末に連絡先を入力し「通話開始」のボタンを押した。

コール音が三回、それだけの時間で音は切り替わった。

『——もしもし、誰かな?』

「公安局の加納^{カノウ}だ。うちの五虎退の件で話がある」

『五虎退君の主か……ふふ、待っていたよ』

端末越しの妖しい声が、こちらにも聞こえて来る。恐らく公安局長が連絡を入れる予感がしていたのだろう、青江の声音は平常そのものだ。

公安局長は強い響きをもって青江に告げる。

「この通話は録音してある。貴方の一言が本丸の命運を分けると思え」

『望む所だよ。主に報告に行く寸前だったんだ、タイミングが良かったね』

「いい返事だ。……調査は貴方だけがしているのか?」

そうだよ、と向こうから幾分か真面目な口調で青江が質問を肯定した。

『大っぴらに動いていると、相手に悟られる可能性があるからね。反逆者の事を知っているのは、刀剣勇士の中では僕だけのはずだ。……極秘任務を告げられた時は驚いたよ、あんなに怒り狂っている主は早々に見ないからね』

「確かに貴方の審神者は、規律に厳しい事で有名だが……そもそも、情報はどこから仕入れた?」

『あれは狂信者に近いんじゃない? 反逆者の事は上官から嫌味を言われて初めて知ったみたいで、今すぐにでも反逆者を排除したいってかなり苛立っていたよ。多分僕が呼び出されたの、嫌味を言われた直後じゃないかな?』

「……誰だ、背信容疑のある審神者に情報を流した馬鹿者は……」

公安局長が唸りながら頭を抱える。鶯丸も氷雨隊審神者に反逆者の存在を知らせた人間に対して「口が軽過ぎるだろう」と呆れ返っていた。さりげなく青江がその上官の名を口にしていたので、恐らくこの後何らかの処分が下るはずだ。それでも、背信容疑のある本丸に情報を与えてしまったという事実は消せないが。

気を取り直して、公安局長は青江に問う。

「貴方は堀川国広を反逆者と看做したらしいな。その証拠は？」

『まずは他本丸の数珠丸に頼んで、大まかに絞り込んでもらった。それからは疑いがあるものの観察さ。……他本丸を観察していて分かった修行の機構が、最終的な決め手になったよ』

「機構……システムか、内容を聞かせてもらおう」

『結論から言えば、一定の練度と本丸及び審神者への愛着が修行を考え始める条件だ。他の容疑者は修行に肯定的だったのに対して、堀川は口籠って意見を言わなかった。堀川の練度は六十五を超えているし、普通なら沢山使ってもらっている相手に愛着を抱かない方が変だろう？ ——堀川は元々他本丸の刀だ。もしかしたら、前の本丸に未練があるのかもね』

公安局長はふむ、と顎に手を当てる。五虎退がそわそわと身じろぎをし、虎がそれを宥めるように彼に擦り寄っていた。

鶯丸は内心で舌を巻く。氷雨の青江は、かなり観察眼に優れているらしい。修行を志望し始める練度の共通点を見出すのは、中々に骨がある作業のはずだ。それを記憶し、他の共通点を探り出した青江の根性は、相当な物であると言えるだろう。氷雨の調査部隊に選ばれるのも納得だ。

「他の刀はその条件を満たしているのか？」

『うん、観察したけど全員満たしていたよ。練度がまだ充分じゃない刀も、本丸に愛着を持っていた。やっぱり浮いているのは堀川だけなんだよ』

「そうか」

その答えに公安局長は目を強く閉じ、静かに開いてから厳粛な声音で青江に問いかけた。

「貴方は、もし反逆者を庇い立てしていると認められたら、本丸を取り潰してもいいと言った。それに二言はないな？」

17—3 「公安局にて2」

隣で、五虎退が唾を飲む心配がしていた。鶯丸も張り詰めた空気を感しながら公安局長を見つめている。

それは余程審神者を信頼して、そして心を通じ合わせていないと口に出せない言葉だ。審神者が庇う事などしないと、知っていなければ出ない言葉だ。

氷雨隊は、本当にこの国に仇なす物を許す気はないらしい。それを証明するように、青江ははっきりと公安局長への返答を口にした。『勿論さ。それと堀川を引き渡していいって言葉も、覆すつもりはないよ』

——この通話は録音されている。それを知っていてなお、青江は退路を保たなかった。少なくとも、審神者と青江は白認定でいいだろう。

公安局長は小さく、安堵したように笑んだ。だが向こうの青江には、その様子を窺わせない声音で続ける。

「……貴方の真意はよく分かった。貴方の審神者の忠誠心もな。だがやはり、言葉だけでは証拠が足りない」

『僕達はどうすればいいのかな？』

「明日、貴方の本丸に調査員を送る。表向きは審神者の監査だが、調査員は本丸構成者の状態を完全に把握出来る。即ち——」

『僕の本丸の一斉捜査が本当の目的だ、と。主にはどう伝える？』

「そのままを伝えてくれ、他の刀剣男士に口外はさせるな。貴方の審神者なら、逃げる事は決してしないと信じている。……くれぐれも、堀川に勘付かれる事のないように」

『主は逃げないだろうね。了解、茶菓子を用意して待っているよ』

やはり、青江の口調に揺らぎはない。堀川を除く全員の潔白を、正面から示すつもりなのだろう。

「それではこれで失礼する。堀川への監視を緩めるなよ」

『分かっているよ。お互いにこの滾りを、早く鎮められるといいねえ』
「本当にな。……では」

公安局長は「通話終了」のボタンを軽く押し、端末をポケットに収める。ふう、と息を吐いてから彼女を見ていた二振りに向かい、引き締めた顔で告げた。

「五虎退。早速で悪いが、小鳥丸へ調査指令を出すと先に伝えてくれ。詳細は追って私が説明する」

「りよ、了解しました……！」

「雲霄の鶯丸。貴方の主に『薔薇の子の凍った川辺は濁っていた』と伝えてもらえるか？ 報告書は今から転送する」

「拝命した」

五虎退は命令を受けると一礼し部屋を飛び出した。軽い足音はすぐに聞こえなくなる。これから公安局も忙しくなるようだ。

こちらから明日から、徹底的な時空の異常確認調査をする事になるだろう。反逆者が時空に手を出していないなどという確証は、どこにもないのだから。

「……しかし、随分と遠回しな言い方だな」

ふと、鶯丸がそう漏らす。目の前の女性は、直接的な物言いをする性格だと思っていたのだが。鶯丸がそんな違和感を覚えたのを悟って、公安局長は眉間に皺を寄せてため息をついた。

「……私ではなく、貴方の主と三日月がな……たまたま会った直後に『薔薇の童が愛した凍る川は澄んでいないらしい』と告げられた時、一瞬訳が分からなかった。遊ばれていると思ったが、真面目に告げられたから何かあったのだと判断したけれど。頭を回転させて内容を噛み砕くのに、しばらく時間がかかったよ……」

「大変だったな。公安局長の性格を理解していながらそう伝えるとは、周囲に人がいたか？」

「ああ、城下町のルピナススマート前だったからな……確かにあまり物騒な話が出る状況ではなかったが、それにしてももう少し分かりやすく伝えて欲しかった……！」

頭を抱える公安局長に、遊ばれたのも事実かと鶯丸は内心で推察する。それくらいの茶目っ気は許されるだろう。何せ公安局からは「時空の裂け目を三十分以内に補修して、尚且つ時空移動した公安局員を

補足し、いつでも呼び戻せる状態にしろ」という、無茶な要請が飛んで来るのも珍しくはないのだから。

時空に詳しい人材が不足しているのは同情するが、と鶯丸が表情を変えぬまま考える。まあそれとこれとは別問題だ。振り回される身としては、公安局にもう少し時空のエキスパートが増える事を願うのみである。

しばらく唸っていた公安局長だったが、通知音が鳴った事で表情を切り替えて端末を取り出す。鶯丸の端末にも一拍遅れて通知が届き、確かめようと端末を開く。

「……システムメンテナンス？ 通達日まではまだ先のはずだろうか？」

訝しむように公安局長は口にする。鶯丸も通知内容に首を傾げていた。

通知を出したのは、コンピューター制御室。政府中枢だけでなく、この区域のネットワークも手掛ける機械制御の中核だ。月に一度大きなメンテナンスを行ってセキュリティ面などを整えているが、その月一の日まではまだ日数がある。

通知をスクロールしていくと、警告として以下の文が記されていた。

『……戦闘訓練室をはじめ、間仕切りや照明、床面の制御が不安定となっております。迅速な対応を心がけますが、メンテナンス終了まで緊急時を除き、室内機構の変更はしないようお願い致します』

今回のメンテナンスは、かなり大掛かりな物となるらしい。緊急でやらなくてはならない仕事がいきなり出来たのだ、コンピューター制御室の面々はご愁傷様である。

丸々一日かけて行われる予定の通知を見て、鶯丸に不審が募っている。

——ここまで大きな不具合は久方ぶりじゃないか？

コンピューター制御室はネットワークの要塞だ。滅多な事ではその防壁は崩れない。そのはずが現在、政府中枢の室内機構が不安定になるといふ不具合を起こしている。

ここ数日の事件で大騒ぎになっている所にこれだ。ただの室員のミスであればいいが――

「……雲霄の鶯丸。私の用事はこれで終わりだが……くれぐれも、周囲に気を配っていてくれ。貴方の所の三日月にも、動いてもらう事になるかもしれないからな」

「公安局長は、これが偶然ではないと?」

一つ頷き、公安局長は顔を顰めて眉間を押さえた。

「制御室の大包平は、新入りながら素晴らしい仕事をすると言っていた。小さなバグも発見して綺麗に修正出来る、優れた奴だと。……そんな大包平がいる中で、こんな大きな不具合を見逃す可能性は低いだろう」

「公安局長は、これが人為的な物であると見ているんだな」

コンピューター制御室でキーを叩いている大包平という面白い光景を一度脳から追い出し、鶯丸は確信を持って公安局長に尋ねた。

「ああ。もしかしたらメンテナンス明けを待たずに何かが起こるかもしれない。出動の用意と『最終兵器』の保全是頼んだ」

「分かっている。……やれやれ、俺はこんなに気を揉むような質じゃないはずなんだがなあ」

公安局長の言葉にしっかりとした返事をしてから、鶯丸は嘆息する。公安局長は険しく眉間を寄せたまま窓の外を睨み、何も言う事はなかった。

——コンピューター制御室

「今日は徹夜かあ……何でこんな時に厄介事が舞い込んでくるかねえ……」

「文句を言わずに手と目を動かせ。下手を打てば俺達、年末年始の休みを吹っ飛ばされるぞ」

「うっわあ、嫌だ……そうならないように、頑張りますかね」

機材が所狭しと並ぶ部屋では、休みを返上する事になりかねない事態を憂う話し声と、それでもひっきりなしにキーを叩く音が響いている。

大体がインドア派の身なりをしている室員の中で、異色の外見をした男が声を張り上げる。

「おい、資料部に不具合が大量にあったぞ！ 誰か手を貸せ！」

「横綱氏、もう少し音量落として……頭に響く……」

「えー、データベースに？ ウイルス？」

「そうだ。軽く見ただけでも侵入痕跡の他、あちこちに妙な改変がなされていた。流石に全て修正するのに、俺一振りでは骨が折れる」

どう考えてもアウトドア系の雰囲気を纏った刀剣男士——大包平は、そう言つて覇気のない室員の一人にモニターを見せる。モニターを覗いた室員は、こりや凄いなあとくたびれた声を発してから肩を回す。

「じゃあ、まずそこからやっちゃいますか。他の奴も手貸してー」

「はい。……しかしデータベースにウイルス仕込まれるって、絶対お叱り案件だよね……」

「セキュリティ、もっと強化しないとイケないよなあ……あー仕事が増えていく……」

データベースには、審神者の個人情報も含まれている。そこに不正アクセスされるといふ事は、審神者の身の危険に繋がりがねないのだ。しかもウイルスまで混入されると、上層部からの叱責は避けられないだろう。

暗鬱な未来図を思い描いた室員達は、ため息をつきつつもモニターに再び向き直った。

「今は目の前の仕事を片付けよう……横綱氏も頼んだよ」

「当然だ。俺がやるからには、全ての不具合を消し去ってやる」

「わあ横綱氏が頼もしい……なんかいつもより輝いて見える……」

「何だと、俺はいつだって美しいだろう!？」

「そこうるさい……頭に響くから本当やめて……」

室員達は画面から目を離さず、キーを滑らかに叩く。仕事をしながら話す彼等の顔は、大包平を除いて一様にげんなりとした顔をしている。大包平も不満そうにしながら、データベースの不具合を一掃する為にキーを叩き始めた。

——ここで大包平が、データベースを他の室員に任せていたのなら。もしかしたら避けられた出来事もあったのかもしれない。

たった一人でその領域を担当していた室員は、その時が来るまでに辿り着けなかったのだ。

政府中枢で保管されている時間遡行軍のレプリカ。それを制御するコマンド部分に混入していた「何か」まで。

17-4 「情報交換1」

「主、落ち着け！ そんな錯乱した状態じゃ、見つかる奴も見つからねえぞ！」

「そうですねよ、主君！ 鶴丸さんも軟弱ではありません、きつとこちらに帰る機会を窺っているはずですよ！」

「また歴史修正主義者に連れ去られたかもしれないねえんだぞ!? 鶴丸は外に知り合いがないんだ、前回みたく奇跡が起こるとも思えねえ！」

俺が出来る事をするしかないだろ！」

「辛い気持ちは分かりますが、今の主さんは兼さんの言う通り冷静には到底見えませんよ！」

「はつきり言うけどな、一介の審神者でしかないあんたに出来る事は多くねえんだよ！ 今の俺達に出来るのは、雲霄の三日月を信じる事だけだ！」

「俺は指くわえて待つてろってか!? あの三日月さんは必ず見つけるつつたけどな、どこまで政府が動いてくれるかも分からねえんだぞ！ くそっ離せ、俺は何がなんでも探しに行く！」

「あるじさんの頑固！ 手掛かりもないのに闇雲に探すんじゃあ、いたずらに体力を消耗するだけだよ！」

玄関で暴れる審神者を取り押さえるかの如く、周囲に刀剣男士が集まっている。誰かが審神者の腕を放せば、彼は外へと飛び出してしまっそうだ。それを理解しているから、刀剣男士達は審神者の体をがっしりと掴んで放さない。

大声を上げ続けている審神者達から少し離れた場所で、一期は必死に端末を操作し続けている。隣に立つ五虎退は玄関から響く怒号に近い説得に怯えながら、長兄へ震えた声で尋ねた。

「いち兄、誰か反応してくれましたか……?」

「……駄目だ、誰も既読印すら付けない。皆忙しいのだろうね」

「そ、そうですねか……事件があつた直後ですもんね」

「……本当に、なんて時機が悪いのだろう」

そう五虎退に返し、一期は端末を閉じて玄関の先を睨む。底なしの

暗黒を湛えた金色の瞳を思い返して湧き上がった、ある予感を抱きながら。

*

蒼穹の鶴丸の名がシステムから消えたと判明した直後。追加の茶を用意する為に台所にいた一期は、尋常ではない声を聞いて審神者の下へと駆けつけた。そこには顔を強張らせている山姥切、真っ青になって頭を抱える審神者、そして——忌々しそうに険しく眉を顰めた三日月がいた。

今にも憤怒の刃を振るいそうな三日月の雰囲気には戦慄しながらも何事か、と審神者へ端的に問う。錯乱している審神者に代わって説明したのは、衝撃から抜け切っていない山姥切だった。

「……鶴丸の名前が、機構から消えているらしい。一期、あんたは鶴丸を見かけていないか」

一期は思わず息を呑む。あの鶴丸が連れ去られたのか。一体誰がそんな事を？

「……いえ、見かけておりません」

それとも——邪推してしまうが、そうなるのも仕方ないくらいに、一期は彼の事をよく知らない。

自隊の鶴丸を、一期は苦手としていた。射抜くような淀んだ目、一期を揺さぶる問いを投げかけるその様は、己の中の醜悪を見せつけられるのも併せて不気味としか形容出来ない。

政府によってこの本丸に配属された彼の事を、審神者もよく知らないという。蒼穹隊の一員になっても、心の内を僅かでも晒さない。精々、一期が少し彼の深淵を覗いてしまった程度だ。

鶴丸が何を考えているかなど、一期は分からない。何を思っただけで姿を消したのか、そんな事は当然想像の域を出ないのだ。ただ知っているのは、鶴丸が底なし沼のような昏い目をする事、それだけだ。

「鶴丸がいなくなる心当たりはあるか？」

鋭い目付きで三日月が尋ねる。審神者は頭を抱えたまま、俯いて声を絞り出す。

「……ない、と言いつ切れ程、俺はあいつを知らないんですよ。政府か

ら引き取って以来、あいつはほとんど部屋にこもり切りだった。流石にずっと引きこもりなのは体に悪いと思つて、時々内番を割り振つてましたが」

「話はしていなかったのか？」

「何度か話をしようと思つたんですがね。いつも具合が悪そうにしていたから、俺も深くは踏み入れられなくて……そんなだから好かれていた訳ではないんでしょうが、嫌われてもいないと俺は思つてます」

「嫌悪で出ていかれる心当たりはない、と。蒼穹殿はそこから、連れ去られたと見ているんだな」

首を縦に振り、審神者は唸り声を上げて蹲る。そんな彼を見る三日月の目は冷め切りながらも、どこか憐憫を含んでいるように見えた。

その視線の温度は、どういう事なのだろうか。真意を測りかねて三日月を見据えると、それに気付いたのか冷めていた目が穏やかな雰囲気纏う。

「案ずるな。どこに行こうが、鶴丸は必ず見つける。蒼穹隊は以前も歴史修正主義者の蛮行に巻き込まれたのだから、きつと俺が報告をすればすぐ搜索に当たるだろう。……しばしの辛抱だ、どうか耐えてくれ」

三日月はそう言うと、柔らかく微笑んだ。それでも、蒼穹隊の面々の心が晴れる事はない。

——柔らかく装ったその目の奥に、冷たい光が残ったままだったから。

*

雲霄の三日月は、こちらを凍てついた目で見ていた。何かを疑つていて、こちらの言う事を心底から聞き入れようとはしていないような。

何を疑っているのか。そう悩んでいた一期の脳裏に、滑_レ園の惨劇に纏わる事情聴取で聞こえたある事が浮かぶ。

——園を襲った小狐丸を追っていたが、どこからか現れた鶴丸国永に妨害され、まんまと逃げられてしまった。

その情報と三日月の冷めた視線が頭で結び付く。途端、体内の血液が一気に冷える感覚がした。

いつか、自隊の鶴丸と戦う事になるだろうとは思っていた。けれどそれは、本丸内だけで済むと一期は考えていた。

——もし、あの鶴丸がこの町を火種に、何かしようとしているのならば。自分の考えの甘さに後悔が止まらない。

三日月は、この本丸を完全に白だと見做していないのだろう。もしかしたら鶴丸を逃がした共犯だと見ているのかもしれない。

冗談じゃない、と憤りが湧き上がる。自分達は政府に仇なす心積もりなどない。これまで刀剣男士は任務をきちんとこなし、審神者は自分達に愛情を注いで来たのだ。あまり関わりがなかったとはいえ、背信を疑われるのは心外だった。

けれど、ともう一方の自分が囁く。自分に出来る事はあったのではないかと。

あの鶴丸は、時折昏い目を自分に向けていた。その関係のこじれを自分達だけの物とせず、審神者に相談すれば良かったのでは、と。

自分で解決するべきだと今まで決め付けていたのだ。これは自分と鶴丸だけの問題で、審神者に話すまでもないと考えていた。己のプライドの高さも原因としてあったのかもしれない。報連相を心掛けなくてはならないのは、知っていたはずだったのに。

今更歯噛みしても遅い。山姥切曰く「綺麗過ぎる」部屋の様子から、鶴丸はこれから本格的に動き出すのだろう。その先に何が起こるか、想像するだけで恐ろしかった。

「い、いち兄。端末から、音が鳴っていますか……」

裾を小さく引かれて、意識を思案の渦から戻される。玄関から響く喧騒が耳に、隣にいる五虎退が心配そうに一期の手にある端末を指差すのが目に入った。ありがとう、と五虎退に告げて、一期は端末の画面に目をやる。

映っていたのは、氷雨の鶴丸からの着信通知だった。一期は今も鳴り続けている端末を勢いよくタップし、耳に当てる。

『もしもし、一期。大丈夫か?』

「はい、何とか。夜分遅くに失礼いたします、鶴丸殿」

『気になるな、緊急事態なんだし。……で、さつき連絡してくれた内容の事だが』

「はい。……うちの鶴丸殿がいなくなりました。そちらに行った気配はありますか？」

一期の真剣な問いに、鶴丸は疲労を滲ませたばつの悪い声で答えた。

『俺の本丸に、他本丸の奴が来た気配はない。……悪いな、力になれずに』

「いえ、お気になさらず。そちらでも何かあったのですか？」

参っているのを取り繕う余裕もなさそうな鶴丸に、一期は率直に尋ねる。鶴丸はああ、と間延びした声を発してからため息をつく。

『……厄介な事になりそうだ、としか話せないな……本当は愚痴の一つでも零したかったが』

「そもいかなしい事情がある、と。分かりました、深くは聞きませんがお気をつけて下さい」

心から鶴丸を案じてそう言うと、端末越しにありがとう、と穏やかな言葉が返ってきた。

『……事件が起こってから慌ただしくて羽を伸ばす時間もないな』

「宴会をする時間ありませんね……四振りで話したい事がいっぱいあるのですが」

『全てに片がついたら四振りで絶対に飲みに行こう』

「そうですね、それを楽しみに踏ん張ります」

力強く宴会の約束を口にする鶴丸に、小さく笑みを漏らす。少しだけでも元気を貰えた、それだけでこの電話は有意義だ。心が少し軽くなったと感じた途端。

『ところで、そっち少し騒がしくないか？ 大丈夫か一期、何かに巻き込まれてないか？』

鶴丸に気遣わしげにそう言われて、今度は一期が情けない声を出す番となった。

「……主がうちの鶴丸殿を探すと息巻いて……こんな遅くに出歩

くはずもなし、もし私の懸念している事が的中していたら、表を堂々と歩く事もしないでしょう。徒労になるだけだ、政府に任せようと言得してはいるのですが……」

『あー、そっちの審神者殿はすぐさま探そうとするだろうな……今も騒がしいという事は、まだ説得は上手くいっていないのか』
「……そうですね、頭が痛いですが」

かれこれ一時間、審神者と刀剣男士の探す探さないのやり合いは続いていた。どちらも決して折れる気配がなく、複数の刀達で止めているからこそ審神者は飛び出さずにいられている。手掛かりなしに見つかるとは思えないので、せめて情報が入ってから探すべき、というのが一期の意見だ。

『君は説得に混ざらなかつたのかい？』

「説得は他の皆様に任せて、私は私の出来る事をしようと思ひまして。探すにしても、少しは情報がないと闇雲になるだけですから」

『そうだな……渡せる情報がなくてすまない』

「鶴丸殿が謝る事ではありませんよ。鶴丸殿にも主がいらつしやるのですから、そちらの命が最優先です」

『はは、そりやそうだ。だけど友達の力になれないってのは、少し齒痒くてな』

「それは、私もそうですよ。己の無力さを痛感して、少し自信をなくしてしまっているんです」

少しだけ弱音を零すと、端末越しに息を呑む気配がした。本当は、鶴丸にこれ以上心配をかけたくなかった。だが後手に回ってしまっている現状で、自分の中に通っている筋にひびが入りかけているのだ。

『二期、俺は君の身に何が起こつたのか、伝聞や君の話でしか知らない。それでも、君は充分に出来る事をしてると思う。やれる事をしてる奴に、俺はこれ以上頑張れなんて言えんよ』

「ですが……」

『正直君は、少し頑張り過ぎなくらいさ。容量を大きく超える事態が次々と起こる中、それでも懸命に立ち回っているんだ。俺は、君を無』

力だとは決して思わない』

はつきりと、鶴丸は言い切る。まだ心は晴れないが、これまで様々な刀達に前を向く為の言葉を貰っているのだ。一期もずっと俯いているつもりはない。ちよつとだけ、疲れているだけだ。

『まあでも、容量過多で動けないってなら。少し、やる事を整理したらどうだ？』

「整理……」

『そう。まず最優先なのは主の命だ。その後続く君が優先するべき事を、一つずつ拾い上げて順位をつけてやるといい。君の場合、主の命に続くのは弟達の事かね』

はつと息を詰まらせる。そうだ、秋田の所へ行くつもりだったのに。自隊の鶴丸の失踪が起こったせいで、随分と後回しにしてしまった。

「……ここ数時間のゴタゴタで、やるべき事が吹っ飛んでしまっていました」

『想定外の事が起こると、今までの事がどっかに行く事はあるよなあ……。俺も今そんな感じだ』

「え、鶴丸殿も？」

『何でこんな目に……って本気で叫びたくなつた……。今うちの本丸はてんてこ舞いだ』

「電話していて大丈夫なんですか？」

『色々あって、少し休むように言われたんだ。だから電話する余裕はあるんだが……。つとすまん、誰か来たみたいだ。ちよつと待つてくれ』

了解したと告げると、鶴丸の声が途切れる。こちらも口を閉ざしたタイミングで、隣の五虎退が一期の顔を覗き込む。

「いち兄、電話相手はお友達ですか？」

「そうだよ。……少し恥ずかしい所を見せてしまったかな」

止めどなく話していた上に、弱音を零す姿を弟に見られてしまった。しつかりとした長兄でありたいのに、ここ最近情けない場面を晒している事が多い気がする。

それでも五虎退は首を振り、安堵したようにへにやりと顔を緩めた。

「いえ、ちつとも恥ずかしくありません。いち兄がこう、ほつとしてい
る顔を見ると、僕も嬉しいです」

「……そんな顔してたかな？」

「はい。僕も外で友達を作りたくなる位には」

友達、いいなあ。そうしみじみと呟く五虎退の頭を優しく撫でる。
緩んだ姿を見てもこう言ってくれる弟が、心から愛おしい。やはり、
一期にとつて弟達は大切な存在だ。

大切に思うのは、秋田にだってそうであるはずだ。だからこそ、
ちゃんと彼には謝りたい。どんなに理由を挙げても、傷付けたのは事
実なのだから。

『……もしもし、一期』

耳元から鶴丸の声がして、しゃんと背筋を伸ばす。反射的に名前を
呼びかけそうになったが、酷く強張っていた鶴丸の口調に首を傾げ
る。無言なのも悪いので、とりあえずは返事をした。

「もしもし、鶴丸殿。どうなさいました？」

『……こつちも緊急事態だ。念の為に聞くが、そつちにうちの堀川は
来ていないよな？』

「……え？ その気配はありませんでしたが……」

そうか、とささくれ立っている声音に、不安が募っていく。焦燥と
苛立ちを露わにしている鶴丸は、端末を持つ手に力が籠る一期に短く
告げた。

『うちの堀川もいなくなった。一期、遅くに悪いが城下町入口で待ち
合わせよう。情報を少しでも集めたい』

17—5 「情報交換2」

早歩きで坂道を下り、城下町の灯りが漏れる入口に辿り着いた一期は、荒れる呼吸を整えていた。

走っていた訳でもないのに、息が切れている。焦燥感から来る物である事は、はつきりと自覚出来た。溢れそうになる心臓のざわめきを宥める為に、大きく深呼吸する。

——このタイミングで、氷雨の堀川もいなくなった。氷雨の彼がどんな刀なのかは分からないが、これが偶発的であるとはどうしても思えない。

蒼穹の鶴丸は、何を起こすつもりなのだろう。一期にはもう、自隊の鶴丸が不穏な事をするとか考えられなかった。

自分がもっと早く動いていれば。そのもしもは今更だろうと自嘲しながらも、一期は悔いる。あの鶴丸は蒼穹隊からいなくなった、それが軋轢の解消を後回しにしていたツケなのだろう。

「二期！」

近づく足音と自分を呼ぶ鋭い声に顔を上げる。白い戦装束を纏った氷雨の鶴丸が、いつもの軽妙さの欠片もない、深刻な様子で坂道を駆け下りていた。一期も鶴丸に向き直り、目の前に立った彼に目礼した。

「遅くなったか」

「いえ、私も今来たばかりです。話はどこで？」

「びんか・まじよーるに行くか。話を少しでも漏らさない方がいいかな。……あ、からおけ屋の事は分かるか？」

「諸事情で入った事があります。話を聞かれない方がいいのは同意見です、そちらに行きましよう」

ああ、と頷き、鶴丸は歩き出す。その顔つきは険しく、彼もまた焦燥と苛立ちを抱えていると分かった。

*

店員によってワンドリンクが運ばれて来たのを、ドアが閉まり店員

が遠ざかるまで見送る。鶴丸はグラスを持って、斜め前に座る一期に切り出した。

「……さて、まずは一期の所の『鶴丸国永』について聞かせてくれないか。俺達の仮説を確かめたいんでな」

「はい。……と言つても、私もあまり知らないのですが」

「構わない、知っている事を教えてくれ」

鶴丸がドリンクを口に含んだのを皮切りに、自隊の鶴丸についての記憶を漁る。思い出すのに難儀したのは、弱い自分を思い知らされたからか。それでも記憶を引っ張り出し、目の前でこちらを見つめる鶴丸へと顔を向ける。

「……初めてまともに言葉を交わしたのは、私の格が上がった日です。その日は鶴丸殿の具合が悪いと聞いていたので、書庫で会った時も少し声を掛けるだけに留めて深く話すつもりはありませんでした」

思い返す。あの鶴丸の、作り物めいた笑顔を。偽物だと隠そうともしないその表情を。そして——その直後に反転したあの様子と、揺さぶつて来た言葉達を。

「ですが、鶴丸殿に話を続けられて、それで……弟達が主や政府に翻られていたら、と尋ねられて……主はそんな事をしないと私はみつともなく声を荒げてしまつて」

「君が主の性質を見誤るとは思えない、そいつの戯言だろうか？」

「はい、本刃も戯言だと言つていました。けれどその表情や声音が、あまりに何の感情も乗せていなかったのも、私も思わず吞まれてしまつて……」

何故、あんなに揺さぶられたのだろうか。氷雨の鶴丸の言う通り、ただの戯言だと一蹴すれば良かったのに。

蒼穹の審神者は、困つた所はあるが悪人ではない。それなのに、どうして想像しかけたのだろう。——弟達をいたぶる、審神者の姿を。首を振つて想像を追い出し、一期は再び口を開く。今は、あの鶴丸に振り回されている場合ではない。

「次に話をしたのは、私が近侍になった日——本当に最近です。その時に尋ねられたのは、大切な存在と対立して、対話をして無駄だつ

たら、という事でした。情けない事に、私はそれに答えられず……黙るしかなかった私に、必ず分かり合えるは綺麗事だ、それを無理矢理噛み合わせようとしても崩壊するだけだ。それで苦しむ事になるなら、最初から繋がりなどない方がいい——そう言い放たれました」

「おいおい、綺麗事まではまだいいが、後半は随分な飛躍じゃないか。ひとはひとりじゃどうにも出来ないんだぜ？ それは俺達だってそうだ。たったひとりで敵を全滅なんて出来ない。それに己を磨くのにも、他者が必要になる場面があるはずだ。俺が言うのも何だが、随分とひねた考えをしてるなあ、そいつ」

鶴丸の呆れたような響きに、ほつと息を吐き出す。自分のもやもやとした内心を肯定されたかのように、少し安心した。「自分」に対して捻くれていると批判する鶴丸に、ちよつとだけおかしく感じてしまったのも気が緩んだ一因だろう。

思考に余裕が生まれたおかげで、一期はある事を思い出せた。

「あ、それと……主に鶴丸殿の事を尋ねた時に、うちの鶴丸殿は政府からの貰い物だ、と教えて頂きました」

「……貰い物だと？」

「はい。強い戦力になるから、という言葉を決め手にして引き取ったらしいです。それ以前の事は知らない、とも仰っていましたね。強い戦力になるはずだったのに、体が丈夫ではないからと引きこもっている事も多いと……主は自分が情けないと嘆いていましたが、今考えると……」

「——自由に動く為の言い分にしか思えない、か？」

低く響く鶴丸の声に、一期は目を瞠る。ストローから口を離れた鶴丸は、目を鋭く細めてグラスを握りしめていた。

「……俺の所の堀川も、政府から譲り受けた奴なんだ。前の堀川は戦場で折れててな……戦力補充の為に主が引き取ったんだ。引き取られた後の活躍は目覚ましい物で、すぐに俺と同じ部隊に配属された。だから俺も奴には期待していたんだが……」

「でも、いなくなつたと」

「ああ。……俺のいる部隊の一振りが主に密命を受けていたらしくて

な。一期の所へ向かう直前までそいつを問い詰めていたんだ。堀川がいなくなつたと告げられた時、あまりにも動揺しなかつたからな」

「……まさか、鶴丸殿の所では」

「思わず声が震える一期に、重々しく鶴丸は頷く。
「その通り、堀川を黒だと見なしている。詳しくは聞けなかつたが、そいつは公安局からの情報も入手していたらしい。堀川が部隊を組んで何かしでかそうとしているのなら、その部隊員には——」

「うちの鶴丸殿が含まれている可能性が高いんですね？」

「そうだな。……つて、随分はつきりと言い切るんだな」

少し呆気に取りられたように目を丸くする鶴丸。当然だろう、普段なら確証がないと見られてもおかしくはない。——あの出来事がなければ。

「……今日、本丸に雲霄の三日月殿が来訪しました」

「……は？　な、いきなり過ぎないか!？」

一期が根拠の元である出来事を告げる。鶴丸は一瞬固まって、ひっくり返つた声を漏らし声の調子を乱れさせた。グラスの中の水面が大きく揺れ、己の手にかかつたドリンクを鶴丸はナプキンで拭く。

一期もかたかたとグラスを震わせ、雲霄の三日月の冷たい視線を思い出していった。

「ええ、いきなりでした。弟達に聞いても、三日月殿が来るという予定は入っていないかつたと。……それに、鶴丸殿がいなくなった時の三日月殿は、あまりにも威圧感が凄まじくて……まるで敵を取り逃したような顔だったので。私達をどこか冷たい目で見ていたのも、もしかしたら鶴丸殿の思惑を知っていながら匿っていた、と思われたのかもしれません」

「……雲霄の三日月が動いていてその様子だつたつて事は、そつちの『俺』も黒だろうな」

がしがしと頭を掻く鶴丸は、グラスをテーブルの上に置いて天井を見上げる。一期はグラスを見つめながら俯いた。重い空気とは裏腹に、部屋の灯りは煌々としていて目に辛い。ドアの向こうで店員の影が通り過ぎて行く。別の部屋のドアを開けたのか、やけにはしゃいだ

歌声が微かに漏れて聞こえてきた。

「俺の所も一期の所も、いなくなつたのは政府からの貰い物、か」

ソファーに寄り掛かり天を向いていた鶴丸が、ぽつりと口にする。一期もその点に引っかけかりを覚え、小さな水面から鶴丸に視線を移す。

「……何で政府からの刀が揃つて、というのはありますね」

「まあ、でも分からなくはないがね。政府預かりになつてる刀つてのは、政府所属である以外には何かしらの問題を抱えている事が多い。それこそ審神者が質の悪い人間だった場合、政府まで憎んでしまうのも有り得なくはない。だが徒党を組んでいるとしたら、かなり稀な事案になる。大体は他のひとを信じられなくて単独行動をするからな、そういう奴は」

「何か共通点でもあるんですかね……」

グラスを傾け、考えを巡らせる。少しぬるくなつた甘い液体が喉を通り抜けていく。液体が滑り落ちるのと同時に冷えた喉と胃が、少しだけ頭をはつきりとさせた。

政府を憎む程の凄惨な出来事。それは審神者の悪政による絶望だったり、政府にあまり良い待遇を受けられなかったりというのが大半だろう。そういうえば春光隊の面々も、政府からいい扱いを受けられずにこちらへと来たのだった。

——こちらへ来た？

春光隊をトリガーにして急速に思考が回る。そういえば長谷部の過去話の中で、引っ掛かる事を話していたような気がする。思い出せ、思い出せと念じて、石切丸の複雑そうな顔と共に語られた「情報屋」の言葉を思い起こした。

——愛甲区域の上層部は大多数はきちんと粛正されたけれど、一部は賄賂を出して名前を変えこちらに潜り込んだ奴もいるわよ。この『町』はそんな奴等が潜り込んでいる事以外は基本的に平和ね。逆に言えば、それが火種となって燻っているのだけだ。

「——『愛甲区域の大移動』の生き残り」

「……え？」

「政府を憎む程の凄惨な出来事、他のものと手を組める。前者は言わずもがな、後者も同じ傷を負ったもの同士で繋がり合える。共通点としては充分ではないかと」

決定打になる要因は、口に出れなかった。それは春光隊に纏わる物だし、政府に忠誠を誓う審神者を戴く鶴丸に伝える事も怖かった。

春光隊の手に入れた情報は「愛甲区域の制裁は済んだ」と認識しているものの大きな怒りを買う事に繋がりがねない。例え友達でも、言っている事と悪い事があるのは認識している。嫌われても真実を告げる勇気がないだけなのかもしれないが。

硬い表情の一期を見て鶴丸は目を見開き、額に手を当てて唸った。「……そうか、それがあったな。だとしたら、解決まで一筋縄ではないかないぞ。何せアレを乗り越えた生き残りだ、練度も相当に高いだろう」

「それに私と対峙した小狐丸殿は、太刀には普通扱えない銃兵を用いておりました。恐らく彼は秋田と似た方法で顕現し、依代の執念が強く残っている個体です。常軌を逸した手段を使っても不思議ではないかと」

「俺と刃を交えた蛍丸もそうだろう、あいつは依代の意識しか残っていなかったがな。……とにもかくにも、頭が痛い事には変わりはない。むしろ堀川達と手を組んでる可能性が高い分、余計に頭痛が酷くなった気がする」

「鶴丸殿はともかく、私に出来る事はそう多くないので歯痒いですね……」

はあ、と大きく息を吐く二重奏が部屋に響く。情報交換をしたが心は晴れず、懸念事項が積み重なってしまった。政府から仕事を回される本丸所属の鶴丸はある程度自由に動けそうだが、自分は一介の本丸の刀剣男士でしかない。本当に、待つしか出来る事はないのだろう。

ふと、頭に浮かんだ仮定を一期は鶴丸に告げる。

「……もしかしたら、私があの鶴丸殿に何も言えなかったのは「ん？」

「凄惨な過去を抱えていて、話す内容が真に迫っていたからかもしれ

ません。……本当に『大移動』の生き残りならば、ですが」

ぬるいドリンクをまた喉に流し込む。グラスからはすでに氷が消えているので、かなり味も薄くなってしまう。それに顔を顰めていると、鶴丸が己のグラスの上方を掴んで振って見せた。

「あんまり引きすぎられ過ぎるなよ、一期。どんなに同情を誘う過去があつたとしても、奴等は主達を裏切つたんだ。君の戴く主や仲間を害をなすと分かつたら、切り捨てる覚悟もしくちやならない。——主の敵に容赦は不要だ。それは分かつてるな」

「当然です」

躊躇いなく頷くと、鶴丸はニツと歯を見せて表情を緩めた。

「よし。……まあ今のは、自分に言い聞かせる面もあるが」

「え……あ、鶴丸殿は堀川殿と同じ部隊だつたんでしたっけ」

「ああ、だから多少の情はあるんだ。……けれど敵になるなら、それも切り捨てなくちやな」

少しだけ寂しそうに、鶴丸はグラスを叩る。一期も薄まったドリンクを、最後の一滴まで飲み干す。

薄いドリンクはやはり舌触りが悪く、少しだけ不快感を催した。

17—6 「怨恨と未練」

水で満ちたタライに沈んでいる皿を一枚手に取る。泡の付いているスポンジで皿の表面を撫でれば、するりと食事の跡が消えていく。裏返して底も洗い、水切り籠の中に入れる。次に掴んだのは茶碗。一見綺麗だが僅かに米の粘度が残っているそれも、洗剤の力で拭い落させた。

「秋田、さつきより大分皿洗いが上手くなってるね」

「……そうですかね」

「うん。ちよつとやっただけでもこんなに上達出来るんだ、秋田は飲み込みが早いや」

「……たかだか皿洗い、つて気持ちじゃ抜けませんが」

秋田はただただ機械的に食器を掴み、洗って水切り籠に放り込んでいく。手を動かしている間は、自分の小ささや内側で渦巻く苦しみを脇に追いやれる。水と共にそういう辛さも流す気分で、ひたすらに皿を洗う。

隣に立つパーカー姿の鯰尾は軽く目を細め、秋田の前から水切り籠に洗った食器を放り込んだ。

「たかが皿洗い、されど皿洗いだよ。中途半端な洗い方だと汚れが残っちゃうし、あんまり洗い過ぎてても食器を傷める。今の秋田はいい塩梅に洗ってるんじゃないかな」

「……」

「少しでも出来たら、自分を褒めてやらなきや。俺達も充分助かってるんだし、何も卑下する事はないんだよ」

ね、と笑う鯰尾に、どのような表情を向ければいいのか秋田は悩む。笑顔の作り方は、長きに渡る苦痛のおかげですっかり忘れてしまった。そんな自分が、気味の悪い顔を見せていいのだろうか。

結局秋田は頭を軽く下げ、目を伏せるのに留めた。鯰尾がどんな顔をしていたのかは見れなかった。心配をかけているだろうと思っても、それしか出来ない自分が嫌になる。

どろどろとした自己嫌悪は、棚上げした側から溢れていく。きつと

これは「秋田藤四郎」らしくないのだろうか？と分かつてはいるのだが、どうにも止める事が難しい。寂しさ、恨めしさ、悲しさ、不安、焦り、妬ましき、情けなさ。渦巻く負の感情は、確かに秋田を苛んでいる。

先程物吉達に少し昏い気持ちを吐き出せた事は、きつとよかつたのだろう。どこの本丸でも——いや、それ以前から誰も自分の言葉を聞いてくれなかったのだから。

最後の皿を水切り籠に入れるのと同時に、台所の入口からひよこりと物吉が顔を出す。

「何か手伝う事はありますか？」

「物吉。こっちは大丈夫、ゆつくり休んでて」

手を拭きながら鯰尾が手助けを辞退すると、分かりました、と言って物吉は引つ込んだ。

抱える悩みを表に出していないその微笑みに、秋田は少し憧れている。話をせずに拗ねて飛び出した自分とは対照的に、物吉は誰かを傷付けない為にここへ来たという。勿論苦しいからという理由でもあるのだろうか、他者への気を回しているだけ自分よりまともに見えるた。

羨望と自己嫌悪を湧き立たせている秋田の肩を、隣の鯰尾がぼんと叩く。

「さ、やる事やったし居間に行こうか」

「はい」

鯰尾に促され、秋田は踏み台から降りる。灯りを切って鯰尾と共に台所から出ると、ぽつりと小さな呟きが聞こえた。

「歌仙さんと薬研、小夜に追いつけたかなあ」

その独り言に何も言えず、秋田は黙って俯いた。

先程突如として、小夜がこの本丸を飛び出した。狼狽している歌仙を軽く落ち着かせてから、薬研は彼と共に小夜を追いかける為に本丸の外へと出て行った。それが、およそ一時間前の出来事である。

小夜は頭痛がすると言っていたはずだ。体調不良を押してどこかへと向かった小夜さんが倒れてないといいのだけど、と石切丸は彼を案じていた。

連絡は、未だ入っていない。二振りが追い付けたのか、それとも探している最中なのかも分からない。鯰尾が心配するのも当然だ。

「秋田、鯰尾、お疲れさん。丁度今面白い番組を見つけたんだけど、秋田は観るか？」

ソファーから身を起こした獅子王がこちらに呼びかける。頷くと、石切丸がテレビに見入っていた五虎退と長谷部の肩を軽く叩いた。少し詰めて、と告げられ我に返った五虎退はあわあわと体を獅子王側に寄せる。鯰尾はその隙間に滑り込んで秋田に手招きする。だが、少しだけスペースが足りない。

おろおろとしている秋田を尻目に、時計を見た長谷部はカップを持って立ち上がり、廊下へと向かって歩き出す。

「長谷部さん、番組観なくていいんですか？」

「観るならもう少し詰めるけど？」

身を乗り出す鯰尾と石切丸に、長谷部は振り向いて首を振った。

「歌仙と薬研に連絡を入れてくる、少し心配だしな。いざとなったら、二振りの所へ行けるようにしておかないと」

「そういや、二振り共遅いな。俺もすぐ動けるようにした方がいいか？」

「獅子王は石切丸と待っていて欲しい、入れ違いになる可能性がある。念の為、鯰尾は準備をしておいてくれ」

「はい」

今度こそ廊下に消えていく煤色の髪を、秋田は鯰尾の隣に座って見送った。

ふつと視線をテレビに向けると、お笑い芸人らしき男性が口の中に寿司を運んでいる最中だった。どうやらグルメを取り扱う番組のようで、他のタレントも口々に寿司の感想を述べている。タレント全員がべた褒めで、板前が微笑んで頭を下げていた。直後にぱつと画面が切り替わり、寿司屋の外観と住所が映し出される。

「お、美味しそうですね」

「ごうも美味そうに食ってるのを見ると俺達も食いたくなるよなー」

「ですねー。久々に明日にでもお寿司注文します？」

「歌仙さんがどう言うかだね。お金も無限にある訳じゃないし」
「皆さんの場合、資金繰りもありますからね……ボクも早く立ち直らないと」

微かに焦燥を浮かべ拳を握る物吉の背を、石切丸がぼんぼんと軽く叩く。

「本当に焦らなくていいんだよ。心の整理も必要な時期だろうし、ゆっくりと休んでいけばいい。歌仙さんの許可が下りたら、皆でお寿司を食べるのもいいかもね」

「いや、それは流石に……!」

「も、申し訳ないです……!」

ぶんぶんと首と手を振る物吉と五虎退。その様子を見て秋田は、何故二振りが寿司を頼むのを固辞しているのかが分からず、首を傾げる事しか出来なかった。

常識が足りないと思うのは、こういう時だ。どう振る舞えばいいのかわからない場面が、ここ最近続けて起こっている。

自分は「自分」の意識が強いのだと自覚しているが、返せば「秋田藤四郎」の意識がかなり薄いという事。「秋田」の知恵を借りる事も叶わない現状、自力で困難を切り拓いていかなければならないのに。

また辛い思いをするくらいなら、このまま春光隊の世話になりたいと願ってしまう。けれどその一方で、それはいけない事だと自分なりに理解しているのだ。あくまでもこの本丸は止まり木。傷が癒えたら自分で進む道を決めなくてはならない。それを前提として、春光隊は自分達を迎え入れてくれているのだろうか。

「秋田、どうしたの？ 何か辛い事を思い出しちゃったかな」

心配そうに声を掛けられ、顔を上げる。テレビからは家族が鍋を囲む明るいコマーションシャルが流れており、寿司屋の話題はすっかり消え去ってしまった。

左右を見ると、皆自分へと顔を向けている。気遣う視線を一身に受けていると気付けば、どうしても体が縮こまる。

「……僕、どうしたらいいのかなって、考えてて」

そこまで言って、詰まってしまう。唇を噛んで俯くと、喉と目が熱

くなつて苦しい。吐き出す息がやけに震えていた。

叫びたくなつた、言い募りたくなつた、恨みをぶつけたくなつた。見てもらえないというのは、想像していた以上に苦しかった。

かつては、外に出れば愛情に包まれた幸せな生活が待っていると思ひ込んでいた。その空想は、本丸を移る中であっけなく打ち砕かれた。

特に、「弟」へ愛情を注ぐはずの一期一振から存在しないものとして扱われ、秋田は期待と信頼を踏みつけにされ粉々になっていく感覚を覚えていた。

蒼穹隊でも、それは同じだった。秋田の存在は無視されて、誰からも程々の扱いを受けた。痛めつけられるわけではないが、愛されもしない。本当に、そこらの石ころと同じ扱いだった。

「新しい本丸で、僕を受け入れてくれるなら、そっちの方がいいかなつて考えましたんです。……でも、どうしても踏ん切りがつかなくて……どうしてなんでしよう。辛い思いはもうしたくないのに、足がまだ動かない」

そう話しながら脳裏に浮かぶのは、空色の髪をした刀剣男士が弟達に囲まれて微笑んでいる姿。周囲にいる弟達も笑顔で、とても理想的な「兄弟」の図。

「どうして僕は、見切りをつけられないんだろう。辛い目にあつたのに、どうしてまだあの本丸から抜ける事を選べないんだろう……どうして僕は、あの中に入れなかったのかな……」

……分かつている。この期に及んでも自分は、あの光景に焦がれている。どうしたらあの笑顔を向けてもらえるのか、みつともなく空想に縋っている。

きつと、この本丸があまりにも温かかったからだ。当たり前前に他者を心配し、存在を認めてくれたからだ。

長谷部という、自分と同じ「異端」を受け入れてなお穏やかな、この家族の温もりにあてられたのだ。だからこそ、未だに夢を見てしまう。

自分が受け入れられ愛情を貰える、そんな幸せな光景を。

「……恨み節と共に、未練も湧いてくるんです。両方に引つ張られて、ぐらぐら揺れて……こんなんじや新しい場所に行つても、きつと後悔し続ける。でも今の場所にい続けるのはきつと辛くて……本当に、どうしたらいいんでしょうかね……」

ついにぼたりと一粒、膝の上に雫が落ちた。乱暴に目を拭うが、雫は次々に膝の上に降り注ぐ。濡れている感覚が不快で、膝も袖でがしがしと拭いた。

散々泣いたのに、未来を考えると涙が溢れるのだから不思議だ。振り子のように大きく揺れる心は、秋田の足をその場に縫い止めて動かさない。

新しい場所に行くには未練を断ち切らなければならず、今の場所に留まるには現状を変える力が必要だ。今の秋田はどちらかを選ぶ事が出来ず、呆然と立ち尽くしている状態。

目の前に二つの道がある。どちらもリスクがあるから、秋田はこの止まり木から動けない。

選ぶ事が怖いのもかもしれない。選んでしまえば、引き返す事は出来ないのだから。

「……秋田、お前……」

獅子王が立ち上がった、こちらに向かってくる。

情けない事を言ってしまった。呆れられただろうか。刀剣男士にあるまじき弱さではないのだろうか。

不安が募って、下を向いたまま顔を上げられない。しかし秋田の視界全面に、獅子王が映り込む。俯く秋田と視線を合わせるように、しゃがんで手を握る。

——獅子王の顔は、優しさで溢れていた。

「……強いなあ」

「……え？」

想定していた物にどれもかすらない言葉を受け、秋田は思わず呆けた。驚きのあまり涙の栓も止まったらしく、目を見開いても雫は落ちない。

獅子王は穏やかな笑みを浮かべたまま、秋田の手をしっかりと握

る。

「秋田みたいに追い詰められた奴は、未来を考える力すら残ってない事が多い。多分傷を負った所を治す為に力を注ぎ切るからじゃないかと思ってるんだけど、本職じゃないから俺には分からない。でもさ、本職じゃなくても分かるよ。秋田は、未来を必死に考えてる」
「……」

「限界迎えて早々に出来る事じゃねえよ。しかも恨む感情と未練をちゃんと把握して、後悔のない選択をしようとしている。深く考えずに新しい場所で再始動、って選択をしてもおかしくないのに。それにまづ恨む力があるのが凄えよ。理不尽を受け入れるんじゃないの、抵抗してさ。そしてその恨みが愛情と表裏一体なものも、分かっているんだろ？」

他者を恨み続けるのにも、エネルギーがいる。それが理不尽を受けた直後なら尚更。

醜悪を自覚している怨恨は、客観的にも主観的にも抱えるのは辛い。それでも秋田は恨んでいいのだと肯定された。理不尽に抵抗している、と告げられて。

問われた事には、頷いて答える。みっともなく微かな光に縋り付いている事を、情けなく思いながら。

「それを分かっているから、お前は足踏みするんだろう。それを見つめて悩んでるのは、きっと後悔しない為なんだよな？ ……やっぱり凄えよ。お前は、まだ未来を信じていられてる。何もかも信じられなくなってもおかしくないのに、だ。絶望に身を墮としても不思議じゃないのに、お前は生きて、足掻いて、悩んでる。信じる事にも力がある。お前は、とてつもない力を秘めているんだ。泣き崩れても、すぐに未来を信じられるくらいには」

そうなのだろうか。自分は、このひと達に情けない姿を晒していなかったのだろうか。

獅子王の手を握り返す。小さな手が一回り以上大きな手に包まれ、柔らかな温度を伝えてくれる。心の中の塊が、少しずつ解けているような気がした。

「そうだね。獅子王さんの言う通り、信じる事には力がある。盲目的になるのではなく、悪い所も見えているのなら尚更だね。正直、こんなにすぐ秋田さんの気力が戻って来るとは思わなかったよ。相当に辛い思いをしたのだから、もう少し時間がかかると見込んでいた。嬉しい見当違いだ」

「でもね、秋田。本当に蒼穹隊に在るのが辛いなら、別の部隊に移る事も選択肢の一つに入ってるんだからね。秋田は今いる所で頑張る事も考えてみたいけど、どうにもならない事はあるんだから。まあ今はここでのんびりして、ゆっくり傷を癒していこう。俺達の事は心配しなくていいからさ」

温かい言葉達が、胸の中に染み入る。はい、と口にしてから、秋田は目を閉じた。

春光隊の面々は、本当に優しい。秋田を否定せず、傷付けない言葉で秋田を宥めてくれた。

鯨尾の言う通り、焦る事はないのだろう。今までかなり苦しく辛かったのは事実で、そんな傷を一朝一夕で癒せるとも思っていない。

——考えよう。これからの事を、そしてあのひとの事も。

そう決意を固めて、目を開く。丸い目に小さく光が差し込み、涙の後もあつて穏やかに輝いている。

よし、と獅子王が手を離し、明るく笑い掛ける。今の秋田には、それに口角を上げて応える余裕が生まれていた。

「戻ったぞ。歌仙達は小夜と合流して、もう少しで帰るらしい。……あれ、何かあつたか？」

廊下から長谷部が現れ、雰囲気少し変わっている事に首を傾げる。それに答えを示したのは、今までの話を黙って聞いていた物吉だった。

「秋田君がすごい強いひとだつて話をしていたんですよ！」

「え、本当に何があつた」

「実は秋田君のメンタルが滅茶苦茶強かったのかもしれないって事です。短期間で未来を考える余裕が生まれているみたいで、獅子王さん達が感心していました」

「……そうか。少しでも前を向けているのなら、何よりだ」

長谷部も表情を緩め、秋田に微笑んだ。秋田も小さく頭を下げ、長谷部もソフアーに向かって、再びテレビ番組を視聴する雰囲気になりかけていた。

物吉が唐突に立ち上がって、窓の外を睨み始めるまでは。

「物吉さん、どうかしたかい?」

「どうした、窓なんか見——」

獅子王の言葉を遮るように、物吉は床を蹴って玄関へと向かう。そして鍵を開ける音と、ドアが開く音。バジヤンと外から鳴った水溜りを踏む気配に、鯰尾が青ざめる。

「ちよつと、こんな時に人格交代……!?!」

「鯰尾、追いかけるぞ!」

「はい! 獅子王さん、石切丸さん、留守は任せました!」

戦装束に身を変えた鯰尾が、一足先に玄関に向かった長谷部の後を追う。ぽかんとした顔の石切丸と獅子王が、それを見送りながら呆然と口にする。

「……令嬢は、この町にいるはずだったよね?」

「一体、何が起こったんだ?」

拳を固めた秋田も、二振りが油断した一瞬の隙を窺い一足飛びで玄関に向かった。そして足跡が消えぬ内にと、全速力で長谷部と鯰尾を追いかける。

「あっ、おい、秋田!」

背後から獅子王の慌てる声があったが、振り切って森の外まで走る。見届けなければ、と思っただの。先輩たる物吉が、どのようにもう一つの魂と付き合っているのか。——どのような道を辿るのか。

それが自分の道を決める手掛かりになると、何となしに思ったのだ。

17-7 「彼女のもとへ」

木々を掻き分け、大通りまで駆けた。感覚が、この先に「敵」の存在を告げている。迷いなしに、その地点へと向かう足は止めない。

体の操縦を無理矢理奪われた物吉は、それでも内側で必死に叫ぶ。「落ち着いて下さい！ ミサキさんの周囲には政府の方がいるはずで、彼等に任せてボク達は退きましよう！ 今の貴方は冷静とは程遠いんです、がむしやらの戦いで敵を倒せるとは思えません！ 彼女の目の前で倒れる事になったら彼女が傷付くんですよ!」

嫉妬の炎に遮られ、彼の下へ行く事は難しい。今の物吉に出来る事は、遠くからの説得だけだった。けれど――

「……殺さなきゃ、殺さなきゃ、ミサキさんに近付くものは、ひとり残らず……!」

彼に、言葉は届かない。物吉の中で募っていく危機感が、それなのに何も出来ないのが、苦痛な程に歯痒かった。

今の彼が、ミサキの一振り目の刀となった加州清光に激しい嫉妬を抱いているのは明らかだ。これからは、彼女の隣に立つのは加州となるのだから。

彼はずつと、彼女を慕っていた。まるで雛鳥の刷り込みのように、彼女が彼の全てだった。彼女を守る為に、全てを投げ打った。物吉を苦しめてまで、彼は「敵」を蹂躪したのだ。

何もかも、彼女を歴史改変から救う為だった。

そんな彼女を横から掻っ攫われたのだ。今まで尽くして来たのに、憤りと嫉みと絶望を抱くのは目に見えていた。

衝動のまま、彼は動いている。その先にあるのが、「敵」を打ち倒す事だけならまだいいが――

――このままだと、ミサキさんの加州さんを破壊しかねない……! ミサキを守るのは自分だと、改めて示すつもりなのだろう。その心意気はまだいい。今の彼の問題は、嫉妬のままに周囲の刀や人を壊したり殺したりしかねない事だ。

間違いなく、ミサキは彼の印象を悪い方向に覆すだろう。下手を打

てば、彼女から激しい憎悪を抱かれる可能性だってあるのだ。

しかし、彼を止めようとしている理由はそれだけではなかった。嫌な気配がするのだ。普段の「敵」は、こんなにも禍々しく、そしてすらりとした雰囲気纏っていない。ちぐはぐなのだ。間違いない、普通の時間遡行軍ではない。

もしかしたら、束になっても敵わないかもしれない。その不安をよそに、どンドン「敵」の気配は近付いていく。

大通りから少し離れている、気配が色濃くなった地点で木に飛び登り、周囲を見渡す。視界が固定されると、はつきりと三つの影が映し出された。

「……お前っ！ 何で主を狙う訳!？」

声を発したのは、抜刀して構える加州清光。その背後に不安そうに目を揺らがせながらも、背筋を伸ばしたままのミサキが立っている。そして、そのふたりに鋒を向けて相対するのは――

「――障害物は少しでも排除するだけですよ」

――宗三さん!？」

物吉は息を呑む。ミサキ達と対峙していたのは、桃色の髪、桃色を基調とした法衣、そして憂いを帯びた目。

外見は間違いなく、物吉の知る宗三左文字と一致していた。だが、それにしては雰囲気がおかしい。

どこか、噛み合わないのだ。何がと問われると、雰囲気か、としか言えないのだが。それでも物吉には、その感覚に覚えがある。

――まさか、被験者……!？」

どうして被験者がミサキを狙うのか。判断するには情報があまりにも少ない。だが、違和感の他に感じた禍々しさ。それが嫌な予感を掻き立ててならないのだ。

恐らく、加州の練度はまだ一桁台だ。顕現して日が経っていないのだから、その程度なのは予測出来る。

敵対している宗三はどうだろう。警戒を緩めない加州と見比べて、脳内で計算する。

そして導き出した結果は――宗三の練度は上限に達しているとい

う、絶望的な差を示す物だった。

ゆつたりと佇んでいるが、宗三は一切隙らしい隙を見せない。わざとらしく欠伸をして見せているのを鑑みるに、加州を取るに足りない相手だと思っているのかもしれない。

加州は舌打ちしながらも攻撃の機会を窺っている。その最中にミサキへと視線をやり、口を小さく動かした。ミサキは端末を手に取って画面を操作する。応援を呼ぶつもりなのだと見ただけで分かった。直後、ミサキの手の中が弾ける。弾けたのは端末だけだったようだが、手に微かな傷が出来てしまった。

「やせると思いましたか？」

気怠そうに、宗三は手を翳す。すると宗三の前に構えを解いた刀装兵がずらりと並ぶ。

充填をしている十八の兵を見て、物吉はまた絶句する。

——銃兵……しかも刀装三つ分……!!

打刀の操れる刀装は二つだ。そして打刀は、銃兵を操る事が出来ない。どう考えても、あの宗三は政府の定めた規格を超えている。

どんな手段を使ったのか。何となく想像はつくが、それを許容出来ない自分がいた。そんな事をしてまで、という気持ち拭えないのだ。

しかし、悠長に思考を巡らせている余裕はない。何故ならば——

「……あいつ……よくもミサキさんを……!!」

口が、こみ上げているだろう怒りのままにそう紡ぐ。握られている刀が、かたかたと音を立てる。

宗三によつて手に傷をつけられた時点で、彼の怒りは頂点に達していた。機会が巡ってきたのなら、すぐさま斬りかかりに飛び出すだろう。

嫉妬と憤怒の炎が熱くて仕方がない。上がる温度に苛まれながらも、物吉は力を振り絞って叫ぶ。

「駄目です……あの宗三さんに、ボク達が敵うとは思えません！ 少なくとも応援は呼びましょう！ 一振りだけで立ち向かうのは無謀です！」

それでも、体は動かない。ぎり、と奥歯を噛み締める音が聞こえる。彼は敵を見据えて切り刻むタイミングを窺い続けていた。

物吉がそれでも更に言葉を重ねようと、口を開きかけた時だった。「……で？　そこでここそこそと覗き見しているのは誰です？　殺気がただ漏れなんですよ。そんなに強い殺意を向けるんです、僕を楽しませるくらいのはあるんでしょうね」

こちらに向かつて挑発を放たれる。まあそうなるだろうな、と物吉は逃げられなくなった現状に嘆息した。

彼はまだ表に出ない。必死に衝動を抑えて好機を探っているのだ。研ぎ澄まされ、膨らんでいく殺意を捻じ伏せるのは骨だろうが、冷静な部分が彼に残っていたのは僥倖だった。

だが、相手はそんな物吉の心情を慮る事などしない。

「……まあ、出て来ないならそれでいいです。精々臆病風に吹かれながら、あのふたりが壊されるのを見ていなさい。……あの女はいい悲鳴を披露してくれそうです。どうやって鳴かせましょうか。四肢を一つずつ落として、目をくり抜いて、口の奥に刀を突っ込んでみましょうか。……楽しそうですね」

ぶつん、と脳裏に何かが切れる音が響き渡る。はっと気が付いた頃には、体が宗三に向かって飛び降りていた。

ぎいん、と鋼がぶつかり合う。殺意を込めて上から叩き斬ろうとする彼と、それを難なく受け止める宗三。押し返され、弾かれた彼は大きく後ろへと引き、地面に着地して手をつき「敵」を睨み付ける。

「……コースケ!?　どうしてここに――」

ミサキが驚愕の眼差しで彼を見つめる。それでも彼は彼女の方を見ず、宗三の一挙一動を見据えている。

はあ、と宗三はまた怠そうに息を吐く。ぴくり、と己の顔面が引きつるのが分かった。

「よりによって同類ですか……同類を釣り上げた時の対応なんて聞いてませんよ、全く」

彼が苛立っているのを感じ取れる。まるで別の場所を見ているかのように宗三の意識が逸れ、目の前の殺気立っている存在を軽んじて

いるのだ。彼は舐められていると感じているのだろうか。

再び鋒を向けようとした彼へ、ふっと表情を緩めた宗三が語りかける。

「ねえ、貴方。僕達の仲間になるつもりはありません？」

体が強張る。何を言い出すのか。なりたてとはいえ審神者を襲撃した奴の仲間なんて、絶対にろくな物じゃない。

そう感じたのは彼も同じだったらしい。地を這うような声で、宗三を突っぱねる。

「……ミサキさんを害する奴の戯言なんて、聞くに値しない」

「判断するには早いんじゃないやありませんか？　僕は何も説明していませんよ」

「どうせそのろくでなし集団に入らないと、詳細は話さないでしょう」

「そうですね。でも同類が現れたので出血大サービスです、僕達の目的をお教えしましょう」

腕を広げた宗三は、まるで菩薩にでもなりきっているかのような笑みを浮かべる。それは物吉の知る宗三とかけ離れていて、背筋が寒くなる。彼は、一体何に魅入られているのか。

「僕達の目的は、この国をひっくり返す事。汚濁を隠そうとするこの国に一泡吹かせ、制裁を下す。その為になら命を散らそうが構いやりません。だって、国を驚愕と戦慄と絶望に墮とす事が出来るんです、これを命がけで楽しまずして何を楽しみましょうか！」

天を見上げながら歪んだ表情は、世界を嘲笑っているように見える。ミサキと加州が口をわななかせて、その狂気に震えていた。

この宗三は、外道に墮ちたとされる鶴丸の仲間なのだろう。言い回しからそう推測出来た。

審神者と連絡を取りたいが、怪しい動きを見せればすぐにでも宗三はこちらを殺しにかかるのは目に見えている。かと言ってここで離脱するなんて選択を、彼は取らないだろう。

そんな思惑を察しているのかいないのか、宗三は高らかに語り続ける。

「志を同じくした仲間が集まっているのですが、何せ数が少なくてもっと数を増やさないと、国を絶望に墮とす難易度は上がるでしょう。そんな訳で、どうです？　一緒にこの腐った国をひっくり返しませんか？」

歪な笑顔のまま、宗三は彼に手を差し出す。彼は黙り込んで睨み続けている。ミサキが心許なさそうに彼の様子を窺っていて、加州はそれに呼応するかのように戦闘態勢を解かない。

「……確かにこの国は、あちこちに汚濁を隠していますが……」

そこまで言ってから柄を一際強く握り、彼は強い口調で言い捨てた。

「そんな事を気にしていたらキリがありません。それにこの国がどうなるうがどうでもいい。——私はミサキさんを守ればそれでいい。そして、ミサキさんを傷付けた貴方は、私の敵だ」

「……残念です。貴方は、いい仲間になると思ったのですが……」

宗三が踏み込んで刀身を大きく横に振るう。鋒を屈んで避け、彼は地を蹴って宗三の懐まで入り込もうとする。振るわれた刀は刀身に食い止められ、再び斬り結ぶ。

澄んだ鋼の音が幾度となく響き渡る。刀を振るう彼を内側から眺め、物吉は焦燥感に包まれた。

——このままじゃ、押し負ける……！

17—8 「彼女のもとへ2」

刀身がぶつかる度に宗三の切れ味は増していき、彼は防戦一方になっていった。何度か彼の鋒が掠る事もあった。だが、宗三はそれを気に留めずに斬りかかって来る。

今までの彼ならば、宗三と同じように傷を気にせず暴れていた事だろう。だが、今はミサキがいる。

正気を失った姿を見られたくないのだろうか。嫌われる心配をしている余裕はないのだが、と思いつながらも、物吉には何も出来ない。猛攻に息を切らし始める彼に、宗三がつまらなそうに呟く。

「手応えのない……」

「ぐっ……はあ……っ！」

「仕方ありませんねえ。じゃあちよつとしたアクセントを加えましょうか」

宗三が手を翳し、銃兵を展開させる。銃兵が一方向に銃を構える。その銃口が狙う先は――

「――っ、ミサキさん!!」

「主、俺の後ろにいて!」

彼が悲鳴を上げる。ミサキの前に加州が立ちはだかっているが、十も鉛玉が飛んで来れば加州は無事で済まされないだろう。それに、一つくらいミサキに当たってもおかしくはない。

ミサキに傷が更につけば、完全に彼は正気を失うだろう。それを見越した行動なのか。

籬を外すために、ここまでするのか。物吉は内側で吐き気を催す。体はミサキの所へと駆け出していた。

発砲音が響き渡る。いくつか弾を食らうと覚悟していたのだが、衝撃は終ぞ来なかった。

「物吉さん、大丈夫ですか!？」

開かれた目の前には、ふわふわの桃色頭をした小さな背中。そしてその向こうに並ぶ、十一の兵達。

呆然と彼は、乱入者の名前を口にする。

「……秋田、君……どうして」

「すみません、どこへ行くのか気になって……傷は負っていませんか？」

春光隊にいたはずの秋田が、重歩兵を展開させて立っていた。こちらへ心配そうに声をかける一方で、視線は宗三から一切動かしていない。

内側で、物吉も動揺していた。どうして追いかけて来たのか。まだ精神的に万全ではないだろうに、無理を押ししてこちらへ来たのだろうか。

衝撃が収まらない中で、更に声が遠くから響く。

「あつ、長谷部さん！ 物吉いまし……ってなんで秋田までいるの!？」
「良かった、無事だったか……え、秋田、どうして」

こちらに駆け寄って来るのは、春光隊の鯨尾と長谷部だ。二振り共息を切らし、こちらの様子を見た鯨尾が抜刀している。

はあ、と息を吐き、宗三が顔をしかめる。納刀して、銃兵を消した。
「……興醒めです。そろそろ帰りますか」

「う、っぐ……何を、逃がすと、思つて——」

「まあ、こんななに囲まれているなら普通は逃げられないでしょうね。でもまあ分かつている通り、僕は普通じゃないので」

そう言つて、宗三はぽんと空中に何かを放る。同時にカツと激しい閃光と爆発音が広がり、思わず目を閉じる。

「また会う機会があれば。次は本気の力を期待していますよ」

耳と目を塞ぐ寸前、そんな置き土産が聞こえた気がした。

音と閃光が消え、目眩と耳鳴りに辟易しながら周囲を見渡すと、もう宗三はどこにもいなかった。

はあ、と息を吐く。脅威は取りあえず去つたが、懸念事項が増えた事には変わらない。報告しなければならぬ事案が発生して、物吉は内側で頭を抱える。

はたと気づく。まだ、体の制御が交代されていない。まだ脅威があるのか、と思つて視界を覗き見る。

正面に、ミサキの不安そうな顔が広がっている。彼が、それに愕然

としているのが感じ取れた。

「……ねえ、コースケ」

彼が、怯えている。何を切り出されるのか、どうしてそんなに不安そうにしているのか分からずに。もしかしたら、自分が戦闘をした事によって、あるいは守り切れなかった事によって失望されたのではないのかと震えている。

ミサキは、彼の全てだ。彼女に見放されたなら、彼が絶望に堕ちてもおかしくはない。そうしたら、自分はどうなってしまうのだろうか。

物吉もごくりと息を飲み込み、彼女の言葉を待つ。

「……私の事、嫌いになった訳じゃないの?」

「……え?」

ぽかんと口が開く。困惑しているその間にも、ミサキは震える声で続ける。

「コースケ、急に立ち上がって走って行っちゃうんだもの、何か私嫌な事言ったんじゃないかと思って……私、周りから鈍感だって言われる事もあったから、コースケがどうしていきなり席を立ったのか、完全に分かってないのかもしれない」

「……」

「私、酷い事言っちゃったのかな。謝りたいけど、悪い事が何か分かってないのに、謝るのは違う気がして……でも私、コースケに嫌な事をしたくないのよ。嫌いになったのなら、言っ。そうなら私は、ちゃんと距離を置くから」

見当違いも甚だしい、と物吉は思った。彼は、物吉を苦しめた嫉妬心を抱く程に、彼女が好きなのだ。加州という死ぬまで彼女の傍にいらだろう存在を妬み、言っ。はならない言葉を吐き出しそうになった。それに加州の話が出るまで、彼はとても幸せそうだったじゃないか。彼のそんな想いに気付かないとは、やはり彼女は酷く鈍い。

けれど、彼の心には何か響く物があつたらしい。——彼の周りにある、昏い炎の勢いが弱まっている。

「……わた、しは」

震える言葉は、自分への絶望が混ざっている。何て事をしてしまっ

たのか——そんな彼の自己嫌悪を、物吉は感じ取った。

「ただ、ミサキさんを守りたくて……でも、私じゃなくて別のひとが傍にいたのが、悔しくて……私だって、ミサキさんの傍にいたかった。楽しい話を、もっと沢山したかった。そんな顔をさせたかった訳じゃ、なかったのに」

「……」

「……私は馬鹿です。自分勝手な行動で、ミサキさんを不快にさせて……自分だけがミサキさんを好きじゃないかって、身勝手に悲しくなって……私こそ、貴女の傍にいる資格がない。ごめんなさい、もう、近付きませんから——」

「そんな事言わないで！——コースケ、私を嫌いになった訳じゃないの？」

大声でそう遮られて、彼は目を丸くした。そしてその後の問いに、恐る恐る頷く。

ミサキは胸を押さえ大きく息を吐いて、表情を柔らかく崩した。

「そっか。……良かったあ」

彼には、何が何だか分からない。こんな自分勝手な人間を、まだ彼女は好いてくれているというのか。自己嫌悪で胸を満たしている状態の彼に、どこか気恥ずかしそうにミサキは微笑む。

「本当の事を言うよね、コースケが実験に参加するって聞いた時、私かなり悔しかったのよ」

「え？」

「だって、コースケは自分の力で未来を切り開こうとしているのに、私は何もしようとしなかった。それが置いてけぼりを食らったみたいで、寂しくて悔しかったの。審神者になろうとしたのだって、コースケに負けない為だったのよ？」

対抗する話じゃないんだろうけどね、とミサキは頬を掻く。

「……守られるだけの、弱い人間でいたくなかったの。大切な家族におんぶにだっこじゃ、あまりにも情けなくて仕方なくて……だから、せめて自分の身を守る手段が欲しかった。審神者になったのは、そんな身勝手な理由よ。崇高な目的なんかじゃない。それでコースケ

を不安にさせたのは、本当にごめんなさい。でも、私は貴方の前に立
てる人間でありたかったの。ずっと病氣や人間関係で苦しかったで
しょうに、弱音一つ溢さなかった強い貴方の前に」

じわり、と視界が滲む。嗚咽を堪える喉が引きつって痛む。

大切な家族だと、思ってくれていたのだ。そして彼女の前で強がつ
ていた自分も、彼女は肯定してくれた。

彼女がそんなに己の弱さを疎んでいたとは知らなかった。彼女は
いつも笑顔で、守られる事をよしとしているのだと、勝手に思い込ん
でいた。

彼女は、決して守られるだけの姫君などではなかったのだ。

—— 相手を見ていなかったのは、私も同じだ。

大切な存在だと言われた嬉しさと、彼女の性格を見誤っていた情け
なさと。彼は涙を流しながら、ミサキに頭を下げる。

「ごめんなさい……私は、本当に身勝手だった……本当は守らなけれ
ばならないと思われるのだから、不快だったはずなのに……！ 挙句
の果てに傍にいられないからと癩癩まで起こして……ごめんなさい、
ごめんなさい……！」

「そうやって謝ってくれるだけで、充分よ。……不安にさせて、こっち
こそごめんね」

頭に、手を乗せられる感触がある。よしよし、とミサキに頭を撫で
られ、また涙がこみ上げる。

「……そっか、お前は主の家族だったんだね」

もう一つ、気配が近づく。頭を上げると、そこに立っていたのは加
州で、傷まみれになりながらも穏やかに笑っていた。

複雑なのは間違いない。けれど彼女は強くなりたがっていて、自分
ももう彼女の為だけに行動出来ない。だから彼は、加州に強い眼光を
向けて告げる。

「加州さん。……ミサキさんの事を、頼みました」

強い意思を乗せて見据えると、加州は力強く頷き、首を傾けた。

「勿論。でも、そんな今生の別れみたいに言わないで、いつでも会いに
来てよ。俺も主について、お前と話してみたいからさ」

「……え、嫌じゃないんですか」

「主の一番の人間はお前だけど、一番の刀は俺だし。そこは比べる所じゃないでしょ」

「……あーあ、簡単に認められるとは。私は何を悩んでたんでしょね」

「取り越し苦労って奴？」

「なんかそう言われると腹が立ちます」

そうして加州と笑い合うその内側で彼が真面目な顔で振り返り、ずっとその光景を見ていた物吉に語りかける。

「物吉さん、今回は……いえ、今回も迷惑をかけてすみませんでした」
「え」

突然そう言われて固まる物吉へ深々と頭を下げ、彼は謝罪を述べ続ける。その体は、少し透けている気がした。

「体を明け渡したのに、ずっと私の都合で振り回して……彼女を守る為とはいえ、もう少し貴方と話す機会を設ければよかった。それをしなかった私が、今更どの面を下げて言うのかと思うでしょうが……私はもう、消えようと思いません。今まで迷惑をかけて、本当に——」
「ちよ、ちよつと待って下さい！ 貴方が消える必要なんてないでしょう!？」

慌てて言葉を遮る。この期に及んで何を言うのか。

散々振り回した自覚が生まれたらしいが、それはもう今更だ。それを受け入れてくれる、いい本丸にだっている。

人間は自分勝手に生きなければ生き残れない。目の前の人間の命を不用意に絶つつもりなど、物吉にはないのだ。

「貴方の持った力は、隠れた時間遡行軍の発見に役立ってます！ それに、ボクはまだ貴方の事を大して知りません！ 何も知らないまま、大切な戦力を失う訳にはいかないんです！」

「ですが……」

「貴方は自分勝手に生きていいんです！ 人間とはそういうものではない!？」 どうしても言うのなら、ボクが勝手に貴方を存在させます！ 散々勝手をやって、すつきりして消えるなんて、ボクは嫌です

よ！」

今度はボクが貴方に勝手をする番です、と物吉は彼にビシツと指さした。

ほかんとした彼は、少し呆れたように笑い肩をすくめた。

「……酷い方です。罪悪感を抱えて苦しんでいる人間を、生かそうだなんて」

「今まで暴れ尽くしたツケが回ってきたと思って下さい」

「はは……そっか、それが私の罰かあ……」

困った顔をして笑う彼の体は、もう透けていない。それに安堵してから、体の制御を受け取る。

そうして物吉が意識を現実に向けた、その時だった。

「……爆発音がしたのはこっちですよね？」

「ああ、間違いない。一体何があったん——あれ、雲霄の物吉か？」

足音が二つ、こちらに近づいて来ている。ぱつとそちらを向くと、そこにいたのは真つ白な男と、それから——

「あき、た……う？」

「……っ！」

——驚愕に強張る、空色の髪をした太刀だった。

17—9 「やくやこのはな」

テヒラソメゴロウ
手平染五郎は、生まれながらの孤児だ。両親の顔は知らない、どんな人間なのかも興味はない。

彼が産まれてからへその緒が切られた頃の合いに、滑園の前に捨てられていたという。だからソメゴローにとっての家族は、滑園の人間達だけだった。

両親がいない事に少しだけ空洞を感じながらも、ソメゴローはすくすくと育った。たまに「卒園」していく家族を羨みながら祝福し、残った家族で毎日楽しく過ごしていた。勉強をさせられるのには辟易したが、それも生きていく為に必要だと信じていた。

ソメゴローが四歳の時に、蔵前朔夜は滑園の一員となった。捨てられた子供の例に漏れず、彼は部屋に引きこもり心を閉ざしていた。顔を覗かせる家族にも冷たく突っぱね、ずっと暗い顔で部屋の隅にいる。家族達は心配しながらも、なかなか彼の心を開かせられなかった。

諦めていく子供達もいる中、ソメゴローは決して挫けなかった。

——なーサクヤ、外に出ようぜ。いい天気だぞ。

——今日のおやつはシュークリームだって。一緒に食べようぜ。

——サクヤ、テストの点数どうだった？ 俺ボロボロー。

部屋に、もしくは布団に閉じこもるサクヤに話しかけ続け、時にはおやつを持ち込んで傍に居続けた。迷惑そうな表情など知った事ではないと構い倒し、ソメゴローはサクヤの心を何とか開かせようとしていた。

——お前、何で俺に構うの。

ある日、サクヤに冷たい声でそう問われた。うーん、と唸り声をあげてからソメゴローは答える。

——だってさ、家族が閉じこもってる心配じゃん。

——家族？ 会って時間も経ってないのに？

——ここに来た奴は皆家族だ。それに、悲しい時に捌け口があった方がいいだろ？

意味が分からない、と言いながらサクヤは拗ねたように口を尖らせる。

——何でそんなに開き直れるの。

——そう言われてもなあ、ケイケンとしか。俺親がないから、大切な事は皆から教わってるんだ。だからかな？

親がない、と告げた時にサクヤの顔が強張った。続く言葉を予想して、ソメゴローは手で制する。

——おっと、カワイソウとか言うなよ。俺はここで楽しくやってんだ。親がない事は少しフクザツだけど、それ以上に幸せなんだよ。あ、それとゴメンもいらさないからな。

口にしたかけた言葉を喉に落とし込んで、サクヤは俯く。膝の上で握られた拳が小さく震えているのを見て、ソメゴローはそれ以上言うのを止めた。

——俺は、いらぬ子なんだって。

そうして紡ぎ始められたのは、この園ではよくある事。だけど、当事者にとつては大きな事だった。

——出来の悪い子だから、新しく子供を作って俺は捨てるんだって。……どうして、俺、頑張ってきたのに……まずいピーマンだって食べたし、言われた事はちゃんとやってきた。勉強も、やったのに……何で……っ！

そう言って泣き崩れるサクヤに、ソメゴローは何も言わなかった。ただ黙って、背中を小さく叩き続けた。

涙を流し切ったサクヤが落ち着いてから、ソメゴローは彼に明るい笑顔を向けて手を叩いた。

——お前さ、何か凄く頭よさそう。ちよつと読んで欲しい本があるから、持ってくる！

本を運んでサクヤの前にどさどさと積み上げると、彼はぽかんとした顔をした。

——これ、全部読めって？

——もちろん、すぐじゃなくていいぞ！俺にはよく分からない言葉があつてさー、時間がある時に教えてくれればいいから！

——辞書とかあるんじゃないの、ここ。

——お前頭よさそうだから、辞書じゃ分からない事も分かりそうだし！

俺も頭よくなりたいなー、そう頭を回していると。

——つふ、あはは。何その俺への謎の信頼！

サクヤは、初めてソメゴローの前で声を上げて笑ったのだった。

そうしてサクヤの心を開かせたソメゴローは、分からない言葉があるとすぐにサクヤに尋ねに行った。図書室の存在を知り、そこにこもる事も多くなつたサクヤは、ソメゴローの疑問に答え、分からない場合は共に調べた。少々頭がよくないソメゴローに頭を抱えつつも、サクヤは楽しそうにしていた。

そうして日々が巡り、時折刀剣男士という不思議な男達が現れて一緒に遊ぶという非日常がありつつも、ソメゴローとサクヤは幸せに日々を重ねる——はずだった。

滑^レ園に殺人鬼が襲来し、サクヤが刀剣男士になってしまいうま度は。

文机の上で目を覚ます。涙の流れた痕が痛い。目の前に食べかけの練り切りがあつたが、食べる気にはなれなかつた。

ツクシや江雪が心配してくれているのは分かる。けれど、どうしても部屋の外に出る気にならない。

家族の大半が殺された。大切な親友は、魂を上書きされた。もう会えない家族達を思うと、また涙がこみ上げる。

ガキ大将だと呆れられつつも、ソメゴローは家族を大事にしていたのだ。いたずらをしたら叱り、テストでいい点数を取れたら褒めてくれたスギハラ、時折サクヤに構いに来ていたノギク、泣き虫で甘えただったコタロー、そしてサクヤ——皆、いなくなってしまった。

生き残ったのは、たったの九人。これからどうなるのだろう、いつそのまゝ消えてしまいたい——そんな気持ちだが、ソメゴローの中で渦巻く。

どうして自分達だったのだろうか。最初から、自分達は兵器になる為

に育てられていたのか。親友と家族を返してほしい。あの殺人鬼を殺したい。様々な感情が、浮かんでは消えていく。

どうしたらいいのだろう。そうは思っても、何もする気力が湧かない。再び文机に突っ伏し、ぼんやりと障子を眺める。

外から雨の音が激しく響く。ただただ屋根や地面に水滴のぶつかる音は、何となく荒れた心を鎮めてくれる気がする。ぴちゃん、と水溜りに滴る気配がするのも良かった。高く澄んだ、心地よい音だったから。

「……ちよつと、本当に大丈夫なの？」

「顔色が悪いですよ、少し休んでからでも……」

「つぐ……時間が、ないから……!」

外からバタバタと、廊下を歩む足音がする。何かあったのかと思ってもどうする気力もなく、ぼうつとそのまま動かず雨音に耳を澄ませる。

しかし足音は次第に大きくなり、こちらへと向かっているのが流石に分かった。何の用だ、と少し苛立ちながらのっそりと身を起こす。

障子の向こうに影が現れたのは、それと同時にだった。

「——ソメゴロー、起きてる?! 寝てても叩き起こすけど!」

ツクシがスパン、と障子を開ける。本当に何の用だと口を開こうとして、険しい顔をした彼女に口を嚙む。この顔をしている時は、真面目に話を聞かなければまずい。それでもむしゃくしゃした気持ちは消えず、棘のある口調で尋ねた。

「……何かあったのか、ツクシ」

「良かった、起きてた! サクヤ、ソメゴロー起きてたよ!」

は、と声が漏れ出す。今、ツクシはサクヤを呼んでいたか。

何の冗談だ。いやもしかしたら、サクヤが刀剣男士になったのが冗談だったのかも——そう願う心は、現れた青い髪に掻き消される。

息を切らしてこちらを見据える三白眼は、小夜左文字と呼ばれる刀剣男士の姿だった。やっぱり冗談じゃなかったと落胆すると同時に、押揃われているのではないかと怒りが湧いてくる。

笑えない冗談だ。ちよつかいに構っている余裕はない。出て行け

と、立ち去れと怒鳴ろうとした口は――

「……つソメゴロー、ごめん、何も言わずにいなくなつて」

――聞き慣れていた口調によって閉ざされた。

どういう事だ。サクヤの魂は、刀剣男士に上書きされたのではなかったのか。混乱するソメゴローに、目の前の三白眼は止めどなく話し続ける。

「やっと、意識を少し譲って貰えたんだ。本当は刀剣男士になつたつて、最初にお前に伝えるべきだったんだけど……でも、復讐の念に苦しんでるこのひとに中々話しかける事が出来なくて。春光隊に身を寄せて、少し休んで、やっとこつちの話を聞いてくれたんだ」

唸り声を上げて、三白眼は頭を押さえる。思わず伸ばしかけたソメゴローの手が、ふらふらと宙に漂う。

目を一瞬きつく閉ざし、再び開いた時には、三白眼の顔が焦りに変わっていた。

「くそ、時間がない……！ 手短に言う。ソメゴロー、俺はあの約束を忘れた訳でも、諦めた訳でもない！」

目を瞪る。あの約束とは、「感じたことリスト」と共に告げられたあれだろう。でも、まだ期待するには早い。全く違う約束を口にする可能性だってある――そうやって膨らむ心を宥める。

けれど、目の前の三白眼はその期待に呆気なく応えた。

「ソメゴローと一緒に、世界を見て回って約束、忘れてないよね？」

「……！ 俺は、確かにこのひとに体を渡した。けど、必死に頭下げて、普段は表に出ないからって言つて、ようやく口をきけるようになったんだ！ ……ソメゴロー。俺は絶対、諦めないから」

息も絶え絶えで、ふらりと体が揺らいでいて、三白眼はかなり苦しいのだと分かる。それでも必死に、彼はソメゴローに言葉を紡ぎ続ける。

「なん、で、そこまでして……」

苦しいはずだ、辛いはずだ。ソメゴローにそれを伝える為だけに、どれだけ辛い思いをしているのだ。

こんな、親友を失って萎れて何もしない自分に、何の価値があるの

だ。

自分には、親友が辛い思いをしてまで会いに来る価値が果たしてあるのか。自分は、親友がいないとただの馬鹿な子供だと言うのに。

俯くソメゴローに、三白眼は頭を押さえ顔を顰めながらも、必死に笑おうとしていた。

「寂しがり屋なお前の事だから、俺が来るまで不貞腐れてたんでしょ？俺が死んだんだって悲しみもしたんでしょ？でも、俺はまだ生きてる。姿は変わったけど、まだ魂はここにある！体を譲り渡して貰える時間を少しでも伸ばせるように、俺も頑張るから。ソメゴローも絶対、約束を忘れないでよ！」

三白眼の体が更にふらつく。目の焦点が次第に合わなくなっていく。多分、時間が迫っているのだ。

泣き出したくなる衝動を堪えて、ソメゴローは三白眼に叫ぶ。

「サクヤー！」

三白眼は、必死に顔を上げてソメゴローを見つめる。全く面影がないのに、似ても似つかないのに、親友の姿が重なって見えてソメゴローは熱くなる喉を震わせた。

「俺は今でも、お前の親友だよな？」

膝の上に手を乗せ、苦痛に喘ぐ三白眼を見上げる。掌が勝手に、寝巻きの布地を手繰り寄せている。

縫ってしまうのを、どうして止められようか。消えたと思っていた親友が、懸命に言葉を届けに来たのだ、

少しでも、繋がりががあると確かめたかった。きつともう、容易く会う事は叶わないとどこかで分かっていたから。

「——ああ。ずっと、お前は俺の親友だ。それと、こうなったのはお前のせいじゃない。変に気負う事はしないですよ」

それを最後に、三白眼の体が崩れ落ちた。隣に立っていたツクシが体を支え、ゆっくりと床に下ろす。

江雪が唸り声を上げる三白眼の体を抱き抱え、部屋の中を覗き込んだ。ほう、と息を吐いてからソメゴローの前に歩み寄り、目の前にゆったりと座る。

「……ソメゴロー君。私は貴方程付き合いが長くないので、確証が持てないのですが……お小夜の体はさつきまで、サクヤ君の魂が主導権を握っていましたよね？」

ぼた、と大粒の涙が畳に落ちる。一度堰を切ってしまったえば、次々と目から水分が溢れてくる。流れる物はそのままに、ソメゴローは膝の上で拳を握って大きく頷いた。

「そうですね。……お小夜には悪いのですが、サクヤ君が少しの間でも戻って来てくれて嬉しいです」

また、大きく頷く。泣き声だけは出さないように、ソメゴローは口を引き結んでいた。

ツクシも中に入って来て、ハンカチでソメゴローの目を拭う。ツクシは決して揶揄おうとせず、黙って涙を拭き続けていた。

少しの間でも、親友に会えた。もう二度と会えないと思っていた親友に。

彼はソメゴローとの約束を果たす為に、戦い続けていた。そしてこれからも、戦い続けるのだと言う。

何もしなかった自分を悔いる。そして出来る事が少ない無力な自分も、また情けなかった。涙と共に溢れ続ける感情を、少しずつ決意に変えていく。

ピンポーン、とインターホンが鳴る。江雪が三白眼を抱えて「少し失礼しますね」と部屋を去って行った。ツクシもその後を追おうと立ち上がりかけた。

「ツクシ」

涙声なのに強い意志を感じさせる響きに、思わずツクシは立ち止まって振り返る。

目の中に、強い光が宿っている。いつものおちやらけた雰囲気などまるでないその顔に、ツクシは膝について視線を合わせた。

「……話がある。聞いてくれるか」

ツクシは頷き、正座をして話を聞く姿勢に入る。

——彼女もまた、いつしか心に宿り、サクヤの来訪で固まった決意を話すつもりだった。

病院の廊下で、電話のボタンを押している影があつた。受話器を耳に当て、コール音に耳を澄ませている彼は、ぷつりという音の後に聞こえて来た声に話しかける。

「……もしもし、ツクシ？ ……うん、俺は大丈夫。食事も摂つてるし、リハビリも順調。もうすぐ退院だから、いくらでも手伝う——」
影の言葉が、不意に途切れた。しばらくしてうん、うん、と頷き、受話器を握り締めて力強く窓の外を見る。

「……それを聞いて、俺も決めた。どんなに後悔する事になつても、もう弱いままなのは嫌だ」

——夜の帳が下りて静まった病院で、一つの決意が形を成した。

カラオケボックスから出た直後に、耳を劈く爆発音が聞こえた。

氷雨の鶴丸と顔を見合わせ、一期はすぐさま音源の方向へと走る。もしかしたら、あの場所に自隊の鶴丸がいるかもしれないと思ったのだ。氷雨の鶴丸も、彼の隊の堀川がいる可能性を考えただろう、一期と並走して音の方へと駆けた。

到着した場所には、複数の人影があった。そこにいたのは、すらつとした女性と彼女に寄り添う加州、物吉、春光隊だろう長谷部と鯨尾。残念な事に、自隊の鶴丸や氷雨の堀川はいなかったが――

「……………」

一期を見て息を？む、自隊の秋田がいた。体を震わせ顔を青ざめさせている彼は、一期から目を逸らそうとしない。もしくは、恐怖のあまりに動けないのかもしれない。そう思った。

そこまで考えて、一期の心は少くないダメージを受けた。だが、そうも言っていられない。

謝らなければならない。秋田を傷つけたのは、逃れられない事実なのだから。

一歩近づいて、秋田と目を合わせる。口を開こうとしたが、秋田の目に浮かぶ恐れの色に、言葉を紡げない。

どう言えればいい。早く謝らなければ。不用意に謝って傷つけないだろうか。嫌われるのが怖い。ぐるぐると回る感情は、一期の口から言葉を奪う。

「雲霄の物吉だよな？ 何があったんだ」

「……………氷雨の鶴丸さん、どうしてここに」

「まあちよつと気晴らしにな。……………傷を負っているが、大丈夫か」

「ボクは大丈夫ですが、そちらの加州さんが審神者様をかばって中傷に……………早く手入れをした方がいいと思います」

「動けるんだから俺は大丈夫だよ。ただ、報告はした方がいいよね？」
「はい。……………まさか、被験者の宗三さんがミサキさんを襲撃するだなんて……………」

「は？ 宗三が、襲撃？」

秋田も、言葉を探しているようだった。青い目が凶暴な存在に怯えるかの如く、うろろうろと彷徨っている。

沈黙が痛い。自業自得とはいえ、弟と気まずい雰囲気になるのは辛かった。

「俺達が着いた時には、閃光弾を放り投げて逃げ去っていましたがね……。というかあの宗三さん、銃兵使ってた気がするんですけど見間違いですか？」

「……見間違いじゃないよ、どこかの刀剣男士。俺は刀装の事をちよつとしか知らないけど、銃兵って打刀には使えないんだよね？」

「使えないな。……銃兵を操っていたのか、その宗三は。どんな手段を使ったんだか」

「あの、氷雨？ の鶴丸さん。私の端末、壊れちゃって……。通報するの、端末を持っていたら貸して頂けますか？」

「分かった。……君は、その加州の主か？」

「は、はい」

「審神者になりたてと見たが、いくら刀剣男士がついてるとは言え夜間に出歩くのは危ない。審神者がいなければ刀剣男士は力を落とす、だから審神者は敵に真っ先に狙われる可能性が高い。くれぐれも、刀達の肝を冷やさないでやってくれよ」

「肝に銘じます……」

黙っているのは駄目だ。何か、何か言わないと。ああでも、一体どう言えばいいのか。

一期は、喧嘩の仲直りの仕方を知らない。友達とは喧嘩らしい喧嘩をした経験がないし、秋田以外の弟達とは仲良くやってきた。審神者も短気だが、一期と喧嘩に発展した事はない。

いたずらに謝るのが、不快にさせてしまう事を知識として知っている。だからこそ、ただ「ごめん」と言うのは違う気がして、一期は口を噤んでしまう。情けない事この上ない。

「秋田」

秋田の背後に立った長谷部が、小さな肩を叩く。秋田が継るように

後ろを見上げると、長谷部は至極真面目な顔で告げた。

「昼間、物吉が話していた事は覚えているな？ どうやら目の前にいるお前の長兄は、謝り方のバリエーションに苦しめられている臆病者らしい。——だから、お前から言ってみてやれ。存分にな」

一期に対して棘のある言葉とは裏腹に、秋田を見る目は凧いでした。ただひたすらに、秋田の心を思いやっているのが分かる。

秋田は微かに頷き、再び一期に顔を向ける。そしてきつと顔を険しくさせ、拳を握って大声で叫んだ。

「——いち兄の、おたんこなすっ!!」

拙い罵倒が、その場で残響する。話していたもの達もぎよつとこちらを向いて、声の主を見ていた。

一期も、秋田の罵声に驚いた。だが呆けている余裕はない。自分は、秋田の言葉を聞かねばならないのだから。

「何が皆愛しているですか、何が皆可愛いですか、ちつともこつちを見なかつた癖に！ どんなに叫んでも、どんなに具合が悪くても、ちつとも気付かなかつた癖に！ 輪の中に入れなくて寂しかった、弟として愛されないのが悲しかった、存在を軽んじられて苦しかった、最後には貴方の姿を見るだけで辛かった！ 僕が春光隊に逃げ込むまで振り向こうともしなかつたのに、今更、今更何なんですか……っ!!」

はあ、はあ、と息を切らしながら、秋田は目から涙を溢れさせる。鼻をすすり、嗚咽を漏らしながらも、心情を吐露し続ける。

「僕だって……僕だって皆と仲良く遊びたかつた！ 戦果が良かったら、よく出来たねって褒められたかつた！ ……兄弟として、いっぱい話したい事もあつた！ なのに、願つた事は何一つ叶わなかつた！ どんなに期待しても願つても裏切られるのなら、何も期待しない方が良かったのに……っ!」

すぐにも叶えてやりたい願い達を秋田は羅列する。ささやかな願い達だ、無理難題などでは決してない。

それを今まで、自分は無視し続けていたのか。軋む心臓に顔を歪めながらも、一期は秋田の言葉に耳を傾けた。

「何で、今になって兄の素振りを見せるんですか！ どうして、歩み寄

るような素振りを見せるんですか！ ……そんなの、期待しちゃうじゃないですか！ 今度こそ受け入れてくれるって、愛して貰えるって、浮き立つちゃうじゃないですか！ もう裏切られるのは嫌なんです、中途半端な意思なら近付かないで下さい！ ……もう、もう、辛い思いは嫌だ……っ!!」

うわああん、と秋田は声を上げて泣き始める。秋田とは違う小さな姿が重なって見え、真正銘の幼子も泣いているのだと分かった。

ああ、と心の中で呟く。本当に、自分は彼に失望されかけていたのか。そこまで見限られていたのに、まだ自分を兄だと思ってくれていたのか。

手遅れにならなかった事を喜ぶべきか、そこまで追い詰めていた自分を責めるべきか。

混ざって複雑な色に変わる心の内を、一期はそのまま表情に出す。自分がどんな顔をしていたのかは、分からない。

「……私は、本当に無神経だったのだね」

膝をつき、秋田に視線を合わせる。秋田は首を振って、嫌だ嫌だと言っただけだ。

ひつく、としやくり上げる秋田をしっかりと見据え、一期は懺悔を紡ぎ出した。

「違和感があったのに、それを気にかけてくれないしなかった。外で友達が出来た事に浮かれて、お前の寂しさに気付くこともしなかった。……散々色々なひとに忠告されていたのに、それを活かそうとしなかった」

まだ、間に合うのなら。もしも、許して貰えるのなら。今度こそ、この小さな手を見失わないようにしよう。

気配が薄いこの弟を、何度でも探しに行こう。ひとりでいるのなら、輪の中に引き入れよう。いい事をしたのなら、頭を撫でてちゃんと褒めよう。

それで、失った信頼が簡単に戻るとは思わないけれど。出来る事から、この弟の傷を癒そう。

ちやんと、この弟と向き合おう。それが小さな子達を傷付けた、一

期に出来る償いだ。

「ごめん。……ごめんなさい、秋田。お前を、ちゃんと見て来なくて。いっぱい、いっぱい傷付けた。酷い事も、沢山しただろう。恨みたいのなら、恨んでくれて構わない。私は、それだけの事をしたのだから。でも私はようやく、お前を見つける事が出来たんだ。私は、お前の……お前達の手を離したくない。もう一度、最初からやり直す事を、許してくれるかい？」

手を差し出す。この手を取ってくれるのかは分からないが、自分の心は分かって欲しかった。分かった上で受け入れられるか、突っぱねられるか。小さく震える手を、悟られないようにと願った。

目を見開く秋田は、一期の顔と手を見比べて涙を一つ落とし俯く。駄目か、と気落ちしたが、秋田の手が動き出したのを見て持ち直す。ふるふると、小さな手が伸びては引つ込められる。宙に揺れる手が行き先を決めるまで、一期は手を差し出したままにいるつもりだった。

そして小さな手が、一期の手に触れて。——恐る恐る、掌を握られた。

一期も、手を握り返す。触れている柔らかな温度を噛みしめつつ、穏やかな優しい笑顔で秋田に告げた。

「……私は、一期一振。栗田口吉光の手による唯一の太刀。——お前達の、兄だ」

名乗りを上げ、秋田の手を優しく握り締める。秋田の小さな呼吸が、震えている。手に伝わる緊張が、一期の心拍数も上げていく。

どれだけ静かな時間が続いた後だろうか。頼りなく震える声が、秋田の口から溢れた。

「……僕は、秋田藤四郎です。そして——僕の名前は、ナルカミチアキ鳴神千明」

そうか、と頷いてまた微笑む。唇を噛んでいる目の前の弟の手を、一期は優しく包み込んだ。

「秋田に、チアキか。……随分遠回りしてしまったけれど、ふたり共。これからよろしくね」

そして、秋田の頭に手を置く。優しく撫でると、秋田の目から再び

涙が流れる。

拭おうと手を移動しかけて、どん、と体に走った衝撃に手の行き場を失う。衝撃の出所を見ると、秋田の桃色の頭が肩口に寄せられていた。よくよく気配を探ると、胸の辺りに服の布地が集まっているのが分かる。

抱き着かれている。そう判断した一期は、再び秋田の頭に手をやって、軽く抱き寄せた。

泣き声が聞こえる。けれどその声は、先程までの悲痛さが少し薄れているような気がした。

「二期」

後ろから肩を叩かれる。視線だけ後ろにやると、胸のつかえが取れたような表情で鶴丸が笑いかけていた。

「良かったなあ、よく頑張った。ぎこちなさが取れるまで長いだろうが、これから心を通わせられるといいな」

「……はい。鶴丸殿も、ありがとうございます」

「俺はほとんど何も出来なかったがな。でもまあ、その光景を報酬として受け取っておくさ」

いたずらっぽく目を細める鶴丸に、小さく笑みを浮かべた。そうだ、雲霄の鶯丸にも礼を言わなければ。

散々迷惑をかけたのだ、何か奢るくらいはした方がいいだろう。パティスリーガザニアでケーキを買いおうか、と礼の内容を考える。

「秋田。これからどうするかだが……まあその様子だと」

「聞くまでもなさそうですね」

少し離れた場所で、長谷部と鯨尾がそう言って笑い合っていた。彼等にも、秋田の心を癒す手助けをして貰った。

それに長谷部は、黙りこくってしまった自分達に発破をかけてくれたのだ。最終的に仲を繋いだのは彼だろう。

一時期秋田に会わせて貰えなかったが、それも秋田のメンタルを気にかけての事だと分かっている。それに秋田の心を手当し、ここまで導いたのは春光隊の面々だ。

返し切れない恩が出来た。けれど、それを重たく感じる事はない。

優しいひと達に優しきで報いたいという、一期の思いは変わらない。

「いち兄。春光隊でもう一泊してもいいですか？」

「え、いいけど……どうしたんだい？」

ぱつと顔を上げて、秋田が外泊を請う。許可を出した後にやはりまだ一緒にいるのは気まずいのか、と尋ねると、秋田は首を振って否定した。

「他の利用者に、まだお別れを言っていないくて……楽しい時間を過ごせたから、少しでもお礼を言いたいんです」

「そうか、それなら泊まっておいで。……あ、春光隊の方々もよろしいですか？」

「勿論大丈夫！ 明日、責任を持って送り届けるからね！」

びつと親指を立てて鯨尾は明るく笑う。秋田がほつとした雰囲気を感じ取って、一期は再び頭を撫でた。

時計を見ていたミサキが、一段落ついた空気を読んで声を張り上げた。

「そろそろ政府の方が来ます、現場にいた方は準備を」

「あ、何か秋田君や一期さんの事でいっぱいになってましたが……」

「そういやそれがあつたな……」

「歌仙さんから帰って来いって通知がいっぱい……秋田、ひとりで大丈夫？」

「はい」

「付き添えなくて悪いな。小夜は大丈夫だったんだろうか」

「まあ歌仙さん達が帰ったのなら、何らかの成果はあつたんでしょうね」

現場に残る三振りが、ミサキの周りに集まる。鯨尾と長谷部も物吉に後を託し、足早にその場を去っていく。

「俺達も帰るか。秋田が帰ってくるのが楽しみだな、一期」

「ええ、本当に」

軽妙な表情を浮かべる鶴丸に、一期は心からの笑顔で応えた。

17—11 「朝を告げる鐘が鳴る」

その日の朝は、ここ数日の例に漏れず、薄暗い天から水滴が落ちてきていた。

不穏な気配がありつつも、いつも通りの日常が始まる。そう思っていたものが大半だった。

——その「いつも通り」が覆されると知らぬまま。

「妹君、これはどこに置く?」

「あ、それは倉庫に持って行って下さい」

「うげえっ! 何これ埃まみれじゃん!」

「何で建物が壊れる度に修理するのに埃は溜まるのか……」

「政府の調査員が来るの後何分くらい!?!」

氷雨隊本丸はかなり慌ただしかった。何せ急に「審神者の監査が入るからある程度片付けろ」と命じられたのだ。

急な事だったので、本丸の刀達の青ざめようといったらそれはもう凄まじかった。審神者の監査とは言うが、絶対に刀達の様子も調べられる。執務室にこもりきりの審神者に代わって妹・夕立が指揮を執り、本丸全体の清掃が始まった。

「……これで俺達の白が証明出来ればいいんだがな」

「鶴さん、何か言った?」

「いや、何でもないぜ」

鶴丸は、審神者の監査ではなく本丸全体——主に背信者とされる堀川——の監査だと知っていた。だが、今ここに背信者はいない。

堀川は単独行動で、氷雨隊は関係ないと信じたかった。だからこそ、鶴丸は調査員どんとこいと構えていた。

しかし、その余裕はごみを捨てようと玄関へと向かっていた時に覆された。

「——誰ぞ! おらぬか!?!」

今の所演練場でしか聞いた事のない声が、玄関から響き渡る。ごみ袋を握ったまま鶴丸が玄関へ走ると、赤い和装をした烏の羽を思わせ

る髪を結った刀が立っている。

「小烏丸？ 君が今日の調査員か。でも時間には少し早いんじゃない？」

「鶴丸か。丁度いい、外を見よ」

小烏丸にぐいぐいと外に引つ張り出され、正門から顔を出す。そして、目を剥いた。

——微かな光さえ飲み込む、刀を持った漆黒のヒトガタ。かつて調査部隊の面々で退治したはずのそれらが、わらわらと湧いていたのだ。

「な、何だこれ、何があった!？」

「……我等が後手に回ったという事よ」

小烏丸に、余裕のある素振りはない。その様子に、その言葉に、鶴丸は事態が大きく動き出したのを察した。

「氷雨隊第四部隊に緊急指令だ。——『時空犯罪特別対策局大住区域支部に集合し、敵を討て』。以上」

その日の早朝。蒼穹の一期は、城下町に向かっていた。

今日、いよいよ秋田が帰ってくる。その事実がどうにも落ち着かず、城下町でランニングでも、と思い立ったのだ。

朝の城下町は、静けさに満ちて新鮮だ。まるで町がまだ寝惚けているかのような感覚を覚える。

しばらく走っては引き返してを繰り返す。それを何回行っただろうか。

遠くに、一つだけ大きく飛び出した、小さな集団が見える。大きく飛び出している姿に見覚えがあり、一期は笑みを浮かべた。

「江雪殿！ 朝から早いですなー！」

そう言いながらその集団に近付き、鮮明になった集団の様子に首を傾げる。

予想通り、それは清澄隊の江雪と滑園の子供達だった。だが子供達は恐慌状態で、江雪も顔面蒼白になっている。

「江雪殿、どうなさい——」

「二期、ソメゴロー君達を見かけませんでしたか!?!」

悲痛な声でそう叫ばれ、気圧されたまま二期は首を横に振る。そう
ですか、と力なく項垂れる江雪に、二期は恐る恐る尋ねた。

「ソメゴロー君達がいなくなったのですか?」

「はい、朝起きたら……。ソメゴロー君とツクシさんと、病院にいるはずのタイガ君が姿を消していて……。どうしましょう、三人に何かあったら……。!」

「私も手伝います、三人の事は心配ですし」

「お願いします!」

「では手分けして町の中を——」

探しましょう、と言いかけた二期は、背筋を凍らせる。気配の方向
にぱつと振り返ると、そこにあつたのは——

「……。つわあああつ、お化けえええつ!」

「なんで朝からお化けが出るんだよ!」

「怖いよ、江雪さん!!」

子供達が恐怖によって正気を失くしていく。それも当然だ。

「……。二期、あれは……」

「……。成れの果て……。どうして……。!?!」

——染み出し始めた朝の光すら飲み込む、漆黒のヒトガタが次々と
立ち上がっていたのだから。

「低品質情報生命体、数が増えています!」

「すぐに現世との接続を断ち切れ、町の中で事を収めるぞ!」

「町の人達に警告は!?!」

「もう出した、後は興味本位で出ていく奴が出ない事を祈るしかない
な!」

雲霄隊本丸は、バケツをひっくり返したような騒ぎになっていた。
あちこちの手伝いをしているとはいえ、主に時空の管理を担当してい
るこの本丸は、現在総出で町の異常に対応している。

「鶯丸様、睡眠不足でしょう? 少し休んでは……」

「そう言っている場合じゃないのは流石に分かるぞ、平野。だがその

気持ちはあるがたい。全てが終わったらゆつくり茶でも飲みたい物だ」

そうですね、と言って平野は再び端末に向かう。鶯丸も作業に戻り、未だに慣れない手付きでキーを叩いていた。

——物吉、無事だといいが……。

森の中の本丸に身を寄せている仲間へと思いを馳せる。現実逃避だとしても、心配なのは本当だ。

昨日物吉は、ある事件に巻き込まれたのだという。事情聴取を受けて、戻ったのは夜遅くのはずだ。それでも今日このデッドヒート中の本丸に帰還するというのだから、その身を案じるのも当然である。

ばたばたと足音が近づいたと思ったら、勢いよく障子が開かれる。そこに立っていたのは審神者だった。

「第一部隊、すぐに出陣の準備を！」

「主、どうしたの!？」

「何かありましたか?」

焦燥感に満ちている審神者が、聞いていたものを愕然とさせる最悪の事態を告げた。

「——対策局が襲撃を受けた! 侵入者である刀剣男士は次々と職員を殺害している、このままでは政府要人も殺されかねん! 要人の殺害は何としてでも阻止してくれ!」

「さーて、それじゃあ秋田と物吉を本丸に送り届けますよー!」

「これ、全員で行く必要あったのか……?」

「まあまあ、他の本丸を見るのも小夜さんと五虎退さんの役に立つだろうし」

「えっと、取りあえずどこから行くんですか……?」

「まずは物吉の本丸からだ。政府直属の本丸だからすつごいぞー」

春光隊の六振りと利用者の四振りは、森の中を進んでいた。まるで遠足のような雰囲気、賑やかな会話をしている。

無事に立ち直った物吉と秋田を元の本丸に返す為、これから雲霄隊と蒼穹隊に向かうのだ。

普段通り、二振りの本丸近くまで送る。それで、今日の予定は終わるはずだったのだ。

——それと邂逅したのは、森の外へ出てからだった。

「……？ あれ、あの蛍丸、こっちに向かってないか？」

「え？ 一体、何——」

尋常ならざる速さで、こちらに突っ込んでくる蛍丸。その大きな刀身を振りかぶり、大きな動作で斬りかかる。

その鋭い目は長谷部を映していて——

「——っ、ぐっ……！」

「……ちっ、防がれたか」

咄嗟に前へと出た鯰尾が、抜刀してその凶刃を受け止めた。ぱつと、その場に紅い花が散る。

「——鯰尾!!」

崩れ落ちる家族を見て、背後で見ていた長谷部が悲鳴を上げた。

「時は来たれり」

白い戦装束をはためかせ、その刀剣男士は高らかに笑った。

屋上から見える足元には、黒く立ち込めるヒトガタと、時間遡行軍のレプリカ。

そして、容赦なく振るわれる刃から逃げ惑う、政府の人間。

「精々楽しませてくれよ、俺達を苦しめた分だけさあ？」

下方で繰り広げられる紅い惨劇を、歪な笑顔で見つめるその刀。

刀身を天に向け、勢いよく振り下ろす。そして彼は、長い一日の始まりを告げる言葉を叫んだ。

「——さあ、大舞台の始まりだ！」

番外編「その虚しさよ、遠くあれ（前）」

——ここ、どこだ？

シャツターの降りている店も多い古びた商店街で、鯨尾は呆然と立ち尽くしていた。周囲を見渡すと、他の人影はどこにもいない。

——確か俺、さつき普通に布団に入ったよな？

春光隊の新たな本丸となった壊れかけの家を雨風を凌げる程度に修復して、使われていなかった押入れから萎びた布団を出して敷き、眠りについた所までは覚えている。空調も無く、掛けているのは薄っぺらい布団一枚だけ。ぶるぶる震えながら意識を夢の中へと追いやったのだろう、と考えて思い至る。

——そっか、これ夢か。

明晰夢という奴だろう、と判断した鯨尾は、とりあえず商店街をぶらぶらと探索する事にした。

どこもかしこも薄汚れていて、シャツターにはカラフルで下品な落書きが、地面には空き缶や紙屑などのゴミが散乱している。電柱には金融会社や風俗店のチラシが貼り付けられていて、治安の悪さを思い起こさせる。人通りが少ないのは、太陽が頭を出したばかりである早朝だからだろうか。

少なくとも、居心地がいい場所ではない。立ち去ってしまいたいが、いくら明晰夢でも夢の舞台までは変更出来ないだろう。誰かいないかなあと歩いていると、小さな横道から怒鳴り声が聞こえて来た。

走ってその声の在り処まで向かう。着いた先には小さな木造二階建てのボロアパートがあった。

「…………この家、まさか」

鯨尾がそう呟いた直後。アパートの一室、上の階左側のドアから髪の毛の長い子供が飛び出した。

いや——弾き出された、というのが正しいか。子供は柵に頭をぶつけ、頭を押さえてその場に座り込んでいる。

「化物が、しばらく頭を冷やしなさい！」

「待って、お母さん！ お兄ちゃんが凍えちゃ——」

地味な装いだがヒステリックな性格も窺える女性が、そう言つてドアを閉める。中からそれを止めようとした幼い女の子の音が、ドアに遮られる。

圧倒されていた鯨尾だったが、子供が身動きをしているのを見て衝動的に走り出した。凹凸のある地面を蹴り、錆びて穴が所々空いている鉄の階段を上り、子供のいる所まで駆け寄る。

「君、大丈夫!？」

「う、あ……」

痛みに苦しむ声を上げるその子供は、鯨尾を見て訝しんでいるのを隠せていない視線を向けた。それはそうだ、目の前にいるのは知らない人間。その人間が自分を心配しているかのような振る舞いをしていくのだ。子供の境遇を思えば、警戒していてもおかしくない。

「安心して、俺は何もしないよ。……信じて貰えないかもしれないけど」

「……」

尚も不審さを剥き出しにする子供に、はたと鯨尾は気が付く。

「あー、こういうのは犯罪者の常套句か。うーん、どうしたらいいかな……そうだ!」

鯨尾は腰に下げていた刀を手を持ち、子供の前で掲げる。

「俺が何か君に変な事したら、この刀を折っていい。ほら、持って」
「……?」

「これは俺の命に関わる大事な物なんだ。もしこれが折れたら、俺が死ぬと思ってくれていい。……これで、何とか信じて貰えないかなあ」

命に関わる、と聞いて子供の目が見開かれた。刀と鯨尾を見比べてから、どうして、と震える声で問う。

「どうして、そこまで……」

「どうしてって言われてもなあ」

本当の事を言っても、信じられないだろう。だって先程の刀と命を結び付ける以上に、荒唐無稽な話だ。

目の前の子供にどう話したらいいのか考えていると、小さくドアが

開かれた。細い隙間から、女の子が顔を出している。

「お兄ちゃん、その人誰？ 何でお兄ちゃん刀持ってるの？」

「えっと、かたな？ っていうのが、この人の命に関わる物なんだって。俺が変な人だと思って見てたらこの人が、俺に何かしたらこれを折っていいって」

「えっ!? そんな大事な物、どうして……」

二人の子供が、鯰尾を不安そうな目で見つめている。そりやそうだよなあと思いつつ、鯰尾は外にいる子供の頭を掻き撫でた。

「だって、君みたいな子が痛そうにしてたから。心配するのは当然でしょ?。」

——目の前にいるのは、慕っている主と大切な家族、その過去の姿なのだから。

刀を持つ男の子の歩くスピードに合わせて、ゆっくりと商店街を歩いていく。重そうにふらふらとよろめきながらも刀を離さない男の子に微笑みながら、鯰尾はある店を指差す。

「ねえ、あの店は何？」

「……八百屋さんだよ。ちよっとお金にうるさいおばさんがやってるんだ」

「そうなんだ。いつもそこで野菜とか買ってるの?。」

「うん。……こんな話で、楽しい?。」

「楽しいよ」

そっか、と言って男の子は八百屋に向かって進んでいく。鯰尾は後ろで手を組み、その後をゆっくりと追った。

鯰尾をどこで信頼したのかは分からないが、女の子は鯰尾に「お兄ちゃんとしばらくの間一緒にいて欲しい」と頼んで来た。曰く、自分達はこれから集会に向かわなくてはならないので、その間男の子に何事もないようにそばにいて見てくれるとありがたい、と。男の子は一人でも何とかすると言っていたが、女の子が「お兄ちゃん頭思いつ切りぶつけたでしょ。後で何かあったら怖い」という内容を鬼気迫る勢いで捲し立てたので、鯰尾と揃って頷く事になったのだっ

た。

男の子が刀を鯰尾に一度返してから八百屋の戸を叩くと、中から老いた女性が現れた。店主であろう女性は眉間に皺を寄せて男の子と後ろにいる鯰尾を睨む。

「……何だいその金の匂いがする優男は」

「分からないけど、いい人です。後この人には優しくして下さいね」

「言われなくても、金の湧く泉を汚す気はないよ。入りな」

いつもの事だと言わんばかりに中に入る男の子と、かなり銭ゲバな性格をしているであろう女店主に引きながら鯰尾も店内に入った。鯰尾が下げていた刀を舐め回すように見ていたし、男の子が持つていたら取り上げられていたかもしれない。そう思うと軽く寒気がした。

店内は陳列棚にきゅうりや大根、ねぎをはじめ、トマトやズッキーニといった鯰尾も最近知った野菜達も並んでいる。他にはすいかやりんご、みかんや苺といった果物も置かれていた。

きよろきよろと店内を見渡していると、男の子が鯰尾の裾を引っ張り、店の奥を指差す。

「……買い物は店の奥でするんだ。そうじゃなきや、お金を盗られちゃうから」

大変だなあと呆れながら店の奥へと向かう。小さなちゃぶ台と棚が置かれているその部屋の明かりを点け、女店主は部屋の奥側に歩く。ちゃぶ台の前にどかっと座り、ふたりを見据えて女店主は座りな、と告げた。

言われるままに女店主の反対側に座り、購入する物を告げようと男の子は口を開く。

「えっと、じゃがいも三個、玉ねぎも三個、にんじんは二本……あとは……」

「何だい、他に買う物があるのかい？ 私は大歓迎だけどね」

「はい、何か果物を買おうと思って」

男の子がそう言うと、ぎよろりと目を開いて女店主は訝しむように言う。

「……珍しいね。母親が許したのかい？」

「いえ。……たまにはいいかなって」

「あの宗教狂いがお布施以外で無駄遣いを云々、と怒り狂わない光景が思いつかないよ。悪い事は言わない、買うのは止めときな」

嫌な想像をしたのか、男の子は俯いて黙り込む。顔に影を落とし目を伏せ、小さな拳を握りしめていた。

鯰尾はポケットの中を探る。がさがさとした音の後、望んでいた感触に行き着いた。迷いなくそれを引き出し、女店主に差し出す。

「店主さん、これで何か果物を買えませんか？ ……果物くらい、食べさせてあげたいんです」

鯰尾の掌に乗っていたのは、五百円玉。女店主はふん、と鼻を鳴らし、受け取り立ち上がる。

「これならみかん一袋にお釣りだ。金払いのいい奴で嬉しいよ。……商品を取ってくるから待ってな」

女店主はドスドスと部屋の外へと消えていく。

足音が遠くなってから男の子は鯰尾を見上げて、ごめんなさい、と眉を八の字にした。

「えっ、何で君が謝るの？」

「……だって、お兄さんにお金を出させた」

「これくらいどうって事ないよ。君が気にする必要は全くない。俺が君に果物を食べさせたって思ったから、勝手に買ったただけだよ」

「でも……」

泣きそうになっている男の子の顔を見ると、かつての「彼」の表情が重なる。明晰夢だとしても、この少年が涙に暮れるのは見たくなかった。

がっ、と両手で男の子の頭を掻き撫でて、鯰尾は明るく笑って見せた。

「分けようよ。俺と君と、それからあの女の子と。そうすれば、三人で幸せな気持ちになれる。これなら誰も損をしない、むしろ独り占めする方が俺に精神的に負荷がかかる。これははれっきとした取り引きだよ」

「……」

「俺が幸せな気持ちになる為に、この提案を受けてくれないかな？」
男の子は髪をくしゃくしゃにされながら黙り込む。しばらくしてからまだ不信感は抜けていないものの、か細い声で答えた。

「……分かった。お兄さんが、それで幸せになれるなら」

「よし、決まりだね」

——本当に、この子は素直だ。あのヒステリックな母親の側にいたという事実を、疑ってしまう程に。

もし、もしも、本当にこの子ともっと早く出会えていたのなら——
撫でる手を止めないまま、鯰尾は心の中に言い様のない暗雲が立ち込めるのを感じていた。

女店主に見送られ、鯰尾と男の子は八百屋を後にした。次はどこへ行こうかと鯰尾が話を振れば、男の子は近くに公園があると教えてくれた。

「じゃあ次はそこに行く？」

「そうだね。……今の時間なら誰もいないかな」

「え？」

「公園はこっちだよ」

意味深な言葉を呟いた男の子に尋ねてみようにも、彼は刀を持ってふらふらと公園方面へと歩いて行ってしまふ。危なっかしいその歩き方に慌てた鯰尾は、言葉の意味を問う事を忘れてしまった。

ちらほらと遊ぶ子供達がいる公園の入口を抜けて、男の子は真っ直ぐに古びたベンチへと向かう。そこに腰掛けて、男の子は鯰尾に小さく手招きをした。誘われるままに男の子の隣に座り、鯰尾はみかんの袋を開けた。

「はい、どうぞぞ」

「……ありがとう」

男の子にみかんを手渡し、鯰尾も袋から一つ出して皮を剥き始める。親指についた果汁は甘く香り、嫌でも唾を湧き立たせる。白い筋と薄皮に守られたみかんを半分に分けてから、一粒口に含む。途端に夢の中だとは思えない程、甘酸っぱい味を感じ取れた。

「美味しい。君のはどう?」

「……まあまあ?」

「何で確信してないの」

「みかん、あんまり食べた事ないから。よく分からなくて」

思わず息を呑む。男の子は鯰尾の態度にも気づかず、また一粒みか
んを口に入れた。

この時代の子供は、みかんを食べる事も多いはずだ。おやつに出る
事だつてあるだろうし、弁当にみかんが入っている描写が当たり前だ
と言わんばかりに漫画の中であつた事から、ごくありふれた果物であ
るのは明白。

それがこの子はどうか。顔をしかめている事から渋いみかんを引
き立ててしまったのだろうか、それに「まあまあ」という評価を下し
ていた。よく分からないという言葉通り、渋い味がみかんの味だと
思っているのだろうか。

男の子の親は、みかんすらも満足に与えようとしないのだ。ありふ
れた味を男の子が理解出来ていない事実を、鯰尾は口惜しく感じてい
た。

「そのみかん、渋かつたでしょ? 俺の方あげるよ」

複雑な感情を人当たりの良い笑顔で覆い隠し、鯰尾はみかんを差し
出した。男の子はきよとんととして、意味を問うように首を傾げる。

「……渋い?」

「えーっと、舌が痺れて、吐き出さくならない? それが渋いって事
だよ」

「……ああ、確かに」

舌が変な感じ、と言って男の子はみかんの粒を見つめる。鯰尾は男
の子の眼前に自分のみかんをずいっと差し出し、明るくなるように
言った。

「なら交換しようよ。俺は多少渋くても食べられるから」

「でも……」

「子供はお兄さんに甘えなさい! 大丈夫大丈夫、俺は慣れてるから
ね。君は美味しいみかんを食べなつて、これも俺が幸せになる一環だ

よ」

「……じゃあ、一粒だけ——」

そう言つて、男の子が手を伸ばしかけた時だった。

男の子の手に、何かがぶつかり地に落ちた。男の子が短く声を上げ、手をさする。

「いつ……!」

「え、ちよつと、大丈夫!？」

「うん。……来ちゃったか」

よく見ると、男の子が覆っている指の隙間から、一筋赤黒い雫が伝っている。手当てを、と鯰尾が言いかけた途端に下卑た声が耳に届く。

「あー？ 今日のはガキが少ねえじゃねえか」

声の主を見る。髪を中途半端に染め、全身を着崩している男達だった。

男の一人が小石をいじって遊んでいる。かと思えば周囲を見渡し汚い笑みを浮かべ、怯えている小さな女の子に向かつて小石を投げつける。小石は女の子の腕に当たり、女の子は小さく痛い、痛いと言き始めた。

男達は女の子を指差して下品な笑い声を上げる。その一人が泣き続ける女の子に近寄ると、腹部を蹴りつけ吹っ飛ばした。

悲鳴を上げる女の子に、男は尚も蹴りを入れ続ける。他の子供達も残りの男達に髪を掴まれたり水をかけられたりと、理不尽な暴力に晒されていた。

「……何だよ、あれ……!」

「……ああやっていじめて楽しんでるんだ。もう、運が悪いな……何でお兄さんがいる日に来るんだよ……」

その口振りから察するに、この男達が来る事はあるにふれているようだ。本当に、この街は治安が著しく悪いらしい。

いたぶられていた女の子が反応を示さなくなつて、男が興味を失つたように視線を動かす。その目がこちらを見て、醜悪なまでに歪な笑みに変えた。

「よう、カミサマ狂いのガキ。こんな時間にぼっちなんざ、ついに妹にまで見放されたか？」

「……」

「せっかくだからドッジボールで遊んでやるよ。意識飛ばしたらお前の負けな」

ボールもないのに何をやる気だ、と鯰尾が思った刹那の間だった。男の子の体が揺れる。そして頭から血を流すと、ぐらりと体勢を崩しベンチに手をつけた。

青ざめながら男の子の体を支え、見えた足下にあつた物。鯰尾は一瞬動きを止め、目を見開き歯を強く噛み締める。

—— 一際大きな石だった。男の子がこの程度の傷で済んでいるのが、不思議なくらいの。これを凄まじい勢いで投げつけられ、男の子は更に怪我を負ってしまったのだ。

男は下品な笑い声を上げる。それが、吐き気がする程に不快だった。

「何だあ、早速飛びかけてんじやねえか。軟弱だなあ、ゲームは始まったばっかだっというのに」

「……っ」

男の子が痛みに悶えている。男の子の顎から血が滴ってベンチに落ちるのが、やけに鮮明に見える。それに被さる馬鹿にした声が、更に投げる石を弄んでいるのが、鯰尾の頭の中にある何かを切れさせた。

「——ねえお兄さん。この子の代わりに俺と遊ばない？」

「……あ？ 何だてめえ」

突如入り込んだ事に訝しむ男へ、人好きのする笑みを浮かべて鯰尾が畳み掛ける。

「代わりに俺が相手をするよ。——意識を飛ばしたらお前の負けだ」

その言葉と同時に、鯰尾は足下の石を掴んで振りかぶった。男の腹部に思いつ切り石が命中し、腹を押さえて蹲るのが見える。

「てめえ……！」

「あつれー、軟弱だなあ。この子にはあんな事言つといて、飛びかけて

るじゃないか。試合は始まったばかりだ、耐え抜いて見せるよ」

「ふざけやがって……！ てめえら、あいつをぶつ潰せ！」

男達が子供を虐めるのを止めて、こちらを睨み付ける。一回やり返されたらこれかよ、と鯨尾が呆れながら隣の男の子に声をかける。

「ごめん、ちよつと待ってて。後、少しの間だけ刀返して貰うね」

「え……」

刀を掴み、抜刀する。本来なら人間相手に振るうのは許されないだろうが、夢の中だからいいだろう。

男の子が苦しむのは、辛くて悲しくて——そうした奴等が憤ろしい。

鯨尾藤四郎という刀は普通、あまり大きな感情を露わにしないときれる。己の中に闇を閉じ込めて、笑顔だけを表に出すようにしているとも。

だけど、と春光の鯨尾は思う。

——ここで怒りを表に出さなければ、年長者として最低だ。

「がっ……！」

「何だこいつ早——」

鯨尾の動きを止める事も、捉える事すら出来ずに男達はその場に倒れ伏していく。人格以外はごく普通の人間のように、あっさりとも男達を無力化する事が出来た。

こんな奴等に、男の子をはじめとする子供達は苦しめられていたのか。

湧き上がる苛立ちを何度か深呼吸する事で収め、鯨尾は男の子の所へ戻る。呆然と一連の流れを見ていた男の子とみかんの袋を抱えて、明るい笑顔を彼に向けた。

「ごめんね、怖い所見せちゃった。取り敢えず、ここから離れようか」
「……ううん、怖くは……ねえお兄さん、どうして泣きそうな顔をするの？」

向けたはず、だったのだ。己の顔を確かめる事は叶わない。けれど鯨尾の顔に力なく手を伸ばす男の子が言うからには、そうなのだろう。

どうして、と内心眩く。
どうして、泣きたい程辛い目に遭った君が、俺の感情なんて気にするの——

番外編 「その虚しさよ、遠くあれ（後）」

「……え、じゃああいつら、どこかのお偉いさんの子供って訳？」

「よく分からないけど、そうらしいよ。だから、誰も止められないんだって」

「うっわあ、世も末だ……ねえ、頭痛くない？ 横になる？」

「大丈夫だよ」

そっか、と言つて鯰尾は頭に包帯を巻かれた男の子の肩を支える。

包帯を巻いたのは鯰尾だ。薬研ではないのであまり上手く巻けなかったが、男の子は「手当てしてくれたの、トモエ以外じゃ初めて」と微笑んでくれた。

ずっと話していたら、もうすぐ日が沈む頃合いになった。シャツターの降りた店の前で寄り添いながら、太陽が少しずつ街の下に消えていくのを見ていた。

すぐそばの通り道では、希望を失っているように目に光のない人々が行き交っている。足取り重く歩く人々は、誰も彼も身形がよろしくない。

かつて骨喰が、貧民街にいる男の子の風景を見たと言った。それがこれかと鯰尾はようやく実感を得る事が出来た。

——こんな中で、この子は生活して来たのか。

決していい環境とは言えない。けれど、それが男の子の普通だったのだ。

肩を支える手に力が入る。男の子がどうしたの、と言うのに何とか笑顔で答える。

「ちゃんと支えた方がいいと思つてさ。ほら、結構な怪我したでしょ？」

「本当に大丈夫だよ、これくらいよくある事だし」

「駄目駄目、傷を舐めたら大変な事になるよ。前に弟が傷を隠して生活していた事があったけど、結局具合が悪くなって倒れちゃったんだ」

「……」

「傷はちゃんと養生してね。君が倒れたら大変だから」

頭を撫でて刺激を与えないように、代わりに肩を撫でる。心配する気持ちが伝わるというんだけど、と念じていると、男の子がふと尋ねる。

「……お兄さん。どうして俺に付き合ってくれるの？」

え、と鯰尾が首を傾げる。男の子は包帯で覆われていない、淀んだ丸い目で鯰尾を見上げた。

「今日初めて会ったばかりなのに、どうして一緒にいてくれるの？」

どうしてそんなに優しくしてくれるの？ ……俺、化け物なのに。そんな事される価値なんてないのに。いない方がいいのに。トモエが いい子なのに縋ってるような、穀潰しの癖に」

声はどこか淡々としている。なんて事ない疑問を聞き、当たり前な事を告げるような。

それが、男の子の普通だったのだ。虐げられ、疎まれ、妹の愛だけを頼りにしているような。

それが当たり前だと刷り込むような日々を、送っていたのだ。

「少なくとも君が痛い思いをするのは、悲しいけどなあ」

ここは夢の中だ。本物の男の子には届かない、一夜の幻だ。だけど、言わずにはいられなかった。

——大切な家族が当然の事だと自分を卑下している。それを見ていられなかった。

「あのね。俺は君が痛かったり悲しかったりすると辛くて、楽しかったり嬉しかったりすると幸せになれるような奴なんだ。君が泣いてると悲しいし、楽しんでいると俺まで楽しくなれる。だから君が笑う方に力を注ぐ、それだけだよ」

「……変なの。そんな人の事を気にするの、トモエくらいだ」

「変かな？ でもさ、何度も言ってるでしょ。結局は俺が幸せになる為だ。笑顔が一杯の方が楽しいし、幸せだ。君に対しても同じだよ。少しでも笑顔で満ちている場所を作る為に、ひとに優しくするのは当然だ」

笑顔、と男の子が繰り返す。そう笑顔、と鯰尾も返す。通りへと目

をやった男の子はしばらく黙ってから、どこか実感のない口調で言った。

「……夢みたいな話だね、笑顔で満ちてる場所なんて」
「え」

「だって、皆苦しそうに生活してる。大人が話してた、生きてる私達は永遠に満たされないんだって。笑顔でいるって事は、満たされてるって事なんですよ？ それがいっぱいの場所なんて、それこそ絵本の中にしかないと思ってたけど。……お兄さんのいる場所は、満たされてる人がいっぱいいるんだね」

言葉を失う。まだ、想像力が足りていなかったのか。

嗚咽と悲鳴、諦観と絶望で満ちている街で生きている男の子にとって、笑顔溢れる場所なんて物はおとぎの国にしか存在しなかったのだ。本来なら家庭の中だけでも笑顔でいられたらそれが一番だが、彼の母親がアレなのだ。

不幸を自覚していないのならどうにも出来ないが、彼は己の不幸を自覚しかけている。それは、どれだけ辛い事だろう。

自覚を促してしまったのが良いのか悪いのか、判断がつけられない。もしかしたら残酷な事をしてしまったのではないかと悔いてしまふ。

だが、何度も繰り返すようにここは夢だ。せめて希望を持てる結末に導こうと、鯨尾は笑う。

「そうだね。俺はきつと、恵まれてる奴なのかもしれない。だけど、君にも笑顔で満たす事は出来るんじゃないかな」

「……」

「俺は君といて楽しいし、笑っているのだから嘘じゃない。君の妹だって、あんなに君を大切にしているんだから、君といるのは楽しいはずだ。君は、笑顔を生み出せる人だよ」

男の子は俯く。顔を窺うのは角度からして無理だが、どこか困惑した雰囲気醸し出している。

当然か、と思った。肯定的な言葉を渡された事も多くはなさそうなのだ。いきなり初対面の人間に言われても、そう容易く飲み込めない

だろう。

でも。

「……楽しいって言ってくれたのは、トモエ以外でお兄さんが初めてだよ」

こうして、困惑と共に聞き入れてくれたのだ。種を植える事は出来たに違いない。

少しでも自分を肯定してくれたのなら、今の家族としては幸いだ。

日が沈んだ後もしばらく、ぽつぽつと話をした。その大半は男の子の妹に関する話だった。男の子が積極的に話そうとしたのが、それだけだったのだ。

そろそろ帰っても大丈夫だろう、と男の子が言い出したのは月が高く登った頃合い。随分と遅くなってしまったが、妹は心配していないだろうか。

そう尋ねると、男の子は表情を曇らせながら答えた。

「……お母さんが寝るのが大体この時間なんだ。それより前に帰ると、機嫌が悪くなるから」

トモエの泣く姿は見たくないし、と付け加えられて、頷くしかなかった。やはりあの女は斬ってやりたい、と思うのは仕方がないだろう。

アパートの前に着くと、男の子がしい、と口に人差し指を当てる。了承し、音を立てないように階段を登る。

ドアの前に立ち、男の子が小さくノックをする。しばらくしてそつとドアが開き、中から女の子が現れた。

「お兄ちゃん、お帰りなさい……頭、どうしたの?」

「公園にいた時、いつもの奴等に」

「お兄さんが手当てしてくれたの?」

「うん」

「そっか。お兄さん、ありがとう」

「いやいや、当然の事だよ」

頭を下げる女の子に、手をひらひらと振って笑う。男の子がそう

だ、と言って鯰尾へと刀を差し出した。

「これ、返さない」と

「ありがとう。今日一日、変な事はしなかったでしょ？」

「うん。……ちよつと返答に困る事は言つてたけど」

「あつはつは。頑張つて考えたまえ、少年！」

少し偉ぶつて胸をそらすと、女の子がクスクスと笑みを漏らす。男の子は口をもごもごさせ、鯰尾に一歩近付いた。

「……ちよつと困つたけど。一緒にいてあんまり怖くなかったのは、良かった事……だと思う。みかんくれたし、公園の時にあいつらをボロボロにしてくれたし、手当てしてくれたし」

「みかん？」

「後で一緒に食べよう、トモエ。……えつと、だから」

言葉に詰まった男の子に視線を合わせる。直後、顔を上げて男の子は微笑んだ。

「優しい人もいるんだって分かつて、良かったなっていうか。……お兄さんが生きているなら、多分この先も大丈夫な気がしてる。だから……ありがとう、お兄さん」

それは、口角を微かに上げるだけの、本当に些細な笑みだったけれど。男の子に希望を確かに残せたのだと、鯰尾は嬉しくなった。

……ただ、その一方で、鯰尾は悲しくなった。

どうして、と夢の中に入ってから何度目か分からない問いを浮かべる。

どうして、この子達には――

「お兄さん、私からお礼。……お兄ちゃんと一緒にいてくれて、ありがとう。随分優しくしてくれたんだよね？ お兄ちゃんがあんな優しい顔してるの久々だから、凄く嬉しかったの。お兄ちゃんが笑顔でいられたなら、私も幸せだから」

女の子が一礼し、目を細めた。兄に似た、本当にささやかな笑顔だった。

鯰尾は震える喉を悟られないように、兄妹の頭を優しく撫でた。

「ううん、俺がした事なんて大した事ないよ。……本当に、大した事

じやないんだ。でも、お礼はありがたく受け取っておくね」

兄妹の顔は穏やかだった。男の子がドアの内側に入って、おやすみなさい、と手を振る。女の子はまた、頭を下げていた。

鯨尾は手を振り返し、ドアが閉まるまで見送った。

「お兄ちゃん、本当に優しい顔してる。あのひとと、楽しく過ごせたの？」

「……多分。ああいう人もいるんだね、いい発見だった」

「そっか。……良かったね、お兄ちゃん」

「うん」

ドアが閉まると同時に、景色が揺らぐ。ゆらゆらとぼやけていくドアがふっと消えると、周囲が暗闇に包まれた。

鯨尾は蹲る。そして膝を抱えて、顔を埋めた。そうしてしまえば、自然と目から何かが込み上げてくる。

背後からゆつくりとこちらへ向かう足音がした。それは鯨尾の背後まで来ると、停止してから柔らかな声で話しかけた。

「……鯨尾。礼を言う」

ぐす、と鼻を吸る。目と喉が熱い。

どうして「長谷部」に礼を言われるのか、鯨尾には分からなかった。これは、ただの夢だ。一夜の幻に過ぎないのだ。鯨尾がした事は、ただの自己満足でしかないというのに。

「……歴史改変を阻止する側のものとして、あまりよろしくない事は分かっているんだが。鯨尾、これはただの夢ではない。トシキの記憶の、大きな改変だ」

一瞬、息が止まる。記憶の改変とは、どういう事だろう。

「眠る前にトシキが、また消えかけたんだ。何が原因かと探ってみたら、昔の記憶に優しい大人の姿がない事に気が付いてな。大人への不信が表に出た事によって、ひとを信じられない自分が嫌になったのかもしれん。あの環境でなら、そうなって当然なんだがな」

また、涙が溢れる。どうして、どうしてと、頭の中の疑問は止まな

い。

「だからせめてもの慰めにと、本丸の誰かを巻き込んで夢を見せ、大人を信じられるような自分を感じさせてやりたかったんだ。だが、夢を構築する段階で異常が起きた。——誰かが、トシキの記憶自体に介入したんだ」

何ものかはつきりとはしてないが、悪いものではないと判断した、と「長谷部」はどこか懐かしむ口調で言った。

「夢を見せるだけなら、あそこまではつきり風景を構築しなくて良かったんだ。だが記憶を引っ張り出され、かつての時間を再現した事によって、誰かは記憶の改変をしたがっていると判断した。大きな出来事があった日ではないから、俺も見過ごす事にしたが」

膝が濡れている。不思議と不快感はなく、ただ「濡れている」という事実だけがあった。

「……意識を接続したのは、やはりというべきかお前だった。不安はなかったな。お前なら、ちゃんとトシキに優しくしてくれるだろうと思っていた。他の奴等がそうでないとは言わないが、一番トシキの過去に触れているのはお前だからな。望む結果を出してくれると信じていた」

そうしてお前が出した結果は、と長谷部が微かに笑う気配がした。「想像以上だった。幸福を分け与え、理不尽に対して怒りを示し、萎んでいた自尊心を少しだけでも満たしてくれた。トシキの体はもう透けていない。お前は確かに、トシキの世界を鮮やかにしてくれたんだ。……改めて礼を言う、鯨尾。トシキを繋ぎ止めてくれて、ありがとう」

どうして、が溢れ出す。鯨尾には、最早それを留める手段を得られなかった。

「……どうして、あの子達が、あんなに不幸にならなきやいけなかったんですか」

「……」

「どうして、優しさを持った子達が、報われなかったんですか。どうして、あの子達は、普通の幸せを手に入れられなかったんですか。……」

どうして、あの子達が、あんな最期を迎えなきやいけなかつたんですか」

「……分かつてるだろう、鯰尾。人も刀も、生まれは選べない。子供なら、運命に抗う術も少ないだろう。だから——」

「それでも俺は！——あの子達に、幸せに、なつて欲しかった」

審神者と、トシキ。兄妹であつた二人は引き離され、兄妹として巡り会えたのは審神者の死の間際だった。

二人は、幸せとは程遠い生い立ちだった。だからこそ、自分達が幸せにしたいと思つていたのに。

審神者は彼岸へ行き、トシキは最愛の家族を失つた。

どうして、とまた頭をもたげる疑問が口をつく。

「……どうしてこんなにも、世界は理不尽なんですか」

「……そうだな。だからこそ、お前達は繋がつてくれたんだろう？」

家族になる。病院で理不尽への対抗の為にそう決断し、トシキに告げた繋がりは、彼を確かにこちらへと繋ぎ止めた。それでも、まだ自分達は繋がりが強固ではないと思う。

名実共に、家族になる必要がある。トシキをこちらに繋ぎ続ける、温かな繋がりを作る必要が。

「確かにまだ、繋がりとしては浅いかもしれない。だがお前達の真心は、トシキの胸に響いたんだ。トシキの心を癒す為にも、家族になる事を止めるなよ」

「……分かつてます。でも、それは貴方もですからね、長谷部さん」

ああ、やはり柔らかく「長谷部」は答える。普通の長谷部らしくないそのあり方は、彼の依代となつたトシキの為にそうなつたのだろう。

ならば、彼も家族だ。共に理不尽に抗う、大切な存在だ。

「もうすぐ朝だ。起きたらまた慌ただしくなるからな、せめて少しは休んでおけよ」

「なら、長谷部さん。俺の限界まで、話をしましょうよ」

首を後ろに向けると、きよとんとした「長谷部」が立っていた。どうしてそこで気付かないかなあ、と苦笑いをしながら、鯰尾は立ち上

がって振り向いた。

「家族なんですから。何でもない時でも話をするのは、当然でしょう？」

「……それもそうか。しかし何を話すか……トシキと主の話しか出来んぞ」

「あの子の事はともかく、主の話っていうのは、長谷部さんらしいですね」

「まあ、こんなだが俺も『長谷部』だからな」

「知ってますよ」

そうして、「長谷部」の顔を見て話をする。意識が白むまで、鯰尾は審神者とトシキの過去語りを「長谷部」とし続けたのだった。

「……ずお、鯰尾！」

体を揺すられ、目を開ける。窓からは陽射しが差し込み、鳥の鳴き声が響いていた。

目を擦ると、濡れた感触があった。視線を動かすと、眉を八の字にした歌仙と目が合った。

「……あー、心配させちゃいました？」

「当然だよ、僕が起きたら涙を流しながら寝ていた物だから……何か悪夢でも見たのかい？」

それとも具合が、と額に手を当てる歌仙に苦笑いを浮かべて、鯰尾は言った。

「悪夢ではありませんよ。ただちよつと、長谷部さんが少しでも健やかでいて欲しいなーってなっただけです」

「……まあ、後で聞かせて貰うよ。今は朝餉の準備だ」

「はい、着替えたら行きまーす」

着替えが済んでいた歌仙が、ドアの向こうに消えていく。さて自分も着替えを、と思った所で、長谷部の寝顔を見やった。

目からは、涙を溢していない。本当に、良い記憶だと思ってくれたのだろう。

枕元に近付く。そして長谷部の頭を撫でながら、鯰尾は小さく祈る

ように呟いた。

「——どうか、君達の心が碎ける日が、永遠に来ませんように」

最後に一撫でしてから、鯨尾は着替えを始める。身支度を整え終わると、部屋を飛び出してドアを閉めた。

長谷部はまだ眠り続けている。——ただその寝顔は、とても穏やかで、幸せそうだった。

第十八話 「揺るがされる町（前）」

18—1 「決意を固めて」

時は、日が登るより前に遡る。

三つの小さな影が、黒く煤けてトラテープの貼られている門の前に真っ直ぐな足で立っていた。影の一つが、血に塗れている門の内側を覗いて切なげに呟く。

「……やっぱり、ぼろぼろだね」

残り二つの影も、微かに頷いた。

門の内側は、血で飾られた遊具や燃えて一部壊れている大きな建物があった。それはかつて三つの影が過ごして来た家であり、温かな記憶が詰まっている思い出その物だった。賑やかな声が響いていた門の内側からは、もう二度とありふれた幸福が訪れる事はない。殺人鬼によって、全てを壊されたのだから。

「なあ、ハルカ姉ちゃんの本当にここに来ていつて言ったのか？」

「うん、間違いない。でも、来たはいいけどどうすれば……」

三つの影は顔を見合わせると、不安そうに再び門の内側を覗き込む。煤けてぼろぼろになった門の内側は、彼等の目的を果たしてくれるとは到底思えない。だが、瓦礫を片付けるにしても小さな影達が出る事など早々ない。

影達がいよいよ途方に暮れていると、背後から足音が近付いて来た。影達は肩を跳ねさせて恐る恐る振り返る。

——来たのがあの二人のどちらかでなかったら、彼等は連れ戻されるだろう。それを恐れて足音の主を見上げ、影達は懸念が解消された事に大きく息を吐いた。

しかし足音の主は、三つの影を見て至極忌々しそうに、そして腹立たしげに吐き捨てた。

「——来ちゃったのか、お前達。あの糞姉貴、チビ達を誑かしやがって……！」

それは、三つの影を心から案じていたから出た言葉だった。姉の悪

辣な誘惑に影達が乗ってしまったのだと、そのせいで過酷な道に足を突っ込もうとしているのだと、憤りが溢れた言葉だった。

心から、自分達を心配しているのだろう。引き返して欲しいと、この先は地獄でしかないからと。

だが、影達は決意を固めたのだ。

「違うよ、サトルさん」

一番小さな影が、足音の主——サトルに向かって一歩踏み出す。見上げるその目には、真っ直ぐな光が宿っていた。

確かに、恐怖や不安はある。自分達が行く道は険しく、それでも一歩踏み入れれば弱音を吐いて引き返すのは不可能なのだ、彼等は今までの出来事から分かっていた。

それでも、彼等は平坦で誰かに守られる道よりも、険しくても自分で切り拓ける道を選んだ。

——何も出来ずに流されていく、弱い存在のままなのは、もうごめんなのだ。

「私達は、私達なりに考えてここに来たの。ずっとずっと、こうする事の良い所悪い所も考えて来たんだ」

「決めた後も、三人で話し合った。それでも揺るがなかったから、俺達はここにいます」

「その言い振りだと、俺達のやりたい事はハルカ姉ちゃんから聞いてるよな？」——頼むよ、サトル」

残り二つの影も、サトルを仰ぎはつきりとした意志を込めて見据える。

——彼等は、こんなに強い眼差しをする奴等だったか。

サトルは愕然とした様子で、彼等を見返していた。子供の成長は早いと言うが、いくら何でも早過ぎだ。それ程過酷な目に遭ったのだと分かっていても、かつてのやんちゃ坊主やませた少女であった姿を重ねてしまい、サトルは混乱していた。

しばらく、そうして穏やかではない視線での問答が続いた後。サトルは観念したように、頭を掻いて門へと歩き出した。

「……分かった。そこまで言うからには、相当の覚悟をしているんだ

ろう。だったら俺にはもう止められない。ついて来い、処置をしてやる」

崩れている門の一部から割って入り、サトルは影達を振り返る。影達は、心から嬉しそうに駆け寄って、サトルに頭を下げた。

「——ありがとう」

それに歯噛みしたのを表に出さぬように、サトルは影達を誘導しながら門の内側を進む。

——影達を通り過ぎた、壊れかけの門柱。そこに掲げられているプレートには「児童養護施設滑 \square 園」と書かれていた。

18—2 「憎悪の一太刀」

赤い花卉のような血飛沫が身体から散り、ぐらりとその場に崩れる。春光の鯰尾は自身に起こった事を、雨に打たれながらどこか他人事のように見ていた。

——ああ、こんなの見せたら、長谷部さんが悲しんじゃうなあ。どこかの蛍丸が放った一撃は、確かに長谷部を殺めようとしていた。だからこそ、真つ先に標的に気が付いた鯰尾が前に出たのだ。

だが防御したつもりでも、大太刀の威力は凄まじい。攻撃の一部を受け止め切れず、鯰尾の身体に小さくはない傷が付いてしまった。

「——鯰尾!!」

「兄貴、大丈夫か!？」

長谷部が恐慌で裏返った悲鳴を上げた。それに我を取り戻した薬研が鯰尾の応急処置をしようと身体を支える。小夜と五虎退、物吉と秋田も突然の出来事に驚愕しながら、鯰尾の具合を窺っている。

獅子王と歌仙、石切丸は彼等を庇うように前へと進み出て、抜刀し殺意を込めて蛍丸を睨み付けた。

「お前、何のつもりだ!？」

「……遺言は三十一字以内で頼むよ」

「私達の身内を傷付けたんだ、ただで済むとは思わない事だね」

蛍丸と向かい合う三振りは、背後から見ても怒りに満ち溢れているのが分かった。あの三振りの誰かの立場に自分がいたら、同じような態度を取ると思う。実際の鯰尾も、理不尽な襲撃に憤りを抱いていた。

しかし、蛍丸の目を見て背筋が凍る。

「……ムカつく」

冷え切っているような、逆に煮え滾っているような低い声が聞こえる。そして再び刀身を大きく振り回し、三振りへと鋒を向けた。

あの目に宿っているのは、昏い憎悪と深い嫉妬だ。

——何で……長谷部さんが直接、こいつに恨まれるような事はしていかないはずだ。

十中八九、この蛍丸とは初対面だ。長谷部と出くわしているのなら、彼から報告があるはず。何より自分に迫る凶刃にきよとんととしていたのだから、長谷部にも心当たりがないのだろう。

ならば、どういう事か。——相手が一方的にこちらの情報を入力し、勝手に恨んでいるとしか思えない。

「お前ら全員、見ててイライラするんだよ。あいつだけ殺すつもりだったけど、もういい。全員殺す」

眉間に険しい皺を寄せた蛍丸の背後から、微光すら呑み込む漆黒のヒトガタが湧き出るように立ち上がる。ゆらりと揺らめき次々と現れるヒトガタを見た獅子王が、顔を強張らせた。

「成れの果て……この数は……！」

「鍵になる物を集めていたのは君か」

「答える義理はない。……さあ人形共、劇の時間だ。あいつらをぐちやぐちやにしろ！」

歌仙の鋭い眼光を物ともせず、蛍丸は表情を歪んだ笑みに変えて叫んだ。途端、成れの果てが妖しく揺らめきながらあつという間に春光隊に迫り寄る。

薙刀と思われる長い棒状の物が横一文字に薙ぎ払われる。その傍から別の成れの果てが、バランスを崩した歌仙に突っ込んだ。歌仙は前に手をつけて体勢を低くし、弧を描くように上へ向けて刀を振るう。パキ、と音を立て空中で小さな人形が割れ、短刀と思われる成れの果ては砂塵と化した。

一歩引いていた獅子王に、脇差と思われる成れの果てが鋒を向ける。詰め寄り押し込もうとする成れの果ての猛攻を受け流しつつ、獅子王は機を窺っていた。そして焦れたのか、成れの果ては大振りに刀を振るおうとした。しかし、その一撃が振られる事はなかった。——切り裂かれた手紙がひらりと地に落ち、さらさらと成れの果ての体が崩れる。練度が低い奴か、と呟いてから獅子王は身を翻して次の相手に向かう。

薙刀の成れの果ての周りには、太刀と打刀の成れの果てがついている。そこから振るわれる薙刀の攻撃は、放っておけば長谷部や鯰尾達

にも届きかねない。機動が低い石切丸は、出来るだけ少ない手数で素早く敵を仕留めなくてはならなかった。だが、急いては事を仕損じる。太刀と打刀の攻撃を凌ぎながら、石切丸は冷静になるように努めていた。じつくりと待ち続け、ついに鍵になる物が露わになるチャンスが訪れる。石切丸はそれを見逃さず、成れの果て三体の急所を一斉に斬り碎いた。

春光隊の三振りには、奮闘している方だと言える。背後の鯰尾達を庇いながら、短い時間で五体の成れの果てを仕留めたのだ。戦果としては上々である——普通の戦闘なら。

「くそ、次々と湧いてくるな……!」

「どれだけ集めたんだろうね、あの蛍丸は! その執念深さは呆れる程凄まじく思えるよ!」

「全くだ!」

斬っても斬っても、蛍丸が続々と成れの果てを投入してくるのだ。それはさながら、息切れを起こして戦う三振りをいたぶり楽しんでいくかのように。

ケタケタと笑う蛍丸は、鋒を鯰尾達に向けて更に高らかに命ずる。

「アハハハ、滑稽過ぎて笑えるね! じゃあ更に無様になって貰おうか。——あの血を流してる黒髪を襲え!」

命令を受けて、成れの果ては一斉に鯰尾のいる場所へと動き出す。鯰尾、と叫びながら彼等のいる方へと駆け出そうとした歌仙は、横から襲い掛かった大太刀の成れの果てによって足止めされた。獅子王と石切丸も、他の成れの果てに対応していて動けない。

鯰尾の手当てをしていた薬研が、戦装束に身を変えて鯰尾の前に立ちほだかる。物吉と秋田は鋭く睨みながら刀身を構え、練度の低い小夜と五虎退も、歯噛みしながら鋒を敵に向けた。

——どうしよう、どうしたら……

その中で、長谷部だけが何も出来ない。彼には戦う事に関するトラウマがある。ここで自分まで行動不能になったら、間違ひなく皆の足を引っ張る——どころか、決定的な敗因になりかねない。せめて肉の盾になろうと、鯰尾を抱き抱えてカタカタと震えながら目を瞑る。

いつ刃が襲い来るか分からない。けれど、それに怯えて家族を失うのは、もつと嫌だった。

「長谷部、さん……駄目だ、逃げて……!」

鯰尾がそう言っても、長谷部は首を振る。身体の震えがこちらまで伝わって来て、鯰尾は苦い思いを滲ませる。

あの蛍丸は、間違いなく長谷部に悪意を持っている。今は仲間達に攻撃が向いているが、いつ長谷部へとその悪意が向けられるのか分からないのだ。それを分かっているのかいないのか、長谷部は手負いの自分を守る為に恐怖を押し殺し、その身を以て盾になろうとしている。

ここで、長谷部を失いたくない。小さな光でも、鯰尾達にとっては大切な希望なのだ。もし、長谷部が命を落とす事になったら——少なくとも自分は、正気でいられないだろう。世界を恨みに恨んで、墮ちてしまうのかもしれない。

——嫌だなあ、そんな未来は。

力を振り絞り柄を握り締め、鯰尾は刀身を長谷部の背後に掲げる。例え重傷でも、長谷部に傷はつけさせない。強い意志を乗せて迫る成れの果てを睨むと、それに気が付いた蛍丸が一際険しく顔を歪める。蛍丸が目を剥いて口を開こうとした、その時だった。

「——江雪殿、行けますか?」

「はい。——これ以上、子供達を悲しませる事態にはさせません」

その言葉の直後に、鯰尾に迫っていた成れの果てが、吹っ飛んで行くのが見えた。黒を基調としたマントをひらりと靡かせた空色の男が、鍵になる物を斬り砕く。袈裟を纏った薄青の長髪が、それに倣い刀を振るう。

ばかりと口を開け呆けた鯰尾へ、空色の男が振り返る。

「春光の鯰尾と長谷部殿、大丈夫ですか!」

空色の男——蒼穹の一期は鯰尾達を視界に入れると、真剣な様子から一転し顔面蒼白になった。それでも警戒態勢を崩していないのだから流石だ、と鯰尾は現状から遠い感想を抱く。長谷部も鯰尾を庇いながら、目を見開いているようだった。

「蒼穹の、一期……何で」

「いなくなつた子供達を探している最中でして。こちらから嫌な気配を強く感じたので駆けつけたのですが……間に合つて良かったです」
迫る刃を受け流し、鍵となる物を素早く砕く。砂塵になつた成れの果てを見た後、一期は鯰尾達の前まで下がり刀を構え周囲を睨む。

歌仙が相手をしていた成れの果てを斬り裂き、江雪は獅子王達に襲い来る成れの果てに向かう。歌仙は鯰尾達の所まで走りつつ、その背中に向かって叫んだ。

「助かつた、ありがとう！」

「気になさらないで下さい。他の子供達が近くにいます、政府に行くまでの間休める安全な場所をご存知ですか？」

心なしに焦燥の滲む江雪の問いに、態勢を整えて鍵となる物をまた一つ砕いた獅子王が、歯を軋ませながら答える。

「一度森の中に引き返すしかねえかな……こいつらを何とかしてから話だけど」

「そうするしかないか……江雪さん、子供達は大丈夫なのかい？」

「刀装兵に守らせています。あまり長くは保ちませんので、早めに片付けましょう」

「ああ、そうだ——」

ジャシュ、と音がする。音の方向を向くと、眉間に皺を寄せ眼光を煮え滾らせ、歯を食いしばつた蛍丸がこちらを睨んでいた。右足からは砂埃が立っている。不快を隠そうともしないで、蛍丸は声を荒げ始めた。

「ムカつく、ムカつく、ムカつく！ 何、こんな時に友情ごっこかよ！

仲良しこよしを見せつけて楽しそうだよなあ、ぶつ殺してやりたい！ —— 容赦はなしだ人形共、ここにいる全員血祭りに上げろ!!」

命令に呼応し更に湧き出る成れの果てに、ざあつと春光隊の顔が青ざめていく。一期と江雪も体を強張らせて周囲を見渡す。

周囲を黒く染めていくその数は、まともに相手をしていたらこちらの体力が削られていくだけだと判断出来る。撤退を視野に入れての戦闘となるだろう。それでも、被害がどれ程出るか。

再び成れの果て達が腕を振り上げようとした、その瞬間。蛍丸の前に画面が浮かび上がり、この場にはない刀の音が響き渡る。

『蛍丸、やり過ぎだ。あんまりそいつらを使い過ぎるなども伝えてあつたよな?』

「うるさい、鳥野郎! その皮剥いで逆さ吊りにしてやろうか!」

『白熱している所悪いが、そろそろ時間だ。寄り道も結構だが、早くこつちに来ないとお前の標的を取っちゃうぜ』

「……くそ!」

通信が切れると蛍丸は再び足を踏み鳴らし、忌々しそうに背を向ける。だがふと鯰尾の方を見ると嘲るように口角を上げ、吐き捨てた。

「ああ、そいつの傷口には呪いを仕込んであるからね。そのまま放置したら死ぬよ。精々無様に足掻いて見せてよ、クソツタレ共」

納刀して踵を返し、蛍丸は足早に遠ざかっていく。一部の成れの果ては消えたが、それでも数はあまり減っていない。命令主を失った成れの果ては、闇雲に近くにいる刀を狙い始めた。

振り下ろされた大太刀から大きく退いて、一期は鍵となる物を壊しながら声を上げた。

「歌仙殿、これからどうしますか!」

「隠れている子供達を一度森に連れて行く! 鯰尾の応急処置をした後は江雪に任せるよ!」

「その後は政府中枢に連れて行きます。子供達を匿う場所ならあるでしょうからね」

非常用のシエルターなら、政府側でも用意しているはずだ。江雪の言葉に頷き、歌仙は石切丸に鋭く目をやる。

「まずはここから抜け出さないといけないけど——石切丸」

「任されたよ。——全員、離脱準備を」

すう、と息を吸い込み、石切丸は刀身を一気に横へ薙ぐ。三体の成れの果ては金切り声を上げながら、さらさらと崩れて行く。ぽっかりと空いた空間に近付く成れの果てを退けつつ、石切丸は後退し始めた。

「包囲網が崩れた、今の内だ!」

「江雪と獅子王は子供達の回収を！ 僕達は本丸に急ぐよ！」
成れの果て達の隙間へと、刀達が飛び込む。森の中へと突っ込んで行く背中達に伸ばされた黒い腕は、最後尾の歌仙によって弾かれた。

18—3 「行動計画」

「江雪さん、何がどうなってるの?」

「お化けがいっぱいいるし、ソメゴロー達は見つからないし……」
「帰りたいよお……」

無事に子供達を回収し、春光隊本丸まで辿り着いた江雪。普通の本丸とは違う構造に疑問を抱く余地もなく、彼は怯える子供達の側に寄り添っていた。

建物の陰で兵に守られながらも震える子供達を見つけた後、獅子王はよく頑張った、と頭を撫でた。獅子王とは顔見知りだったのか、子供達は一瞬だけでも安堵したように見え、江雪も少し冷静さを取り戻す事が出来た。その後は子供達を守りつつ先導する獅子王について行き、右左折を繰り返し本丸へと滑り込んだ。

森の最奥に成れの果ては入って来ておらず、当分の間は大丈夫だと石切丸は息を吐いた。けれどまだ恐怖が抜けていない子供達は、リビングで身を寄せ合って不安に耐えている。

城下町には蛍丸によって既に成れの果てが放たれている。ある程度数が減るまで、江雪達は動けない。薬研は通報したと言っていたものの、いつ駆けつけてくれるのか。

からりと引き戸が開く。現れた鯰尾は、体をぎこちなく動かして唸り声を上げた。

「いてて……あの蛍丸の言ってた事は本当だったんだな」

「鯰尾、大丈夫か?」

「まあ動ける事は動けます。……でもこれまずいですね、つくづく子供達に被害がなくてよかったです」

「どういう事ですか?」

長谷部に支えられながら痛みに唸る鯰尾は顔を顰めつつ、子供達の頭を撫でている江雪の疑問に答えた。

「体の一部が崩れる感覚がするんです。完全に穢れが染み込んでますね……穢れを祓う方法はいくつかありますが、今回の場合は……」

「場合は?」

「——あの蛍丸を殺さないで、穢れは取れないと。石切丸さんが言うからには、そうなんでしょうね」

苦々しく告げられた言葉に、声が詰まる。撫でる手が震えているのを感じ取った子供達が、目を揺らがせながら江雪を見上げた。

術者を殺さなければ取れない穢れ——当然ながら、相当の物なのだろう。どれだけの怨念があればそこまでの物が出来るのか、江雪には想像が難しい。和睦を重んじる彼は、なるべく血を見ないように事が収まればいいと祈っていたが——この本丸内の命が関わる以上、それも不可能になってしまったと部外者ながらに理解した。

「……せめて子供達だけでも、心穏やかに過ごせるようになればいいのですが……」

「そうですね。……長谷部さん、あの蛍丸がどこに行っただか、分かりましたか？」

ぴく、と肩を跳ねさせて長谷部が怖々と鯰尾の顔を見る。その怯え方に、鯰尾が軋む体を動かし長谷部の背を叩く。

「長谷部さん、大丈夫ですよ。長谷部さんに手は掛けさせませんから。行った先で支援をしたらう事にはなると思いますが——」

「……違う、違うんだ、鯰尾……確かにそれも怖いけど……」

ぽんぽんと背を叩かれても、長谷部の強張りは解けない。顔を青ざめさせ、今にも倒れそうになりながら言葉を探す長谷部は、鯰尾を支える手に力を入れて俯いた。

「——鯰尾が休んでいる間に皆には話したけど、あの蛍丸は政府中枢に向かった。周囲を傍受してみたら、戦闘している音も聞こえてきた。……多分、今の町の中にある安全な場所は、限りなく少ないんだと思う」

江雪の体からざつと血の気が引いていく。鯰尾も表情を険しい物に変え、ギリ、と奥歯を噛み締めていた。

長谷部が告げたのはつまり、蛍丸が政府中枢への襲撃を行っているという事だ。蛍丸が去るまでに「鶴丸国永」から通信が来た事から、単独行動ではなく、突発的な行動でもないだろう。

政府中枢がまともに機能しなくなったら、子供達の安全も保ちにく

い。無用な血が流れる事も予測出来る。

あの蛍丸達は、政府へのテロを行っている。——言葉にするにつれ、恐ろしい。

子供達も不穏な空気を悟り、江雪の服を握る。震える手を優しく撫で、江雪は彼等に小さく笑んだ。せめて自分が平静を保つ事で、子供達に心の余裕を生み出せるようにしたかった。

「この後の方針は決まっています?」

鯨尾が真剣な声音で問う。長谷部は深呼吸を数回繰り返してから、口を開いた。

「……蛍丸を討つのは確定だ。一期がそこに加わるかどうか、今検討している所だな」

「え、何故一期が蛍丸討伐に?」

「そうですね、俺達の為にさせるのは流石に——」

「確かに蛍丸とは無関係だ。だが通信を聞いたらそうも言っていられなくなってる……」

通信、と一瞬呆けて首を傾げる。江雪に覚えのない気配である事から、氷雨の鶴丸ではないだろう。しかし、一期は反応した。その示す所は——

考えが至つたと同時に一期がいるであろう二階方面に視線を飛ばす。鯨尾も同じ答えに辿り着いたのか、声をわななかせて長谷部に尋ねた。

「……まさか、通信相手の鶴丸国永が」

「……ああ、一期の本丸の鶴丸だったらしい。通信相手があいつの本丸の奴だと確信を得てから、許せないと据わった目で言っている。審神者への忠誠心があるのなら、怒るのも当然なんだろう」

それはそうだ、と意識の片隅で思う。仲間が審神者を欺いたのなら、配下のものとして落とし前をつけさせるのは当たり前の事。一期も背信者への憤りを露わにし、少しでも動けたらと思ったのだろう。

「でも、審神者さんには伝えたんですか? 単独行動をするには、あまりにも危険な相手じゃ……」

「さつき連絡を入れたが、あつちもかなり混乱していた。当分、まとも

な対応は出来ないだろう」

「だからって……」

「それに、一期の決意は固かった。一振りでも鶴丸と話をつけに行くと言っていたからな。単独で放り出す方が不安だ」

「……あー、逆に連れて行った方が手綱を着けられて安心だ、と。まあいち兄の気持ちは分かるんですけどね……」

半ば困ったように鯰尾は笑う。長谷部も呆れた様子で微かに息を吐いた。

一期は政府中枢に向かうと決めた。自分はどうしようか。

——子供達をせめて安全な場所まで連れて行きたい。しかし誘導候補だった政府中枢は今、最も危険な場所になりつつある。ずっとこの本丸にいる訳にもいかない。自本丸へ戻るべきだろうか。だが道中に成れの果てが放たれているのだ、子供達を安全に誘導できるか不安が残る。

途方に暮れている江雪の耳に、バタバタと階段を駆け下りる音が入ってくる。振り返ると、顔を強張らせる春光隊の面々と蒼穹の一期がリビングの入口に立っていた。

「鯰尾、起きたか!？」

「起きてます、どうしました!？」

「まずいよ、本丸のある区域にまで成れの果てが入り込んでいるんだ！ 江雪さんも子供達は本丸に戻さない方がいい!！」

「防護壁とかどうなってるんですか!？」

「本当どうすり抜けたんだろうな、このままだどこの森にも入って来かねないぞ!！」

腹立たしそうな薬研が示した予想図に、子供達は震え上がり江雪の服を握る。江雪もまた、一つの手が潰された事で手に汗を滲ませていた。

自本丸に戻るのは今の時点だと駄目だ。江雪一振りでも何とか支えていた状態なのだ、成れの果てを防げるとは到底思えない。

ならば、戦場と化している政府中枢に行くか。それにも大きな懸念がある。子供達を守りながら戦い、安全な場所へ誘導出来るか。……

情けない事に、言い切れる自信が全くないのだ。

六人の子供を、傷一つ付けずに守り切りたい。そして、行方不明になっっている三人の子供を見つけ出したい。その両方を成し遂げるには、一振りだと難しいだろう。自分一振りだけで、子供達に襲い来る何もかもを薙ぎ払えるとは思っていない。自分の力量を見誤り、全てを失う事になるのはごめんだった。

眉はひそめられ、子供達を抱く手に力が入ってしまう。江雪の険しい顔を見上げる子供達は、不安そうに見つめ合い、彼の袖を引こうと手を動かしかける。

「江雪！」

江雪の耳へと真つ直ぐに、声が飛び込んできた。ゆっくりと声の方へと顔を向ける。

戦装束を纏う春光隊が、こちらを見据えていた。歌仙が一步進み出て、眼光を鋭く研ぎ澄まし告げた。

「——子供達は、僕等にとっても大切だ！ 君一振りだけに任せるつもりはない！」

歌仙に同意する春光隊の領きは力強く、あまりにも頼もしく江雪の目に映った。その中で長谷部だけは子供達に近寄り頭を優しく撫でていた。子供達は少しだけ体の力を緩め、長谷部を見返す。その目には微かに、小さくはない信頼が見えた。

「江雪殿」

友の穏やかなのに意志を感じさせる声音に、江雪は息を呑む。彼だって激情を抱えているだろうに、それを子供達に気取られないよう安心させる様子で頭を下げる。空色の髪がしやらりと揺れるのが目に残った。

「どうか、私にも子供達を守らせて頂きたい。……子供達に、私達の不始末を背負わせたくないのです。私を、悪意から守り抜く戦力に数えて頂けませんか」

自分の本丸から、裏切り者が出た。本来なら衝動に任せて動いてもおかしくない状況だ。それでも一期は、その怒りを前面に出す事はせず、子供達を思い助力を申し出てくれている。守られるべき者達に、

背負うべきもの達の重みを押し付けたくないと、子供達の傷を減らそうとしてくれている。

それがどれだけ得難い物だと感じたか、どれだけ嬉しかったか、言葉にするのは難しい。胸を打つとはこういう事かと、江雪は染み入るように感じていた。

彼等の厚意を感じていなかった訳ではない。だが、今の今まで自分の力しか頼れないと思っていた。

力を貸そうとしてくれるものが、周りにいる事。そしてその助力の申し出は、決して生半可な物ではない事。その事実を叩き込まれた今、渡された厚意を無碍にする選択肢など選べなかった。

「……一振りだけで何とかしようとした、私が間違っていたのですね。子供達には、こんなにも味方がいたというのに」

「……では……」

「はい。一期、春光隊の皆さん、どうか力を貸して下さい。何としても子供達を守り切り切りたいのです」

顔を上げた一期は、期待する響きのある声を江雪に向け目を見開く。それに頷き、江雪も静かに頭を下げる。

一振りでは、最初から限界があったのだ。それを分かっていたが、優しいひと達を巻き込めないと思い込んでいた。優しいひと達は、力になりたいと願っていたのに。

氷雨の鶴丸が一振りで煮詰まっていた時のように、誰かがそっと支える事で見つかる道もある。そして悩むものを支える事が、その誰かにとって確かな力へと繋がる事もあるのだ。大切なひとの力にならない事が、悲しみに繋がる事もあるように。

深々と礼をする江雪に頭を上げるように言ってから、歌仙は綻ぶ花のような笑みを浮かべる。それは、巨木のように優しくどこまでも安心感のある笑顔だった。

肩から力が抜けていく。ともすれば座り込みそうになりそうな江雪に、歌仙は笑みを浮かべたまま力強く頷いた。

「承った。必ず、子供達を守り抜こう」

「私も微力ながら力添えを致します」

過酷な戦いになるだろうに笑ってくれる優しい部隊と大切な友に、改めて頭を下げる。目の前が少しだけ滲んだのは、子供達に気付かれなかったと思いたい。

子供達もおっかなびっくり頭を下げていく。守られなければならぬ場面だと分かっているのだろう、春光隊や一期に、お願いしますと口々に告げている。

……複雑な気持ちだろうに、やはり聡い子達だ。何としてでも、彼等には安寧をもたらさなければならぬ。

「……それで、この後はどうすればいいですか？」

「政府中枢にあるゲートから、子供達と小夜達を隣接する町に避難させよう。他の町では流石にテロも起こっていないはずだ。戦場の中にゲートがある以上、一か八かの賭けになるが……」

一期が行動の指標を仰ぐと、長谷部が端末を立ち上げ地図を表示させる。比較的安全なルートを導き出し、地図にマーキングしていく。賭けに近い状況に不安を覚えているのか、顔には翳りが浮かんでいた。

ぽん、と獅子王が長谷部の背を叩き、ニツと歯を見せる。それに長谷部も力無く微笑み返した。

「それでも、何もせずに襲撃を迎えるよりかはマシだろう。門の位置は把握済だよな？」

「うん」

「なら、早速動いた方が良さそうだね。——この辺りにも嫌な気配が漂い始めた、時間はかけられないよ」

ぼつ、と窓の外を見る。遠くの方、微かな点程度しか見えていないが、黒い影が蠢いている気がした。子供達が再び顔を青ざめさせる。彼等の肩を抱えつつ、江雪は唾を飲み込んだ。

「そうだ、物吉と秋田はどうする？ 戻らなきゃならないなら、俺が送り届けるけど」

鯨尾の言葉にそういえば、と意識を向ける。春光隊の中にその二振りもいたのだ。確か、別の本丸から預かっている帰還予定だった二振り。今の今まで思い出せなかったのは、やはり彼等の特異性故だろう

か。

「少数で行動する方が今は危険でしょう。ボクは状況が安定するまで、春光隊の皆さんと戦います」

「……僕も、皆さんの側にいます。いち兄と離れるのは、その、不安なので」

「分かった、ありがとう。でも二振り共、無茶はしないでね」

物吉はにつこりと意思を示し、秋田はぼそぼそと小さく呟く。鯨尾は二振りに礼を述べ、秋田の頭に手を置いた。

蒼穹の秋田と一期が仲直りしたというのは聞いていた。だが実際に兄を信頼しているのを目の前で見ると、良かったという安堵が込み上げる。一期達が苦しんでいたのは知っていたので、直接力になれなかったのが少し申し訳ない。仲の修復を後日存分に祝福しようと、江雪は全てが終わった後の事を考えて己を鼓舞した。

「皆、水は充分飲んだか？」

「う、うん」

「飲んだよ」

「長旅になるかもしれないから、体調は万全にしておかないといけない。全員、これから全力で走らなきゃならないけど、傷なしで助かる為だ。分かってくれるな？」

薬研が厳かに子供達へ尋ねると、おっかなびつくり答えが返ってくる。長谷部は子供達と視線を合わせ、顔色を見ながら口元を緩める。その表情と言葉のギャップに目を白黒させながら子供達は頷いた。

「よし、それじゃあ行こう。門までの道を、何としてでも切り拓くぞ！」

「了解！」

歌仙の高らかな声に、刀達が気強く応える。

戦場に飛び込むのは、守るべき者達を守る為。江雪は刀を握り締め、子供達の背を刀達の輪の中に押した。

18—4 「非日常の思考と日常の挑発」

政府所属の小鳥丸から緊急指令を受け取り、鶴丸は戦装束に身を包んで本丸の廊下を歩いていった。バタバタと走り回る他の刀とすれ違いながら、顎に手を当て考えを巡らせる。

——十中八九、あのヒトガタ達に堀川が関わっているだろう。

昨日から姿を消している堀川が背信者であると、青江から聞いていた。主からの密命だという事で最初は口をつぐんでいたが、根気よく説得を続けて口を割らせたのだ。

それが昨日の夜の事。夜が明けるまでの僅かな時間で、堀川は動き出した。事を起こすのが余りにも早過ぎる。堀川に協力者が付いているのは、蒼穹の一期の話から確信を持つている。彼等が計画を起こしたのは一体いつからだ。長きに渡って機会を狙い続けたとして、氷雨の仲間と和気藹々としていたのすら偽りだったのか。

……ふざけたりして長谷部に雷を落とされたのも、戦場を共に駆け抜けたのも、堀川にとっては考えを改めるに至らなかつたのだろうか。仲間だつたのになあ、と考えると気分が沈んでくる。

すれ違う刀達にぎよつとした目で見られる程足取りが重くなつている事に、鶴丸は気付いていなかった。

「おや、鶴丸殿」

嫌味な程涼やかな気配に足を止める。目の前に立っていたのは戦装束を纏う一期一振。顔を上げて彼を軽く見返す。一瞬眉を顰めていた気がしたが、爽やかな笑顔でいつものように飛ばされる嫌味に鶴丸は青筋を立てる。

「こんな所で何をぼーっとしているんです？ 徘徊なら後回しにして頂きたい。今貴方の後始末をしている時間など、誰も持ち合わせていないんですよ」

ふつふつと湧く苛立ちに任せて、鶴丸も嫌味を打ち返す。

「そう言う君こそ、随分お気楽そうじゃあないか。こんな状況なのに喧嘩を売る余裕があるらしい、羨ましいこつたな」

それは本心からの言葉だつた。仲間が背信者だつたものの気持ち

など、彼は汲み取る気もないのだろう。さつさと通り過ぎようと足を踏み出した所で、更に嫌味が飛んでくる。

「私としてもさつさと外の片付けを手伝いたい所ですが……集合の命をまともに聞けない程耄碌している御仁がいらつしやいますからな。いよいよ言語を理解する事すら出来なくなりました？ 全く、介護なんて私の仕事ではありませんよ」

「誰が要介護認定者だこの青二才、今から行こうと思っていたんだよ！」

ぼけ老人扱いされて思わず足を止めて怒鳴り散らす。しかしその涼やかな体勢を崩す事は出来ず、呆れ顔を浮かばせたため息をつかれる。

「ならさつさと行つて下さい、主が気を揉んでいらつしやいます。貴方がいなくても本丸は回せるんです、早く事態を収束させてきなさい。驚きしか取り柄がないのに、戦場を引つ掻き回す事すら出来なくてどうするんです？」

「えつらそうに……！」

頭に血が昇る感覚がする。今の鶴丸には堀川への無念さなど吹き飛んでおり、とにかく目の前の腹立たしい刀を黙らせたいという、ある意味いつも通りの感情になっていた。

顔を真っ赤にする鶴丸に、一期は鼻で笑い爽やかに嫌味を言い放つた。

「少なくとも変になまくらな今の貴方よりは頭が回る自覚がありますので」

「よしそこに直れ叩つ斬つてやる!!」

「鶴丸、何してる！ 悠長に喧嘩をしてる時間はないんだぞ！」

柄に手をかけた所で、一期の背後から眉間に険しく皺を寄せた長谷部が現れる。あつという間に襟を掴まれると、ずるずると玄関へと引きずられていく。

離せ歩ける、と喚く鶴丸を嘲笑うかのように、一期はひらひらと手を振って見送った。

「長谷部殿、回収お疲れ様です。鶴丸殿、精々尻拭い頑張つて下さい。」

特別に骨は拾って差し上げますよ」

「くっそ、帰ってきたらぶん殴ってやるからなあああ!!」

「喧嘩は後にしろ、行くぞ!」

拳を振り回して暴れる鶴丸を引きずりながら一喝し、長谷部は玄関へと消えていく。二振りの姿が見えなくなるまで手を振っていた一期は、やれやれと言わんばかりに息を吐き身を翻した。

それを遠巻きに見ていた刀達も、次第に散り散りになっていく。膨らんだごみ袋を持ったまま一部始終を見届けていた太鼓鐘は、首を傾げてぽつりと疑問を零した。

「……一期、何でこんな時に鶴さんに喧嘩売ったんだろう」

「ん? あーそうだな、太鼓鐘から見えて鶴丸の様子はどうだった?」

「どうって、ちよつと気落ちしてたよう、な……」

隣で同じくごみ袋を持っていた薬研が、太鼓鐘にぼいとヒントを渡す。

太鼓鐘は鶴丸の旧知でよく気が回る質だ。鶴丸の状態をある程度把握する事が可能だと判断した上で薬研は太鼓鐘にヒントを出し――そして思惑通りあっさり鶴丸の状態と一期の思惑を看破して見せた。

「……え、まさかあれ発破掛け? 確かに鶴さん、いつもの調子を取り

戻したみたいだけど……劇薬が過ぎねえ?」

目を剥いた太鼓鐘は、えー……と呆然とした声を発し続けた。

劇薬、それは言い得て妙だと薬研は苦笑う。下手したらその場で乱闘になった可能性もあった、あまりにも危険な手段だ。それでもいつもの鶴丸に戻せたのだから結果オーライと判断するだろうな、と少し血の気が多い長兄の思考を読んで薬研は乾いた笑いを浮かべた。

「いち兄は絶対認めないだろうが、喧嘩相手が落ち込んでいるのを見てられなかったのも少しはあるだろうな。何かあったのか分からんが、鶴丸今朝から考え込んでいただろ」

「だからって……ある意味不器用だな、一期……」

「まあ大半の理由は喧嘩を売ったからだと思うが。そりが合わないのは事実だし」

「……何とかならねえの?」

「なつてたら俺達も匙投げてねえよ」

何度話し合わせても最終的には部屋を破壊する喧嘩に発展するしな、と遠い目をする薬研に、太鼓鐘は本当に相性悪いんだな、と目を逸らした。

*

「あんの青二才帰ったらギツタギタにしてやる、いくら心の広い俺でももう我慢の限界だ、あの澄ました顔に一発入れなきや気が済まんクソツタレ」

「鶴丸いい加減切り替えろ! これから任務だというのを分かっているだろうな!」

廊下を引きずられつつ一期への怨嗟を吐き続ける鶴丸に、長谷部が頭痛を堪えながら声を張り上げる。

流石にこの状態のままでは避けたい。先程からすれ違う刀達による呆れ混じりの視線が痛いのだ。それに、任務に向かうというのに雑念に囚われているのでは、戦場で大きく動きが鈍る要因になる。

喧嘩をするにしても時間を選んで貰いたい、と願うのは間違っていないはずだ。いつものようにやり合うには、今の状況はかなりまずい。

——何せこれから、この本丸から出た背信者の討伐と、この本丸の無実を示さねばならないのだから。

昨夜、堀川がいなくなつた直後に調査部隊が集合した際、鶴丸が青江を問いただした。そして青江によつて告げられた事態に、長谷部も身体中から血の気を引かせた。小夜と次郎も、大きく動揺を見せる事となつた。

目覚ましい戦果を上げ、任務中にさりげなくサポートをしてくれる堀川を、長谷部は信頼していたのだ。この本丸に来てからすぐに調査部隊に配属された位だ、審神者も堀川を良く思っていたに違いない。

なのに、堀川は裏切っていた。——青江の話によれば、恐らく最初から。

審神者すら欺いたその演技力には舌を巻く。誰も彼もに自分の正体をぎりぎりまで悟らせず、そして尻尾を完全に掴まれる前に同志と合流した。敵ながら鮮やかな手腕である。

確実に政府の情報を入手する為に、本丸に潜り込んでいたのだろう。ならば、対策局の事もおよそは掴んでいるに違いない。

信じていたものに裏切られると、こんなに冷静さを欠くのだと、長谷部は震える手を握り締めていた。その直後だ——鶴丸が本丸を飛び出したのは。

鶴丸も、堀川を信頼していたようだった。しょっちゅう気にかけていたらしいし、任務時にも和やかに話していたのを見かけている。戦闘時には彼の力を疑う事すらしなかった。

だからなのかもしれない。鶴丸は、今朝まで苦い顔をし続けた。

裏切られた衝撃と、それを見抜けなかった口惜しさ。そして、仲間としての情。混ざり合った感情が、鶴丸からいつもの軽妙さを削ぎ落としていた。

それに気付かなかった訳ではない。だが、複雑な心境だったのはこちらと同じ。慰めるのも違うしと、どう声をかけるか長谷部も悩んだ。結局はええいままよと、準備をしていた鶴丸に集合するように告げに行ったのだ。

だがそんな意気込みをよそに、いつものように一期への敵意を剥き出しにしているのを見て、肩の力が抜けた。それは余りにも「日常」だったから、何だか気が抜けてしまったのだ。

呆然と遠くから眺めたのも一瞬に収め、長谷部は鶴丸を連れにかかった。手を振って更に敵意を煽る一期も、それに喚く鶴丸もいつも通りで、こんな時にやり合うなと思うと同時に、少しだけ安心してしまった。癪なので、口にする気は毛頭ないが。

鶴丸はしばらく洗い深呼吸を繰り返し、はあ、とため息一つ零す。そして己の襟首を掴む長谷部の手を軽く叩いて、もう歩ける、と言い手を離させ立ち上がった。

「……あーすまん、見苦しい所を見せた」

「全くだ。……いつもの精神状態に戻ったのなら良かったが……」

「何か言ったか？」

「いや何も」

余計な事は伝えないに限る。長谷部はしれっとした顔で独り言をなかつた事にし、鶴丸はそれに首を傾げていた。

足早に玄関へ向かうと、既に他の隊員が揃っていた。政府からの調査員である小烏丸が、こちらへと顔を向けて手を挙げる。小夜、青江、次郎もそれぞれ反応を示し、遅くなったと告げる長谷部と共に鶴丸も手を振った。

小烏丸の前に立つと、彼は咳払いを一つして引き締めた顔を上げた。

「さて、早速だが対策局までの道案内はこの父が勤めよう。本来は我がこの本丸の調査を任されていたが、それは別のものに託す事になる。——あくまでも、そなたらの疑いは晴れていないと心得よ」

「まあ、そうだよ。案内は任せたよ」

「疑われてるって教えてくれるだけ有難い、と思うべきなんだろうねえ。あー、ゆっくり酒が飲みたいよ……」

「全てが終わったら、僕も付き合いますよ。……小烏丸さん、お願いします」

青江は肩をすくめて内心を隠した笑みを浮かべているが、次郎は既にげんなりと様子で酒樽を叩いている。小夜がそれを宥めつつ、小烏丸に頭を下げた。

「痛い腹がないなら、堂々としていればいい。俺達が今すべきはただ、背信者を討ち倒す事だけだ。案内は頼んだ、小烏丸」

次郎に少しだけ穏やかな目線を一瞬向け、長谷部は凜とした佇まいで小烏丸に向かい合う。続いて鶴丸も、小烏丸に自身の気持ちを述べた。

「色々言っておきたい事はあるが、今は敵を倒す事に集中するさ。……堀川は、俺達が何としてでも討ち取る。そうじゃないと、気が収まらないんでな」

うむ、と小烏丸が鷹揚に頷く。そしてひらりと背を向けると、一言だけ告げて地を蹴った。

「……対策局は今や、見るも無残な有様よ。こちらとしても、これ以上戦力を落とすのは避けたいのだ。我としては、そなた達の忠心を信じ

たいのが本心。その為にも、大きく戦果を挙げるのを期待しているぞ。……では、参ろうか」

軽やかに駆ける小烏丸に、調査部隊は何も言わなかった。ただ引き離されないよう、その背中を追いかける。

自分達の不始末は、自分達で片付ける。それは小烏丸に言われなくても、調査部隊全員共通の認識だった。

*

本丸区域を駆け抜けていくと、あちこちからきいん、と高く激しい剣戟の音がした。どうなっているんだ、政府に通報は、と混乱している声も聞こえてくる。本丸区域のもの達には、持ち堪えてくれることを祈るしかない。

当然、道中ではあのヒトガタも襲い掛かってきた。見通す先が闇で覆われる程に数が多かったのだが、小烏丸はあまり相手にするな、と先へ進む事を命じた。

「消耗するところちかも困るのだ。他の本丸にこの事は任せ、我等は対策局へ急ぐぞ」

「こんな数を避けるって言われてもなあ……!」

「それでも避けて貰うしかないのだ。——恐らく対策局にこやつらの操り手がいる、そやつを打ち倒さなければ延々と湧いて出てくるぞ」

操り手と聞いて、長谷部が小烏丸に鋭く視線を向ける。

「……こいつらは、操る事も可能なのか」

「ああ、そこまでは聞いていなかったか。……そうだ、こやつらはある実験で命を落とした者の怨霊でな。その怨念を突いて操作可能にした輩が、襲撃の下手人の中にいるのだ」

ある実験、と言葉にする前に小烏丸が言い淀んでいたのを、鶴丸と小夜は聞き逃さなかった。一瞬小夜と目を合わせて己の推測を確信に変えた鶴丸はここでもか、と舌を打ちたくなる。

実験——それはあの蛍丸が修羅になる前に施された、地獄のような苦行と同類の物だろう。それが少なくない数いるとは感じていたが、ここまで多くの命を費やしていたとは。

それも今まで連綿と紡がれた歴史を守る為なのだ、分かっている

ても。鶴丸は、窮地に追いやられた人間の業を感じざるを得なかった。

「よし、対策局が見えてきたよ」

「状況は——ああ、最悪そうだな」

「分かっていった事でしよう？」

「殺気が溢れてるねえ、冷めちやうなあ……」

調査部隊がそれぞれ、土埃や煙があちこちから上がる対策局に目をやる。段々近づいていくと、惨状に苦しむ悲鳴や物が崩壊する音が入る。大きく爆ぜる音すら飛び込んできて、果たしてどんな地獄が繰り広げられているのか、想像するのも悍ましい。

穴の開いた塀の前で小鳥丸は足を止め、中の様子を静かに窺う。しばらくそうしてから調査部隊の面々をぐるりと見渡し、己の刀装玉を手にとって告げた。

「総員、損傷はないか？ ……これより対策局に入る、刀装を展開し戦闘態勢に移行せよ」

調査部隊は刀装を展開する。鶴丸が持ってきたのは、バランス良くステータスが上がる軽騎兵。長谷部も同じく軽騎兵、次郎は精鋭兵、青江は弓兵、小夜は銃兵だ。遠戦装備の二振りは打撃上げとリーチ拡張を、そうではない三振りは機動上げを目的に刀装を選んだ。

全員が刀装の展開が完了したのを確かめ、小鳥丸は空いた穴から対策局内部に滑り込む。調査部隊も彼に続いて、中へと足を踏み入れた。

鶴丸の足元に何かが当たる。見ると、人の腕が肩から切り落とされた状態でそこにあった。ざっと周囲へ目をやる。五体満足の遺体だけではなく足や腕がなかったり、胴体に大きく切傷があったり、元の部位が辛うじて分かる程度にしか形を留めていない肉片があったりと、多くの血溜まりに犠牲者達が沈んでいる。

——登庁してきた一般職員はほとんど死んでいるか。随分と徹底的だな。

ネームプレートがついている遺体達の状況から見て、そう判断する。

食い散らかしたように惨殺されている職員達は、大体が上層部の事情など知る由もない、然程大きくない役持ちか役なしの人間だ。罪のない職員まで巻き込まれているのを見ると、テロ首謀者達の悪意をまざまざと感じて気分が悪い。その中にかつての仲間がいるというのも複雑である。

「……小夜。どう思う?」

不意に、長谷部がそう尋ねた。しゃがんでじつと遺体を見つめていた小夜は立ち上がり、柄を握り締め答える。

「一般職員の犠牲が多い……少なくとも、奥へ行くように誘われていますね。僕としてはこの状況を放っておくのか、見過ごすのかと挑発されているような気がします。相手に何か手があるのかもしれない。これ以上犠牲を出さないようにするのも肝要ですが、進軍は慎重にするべきかと」

確かに小夜の言う通り、相手の悪意に乗せられて謀略に引っかかるのはまずい。あちらには少なくとも、ヒトガタを操れるというアドバンテージがある。底が見えるようになるまで、こちらは慎重に動かざるを得ない——口惜しい事だが。

「同感だな。堀川達がどこにいるかはまだ分からないが、こちらの一举一動を見られていると言っているだろう。——こうして、監視の目を送られている事だしな」

長谷部が建物を見上げながらすらりと鞘から刀を抜き放つ。次の瞬間、高く澄んだ音と共にカシャン、と何かが砕け散った。

地面には、壊れたシャープペンシルが落ちている。——間違いない、ヒトガタの「鍵」だ。

「落ちてきた方向は見ていたな?」

「うん、人影も確認した。隊長の言う通り見られているね」

鋭く目を細めた青江も建物を仰ぎ見て抜刀する。調査部隊全員の抜刀を確認してから、長谷部は耳に手を当てている小鳥丸に尋ねた。

「上からの命が下りたのか?」

「ああ、主から至急合流するよう命じられた。我の案内はここまでだが、互いに事態の収束に向かえるよう祈っているぞ」

「案内助かった、小鳥丸」

ではな、という言葉を残して小鳥丸は地を蹴り遠ざかった。それを一瞬だけ見送って、長谷部は隊員達に向き直る。

「俺達は『幽霊』を討伐しつつ、背信者共の元へ向かうぞ。準備はいいな？」

調査部隊員は頷いた。よし、とだけ言った長谷部は身を翻し、建物入口に集まるヒトガタの群れの中に突っ込んでいく。

ヒトガタは突っ込んできた長谷部へと一斉に襲い掛かる。覆い被さるように向かったヒトガタはしかし、数秒後に黒い霧となつて消えていった。ぽっかりと空間が出来た周囲では、「鍵」である欠片達が地面へ向かつて落ちていた。

「長谷部、短い間に腕を上げたなあ。……さて、俺達も行くか！」

鶴丸も長谷部の背中を追う。残り三振りも刀を構え、戦場へ飛び込む為を駆け出した。

鶴丸達氷雨調査部隊が対策局に到着する少し前。雲霄隊第一部隊は、審神者から政府要人の殺害阻止を命じられ、対策局までの道を駆けていた。目的地が近づく度に増えていく成れの果ては、彼等に過酷な事態の発生を感じさせていた。

「本当にこの数、どうやって用意したんだろうな……！」

「加州殿、公安局に連絡はついたか？」

「ぜんっぜん繋がらない！ 多分あつちも大わらわなんだろうけどさあー！」

「手を焼いているのは間違いなさそうですね。急ぎましょう！」

誰も彼も、表情が強張っている。足を動かしつつ、鶯丸は漂う血の匂いに漏れそうになったため息を押し殺した。

城下町に溢れる成れの果ては戦力分散の為の囿、というのが加州の意見だ。それでも成れの果てを退治しなければ、いつまで経つても城下町に平穏は訪れない。それに、今は室内に籠っている人間を襲っていないが、いつ建物内に成れの果てが入り込んでもおかしくはないのだ。

結果、政府側の本丸も成れの果て退治に追われる事となり、対策局に向かえている部隊はかなり少ない。対策局襲撃が起こった時点で向かおうとした部隊もいたらしいが、成れの果てに阻止され合流するのは遅くなると連絡があった。

対策局で待機していた部隊の他に、どのくらい人員が割かれているのかは分からない。だが現時点では、かなり不利な状況での戦闘になるだろう。流れる血も多くなるに違いない。憂鬱な息を再び噛み殺し、鶯丸は走り続けた。

「対策局が見えてきたよ！ 全員刀装展開！」

加州が声を張り上げて、刀装玉を上へと放り投げ兵を呼び出す。現れた兵は、盾を構えて加州の周りへとついた。

雲霄隊は全員、防御力を上げつつ兵の多い重歩兵及び盾兵を選んだ。長い戦いになるだろうと見越しての選択だ。刀装が壊れる事態

にまでにならない事を祈りつつ、鶯丸も刀装を展開する。

塀を超えて対策局へ入ると、一層強く鉄臭い匂いが漂った。周囲を見渡すと、やはりそこには地獄絵図と呼んで差し支えない光景が広がっている。

ある場所では、成れの果てが息絶えている職員に群がって体を切り刻んでいる。ある場所では、まだ息のある別の職員をいたぶるように成れの果てがゆっくりと刃を沈めている。またある場所では、悲鳴を上げている職員に火をつけて嘲笑うように成れの果てが体を揺らしていた。

悪意に満ちた惨劇が、目の前で繰り広げられている。加州は顔をしかめてからぐるりと視線を動かし、一点を見つめると目を見開いて駆け出した。抜刀し刀を横に一閃すると、成れの果てはさらさらと霧散していく。成れの果てが消えた向こうに、腕から血を流した職員が座り込んでいた。

「大丈夫!？」

「……き、救援……?？」

「そうだよ、間に合って良かった! これから他の部隊も来るから、気をしっかり持つて!」

「あ、ああ、そうか、救援が来たのか……」

職員は体を震わせて、加州を見返す。鶯丸達も加州の元へと駆け寄り、周囲の成れの果てを退けようと刀を構える。

鶯丸は穏やかな表情を職員に向けて、尚も恐怖が抜け切らない彼へと尋ねる。

「ここまでよく持ちこたえたな、よく頑張った。アレをけしかけたのは刀剣男士で合っているか?」

「……そ、そうです。堀川国広が、何かをばら撒いたと思ったら、あれが現れて……」

「堀川の他に一緒にいた奴はいるか?」

蜻蛉切がそう聞くと、職員は唇を震わせながら答えた。

「い、一緒にいたのは鶴丸国永と蛍丸です。ですが、会話の中で乱藤四郎と宗三左文字と小狐丸の名前が出ていました」

「その六振りは建物内ですね？」

「はい……痛っ……！」

「大丈夫であるか？　すぐにでも、安全な場所に連れていきたい所であるが……」

険しい顔をして山伏が職員顔を覗き込む。職員腕の傷はかなり大きく、このままではまずい事になるだろうと一目で分かる。

だが、今の対策局はおろか町の中ですら、安全な場所が思いつかない。町の隅々まで成れの果てが蠢いているのだ、迂闊な場所を選べなかった。

「とりあえず、公安局室まで行こうか。動ける？」

「は、はい」

「貴重な生存者だ、傷一つ付けません。さて、公安局長はどうしているだろうな……」

「無事でいる事を祈るしかないな。まあただでやられる人間ではないだろうが」

「では参ろう。傷の具合が悪化しないとも限らんからな」

山伏へ領いた蜻蛉切が、職員に手を差し伸べ立ち上がらせる。職員もぎこちなく手を取り体を動かした。

周囲を警戒し時には迎撃しながら、建物内を進む。成れの果ての数はやはり多く、少し進むのにも手を焼く始末だった。

「姿を見せないね、襲撃者達」

「どこで何をしているのか把握出来たらいいんですけどね……」

「手負いの人間がいるんだ、戦闘回数は少ないに越した事はない。公安局員が無事でいてくれるといいんだが」

ふと、平野が足を止める。そして前方をじっと睨みつけると、鋭く叫んでから駆け出した。

「——公安局室方向から鋼の音がします！」

敵襲の報に隊員達が平野に続いて走り出す。蜻蛉切は職員に一言断りを入れて彼を背負い傷に障らないようにしている。

その職員は、震える声で呟いた。

「……ああ、あのテロリストが、公安局室にまで……！」

その言葉を聞いていた鶯丸は、改めて耳を澄ませる。

高く澄み渡る剣戟の音が走る度に近づく。それが間を置く事なく響き続けている。更に走ると、微かに声が聞こえてきた。

「……あるじさま、通信はまだ復旧が……！」

「……くそ、あつちも襲撃されたか！」

「速過ぎる、こいつ修行済みか！」

「傷は出来るだけ負うな、毒にやられるぞ！」

公安局室付近の曲がり角まで来ると、壁や設備の破壊音と共に何か跳ね回っていた。公安局員とその配下の刀剣男士へ次々と攻撃を加えるそれは、廊下に降り立つと背筋が凍る程冷えた声で告げた。

「そろそろいいかな。……銃兵、構えて」

言い終える前に、平野が床を蹴って飛び出した。角で足を踏み切つて曲がり、兵に向かって大きく叫んだ。

「重歩兵、職員の皆様を庇って下さい！」

重歩兵が平野の命を受け、公安局室内へと入り込んでいく。銃兵が弾丸を放つ先に、重歩兵は次々と割つて入った。弾丸によつて、重歩兵が三名程弾けて消える。少し遅れて重歩兵達の元に着いた平野は、刀身を構えながら公安局員達を背に庇う。

「皆様、ご無事ですか!？」

「あんたは……雲霄隊の平野か？」

「良かった、増援だ！」

「要請は届いていたか……！」

公安局員が平野が現れた事に安堵の声を上げる。それでも公安局の刀剣男士達は体勢を崩さない。睨み付ける先にいる襲撃者が、まだ銃口と鋒をこちらに向けているからだ。

襲撃者はつまらなさそうにヒールを鳴らし、不安を掻き立てる歪な笑みを浮かべた。

「あーあ、もう邪魔が入っちゃったか。政府も自分の危機察知能力だけは高いんだから」

「何でこんな事を……乱兄さん」

平野は敵意と困惑を混ぜた感情を乗せ、鋒を襲撃者——乱藤四郎に

向ける。乱は動じた様子もなく、短く嘲笑した。

「何で？ 分かり切っているでしょ？ ボク達は政府を憎むもの達。それだけじゃ理由に出来ないの？」

「どうして無関係の職員を襲ったのですか？ 憎悪を抱いているのは一目見ただけでも分かります。けれど、ここまでの惨劇を起こす必要があつたのですか？」

平野の問いは、強者側の問いだ。多くのひとが抱くその問いは、しかし少数派の乱の笑みを崩れさせる程度には嫌悪感を催させたらしい。

「——無関係？」

眉間に皺を寄せ目を見開いた乱は、一気に殺気を溢れさせながら平野に叫んだ。

「揃いも揃ってボク達の悲鳴を封殺した癖によくそんな事言えるよね！ どいつもこいつも、助けてって叫びすらなかった事にして、踏みつけにした癖に！ それで無関係なんて言葉が吐けるなんて、ある意味その白々しさは尊敬するよ！ 救助要請を聞かなかつた事にして、ボク達を害そうとした奴を庇い立てした時点で、政府の奴等は全員敵だ！ どんなに下っ端だって言い訳しようが関係ない、あるじさんの死に関わつた奴等は全員地獄を見せてやる!!」

びりびりと、空間に振動が走る。乱の叫びには、余りにも強い憎悪と悲哀が込められていた。

平野は乱に相對しながらも、齒を食いしばって悔恨の念を味わっていた。

——この乱兄さんは「大移動」の生き残り。どうして首謀者達より先に、僕達が接触出来なかつたのか……!!

庇い立てという発言から、乱が政府の制裁を知っており、それに疑問を抱いているのは間違いない。その疑問を強固にさせたのが、首謀者なのだろう。

確かに、外から見て軽いと思われる制裁を下された人間がいるのも確かだ。だが様々な思惑が絡み合う中で、一番重い罰をようやく下せたこちら側の事情もあるのだと言いたい。きっと彼等には、言い訳だ

と一蹴されてしまうだろう。

それでも、こちら側は一切彼等を軽んじていた事はない。きつと的外れな事もしたのである。けれどもままならない調査の中から最善を選ぼうとし、彼等に出来る限りの配慮をしたのだ。何もしなかつたと否定されるのは、こちらとしても嫌だった。

「僕達は、救助要請を無視した事はありません！ きつと乱兄さんのいた町では、要請を握り潰すような人間が多くいたのでしょう。でもこの町では、そんな事をしたら懲罰が下されます！ 制裁だって、当事者達にとっては非常に重い罰を下しています！ 不満があるのなら、関わりのない職員ではなく僕達に言えば——」

「とことんいい子の発言だね、平野。ボク達をそんなお綺麗な言葉で流されるような刀だつて見くびっているの？ どんなに言い繕つても、こつちに逃げて懲罰を逃れた人間がいるのは知っているんだよ！

それとも何？ 平野達の言う罰っていうのは、罪のない審神者達を散々甚振った人間に、新しく役職を与えて暢気に過ごさせるっていうのがあるの？」

「その役職だつて、ほとんど監視付きの牢獄に入れているような物です！ 罪から逃れようとした人間を許したりはしていませんし、暢気に過ごさせるような事にもしていません！」

「まだ分からない？ それともしらばっくれてるのかな？ ——そんな罰じゃ、ボク達は足りないって言っているんだよ」

鼻で笑い、乱は己の刀装兵達に手を翳す。充填が終わつたらしい兵達は、いつでもこちらを撃ち抜けるように備えている。室内の職員達は、恐れたように少しずつ後退していた。

「そんな生温い罰で制裁を済ませたつて言うような奴、信じるに値しないんだよ。あるじさんを追い詰めた奴等は、まだのうのうと生きている。この手で地獄を見せなくちゃ、ボクの気持ちは満たされないので」

嘲りに歪めた表情に、一切の揺らぎはない。平野は口惜しそうに眉をひそめ、鋒を震わせる。乱はまた飽きたように表情を消し、ヒールを鳴らしつつ刀装兵に命じようと口を開く。

「話にならないね。銃兵、目の前の刀剣男士を撃つて——」

命じる口が閉じ切らない内に、平野は懐へと走り出した。攻撃が成功するとは思っていない——少し虚をつければ十分だ。乱は目を少し見開かせるが、すぐに迎え撃とうと刀を構える。

その一瞬、確かに乱の意識は平野に集中した。

「——時空座標指定、完了！」

その声と共に、空間が揺らぎ始める。時空転移が開始された事に乱が今度こそ目を震わせた。

曲がり角から親指を立てながらこちらに駆けてくる加州の姿に、平野はほう、と息を吐く。——どうやら、隊長の目論見通りになったようだ。

「雲霄隊、頼んだぞ！」

「あの職員はこつちで何とかする、そつちは任せた！」

「こちらも態勢を整えてから沈静に向かうからな！」

同じく加州の策に乗った公安局員達がそう言いながら部屋を駆け回り始める。公安局の五虎退が一礼したのを見たのも束の間、視界が暗転し足が浮き上がる。

床にふわりと足がつく。目の前には四角いドーナツ状になった大きな机が置かれ、後ろにはプロジェクタースクリーンが天井から吊り下げられている。

飛んだ先は、中くらいの会議室であるようだった。周囲を見回すと既に他の隊員は刀身を構えている。乱は、と気配を探すと、射殺するような猛烈な殺気とともに、銃弾が迫る。

平野は腕を掴まれ、思い切り後ろへと引き下げられる。盾を持つ兵が目の前に現れ、銃弾によってかき消された。

「鶯丸様、助かりました」

「まだ時空酔いが抜けなにか、だが存分に動いてもらうぞ。どうやらお前が戦いの鍵になりそうだからな」

平野に視線を流し微笑んでから、鶯丸は前を睨む。視界を動かすと、頭を押さえる手の隙間からこちらを見据える乱が、ふらりと立ち上がる所だった。

「……やってくれたね」

「話し合いでどうにかなるなら、それが一番よかったんだがな。そうはならなさそうだったから、隊長が一計を案じた訳だ」

「時空の裂け目がやたら多かったからねー。相当暴れてるでしょ、お前達。時空にまで手出ししてるって、想像したくない手も使ってたろうね、きつと」

一歩踏み出して、加州が鋒を乱へと向ける。

「念の為聞くよ、反逆者。——刀を収める気は？」

「——ある訳ないでしょ、政府の小間使い」

冴えた声で告げられた最終確認を一蹴し、乱は腰を落とす。雲霄隊もそれぞれ戦闘態勢を崩さず、反逆者の動きを注視していた。

「くそ、本当どうなってるんだよ!? 鶴丸と一期と秋田は帰ってこねえし、変なバケモンは湧いて出てくるし、氷雨の野郎は喧嘩売るメツセージ寄越してくるし!」

「ボクが聞きたいよ、あるじさん! それと氷雨隊の審神者さんと喧嘩するのは後にしてね!」

「とりあえずあんたは騒ぐな、奴等に見つかりかねないぞ!」

蒼穹隊本丸、執務室。想定外の出来事が続けて起こり、審神者が頭を抱えて騒いでいる。彼を宥めながら障子をわずかに開け、山姥切と本日近侍である乱は廊下の様子を窺っていた。

鶴丸が原因不明の失踪をし、その動揺が冷めやらぬ中での「幽霊」襲撃だ。単細胞思考気味である審神者がパニック状態になるのも当然である。

執務室の外からは、応戦している刀達の慌ただしい声や澄んだ鋼の音が響いている。執務室の近くまではまだ「幽霊」の気配を感じないが、ここまで来るのは時間の問題のような気がした。

『主、そっちに敵は来てない? こっちは全然数が減る気配がないんだよね! うわあ長谷部君大丈夫!』

『悪夢見てるみたいだよ本当……ちよ、清光前! 前から来てるんだから爪いじるな!』

『主君、執務室からは出ないようにして下さいね! ……骨喰兄、左は任せました!』

『分かった。主殿、鬱憤は溜まるだろうが抑えておいてくれ』

審神者の端末から次々と、良いとは言えない状況が報告されてくる。それにますます頭を抱え込んで審神者は文机に突っ伏した。

「ああああ、何が起こってるんだ本当に! 俺と俺の刀剣男士達が何したってんだよ!」

「落ち着いてあるじさん! 気持ち分かるよ、ボクだっていち兄が帰ってこなくて不安だもん! でも今はこの状況を乗り越える事だけを考えよう、ね!」

「乱の言う通りだ、主。今は喚いたってどうしようもないだろう、深呼吸して落ち着いてからまた指揮を執ってくれ」

審神者の横に移動した乱が背中をさすり、彼の顔を覗き込む。頭を抱えたまま今度は天を仰いだ審神者は、それでもまだ唸り声を上げている。

端末から、指示を乞う声が溢れ返る。山姥切はふう、と息を吐いてから審神者の正面に座り、ぱん、と眼前で手を叩いた。

「がっ!？」

「主、いい加減采配を頼む。燭台切達の班が増援を要請しているが、どうするんだ？」

「……あ、ああ、悪い。そうだな、太郎と青江が待機班にいたよな？」

燭台切の所に向かつてくれるよう頼んでくれ」

「分かった」

まだ呆然としている審神者の代わりに出陣の手配をしながら、山姥切は乱に話を振る。

「……鶴丸はともかく、一期と秋田はどうして帰ってこないんだろうな。一期は城下町まで走り込みに行っただけだし、秋田もそろそろ送り届けられる時間だろう」

「……城下町も……と同じような事態になってる、とか？ それなら公安局に繋がらないのもいち兄達が帰ってこないのも納得出来るよ。きつと通報の嵐だろうし、足止めを食らってる可能性高いだろうし」「想像したくない事態だな……」

布を深く被り、ため息をつく。想像したくないとは言ったが、乱の言う通りの事が起きているとしか考えられず、締め付けるような頭痛が酷くなった。

公安局へは「幽霊」が現れた当初から、繰り返し通報を行っている。だが一度も繋がらないのだ。電話が集中しているのを示すアナウンスだけが返ってくるだけの状況に、受話器を叩きつけて通報を諦めたのは先程の話である。

周囲が似たような事態になっているのなら、間違いなく一期と秋田は巻き込まれているだろう。政府も動いているはずだが、その連絡が

全くないのが不安を掻き立てる。

ピピピピ、と高い電子音が響き渡る。着信を示す音に肩を跳ねさせてから、応答する為に山姥切は慌てて端末画面のボタンを押す。

「こちら蒼穹隊山姥切国広、用件を——」

『二期一振です、緊急時につき手短に。蒼穹隊鶴丸国永が謀反を起こし政府中枢を襲撃中、私はこれから春光隊と共に征伐へ向かいます』ポカンと開いた口から、は、と言葉が漏れる。いきなり過ぎる知らせに固まらざるを得なくなる。乱が、え、と震える声を漏らして、こちらを向いているのを感じた。審神者がどうなっているかは——今は考えたくない。

鶴丸が裏切った。それ自体は驚く程すくと腑に落ちた。けれどどうして、征伐しに行くという一足飛びの事態になっているのか。そもそも二期はどうやって確信を得たのか。

端末越しに一期の激しい怒りが伝わってきている。地を這うような声が通話を打ち切る挨拶を述べようとしたので、それを遮り山姥切は状況を尋ねようとした。

「おい一期、一体何が」

『申し訳ありませんが私は腹を決めています。鶴丸国永とはいずれ、決着をつけねばならないと思っておりますので。謀反者はこの身に代えても討ち倒します。それでは』

激情を窺わせながらも涼やかな声が途切れ、無機質な連続音が響き始める。呆気に取られたまま、通話終了の文字が出ている画面を見つめるしか出来なかった。

乱も事態を飲み込み切れしていないのだろう、動揺に震えた声は余りにも頼りない。

「……………え、どういう事……………？ 鶴丸さんが、謀反……………？」

ダン、と鈍い音が空気を震わせる。音源へと振り向くと、肩をわななかせている審神者の背中が目に入った。審神者の拳が、メリメリと音を立てて文机にめり込んでいるのも。

「……………まんば、乱」

「な、何？」

「……主？」

地獄の底から響くような声で、審神者が二振りを呼ぶ。どう考えても激怒している審神者の様子に戦々恐々としながら、二振りは答えた。

審神者が続けて命じる。その内容は常とは違う、余りにも具体的な物だった。

「燭台切達の班を援助して来い。温存していた奴等も参加させろ、手配はこれから送る。仙人団子はありったけ出してやるから、ここにいるバケモンをまずは片付けるぞ」

「き、急にどうした？」

「あるじさん、何か怖いよ……？」

いつものかわい子ぶる物ではなく、乱は本気で怯えているようだった。山姥切も困惑しながら審神者の背を見つめる。

当然の話だ。いつもの審神者の命令は、出陣している刀達が匙を投げる程大雑把極まりない物なのだから。頭が良くないと自分で言うくらいだ、審神者もそこまで采配に期待されているとは思っていないし、高度な事をやろうとも思っていないだろう。

そんな審神者が頭を回して、迅速に敵を叩き潰す命令を下している。天変地異の前触れとしか考えられない。実際同じような事態なのだろう——己の刀が謀反を起こしたなんて事などは。

振り返った審神者は目を剥いて瞳孔を開き、額に青筋を立てている。般若と言えるその怒り様に追い立てられるまま、山姥切と乱は背筋を伸ばす。次に下される命令を聞かなければ、審神者は荒れ狂うだろうから。

「——片付けたら政府中枢に向かう！ ここで無様に潰されてたまるか、邪魔する奴等は片っ端から蹴飛ばしてやる！ 鶴丸の裏切りが嘘にしる本当にしろ、真実はこの目で確かめるぞ！ 分かったらすぐに動け、事態が待ってくれる訳ねえんだからよ!!」

「り、了解！ 山姥切さん、燭台切さん達は!？」

「あっちだ!」

命を受けて、山姥切と乱は執務室から転がり出るように飛び出し

た。共に廊下を駆け抜け、待機していた面子に声をかけ、疲労をある程度抜く仙人団子を口に入れつつ数本手に取り、配置された班に向かう。

本気を出した審神者など、この先再び見られるかどうか。そこまで追い込まれた事態になってしまったのを憂いながら、二振りは戦場に飛び込んだ。

刀身をヒトガタへと大きく振り下ろしつつ、蛍丸が屋上から降ってくる。氷雨隊審神者の妹である夕立は、指揮する隊に含まれていない彼がこちらに来たのに目を丸くした。

「蛍丸は消滅していくヒトガタに目も暮れず、夕立に問いたです。

「妹さん、国行どこに行つたか知ってる!？」

「え、さつき交代の時間だからって西棟の方へ向かつたのを見かけましたが……」

「えっ、交代には早過ぎだろ!? て事は……サボりやがったな国行!!」

「仕事場からまんまと逃げおおせた自分達の保護者に、愛染が大きく吠える。蛍丸も、国行には後で目一杯働かせようと目を据わらせていた。夕立は言いくるめられた事に自分の未熟さを痛感して項垂れる。

「申し訳ありません、他の方にも確認を取るべきでした」

「いやいや、審神者じゃない妹さんが出来る事は多くないんだしさ」

「そうだよ、悪いのはサボつた国行」

それでも夕立は、目を伏せて口を引き結んでいる。蛍丸と愛染は顔を一瞬見合わせてから、夕立を背に庇うように立って刀を構える。

「妹さんはごこの指揮しか任されてないし、出来ないんだよ。それ以上の上の事は主さんの仕事だし。だから、妹さんがそこまで気負う必要はないの」

「蛍の言う通りだぜ、妹さん。出来る事をしっかりやってるんだから、妹さんは上出来過ぎるくらいだ。むしろ、真面目過ぎる所を直した方がいいかもな」

その点は国行を見習ってみてもいいかも、と二振りは夕立に柔く細めた目をやる。夕立はゆっくりと頭を持ち上げ、二つの頼もしい小さな背中を見つめた。

愛染はヒトガタの懐に入り込み、「鍵」を打ち砕く。蛍丸は大きく鋒で弧を描き、胴体と「鍵」を同時に切り裂いた。戦装束の裾とマントがそれぞれ、ひらりと軽やかに揺れる。鮮やかにヒトガタを倒していく二振りの姿は、見ていて気持ちの良い物だった。

二振りが再び夕立の前に立つ。刀の神様がこうして夕立を気にしてくれている事に、少しだけ嬉しいような、情けない姿を晒して恥ずかしいような、そんなくすぐったい心地になる。けれど、アドバイスまでもらって黙っている訳にはいかなかった。

「お二方、ありがとうございます。少し気が楽になりました」

「気に病む所はどこにもないと思うけどな」

「うん。悪いのは国行だけだし」

「妹さんを悩ませた罰として、今日の夕餉の量を減らしてやろうぜ、蛍」

「そうだね、国俊。動かないんならそこまでお腹も減らないでしょ」

保護者に対して辛辣な、けれど愛情も窺える二振りに、思わず笑みが溢れる。何だかんだで気の置けない来派の刀達が、少し羨ましく思えた。

「ほたるまるー！ あかしさんはみつかりましたかー？」

「あ」

たつたつた、と今剣がこちらに向かって駆けてくる。蛍丸は明石を探していたのを思い出し、短く声を上げてから近くのヒトガタを薙ぎ払い、今剣に告げた。

「西棟の方に向かったって。俺も後から向かうから、部屋に引きこもってたら引きずり出しといってくれる？」

「わかりました！ ……それと、ほたるまる。これがしゅうそくしてしばらくは、えんれんにでないほうがいいです」

「え、何かあつたの？」

急に目を鋭くさせた今剣に、首を傾げつつ蛍丸が尋ねる。きよろきよろと周囲を見渡してから、今剣は声を潜めて仕入れた情報を話し始めた。

「……さつきあるじさまのへやをとおりかかったとき、はなしごえがきこえたんです。せいふをしゅうげきしているかたなたちがいて、そのなかにほたるまるがいる、と。どうもそのほたるまる、このくらいばけものをしたがえているみたいなんです。それに、かなりざんぎやくなことをしていると」

全身の毛が逆立ったような気がした。愛染と蛍丸も、目を剥いているのが感じ取れる。

刀剣男士は、主である審神者に従うのが常識だ。そしてその審神者は、政府の命令を受けて行動する。即ち、直接的でないにしろ刀剣男士は政府の影響下にあるのだ。

それに反して、政府を襲撃している刀達。しかもその中にいる蛍丸は、現在この本丸を襲うヒトガタを操っているという規格外の事もしている。

政府に歯向かい、大きくダメージを与える事が出来る刀剣男士達。その同位体の刀がどう見られるか、何となく想像出来る自分が嫌だった。

「どんなひぼうちゆうしようをあびせられるかわかりません。ほたるまるだけですめば、よくないですけどましなんです——」

「……主さんにも矛先が向く可能性があるのか。分かった、しばらく演練には出ないよ」

「はい……あ、このことはあるじさまがおはなしするまで、たごんむようでおねがいますね。ぼくもこっそりきいただけなので」

それじゃああとで、と言って身を翻し、今剣は軽やかに跳ねながら曲がり角に消えていった。

「……政府に、刀剣男士が……」

『蛍丸』が襲撃者の一振りか……何でそんな事したんだろう」

「それは、あっちの『蛍』にしか分からないだろ。でも……」

「政府に悪意を持つてるのは、間違いないでしょうね。残虐な行為をしているらしいですし……」

それきり誰も口を開かず、刀を振るう音だけが響く。夕立は二振りの背中を見つめながら、足が浮いたように不安定な気持ちを持って余す。

自分は、誰かに守られてばかりだ。力を持たず、能力も高いといえない状態で、何か出来るとは思っていない。だが、進路を問われた時のような焦燥感によって、心身共に苛まれている。何もしないで守られている立場に甘んじている現状が心苦しい。

思考を深めた結果兄から自立しようと決意した夕立は、兄の手伝いをする事が増えた。そうする事で、力をつけていられていると思っていた。

けれど——自分は、あまりに物を知らない。兄が隠れて何をしているのか、政府に反旗を翻した刀達の背景だとか、そういった世界に触れる度に、ぬくぬくとした温室で柔らかな物にくるまれていた自分を思い知る。

物知らずの子供である自分が、心底情けなく感じる。視線を下にやると、ローファーに包まれた柔く頼りない足がそこにあつた。

「……夕立、夕立はいるか!？」

張り詰めた兄の声がこちらへと近づいてくる。ぱつと振り返ると、顔を強張らせ荒い足音を立てている兄が速足で歩いてきていた。

「お兄様、どうなさいました?」

「夕立、今すぐ部屋に戻れ。これ以上の指揮はお前に任せられない」

断じて命ずる兄に、夕立はどうしてか得も言われぬ不快感を催した。いつもと同じような口調なのに、と頭の片隅で不審に思いながら、硬い口調で夕立は尋ねる。

「何故です? 私が無熟なのは承知していますが、今は猫の手も借りたい状況のはず。そんな事を言っている余裕は——」

「ここは戦地の真っ只中だ。そんな中で未熟な者を前線に出せば足手まといになる。それに、これ以上お前にあんな怪物共と相対させるつもりはない」

「……は?」

兄は今、何と言ったか。未熟者なのは分かっているからまだいい。けれど、自分があのだヒトガタに苦しめられるような、柔な性質だと見られている発言ははつきりと夕立の癪に障った。

「ちよつと主さん、それは流石にないよ!」

「妹さんは充分頑張ってるんだ、しっかりと足つけて! 主さん、心配なのは分かるけど国行以上の過保護は頂けないぜ!」

「お前達は黙っている!」

夕立の心境を察している二振りが審神者である兄に言い募るが、兄

は怒鳴りつけてそれを一蹴した。その光景を見ながら、ふつつつと夕立の中で何かが煮え滾る。

手伝いを通して、少しでも自分の成長を示せればと思っていた。まだまだ未熟でも、力をつけているのだと認めて欲しくて、夕立は今まで様々な事に励んでいたのだ。

しかし、結果は先程の兄の発言だ。兄は夕立の事を、幼い無力な存在だという固定概念を覆していない。そうであるべきだ、という考えを隠そうともしていない。

仕事を手伝わせたのも、ただのお嬢様の手習い程度の認識だったのだろうか。

——ふざけるな、と罵りたかった。その心そのままに兄を呼べば、常にない程圧のかかった声が出た。

「お兄様」

「まだいたのか！ 指揮は俺が引き継ぐ、お前は早く部屋に戻れ！」

「んな言い方——いつ!？」

「いくら何でも——ひっ！」

兄に食い下がろうとした愛染と蛍丸はちらりと夕立へ視線をやつて、体を硬直させる。愛染はたらりと冷や汗を一つ流し、蛍丸は目と口をわななかせている。尋常ならざる二振りの様子に、兄が視線の先である夕立の顔へと向く。

そして——目を据わらせ、眉根を寄せるその表情に、ようやく彼女の感情を感じ取った。

「……な、何だ夕立、何か文句が」

「お兄様、そこに正座して下さい。愛染様と蛍丸様は周囲の警戒を」

「っ、ツユリ、何かおかし——」

「お兄様は今すぐ正座ッ!!」

ガン、と勢いよくぶつけるような尖った大声で、夕立は兄に命じた。愛染と蛍丸は慌てて夕立の周りで刀を構え、兄はふらふらとよろめくように地面に正座した。腰に両手を当て、足を少し開き、兄を冷たい目で見下ろしながら夕立は声を発した。

「いいですか、お兄様。確かに私は未熟で、まだまだ世間を知りませ

ん。大切にさせて頂いた自覚もありますし、大きな悪意にぶつかった経験も幸いにしてありません」

「分かっているなら、早く部屋に——」

「話は最後まで聞きなさい」

尚も戦場から遠ざけようとする兄に一喝し、口を閉ざさせる。肩を跳ねさせる兄を見た愛染と蛍丸は、怒りが頂点に達した夕立の威力を思い知った。

「ですが刀剣男士の皆様の力添えもあり、少しずつ力をつけていると自負しています。そうして力をつけたいのは、少しでも早く一人前になりたいから——そして、お兄様の力になりたいからなのです。それを無視される憤りが分かりますか？ 封じ込められて無知な子供のままでいさせられる無力感が分かりますか、お兄様？ 分かりますよね、散々お父様にしごかれながらもなかなか認められなかったのですから。……それが私に適用されないと、どうして思ったのですか？ 私はいつまでも子供でいる訳ではないのですよ」

滔々と語る夕立に、兄は口を挟めない。夕立の言葉に押し潰されるように項垂れ、むぐぐと唸り声を上げている。

大きく息を吐き、夕立は更に説教を続ける。

「大切にされている事が嬉しくないとはいけません。ですが、もう少しだけ私を年相応に扱って欲しいというだけの話です。私のような年頃の子は、お兄様が思う程幼くないし、無力でもないのですよ。何なら、お兄様の昔のエピソードを語って差し上げても——」

「わ、悪かった、すまなかつた！ 昔の話は頼むから勘弁してくれ！」
顔を青ざめさせ頭を上げる兄を見て、夕立の口はようやくやく止まる。愛染と蛍丸がひそひそと話す内容は聞こえなかったが、兄が二振りを睨み付けていたので何となく内容は察する事が出来る。

黙って兄を見下ろし続けていると、彼は肩を落として目を伏せた。
「……そうだな、俺だって無力な自分を嘆いた事もあったのに、それをすっかり忘れていた。お前の年頃には、反骨精神を？き出しにしていたはずだったのにな。これが年を食うという事が……」

「年寄りぶるには早いと思うぜ、主さん」

「そうそう。人生まだまだ長いんだから」

刀を振るう二振りだが、そう言って口角を持ち上げる。兄は短く笑い声を上げ夕立に力強い眼光を向けた。

「なら、どんどん仕事をして貰おう。もちろん、お前の出来る範囲でだ。愛染、蛍丸、お前達から見えて夕立の指揮能力はどうだ？」

「年相応だけど可能性の塊、かな？」

「将来有望って感じだな！」

「なら、引き続きここの指揮は夕立に任せる。自分で言った事なのだから、怖くても投げ出すんじゃないぞ」

「望む所です」

愛染と蛍丸の援護によって、兄は夕立の対応を少し厳しくした。

それでも構わない——責任は、一人前になるにつれ大きくなる物なのだから。少し大人として扱って欲しいと願った事を、覆したりはしない。夕立は拳を握り、少し勝気に目を細めた。

「じゃあ俺はそろそろ持ち場に戻るね。国行、引きずり出さなきゃなあ……」

「明石はまたサボりか、全く。蒼穹の痴れ者でもあるまいし、こんな時に手を抜く事もないだろうに」

「え、蒼穹の審神者さんサボってんの？」

愛染が目丸くすると、兄は嘲るように顔を歪めた。

「余程現実を受け止め切れないのか、混乱しているメッセージが残っているな。二言三言返信してやったら、面白い反応が返ってきた。あれは傑作——」

「……お兄様、こんな時に蒼穹様と喧嘩なんて、ずいぶん余裕がある事ですね」

夕立の気配が炎を纏う。そうして放たれた一言によって己の失言を悟り再び顔面蒼白になる兄であったが、もう遅い。

振り返った夕立は、笑っているながらも目が表情と合っていないかった。

「その件に関しては、後で、ゆつくりと、お話致しましょう。……逃げないで下さいね？」

「あー、主さんへマしたね」

「自業自得だけどなー」

苦く笑う二振りは、微笑みながら怒れる少女を止めようとしな
い。味方のいない兄は再び、がつくりと項垂れるのだった。

パキン、パキンと物が碎ける音が続けて鳴る。ストラを靡かせながら器用に「鍵」を壊していく背中を追いつつ、氷雨の鶴丸も刀身を振るっていた。

現在、氷雨の調査部隊が走り抜けているのは対策局三階に繋がる階段。彼等は次々と湧いて出てくるヒトガタに構う事はせず、背信者側の刀剣男士を探す事に注視した。

まずは、根源を叩く。それが調査部隊の総意だった。

「青江、小夜、三階に敵はいそうか？」

「奥からびんびんと感じるねえ。……一層濃い悪意を」

「間違いありません、三階左手に背信者がいます」

「よし、総員刀装再展開！ 背信者は必ず討ち取るぞ！」

階段の途中で敵の出現が一旦途切れると、調査部隊は刀装に手を翳し、玉に戻してから再び兵を出現させる。

普段なら、本丸に戻るまで刀装の再展開は出来ない。だが階層がある場所で連戦を重ねたからこそ、玉に戻してから完全な状態で再展開という芸当が可能なのだ。

大阪城の調査に代表される、階層毎にボスを討ち取れば刀装の再展開が可能になる仕組み。それが今回適用されたのは幸運だった。

こちらの疲労は溜まるが、刀装が万全の状態で背信者と対峙出来る。相手の力量が未知数である以上、慎重になるに越した事はないのだ。

「さて、奴さん達はどこにいるのかねえ」

「各個撃破出来たら一番いいんだが……きつとそうもいかないよなあ」

「酒も抜けてくるし、早く済ませちゃいたいよねえ……」

げんなりした声音で、次郎は刀装を展開させる。声を潜めて、手すり壁の内側に身を隠しつつ周囲に視線をやる姿は、声とは裏腹に疲れを見せないしつかりとした物だった。

鶴丸はいつも通りの次郎に小さく笑んだ後、彼に真剣な表情を向け

て問う。

「次郎」

「んー？」

「君は、堀川の事についてどう思った？」

きよとんとした次郎は、んー、と天井を見上げる。しばらく沈黙した後、少し寂しそうに訥々と話し始めた。

「……やっぱり、最初は何で、って思ったよ。アタシ達、楽しくやってたじゃないか、ってさ。でも、堀川は政府から引き取られた奴だ。それより前に酷い目に遭っていたのならまあ、同情はしないけどこんな事をするのにも納得がいくっていうか」

「……念の為聞くが、許す訳じゃないよな？」

「もちろん。アタシ達にだってアタシ達なりの意志がある、それを譲る気は全くないよ。アタシ達も、きつと堀川も、負けるつもりはなくて。ならこうしてぶつかつた果てに最期まで己の意志を貫けたら、それが一番いい」

そう、自分達には譲れない物があるのだ。それと同じように、相手にも譲れない物があるだけで。状況が違えば、容易く反転していたかもしれない立場だ。

知っていたはずなのにそれが空恐ろしく感じられて、鶴丸はそれを振り切るように問いを重ねる。

「……説得出来たらって、考えなかったのかい？」

「こう言ったら薄情かもしれないけど、堀川の決意は覆せる程度の物じゃないはずさ。アタシ達と堀川には、相容れない物がある。だから、そうだね。残念だけど、アタシ達は堀川の意志を葬る為にここにいるんだ、って身勝手な考えしか出来なかったよ」

「……」

身勝手。その言葉が鶴丸の胸に黒くじわりと広がる。未だ自分は、決断をし切れていないらしい。あれだけ友達に相談に乗って貰ったのに、何て有様か。

唇を噛み締める鶴丸の顔を、神妙な様子で次郎が覗き込む。心配というよりは、訝しんでいるようだった。

「鶴丸。アンタに堀川を斬る躊躇いがあるとアタシには思えない。だったら、何をそんなに難しい顔をしているんだい？ もやもやは早めに晴らしちゃいな、そのままにしておくのと切れ味が鈍るよ」

踊り場へと身を出してから、次郎はそう言った。鶴丸は柄を握り締め俯く。

分かっている。分かっているのだ、理屈では。

言われた通り、堀川を斬る事自体に躊躇いはない。けれどそうする事に繋がる身勝手な理由を、口にするのはどうしても憚られた。

あの蛍丸は、全てを巻き込んで破滅へと向かおうとしている。それを止める理由を、平和を取り戻す為だと言い繕うのは簡単だ。だが、本心はそうではないのだ。

余りにも綺麗な身勝手。それを受け入れられないのなら、言わない方がマシだとも思えた。だけど、仲間が不審な顔付きで見詰める物だから。

不審と呆れ。両者を天秤にかけて、鶴丸は口を開きかける。

「……俺は——」

「——敵襲!!」

青江の声が、鶴丸の脳内を切り替えた。咄嗟に刀装を前に出すと、二、三の兵が弾け飛ぶ。

飛んで来たのは、鉛玉のようだった。短刀かと思えば影を探す。

しかし、想像した大ききの人影はどこにもない。代わりに——

「あはは、本当に銃兵が使える。短刀はさぞ便利だったろうね」

まるでその辺で出くわしたかのように穏やかな笑みを浮かべ、堀川が銃兵を操る。

銃口をこちらに向け、容赦なくこちらへと銃弾を飛ばす。その様は仲間に対するそれではないと、一目で分かった。

こちらへと飛んで来た銃弾を、兵達に受け止めさせてやり過ぎす。近づいて来た足音に、長谷部は尖った眼光を向けた。

「……よく顔を出せた物だな、堀川」

「うわ、長谷部さんの怒った顔、やっぱりおつかないですね。ちっちゃい子なら震えて泣いてますよそれ」

長谷部は鋒を堀川に向けるも、戯けた態度を取られて額に青筋を走らせる。齒を食いしばっており、かなり苛立っているのは明らかだつた。

「よくもまあ、仮にも仲間だった相手にそんな態度でいられるね。僕は君の事を見誤っていたのかな？」

青江も苛立つような呆れたような表情を浮かべ、刀を構える。仲間だった刀が余りにも抜け抜けとした態度でいるので、何を考えているのか探るように睨みつけている。

堀川はカラカラと笑いながら、首を傾げて言い放った。

「まあ、残念に思ってますよ。——仮にも仲間だったひと達がこんな間抜けで」

「——つ次郎さん、後ろです!!」

次郎が小夜の一声に反応して、背後へ刀を振り回す。キーン、と高い音が鳴り、二つの大きな刀身が鎬を削るのが見えた。

そして、その小さな体に見合わない大きな刀を振るう姿に、鶴丸は空いている拳を握り締めて呟く。

「……ここに来たか、19478番」

「——そう呼ぶなって言ってる、鳥頭」

そう吐き捨てるのと19478番——蛭丸は、次郎の刀身を横へと流して大きく後退する。床に着地して空の片手を前に突き、煮え滾る憎悪を眼光に乗せてこちらを見据えた。

「ああ、うざい。どこの『鶴丸国永』もそんなムカつく顔付きなんだね。苛立たせる度合いでは俺達の将とどっこいどっこいだ」

「……なるほど、やはり『鶴丸国永』がそっちにいるのか」

「ちよつと蛭丸君、あんまり情報を渡すのは良くないよ」

「煩いな。腹立つ奴に腹立つって言って何が悪いの？ さっさと血染めの人形にしようよ、こいつら本当ムカつくから」

言葉程深刻さを見せていない堀川の忠告に、蛭丸は舌打ちしながらポケットへ乱雑に手を突っ込む。苛立ちを露わにするその様は、やはり普通の「蛭丸」とは思えない。

——改めて、魂を喰らった奴なんだな、こいつは。

喉がひりつき、目が乾く。その煩わしい感覚を無視し足先の角度を斜めに変えて、踏み締める。

言葉を尽くして止まる相手ではない。相手は既に、墮ちる所まで墮ちてしまっている。ならば、刃を以て止めるのが自分達の役目だ。

「——人形共、こいつらを血祭りに上げろ！」

「気が早いなあ、でもまあ頃合いか。——さあ皆さん、仇討ちの時間ですよ」

蛍丸が『鍵』を周囲にばら撒こうと腕を振りかぶる。それに呼応して、呆れた様子の堀川が『鍵』をパラパラと床に落とした。

長谷部は忌々しく顔を歪めながら隊員に命令を飛ばす。

「遠戦刀装持ちは構えろ、あちらに手数を増やさせるな！」

「銃兵、蛍丸さんの『鍵』を一つでも多く破壊して！」

「弓兵達は堀川の『鍵』を壊してくれ」

小夜と青江が刀装兵に命じつつ、それぞれの操り手の元へと駆け出した。それを黙って見ている操り手達ではなく、刀装兵を展開させ銃口を向ける。

小夜は刀を前に構え、飛んで来る銃弾を刀装兵に受け止めさせつつ接近する。左右上下に飛び回り、銃弾をいなしつつ体を捻って刀身を蛍丸に振り下ろした。

当然、それは呆気なく受け止められる。キン、と高く鳴り響いた金屬音は、蛍丸と小夜の刀身がぶつかり合っている事を示していた。

甲高く短い悲鳴を上げ続ける刀二振り。小夜は蛍丸の隙を突こうとするも、難なく受け流されている。ふと蛍丸の刀身を見て、小夜は息を呑む。

——蛍丸の刀には、振り落とし切れていない血の跡がおびただしく付いていた。

「貴方は、どこまで業を積みば気が済むの……！」

「……これの事？ 復讐の刀が血にビビるの？ どこまでも笑えるね」

「僕達は、普通の人を斬る事を禁じられている。なのに斬ってしまったら、貴方は——」

「処罰されるって? —— 罰を下そうとする奴をその前に殺せばいい話だ」

短く嘲笑し、蛍丸は小夜の体を背後に吹き飛ばした。受け身を取っていた小夜は転がりつつ、腕に入った傷を庇いながら立ち上がる。

視線の先では、険しい顔をした次郎とこちらに背を向ける蛍丸が斬り合っていた。

「全く、アンタみたいな奴は余り相手にしたくないんだけどね!」

「じゃあそこらで飲んだくれて死ねよ。アル中で死ぬなんて、願ってもない死に方だろ?」

「気持ちよくない死に方は御免被るよ!」

兵が、装填の完了を告げている。銃口の照準を蛍丸の背に合わせて、小夜は兵にさりげなく発砲を命じた。

パン、と火薬の匂いと共に音が鳴る。小夜はそれに合わせて床を蹴り、蛍丸の背へ鋒を向けた。蛍丸は鞘でその攻撃を受け止め、顔を響めて踏ん張った。

「どいつもこいつももうつぎいな!」

そして小夜の腹を蹴飛ばし、次郎を後退させてから更に小夜に攻撃を加えようと走り出す。床へと叩きつけるように刀を振りまわし、床材が砕けて周囲へと散乱する。

振り下ろされた先には何もなく、蛍丸は振り返って顔を憤怒に歪める。

天井に飛んで壁を踏み切り次郎の所へと戻った小夜は、腕の傷口を押さえて痛みに喘いだ。

「小夜、大丈夫かい!」

「まだ軽傷です。ですが……」

手を傷口から離し、次郎に見せる。一瞬訝しんでいた次郎は傷口の様子を見て、即座に目を見開いた。

「……これ、呪いかい?」

「ええ。……僕は長期戦を控えた方が良さそうです」

「術師を殺さないと解けない代物じゃないか。……避けたかったけど、あいつを殺す明確な理由が出来ちゃったね。アンタを失う訳には

いけないから」

「そう、ですね……」

背後から殺気を感じ、即座に体を逸らす。飛んで来たのは銃弾だ。あちらで何が起きているか確認する間もなく、再び蛍丸が床材を蹴散らし二振りへと迫る。

金属がぶつかる音は、止む気配がない。

長谷部が堀川に攻撃をしようと速度を上げる。堀川は煌めく刃をヒトガタに受け止めさせ、更にヒトガタを増やそうと『鍵』を撒く。

それを阻止する為、青江が弓兵に命じて『鍵』を砕かせようと矢を放たせた。鶴丸がその隙間を縫うように掻い潜り、堀川へと距離を詰める。

目の前に飛んで来た絵画を真つ二つにしてから、鶴丸は即座に体を捻り刀身を前に出す。刃のぶつかる音が、自分の行動の正解を告げていた。

「本当、皆さんは強いですね」

「何だ、それは嫌味かい？ 堀川」

「いえ、純粹に凄いと思つていますよ？ 保護されながら成長しているのが健全過ぎて、眩しいくらいです」

「君も保護されて育つた一振りのはずなんだけどね。何でそこまで他人事でいられるのかな？」

青江は現れたヒトガタと斬り合いながら、堀川へ棘のある響きで問う。それにきよとりと目を丸くさせ、首を傾げて堀川はあっさりと言い放った。

「何でも何も、本当に他人事ですから。保護して貰ったのはありがたいと思つてますけど、それに旨味を感じたのはこうして動くまでの時間稼ぎが出来た点だけです」

鋭い殺意が斜め後ろから噴き出した。それを察知したのだろう、堀川は押される力に任せて後方に退がる。床に当たり澄んだ音を立てた刃を持ち直し、長谷部は堀川に向かって突き進んだ。

「主の厚意を旨味扱いとは、随分と偉くなつた物だなあ？ 堀川」

「そう言われましても、そうとしか思えませんから。審神者さんが政

府を盲信していたお陰で僕は自由に動けた訳ですからね、盲目な狂信者もこういう時には役に立って——」

「——よく回る口だな。主を侮辱する余裕もあるらしい。だが」

とん、と天井の段差に足を掛けて蹴り、鶴丸は眼下の堀川に向かって刃を振るう。その攻撃が刀身によつて防がれると、続けて青江が放った矢と共に堀川の鳩尾を狙った。相手の刀装によつて弾かれた青江は後ろへと飛び、軽やかに着地してから体勢を素早く整える。

猛攻を受けて尚、堀川の微笑みは崩れない。平静のままの堀川へ敵意を剥き出しにしながら、長谷部は鋒を向ける。

「主を貶されて俺達が黙っていられるはずがない。貴様の腹立たしい余裕がいつまで保つか見物だな！」

「いや、狂信者なのは事実だと思うが」

「長谷部君も大概盲目だよねえ」

「その二振りには真面目にやれ！」

怒り声を上げる長谷部に肩をすくめたのも一瞬、鶴丸は寒気を覚えて刀身を頭上に出す。大太刀と思われる刀を持ったヒトガタが揺らめき、鶴丸の上方から潰しそうな力で押し込める。腕の筋肉が悲鳴を上げつつも、何とか拮抗状態に留めている。

青江も太刀を持つヒトガタとぶつかり合い、激しく剣戟の音を鳴らしていた。

「お陰様でしばらく余裕は保てそうです。この後に僕の余裕が崩れるか、皆さんが先に倒れるか、見物ですね」

寒気がする程穏やかな笑みを浮かべる堀川を、ヒトガタの対処に当たる長谷部は憎々しい様子で睨んだ。

18—10 「到着—春光と協力者—」

「……本当に、襲撃されているのですね。信じたくなかったのですけど……」

「せめて、門が無事だといいいのですが……」

「長谷部さん、周囲を出来るだけ見ないようによね」
「……分かってる」

あちこちから地すら揺らす轟音が響く政府中枢。その正門から少し離れた所に、蒼穹の一期と清澄の江雪、春光隊とその利用者である刀と元滑園園の子供達はいた。

既に中で戦闘は始まっている様子であり、高く鳴り響く金属音に子供達が身を竦めているのが伝わる。恐怖に震える子供達の背を、江雪が優しく支えている。

さて、と先頭に立って建物を見上げていた歌仙が振り返り、隊員達に引き締めた顔を向けた。

「これから政府中枢に入る。最優先するべきは子供達の避難だ、まずは真つ先に門を目指すよ。長谷部、門までの道筋は確認したかい？」

「ああ。……出来るだけ短い、安全なルートを選んだからな。安心までは行かないだろうけど、緊張は軽くして欲しい」

「よし。襲撃されたら、僕達と一期と江雪で対処に当たるよ。あの蛍丸を最初に討ち取れば一番良いんだけど……」

「そう上手くは行かないだろうな。鯰尾兄、大丈夫か？」
「うん、まだ平気。でも長くは保たなさそう」

鯰尾が顔を顰めて腹の辺りをさする。長谷部が泣きそうな様子で見つめていたのを感じ取ったのか、大丈夫ですよー、と振り返って明るく笑う。痛みがあるのを感じさせない笑顔だったが、それでも長谷部は目に涙の膜を張ったままだ。

ぼん、と獅子王が長谷部の背を叩く。振り向いた泣き顔に、獅子王は優しく目を細めた。

「子供達を避難させたら、すぐに鯰尾を治すからな。お前はいつも通り、心を落ち着かせつつ指示を出してくれ。緊張を軽くするのは子供

達だけじゃなくてお前もだぜ、長谷部」

「……分かった」

「鯨尾さんも柔じゃない、だから治すまでの時間は沢山ある。まずは出来る事からやっつけていこう」

頭を優しく撫でる石切丸へ叫びそうになるのを堪えて、顔を赤くした長谷部が頷く。それを柔らかな笑顔で見届けてから、歌仙は真剣な様子で改めて声を上げた。

「まずは門まで走り抜けるよ、全員刀装展開！」

空中に放り投げられた刀装玉は、分裂して兵達に変わる。一期も刀装玉を上投げて、兵を展開させた。

一期が春光隊から借りた刀装は、重騎兵。バランス良くステータスを上げるといふ点では軽騎兵と似ているが、軽騎兵が機動力を多めに上げるのに対して、こちらは攻撃力を多めに上げる。攻撃力が不足していると考えた上での選択だ。

長谷部を除く春光隊は、攻撃力を上げる刀装を選んでいる。相手の力量を見積もって、手早く終わらせた方が良くと判断した為だ。戦えない長谷部は、盾兵を持って来ている。

兵の展開が終わり、さて索敵をしつつ門へと向かおうか——と歌仙が言いかけた、その時だった。

「歌仙さん、正門から何かがこつちに来ます！」

物吉が叫ぶと、反射的に歌仙が兵を前に出していた。長谷部を輪の中に入れた春光隊が兵で自分達の周りを堅める。三、四の兵が弾け飛び、ゆらりと周囲から黒い影が立ち上がる。

影を操っているであろう外壁の上に立つ姿を認めて、江雪は目がかつと見開いた。

「……あの時の、小狐丸……！」

「ひっ！」

「あいつ、皆を殺した……!?!」

「江雪さん、怖いよお……っ！」

子供達もそれを察知して、恐怖が伝播していく。江雪の体にしがみつき、震えながら怖い怖いと訴えている。怯える子供達を抱きしめて

から、江雪は刀を握った。

一期も刀を持って、小狐丸を睨む。早過ぎる横槍だが、やるべき事は変わらない。——障害を排除し、子供達をゲートへ連れて行く。出来る事からやって行く、それに一期も倣うつもりだった。

しかし——

「……やれやれ、邪魔者が随分と多い。固まられては流石に手を焼く、お主達にはどこぞへと散って貰おう」

その呆れた響きと共に、周囲の空間が揺らめいた。まずい、と手を伸ばしたが時既に遅く、一期の姿は掻き消える。

短く悲鳴を上げたのは、子供達だろうか。しかしその悲鳴すらも飲み込み、揺らめきは次々と春光隊達を消していく。

段々とこちらの数が減っていき——最後に江雪を残して、周囲からひとの形をしたものは姿を消した。

「……何の、つもりです……!」

「私も多くを相手取る暇はない。こうして邪魔者を散らして戦果を捧げる事で、母様はお喜びになる。ふふ、母様、もうすぐ会いに行きますからね……」

鋭い眼光を向ける江雪をよそに、小狐丸は自分の世界に入り込み始めている。頬を染めて笑い声を上げるその様は、この状況を生み出したと思えない程に無邪気で、故に狂気を感じさせた。

歯を食い縛り、小狐丸の所へ駆けていく。自らの空想に陶醉するその顔に一撃を喰らわせられたら、という怒りを伴う考えから地面を踏み切り怨敵を斬り裂こうと刃を振るう。

しかし、攻撃は届かなかった。そればかりか、一撃を受け流された様子もない。

離れたはずの地面に再び足がつく。小狐丸の姿を探すと、外壁の上に立つ遠い姿が目につき——そして思い至る。

駆け出す前と今の距離感に、全く差異が見受けられない。周囲の景色も、先程と比べるまでもなく同一だった。

走り出す前の場所に引き戻された。愕然としつつ見上げると、小狐丸はまだ自分の世界に意識を沈めている。

「ふ、ふふ、母様。アサギは永遠に、母様と共にあります。母様を誑かす愚か者共を一掃し、心穏やかに過ごせるようにしますから……」

歯が軋む。一瞥すらしない相手にどう目に物見せてやろうかと、江雪は周囲の煌めく景色を見渡し作戦を練り始めた。

空気が微かに揺れた、と思った直後に痛いくらいの振動が己の全身に走る。手の中にある刀から伝わった振動の発生源——目の前で刺すような眼光を向ける少女染みた刀剣男士は己が刀の鋒でもって鎬を削り合う。

鶯丸は少女染みた刀剣男士——乱藤四郎の放つ威力の高さに、腕を痺れさせながら舌を巻く。

——修行済み、しかもこの短期間で高過ぎる練度。乱の主はさぞ大切に使っていたのだろう。こうなるのも領ける位に。

彼の主は十中八九いい審神者だったのだろう。愛情を沢山注がれ大切にされてきたのなら、審神者を蔑ろにした者に対して容赦をしようとは思わないに違いない。

腕が悲鳴を上げ、体が少しずつ後退している。鶯丸と鏑迫り合いをし合う乱に、左上方から弾丸のように空気を裂いて突っ込もうとする気配がある。

乱は顔を動かす様子もなく兵を気配の元に向け、銃弾を放たさせる。気配は兵を集め、一体を足場にして素早く方向転換し、銃弾から逃れつつ鶯丸と共に後方へと下がった。

「攻撃が少しも当たりませんね」

「全く、手応えがあり過ぎるな。血の気が多い奴なら喜ぶだろうが……」

「そもも言っていていられませんかよ、鶯丸様。何としてでもここで乱兄さんを止めなければ、惨劇が広がるばかりです」

「分かっているさ。やれやれ、あの乱も気が変わってくればなあ……」

希望的観測を口にする鶯丸の隣に降り立った平野は、変わらないでしようね、と目の前を見据えながら返した。

キーン、と鋼のぶつかる音が響く。加州の攻撃が防がれた音だ。直後、柄を短く持った蜻蛉切と刀身を大きく振りかぶる山伏が、乱に向かって突っ込む。

突き出された蜻蛉切の鋒を、手近の椅子を掴んで盾にし防御。視界が少し覆われて動きにくくなった蜻蛉切をカバーするように、山伏が側面から乱に斬りかかる。

乱は不意に盾にした椅子を投げ飛ばし、避けようと山伏が身を逸らした一瞬について包囲網から空中を飛んで脱出する。

「やはり、室内では動き辛いな……」

「想定はしてたけど、修行済みは手強いね。三振りの攻撃をいなすならんてさ」

「うむ。囲まれながら無傷でやり過ごすその戦いぶり、敵ながら見事である」

「貴方達に褒められても嬉しくないけどね」

二振りと三振りから比較的距離のある場所に着地し、乱は不服そうに眉を顰めた。山伏の言う通り、その体には傷一つない。

室内戦においては、小回りが利く方が有利だ。故に短刀である乱にとってこの戦場は、自分のアドバンテージを大いに活かせる場所だった。反対に槍である蜻蛉切はリーチの長さが仇となり、素早く動く乱を捉え切れない。太刀である鶯丸と山伏も、余り動きやすいとは言えなかった。

五振り中三振りが大きく動くタイプの戦い方を主とする。今の状態は、多く見積もってもこちらの不利が大きい。戦場を移す事も考えるべきだろう。だが時空座標指定装置は現在クールダウンタイム中で、次の転移可能時間まで時間がかかる。しばらくの間は、ここで戦い続けるしか選択肢はない。

睨み合いが続く。冷たく張り詰めた空間の中、口火を切ったのは乱だった。

「ねえ、貴方達はどうして政府に従うの？」

目を鋭く細め、乱はそう尋ねる。唐突に問われた雲霄隊は、だが戸惑いはしても警戒態勢を崩す事はなかった。

鶯丸はじっと敵を観察する。少しでも隙を見出せないかと、そして襲撃者の一振りである刀の動機を感じ取れないかと、と。

「どうして叫び声を封殺するような奴等に頭を下げられるの？ 正し

い側に立てれば何でもいいのか？ 考えられないよ、腐った奴等に忠義を示すなんて。それこそ魂を腐らせなければボクには無理だ。貴方はどうなの？ 魂が心底から腐ってるか、それとも大きくねじ曲がっているか、ボクにはそうにしか見えないんだ。——歪んだ政府に仕える刀は、歪んだ魂を持っているのかな？ 教えてよ」

こちらを詰る言葉は、襲撃者である前に「大移動」の当事者である乱の裏側を察するに余りある物だった。

苦痛を訴える叫び声は容易くねじ伏せられ、苦しみを何とかしようとして強い力に押し潰され、腐り落ちた魂を眼前に突き付けられ、歪み切った理不尽を味わう事となった。

刀だった彼だって、苦い現実を知らなかった訳ではないだろう。現に雲霄隊の乱も、汚れた世界がある事を苦い顔をしながら飲み下せている。

この乱は潔癖なのだ。汚濁を許せず、自らの手で消そうとする位に。

同位体という概念は凄まじい。別刃と言える程大きく異なる性格をしていても、共通する部分が少しあるだけで「同じ」だと見なされる。ある刀が喜ぶ事が、その同位体にとっては嫌な事だというのもあり得ない話ではないのだ。

それでもと、柄を握る手に力を込める。——自分に出来る事を少しでもしておかなければ、後悔するだろう。

息を小さく吸う。吸いきって言葉を紡げば、口の中が微かに乾燥しているのが分かった。

「お前が悪質な審神者に当たった訳ではないのは見ていて分かる。お前の在り方はちっとも歪んでいないからな。だからこそ悪意に耐え切れず、こんな事を起こすに至ったのだろう。心情は納得出来るが、だからといって俺達を心のない存在と見られるのは心外だ」

乱はこちらを睨みつけつつ、口を挟まない。鋒を前に向けたまま、こちらの動きを警戒している。

「悪意や理不尽に憤りや悲しみを抱かない訳じゃない。だが、それでいちいち立ち止まっていたらなすべき事をなせないから、一時的に横

に置くだけだ。勿論、自分達の全てが正しいとは思っていない。それでも戦う事を止めれば、俺は俺を許せなくなるだろう。極論、俺とお前は戦い方が違うというだけの話だ。本当ならお前のやり方も受け入れてやるべきなんだろうが——」

幸福で満ちた笑顔と、痛苦に喘ぎ零れる涙、理不尽に憤る握り拳。ひとびとの様々な表情が脳裏に浮かんで消えていく。ひとびとの当たり前の営みを、壊したくはない。

彼等のした事は、そんなひとびとの営みを滅茶苦茶にし、鶯丸達の祈りを踏みにじる行為だ。どうしたって、彼等のやり方を受け入れられそうにない。

心変わりをしてくれたいんだがと、望み薄な事を考えながらも鶯丸は言葉を紡ぎ続ける。

「お前達がひとを害するのを許せないから、俺達はお前と戦う。お前達のやり方を許容してしまったら、多くのひとびとを守る秩序が崩壊してしまうからな。ひとりでも多くを守るのなら、俺達は秩序を守る側に回るさ。……政府のものとして、お前達のやり方を受け入れる事は出来ないが、受け止める事は出来る。お前の恨みは全て聞き届けよう、怒りがあるのなら相手になろう。お前の気が済むまでな」

ぎ、と歯噛みする音がこちらまで聞こえた気がした。乱の体中から揺らめく、怒りと恨みの感情が見える。苛立たせたらしいと感じ取り、雲霄隊は警戒を強くする。

片手で顔を押しさえ、乱はふらりとよろめきながら煮え立った笑いを漏らす。

「は、はは、どこまでも腹立たしいね。なら、言った通り受け止めて貰おうか。——貴方達が、原型もない位に折れるまで！」

手の隙間から、大きく火を噴いた目が見える。乱は手を下ろして大きく足を踏み切り、鶯丸へ突つ込もうと刀を構える。鶯丸は刀身を前に出し、隣に立つ平野も険しい表情をして身構えた。少し距離のある場所にいる山伏と蜻蛉切も、こちらへと駆け出している。

ふと、違和感を覚える。何だ、と思い意識を回すと——加州の動きがおかしい。

何かを背に庇うように体の向きを動かし、腕で隠すように軽く広げている。そもそも先程の話に割り込まず、気配を感じさせなかったのが不審だ。その行動をいつからしていたのかは分からない。話に集中し過ぎて見逃したようだ。

乱が気付いていたかは定かではない。だが鶯丸とぶつかり合う寸前に、飛んで来た鉛玉を避けた反射神経は、目を瞠る物だった。

鉛玉は、乱だけを狙った物だ。そして雲霄隊に、銃兵を持っている刀剣男士はいない。どうした事かと、飛んで来た方向へと視線を向ける。

——加州の傍に、黒い髪を持つ刀と菖蒲色の髪を持つ刀が立っていた。

「——よう何処ぞの乱、随分暴れ回っているらしいな」

「全く、この部屋も味気ないね。それに戦闘の跡のせいで傷だらけだ、雅じゃない」

「まあ機性能性重視らしいしな。後、傷だらけなのはこの状況じゃ仕方ないだろ」

「こんな部屋から出て、早く合流したい物だね。……さて」

滅入った顔をしている菖蒲髪の刀——歌仙兼定と、それを宥める黒髪の刀——薬研藤四郎。どこかの二振りは、乱に視線を向けると表情を険しくさせて鋒を向ける。乱もまた睨み返し刀を前に構えた。

「……邪魔する奴が多いね。貴方達はあの森に住む刀でしょ？」

森の中に住む刀。それに当てはまる行動的な部隊といえば、一つしか思い浮かばない。

特殊な刀剣男士を保護する活動をしている、刀剣男士を審神者とする部隊。そんな彼等が何故ここに。

乱の問いかけに口元を歪めながら、薬研は頭を傾ける。

「二発で見抜いた事に驚いて見せたいが、お前が聞きたい事はそうじゃないよな」

「どうして政府に加担するかという事だろうか？ 簡単さ」

カシヤリ、と音を立てて刀を構え直す二振り。その目は強く鋭く、怒りを滾らせていた。

「君達は子供達を巻き込んで、かつ僕達の家族を傷付けた。理由などそれで事足りる」

「政府に与する訳じゃないが、お前達にはきっちり落とし前をつけて貰わないとなあ？」

何があつたのかは分からない。けれど乱達があのだ達の、一時的にでもこちらに協力する位の怒りに触れたのは理解出来た。そして、思い返して気付く。

——子供達……まさか、滑園の園児達か？

滑園の子供達は、清澄隊の本丸で保護されていたはずだ。刀剣男士となった子供はあの刀達に引き取られたにしろ、どうして子供達が巻き込まれたのか。

そういえば、と考えが巡る。滑園の子供達は、江雪が預かっていたはずだ。ならば、子供達が巻き込まれて黙っていられるはずがない。

——まさか、この戦場に来ているのか？

冷や汗が一筋背中を流れ、鶯丸の心を乱していく。戦嫌いの友達が、参戦しているのかもしれないのだ。何とかして事態を収めなければと、焦りが生まれては冷静さを削っていつているのを感じ、鶯丸は強く目を閉じてからゆっくりと開いた。

開いた先に、鋒を向けて睨む春光隊が見える。それにハッ、と短く嘲笑し、乱は再び銃兵を動かした。

「出来る物ならやってみなよ、腰抜け達！」

「来るよ！ 春光隊、悪いけど存分に手伝って貰うからね！」

「利害の一致って奴だからね、分かっているよ」

「何、こっちもはらわた煮えくり返ってるんでな」

加州の指示が飛び、森の刀達は笑って体勢を整える。そしてまた、銃口が放たれる乾いた音が部屋に響いた。

「斬っても斬ってもキリがないな……!」

「全く忌々しい、こいつらのせいで堀川に近寄れもしないじゃないか!」

「ああして余裕のある様子で見られると、我慢が出来なくなってしまうそうだね」

珍しく尖った青江の声音に、長谷部が舌打ちをして応える。鶴丸もギリギリと理性の紐が切れそうになっているのを、何とか抑えてヒトガタに刃を滑らせる。

堀川は操る手を止めず、そんな彼等を見て微笑んでいる。汗一つかかないその姿と比べると、こちらは息が上がり感情もささくれていて余裕がない。

何せヒトガタに油断すればこちらが斬られるのだ。そして斬ったと思えば堀川によって次々と湧いて出る。無視して堀川の元へ行こうとすれば、ヒトガタは一齐にこちらへと向かって来て、最終的には押し戻される。現状数の底が見えないヒトガタを対処していくしか、堀川に近付く方法はなかった。

「はは、皆さん大変そうですね。乱君の言つてた通り、余裕のない相手をのんびり眺めるのは楽しいな」

「本当、ここまでいい性格をしていたとはな……!」

「そりゃあ、僕だって政府に一杯食わされた立場ですから。どん底を経験すると、性格は歪む物ですよ。全てが恨めしくなる位に」

「それで君とは関係ない奴等を襲つてたら世話ないぜ。君がやってるのはただの八つ当たりにしかならない」

鶴丸は一体減らした側から湧き出るヒトガタに、奥歯から音を立てる。正直、終わりの見えないヒトガタの対処に苛立つ気持ちが凄まじい。早くヒトガタを討ち果たし、攻撃対象を堀川に移してしまいたかった。皮肉の一つ漏らした所で、誰も責められないだろう。

しかし堀川は鶴丸の皮肉に、こちらが凍りつく事実で答えた。

「鶴丸さん達を襲つてるのはついでですよ？ 僕はもう、仇討ちは済

ませましたから」

「……え？」

「いやあ、上層部は完全にこちらを舐めていたみたいですね。あんぐりした顔で事切れたのを見たら笑いが止まりませんでしたよ。結局彼等は何も分かってなかったんですね、政府の下した制裁って何だったんでしょか」

青江の強張った声を気にする事なく、堀川は明るい調子でそう言い放つ。長谷部は目を剥き、鶴丸も愕然とするしかなかった。

つまり、彼は上層部まで入り込んでいたという事だ。仇討ち、事切れたという言葉から、被害が出ているのは疑う余地もない。

政府要人にまでその手が及んでいたら。流石に彼等の守りは硬いと信じたいが、ああして笑っている堀川を見ると不穏な想像が湧き立つのだ。

「……これで堀川を手につけない選択肢がなくなったな」

冷えた声が、鋼の当たる音と共に響いた。長谷部の方を見ると、眉を寄せ目を見開き青筋を立てていた。激しく怒り狂っているだろう感情のまま、長谷部は刀を振り下ろしヒトガタを「鍵」ごと叩き割った。

「対策局上層部を手にかけて、俺達にまで影響が及ぶと考え付かなかった訳ではあるまい。貴様は、俺達の被害を承知の上で凶行に及んだ。ならば——ここで俺達によって、被害を断つために破壊されてもおかしくはあるまい」

長谷部の怒りを込めた視線を浴びても、堀川は微笑んだままだ。凄まじい胆力だ、と鶴丸は嘆息する。以前、彼の様子を恐れていたのは演技だったのだろう。

長谷部の鋭い目配せを受けた青江が側に近寄って、鋒を前に向けてる。耳を澄ませると、二振りが小声でやり取りするのが聞こえて来た。

「二刀開眼で、どこまで近付けるか……」

「やってみるだけの価値はあるよ。温存する理由もないしね」

なるほど、二刀開眼を起こす事で近付けないかを試そうとしている

のだ。ヒトガタが刀装扱いなのかは疑問が残るが、確かに試さない理由はない。対策をされていない保証はないが、少しでもダメージを与えられたら文句はないだろう。

すう、と息を吸い、二振りは力を繋げる。そして――

「……………！ 皆さん、前に出て！」

堀川の動揺した声が耳に入る。キンと澄んだ鋼の音によって、効果があったのか、と鶴丸は目を丸くした。しかし、こちらに下がった長谷部と青江の様子を見て、その考えを変える。

二振りは呆然としていた。まるで豆鉄砲を食らった鳩のようだ。驚いているのは間違いないが、二刀開眼の成功への驚きにしては喜ぶが足りない。

ならば、何故なのだろう。それは直後、目の前に降り立った存在によつて解明された。

「……………なま、ずお……………？」

「え、一体どこの……………って怪我してるじゃないか、大丈夫かい？」

鯰尾、という長谷部の呼び声によつて降り立った影を見る。警戒しながら腹を押さえている、長い黒髪を結った刀剣男士。頭から出ている逆毛も、鯰尾藤四郎だという証明となった。

どうしてここに。そもそも一体どこの刀だ。疑問で脳内を渦巻かせる三振りは、背後から響く激しい剣戟の音に更に謎の沼に叩き込まれる。

「アンタ、石切丸……………？ 一体どこから来たんだい!？」

「天井から落ちて来たようにしか見えませんでした……………！ ！……………！」

「疲れがたまっているようだね、小夜さんも怪我を負わされたのか。……………舐めてかかれない相手なのは間違いなさそうだ」

次郎と小夜の困惑した声、そして穏やかながら強い響きを持つ乱入者――石切丸の声。

意味の分からない状況下だったが、鶴丸は乱入してきた鯰尾の弦きを耳にし、大きく心を荒立たせる事になった。

「……………つつ……………飛ばされたか。長谷部さん、泣いてないかな……………それ

と蒼穹のいち兄、迷子になってないといいんだけど」

蒼穹の一期の名前が、何故この刀の口から出るのだ。知り合いなのは間違いないだろうしどういふ仲なのかは気になるが、それよりも問題なのは――

「……おい、君。蒼穹の一期が、どうしたつて？」

「え……ああ、貴方はいち兄の友達か。いち兄は俺達の手伝いと、自分の本丸の鶴丸国永と決着をつける為に、ここに来てます。それで正門に着いたはいいんですが、多分あの堀川の仲間だろう小狐丸に時空ごと散り散りにされたんです」

状況を素早く把握した鯰尾は、端的に成り行きを説明した。それを聞いて、鶴丸は柄を握り手を軋ませた。

この鯰尾達の手伝いというのが何かはまだ分からない。しかし、今の理由は横に置いておくべきだろう。

――自隊の鶴丸と対立する事になるだろうと、一期は言っていた。それが起きてしまったのか。

一期は昨日まで、蒼穹の「鶴丸国永」が裏切っているとは知らなかったのだらう。それでも何かを感じ取り、力を積んで来ていた。

相手がどのくらいの力量かは不明だ。正直一期がどのくらいやれるか、氷雨の鶴丸には不安が残る。今すぐ加勢に行きたいが、この状況でそんな訳にもいかないのは理解している。

せめて一期が折れないように祈るしか、今の鶴丸に出来る事はなかった。

「相手が増えちゃったな。小狐丸さんも、飛ばす場所くらい指定してくれたら良かったのに」

「やっぱりお前、あの小狐丸の仲間か。随分あっさり話したけど」

「あー、蛍丸君に注意した側から話しちゃった。……なら、情報を漏らさない為に折らないとね」

また再び、ヒトガタが苦笑する堀川の前に立ちはだかる。ゆらりと揺れるヒトガタから、殺意が漏れ出している気がした。

腹を押さえる手を離し、鯰尾は堀川を睨みつける。そしてふつつつと煮えた声で、語り始めた。

「俺はね、正直上層部がどうなるうが知ったこっちゃないんだ。俺達
は上層部に苦しめられて追われた立場だから。だからこの町が滅び
ても、そうなんだで済ませられると思う。けどね」

目を一旦閉じ、再び開いた時には、鯰尾の目にも怒りの炎が揺れて
いた。そして、煮え滾る声の温度も一段階上がる。

「長谷部さんを——長谷部さん達を悲しませる事だけは、絶対に許せ
ないんだ。お前達は、長谷部さん達を悲しませて苦しませて、更に未
来を断とうともしているんだろ？ それは駄目だ、絶対に駄目だ——
この世から消さなきゃ、長谷部さん達が脅かされる。だから」

氷雨の長谷部が訝しむように首を傾げる。鯰尾の隊の長谷部は、そ
こまで過保護にされる程危なっかしい性質なのだろうか。氷雨の長
谷部は鯰尾を叱る事も多いので、尚更分らないのだろう。

「——長谷部さん達の平穏と、俺達の希望の為に死ぬ。お前達が身勝
手に動いてるんだ、俺達も身勝手に動かせて貰う」

目の前の鯰尾は、だが心から自隊の長谷部を重んじて言葉を紡ぐ。
鋒を上げ、鋭く低い声音で告げたその内容は、武器らしい戦闘意欲と
人間らしい祈りが混ざった物だった。

きよとんとした堀川は、しばらく空白の時間を生んだ後、高らかに
笑い出した。

「あつはははは！ いいね、身勝手最高！ 互いに勝手な思いを抱い
て、ぶつかり合うのは上等だ！ 存分に刃で意地を通そう、それが刀
のあり方だ！」

「楽しそうで羨ましい事だね、腹立たしい位に」

「どこぞの鯰尾、無理だけはするなよ」

「とても助かるけどね。君の仲間に恨まれるのは避けたいから」

「ええ、これ以上家族を泣かせる真似はしませんよ」

鯰尾の参戦が決まった所で、鶴丸は背後に意識を向ける。

石切丸が、蛍丸に向かって刀を構えている。小夜と次郎も、石切丸
の参戦に頷いているらしい。

「アンタも無理はしないでよ？ あいつに斬られると呪いが染みるか
らね、小夜もやられたんだ」

「うん、うちの鯰尾さんも呪われたんだ。充分気を付ける事にするよ。……長谷部さんを悲しませる訳にはいかないからね」

「加勢感謝します、石切丸さん」

そうして彼等が態勢を整えた直後、堀川が不穏な様子で手を翳すのが目の端に映った。意識を前に戻すと、口元を歪めた堀川が大声で再戦開始を叫ぶ所だった。

「さあ、死合いましょう！ どちらが倒れてもおかしくない状態で、どちらが意地を通せるか楽しみですね！」

ちつとも楽しくないよ、と鯰尾が忌々しそうに呟くのが聞こえる。鶴丸も内心で同意を示し、襲い来る太刀のヒトガタに向かい合った。

んん、と唸り声を上げてから目を開く。周囲を見渡すと、隣に白を基調とした戦装束を纏う物吉が、周囲を警戒していた。目を覚ました自分に顔を向けると、目を軽く見開いてから微笑む。

「秋田君、目が覚めて良かった。具合は大丈夫ですか？」

「……はい、少しぼーっとしますが、他は平気です」

「そうですか。でも気を付けて下さいね、頭が冴える前に敵が来ないとも限りませんから」

秋田は軽く頭を押さえながら頷いて立ち上がり、改めて周囲を確かめる。

どうやらここは、武器を納める倉庫の中であるようだった。ぐるりと頭を動かすと、高い天井の上まで届く、巨大な時間遡行軍のレプリカが何体もそびえ立っており、その迫力に思わず身を震わせてしまう。

チカ、と時間遡行軍の目が光った気がして、側にいた物吉に継り付く。

「秋田君、どうしました？」

「あ、あの、あれが……」

「あれ？ ……時間遡行軍のレプリカですか。大丈夫ですよ、こここの制御はかなり厳重に守られていますから、怖がる事はありません」

震える指をレプリカにさす秋田の頭を撫でながら、物吉は微笑んで宥める。しかしその直後に告げられた秋田の報告によって、物吉の目の警戒の色が強くなる。

「で、でも、今……目が、ピカッて……」

「……光った？ さっきまで起動はしてなかったはずじゃ……いや、この状況下だから、警戒するに越した事はないんですかね……」

うーん、と声を出して、物吉は時間遡行軍のレプリカ達を見回す。大太刀のレプリカの隙間を次々と覗き込んで——ある一角を見た時、物吉の体が強張った。

「……おかしいです。短刀と脇差の数が少な過ぎる」

「え？」

「あの辺り、見えますか？ ぼつかりと空いているでしょう。多分あそこは短刀、あそこは脇差のスペースだと思うんです」

「あ、本当……不自然に空いてますね」

「……まさか、ここの制御も……」

突然ビリ、と背中に殺気を感じて、脳天にまで走った衝撃のまま勢いよく振り返る。

倉庫の入り口に、桃色頭の気怠げな刀剣男士が立っている。気怠げな刀の背後からは光が差し込んで、体の輪郭を妖しく照らしている。忘れられない、見覚えしかないその刀を認識した時、物吉の目の色が変化し昏く揺らめいた。

「……貴方は……っ！」

「おや、早い再会ですね。僕達一派に加わりに来た……という訳ではありませんよね」

はあ、とやはりつまらなさそうに息を吐く刀——宗三左文字。昨日物吉を襲っていたのは、彼に間違いない。普段は穏やかな物吉が、敵意を全身から漲らせているのだから。

政府に所属している訳ではない刀が、何故ここにいるのか——聞いた所で碌な答えが返ってこないのは目に見えている。

ふと秋田に視線を向けた宗三は、そうだ、と手を合わせてゆつたりと微笑んだ。

「物吉には断られましたか、貴方には聞いてませんでしたね。……どうですか？ 今からでもこちらに下るといっなのは」

「……え？」

「今こちらに来てくれるのなら、物吉の安全は保証しましょう。逆に敵対するのならば、僕は貴方達の口を封じる為に、手荒な真似をしながらはなりません。……蜜を貪るだけの人間達に一泡吹かせるのは楽しいですよ、どうですか？ 何より貴方は不満を抱えているみたいですし、それを晴らせるいいチャンスですよ」

クスクス、と何かを思い出しては小さく笑う宗三。遠い所を見るその姿に何か空恐ろしい物を感じ、秋田は目を逸らす。そして向けた視

線の先、宗三の刀を見て息を呑む。

——時間遡行軍の血は、しばらく経つと消滅する。しかし宗三の刀身は、血の池に漬け込んだかのように濡れており、赤いそれが消える気配がない。

何をしたのか、なんていうのは馬鹿げた問いだろう。時間遡行軍の物でないのなら、何を斬ったとしてもまともな物を斬っていないはずだから。

震える手を握り締め、頭を持ち上げる。見据えた宗三の顔は妖しく笑んだままであり、怯える心を奮い立たせて秋田は口を開いた。

「……確かに、僕は不満を持っていました。誰も僕を気につけない、気にも留めない。それが嫌で逃げ出したのも事実です」

物吉が、心配そうにこちらを見ているのを感じ取れる。反対に宗三は、至極楽しそうに口元を歪めている。

自分がどう思われているか、知りたい所ではあるけれど。今は、自分の意志を示さねばならない。

「でも、僕はもう一度信じると決めた。支えてくれたひとを、先に道を進んだひとを、懸命に手を伸ばしてくれたひとを。一度決めた事を覆すつもりはありません。だから僕は、貴方の所へは行かない」

「……そうですか」

宗三は呆れたような息を吐くと、すぐに顔を歪ませて刀を正面で持ち刃を向ける。また背筋を痺れさせる殺気に反応して、秋田と物吉は刀を抜き放った。

「ならば僕も目的を達成する為に、貴方達の口を封じなければ。残念ですねえ、こんな事になってしまっなんて。同胞を手にかける事になるとは、世界は本当に意地が悪いです」

白々しい、と舌を打つ物吉の——彼の苛立った声が聞こえる。秋田はそんな彼へと視線を一瞬向けて、彼の向こう側に並んだ時間遡行軍達の間光る何かに背筋を凍らせた。

それが何かは分からないまま、本能的に物吉の腕を引き頭を低くさせる。目を丸くしていた物吉の背中を守る為に、刀装兵を展開させる。直後、耳をつんざく爆音と爆風が襲いかかり、物吉は秋田に頭を

押さえられたまま目を見開いた。

また刺すような気配を感じた時、咄嗟と言った様子で物吉が秋田を押し出す。空いた空間に斬撃が降りかかり、衝撃の余波を兵に受け止めさせつつ立ち上がった警戒に移る。

「……秋田君、ありがとうございます。ボク達、全く気付かなくて……」

「気にしないで下さい。……爆弾使いですかね、あの宗三さん。早く対処しないと、この倉庫も壊れますよね……」

「そうですね……爆弾を止めつつ、宗三さんを取り押さえないと事態は——」

「ああ、そうそう」

パチン、と指を弾く音が倉庫内に大きく響く。すると、大太刀の巨体があつた場所ががらんどうになった。大きく空いた空間に、秋田は驚愕しつつ意識を向ける。

物吉が不意に前へ出た。高く澄んだ鋼の音が連続して響き始める。秋田は注意を逸らしてしまった事を反省しながら、宗三の腹に向かつて刃を振り翳す。その攻撃は呆気なく、鞘で受け止められてしまった。

二振りの刃を防ぎながら、宗三は楽しい遊びを提案するかのようにならう。

「察しの通り、レプリカの短刀と脇差は別の所へ移してあります。あちこちで既に暴れさせているので、さぞ気持ちいい悲鳴を奏でている事でしょう。それに加えて、今転移させた大太刀。クールダウンが必要にしても、ここにあるレプリカが全て動き始めたら……きつと、とても面白い事態になるでしょうねえ」

——敵勢力の追加を、この刀が行っている。楽しいおもちゃで遊ぶように語る目の前の反逆者に、二振りは顔を青ざめさせた。

体の上を、冷たい風が通り過ぎていく。蒼穹の一期は瞼を持ち上げつつ、震える体を起こして周囲を見渡した。

目の前には二つの階段。平らな所で寝ていた事から、踊り場に転移されたと分かる。頭上にある窓は、水滴を落とす音と共に薄暗い空を映し出していた。

早く、誰かと合流しなければ。そう思つて目眩を起こさないように立ち上がり、裾の埃を払つた時だった。

鉄錆びた臭いが、上へ向かう階段から漂つてきた。普段なら高揚するはずのそれは、一期の体を強張らせ冷や汗を流させた。

ここは、血の臭いを落としてから来る場所のはずだ。戦場に向かう事のない人々が、仕事をする場所のはずだ。それなのに、強く漂うのは殺戮の気配。

強く臭う嫌な予感に、しかし一期は逃げずに臭いの源へと歩き出す。一段一段、音を立てないように階段を上る。刀を握る手は痛む位の強さで、息を吐きながら力を抜こうとしても強張つたままだ。

上り切つた先で、また一段と強く血が臭う。廊下の左右を見ると、左側の通路に転々と赤い跡がついている。唾を飲み下し、痕跡を辿る。血の跡は複数の部屋へと伸びていて、ドアの外から気配を探る。誰もいないと分かりつつ、一期はある部屋のドアを開ける。

赤い壁に、白いまだらが付いている。そう思いかけ、違う、と愕然とした。

——白い壁が赤く染まる程の、夥しい血の跡。そして床には、二人の切り刻まれた人間が事切れていた。

腹を開かれ、顔を刻まれ、四肢が原型を留めていない。どれだけの悪意でもつて、こんな事をしたのだろう。綺麗なまま死なせないという憎悪が見えて気分が悪い。

静かに手を合わせて、部屋を出る。次の部屋に向かうと、そこでも悍ましい部屋と惨殺された人間が待つていた。

次の部屋も、次の部屋も、血に塗れた惨状があった。黙祷しつつ、一

期はふと思ひ至る。

——こんなに酷い状態なのに、悲鳴の一つすら聞こえないのはどう
いう事だ。

もしかしたら、と合わせた手がカタカタと震える。勢いよく立ち上
がり、大きな足取りで一番奥の大きい部屋に向かう。

ドアの前で耳を澄ませる。しばらくしてドアを開けようとドアノ
ブに手を伸ばすと、中から音が聞こえた。

肉を断つ音。命を断つ為に、刀を振るう音だ。

迷わずドアを開け、中に踏み入った。そして一層強くなった鉄臭い
臭いに、息を呑む。

部屋の中央に、それはいた。

元から赤い色だったのではと思わせる程に、返り血に染まり切った
白い戦装束。顔が潰れて誰かも最早分からない人間の腹に、躊躇いな
く突き立てられる刃。そして、こちらの背筋を凍らせる悪意に歪んだ
笑み。

間違いない。蒼穹隊を裏切った鶴丸国永だ。

歯の奥が鳴る。手が汗ばむ。これから鶴丸を相手取るのに、恐れが
ないと言えれば嘘になる。それでも、怖気付いて逃げる訳にはいかな
かった。

——これまでの自分に嘘をつくのは、自分を許せなくなるのは絶対
に嫌なのだ。

一歩踏み締め、刀を抜き放つ。それに反応し、鶴丸がこちらを向い
た。

「——ああ、遅かったじゃないか」

また醜悪に歪む笑顔を見て、爪先に力が入る。一期は内心で自らの
足に叱咤し、照明に照らされる刃を鶴丸に向けた。

「こんにちは、鶴丸殿。この状況でそれも笑えるとは、本当に魂まで墮
ち切っているようですね」

「何、君は薄々分かっていただろう？ 俺は誰かの不幸を嗤える奴
だって」

「これで思い至らない方が愚かでしょう。そうして願った不幸の味

は、貴方にとってさぞ美味しい物なのでしょうな」

「ああ、美味しいさ。美味くて美味くて——大声で笑い出してしまいうだ！」

目を大きく開き、口元を大きく歪ませ、鶴丸も抜刀する。憎悪に満ちたその表情にまた体を強張らせながらも、一期は鋭く反逆者を睨み付けた。

「これまで俺達を散々踏み躪ってくれた奴等だ。そいつらが不幸になればなる程、地獄へ深く堕ちれば堕ちる程、美味い蜜を出してくれる！　今まで屈辱に耐えてきたのは、この蜜の味を味わう為だと言われども納得出来る！　ああ、何て快さだろうな！　憎い奴等が出す蜜以上に、快く胸を震わせる物はない！」

「その憎悪に、他の方を巻き込む必要はあったのですか。貴方とは何の関係もない人々を、不幸に叩き落とす必要はあったのですか」

向ける鋒に、震えはない。真つ直ぐ突き付けられる刃に動揺一つ見せない鶴丸は、相変わらず歪な笑顔を浮かべて腕を大きく広げた。

「ああ、あつたさ。あいつらの地位を大きく落とせたんだからな。いい奴だったなんて言わせないさ、あいつらは無能のまま死んで貰う。巻き込まれた人間達は、まあ、ご愁傷様って奴だ。あいつらに関わったのが運の尽きって奴だな」

「……やはり、貴方とは分かり合えそうにありませんね」

鋒に怒りが乗る。鋭く目を細め、一期は首を傾げる鶴丸に吐き捨てた。

「私は、私の大切なひと達を巻き込んだ貴方を許せそうにない。あの子達が、彼が、何をしたと言うのです。貴方の恨みをよく知らないまま、間違いだと言う気はありません。ですが、貴方が身勝手に私の大切なひと達を巻き込むのなら、私も身勝手に貴方を排除しようと思いません。貴方がいる限り、大切なひと達は安全に過ごせないようなので」

「ふうん。——君にそれが出来るだけでも？　練度も高いとは言えない君が？」

ニタリと醜悪に影を落とす顔を睨み付け、一期は大きく足を踏み出

す。ぶつかり合う鋼が火花を放つ。鏢迫り合いに持ち込んで、一期は手を握り締めて答える。

「不可能と言われても、やって見せます。そうでなければ、自分を認められませんから」

「——ははっ！ やっぱり君に目をつけたのは正解だった！」

一期の刀身を受け流し、背後に大きく下がってから鶴丸は刀装を展開する。兵は盾兵二つに、もう一つは——

「……銃兵……あの小狐丸殿が操れるのなら、持ち込みますよね……！」

こちらも兵を展開し、銃弾を防ぐ為に前へと出す。弾けて消える前に、鶴丸はこちらへと詰め寄り始めていた。大きく刀を振るわれ、刀身で受け止めた直後には次の斬撃が向かっている。

——速い。余りにも速く、防御するので精一杯だ。

練度差というのをまざまざと実感する。毎日頑張っていたつもりだったが、まだここまで差があるとは。やはりもう少し鍛練を積むべきだっただろうか。

弱音が浮かび上がり、精神を弱らせているのが分かる。いや、と心の内で首を振り、気合を入れ直す。

ここで鶴丸を逃がせば、惨劇が広がるばかりだ。それに、弱気な自分も許せなくなる。

今の自分に出来る最善を。一期は襲い来る攻撃を防ぎながら、鶴丸へ一撃を与えられるチャンスを真剣に窺い始めた。

「いった……い！」

「うう、（こ）ど（こ）……？」

子供達が痛みに呻いている。その声によって目を覚ました長谷部は、体を起こしてこの場にいるひとの数を数える。

幸いな事に、子供達は全員いる。小夜と五虎退も意識が朦朧としていたが近くにいた。奥の方で獅子王が気絶しており、子供達の一人にペチペチと頬を叩かれている。ふと頭を上げると、目の前に機械端末が何台も並んでいた。最新型の端末に思わず身を竦ませる。

立ち上がり、周囲をぐるりと観察する。細長い机がいくつもあつて、その上に端末が一定の間隔で並んでいる。どうやらここは、コンピューター制御室であるらしかった。

がばりと、獅子王が起き上がるのが見える。頬を叩いていた子供がその反動で尻餅を付いて、涙目になっていた。

「獅子王、大丈夫か？　子供達はここに全員いるぞ。小夜と五虎退も無事だ」

「知りたかった事を教えてくれてありがとうな、長谷部。で、ここは一体……」

「対策局のコンピューター制御室だろうな。今の所敵は来ていないが、油断は出来ない」

「機械制御室……真っ先に襲われそうな物なのに、何で無事で——」

「——俺に殺されるんだ、名誉に思え！」

室外から響いた大声に、獅子王と顔を合わせる。子供達が気力の漲り過ぎている声に体を震わせ、身を寄せ合った。長谷部は子供達の頭に手を置いて、優しい声で宥めた。

「大丈夫、さっきの声の主は多分味方だ。獅子王、外の様子を確かめられるか？」

「了解。チビ達、危ないから長谷部の側にいろよ」

獅子王はひよいひよいと机の間の階段を降り、正面左側にあるドアから様子を窺う。長谷部は子供達の肩を抱えながら、獅子王の背中を

見つめていた。

「長谷部さん、皆どうしてるかな……」

「江雪さんは大丈夫だよね？」

「うう、帰りたいよお……」

「大丈夫、大丈夫だ。獅子王がついてるからな、俺もお前達を守る為に頑張るから」

子供達の肩を叩き、優しく声を掛ける。怯えた様子を隠さずに見上げる子供達は、それでも大声を上げていない。油断出来ない状況である事を、正しく理解しているのだろう。

自分はどうかだろうかと、長谷部は考える。自分は——彼は、この状況で正しく動けるだろうか。長谷部の力で理性を保っているだけで、彼がこの場でいなくなってしまうたら、果たしてちゃんと考えられるだろうか。

そう思っている時点で、恐怖に吞まれているのだろう。けれど、それを捻じ伏せて行動しないとイケないのだ。自分は今、「へし切長谷部」なのだから。

「長谷部！ ちょっとこっちに来てくれるか？」

獅子王に呼ばれて、長谷部は子供達に奥の方に隠れているよう告げてから階段を降りる。ドアは開いており、外側には予想通り大包平が納刀しながら立っていた。

「改めて聞くが、お前達は春光隊で間違いないな？」

「ああ……えっと」

「長谷部、この大包平はな、今までたった一振りでここを守っていたらしい。機械制御室の職員を逃がしたのも大包平だ。もしかしたらこの大包平なら、チビ達も逃がせるんじゃないかって思ってた所でさ」
「……え、一振りで？ 大包平は凄いつて聞いていたけど、ここまでとは……」

「当然だな！ ……それで、子供達の話だが」

大きく胸を張ってから、大包平が顔を引き締める。長谷部と獅子王も背筋を伸ばして、話の続きを待った。

「職員を逃がした時とは状況が違う。敵がどこから現れるか分からない

くなつた今、子供達を移動させるのは危険だ。幸いな事に俺一振りでも対処出来るくらいには、この辺りにいる敵の数は少ない。しばらくはここにいさせて、機を窺うしかないだろうな」

「そうか……」

やはり物事はそう簡単には行かないらしい。残念そうに俯く長谷部に、大包平は目を丸くして呟いた。

「……やはり被験者なんだな、お前は。俺が会った事のあるへし切長谷部は、そこまで穏やかな性格をしていなかったぞ」

「……いけなかったか？」

恐る恐る問いかける長谷部の隣で、獅子王が大包平に剣呑な目をやった。獅子王に不敵に笑んでから、大包平は長谷部の頭に手を置く。

「いや、悪い奴ではないのは分かるからな。どんなに性格が異なろうが、悪い奴でなければ異論はない。お前は健やかに育つといい、この大包平がお前の成長を祈ってやろう」

「……えつと、ありがとう？」

目を白黒とさせる長谷部の頭をくしゃくしゃと撫でてから大包平は手を離す。獅子王はふっと笑みを溢してから、懐に手を入れて端末を取り出した。

「うっわ、端末壊れてる。これじゃあ連絡も出来ないよなあ……」

「え……あ、俺は電池が切れてる」

「どっちも端末が死んだか……長谷部直せたりは」

「してたら今困ってない」

「だよなあ……」

項垂れる獅子王と難しい顔をする長谷部を見て、ふむ、と大包平が顎に手を当てる。その直後ニヤ、と悪戯げに口元を変え、長谷部と獅子王の肩に手を置く。

「その端末、動かせるようにしてやろうか」

「え」

「本当か!？」

「ああ。だが条件として、しばらく長谷部を借りるぞ」

へ、と長谷部が間抜けた声を出す。獅子王がどういう事だ、と目を鋭くさせて尋ねた。

「さつきも言ったが、この長谷部は戦えねえぞ。まさか無理強いさせるつもりじゃ——」

「確かに俺は、長谷部に戦って貰うつもりだった。ただし、戦場は機械制御室だ」

その意図を把握した獅子王は目を見開き、勝ち気に笑う大包平を見返す。長谷部はポカンと口を開いて、頭上に疑問符を浮かべている。

「え、いいのか？　ここの機械に部外者が触っても」

「やむを得んだろう、今の機械制御室には人手が圧倒的に足りない。あちこち弄られている形跡があるが、口惜しい事に外の対処で手一杯だったからな。獅子王は俺と共に、外で敵の迎撃を行ってくれ」

「いや、それはいいけどよ……ここの機械の使い方長谷部に教えないといけないだろう？　それまで俺一振りで対処しないといけないじゃねえか」

「そうか。確かにこの俺でも骨が折れるくらいだ、お前なら尚の事だろうな」

うーむ、と唸る大包平達に、近づく影が二つ。その影達は獅子王の裾を引いて、その存在を示した。

獅子王が振り返ると、長谷部と大包平もその存在に気が付いた。

「小夜、五虎退。体は大丈夫か？」

「えっと、平気、です。その……」

「どうした？　子供達に何かあったのか？」

「いえ、違います。……大包平さん、外の対処を僕達にも託してくださいませんか」

あ、と獅子王が声を上げる。長谷部もはっと気付いたように身を跳ねさせた。大包平は小夜と五虎退の目を見つめて、真意を確かめようとしているようだった。

「僕達は顕現してから日が浅いですが、それでも刀剣男士です。敵を斬る事は出来ます」

「コンピュータの操作は、難しいですけど……戦う事なら、僕達でも

力になれるんじゃないかな、って……思っただんですけど……」

おどおどしながらも、五虎退の目はしつかりとしている。小夜も体中から戦意を滾らせており、意思を問うまでもなさそうだった。

大包平はしやがんで、やる気を見せている二振りと目を合わせる。

「お前達は顕現したてだと言ったな。例え戦意が充分にあつたとしても、練度が低ければ足を引つ張る可能性もある」

「で、でも、一振りでも戦力が多い方がいいです！」

「使えない戦力はただの案山子だ、お前達だけでなく他の奴にも危険が及ぶかもしれん」

「僕は隊長の命令を聞いてから動きます。それに五虎退の言う通り、戦力が多いに越した事はありません。——弱いまま何もしないでいるのは、僕も嫌なんです」

じつと大包平を見返して、二振りは己の決意を示す。大包平も険しい顔で二振りと向かい合う。

無言の意思の示し合いが続いて、最後に折れたのは大包平だった。

「はあ、分かった。顕現したてだからと言って侮るのはお前達にも礼を欠くからな……獅子王、隊長を頼めるか。俺は長谷部と機械制御に移る」

「おう、任せろ。小夜、五虎退、くれぐれも俺の指示に従ってくれよ？」

「はい」

「は、はいー」

元気に返事をする二振りを横目で見ながら、長谷部は目を伏せる。

顕現してそう時間が経っていない二振りが、戦いに意欲的なのだ。自分だって刀剣男士なのに、刀を握る事すらままならない。足を引つ張っているのは、自分なのではないか。

ポン、と二つの手が背中と肩を叩く。顔を上げると、獅子王と大包平が明るい表情でこちらを見ていた。

「お前はお前の出来る事を、だろ？ 大包平の手伝いはお前にしか出来ないからな、頼んだぜ」

「この大包平の助手を、一時的とはいえ任せられるんだ。大いに誇る事だな！」

目を瞬かせて、小さく頷く。よし、と二振りにもう一度強く背中を叩かれ、長谷部は体を竦めた。

——頑張らなければ。拳を握り、前を向く。大包平の背を追いながら、長谷部は勇気を溜める。

これからする事は多分、この戦況を左右する事になるだろうから。

18—16 「世界に挑む」

ざつ、と裏門から対策局内部に入ったその刀は、鷹揚な様子で歩き出す。その姿を見たヒトガタの多くは恐れをなして動きを止め、無謀にも戦いを挑んだ少数は呆気なく一太刀で消滅させられる。

「ふむ、随分と荒れてしまっているようだな」

穏やかな口調で言う刀——雲霄の三日月は、目に冷たい光を宿し足を進めた。

三日月に出動要請が出たのは三十分程前の事だ。城下町に下りている部隊はヒトガタ退治に難航し、対策局に駐在している刀剣男士は襲撃者に翻弄されてしまっているようだ。対策局の刀達が手を焼くという事実は、襲撃者が相当な手練である事を示していた。ついには上層部の人間までもが襲われ、対策局は雲霄の三日月の出動要請を出したのだ。

三日月が対刀剣男士特化の「最終兵器」と呼ばれるのには理由がある。本能的に畏怖させる強さもそうだが、彼の体内に特殊な機械が埋め込まれているのも理由だ。

埋め込まれているのは、刀剣男士の活動を強制的に停止させる遠隔機械。コストもかかり普通の刀剣男士なら発狂してしまうそれに耐え得るのは、雲霄隊の中でもこの三日月だけだったのだ。

強い上に、己の行動を停止させられかねないという危機感によって、本能的に規格内の刀剣男士は雲霄の三日月を恐れる。三日月自身、他の刀剣男士と距離が生まれてしまう事に思う事がない訳ではない。しかし理解してくれる刀も少数だが存在しているので、今の境遇に不満はない。

それにこうして動ける事件で、刃で語らえる刀と出会えるのも楽しみなのだ。どうも規格内の刀はこちらに怯えてしまっていていけない。当然仕事なので、最終的には相手を黙らせる事になるのだが。

さあ、今日出会う刀はどんな性質をしているのだろうか。浮き立ちながらロビーを進む三日月はしかし、少し予想と外れた出会いをする事となる。

「さて、これ以上人々に影響を出す訳にはいかない。手早く事態を収めようか」

「——させると思ってた?」

独り言に反応したのは、鈴の鳴るような高い声。勇士にはまらずあり得ない性質のそれに、思わず身を引いた。直後、足元に弾丸が降ってくる。引き続き頭上に降り注ぐ弾丸を盾兵に受け止めさせ、銃口を探す。

カウンターの上に、顔を狐面で覆った女が立っていた。髪を下方で結った、面以外何の変哲もない女だ。

そのはずなのに、何故か女からは自分と同じ匂いを感じる。余りにも強い違和感を探る前に、女は口を開く。

「やはり来たわね、傲慢な神。これから楽しい事になるというのに、この私が止めさせる訳ないでしょう。貴方はここで足止めさせて貰うわ」

「……ふむ、畏怖を与えられないのは予測済みか。だが人間が、俺に敵うと思うか?」

三日月は余裕を崩さない。たかが人間という意識があつた為だ。狐面の女はそれを察して微かに笑い声を漏らし、手を翳す。

それから現れた物に、三日月は目を瞪る事となった。

「借り物の力で偉そうね——傲慢な神風情が!」

——手から現れたのは、一振りの刀。打刀と思われるその刀を現出させ、手に握る。それは、刀剣勇士のやり方と同じだった。

三日月は刀を構え、狐面の女に厳しい口調で問う。

「女。そなた、その刀をどこで手に入れた? いや、そもそも人間が刀をそんな風に現出させられる訳がない。——そなた、刀剣勇士から力を奪ったな?」

嘲笑するのを隠さず、狐面の女は刀を振りカウンターを蹴った。

「神に答える義理はないわ。精々頭を悩ませながら消えなさい!」

頭上から振りかぶられ、三日月は刀身を上に向ける。鋼がぶつかり合い、噛み合つて軋む。横に受け流し、狐面の女の腕を狙い刃を滑らせた。その攻撃は防がれ、女はすぐさま攻撃に転じた。

防ぎ、攻め立て、また防ぎ、また攻撃をし。三日月と女の攻防は、側から見れば何をしているのか全く分からない。それ程に目まぐるしく、戦いは加熱していく。

こうして自分と渡り合える人間がいる事自体が異常だ。その腕力は男の物と遜色なく、技巧もなかなか侮れない。

考えずに対応すれば、こちらが痛い目を見る。久々にそう思った相手が人間だというのが驚愕に値する。三日月は刀を振りながら、女に警告する。

「そこを退け、女。俺はこれ以上、被害を出す訳にはいかんのだ」

「嫌だと言っているでしょう。神々が醜い感情を晒し、神に挑む人間が新たに現れようとしているというのに！」

「その何が楽しい？ 惨劇に塗れた戦いなど、避けたいのが人間だろう」

「あら、私は寧ろそれを探しているわよ？」

どうしてだろう。面を被って顔は見えないはずなのに——三日月は面の下の、女の性悪に歪んだ笑顔を幻視した。

「人間は神に挑んでこそ尊厳を保てる。その輝きを、私は見ていたいのよ。それを邪魔するなんて、無粋以外の何物でもないの！ 今だつて若き魂が、神に挑んで輝いている——これを止める理由などないわ！」

はあ、はあ、と息を切らして、江雪は悦に浸る刀を睨む。

相変わらず小狐丸は自身の空想に耽っており、こちらを気にかける様子もない。攻撃を当てようとしては最初の場所に飛ばされるのだ、和睦の刀が苛立つのも当然である。

「ふふふ、母様……アサギは邪魔者を排除して貴女の元へ参りますよ……」

「……こんな事を言いたくないですが、本当に狂っていますね」

腹立ち紛れにそう吐き捨てる。この小狐丸は、余りにもイカれているのだ。

殺す事が母の為になると信じて疑っていない。今は戦国の世では

ないのだ、そんな事を普通の母親は望まないだろう。

殺して積んだ屍の数だけ、母の愛が増すと信じている。余りにも普通ではない。余りにも——狂気に満ちている。

「狂っている？ 何を言う、この世界こそが狂っているであろう。母様と私が共にいられない、こんな世界の方が」

僅かに意識をこちらに向けた小狐丸は、眉根を寄せて目を鋭くさせて空を睨む。その顔には、強い憎悪が乗せられていた。

「母様が私と離されてしまったのは、あの邪魔者達のせいだ。邪魔者達さえいなければ——殺して、消して、排除して、捌つて、吊るして、埋めてしまわなければ。邪魔だ、邪魔だ、何もかもが邪魔だ。ああ——ならば、何もかも消してしまおう」

そして強い殺意が、こちらへ向く。反射的に身構えた江雪まで一足飛びで、小狐丸は目を剥き刀を振るつた。

振り下ろされる刀を横に飛んでかわし、江雪は頭に向かって刃を向ける。刃は鞘で防がれ、小狐丸は低くなった体勢のまま江雪の脛を狙って刀を滑らせる。戦装束を斬り裂かれ、裾が下に落ちる。江雪は一步引いて、体勢を整える為に構え直そうとした。

その時。

「……っ!？」

油断したつもりはなかった。けれどやはり、それは言い訳に過ぎないのかもしれない。

足を引いた先に、裂け目があった。足は裂け目に飲み込まれて、その上固定されている。抜こうと足を引っ張り上げるが、抜けるには時間がかかりそうだ。

動揺したその一瞬を、見逃されるはずがなかった。

咄嗟に出した刀は空振り、腕に傷を負ってしまった。途端、腕から鈍い痛みが走り出す。それは次第に広がり始め、気付けば利き腕側は強く痺れて動かし辛くなってしまった。

二撃目が襲い来る。腕を懸命に動かして、せめて傷を少なくしようと鞘の前に出そうとして——

「——陣形、どうするっ!？」

「決まってる、一番早く動ける奴だ」

「よし、じゃあ逆行陣で行こう。遠戦用意！」

聞き覚えのある声が聞こえた気がして振り返る。直後、頭上から石が降り注いだ。小狐丸は投石を察知して距離を置いている。その隙に、江雪は裂け目から足を抜いた。

投石は小狐丸にだけ向けられた。ならば、援軍か。一体どこ？

近くの木から、何者かが地面に降り立った。その赤い髪の毛をした小さな刀に、江雪は心当たりがあった。

「……愛染？ 貴方は、一体……」

「——江雪！ 無事だったんだな！」

ヒュ、と息が漏れる。聞き覚えのある調子に、どうしても唇が震えた。

この声の調子は、あのやんちゃで、親友想いで、寂しがり屋の彼の物だ。けれどその髪の毛の色は茶色で、決して赤毛ではなかったはず。

愕然とする江雪の元に、続けて二つの影が降り立った。

「江雪、腕をやられたのか！ ごめん、遅くなって……！」

「大丈夫、江雪さん！ ちよつと待ってね、簡単だけど処置するから！」

何故、どうして。絶望混じりの疑問は絶えない。

どうして、あの幼馴染を慕う元気な少年の口調で、伊達家所縁の青髪の短刀が話しかけてくるのだろう。どうして、あの強くある為に笑っていた少女が、巫女装束風の衣装を纏っているのだろう。

どうして。

何故、貴方達が、こんな地獄のような場所に——

「……どうして、ここに来たのですか。ソメゴロー君、タイガ君、ツクシさん」

——行方不明になっていた滑_レ園の三人は、江雪の前に悪夢のような変化をもって現れた。

第十九話 「揺るがされる町（後）」

19—1 「神に成る」

舞い落ちるように、少年は地面に膝をつく。地面を覆い尽くす桜の花びらが、俯いた目に飛び込んできた。

ぼんやりとした頭の中は、少年に一つの事実を呼び起こすのにも一苦労だった。

——そうか俺、刀剣勇士になる為に、処置を受けて……。

どこか現実味のないその事実にも、少年のぼやけた思考が戻る事はなかった。処置の副作用が出ているのも理由の一つだが、最大の要因は目の前の景色にある。

天まで届きそうな、大きな桜の木。丘の上に立っているその桜は、風に乗せて白い雨を降らせていた。

数多の花弁が、少年の横を通り過ぎていく。不思議な事に、花弁が少年の体に張り付く事は不自然なまではなかった。

左右を見渡すも、花の雨は空までもを隠し、自分がどこにいるのかも不明瞭にさせた。

分かるのは、目の前の丘に立つ桜の木が、少年を呼んでいるという事だけだ。

目の前に、桜の花が舞い降りた。それは内から光を放って花を包み、光の玉に変化してからふよふよと少年の周りを漂い始める。

「ふうん。こいつが、オレの依代って訳？」

その一言で、少年ははっと我に返った。夢の中にいるような微睡にも似た感覚から、四方を敵に囲まれている戦場にいるかのような緊迫感へ。

ほろりと溢れるように存在の名称を呟いたのは、無意識だった。

「かみ、さま……」

睡を飲み込んでも手の強張りが解けないが、怖気付いている場合ではない。

今から少年は、この神様相手に交渉をしなければならないのだ。

——自分の望みを叶える為の、交渉を。

「神様、確かに俺は、あんたの依代だ。その覚悟はあるし、嫌だと言うつもりもない。けど、その前に話を聞いて欲しいんだ」

「話？ でもさあ、お前には時間がないんだろ？ そんな悠長にしてる場合じゃ——」

「だからこそ、大事な話だ。俺は覚悟をしてきた。でもそれは、条件付きの物だ」

ピタ、と光の玉が停止する。少し訝しんでいるのだろう、微かに位置がずれるだけで光の玉はそこから動こうとしない。

ぐっ、と歯を噛み締めてから、少年は頭を上げて口を開く。

「俺は、どうしようもなく弱かった。心も、体も。だから親友を失った時、正気でいられなくなつたんだ。理不尽で、不条理で、酷い事をする世界を恨むしか、弱い俺には出来なかった」

認めよう、自分はどうしようもなく子供だった。それも、どうしようもない事に駄々をこねるタイプの、駄目な子供だった。

親友が消えた事を受け止め切れず、何も知らないひとに八つ当たりをしてしまった。あの時の自分は、怒りを、やるせなさを、闇雲に振り撒く事しか出来なかった。

「親友は、それでも世界に抗つてた。俺との約束を果たす為に、必死になつて頑張つてたんだ。なら、俺だつてそうしなきゃ顔向け出来ないだろ？」

脳裏に思い浮かべるのは、力を振り絞って決意を示した親友の姿。彼は、微塵も諦めていなかった。塞ぎ込む自分に、約束は無効になどなつていないと告げに来た、強い眼差しを覚えている。

それに引き換え、自分の何と無様な事か。不貞腐れ、心配してくれた存在にぞんざいな態度を取り、自分だけが可哀想だと思ひ込んで。「……もう嫌なんだ、大切な人達が奪われていくのを、指を咥えて見てるだけだなんて。この手の中のを、守れるような強さが欲しい。約束を破らない強さが欲しい。……逃げそうになる心を、ねじ伏せられる強さが欲しい」

変わりたいと願った。幼い自分と決別し、強くあれるように祈つ

た。しかし、守る強さを手に入れる為の時間を待つ余裕はない。今にも大切な存在が失われるかもしれないのに、悠長にしている暇はどこにもなかった。ならば多少過程を飛ばしてでも、強さを手に入れる手段を講じて見せる。

少年は地面に手をつき、深々と首を垂れる。おびただしく散らばる死骸のような花卉が、視界一杯に映った。

「体は勿論譲り渡す。最低限残してくれば、魂だって削ってくれても構わない。記憶だって、力になるなら受け渡すよ。だから、神様。

——滑^レ園の奴等を、どうか守ってください。俺には、それしか願いはないんです」

しん、と静寂が降りる。桜吹雪が撫でるように、己の横を通り過ぎていく。現実世界は冬なのに、ここでは温かな風が吹いている。

少年は頭を下げたまま、光の玉の答えを待った。強い畏れはある。それでも自分の誠意を伝える事しか、自分の道を切り拓く術はない。

「駄目だ」

光の玉は、断じて告げた。少年の肩が微かに跳ねる。

やはり、神に無理を通す事は出来なかったか——少年は萎んでいく意気込みを感じ、静かに涙を堪える。それなら、光の玉に全てを委ねるしかない。目の前の神は、人間を愛する神だ。悪いようにはしないだろう。

小さい体に覚悟を込めているのを知ってか知らずか。光の玉は、声を張り上げ少年を一喝した。

「途中までは、骨があつて良かった。弱さを嘆いて、逃げたがる心から目を背けない。そこまでは良かったんだ。だけどなあ——守りたい奴等を、いい子のフリして他人に任せてんじゃねえよ！」

頭を、恐る恐る上げた。光の玉はカツと光量を増し、少年の眼前に迫って更に声を尖らせる。

「オレは祭りが一番好きだ！ それは何かあつても揺るがねえ、例え身内であつてもだ！ お前だつてそうだろ!? その滑^レ園の奴等が、お前のたった一つの願いになるような、大切な存在なんだろ!? ならそれを守るのは、お前の進むべき戦場だ！ 戦況を他人に預けてん

「じゃねえよ！」

「……でも、俺の魂は、高確率で消えるって——」

「そんなの、事情を知ってればこっちでどうとでもなる！ 仮にも神を舐めんよ！ 守りたいのなら物分かりのいいフリなんてしないで、全力で抗え！ ——少なくともオレは、目の前にいる罪のない、力の限り生き抜こうとしてる人間をすり潰すような、非情な存在になる気はサラサラねえよ！」

光の玉を見つめて、少年は感嘆の息を漏らす。この神様は、自分が思っていた以上に情が深いらしかった。だって、人間など神にとつてはちっぽけなはずだ。なのに依代となる自分を認識し、生き抜こうとしていると言ってくれた。

萎む心が、再び甦っていく。神に生きるよう叱咤されるとは思っていなかった。けれど、そのおかげで少年は思い直す。

——世の中を諦めるには、まだまだ自分は知らない事が多いのだと。

「なら」

今度は光の玉を真っ直ぐ見据え、少年は力強く願った。

「なら、神様を信じて頼む。——俺に、力を貸してください」

ふわ、と風が吹いて、淡い色の花びらが舞い踊る。体中に温かな感覚が染み込み、行き渡っていく。

光の玉はいつの間にか、人の形をとっていた。光の玉——赤毛の少年はニツと明るく笑い、手を差し出した。

「ああ、力はいくらでも貸してやる。祭り好きな奴に悪い奴はいないからな。——オレは愛染国俊。長い付き合いになるだろうけどよろしくな、ソメゴロー！」

少年は頷き、神の手を握る。笑い返して見せた少年に、神は太陽のような表情を浮かべた。

*

目を開ける。処置台から体を起こして左右を見渡すと、己の体に管やら電極やらが繋がっていた。手を握って開くと、やけに力がみなぎっていると分かる。鏡が横に置かれていたので己の姿を見ている

と、先程の赤毛の少年がきよとんとした顔で映っていた。

ドアが開く音がして振り返ると、そこには坊主頭の青年と青みのある髪をした少年、巫女装束風の衣装を纏った少女が立っていた。ソメゴローが起きているのを見て、少年少女は処置台に駆け寄った。

「サトル、タイガ、ツクシ！」

「目が覚めたか。お前はソメゴローだな？」

「おう。タイガはどうなった？」

「タイガのままだよ。神様、かつこよかったって」

「いやー、あんな事言われて頑張らなきゃ漢が廢るだろ」

「俺も多分似たような事言われたなー……」

「えー、何言われたのさ二人共」

「黙秘権を行使する！」

子供達は笑いながら話していたが、サトルに咳払いをされて口をつぐむ。サトルは処置台に寄ってソメゴローから管などを外しながら、状況説明を始めた。

「これで三人共処置は終わりだ。強さの上限が百とすると、タイガは五十八、ソメゴローは六十二になったみたいだな。結構強くなったぞ、即戦力レベルだ」

「えっ、本当か？」

「うん。私も力がついた感じするし、江雪さん達の力にはなれそうだよ」

「それじゃあ早速江雪の所に戻って——」

子供達は力がついて先走る気持ちのまま飛び出そうとする。険しい顔でサトルがそれを制し、更に続けた。

「ただ、ソメゴローとタイガに降ろしたのは短刀だ。体力が少なく、力も弱い方になる。夜になれば力が大きく増すのが短刀の特徴だが、昼間は油断すればすぐに死ぬぞ」

「え」

「そんな……!」

「じゃあ、夜まで何も出来ないのか!」

「落ち着け。確かに油断は禁物だが、さつき言った通り即戦力レベル

ではある」

サトルは焦燥感に満ちた子供達の肩を叩く。そして視線を合わせ、言い含めるように静かにアドバイスを告げる。

「ソメゴロー、タイガ、お前達には機動力の高い短刀が降りた。その足はお前達の大きな武器になる。いいか、敵の攻撃を当たらせず、自分の攻撃だけを当てるつもりで戦え。お前達に降ろした刀なら、その戦法がとれるはずだ」

「自分の攻撃だけを……」

「もつと具体的に言えれば良かったんだけどな。俺は戦いのプロじゃない、後は実戦で戦い方を覚えろ」

「ねえ、私はどうすればいい？」

「ツクシは決して前に出るな。戦場では真つ先に大将であるお前が狙われるからな。基本的に後方支援がお前の仕事だ。頃合いを見て疲労を抜いたり、戦況を見定めて撤退を決めたりだな。お前が出来る事も俺は詳しく知らないが——」

突如、背筋に寒気が走った。園長室に繋がる通路を振り返ると、ゆらゆらと揺らめく黒いヒトガタがこちらに向かってにじり寄っていた。

ひつ、とツクシが悲鳴を上げる。ソメゴローとタイガも思わず息を呑んだ。

「あいつら、動き出したか……おい、ソメゴロー、タイガ。早速実戦だ」「へ？ あ、あいつら、倒せるのか？」

「おぞましいのは分かるが怖気付くな。これからお前達は、ああいう化物達を相手取る事になるんだからな」

「で、でも……本当に、俺達に倒せるかな？」

ソメゴローとタイガが、顔を見合わせる。まだそこまで自分に宿つた力に実感が無いのだろう。ツクシもおろおろと、落ち着かない様子で二人を見ていた。

——糞姉貴なら、ここで「じゃあ頑張つてね」と放り出すんだろうが……。

ニヤニヤと笑む忌々しい姉の姿を思い浮かべて、サトルはため息を

つく。

——俺はそこまで外道じゃないんでな。

「いいか、あいつには『鍵』と呼ばれるエネルギー供給源がある。それを探して破壊しろ。破壊すると怒りで動きが速くなるが、壊されたならただの人形だ。ぶった切るだけで倒せるだろう」

「……え」

「少なくとも、ここを出るまではサポートしてやる。それまでに戦闘の基礎を覚えろ。……弱いままでいたくないだろうか？　なら、その覚悟を示せ」

はつと息を呑み表情を引き締めると、三人は頷いて前を見据えた。

それに呼応するように、ヒトガタは腕を振り上げその刀身を電光に翳す。反射する光に目を瞬かせながらも、ソメゴローは床を踏み切つて前へと飛び出した。

「どうして、地獄の道へと足を踏み入れてしまったのです」

震える声で、江雪はソメゴロー達を問いただす。その目には疑うまでもなく悲哀と絶望が浮かんでおり、この状況を受け入れているとは到底言えなかった。

——分かったた、江雪が悲しんで傷付くのは。

これから三人は、果てのない戦いに身を投じる事になるのだろう。それはどんなに嫌だと泣き喚いても誰も助けてくれない、茨で出来た危険な道だ。神——大人よりも世間を良く知っている存在と、肩を並べて進まなければならぬ戦場だ。子供の身勝手なわがままなんて、少しでも見せれば叩き落とされるだろう。

ソメゴロー達はまだ子供だ。過酷な道の過酷さを、想像するしか出来ない未熟者だ。

江雪が嘆き悲しむくらいにはこちらを大切に思い、危険な目に遭つて欲しくない願っているのは身に染みている。

それでも。

「貴方達が戦う必要なんてない。危険で不確かな進路だけではなく、安全で確かな道もあったはずです。戦うのは私達大人に任せて、今す

ぐ引き返してください。貴方達がわざわざ傷付きに行く事などありません」

江雪が、悲痛な顔でソメゴロー達をを引き止めようと言葉を並べる。それが心の底からこちらを案じて、幸せに生きて欲しいと思っ
ているから出ている言葉なのだ、心が痛む程に分かっている。
けれど。

「――それで大人達に任せて、また大切な物を取りこぼしても？」

それでは駄目なのだ。仮初の安穩に身を任せてしまえば、再び世界が牙を剥いた時に、自分達はなす術もなく潰されるだろう。

この世界というのは、力を持たない者に優しくないとソメゴローは思う。何もしない、しようとしなない者は圧倒的な力に翻弄され、なすがままに流されて暗い場所に叩き落とされる。何もしない者は暗い場所で不満を垂れ流しまた流され、どんどん地獄へと向かっていくのだろう。

そんなのはごめんだ。何もしなかった結果失って、それに不満を漏らすしかない自分なんて、反吐が出る。

「世界の端で、俺達は大切にされて来たんだと思う。スギハラ先生は何だかんだで優しくかったし、江雪だって沢山気にかけてくれた。そういうひと達のおかげでどん底に行かずに済んだんだ、俺達は運が良かった。でもそれに甘えて、大切な物を守ろうとしないのは違うだろう」

キン、と澄んだ音が鳴る。目を向けると、タイガと小狐丸が鎧を削っているのが見える。小狐丸は悠長にこちらの話し合いの終わりを待つつもりなどないらしい。当然の話だ、世界はいつも自分の思うように進むとは限らないのだから。

ツクシが慣れない手つきで江雪の応急処置を進めている。滑^レ園特製の絆創膏を貼り付けると、傷がみるみる塞がっていった。それでも用心深く、ツクシは江雪の腕の具合を見ている。

ソメゴローも警戒しながら地面を踏みしめ、再び前を向いて話を続けた。

「嫌なんだよ、無力なままなのは。自分の小ささを知ったら、それが腹

立たしくてたまらなくなった。俺達の守りたい物は、世界にとっちゃ取るに足りない物で、すぐに踏み潰される物なんだろう。だったら、俺達が自分の手で守るしかない。……もう、何も出来ないで泣くだけの自分は、嫌なんだ」

息を呑む江雪の気配に、自分の言葉が少しでも届いたと感じた。

心配するのは当たり前だと思う。自分だって、他の滑^ス園の面子がこんな道を進みたいと言ったら、よく考えろと一度は止めるだろう。けれど、自分達も自分達なりによく考えたのだ。出せるリスクを出し切り、それでも世界と対峙出来る力を求めた。

——どうか、この決断を見届けて欲しい。どんなに辛くても、悔やんでも、翻したりしないと誓うから。

応急処置を終えたらしいツクシが、小さく笑い声を漏らす。ちらりと見やると、彼女は晴れやかな笑顔で首を傾げた。

「ソメゴロー、今日は随分賢そうに話すね」

「おいツクシ、どういう事だそれは」

「私達の意見を伝えてくれてありがとうって事だよ。……ねえ江雪さん。私達は確かに子供で、何も知らなくて、力なんてないよ。しっかりと覚悟したつもりでも、きつと考えが足りない所もあるだろうね。それでもね、私達は世界にいいようにされたくないんだ。守りたい物を守る為に、私達らしくある為に、私達は戦わなくちゃいけないんだ」

タン、とタイガが大きく後ろへと下がる。ソメゴローと並び立ったタイガは、同じく体勢を整えている小狐丸を睨みながら、息を吐いた。

「よしじゃあ最後に、タイガも一言くれよ」

「え、何の話だ」

「私達の考えた事を江雪さんに話してたの。タイガもほら」

「あー……ちよつと恥ずかしいんだけどな」

照れ臭そうに目を泳がせた後、意を決したように咳払いをして、タイガも眼光を鋭くさせた。

「……本当は怖いさ、戦う事なんて。でも、何も知らないまま流されていく事の方が怖い。目隠しされて連れて行かれるようなもんだろう、それは。だから俺は、自分の意志で進む為に戦うんだ。こんな世界に

負けてやるもんか、つてな。少しでも、格好良く。少しでも、強く。少しでも、見栄を張つて。そうして最後に笑えるのなら、本望だ。だろ？」

タイガの呼びかけに、二人は頷く。強く宿る決意の光は、ソメゴロー達の目を確かに輝かせていた。

——意志は固い、という事ですか……。

江雪は彼等の姿を見て、湧き上がる様々な言葉を懸命に飲み下した。

彼等が心配だ、こんな地獄を進ませたくないという思いもある。

彼等は子供だ、まだ守られているべき年頃なのだ。けれど——その倫理を、世界は許さなかった。だからこそ子供達は力を求め、険しいと分かった上で戦う事を選んだのだ。

悲しみが湧く、絶望に目の前が暗くなる。それでも、江雪に足を止めている暇はない。

戦士となったのなら、仲間として共に戦おう。子供達が身を切ると決めたのなら、自分が身を切らない理由などない。

彼等の決意を踏みにじる事だけはしてはならない。子供達がその道を選ばざるを得なくなった事を悲しみながら、否定はせず支えよう。

それが、年長者である江雪に出来る見守り方だ。

「……ツクシさん、決して前に出ないように。愛染、太鼓鐘、あの小狐丸は面妖な術を使います。十分に警戒を」

「……江雪」

「ここまで来てしまったのなら、私は見守る事しか出来ません。けれど今は、あの小狐丸を退けましょう。三人とも、頼りにしていますよ」

おう、と三人は声を張り上げ、前を見据える。体勢を整え終わった小狐丸の周囲から、再び時空の裂け目が生まれ始めた。

19—2 「それでも、俺は」

階段状の部屋の正面にある大画面いっぱい、英数字の文字列が映し出されている。とめどなく打ち込まれてはコマンドを実行し、更に文字列を入力されていく。

大画面の下にいる長谷部と大包平は、画面から意地でも目を離すまいと顔の向きを固定させ、キーボードを打つ手は滑らかに、そして力を込めながらタイプ音を響かせている。表情は真剣に強張ったまま変わらない。

部屋の外から、嫌でも剣戟の音が聞こえてくる。怖い顔をしている長谷部と大包平、怖い事になっている部屋の外。その二つの間をちらちらと窺いながら、子供達は小さく固まって震えていた。

「ひっ！ ……また、何かが壊れる音がした……」

「獅子王さん達、大丈夫だよね？」

「今は信じるしかないよ……僕達が出て行っても邪魔になるだけだ」

子供達——滑^レ園の園児達は、怯えているしかない己の無力さに歯噛みしながら俯いた。

ソメゴロー達がいなくなった——その事実気が付いた時に、子供達は各々の動揺を見せた。どうして消えたの、ソメゴロー達までいなくなつた、何故こんな時に黙つて——衝撃の果てに子供達は、ある思考に至つた。

——自分達が、弱かつたから。

ソメゴロー達がこの状況に相当傷ついていたのは知っていた。知っていて、自分達は自分の傷に手一杯だったせいもあり、江雪達に任せただ。

その結果、ソメゴロー達は何かを決めた。きっと彼等は、茨で出来ている道を進むと決めたのだろう。

自分達は、そんな決断が出来ない。今だつて家族がいてある程度の安全があるというのに、それ以上の何を望もうか。

……砂上の幸福であるとわかつてはいる。それでも、怖い思いをすめるのは嫌で仕方がないのだ。

自分達は、あの三人のようになれない。どうしようもない事だけでも、悲しくて悔しくてたまらなかった。

「……ソメゴロー達、どこにいるのかな」

一人の言葉に、子供達が顔を跳ね上げた。表情にかつてのような明るさはない。それでも、彼等の心にあつた懸念は一緒だった。

「変な所に、行ってないよね？」

「ツクシとタイガがいるんだから、そう危ない場所に行かないとは思うけど……」

「サクヤがいなくなっちゃったのが痛いよなあ……」

「ソメゴローのストッパーはあいつだったしな」

「……三人共、何か考え込んでたし、……いなくなっちゃうの？ 三人も」

重たい沈黙が降りる。嫌だと叫びたくても、状況が許してくれない。

ここは間違いなく戦地ど真ん中なのだ。守られていなければならぬ存在である自分達が動けば、今も戦っている大人達に迷惑がかかる。自分達に出来るのは、部屋の中でじっとしている事だけだった。

ああ、そうか。子供達は、少しだけ三人の考えに近づけたような気がした。

——何も出来ない弱さが嫌で、あの三人は……。

「よし、こっちは大部分の修復が出来た」

「こちらにも制御の奪還に成功した、次の割り当てだが——ん？」

大包平に進捗報告をしていた春光隊の長谷部は、首を傾げて画面を睨む彼の方向を見た。

あちこちにばらまかれていたウイルスを退けながら、機械制御を奪還しようとしていた彼等は、その甲斐があつて少しずつ制御を取り戻しつつあつた。

さすがは政府といったところか、最新システムのテストが行われていたのだと見せられた物は、長谷部を大いに驚かせた。実装に至るまでには時間がかかりそうだと唸りながら告げられて、長谷部はノータイムで「応援している」と拳を握って見せた。

そんなシステムの開発に携わっている大包平が、顔を顰め画面の上に視線を泳がせたと思うと――限界まで目を見開いた。

その形相は迫力に満ちすぎていて、長谷部は思わず体を引いていた。

「長谷部、予定変更だ」

「ど、どうした？」

「武器庫の制御が奪われている。ここには時間遡行軍の模型もある、自由に動かせるようになっていいるのではまずい！　くそ、ここまで手が及んでいたとは……！」

端的な説明を聞いて、長谷部も顔を青ざめさせた。

どこに運び出すかは分からないが、ここに放つにしろ、別の所に移動させるにしろ、ろくな事にならないのは目に見えていた。

長谷部は大包平の最優先となった作業を確かめる。

「大包平は、武器庫の制御を取り返すんだな？」

「ああ。長谷部、連絡の機構は修復したんだろう？　反逆者と戦っているものとの連絡は任せたぞ！」

「わ、分かった！」

鋭く命じられ、長谷部はキーボードを再び叩き始めた。

「……敵性反応を示す情報生命体を除外、こちら側の情報生命体反応を検出……完了。該当生命体所持端末にアクセス……成功！」

エンターキーを思いつ切り叩き込み、長谷部は近くにあったマイクに顔を近づけて叫んだ。

「――おい、聞こえるか!?!」

数多の雨粒が、地面に弾けては消えていく。耳障りな音も量を増し、視界すらも遮り始めていた。

愛染が雨粒を巻き込みながら地面を跳ね飛び、水溜まりを避けて小狐丸の懐に迫る。当然それは輝く鋼に防がれ、ぎしりと軋んで拮抗状態になった。

睨み合い続ける二振りに、木の葉が揺れる音と共に頭上から白と青の影が降ってくる。落ちながら体をねじり、刀を振りかぶって相手の

首を狙う。

しかし、目の前の景色が揺らいだと思うと、次に足から感じたのはぬかるんだ地面の感触だった。青と白が横を見ると、愛染も前方を睨みながら立っていた。少し離れた所では相も変わらず小狐丸が恍惚とした様子で体を振っている。

「くっそ、やっぱりワープが厄介だな……!」

「アレを何とかしないと永遠に近づけないだろ……」

愛染が腹立たし気に吐き捨てると、青と白——太鼓鐘も歯痒そうに小狐丸へと視線を向ける。

小狐丸の視界にはもう、先程の襲撃者の姿はない。ただ母親の幻覚と踊り狂い、うっとり目を潤ませ表情を蕩けさせている。

「ふ、ふふ。ああ母様、もうすぐ会いに行けますからね……」

忌々しそうにしている愛染と太鼓鐘の後ろで、ツクシは小狐丸をじっと見つめている。目を皿にして敵を凝視する彼女の肩を、江雪は優しく叩いた。

「ツクシさん、怪我はありませんか?」

「大丈夫だよ江雪さん、ありがとう」

「いえ。……あの転移の術、どうにか出来ないでしょうか」

それは当然の言葉だった。何せ近づけたと思ったら元の場所に飛ばされているのだ、このままではこちらの体力が削られていく一方である。

腕を斬られた江雪も、長く戦闘を引きずると危ないだろう。少しでも早く、突破口を見つけたい所だった。

「……ねえ、あの小狐丸さ、様子がおかしくない?」

「え?」

「変に顔が赤くなってるから分かり辛いけど、少し目が虚ろになっている気がする。それに体の軸がちよつとぶれてるよ。多分、少し疲れているんじゃないかと思うんだけど……」

今もなお小狐丸を見据えるツクシの横顔は研ぎ澄まされたように真剣で、江雪はその気迫に息を?む。

戦場から距離を置いた所で、彼女は彼女なりの戦いをしていたよう

だった。

「……何故急に、疲労を表に出したのでしょうか」

「分からない。けどこれはチャンスだ。少しつづけば多分、あいつはぼろを出す」

「けれど、つづくと言ってもどうやってですか？ 今も隙を見せていないのです、攻撃で穴を見つけるのは難しいですよ」

「だろうね。なら」

ツクシの唇が小さく、けれど確かに歪む。それは幼い子供がささやかないたずらを企んでいる時の、常なら微笑ましさと微かな不安を催す物だった。

けれど――

「――なら、心の隙を突かせてもらおうか。あいつが私達と同じような経緯で生まれたのなら、存分に揺さぶるネタはある」

この厳しい状況下では、強力な軍師がこちら側に付いたような安堵を覚えられた。

はあ、と吐き出した息には鉄錆びた疲労の臭いが漂う。口元を拭いて鶴丸は再び前を見る。

周囲の壁は斬った跡だらけで、滑らかだった平時の物とは思えない。斬られた痕跡から覗く基盤は、恐らく機械制御の為にある物だろう。今は辛うじて傷はついていないが、この後の戦況次第では使い物にならなくなる。

床面も問題だ。綺麗に敷かれていたカーペットは捲れ上がり、銃兵が開けた穴がいくつも点在している。戦闘に巻き込まれて綺麗な絨毯からみずぼらしい襤褸切れになってしまったカーペットには、後で黙祷を捧げなくてはいけない。

そして、その向こうでは。流れの鯨尾がこちらの長谷部と共にヒトガタを吹っ飛ばしている。長谷部はいい加減に操り手に近づけない現状に焦れたというのもあるだろう。かつてない程乱雑に刀を振り回す彼は、かなり頭にきていようだった。

それをさりげなくサポートしているのが、鯨尾だ。真つ二つにされ

たり首を飛ばされたヒトガタの「鍵」を的確に破壊しつつ、ヒトガタの肉体が消える前に堀川のいる所へと投げ飛ばしていた。当然サツと避けられ、それに舌打ちをしつつ鯰尾は次の標的に移っている。

青江も隙を狙っては堀川に攻撃を仕掛けようとする。だが、すぐにヒトガタに防がれ遠のけられた。彼の目にも、苛立ちが浮かんで見える。それでも彼は、冷静さを保っている方だった。

「う、ぐ……」

後ろから、か細い唸り声が聞こえる。直後どさりと倒れる気配がして鶴丸は振り返った。

「小夜、大丈夫かい？」

「体が、思うように動かなくて……すみ、ません……」

「強力な呪いらしいからそうなるのもおかしくないんだ。頼むから、無理はするんじゃないよ」

ヒトガタを吹き飛ばし小夜の側から遠ざけながら、次郎は彼を案じていた。小夜は小さく頷き、腕を押さえて唸り続ける。

その光景を、憎悪の目をもって見つめているものがいた。

蛍丸は腰を低く落とす。そして床を後ろ側の足で蹴飛ばし突進する。視線の先にいるのは、小夜。

その昏い眼光に気付いた次郎は、小夜から少し離れた場所より叫んだ。

「——小夜!! つぐう……!」

蛍丸は低い姿勢で次郎の脚に切り傷を入れる。次郎がそれに気を取られた一瞬の間に、蛍丸の鋒は小夜に向けられていた。

斬られた直後から起こっている激しい痛み。そのせいで立ち上がるのも困難だった次郎は、少し黒ずんだ白い脚が凶刃を振り下ろすのを歯噛みして見る事しかできない。

——歯噛みして、祈る事しかできないのだ。

「……本っ当に、君は性根が歪んでしまっているなあ——19478番!」

「小夜さん、大丈夫かな？」

割り込んだ鶴丸が小夜を蛍丸から引き離し、石切丸が凶刃を受け止

め、攻撃を阻止する。

鋼がぶつかる音が高く澄み渡り、刀身の向こうで蛍丸が鋭く昏く、こちらを睨みつけていた。

「……どういつも、いつも本っ当にムカつくなあ」

沼の底に沈む、粘ついた呪いの表面を反射して、瞳に映しているようだ。刹那、鶴丸はそう思う。その目の奥に、どれだけの絶望と恨みがあるのだろうか。

「どうせ殺すしか出来ない癖に、どうせ傷付けるしか出来ない癖に、善人気取ってさ。お上が守ってくれるから自分達が正義？ ハッ、腹が振れるね。どこまで行ってもお前らは血に濡れる人斬り包丁なんだ、それ相応の振る舞いをした方がいいと思うけど？」

ケタケタと人を食うような笑い声を上げる蛍丸。怨嗟を隠そうともしない彼の言葉を聞いた鶴丸は、目を見開いて息を震わせた。

——蛍丸の根源に触れた気がした。あの悪意溢れる言葉の奥を想像して、彼の辿った経緯を合わせれば、彼の傷が見えてくる、ような。

小夜が、鶴丸の裾を小さく引く。我に返った鶴丸は、絨毯の切れ端をかき集める。

お上殺しをしている以上、蛍丸の『処理』は絶対だ。けれど、それでも何か、彼に残せる物があるのなら。少しでも、報われる結末に至れるのなら——

切れ端を重ねて小夜を寝かせ、か細く息を吸う。鶴丸も、己の内側を晒す覚悟を固めた。

「……そうだな、確かに俺達は人の命を刈り取る武器だ。だが、今は体と意思がある。斬る事が刀の定め、それは当然だ」

——傷付けるしか出来ない？ ああ、そんなのは百も承知さ。

——善人を気取ってる？ 人に少しでも良くあらねば、俺達は容易く壊されるんだ。

——お上に守られているから安全圏にいられる？ 信用に足りない人間が多い守りが、脅威に転じない保証などどこにもない。

——人斬り包丁らしい振る舞いをしろ？ ……脳裏に、夕立の笑顔と滑り園の写真、そしてあの日、惨劇の舞台となった研究所の被害者

の、絶望に惑う姿が浮かぶ。

それを見てしまった自分は——その振る舞いだけを断固として拒絶するのだ。

「けれど、その上で俺は思った。俺は、未来を断つだけの武器にはなりたくない」

苛立ちを隠そうともしない蛍丸は、齒を軋ませながら刀身を石切丸へと押し出す。

「物言えぬ頃には出来なかった。だが、今は心を伝える口があり、思う場所に行ける脚があり、そして他者を守る腕と手がある。それらを使わずにただ闇雲に斬るのでは、幼子の戯れと何も変わらん。笑顔の温かさを知ってしまったら……悲鳴を、慟哭を、聞いてしまったら。少しでも涙の流れる事態を避けようと思うのは、心あるものとしては自然だ、と俺は考えている」

石切丸もまた刀身を押し返す。鶴丸は応急処置をしている次郎を横目で見ながら、素早く思考を重ねていく。

蒼穹の一期は、己の不甲斐なさに泣いていた。彼に何も出来なかった自分もまた、痛い程に情けなく感じられた。けれど鶴丸は、あの時も心から「蒼穹の一期の力になりたい、彼には笑っていて欲しい」と思ったのだ。そんないい奴ではないと首を振っても、本心を偽れば必ずどこかで破綻する。

だから鶴丸は今、この点に関しては正直でいる事に決めた。

「斬る事が俺達の本能。だが俺は闇雲に斬るんじゃないやなくて、この世界を、俺の世界をより良く出来るように、道を切り拓く刀でありたい。主を、仲間を、友達を、俺の世界を構成するひとびとの明るい未来を、指し示せるような刀でありたいんだ。だから19478番、俺は俺の望むままに振る舞う。君の提案は残念だけど、却下させてもらうぜ」
「いよいよ蛍丸の表情が険しくなっていく。眉間の皺は深く、細くなった目は研ぎ澄まされ、その奥で澱んだ炎が揺れている。」

「……お綺麗な言葉を並べて、つくづく苛立たせるのが上手いな、お前は」

そう吐き捨てて蛍丸は刃を引き、一步下がって壁の照明に手をかけ

た。

19—3 「君の未来の為に」

石切丸は春光隊の中では最後に顕現した刀だ。なので、長谷部との付き合いも他の隊員よりは短い。それでも数多の出来事を経た自分の長谷部への愛情は、他の隊員と同じくらい強い自信がある。

だから、今だって想像してしまう。——こうして戦場に巻き込まれた彼は、どれだけ怯えてしまっているのだろうか、と。

『おい、聞こえるか!?』

その声が耳に入った時、目を見開いた石切丸が抱いたのはまず「安堵」だった。

長谷部は無事だ。少なくとも声に張りがあるし大きく慌ててもない。その事実だけで不安の大部分が払拭される。後は、彼が今どこにいるのかだけが問題なのだが——

『聞こえているみたいだな。春光隊が一振りへし切長谷部、これより政府所属の大包平と共に、賊討伐の支援を行う!』

次いで飛び込んできた言葉に、思わず耳を疑った。何故、長谷部が政府の大包平と協力する事になっているのか。他の本丸の刀と話す事が苦手なのに、大丈夫なのか。そして何より、支援という名目で危険な事に巻き込まれていないか——安堵の感情を塗り潰すように、不安が噴き出す。

そんな石切丸の懸念を知ってか知らずか、長谷部は緊迫した声音で続ける。

『現時点で、政府中枢システムのおよそ半数の奪還に成功している。大包平は引き続きシステムの奪取を、俺は取り戻せたシステムを用いて床や壁といった地形の変動をはじめとした支援を行う。今はまだそちらの声を聴き取れるまでには至っていないが……こちら側からお前達の様子は見えている。出来る限り、やり取りを可能にしたのは伏せておきたいから、疑問もあるだろうが今は俺達を信じてくれ、としか言えない』

はきはきとした口調から、長谷部も覚悟を固めてその場にいるのだろうと分かる。その気持ちを尊重したいが、やはりどうしたって不安

と心配が胸の中で渦巻く。

慣れない場所に彼を一人にしたくない。変に気負いすぎてまた必要な傷を負う事になったら。ああ、今すぐ長谷部のいる場所に鯨尾と共に駆け付けたいのに。

涙に沈む長谷部を、もう見たくはない。でも、決意をしたなら妨げるのは野暮だ。だが強く言われて参戦したというのなら、そんな事をしなくていいと言わなければ――

『最後に、俺の本丸の皆に』

ピタリ、と脳内で回っていた言葉が動きを止める。止まった言葉達を脳の隅に払いのけ、そして長谷部の言葉を聞き逃すまいと、それだけを思考の中心に据える。

――何というか、私ってここまであからさまだったかなあ……。

内心で苦笑しつつ、石切丸は大切な家族の言葉を待った。

『……分かっていると思うけど、俺が介入すると決めただ。大包平は悪くないし、一緒にいた獅子王もいって言うってくれた。確かに怖いよ、俺の判断一つで沢山の人が死ぬかもしれないのは。それでも、皆が戦っているから。家族が苦しんでいるから。俺も勇気を出して、助けるために戦わないとって思えたんだ』

逃げてもいいのに、それでも彼は戦う事を選んだ。子供達が追い込まれている状況だ、長谷部は見捨てないだろうというのは百も承知だった。けれど家族の――自分達の姿を見て、戦う決意をする最後の引き金を引いたのだろう。

守りたい思いが、大切な家族を戦地に追い立てた。何とも皮肉だと、石切丸は自嘲した。

『だから、皆。どうか、生きてまた会おう。また笑って会えるのなら、俺は怖い場所だつて進んで見せるから』

――澄んだ言葉が、耳に穏やかに滑り込んでくる。戦場である事も忘れて、石切丸は茫然とした。

それは未来を祈る言葉で――何より、自分達への信頼だった。きつと自分達は、困難を乗り越えてまた長谷部のもとへ帰ってきてくれる。自分達は、長谷部を一人ぼっちにしない。そんな、自分達の力と

魂を信じているが故の言葉だった。

けれど、信頼を向けられているだけではない。それは少し震えていた口調から分かる。

長谷部は怯えている。——家族がもし、戦いの中で折れてしまったら。心を信じていても、やりきれない事に傷ついた彼は「もしも」の恐怖に囚われているのだ。

自分だけならまだマシだと考えているのもいただけだが、確定してもいない未来に怯え続けているのは、どうにかして低減させたい性質の一つだった。

どんなに幸せな未来を思い描いても押し潰されてきたのだから、そうなってもおかしくはない。最近は何者との交流でそれも治まっているかと思つたが、まだ燻っているのは間違いなく。

だからこそ——

「祓い給え……清め給え……」

意識を現実に戻し、石切丸は目を細める。目の前には、壁上方に備え付けられた照明を踏み切つて渡り、ヒトガタをばら撒く蛍丸に、ヒトガタの鍵を壊す鶴丸が追いかけていた。

——目を凝らせ、気配を探れ、一挙一動を決して見逃すな。

石切丸は索敵が得意な方ではない。けれど彼だつて刀だ。戦い方は心得ているし、索敵が難しくてもやれる事はあるのだ。

蛍丸は地面に降りてこない。攻撃のしにくい所から石切丸達を翻弄しようとしているのだろう。鶴丸は高所への攻撃手段を持っていない為、かなりやりにくそうにしている。

高所に陣取っている敵。足場になっているのは壁の照明。あちらは既にあちこちを破壊している。ならば。

石切丸は戦場から少し離れて上を見る。小さな足なら実によく置き場になるだろう、シンプルな照明がそこにあつた。

石切丸は柄を握り、天に向かって刀身を掲げる。

「——それっ！」

そしてその一言と共に、壁付き照明は一気に砕け、ただの残骸になり果てた。散らばる破片は最早足場にしようもなく、床に降り積もつ

ていくのを横目に、石切丸は次の照明に向かおうとする。

その時、壁の中からガコン、という音がした。

何があつたと思ひ壁へと向くと、ドアの一つと横の壁が重なつていた。そして次第に襖を重ねるかのようにドアのある壁が照明のある壁に重なり、そして重なつた二枚は照明を引つ込めながら次の壁に重なつていく。

照明の上に乗っている蛍丸も、鍵をばら撒きながら舌打ちをしていた。

これは、長谷部の支援だ。そう考えたのを裏付けるように、通信が入る。

『大包平から施設の破壊許可が下りた。不用意な損壊は禁止だが、戦闘の上での損壊は仕方ない、との事だ。今から戦場を広げる。許可は下りているから、存分にやれ!』

ズズズズ、地の底から響くような音がして、壁が更に大きく動き出す。一斉に動き出した壁はどんどん空間の端に向かって滑っていく。部屋を遮っていた壁や、空間を隔てていた壁がこのフロアの端にまで追いやられ、一気に空間が大きく開けていった。

蛍丸は既に床へ着地しており、刃を構えて全方位に殺気を飛ばしている。離れた場所にいる堀川は、紙屑を床にばら撒かれたかのような困った笑顔を浮かべていた。

「チツ、コンピューター制御を奪い返されたか」

「蛍丸君、眉間にしわが寄つてるよ。冷静にね」

「言われなくても分かつてる、相棒狂い」

鋭い舌打ちを一つして、蛍丸は眼前に刀を掲げる。真意が見えないままに微笑む堀川も、鍵をぶちまける用意をしていた。

長谷部の支援で戦場が広がつた——即ち、大振りの刀が動きやすくなつたという事。大太刀の石切丸や次郎、太刀の鶴丸も本領を發揮でききる。

しかしその有利は、味方だけに発動されるものではない。

「ムカつく、ムカつく、ムカつく……味方から援護されて腑抜けた顔しちゃつてき。——今度こそ、全員殺す」

殺意を漲らせた蛍丸は腰を低く落とし、掲げていた大太刀を横一字に振りかざした。血染めの白銀が、周囲にいた刀を否が応でも遠ざけさせる。

相手は「演練の悪魔」とも称される蛍丸を降ろした存在だ。迂闊に近づけば手酷い反撃を食らうだろう。

長谷部が生み出した有利は、その蛍丸にも有効だ。自分達だけ、という甘い話はないと分かってはいるが、頭が痛くなる話だった。

鶴丸が石切丸の隣に並び、前を強く見据えながら言葉を投げかける。

「通信を入れた長谷部は君の所の奴だよな？」

「そうだよ」

「随分と変わっているらしいな、君達の長谷部は。こんな状況じゃなかったら、友達になろうと俺は声を上げていただろう」

「……好奇心だけで近付かれる訳にはいかないんだけどな？」

殺気を少し込めて鋭く睨みつけると、いやいや、と鶴丸は軽い調子で否定する。

「好奇心があるのは否定しないが、俺はあの長谷部と真面目に語り合いたいと思ってるんだぜ？ 何せ、恐怖をねじ伏せてまで戦場に立った奴だ。戦士として扱うには十分だろう。恐怖を鎮める術、機械制御をどのように戦術に組み込むか、話のタネは山ほどある。そりゃあ今すぐとは言わないさ、君達にも色々事情があるんだろうしな」

「……」

「それでも俺は俺の刃生を楽しむ為に動くし、相手にも楽しいと思ってももらえるように務めるさ。好ましい相手に嫌な驚きを与えたくはない、と口で言っただけで信用が得られるとは思っちゃいないが……それなら君達にも信じてもらえるように、俺は全力を尽くすだけだ」

「……どうして、そこまで長谷部さんに興味を」

警戒と困惑を素直に声音に乗せてしまった自分に驚く。鶴丸は石切丸の言葉に、微笑んで肩をすくめて答えを返した。

「友達になりたいと思うのに、大それた理由はいらないうらう。俺は君達の事を、少しの接触だけが好ましく感じた。好ましい相手と仲

良くなりたくなるのは、当たり前前の心情だと思うぜ」

相手は、数多の戦いを乗り越えてきた刀だ。謀略を巡らせた事だつてあるだろうし、時間遡行軍ではない者の血も流させた事もあるだろう。警戒してしかるべき存在だ。

それでも、何故だろう。石切丸は、彼の言葉にさほど裏を感じられなかった。理由を考えても明確な答えは出なかったが、ふと思った事が真理を突いているような気がした。

——なるほど、蒼穹の一期さんの友達なだけはある。

プライドが高いと言われる一期一振にしては、どこかぼやつとしたあの刀。それでも彼は、真剣に長谷部と友達になりたがっていたし、どんなに傷ついても腐る事なく真っ直ぐに問題へと向かい合っていた。

きつと、目の前の鶴丸もそうなのだろう。どんな汚濁に塗れても、決して侵されない純粹があるのだろう。

審神者を失い、長谷部が世界への絶望を露わにしたあの日。石切丸達は己の存在をかけて、長谷部を守ると誓った。けれど転び方を教えないままではいけないとも分かっていた。

どんなに心配でも、傷ついて欲しくなくても。長谷部が楽しく幸せに生きていく為に、決断をしなくてはいけない。

そうして石切丸が、静かに口を開きかけた時だった。

「——へえ、こんな時に呑気に友情劇場？ どこまでも舐め腐つてくれやがって……そんなに死にたいならお望み通り、一番最初に殺してやるよ」

はつと顔を上げれば、目の前で昏い炎を目に宿した蛍丸が鶴丸と切り結んでいる。何度も何度も大きな動きで斬りかかる蛍丸に、鶴丸は防戦一方だった。

蛍丸の剣筋は、お世辞にも優れているとは言えない。やはり元は子供なだけあって、経験が足りていないのだろう。

だがどんな未熟なものでも、膨大な力を持っているとなれば話は別だ。少し刀を振り回しただけで周囲を怯ませ、力任せに振り下ろせば地面を砕きかねない。そして、少しの切り傷だけでも大幅に行動を制

限できる。そんな力を振りかざせる相手に、舐めてかかれる理由はどこにもなかった。

加勢しようと足を踏み出した石切丸に、鶴丸が鋭い声で制した。

「石切丸は小夜坊と次郎の事を頼む！ こっちは俺だけで何とかするから！」

「何を言っているんだい!? 一振りだけでどうにかなる相手ではないだろう！」

「それでもだ！」

罅迫り合いの最中に、鶴丸は一瞬強い視線を石切丸へと向けてから声を張り上げる。

「小夜坊と次郎は傷を負っている。このまま放置していたらどうなるか分からん！ 神社で暮らしてきた君なら、悪化するのを防げるかもしれない」

「だけど——」

「小夜坊は修行済みだ、次郎も修行を望んでいる。蛍丸の思惑通りに二振りで挑んで、重要な戦力を失う訳にはいかない！ 君の力を信じて頼みたいんだ、どうか引き受けてくれ、石切丸！」

強く押されて、鶴丸が地を踏みしめる。床の擦れる音が微かに聞こえた。石切丸は一瞬逡巡してから、怪我を負う二振りの元へと駆け出す。

状態の悪い小夜は目を閉じて唸り声を上げていた。次郎はまだ傷が浅かったのか、自分で傷口に酒をかけて消毒を試みている。石切丸が二振りの前に立つと、次郎は目を丸くして顔を上げた。

「石切丸、アンタどうして」

「鶴丸さんに頼まれたんだ、二振りの様子を見てくれと。……小夜さんは辛そうだね」

「ああ。アタシもどうにかしようとしたけど、良くならなくてね。……やっぱり、あいつを殺すまで呪いは解けないのかね」

苦しむ小夜を見下ろし、次郎は表情を曇らせる。石切丸は片膝をついて小夜の顔を覗き込み、それから腕の傷を見分しようと頭を動かす。

「完全な解呪は難しいけれど、少しだけなら弱められるかもしれない。その為に力を尽くすよ。……小夜さん、腕に触れるからね」

「う、あ……」

傷から遠い所に触れただけでも小夜は痛そうに呻く。その様子に胸が痛むが、立ち止まってははいられない。

鶴丸は自分のなすべき事をなそうとしている。懸念もあるだろうに、出会ったばかりの刀を信じると決めて仲間を託して、最善を尽くそうとしている。

——長谷部は怯えている。「もしも」の恐怖に囚われて、一步踏み出す事を恐れている。どんなに口先だけで慰めをかけても、傷を癒すには到底及ばない。それでも、最近は他者との交流で少しずつ前向きになってきている。

だからこそ。

「神気を流すよ、少しだけ耐えてくれ」

小夜の腕へと少しずつ力を流す。傷の治癒には至らない微かな物だが、小夜の体は反発しているらしく、苦しそうな声上がる。

それでも、小夜は耐えている。歯を食いしばり、少しでも良い方へと向かえるように、懸命に呪いに抗っている。その姿は少しだけ、自分達の大切な家族と重なる。

——だからこそ、ここでも少しでも頼りになる姿を見せたいのだ。長谷部が傷ついても、味方がいるのだと彼に覚えてもらえるように。

小夜達を利用している。分かっている。まだ心から彼等を信じていられていない。仲間を託して見せた鶴丸の事も、疑ってかかっている部分がある。不信を抱いている事に、後ろめたさがない訳ではない。

それでも。頼りになると示さねば、彼はいつまでも怯えたままだ。これは大きなチャンスなのだ。長谷部が戦いに身を投じると決め、他者と協力する姿勢を見せている。大きな決断をして、他者と繋がるうとしているのは大きな進歩なのだ。

長谷部の健やかな生の為に、なりふり構ってははいられない。残酷な世界と向き合う覚悟を、誰にも、自分達ですら邪魔させないように。

癒す姿を、理不尽と戦う姿を、長谷部の目に焼き付ける。それで少しでも長谷部が前に進めるのならば、石切丸は望んで他者を癒して見せると決めていた。

19—4 「核心／狂気」

太鼓鐘が跳ね回りながら小狐丸の懐を狙っている。愛染はその様子を見、真剣な眼差しで見つめていた。

先程から、状況はあまり変化していない。近付けたと思っただらワープを仕掛けられて元いた場所に戻され、再び近付いての繰り返しだ。ワープを何とかしなければ、小狐丸に攻撃する事すらままならない。けれど、ずっと遠くから観察していたツクシによつて、突破口が見えつつあった。

「あいつは、ずっと母様母様って言ってるよね。そこから母親を待っているらしいのは分かる。邪魔者を排除すれば、母親に会えるだろうとも」

「……そうですね、ずっとそう言っていました」

「でも、それがどうしたんだよ?」

「……ツクシ」

「うん、ソメゴロー。おかしいよね? だって——」

脳裏に江雪と家族との会話を思い描き、愛染は目を鋭く細める。そして伝えられた作戦の概要をもう一度確認し、送られるはずの合図を待っていた。

「……愛染、そろそろです。準備はいいですか」

江雪の言葉に、愛染は力強く頷く。そして正面を向き、太鼓鐘の一挙一動を見逃さないように視線を動かす。

幾度も二つの刀身がぶつかり合い、太鼓鐘は歯を噛み締めながら攻撃を続け、優位を崩していない小狐丸が歪んだ笑みを浮かべる。直後、ワープが発動し——太鼓鐘は目を見開いてから、即座に柄の頭を手で二回叩いた。

「合図です。——ご武運を」

「おう、行ってくる」

硬い表情をしている江雪に笑いかけてから、愛染は地を蹴って小狐丸へと迫る。

まずは一分で、攻撃を通さなければならぬ。難易度が高くて、

愛染はやり遂げなくてはいけなかった。

「なあ、お前。いくつか質問があるんだけど」

鋒を小狐丸に向けながら、愛染はそう切り出した。ぴく、と眉を跳ね上げさせて、小狐丸は首をかしげる。余裕で鋒を防がながらも先を促す様子だったので、愛染は口を開いた。

「お前と母親は、邪魔者を殺せば会える。逆を返せば、邪魔者を殺さないと気軽に会えないのか？」

「そうだ。母様は高貴で尊い存在。そんな母様と私の仲を羨み妬み、邪魔をするものが余りにも多すぎる。母様だって邪魔者を排除して私に会える日を待ち遠しく思っている」

恍惚として、身をよじらせる小狐丸。その目には誰も映しておらず、相変わらず一人で盛り上がり悦に浸っている。

まずは探る為の第一撃、という作戦だったが——ツクシの推察に繋がる発言を、たった一つの質問で小狐丸は答えてしまった。

ちらりと、後ろを見やる。ツクシは愛染に頷き、作戦の遂行を促した。

視線を前に戻し、愛染は攻撃を繰り返した。

「おかしいと思わなかったのか？」

不審を浮かべて、小狐丸は攻撃を受け流す。ここからだ。愛染はツクシの推察を元に、言葉を投げつける。

——普通の親なら、まずあんな事をするはずないんだよ。子供を、刀剣男士にさせるなんてさ。

「刀剣男士にするための施設は、普通身分の低い子供が入れられる。あんたの言う身分の高い人間は、まず関わりたいとも思わないはずだ」

——知っててそうした可能性は低いけど、それでもろくでもない施設に子供を置いて行ったって時点で怪しい。

「そういう施設は、金の必要な大人に捨てられた子供や親のいない子供が集められる。少なくとも大金と引き換えにして、滅多に会えなくなるような場所に、愛情を注ぐ子供をやる大人はいない」

——あいつ、邪魔者って言って無関係な子まで殺したんだよ？ も

しかしたらああなる前にも、周囲の人が邪魔だって酷い事をしていたかもしれない。

小狐丸の顔が険しくなり始める。迫力のある表情に圧倒されながらも、愛染は負けじと言葉を紡ぎ続けた。

「母親だって人間だ。いくら腹を痛めて産んだ子供でも、自分を削られたら愛情も失せていくに決まってる。お前、そうなる前にも母親が関わる人間を邪魔だっていじめてたんじゃないのか？」

——無関係な子すら邪魔だって言って殺した奴が、まともな思考回路をしているとは思えないんだよ。私だって、例えば親友でも他の子と仲良くするなって言われるのは嫌だ。

一斉に現れた時空の裂け目が、愛染に襲い掛かる。大きく後方に下がり、また裂け目の合間を縫うように駆け出した。

まだ駄目だ。まだ、完全に噴火するには足りない。走る足を止める事なく、愛染は声を張り上げた。

「本当に邪魔者だけならいいけど、中には本当の友達や信頼している人だっていたかもしれない。無関係な奴等を殺していったお前が、それを見分けられていたとは思えない。それとも、母親が愛情を自分以外に向けていた事すら気に食わなかったのか？」

血が昇り、真っ赤になった小狐丸の顔を睨みながら、愛染は湧き出た時空の裂け目から逃げ回る。逃げ、避け続けて、更に言葉を重ねる。

——どんな相手でも、周囲の人と仲良くするのを邪魔され続けて孤立するなんて、普通に考えたら気が狂うよね。憎しみに転じてもおかしくないよ。だから多分、あいつの母親は——

「そんな事をし続けたら、親の愛だっていつかは尽きる。お前の母親はお前への愛が尽きて、目に入れるのすら嫌になったんだろうな。身分の高いってお前の母親は、だからお前を殺す前に施設に入れたんだ。これでも分からないならはつきり言っつてやる。——お前、母親に捨てられたんだよ」

「——貴様に、私と母様の何が分かる!!」

白い髪が、一気に膨らんだ。額に立てられた青筋、目を剥いた為に露になった瞳孔は小さく、怒りに触れたのが一目で判断出来る。怒声

も体中がびりびりとする程に大きく、愛染は一瞬体を強張らせる。

「貴様に何がわかる、親に見捨てられ、崇高な愛すら与えられなかった童が！ 母様が私を捨てたなどあり得ぬ、母様は私を優しく抱きしめて下さった、邪魔者を排除する事にもそこまでしなくていいと私を慈しんで下さったのだ！ 親なき子である貴様には永劫に分らぬ、その母様の愛を否定するなど、身の程を知れ!!」

小狐丸の罵声は溢れ返り、愛染の心まで凍らせにかかってくる。だが、止まってはられない。

予想通り、時空の裂け目が次から次へと現れる。気を抜けば元の場所——どこか、怒りに触れた今となっては、どんな危険な場所に飛ばされるのかわかった物ではないのだ。

だから、愛染は走り続ける。周囲に目をやり、合間に繰り出される攻撃を躲し、裂け目に吞まれないように走り回り、反撃の機会を待っている。

ツクシは、こうも言っていた。

『すぐに人を思った場所にワープ出来る、ぱつと見じゃ分からないくらい小さい機械なんて、とんでもない技術が使われてるはず。相当高い機械だよ、きつと。だから替えなんてないだろうし、ワープはきつと一台の機械でやってる。それと疲れ始めているあの様子から、ワープさせるのは体への接続が必要で、相当な負荷がかかると思う。だから——』

罵声と共に増え続けていた時空の裂け目が、急激に数を減らし始めた。と同時に小狐丸の顔色が悪くなり、体の軸も更に不安定になった。少し黒ずんだ腕がぶらりと地面に垂れ下がる。

自らの頭に考える暇すら与えず、愛染は駆け出した。残った裂け目の間を掻い潜り、小狐丸に向けて鋒を突き出す。

小狐丸はぎつ、と眼光鋭く睨み付けその刃を受け止める。ギシリと、刃同士が絡まって動かない。

やはり相手はそう易々と削らせてはくれないらしい。——一人で

は。——だから、わざと正気を失わせてワープを多用させて、動きが鈍

くなつた所を叩く。

脳裏に、真つ直ぐ前を見据えていた少女の言葉が浮かんだ。

「はあっ！」

頭上から、白と青が降ってくる。同時に、小狐丸の肩から鮮血が噴き出した。愛染は噛み合わなくなった刀身を引き戻し、よろけたその懐に向けて横一文字に振るつた。

生温い血が、顔に当たる。込み上げる吐き気に気を取られている時間はない。——まだ、小狐丸は倒れていないのだ。

「タイガ、一気に削るぞ！」

「分かつてる！」

太鼓鐘が着地し、赤く濡れた鋒を再び小狐丸へ向ける。

肩と腹を斬られてもまだ炎を宿している赤い目に戦慄を覚えるも、愛染は柄を強く握りそれを振り払つた。

地を揺らす爆発と共に、外からは職員と思われる人間達の悲鳴も遠く聞こえて来る。空気が煙に汚れるのを感じて、物吉の目の前が霞む。

気分が悪い。頭も上手く回らない。けれど、足を止めれば待つのは死だ。

入り口の側に立つ宗三の動きを、見逃さないように頭を上げる。彼は気怠げな佇まいをしながら、瞳を妖しく輝かせていた。

「ふふ、苦しそうですね。息をするのも大変でしょう？ でもまだまだ付き合ってもらいますよ」

ふらり、と体を揺らす秋田へ視線を向ける宗三に、嫌な予感を抱いて咄嗟に手を伸ばす。秋田の腕を引いた直後、彼のいた場所に斬撃が落ちた。

攻撃をしてきたのは時間遡行軍太刀のレプリカ。殺意が見える眼光を睨みながら、物吉は一気に距離を詰める。

次の瞬間には、太刀の首と頭が綺麗に離れていた。太刀の首から黒がかった血が吹き出し、空中に霧散していく。

「助かりました、物吉さん」

「まだ戦えそうですか？」

「大丈夫です。さつきは後れを取りましたが、もうそんなへまはしません」

その青い目には確かに、強い力が漲っていた。体が不安定になってもいない。秋田の言う通り、まだ彼は戦える。

しかし、悠長に引きずっている余裕もない。煙はまだ、この倉庫内に充満している。この状況がずっと続けば、コンディションにも影響が出てくるはずだ。

「あはは。その殺意、その戦意。気持ちいいですねえ、気分が高揚します。もっと、もっと楽しもうじゃないですか、この宴を」

「お断りします。貴方にかまっついていて被害が広がるなら、さっさとこの戦いを終わらせたいです」

ニタリと悪意をもって嗤う宗三に物吉がそう吐き捨てると、更に悪意を含んだ声音で返される。

「この快樂の宴を、そう簡単に終わらせてたまるものですか。せっかく部隊を整えて暴れられるいい機会が巡ってきたんです、楽しまなくちゃ損でしょう？」

少し黒ずんだ目を歪に細め、宗三はそう高らかに笑い、嗤う。直後、背後から殺気を感じて咄嗟に刀装兵を展開させ、身をかがめる。秋田の頭を下げさせる事も忘れなかった。それと同時に再び爆発が起きて、爆風と建物の破片が襲い掛かる。兵に爆風を防がせても、微かな断片までは防げない。頬にチリ、と痛みが走る。恐らく壁か床の破片が掠ったのだろう。舌打ちしたくなる衝動を抑え、殺気が迫るのを察知し膝について立ち上がる。

パン、という音と共に、物吉の兵がまた一つ弾ける。宗三が兵の銃口を、こちらに向けているのが見えた。

「あら、まだ刀装は壊れませんか。なかなかしぶといですね。楽しめるのでいいですけど」

「……………こっちは気分は最悪ですけどね」

近づいて攻撃もできない現状に苛立ち、きつと宗三を睨みつける。宗三の様子はそんな中でも変わらない。

「まだ本気ではないでしょう？　僕、貴方と戦うの本当に楽しみにしていたんですよ。こんなに早く機会が巡ってきて嬉しくて仕方がないんです。もっと楽しみましょう、味わいましょう、途方もなく悦楽の味がするこの時間を！」

「……ああもう、ひとの事を言えませんが、私は狂人の相手はしたくありませんよ」

眉間に皺を寄せ、物吉は鋒を前に向けて床を蹴る。宗三はゆったりと正眼の構えで迎え撃ち、鋼のぶつかり合う音が響く。二度、三度と切り結び、それでも押し返されてしまう。ちつ、と今度こそ舌打ちする。やはり相手は相当の手練れらしい。

チカ、と視界の端で何かが光る。全身に寒気が走り、咄嗟に後方へと下がり兵を前に出す。直後、また遠くない場所で爆弾が爆ぜる。爆風と煙で視界が遮られた。それでも周囲の気配を探って警戒する事は止めない。

だが、宗三が動く気配はない。何事か、と思うと同時に耳元から声がした。

『物吉、聞こえるか!』

「——長谷部さん!」

ぎよつとして、裏返った声を上げてしまう。思わぬ人物からの呼び声に、動揺している自分がいた。

『良かった、繋がったか。……倉庫の制御は大体取り返せた、間接的にだが俺からも戦闘支援を行う』

「どうしてそんな事を、っていうのは後でにした方がいいですよね」

『そうだな、悪い。とりあえずは、爆風で澱んだ空気をどうにかするか。いいか?』

「お願いします」

物吉が頷くと、すぐに空調の唸り声が響いて息が少し楽になる。それと同時に、視界も晴れてきたのだが——

目に飛び込んできた光景に、物吉は息を?んだ。

「……ぐっ……!」

「ははっ、あははは!　これでこそ、これでこそ命のやり取りというも

のです！」

宗三の懐に突き立てられた短刀が、血に濡れている。そしてそれでも高笑う宗三の鋒は——秋田の腹を貫いていた。

19—5 「それぞれの願い」

銃弾が空気を裂いて、背後の壁に突き刺さる。弾丸より少し遅れて飛び込んで来たのは乱だ。

刀身が噛み合って悲鳴を上げる。鶯丸が乱を弾き飛ばした先で、歌仙が刃を向けていた。乱はしかし、体を急反転させてその刃を防ぎ切る。隙を突こうとした薬研の一撃さえ、椅子を蹴り上げて凌がれた。

「つたく、修行済みっていうのは本当に厄介だな！」

「同感だよ。動きも早ければ攻撃も鋭い。ここまで成果を見せつけられてしまったては、修行をする方に傾いてしまいそうだ」

昂る戦意の中で煩わしさも滲ませる薬研に、歌仙がため息混じりに同意を返す。鶯丸も息を切らす平野の隣で、修行済みの脅威を実感していた。

「……修行済みが敵に回ると、ここまで手を焼く事になるのか。平野には改めて労ってやらないといけないな」

「お役目なのでですから当然の事です。敵になると厄介だというのは同意しますが」

乱を見据える平野は一見何ともないように見えるが、目には疲労の色が浮かんでいる。いくら修行済みであるといつても、相手も修行済みであるとなると相応の苦勞をするらしかった。

「本当、理解できない。悲観主義なら悲観主義らしく、森で引きこもっていたれば良かったのに」

突如、乱が刀身を振り翳しながらそう言葉を投げつける。鋒の先にいるのは歌仙だ。ぴくり、と眉を跳ね上げる歌仙に、乱は更に柄に力を込めて続ける。

「ボク達の邪魔をするのが政府の奴等なのはまだ分かる。でも、貴方は政府に痛い目に遭わされて、世間と関わるのを疎んでいるはず。何故今更関わるの？——あの長谷部さんを守る事が、そんなに大事ななの？」

鏑迫り合いをしている乱の妨害をしようと、蜻蛉切が足下へと刃を振るう。机に乗り上げる事で回避しつつ、乱は銃兵に弾を込めさせ

た。

柄を握る歌仙の指が白くなっている。彼は、息を吐くように乱の質問を反芻した。

「大事なのか、ねえ。——当然に決まっているだろう」

目に炎を宿して、歌仙は語気を強める。ともすれば乱に怒っているとも見受けられるが、鶯丸にはそう見る事はしなかった。

「彼は、僕達の主が唯一遺してくれた願いそのもの。でも例え主に願われなくとも、僕達は彼を慈しむ事を選ぶだろう。僕達は生憎、罪なき人々を踏み躪れる程世界に失望していなければ、こんな破壊行為で何かを変えられると思える程世界に期待している訳でもない」

声は力強く、その中に確かな意志を感じられる。乱へと向ける眼光は触れたら切れそうな程で、長谷部への確かな愛情も窺えた。

「主を失って誰よりも絶望したのは彼で、それでも最後まで優しさを捨てなかったのも彼だ。そんな彼を暗闇に墮としたくなかった、僕達の動く理由などそれだけさ。僕達は辛い目に遭っていた彼が幸せになる事で、全てが報われると思っている身勝手な刀だ」

身勝手と己を称しつつも、紡ぐ言葉は優しい。一瞬だけ穏やかな笑みを浮かべたと思えば、すぐに険しい顔へと変化させる。

「そんな彼を、未来へ進む幼き者の笑顔を翳らせようとしている者がいる。——言語道断だ、許せない事だ。決して見過ごしてはならない事だ。ならば僕達は、全身全霊をもってその者を遠ざけるのみ。君達も許せなくてこんな事をするのだろうけど、僕達だって君達みたいな存在を彼に近づけさせるとはいいかないんだ」

「そうだな」

一歩踏み出し、薬研が歌仙の言葉に頷く。そして顔をしかめている乱に鋒を向け、静かな声で言葉を並べる。

「反逆隊の乱、お前にも大切にしてくれた奴がいるはずだ。そこまで強くなれたくらいなんだからな。俺達も、あいつを大切にしたいんだよ。あいつが優しいままで、強くなれるように」

大切にしてくれた奴、という言葉に乱の肩が跳ねる。張り詰めている気配はそのままに、表情がどんどん強張っているような気がした。

「ああ、確かに俺達だって、絶望した、恨んだ、怒りを抱いた。それでも俺達はいいつの為に、自分達の為に、希望を捨てる訳にはいかない。俺達にとって希望を捨てる事は戦いに負ける事で、あいつを絶望に墮とす事だ。だから絶対に、諦めるなんて出来ない」

目を閉じて怒りを口にする様子は、何故かどこか静謐で、厳かで、祈っているようだった。ゆっくりと開かれた薬研の目には、それに加えて戦意も乗せられていると分かる。

「生まれた事さえ祝福されなかったあいつを、幸せになる事すら阻まれてきたあいつを、幸せな未来へ導いてやる事が俺達の勝利条件だ。あいつみたいな奴が笑って生きられない世界なんて、俺達は絶対に許さない、認めない。悪し様に言うなら、俺達はいいつを俺達の勝利の為に利用しているんだ。それでも、あいつに幸せになつて欲しいのは事実。だからその為にも、お前には消えてもらうぜ、乱」

その一言を最後に、薬研が前に飛び出す。殺意が籠った刀身を何度も思い切り振るう。その殺意を何度も避けた乱は最終的に、兵を足場にして空中へと舞った。

「……どうして」

鶯丸はその刹那に、確かに悲憤の呟きを聞いた。そして乱は兵を大きく展開し、部屋全体に降り注ぐように銃弾の雨を降らせる。

あちらの兵数は残り僅か。それまで銃弾を凌げるか、そしてその後の動きに対応出来るかが勝敗の分かれ目になりそうだった。

銃弾を避けようと壁側に下がり、続けて降ってきた弾丸に己の判断ミスを悟る。刀装を大きく削られるのは避けられないか、と覚悟を固める。

しかし咄嗟に後ろに引いた足は、何にもぶつからなかった。更に体を引くと壁らしき物はなく、大きく後ろへと下がる事が出来た。思わぬ壁があったと思われる場所を見る。壁は何枚かに別れて細いレールを滑り、空間を大きく広げていた。

何事か、と思つた直後に、耳に入ってきたのはノイズ音と焦燥に満ちた声だった。

『……おい、聞こえるか!? 聞こえていたら返事をしろ!』

「……長谷部？ 一体どこの、というか何故機械制御室から通信している？」

訝しさを込めてそう言うと、通信先の長谷部はえっと、と口籠った。様子が少し異なる声音に首をかしげていると、続けて自信ありげな大きな声が飛び込んできた。

『この長谷部は俺の臨時助手だ。聞こえているみたいだな、雲霄の鶯丸』

「制御室の大包平、無事だったか。……分かつてはいたが、そっちも緊急事態のようだな」

『お前は鶯丸らしく気楽そうだな。……いや、少しは真面目にやっているらしいが』

「それはそうだ、流石に真面目にやらないとあちこちから怒られる。壁を動かしたのはお前達か？」

ああ、と肯定が返る。通信先の大包平は端的に状況を説明し始めた。

『敵に奪われた機械制御は半数程取り戻せた。引き続き制御の奪還に力を尽くす為、そちらへの戦闘支援は俺ではなく春光隊の長谷部が行う。地形が大きく変わるからな、それだけは覚悟しておけよ』

「制御が不安定なのは平気なのか」

『どうやらそれも敵側の仕込みらしくてな……修復を進めているが、かなり深い所まで入り込まれている。まあそれも俺がいれば修復出来る。だがまだ完全に修復出来た訳じゃないから、地形変動にはくれぐれも注意しておけ』

「……致し方ないか、了解した」

『それではこれより地形変更を行う。健闘を祈っているぞ』

ぷつりと通信が切れた直後に、天井や床から地響きのような音が鳴り、数々の大きな塊が現れる。障害物、という事なのだろう。

目を見開いていた葉研はすぐに口元を戦意に歪め、塊の上に飛び乗って乱の下へと躍り出た。戦場が広がった事により、蜻蛉切や山伏も動きやすくなったようだ。

「機械制御室からの支援？ 気が利くじゃん」

「加州さん、僕達も行きましょう」

「そうだね。鶯丸、ここからは大いに働いて貰うからね！」

「勿論だ」

鶯丸は気合を入れ直している加州と平野に頷き、刀を構える。大きく動こうとしている戦場に、飛び込む為に。

がしやん、と床に落ちたガラス細工が碎け散る。それに目もくれず、二つの影が目まぐるしく室内を飛び回っていた。

一振りは、赤く染まった白い戦装束を纏い、あまりにも身軽に動く鶴丸国永。高らかに笑いながら兵を展開し、もう一つの影に向かって銃弾を放つ。

もう一振りは、血の跡が付いているマントを靡かせ、騎士のように綺麗な戦い方をする一期一振。飛んできた銃弾を兵に受け止めさせ、弾丸に合わせて突っ込む鶴丸の刃を受け止めた。

「っはは！・ どうしたどうした一期一振！ まだまだへばるには早いぜ！」

「……っ！」

その身軽さには見合わない一太刀の重さに、一期の腕が悲鳴を上げる。ぎしりと噛み合った刀身を辛うじて弾き返し、距離を取るのが精一杯だ。

——一撃一撃が重い癖に手数が多い！

きつと、ステータスから見ればバランスが取れていて、特別攻撃力に長けているという訳ではないのだろう。だが今の一期には、平均的な攻撃ですら脅威だった。

——このままでは、いたずらに体力を削られるだけだ。

そうは思うも、突破口がなかなか見つけられない。思考を巡らせている間にも、鶴丸の容赦ない攻勢は続く。

「ははは、大層な事を言った割には腰が引けてるぜ！ 身勝手に動くには、それ相応の強さが必要なのさ。対して君はどうだ？ 俺の攻撃に避けて逃げて、ちつとも強さが見受けられない！ 逃げ惑うだけじゃ、言葉に力なんて宿らないぜ！」

斬り合いの最中にも嘲笑出来るくらいに、鶴丸には余裕がある。こちらは攻撃をいなすのがやつとで、口を開く暇などありはしないというのに。

けれど。嘲笑された内容に、黙っている事は出来そうになかった。「攻撃の機を窺うのも戦略です。それを分からない貴方ではないでしょう。それに、例えば私の力が貴方に及ばないとしても、貴方に私の身勝手を否定される謂れはありません！」

煽られている、ああ分かっているとも。必要以上に相手に乗る必要はない、それも分かっている。

けれど、自分の決意を弱い物だと見做されるのは、腹立たしい事の上ない。一期一振というのは、総じて誇り高い刀なのだ。

「どんなに力及ばずとも、声を上げなくては何も伝わりません。言葉の強い弱いを論ずる事程無意味な事もないでしょう。強さにも種類があるというのを、分からないとは言わせませんよ！」

「——ははは、本当に綺麗な言葉だな。吐き気がするくらいに」
声の温度が急速に下がる。ぞつとして思わず身を引いた。鶴丸は攻撃の手を緩めない。そしてその顔には——まっさらな表情に澱んだ光を宿した目があった。

「祈りは必ず届くと信じて疑わないものの言葉だ。自分だけが正しい側にいると疑わないものの言葉だ。——どれだけ目を逸らした所で、祈りは誰かの意思一つで跳ね除けられる物だし、正しさの下にはどぶに塗れた否定がある。君だけが綺麗でいられると思わない事だな、一期一振。どんなに正しさを信じて、それは誰かを毀しかねないというのを、君はどれだけ理解している？」

澱んだ目には、確かに絶望が乗っている。この言葉だけでは、何があったのかを推察するのは難しい。

それでも、ふつふつと煮えたぎる怒りを、嘆きを、言葉にしない事を選べなかった。それが例え、全く理にかなっていないとしても。

「貴方はどれだけ私を侮っているのですか？ 私が完璧な存在だと驕った事など、ただの一度だってありません！ 何度も間違えた、何度も誰かを傷つけた！ その度にままならない現実を見てきたので

す、貴方の言う事など百も承知！——その上で私は、伝える事を絶対に怠りたくないと言っているのです！」

ぎん、と高く音が響く。攻撃を何とか押し返しながら、一期は更に重ねて叫んだ。

「祈りは必ずしも届かない、ええそうでしょう。けれど祈りの否定は、自分を自分たらしめる事への否定に繋がります！ 祈る事はただ誰かに頼むというだけでなく、自分が何を目指しているのか、そして明日を信じてどのようなように動くかという克己にもなるのです！ 私は、それを否定などしたくありません！」

弾け飛ぶように、鶴丸と一期は間合いを取る。息を切らしている一期に反して、鶴丸の表情は変わらない。——喜怒哀楽の何もかもを削ぎ落した、そんな顔だ。

「……本当に、腹立たしいくらい理想に塗れた言葉だな。君を折つてそれを否定したのなら——君は、どんな顔をするんだろうな」

そう言つて、鶴丸はまた兵を展開する。六の銃兵はこちらに銃口を向け、発砲の時を迎えようとしていた。一期は刀装が一つ壊れるのを覚悟で歯を食いしばる。

発砲音がする。覚悟した刀装の破壊音はだが、待つていても来る気配がなかった。

え、と前を見ると、目の前には天井まで及びそうな程大きな塊。周囲にもいつの間にか、大小様々な塊が所々に置かれていた。

『……ふり……一期一振、聞こえるか!？』

耳に飛び込んできたのは、普通なら勝気を滲ませているはずの声色。思わずその名を呼んでしまいそうになるが、すぐさまその声に制される。

『繋がっているのならいい、返事はするな。俺は今、コンピューター制御の御室の大包平と共に戦闘支援を行っている。この制御は今、半分強を取り戻せたといった所か。そっちは大分苦戦しているらしいな、流石は隊長格を相手にしているだけはある』

真面目な声音に頷きたくなるが、ぐつとこらえる。通信を気取られる訳にはいかないのは理解出来るからだ。

だからという訳ではないが、と通信は続ける。

『そちらへの戦闘支援は重点的に行う。脅威は充分に伝わってきたからな。……地形変動も多くなると思う、覚悟しておけよ』

領けない代わりに、顔を引き締めて返事の代わりとする。それじゃあ、と言って通信は切れた。直後、ガキン、と硬い物が壊れる音と共に、鶴丸が動く気配がした。

「……機械制御は奪い返されたか。やれやれ、もう少し持つと思ったんだがなあ。まあでも、これもまた面白い」

鶴丸の声に、余裕が薄れている気配はない。むしろ言葉通り、面白がっている気配すらある。

一期は一つ大きく息を吸い、塊の陰から飛び出した。

19—6 「踏み躪るもの／決着1」

弓兵に弓を構えさせ、合図と共に矢を飛ばさせる。堀川に向けたその矢は、当然のようにヒトガタに遮られ、命中して欲しい相手に届く事はない。

けれど、それで構わなかった。

ヒトガタを出現させるのには、多少なりともクールタイムが必要らしい。ぽんぽんと出現させていると思いきや、何の事はない、自分達がヒトガタと戦っている間に時間を稼いでいる、ただそれだけだったのだ。

支援を受けられている今、その強みも覆せそうだ。——だって、ほら。

『例え心臓を貫くのすら無駄だとしても、まとめて潰してしまえばどうという事はないな！』

『大包平、声が大きい……』

通信と共に、床と天井から塊が勢いよくせり出してくる。そしてヒトガタを挟んだと思うと、ぎしぎしと音を立てて塊同士がぶつかり合った。「鍵」ごと潰されたヒトガタは床に落下し、長谷部と鯨尾によつて斬られ、さらさらと崩れて消滅していく。

それを横目に、青江は駆け出した。走りながら抜刀して、その刃は今度こそ相手に向けられた。

「——やあ、捕らえたよ。堀川」

ようやく届いた刃は、確かに堀川の刀身と噛み合っている。それでも堀川は、微笑みを崩す事すらしない。

そう、今はようやくスタートラインに立っただけ。本当の戦いの始まりは、ここなのだ。

「あはは、捕まっちゃった。やっぱり地形を味方につけられるところちは辛いなあ」

「そうは見えないんだけどね。遠くから見ていただけなのだから、当然なんだろうけど」

少し黒ずんだ腕を軋ませ、堀川は微笑み続ける。その様はあまりに

心が乗っているようには思えなくて——はつきり言ってしまったえば、とても不気味だった。

「確かにそうですね。でも、何もしていなかった訳じゃありませんよ。ほら、今だって」

「——全く、怪談は僕の領域だと思っていたんだけどね」

いつの間にか背後で、ヒトガタが大きく刃を振り上げている。青江は刀装を後方に展開し、一撃を受け止めさせる。動きが止まったその一瞬で、長谷部が迅速にヒトガタを屠った。

こっちは何とかするからお前は目の前に集中しろ、と言外に告げられる。分かっているさ、と笑って見せて青江はまた堀川に向き直った。

二度、三度、四度と刀身がぶつかっては離れてまたぶつかり合う。ここまで激しいとこぼれてしまうかもねえ、刃の事だよ——いつものような冗談を口にする雰囲気ではないのは理解していたので、脳内で呟くに留めた。

「まだ考えていられる余裕があるみたいですね」

「そう見えるかい？ 多少はゆとりがないと、戦場では命取りだからね」

「確かにそうですね。じゃあ、そのゆとりを奪って差し上げましょう」
クス、と堀川が笑みを零したと思うと、周囲からヒトガタが二体立ち上がる。斬り合いをしていた刀を一度引いて、どうするか算段を立て始める。ヒトガタの持つ刀は大太刀と薙刀。広範囲を攻撃出来るだけあって、放置しておくにはいけない相手だ。

それでも、一体は制御室からの支援で潰せるだろう。問題はあと一体。堀川とヒトガタ、どちらかを相手取っていたらどちらかに攻撃される。複数を相手にするのは出来る限り避けたいので、どれだけ早くヒトガタを斬れるかが肝になるのだが——

——流石に一振りでは骨が折れるか。

長谷部は周囲のヒトガタに対応していて、こちらへ向かう余裕はない。鯰尾も動きが鈍くなってきたており、支援に来てもらうのは難しそうだ。遠くで蛍丸と戦っている鶴丸達に頼むのは当然無理、ならばど

うするか。

——まだだ。焦りは禁物、しっかりと頃合いを見る。

懐にある物に意識を少し向け、首を振りたくなる衝動をこらえて目に力を入れる。

さあ、どちらを相手にしてやろうか。

二体の黒い異形を見据えて、青江が鋒を向けようとしたその瞬間。薙刀のヒトガタへ、何か突っ込んで来た。その黒い影は息を切らしてヒトガタの懐に深々と刀身を沈めている。ヒトガタは耳障りな悲鳴を上げて、黒い影に向けて大きく刃を振り下ろそうとした。

しかし、その一撃は届かなかった。振り下ろした先には何もなく、周囲に黒い影は見当たらない。その代わりにあったのが、白い塊。

ヒトガタがふっと降ってきた影に反応した時には、全てが遅かった。重力に任せて落ちる力のまま、「鍵」ごとヒトガタを真つ二つにしたその影は、消滅していくヒトガタを睨んだ後に、ふらりとその場に崩れ落ちる。

「鯰尾！」

もう一体の後処理を終えた青江は、うずくまる鯰尾へと駆け寄る。ぜえ、はあ、と荒い息を吐く鯰尾の体は、あちこちから血が滲んでいた。

「助かったよ、ありがとう。……大丈夫かい？」

「大丈夫……って言いたい所なんですけど、ちよつとまずいですね。穢れが広がっている感じがします」

腹を押さえながら、顔を歪める。その様子でかなりの痛苦を抱えていると分かるのに、それでも戦うのを止めようとしないう鯰尾に、青江は内心で賞賛を送った。

ぱちぱち、と乾いた音がする。ぱつと顔を上げると、少し離れた場所ではやはり微笑みに固めたままの堀川が手を叩いていた。

「いやあ、素晴らしい特攻でした。目的の為ならなりふり構わないその姿、嫌でも彼女を思い出しますねえ」

「……彼女？」

鯰尾が首をかしげながら痛みに喘ぐ。しかし青江は、それに意識を

向けられなかった。

嫌な予感がしたのだ。何か、堀川がとんでもない事を口にしような、そんな予感が。

「兄を取り戻す為に敵地に乗り込み、もう少しで目的を達成出来そうだった少女の事です。それは貴方達氷雨隊や雲霄隊によって阻止されましたが。僕正直、彼女の事はそんなに嫌いじゃなかったんです」

だってね、と堀川は話し続ける。——微笑を微塵も動かさないまま。

「あそこまで愚直に物事を信じる様は見てて楽しかったんですよ？

達成寸前まで事を進めたのは予想外でしたが、自分は正しい、自分だけはちゃんと報われる。そこまで自分の正当を信じられるのが本当におかしくて。他者を踏み躪って自分だけが願いを叶えられるなんて、そんな事あるはずなのに」

ふふ、と笑みを漏らす姿に、体中の体温が下がっていく。隣にいる鯨尾も、表情をなくしつつあった。

確かに、あの少女は言い逃れられないくらいに間違っている反逆者だった。誤解して蜂須賀をさらった事は絶対に許せないし、かばい立てしようというつもりもない。

けれど、けれど。

「……それを、踏み躪った君が言うのかい」

けれど。少女が純粋な願いのままに動いていたのは確かなのだ。例えばどんなに間違っている、歪んでいても。願い自体は、否定出来ない物のはずだった。

堀川の言葉は、彼女の願いを歪めて利用し、乱暴に使い捨てたと言っているような物だった。純粋な願いを暴走させ、世界へ攻撃させたと告げているとしか思えなかった。

辛うじて絞りだした青江の一言を継いで、鯨尾がふつつつと煮え滾った声で言葉を迸らせた。

「ふざけてる。……何なんだよ、よくそんなに人を貶められるな。願いを利用して、破壊させて、自分達は笑って見てるだけ？　そこまで

の悪意をよく抱けたな。胸糞悪い……吐きそうだ」

本当に気分が悪そうに吐き捨て、鯰尾は鋒を堀川に向ける。あはは、と堀川は軽やかに笑って、「鍵」をぶらぶらと振って見せた。

「そうですね。僕達は、世界に悪意を抱く刀。そんな刀が誰かの為に祈る聖者だと？ ちゃんちやおかしいですね。……誰かへの祈りを無意味にされて、僕達はここにいるのですから」

そうして、堀川は「鍵」をぼいと落とす。再び溢れ出たヒトガタを睨み付け、鯰尾はゆらりと立ち上がる。

「青江さん、周りの邪魔者は俺が一掃します。青江さんはあの堀川の相手を」

「いいのかい？ そうしてもらえると助かるけど……」

「はい。その代わり——」

ブン、と勢いよく刀が振られる。一気に二体のヒトガタが砂となり、爛々と戦意を目に宿した鯰尾が告げた。

「——あの堀川は絶対に一発ぶん殴ってください。俺の分まで、思いつきり頼みます」

視界で認識出来るようになった裂け目に、練度が上がっているのだと実感する。心なしか、判断するスピードも体の動きも速くなっている気がした。

しかし、まだ目の前の小狐丸が倒れるには至っていない。

「……まだ立ち上がってくる！」

「あいつ本当にしぶといな！ 不死身なんじゃないのか!?!」

「頑張つて、あと少しのはずだよ！」

江雪に守られつつ、ツクシが仙人団子を支給する。口の中に入れた甘味に疲れを少し癒されながら、愛染は柄を握り直した。

怒りで我を失った小狐丸は、攻撃の苛烈さこそ増したものの、動きの正確さは失われていった。攻撃が当たる回数も減り、逆にこちらの一撃が通りやすくなる。時空の裂け目を生み出される事こそ厄介だったが、それに巻き込まれる事も大きく減っていた。

問題なのは、小狐丸の体力と執念が底なしと見紛う程に膨大だった

事だろう。

「……ぐっ、母様、母様に会うまで、私は……！」

致命傷と思われる攻撃も何回か当たった。それでも、小狐丸は立ち上がってきた。口から血を吐き、体を支えるのすら覚束なくなっても、まだ倒れる気配がないのだ。

それでも、愛染達に諦める選択肢はなかった。自分達らしくある為に、大切なひと達の安寧の為に、決して諦める訳にはいかなかった。

「——私と母様を邪魔をするものなど、消え去ってしまえ！」

手を翳した先にあるものを察して、太鼓鐘が走り出す。思い切りぬかるむ地面を後ろ足で蹴り上げ、目を見開くツクシの体を押しつけた。

「タイガー！」

「タイガさん！」

倒れ込んだツクシと、腕をかばいつつ彼女を背後に下げる江雪の叫び声を尻目に、太鼓鐘は裂け目に消えた。

それに気を取られた隙に、斬撃が愛染に襲い掛かる。紙一重でかわして目の前に意識を戻せば、嫌な光を目に乗せる小狐丸がニタリと笑う。

「ふ、ふはは、邪魔者は、一人残らず屠るのみ！」

ギラギラ、と言っても過言ではないくらいに戦意を漲らせた小狐丸は、今までのダメージで落ちていた動きの速度を上げ、大きく刀を振るう。辛うじて避けたものの、その後に来た蹴りにまでは対応出来ず、もろに腹に食らって吹き飛ばされる。幸い傷を負うには至っていないが、思わず動きが止まってしまった間に距離を詰められた。

——しまった！

刀を振り上げようとしたが、その前に刃が下ろされる方が早いだろう。咄嗟に目をつぶって、衝撃に耐えようとした。

「——投石兵、行け！」

頭上から、高らかな声がした。直後石の雨が降り注ぎ、土砂が思い切り跳ねる。ばしやりと泥が跳ね、戦装束を汚していく。

泥が顔にかかったらしい小狐丸が、頭を振って視線を逸らした。

またとない好機だった。

「——当たれえええっ！」

腹に力を入れ愛染は叫び、横一文字に脚を斬った。呻き声を上げてバランスを崩す小狐丸の頭上へと、肩への斬撃と共に太鼓鐘が降ってくる。口から大量の血を吐いているのを視認した直後、迫りくる背後の気配に安堵の息を漏らしつつ、彼の為に左へと飛んだ。

「全てあなたが悪いという訳ではないのでしょうか。——ですが、これが戦いです！」

袈裟懸けに振り下ろされた江雪の刃は、的確に小狐丸の急所を狙い撃った。噴き出した血は、愛染の顔にまで跳ねてくる。

「ガッ、ああああ……っ！」

断末魔が響く。崩れ落ちた小狐丸の体はすでに全身傷だらけで、もう立ち上がる事はないだろうと判断出来る。

倒れ伏した小狐丸の横に降り立った太鼓鐘は、刃を構えつつ言葉を漏らす。

「……お前が、母親に会いたい気持ちは分かるよ。俺だって二度と家族に会えない事が、悲しくて仕方なかったんだから。でも、それで他の人を攻撃するのは違うだろう。お前を止めてくれる人がいたら、また変わってたのかもしれないけど」

その言葉に、小狐丸は虚ろな目のまま何も返さない。その代わりに、ぴくりと黒ずんだ腕が動く。

そして、その黒はじわじわと上腕、肩、上半身、と全身に伝搬していく。愛染達は目を瞠った。

「母様、ああ、この呪わしい世界をお捨てになられたのですね。ならばサギも、この世界を呪って捨ててやりましょう」

うわ言のようにそう呟く声が聞こえる。黒は全身を蝕んで、そして端から砂のように崩れていく。崩壊していく体を呆然と眺めているしか出来ない愛染は、唾然としながら思う。

——そんな代償を支払ってまで、やる事だったのか。

尋ねても、答えは返ってこないだろう。口を開く事すら出来ないまま、愛染達はその場を動けずその存在の消滅を見守った。

「……小狐丸は、許せない事をしました。決して相容れないものでもあったでしょう。ですが……それでも、彼だつて安息を求めただけであるのでしょうか。胸が痛むのは、彼もまた悲しみの存在だと知ってしまつたからなのでしょうね……」

ぼつりと落とされた江雪の一言に、愛染と太鼓鐘は何も返せない。重い沈黙が満ちたその場を切り裂いたのは、ツクシのはつきりとした、けれど少しだけ哀愁の混ざつた声だつた。

「……それでも、それでも私達は、生きる為にこうしなくちゃいけなかつたんだ。私達らしくある為に、黙っている訳にはいかなかつたんだ。だから、立ち止まつているだけじゃだめだ。辛いけど、後ろめたいけど、それでも進むしかないんだ、私達は」

愛染は拳を握る。そうだ、その通りだ。

引き返せない道を行くと決めた、もう戻れないのを翻さないと誓つた。痛いけれど、悲しいけれど、強くあるためにそう決めた。ならば、自分達に嘆いている暇はない。

「……本当に、短時間ですつかり成長しましたね……もう少し、ゆつくり大人になつてもよかつたのに」

「仕方ないよ、そうするしかなかつたんだから。じっくりと待つてたら、私達は世界に潰されてた」

「俺はもう大人だつたけどな！」

「説得力ないぞ、ソメ……愛染」

愛染が空元気に胸を張るのを、少し呆れたように太鼓鐘が見つめる。ツクシも眉を垂らしながら小さく笑んだ。

子供達を、どうして子供のままでいさせてくれなかつたのか。世界の残酷さを改めて目の当たりにした江雪の耳に、声が飛び込んできた。

『……おい、聞こえるか?! 返事が出来たらしてくれ!』

「……え? 長谷部?」

焦燥した声音で安否を尋ねられ、思わずぼかんとして江雪は声の主の名前を呼ぶ。愛染達も、長谷部? 長谷部さん? と驚いた様子で耳に手を当てていた。

『お前達は、滑園の奴等か?』

「そうだ、長谷部」

『……お前達はその道を選んだんだな。覚悟の上なら俺は何も言わない。だが、困った時はいつでも俺が力になるという事は覚えておいてくれ』

そう告げられた愛染達は、力強く頷いた。よし、という声の後に、長谷部から続けて呼びかけられる。

『反逆部隊の小狐丸の消滅を確認した。全員無事だな?』

「うん。……あ、でも、江雪さんが腕を斬られたの」

『小狐丸にだな? その江雪の傷を確認したいから、コンピューター制御室まで来て欲しい。お前達に頼みたい事もあるしな』

「分かった。……頼みたい事?」

ああ、と長谷部が肯定する。

『お前達は機械に強かったな? コンピューター制御奪還の手伝いをして欲しいんだ。正直、俺ともう一振りだけでは骨が折れてな。頼まれてくれるか?』

「勿論。そっちへの行き方は?」

『俺が指示する。道中くれぐれも気を付けて』

「分かってるって!」

愛染が力強く返事をして、建物内へと走り出す。その後を追って、太鼓鐘も駆け出した。

「江雪さんも行こう」

「ええ。……長谷部にはお礼をしなくてはなりませんね」

「どうしたの?」

いえ、と首を振って江雪も足を上げる。

——長谷部がコンピューター制御室に愛染達を呼んだのは、ただ力を借りるだけではないと分かっている。

だって、もし制御室が戦場になっていたのなら、決して機械を操作している余裕はなかっただろうから。

19—7 「神に抗う／決着2／荒業」

ぎいん、と鋼の鈍い音が大きく響き渡る。その刃の行く先は、受付カウンターの。そこには人型のものは何もなく、三日月は微かに眉をひそめた。

殺気を感じて、即座に刀身を翳す。予想通り降ってきた人影が、三日月の刀身と噛み合っただけで悲鳴を上げていた。

「本当に、さつさと消えて欲しい物だけどねえ」

「俺はそなたが、一刻でも早く降参して欲しいと思っただけがな」

はつと鼻で笑い、狐面の女は身を離す。持っていた打刀を消して新たな刀を出現させる。現れたのは短刀だ。しかし、だからといって油断は絶対に出来ない。

「……修行済みの刀まで所持しているか……全く、見逃す理由がますます少なくなっていくな」

「あら、貴方こそいいの？ 神ごときが凶に乗って申し訳ありません、と私に頭を垂れて許しを請わなくても」

「はっはっは、面白い冗談だな」

そうしてまた、激しい剣戟が始まる。

舞うように刀を振るう三日月に対して、狐面は粗く削られたまさに戦い続けた者のそれだ。美しさと効率、対極の戦い方が今火花を散らしあっている。

ふわりと切り裂く動きをする三日月の鋒を避けつつ、狐面は積極的
に懐を狙い続ける。その動きも、三日月ではなかったら捉えられない
だろうと見られる速さだ。

華麗としか言いようがない刀の振るい方、動き方、避け方を、狐面
は体全体を使って泥臭くないなしていく。

「……ふん」

「本当に、神というのはしぶとくて腹立たしいわね」

目に見えて苛立った様子を見せる狐面に、三日月も鼻を鳴らす。か
なり長い間戦っているのに、決着のつく気配がないのだ。双方じれつ
たく思っているのは明白だった。

だから、三日月は少し切り込む事にした。

「女よ、そなたに一つ聞きたい事がある」

「あら、何かしら？ 私の配下に加わる方法？」

嘲笑を隠さずに狐面がそう返す。話を聞くつもりはあるようだ。

「いや何、そなたは何故そんなにも強さに執着するのか、と思つてな」

ぴく、と狐面が肩を跳ねさせる。鋒を彼女に向けながら、三日月は更に言葉を重ねた。

「何故そこまで強さに——神を上回る強さに固執する？ 俺の考察を述べてやろうか。そなたは一度、神に蹂躪されているのではないのか？ 神に様々な物を——例えば自尊心やらを、踏み躪られていたのではないのか？ 越えられない存在を、上に立てない事に絶望を覚え、神を上回る事で、その自尊心を回復させようとしているのではないか？」

「……」

狐面の纏う空気が冷たく凍えていく。それに劣らないくらい温度のない視線を、三日月は彼女に突き刺していた。

「皮肉を叩くのもその一環だろう。それが自尊心の保護を目的としているのなら——非常に人間らしい、と言わざるを得ないな。己を守る為に自らを大きく見せ、敵を遠ざけんとする……なるほど、弱い者の戦略だ。元から強いのであれば考えもしない行動だ。女よ、そなたはまだ引き返せる。畜生道に堕ちる前に、人間らしく生きる事を勧めるぞ」

「——馬鹿言うんじゃないわよ、身の程知らず。本当に殺されたいよ
うね」

氷点下まで冷え切った声が、強烈な殺意と共にぶつけられる。狐面は手の中の短刀を消して、太刀を出現させた。三日月は、見覚えのあり過ぎるそれに目を瞠る。

『『三日月宗近』……本当に、そなたを逃がす訳にはいかなかったな』
「やれるものならやってみなさい。——自分自身に屠られる、その絶望的な感覚を堪能させてあげる」

殺意を露骨に声に乗せ、狐面は刀を握って飛び上がる。三日月も強

く見据えて刀を構えた。

腹が痛い、熱い。口の中に鉄の味が広がっている。目の前がちかちかど明滅する。それでも秋田は柄を手放さなかった。我ながら、随分な執念だと思う。

「秋田君!!」

物吉が悲鳴と共にこちらへと突っ込んでくる。しかしあと一歩、という所で物吉は大きく後方へ飛びのき、直後に床が小さく爆ぜる。

「さて、この子をどうしてあげましょうか。このまま死ぬのを待つ？ それとも腹を大きく裂く？ ふふふ、楽しいですねえ。こうして悔し気に殺意を募らせている貴方を見るのも、また愉しい」

「……趣味が悪い……!」

忌々し気に吐き捨てる物吉。しかし、うかつに近付くのもままならない。そうすれば爆弾で遮られたり、秋田を更に害される可能性があるからだ。

秋田はそれでも己の鋒を抜かない。ここで宗三を逃がせば、もうチャンスは巡ってこないと感じたから。

「物吉、さん。僕の事は、気にしないでいい、です。だから、物吉さんは、少しでも攻撃の機会を——」

「何言っているんですか?! 友達になれそうな相手を見殺しに出来る訳ないでしょう!」

「それでも、です」

物吉の悲痛な叫びに、秋田は血を吐きながら言葉を重ねた。

「ここでこの宗三さんを取り逃がせば、更に被害が広がります。それが分からない物吉さんじゃないでしょう。僕なんかの事よりも、多くの人を。……お願いします」

「……っ!」

言葉を詰まらせて立ち尽くしてしまふ物吉に、秋田は口の端を持ち上げて見せた。目を震わせ、歯を食いしばって物吉は再び柄を握り直す。

はあ、と大きく宗三が息を吐いた。

「……何とか、いい所だというのに本当に冷めますねえ。つまらない、しょうもない、そんな誇りの為に踊らされるのも不愉快です。……終わりにしましょうか」

直後、腹に沈められていた刀身が動く気配がした。がは、と血を吐くと、薄れかける意識の中で物吉がまた叫んでいるのが辛うじて分かった。

けれど、秋田だつてただで倒れる訳にはいかない。宗三の腹を扶るように、秋田も刀を押し込んだ。

宗三は何が楽しいのか、とても高らかに笑っている。いよいよ意識を保つのが難しくなってきた、ここまでか、と秋田は覚悟を固めようとした。

その時だった。——聞こえてきた声と共に、秋田が彼の存在を思い出したのは。

『——武器庫床面の制御モードを変更、モード名《アースクウエイク》!!』

意識を呼び戻す程の地鳴りがした。と思うと、床面が大きくひび割れて隆起し、秋田は宙に投げ出された。

何が起こったのか、分からなかった。だが呆然としている様子の宗三を視認し、秋田の体は動いていた。

「兵の皆さん、力を！」

秋田の命令に心得た、と言わんばかりに兵は動き出す。秋田の足元に集まった兵を踏み抜いて、宗三へと鋒を向ける。

「——お命貰います!!」

「——たあっ!!」

同時に響いた二つの喊声は、宗三の胴体を切り裂いた事を示していた。物吉も攻撃に加わった為に、宗三の肉体は力を失い落下していった。

秋田も力が入らないままに落ちていく。しかしふわりと小さなもの達に包まれる感覚がして、落下速度が遅くなった。

静かに動きが止まると、秋田の顔を小さな兵が覗き込んでいた。

「秋田君、意識はありますか!?!」

視界に現れた物吉の顔は、少し煤けつつも青ざめていた。僅かに残った力を振り絞って頷くと、物吉の肩から力が抜ける。

「よかった……でも、もうあんな事は言わないでください、肝が冷えましたよ本当に……」

「……でも、僕が頑張つて被害を抑えられるなら……」

「貴方が死ぬ事だつて大きな被害ですよ！ 本当にもうそんな無茶は二度と——」

『おい、長谷部？ 大丈夫か？』

通信の向こうで、大きな声がした。はつと気が付いて耳に手を当てると、小さく嗚咽が聞こえてくる。

『……ごめん、なさい、ごめんなさい、違う、秋田を死なせない為だった、でも俺は、宗三を、死なせた、違う、被害を広げない為だった、それでも、俺はまた、誰かを——』

息を？ んで、宗三のいる方を思わず見る。宗三は床に投げ出されていて、ぴくりとも動く気配がない。そしてよく見ると——彼の顔が黒ずんで、砂のように崩れていくのが分かった。

「……はは、あははは」

それでも宗三は嗤う、笑う。黒が全身に及び始め、体が崩れ始めても、宗三は笑い続けていた。

「ああ、これが、死の感覚。なんて快樂、なんて心地良さでしょう。僕が戦い続けていたのは、もしかしたら、これを味わう為だったのかな。あははは、本当に、最期の感覚がこれなら、生きていた甲斐もあったというものです」

はは、あはは、力ない、しかし快さに満ちた笑い声は止まらない。その間にも、宗三の体は空調にさらわれていく。

分からない。秋田には分からなかった。どうして死の間際に、そんなに楽しそうにしていられるのか。どうして、死なんて恐ろしい物に快樂を見出せるのか。

分からなかった。勝者となって、今も此岸に立ち続けられている、生者である秋田には、これっぽっちも理解が及ばなかった。

「何故、泣くのです？ ——僕は今、満たされているというのに」

え、と思っていると、頬に伝わる冷たく濡れた物が乾く感覚。手が動かせないので、雫は流れるままになっていく。

どうして、僕は泣いているんだろう。秋田は全く分からない。混乱する中で、宗三は声を掠れさせた。

「僕の望みは果たされた。貴方達の望みも果たされた。何を嘆く必要があるのです？ 誰もが望みを叶えた、ハッピーエンドじゃありませんか。やっぱり、僕には分かりませんねえ。……生にしがみつくもの事は」

「どうして……どうして、死ぬのに笑えるんですか。そうやって死ぬのは怖くて、痛くて、苦しいはずなのに……」

声が震える。秋田の問いに、小さく笑って宗三は答えた。

「こんな世界に、大それた望みを抱く方が馬鹿馬鹿しいんですよ。ならば、自分の快い方に動いた方が楽しいでしょう？ 僕は僕なりに人生を謳歌しました、だから同情なら不要ですよ」

ははは、あははは。笑い声は、その一つで最後となった。崩れ切った体は、その場に黒い砂状の物を残して消えた。

秋田は呆然としたままそれを見ていた。物吉が彼の肩を支えて、ゆっくりと立ち上がった。

「……行きましょう、秋田君。複雑ですけど、まだ戦いは終わっていません」

「……はい」

「長谷部さんも、大包平さんもうございまして。地形変更がなければ、秋田君は死んでいたでしょうから」

『なんて事はない。秋田を機械制御御室に連れて来い、資材が少しあるから簡易的な手入れを行ってやる』

「……ありがとうございます。長谷部さんは……」

『……精神が不安定になっているな。しばらく作業は無理そうだ。でも安心しろ、この大包平がいるからには二振り分の作業もこなして――』

『……だい、じょうぶ。少し昔を思い出したただけだ。すぐに作業を進める』

え、と大包平が声を上げる。だがすぐに精神を切り替えると、力強く長谷部に告げた。

『無理だけはするなよ。一つの失敗が戦況に繋がるんだ、万全じゃない状態でやらせる訳にはいかない』

『……覚悟が足りなかったただけだ。もう大丈夫、やれる』

『そうか、分かった。頼りにしているからな』

うん、と頷く声がある。その声は少しだけ無理をしているようだと感じ取れる。

宗三の事は複雑だが、今は自分の治癒を優先しなければならぬ。秋田は長谷部の苦しそうな表情を思い浮かべて、そうやって恩人の安息の為に動くとは決断した。

壁が、床が、蛍丸の一撃によって大きく砕かれていく。割れた瓦礫と斬撃をかくぐぐって、鶴丸は蛍丸に再び迫る。

忌々しそうに、蛍丸は舌打ちする。迫りくる鶴丸をかわしてまた刀を振り回し、一歩退けたのを見てある方向へと駆け出す。

「おっと、行かせないぜ！」

瓦礫を拾って蛍丸の行先へと投げつけ、速度を緩めさせて追いついた鶴丸は、次郎達の所へ向かうその足を止めさせた。本当に腹立たしそうに、蛍丸は鶴丸を睨み付ける。

「ああもう、本当にうざい！ いい加減無様に死んで欲しいんだけど！」

「御免被る！ まだ折れたいとも思わないんでな！」

振るわれる刃を軽々と跳ね上がって避け、重力に任せて刀身を振り下ろす。刀が噛み合う音がして、ギリギリと鏝迫り合いが行われた。

蛍丸は額に青筋を立てて、鶴丸に叫んだ。

「お前みたいな奴が一番嫌いなんだよ！ 綺麗事ばかり口にして、それが正しいって妄信してて！ 反吐が出る、ムカつく、まじで死ぬ、みっともない死体にならなきゃこっちの気が済まない！」

「ははっ！ ようやく底が出始めたか！」

力強く吹き飛ばされながらも、鶴丸は笑って着地する。何がおかし

い、と言わんばかりに刀を振り上げる蛍丸に、鶴丸は笑みを消し告げた。

「でもなあ、19478番。——腹立たしいのはこちらも同じなのさ」
また、床面が割れる。砕けた瓦礫の向こうで、鶴丸は低く腰を据えた。

「君のような存在はどうして生まれた？ どうして君のような存在が、明るく無邪気に笑っていられる世界じゃない？ 俺はなあ、それが一番気に食わない」

世界の裏側で起こった悲劇を知った。それは思いを巡らせていた鶴丸の前に血塗られた惨劇と共に姿を現し、そして鶴丸達を嘲笑った。あの時は腹が立った、頭に血が上って我を失いかけたが、今はもうそうはならない。

「君を知った時、俺はとてもやるせなかつた。友達を殺され、大人達にいいようにされる君という光景が、嘘であつて欲しいと願ひさえした。でもなあ、後ろを向いて現実を否定するだけじゃ、何も解決なんざしないんだ」

だって、それも悲劇の表出であるはずなのだ。無様に喚いてそれがなかつた事になるのなら、世の中から悲劇という悲劇は消え失せている。

蛍丸だつて、本来ならば救わなければならぬ存在なのだ。けれど、彼もまた己の意思で世界に逆らうと決めたのだろう。

「君は、理不尽を一身に背負わされた存在だと思つてゐる。そして君はそれに抗おうとして、この世界に間違つたやり方で牙を剥いた。そうするしかなかつたとしても、俺は未来を絶つやり方を認められない。俺は、どんな手段を使つても未来を切り拓く道を選ぶ」

結局、鶴丸は未来を照らす刀でありたいのだ。この世界を、大切な存在の明るい未来しか願えない刀であるのだ。それが、氷雨の鶴丸という刀剣勇士の根源。

——世界を恨んでその破滅を願つた、蛍丸とはどうしても相容れなくて——身勝手に、その理不尽をなくしたいと思つてしまったのだ。けれど、人としての経験が浅い鶴丸には、その方法が一つだけしか

思い浮かばなかった。本当に、それが口惜しい。

「君という理不尽を、きつと俺は許容出来ないんだろう。もう後戻り出来ない所まで行ってしまった君を殺して——俺は、負の連鎖を断ち切る」

刀を構え、鶴丸はそう宣言する。蛍丸もはつと嘲笑い、刀を正面に据えた。

「やれるもんならやってみろ、偽善者」

「ああ、やらせてもらう」

そう言った直後、鶴丸は床に刀を突き刺した。

訝しげにそれを見ていた蛍丸は——しばらくして、頭を押さえて唸りだした。

「……お前……っ！ 何やった!?!」

鋭い眼光を飛ばす蛍丸に、大きく息を吐きながら鶴丸は言い放つ。「言っただろう。——どんな手段を使っても、と」

——あちらも荒業を使うなら、こちらを使うまでだ。

19—8 「決着3／反転」

「行きますー！」

そう言つて駆け出した平野の前に都合よく、大きな塊が現れる。飛び乗つて塊を蹴り、一足飛びに乱に向けて刀身を振るつた。

「くっ……！」

動きが格段と良くなった平野の相手で手一杯になっている乱は、自身にも及ぶはずの地の利を活かせていない。

それも当然だ。

「カカカカカ！ やはり我等は広い方が存分に振るえて戦いやすい！」

「そうだな。後は、己の全てを出し尽くすのみだ」

——今まで窮屈そうに戦っていた蜻蛉切と山伏が、支援によつて全力を出せているのだ。一対七の戦力差では、さぞやりにくい事だろう。

室内で目まぐるしく変わる攻防。少しずつ動きが鈍くなるが、それでも乱は膝をつかない。

パキン、と音を立てて刀装の碎ける音がする。はっとした表情の乱に構わず、加州と鶯丸は彼に斬りかかった。

「いったあ……！」

「攻撃が通り始めた、真剣必殺には警戒して！」

「心得ている」

ようやく乱にダメージを与えられたが、加州は警戒を怠らない。伊達に政府直属の部隊長を任されてはいないのだ。このくらいの事は当然だった。

一気に体力を削るか、そう判断して鶯丸は更に前へと躍り出る。高く鳴る鋼の音は何度目だろう。せめぎ合い軋む刃に腕を痛めながら、鶯丸は刀を押し出した。

「まだ、……まで力が残っているか」

「……っ！」

乱はもう、口を開く余裕もなくなつたらしい。ただこちらを睨み、

刀を振るうばかりだ。少し鈍くなったとはいえ、彼の機動が凄まじいのは変わりない。油断は禁物だ。

けれど、それでも天秤が傾いているのは事実で――

「歌仙、多分あと少しだ。援護を頼む」

「ああ。決して気を緩めないように」

領いた薬研は塊の上に乗し、天井から現れた取っ手を掴んでぶら下がって、銃兵へと発砲指示を出す。降り注いだ弾丸に乱は気を取られ、周囲に気を配る事すら難しくなっている。

当然、この場にいる刀達はそれを見逃さない。

「ぬおおおっ！」

「――せめて雅に散れ！」

二振りの攻撃によって、乱の動きが止まった。胴と腕に入れられた傷は、その動きを大きく低下させる。

そしてとどめとして、短刀二振りの斬撃が乱の脚に入る。結果として彼は、完全に膝をつく事となった。

だが、それでもその目から戦意は消えていない。もう立つ力すら入れられない脚を酷使しようとする乱に、鶯丸は曇った表情で宣告した。

「もう勝敗は決しているだろう。俺としても、貴重な修行済みを折りたくはない。……投降しろ。本当にこの後も続けるなら、お前を殺す事になってしまう」

鶯丸は殺しを疎む刀だ。必要ないなら、決して殺す事はしたくない。だからその一言も乱の為でなく、自分の為だった。

しかし、乱にその言葉は歪んで響いたらしい。

「……どこまでも舐めてくれるね。ボクが、政府の言いなりになるとでも？ 例え善意であっても、それは腹立たしくしか聞こえないんだよ。……宗三さんの『もしも』がこんな所で役に立つとはね」

カチカチカチ、どこからか音がする。思わず首をかしげると、乱が煮え立った声色で叫んだ。

「政府に下るくらいなら、舌を噛み切つて死んでやる。でもただで死んでなんかやらない――お前達も道連れだ!!」

カチ、と音が止まり、激しい閃光が乱から迸る。思わず兵を前に寄せ、腕で目を覆っていた。

激しい爆風と衝撃、爆音がその場に溢れた。兵で防御しても、少し机や椅子の断片が腕を掠めていく。覆っても視界に入り込む閃光に目を痛めて、強く瞼を閉ざしてしまう。

しばらく経って爆発の勢いが落ち着いてから、ようやく鶯丸は目を開けられた。目の前には凄惨な事となった体が落ちているのだろう、と覚悟を決めて前を見ると――

「……あ、れ？」

「乱が、いない？」

そこには、何もなかった。乱の肉体どころか、戦装束のひとかけすら落ちていなかったのだ。

七振りは啞然とする。どう考えても異常事態だ。今の一瞬で空間移動でもしたのか。

薬研が通信先に向かって呼びかける。

「長谷部、どうなっているか分かるか？」

『……乱と思われる情報体反応はそこから消えている。……というか、これ、何て言えばいいのか……うーん』

「長谷部？ どうしたんだい？」

うーんうーんと唸る長谷部に歌仙が心配そうに尋ねる。唸り声を上げ続けている長谷部から、大包平に通信が切り替わった。

『長谷部に代わって俺が説明する。詳細は追って話すが、乱藤四郎の脅威はなくなったと言っている』

「今説明する訳にはいかないの、大包平？」

『……説明するのが難しい上に、確証が持っていない。正確な情報を得次第、お前達には最優先で伝える』

「……何か嫌な予感がするのですが、鶯丸様」

「奇遇だな、俺もだ」

どう考えても面倒事になる気配しかしない。思わずため息を吐いていると、頭を搔いていた加州が大包平に確認する。

「大包平、援護に向かった方がいい所はある？ そっちには行かなく

「てもいい?」

『まだ本館二階と最上階で戦闘が継続中だ、そちらを頼む。こちらは気にしなくていい、既に援護を他の部隊に頼んでいるから——』

『澄清隊江雪左文字及び滑園、到着しました!』

『皆、無事だったんだね!』

『ツクシと江雪! と……ソメゴローとタイガ? え、何でそんな恰好……』

『あー、その話は後でいいか? えーと、オオカネヒラだっけ? 俺達何すればいいの?』

『俺達が来たからにはもう大丈夫だからな! 必殺・アルティメットブレイブパンチで全ての敵を蹴散らして——』

『まだそれ言ってるの、ソメゴロー……』

『ええいお前達少し静かにしろ! すまん後でまた通信を入れる、本館の援護は頼んだぞ』

賑やかな声とそれを一喝する大包平の要請を最後に、通信は切れた。

とりあえずは、と蜻蛉切が口火を切る。

「本館へ向かおう。二階の戦闘を終わらせた後に、最上階へ向かうでいいな、加州殿?」

「うん、それで行こう。歌仙、葉研。二振りはどうする?」

「僕達の家族がいるかもしれないからね、一緒に行くよ」
「異議なしだな」

春光隊の二振りの同行が決まり、加州は全員を見渡して告げた。

「よし、これから本館に向かう! 道中に敵がいなくても分からない、油断は決してするなよ!」

「了解!」

六振りは頷く。鶯丸も了解を返しながら、まだ見ぬ敵へと想いを馳せた。

また一つ、借りていた刀装の碎ける感覚がする。これで残りは一つだけになってしまった。それに反して、相手の刀装はまだ壊れるに

至っていない。銃兵がようやくあと少しで、といった所だ。

「……大きな練度差が、あるという事なのだろうな……」

無意識に滲む悔しさと痛みが、一期の胸を苛む。現れた塊の後ろに身を隠し、悠然と佇む鶴丸を窺う。

まだ、鶴丸には傷一つ付けられていない。やはり盾兵を二つ操っている彼は非常に守りが堅く、経験の差もあつてすぐに攻撃を防がれてしまう。長谷部達の援護があつても、それを何て事もないようにいなされた。

自分の実力不足がもどかしい。それでも、焦りが致命傷になると分かっているので、一期は慎重になるしかない。

「どうした？ 隠れているだけじゃ俺は討てないぜ！ 被食動物のようにちよこまかと逃げ回っていないで、堂々と攻撃してみたらどうだい？ 今のままじゃ俺は退屈で退屈で——ここにいる奴等を全員殺してしまえそうだ」

また、鶴丸がこちらへと煽りを入れてくる。深呼吸を一つして、苛立つ気持ちを抑え込む。

確かに今の自分は、あまり勇猛な戦い方をしていない事だろう。だが、下手な煽りでやすやすと罠を踏む馬鹿ではない。戦闘力に大きな差があるなら尚更だ。

歯を食いしばって、反応しないようにするのは骨だった。それを嘲笑うが如く、鶴丸の言葉による攻撃は止まらない。

「もしかして仲間が、味方が来てくれるとでも思っているのかい？ もしそうだとしたら、なんて生温い事だろうな！ 愛情は裏切られる物だし、信頼は壊される物だ。どう足掻いたって、君の純粋は傷物にされる。そうなるようにこの世界は出来ているのさ！ その壊される前提の物にしがみついている君は、何と無様な事だろうな！」

高笑う鶴丸は、明確に一期を傷つけ、激昂させようとしていると分かる。その意図が明白過ぎて、呆気に取られるくらいだった。

その言葉の刃は——不思議なまでに、一期に届かなかつた。現実とは逆だな、と笑ってしまう余裕すらある。

「……仲間の、味方の救援をただただ待つ？ それは信頼ではなく、依

存でしょう。愛情を持つているからこそ、私は大切なもの達に依存したくはありません」

何故だろう。何故ここまで、傷つかずにいられたのだろう。

大きな価値観の差から？ 多分それはある。

鶴丸の言葉に現実味を見出していないから？ そんな馬鹿な考えを持ち続けていたのなら、自分は周囲から見限られている。

だからきつと、理由は多分――

「貴方にとって、私の感情は生温く見えるのでしよう。ですが私にとって貴方の感情は、何もかもに裏切られて諦めたものの言葉にしか聞こえません。貴方の言葉は現実の一端であるのでしよう。私も傷付いた経験がある以上、それを否定するつもりはない」

――彼の言葉に、隠された傷を見つけたからだ。きつと世界に裏切られたのだと、そう察する事が出来たからだ。きつと世界に裏切

「ですが、私の考えもまた嘘ではないはずなのです。私も世界に幾度となく傷付けられ、心を試されました。大きな苦難を経ても、私の考えは変わらない。――私は私の心を、大切なひと達の強さを信じます。貴方が世界の悪性を信じているように、私は世界の善性を信じている。無様？ 愚か？ 何とでも言えばいい。私が見つけた光は、決して揺るがないのだから」

そう告げて、一期は塊の影から身を現す。この戦いで隠れる事は、もうないだろうという予感がある。

この鶴丸と、正面から向かい合おう。世界の闇を見つめているものと、真つ向から戦わなければならぬ。

だってそうしなくては、自分の見つけた正解に胸を張れない。大切なひと達に笑顔でいられなくなる。

実際一期は、鶴丸の言う通りに馬鹿なのだろう。世界の裏を知っても、光はあると疑わない愚か者なのだろう。

それでも。――それが、蒼穹の一期一振という刀の中核だ。

目を見開いた鶴丸はしばらく固まっていたが、次第に小さく笑い声を漏らし始める。それを訝しく思っていると、鶴丸は大きな声で笑った。

「……はは、はははは。ああ、何という事だ。何て事態だ。——君が、ここまで強大になって立ちほだかるとは！」

鶴丸は笑う。酷く楽しそうに——嬉しそうに。何があったのか、心境の変化があった訳ではあるまい。

その理由は分からないが——ここが、この戦いの折り返し地点なのだ、一期は理解していた。

「ならば俺も、全力で君を打ち倒そう。その光が遍くものを照らせている訳ではないと、この世界に示して見せよう！」

真つ直ぐに、鶴丸がこちらへと向かつてくる。一期は直後に盛り上がった床の勢いに身を任せ、大きく跳ね上がる。

上方から刃を振るい、その斬撃を鶴丸に向ける。ニタリと口元を歪めた鶴丸は、だがしかし——その表情を強張らせる事となった。

「……は？」

鶴丸の肩から、血が流れている。おかしい。異常事態だ。

だって鶴丸の刀装はまだ一つも壊れていなくて、守りは万全だったはずなのだ。

そこまで思考を巡らせて、気付いた。

——刀装がない。

「——ここからは、出し惜しみなしで参ります!!」

一期はそう宣言する。

攻撃が、再び鶴丸の体に降り注いだ。

19—9 「外では／決着4／決着5」

軽く舗装されたぬかるむ道を、黒いヒトガタを斬りながら駆け抜ける。わらわらと湧いてくるヒトガタの合間を縫って進めば、蒼穹の審神者はまた山姥切に指示を出す。

「まんば、右側五メートル先にバケモン二体だ！」

「ああくそ、本当に無限に湧いて出るな！」

既に何体も斬っているのだ、コツは掴み始めている。それでも倒すのに手間がかかるヒトガタは、山姥切達の進みを遅くさせていた。

一閃して二体のヒトガタを屠り、また走り出す。ふたりの向かう先は、政府中枢だ。

「つたく、先は長いなあー！」

「本当に手が足りないな、猫の手も借りたいというのはこの事か……！」

じれったさに足が急ぎ立てられるのは、ふたり共同じだ。鶴丸の裏切りを、一期と秋田の安否を確かめたい、足を動かしているのはそんな理由だ。

しかしそんな願いを、この悪意に満ちたヒトガタが聞き入れてくれるとは到底思えない。それを示すように、審神者の背後にヒトガタが立っていた。

「主ー！」

それに一足早く気付いた山姥切が叫ぶ。ぱつと振り返った審神者に振り下ろされた刃は、呆気なく彼を引き裂くと思われた。

「——そっつー！」

だがしかし、その声と共にヒトガタの動きが止まり、さらさらと体を崩れさせていく。消えた黒い影の向こうに現れた人影達に山姥切は驚き、蒼穹の審神者はうげつと嫌そうな声を漏らした。

「ふん、流石は不逞の輩だな。こんな攻撃一つ避けられないとは」

「主、こんな時に喧嘩を売らないでくれ！ 蒼穹殿、山姥切、大丈夫かい？」

嫌味を飛ばす氷雨の審神者を蜂須賀が宥める。苛立ちのままに開

かれようとする蒼穹の審神者の口を塞ぎ、山姥切は端的に礼を述べる。

「助かった」

「どうって事はないさ。君達も中枢に向かう所かい？」

「そうだ。本丸の奴等が巻き込まれた可能性があつてな……安否を確かめに行く所だった」

「むが、むごごーっ！」

「話が進まないから口はまだ塞がせてもらおうぞ」

「ふん、無様だな。先程もみつともなく突つ立っているだけだったし、本当に貴様は無力——」

「喧嘩を売りに来た訳じゃないだろう、主！……すまない、君達に会つたら提案したい事があつただけけど」

蜂須賀も氷雨の審神者の口を塞ぎ、無礼を詫びながら切り出した。それに首を傾げ、山姥切は問い返す。

「何をだ？ あんたの主が俺達に何かを頼るとは思えないんだが。まさか協力してここを進もうとでも——」

「そのまさかだよ、山姥切」

はつきりと告げられた言葉に一拍おいてから、山姥切は大きく目を睜つた。本当に天変地異が起こるのでは、という現在への恐怖に唇を震わせながらも詳細を尋ねる。

「……どういう事だ。言っておくが主には特別な力などないぞ」

「いや、うちを上回る戦果を出した事もあるくらいだ、卑下はしなくていい。……それは置いておいて、君達に頼みたいのは着いた後の交渉だ」

「交渉？」

ああ、と襲い来るヒトガタを斬りながら蜂須賀は頷く。

「うちの本丸から、中枢を襲撃している裏切り者が出た。君達の本丸からも、裏切り者が出たと聞いているよ。彼等は政府から異動してきたんだろう？ ……流石の主も、腹に据えかねているんだ。政府に仇をなす可能性のあつた刀を、何も言わずにこちらへと渡した、とね」

「……」

「恐らく裏切り者達は、政府の手落ちによってそうするに至った。自分の役目はあくまで政府の役に立つ事であって、裏切り者を同胞とする事ではないと、主は言った。政府の手落ちを庇い立てすると思われていたのも不本意だ、ともね」

なるほど、と腑に落ちた。蜂須賀の言っている内容が事実なら、流石に政府は仕事を押しつけ過ぎだし、こちらを軽んじ過ぎだ。

政府の手落ちで傷付いた刀のケアをしてやる義理はないし、そんな危険な存在を本丸に置いて何か起こっても構わないとされているような物だ。

政府から仕事を任されているとはいえ、自分達の敬愛する主は審神者だ。政府の言いなりになる必要性もつもりも、どこにもない。

「君達も被害者だ。だからこそ協力して、政府の手落ちを認めさせられないか、と思っっているんだ。……主が一方的に責められるのは、俺も耐え難い。けれどもうちだけでは握り潰されそうな予感しかなくてね。蒼穹の審神者殿は、その、とても苛烈だろうか？ だから一緒に、自分達の非を軽く出来ないか、と思うんだけど」

口を解放された氷雨の審神者は、何も語らず黙っている。流石に交渉するのに余計な口出しをしない方がいいと思っっているのだろう。

山姥切は考える。下手したら、蒼穹隊が潰されかねない事態なのは分かった。今口を塞がれつつ暴れている蒼穹の審神者も、氷雨の審神者相手だけではない怒りを抱いているはずだ。だが、特に何の後ろ盾もない我が隊が訴え出た所で、相手にされずに終わるだろう。

ならば、取れる選択は一つだった。

「分かった。その提案、受け入れよう」

「もぐ、むががー！」

「主、文句が言いたいのは分かるが、事態はきつと想定以上に悪いぞ！ 例え気に食わなくても、氷雨隊と協力しなければ本丸が潰されかねん！」

「むぐっ……」

山姥切の懸念に蒼穹の審神者が喚くのを止める。嫌な気持ちはあるが、受け入れなければ危険だと理解したのだろう。

「はあ、と息を吐くと、蜂須賀も困ったように微笑んだ。

「今結論を急がなくてもいい。突飛な提案をしたこちらに非があるんだからね。取り敢えずは中枢に急ごう。いいかい？」

「ああ。主、歩けるな？」

「……げっほげっほ、くっつまんばお前、長時間口塞ぎやがって……」
「話が中断しそうだったからな。あんたすぐさま氷雨の審神者に喧嘩を売るだろう」

「はっ、貴様の汚い声を聞かんで済んだ事を山姥切に感謝せねばなるまいな」

「主、また口を塞がれたいのか！」

蜂須賀が氷雨の審神者に一喝する。ふん、と鼻を鳴らし、氷雨の審神者は口を閉ざした。頭が痛そうに額を押える蜂須賀に、心の底から山姥切は同情する。

ふと、空気が大きく揺らぐのを感じた。周囲を見ると、周囲にいたヒトガタの動きが止まっている。

「……何があった？」

「何かが起こったみたいだね、中枢に急ごう」

頷き、山姥切は審神者達に行くぞ、と告げて地を蹴る。

ヒトガタは先程よりもあっさりと、山姥切達の刃を受け入れている。た。

「っ、があ……っ！」

蛍丸が頭を抱えて悶えている。遠くを見ると、堀川も頭を押さえてふらついていた。鶴丸は朦朧とする意識を何とか保ちつつ、柄を握る手を強める。

——脳内ジャック。鶴丸が行使出来る超常現象だ。記憶を呼び起こすよう働きかけた鶴丸は、強い反動に苦しみながらも彼等に力が届いた事に安堵した。

「やだ、嫌だ、スズ……っ！」

「兼さん、ごめん、また僕は……！」

記憶に苦しむ様は見ているこちらまで苦しくなる。周囲のヒトガ

夕も動きを止めている。

ぎり、と歯を食い縛って鶴丸は叫んだ。

「今だ、押し返せ!!」

キン、と複数の澄んだ音が鳴る。足に力を入れて立ち上がった鶴丸も、蛍丸に攻勢を仕掛ける。噛み合った刃は、もう拮抗してはいなかった。

「くそ、頭が痛い……!」

「ぐっ、うう……っ!」

だが、それでも鶴丸が弱っているのに変わりはない。少しでも気を抜けば、形勢は逆転するだろう。

鶴丸は眩む視界を瞬かせてまた力を込める。あと一押し、そうすれば相手に刃が届くのに。もどかしく思っていると、向こう側からも堀川が声を張り上げるのが聞こえた。

「……僕は、ここで倒れる訳にはいかない! 真実を知らしめるまで、膝をつくなんて許されないんだ!」

「真実を知らしめるのに、こんなに被害を出すのがお前のやり方か。……やっぱり、ぶん殴ってやらなきゃ気が済まないな」

「鯨尾、大丈夫。もうすぐ殴れるよ」

耳に手を当てていた青江が、同じく耳を押さえていた鯨尾にそう言った。そして懐に手を入れると、静かに語り出す。

「堀川。君達は、僕達を後れを取っている物だと思っただけで、侮っているみたいだけど。それでもね、僕達だって敵と戦う為に日々力をつけているんだ」

懐から手を出して口元に運び、一息に続ける。

「僕がただ情報を掴んだだけだと思う? それだけで、何も対策せずここに立っているとでも? そんな訳ないんだ。君の敗因はただ一つ——僕達を見くびり過ぎた事だ」

青江が手の中の物を口に入れる。直後、体の小さな傷が塞がり、頭痛が少し遠のいていくのが分かった。え、と思わず声が漏れ——そして、手に伝わる強い手応え。

「い……っ!」

蛍丸がバランスを崩してよろめく。それを見て、体が無意識に動いていた。

「——これで負けたんじゃ、驚きも何もないよなあ!」

左下から右肩に大きく切り上げれば、戦装束が赤く染まる。顔にもかかった血は、蛍丸に致命傷を与えられたと判断するに充分だった。

「——これで、最後だつ!!」

「——俺の刃は防げない!!」

あちらでも、堀川に攻撃が届いたようだ。二つの声が、肉を断つ音と共に場に反響する。

目の前の蛍丸が崩れ落ち、もう僅かな力も残っていないと判断すると、鶴丸は刀の血を払って納刀する。立っている他の刀も、静かに鞘へと刀を収めた。

『……一期一振。一つ賭けをしたい』

決意を固めた長谷部の声が、強く耳に残っている。

『大包平が、実行許可を出した物がある。まだテスト段階のプログラムで、どのような影響があるかは未知数だ。そしてこれを実行すれば

——戦闘終了まで、通信は出来なくなる』

涙に少し濡れた声はしかし、他の長谷部に負けず劣らず意志を持っていた。何があつたのか、今はまだ聞けない。

『だが、氷雨の青江が持っている策と合わせれば、相手を削る事が適うはずだ。他のものからは承諾を得ている。後はお前だけだ、一期一振』

即座に頷き承諾を返す。ふう、と息を吐くのが聞こえた。

『分かった、では一分後を目安にプログラムを実行する。……これが恐らく最後のチャンスだ、絶対にしくじるなよ』

そう、これが最後。

——長谷部が作ってくれた好機を、無駄にはしない。

「っ、こ、のっ!」

攻撃し返され、咄嗟に体を庇った腕から血が噴き出す。痛みなんて気にも留めずに、一期は刀を振るう。

長谷部が行ったのは、システム『刀剣乱舞』に実装予定の、刀装を一度に全解除出来るプログラムだ。敵方にもハッキングを行い、その場で戦っている全員をプログラムの範疇に入れ、刀装を剥がしたのだ。

加えて青江が特別に持っていた体力を全回復出来る「勝栗」をハッキング前に使用する事で、こちらの体力を万全にした状態で相手へ攻撃を通せる。使わない手はなかった。

デメリットは、まだテスト段階なので刀装解除する相手を敵のみ選べない事、この後の影響が未知数だという事だ。

それでもこの戦いに勝利する為なら、手段を選ぶ余裕はない。

「はあ……っ！」

また斬撃を行えば、鶴丸の胸に届いた。血飛沫が辺りに散って、己の戦装束にも生温い感覚がする。

二振りの体は最早、血に濡れていない箇所が探さなければ見つからないくらいになっていた。

それでも、まだ最後の決め手には至っていない。まだ勝利を確信するには足りなかった。

「はっ、ははっ。ここまで追いつめられるとは。やはり戦いとは先が分からない程面白い！」

鶴丸の目はギラギラと光を放っている。刀装を剥がしても、油断をすることはこつちがあつという間にやられるだろう。

一瞬気を逸らしてしまったのがいけなかったのかもしれない。――

――一期の腹に横一閃を入れられた。

「ぐっ、うあ……っ！」

「はは、あははは！ 楽しいなあ、楽しいなあ一期！」

満身創痍だ、互いに。立ってはいるが、少しでもつつけば二振り共倒れてしまいそうだ。

はあ、はあ、と荒い息がその場に満ちる。先に動いたのは、鶴丸だった。

踏み込んで斬撃を与えれば、一期はその場に崩れ落ちた。

「……これで終わりだ、一期。残念だなあ。君は骨があると思ってい

たんだが。でも、これもまた戦だ」

最早、一期は動けない。それに残念そうに首を振りつつ、鶴丸は刃を振り上げる。

ほつりと、小さな声がする。鶴丸は思わず耳を澄ませた。

最期の言葉くらい、聞いてやろうと思ったから。

「……自分、が」

「ん？ 何だい？」

近付いてそう聞き返す。そしてその時、鶴丸は耳にした。

小さな小さな、笑い声を。

「——自分ではよくわからんです。今自分が、どんな顔をしているのか……」

「——っ！ しま……っ！」

咄嗟に飛び退こうとしたが、もう遅い。

足元に現れた小さな塊を蹴り、一期は鶴丸の体を切り裂く。また大量の血が溢れ出し、鶴丸は体を立たせていられなくなり、後ろ向きに倒れ込む。

ふらりと立ち上がった一期は、刀の血を落したマントで拭い、息を吐いて納刀する。

窓の外、空を覆う数多の雲の隙間から、陽射しが少しだけ差し込んで来ていた。

19—10 「悪夢の続きを」

そもそも、だ。堀川は考える。

どうして自分の大切な相棒が死ななくてはならなかったのか、そこからである。

堀川はある本丸に、何番目かの刀として顕現した。相棒との再会に喜んだのも束の間、審神者の目付きが少しおかしい事に気が付いた。

——まるで、自分を憎むかのような。

後から思うに、この時点でもう堀川は地獄を生きると決まっていたのかもしれない。

堀川は毎晩呼び出され、審神者に暴力を振るわれるようになった。お前は忌々しい弟の生き写しだ。最初に言われた内容が、審神者の鬱屈の全てを表していた。

——お前さえ、お前さえいなければ……！

堀川は罵倒と共に暴虐の限りを尽くされる日々を送っていた。戦場から帰ってきたら何故帰ってきたと罵られ、少しでも怪我をしてくれば資材を無駄にしたと罵られる。楽しそうにしているのが気に食わない、幸せそうに生きているのが腹立たしい——どんな一挙一動にも罵倒を浴びせられ、堀川の心は少しずつ固まり、死んでいった。

相棒と過ごす、僅かな時間だけが癒しだった。生傷の絶えない自分に違和感を抱いていたようだが、ニコニコと笑ってやり過ごした。今となつてはいろいろ麻痺していたとしか言えないが、自分に心配される価値はないと、そう思っていたから。

そして、変化は突然に訪れる。いつものように堀川が審神者の暴行を受けていると、部屋の障子が大きく開かれたのだ。

——国広!! ……この野郎……！

当然のように怒り狂う相棒に、審神者は慌てて言い訳をしてこの場を離れさせようとした。そんな事をして、かえって怒りを抱かせるだけだと分からなかったのだろうか。

激しい口論の末だった。堀川を侮辱する言葉を吐いた審神者は、呆気なく相棒に叩き切られた。

——……ここまで猫被つてたとはな。行くぞ国広、もうここにはいられねえ。

相棒に導かれるまま、堀川は本丸を抜け出した。

闇夜に紛れて長い道を歩き、その道中の森の中で休息をとろうという事になった。

——少し周囲を見てくる。国広は休んどけよ。

小さなあばら家に堀川を残して、相棒は木々の間に消えていった。それが最期の会話になると、堀川は疑う事すら出来なかった。

しばらく待っていると、あばら家の周囲から声がした。それは、かつて同じ屋根の下で過ごした仲間達の物。追いつかれたか、相棒はどこに。焦燥感に満ちた堀川の耳に、全身から血の気を引かせる話が聞こえてきた。

曰く、相棒を見つけたが「主に裏切られた」としか言わず、話にならないので破壊した。そしてその相棒がこちらに向かわせんとしていたので、ここに堀川がいるのが分かった。裏切り者は、ここで始末しなければならぬ、と。

ふざけるな、としか言えなかった。相棒は、ただ自分を憂いてくれただけだ。理不尽に傷を負わせたのを許せず、言い訳をして悪い事をしたとも考えていなさそうな態度に怒ってくれただけだ。

そして、その審神者の蛮行を止めようともしなかった癖に、審神者が害されたらこちらを悪者にするのか。

罰するなら自分だけにすればいい。何故、相棒を殺したのだ。

憤怒に任せて、堀川があばら家を飛び出そうとしたその時。——外から悲鳴が轟き、物音一つすらしなくなった。何事か、と思つて外に出ると、倒れ伏すかつての仲間を尻目に、月に照らされている真っ白な太刀が佇んでいた。

——よっ、無事か？

呆然とする堀川に、白い太刀は申し訳なさそうに目を細めた。

——悪い、君の相棒は助けられなかったんだ。俺が見つけた時にはもう虫の息でな。君を助けに行けと言われて、急いでここまで来たのさ。

……何で、こんな……。

——まあ少し、君に伝えなくちゃいけない事があつてな。……君の本丸の事だ。

体が強張る。一体何を言われるのか分かった物ではなかったが、それでも自分の中の何かが変わってしまう気がしてならない。

——君の主は、君への暴虐を行う事によって、精神の安定を図っていた。そして君の仲間達は——何も知らなかった和泉守を除いて——その暴虐がこちらに向かないよう、徹底的に知らない振りをしていたのさ。そして君の主が死んで責任が問われそうになると、さも忠臣を装って君達を殺しにかかったんだ。

何故、と問いかけていた。何故、そこまで知っているかのように、と。白い太刀は忌々しそうに吐き捨てた。

——君の仲間達は声が大きいい個体が多かった、それだけの話さ。

しばらく堀川はその白い太刀と行動を共にした。あばら家で暮らす堀川にある日、白い太刀は一枚の紙切れを渡した。

——何、これ……兼さんが、全部悪い事になつて……！

それは新聞の切り抜きだった。書かれていた内容は、相棒がエラーを起こして審神者を殺害したという物で、審神者が何をしたかの記載は一切なかった。

白い太刀はがりがり頭を搔いて補足する。

——君の元主には、政府の中に身内がいた。恐らくそいつの差し金で、こんな事になったんだろうな。

叶うなら、今すぐ全ての新聞を燃やしてしまいたかった。

その後、後に「大移動」と呼ばれる事件が起き、堀川達は隣接区域まで逃れる事が出来た。その後、それまでいた区域は制裁が行われたと聞いていたが——それを信じられる堀川ではない。

——兼さんの真実は、まだ明らかにされていない。訂正しようともしてないのにこつちを信じてくれって？ どこまで馬鹿にすれば……っ！

憤り嘆く堀川に、白い太刀は囁いた。

——なあ。俺に協力しないか？

*

目を開ける。かひゆう、と細い息が口から漏れる。

もう体は動かない。指先一つすらも、まともにはもう操れないだろう。

納刀しながらも柄から手を離さない刀達に、ぼんやりと思う。

「……結局、兼さんの真実は闇の中、か」

ぴく、と青江が指を跳ねさせる。彼に笑う事すらままならない中、堀川は口を動かした。

「僕は、兼さんの真実が明らかになれば、それでよかった。その為だけに、こうして戦ってきた。でも……結局僕は、皆に負けた。だからもう、僕は真実と共に眠りにつくしかない」

「堀川、アンタ、何でそんな……」

立ち上がれるようになった次郎が、震えた指をこちらに向ける。

堀川の体は全身に黒が染み渡り、端の方から崩壊を始めていた。

「外道に堕ちたからそれ相応の報いを受けた、それだけですよ。おめでとうございます、皆さんの正義は立証されました。悪者たる僕達は、大人しく退場する事としましょう」

堀川の体が、黒い砂となっていく。その場にいるものは、なかなか口を開けない。

完全に崩れるその前に、青江は少しだけ肩を竦めた。

「ああ、これから報告書を書かなくてはならないね。全く、僕は斬ったり斬られたりする方が得意だっていうのに。でもそうだね、やるからには全力で。下手人の動機や背景だって、調べ尽くして見せようじゃないか」

え、と堀川は声を上げる。妖しく笑いながらも、青江の目は真剣だ。「それがこの町の安寧に繋がるのなら、もう何もかもを調べて解析して、報告するしかない。そうすればそうだね、ある謀反人の無念が大きな動機になる事もあるって政府も理解して、今度は適切に対応してくれるかもしれないね」

また少し細くなった息が口から零れる。何だか何もかもが馬鹿らしくなって、堀川は口の端を持ち上げた。

「まあ頑張ってください。僕の過去を調べるのは骨ですよ。何せ、お上に全てを覆い隠されたのですから」

「ふふ、舐められるのは困るなあ。——僕達は氷雨調査部隊。どんなに時間がかかっても、必ず真実を掴ませてもらうよ」

青江の笑みを目に映し、堀川はまた小さく微笑む。それを最後に、彼の体は完全に崩れ去った。

「小夜、次郎。大丈夫か？」

「ああ、すっかり元気さ。小夜も眠っているけど、苦しんではいなさそうだ」

「鯨尾さんも、体に不調はないかな？」

「はい、体調は万全になりました！」

小さく寝息を立てる小夜を抱える次郎は、元の頼りになる姿を見せている。鯨尾も体につけられた傷は消えて、両方の拳を顔の横で握っていた。

「鶴丸、そっちも終わったかい？」

「終わった……と言えば終わったんだろうが」

鶴丸は歯切れの悪い物言いをしながら、風にさらわれつつある黒い砂状の物を見つめている。視線が一気に鶴丸へと集中する。それに気付いているのかいないのか、先程よりもしっかりとした口調で答えた。

「こいつは斬られてから消滅するまで、一言も言葉を発さなかったんだ。なのに目は怨嗟の念に燃えていて……まだ、何かが起こる予感を感じてなあ」

不穏な言葉に、その場にいる全員が黙り込む。階段下から、こちらへと呼びかける声が近づいてくる。

空を覆う雲はまだ、分厚くその場に留まっている。

「ああ、負けたんだなあ」

鶴丸は仰向けに倒れ、天井を細い視界で見つめている。そうするのも辛いというのに、無様に死ぬ間際だというのに、不思議と鶴丸の魂は充実感で満ちていた。

「でも何でだろうな、心は晴れやかだ。何だかんだで、悪役を全う出来たからか？ それとも、充分に楽しい戦いが出来たからか。まあどっちでもいいか。そんな事は消えゆく俺にとっては些事ではない」

「何故」

「ん？」

「何故、最後の最後で隙を見せたのです。あの時刀を振り下ろしていたら、私は真剣必殺の発動すら出来ずに倒れていたでしょう。……何故、一瞬でも油断をしたのです」

「驚いたな、こんな俺にも説教かい」

少し変わりものとはいっても、やはり彼は一期一振だ。最後の最後で手を抜かれたと勘ぐったのだろう。実際はそんな事は一切ないのだが。

真つ直ぐな眼光、立つのも辛いだろうに一切姿勢を崩さないその強い意志。

それを見て、すとんと鶴丸は納得した。

「ああ、そうか。——俺、君に殺されたかったんだなあ」

「……は？」

「いや、こう言う用語弊があるか。……俺は、君みたいな善性の塊のような奴に、蹂躪されたかったんだ」

体が、指の先から崩れていく。それでも鶴丸は全く怖くなどなかった。

「眩しかった、綺麗だった。その魂は、苦難を味わっても尚光り輝いていた。馬鹿だとも強く思ったが——やっぱり俺は、羨ましかった」

本当は、そうなれたら良かった。だけど善を行うには、自分は余りにも世界の理不尽と絶望を味わい過ぎた。素直に光を信じられない振れた魂は、歪んだ形で本当の願いを叶えようとした。

「結局俺は、物語のように善がなされると心のどこかで思っていたんだだろうなあ。世界はまだ捨てた物じゃないと、まだ希望に縋っていたんだ。だからこそ、悪になった俺を君が倒してくれる事で、善をなす機構はまだ生きていると、実感したかった」

もしかしたら、一期は自分を討ち果たしてくれると感じ取ったのか

もしれない。だからこそ二回も強烈なちよっかいをかけ、彼の心を揺さ振った。もしかしたら彼なら、それを乗り越えて自分の願いを叶えてくれるのではないかと。

「そうだな、悪は滅び善が勝つ。最高の大団円だ。幸せな結末だ。……俺はあの時、そうなる事を望んでいたのに。結局の所、報われなかった願いを叶えようとしたかったただけだったんだなあ」

カラカラと笑おうとして、口から血が溢れた。視界も少しずつ霞んできていて、終わりが近いのだと悟る。

「……私は」

震える声が、反響する。どこか涙に濡れているような気がした。

何故だろう。何故、彼はこんなにも悲しみを湛えているのだろうか。

「私は、貴方を全く知りません。でも、それでも……貴方が、幸せになる選択肢はなかったのですか。悪として誰かを害するのではなく、誰かと手を取り合う選択は取れなかったのですか。貴方は強い、悔しいくらいに。だからこそ、堕ちてしまった事が悲しい……貴方を止められなかった事が、口惜しい」

ああ、やはり彼は真つ直ぐだ。その善性は、誰かを傷つけかねないくらいに鋭い。

けれど今の鶴丸には、その鋭さが心地よかった。

「なあ、一期一振。俺の死を悲しんでくれるというなら、一つ願いを叶えちゃくれないか」

声に力が入らない。下半身の大部分が崩れ落ちている。ああ、それでも、もしこの願いが叶うなら。

きつと、鶴丸の生涯は報われる。そんな確信があった。

「……本当にどうしようもない刃生だったが。どうか、こんな奴がいたって事を、覚えていてほしい。どうか、こんな悪夢の続きのような刃生があつたって事を、忘れないでいてほしい」

そんな生き方をしたものがいたのだと、時折思い出して欲しかった。褒められた物ではない、本当に散々な命だったが。数多にある生き方の一つとして、認めて欲しい。

鶴丸の願いは最早、それだけしか残っていなかった。

「——嫌でも忘れられませんよ、当然でしょう。きつと、私の最期まで貴方という存在は記憶され続けているでしょう。だからどうか、せめてあなたの魂が、安らげる場所に行ける事を願います。私の心が、これ以上傷つかないように」

心の底から、鶴丸は満たされていた。敵なのに、殺しあったのに、ここまで言葉をくれたのだ。

悪に成りながらも空洞を持ち続けていた身として、これ以上の幸いがあるのだろうか。

「……はは。そうか。良かった」

目の前が、暗闇に包まれていく。体の感覚も消えていく。

——鶴さん、お疲れ様。

——帰るぞ、国永。

怨嗟に満ちた始まりの記憶。その中で確かな幸福の証だった、二振りの声が聞こえた気がした。

「——一期っ!!」

反逆隊の鶴丸の体が完全に崩壊した直後。限界だった体は、あつけなく床に倒れる事を選んだ。同時に飛び込んできたのは、大切な友の悲痛な声。

「しっかりしろ、一期、一期!」

「落ち着け鶴丸、重傷だが破壊にまでは至っていない。大包平、資材と手入れ札の余りは?」

「先程の江雪と秋田と物吉の手入れで使い切った! 誰か、資材を持っている奴はいないか!」

「滑レ園の絆創膏で良ければ、あと一枚あるよ!」

「小さいですが、ないよりはマシでしょうね。一期、気をしっかり持つてください」

救護室に運べ、止血が先だ、言い合う声が聞こえる。一期は安堵の念に包まれながら、意識を手放した。

19—11 「最後の悪意」

「……女、まだ倒れないのか」

三日月が驚愕の表情で刀を握っている。目の前にいる狐面は、足を纏れさせながらも立っている。

腕と脚には切り傷がいくつもついている。胴には辛うじて傷が入っていないが、それでもこうして立ち向かってくるのは恐るべき事だった。

「ふ、ふふ。神の前で、膝をついている訳にはいかないでしょう」

ふらりとよろめきながらも、まだ戦うつもりでいる狐面。手にあった脇差を消して、薙刀を出現させる。

「まだ私は神を打倒していないのよ。なのにへばっているようじゃ、私の心が許さないわ!」

薙刀を振り下ろす狐面に、殺す選択を取らねばなるまいと三日月は思考を巡らせる。話を聞き出せなくなるのは残念だが、それならば脳内を読み取ればいいだけだ。

再び向かい合った直後——天井が崩落して、瓦礫が二人の間に降り注ぐ。

戦いの影響か、と思っていると、遠くで狐面がつまらなさそうにぼやいた。

「あら、もう終わり? 全く、傲慢な神のせいで大事な所を見逃しちゃったじゃないのよ。でもまあいいわ。目的は果たしたもの」

「女、何を」

言っている、と言いかけた刹那に、筒状の黒い何かが三日月の五歩前くらいに放り投げられる。

「さようなら、傲慢な神。次に会った時は必ず殺すわ」

カツ、とその場に閃光が放たれる。即座に兵達が守ってくれたが、それでも微かな光と音は三日月の五感を揺さぶった。

衝撃が落ち着いてから目を開くと、そこにあるのは瓦礫の山だけだった。当然、人影などどこにもない。

「……む? 人影?」

人影。それは例の黒いヒトガタの事だったか。それにしては、戦装束に斬られた跡が大量にあるのは変だ。いや、反逆隊が用意した物が強かった可能性もある。

思案している内に、違和が消えていく。しばらくその場で考えていると、通信が流れ込んできた。

『三日月、大丈夫か!』

「おお、主。いや、今着いた所だな。酷い有様だ、早く事態を収めなければ」

「……は？ どうしたんだ？ もう戦闘は終わっていると連絡があったが、お前さん何をしていた？」

「……何だと？」

認識のずれがある。それを悟った雲霄の審神者は、解決次第すぐに検査をしよう、と強張った声で告げた。

「ねえ、もう帰れるんだよね？」

「怖かった……怖かったよお……」

「しばらくここには来たくないな……」

子供達が、怯えながら江雪の後ろに固まっている。江雪は彼等を宥めつつ、鶯丸の話を聞いていた。

「引き続き、滑_レ園の者はお前の所で預かってもらう事になるが……三人はどうするか」

「ツクシさんが審神者、二振りが彼女の下へ配属という事でいいのではないのでしょうか」

「今はそれしかないよなあ……」

「貴方も大変ですよね、これから復旧に会議でしょうか？ 中枢の建物が崩壊寸前な今、会議する場所にも困るでしょうし……」

「まあ、何とかするしかないさ」

冷静な二振りをよそに、その背後では大人気が全くない大喧嘩が繰り広げられていた。

「んだと、もう一遍言ってみろ!!」

「貴様の足りない頭では説得など不可能だと言っているんだ。俺の考

えた文面にケチをつけるくらいだ、分かりきっていた事だったがな」
「だからってここまで腹立つ物言いするか!? その言い方じや逆効果だ
だって言ってるんだ、テメエの神経逆なでしかない文面よりも俺の
作った奴の方がマシだろうがよ!」

「貴様の文面の方がマシ? 冗談は休み休みでも口にするな!」
「テメエの性悪の方が冗談染みてんだよ!」

蒼穹の審神者と氷雨の審神者の言葉による応酬に、山姥切と蜂須賀
は呆れ切った顔をしている。それを見つめて、雲霄の加州達は太鼓鐘
の頭を撫でた。

「お前はあんな風になるなよ……」

「なあ、あれ本当に止めなくていいのか?」

「止めに入ったら加熱するだけだと思えますよ……」

「うむ、すぐ側に山姥切殿達がいるのだから、二振りに任せるべきであ
る」

「それはそうとして、本当に体調は大丈夫だな?」

「おう、元気元気。何とかなつてよかったぜ」

「決して無理はするなよ、まだなりたてなのだからな」

「分かっているって!」

「おい、加州。少し確認したいことがある、こつちに来てくれ!」

「今行くー」

そうして歩き去った加州を横目で見やって、秋田と物吉は空を見上
げる。

「何とか終わってよかったです」

「はい。……死者も出てしまいましたが」

「そうですね……こうした襲撃を行う以外に方法はなかったのでしょ
うか……」

「せめて、彼等の安息を祈りましょう。僕達に出来るのは、多分それだ
けだから」

「ええ」

手を組んで祈るふたりを見守りつつ、一期は何もない腹をさすりな
がら鶴丸に問いかける。

「大包平殿は、まだ機械制御室ですか？」

「ああ、不備の確認をしているらしい。子供達とあの長谷部のおかげで大分修復されたとはいえ、まだ残っている箇所があると言っていたな」

「大変なのですね……」

「まあ数日くらいは制御室の奴等、寝る時間もないだろうな……頑張って欲しい所だ」

「そんな二振りを遠巻きにしている春光隊と小夜と五虎退に、忍び寄る影が四つ。」

「よーう、今回の協力者諸君！」

「わあつ、次郎さん!？」

「フフフ、話に聞く通り、とても仲睦まじいようだねえ。今回君達の協力がなければ、事態を収められなかったよ」

「ああ、ありがとう……近すぎないか？」

「獅子王、小夜左文字、五虎退。機械制御室の防衛をしたそうだな。少し話を聞かせてもらいたいのだが」

「え、ええと……」

「……僕は構いませんが」

「俺もいいぜー。いやあ、改めてみるとやっぱりうちのとは違うなあ」

「僕にとつては、貴方達春光隊の長谷部さんこそ不思議ですが」

「まあそれも個性だ。そういうのもいると知ってもらえるだけでも、こっちとしちやありがたいぜ」

「そうだねえ。氷雨の小夜さん、後でまた厄がないか見せてくれ」

「何だかんだで盛り上がっている一角から距離を置き、春光の長谷部はそわそわと体を揺らす。すると遠くから、こちらに向かってくる人影が手を振っていた。」

「ごめーん、お待たせ！」

「ふいー、さっぱりしたあー」

「ツクシ、愛染、お帰り」

「トイレに行っていたツクシと愛染に、春光の長谷部が答える。まだ気を張っている様子のふたりは、どこに行こうかと悩んでいるよう

だ。春光の長谷部はこっちで話をしよう、と手を上げかけた。

その時だった。——ツクシと愛染の背後に、大きな影が映り込んだのは。

周囲を見る。誰も気が付いていない。そして距離的に、ふたりを庇えるのは長谷部ひとりだった。

地を蹴って、刀を出す。久々に出現させた気がする。鞘から何とか刀身を引き抜き、ツクシ達の背後に向かって刃を振るう。

現れたのは、検非違使のレプリカ。ぎよつとしたツクシと愛染に傷をつけないように、懸命に長谷部は刀を振った。

「——長谷部さん!!」

鯨尾の悲鳴が響いたと同時に、長谷部とツクシ、愛染は大きな空間の裂け目に飲み込まれた。三つの影は、もうその場に残っていない。

「スズを奪った最悪な世界に」

「母様を引き離れた劣悪な世界に」

「——この素晴らしき恵まれた者の世界に、俺達の呪いあれ!!」

怨嗟に満ちた高笑いがかかります。死者の悪意によつて引き起こされた緊急事態に、誰も口を開けない。

一期は唇を震わせて、呆然とその場に立ち尽くしていた。

第二十話 「狭間の世界の物語、あるいは」

20—1 「希望の為に」

「長谷部さん!!」

「くっ、次郎さん放してくれ!」

「畜生、最後の最後で……っ!」

「お小夜、手をどけてくれ! このままじゃ……!」

「何で、何で長谷部がここまで恨まれなくちゃならないんだ!!」

春光隊の長谷部が愛染とツクシと共に消えてから、春光隊の面々は悲痛な声を上げながら建物内へと駆け出そうとしていた。しかし、それを必死に止めているのが数振りいる。

「馬鹿言うんじゃないよ、当てもなしにあの崩壊寸前の建物をうろつこうつてのかい!」 アンタ達も押し潰されるのがオチだ、今必死に居場所を探してるんだから落ち着きなよ!」

「そうです、貴方達は互いに大事にしているんでしょう!? なら彼も、貴方達が傷付くのを恐れているはずです!」

「どうか頭を冷やされよ! これ以上被害者を増やす訳にはいかん!」

「本当に、今の建物内は危険なんです! どうか冷静な判断を……!」
探す探さないの押し問答が繰り広げられる中、蒼穹の一期は顔面蒼白になって立ち尽くしていた。

——何故、何故こんな事に……。

長谷部達が裂け目に吞まれた時、黒い影は長谷部を中心に呑み込もうとしているようだった。それは、あの狂った声達が長谷部を害そうとしていた証に他ならない。

何故なのだ。春光隊の言葉を聞く限りでは、長谷部に何の関わりもなかったはずじゃないか。どうして、あそこまで彼が傷つけられなければならないのだ。いや、それを考えている暇はない。早く動かなければ、早く助けなければ、長谷部までもが死んでしまう。ああでも、何をすればいい? 事態を動かす力のない自分が、いったい何を出来る

というのか――

「――しっかりしろ一期一振イっ!!」

ぼしり、と両頬を叩かれる。痛みに顔を上げると、いつの間にか眼前に真剣な眼差しをした今の主――蒼穹の審神者がいた。

突然の事に呆然とする一期に、蒼穹の審神者は一喝する。

「何をそんなに怖気づいてやがる？ お前さんは俺よりずっと賢くて、強くて、行動力がある！ かつてあの江雪さんを、俺の反対を押し切ってまで助けに行ったお前さんだ。今回だって助けに行くのがお前さんだろうが！」

滅茶苦茶だ。無理がある。だって一期は普通の刀剣男士だ。今も身内である春光隊ですら探すのを止められているのに、完全なる部外者である自分が行けるはずがない。

けれど。己の認めた審神者は更に叫ぶのだ。

「友達を助けるのに友達である以外に理由はいらねえ、そう教えてくれたのは一期、お前さんだろうが！ なら今回だって理由はそれだけで充分だ！ どんなに立派じゃなくてもお前さんの今の主は俺だ、まだ迷うならその俺が命じてやる！――お前さんの友達を助けに行け、一期一振!!」

本当に、出鱈目な言い分だ。限界もしがらみも何も無い、己の心のままに動けと言われているのだ。

いい子の理性は言う、止めた方がいい、上の救助を待てと。

けれど、身勝手な感情は叫ぶ。私は――

「……かしこまりました、主」

発した言葉と共に、急速に思考が回り始める。

自分に何が出来る？ 今の自分の持ち札は一体何なのか。一体何枚あるのか。

コンディションは万全、現在の建物の状況を確認、そして自分の知恵を振り絞る。

建物は相も変わらず崩壊が進んでいる。が、中を進めない程ではない。居場所をはつきりとさせて真っすぐに向かえば、無事に帰れるだろう。

ふと、目の端にこちらを呆然と見やる蜂須賀の姿が映る。脳裏に浮かんだのは、かつて列車内で見せてもらった――

大股の急ぎ足で蜂須賀のもとまで歩み寄る。ぎよつとしている彼に、一期は声を張り上げた。

「蜂須賀殿、壊れていたという機器はお持ちですか!？」

「えっ、ああ、うん。持っているよ」

「見せて頂いてもよろしいですか？」

「うん、構わないけど……」

はい、と差し出された機械を手に取り、必死に操作する。機械は修理されていたが、幸いにも履歴は残っていた。慣れない手つきでボタンを繰り返し押す。焦りで何度か間違えそうになったが、何とか履歴を遡る。

そして、ある文字列を見つけた。一期はその手を止めた。

「十月末、地点は鷺ノ原……これだ!」

それは、かつて事件に巻き込まれた際に長谷部と行った通信の記録だ。それが残っていたのに心から安堵しながら、しかし一期はふと思いつく。

手掛かりを見つけたはいいものの、この後どうするべきか分からない。機械の勉強をして来なかったツケが、ここで回ってきてしまった。

思わず顔をしかめて、歯噛みする。大きな手がかりを見つけたのに、あと少しで助けに行けそうなのに。自分の力不足で、諦めなければならぬのか。

「貸せ、一期」

ひょいと、横から機械を取り上げられる。へ、と間の抜けた声をよそに、手慣れたように機械を操作する鷺丸は真面目な顔だ。

自分の端末を取り出し、空中に画面を映し出す。しばらく捜査してから一つ領き、鷺丸は一期に微笑んだ。

「長谷部の居場所を特定出来た。俺が誘導するから、一期は早く長谷部を助けに行け」

「え、あの……え?」

「どうした、早く助けたいんだらう？ まあ何、お前がそうも必死になっっているんだ、手を貸してやりたいと思うのが当然だろう」

呆気なく許可を出されて、とっさに反応出来なかった。こうも反対されているのに、独断で出されただろうゴーサインに従っていいのだろうか。

当然ながら、側にいた加州がぎよつとした表情で鶯丸の肩を揺する。

「何言ってるの!? こんなに崩壊が進んでる中に行かせられないよ！

後で後悔するのは鶯丸だよ!」

「その通りだ。それに、独断で出された許可を認める訳にはいかない。せめて主の判断を待った方が——」

「二期、受け取れ」

蜻蛉切の説得をよそに、鶯丸は二期に小さな箱を差し出した。思わず受け取ると、彼は二期の背中を軽く押す。

「手入れ資材一式だ。ここに来る途中で救護室から拝借した。恐らく長谷部は怪我を負っているだろうから、急いだ方がいい」

「え、でも……」

「俺も春光隊の長谷部に興味があるのでな。物吉の件で恩もある。……死んでしまえば話す機会も失われてしまう。だから、お前が後悔をしない選択をしろ、一期」

逡巡したのは一瞬だった。唾を飲み、一期は建物へと走り出す。背後からは鶯丸に詰め寄る加州達の声があった。

「ああああ、もう、勝手に言っっちゃって……！ 主に叱られても俺知らないからな!」

「細かい事は気にするな」

「今回ばかりは細かくしないで、鶯丸殿……」

足を止めようとする理性をねじ伏せ、一期は廊下を駆け抜ける。点在する瓦礫を避け、落ちてくる欠片をかわし、建物内を進む。

『二期、聞こえますか』

端末から声が聞こえる。それは、いつもならゆったりとした物であるはずの、友の声だった。

『……ありがとうございます。貴方が動かなかつたら私が動いていたでしょう。子供達を見ていなくてはいけないというのに。……褒められた事ではないのでしようが、お願い致します。どうか、どうか子供達と子供達の恩人を頼みます』

『一期さんお願い、三人を助けて！』

『突撃しかねないくらいタイガが凄く焦ってるんだ、頼んだぞ！』

江雪の横から話しているのだろう子供達が、口々に一期へと望みを託す。一期はそれに一言だけ返してから、曲がり角を曲がった。

「必ず、助けます」

端末画面内のアイコンが、まだ先は長いのだと教えている。一期は画面を見つつ、足を動かす。

もう職員が誰もいない建物内は、軋む音と瓦礫を踏む音しかしない。それも次第に大きくなり、みしみしとした不穏な気配もしてくる。だが一期は足を止めない。足を止めれば、希望を断つ事になると理解しているから。

殺気を感じて咄嗟に足を止める。顔を上げると、複数の大太刀が荒く息を吐きながらこちらを睨み付けていた。

こんな時に。舌打ちしたくなる気持ちを抑え、柄に手をかける。正に刀が抜き放たれようとしたその時、背後からまた別の気配が迫る。

白い翼を広げたように、袖がふわりと宙を舞う。大太刀の一体が断末魔を上げて崩れ落ちる。

「鶴丸、殿」

「よっ、追いついてよかつたぜ」

一期の隣に、鶴丸が並び立つ。強気に笑う鶴丸は振り向いて手を持ち上げた。

「どうして、ここまで」

「君の主も言っていただろう？ 友達を助けるのに理由はいらない、ってな」

そう言っつて、また鶴丸は鋒を前に向ける。そして床を強く踏み込むと、また一体大太刀の胴を一闪した。

「あの長谷部と、俺も友達になりたくてなあ。ああして誰かの悪意に晒されて死ぬには余りにも惜しい。だから俺は、ふたりの友達を助けようとしている訳だ」

「いや、ですが、審神者殿から止められなかったのですか？」

「君が言うのかい？　ちやあんと説得して来たさ。最終的には『お前のやる事を止められると思った俺が馬鹿だった』と言ってくれたぜ」
「それ、諦められてません……？」

「そうとも言えるなあ」

鶴丸はけらけらと笑いながら首をかしげる。くすぐつたい嬉しき半分、呆れ半分で一期が見つめると、鶴丸は微笑みながら見つめ返した。

「という訳で、ここは俺に任せてくれ」

「え？」

「いやあ、これ一度は言ってみたかったんだよなあ。……と、そうじゃくてだ。このままじゃ長谷部が危ない。俺が敵を引き付けるから、君は早く長谷部の所へ向かえ」

「え、ですが、この数ですよ!!　いくら何でも無茶では——」

大太刀はまだ、一部隊くらいはいる。そのどれもが戦意を滾らせてこちらを見ている。常の一期ならば、絶対に取らない選択だった。

しかし鶴丸もまた、あくどい笑みを浮かべて大太刀を見据える。

「なあに、俺も不完全燃焼だったんでな。むしろ丁度いいくらいさ。」

——こいつらには、存分俺の相手になってもらうぜ」

さあ、早く行け。そう強く告げられ、一期は後ろ髪を引かれる思いで駆け出した。

後に残ったのは、天井をぶち抜く程大きな大太刀と、笑みを消した真っ白い太刀。

「……俺だってな、思う所がない訳じゃないんだ」

唸り声しか返さない相手に、鶴丸は険しい声でそう告げる。

「だって、なあ。俺の人としての経験が足りないせいで、俺は小さな子供を殺しちまったんだ。仕方のなかった事とはいえ、胸糞悪いに決まってる」

頭を掻き毟る白い太刀などお構いなしに、大太刀は刃を振るう。しかし振り下ろされた先に太刀はおらず、気が付いた時にはその大太刀の首と胴は離れていた。

「そんな中で、友達が前を向いて新たな友達を作ろうとしている。それは寿ぐべき事だが——少しばかり寂しいんだ」

宙を舞う鶴丸は、さながら本物の鶴のようだった。白い戦装束をふわりと広げ、刃を電光に煌めかせれば、見とれたように大太刀が動きを止めた。

「あいつが友達になりたいと願う相手だ、俺だつてきつと好ましく思うんだろう。だが今ばかりは、その寂しさに身を委ねたい。苦しい葛藤に、新たな友が増えるかもしれない高揚感と、少しの妬み。——俺の感情のぶつけ場所として、付き合ってもらうぜ」

ギャオオオ、と大太刀が怒り狂って吠え立てる。鶴丸は大太刀のいない場所に着地すると、体を反転させて刀身を翳して見せた。

20—2 「どうして、と／もういい、と」

はあ、はあ、と息が切れる。砂埃のせいで呼吸が苦しくなっているのだろうか。それでも一期は止まらなかつた。

端末を見ると、目的地までは然程遠くない所まで来ていた。体が重い、あと少しだというのに足を止める選択肢は選べない。

足が纏れて、走った勢いのままに転倒する。瓦礫が脚を掠めて傷が出来る。常なら気にしない痛みが、どうしてかとても気になった。

立ち上がれない。脚に力が入らない。痛い、痛くて仕方ない。目の前に、小さな箱が落ちている。

——俺は、君みたいな善性の塊のような奴に、蹂躪されたかつたんだ。

それは、宿敵の言葉だ。痛くて痛くて仕方なくなる、余りにも悲しい願いだつた。報われなかつたものが最後に一期に纏つた、この世界の理不尽が形を取つたような哀願だつた。

どうして、どうして幸せになろうとしなかつた。不幸に身をやつしたあの姿が、目に焼き付いて離れない。どうにか出来なかつたのか、ぐるぐると頭を巡る。

——もう裏切られるのは嫌なんです、中途半端な意思なら近付かないで下さい！……もう、もう、辛い思いは嫌だ……っ!!

大切な弟の、悲痛な叫びが脳内でこだまする。見限られる寸前だつた所を食い止めてくれたのは、間違いなく森の奥の部隊だ。

孤独だつた彼を自力で見つけられなかつた。それは間違いなく一期の避けられない落ち度である。

それでも、それでも最後は手を取れた。まだ許されてはいないだろう、だがそれも歩み寄りには違いなかつた。もう二度と、手放したくない温もりを、思い返す。

——おう、任せておけ。友達の格上げ祝いだ、とつておきの驚きを用意しようじゃないか。

——楽しいですよ。貴方は他の一期一振よりも賑やかですから。

——これは独り言だが、友達に協力してもらつた礼もしたいしな。

刀剣男士になれて特に良かったと思つた事は、彼等と出会えた事だろう。弟達と出会えた事と比べられるはずもないが、それでも一期の中で喜びの度合いは上から数えた方が早い。

主従のない対等な、気の置けない、背筋を伸ばすような気を緩めさせるような関係は、一期に幸福をもたらしてくれた。なかなか集まらない情勢が、恨めしくなるくらいに。

数多の関係性の中で、一期の心は色鮮やかになっていく。悲しみも怒りも、幸福も喜びも、一期の胸で鮮烈に輝いていた。

だから――

――傷付きたくなければ、滑_レ園には近寄るな。

彼の忠告はつまり、自分が傷ついた経験を一期にさせたくなかった、それだけの話だ。忠告を軽視して突き進んだ結果、一期も大きな衝撃を受けた。だけど、そこから導ける事もある。

彼は優しい、余りにも。一期が嫌いなら、忠告をしなくてもよかつたはずなのだ。傷つく所を見て、それ見たことかという態度でいてもよかつたはずなのだ。

それでも。傷ついている姿を見たくなかつたから、言わずにはいられなかつた。

誇大妄想かもしれない。思い上がりも甚だしいと言われるかもしれない。だが一期は、彼の行動の理由をそう受け取つた。

行動の理由を見誤る程、一期の目は濁っていない。だからこそ、彼の繊細な優しさを確信していた。

確かに、それは小さな光だろう。強風が吹けば掻き消えるくらいの、仄かな火だ。しかし、その少し先を照らす光の価値を、彼の家族はよく知っている。そして、一期もその価値を実感しつつあった。

こんな所で、消し飛ばす訳にはいかない。彼にはこの先も、穏やかな光の中で過ごしていきべきなのだ。懸命な祈りを届かせる為に、諦めてはいけない。

「……………ぐ……………」

痛む脚を無理矢理駆動させて、箱を掴み体を起こす。立つのも少し骨がいるが、もう構っていられない。

歩く度に悲鳴を上げる脚を酷使して、先に進む。息切れも激しいが、そんなのは未来の自分が苦しめばいい。

アイコンは、あと少しだというように明滅が激しくなっている。足をそちらに向けると、響いてきたのは――

「……おい、誰か、誰かいないのか!？」

「お願い、誰か助けて! ——このままじゃ、長谷部さんが死んじゃうよお……っ!!」

体から血の気が引いていく。走って向かった部屋から、泣く寸前の声が聞こえてきた。

見つけたのはいいい、問題はドアの前にある大量の瓦礫だった。――それは、天井まで積み上がっていたのだ。

「愛染殿、ツクシちゃん!」

「二期さん! こつちからドアが開けられないの! 外がどうなってるかわかる!?! ……長谷部さん、しっかりして!」

「……瓦礫が、扉の上にもまで積み上がっている。これは、開けるのに骨が折れそうだね」

「そんな……今すぐ治さないと、本当に長谷部が死んじゃうぞ!!」

愕然と言う愛染と、悲鳴に近い声で長谷部に呼び掛けているツクシ。ふたりの様子に、一期の声は震えてしまった。

「……愛染殿、ツクシちゃん。長谷部殿の容態は」

瓦礫の山からは、三人の様子は窺い知れない。それでも嫌な予感しかしない現状に、少し煤けた両手を見る。

「……お腹から、血が沢山出てるの。手もどんどん冷たくなって……一期さん、どうしよう、長谷部さんが死んじゃうよ……!」

その悲鳴に、一期に取れる選択は一つだった。

瓦礫の山に登り、その一つを掴んで、遠くに放り投げる。一つだけ減った瓦礫の山に、一期は腹を括った。

「ツクシちゃん、愛染殿、しばらく扉から離れていてくれ」

「え……何、するんだ?」

「瓦礫の山を壊す」

ガシャン、と砕ける音がする。ガン、ガン、ガシャンと手で瓦礫を

掴んでは投げている音は繰り返し、けれど山は崩れない。

手を瓦礫の中に入れ、一気に内側から崩そうとする。とがっている堅い物が、手袋を突き破って傷を作る。顔をしかめるが、止まっている余裕はない。

一期は瓦礫をどけ始める。——小さいが明確な希望を、繋ぐ為に。

「長谷部さん、長谷部さん、起きてよお……！」

顔をくしゃくしゃにして、近くに山積みになされていた布をツクシは必死に長谷部の腹部に押し当てる。布はすぐに赤く染まり、彼女は嗚咽を漏らしながら布を交換する。ドアの側にいる愛染は、必死に開く気配のないドアに体当たりをしていた。

「駄目だ、全然開かない！」

「うっ、うええ、どうしよう、どうしたら長谷部さんは助かるの……！」

ツクシの泣き声に呼応するように、長谷部が薄く目を開く。呼吸が細かい。はっとしてツクシは長谷部の手を強く握った。

「長谷部さん、私分かる？ お願ひ、気をしつかり持つて！ 絶対に助けが来るはずだから、だから……！」

意識を保とうとする言葉には、痛哭が滲んでいた。必死に握られた手は震えているし、目から落ちる水滴は止まる事を知らない。

そんな中で、長谷部の心は凧いでいた。

——俺はもう、充分に生きた。

親友を殺し、恩人を置いていき、妹を救えなかった。罪深い事を、自分分は沢山してきたと思う。

刀達には、本当に大切にしてもらった。褒められたり、叱られたり、一緒に泣いたりした日々は、得難い物だ。こんな自分にはあまりにも過ぎた宝物だ。

「くそ、一期早くしてくれよ！」

「やだ、やだよ、長谷部さん……！」

だからこそ、長谷部はここで己の旅路を終えてもいいと思えたのだ。

幸せは、長くは続かない。それは短くも濃密な生の中で実感してい

る。だけど、そんな中で優しく温かく慈しんでもらった。悩める誰かの助けになる行動をとれて、少しだけ自分が嫌いじゃなくなった。

もう、それで充分じゃないか。長谷部の一生は、綺麗に見えるように充分に整えられた。それでももう幸せだ、そう思える。

だから、決して泣く必要はないのだ。決められていた時よりは少し遅かったけれど、定められた通りに地獄に落ちる、それだけの事なのだから。

『ふぎ、けるな、まだ理解してなかったのか！ お前が何の罪を犯したって!? それは全て俺に非がある事じゃないか！ 十分に生きて？ 冗談も大概にしろ！ お前にはこの先、長過ぎる人生が待っているんだからな!!』

脳裏でそう叫ぶ声がある。表情は分からなかったけれど、眉間に皺を寄せているのだろうな、と想像している自分に苦笑した。

今わの際にこうして悲しんでくれるひとがいるのだ、罪深い旅路の果てとしては上等過ぎるくらいだ。

だから、もういいのだ。だってこんなに血が出て、意識も朦朧としていて、痛みすらも薄れかけている。

助からない。自分でも分かっていた。だから覚悟を決めるくらい、しても構わないだろう。

「やだ、やだやだやだあ……っ!」

「くそ、開け、開けよ!!」

ふたりが、必死に自分を生かそうとしている。微かな力を振り絞って、未来へ繋げようとしている。

大丈夫だ。風いだ心で思う。だってふたりを守れた。人としても刀としても中途半端だった自分が、大切にされるべき命を守れたのだ。

満たされている。そう感じていた。だから何にも、怖がったり悲しんだりする必要はないのだ。

『そのの、どこが満たされているんだ！ そんな、そんな顔で泣くくらいなら、最初から強がったりするんじゃない！ 何故お前は、変な所で物分かりよく——諦めがよくなるんだ！ そんな顔のまま死な

せたりなど、俺は絶対にさせないからな!!』

……泣いている？ そんなはずはない。だって今自分は幸せだ。そのはずだ。そうでなくてはならないのだ。

悲鳴が、焦燥が、噴悶が聞こえる。それが全て自分の為に表出しているというのは俄かに信じがたい。

だけど、惜しまれながら終われるのは、きっと幸せであるはずなのだ。だから自分も、幸せなはずだ。

どんなに痛くても、苦しくても、泣いている訳がない。

……彼は気づかない。凧いでいる心が、端から固まっていっている事など。その心が幸せと定義した水面の下など、考えようともしなかった。

また一つ、嗚咽混じりの悲鳴が響く。ドアを押し開こうと鈍い音がする。愛染がもう一度ドン、と体当たりをした直後――

――ドアが勢いよく開いた。

20—3 「生きて、君と」

一期さん、と掠れた声が彼を呼ぶ。長谷部も動かせる視界を動かして、荒い足音の方向を見る。

そして愕然とした。——手袋が破けて、指先が赤く染まっている。爪の一枚や二枚は剥がれているだろう。痛々しく血が流れる両の指は、瓦礫が積まれていたという場所に何をしたのかを明白に示していた。

腕で口を押えて咳き込むのは、この辺りが砂埃で満ちていたからか。体力を失っているせいか、足取りが少し覚束ない。

一期はどきっと長谷部の側に腰を下ろし、隣にいるツクシに尋ねる。

「資材一式を持って来た、長谷部殿を治すのを手伝ってもらえるかな」
「も、勿論」

ツクシは差し出された資材の一部を受け取り、一期と共に資材を体の一部に変えるプログラムを発動させた。ツクシは頼りない手つきだったが、真剣に治療に取り組んでいた。

一期の顔がいつもとは一変して険しく、非常に怖かったからだ。

「……げ、ほっ、なん、で」

長谷部の腹部の傷が埋まっていく。血色はまだ悪いが、腹の傷が治っただけでも窮地は脱したと判断出来た。

啞然と、どうしてと問いただすような視線を向けられた一期は、ふう、と震える息を吐いた。

「……私は、本当に怖かったのですよ」

ゆっくりと長谷部の手を握って、一期は視線を落とす。一期の手は血に塗れていても、優しい温かさを宿していた。

「貴方が死ぬかもしれないと思うと、目の前が真っ暗になったのです。貴方と何も、何一つ語らえないままに、永遠の別れになってしまおうのではないかと。貴方としたい事だつて山ほどあるのです、どうしてみすみす死なせる方を選びましょうか」

優しく握る手が震えている。声も頼りなく掠れていて、彼が心から

怯えていたのだと分かる。握るのも辛いだろう指先の力は、けれど緩まる事なく長谷部の手を掴んでいる。

「きつと、貴方の目には世界の絶望が色濃く映っているのですよね。私にだって心当たりがあります。だから私はこれから、本当に酷な事を貴方に希う事になる」

一期の眼前に、長谷部の手が運ばれる。その姿は、まるで神に祈る聖職者のように、厳かで清らかだった。

「どうか、どうかまだ、暗がりには堕ちないでくれ。まだ私達と一緒に、楽しい事をしていてくれ。いずれ君が行くかもしれない、君が行きたいと思っている場所に、私はまだ行かせたくない。……この願いを、聞き届けてはくれないか」

一期は、どう考えても自分に話しかけている。口調もそうだが、長谷部が割り込もうとしないのが大きな証拠だ。

目眩がする。血が足りないせいだけでは無いだろう。

——このひとは、本当に俺と……。

懇願が、祈りが、体中に染みていく。どうしてここまで心が揺さぶられるのだろう。

もしかしたら、と思う。自分は、家族の言葉を当たり前の物として受け取り過ぎたのではないか。

いつも、あまりにも大切にされてきたから、心のどこかでその重要度を落としていたのだ。——彼等は当然のように優しいだけで、自分の事など大層に思っていない、と。

彼等の主が、自分の妹だった。だから自分の事も大切にしているだけで、自分にそう価値はないのだろうと。寧ろ、自分という存在が、彼等を束縛して苦しめているのではないか。それが、ずっと心に引っかかっていた。

目の前で手を握っている一期は、家族でも何でもない。偶然が重ならなければ縁すらもなかった相手だろう。

だからこそ、なのかもしれない。本当に他者だったからこそ、ここまで響くものがあつたのかもしれない。

目の前がぼやける。表情が歪む。こんな情けないのは嫌なのに、

みつともないのは嫌なのに、止められそうになかった。

静かに手が離される。同時に、二つの体が長谷部に抱きついた。

「……………うっ、うわああああん！ 長谷部さんが死ななくて良かったよお……………っ！」

「くっそ、力になるとか言っつといてお前が死にそうになってどうするんだよバーカバーカ！」

ツクシは安堵をそのまま表に出し、愛染は少し捻くれている表情で涙を流す。泣き声の二重奏が響く中、こちらに近づいてくる気配が複数。

「長谷部さんっ!!」

「長谷部!!」

大切な家族が、泣きそうな顔で部屋へと突入する。そして長谷部の姿を認めると真っ直ぐに向かってきて、ツクシと愛染の上から強く抱き締めた。

「良かった、本当に良かった、貴方に何かあったら俺達は……………!」

「本当に肝が冷えたよ、この世を恨み尽くす所だった」

「怪我は治ってるな？ 無茶しやがって、帰ったら説教だ」

「畜生、もうこんな思いは御免だ……………っ!」

「厄落としを念入りに行わないといけないね、二度とこんな目に遭わせないように」

大きく嗚咽を漏らす鯰尾と獅子王、険しい顔でありながら抱き締める腕の力はとても強い歌仙と薬研、そしてその上から全員を包むように優しく腕を広げている石切丸。

目の前が更に歪む。喉の奥から込み上げてくる物は、長谷部に否が応でも口を開かせた。

「……………わ、かった」

今、自分を包んでいる温もり。もし少しでも何かが変わっていたのなら、この温もりを感じられる事もなかっただろう。

温かく優しいそれらは、大きな安堵をもたらすと共に——長谷部の覆い隠していた本心を、暴き出した。

「こわ、かった、こわかった、怖かったよお……………っ!」

声を上げて泣き出す。自分を包む腕に縋りつき、わんわんとみつともなく涙を流す。

怖かった。そう、長谷部は怖かったのだ。死ぬ事にはない——きつと、もう二度と会えなくなるという事が。

心を凍らせてその時を迎えようとしていた。けれど一期が心を覆っていた氷を砕き、そして今抱き締めている腕達が、冷たく凍えていた心を温めた。

本当に、もう一度会えたのが幸せで、それを失う寸前だったのが心から恐ろしいと言える。

失いたくない、と思った。身の丈に合わない幸福でも、手放したくないと願った。

長谷部は声を嗄らして、泣き声を上げ続けていた。

「二期」

「鶴丸殿」

部屋の中に入ってきた鶴丸は、少し離れた所で泣き続ける長谷部達を見つめる一期に話しかけた。一期は振り返って、小さく笑んで見せる。

「あの長谷部だな？」

「はい」

「そうか。……本当に、良かったなあ」

『全く、これでようやく一段落だな。最後の最後でやらかしてくれた物だ、襲撃者も』

『本当にありがとうございました、一期。三人共無事だと分かって、ようやく体の力を抜けました』

通信越しに、胸を撫で下ろしているであろう友の声がする。それに返事をしようとする、割り込んで通信をしてくる声が複数。

『今回は皆無事だったから良かったけど、もうこんな事は控えてよ？

あんた達まで死なれたら目覚めが悪いんだよ』

『鶴丸、アンタも急に飛び出しちゃってさあ。友達が心配なのは分かるけど、止めてたアタシの立場がなくなるから相談くらいしておくれよ』

「あー、あはは……」

「その点は本当にすみません……」

目を逸らす鶴丸と一期は、もう一度抱き締め合い続けているひと達を見やる。

長谷部はまだ涙を流している。けどもう、そこに暗い色はどこにもない。一期は優しく微笑み、窓の外へと視線を向ける。

空を覆い隠していた分厚い雲は千切れ始めている。そこから降り注ぐ陽射しは、穏やかにこの町を照らしていた。

20—4 「ある反逆刀の顛末」

鈍い痛みで目が覚める。辺りは薄暗く、どこにいるのかも判然としない。

周囲を見渡すと、少し離れた場所に二人の男女がいた。

「……まったく、いつもいつも無茶した時の尻拭いは俺の役目だ」

「あら、下の者は上の者のサポートをする物と相場が決まっているのよ」

「はあ？ てめえのどこが上だ、そう扱われたいならもう少し待遇をよくするんだな」

「どんなにあんたがみつともなく喚いても、上下はひっくり返らないの。残念だったわね」

「改善する気はゼロか、糞姉貴……！」

男が女の腕に包帯を巻いている。女はいかにも傲慢そうな態度で、頭を抱える男を嗤っている。

何なのだ、そう思って体を起こし——一瞬思考が停止する。

髪の毛が、軽い。軽過ぎる。ぱつと髪に手を当てる。

丁寧にケアしていたはずのロングヘアは、乱雑なショートカットになっていた。毛先がちくちくしている。あまりに乱雑で、きつと髪はかなり傷んでいるだろう。思わず悲鳴を上げてしまう。

「……ん、おい、乱藤四郎が起きたぞ」

動転している乱に気付いた男が、女にそう呼びかける。女はすくつと立ち上がり、乱の眼前まで歩み寄った。

「自爆して無様に生き延びた後の目覚めはいかがかしら、敗北者？」

「……木枕遥」

地を這う声が無意識に出る。反逆部隊に情報を流していた自称居酒屋の看板娘、木枕遥はニンマリとした顔で指を立てた。

「あら、そんな目で見られる謂れはないわね。むしろ感謝して欲しいくらいなのよ？ 何せ自爆していたずらに失われようとしたあんたを、私が命令して愚弟に拾わせたんだから」

「……あー、先に言っておく。乱藤四郎、すまん」

「何で謝ってんのよ愚弟」

気まずそうに男——サトルが目を逸らす。それを睨んでいるハルカを尻目に、乱は嫌な予感の正体を探るべく思考を回す。

やたらと体が重い。ここで戦闘になっても、いつもの身軽さは出せそうにない。刀を出そうとして意識を巡らせ——そして、衝撃に声を詰まらせる。

刀身を出せない。それどころか——乱の中に刀がない。

手を体中に当て、刀身を探す。だが、やはりどこにも目当ての物はない。

「探しているのはこれかしら？」

顔を上げると、ハルカがにっこりと乱の刀を振っている。返せ、そう叫んで手を伸ばすも、ひよいとあっさりかわされる。

「まあこれはしまっておきましょう。——いい事、傲慢な神」

乱の刀身はあっけなくハルカの手の中に消える。伸ばした手の行く先をなくして呆然としていると、顎をぐいっと持ち上げられた。

「あなたの刀身は私の物になった。即ち、あなたの力は私の物になったの。感謝なさい、無様に死ぬ所だったあなたを、私の下僕にしてあげようと言うのだから！」

は、と震えた声が出る。後ろでサトルがすまなそうに両手を合わせている。

何の恥辱だ、何が感謝だ。頭に血が上り、反射的に目の前にある首を絞めてやろうと手を出した。

その手は届く事はなく、代わりに腹部に強い衝撃が加わった。吹っ飛ばされた先で起き上がれずに倒れ込む。

「頭が高いのよ、神の分際で」

げほ、げほ、と腹を押さえて噎せている乱の腹を踏みつけ、ハルカは冷たい目で見下ろす。ふん、と鼻を鳴らし、彼女はぐりぐりと足で圧を加える。

「本当に自分の立場を分かっていないのね。あなたの力は大部分が私の物になったと言ったでしょう。ただの人間並みに力を落としたあなたか、神を食らった私に敵う訳がないの。私は優しいから気が進ま

ないけれど、あんたの立場を充分に理解させてあげてもいいんだけど？」

「てめえが優しいなら、反逆者は全員聖人だろうな」

ほそつと吐き捨てるサトルへ空き瓶を投げつけたハルカに、乱は呻きながら問いただす。

「……まさか、貴女がボク達に協力したのって、力を奪って自分の物にするのが目的……？」

「あら、だとしたらどうするの？ どうせあんたには何も出来ないのに」

ハルカはまた顔を歪な笑みにする。ぐっと乱の腹を一蹴りし、彼女は高笑いをした。

「せいぜい私の手足となるのね、傲慢な神。その魂が雑巾以下に擦り切れるまでこき使ってあげるわ！」

——これ、折れるよりも地獄に近いのでは。

顔を青ざめさせる乱に近づいたサトルは、ぽんと肩を優しく叩いた。

20—5 「きつと未来は（前）」

蒼穹隊と氷雨隊。裏切り者を所有していた二つの本丸は、政府より
厳しい目で見られる事となった。

刀の心を御しきれず、裏切りを阻止できなかった、と。
だから、その二つの本丸は成す術なく処罰の日を待つ――
はずだった。

「いやあ、思ったより軽く済んでよかったなあ」

「本当に……審神者連合の皆様には感謝してもしきれませんね」

「俺は蒼穹のも氷雨のも人柄を知っていたから無罪であると分かって
いたが、他の人間はどう思うか分からないからなあ」

「……解体の危険もあつたでしょうし、本当に軽い罰で済んでよかつ
たです」

大きな宴会場は、酒に浮かれているものが多い。そんな会場の
隅の方で、四振りはそう囁き合っていた。

蒼穹の審神者の怒りに狂った率直な文面と、氷雨の審神者の皮肉に
塗れてはいたが堅い文面を足して二で割ったような嘆願書。そして、
じわじわと噂を広めた事によって集まった審神者からの批判。その
二つが、蒼穹氷雨両本丸の罪を軽くする決め手だった。

――政府は彼等の落ち度で傷付いた刀剣のケアを一般的な本丸に
押し付けた挙句、その刀が裏切ったら本丸のせいにした。審神者達に
は、そんな噂を流したのだ。

当然、審神者達は荒れた。刀達を愛する審神者からは政府への憤り
を、保身に走る審神者からは刀を返却しようとする動きがあつた。そ
の中間的な性質の審神者達も、政府のやり口に憤り、痛烈な批判を
行つた。

政府は噂を沈静化しようとしたが、怒り狂った審神者達がそれを許
さない。噂は小火から大きな焚火、そして町を包む業火に変わった。
流石に代償なき沈静化は無理だと悟った政府は、二つの本丸の罪を軽
くして見せる事でどうか審神者達の気を収めようとしたのだった。

まあ、政府要人も沢山殺害されているのだ。その中で上手くやつた

方ではなからうか、というのが四振りの見解だ。

「そういえば、政府中枢の建物は修復中なのですよね？」

「ああ、まだ本格的な運営再開までには時間がかかりそうだ。財務部の博多が『金は無尽蔵に出とう訳やなか！』と頭を抱えていた」

「ああ、それは……」

「ご愁傷さまだなあ……」

近くの席からまたわあつと歓声上がる。どうやら誰かが宴会芸をこれから行うらしかった。やんややんやと囃し立てるひと達の声に埋もれないように、音量を少しだけ上げる。

「まあそんな中でも、被害者遺族への補償と慰霊碑建築の予算は通したようだぞ。流石に、政府職員に死者をあれだけ出していたらなあ」「完成したら参拝いたします」

「ですね……せめて安らかに休めるように祈るしか出来ないのが歯がゆいですが」

「献花は絶えないだろうなあ」

少し音痴な歌声が遠くから響く。手を叩いて音頭を取っているひとびとをちらりと見つめて、鶴丸はふと呟いた。

「そーういやさ、あの時君の所の三日月来なかつたよな？ 来そうな物だったのに、まさか他の場所に出ていたのか？」

「……内密にしてくれよ？ あの時確かに三日月はあそこに来たんだ。だが、何者かに妨害された形跡があつてな」

「妨害、ですか？ あの三日月を？」

「ああ。だが明確な証拠がない上に、その形跡もどんどん消えていると来た。……俺としては、妨害者はほぼ奴等じゃないかと確信しているんだがな」

「……」

一期も、なんとなく情報屋の彼女等の仕業ではないかと感じていた。春光隊の話の聞いただけで只者ではないと思えたのだ、そんな行動を起こしていても不思議でも何でもない。

目の前に料理がコトリと置かれる。顔を上げると、キャスケット帽を目深に被る少年がふいつとそっぽを向いた。覚えのある気配に首

をかしげる一期に、少年の隣にいた女店員——ハルカが、にこりと微笑みかける。

「どうも、一期さん。慰労会はいかがです?」

「……ハルカさん、どうも。楽しんでますよ、程々に」

相変わらず、こうして見ているとただの女店員だ。この毒気のない様子から一転して、言葉の刃を突き付けてくる可能性があるのだから油断ならない。

「ふふ、あの事件に関わった方々はほぼ全員参加されていますからね。政府がお金を出して楽しめと言っているんです、精一杯楽しまなくちゃ損ですよ?」

ほらあそこでも、とハルカが指し示す。

体格のいいショートヘアの女性が、五虎退と飲み比べをしている。周囲には酒瓶が散らばっており、彼女等の飲んだ量が窺えた。囁し立てる地味な格好の人間達と赤い短髪の太刀も、顔が赤い。

またある所では、氷雨の蜂須賀に話しかけている蒼穹の秋田と雲霄の物吉がいた。三振りには至極穏やかに話をしているようで、全員優しい笑みを浮かべている。

「お兄様、まだ話は済んでいませんか?」

「ゆ、夕立、頼むからそれは後にしてくれないか、こうしている内にあの馬鹿者が来て——」

「やーい夕立ちちゃんに叱られてやんのー! 大事な妹に呆れられる気分はどうだよ、氷雨の野郎!」

「夕立ちちゃんなどと妹を呼ぶな、穢れる! 夕立こいつから三メートル離れろ、馬鹿がうつるからな」

「ああ!? テメエの頭でつかちの方が重症だろうが!!」

「貴様の低能が公害並だと言っているんだ!!」

「お二人共、周囲の迷惑になりますのでお静かに」

「……すまん」

「ご、ごめんな夕立ちちゃん」

……見苦しい喧嘩をしている二人の事は、頼もしいあの少女に任せよう。一期は見ないふりをして別の方向へと顔を向ける。

「二期さん、こんばんは！」

「ツクシちゃん……いえ、秋霜殿。こんばんは」

少女と刀剣男士四振りが、一期のもとにやってきた。さりげなく離れた女店員は気にしない事にして、少女に向き直る。

「別に前みたいにつくシでいいよ、一期さん。丁寧に話されるとちよつと悲しいから。……どう？ 楽しんでる？」

「それでは失礼して。……うん、料理も美味しいし酒も程々にしているよ。ツクシちゃんは正式に審神者になったんだよね、やっぱり大変かな？」

「大変だけど、皆がいるから平気だよ！ ちよつと書く物が多くて頭こんがらがりそうだけど」

「主、僕に任せてって前から言っているのに」

「あるじさま、ここ最近ずっと夜遅くまで仕事をしているので心配なんです……」

ツクシがまずい、という表情を浮かべる。背後の赤と白の二振りがツクシの肩をがしつと掴み、迫力のある笑みを浮かべて言った。

「ツク……あーるーじー？ 夜更かしは厳禁だって前から言ってるよなあ？」

「主さん、こうなったら見張りをつけてやるからな。寝るまで監視するから覚悟しとけよ？」

「うわあああつ！ こうなるからバレたくなかったんだよー！」

「あつ、待てツクシ！」

「逃がすかあつ！」

脱兎の如くその場を離れるツクシの後を追いかけてようと愛染と太鼓鐘が駆け出す。あわあわと彼等を追う五虎退がいなくなったのを確かめて、小夜は口を開いた。

「あの、一言だけお伝えしたい事が」

「どうしました？」

「——ソメゴロー達と友達でいてあげてね、一期さん」

そう言っつて小夜は一礼し、足早に追いかけていった。ぽかんと開かれた口は、次第に笑みの形に変わる。

そういえば、とふと思ひ至る。何故彼等は、江雪に話しかけなかったのか。江雪のいる方向を見ると、彼は男性店員の顔を見て目を瞠っていた。

「……ほんとう、ですか」

「はい、送迎の者が玄関で待機しています。……澄清様から伝言です、『よく頑張ってくれた、本当にありがとう』と」

ガタン、と江雪が立ち上がる。そうして宴会場の外へ出て、あつという間に姿を消してしまった。

「……澄清のが目を覚ましたか」

「吉報だなあ。これから澄清隊も賑やかさを取り戻すか」

「ああ。秋霜隊のいい支援者になってくれそうだ」

笑い合う二振りの会話で、一期は江雪の冬が終わった事を悟る。

心から友に訪れた吉報を喜びつつ、コップの中にあるビールを呷った。

「二期、飲んでるかあ」

「山姥切殿……と『私』？」

「こんには、蒼穹の『私』」

赤ら顔になつている蒼穹の山姥切と、氷雨の一期が並んで立っている。ちらりと視線を後ろへやると、案の定鶴丸の顔は険しくなり始めていた。

「たまたま近くの席になりました、話が盛り上がっていたんです。ですが少し酔いが回り始めたようで、そちらにお返ししよう」と

「は、はあ」

「そちらの山姥切殿は本当に素晴らしい方ですね、流石は一振り目の刀。うちの感覚麻痺衝撃探求アホウドリと交換して欲しい物です」

「おい誰が衝撃でしか反応出来ないだつて？」

脳内であーあー、と声を出しながら額を押さえる。鶯丸は料理を掴まんでいて、介入する気配すらない。

「本当の事でしょうか？ 衝撃を与えなければ反応出来ない、正に感覚麻痺ではないですか。別の言葉を用いなければ温情だと思つて頂きたいですね」

「君の方が弟以外に反応を示せない感覚麻痺じゃないか。周囲に目を配れないのは戦場では命取りだぜ？ 何ならここで試してやろうか」「ご心配なく、戦果はきちんと挙げていますよ。ただ、貴方のような痴呆ボケ老人を相手取るのが嫌なだけです」

「はっはっは、言いやがるな。——表に出ろ、小児趣味が!!」

「お相手致しましょう。——二度と徘徊出来ないようにして差し上げますよ」

すぐさま戦装束に身を変え、二振りは宴会場の外へと飛び出す。頭を抱える蒼穹の一期に、のんびりと鶯丸が肩を叩く。

「気にするだけ負けだ、一期。あの二振りはあれが会話手段なんだ」

「随分物騒な会話手段ですね……」

「ああなったら放っておくのが一番だ。巻き込まれただけ損をする」

「やれやれ、と言わんばかりに首を振る鶯丸。頭痛が酷くなった気がして一期は項垂れた。」

20—6 【終】「きつと未来は（後）」

「……あんたは、本当に他本丸に友達を作ったんだな」

ふと落とされた言葉に、一期はぱつと顔を上げる。山姥切が、酒瓶を抱えつつこちらを見ていた。

「正直、何というか、必要性を感じないのに何故、と思ったんだ。本丸内で事足りるのに、わざわざ外へ行く理由は何なのだろう、と。……でも、今までのやり取りを見て思った。あんたは、本当に友達を大事にしているんだな」

「そう、ですね。全員、大切な友達です」

しつかりと頷き、一期は笑う。目を瞬かせた山姥切は、瞼を伏せてぽつりと呟いた。

「……俺にも、出来るだろうか。あんたと鶴丸達みたいな友達が。心を交わし、互いを高め合える、そんな友達と出会えるだろうか」

返事をする前に、山姥切はぱたりとその場に倒れて寝息を立て始める。一期は自分のジャージを掛けてやりながら、静かに囁いた。

「きつと、出来ます。出会えます。山姥切殿なら」

背後から、複数の気配が歩いてくる。鶯丸がそちらを向いた様子を見て、一期も視線を上げる。

「はい、追加料理お待ちー！」

「おっ、酒も空だな。酒瓶も交換するか」

「腕によりをかけたからね、どんどん食べてくれ」

「くれぐれも飲みすぎるなよ、いち兄。酔っ払った時の話は聞いているからな」

「おや、山姥切さんは眠ってしまったのか。後で運んだ方がいいだろうね」

「……」

春光隊の面子が、調理白衣を身に纏って料理を運んできた。次々に料理の乗った皿を並べつつ、空になった皿を引き取っていく。

長谷部がじつとこちらを見ているのが気になったが、まずはそれを置いておいて一期は穏やかに笑いかけた。

「春光隊の皆様、こんばんは。従業員としていらしていただのですね」
「うん。客として招かれたんだけど、流石にね。どう、美味しい？」
「美味しいよ、ありがとう」

「歌仙が監修してるからな、そりや美味いだろ！」
「そう言われると照れるけどね」

気恥ずかしそうに頬を掻く歌仙の背中を叩く獅子王。次々と新たな料理を置かれ、一期は春光隊の心尽くしを頂こうと箸を動かす。

料理の中に海老が入っていて、ぷりぷりと旨味が口の中で弾けた。

「二期」

長谷部が、口に手を添えている一期に向かい合う。中の物を飲み下し、一期は目を丸くした。

長谷部が、何かを決意したようにこちらを見ている。

「……後で、話がある。時間は取れるか？」

真剣な表情を向けられ、思わず首を縦に振っていた。春光隊の面々は、と見てみると、彼等は微笑ましい物を見るように温かい笑みを浮かべていた。

「よし、じゃあ仕事を続けようぜ！」

「これで一月は余裕で暮らせるんだからいい仕事だよなあ」

「そうだ、鶯丸。君とも少し話したいんだけど、いいかな？」

「構わないぞ。色々と言りたい事もあるしな」

「山姥切さん、別室に運んじやいます？」

「そうだね。料理はどうしようか」

そんなやり取りをする中でも、長谷部はこちらを向いている。いよいよ何を話されるのか分からなくて、一期は不安を抱えながら首をかしげていた。

——スタッフルーム前で待っている。

指定された場所へと向かう道中、一期は窓の外に丸い月を見た。欠け一つないその月は、雲一つない空を明るく照らしている。

そうして綺麗な月を眺めながら、ふらふらと歩いていたのが悪かったのだろうか。

「……………は、どこだ……………」

一期はどこぞの会場前で、呆然と佇んでいた。中からは賑やかな声が聞こえてくるが、一期がいた会場ではないのは分かった。

いやこれ、絶対に呆れられるだろう。顔を覆い項垂れる一期の背後から、本当に呆気に取られたような声がした。

「……………お前が方向音痴だったのを忘れていた」

「……………本当にすみません、大事な話の時に……………」

振り返ると、既に長谷部は調理白衣からいつもの鳴狐そっくりのジャージに身を変えている。半目でねめつけられて肩を落としていると、クス、と声が聞こえた。

「ああ、お前は本当に変わり者だな。方向音痴の一期一振なんて、見た事も聞いた事もない。最初に会った時はは何だこいつ、と思った物だが」

……………長谷部が、楽しそうに笑っている。おかしそうに笑っている。一期は目を見開く。

それは、ずつと見たかった表情だ。友達になりたいと願った時からずつと、楽しそうに笑う長谷部と話してみたかった。

そう祈っていた事が急に実現して、一期は呆けている。長谷部は表情を真面目な物に戻し、一語に告げた。

「どうせなら、歩きながら話をしよう」

「え、あ、はい」

身を翻し、長谷部は歩き出す。その後を追って、一期も足を踏み出した。

沈黙がしばらく続く。どこへ向かうのだろうか、と思い始めた所で、長谷部はようやく口を開いた。

「……………俺は、ずつと怖かった。誰かを信じる事も、信じて裏切られる痛みを味わう事も。だってそうだろう、俺は沢山の物を取りこぼし過ぎた。だから家族以外を信じない事にした——いや、家族さえも、最後の最後では信じられなかった」

口を挟まず、一期は足を動かす。滔々と、淡々と、長谷部は振り向かず、話を続ける。

「親友も、恩人も、妹も、俺の手からすり抜けていった。最後は痛くて苦しい別れが待っていて、俺は泣く事になる。そうなるくらいなら、最初から持たない方がいいとすら思っていたんだ。……お前が現れたのは、そうして心が完全に固まる寸前だった」

流れる水をただ眺めるように、長谷部は話し続ける。心の傷を、ただの事実のように静かに語り続ける。

「お前はずっと、俺と友達になりたいと言っていた。訳が分からなかった。こんなつまらない奴、どこがいいのか理解出来なかった。ただの好奇心で近付かれて最後には離れられるなら、それは反吐が出るくらいに嫌なことだった。だけど」

ついに、建物の外へと出た。月明かりがぼんやりと、道中を優しく照らしている。長谷部の語りはまだ、終わらない。

「……だけど、お前は俺の手を取りに来た。刀を握る手をぼろぼろにしてまで、俺を助けたと言った。そして、わがまますを承知で、俺と楽しい事をしたかった。……それが、本当に嬉しかったんだ」

大きく開けた広場で、長谷部はようやく立ち止まった。一期も少し離れた場所で足を止める。

振り返った長谷部の表情は、月によって輪郭を描き出し――

「……ありがとう、一期。俺を望んでくれて。最後まで、手を取りに行ってくれて。……きつと、俺はずつと、お前に礼を言いたかったんだ」

――泣きたくなるくらいに、穏やかな笑みだった。きつと春光隊は彼にこんな表情をさせたいが為に生きてきたのだろうと、そう確信出来る顔だった。

一期も、そう感じられた。彼に平穏な笑顔を浮かべていて欲しいと、そう願う気持ちがあった事に気づけた。

そうだ、友達の幸せを願う事なんて、当たり前なのだ。それを思い出させてくれた、やはり長谷部と友達になりたいと願ったのは正解だった。

「……私は、私の心のままに動いたまです。本当に、礼には及ばないのですよ。でも、そうですね」

精一杯の笑顔で、長谷部と向かい合う。そして一步近寄ると、長谷部の手を優しく握り締めた。

「私は、貴方ともっと話したい。貴方ともっと絆を深めたいのです。楽しい事をして、楽しい話をして、楽しい時間を過ごしたい。もし返礼をして頂けるなら、私はそれだけで充分です」

「……はは、欲深だな」

掠れた笑みを漏らす。長谷部は皮肉な言い方をしているも、表情は温和その物だった。

「お前といると楽しい時間を過ごせそうだ。でも、お前の望みはもう一つあるだろう。——お前の友達を俺と繋げたい。どうせそんな所だろう?」

「ふふ、読まれていましたか」

「そりやあな」

繋いだ手を、握り返される。それは本当に、涙が出そうなくらいに温かかった。

「なら、俺も一つ願いを出そうか——俺の家族を、お前の友達と繋げて欲しい。あいつらには、他者の風が必要なんだ」

「お安い御用です。きっと、三振りも喜びますよ」

いい大人達がいつまで手を握っているのだろう——いや、一方は子供の魂を持っているのだけ——と頭をよぎっても、一期は手を離す気になれなかった。

「そうか。——良かった」

——一期の目には、勝気な笑みと幼い満面の笑顔、二つの姿が映っていた。その姿達を見ながら、一期は改めて願った。

どうか、この縁がいつまでも温かいままであるように、と。

これは、狭間の世界の物語。

あるいは——未来と友達についての物語。

番外編 「深夜、麦茶の瓶が空になる」

「うわ、少ししかない」

蒸し暑さが少し落ち着いた、草木も眠る丑三つ時。

春光隊本丸のキッチンで、へし切長谷部が冷蔵庫の中を覗き、そう口にした。

ドアポケットに入っている耐熱ピッチャーには、僅か三センチくらいしか麦茶が入っていない。コップ一杯分を満たすには足りない量だ。ならば他のは、と視線を動かすも、冷蔵庫に入っていたのは三センチ分の麦茶を残している物のみ。

「他の瓶も空……そういや今日は久々の出陣だったな」

『全員見事に泥と返り血塗れ、水筒もすぐに空になったとかで麦茶が飛ぶようになくなっていた。全員麦茶を作り直す余裕もなかったんだろう』

「だから六つ分の瓶から麦茶が消えているのか……まあ足りなくなるよりはマシか？」

一つの口から、二人分の口調が響く。まるで一人芝居をしているように見えるが、本人達は至って真面目だ。

何せこの長谷部には、二つの魂が宿っているのだから。

「折角だし、まとめて作ってしまおう」

そう言って長谷部はピッチャーを洗い始める。蓋と容器を分け、スポンジを手早く動かし、水気を切った。

『薬缶を火にかけたら居間に避難しろよ。熱中症で倒れかねん』

「分かっているさ。キッチンの床で寝てたら歌仙に叱られるからな」

『それは眠るのではなく昏倒だろうが……』

片方が頭痛を堪えていると、片方はきよんとした様子で薬缶に水を入れ始める。

六つ分の麦茶を作るのだから、当然大量の水が必要になる。この本丸ではピッチャー半分くらいの熱湯で麦茶を抽出してから水を追加する。なので完全な熱湯で作るよりは沸騰させる水は少なくて済むが、それでも量が量だ。

薬缶の許容量ギリギリまで水を注ぎ、コンロの上に乗せる。カチカチ、とツマミを回して着火し、長谷部はキッチンからリビングへと移動した。

ソファーに座ってテレビの電源をつけ、ぼうつと画面を見る。流れているのは、大仰な反応をするタレントばかりの通販番組だ。

『……森の中でも、最低限の資源を心配しなくて済むのはありがたいな』

「何だいきなり」

『いや、ここに着いた時、俺は少なからず覚悟を固めていたんだぞ？』

水道、火、電気。そういう面でかなり不自由することになるだろう、と『な』

「あー、まあそうだよな。俺もガスとかは絶望的だと思っていたし、しばらくして普通に生活できると分かって驚いた」

『本当どうなっているんだろうな、あの機構は……』

唸る片方に、もう片方が深く考えても無駄だろうと小さく笑う。

森の住人達——特に「家の墓場」で暮らすもの達——は、政府に好意的でないものが大多数だ。そんな彼等が、何故政府と関わらずガスや電気、水などの資源を入手できるのか。

それに対する長谷部の仮説は、森が時空の裂け目を生じやすいことから成り立っている。

時空の裂け目は、あらゆる時代の現世と繋がっている。そして家が設備の状態を保ったまま森に流れ着くことから、長谷部は思い付いた。

森に流れ着いた家は、どこかの時代の導管から資源を引っ張ってきているのかもしれない、と。

政府からは請求書が来ていないし、電柱も導管も引かれている様子がない。なので現在時点の資源は使っていないのだろう。ならば入手先はどこかという点、恐らくはあらゆる時代の隙間から。

導管から少しずつ資源を拝借して、森に送られている。原理は分からないが、時空が乱れやすいからできるシステムなのだと思う。

世界の辻褄合わせなのか、あるいは神の悪戯か。何にしても、あり

がたいことには変わりはない。

「月の終わりにどこからか請求書が現れるのがもう原理不明だろう。そして請求書通りに消える小判。俺は理解しようとするのを諦めたよ。現に生活できているのだから不満はないしな」

『いやしかし、これが政府の作り上げた機構だったらどうするんだ。掌の上で踊っているみたいでなんか腹が立つんだが』

「勝手に家の中から資源代を取れるシステムがあったなら、政府ももっと集金が楽になっただろうな。それができてないんだから、多分心配は無用だ」

『まあそれもそうか』

テレビではオペレーター増員を謳い、通販の利用を促している。語呂合わせの電話番号は本当に無理矢理で、そうまでして連絡しやすくしたいのかとおかしくなる。

また次の商品の説明が始まろうとしていた時、高い音がキッチンから響き始める。

『湯が沸いたみたいだな』

「さっさと作ってしまおう」

立ち上がってキッチンへ戻る。長谷部は薬缶の火を止めてから麦茶パックを取り出し、容器に投入していく。容器の半分くらいまで熱湯を注ぎ、一つずつ容器を手に取り水を追加していく。

『手慣れたものだな』

「長くやってきたんだ、慣れていなければ困る。まあ最初は見苦しいくらいに手間取っていたが」

『……どれが触れていい物か分からなかったから、か?』

酷く口惜しそうに、片方が尋ねる。もう片方は少しばかり目を伏せて、そうだな、と肯定した。

「あの家では、俺が勝手に物を動かすことを禁じられていた。けれど何もせずにいれば今度はそれを罵られるし、どうしたらいいのか分からない。……トモエがやり方を手取り足取り教えてくれても、恐怖感が拭えなくて」

『……主もお前も、幼かったんだ。恐怖を乗り越えられなかったこと

を、悔やむ必要はない』

そうなんだろうけどな、と片方は水を入れたピッチャーの蓋を閉めながら漏らす。

「未だに夢みたいなんだ、こんなことをしても叱られないなんて。本来ならそれが当然なのは言うまでもない。だが、時々その事実を噛み締めては幸せなような、申し訳ないような気持ちになる」

新たに一つ、容器に水が満ちた。蓋を固く閉めて、次の容器に手を伸ばす。

『……分かっているとは思うが、それを手放そうとする真似だけはそのなよ。お前の為に、本丸中が必死になって差し出した物なんだからな』

「理解している。これを手放せば皆への侮辱になる」

ありがとう、小さく呟いて長谷部は最後の容器に水を注いだ。

——魂の融合が進んでいる。

絶望の果てに、長谷部へと差し出すことを強制された少年の体。この体には、元々の持ち主である少年と、刀剣男士である長谷部の魂が宿っている。

少年は、長谷部が降ろされた時に消えてしまうはずだった。けれど、瀬戸際で長谷部が消失を阻止したのだ。

起こしてしまった悲劇を塗り替える為にしたことは、今の所幸せな未来に向かう方へと舵を切れている。

けれど——少年は、言動が染まり始めている。

初めは少年らしさが残っていたはずだ。なのに、次第に少年は長谷部に似てきて、性質も変化し始めている。

まるで、己の魂を差し出すかのように。

まだ絶望を癒やすには足りないというのか。いや、癒えてはいるはず。少年は笑うことが増えているから。

もしかしたら、まだ自分を罪人だと思っているのだろうか。……罪を犯したのは長谷部なのだから、こちらからは何も言えない。

どうしたらいい。どうしたら、彼が生の方角へ目を向けてくれる？
彼がピッチャーを冷蔵庫に入れる姿に唇を噛むしか、思い悩む長谷

部にはできなかつた。

数ヶ月後、葉が赤く色づく頃。

長谷部はある方向音痴の刀剣男士と出会い、少しずつ頑なだった心を融かしていくのだが――

それはまた、別の話だ。